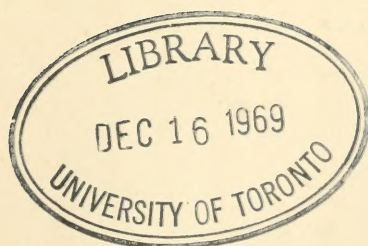
野々村戒三
安藤常次郎 共編

狂言集成

東京 春陽堂版

序言

室町時代に出來た舞臺藝術の一つとして、狂言が、能と共に、日本文化史の研究上、貴重な資料である事は、今更ら冗辯を費すまでもなく、具眼の士は夙に注目して居たにも拘らず、これが研究の底本としては、元祿版の横本狂言記が專ら用ゐられ、明治以後公けにせられた研究論文や著書の如きも、此の元祿横本を土臺にしたものが、殆ど其の全部を占めて居るのである。所が、此の狂言記なるものは、もと寛文板の美濃五卷本が始であつて、それに踵いで、半紙本が公にせられ、降つて元祿の頃、横本正續拾遺十五冊のものが出來、近くは嘉永元年の後刷本も出來て居る位で、斯界唯一の版本といふ所から、世間で頗る重寶がられて居るにも拘らず、其の正體は頗る曖昧で、林若吉氏の如きは「此刊本狂言記は從來俗に和泉流の狂言と傳へてゐて今も一般には左樣に信ぜられてゐる、然も其文句は無論大藏流でもなければ鷺流でもない、さらばと云つて舞臺で演ぜらるゝ和泉流の詞に比較すれば之も亦違ふ、そこで疑問を起して亡友岡田紫男君はこれも今は故人となつた和泉流の家元山脇和泉翁を訪問して其眞僞を慥かめたことがある、然るに元清翁の答には刊本の狂言記は斷じて和泉流ではないと否定されたのである、三流のものでないとすば、まやかしものといふの他はない」と、斷然其の杜撰の書である事を云ひ、和田萬吉博士もまた、「其文詞は不思議な事に何流にも屬せぬ中途半端の者」と、斷定を下し、今では此の意見に贊成の人々が頗る

多い。唯だ本書解說の著者笹野堅君は、やはり底本は和泉流のものであらうと、やゝ穩かな意見を持し、其の論據にも傾聽すべきものがある。然し、それにしても、刊本狂言記が果して和泉流の何ういふ本を底本としたか、その點が不明である限り、それが狂言研究の土臺として頗る權威のないものであるといふ事には、少しも變りはないわけである。

本書收むる所の狂言及び能間の曲數は、三番叟と風流四番とを除いて、總て七百卅四番であるが、特に鷺流若しくは大藏流と註記してないものは、全部和泉流である。底本としては、寬政から慶應に至るまでの古寫本を用ゐ、それに對し、三宅派の六儀を以て嚴正に校訂を加へたものであるから、其の詞章に於いて現行のものと多少の異同は免れないにしても、とにかく專門家が使用して居たものを底本として居るといふ點に於いて、安心して研究の對象となし得る事を信じて疑はないのである。

現行狂言の中で、和泉流の鷄猫、越後聟、弓矢太郎、及び唐人子寶、それから大藏鷺兩流の金藤左衞門及び鷺流の半錢外數番を入手し得なかつた事は、編者の頗る遺憾とする所で、同樣に、風流の多數を逸して居る事も、また殘念に思つて居る所である。是等は、何れも、他日重版の際、是非增補したいと思つて居る。

補遺の二番は、もと適所に之を收むべきであつたが、誤つて逸せられた爲め、印刷の都合上、不體裁且つ遺憾ながら、補遺として、最後に之を收錄する事にした。

鬼丸及び右流左止の二番は、野村萬齋氏の和泉流名寄には、現行曲として取扱はれ、又右流左止は、野村又三郎氏の名寄にも所見があるが、本書は三宅派の名寄を土臺としたので、右の二番は之を番外曲中に收める事にした。

大藤內、藥水、弦師、那須の四番は、能間の部に之を收錄したので、狂言の部からは省く事にした。なほ此の類のものでは、外に竹生島道者と白髭道者とがあるが、遺憾ながら、原本を得なかつたので、其の收錄は、他日を期する事とした。

次に、鷺流の氏結（うぢゆひ）が、誤つて氏結（うぢむすび）となり、隨つて其の順序に誤りを生じて居る事、及び收めらるべき部に誤りはないが、同じ部の中で順序の前後したものが二三ある事をも、序ながら斷つて置く。

寫眞として挿入した古畫は、故黑木勘藏氏の所藏で、時代は元祿を下らぬ、然も出處の正しい逸品である。

本書の底本とした古寫本には、誤字や宛字がかなり多く、それらは皆訂正して置いた。云ふまでもなくかうした誤字宛字の大部分は、狂言師の無學に因るものであらうとは思ふが、中には、佛敎の祕密像軌の文句が、故らに不可解に且つ讀みにくゝされて居るのと、同様の動機から、わざと違へて居る様なものもあるのではなからうかと考へる。

句讀の切り方は、舞臺の上で演奏される時のものと同様にするのが、本義ではあるが、事實それが一定

して居る様で、また多少の自由さもある様に見受けられる故、必ずしもそれには拘泥しない事にした。節附の處は、圏點を以て之を示して置いたが、イロの部分は、煩を厭うて、省略する事にした。

最後に、解説に就き、篤學なる笹野堅君の寄稿を得た事、及び資料の蒐集に關し、京口元吉君の援助を得た事に對し、厚く感謝の意を表して置く。

昭和六年四月

編者識

目次

【き】

【く】

【に】

【ぬ】

【ね】

【は】

【ほ】

【ま】

【み】

【む】

【め】

【も】

【や】

【ゆ】

【よ】

狂言篇番外曲

能用篇

【あ】

【い】

【う】

【え】

【そ】

【た】

能開篇番外曲

【ゐ】

【を】

「狂言集成」解説

解說

——和泉流に就いて——

笹野堅

一　傳統

發生・發達・流派——和泉流（附野村派、三宅派）

能狂言の源流を探ねる者は、白河朝以降發達した猿樂を繼承したと說く。川崎重恭の「猿樂沿革考」、著者不明の「猿樂傳記」等の諸書に記載するところで、從來此の說が行はれてゐるのである。藤原明衡の「新猿樂記」には歌舞、物眞似、曲藝等の曲目を列記してゐるのを見ると、猿樂といふのはそれ等の雜藝を總括した名稱であつたらしい。もと平安朝の初め唐から輸入された散樂が全く唐風から變化したものであつて、古く物語草子等に散見するさるがうとかさるがうがましくとか言ふのは、この散樂から轉用されたのであるが、さうした生活が散樂を悅び迎へたのであつて、又これが何時かこの演伎を變化して猿樂を導いて行つた。そして「平家物語」の鹿ヶ谷の條に物語られてゐる俊寛と西光との平氏を諷刺した物眞似も

さるがうの名に行はれてゐるやうな傾向をも生じ、「都猿樂之態、嗚呼之詞、莫不斷腸解頤者也」（「新猿樂記」）とか、「雲州消息」（藤原明衡）に、

又有散樂之態。假成夫婦之體。學衰翁爲夫。摸姹女爲婦。始發艶言後及交接。都人士女之見者莫不解頤斷腸。輕々之甚也。

とある記事とか、「新猿樂記」の福廣聖之袈裟求、妙高尼之襁褓乞、東人初京上等の曲名から後の狂言の發生を十分考へさせるのではあるが、好笑を目的とした狂言の趣向構想や、世阿彌の「習道書」の狂言の役人の事の條等から考察すると、即興的な座興が成長し藝化して行つた獨自な進化の經路を考へしめる。（「國語と國文學」第七卷第四號、能狂言の詞章）これに與つて力あつたものは宗教的儀禮と密接な關係をもつ狂言の特質と懸隔してゐる神事（「福の神」、「夷大黑」等）、祝賀（「松脂」、「笑祖父」、「三人夫」、「松楪」等）に關するものを存してゐることや、能の「翁」の中で演ぜられる一種の歌舞であるが低級ながら劇の形式を持つてゐる風流とか、狂言中に行はれる以外に單獨に小舞、語等が狂言に附隨して行はれて來たこと等から宗教的行事に結びついて發達したことを認めなければならない。元來歌舞は宗教的儀禮から著るしく發展したのであるが、團體的宗教感情の統一に宗教的儀式を利用するやうになつては、單に神に對する信仰的な歌舞を以て足れりとせず、更に民衆の生活樣式と密接な關係をもつものが選ばれなければならなかつた。即ちその初めの日に於いては低級な民衆の趣味と迎合する單なる好笑を旨とした即興的な座興の範圍を出でないものを以

て有縁無縁の衆生を歡喜させ得たのである。併しこれは觀客に新しい笑を提供するに幾何の效果はあつたであらうが、これが屢々行はれ繰り返へされるやうになつては、同じ人を常に笑はせることは困難で、その必要の爲にも亦自然の歸趨としても藝化しなければならない。然るに社寺の勢力が增大した中世に於いては、宗教上の儀式は享樂的な民衆と密接な關係をもつて非常な勢力で展開したが、當時の下剋上の思想は又これを動搖し遂に民衆の娛樂に轉換するに至つた。かくして最初から民衆を目的とし對象とした狂言は民衆的な演伎として發達した。そしてこれが大成するまでには當時の雜藝の影響を受けずにはゐなかつた。ことに鎌倉時代にその盛時をみた延年は、佛會の餘興等に演じた種々の演伎の總稱であるが、特に風流、連事、開口、當辯、答辯は、何時か能樂に附隨して行はれるものとなつた。多く數人の問答によつて故事來由を述べる連事は、低級ながらも劇の構造になるもので、儀式だつた祝言を滑稽化して地口にいふ開口及びそれの終に必ず續いて、同じく地口、口合をする當辯、答辯と共に、間（狂言）の原形をなすものではないかと思ふ。間（狂言）は能の中入の時間の延引の所を結び合せる爲に狂言師が物語をする。卽ち口上や幕がはりや能の補足をなすものであるが、立語（しやべり）は連事に。純口開間は開口に、口開ののち他役にあしらひあるものは答辯、當辯に類似した形式が見られ、また風流は延年の小風流と類似した構造であつて、兩者に離すことの出來ない關係が認められる。また狂言が田樂にも附隨してゐたことは、春日の若宮祭の田樂に「御福田」、「鞍馬參り」等の曲目を見出すことや、「文安田樂記」（文安三年記）に

松阿。狂言　一阿。狂言　德阿。狂言

とあり、註して

裝束をば着して居ながら詞をいひかはして。表能之形此風情亦有其興。狂言相交之兩三番。松阿勸之於事周備す。

とあることや、狂言の名手つち太夫（世阿彌「習道書」狂言の役人の事。）の田樂法師であつたこと等から田樂の影響を認めなければならないが、能樂界に觀阿彌、世阿彌の二天才が出て、その大成を出現した此、漸次發達し來つた狂言も亦大成し、この二つの藝術が併行してその他の雜藝を附隨させ或は零落せしむるに至つた。狂言大藏流、大藏彌右衛門虎明（寛文二年一月歿）の「わらんべぐさ」（萬治三年記）の家系に據れば、玄惠法印を初代とし日吉氏六代を數へてゐる。日吉彌兵衛、日吉彌太郎、日吉彌次兵衛、日吉彌右衛門、日吉彌太郎まで近江坂本に住し、六代日吉彌太郎の代から金春座へ出で、後奈良に住したとある。これが大藏流の家系としては深く信ずるに足りないけれども、夙く近江猿樂の搖籃地である近江に狂言の行はれたことを考へさせると共に、七代日吉彌右衛門は奈良に生れ、次は金春座から養子した金春四郎次郎で禪竹の子と傳へられる。私は彼を大藏流の元祖と考へる。これは實に狂言大成の推移を考へしめる。しかも東山時代の文化を生んだ足利義政の風流と趣味に徹した治世は、これの發達に資することが多大であつた。幕閣鈺公の臨觀も屢々あり、且つ非常な援助を與へられたのである。前代未聞の壯觀を呈したと云はれる糺河原勸進猿樂の興行も

實にその寛正五年四月五日、七日、十日の事で、凡そ二十番餘（「糺河原勸進猿樂日記」「異本糺河原勸進申樂記」）の狂言が行はれてゐる。此時の有樣は「蔭涼軒日錄」に詳しく記されてゐるが、將軍義政及び公家武家が美々しくこれを見物した。此の如く貴族に賞愛されて漸く民衆娛樂として民衆を離れ行く傾向を示したが、織豐時代になつても前代に優るとも劣らぬほどに武家に重用された。文祿二年十月五日、紫宸殿前の御能には豐臣秀吉は、德川家康、前田利家と共に「耳引」（改題「眞似」）を演じた。そして德川時代になると、幕府の式樂となつて全く武家の專有する藝術となつてしまつた。これは特殊な現象を呈して藝道を琢磨することにはなつたが、幕府の因襲を重んじ傳統を尙び形式を主とした態度は、自然これらの藝術に波及するところが多かつた。藝道を神聖視し尊重して洗練を重ねて行つたことも重大な現象ではあつたが、從來集團的に或は地方的に漠然としてゐた藝風は流派としての觀念の許に統括され漸次意識的になつた。これは既に豐臣氏の頃からであつたが、德川時代になると、永い間の傳統を持つて來た大藏流に鷺流が對峙した。豐臣秀吉が金春流を贔屓にしたことは、その座附である大藏流をも殊遇せしめたであらう。大藏彌右衞門虎政（慶長九年歿、六十六歲。）は、秀吉が狂言を演じた時用ゐた狂言肩衣、側次を賜はり、その子の虎淸（正保三年歿、八十一歲。）は知行を拜領してゐる。然るに德川家康は觀世を取立てた。從つて鷺流は四座の觸頭となつた觀世の座附として時を得るやうになつた。「飯錢」といふ狂言は家康の好みによつて鷺仁右衞門宗玄の作つたものである。鷺仁右衞門宗玄は私が鷺流の流祖とするものである。（「國語と國文學」第七卷第四號、能狂言の詞章。）かくて大藏・鷺二流は各流派的自覺の許に夫々

の藝風を樹てそれを流儀として發達せしむるに勤め、從來集團的に或は地方的に藝風を持續したものをも統轄し或は衰滅させた。三世鷺傳右衛門保教（享保九年五月二十七日歿）の傳書に見える京流も南都彌宜流も又「猿樂傳記」に記されてゐる田中、脇本といふ流も遂に勢力を持續するに至らなかつたが、獨この二流にともかくも鼎立したものに尾州藩の抱で、禁中の御用をも勤めた和泉流がある。かの二流が藝道格式を尊重して大夫師承を段々迎つて傳統を遠く考へ、系圖を古く作成したやうに和泉流も亦その狂言大夫山脇和泉家流傳統之碑によると古い傳統のものになるのである。しかも和泉家に大藏・鷺二家がそれ〲風流及び「花子」、「釣狐」の相傳を受けた神文誓紙なるものを傳ふるは、私をして言はしむれば後人の流傳を尊くせんが爲のものに外ならない。これを以て山脇元清が風流は和泉流より他流へ傳へしもの等と說くが如き、（「能樂」第三號、「風流の話」「能樂評典」明治四十一年刊、弘文館。）横井春野氏がこれを當時のものと斷定して和泉流の由來を說くが如きは、（「能樂全史」大正六年刊、龍吟社。）私の取らざるところである。これは敢て大藏・鷺流の傳統を重く見るが故ではない。神文誓紙といふは次の如きものである。

神文之事

一　御流儀之風流五番此度預御相傳當家之重寶ト辱秘藏仕候

一　御相傳之口儀寫取候書物粗末ニ致間鋪候

右之條於違犯仕者日本國中大小之神祇別而春日大明神之可蒙御罰者也仍而神文如件

狂言大夫大倉彌太郎

虎 時 花押

寛永拾二年

中夏吉辰日

山脇和泉殿

同 五郎左衛門殿

きしやうもんの前書事

一 貴樣ニ相傳申候事中にも花子の儀皆々ハ子なくて候餘人ニ傳へ申間敷候事

一 若我等狂言とまり申候ハヽ御書取被下候本皆かへし以來餘人に傳へ申間敷候

右之通り相そむき候ハヽ春日大明神住吉大明神八幡大菩薩何も日本國中の大神小神殊には佛の御はつをかふむるへく候物也仍而きしやうもん如件

正徳三年いぬノ

十一月十六日

鷺 二 藏 花押

山脇和泉殿 參

紙質墨光時代と合はざる許りか、鷺二藏なる者の誓紙は、本文、年月日及び山脇和泉殿參の書體いづれも同一人の筆蹟ではなく、且つ正保三年には流祖鷺仁右衛門宗玄(慶長三年四月二十四日歿、九十一歳)が健在してゐたし、正保四年板(森鷗外博士の考に正保二年かといふ)の「江戸屋敷附」には「狂言鷺仁右衛門、狂言同權之丞、狂言同傳右衛門」とあつて二

藏の名は見當らない。また狂言大夫大倉彌太郎虎時の誓紙に至つては、遂に大藏家系圖にその名を見ず、その時代に於ける大藏流の狂言大夫は大藏彌太郎虎明である。卽ち後人の附會になるもの、私の取らざる所以である。かの山脇家流傳統之碑の如きも亦注意して見るべきものではあるが、徒に疑ひ棄つべきではない。私はこれを考へ迷妄を拂つてその本體を知らうとする。碑文に據れば、江州坂本に佐々木岳樂軒といふ隱士があつた。神道歌道を修め、殊に狂言を善くして、其甥佐々木源五郎に傳へた。源五郎は京都に住して諸國に名を得た上手であつたが、後坂本に歸つて一葉軒と稱した。この弟子に甥の鳥飼五郎左衛門元純と日吉萬五郎超運とがあつた。日吉萬五郎は既に狂言に熟達してゐたが、一葉軒に就いて其奧儀を極め、甥の宇治源右衛門及び早世した鳥飼五郎左衛門の子鳥飼和泉元光に傳へた。「金春流系圖」に

……金春四郎次郎（大藏流元祖）――萬五郎（養子）┬宇治源右衛門――山脇和泉元宜（和泉流祖）……
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　└宇治彌太郎……

とあり、日吉萬五郎、宇治源右衛門は、「四座役者目錄」（似我與左衛門國廣、天正八年歿）の親世方狂言之次第に

日吉萬五郎　吉野とち八郎太夫座ノ者ナリ、高若ガ養子ナリ
宇治源右衛門　日吉満五郎ガ甥ナリ

とあり、又「わらんべぐさ」の金春四郎次郎の條に

此弟子ニ、金春萬五郎ト云ハ、金春源七郎弟也
萬五郎弟子ニ宇治の源右衛門ト云アリ、此弟子、親鸞、同三之丞

狂言大夫山脇和泉家流傳統之碑

とある。これに據れば和泉流も亦後の大藏・鷺流と同じ傳脈を受けてゐるのであるが、もとよりかゝる後人の記載は、深く信ずるに足りず今暫く之に耳を傾けるとするも、此等の人々を以て流派の人とすることは考へられないのであつて、流派としての自覺は鳥飼和泉の子源助に發するものと思はれる。

源助（萬治二年二月四日歿）は後に五郎左衛門と改め緯を元宜と言つた。和泉の代からその叔父の性山脇を冒した。慶長十九年京都から尾州へ招かれ、德川義直に仕へ切米百石扶持方八口を給はつて、京都に於ける門人も招いたけれども亦この地に於いても弟子を養ひ、その藝風に精進して行くところの基礎をなしたものであらう。私は彼を和泉流の流祖と考へるのである。かくて寛永八年和泉守に任ぜられた。

口宣案

上卿　日野大納言

寛永八年十月廿四日　宣旨

源元宜　　藏人頭右大辨藤原經廣奉

宜任和泉守

これは今も傳へられてゐる。後寛永十二年隱居して道仙と云ひ、甥の五郎八を養子して職を讓つた。山脇五郎左衛門元永（正保二年二月二十一日歿）、後道意と稱したが、早世して道仙の外孫に當る太鼓の家、鳥飼吉左衛門の子吉三郎をして家を繼がした。山脇和泉元信（元祿六年八月二十日歿）、後に元純と修した。元祿六年元純隱居して道甫と稱し、子彦三郎後源助家を繼ぎ、和泉元知（享保十六年十二月十五日歿）といひ、隱居しては道純と號した。子庄之助、山脇源助元政と稱して家藝を繼いだが、早世して子辨彌家を嗣ぐ、五代和泉元喬（文化三年七月十七日歿）である。野村久

三郎信明が後見をしたと傳へられる。五郎左衞門後和泉元乘とも言つた。隱居して莽藏、法號を道味と稱した。次は六代和泉元貞（文化十三年六月十四日歿、七十歲）、法號道宏。幼名元磨、吉三郎、彦三郎、後、五郎左衞門、四郎等の名がある。元喬の甥にて木全藤左衞門の三男を養子したものである。寶曆十四年元喬に從つて江戶に下り業道を勵んだ。また本居宣長に從學したとも傳へる。天明七年元喬の食祿、切米六十石、扶持江戶六口尾州四口を襲つた。多く狂言の本文を改めた、その書を斯道で雲形本と稱してゐる。次は町醫服部松富の弟、幼名幾松、四郎といふもの養子となつて、和泉元業（嘉永三年一月七日歿、六十九歲）。天保五年惣髮となり世に惣髮和泉と稱された人で、家流傳統之碑及び敎順寺の墓地にある初代以來代々の墓を建てた。碑石は最初山科西野村西宗寺に建てる筈であつたが、名古屋の敎順寺の墓地（名古屋東區車道町）に建て、大正十四年十一月敎順寺（名古屋東區錦屋町）內に移した。元業歿して子和泉元賀（明治十九年十二月十五日歿）、父祖の業を繼いだが、明治一新廢藩となつて、斯道が中絕するに至つた。然るにその子鐵太郎、明治十四年十二月東京に移つて家藝を再興し、山脇和泉元淸（明治四十四年三月二十日歿、六十三歲）と稱し、次いで和泉元照（幼名四郎）十代目を襲ふたが、大正五年二月二十五日歿して、今はこの名流の跡を繼承する者がない。

なほ和泉流に屬するものに野村派、三宅派がある。大藏流に於ける八右衞門派（大藏彌右衞門虎明の弟、大藏八右衞門淸虎を初代とする、寬文十二年八月五日歿、年五十三）、鷺流に於ける傳右衞門派（鷺傳右衞門了意、初代とする。延寶八年十一月二十七日歿。）の如きものである。野村家は丹後宮津の郷士で慶長三年細川侯に隨つて熊本に下り、元和八年京都室町中立賣に住み、吳服商を營んで細川家の御用

を勤めたが、又三郎重信の時になつて一條松の下に移り、狂言を以て宮家公家に出入し、和泉流の門人となつた。これを初代とする。その傳ふる家系を列記すれば左の如くである。

又三郎重信　正徳元年七月四日歿、享年七十一歳。

又三郎信之　享保四年五月四日歿。

又三郎信明　初名丹藏、正徳三年三月尾州藩ニ召抱へらる。享保十六年山路和泉元喬若年につき後見となる。卽ち十石の加増あつて切米三十五石、扶持江戸四口、尾州三口。延享元年八月十三日江戸よりの歸途駿州吉原にて歿す、同所妙祥院に葬る。

又三郎信幸　信明の甥、磯野氏。寛延二年十一月二十六日歿。

又三郎信成　信明の弟小三郎の子、藤吉後丹藏といふ。寶暦十三年一月四日江戸にて歿す、牛込原町惠光寺に葬る。

又三郎信興　幼名丹藏。文化十三年十二月六日歿。

又三郎信名　幼名粂治。文政四年七月二十四日歿。

又三郎信喜　幼名惣二郎、淺井氏。安政四年五月十八日歿。

又三郎信茂　初名小十郎、明治一新廢藩となり大阪に移る。明治四十年十二月三日歿、年七十三。

又三郎信英　幼名廣之助、當代。（「名古屋市史」風俗編）

また三宅派はその派生の詳しきを得ないが、貞享四年板「能之訓蒙圖彙」狂言之分、松平賀州殿の條に

今出川通寺町西へ入丁　源介弟子　三宅藤九郎

とある。源介は山脇源介である。野村万藏家の記錄に家祖三宅藤九郎法名淨榮七十三歲とあるは此人かと

思ふ。もと大藏流の流を汲んでゐたが後和泉流の門人となつた。和泉流の「不見不聞」を三宅派では大藏流と同樣に「不聞座頭」と言つてゐる。家元家格として扱はれ、「釣狐」、「花子」を除く外凡べて免狀を出すことを許されてゐた。加州藩の御抱役者である。かうした役者を抱へることは表向には國主でなければならない。水戶、彥根、薩摩、尾張には有名な者がゐた。二代は猪三郎後に藤九郎と言つた。法名淨悅四十七歲とある。歿年を得ない。三代は藤九郎喜納法名淨智、この人の弟惣三郎が別家を立てた。そこで本家藤九郎家と分家惣三郎家が出來たのである。三代藤九郎は安永二年六月二十八日歿して、藤九郎納正（天明四年五月十八日歿、五十四歲。）法名淨壽が四代目を嗣ぎ、その弟乙九郎が惣三郎家に養子となつた。寶曆十年板「能訓蒙圖彙」下卷和泉流の條に、

加　州　高倉通二條上ル　三宅藤九郎
同　　　同　　　三平
同　　　上京塔の段　三宅惣三郎
同　　　同　　　乙九郎

とあるは、四代目藤九郎、初代惣三郎及び養子乙九郎である。乙九郎（文政元年三月七日歿、四十二歲。）は天明三年十二月二十七日二代惣三郎（法號行樂）を相續した。文化中十兩御加增があつて二十五兩になつたと傳へる。藤九郎家の五代目は、名人と云はれた藤九郎正之（文政十年十月二十二日歿、五十九歲、京都黑谷眞如堂に葬る。）法名淨眞、幼名を捨五郎といふ。萬藏家の記錄に「同（天明）年十二月　於金澤十六歲ニ而金三十兩無相違家督被爲仰付文政四年巳十二月二十八日御給

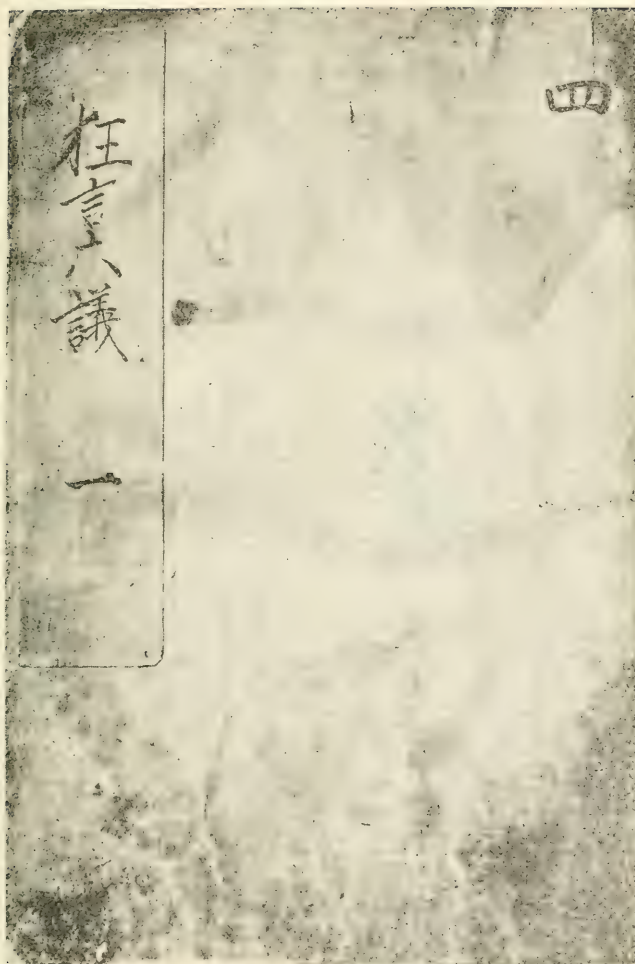
金判金四枚ニ被仰付改而一統ニ列」とあり、この弟乙九郎が惣三郎祐之（安政四年七月歿、八十五歳。）と言つた。文政元年十二月惣三郎家の三代を冒した。文政十一年十二月二十日藤九郎尙之が六代目を相續した。給金三枚にて御手役者列に加はつたが、天保三年十二月十七日二十五歳で歿した。相續人が無かつたが穩便に取扱はれ、天保十一年十月八日病死の旨を表向に達し、越えて十三年七月十三日庄市正信が判金三枚で御手役者に列した。かくて明治一新廢藩となつたが、代々京都に住しことに庄市は靜寬院の宮、岩倉、三條公の知遇を辱くしてゐたので遷都の際東京に移つた。明治十八年八月八日庄市歿して子幼く、三代惣三郎祐之の養子惣三郎を入れて本家を繼がしめ惣三郎家は跡を斷つたが、その歿後また後繼者がない。

二　狂言記

作者・變遷・波形本・雲形本・番數

狂言記といふ名稱は、板本によつて行はれたもので、狂言師の間には用ゐられてはゐない。一體狂言の本文を書寫して藏することは容易な事ではなく、從つてそれに對する名稱が漠然としてゐた、普通傳書と言はれてゐるが、和泉流では特に六義とゝ稱してゐる。これを以てみても如何に重要な意味を持つてゐたかゞわかる。併しこゝでは單に板本のみに限らず廣い意味で狂言記の名稱を用ゐることにする。

私達は先づこの狂言記を攻究しなければならない。卽ち本文を檢討する、狂言の根本資料の研究である。

雲形本

狂言が或る作者の手に成つたものを傳へてゐるとすれば、この本文の檢討も比較的容易であるが、大藏流でその作者と傳へる玄惠法印や、幾番かのものを金春四郎次郎・宇治彌太郎二代の內の作といふ漠然とした傳說は信ずべからざるものであるし、（「國語と國文學」第七卷第四號、能狂言の詞章）その始め演者によつて協定された一つの筋が、舞臺で繰り返され洗煉されて略一つの定まつたものに形成され、しかも永く口傳のまゝで傳承され、琢磨されて變化し來つたものであるから容易な業ではないのである。猶今日に至るまで口傳の遺風が墨守され、殊に近世になつて狂言が幕府の式樂となつて、益々この傳統が尊重され、一般には記錄書物の形で傳へられることが許されなかつた。從つて偶々見られうるものゝ多くが心覺か備忘錄のやうなものであるから、何處まで忠實に書寫されてゐるかを檢討し、且つ研究の基礎とする狂言記を定めなければならない。又和泉流でも本流及び野村派、三宅派、夫々異るところがある。和泉流の本文は大體に於て大藏流の流れを汲んでゐるのであるが、野村派は本流と併行してゐた關係上三宅派のそれらとの差異ほど著るしいものではない。これは各派の確立してから生じた現象であつて、演出と重大な關係を持つものであるが、又流派的意識による改變も行はれたものであらう。六代山脇和泉元貞が改變した斯道で雲形本と稱するものは、實にこの變遷を確證するものである。雲形の模樣ある表紙に據つた名で、題簽には狂言六議とある。竪七寸八分、横五寸七分、全部二十冊、二百番の狂言を收めてゐる。

一

一　夷毘沙門
二　惠比須大黒
三　毘沙門連歌 附り替之仕様
四　大黒連歌
五　福の神
六　松脂
七　三人長者
八　餅酒
九　三人夫
十　昆布柿

三

一　末廣かり
二　三本柱
三　張章魚
四　鷄聟
五　音曲聟
六　引敷聟
七　折紙聟
八　庖丁聟
九　貰聟
十　孫聟

五

一　萩大名
二　文相撲
三　鼻取相撲
四　蚊相撲
五　鬼瓦
六　靱猿

二

一　筑紫奥
二　佐渡狐 但是ハ追加之狂言
三　煎物
四　鍋八撥
五　牛馬
六　鎧腹巻
七　寶槌
八　寶笠
九　麻生
十　目近籠骨

四

一　樽聟
二　船渡聟
三　水掛聟
四　八幡前
五　岡太夫
六　二人袴（務フタリニテモニニンニテモ）
七　秀句傘
八　今參
九　入間川
十　粟田口

七　雁大名 雁盗人トモ
八　墨塗
九　二千石
十　文藏

十六
- 一　素襖落
- 二　寝音曲
- 三　隠狸　但是ハ追加之狂言
- 四　棒縛
- 五　鳴子
- 六　文擔
- 七　鶯
- 八　千鳥
- 九　木六駄
- 十　狐塚

十七
- 一　附子
- 二　縄綯
- 三　二王
- 四　舎弟
- 五　横座
- 六　鱸庖丁
- 七　鳴子遣子
- 八　脱殻
- 九　清水
- 十　鞍馬參

十八
- 一　鈍根草　附大事ノ仕様トモ
- 二　成上
- 三　船不奈
- 四　御冷
- 五　鐘音
- 六　伊呂波
- 七　富士松
- 八　奴良々々　竹生嶋參トモ
- 九　髭々頭　菊の花トモ
- 十　太子手鉾

十九
- 一　栗燒
- 二　杭歟人歟
- 三　茶碗
- 四　胸突
- 五　八句連歌
- 六　胼
- 七　萍
- 八　花爭
- 九　歌爭
- 十　柑子

二十
- 一　柑子俵
- 二　膏薬煉
- 三　酢薑
- 四　謀盛種
- 五　芥川
- 六　王藤内
- 七　才寶
- 八　瓢の神
- 九　唐人相撲
- 十　猿聟

波形本

波形本

然るに和泉流狂言師早川孝八家の傳へた波形本と稱するものは、この改變以前に行はれたところのもので、雲形本と詳細に對照研究すべき資料で、寧ろ色々な點で雲形本以上の價値を認めねばならない。斯道で波形本といふは雲形本と同樣、波形の模樣ある表紙から出た名で、竪五寸三分、横七寸三分の横本十六冊、二百五十二番の狂言を收めてゐる。卽ち雲形本所載以外に「勝栗」、「鳫雁金」「弓矢」、「松ゆつり葉」、「筒竹筒」、「口眞似聟」、「野老」、「蟬」、「双六」、「勸進聖」、「鷄猫」、「右流左止」、「松拍子」、「懷中聟」、「賽の目」、「角水」、「鞍馬聟」、「二人大名」、「連着」、「鷄流」、「淸水座頭」、「猿座頭」、「岩橋」、「樋の酒」、「長刀應答」、「牛盜人」、「蜘盜人」、「骨皮」、「六地藏」、「小傘」、「若和布」、「雪打」、「連歌十德」、「柱杖」、「大般若」、「若市」、「鬼繼子」、「鬼丸」、「六人僧」、「八尾」、「馬口勞」、「弓矢太郞」、「吹取」、「今神明」、「川原太郞」、「業平餠」、「兒流鏑馬」。「茶子味梅」、「唐人子寶」、「老武者」、「庵の梅」、「狸はら鼓」の五十二番ある。又雲形本の「目近籠骨」、「塗師平六」、「花折新發意」、「水汲新發意」、「梟」を波形本では「目近」、「塗師」、「花折」、「水汲」、「飛越」、「梟山伏」としてゐる。斯うした變遷や興廢は屢々行はれて、漸次猥雜なもの、興味の少ないものが整理されて來たのである。併しこの改變以後に於いても、野村派は家元と共に出演する場合でない限り、これに據らず舊態を守つてゐたらしく、三宅派は京都にあつて加州藩に抱へられてゐた關係上寧ろ大藏流の影響が認められるのである。野村派では雲形本所載のもの以外に五十六

番、波形本の「勸進聖」を除いてその他に「姫糊」、「越後聟」、「鮒」、「浦島」、「空腹」、「奈須の語」を加へ、三宅派では雲形本の「王藤內」を除いて四十七番、波形本の「勸進聖」、「右流左止」を取らずして「鉢叩」を加へ、「唐人子寶」、「鬼丸」を別物として取つてゐる。なほ別物に「見物左衛門」、「孝心竹」、「祖父倀」、「呼聲」、「出家狩人」、「俄山立」、「茶かき座頭」、「寶瘤取」、「寶聟」、「夷詰」、「月見」、「馬草船」、「昆布布施」、「星合」、「鬼不切」、「嶋太郎」、「烏帽子聟」、「鬼座頭」、「宮廻り」、「繼子山伏」、「三人僧」、「笑祖父」、「鹿ぞなく」、「寐代」、「瀧添」、「釣ノ椴」がある。

此等の狂言のあるものは、或る時代には大藏流で行はれ、次の時代には和泉流のみで行はれ大藏流で廢されたこともあつて、これは確に當流だけで傳へてゐるといふことは速斷されないのである。流派の發達が近世のことであつて、各流が確立されて色々とその所傳を樹てたに過ぎない。卽ち「和泉流祕書」に據ると三宅派で別物としてゐるものを加州藩で出來たと傳へてゐるけれども、既に大藏虎明の寛永十九年書寫の傳書には、「寐替」、「寐聲」、「繼子山伏」等が記載されてゐて、古くから相傳へてゐたことを證しうるし、「双六」、「蟬」、「岩橋」、「どちはぐれ」等も和泉流のみのものとされてゐるが（諸流對照和泉流名寄一覽）、大藏・鷺流（大藏彌右衛門虎明傳書　鷺傳右衛門保教傳書）でも行つてゐたのである。又曲名の異同も時代によつて相異してゐるので、それが各異名を樹て通したのは比較的近く全く流派として固定してからのことである。和泉流で「今神明」といふを大藏流で「粟隈神明」と云ふ類で、大藏流でも古くは「今神明」と言つてゐたのである。

此の如く一流に於いても漸次變遷し、時代によつて異るところがあり、各流亦夫々に異同してゐるのであるが、室町時代の古寫本が出現しない以上、私達はこれらの各流の最も信據されうる狂言記を校勘してこれが研究の底本を檢覈しなければならない。この困難な仕事は縱令へ室町時代の古寫本が出現したとしても、斯うした傳統藝術の研究には、一度は檢覈しなければならない事であつて、斯くて私達は正しい標準で文學として品評し、戯曲としての結構に關して批判し得るのである。併しこの底本の校勘には幾多の困難がひかへてゐる。單に古いだけでは決して最善とはし難い。最も忠實に筆記されたもので、その確證され得るものでなければならない。心覺や備忘錄のやうなものでは信據されないのである。何故といふにその詞章は、最初ある作者達が作り上げたものではなく、演伎の動作と共に完成され、動作と融合することによつて狂言の全體をなすもので、文學として研究するにも演伎としての考察を怠ることは出來ないが、舞臺で洗煉され彫琢されて、よく對話の妙を盡し得た詞章を基礎とする文學の攻究に、狂言記を擇ばないで只想像と直覺とを以てしては、淺薄、不徹底の缺陷をまぬかれず、その作の眞價、語法、修辭法、詩律等の調査は、正確な記錄によつてその行間を味讀しなければならないのである。

今日世に行はれる當流の狂言記で容易に見られうるものは、「和泉流狂言大成」四冊二百番（第一卷、第二卷—大正六年刊、第三卷—大正七年刊、第四卷—大正八年刊、わんや書店發行。）と、「新撰狂言集」一冊五十番（野村萬齋編、昭和四年刊、わんや書店發行。）、「型附狂言稽古本」二十五番（野村萬齋編、わんや書店發行。）とがある。「狂言大成」はある事情によつて山脇和泉元照の名で刊行されてゐるが、實は和泉木流

のものではなく、前半を五代目三宅藤九郎が寫し、後を乙九郎が繼いだ三宅派の詞章で、刊行に際し故小早川精太郎が加筆したもの、萬齋氏編するところのものも亦三宅派に屬する。なほ本書は三宅惣三郎家に傳つた幕末頃の寫本を底本とした。

三　組織

役者・役割・格式・番組・作り物・裝束・小道具・面

狂言は演ずべき作品で、それが藝術として完全するには舞臺へ現はれなければならない。その舞臺は能の舞臺と同じである。その役者は二人、三人、やゝ複雜なものに至つて數人で、主な役をシテ或はオモとも言ふ。大藏八右衛門虎光の書いた「狂言不審紙」(文政十年記)に、

大藏狂言ニ壹番の狂言の長する者を仕手ト言餘流ニ而者重ト云と聞大永四年十一月三日補任大夫職の免許有是を狂言大夫と云大藏流狂言は大夫號持居ル故ニシテト云

とある。仕手或は爲手の義で、そのシテの相手となるものをアドといふにつけて、同書に

壹番の狂言之相手するものを挨答(アト)ト云挨拶答るの略言なり

と言つてゐるが、諸說あつてその意味が定つてはゐない。或ものはシテの趾をふむ意にとり、又古語のあどうつから應答する意に解してゐる。このアドが、二人、三人になるとアド、小アド、三のアド等といは

れ、「靱猿」の猿等は子方と呼ばれてゐるが、實際はシテ、アドと呼ばれるものは、大低二人或は三人までの役割に言はれ、アドが多い場合は例へば、「庖丁聟」の如くシテ、舅、太郎冠者、女、教へ手等と役割によつて呼ばれてゐる。併し舞狂言だけは能のやうにシテ、ワキ、間（「通圓」―シテ　通圓の幽靈、ワキ僧、間　所の者。「蟬」―シテ　蟬、ワキ　僧、間　所の者。）と言はれる。また「煎じ物」や「菌」等には、立衆と云つて三のアド以上のアドに當るものが出る。これは人數に制限はないが、必ず奇數で五人或は七人を以て普通行つてゐる。この數は場面の效果に關係はあるが、狂言のやうな制約された特殊な藝術にあつては、その人數の多數はそれ程重大な關係を持つてゐるのではない。それは單に二個の人物が動いてゐるとも見られる。「煎じ物」に例をとれば、祇園の會の頭の許に招かれて噺子物の稽古をするものが、立衆と言つて五人或は七人出るとしてもその內の先頭の一人、立頭（たちがしら）は正に一個の人物であるが、他の立衆は二人でも八人でも一個の人物として考へられる。立頭は亭主及び太郎冠者と詞を取りかはし、噺子の音頭を取り拍子をふむけれども、他の立衆は何人でもその擧止動作は全く同じで同音に囃す、

立頭「時雨の雨に濡れじとて」

立頭「鷺の橋を渡いた、鵲の橋を渡いたりや、そうよの」

立衆はこれを幾度か繰り返へし、シテが煎じ物をすゝめると、囃子ながら皆同じやうに厭ぢやと言つて頭

を振るのである。要するに狂言の登場人物は、如何に多くても十人は越えないと言つていゝのである。そして數人登場することはあつても、二人乃至三人の間に最も緊張した形で演ぜられてゐる。

　また狂言が武家に重用され幕府の式樂となり、各流が流儀を樹て、師傳を尊重するやうになつては自由な束縛のない表現樣式を排斥し、只管に直觀的な修業を要求して狂言に夫々格式を設け、それによつて稽古の順位とした。和泉流ではその位附を、入門濟（「伊呂波」、「謀生種」、「船ふな」等）、頭取濟（「鍋八撥」、「三人長者」、「夷大黑」等）、一番習（「鳴子」、「大般若」、「木六駄」等）、小習（「棒縛」、「松囃子」、「入間川」等）中習（「靱猿」、「鬼丸」、「業平餅」等）、大習（「唐人相撲」、「金岡」、「枕物狂」、「釣狐」、「比丘貞」、「庵の梅」、「越後聟」、「花子」）としてゐる。なほ「狸腹鼓」、初日三番叟、風流は一子相傳物で家元以外には勤められないことになつてゐた。また習物の演ぜられる時は、後見は麻の裃を着けるとか、それに地を要するものゝ時は地に出る者も同樣麻の裃を着けることになつてゐる。

　上演の番數は能五番に對して狂言四番、能があり狂言がありまた能が出るといふのが一般に行はれた形式で、「習道書」の「信のさるがく三番、きうけん二番已上五番也」の形式を追つて番數がふえたもので、狂言盡といつて狂言ばかり行はれる場合でない限り、斯うした組合せは仕手方狂言方の演者の爲に最も都合のよいことである許りでなく、この二つの藝術が觀客に對して互に大きな力を影響させる舞臺上の效果からも重大な意義のあることである。そして番組を作るに當つては、脇狂言（「麻生」、「若菜」、「秀句傘」

等）、二番目（「膏薬煉」、「野老」、「薩摩守」等）、三番目（「蟹山伏」、「長刀應答」、「米市」等）と分けるが、脇狂言の「福の神」は切にも當て「佐渡狐」、「鞍馬聟」は初番物、「歌仙」は脇狂言にも二番目にも、「寶の槌」、「文藏」、「二千石」、「鬼瓦」、「昆布賣」は初番目二番目にも、「骨皮」、「太鼓負」、「附子」等は二番目三番目、「宗八」、「小傘」、「首引」等は三番目四番目にも出す。脇狂言は狂言の首位に置かれるもので、目出度い事を仕組んだものであるから四季を論ぜず演ぜられるけれども、「水掛聟」、「蚊相撲」等は多く夏に、「萩大名」、「鴈盗人」等は秋に演ぜられ、春ならば「土筆」、冬ならば「あかゞり」を出すとか季節に合つたものを撰んで番組が作られる。

　さて狂言が演ぜられるに當つて、裝置が舞臺に設けられることがある。裝置と言つても極めて簡單な無雜作なもので、能のそれと類似してゐる「唐人相撲」の屋臺、これは能の「邯鄲」と同じものである。また「花盜人」では能の「羽衣」、「松風」等に用ゐられる臺枠に、その上五尺許りの左右へ廣がつた作り花をつけた櫻の立木が出る。これを作り物と言つてゐる。それらは狂言の演ぜられる前に舞臺に設けられるものと、「泣尼」の高座の如く、演技中に後見に依て切戸から舞臺へ運ばれるものがある。

　なほ登場人物に、裝束（附小道具）及び面が用ゐられる。裝束は、多く足利時代の風俗に取つた。そして狂言の詩材が一般民衆に取つた爲に、その裝束が色々の風俗を示してゐる。その一般的なものを見るに大凡、大名は、着付　段熨斗目、素袍、大名烏帽子、少サ刀、扇子。但し「入間川」、「蚊相撲」、「文相撲」、

「鼻取相撲」等では、着付や素袍をぬぐから着込白小袖、下袴を別に着けてゐる。太郎冠者は、着付 縞、狂言袴社杯、腰帶。山伏は、着付 厚板、大口、水衣、腰帶、兜巾、篠懸、珠數、太刀。出家は、着付 無地熨斗目、長衣、五條袈裟、角頭巾、徑、珠數、中啓。座頭は、着付 縞、狂言袴、狂言袴、水衣(但し十德にても)、腰帶、強師頭巾、杖。百姓は、着付 縞、掛素袍、狂言袴、扇子。聟は、着付 段熨斗目、素袍、侍烏帽子、少サ刀、扇子。女は、着付 縫箔、びなん、女帶を用ゐる。更に狂言では神や毘沙門や鬼や物の精をも扮裝させてゐる。大黒は、着付 唐織、法被、半切、腰帶、袋、中啓、小槌(但し壺折にても)、大黒頭巾、大黒の面。蛭子は、着付 縫箔、下袴、縷狩衣、腰帶、襷(色鉢卷を用ゆ)、中啓、釐桶二つ、釣竿、釣緒、鯛、注連飾、夷烏帽子(調度懸)、夷の面。福の神は、着付 縫箔、下袴、唐織壺折、腰帶、中啓、丸頭巾、福の神の面。毘沙門は、着付 厚板、下袴、法被、腰帶、垂、中啓、釐桶二つ、矛鉾、釣針、釣緒、鯛、透冠、毘沙門の面。鬼は、着付 厚板、括袴、腰帶、壺折厚板、鬼頭巾、脚絆、武惡の面。松脂の精は、着付 厚板壺折、括袴、腰帶、中啓、頭巾、空吹の面。蚊の精は、着付 縞、縷水衣、括袴、腰帶、毛頭巾、空吹の面を用ゐる。

また面の種類と用ゐられる狂言の曲名を列記すれば左の如くである。

面 曲名

「通 圓」 「通圓」シテ。

「見徳」　「止動方角」馬、「犬山伏」犬、「蟹山伏」蟹、「兒流鏑馬」馬、「茸」立衆、「横座」アド。

「武悪」　「武悪」シテ、「首引」鬼、「八尾」シテ、「節分」シテ、「朝比奈」鬼、「馬口勞」大王、「政頼」大王・鬼、「神鳴」シテ、「鬼の継子」シテ、「弓矢太郎」シテ、「柑子俵」小アド、「茸」立衆、「伯母が酒」、「鎧腹巻」、「簓屑」、「清水」、「膁殻」。

「祖父」　「腰祈」シテ、「枕物狂」シテ、「老武者」シテ・立衆、「酒講式」シテ、「孫聟」シテ、「鬼丸」祖父、「財寶」シテ、「瓢の神」瓢の神、「茸」立衆。

「登髭」

「鼻引」　「禰宜」シテ、「筒竹筒」シテ、「樂阿彌」シテ、「塗師平六」シテ。

「空吹」　「石神」シテ、「八尾」アド、「瓜盗人」アド、「蚊相撲」蚊、「松脂」シテ、「蛸」シテ、「野老」シテ、「蟬」シテ、「茸」立衆。

「乙御前」　「枕物狂」乙、「吹取」女、「首引」小アド、「六地藏」立衆、「佛師」、「釣針」小アド、「鬼丸」後シテ、「金津地藏」シテ、「賽の目」乙、「業平餅」乙。

「尼」　「泣尼」尼、「比丘貞」シテ、「庵の梅」シテ、「小傘」尼。

「伯藏主」　「釣狐」シテ。

「狐」　「釣狐」後シテ。

「猿」　「靱猿」猿、「猿座頭」猿、「猿聟」猿。

「毘沙門」　「毘沙門」シテ、「夷毘沙門」毘沙門。
「福の神」　「福の神」シテ。
「大　黒」　「大黒連歌」シテ、「彌宜山伏」大黒、「夷大黒」シテ。
「蛭　子」　「夷大黒」夷、「夷毘沙門」シテ。
「御　寮」　「比丘貞」シテ、「庵の梅」シテ。

なほ武惡の面には、武惡と作り武惡とがあり「樂阿彌」には樂阿彌の面、「神鳴」には神鳴の面、「塗師平六」には塗師の面もあるが、此等は後に作られたものらしい。また三番叟の黒色の面、風流に用ゐる千々之尉、延命冠者の面、間に用ゐる鳶の面等もある。

以上は狂言を演戲として研究するに、或は鑑賞するに必要なものを和泉流に依てその一班を擧げたに過ぎないが、また囃子、型、科白等をも調査し、大藏・鷺二流の組織との比較によつてその特色を考究し、更に古く狂言は如何なる裝束や、裝置や、道具や、囃子を用ゐてゐたか、その藝風、型、科白、等を檢討し、又狂言の成立した室町時代及びその消長した時代の觀衆を知らねばならない。今迄も狂言と室町時代の世相との關係を考察したものは尠くはないが、もつと劇場に卽した觀衆に就いての研究が必要である。其の當時の劇場組織と、藝風と、觀衆とは、密接な關係をもつて支持されてゐるからである。

空吹

乙御前

猿

武惡

見徳

祖父

福の神

黒色　以上十面　名古屋　狂言共同社藏

室町時代に發達した能樂と共にその消長を同じくし、今日猶行はれてゐる狂言に就いては、能樂のともかくも相當研究されてゐるのに比して餘りに顧られないやうに思はれる。明治二十八年芳賀矢一博士が「帝國文學」第二及び第三號に「能狂言に就きて」と題し、狂言の研究を提唱されてから、笑の文學としての研究は屢々あつたが、野村八良氏が明治三十八年から大正二年まで雜誌に發表されたものを增補して「能狂言之研究」(大正五年刊、光風館發行。)に纏めて單行したものと、近年高野辰之博士が「歌舞伎」に歌舞伎劇前史として說かれたものが「歌舞演劇講話」(昭和四年刊、寶文館發行。)に「能狂言の說明」として收められてゐるもの等をその重なるものとして數へる位で、狂言の主として考覈すべき舞臺藝術としての研究は、未だ着手されてはゐない。狂言の本文が文學としても觀られ研究すべきではあるが、元來が舞臺に實演されたところの演戲であつて、縱令へ文學として研究すべきにしても實演すべき劇としての研究用意の缺けた考覈は、狂言の本質を闡明することは出來ないし、その眞價を窺ふことを許さない。併しとかく中世の文學として鑑賞されたり、語學的に取扱はれることはあつても、今日能を觀る觀客の多くから大抵の場合は輕視されてゐるやうに、狂言の演戲としての考察は何時も甚だ無關心のまゝで行はれてゐるのは、この藝術の爲に遺憾に思はれる。狂言の本文が單なる讀者に演戲としての自己を表はさないものであるといふことは、その本文の成立や特質を檢討した者には判る筈である。しかも今日に於ける研究は、狂言の笑を分類して西洋の笑の哲學に附會したり、或はその素材と室町時代の世相風俗との關係を觀察するだけで、その獨特の發達を遂げた戲曲と

しての結構に關する批判等は檢覈されてゐないのである。狂言が文學としても鑑賞さるべきものであり、研究の對象となり得ると同時に、國語學上、風俗史上の貴重な資料ではあるが、狂言の眞價を高調するところのものは、劇としての價値に外ならない。私は狂言を喜劇としての高所を標致した藝術だと考へてゐる。狂言が時勢と共に流動して幾度か改變されたけれども、獨自の進化を遂げ、基礎的成分は大切に追隨され保育されて今日に及んでゐるのである。しかも今日能樂の陰に僅かに生命を保つ我が國に唯一とも言ふべき喜劇を鑑賞し研究して、薄れ行く光輝を發揚し、我が將來の喜劇を創造したいものである。（昭和五年十月）

嘗て私の和泉流研究に御便宜を與へて下さつた、井上重兵衛、河村鍵三郎、野村萬齋、石田元季諸氏に厚く感謝の意を表する。

狂言篇

三番叟（さんばさう） 鷺流

シテ　三番叟
アド　千歳面箱

▲初日の式　三番叟。千歳（面箱）の出やう及び三番叟初段揉出しの型。笛譜省略。

三番叟　面を掛け。袖の露取る　へあら目出度やな。物に心得たる呼答（あど）の大夫殿に見參申さう。千歳へちやうど參つて候。三番へ誰がお立ちにて候ぞ。千歳へ呼答と仰せ候程に。某隨分物に心得たると存じ。御呼答の爲に罷り立ちて候。三番へほう。千歳へ今日の御祝儀を千秋萬歳と目出度きやうに舞うておりそい。色の黑い尉殿。三番へアドと申す所に早々とのお立ち祝着（しうちやく）に存ずる。今日の御祝儀を此の色の黑い尉が。千秋萬歳と目出度きやうに舞ひ納めうずるは。何より以て安う候。先づ呼答の大夫殿は。元の座敷へおも〳〵とお直りそい。千歳へ某の座敷に直らうずるは。尉殿の舞より安う候。先づ御舞ひ候へ。三番へいやお直り候へ。千歳へいや御舞ひ候へ。三番へ只お直り候へ。千歳へさあらば鈴を參らせう。鈴を渡す。三番へあらやうがましや候。以下鈴の段となる。

▲二日目の式

三番叟へ何より以て安う候。こゝまでは初日同斷。それにつき。アドの大夫殿にちと不審申し度きことの候。千歳へそれは如何様なる事にて候ぞ。三番へ唯今翁の大夫の召されたる烏帽子は何と申し候ぞ。千歳へあれは立烏帽子と申し候。三番へ又アドの大夫殿その外。何れも囃子の衆の着せられたる烏帽子をば何と申し候ぞ。千歳へこれは折烏帽子と申し候。三番へ折烏帽子立烏帽子吟ずる心持。何れも目出度い名共にて候。祝うて參らせうずるが如何候べき。

千歳へ如何様にも御祝ひ候へ。三番へ四方に四萬の舞を立烏帽子。其の中にどうど折烏帽子。千歳へ御祝ひ近頃祝着申し候。又尉殿にも不審申し度き事の候。三番へそれは如何様なる事にて候ぞ。千歳へ唯今翁の大夫の召されたる烏帽子にも違ひ。又アドの大夫何れも囃子の衆の着せられたる烏帽子にも變り。尉殿の烏帽子は將棋の駒形にて候が。それは何と申す烏帽子にて候ぞ。三番へこれは物と申す烏帽子にて候。千歳へ何と申し候ぞ。三番へ物と。千歳へ何と。三番へ物と。千歳へ何と。三番へかやうに天下治まり目出度い折からなれば。此の處へ七珍萬寶からりからりと降り烏帽子候。千歳へあら目出度や。さらば鈴を參らせう。三番へあらやうがまし

やな。（以下鈴の段）

▲三日目の式

三番叟（前の言葉初日同斷。）〽何より以て安う候。それにつきアドの大夫殿に物語りが致したう候が。何と候べき。千歳〽何事にてもあれ御物語り候へ。これにて承らうずるにて候。三番〽世上に德人多しと申せども。子德人程目出度き者はあるまじきと存じ候が。何と思召され候ぞ。千歳〽尤も左樣にて候。三番〽それにつき某は。子を十人持ちて候。上五人は珠を延べた如くなる男子。下五人は瑠璃を延べた如くなる女子なるが。男子の上席には某。女子の上席には子持の母。十二人が車座に居ながら居て。やれ此處な者よと呼べば。我が事かと思うて立騷ぐによつて。ただ一聲に呼ぶやうに名を附けて候。千歳〽それは何と御附け候ぞ。三番〽物と附けて候。千歳〽何と。三番〽物と。千歳〽何と。三番〽おとよ。けさよ。だんだら。いなごに。たつ松。いる松。かいつく。ひつつく。すひつく。燧袋と附けて候。千歳〽あら目出度や。さあらば鈴を參らせう。（以下鈴の段。四日目は初日同斷）

▲田歌。

三番叟（前は初日同斷。）〽何より以て安う候。然ればアドの大夫殿を田歌節に呼うで見たう候が。何とおりやらうぞ。千歳〽如何やうにも御呼び候へ。答へ申さうずる。三番〽ヤドノヤ。ヤドノヤ。ヤドノ〱ヤヤ。ヤドノヤ。千歳〽ナヂヨトヨ。ナヂヨトヨナヂヨトナヂヨ給へ尉殿。三番〽ヤドノ〱〱〱ヤドノヤ。ヤドノヤドノヤドノヤ。千歳〽何事ぞ。三番〽なんぼう良き天氣にては候はぬか。千歳〽あゝら目出度や。鈴を參らせうずる。（以下鈴の段）

鶴龜の風流　千歳の風流

シテ　鶴先きへ出る。

ツレ　龜あとに出る。

二人一度に出る也。

一せい二人〽龜は萬年の劫を經て。鶴も千歳や。重ぬらん。千歳〽あら奇特や。是へ鶴龜の現れ出でたるは如何やうなる子細にて候ぞ。鶴〽その事にて候。唯今千歳ふるの次第に。鶴は千歳ふる。君はいかが ふると候程に。其の緣により斯かる目出度き折なれば。是まで罷り出でて候。千歳〽又それなる龜には。如何なる緣によりて候ぞ。龜〽其の事にて候。唯今の詞に。萬歲こそふれありうどうと候へば。龜は萬年の齡をふるもいなれば。其の緣により罷り出でて候。千歳〽まことに天下泰平の御世なれば。鶴龜ともに是まで現れ出づる事。いよ〱所繁昌の瑞相と存じ候間。此の上は目出度う鶴龜共にうつり舞に舞ひ候へ。鶴〽さあらばやがて目出度ううつり舞に舞うずるにて候。二人〽目出度かりける御代の惠み。鶴と龜との舞の曲。（舞。餅酒などの舞と同じ事なり。）二人〽千歳ふるの緣に引かれ。〱。緣の龜も舞ひ遊べば。丹頂の鶴も飛びまはり。いま此の處に一千年の。齡をさづけ奉り。是までなりとて鶴龜共に。千歳ふるにお暇申し。千歳ふるにいとま申して。海中さしてぞ歸りける。（または。海中に入ることそめでたけれ。にも。）

御賀の松の風流　千歳の風流

一人にても二人にてもするなり。

先きへ出るがシテなり。

一せい松〽君が代の久しかるべきためしには。兼ねてぞ植ゑし住吉の松。千歳〽あら奇

特や。是へ出られたるは。如何やうなる人にて候ぞ。松へ是は住吉御賀の松子の日の精。これまで現れ出でて候。千歳へ扨それは如何やうなる縁により。今此の處へは出でられて候ぞ。松へ其の事にて候。唯今千歳ふるの謠に。興がる松かな御賀の松と候程に。その縁により。目出度き折なれば。これまで罷り出でて候。千歳へ斯かる目出度き事こそ候はね。天下泰平の御代なれば。心無き草木までも現れ出づる事。類少なき御事にて候。さあらばとてもの事に。目出度き舞を一さし御舞ひ候へ。松へ仰せの如く目出度き折なれば。やがて一さし舞うずるにて候。ワカ松へつきせぬ御代のしるしとて。千年の松の舞の袖。舞の如く松へ御賀の松の縁に引かれ。/\。引かれ引かれて舞ひ遊べば。喜びは日々に。なほまさり行く此の君の。千歳ふるや。萬歳までも末かけて。千歳萬歳末かけて。治まる御代とぞ成りにける。

大黒(だいこく)の風流(ふりう)　三番叟の風流

初段過ぎ。鈴を請取つて。一部拍子にちがうを云うて。下に居る。

一せい大黒へ子の日をば我が吉日と立出づる。心も勇む心かな。大黒へ抑もこれは。佛法を守護し奉り。國土に寶を與ふるなる。大黒天とは我が事なり。三番叟へあら奇特や。是へ御出でありたるは。如何やうなる御方にて候ぞ。大黒へ是は比叡山延暦寺三面六臂の大黒なるが。今日の御祝儀守らん爲め。又目出度き御能をも見物申さん爲め。これまで現れ出でて候。三番へ是は奇特なる事を承り候ものかな。それと申すも。所繁昌のしるしと存じ候。さあらばとてもの御事に。三面六臂大黒の目出度き謂れ御物語り候へ。大黒へあういでさらば語つて聞かせ申さうずるにて候。三番へやがて御物語り候へ。大黒へ抑も比叡山延暦寺は。傳教大師桓武天皇と御心を一つにして。延暦年中に開闢し給ふ。されば一念三千の機を以て。三千人の衆徒を置き。佛法今に繁昌たり。其の時開山三千人を守護し給ふ天部をと祈誓す。其の時此の大黒出現す。いや/\大黒は一日に千人をこそ扶持し給へ。此の山には三千人の衆徒を守らん天部をこそ安置(あんち)あるべけれと有りしかば。此の大黒大きに怒りをなし。いでさらば奇特を見せんとて。忽ち三面六臂とあらはる。其の時開山滿足し。則ち叡山に安置す。是こそ三面と現じたる子細候よ。三番へ誠に目出度き謂れにて候。某いまだ鈴の段を舞はず候。唯今舞うずる間。それにて御見物候へ。大黒へ我等も相舞に舞うずるが。何と候べき。三番へそれこそ猶以て目出度う候へ。やがて舞うずる間。こなたへ御通り候へ。二人並うで入る時。一せい打つ三番叟拍子にちがうを云ふ。三番へあら奇特や。又拍子打ちちがうて。舞の舞はれぬは如何に。是迄にて下に居る。ねずみへ子の日をば我が吉日と立ち出づる。心も勇む山路かな。三番へそれへ鼠共澤山に出でて候が。これは如何やうなる事にて候ぞ。ねずみへ其の事にて候。所繁昌の験(しるし)により。大黒殿の御出でにて候故。眷屬の鼠共も是まで罷り出でて候。三番へ近頃目出度き事にて候。さあらば某鈴の段を舞うずる間。何れもそれにて見物仕り候へ。ねずみへ畏まつて候。大黒へさらば大黒天も相舞まひ候べし。三番へあらやうがましや候。大黒と相舞なり。かゝり[illegible]の如く。舞ひ納め大鼓頭打。鼠ひ出す。鼠四共に踊居へなほり居るなり。鈴の段を舞ひ納むれば。三面の大黒喜び給ひ。なほ/\所繁昌に守らんと。打出の小槌を所になさめ。眷屬の鼠を引きつれて。叡山さして歸らせ給ふ。あらたなりける

奇瑞かな。（其の風流は。三番叟ばかり舞ふ事もあるべし。）

鳳凰の風流　（三番叟の風流）

鳳凰一せい〽有難や今この君におひ竹の。世々を重ねて出づるなり。三番叟〽あら奇特や。是へ鳳凰の飛來するは。如何やうなる子細にて候ぞ。鳳〽其の事にて候。天下泰平の御世には。聖人も出生し。仙人も山より出づるならひなり。斯樣の目出度き折からには。此の鳳凰出ぬと云ふ事なし。唯今目出度き舞の囃子の音に引かれ。これまで來儀仕りて候。三番〽斯かる奇特なる事こそ候はね。さて鳳凰の目出度き子細あらば。語りて聞かせ候へ。鳳〽それ鳳凰の目出度き子細と云へば。諸鳥第一の名を得て。四靈の一つと仰がれ。七つの徳を集めて五つの色を表す。されば李太白が詩にも。鳳九千仞に飛ぶ。五色采珍を備ふと綴られたり。また漢の黄覇と謂つゝ人。國を治むるに。政天下第一なれば。其の時も此の鳳凰國の境に出でて。集りつどひたり。なんぼう目出度きものにて候ぞとよ。三鳳〽斯かる目出度き事こそ候はね。唯今某鈴の段を舞うずる間。先づかう通り候へ。鳳〽心得申して候。三番〽また虚空に其の音の聞え候。鈴の段を暫く待たうずるにて候。（ト云うて下に居る。鳳凰なほる。）

とも。其儘一せい。二人一せい〽治まれる。國を守りの今までも。取り傳へたる舞樂かな。三番〽是へ不思議なる人二人出でられて候が。是は如何やうなる人にて候ぞ。后稷〽其の事にて候。是は虞舜の世に后稷と云へる者なり。かゝる目出度き折を得て。鳳凰まで飛來仕りて候間。我も御相きも今日の目出度き時節を悦ばんため。これまで罷り出でて候。三番〽かゝる目出度き事こそ候はね。さあらばともかくもの御事に。后稷の御身の目出度き事を御物語りあつて御聞かせ候へ。后〽其の事にて候。我れ百のたなつ物を蒔き。稼穡の道を教へのはれば。それよりして國富み民豐かにして。萬民の喜び限りなし。されば其の御世に太平の奇瑞ありて。鳳凰飛び來たつて舞ひ遊ぶ。今もつて鳳凰の飛來するも。我れ國を治めし故なり。三番〽誠に以て目出度き事にて候。又あれなるは。如何やうなる人にて候ぞ。夔子〽是は虞の帝に其の名を夔と云ふ者なり。我れ音樂の道に優れたれば。鬼神をも和らげ。人の心をも慰めぬれば。天下泰平の御世となる。又鳳凰は靈ある鳥にて。我が音樂の妙なるを感じて。庭上に飛び來り舞ひ遊ぶ。されば諸人の口ずさみにも。蕭韶九成すれば。鳳凰來儀すと云へり。かゝるためしも皆。これ我が音樂の威徳なり。なんぼう正しき謂れにては候はぬか。三番〽近頃目出度き事どもを承りて候ものかな。某未だ鈴の段を舞はず候。唯今舞うずる間。是にて見物あつてたまはり候へ。后〽さあらば夔と共に相舞に舞うずるが。何と候べきぞ。三番〽それこそ三神相應にて。なほ以て目出度う候へ。やがて相舞に舞うずる間。こなたへ御入り候へ。（三番叟面箱の前より鈴持ち出る。二人は太鼓座より出る。）二人　シテ〽四海國土の安全は。三人〽四海國土の安全は。治めざるに平かなり。（鈴の段。二人舞納むる。何れも風流同事なり。舞納めて。太鼓頭にて謡出す。）

後二人〽夔子は琴をかきならし。數曲をつくし彈じ給へば。鳳凰喜び翼を連ね舞ひ遊びつゝ。目出度し〳〵今此の時に。あひ同じく御世を仰ぎ奉り。たんけつの山さして歸りければ。后稷も夔子も信仰をなして。舞納むるこそ目出度けれ。

【あ】

胼（あかゞり）

シテ　太郎冠者
アド　主　人（入道具）

アド〽此邊りの者で御座る。此中方々の御參會お振舞は夥しい事で御座る。今日さる方の振舞に參る。太郎冠者を呼出し。供の儀を申付けうと存ずる（ト云うて呼出す。出るも常の如し。）此中方々のお振舞は。夥しい事ではないか。シテ〽御意なさるゝ通り。打續いた事で御座る。アド〽今日も亦振舞に行くは。シテ〽毎日／＼御苦勞な事で御座る。アド〽慰みぢやと思うて行けば。曾て苦勞な事はないわいやい。シテ〽是は御尤もで御座る。アド〽追付け行かう。供をせい。シテ〽畏まつて御座る。アド〽さあ／＼來い／＼。扨身共が方へも近日客を申入れうと思ふが何とあらう。シテ〽餘所へばかりおいでなされて。此方へは申入れさせられぬとあつて。陰でお叱りなさるゝお方もあると承りました。アド〽其樣な事ならば。急に申入れうわいやい。シテ〽それがよう御座りませう。アド〽イヤ何かと云ふ内に川へ來た。シテ〽誠に川へ參りました。アド〽さあ／＼負ひ越せ。シテ〽誰を。アド〽身共を。シテ〽なりませぬ。アド〽なぜに。シテ〽毎年とは申しながら。別して當年は寒氣も強う御座るによつて。臑に胼が切れましてしみまするに依つて。水へつける事はなりませぬ。アド〽それは氣の毒ぢやが。それならば渡らう程に。汝も身拵へをして渡れ。シテ〽是は御意とも覺えませぬ。私が渡る程なれば。おまへを負ひ越しますれども。如何にしてもしみまするによつて。水へ足をつける事はなりませぬ。アド〽と云うて先へ供を連れぬ事もならぬ。是非に及ばぬ。身共に負はれい。負ひ越さうぞ。シテ〽御勿體ない。御主人に何と負はれらるゝもので御座る。アド〽聞けば其方は此中歌を詠むげな。此所で歌を一首詠め。負ひ越さうぞ。シテ〽よし歌を詠むにもなされい。おまへに何と負はれらるゝもので御座る。アド〽總じて歌にて鬼神も納受あると云ふ。汝を負ふとは思はぬ。歌を負ふと思うず。則ち胼といふ題をやるぞ。シテ〽なんぼうの歌も聞きましたが。胼といふ題は珍らしう御座る。アド〽そちは難題でも詠みかねぬと聞いた。是非とも詠め。シテ〽さやうならば斯うも御座りませうか。アド〽何と。シテ〽胼は。彌生の末の郭公。うづきまはりて音をのみぞ啼く。アド〽是は一段と出かいた。迚もの事にも一首よめ。シテ〽歌といふものは。其樣にとつかは／＼詠まるゝものでは御座らぬ。アド〽そちは歌が達者なと聞いた。是非とも詠め。シテ〽ちと案じて見ませう。斯うも御座りませうか。アド〽何と。シテ〽胼は。春にもならば歸れかし。つれなく足のねにや住むらん。アド〽是は猶よう出來た。さあ／＼負はれい。シテ〽是は御ゆるされませ／＼。アド〽何をしてゐるぞ。負はれぬか。シテ〽あまり勿體なうて。ちと斟酌で御座る。アド〽先へ遲うなる。さあ／＼早う負はれい。シテ〽それならば負はれまする。御ゆるされませ。アド〽さあ／＼渡るぞ。シテ〽あぶなう御座りまするぞ。アド〽是はいかう深いは。シテ〽怪我をなされまするな。アド〽扨この川の中でも一首詠め。シテ〽向ふへ着きましてから詠みませう。アド〽愛で詠まずば川へはめるぞ。シテ〽アヽ詠みませう／＼。アド〽急いで詠め。シテ〽胼は。戀の心にあらねども。ひゞに増りて悲しかりけれ。アド〽一段と出かいた。さ

り乍ら。汝よく聞け。總じて昔から今に至る迄。主が下人を負うた例がない。おのれがやうなやつは斯うしておいたが良い。シテ〽南無三寶。耳へ水がは入つた。しつかい濡鼠ぢや。一絞りになつた。爪先を濡らすまいと思うて。ぼんの窪まで濡らした。ハアくつさめ

ト云うて。止めて入るなり。

芥川（あくたがは）

シテ　生姜手の男
アド　ちんばの男
（入道具）

アド〽此邊りの者で御座る。承れば生田の八幡に御遷宮のあつて大參りぢやと申す。某も參らうと存ずる。シカ〳〵。誠に。某は生付いての片輪では御座らねども。幼少の時高い所から落ちて。斯樣の跛者となつて御座る。此事を祈誓致さうと存ずる。イヤ是迄來たればいかう草臥れた。暫く是に休らうて。似合はしき人も通らば。言葉をかけて同道致さうと存ずる。シテ〽此邊りの者で御座る。承れば生田の八幡に御遷宮あつて大參りぢやと申す。某も參詣致さうと存ずる。シカ〳〵。誠に。某は生付いての片輪では御座らねども。悴の時分ふと手を燒いて。斯樣の生姜手となつて御座る。此事も祈誓致さうと存ずる。アド〽イヤ是へ一段の者が參つた。言葉を掛けう。イヤなう〳〵これ〳〵。シテ〽此方の事でおりやるか。アド〽成程こなたの事ぢや。わごりよはどれからどれへお行きある。シテ〽身共は生田の八幡へ參る者ぢやが。何ぞ用でばしおりやるか。アド〽それは幸ひの事ぢや。身共も生田の八幡へ參る者ぢや。何と同道召さるまいか。シテ〽幸ひ獨りで連欲しう存じた。成程同道致さう　アド〽それならばいざお行きあれ。シテ〽何が扨そなたが先ぢや。先づそなたからお行きあれ。アド〽何の是に先の後のと云ふ事はない。先づそなたからお行きあれ。シテ〽それならば身共から行かうか。アド〽一段とよからう。シテ〽さあ〳〵おりやれ。アド〽心得た。扨ふと言葉を掛けたに。早速同心召されて。此樣な悦ばしい事はない。シテ〽連には似合うたもあり。又似合はぬもあるものぢや。そなたと身共は似合うたよい連でおりやる。アド〽ワア。是は大きな川へ出た。シテ〽わごりよは此川を知らぬか。アド〽いゝや知らぬ。シテ〽是は芥川と云うて。此川を渡らねば生田の八幡へは參られぬ。アド〽何ぢや。此川を渡らねば生田の八幡へは參られぬ。シテ〽身共は最早渡るぞ。えい〳〵。やう〳〵と渡つた。アド〽是は又苦々しい所へ來かゝつた。何としたものであらう。是非に及ばぬ。渡らずばなるまい。えい〳〵。アヽこりや石が滑る。氣味の惡い事ぢや。シテ笑ふ　シテ〽最前からきやつが後へさがると思へばちんばぢや。笑ふ。何と渡らしましたか。アド〽やう〳〵と渡つておりやる。シテ〽扨そなたに逢つて又いつ逢うも知れぬによつて。身共は歌を一首詠まうと思ふが何とあらう。アド〽一段とよからう。シテ〽かうもあらうか。アド〽何と。シテ〽津の國の。アド〽津の國の。シテ〽難波入江に來て見れば。あしのもとこそをかしかりけれ。アド〽是は一段と出來た。シテ〽ハア。わごりよは此歌に氣がつかぬさうな。是は足のもとで持つた歌ぢや。アド〽南無三寶。身共が足を見付けをつたさうな。さて〳〵腹の立つ事ぢや。シテ〽足のもとこそをかしかりけれ。笑ふ。アド〽なう〳〵。足のもと〳〵とようおりやる。シテ〽ハア。身共が歌を吟ずれば。わごりよはいかう腹を立てるの。

アドへいや／＼腹は立てぬ。この行先に此様な綺麗な水はあるまいに依つて。手洗をつかうて行かうと思ふが。何とであらう。シテへ是は一段とよからう。さり乍ら。一緒に居てつかうては。互ひにとばしるがかゝつて惡い。つうとのいてつかはう。アドへそれがよからう。扨も／＼綺麗な水ぢや。心がせい／＼とする。シテへ扨々是は綺麗な水ぢや。心がせい／＼とする。此様な綺麗な水はあるまい。扨も綺麗な事かな。アドへ最前からきやつは一方の手を出さぬと思へば生姜手ぢや。笑ふ。何とつかはしめたか。シテへやう／＼と使ひました。アドへ扨。最前の歌がよう出來たによつて。返歌をせうと思ふが何とであらう。シテへあの足のもとの返歌か。アドへなか／＼。シテへ是は一段とよからう。アドへかうもあらうか。シテへ何と。アドへ芥川。シテへ芥川。アドへ塵かき流す手を見れば。足のもとより猶ぞなかしき。シテへ是はいかう出來たさうな。アドへハア。わごりよも此歌に氣が付かぬか。是は手を見ればで持つた歌ぢや。シテへ南無三寳。身共が手を見付けをつたさうな。アドへ手を見れば。／＼。笑ふ。シテへそれよりは足のもとこそ。アドへ手を見れば。シテへ足のもと／＼。アドへ手を見れば／＼。笑ふ。シテへなう／＼。なうそこな人。アドへ何ぢや。シテへ最前から。手を見れば／＼とおしやるが。身共が手は何とした。アドへ何ともせぬ。生姜手ぢや。シテへヤイ／＼。どこに是が生姜手ぢや。アドへイヤ／＼そちらではない。こちらの手を出せ。シテへこちらぢやと云うて出し兼ねうか。そりや出した。アドへ是は身共が誤つた。それならばも一度そちらの手を出せ。シテへ幾度なりとも出して見せう。そりや出した。アドへ取つたぞ。シテへこりや何とする。アドへさあ。そちらの手を出せ。シテへこちらは最前出した。アドへそりや。生姜ぢやによつて得出さぬは。シテへ生姜でなくば何とする。アドへそちが存分にせい。シテへ存分にするぞよ。アドへおゝ存分にならうとも。シテへ出すぞよ。アドへ出せ。シテへ出すぞよ。アドへ出せ。シテへそりや出したは。アドへそりや生姜ぢや。シテへヤイ／＼そこな奴。アドへ何ぢや。シテへ何處に是が生姜ぢや。是は蘘と云ふものぢや。アドへ生姜も蘘も同じ事ぢや。生姜よ／＼。シテへあの横着者。どつちへ行く。やるまいぞ／＼。ト云うて追込み入るなり。

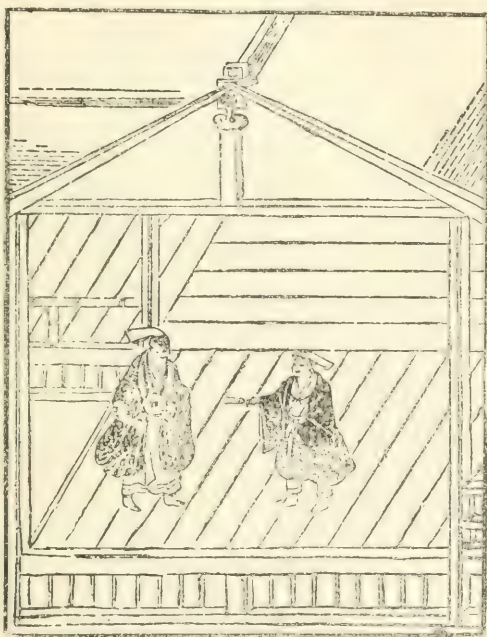
惡太郎（あくたらう）

シテ　惡太郎
アド　伯父
小アド　僧

（入道具）

シテへ此邊りに住居致す惡太郎と申す者で御座る。某伯父を一人持つて御座る。身共が常々好いて飲む酒を。陰でいかう叱らるゝと承つて御座る。今日はこの長刀を持つて參り。重ねて姦しう云はれぬ様に。口をとめて歸らうと存ずる。シカ／＼。誠に。餘所外ではなし。伯父と甥との事ぢやによつて。氣に入らぬ事があらば直におしやつたがよいに。陰で沙汰せらるゝは。言語道斷聞えぬ事で御座る。イヤ何かといふ中に是ぢや。ト云うて案内を乞ふ。出るも常の如し。シテへ身共でおりやる。アドへエイ惡太郎。此中は久しく會はぬが變つた事もないか。シテへこなたは異な事を云はしやる。餘所外ではなし。伯父と甥との中に變つた事があらば。知らせずには置きませぬわいの。アドへ是は身共があやまつた。して今日は何と思うてお出やつた。シテへおれは此中長刀を拵へたによつて。見せうと思うて持つて來ました。是を

見て下され。アド〽ア、それからも見ゆるわいやい。シテ〽何とこの長刀は切れませうかの。アド〽されば。何とあろぞ。シテ〽何とあらうとは切れまいといふ事か。アド〽いやいや。さうではない。シテ〽恐らく切つて見せませう。アド〽ア、あぶない〳〵。ア、そちは道で喧嘩をなしたさうな。シテ〽喧嘩などする様な者では御座らぬ。アド〽それならば酒に酔うたか。シテ〽いよ〳〵聞えぬ事を云はしやる。こなたが何時身共に酒を振舞うて。飲む事を知つて居さしやるか。アド〽扨々汝は物をとが〳〵しう云ふものぢや。下地もなくば貰うた酒があるによつて。振舞はうかといふ事ぢや。シテ〽それならばそれとおしやつたがよい。そりやよからう。出さつしやれ。アド〽まづ下にお居やれ。シテ〽遅ければ飲みませぬぞや。アド〽まづ下にお居やれト云うて。笛座より酒を持つて出る。アド〽さあ〳〵盃を取つて来た。一つお飲みやれ。シテ〽何と此酒はよいか。アド〽貰うた酒ぢやによつて。良いやら悪いやら知らぬ。

シテ〽悪ければ飲みませぬぞや。アド〽ハテ一つ飲んでお見やれ。シテ〽それならば注がせられい。アド〽心得た。シテ〽オ、ある〳〵。あるわいの。飲む。アド〽何とあつた。シテ〽いや。只ひやりとしたばかりで何も覺えぬ。

アド〽それならばも一つ飲うて。味を覺えさしめ。シテ〽も一つ飲みませう。注いで下され。アド〽心得た。注ぐ。シテ〽オ、ある〳〵。あると云ふに。酒といふものは。此様にこぼろゝ程に注がぬもので御座るわいのう。ちと酌も仕習はしやれト云うて飲む。シテ〽是は良い酒ぢや。アド〽何と良い酒か。シテ〽思ひの外良い酒ぢや。ちとこなたへさゝう。アド〽汝が知る通り身は下戸ぢや。シテ〽何の役に立たぬ人ぢや。ちと酒も飲み習はしやれ。扨こなたにいつぞは云はう云はうと思うてゐたが。こなたは俺が好いて飲む酒を。陰でいかう叱らしやるげな。アド〽いや叱るではない。もし酒が過ぎて病氣でもすれば悪いによつて。過ぎぬ程お飲みあれといふ事ぢや。シテ〽それは誰も知つてゐます。總じて酒といふものは。百薬の長たりと云うて。諸々の病を治すも此酒ぢや。その薬になる酒を飲むなといふ事があるものか。重ねて意見はおいて貰ひませう。アド〽オ、意見をする事ではない。シテ〽俺が斯うと云ひ出したからは。誰殿がお止めあつても。止まる事では御座らぬト云うて盃を出す。アド〽まだ飲むか。シテ〽獻が悪い。アド〽過ぎはせぬか。シテ〽何のこの小さい盃に二つや三つ飲

うだというて。何の醉ふもので御座る。アドへそれならば。さあ〳〵お飲みやれ。シテへさりながら。輕う注いで下され。アドへ迚も飲むなら丁どお飲みやれ。シテへ輕う注がつしやれ。オヽある〳〵。あると云ふに。こぼるゝわいのう。只今も云うて聞すに。酒といふものは。此樣にこぼるゝ程は注がぬものぢやと云ふに。扨も〳〵さもしい注ぎ樣をする人ぢやト云うて。半分飲んで。むせる。アドへ何としたぞ〳〵。シテへあまり此方が姦しうおしやるによつてむせた。アドへそれならば靜かにお飲みやれ。シテへちと休んで飲みませう。アドへそれがよからう。シテへ扨いつぞは云はう〳〵と思うてゐたが。こなたは俺が好いて飲む酒を。陰でいかう叱らしやるげな。アドへいや叱りはせぬ。シテへいや〳〵叱らしやるげな。アドへ何も叱りはせぬ。酒が過ぎて病氣でもすれば惡いによつて。過ぎぬ程にお飲みやれといふ事ぢや。シテへまだ其樣な事を云はしやる。總じて酒は百藥の長たりと云うて。諸々の病を治すも皆この酒ぢや。その藥になる酒を飲むなと云はしやるは。こなた何ぞ俺に意趣があるか。アドへいや。何も意趣はない。シテへいや。意趣があらう。又こなたが何ぞ好いてさつしやる事を。はたから兎や角云うたらば。餘り機嫌がようあるまい。まつその如く。俺が好いて飲む酒を誰殿がお止めやつても。いかな〳〵止る事では御座らぬ。意見おいて貰ひたい。アドへいかな〳〵。意見する事ではない。シテへサア俺が斯う云ひ出してから。誰殿がお止めやつても止る事ではないト云うて飲む。シテへサアとらつしやれ。アドへ最早飲めぬか。シテへもういやぢや。アドへそれならば取るぞよ。シテへハテ取らつしやれ。アヽくどい人ぢや。こなたの樣な人には。ちと長刀を使うて見せう。アドへやい〳〵。何をするぞいやい。シテへ長刀を使ひまする。アドへアヽこはいざれ事をするないやい。シテへ俺に誰ぞ敵たう者があれかし。この長刀にのせて見せうものを。アドへアヽあぶないわいやい〳〵。シテへこはいか。アドへこはい〳〵。シテへそれならば。もう斯うゆかう。アドへもうお行きやるか。シテへ中々。常の如くアドうける。シテへあゝ〳〵。吝い伯父なれども。この長刀を持つて居たれば。恐ろしうがつて酒を飲ませた。今から酒を飲みたければ。この長刀を持つてゆけば。何時でも酒が飲まるゝといふものぢや。笑ふ。ちと謠うてゆかうト云うて。小謠ざゝんざを謠ふ。こりや見知らぬ人が手をついて。こなたへのお辭儀ならばお手を上げられい。それは迷惑ぢや。ひらにお手をあげられい。イヤこなた誰ぢや。笑ふ。人が〳〵と思うたれば。こりや石佛ぢや。石佛が人に見えては行かれぬ。ちと爰で寢てゆかう。エイ〳〵。醉うた事かな〳〵。ト云うて。小さ刀ぬき。帶折解きて寢る。アドへ最前甥の惡太郎が來て。殊の外御酒に喰べ醉うて歸つて御座る。路次の程も心許ない。見に參らうと存ずる。シカ〳〵。誠に。酒を飲ますれば。醉の增されば機嫌が惡し。此樣な氣の毒な事は御座らぬ。是は如何な事。あれに正體もなう寢てゐる。扨も〳〵苦々しい事かな。ヤイ惡太郎。此處は街道ぢや。起きてゆけ〳〵。エヽ熟柿臭やの〳〵。したゝか酒に醉ひ居つた。何卒是に懲りて。以來酒を飲まぬ樣にしたいものぢやが。致し樣が御座るト云うて。差足して側へゆき。長刀を取り。元へ戻る。アドへ是さへ取れば心安いト云うて。太鼓座より十徳を持つて出て。帶折ぬがせ。えんひ頭巾とり。頭巾ばかり殘し。鬚を取り。一緒に持ちて後見座へおく。小さ刀は長刀の時とる。アドへヤイ惡太郎。確かに聞け。汝日頃醉狂をし。惡逆ばかりなすによつて。今斯樣の姿にする。向後は惡心を飜し。佛道に入つて後世を願へ。則ち汝が名を南無阿彌陀佛と付くるぞ。エイ。まづ歸つて樣子を見うと存ずる。

シテへムヽ寢た事かな〳〵。たそ湯か茶か一つ呉れい。是はいかな事。内か〳〵と思うたれば野原ぢや。何として此處に寢てゐた事ぢや知らぬまで。オヽ誠に夜前伯父や人の方へいて。したゝか酒を飲うだが。その酒に醉うて。爰を路次とも知らず寢てゐたものであらう。それならば長刀がありさうなものぢやが。こりや何ぢや。衣か小袖もなし。其上どうやら頭(つむり)が輕うなつた樣な。ワア。こりや坊主にしをつた。ホヽ南無三寶。大事の髭まで剃りをつた。扨々腹の立つ事かな。是は何者の仕業ぢや知らぬまで。アヽ今思ひ出した。夜前夢(いめ)現(うつゝ)のやうに。汝日頃醉狂をして。惡逆ばかりなすによつて。今斯樣の姿にする。向後は惡心を飜し。佛道に入つて後世を願へ。則ち汝が名を南無阿彌陀佛と付けるぞ。エイ。と仰せらるゝと思うたらば目が覺めた。扨は身共が醉狂をして。惡逆ばかりするによつて。釋迦か達磨が變化させられて。斯樣の姿になされたものであらう。是を菩提の種として。樂屋に入つて後世を願はう。さり乍ら。今など斯樣の姿にならうとは思ひも寄らぬ事ぢや（ト云うて。泣く〳〵十德着る。小アド出る。）小アドへ南無阿彌陀南無阿彌陀佛。なむあみだ。シテへ是はいかな事。たつた今身共が付いた名を。はや何者やら知つて呼ぶは。あれ〳〵正(まこ)しう身共が名ぢや。是は返事をせずばなるまい（ト云うて。色々返事する。坊主不思議さうにして念佛申す。色々仕得口傳なり。）小アドへ是はいかな事。身共が念佛を申せば返事をする。あの樣な者は構はぬがよい（ト云うて。念佛申して出るなり。）シテへ是はいかな事。身共が名を云うて呼ぶによつて。返事をすれば。異な顏をする。合點のゆかぬ事ぢや。あれ〳〵又呼ぶ。こりや返事を致さう。ヤア何ぞいのう（ト云うて。念佛の間に返事する。小アドをかしがる。笑ふ。）小アドへどうでもきやつは氣違ひさうな。踊念佛を始めて。きやつを浮からいてやらう。シテへ是はいかな事。笑ひをる。ハテさて合點のゆかぬ事ぢや。（小アド拍子にかゝり念佛申す。シテも拍子にかゝり返事する。）シテへヤア。こりやしきりに呼ぶは。返事をせずばなるまい。（是よりヤア〳〵と云うて。返事色々あり。小アド大いに笑ふ。）シテへアヽこれ〳〵。そなたは最前から身共が名を云うて呼ぶによつて。返事をすれば。をかしさうに笑ふ。どうした事ぢや。小アドへして其方(そなた)の名は何と云ふぞ。シテへ身共が名は南無阿彌陀佛。小アドへ何ぢや。南無阿彌陀佛。シテへ中々。小アドへしてそれには何ぞ仔細があるか。シテへ成程仔細がある。身共はこの邊りに惡太郎と云うて大の醉狂人ぢや。夜前も伯父や人の方へいて。したゝか御酒にたべ醉うて。爰を路次とも知らず臥せつてゐたらば。夢現のやうに。汝日頃醉狂をして。惡逆ばかりなすによつて。今斯樣の姿にする。向後は惡心を飜し。佛道に入つて後世を願へ。則ち汝が名を南無阿彌陀佛と付けるぞ。エイ。と仰せらるゝと思うたれば。目が覺めた。今又そなたが南無阿彌陀佛とおしやるによつて。身共が事ぢやと思うて。返事をした事でおりやる。小アドへ扨はさうでおりやるか。さり乍ら。南無阿彌陀佛といふは。是より西方十萬億土極樂世界の佛の御名で。なか〳〵そなた達の付ける名ではおりない。シテへ何とおしやる。南無阿彌陀佛と云ふは。是より西方十萬億土極樂世界の佛の御名で。なか〳〵我等如きの付ける名ではないとおしやるか。小アドへ中々。シテへそれは誠か。（常の如くつめる。）シテへげに今こそは悟りたり。扨は六字の名號を。小アドへ夢に付けたる。シテへ我名なれば。二人へ今よりは思ひ切り。〳〵。只一念に彌陀を頼み。〳〵。念佛申して別れけり。

惡坊（あくばう）

アド　僧
シテ　惡坊
小アド　茶屋
（入道具）

アドへ東近江に住居致す坊主で御座る。西近江へお齋に參つて。只今歸るさで御座る。シカ〳〵。今朝は雨が降りさうに依つて。傘を持參致いたが。これは重疊の天氣に成つて。此の樣な悅ばしい事は御座らぬ。（小謠など謠ひ。シテ出る。酒に醉うてなり。）シテへ御坊々々。御坊はどれからどれへお行きやる。アドへ東近江の者で御座るが。西近江へ齋に參つて。只今東近江へ歸ります。シテへ何と東近江が西近江へ引つくり返つたとおしやるか。アドへいや左樣では御座らぬ。東近江へ戾る者で御座る。シテへ是は尤もぢや。お供申さう。アドへ見ればお歷々さまに御座る。お連には似合ひませぬ。お先へ參りませう。シテへいや〳〵。連には似合うたもあり。似合はぬも有るものぢや。是非とも御供致さう。但しいやか。（ト云うて。長刀にて嚇す。アドこはがる。）アドへ成程お供致しませう。シテへそれならば先へ行かしませ。アドへ何がさてお先へお出でなされませ。シテへいかな〳〵。御出家を後には置れぬ。先へお行きやれ。アドへ畏まつて御座る。シカ〳〵。さあ〳〵お出でなされませ。シテへさて御坊はどれからどれへお行きやる。アドへ東近江から西近江へ參つて。又東近江へ戾ることで御座る。シテへ成程さうおしやつたに依つて。お供申さうといふことぢや。アドへよいお連で悅びまする。シテへ幸ひのお連ぢやに依つてお供申さう。さて。御坊は此の長刀をお見やつたか。アドへ見まして御座るが。結構な長刀さうに御座る。シテへいや〳〵結構なとばかりではすまぬ。先づこの長刀をかうかたげたが早からうか。但し。と構へたがはやからうか。アドへされば何と御座りませうぞ。シテへ何と御座らうとは。遲からうといふ事か。アドへいや左樣では御座らぬ。シテへ早いか遲いか。試みに使うて見せう。アドへあゝあぶなう御座る〳〵（ト云うて。傘にてとめる。）シテへいや御坊は手しやぢやわいのう。其傘で支へたらば斬れまいと思ふか。傘の五木や拾本は御坊共になで切にせう。アドへ成程きれませう。御ゆるされませ〳〵。シテへ切れうのう。いや御坊。いかう草臥れた。ちと手を引いてたもれ。アドへ畏まつて御座る。シテへさて此のあなたに存じた茶屋がある。これへ連れて往て一飯を申さう。アドへそれは御無用になされて下され。シテへいはれぬお斟酌をとめて。身共次第にして置かじめ。アドへそれならばともかくもで御座る。シテへ此處ぢや。ずつと奧へ通らしませ。亭主〳〵。小アドへ是に居りまする。シテへ旅の御出家を一人お供申した。一飯を拵へい。小アドへ畏まつて御座る。シテへ早う拵へい。憎いやつぢや。なう〳〵御坊。何と此の長刀をどれに置かうぞ。いや是處に立てゝ置かう。（ト云うて。ひよろ〳〵。ちら〳〵して立ち目のちろつくなり。）にくい。御坊の肩に置かう。アドへそれは御無用で御座る。シテへこはいか。アドへ恐ろしう御座る。シテへそれならば下に置か…。アドへよう御座りませう。シテへ殊の外草臥れた。さあ〳〵御坊。腰を打つてたもれ。アドへ畏まつて御座る。（ト云うて。こは〴〵打つ。四五度打つて強くうつ。シテ少しさがりそりうつ。）シテへこれは何とする。アドへ御ゆるされませ。眠りました。シテへ眠つた。アよい肝を潰させた。眠らぬ樣にしておうちやらう。アドへ畏まつて御座る。（ト云うて。また打つ。色々口傳あり。さてとくと寢入りたるを見て。）アドへ亭主御座るか。小アドへこれに居

いまする。アドへあれは先づ何人で御座る。小アドへそなたは知らせられぬか。アドへいや曾て知りませぬ。小アドへあれは六角殿の悪坊というて。大の醉狂人で御座る。あの人に逢つて生疵をまうけぬ者は御座らぬが。そなたは何事も御座らぬか。アドへ先づ身共は怪我も致しませなんだ。小アドへそれはお仕合せで御座る。アドへどうぞそなたを頼みまする。裏道から私を往なせて下され。小アドへそなたを戻したらば。後で身共が迷惑を致さう。けれ共御出家の事で御座る。どうぞしませう。急いで歸らつしやれ。アドへ近比忝う御座る。後を頼みまする。なう〳〵嬉しや。あまの命を拾うた。先づ急いで歸らう。さりながら。最前から身共をなぶつた所が餘り口惜しい。何とせうぞ。いや思ひ出した。ト云うてさし足して行き。助老をふき。傘に是を下に置き。長刀小刀を持へてとりて。アドへ先づこれさへ取れば心安い。ト云うて。シテ柱のそばにて衣脱ぎ。シテ壺折に着て居る厚板をとりて。壺折着かへて。小刀さし。長刀構へて。アドへやい。最前から身共を嬲つたがよいか。これがよいか。起きて見よ。此の長刀にのせてくれうぞ。はつちやこはもの。急いでずかさう。ト云うて入るなり。シテへむゝ寝たことかな〳〵。誰ぞ湯か茶かくれい。内かと思うたれば。またいつもの茶屋に寝て居た。すれば長刀がある筈ぢや。これに傘か。これは何ぢや。是は禪僧が座禪工夫をする時かうやらする助老といふ物ぢや。小袖があらうか。これは衣が壹メ。合點がゆかぬ。イヤ今思出した。最前夢うつゝの様に出家を一人同道したと思うたが。扨は某が日比醉狂をして悪逆ばかりなすに依つて。釋迦か達磨が變化させられて。か様の姿になされたものであらう。是非に及ばぬ。是を菩提の種として。佛道に入つて後世を願うと存ずる。さりながら。今などか様のあさましき姿にならうとは思ひも寄らぬ事であつた。ト云うて泣く。思ひよらずの遁世や〳〵。小袖にかへた此の衣。刀にかへし此の助老。長刀にかへたるからかさを。かたげてすだに出でうよ〳〵。行脚の僧に。はち〳〵。ト云うて留めて入るなり。

朝比奈（あさひな）

シテ　朝比奈三郎
アド　閻魔大王

次第アドへ地獄の主閻魔王。〳〵。ろさいにいざや出でうよ。詞これは地獄の主閻魔大王とは我が事なり。今は娑婆の人間が賢うなつて。八宗九宗に法を分け。禪宗ぢやと云うては極樂へ。淨土宗ぢやと云うては極樂へぞろり。ぞろり〳〵とぞろめくに依つて。地獄の飢饉以ての外ぢや。さるに依つて。此度閻魔大王自身六道の辻に出で。罪人も來たらば取つて服せばやと存候。道行住みなれし。地獄の里を立出でて。〳〵。足に任せて行く程に。〳〵。六道の辻に着きにけり。詞急ぎ候程に。六道の辻に着いた。暫く此の處に休らひ。罪人も來たらば責落とし。取つて服せばやと存候。シテ一セイへ力もやう〳〵朝比奈は。淨土へとてこそ急ぎけれ。詞これは娑婆に隱れもない朝比奈の三郎何某で御座る。扨命の程も定まりぬるか。無常の風に誘はれ。唯今冥土へ赴き候。先づそろり〳〵と參らう。アドへむゝ。人臭い〳〵。どうでも罪人が來たさうな。邊りに人臭い。さればこそ罪人ぢや。おつつけ責落とし。取つて服せう。いかに罪人急げとこそ。責めかけるなり。太鼓アシラヒあるをカケリと云ふ。太鼓なき時。常のカケリなり。責一段すむと。シテより詞かけるなり。シテへやいそこなやつ。アドへ何ぢや。シテへ最前から身共が目の先をちら〳〵とする。おのれは何者ぢや。アドへ身共を知らぬか。シテへいや知らぬ。アドへ地獄の閻魔大王ぢや。シテへ何ぢや閻魔

大王ぢや。アド〽中々。シテ〽娑婆で聞く閻魔大王は。玉の冠を着。石の帶をし。金銀をちりばめ。邊り(あたり)も赫く體と聞いたが。おぬしのなりは一向興もおりない。アド〽不審尤もぢや。以前は玉の冠を着。石の帶をし。金銀をちりばめ。あたりも赫く體であつたれども。今は人間が賢うなつて。八宗九宗に法を分け。後生を願うて。極樂へばかり行くに依つて。地獄の飢饉以ての外ぢや。さるに依つて。閻魔大王自身六道の辻へ出でて。罪人も來たらば取つて服せうと。思ふ所へ汝が來た。追付け責落とし。取つて服する程にさう心得。シテ〽いかに程なりともお責め候へ。アド〽いかに罪人急げとこそ。責なり。此の間色々あり。杖にてゆすり。後よりこぜて見る。口傳。アド〽やいそこなやつ。シテ〽何ぢや。アド〽最前から祕術(ひじゆつ)を盡して責むれども。ぎつくりともせぬ。おのれは何者ぢや。シテ〽娑婆に隱れもない朝比奈の三郎何某ぢや。アド〽何ぢや朝比奈ぢや。シテ〽中々。アド〽牛に喰(くら)はれた。朝比奈と聞いたらば責めまいものを。シテ〽もそつとお責めやらいでな。アド〽どれ。朝比奈と聞いて責めれば。地獄の名折れぢや。それならば身を輕うして。もう一責(ひとせめ)せめて取つて服する程に。さう心得。シテ〽いか程なりともお責め候へ。アド〽先づ身を輕うしてこう。ト云うて。笛折る笛ノにてとる。アド〽いかに罪人。地獄遠きにあらず極樂遙かなれ。急げとこそ。責なり。色々あり。此のうちにシテ一遍廻りて。竹馬に乘り。揺鑿へ行きまねきし。其の次舞臺へ出て。竹杖竹廻す。シテ竹にて首筋を押へて。打ちこかすなり。口傳。アド〽あゝもう責めまい／＼。シテ〽もそつとお責めやらいでな。アド〽汝が誠の朝比奈ならば。和田軍(いくさ)の起りを知つて居よう程に。語つて聞かせ。シテ〽それは身共が手にかけた事ぢやに依つて。よう知つて居る。語つて聞かせう。先づ其の床几を持つて來い。アド〽心得た。さあ／＼語れ／＼。ト云うて。葛桶を持つて出で。鬼腰をかける。シテ後より引掴みて。打ちつくる。アド〽さても／＼。閻魔あたりの強いやつぢや。シテ〽やい。これが其の時手柄をした七ツ道具ぢや。見て置け。アド〽ムヽ。むまいにほひがする。シテ〽語らう程によう聞け。語抑も和田軍の起りを尋ぬるに。在柄の平太種長といつし者。碓氷峠にて虜られ。鎌倉を渡さるゝこと一度ならず二度ならず。兩三度迄引渡さるゝ。彼れが繩目の辱を雪がんと。和田の一門四百八十人連判して。親にて候義盛。白髪頭に兜を戴かんといふ上は。一門の

事は云ふに及ばず。其の外の人々に殘る人はなし。五月三日の早天に。大門の南表に押寄せ。一度にどつと鬨をつくる。譬へば雷電雲を響かし。大地震のゆるが如くなり。古郡がさげ切り。から申す朝比奈が人礫目を驚かす處に。視にて候者より使者を立て。何とて朝比奈は一合戰仕らぬぞとありしかば。承り候とて。頓て馬より飛んでおり。大門さして歩み行く。すは朝比奈こそ門破れとて。五六簪石火釘かすがひ。打拔き／＼うつたる有樣は。ただ劍の山の如くなり。かくて朝比奈手のひらを以て。釘の頭をすらり／＼と撫づれば。釘は則ち湯となつて流れぬ。さて門の扉に手をかけて。えいや／＼と押しけれど。何かは以てころぶべき。内にも大力が百人ばかり抱へて居た。朝比奈心に思ふ樣。若し此の門破れぬものならば。一期の恥辱と思ひ。金剛力士の力を出だし。またえいやつと押しければ。柱は根よりも折れ。扉は内に倒れ伏す。押しに打たれて死する者は。ただ鮓をしたるが如くなり。アドへあゝ其の時の鮓が一ほゝばり。ほゝばりたいなあ。シテへ其の時ならば。いか程なりともおませうものを。かゝつし所に五十嵐の小文治と云つし者。七十五人が力と名乘り。この朝比奈を目がけ馳せ來る。もの／＼しやと思ひ彼の小文治を近づけ。小耳の脇をとらまへ。鞍の前輪に押附けて。あなたへはころり。こなたへはころり。ころり／＼ところばかいてあるぞとよ。なほも寄れ。語つて聞かせう。アドへいやも聞きたうはない。シテへもそつとお聞きやらいでな。アドへもういやぢや／＼。シテへそれならば。極樂へ導きをせい。アドへ勝に乘つて樣々の事をぬかしをる。それはおのれが行きたい所へ行かうまでよ。シテへさては導きをせまいといふ事か。アドへまたどの樣にせうぞ。シテへそれは誠か。常の如くつめる。シテへ朝比奈腹をすゑかねて。同へ朝比奈腹を据ゑかねて。此の程中間にことかきつるに。熊手ないがまかなさい体。閻魔王にづうつと持たせ。／＼。閻魔王にづうつと持たせて朝比奈は。淨土へとてこそ參りけれ。

麻生(あさふ)

シテ　麻生の何某
アド　藤六
小アド　源六
小アド　烏帽子屋
(入道具)

シテへ信濃の國の住人麻生の何某で御座る。永々在京致す所に。訴訟悉く相叶ひ。安堵の御敎書頂戴致し。過分に新地を拜領し。剩さへ御暇まで下され。近日本國へ罷下る。か樣の有難い事は御座らぬ。先づ兩人の者を呼出し。此由を申聞かせ。悦ばさうと存ずる。やい／＼。藤六源六あるかやい。呼出す。如常。シテへ念なう早かつた。……アドへ内々か樣の義を待ちえましたに。か樣の目出度い事はナア源六。小アドへオヽ／＼。二人へ御座りませぬ。シテへさて明日は元日ぢや。出仕を勤めたものであらうか。御暇を下された事ならば。それにも及ぶまいか。アドへ御國許(おくにもと)に御座なされてさへ。態々御上(のぼ)りなされて御出仕なさるゝ事。まして御在京の事で御座る。やはり御勤めなされた方がナア源六。小アドへオヽ／＼。二人へよう御座りませう。シテへ身共もさう思ふ。さりながら。小袖袴(かみしも)の用意がない。アドへ御小袖袴はか樣の事も御座らうかと存じ。私が申附けて。用意致して置きました。シテへ汝が用意して置いたといふか。アドへさ樣で御座る。シテへそれはでかいた。まだ烏帽子が

ない。小アドへ烏帽子は此の源六が用意致しました。シテへ何ぢや。そちが用意した。小アドへハア。シテへさて〳〵汝等は才覺な者共ぢや。先づ其の烏帽子を見せい。小アドへイヤまだ烏帽子屋に御座る。シテへこれはいかな事。烏帽子屋にあるものが。何の役に立つものぢや。早ういて取つて來い。小アドへ畏まつて御座る。アドへ急がしめ。小アドへ心得た。シテへさて藤六。此の烏帽子髪といふものは。殊の外むつかしいものと聞いたが。たれに結はせたものであらう。アドへ是も兼てか樣の儀も御座らうかと存じて。私が稽古致して。習うて置きまして。覺えて居りまする。シテへ何ぢや。汝が習うて覺えて居ると云ふか。アドへさ樣で御座る。シテへそれは一段ぢや。隙のいるものぢやと聞いた。急には出來まい。これへ寄つて結うてくれい。アドへ畏まつて御座る。シテへこれは何とする。アドへきやうりせんで御座る。シテへ何。きやうせんぢや。アドへイヤきやうりせんで御座る。之をぬりませねば。ごたい附が附きませぬ。シテへそれならばそれと云はいで。手頃な手木を持つて寄るによつて。打擲するかと思うて。よい肝を潰した。塗らいで叶はぬものならば。これへ寄つて塗れ。アドへ畏まつて御座る。仕方口傳。シテへやい〳〵それは何をする。アドへこれはごたい附のおゑ鹽で御座る。シテへ何ぢやおゑしほぢや。アドへハア。シテへおゑ鹽はおゑ鹽であらうが。ちと手穢い氣味ぢやなあ。アドへ餘り綺麗には御座りませぬ。シテへさあ〳〵。是へ寄つて結うてくれい。アドへ畏まつて御座る。シテへさて明日の儀式はどの樣な事ぢや。アドへ先づ明朝の儀式は。いつもの通り御雜煮を御祝ひなされて。初獻は引渡して冷酒で御座る。其のあとはつたりと酬をしすまして。思召すまゝに召上がるゝ事で御座る。シテへ冷酒は冷やかで惡からう。はつたりと酬をしすましてくれい。アドへ畏まつて御座る。シテへさて小袖はどの樣な事ぢや。アドへ先づ御小袖は萌黃の御熨斗目。御定紋附けまして。さて御袴はかちんのおらがけに子持筋を附けまして。日出度う雪なづなで御座る。シテへかちんの袴に萌黃の熨斗目。よい取合はせであらう。アドへつゝと花やかな御出立ちで御座る。シテへさあ〳〵結うてくれい。アドへ畏まつて御座る。シテへさて烏帽子髪といふものは。いかう窮屈なものぢやなあ。アドへ殊の外むつかしいもので御座る。シテへこちはよい時分に稽古して置いて。此度の役に立つて悦ばしい事ぢや。アドへ私もよい時分に稽古致して。此度の御間に合ひまして悦びまする。シテへさてもうよいか。アドへもそつとで御座る。暫く御辛棒なされませ。シテへ苦しうないがもうよいか。アドへもそつとで御座る。御窮屈に御座りませうが。今暫く御堪忍をなされませ。シテへせく事はない。隨分念を入れて。ならう事ならば早く結うてほしい。見合シカ〳〵云ふ。アドへさらばよう御座る。シテへよいか。さても〳〵窮屈な事かな。さて源六はまだ歸らぬか。アドへまだ歸りませぬ。シテへ何をして居る事ぢや。殊の外遲い。汝いて見てこい。アドへ畏まつて御座る。小アドへものまう。案内まう。如常。小アドへ私で御座る。何と烏帽子は出來ましたか。烏帽子屋へなる程出來ました。進ぜう程に暫く待たせられ。小アドへ心得ました。烏帽子屋へこれ〳〵。之を持つて御座れ。小アドへどれ〳〵。是は見事に出來ましたが。是はなぜに細い竹にさいて御座る。烏帽子屋へ不審尤もぢや。まだ漆が乾ききりませぬ。かうして持つて歸らつしやる内には。漆が干まする。小アドへ是は尤もで御座る。もうかう參

る。假乞如常。小アドへなう／＼嬉しや。先づ急いで歸らう。シカ／＼。さても／＼あの烏帽子屋は。細工が上手ぢや。此樣に美しう拵立てた。賴うだ御方にお目に懸けたらば、さぞ御滿足なさるゝ事であらう。何かといふ内に戻つた。まうし。賴うだ御方御座りまするか。烏帽子屋より源六が只今歸りました。ハア。是處ではないさうな。是はいかな事。賴うだ御方の宿を忘れた。是は何としたものであらうぞ。アドへ最早戻りさうなものぢやが。何をして居る事ぢや知らぬ迄。エイ源六。小アドへエイ藤六。わごりよはどれへ行く。アドへどれへと云ふ事があるものか。餘り遲いによつて迎ひに來た。小アドへ面目もない事がある。アドへ何事ぢや。小アドへ賴うだ御方の御宿を忘れた。アドへ是はいかな事。主の宿を忘るゝといふ事があるものか。小アドへでも忘れたればせう事がない。アドへ連れて戻らう。來さしめ。小アドへ心得た。アドへ云うても／＼そなたは疎忽な人ぢや。主人の家を忘るゝといふ事があるものか。小アドへでも忘れたればせう事がない。アドへ常々物覺えが惡いというて叱らせらるゝ。ちとおたしなみやれ。小アドへこれに懲りぬといふ事はあるまい。アドへこれ／＼、是處ぢや。小アドへ誠に是處ぢや。アドへやあ／＼這入れ／＼。小アドへ心得た。アドへ申し／＼、賴うだ御方御座りまするか。只今烏帽子屋から藤六。小アドへ源六が。二人へ歸りました。二人へそりや叱るは。アドへこりや是處ではないさうな。小アドへやつと參つたれ。アドへ慥に是處ぢやと思うたが。小アドへまだ身共の方がましであらう。身共についておりやれ。アドへ心得た。小アドへ身共は最前出たに依つて、忘れまいものでもない。そなたは今内を出て。早忘れたか。アドへよう覺えて居たが。面目もない事ぢや。小アドへこれ／＼是處ぢや。アドへ誠に是處ぢや。小アドへやあ／＼這入れ／＼。アドへ心得た。申し。賴うだ御方御座りまするか。只今烏帽子屋から藤六。小アドへ源六が。二人へ歸りました。二人へそりやまた叱るは。小アドへまた是處でもない。アドへ是は兩人とも忘れた。小アドへ其の通りぢや。アドへ最早家家にしめ飾をしたによつて。どれがどれやら知るゝ事ではない。小アドへ是はまた何としたものであらう。アドへイヤ身共が思ふは、やう／＼松囃子の時分ぢや。賴うだ御方は興がるんぢやによつて。此の體な囃子物で誘ねうと思ふが。何とであらう。小アドへこれは一段とよからう。して何と云うて囃すぞ。アドへ唯ありのまゝに。賴うだ人は信濃の國の住人ぢやに依つて。信濃の國の住人麻生殿の御内。そこでそなたと身共が名を藤六。源六が主の宿を忘れて。囃子物をして行くと云うて。囃さうか。小アドへこれは一段とよからう。アドへ先づ云うて見さしめ。小アドへ心得た。アドへ信濃の國の住人。二人へ信濃の國の住人。麻生殿の御内に、藤六源六が。主の宿を忘れて、囃子物して行く。小アドへ行く。これでは後が詰まる。アドへ其のあとへ。實にもさあり。やよがりもさうよの。と云ふ事を入れう。小アドへこれは一段とよからう。アドへさあ／＼囃せ／＼。小アドへ心得た。是より二人信濃の國云うて囃す。シテ浮く。末廣に同じ。口傳。シテ笑ふへ兩人の者が某が宿を忘れて。面白い囃子物をして來る。これは出ずばなるまい。信濃の國の住人。二人へそりやお聲ぢや。シテへ麻生おれが内の者に。藤六と源六が馬鹿が。宿を忘れて囃子物をして來る。前代の曲事。二人へ藤六と源六が主の宿を忘れて。囃子物をして來る。シテへ出ばやとは思へども。元結はとつたり。玉體附はトけたり。さながら出るも尾籠なれば。此處

なる窓から。ちよと見て。でついつもだいた。二人へ主の宿を忘れて。囃子物をして行く。シテへとかくの事はいるまい。内へ入つて餅食へ。二人へ實にもさあり。やようがりもさうよのう。やようがりもさうよのう。シヤギリ イヤト留めて入る。

合柿（あはせがき）

シテ　柿賣
アド　參詣人
立衆　參詣人
（入道具）

シテへ宇治の遠方（をちかた）の者で御座る。今日（こんにった）は當所の市で御座る。罷出て柿を商賣致さうと存ずる。シカ〳〵。誠に。此の處に於て市あまた御座れども。別して今日は一在所の神事で御座るに依つて。夥しい參詣で。いつ〳〵よりも賑々しい市で御座る。參る程に市場ぢや。これは皆店を飾つた。某（それがし）も店を出さう。なう〳〵。そこ許へ。合柿を召さぬか。柿の御用ならば。此方（こなた）へ仰せられい。や。先づ此處（ここ）に居て商賣を致さう。アドへ此の邊り（あたり）の者で御座る。今日は此の處の神事で御座る。何れもな同道致し。明神へ參詣致さうと存ずる。なう〳〵。何れも御座るか。立衆へこれに居りまする。アドへいつもの通り。明神へ參詣致しませうか。立衆へ一段とよう御座らう。アドへさあ〳〵御座れ。立衆へ心得ました。アドへ何と思召す。去年の神事をきのふやけふの様に存ずれば。はやまた祭になりました。立衆一へ何れ月日のたつは。間のない事で御座る。立衆二へ光陰矢の如しで御座る。立衆三へ其の通りで御座る。アドへ何かと申すうちに參り着きました。立衆へどれ神前で御座る。アドへいざ拜を致さう。立衆へ一段とよう御座らう。ト云うて。各正面に座し。扇ひろげて拜む。アドへこれから森へ參つて。市の體（てい）を見物致さう。いざ御座れ。立衆へ心得ました。アドへさても〳〵。毎年とは申しながら。夥しい參詣で御座る。ト云うて。廻るうち。シテ見合はせ立つ。シテへこれへ歴々と見えて大勢見えた。さらば商賣を致さう。なう〳〵。何れもをさないの土産に。風味のよい醂柿を召さぬか。アドへ醂柿といふは何ぞ風味が違ふか。シテへされば。格別風味がよいによつて。合柿と申す。アドへそれはまた何うした事ぢや。シテへ御不審尤もで御座る。先づ大和柿。御所柿。美濃柿。蜂屋。久保柿などと申して。風味のよい柿が様々御座れども。それを一ツに合はせた程。風味がよいに依つて。合柿と申す。アドへどれ。これは尤もぢや。ちと買うて宿元に土産に致しませうか。立衆へ一段とよう御座らう。アドへどれ〳〵。ト云うて。立寄り。籠の中を見て。アドへいや。これは澁さうな。なう何れも。立衆へなるほど。是は澁さうな。シテへさて〳〵。むさとした事を仰せらるゝ。此の中（うち）に澁いは一ツも御座らぬ。皆甘う御座る。アドへいや〳〵。何程おしやつても。これは澁からう。シテへ誠に澁からうと思はつしやるならば。一つ喰うて見てから云はつしやれ。アドへそれならば。一ツ喰うて見よう。ト云うて。喰ふ。澁き仕方。但し半分喰うて捨てるなり。口傳。アドへさても〳〵。澁い柿かな。これが何と喰はるゝものぢや。シテへ澁くはない筈ぢやが。大分ある柿ぢやに依つて。一つなど澁いも御座らう。あとは皆甘い。求めさせられい。アドへいや〳〵。其の様な澁い柿は何うも求められぬ。シテへお前求めさせられい。立衆一へ身どもは柿は嫌ひぢや。シテへそれならばこなた買はせられ。立衆二へそれならば身共も一つ喰うてみて。甘くば求めう。シテへそれには及ばぬ事。立衆二へどれ〳〵。ト云うて。喰うて。シテ同様澁いと云うて捨てる。シテへ合點の行かぬ事ぢや。

澁い筈はないが。ハアこなた衆は甘けれども。慰みに澁いと云うて。身共をなぶらしやるか。アドへそちは澁い柿を人に喰はせて。まだそのつれを云ふか。甘いか澁いか。そち喰うて見よ。シテへ身共は常に風味を知つて居まするに依つて。喰うて見るに及びませぬ。アドへさうであらう。澁いに依つて得喰ふまい。シテへそれならば喰うて見せうが。さりながら。身共が喰うて甘ければ。此の一籠の柿を皆買うて貰ふぞや。アドへおゝ買うてやらう先づ早う喰うて見よ。ト云うて。シテ籠の柿をよる仕方あるなり。アドへやい〳〵。其の樣によらずとも。上にあるのを喰へ。シテへはて小さいのを喰ふと思うてよるのぢや。アドへいや〳〵これを喰へ。シテへこれか。アドへ中々。シテへこれは甘いぞや。アドへ先づ喰うてみよ。シテへ喰うて見せう。ト云うて。澁い柿を澁うない口元をする。色々仕樣あるべし。アドへそりや〳〵。澁いは〳〵。あの顏を見させられい。ト云うて。皆笑ふ。シテへうまい〳〵。これ程甘い柿を。何れもむさとした事を云はせらるゝ。さあ〳〵。買はせられい〳〵。アドへさても〳〵。あの口元でも。まだあのつれを申す。それならば。澁い柿を喰うては。うそが吹かれぬものぢや。うそを吹いて見よ。シテへうそとは何の事ぢや。アドへさあ〳〵こなた吹いて見させられい。立衆へ心得ました。ト云うて。[illegible]また立衆に笛吹いて聞かすなり。シテへおゝうそとは口笛の事か。アドへ中々。シテへ吹いて見せう。ト云うて。吹いて見る。吹きかねる。顏をふくらかす。色々口傳。アドへあれ〳〵あの口元を見させられい。立衆へをかしい事で御座る。アドへさあ〳〵よう吹かぬか。シテへかしましい。今調べて居る所ぢや。アドへ早う吹け。また吹けども。吹かれず。シテ色々あり。皆笑ふ。アドへさても〳〵。横着者で御座る。いざ歸りませう。立衆へよう御座らう。シテへあゝ先づお待ちやれ。アドへ何事ぢや。シテへ澁いならば澁いまでよ。最前からの柿の代(かはり)をおこさつしやれ。アドへいやこゝな者が。澁い柿を甘いと云うて無理に喰にせて。誰が代をやるものぢや。シテへさては代をおこすまいと云ふ事か。アドへまた何のやうにやらうぞ。シテへさて〳〵憎いやつの。今迄は一時(いつとき)の旦那ぢやと思うて。色々機嫌を取るやうにした。此の上は足元の明(あか)いうちに代を置いて行かずば。目に物を見するぞよ。アドへそりや誰が。シテへ身共が。アドへ汝が目に物を見すると云うて。深しい事はあるまいぞやの。シテへかまへて悔むなよ。アドへどの樣に悔まう。シテへおのれは憎いやつの。ト云うて。大勢に取つてかゝる。皆々扇振上げてたゝくなり。アドへ憎いやつぢや。皆々寄つて踏まつしやれ〳〵。ト云うて。立衆寄つて[illegible]取散らし。皆入るなり。シテへさても〳〵。柿を皆打ちあけて。店を散々(さんざん)にしられた。さて〳〵腹の立つ事かな。やい〳〵。悪戯者(いたづらもの)ども。かへせ〳〵。かへせ合柿と〽いへども〳〵。取喰さるゝ木守(きまもり)の。古の人丸は。柿の本に住みながら。歌を案じて空うそを。吹かせ給ひし例もあり。うたてやわがうそを。吹かれぬ口を。かきむしり後悔しつゝ。頭(かうべ)を柿の。串刺にあられども。拾入れたる柿をもち。我が宿所にぞ歸りける。我が宿所にぞ歸りける。南無三寶。しないたり。柿は〳〵。ト云うて。留めて入るなり。

粟田口(あはだぐち)

シテ　大名
アド　太郎冠者
小アド　都の者
（入道具）

シテへ隱れもない大名。此の中方々のお道具競べには夥しい事で御座る。それに就き。何れも何と思召してやら。重ねては粟田口を競

べきせられうとのお事で御座る。身が道具の中に。栗田口があるもないも存ぜぬ。先づのき者を呼出だし。此の由訊ねうと存ずる。大名呼出し常の如し。 シテへ此の中方々のお道具競べは夥しい事ではないか。 アドへ御意なさるゝ通り。事ちやうじた儀で御座る。 シテへさて何れも何と思召してやら。重ねては栗田口を競べさせられうとのお事ぢや。身が道具のうちに栗田口があるか。 アドへお道具は悉く存じて居りまするが。栗田口は覺えませぬ。 シテへ汝が知らずは無いであらう。何と都にはあらうか。 アドへ何がさて、都に無いと申す事は御座りますまい。 シテへそれならば。汝は大儀ながら都へ上つて。栗田口を求めて來い。アドへ畏まつて御座る。 シテへ紙に包む程の物なれども。いかう高直の物と聞いた。價には構はぬ。隨分念の入れてよい栗田口を求めて來い。 アドへ其の段はそつともお氣遣ひなされまするな。 是より云附け。つめろうけろ。扨シカ〲云うて。都に着いて。粟田口を訊ね呼ばはる。小アド出て。心の直ぐにないもの。段々有つて。悉く此の類末廣に同じ事なり。 小アドへ洛中に人多しといへども。そなたの尋ぬる栗田口は身共でおりやる。 アドへさてはこなたが栗田口で御座るか。 小アドへ中々。 アドへすれば某に仕合はせ者て御座る。さりながら。人を栗田口と云ふには。仔細が御座るか。小アドへなる程子細がある。都の東に栗田口といふ在所がある。此の氏生の者を悉く栗田口といふ。此の中は方々のお大名に。栗田口がはやつて。皆抱へられた。また某は都の重寶にとあつて。殘し置かれたれども。餘りそなたがほしさうにおしやるに依つて。賣られても往かうかと云ふ事でおりやる。 アドへ謂れを聞けば尤もで御座る。それならば求めませうが。代物は何程で御座る。小アドへ萬疋で御座る。 アドへそれは餘り高う御座る。もそつとまけて下されい。小アドへいや〱。栗田口に限つてまけはない。いやならば置かしめ。アドへそれとても求めませう。即ち代物は三條の大黒屋で渡しませう。 小アドへなる程大黒屋。存じて居る。あれで請取るであらう。アドへして今でも來て下されうか。 小アドへ何時でも參りませう。 アドへそれならば。さあ〱おりやれ。 小アドへ心得ました。 アドへさて栗田口を何れも御重寶なさるゝは。どうした事でおりやる。小アドへ天下治まり目出度い御代なれば。さ様の事も御座るまいなれども。若人のかたらひに依つて。御陣などの御加勢の御時。此の栗田口を一人御馬の先へ召連れらるれば。漫々たる敵も。夏の蚊や蝿を。大團扇で煽つが如く。雪に水をかくるが如く。片端からめつき〱と滅却致すによつて。何れも御重寶なさるゝ事で御座る。 アドへさて〱それは重寶な事ぢや。其の由頼うだ御方へ申上げうならば。さぞ御滿足なさるゝであらう。小アドへかう參るからは。こなたを寄り親殿と頼みまする。萬事を引廻して下されい。アドへ其の段はそつともお氣遣ひなしやるな。小アドへして程は遠う御座るか。 アドへいや何かといふうちにこれぢや。そなたを同道した通り申上げう程に。暫くそれにお待ちやれ。小アドへ心得ました。 主を呼出す常の如し。 シテへやれやれ骨折りや。して栗田口を求めて來たか。アドへなる程求めて參つて御座る。シテへそれは出かした。急いで見せい。アドへいや其の樣にお手へ上げる物では御座りませぬ。 シテへ何ぢや。手へくるゝ物ではない。 アドへはあ。 シテへして栗田口は何ぢや。 アドへ人で御座る。シテへ何ぢや人ぢや。 アドへさ樣で御座る。 シテへこれは凡慮の外な物ぢやなあ アドへはあ。シテへしてまた人を栗田口といふには。何ぞ子細があるか。 アドへなる程仔細が御座る。都の東に栗田口といふ在所が御座

る。此の氏生の者は。悉く栗田口と申す。此の中は方々のお大名に栗田口がはやつて。皆召抱へらるれども。私の求めて參つた栗田口に。都の重寶にとあつて殘し置かれたな。色色と申して。やう／＼と求めて參つて御座る。シテへ謂れを聞けば尤もぢやが。栗田口は人者ようなあ。アドへ入て御座る。シテへあれに往ていはうは。栗田口に。遙々の所大儀でこそあれ。さうあれば爰に栗田口の書いた物がある。これに引合はせて見たいが。合うてくれうかと云へ。アドへ畏まつて御座る。なう／＼。（シテの通り云ふ。）小アドへいか様にも合ひませうと云うて下され。アドへ心得た。いか様にも合ひませうと申しまする。シテへ何ぢやいか様にも合はうと云ふか。アドへさ様で御座る。シテへそれならば。先づ其の床几をくれい。アドへ畏まつて御座る。（ト云うて。葛桶に腰かけさせる。）シテへ違棚に栗田口の書いた物がある。取つて來い。アドへ畏まつて御座る。これで御座るか。シテへおゝこれぢや／＼。常には要らぬが。書いた物は重寶ぢやなあ。アドへさ様で御座る。シテへ何々。栗田口の。／＼。太郎冠者。アドへはあ。シテへ是は何ぢやいなあ。アドへされば何で御座りまするぞ。シテへ

讀めぬか。アドへ讀めませぬ。シテへ眞で書いてあるによつて。讀めぬな。アドへさ様で御座る。シテへ栗田口の書といふ事かいなあ。アドへいづれ書の事でがな御座りませう。シテへまあ書の事よ。とうりんとうましとて。二た流れあるべし。いづれの流ぢや。問うて來い。アドへ畏まつて御座る。なう／＼。東林藤馬とて二た流れある。いづれの流ぢやと仰せらるゝ。小アドへ藤馬之丞が流ぢやと。仰せられて下され。アドへ心得た。藤馬之丞が流ぢやと申しまする。シテへ何ぢや。藤馬之丞が流ぢやと云ふた。アドへさ様で御座る。シテへオゝ爰にあるは。アドへ御座りまするか。シテへ但し藤馬之丞は惣領筋なり。笑ふ。やいやい。きやつは惣領筋ぢやといやい。アドへこれは重寶で御座る。シテへよい栗田口を求めて來たなあ。アドへはあ。シテへはゞき元黑かるべし。やい／＼。はゞき元が黑いか。問うて來い。アドへ畏まつて御座る。はゞき元が黑いかと仰せらるゝ。小アドへ常に黑いはばきを好いて致す。今して居るはゞきも。黑いと云うて下され。アドへ心得た。（小アドの通りシテに云ふ。）シテへすればこれも書に合うた。銘なきは寶物多し。やい／＼。銘があるか。訊ねて來

い。アドへ畏まつて御座る。なう／＼。銘があるかと仰せらるゝ。小アドへ上京に姉が御座る。下京に妹が御座る。これにいづれも女の子を一人づゝ持つて御座る。これはしめいで御座らうかと仰せられい。（アド受けて。右の通り云ふ。）シテへ何ぢや。姉と妹の子に女か。アドへさ様で御座る。シテへ女々。おゝ姪とも／＼。これは正しい姪ぢや。おゝ爰にあるは。但し兩めいは上作物なり。笑ふ。やい／＼。きやつは上作物ぢやといやい。アドへよい栗田口で御座る。シテへよい栗田口を求めて來たなあ。アドへはあ。シテへ古身たるべし。身が古いか。問うて來い。アドへ畏まつて御座る。身が古いかと仰せらるゝ。小アドへ生れてこのかた湯風呂を致しませぬ。隨分身は古いと云うて下され。アドへ心得た。申上げまする。シテへ聞いた／＼。アドへお聞きなされましたか。シテへ何ぢや。生れてこのかた湯風呂をせぬと云ふか。アドへさ様で御座る。シテへすればもの産湯もあびぬであらう。アドへ定めてさ様で御座りませう。シテへあゝ古し／＼。古身ぢやがちと手むさい氣味ぢや。アドへ餘り綺麗には御座りませぬ。シテへでも書に合うたが重寶ぢや。アドへはあ。シテへ寸は不同。

これは尋ぬるに及ばず。してまた栗田口が何れも御重寶なさるゝは、どうした事ぢや。アドへ其の儀も路次で尋ねて御座れば。天下治まり、目出度い御代なれば、さ様の事は御座あるまいなれども、若人の物語びに依つて。御陣などの御加勢の御時。此の栗田口一人。御馬の先へ召連れらるれば。漫々たる敵も。夏の蚊や蠅を大團扇で煽ぐが如し。雪に水なかくるが如し。片端からぬつき／＼と滅却するによつて。何れも御重寶なさるゝと申しまする。シテへあのきやつ一人してか。アドへさ樣で御座る。シテへさて／＼それは重寶なものぢや。其の樣な事を知つたらば。とうにも抱へうものを。ちと油断であつたなあ。アドへいづれ御油断で御座りました。シテへあれへいて云はうには。栗田口に昔に悉く合うて満足する。さうあれば山一つあなたへ往きたいが。来てくれうかと云うて、尋ねて来い。アドへ畏まつて御座る。なう／＼。栗田口に昔に悉く合うて満足する。さうあれば山一つあなたへ往きたいが。来てくれうかと。仰せらるゝ。小アドへいづくまでもお供致しませうと。仰せられい。アドへ心得た。いづくまでもお供致さうと申しまする。シテへ先づ其の太刀を持て。アドへ畏まつて御座る。（アドハ昔試を渡す。請取りて。また太刀を持つて出で。）アドへお太刀持ちました。シテへさて汝も供に連れうたれど。きやつ一人あれば。千騎萬騎にも向ふとある。其の上汝は都へ上つて草臥れたであらう。いて休め。アドへ畏まつて御座る。シテへ栗田口をこれへ出せ。アドへ心得ました。なう栗田口。これへお出やれ。小アドへ心得ました。アドへ栗田口。シテへム、栗田口。小アドへはあ。シテへ昔に悉く合うて満足した。さうあれば。山一つあなたへ往かうと云へば、来てくれうとあつて。祝着に存ずる。小アドへいづくまでもお供致しませう。シテへ先づお立ちやれ。小アドへ畏まつて御座る。シテへ惣じて此の栗田口といふは。そなたの在名か。小アドへ在名で御座る。シテへ藤馬之丞といふは。小アドへ名で御座る。シテへ名か。小アドへはあ。シテへされば栗田口と呼うでも。藤馬之丞と呼うでも。小アドへ答へませう。シテへ何ぢや答へう。小アドへはあ。シテへはつし／＼と答へて面白い。路次すがら呼うで參らうと存ずる。なう／＼栗田口。名を覺ゆる爲。路次すがら呼うで往かう程に。答へておくりやれ。小アドへ心得ました。シテへ先づ此の太刀を持つておくりやれ。小アドへ畏まつて御座る。シテへさあ／＼栗田口おりやれ。小アドへ參りまする。シテへ藤馬之丞はわするか。小アドへ參じまする。シテへ栗田口。小アドへお前に。シテへそこにか。小アドへはあ。シテへ藤馬之丞。小アドへこれに候。（段々早く呼び。飛びつはねつ。つめて色々仕樣あるべし。）シテへ笑ふ。さても／＼面白い事かな。イヤなう／＼。身を輕うして呼ぶ程に。これも持つておくりやれ。小アドへ心得ました。（小刀もぬき持たす。）シテへ栗田口。小アドへお前に候。シテへ藤馬之丞。小アドへこれに候。シテへ栗田口。小アドへお前に。シテへ藤馬之丞。小アドへこれに候。（ト云うて。たましとびにし。小アドは其の通りにうける。一遍廻り一。橋懸りまで往て呼び。同じく答へる。又走りて舞臺へ出で。色々仕樣あるべし。嬉しがりて笑ふうちに。小アドすかす。）小アドへ一段の仕合せぢや。急いですかさうと存ずる。（ト云うて入る。）シテへさても／＼面白い事かな。栗田口。藤馬之丞。なう／＼。そこもとへ栗田口は鞘走らぬか。なう／＼。そこへ藤馬之丞は錆着かぬか。栗田口／＼。往來の人に藤馬之丞。太刀も。刀もすはれたり今の栗田口をよく／＼思へば。都のたらしめにてありけるよの。あゝ南無三寶。しないたり。（ト云うて。留めて入るなり。）

祖合烏帽子（あひ〳〵ゑぼし） 鷺流

シテ　丹後百姓
アド　丹波百姓
アド　奏者

（入道具）

丹波へこれは丹波の國のお百姓で御座る。例年の通り上頭へ正月のお飾竹を差上げにのぼらうと存じて。罷り出た。先づ急いで上らう。誠に。目出度い御代に生れ合せ。毎年相變らず御貢物を差上げるやうな。大慶な事が御座つてこそ。さりながら。某一人では路次がさびしい。暫く爰元に待合はせ。似合はしい者も通らば。詞をかけ。同道致さうと存ずる。ト爰に着く。丹後へこれは丹後の國のお百姓で御座る。例年の通り上頭へ正月のお飾松を捧げに上らうと存じて罷り出た。先づそろり〳〵と參らう。誠に。有難い御代に生れ合せ。干損水損もなく。五穀成就致し。毎年恙なく御貢物を納むるやうな大慶な事が御座つてこそ。又明年も田畑の相續いたすやうにと存じ。門出を祝うて參つた。丹波へこれへ似合はしい人が參つた。詞をかけて同道致さうと存ずる。なう〳〵。なうそこな人。丹後へやあ。こちの事で御座るか。丹波へなか〳〵。そなたはいづ方へ行かしますぞ。丹後へ某は都へのぼる者ぢやが。何ぞ用でばしおりやるか。丹波へ詞をかくるも別の事でもない。某も都へ上るが。一人で路次すがら淋しい故に。同道致したいとのいひ事でおりやる。丹後へ何がさて。身共も路次すがら淋しうおりやつたに。お供致さいでは。丹波へそれは過分な。いざおりやれ。丹後へ先次第にこなたから御座れ。丹波へお斷りぢや程に某から參らう。さあ〳〵。おりやれ〳〵。丹後へ心得ておりやる。丹波へそなたへはかりそめに詞をかけた處に。早速同心召され。この様な大慶な事は御座らぬ。丹後へふと御目に懸かり。お供致すも。ひとへに他生の縁でがなおりやらう。丹波へその通りでおりやる。丹後へ扨そなたは都に上るとおしやるが。何國から何用あつて都へのぼらしますぞ。丹波へ某は丹波の國のお百姓でおりやるが。例年の通り上頭へ正月のお飾竹を納めに上るよ。丹後へそれは〳〵。はる〴〵の所を大儀でこそあれ。丹波へ又そなたは都へ上るとおしやるが。何國の人なれば。都へは何用あつてのぼらします。丹後へ某は丹後の國のお百姓ぢやが。身共も毎年上頭へ正月のお飾松をさゝげに上る。當年も相かはらずのぼる事でおりやる。丹波へその通りでおりやるか。もそつとぢや急がしませ。丹後へ心得た。丹波へさて人のつれには似合うたもあり。又似合はぬもある。そなたもお百姓。某も百姓。この様な連は。國元からいひ合はいたりとも外にはあるまいぞ。丹後へなか〳〵外にはあるまい程に。互に暇がいらうとも。待ち合はいて同道致さう。丹波へ何が扨お供致さいでは。丹後へいや何かといふうちに都へのぼり着いた。丹波へまこと都ぢや。丹後へ某が參るお館はこれでおりやる。丹波へ身のお館もこれでおりやる。奏者へこれは今日のお奏者で御座る。ト名乘出る。丹後へ扨そなたは時のお奏者であぐるか。但し定まつたお奏者があつて納めさしますか。丹波へ某はいつも時のお奏者で上ぐる。丹後へ定まつたお奏者であぐる時はおうけが早い程に。向後さやうにさしませ。丹波へなか〳〵さやうに致さうとも。さて何と思はしますぞ。お貢物を一所に納めたならば。おいとまも一所に出ようと思ふ程に。某と一所に納めさしませ。丹後へ心得ておりやる。

丹後〽物もう〳〵。奏者〽たれぢや。丹後〽物もう〳〵。奏者〽誰ぢや。何者ぢや。丹後〽はあ。これは如何やうなお方で御座る。奏者〽今日のお奏者よ。丹後〽先づ御禮を申上げまする。これは丹後の國のお百姓でござる。例年の通りお飾松を差上げまする。御前宜しく御披露あつて下さりませい。奏者〽なか〳〵申上げう。今一人も丹後の者か。丹波〽いや私は丹波の國のお百姓で御座るが。例年の通りお飾竹を差上げまする。御前宜しくお取なしを頼み上げまする。奏者〽兩人ともにお藏の前へ持つて參つて納めませい。兩人〽畏まつて御座る。奏者〽兩國のお百姓かくの如く。はあ〳〵。やい〳〵。兩人共にそれへ出ませい。兩人〽はあ。兩人共にお前に。奏者〽やい〳〵。仰出さるゝには。丹後丹波は國ならびとはいへど。同じ日の同じ時に御貢物を捧ぐる事。御感に思召さるゝ。さうあれば御祝儀におつかひなさるゝものなれば。松は松。竹は竹と。目出たい仔細があらば申上げよとのお事ぢやよ。兩人〽はあ。丹後〽何と其方は申上げうと思はしますか。丹波〽あの如く仰せらるゝによつて。申上げずはなるまい。丹後〽いかさま申上げずはなるまい。丹波〽先づそなたから申上げさしませ。丹後〽心得た。申上げまする。奏者〽急いで申上げい。丹後〽心得て御座る。抑も松の目出度き事は。生ずるより定千年の齡をたもち。雨露霜雪にもおぼれず。常磐なるものなれば。百とせに一度花さき若やぎ。千年には十度花咲き實なれば。松花の色十返りとは申す。君も同じ御事。老いては若やぎ老いては若やぎ。十返りの翁たるべし。されば歌にも。君が代の。久しかるべきためしには。かれてぞ植ゑし住吉の松。又松を太夫と申す。秦の始皇帝御狩をなされし時。俄に雨降り。帝小松の蔭に立寄り給へば。この松大木となり。枝を垂れ葉をならべ。君を守護し奉る。その時松に太夫といふ官を下さるゝこと。なんぼう松は目出度き物にて候。奏者〽一段とでかいた。さあ〳〵。汝も申上げい。丹波〽畏まつて御座る。抑も竹の目出度きことは。生出るより幾千代と代々をこめたる竹の子の。成長其の樣直ぐにして淸し。殊に節の淸きものなれば。竹をば君子にもたとへたり。されば歌にも。幾千代と。限らざりけり吳竹の。君が齡のためしなるらん。其の外唐土の七賢は。竹の林にて遊んで樂しみをのぶる。我が朝にては年の始の御壽。民の門まで賑はへる。竹の飾りの風の音は。颯々の鈴の音と。豐かなる代のためしなり。なんぼう竹は目出度きものにて候。奏者〽汝もでかいた。其の通りを申上げう。奏者〽兩國のお百姓かくのごとく。はあ〳〵。やいやい。お笑草に仰出されたところに。聞き事なことを申上げたとあつて。御感に思召す。前代には無い事なれども。只今のお褒美に烏帽子を御免なさるゝ程に。有難う存じませい。丹後〽これはなあ。丹波〽なか〳〵。兩人〽有難い事で御座る。奏者〽即ち烏帽子を下しおかるゝ。さて似合うたか似合はぬか。着けてお目にかけませい。兩人〽畏まつて御座る。丹後〽なう〳〵。これへおりやれ。丹波〽心得た。丹後〽何と思はしますぞ。これは有難い事ではないか。丹波〽なか〳〵有難い事で御座る。丹後〽抑そなたは着やうを知つてお居やるか。丹波〽いや〳〵百姓の事なれば。つひに着たことはないよ。和御寮は着たことがあるか。丹後〽いや〳〵。身共も着たことはないが。先づそなた着て見さしませ。丹波〽それならば。某着て見よう程に。手傳うてくれさしませ。丹後〽心得ておりやる。ト云うて。後見座にて着る。一段とよい。早うあれへ出さしま

せ。丹波へ心得ておりやる。まうし御座りまするか。奏者へ誰ぢや。丹波へ烏帽子を着致いて御座る。奏者へどりや〳〵。一段とよい。申上げい。丹波のお百姓。烏帽子を着致いて御座る。はあ〳〵〳〵。やい〳〵。よう似合うたとあつて。お褒めなさるゝ。今一人の者にも着して出よといへ。丹波へ畏まつて御座る。なう〳〵。よう似合うたとあつて。お褒めなされた。丹後へそれは一段のことぢや。丹波へそなたにも着して出よと仰せらるゝ。丹後へ心得た。こちへおこさしませ。丹波へ心得た。さあ〳〵着さしませ。手傳うてまゐらう。丹後へ手傳うておくりやれ。何とよいか。丹波へなか〳〵よい。早う出さしませ。丹後へ心得た。まうし御座りまするか。奏者へ誰ぢや。丹後へはあ。頂きまして御座る。奏者へ汝もよう似合うた。はあ〳〵〳〵。やい〳〵。兩人ともに烏帽子がよう似合うたとあつて。御感に思召す。卽ちお暇を下さるゝ。さて此の度は兩人共に一所に着してお白洲へ廻り。和歌を上げて洛中を舞ひ下りに致しませいとの綸言ぢやよ。丹後へはあ。奏者へ先づ一人の者へも此の通り云へ。丹後へ畏まつて御座る。なう〳〵。某にもよう似合うたとあつてお褒めなされた。扨お暇を下さるゝ程に。今度は一所に着してお白洲へ廻り。和歌をあげて洛中を舞ひ立ちにせいと仰出されたは。奏者へやあ〳〵。一所に着して和歌をあげ舞ひ立ちに致せ。兩人へなか〳〵。丹後へ和歌を如何やうにもあげうが。烏帽子が一つぢやが何と思はしますぞ。丹波へされば何とがよからうぞ。丹後へ其方よいやうに分別をしてお見やれ。丹波へ何としたらばよからうぞ。いやよい事を思ひ出いた。この臺共に兩人戴いたならば。二人一所に着したも同然ではあるまいか。丹後へこれはよい機轉ぢや。丹波へ先づそれへよつて着て見さしませ。丹後へ心得た。丹波へこれは正眞の相合烏帽子で御座る。丹後へ其の通りでおりやる。丹波へあれへ出よう。丹後へようおりやらう。丹波へまうし〳〵御座りますか。奏者へ何事ぢや。丹後へ兩人一所に着いたしまして御座る。奏者へどれどれ。これはでかいた。急いで舞立ちにせい。兩人へ畏まつて御座る。奏者へ明年待つぞ。丹波へなか〳〵。明年祗候致しませう。奏者へ最早行くか。丹後へなか〳〵。三人へさらばさらば。奏者へよう來た。兩人へはあ。丹後へなう〳〵。何と思はしますぞ。斯樣に有難い御意をうけ。殊に烏帽子までを御免なさるゝやうな目出度い事はおりやるまい。丹波へおしやる通り斯樣に有難い事はおりやるまいとも。丹後へいざ和歌を上げさしませ。丹波へ心得た。丹後へ千代に八千代をさゞれ石の。丹波へ君が齢は。兩人へ萬歳樂。謠あら〳〵目出たや〳〵な。治る御代のしるしとて。百姓までも烏帽子をゆるさるゝ年の春。勇みにいさむふたりはなか〳〵相合着てこそかへりけれ。えい。やあ。いやあ。

【い】

祐善

シテ　祐善の幽靈
ワキ　旅僧
アヒ　處の者

（入道具）

ワキ次第へわがあらましの末遂げて。〳〵。會下傘や友となりぬらん。詞是はさしもなき者にて候。われ俗にてありし時。傘を張りあなた此方仕り候へども。浮世は何ともなきものと思ひ。斯樣の姿となりて候。猶も傘に緣

の候ひけるぞ。若狹の國轆轤谷會下に閉籠り。行ひすまして候。また我等が氏の神にて候程に。都笠取の明神へ參らばやと存じ候。道行住馴れしわが會下傘を遙々と。わが會下傘を遙々と。後に綠の青葉山。後瀬の山の椎の笠。張出峠を打過ぎて。都の内に差掛り。甍の軒に著きにけり。詞急ぎ候程に。是は早や五條油小路とかや申し候。あら笑止や。俄に村雨の降り來りて候。これなる庵に立寄り雨をはらさばやと思ひ候。シテへなう／＼あれなる旅人 何とて此庵には立寄らせ給ひ候ぞ。ワキへさん候只今の雨をはらさん爲立寄りて候。シテへそれは祐善がやどりとて。雨もたまらぬ所なり。ワキへそも祐善とは如何なる者ぞ。御身も如何なる人やらん。シテへ是は祐善と申す者の幽靈なるが。此世を去りて久方の。月の夜すがら現れて候。御身も傘に好き給はゞ。我も昔は傘を張りし謂れを申すべし。傳へて／＼お弔ひあれと。同へ軒端の竹のかさかさと。藪の中へぞ入りにける。ワキへ所の人の渡り候か。アヒへ所の者とお尋ねは 誰にて渡り候ぞ。ワキへ是なる宿りは如何なる人の建ておかれたる庵にて候ぞ。アヒへさん候いにしへ此所に祐善と申す傘張の候が。傘を張りあなた此方仕り候へども。祐善が傘は。雨の用には立たぬ。その仔細は。一雨あへば骨は骨。紙は紙となる程にとあつて。餘の所にて傘を召さるれば。それを腹立ち。後には狂氣して狂ひ死にせられて候。この庵はかの人の建置かれたる庵なるによつて。祐善が宿りと申し候。今も傘張の御通り候へば。まみえ申すなどとは申せども。我等如きの見申したる事はなく候。お僧も逆緣ながら弔つて御通り候へ。ワキへ懇に御物語祝着申して候。さあらば立越え。弔うて通らうずるにて候。アヒへ重ねて御用もあらば仰せられい。ワキへ頼みませう。アヒへ心得ました。ワキへ扨は祐善が跡なるかや。いざや御跡弔はんと。永き日ぐらしつれ／＼と。／＼。けさの傳にて暮しつゝ。南無祐善成等正覺。一聲シテへ笠にぬふ。すげの葉亂れ降る雨に。よるの御法をうくるばかりぞ。ワキカヽルへ不思議やなさも破れたるかさかさの。軒端に近く見え給ふは。如何なる人にてましますぞ。シテへ是は祐善の幽靈なるが。御弔ひの有難さに。重ねて現れ出でて候。ワキへ扨は祐善の幽靈なるかや。いにしへ傘を張り給ひし。その妄執を語り給へ。跡をば弔うて參らすべし。シテへいで／＼さらばそのいにしへ。わが傘を張廻りし。有樣語り申さんと。御前にさしかゝり。カケリ常の如し。打上打切。同へ御前にさしかゝり。シテへ祐善がからかさ。同へ祐善がからかさは。日本一の下手なりと。名をもらし離れ易し。いやとて召す人なかりければ。あそこへさしかけここへさしかけ。お傘召されよ傘召されよと。呼べども呼ばれども。人は答へず春ながら。日かさも早くたけかさの。シテへ骨折れや腹立ちや。地へ骨折れや腹立ちやとて。かみけの如くに狂ひまはるは。只醉狂か顔は朱傘の。赤きは猿の山王祭か。科もなき人に向ひて。さはらばひやせと惡口すれば。かれが頭をわりためや。さしやくためにし。轆轤をはなせとありしかば。終に命はない取笠にて。地獄の底に住む笠なりしを。今あひ難き御法を會下傘。弘誓の船に半帆を上げて。蓮の花笠はすの葉かさを。さしはりてゆく程に。是ぞ誠の極樂世界。是ぞ誠の極樂世界の。あみかさや南無あみかさの。ほのかに見えてぞ失せにける。

石神

シテ　夫
アド　仲人
小アド　妻
（入道具）

シテ〽此邊りの者で御座る。某常に好いて飲む酒を。女共が嫌うてとやかう申す。此中打續きあなた此方で大御酒を下されたれば。さん〴〵腹を立て。暇を呉れい。去なう。と申す。あれが歸つては片時も世帶の世話もならず。其上身共まで此家にゐる事のならぬ譯が御座る。と申して。女に向うて堪忍して呉れいと申すも口惜しう御座る。爰にかれが參つた時肝煎せられた御方が御座る。是へ參り。何卒女共が歸らぬやうに意見をして貰はうと存ずる。シカ〳〵。女共が申すも無理では御座らぬ。晝夜とも酒が過ぎて。渡世の事も打忘れてゐるによつて。腹を立つるも尤もで御座る。（ト云うて行著き。案内乞ふ。常の如し。）アド〽何としてわせたぞ。シテ〽只今參るは別の事でも御座らぬ。女共が暇を呉れい。出てゆく。と申しまする。アド〽それは何ぞ夫婦いさかひでもめされたか。シテ〽いや。曾てさやうの事も致しませぬ。アド〽でも只去なう筈はないが。アヽいつぞやであつた。お内儀がわせて。そなたが世帶の事も構はず晝夜酒ばかり飮うでゐると云うて。殊の外不機嫌にあつたが。扨はまた酒が過ぎたものであらう。シテ〽いづれ此中は少し過ぎましたさうに御座る。アド〽それ〳〵お見やれ。身共がせつ〳〵意見をすれどもお聞きやらぬ。兎角酒をとまるならば取持たうず。又とまるまいならば身共は存ぜぬ。シテ〽何が扨。此後はふつ〳〵御酒はとまりませう程に。どうぞ女共が歸らぬやうになされて下されい。アド〽それならば。お内儀が去ぬと云うても。某が方へ斷りなしには行かぬであらう。是へ見えたらばよい樣に云はうぞ。シテ〽いや女共は今朝から恐ろしい顏附で身繕ひを致して居りました。定めて此處へ參るで御座りませう。途中で會へばむつかしう御座る。暫く是に置かせられて下されい。アド〽成程尤もぢや。それならば奥の間へむいてゐて樣子をお聞きやれ。シテ〽畏まつて御座る。女〽此邊りの者で御座る。妾が連合ひは大酒飮みで。世帶の事も構はず外を家にして出歩きまするによつて。人を頼うで意見をしてもらひつ。色々と致せども。兎角根生が直りませぬ。妾もほうど厭き果てゝ御座るによつて。親里へ去なうと思ひまする。さりながら。妾が嫁入をして來る時世話をして下された御方が御座る。是へ御斷りを申して直ぐに歸らうと思ひまする。シカ〳〵。誠に。一度や二度の事ならば堪へもしませうが。餘り再々で御座る。とかく是迄の縁であらうと思ひまする。何かと申す内に是ぢや。（ト云うて案内乞ふ。アド出る。常の如し。）女〽わ男が又度々大酒をして醉狂を致す。おまへの御耳へ入れまするもお恥しう御座れども。どうもなりませぬ。最早妾も愛想がつきましたによつて。出てゆかうと存じまして。お斷りに參りました。アド〽又か。女〽中々。アド〽扨々氣の毒な事かな。身共もよい事を聞く樣になうて笑止な事ぢや。さりながら。何とも意見をせう程に。まづ此度は了簡めされ。女〽あの仰せらるゝ事は。佛の顏も三度撫づれば腹を立てさせらるゝ。最早堪へ袋が切れました程に。さやうにお心得なされて下されい。アド〽して何ぞ暇の印をとつたか。女〽いや暇の印は取りませねども。おまへにお斷りを申せばよう御座る。アド〽い

や〳〵。某に斷りを云うた分では濟むまい。女へそれならば歸つて暇の印を取つて參りませう。アドへあゝこれ〳〵。まづお待ちあれ。それ程迄に思ひつめたらば留めもせまい。さり乍ら。物をよう思案をしたがよい。先づそなたが因果の程を知らぬ。あれを嫌うて。又あれに重を越した大酒飲みを男に持つまいものでもない。とかく此上は神佛次第に召され。則ち出雲路の夜叉神は殊の外申し事が叶ふといふ程に。あれへいて石神をひいてみて。みぐし次第に召されたらば良からうと思ふ。女へ誠に。仰せらるれば尤もで御座る。妾が因果で又どの樣な男に連添ふまいものでも御座らぬ。成程此上は石神をひいて御鬮次第に致しませう。アドへ一段とよからうさり乍ら。晝は人目も繁い。暮に及うで行かしめ。女へ心得ました。又してもく〳〵よい事は申して參らいでお世話になりました。此樣な氣の毒な事は御座らぬ。アドへ何しにさう思ふぞ。又お出やれ。女へも斯う參る（ト云うて。常の如く暇乞ふ。女は太皷座へ入る。シテ始終立聞きし。さて女暇乞して行くと。アドの袖を引く。）シテへ申し〳〵參りました。アドへ何とお聞きあつたか。シテへ成程承りました。アドへそなたが世帶の事も構はず。大酒ばかり飲うでゐると云うて。いかう腹を立てゝゐた。シテへいや此度の事は女共の申すが尤もで御座る。此間は御酒も少々過ぎまして御座る。アドへいや少々ではなかつたさうな。シテへ面目も御座りませぬ。さて只今仰せられました事は。一として私は合點が參りませぬが。あれはどうした事で御座る。アドへされば。お聞きある通り色々と云うたれども聞かぬによつて。ふと身が分別をした。某が思案には。そなたを石神にして出雲路へやつておいて。さて女が參詣して。添へと思召さば上らせられいとか下らせられいとか云ふであらう。そなたは傍（そば）に聞いてゐる事ぢやによつて。どうなりとも添ふやうにしたがよい。シテへはあ。扨は私が石神になる事で御座るか。アドへなか〳〵シテへ是は格別の御分別が出ましたが。してその石神には何としてなりませうぞ。アドへそれは何もかも道具を貸して取繕うてやらう程に。是へ寄らしめ。シテへ畏まつて御座る（ト云うて。大小の前にて。肩をとり。水衣を着せ。强飾頭巾着せしめ。縄を左の肩より筋かひにかける。）アドへさて云ふ迄はないが。是に懲りて以來はふつ〳〵大酒をめされな。シテへ向後は禁酒に仕りませう。アドへそれ〳〵それでよいぞ。シテへ是は變つた體（なり）になりました。アドへさて此面を貸さう程に。あれへいてよい時分にきさしめ。シテへ忝う御座る。もう斯う參りまする（ト云うて。暇乞してゆく。すぐにシカ〳〵。）シテへ扨も〳〵分別のある人かな。あの女は大抵の事で聞くやうなやつではないに。あの人の蔭でざつと去（い）なしはせまいと存ずる。いや何かと云ふ内に出雲路ぢや。その石神はどれに御座るぞ。さればこそ是にある。まづ石神はのけておいて（ト云うて。石神をのける仕樣あり。）最早暮に及うだ。女共が參るであらう。さらば石神になつて居ようと存ずる（ト云うて。脇正面の先にて。葛桶に腰を掛け。面をきる。）女へやう〳〵暮に及うで御座る。參らうと存ずる。シカ〳〵。誠に。此度は是非とも暇を乞はうと存じたれども。何某殿の仰せらるゝが餘り尤もで御座るによつて。とかく此上は神佛次第に致さうと思ひまする。何かと云ふ内是ぢや。扨も〳〵御殊勝な事かな（ト云うて拜む。）只今參る事別の儀で御座らぬ。妾が夫は大酒飲みのならず者で。世帶の事も構はず外を家にして出ありきまする。末々の事も心許なう御座るによつて。緣を切らうと思ひまするさり乍ら。妾が因果の程を存じませぬによつて。今石神をひいて御鬮次第に致しまする。今迄の男に添へと思召さば上らせられい。添ふなと思召さば上らせられな。小歌わ

が戀は遂げうずやらう。末遂げうずやろ。あがれ／＼上れ上らしめなう石神る。ト云うて引立つ石神上る。

女へ扨も／＼。あの男に緣かおるやら石神が上らせられた。迷惑な事かな。いやがうでは御座られども。今度は逆圖を引きまする。添へと思召さば上らせられな。添ふなと思召さば上らせられい。小歌たゞ人は見るにほれ候。もしは又文珠の再來か。行平の中納言も見ずば何ともな。女引立つる。シテ少しも動かぬなり。

女へなう／＼不興／＼。とかくあの男に緣があるやら石神が上らせられぬ。是非に及ばぬ添、ぢやまで。さり乍ら。此樣に御神樣に御苦勞をかけて只は歸られまい。妾が邊りに神子が御座るによつて。神樂の參らせやうを習うておいた。今の御禮にそと御神樂を參らせうと思ひまする。ト云うて。太鼓座より鈴を持ち出で。

女へおゝ遙かなる沖にも石のあるものを。蛭子の御前の腰掛の石。神樂打出し鼓笛云合すべし。一段順に舞ふ。シテうつる。

女へおゝめでたやな／＼。只今の御神樂の感應により。夜の驚き貴い騷ぎ。何事も思ふ所望を叶へ給ふ有難や。ト云うて又舞出す。シテ段々うつり。後には面を脇へかけて。面白がる。仕樣色々工夫あるべし。其中に女見付けて。

女へヤアわ男ではないか。シテへ南無三寶。見付けられた。女へなう腹立ちや／＼ ト云うて追込み入るなり。注意。シテ中入すゐ事もあり。その時は

アドへそれならばお内儀が去ぬと云うても。某が方へ斷りなしには行かぬであらう。是へ見えたらばよいやうに云はうぞ。（是迄繼りなし。以下次の如し。）

シテへ近頃忝う御座る。とかくよろしく願上げまする ト云うて暇乞ひ常の如く。シテ中入する。

小アド出て。シカ／＼ありて。太鼓座につくと出る。

シテへ女共が内に居らぬ。定めて何某殿へ參つたものであらう。參つて樣子を承らうと存ずる。何卒誰殿の御意見を承つて。承引致さばよう御座るが何と御座らう。心許ない事で御座る。何かと云ふ内是ぢや ト云うて案内乞ふ。出るも如常。

アドへエイ。誠によい所へお出やつた。

シテへ歸つて見ましたれば。女共が内に居ませぬ。定めて此方へ參つたで御座らうと存じまして。樣子を承りに參りました。

アドへ成程わせたが。そなたが世帶の事も構はず。大酒ばかり飲うでゐると云うて。いかう腹を立てゝゐた。

シテへいや此度の事は女共の申すが尤もで御座る。此間は御酒も少々過ぎまして御座る。

アドへいや少々ではなかつたさうな。

シテへ面目も御座りませぬ。

アドへさて身共も色々と云うたれども聞かぬによつて。不圖思ひついて。出雲路へいて。石神を引いて御鬮次第に召され。さり乍ら。貴は入目も繁い。暮に及うでお行きあれと云うたれば。やう／＼得心なして去んだ。身共が思ふは。そなたを石神にして云々。（以下繼りなし）

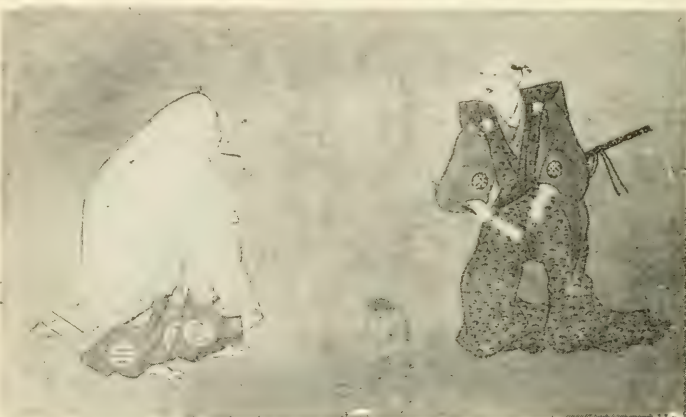
因幡堂（いなばだう）

シテ　夫

女　妻

（入道共）

シテへ此の邊りの者で御座る。某が妻はつうと成らず者で。朝寢をして有明かつて起きて。縫針の事は申すに及ばず。苧な一裂き績む事がならぬ。是にまだ堪忍も致さうが。女のあらう事か。大酒を呑んで酔狂を致す。之を煩さう存じて暇をやらうと申せば。わゝしう言うて。なか／＼身共に口をあかせぬ。今日は親里へ用が有つて歸つた程に幸ひと存じて。後から暇の狀をやつて埒を開けて御座る。さりながら。一人居ては片時も世帶の事が何ともならぬ。また因幡堂の藥師如來は現佛含と申す。今日參詣致し。申妻を致さうと存ずる。シカ／＼。やれ／＼。去りたい／＼と存じたに。ざつとよい病時を致した。又信心に祈誓申して御座らば。定めて似合はしい妻をお授けなされて下さらうと存ずる。參る程にこれ

ぢや。先づお前へ向はう。ヂヤグワン／＼。ト言うて鰐口を打つ眞似をする。唯今參る事餘の儀で御座らぬ。
私唯今までの妻は殊の外ならず者で御座る。
其の上大酒ばかり食べまするによつて。離別
致して御座る。あはれ藥師如來のお引合せで。
似合はしい妻を與へさして下されい。南無藥
師瑠璃光如來／＼。今夜は是に籠らうと存ず
る。女へなう／＼。腹立ちや／＼。わ男が妾
を嫌つて。親里へ歸つたれば後から暇の状を
おこして。また因幡堂へ申妻に參つたと申す。
此の樣な憎い事は御座らぬ。あれへ參つて致
し樣が御座る。シカ／＼。云うても／＼。妾
をだまして去り居つたが憎う御座る。見附け
次第喰ひ殺してのけう。さればこそあれによ
し／＼と伏せつて居をる。何とせうぞ。いゝ。
妾がお藥師樣になつて示現をおろさう。ヤ
イ。汝よく聞け。西門の一のきざはしに立つ
たを汝が妻に定め。エイ ト言うて。中入する。シテへハア
ハア。あら有難や。少し睡眠のうちにあらた
な御靈夢を蒙つた。扨も／＼忝い事かな。西
門の一のきざはしに立つたを汝が妻に定めよ
との御事ぢや。扨々有難い事かな。先づ急い
で西門へ參らう。シカ／＼。扨も／＼。佛の利
益をかりそめにも疑ふ事では御座らぬ。斯樣
なあらたな事は御座るまい。何かと云ふうち
に西門ぢや。さてかの人はどれに居るぞ。

ト言うて尋ぬる。女箔をかづき。一ノ松へ出て居る。シテ見つけ笑ふ。詞かけ兼ぬる所。二九十八同斷。アドうなづく。

悦うで笑ふ。この邊同意。退付け向ひに馬か乘物かと云ふ。いやとかぶり振る。手を引いて行かうかと言ふ。女うなづく。身の上相應を言うて。悦び手をひき。シカ／＼言うて同斷。 さあ／＼御座れ。
誠に。初めて逢うて言ふは異なものなれども。
後で知れる事ぢやに依つて話しまする。某唯
今まで獨り居たでも御座らぬ。是までの連れ
は殊の外ならず者で。朝寢をして有明かつて
起きて。隣あたりへいて。大茶を飲んで人事
を言ひまする。是はまだ堪忍致さうが。聞い
て下されい。女のあらう事か大酒を飲んで醉
狂を致す。それ故暇をやりました。又そなた
は藥師如來樣のお引合はせで夫婦に成りまし
た程に。五百八十年萬々年も連添ひませう。何
かと申すうち。是ぢや。先づ是處に御座れ。
さて盃を致さう ト言うて盃を持つて出る。 先づ其の衣を取ら
しめ。女イヤとかぶりふる。 うひ／＼しいに依つて恥し
いも尤もぢや。それは互ひぢや勝手にさせら
れい。此の樣な時は飲んでさすものぢや。そな
た參つて下され。ト言うて。盃をもたせ。酒を注ぐ。シテちよとつぐ。盃つき出す。
こりやそなたもちとなるか。ト言うて。アドうけて飲む。 こ
れは一向なるさうな。さあ／＼是へ下され
い。かぶり振りて。また盃さし出す。シテ取らうとすると。アド引込めまた差出す。 また參
る。ト言うて注ぐ。また差出す。 これは如何な事。身共が仕
合はせも知れた。今迄の女共も餘の事は堪忍

致せども。酒を呑むが厭さに離別致したに。こりや重を越えた大酒飲ぢや。扨も〳〵苦々しい事ぢや。サア〳〵其の盃をおこさしめ。たまた前の通り盃を差出す。取らうとすれば。引込め。また差出す。献を合はすと言ふ事か。ト言うて。また一寸注ぐ。盃を差出す。さあ〳〵何程なりともお飲みあれ。また注ぐ。扨も〳〵興のさめた事かな。女と言ふ者が其の様に酒を飲むものではおりない。此方へおこさしめ。ト言うて。引つたくり腹を立て。盃をおしまふ。サア〳〵衣をお取りやれ。かぶり来る。合點の悪い。其様にして居るものぢや。ト言うて無理に衣をとがす。いざ對面せう。女へヤイ其處な奴。何ぢや。ならず者ぢや。眞實暇をくるるか。シテへいや有りやうは遁世の望みで。獨身に成らうと思うて暇を出した。女へエイ腹立ちや〳〵。因幡堂へは何の爲に籠つた。シテへそなたの息災な様に願をかけに參つた。女へあの卑怯者め。摑みつかうか食ひ附かうか。ト言うて。退込み入るなり。

犬山伏（いぬやまぶし）

シテ　山伏
アド　僧
小アド　茶屋

犬　入道具）

アドへ此邊り近い所の庵住で御座る。今朝は檀那衆の齋に參つて。只今歸るさで御座る。まづそろ〳〵と參らう。シカ〳〵。今朝はどうやら雨が降りさうに御座つたによつて。傘を用意致して御座る。是は重疊の天氣になつた。此先に茶屋が御座る。庵室へ持つて歸らうより預けて參らう。イヤ茶屋殿。出させられたか。小アドへエイ御坊様。また今朝もどれへぞ御座つたか。アドへされば毎月今朝さる方へ齋に參る。當月も參つて只今歸るさで御座る。小アドへまづ腰を掛けて休ませられい。アドへ心得ました。ト云うて腰かける。小アドへ何と茶を一つ參らぬか。アドへ一つたべませう。茶を飲む。シテ次第で出る。是より後禰宜山伏同意。少しも變らず。シカ〳〵同斷。但し禰宜を坊主と云ふが違へるばかりなり。小アドへなう〳〵お前は途中で山伏に出會はさせらるれば。肩箱を持たせらるゝが作法で御座るか。アド強力づれの肩箱もつ作法はない。ト云ふ。小アド取次して。貴人ぢ下馬をなさるゝ。ト云うて。シテが小アドをのけてアドの方へゆかうとすると。小アド止めて。今のを聞かせられたか。ト云ふ迄のセリフ。皆々禰宜山伏に少しもちがはず。アドへ成程承りました。扨々我儘な事を仰せあります。私どもぢやと申して。上々様のお頼みによつて現當二

世安樂の御祈禱の爲。陀羅尼を讀誦し。法事の場に於いて貴人高人の上座をも塞ぎまする。すれば宗旨こそ違ひますれ。別に押しも押されもする事でないと云うて下され。小アド取次ぐ。更に。目の前を飛ぶ鳥も祈り落す。の所を云ふ。小アド取次ぐ。すべて禰宜山伏同斷。アドへいよ〳〵無理な事をおしやりまする。捨身の行ひとやらをするによつて。飛ぶ鳥も祈り落すとやら云うて恩にきせありまするが。それは山伏の役で御座る。まづ私も佛前に於いて。經說を以て惡人を後生の道に入れ。罪の深い亡者をも弔ひうかめるが出家の役で御座る。其上佛菩薩の功德利生は樣々御座れども。それを申せば威勢爭ひの樣になつて惡う御座る。愚僧は裏道から去ないて下されい。小アドへまづ待たせられい。そつとも聊爾はさしませぬ。氣遣ひ召さるな。是は何ぞ勝負にさせられたら良う御座らう。アドへ勝負とは何を致しまする。小アドへ身共が所に人喰ひの犬が御座る。是を引出し。雙方へ祈らせて。行力の達した方へは犬がなつきまする。その懷いた方を勝に致さう。アドへいかな〳〵。山伏は常に祈り祈禱にかゝつてゐられまする。其上犬は唯さへ此衣の裾はざれつきたがるもので御座る。殊に人喰ひの犬ならば恐ろしう御座る。なか〳〵是はなりますまい。小アドへいや。最前から山伏は無理で御座る。そなたに勝たせたいものぢやが。何とぞお經の中に虎と申す事は御座らぬか。アド經を少し讀みかけて。アドへ中々。虎と申す事が御座る。小アドへそれは幸ひの事で御座る。かの犬の名を虎と申す。その虎々といふ事をお經に交ぜて仰せらるれば。犬が懷きまするによつて。疑ひもなくそなたの勝になりまする。祈らせられい。アドへそれならば祈つても見ませうか。小アドへ則ちそなたが勝たせられたらば。その傘をあの山伏に持たせませう。萬一負けさせられたらば。不承ながら肩箱を持たせられずばなりますまい。アドへ此上は何事も茶屋殿を賴みまする。よい樣にして下されい。小アドへ心得ました。シテへ何と持たする。小アドへ是では埒があきませぬ。何ぞ勝負にさせられたらば良う御座らう。是より後悉く禰宜山伏同意。大黑のセリフを犬と云ひ。幣を傘と云ひ。禰宜を坊主と云ふなり。扨犬をつれにゆく。來い〳〵と云うて。幕ぎはより呼ぶ。内よりせいて出る。扨色々あつて。アド經を讀む。南無きやらたんのうとらや〳〵と云ふ。犬なつく心なり。アドのつて經を讀む。うつる所犬も大黑の通り同じ事なり。シテ祈る。一句々々に犬ほえつく。山伏驚きて。犬をとらへてゐよ。ト云うて茶屋を叱る。扨相祈りになつて。シテに犬強くほえる。喰付く心なり。山伏逃げて入る。犬追込みて入る。アド小アドも後より入る。狂言全部禰宜山伏の通りなり。

岩橋

シテ　夫
アド　仲人
女　妻

（入道具）

シテへ此邊りの者で御座る。此中妻をまうけて御座るが。參つてから早や十日の餘になれども。其時かづいてわせた衣を。今において晝夜取らずに着て居らるゝ。それ故未だ顏をも見ぬ。察する所は定めて五體不具な女と存ずる。一目も見ずに暇を遣すは後難もいかゞぢや。又其時仲人してくれたお方が御座る。是へ參つて樣子を尋ねうと存ずる。シカ〳〵いづれ合點の參らぬ事で御座る。此中も色々だましつすかしつ申せども。有無に衣を取らず物をも申さぬ。今日仲人に尋ねて御座らば。樣子が知れうと存ずる。何かと申す内に是ぢや。先づ案内を乞はう。ト言うて案內乞ふ。常の如し。シテへ先づ以て此度は段々お世話に預りまして。これと申すも私をよかれかしと思召す故と存じて。別して喜ばしう存じます。アドへ成程わごりよのおしやる通り。何卒似合はしい事も

あれかしと思うたに。幸ひの事が有つて。身共まで滿足に存ずる。シテへそれに就きまして合點の參らぬ事が御座る。あの人の參られましてからはや十日の餘にも成りまする。其時かづいてわせた衣な。今にお取りやりませぬ。其上物をも言はず引込うで居られまする。私の存じまするは。若し顏形(かたち)の内に見せとむない事が有つて。あの樣にして居られまするか。餘り心許なう御座るに依つて。定めてお前はよう御存じで御座らうと存じて尋ねに參りました　アドへ扨々むさとした事を言ふ人ぢや。前方から申す通り。美人と言ふではなけれども。大抵十人並みの器量で。中々不具な事は少しもない程に氣遣ひ召さるな。シテへ先づそれならば安堵致して御座る。さりながら。衣を取らぬが合點が參りませぬ。アドへ何れ合點のゆかぬ事ぢや。どうでもそれは餘所(よそ)見ずぢやに依つて。恥しがつて。其衣を脫がぬ物であらう。何卒衣を取らせ對面させたいものぢやが。シテへどうぞよろしう御思案をなされて下されい。アドへ其樣子なら。中中大抵の事では衣を脫ぐまい。何とせうぞ。いやあの子は幼い時から歌道に好(す)いて歌を詠む。どうぞ葛城岩橋の事などを引いて歌をお詠みやつたらば。大方衣を取るであらう。シテへ岩橋とは何の事で御座る。アドへ終に詠うだ事はないか。シテへ曾て存じませぬ。アドへ扨々氣の毒な事ぢや。何と敎へたらばならうか。シテへ習うてならぬと申す事は御座るまい。アドへそれならば敎へてやらう。先づそなたの内へお歸りやつて。首尾を見すまして。葛城や。人目をつゝむ神だにも。夜は現れ給ふ習ひぞ。とおしやれ。まだそれでも衣を取らずば。岩橋の。末通るべき仲ならば。何とて君に會はで果つべき。この二首お詠みやつたらば。定めて衣を取るであらう。シテへ今のは誰が申しまする。アドへわごりよのおしやる事ぢや。シテへあの私ひとりしてか。アドへはてさて歌一首を幾人(たり)して詠むものぢや。シテへその生長い事が五年や三年に何と覺えらるゝ物で御座らう。アドへ是程の事がならぬか。シテへ思ひもよらぬ事で御座る。アドへ扨々氣の毒な。何とした物であらう。何とそなたは物を書くか。シテへ書くと申す程の事には御座らぬが。いろはの内の字ならば。雀の跡足の樣に仕りまする。アドへそれはされどもぢや。先づそれに待たしめ。シテへ畏まつて御座る。アドへこれ。悉くいろは字で書いてやる。是は讀めうぞ。シテへ成程是は皆知つた字で御座る。この文字の側にちよぼ〳〵と墨の附いたは何で御座る。アドへあのそれを知らぬか。シテへいや存じませぬ。アドへそなたも餘程不調法に生れ付いた人ぢや。濁りの點ぢやわいなう。シテへ成程合點致しました。アドへ扨言ふまではないが。わごりよが當座に不圖(ふと)詠む樣にして。必ず書いた物を人に見せぬ樣に召され。シテへ畏まつて御座る。さて忝う御座る。歸つて樣子を見ませう。アドへ先づ樣子をお見やれ。シテへもうから參る。常の如く暇を乞ふ。シテへ先づ急いで歸らう。シカ〳〵。誠に。夢に聖人にまみえずとやら申すが。推量致すに。是は眉目も大體なれども。引けなして衣を取らぬと存ずる。さりながら。今日は是非とも對面致さずばなるまい。何かと言ふ内に私宅ぢや。なう居さしませぬか。今戾つておりやる。女切戸より出で。常居に居る。まだ衣をかづいてお居やる。先づ窮屈にあらう。お取りやれ。かぶり振る。扨々辛抱の強い人ぢや。聞けばそなたは歌好きぢや。其衣をお取りやれ。一首詠まう。女うなづく。シテ喜び。笑ふ。シテへかうも御座らうか。と言うて。葛城やを書いたを見々讀む。口傳。さあお取りやれ。かぶり振る。シテへそれならばもう一首詠まう。必ず取ら

しめ。と言う一二〇岩橋の歌を謡む。右の心に同斷。　さあ／＼衣なお取りやれ／＼。いやと。かぶり振る。　シテへ扨々あこぎな人ぢや。其上我等如きの妻が。いつ迄其樣にして居る物ぢや。此上は身共が衣を取るぞ。釣針。二九十八。同斷。　シテへあれは何ぢや。きようがつた者ぢや。　女へまうし／＼。　シテへ何ぢや。　女へどこへ行かしやる。　シテへいやどれへも行きはせぬ。　女へこなたと妾は五百八十年。萬々年も連添ひませう。　シテへ人が笑ふ。おのれが樣なやつは。かうして置いたがよい。長者になると言うても。あの樣な者が何となる物ぢや。　女へまうし／＼。どこへ行かしやる。　シテへあゝ行かしてくれい。と言うて退込み入る也。

家童子（いへどうじ）

鷺流

シテ　妻
アド　夫
アド　太郎冠者
（入道具）

アドへこれは皆人の御存じの者で御座る。先づ召使ふ者を呼出して談合致す事が御座る。呼出し常の如し。但し方々の御遊覽はあらけない事ではないかと云ふ。　それにつき此の中東山で。はからずに出逢うて道連になつた人は。不思議の緣ではなかつたか。あれは大方御所方の御衆で御座らうか。あの樣に仰せ合せられたやうに御參會なさるる事も。なか／＼一世や二世の御緣では御座るまい。さて先づ美しい事で御座りました。　アドへ汝が云ふ通りぢや。某も忘るゝ間もなう目について居るやうなによつて。いろ／＼便りを求めてまんまと文を遣うて。篤と合點めされ、今夜行く筈になつたは嬉しい事ではないか。　太郎へそれは一段のお事で。目出度う御座りまする。　アドへさりながら。山の神めが最早察し居つたか。一兩日は餘所へちとの用を云うてやるにも氣をつくるによつて。何卒きやつを欺いて緩々（ゆる／＼）と遊ばうと思ひ。色々分別して置いた所へ。幸ひ南部から上々の諸白を貰うた。それをかれにやつて。某は參宮すると門出を祝うて酒を飲ませ。卽ち置土產に留守の間慰みにせいと。今の南部の酒を置いていたらば。酒と聞くと何事も思はぬ。所で心易う身共は慰んで歸らう程に。汝は留守に居て山の神が機嫌を見合せ、淋しさうな時には酒を飲ませ。相手になつて居よ。　太郎へ畏まつて御座るさりながら。御酒の御挨拶は私より次郎冠者に仰附けられませい。やい／＼。次郎冠者／＼。呼ぶ時常の如し。　アドへいや／＼。次郎冠者にいひ付くれば。身共が呼うて直にいひ附くる。すこしも氣遣ひするな。今角（つの）のはゆるやうな時も。酒を見ると其のまゝ機嫌が直る。それ故に常に戲れに酒童子／＼と云ふ。總じて女房をば家童子と云ふ。それにあれは酒を好むによつて。昔し丹波の國大江山に酒呑童子と云うて。大酒飲みの鬼があつた。それに引合はいて酒童子と云へばよい事かと思うて悦ぶ。先づ急いで呼んで來い。アド笛の座へ。太郎冠者樂屋へ向き呼出し。シテ出る。　アドへそなたを呼ぶは別の事でない。目出度い事がある。夜前あらたなお告げがあつたによつて。思立つて伊勢へ參宮する。留守の間淋しくとも太郎冠者を相手にしておりやれ。　シテへこれは俄な思召し立ちで御座る。先づ其のお告げは如何樣な事で御座りますぞ。　アドへいや／＼。話したうはあれども云ふ事はならぬ。幸ひこれは只今到來した。これを置土產に置く程に。是れを慰みして居さしませ。シテ酒を見て俄に機嫌よくなる。先づ盃を出せと。爰にて酒宴あり。小舞。小謠などあり。機嫌よく酌む。シテ醉ふ。　シテへ妾は酒（さゝ）程面白いものは御座らぬ。皆女の大酒はいらぬ事とおしやれども。世の中に殿とさゝさへ見て居れば思ふ事は御座らぬ、

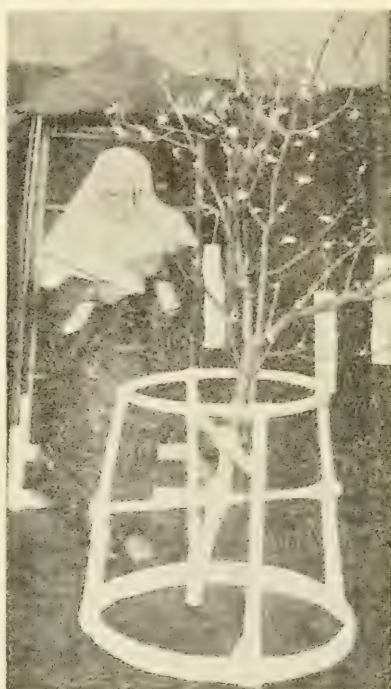
人は何とおしやらうと。お叱りやらうと。こなたさへ可愛がらるればよう御座る。（アドに寄りかゝる）アドへいや／＼。酒を飲むこそよけれ。語つて聞かせう。語 昔唐の楊貴妃は隠れなき美人にてありしが。帝の御寵愛淺からざりしに。或時召されしにいたく酒に酔ひ給ふ。折節なればやう／＼と介錯せられ。出で給ひて面はゆく思はれけるか。嚮きておはしけるを叡覧あつて。海棠の睡りの足らざるに喩へ給うたといふ事もある。かやうの事を聞く時は。すこしも苦しうない事でおりやる。さながら其の時の様體を見る心がするぞや。シテへ何と仰せらるゝ。わらはが此の様にして居るが似た。軽忽な。何と似ませうぞいのう。（太郎冠者くつろいで。極悪にて。）太郎冠者へあの體は海棠には似いで。其の儘灰俵を横に捨てゝおいたやうな。（ト笑つて。又元の座に行く。シテ殊の外腹を立て。など諷ひ色々する。アドは頭合を見合はせて。そろ／＼とのく。シテアドを尋ねて。わらはも行かうと云ふを。太郎冠者とむると大に腹を立てる。）シテへ内の人はどこへぢや。太郎へ最早お立ちなされて御座る。シテへお立ちなされた。（ト太郎に向つて。）ようおのれは一つになつて。まち／＼と其の様な事を云ふ。わらははとうから知つて居たれども。まづさゝを飲うてからと思うて。知らぬ様にしてゐた。飲みたい程さゝは飲み。本性にたがはぬ。奴もおとなら行かう。大方御所方の宮へ、お参りやつたもいでゝあらう。なう腹立ちや／＼。（太郎冠者を振り切りかけ出でて追ひかける。アド太鼓座より出て。酔うて隠るゝやうに行くを。シテ見付け。色々云ふて夢見のことを話すもきかず。アドとつかみ合ふ。さてアドはシテを打ち伏せてのく。シテ追ひかくる。）

庵の梅

シテ　庵の女主人
立衆　花見の女達
（入道具）

（庵の作り物を出し。笛座の上へなほす。直に次第。但しシテ庵の内へ入つて居る。）

次第女へ雪間の風も香なれや。／＼。梅の香なを尋ねん。立頭へ是は住吉の里に住む女にて候。遠り近き庵におりやう様が御座る。美しい梅の花が盛ちやと申す。友達の雑女を誘ひ。只今おりやう様の庵へ参らばやと思ひ候。道行へ住みなれし。すみに雀の巣をかけて。／＼。ここそ雀も住吉の。松にはあらで梅が枝の。庵の軒に響きにけり。立頭へ何かと申す内是で御座る。柴の戸がさして御座る。何と致さうぞ。二女へいや／＼由あるおりやうと聞いて御座る。暫く機嫌を見合せたらばよう御座らう。立頭へそれならば先づ斯う寄つて御座れ。シテへ小歌世に遠く。道に果てゐる宿にも。春だに来れば。梅の花。人待ち顔に咲くからに。昔にかへる心かな。立頭へさればこそ謡が聞えまする。まづ案内を申しませう。如何におりやう様。御内に御座りますか。シテへこの庵の外面に訪るは誰そう。立頭へ是は住吉の里の者で御座る。お庭の梅の花が盛と聞きまして。大勢花見に参りまして御座る。何とぞ見せて下され。シテへ侘しき我庵恥しや／＼。外から見て歸らしませ。立頭へ遠々参り。殊に竹筒など用意致し／＼御座る。只お情にお見せあれ。シテへよし／＼何かと申せばおくがまし。どりや／＼戸をあけませう。オヽ腰いたや／＼。サラ／＼。扨も／＼大勢のごりよん達や。よう渡らしました。さあ／＼通らせられい。立頭へいづれも御座れ／＼。扨も聞及びましたより見事では御座らぬか。二女へ是は／＼。玉の緒の絶える事はあらぬと思ふ程のお慰みで御座る。三女へ心が伸び／＼と致しました。シテへ前は見事に咲きましたが。今は年が寄つて。梅の花も餘りあつ／＼とは咲きませぬ。その筈で御座る。おりやうが年と此木とが同じ年で。

木も屈む。おりやうが腰も屈みました。立頭へいや〳〵見事に咲きました。シテへ先づゆる〳〵と遊ばせられい。おりやうも今日には共に遊びませう。何と口ずさみも御座らぬか。立頭へ恥しながら。斯うも申されませうか。シテへどれ〳〵。扨もやさしや〳〵。面白う遊ばした。へ是も御覧なされて下されい。へその序に妾もお目にかけませう。シテへやれ〳〵面白い事や。是は梅ヶ枝につけませう。へそれは許されたう御座る。シテへそれは何れもお卑下で御座らう。立頭へさあ〳〵。竹筒をひらかせられい。へ妾酌に立ちませう。へ一段とよう御座らう。酌へおりやう様。お始めなされて下されい。シテへ是はあいだてない盃を出させられた。お志や。始めませう。扨も〳〵よい九献や〳〵。念を入れさせられたか。いしい酒で御座る。御りよんへ上げませう。へ頂きませう。シテへちと謡はせられい。小謡。シテへ皆殿達が好かせらるゝ程あつて。面白い事で御座る。へおりやう様へ上げませう。シテへ此内に舞はせられぬといふ事はない。さあ〳〵一さし舞はせられい。女舞。シテへ上手やの〳〵。扨も面白い事で御座る。さりながら。今のは餘り短かに御座る。もそつと長い事を連舞にさせられい。ツレ要小舞。シテへどれも〳〵。器用な輩御前たちや。この肴で妾もまた喰べませう。今の骨折に差しませう。へ頂きませう。へ近頃申兼ねましたが。おりやう様一さし舞はせられい。シテへ恐ろしや〳〵。このおりやうが舞とやらは知り候はぬ。立頭へいや〳〵舞はせられぬ事は御座るまい。是非とも御所望で御座る。シテへそれならば。酒にも酔ひまする。昔を思ひ出して舞ひませう。地を謡うて下されい。シテ小舞。シテへ恥しや〳〵。このおりやうが舞うたと人に云うて下さるな。立頭へおしほらしい事で御座りました。シテへ何のしほらしい事が御座らう。立頭へさて日も西に傾きました。何れもお暇を申しませう。シテへ何れ日が暮れては。女中ばかり歸らせらるゝはこはからう。どれ〳〵立座を進ぜう。ト云うて一つ梅の枝を折つてやる。へ忝う御座る。嬉しうおみやを下された。シテへ腰が屈うで手が届かぬ。皆寄つて枝を折らせられい。シテノルへ盃の。立衆へめぐる日かげや梅の花。けふの名殘を惜しむらん。とり〳〵梅のかざしして。殿御を待たぬ酒宴には。三々九度の名もをかしくて。汲交す酒の。色に映じ。花に映じて日も傾けば。お暇申さんといふ人心。へつらひもなく。へつらひもなく。人の心にへつらひもなくて。めんそうにぐすと。はいりけり。

今神明

シテ　部方の者
女　妻
小アド　參詣人
立衆　參詣人
（入道具）

シテへ部方に住居する者で御座る。某近年不仕合せで色々商ひを致せども損をする。とかく身上難成らぬ。それに就いて。女どもと相談致す事がある。呼出す。如常。誠に　おぬしが知る通り。近年は何なしても不仕合せで。身上ならぬに就いて。ちと思附いた事がある。此の頃宇治へ神明の飛ばせられたが。之を今神明と名附けて。夥しい參詣があるげな。でもかうもするならば。夫婦連れで參詣せうけれども。其の段でもない。幸ひの事ぢや程に。參詣がてら何ぞ商賣物を拵へて行かうと思ふが。何とあらう。女へとかく身代の爲ならば。如何様にもおそばせ。シテへそなたも來てたもらうか。女へ參つてよくば行きませう。シテへ商ひと云うて。當分思寄つた事もない。茶屋をして茶を賣らうと思ふ。女へよからうと思召さば。さうもなされい。さりながら。道具が御座るまい。シテへイヤ先だつて用意して置いた。それにお待ちやれ。ト云うて。樂屋へ入り持ちて出る。シテへそれ〳〵見さしめ。女へ是は思ひの外よう出來ました。シテへさあ〳〵行かう。來さしめ。シカ〳〵。誠に。身代がならぬ程難儀はない。別に人惡るかれとも思はぬが。とかく不仕合せな。女へわらはも何かと思ひますれども。致さうやうも御座らぬ。シテへ何とぞ茶がよう賣れゝばよいが心もとない。さて。總じて此の茶を賣るに。茶立女と云ふ者が氣を働かしてさへられねばならぬ。人が夫婦ぢやと思へば。遠慮して物も云はぬ程に。そなたは茶立女になつて。身共は連合ひの樣におしやるなや。女へイヤそれはしつけすはなりそむない事で御座る。シテへ隨分氣を附けて。人の寄りそいのある樣にさしめ。是はとかくそなたの上手次第でおりやる。女へ心得ました。シテへ何かといふうちに是ぢや。さて〳〵大參りぢや。是處は人の通らいでならぬ所ぢや。定めてよう賣れるであらう。某はちと脇へ退いて居る程に。隨分精を出さしめ。女へ心得ました。小アドへ此の邊りの者で御座る。宇治へ神明の飛ばせられて。申し事が叶ふと申す。參詣致さうと存ずる。シカ〳〵。誠に。末世とは申しながら奇特が御座る。人の心を正直に持たう事と存ずる。これ〳〵殊の外咽が渇く。幸ひ茶店がある。これ〳〵茶を飮まう。女へ茶を參るか。小アドへ一つくれさしませ。仕方色々あり。口傳。小アドへこれはいかうぬるうて飮まれぬ。シテ我に煽つ。女へどれ〳〵汲直して進ぜう。これ〳〵。小アドへイヤとかくぬるい。其の上惡るい香がして飮まれぬ。外の茶屋へ行かう。シテ女の袖を引き。色々あせる。女へはて茶を熱うして進ぜう。小アドへイヤ其の間は待たれぬ。ト云うて入る。シテへさて〳〵苦々しい。もそつと茶を熱うして置かしめ。女へ炮烙罐子ぢやによつて。思ふ樣に茶が立ちませぬ。シテへ身共が煽つてやらう。頭へいづれも御座れ〳〵。今神明へもそつとで御座る。急がせられい。衆へ心得ました。頭へさて〳〵夥しい參詣で御座る。衆へ其の通りで御座る。頭へ咽が渇く茶を飮みませうか。衆へちと休むで行きませう。シテ立衆を見附け女にしらす。女へなう〳〵茶を參らぬか。頭へいづれもたべう。皆下に御座れ。衆へ心得ました。シテ大勢を喜びて。女へさあ〳〵參れ。頭へこれは穢い茶碗ぢや。はたの缺けぬを出さしめ。女へ心得ました。女うろ〳〵する。シテすゝげとあせる。口傳。女へ之を參れ。頭へ、身共はいやぢや。女

へこなた參れ。茶へどれ〳〵。これは水が惡いか。茶の精があるか。濁つて氣味が惡い。よの茶碗はないか。女へはてこれが奇麗に御座る。頭へ總じて茶柄杓もいかうふすぼつてあり。何とめちやむさい。是處ばかりが茶屋では御座るまい。さあ〳〵御座れ。茶へいづれもきへ參らう。茶へ先づ道具も穢うては飲まれませぬ。頭へさて。何と今の女を見させられたか。さて〳〵色の黒い顔で御座る。茶へ中々。あの顔に白粉をべつたりと附けた見たむなさ。頭へたべ物を賣るには。あれは見苦しい事ぢや。皆々笑うて入る。シテ立留き種々仕樣あり。團扇を捨て。シテへなぜに茶碗をようゆすがぬ 女へでも唯一つならではない茶碗が。何となりまする。シテへ物は云ひなしぢやけれども。いかにしてもおぬしが不調法で。氣の毒な事ぢや。女へしつけぬ事ぢやによつてどうもなりませぬ。とかく此の體ならば。何をしたりとも不仕合せに御座らう。ト泣く。シテへおしやる通り。不運になれば。する程の事が惡いものぢや。是處に居て恥をかかうより。仕舞うていなう。ト泣く。シテフシへうたてしの旅人たちや。何とて茶をば飲まざるこそ。女へ飲まぬこそ道理なれ。檜の木茶桶に炮烙鑵子に。伊勢水呑のはたの缺けたに。天道干のいとまこはずを。飲まぬは人の道理なり。シテへさらば茶立てのみめもよいが。極めて色の黒き顔に。はいほなんどずつぱとつけたる顔を見れば。燒山に霜の降つたに少しも違はぬ可笑しさよ。二人へよく〳〵思へば我等が商ひ。今此の茶屋にて身をば立つまじ。いざ打捨てて此の茶屋を。いざ擱きて此の茶屋を。捨てて都に歸りけり。ト炮烙を打割りて入る。

今参

シテ　大名
アド　太郎冠者
小アド　今參り
（入道具）

シテへ隠れもない大名。かやうに過は申せ共。召使ふ者は唯一人。一人では使ひ足らぬによつて。新參の者を大勢抱へうと存ずる。先づのさ者を呼出し。此由申付けう。ト云うて呼出す。大名狂言同斷。シテへ汝呼出す別の事でない。此中の樣に方々をすれば。そち一人では使ひ足らぬに依つて。新參の者を大勢抱へうと思ふが何とあらう。アドへ御意もなくば申上げうと存じて御座る。是は一段とよう御座りませう。シテへそれならば何程抱へたものであらうなあ。アドへそれは御前の御分別次第で御座る。シテへなに分別とは身共が儘といふ事か。アドへ左樣で御座る。シテ　れならば大名のせつ〳〵置かうより。一度にどつと八千人抱へう。アドへ是は夥しい人數で御座る。先づその八千人と申す人の置き所が御座るまい。シテへそれこそ廣い野山にばら〳〵と放いておけ。アドへむさとした事を仰せらるゝ。人が野山で育つものでは御座らぬ。是はもそつとおへしなされませ。シテへ何ぢや。へせ。アドへハア。シテへそれならばくわつとへして二百人抱へう。アドへへりはへりまして御座るか。それでは御堪忍が續きますまい。シテへなにかんにん。アドへハア。シテへ堪忍〳〵。ムヽ堪忍とは物喰み物の事か。アドへ左樣で御座る。シテへそれこそ澤山な水を呑ませておけ。アドへ又むさとした事を仰せらるゝ。人が水ばかりで育つものでは御座らぬ。是はもそつとおへしなされませ。シテへ何ぢや。まだへせ。アドへハア。シテへそれならくわつとへして二人抱へう。アドへハア。二人な。シテへいや。汝共に二人ぢや。アドへすれば召

抱へらるゝ者は唯一人で御座るか。 シテへ其通りぢや。 アドへ是は一段とよう御座りませう。シテへそれならば。汝は大儀ながら上下の海道へいて。獨りもひとりからと囊のある利根さうな者を見すかして抱へて來い。 アドへ畏まつて御座る。（此處大名狂言同斷。） アドへ過急な事を仰付けられた。先づ急いで上下の海道へ參らう。シカ〳〵。誠に。只今迄は某一人で辛勞に御座つた。新參の者を抱へて御座れば。大方の事。（それより上下の海道へいたり。似合はしい者通らば聲を掛けう。と云うて下に居る。） 小アドへ是は坂東方の者で御座る。某國許の奉公致し盡して御座る。此度上方へ上り。愛かしこなのゐる〳〵見物いたし。似合はしい所もあらば。足をもとめうと存ずる。（シカ〳〵。皆い時へ云ふ。） アドへ是へ、一段の者が參つた。言葉をかけう。なう〳〵是々。 小アドへ此方の事で御座るか。 アドへ成程そなたの事ぢや。わごりよはどれからどれへお行きやる。小アドへ奉公の望あつて上方へ上る者で御座る。 アドへそれならば抱へうものを。小アドへあのそなたがや。 アドへいやいや身共が抱へるではない。身共が賴うだお方はお大名ぢや。此度新參の者を抱へさせらるゝによつて。肝をいつて出してやらうかと云ふ事ぢや。小アドへそれは忝う御座る。どうぞ肝をいつて出して下され。 アドへして今でもおりやるか。 小アドへ何時でも參りませう。アドへそれならばさあ〳〵おりやれ。 小アドへ心得ました。アドへ扨ふと言葉をかけたに。早速同心めされて此樣な嬉しい事はない。小アドへ袖のふり合せも他生の緣と申す。さぞ深い緣でがな御座らう。 アドへさてそなたの國は何處ぢや。小アドへ坂東方で御座る。 アドへ何も藝はないか。小アドへ弓鞠庖丁碁双六。馬のふせおこし。やつと參つたを致しまする。アドへ扨々萬能に達した人ぢや。 何と秀句はならぬか。 小アドへそれならは得參りますまい。 アドへそれはどうした事ぢや。小アドへまだ參らぬ先からしん苦などと仰せられぬか。ドアへそれはわごりよの聞き樣が惡い。 辛苦ではない。秀句うせ事のやうな事はならぬかと云ふ事ぢや。小アドへ其樣な事は不調法で御座る。 アドへ何と敎へたらばならうか。小アドへ習うてならぬといふ事は御座るまい。 アドかういふも別の事でない。賴うだお方は秀句ずきぢやによつて。秀句を敎へておませうと云ふ事ぢや。小アドへそれは忝う御座る。敎へて下されい。 アドへ先づあれへお行きあつたらば。ゆく〳〵は名をもお付けなされう。すれども。先づ當分は今參りとお呼びなされう。今參り〳〵あれへなりそへ是へなりそへと仰せられたらば。あれへ是へと御諚候へども。お座敷見れば破れ的。とおしやれ。心はと仰せられたらば。射所が候はぬと云うたがよい。是に心がある。惣じてやぶれた的には射所のない物ぢや。わごりよが新參者で。どれにゐようぞ。かしこにゐようぞとうかがうて。破れた的に射所のないは。何と面白うはないか。小アドへ面白さうな事で御座る。 アドへ又重れて。今參り〳〵。早うなりそへ〳〵と仰せられたらば。早う〳〵と御諚候へど。判官殿の思ひ人。とおしやれ。小アドへいや私は思ひ人では御座らぬ。アドへ思ひ人ではなけれども。靜かに參らうと云はう爲にかりておりやる。小アドへ是は面白い事で御座る。 アドへさうさへおしやれば。賴うだお方は秀句好きぢやによつて。きつと奉公がすむ事でおりやる。小アドへかう參るからは。此方を寄り親殿と賴みまする。萬事引廻して下されい。アドへ其段はそつとも氣遣ひをしやるな。小アドへして程は遠う御座るか。 アドへいや。何かと云ふ内に是ぢや。そなたを同道した通りを申上げう程に。暫くそれにお待ちあれ。小アドへ心得ま

した。アドはシテを呼出す。出るも如常。何れも大名狂言同斷。　シテへやれやれ骨折りや。して新參の者を抱へて來たか。アドへ成程抱へて參つて御座る。シテへどれにおいた。アドへ御門前に待たせておきました。シテへア、それ大名といはうものを。アドへ成程お大名と申して御座る。シテへそれはでかいた。惣じて初めある事は終り迄あるといふ。きやつが聞く樣に過を云はう。汝は大勢に答へい。是より太郎冠者を呼ぶ。返事は懸れと云ふ。アドうけて腰掛けさせる。その後のセリフ。文相撲の通り少しも不違なし。　シテへ扨々利根さうな者ぢやなあ。アドへつゝと利根さうな者で御座る。シテへさりながら。人はうち見と違うてずつと不背者がある。きやつが心ばへを目で使うて見う。是へ出よと云へ。アドへ畏まつて御座る。なう〳〵。そなたの心ばへを目で使うて見うと仰せらるゝ。あれへ御出やれ。小アドへ心得ました。アドへかまへて御目の參る方へお行きあれ。小アドへ畏まつて御座る。アドへ新參の者。それより目にて使ふ。色々仕樣あるべし。口傳。シテ笑ふ。　シテへやい〳〵太郎冠者。扨も〳〵利根なやつぢや。身共が目で使へば。ちらり〳〵ウン〳〵。笑ふ。きやつが國は何處ぢや。アド坂東方を云ふ。それよりシテ藝を尋ねる。弓勦庖丁を云ふ。臥せ起したことあり。猫の臥せ起したと云ふ。文相撲の通り同じ。　シテへ中にも得た藝は何ぢやと云うて問うて來い。アドへ其儀も

踏次で尋ねて御座れば。秀句を好くと申しまする。シテへなに秀句を好く。アドへ左樣で御座る。シテへいよ〳〵身に生れ合うたやつぢや。身共が秀句に好けば。きやつも秀句に好くと云ふか。アドへ左樣で御座る。シテへおれへいて云はうには。ゆく〳〵は名をも付けうなれども。まづ當分今參りと呼ばう。さうあれば秀句が聞きたい。是へ出よと云へ。アドへ畏まつて御座る。なう〳〵。行く〳〵は名をもお付けなされうなれども。まづ當分は今參りと御呼びなされうず。秀句が聞きたい。あれへ出よと仰せらるゝ。小アドへ心得ました。アドへ必ず最前のを忘れまいぞ。小アドへ合點で御座る。アドへ今參り。シテへ今參り〳〵。あれへなりそへ是へなりそへ。小アドへあれへこれへと御諚候へど。お座敷を見れば破れ的。シテへ破れ的〳〵。太郎冠者。是は秀句さうな。アドへさやうさうに御座る。シテへ心があらう尋ねて見よう。アドへお尋ねなされませ。シテへ破れ的の心は如何に。小アドへい所が候はぬ。シテへいどころが候はぬ。笑ふ。やい〳〵太郎冠者。汝は知るまい。總じて。破れた的には射所のないものぢや。きやつは新參者で。どれに居ようぞかしこにゐようぞと

思うて。破れた的に射所の無いは出かしをつたなあ。アドへ出かしました。シテへきやつが腹中が腐さうな。もそつと尋ねう。アドへお尋ねなされませ。シテへ今參り〳〵。早うをりそへ〳〵。小アドへ早う〳〵と御諚候へど。判官殿の思ひ人。シテへ又くはいた。笑ふ。思ひ人の心は如何に。小アドへ武藏坊辨慶。シテへしさりをれ〳〵。アドへ何となされました。シテへ今のを聞かぬか。判官殿の思ひ人とぬかしをつたによつて。定めて靜御前の事をかなぬかしたるかと思へば。辨慶。あの色の黑い辨慶といつ判官がお契りあつた事がある。あの樣な者は役にたゝぬ。早う去なせい。アドへ畏まつて御座る。なう〳〵。何故に今の樣な粗相な事をおしやる。小アドへ賴うだお方のお目の内を見ますれば。小鷹のやうにくる〳〵致すによつて。御威勢に恐れて申しそこなうて御座る。重ねてはいか樣にも答へうと仰せられて下されい。アドへ心得た。賴うだお方の御威勢に恐れて申損うて御座る。重ねてはいか樣にも答へうと申しまする。シテへ是は尤もぢや。總じて。大名の前では物の言ひ難いものと聞いた。それならば。きやつがきた烏帽子のなりが面白い。烏帽子に就いて問

はう程に。是へ出よと云へ。アドヘ畏まつて御座る。なう／＼そなたの烏帽子に就いて問はうと仰せらるゝ。あれへお出やれ。小アドヘ心得ました。アドヘ最前の様に粗相をおしやるな。小アドヘ心得ました。シテヘ今参り／＼。今参りが着たる烏帽子はこゝらにも似たる。小アドヘそれはさも候。中に壁を塗りたり。シテヘしさりをれ／＼。まだそれに居るか。アドヘ是は何となされまする。シテヘ去なぜと云ふに間分けのない。きやつが着る烏帽子の體が鎮守祠に似たによつて。中にかみないはうた。など言ふかと思ふたれば。壁を塗つた。あのよせきもない烏帽子の内に。何時造作をして壁を塗つた事がある。あの様な者は役に立たぬ。早ういなせ。アドヘ畏まつて御座る。シテヘこりや／＼。水でも吳れたらば取返していなせ。アドヘ心得ました。これ／＼。一度ならず二度ならず何故粗相な事をおしやる。小アドヘ私が國のならひで。問ふ事も答ゆる事も。左右小拍子にかゝつて申し習うて御座る。あはれ頼うだお方にも小拍子にかゝつてお尋ねなさるゝならば。如何やうにも答へませうと仰せられて下され。アドヘそれは誠か。小アドヘ誠ぢや。アドヘ眞實か小アドヘおんでもない事。アドヘ心得た。申し。かゝらうと申しまする。シテヘ是は何とする。アドヘきやつが國の習ひで。問ふ事もいらゆる事も。左右小拍子にかゝつて申習うて御座る。あはれ頼うだお方にも。小拍子にかゝつてお尋ねなさるゝならば。如何やうにも答へうと申しまする。シテヘそれならばそれと云はいで。よい肝をつぶした。小拍子は身が得物ぢや。きやつが五體の様子を小拍子にかゝつて尋ねう程に。是へ出よといへ。アドヘ畏まつて御座る。なう／＼。そなたの五體の様子を。左右小拍子にかゝつて尋ねうと仰せらるゝ。あれへお出やれ。小アドヘ心得ました。アドヘ今参り。シテヘ今参り／＼。今参りがきたる烏帽子は祠にぞ似たる。小アドヘそれはさも候。ノル。そりやさも候。中に神の候へば。シテヘくはいたりや出かいた。弓矢八幡出かいた。ひたひこそ高けれ。小アドヘ蜂びたひで候もの。シテヘ眉は何故にかがうだ。小アドヘかぎ眉で候もの。シテヘ目こそはくぼけれ。小アドヘすつぼ目で候へば。シテヘ鼻は又高いは。小アドヘかうりやう鼻で候もの。シテヘ耳は何故に薄いぞ。小アドヘ猿の耳で候もの。シテヘ口がくわつと廣いは。小アドヘわに口で候もの。シテヘ胸が又高いは。小アドヘ鳩胸て候もの。シテヘ腰こそは細けれ。小アドヘ蟻腰て候もの。シテヘ臑が細う長いは。小アドヘ蟋蟀臑で候もの。シテヘこの頤がさし出た。小アドヘ槍頤で候もの。二人ヘ槍おとがひで候もの。／＼

是より二人。やりおとがひを云ふ二拍子ふみ。それよりはしりこきして左廻り又。向ひ合ひて。それより右へ廻り。事ありて兩方へとぶ。ホウハイヒウロヒイ。トとめて入るなり。但し。シテは。イヤア。ト留めたるもよし。

伊文字（いもじ）

シテ　通行の者
アド　主人
小アド　太郎冠者
女　（入道具）

アドヘ此邊りの者でござる。某未だ定まる妻がござらぬ。又清水の觀世音は靈現あらたにござる。参詣致し。申し妻を致さうと存ずる。呼出す如常。アドヘそちが知る通り。未だ定まる妻がない。それについて清水の觀世音へ申し妻をせうと思ふが何とあらう。小アドヘ何れ左様の事でなりとも。早う奥様をようけさせられたらばようござりませう。アドヘさり乍

ら斯様の事を廣う沙汰するはいかがぢや。汝一人供をせい。小アドヘ畏まつてござる。アドヘ追付け行かう。さあ／＼來い／＼。シカ／＼。何卒觀世音のお引合せで、似合はしい妻を授けさせらるればよいが。小アドヘ何が扨。信心に御祈誓なされたらば。御利生のないと申す事はござりますまい。アドヘ何かと云ふ内に清水寺ぢや。小アドヘ誠にお參り着きなされてござる。アドヘ先づお前へ向はう。小アドヘ一段とようござりませう。アドヘじやぐわん／＼。拜する。唯今參る事。餘の儀でござらぬ。某未だ定まる妻がござらぬ。何卒觀世音のお蔭を以て。似合はしい妻をお授けなされて下されい。南無觀世音／＼。今宵は是に籠らう。汝もそれにてまどろめ。小アドヘ畏まつてござる。アドヘハア／＼。あら有難や。扨も／＼あらたな御靈夢を蒙つた。ヤイ太郎冠者。暫くすゐめんの内。あらたな御靈夢を蒙つた。西門の一の階(きざはし)に立つたを。汝が妻に定めいとのお事ぢや。小アドヘこれは早速御夢想がござつてお目出度うござる。アドヘいざ西門へ行かう。さあ／＼來い／＼。シカ／＼。何と思ふぞ。此様な事ならばとうにも參ればよかつた物を。油斷であつた。小アドヘ何れ御油斷で

ござりました。トしか／＼の中。女一の松へ出る。アドヘ何かと云ふ内に西門ぢや。其邊りに見えぬが。尋ねて見よ。小アドヘ畏まつてござる。申し／＼あれでござりませう。アドヘさうであらう。小アドヘあれならばあらたな事でござる。アドヘ汝いて問うて來い。小アドヘ畏まつてござる。申し／＼。お立ちなされたは御夢想のお方ではござりませぬか。女うなづく。小アドヘ申し／＼。御夢想のお方かと申してござれば。ウヽと云うて。二人笑ふ。アドヘ扨々嬉しい事かな。追付けお迎ひを進じませうが。お宿はどこもとでござると云うて問へ。小アドヘ畏まつてござる。追付けお迎ひを上げませうが。お宿はどこもとでござる。女ヘ戀しくば。問うても來ませ伊勢の國。伊勢寺もとに住むぞ妾は。小アドヘア、これ／＼。申し／＼。アドヘヤレ太郎冠者。ちやつと留めませい。小アドヘこれはいかな事。ついとござらせられた。さて氣の毒な事ぢや。アドヘ扨々苦々しい。何故に留めなんだ。小アドヘ留めましたれども。ついお歸りなされてござる。アドヘ何とやらおしやつたではなかつたか。小アドヘされば。戀しくば問うても來ませいと迄は覺えましたが。後はぐち／＼と仰せられて。聞えませなんだ。アドヘ扨々氣の毒な事

ぢや。扨これは何としたものであらう。小アドヘ私の存じまするは。これは歌の上の句でござらう。イザ此處に鬮をたてまして。往來の人を留めて。この下の句を繼がせませうが。何とござらう。アドヘこれは一段とよからう。さり乍ら。天下治り目出度い御代に。新鬮はいらぬものではないか。小アドヘイヤこれは烏目を取らぬ歌鬮でござる。苦しうござらぬ。アドヘそれならば急いで鬮を立てい。小アドヘ畏まつてござる。先づお腰を掛けさせられませ。扨御苦勞ながらこれをお持ちなされませ。アドヘ心得た。シテヘ急の使に參る者でござる。誠に。主命と申し乍ら。奉公程辛勞なものはござらぬ。毎日／＼方々をありく事でござる。二人ヘヤア。鬮ぢや／＼。シテヘこれは合點のゆかぬ事ぢや。天下治り太平の御代なれば。國々の鬮も上げさせらるゝ折柄。新鬮を立てるはどうした事ぢや。小アドヘ不審尤もぢや。さり乍ら。これは烏目を取らぬ歌鬮でおりやる。シテヘ先づ安堵した。扨其様子は何とぢや。小アドヘ先づ是にござるは某が賴うだお方ぢや。未だ定まる奥様がないに依つて。此度清水の觀世音へ申し妻をなされたれば。案の如く御夢想の奥様がござつた。お迎ひを

上げませうが。お宿はどこもとでござると問うたれば。戀しくば問うても來ませいと迄は覺えたが。後はぐち〳〵と仰せられてお踊りなされたに依つて聞き殘した。これは歌の上の句さうな。この下の句を繼がせうための關ぢや。繼いで通らしめ。シテへしてその使は誰であつた。小アドへ身共であつた。シテへ使をしたそなたさへ知らぬを、身共が知らう樣がない。其上某は急ぎの使に行く。通さしめ。小アドへ先へは通さぬ。アドへ通すな〳〵」シテ後へ戻らう。小アドへ後へもやらぬ。シテへ下に居よう。小アドへ下にもおかぬ。繼いで通らしめ。シテへ何ぢや。下にもおかぬ。小アドへ中々。シテへ扨々迷惑な所へ來かかつた。扨今のは何とやら云ふ事であつた。小アドへ戀しくば問うても來ませと迄は聞いた。シテへこれはもし伊の字のついた國ではあるまいか。小アドへ左樣な事でもあらうか。シテへそれならば。いの字のついた國を一つ二つ云はう程に。それならそれと答へさしませ。小アドへ心得た。シテへ關をも上げさしめ。小アドへ心得た。シテへ行衞も知らぬ關守に。カホル 仲人するぞをかしき。二人へをかしき。シテへ伊の字のついた國の名〳〵。これより仕方。色々口傳あり。 二人へそれにても候はず。思ひもよらぬ國の名。色々ありて。 シテへ伊の字のついた國ならば。伊勢の國の事かとよ。小アドへそれであつた〳〵。シテへ先づ吟じて見さしめ。小アドへ心得た。二人へ戀しくは、問うても來ませ伊勢の國。伊。引く。又伊でつまつた。シテへ何ぢや。又伊でつまつた。知れた〳〵。其樣に伊を引いてつまるならば。燈心引きの娘であらう。小アド。シイと云ふ。シテ口をふさぐ。 シテへこれはざれ事。今のはふと云ひあてゝ何れもの仕合せ。此後は。後から來る者に繼がさしませ。小アドへ迚もの事に此後も繼いでおくりやれ。シテへそれならば、國には必ず里のつくものぢや。今度は伊の字のついた里を一つ二つ云はう。これもそれならばそれと答へさしませ。二人へ心得た。シテへ思ひもよらぬ里の名。拍子に乘りて。初めの通り。思ひ出す所。色々面白く。市の本と云ふ。それにても候はず。 シテへ神變や。奇特や奇體。不思議の里の名。いろ〳〵ありて。 シテへ伊勢寺もとの事かの。二人へそれであつた〳〵。シテへあら嬉しや。又吟じて見さしめ。二人へ心得た。初めの通り。戀しくは云々とめまで云ふ。 二人へかうであつた〳〵。シテへいかにや〳〵關守。さらば暇申さん。二人へあら名殘惜しや。シテへこなたも名殘惜しけれど。あの日を御らうぜ。二人へ山の端にかゝつた。シテへめい〳〵さらり〳〵と。鞠はまろりと落つるとも。樹は枝にとまつた〳〵。とまり〳〵とまつた。とつしとしイヤしと蹴あげ入るなれ。

入間川（いるまがは）

シテ　大名
アド　太郎冠者
小アド　入間の何某
（入道具）

シテへ遥か遠國の大名。永々在京致す所。訴訟悉く相叶ひ。安堵の御教書頂戴し。過分に新地を拜領し。あまつさへ、お暇迄を下されて。近日本國へ罷下る。此樣な悦ばしい事は御座らぬ。先づのさ者を呼出し。此儀を申聞かせ悦ばせうと存ずる。ト云うて呼出す。大名に同斷。 シテへ念なう早かつた。長々在京致す處。訴訟悉く相叶ひ。安堵の御教書頂戴し。過分に新地を拜領し。あまつさへお暇まで下されて。近日本國へ罷下る。此樣な悦ばしい事はないなあ。アドへ内々斯樣の儀を待ちかねましたに。斯程お目出度い事は御座りますまい。シテへ目出度いなあ。アドへハア。シテへ扨お暇を下された事

ぢやに依つて。早速立たうと思ふが。荷物は何としたものであらう。アドへ兼ねて斯様の事も御座らうと存じて。御荷物ははや先へ下して御座る。シテへそれなれば何時立たうとも儘な。アドへ何時お立ちなされうとも儘で御座る。シテへそれはでかいた。それならば先づその太刀を持て。アドへ畏まつて御座る。お太刀持ちました。シテへ追付け行かう。サア〳〵來い〳〵。アドへハア。シテへさて國許を出づる時は。人あまた連れたれども。不奉公をして手討にした者も有り。又駈落ちをした者も有るに。汝は懇なう勤めたに依つて。國許へ歸つたらば取立てゝとらせうぞ。アドへそれは有難う存じまする。シテへ馬に乗せうぞ〳〵。アドへ猶以て有難う存じまする。シテへさり乍ら。馬に乗る迄は牛に乗れといふ。先づ當分は牛に乗せうぞ。アドへそれはともかくもで御座る。シテへ何ぢや。ともかくもぢや。アドへハア。笑ふ。シテへ是はざれ事ぢや。馬に乗る迄に取立てゝとらせうと云ふ事ぢや。アドへ近頃有難う存じまする。シテへサア〳〵來い〳〵。アドへ畏まつて御座る。シテへヤイ太郎冠者。アドへハア。シテへあの向ふに白う見ゆるは何ぢや。アドへあれは富士さうに御座る。シテへ誠に富士ぢや。ハヽ見事〳〵。三國一の名山を今更ほむるは愚かなれども。どれから見ても見事ぢやなあ。アドへ見事な山で御座る。シテへすれば此處は駿河の國か。アドへ左様で御座る。シテへ千里の行も一歩より起るといふ。首尾よう勤めて下る事ぢやによつて。道はかのゆく事ぢやなあ。アドへその通りで御座る。シテへ國許へももそつとぢや。急げ〳〵。アドへ畏まつて御座る。シテへハア。これは大きな川へ出た。アドへ誠に大きな川へ出ました。シテへ是は上りにも有つた川かいなあ。アドへされば上りもあつた河で御座るか。シテへ折節。上が降つたと見えて。いかう水が濁つてある。誰ぞ人通りが有らば。渡り瀬を尋ねたいものぢや。小アドへ是は入間の何某で御座る。川向ひ急用があつて參る。先づそろ〳〵と參らう。シテへイヤ幸ひあれに人が見ゆる。先づ言葉を掛けう。アドへ一段とよう御座りませう。シテへやい〳〵。河向ひの者にもの問はうやい。小アドへ扨々世に横柄な者が御座る。此方から答へ様が御座る。ヤイ〳〵。こちの事か。何事ぢやヤイ。シテへこちの事か何事ぢやヤイ。太郎冠者。その太刀をおこせ。アドへ何となされまする。シテへ何とては。今のを聞かぬか。アドへ成程承つて御座る。御國許では御前をよう存じて居りますとも。此處は他處で御座るに依つて。存ぜいで申したもので御座らう。言葉を直してお尋ねなされませ。シテへ何と云ふ。國許では身共を知つてゐれども。此處は他所ぢやに依つて。言葉を直して尋ねいと云ふか。アドへ左様で御座る。シテへ是は尤もぢや。それならば言葉を直して尋ねう。アドへそれがよう御座りませう。シテへしし申し。これ〳〵川向ひの御方に物が尋ねたう御座る。小アドへさればこそ言葉を直した。此方からも言葉を直さうと存ずる。しし申し。此方の事で御座るか。何事で御座るぞ。シテへこちの事で御座るか。何事で御座るぞ。笑ふ。やい〳〵太郎冠者。問ひ聲よければいらへ聲よいと云ふが。此方から言葉を直したれば。あの方からも言葉を直しをつた。アドへ左様で御座る。シテへ先づ川の名を問はう。アドへお尋ねなされませ。シテへなう〳〵。此川は何と申す。小アドへ是は入間川で御座る。シテへなに。入間川。小アドへなか〳〵。シテへやい〳〵太郎冠者。入間川ぢやといやい。アドへハア入間川で御座るか。シテへすれば。上

りにも有つた河ぢやなあ。アドへ左樣で御座る　シテへ向ひの在所は。小アドへ入間の在所。シテへかたヽヽの御名字は。小アドへいやも。名も無い者で御座る。シテへいやヽヽ御仁體と見受けた。隱さずともありやうに仰せられい。小アドへそれならば申さう。入間の何某で御座る。シテへ何ぢや。入間の何某殿ぢや。小アドへなかヽヽ。シテへホイ。やいヽヽ太郎冠者。最前言葉あらに言うたこそ道理。入間の何某ぢやといやい。アドへ左樣に申しますか。シテへ渡り瀨を尋ねう。アドへお尋ねなされませ。シテへイヤなうヽヽ。此川はどこもとを渡つてよう御座るぞ。小アドへ以前は此所が渡り瀨で御座つたれども。今は瀨は變つて。拾八丁上が渡り瀨で。此處は深う御座る。シテへ何と仰せらるゝ。以前は此處が渡り瀨であつたれども。今瀨が變つて十八丁上が渡り瀨で。此處は深いと仰せらるゝか。小アドへなかヽヽ。シテへすれば此處は入間川で御座るの。小アドへ成程入間川で御座る。シテへやいヽヽ太郎冠者。渡り瀨が知れた。身拵へをして渡れ。アドへ申し。此處は深いと申しまする。シテへおのれが何を知つて。身共が聞いた事が有る。なうヽヽ。此處は入間川で御座るの。小アドへ入間川で御座れども。此處は深う御座る。シテへ向ふの在所は入間の在所。小アドへなうヽヽ太郎冠者殿。お留めやれいのう。アドへなかヽヽ。あぶなう御座る。シテへかたヽヽは入間の何某殿。アドへ申し。深いと申しまする。シテへア、石がすべるヽヽ。ト云うてこける。二人よりて引上げ。目付柱の側にて。二人ともヽヽシテの身を取りつくらう内。シカヽヽ有るべし。シテ素袍の右の肩をぬぎ。太刀をとる。シテへお直り候へ。成敗致す。小アドへ何となさるゝ。シテへ何とするとは覺えがあらう。小アドへいゝや覺えがないが何となさるゝ。シテへ最前この川の名を問へば。入間川。向ふの在所は入間の在所。其方には入間の何某とは言はぬか。小アドへ何某ぢやに依つて何某と申した。シテへ惣じて。昔から入間樣と云うて。逆言葉を使ふと聞いた。深いと云ふは淺い事ぢやと思うて渡つたれば。諸侍に欲しうもない水をほつてと呉れた。その過怠に。お直り候へ成敗致す。小アドへ扨はこなたには入間樣を御使ひなさるか。シテへおんでもない事。小アドへすれば眞實御成敗なさるゝぢやまで。シテへくどいヽヽ。小アドへとてもの事に御誓言で承らう。シテへ弓矢八幡。打つてすて申す。小アドへヤラ心安や。シテへヤラ心安や。やい太郎冠者。アドへハア。シテへ成敗せうと云へば迷惑にも有りさうなものが。ヤラ心安やと云うて立つたは。どうした事ぢや。アドへ合點の參らぬ事で御座る。シテへ樣子が有らう。尋ねて見よう。アドへお尋ねなされませ。シテへイヤなうなう。成敗せうといはゞ迷惑でありさうなものを。ヤラ心安やと云うてお立つたはどうした事ぢや。小アドへこなたは最前入間樣を使ふと仰せられぬか。シテへいかにも使ひ申す。小アドへすれば眞實御成敗なされうとは。なされまい事ぢやと存じて。ヤラ心安やと申して立つた事で御座る。シテへ何とおしやる。眞實成敗せうと云ふは。成敗せまい事ぢやと思うて。ヤラ心安やと云うてお立ちやつたか。小アドへなかヽヽ。シテへハアン。やいヽヽ太郎冠者。くはしなつた。アドへ出かしました。シテへ道理につまつた。命を助けずばなるまい。アドへお助けなさらずばなりますまい。シテへなうヽヽ。そなたは近頃面目もない人ぢやに依つて。命を助けも致さぬぞ。小アドへ命を助けもなされねば。シテへなされねば。小アドへ忝うも思ひませぬ。シテへ思ひませぬ。笑ふ。やいヽヽ太郎冠者。命を助かつて忝うないと云ふは。アドへ變つた事を申しま

する。シテ〽入間様は變つたものぢやなあ。アド〽左様で御座る。シテ〽イヤなう／＼。是は重代でなけれども。そなたにやりも致さぬぞ。小アド〽重代でも御座らぬお太刀を。シテ〽お太刀を。小アド〽下されもなされれば。シテ〽なされれば。小アド〽有難うも存ぜぬ。シテ〽やい／＼。物を貰うて有難うないと云ふは。アド〽左様に申しまする。シテ〽入間様は面白いものぢやなあ。アド〽面白い物で御座る。シテ〽これ／＼。これは業よしてはなけれども。そなたに進じもせぬぞ。小アド〽わざよしては御座らぬお太刀を。シテ〽お太刀を。小アド〽拜領も致さねば。シテ〽それ／＼。小アド〽過分にも御座らぬ。シテ吟じ笑ふ。そなたなう／＼。是は京折てはなけれども。小アド〽是は結構にも御座らぬお扇を。シテ〽フウ。小アド〽下されもなされれば。シテ〽なされれば。小アド〽大慶にも御座らぬ。シテ〽又くはいた。笑ふ。やい／＼太郎冠者。そちもなんぞやつて。入間様を聞かぬかいやい。アド〽私は何もやらう物が御座らぬ。シテ〽何ぢや。やる物がない。アド〽ハア。シテ〽苦々しい事ぢや。何ぞもそつとやつて入間様が聞きたいものぢやが。イヤ是をぬがせ。アド〽是は御無用になされませ。シテ〽おのれが何をしつて。この面白い入間様を聞かずにいらるゝものか。早うぬがせ。アド〽よしになされませいで。シテ〽これ／＼。是もやらぬぞ。小アド〽嬉しう御座らぬ。シテ〽御座らぬ／＼。笑ふ。小アド〽一段の仕合せぢや。すかさうと存ずる。シテ〽イヤなう／＼これ／＼。小アド〽ヤア。シテ〽一寸お戻りやんな。小アド〽何で御座らぬ。シテ〽ハテまあ一寸お戻りやんな。小アド〽何で御座らぬぞいのう。シテ〽最前から色々の物をやつたが。嬉しいか嬉しうないか。小アド〽嬉しう御座らぬ。シテ〽それは入間様。眞實嬉しいか嬉しうないか。小アド〽眞實嬉しう御座らぬ。シテ〽ハテ氣の毒な。今迄は入間様。その入間様をさらりとのけて。上方様で。眞實嬉しいか嬉しうないかと云ふ事ぢや。小アド〽此處は聞き所で御座る。今迄は入間様。その入間様をさらりとのけて。シテ〽それ／＼。小アド〽上方様で眞實嬉しいか嬉しうないかと仰せらるゝか。シテ〽其通りぢや。小アド〽何が扨。此様な結構なお小袖上下太刀かたな。お扇まで下されて。忝うないと申す事が御座らうか。生々世々身にあまつて忝う御座る。シテ〽何ぢや。生々世々身にあまつて忝い。小アド〽なか／＼。シテ〽それは誠か。小アド〽誠ぢや。シテ〽眞實か。小アド〽おんでもない事。シテ〽なう。その入間様をおのきやれと云ふは。おのきやるなと云ふ事ぢや。眞實嬉しいとおしやるか。誠ならば嬉しうないもので有らう。それはこちへおこさしめ。小アド〽やい／＼。それは身共が貰うたのぢや。シテ〽是がほしいか。小アド〽こちへおこせ。シテ〽ならぬぞ／＼。小アド〽あの横着者。やるまいぞ／＼。ト云うて追込みなり。

以呂波（いろは）

シテ　子
アド　父

アド〽これは此邊りの者で御座る。悴もやう／＼成人致したによつて。寺へ上せて手習なさせうと存ずる。かなほふしあるか。シテ〽ハア。アド〽居たか。シテ〽お前に。アド〽念なう早かつた。そちもやう／＼成人したによつて。寺へ上せて手習をさせうと思ふが何とあらう。シテ〽それは兎も角もで御座る。アド〽寺へやると云うて別の事ではない。白い黑

いと知る筈ばかりぢや。シテ〽白い黒いを知る筈の事ならば、京へは無用で御座る。アド〽扨は白い黒いを知つてゐるか。シテ〽成程存じて居りまする。アド〽白いは何ぢや。シテ〽鷺。アド〽黒いは。シテ〽烏。アド〽扨々むさとした事を云ふ。白い黒いを知ると云ふは。例へば白い紙に黒う文字を書いて。それを讀みあきらむを。白い黒いを知ると云ふ。爰に高野の弘法の作りおかれた四十八字のいろはがある。是を知つてゐるか。シテ〽何と仰せらるゝ。高野の小六が四十八になると仰せらるゝか。アド〽いやさうではない。高野の弘法の作りおかれた四十八字のいろはがある。それを教へてやらうといふ事ぢや。シテ〽それは忝う御座る。教へて下され。アド〽寺へ行くと云うても。いろは程の事を知らいではなるまい。まづ讀みから教へうものといふ事ぢや。いろはにほへとちりぬるをわかやまけふこえてゑひもせず京と云ふ事ぢや。シテ〽其樣に立板に水を流すやうに仰せられては覺えられませぬ。年寄の坂を登るやうに、ほくり〳〵と一字づつ教へて下され。アド〽是はいかな事。年寄の坂を登るを見た事もあるまいに利根な事を云ふ。それならば一字づつ教へてやらう。い。シテ〽とうしん。アド〽それはどうした事ぢや。シテ〽蘭を引けば燈心が出るによつて申して御座る。アド〽何時蘭を引いて燈心の出るを見た事もあるまいに賢い事を申す。智慧のつく時分はつくもので御座る。ろ。シテ〽かい。アド〽是又どうした事ぢや。シテ〽舟に艪があれば。櫂も御座るによつて申して御座る。アド〽何時旅をして舟に乗つた事もあるまいに艪櫂の穿鑿をする。所詮一字づつ教へるによつてぢや。一字づつ教へう。ちり。シテ〽掃き集めて火にくべう。アド〽それはどうした事ぢや。シテ〽いつもお座敷に塵があれば。ヤイかなほふし。おのれが目に見えぬか。掃き集めて火にくべい、と仰せらるゝによつて申して御座る。アド〽それは走り智慧と云うて役に立たぬ。其樣な事では寺朋輩の仲も惡うなる。惣じて物を習ふと云ふは。師匠の口寫しを云ふものぢや。シテ〽さてはおまへの口寫しを云へばよう御座るか。アド〽成程その通りぢや。シテ〽心得ました。アド〽それならば一下りづつ教へう。いろはにほへと。シテ〽いろはにほへと。アド〽ちりぬるをわか。シテ〽ちりぬるをわか。アド〽やまけふこえて。シテ〽やまけふこえて。アド〽ゑひもせず京と讀め。シテ〽ゑひもせず京と讀め。アド〽いや只京とばかり。シテ〽いや只京とばかり。アド〽京とよめとはおのれが事ぢや。シテ〽京とよめとはおのれが事ぢや。アド〽親を罵うでおのれと云ふ。魚にならうぞよ。シテ〽親を罵うでおのれと云ふ。魚にならうぞよ。アド〽爰なやつに物を云はせておけば方量がない。おのれ。シテ〽爰なやつに物を云はせておけば方量がない。おのれ。アド〽斯樣なやつは斯うしておいたがよい。シテ〽斯樣なやつは斯うしておいたがよい。アド〽親を此樣にして將來がようあるまいぞ。やるまいぞ〳〵。(ト云う。)シテ〽やるまいぞ〳〵。(シテより先に入る。)

【う】

鶯（うぐひす）

シテ　梅若殿の家来
アド　所の者
（入道具）

アド〽此の邊りの者で御座る。此の中世間に小鳥のはやるは夥しい事で御座る。某も枠

の時分から小鳥に好いて。様々の鳥を飼うて御座る。又此の鶯は子飼で。凡そ雙びない鳥かと存ずる。今日は野邊へ持參致し囀らせうと存ずる。シカ〳〵。誠に。我等ごときの小鳥好きが致すと申せば。似合はぬ様に御座れ共。斯様に子飼を致して上々へ進上致せば。大分の値を下さるゝに依つて。一向渡世の爲に致す事で御座る。何かと云ふうちに野に參つた。先づ此の處に置いて鳴かせうと存ずる。シテへ大内に隱れもない。梅若殿と申す人の御内の者で御座る。此の中世間に小鳥のはやるは夥しい事で御座る。又頼うだ梅若殿と申すは。他の鳥はさのみ好かせられぬが。鶯とさへ申せば。善惡にかまはず欲しがらるゝに依つて。方々から鶯を上る事で御座る。身共も上りたう存ずれ共。金銀を出して求むる事はならず。又さる者が申すには。野邊へ出て荒鳥をさせと申して。此のさし棹を貸して御座る。今日は野邊へ出て。ねらうて見うと存ずる。シカ〳〵。誠に。身どもは終にいなごを一疋さいた事は御座らねども。野邊には足の弱い鳥があるものぢや。其の様な鳥はさしつけぬ者でもさせるものぢやと。彼の人が申さるゝ。あはれその様な鳥に出會ひたう存ずる事ぢや。何かと云ふうちに野ぢや。扨も〳〵春の野の景色は青々として面白い事ぢや。ヤアよい鶯の聲が聞ゆる。此の邊に數も無し。木立も無いが。エイあれに籠に入つた鳥が有る。扨も〳〵よい鳥の。何として是處に有る事ぢや知らぬ迄。おとりに置いたか。邊りに人も無い。幸ひの事ぢや。さらば取つて歸らう。アドへなう〳〵是はどこへ取つてお行きやる。シテへ拾うて參る。アドへ主のある鳥を拾ふと云ふ事があるものか。シテへ身共はまた離れて來たかと思うて。アドへ籠に入れて離れて來るものか。シテへ籠共に離れて來たも知つてこそ。アドへ扨々むさとした事を云ふ人ぢや。籠に入れて離れ來ると云ふ事があるものか。シテへ是れはされ事。何を隱さう。身共は去る少人の御内の者ぢや。鶯に好かせられて。様々の鳥を大分にお求めなさるゝ。身共も上らうと思へども。似合はしい鳥がない。又さる者が野邊へ出て。荒鳥をさせと云うて棹を貸したさりながら。身共は終にいなごを一疋さした事がないと云うたれば。彼の人が云ふには。野邊には必ず足弱い巣立などがあるものぢやと云うたに依つて。若し其の様な鳥もあらうかと思うて。此の邊へ出たれば。此の鳥があつたに依つて。若し主のない鳥かと思うて。手をさしておりやる。近頃云兼ねたれども。あはれ身共にたもるまいか。アドへ成程やりたい物なれども。これには身共が命諸共と祕藏する鳥ぢやに依つて。唯やる事はならぬ。シテへたゞとおしやる所が聞き所なれども。折節持合はせがない。是はきやしやどくぢや。又どこでなりとも逢うた時にやらう程に。先づくれさしめ。アドへ和御寮も了簡が惡い。持合はせが無くば。其の一腰でも出して。是に替へてくれいなどとおしやつてこそ。きやしやどくなれ。人の物を唯くれいとおしやるは。きやしやどくではあるまい。シテへ成程尤もなれども諸侍の一腰が。何とはなさるゝ物ぢや。アドへイヤとかく鳥は身共の物。腰の物はそなたの。どうなりともおぬしの勝手に召され。シテへはて苦々しい。イヤそれならば勝負に致さう。アドへ勝負とは。シテへ此の棹で其の鳥をさゝう。さしおほせたらば鶯を取らう。得さゝずば此の刀をおぬしにやらう。アドへ扨々むさとした事を云ふ人ぢや。籠に入つた鳥のさゝれぬと云ふ事があるものか。シテへいや最前も云ふ通り。身共は終にいなごを一疋さした事がないに依つて。得さゝすまいも知れぬ。其の上それ

が勝負ぢや。とかく是は了簡をして。どうあらうともさせてたもれ。アドへ扨々不承な事を云ひかけられた。其の樣におしやる程に。是非に及ばぬ。さゝせう程に先づその刀を出さしめ。シテへ心得た。さらばさすぞ。ホイ。アドへそりやはづれた。シテへ扨も／＼口惜しい。も一度さゝう。アドへ今度の賭物は。シテへはて後で何なりともやらう。アドへいかな／＼。賭物を見ねばならぬ。シテへ是非に及ばぬ。是は賴うだ人から預つてある太刀なれども。之をかけう。アドへ何なりとも出さしめ。シテへ大事の勝負ぢや。とつくりともちなをさう。扨々無念な。今少しの事でさし損うた。仕樣口傳。さらばさすぞ。アドへこれ／＼。走りかゝると云ふ事があるものか。初めの所からさゝしめ。シテへはてかたい事を云ふ人ぢや。さあさすぞ。アドへあゝこれ／＼。其の樣に飛ぶと云ふ事があるものか。シテへはてどうして。さいたら大事か。アドへはてさて正直に召され。シテへむつかしい事を云ふ。さらばさすぞ。南無三寶。アドへまた外れた。シテへ口惜しい。どれ／＼。も一度さゝう。アドへ今度の賭物は。シテへこの一度はそへに召され。アドへいや／＼。そへと云ふ事は無い。此の鳥は身共が祕藏の鳥ぢや程に。さゝせずともとつて歸らう。シテへそれはむごい事ぢや。了簡しても一度さゝせてたもれ。アドへいかな／＼。思ひも寄らぬ事ぢや。シテへそれならば。かけ物を出すわいやい。アドへならぬぞ／＼。シテへこれ／＼先づお戻りやれ。扨々氣短い男かな。エヽ由ない事にかゝつて太刀も刀も取られた。はあ是れに就いてさる事を思ひ出した。語 大和の國當麻の寺に梅若殿と申す少人のありしが。かたち人に勝れ美しくましませば。師匠の情色にあらはれ。賞翫類なかりしが。定めなき世の習ひ。老少以て選はねば。かの兒十六歲の春の頃。身空しくなし給ふ。師匠の情一山の愁歎。是に過ぎたる事なし。或時かの少人鶯と化して。其の寺の軒端にありし梅枝に飛び來り。一首の歌を詠み給ふ。初春の。朝夕毎には來れども。逢はでぞ歸る本の住家にと。此の歌を詠じ。師匠の坊に手向けられければ。皆人なほも憐れさのあまり。涙の露袖にあまる。某はそれには違うて。梅若殿故に一せきをとられ涙を流す。あはれ此方の梅若殿は。鶯にこそならずとも。せめて雀になりともなつて。太刀刀の戻る樣な歌があらば。詠うでもらひたい。扨々思へば／＼うつけた事をした事かな。正直の腰折れとは。身共が有樣ぢや。さらば身共も一首つらねて罷歸らう。初春の。太刀も刀も鶯も。さゝでぞ歸る本の住家に。エヽしないたり／＼。とかく此の棹故ぢや。あら腹立ちや。なう腹立ちや。（ト云うて棹折り入る。）

牛盜人

シテ　兵庫三郎
アド　鳥羽の離宮の牛奉行
子　兵庫三郎の子
太郎冠者
次郎冠者

（入道具）

アドへそも／＼これは鳥羽の離宮の。牛奉行で御座る。扨も法皇御幸の御時御車を引く牛を。某預かり牛部屋を立てゝ。番人をさし置き晝夜守護致す所に。此の中雨の夜に盜賊の仕業と見えて。かの御預かりの牛が失せて御座る。隣郷は申すに及ばず。山々谷々まで。草を分かつて詮議致せども。知れぬ。公卿大臣御詮議の上。此の牛盜人を訴人致せば。同類たりとも其の科を許し。褒美

は何なりとも其の者の願ひを御叶へなされうとの事で御座る。先づ此の由を高札に打たう。ト言うてアド柱に高札を打つ事常の如し。汝等を呼出す別の事でない。かの牛盗人の在所が知れぬに依つて高札を打つた。高札の表に就いて牛盗人の訴人来らば、早々此方へ知らせ。二人へ畏まつて御座る。ト言う二つ三つある。受ける事常の如し。子へ此の邊りの者で御座る。鳥羽の離宮の牛盗人を訴人致さば、同類たりとも其の科を許し、其の者の願ひを御叶へなされうとの御事で御座る。某存じて御座るに依つて。訴人に出うと存ずる。シカ〳〵。誠に。人の科を訴人致すと申すは。不心得な事で御座れども。身に代へて大切な願ひが御座るに依つて。訴人に参る事で御座る。何かと言ふうちに是ぢや。ト言うて。案内する。太郎冠者出る。子へ牛盗人の訴人で御座る。其の由仰せられて下されい。太郎冠者へ其の由申上げう。暫くそれに待ちませ。子へ畏まつて御座る。太郎へ申上げまする。牛盗人の訴人と申して。幼い者が参つて御座る。アドへ何ぢや。牛盗人の訴人ぢやと言うて。幼い者が参つたと言ふか。太郎へさ様で御座る。アドへ急いで是へ出せ。太郎へ畏まつて御座る。さあ〳〵あれへ出ませい。子へ心得ました。太郎へ此の者で御座る。アドへ牛盗人の訴人と言ふは汝か。子へ成程私で御座る。アドへさて其の牛は誰が盗んだぞ。子へ隣在所の兵庫三郎と申す者が盗取つて。他郷の市へ引いていて賣つて御座る。アドへしてそれには何ぞ確かな證據が有るか。子へ證據までには及びませぬ。對決の上で白狀致させませう。三郎を召出されまして。アドへ是は確かな證據ぢや。やい〳〵。何にもせよ此の者を傍らへ寄せて置け。太郎へ畏まつて御座る。太郎へさあ〳〵。是に寄つて居さしめ。アドへやい〳〵。次郎冠者も呼べ。次郎へ畏まつて御座る。次郎冠者召すは。次郎へ何ぢや。召すと言ふか。太郎へ早うお出でやれ。次郎へ心得た。次郎冠者お前に。アドへさて汝等は隣在所の兵庫三郎と言ふ者を知つて居るか。太郎へ私は家は存じて居まするが。面は存じませぬ。アドへ次郎冠者は何とぢや。次郎へ私は家も面も存じませぬ。アドへ何もせう隣在所へ行て兵庫三郎を召捕つて來い。二人へ畏まつて御座る。アドへ人違ひでも苦しう無い。異議に及ばず搦捕つて來い。二人へ畏まつて御座る。アドへ急げ〳〵。二人へはあ。太郎へ何とこれは一大事の事を御附けられたではないか。次郎へ其の通りぢや。太郎へ先ず捕

縄の用意なおしやれ。太郎へ心得た。捕縄の用意頁うおりやる。太郎へ追付け行かう。さあ／＼おりやれ。太郎へ心得た。シカ／＼。太郎へさてあの兵庫三郎はのうと心得た者おつと聞いたが、何として捕つたものであらう。太郎へさらば行かうか宜からうぞ。太郎へとかく隔すに手はないぢや。だまし捕りにせう程に。ぬからしますな。太郎へ心得た。太郎へ何かと言ふうちに是ぢや。身共は案内をこうて引出さう程に。汝はそれにかゞうで居て。無體に縄を掛けまいぞ。太郎へ心得た。太郎へ物まう。案内もう。兵庫三郎内にお居やるか。シテへ表に案内がある。あら不思議や。俄に雲の氣色が變つた。在の上どうやら胸騒ぎがする。案内とは誰そ。太郎へ兵庫三郎とは其方か。シテへ成程。兵庫三郎は身共ぢや。其方にどれからわせた。太郎へ一寸頼みたい事がある。是へ出ておくりやれ。シテへ心得た。身共に頼みたいとは何事でおりやる。太郎へ別の事でもない。太郎へ捕つたぞ。シテへ何とする。太郎へ捕つたぞ。シテへ何とし居る。己れは憎い奴の。太郎へ捕つたぞ。シテへこりや何とする。太郎へきつと縛れ／＼。太郎へ心得た／＼。シテへやあら汝等は無體に縄を掛けて何とする。太郎へ鳥羽の離宮の牛を行よりのお召ぢや。立ちませい。シテへそれに人違ひであらうぞよ。太郎へ人違ひでも苦しうないとの御事ぢや。行け／＼。シカ／＼。シテへ身共は行く分は苦しうないが。後で汝等が迷惑をせうと思へば、それが氣の毒ぢや。太郎へそれは汝が構ふ事ではない。さあ／＼行け／＼。太郎へ何かと言ふうちに是ぢや。此の由申上げう程に。そなたは縄を捺へてお居やれ。太郎へ心得た。太郎へ申上げまする。アドへ何事ぢや。太郎へ兵庫三郎を召捕つて參つて御座る。アドへなに兵庫三郎を召捕つて來た。太郎へ左樣で御座る。アドへそれは出かした。急いで是へ引出せ。太郎へ畏つて御座る。さあ／＼おれへ出ませい。此の者で御座る。アドへ兵庫三郎と言ふは汝か。シテへ成程。兵庫三郎と申すは私で御座る。アドへ己れは憎い奴の。御前かりの牛を盗取つたなあ。シテへはあ。さては最前の捕手衆の向はれたは。此の牛盗人の御詮議でよな。アドへおんでもない事。シテへ身に取つて覺え御座らぬ。アドへあのまざ／＼しい面な見よ。己れ何程陳じたりとも。これには確かな證據が有るぞ。シテへ證據の有らう樣が御座らぬ。身に取つて覺え御座らぬ。アドへまだぬかし居る。やい／＼。最前の幼い者なこれへ出せ。太郎へ畏つて御座る。さあ／＼あれへお出でやれ。子へ心得ました。シテへやあ。牛盗人の訴人と仰せらるゝは此の子で御座るか。アドへなか／＼。シテへあの此の子がや。アドへおんでも無い事。シテへはあ。子へなう／＼兵庫三郎。身共が訴人に出るからは遁れは有るまい。白状めされ。アドへやい／＼汝はおれへ近附きさうに言ふが。そちが爲には何ぢや。子へ親で御座る。アドへやあ親か。子へ子として親の科を訴人に出るからは。遁れは有るまい。白状めされ。シテへあゝ是程までに天命に盡き果つるものか。何な隱しませう。お預りの牛を私が盗取つて御座る。アドへそりや知れた。さうもおりやるまいものを。縄が緩い。きつとしめ上げ。太郎へ畏まつて御座る。シテへやい其處な人でなしめ。己れは如何なる天魔が見入りたれば。子として親の科を訴人には出をつたぞいやい。其の根性とは知らず。己れが生まれた時は。やれ三郎はうひの子に男を設けた果報者よ。あやかり者よと。人にそやされて。夫婦の者が夜も日も寝ずに己れを抱きかかへて育

て上げ。二つ三つにもなつたらば。髪もしよぼ〳〵生へ。四つ五つにもなつたらば。牛にも馬にも踏まれ居るまい。七つ八つ十にもなつたらば。寺へ登せて手習をさせうぞ。己れ十五に成り居つたらば元服をさせ。地頭殿へ連れて行て。名代をも勤めさせ。末では己れにかゝらうと思うて。夫婦の者は年の寄るも構はず。己れが成人を待つたかひも無い。何處にお親の科を訴人に出ると言ふ様な不心得な事が有るものか。己れは子では無い。佗ぢやわいやい〳〵。泣く。アドへやい〳〵。やい其處な奴。扨々己れはうつけた事をぬかし居る。何のあの幼い者に科が有るものぢや。己れがお身を恨み居つたが良い。してお預りの牛を盗んで何にした。シテへされはの事で御座る。當年は親の年忌に當つて御座れども。身上不如意に御座つて。此の法事を勤めう手だてが御座らぬ。それ故お預りの牛を盗取り。他郷の市へ牽いて行て賣り。其の代りを以て親の追善を勤めて御座る。アドへまだ其のつれをぬかし居る。牛を盗んで親を弔うたと言うて。何の孝養に成らう事は。シテへ殺生偸盗。邪淫妄語飲酒戒。是れ皆佛の誡めなり。佛出世の御時。しやうしん比丘とて貧賤第一

なる御弟子の有りしが。親の追善あらんと御せられども御心に叶はず。或る所にて牛を一匹盗み取り。盗みたる牛を賣らうといへば。勿體なし。ただ賣らうと言へば妄語戒を破る。取らばやと思召し。やがて深山に分け入り。諸木に妄語戒を授け。布施に取りたる牛賣らうと宣へば。市人出で會ひ布に代ふる。やがて御僧を供養し。彼布を布施に參らする。布施とは布を施すと。書きたるも此の理なり。佛弟子の御身にさへ。牛を盗んで親の追善をし給ふ。況や凡夫の某が牛を盗んで親を弔ふ事。何の科にかなり候ふべき。アドへ盗みする程の奴なれども。小賢しい事を言ふ。さりながら。綸言出でて再び反らず。科の輕重は追つての事。先づ此の者を獄屋へ引立てい。太郎へ畏まつて御座る。子へ先づお待ちなされませ。アドへ何と待てとは。子へ私に褒美を下されい。アドへ誠に。牛盗人の詮議にかゝつて褒美の沙汰を忘れた。さあ褒美をやらうが錢が欲しいか。但し俵でもやらうか。子へいゝや其の様な物は欲しうは御座らぬ。三郎の命を助けて私へ下されい。アドへそれはならぬ。あれは大事の科人ぢやに依つて。獄屋へ入れねばならぬ。何なりとも外の事を願へ。叶へ

で取らせるぞ。子へ扨は勅にも僞りが御座るか。この牛盗人の訴人致せば。同類たりとも其の科を許し。褒美は何なりとも其の者の願ひをお叶へなされうとの事で御座らぬか。アドへ如何にも其の通りぢや。子へもし餘の者が訴人致せば。三郎が命は御座るまい。親の命が助けたさに。子として訴人に出ました。三郎が命を助ける事が成りませずは。私共に御成敗なされて下されい。ト言うて泣く。シテも泣く。シテへやいかな法師。そちは神か佛かいやい。其の様な心入れとは知らいで。最前からの雜言惡口。耐へてくれい。こりや手を合せて拜みたけれども。縄目の恥に及うで居れば。手を合はす事さへならぬわいやい。ト言うて泣く。アドも泣く。アドへ扨不便な事ぢやなあ。太郎へさ様で御座る。アドへよく〳〵物を案ずるに。物の憐れを知らざるは。唯木石に異ならず。其の上慈悲は神よりくだると言へば。科有りとても親子の者。早や助くるぞ三郎と。二人へ畏まつて御座る。シテへ座の下より引立てゝ。地へ命助かる親と子は。嬉しさもなか〳〵に。思はぬ程の心かな。かくて伴ひ立歸り〳〵。親子の契り盡きせずとこしへ。富貴の家と成りにけり。げに有難き孝行の威徳ぞ目出度かりける〳〵。

歌爭（うたあらそひ）

シテ　所の者
アド　同上

アドへ此の邊りの者で御座る。今日は長閑な天氣で御座るによつて。野遊びに參らうと存ずる。又爰に心安う致す人が御座る。これを誘うて參らうと存ずる。先づ急いで參らう。誠に。內に御座ればよう御座るが。內にさへ御座つたならば。某が申す事ぢやによつて。御出でなさるゝであらう。いや何かと云ふうちには早是ぢや。（トいうて。案內まで常の如し。）シテへエイ爰な何と思うて御出でなされた。アドへ今日は長閑な天氣で御座るによつて。野遊びに參らうと存じて。お誘ひに參りました。何とこなたにはお出でなされませぬか。シテへ幸ひけふは閑で居りまする。成程御供致しませう。アドへそれならばいざお出でなされ。シテへ先づお待ちなされ。ちとお目に掛けたい物が御座る。先づかうお通りなされい。アドへ心得ました。入違ふ。シテへさら/\。（トいうて。戶をあける。）アドへはあ。これは庭を作らせられましたか。シテへ此の中庭を作りました。アドへ扨々これは綺麗な庭で御座る。シテへ何とお氣に入りましたか。アドへいや。お物好きとかう申された事では御座らぬ。シテへいや左樣にも御座らぬ。アドへはあ向うの花壇にあかう芽を出したは何で御座るぞ。シテへあれは芍藥で御座る。アドへ扨々心地よう芽を出しました。定めて一花の時分は見事で御座らう。シテへ恐らく見事で御座る。アドへちとお知らせなされい。身共に參りませう。シテへ畏つた程お知らせ申さう。さりながら。花は綺麗に御座れども。昔から歌に御座らぬ。アドへいや歌に御座るぞや。シテへ芍藥の歌は終に承りませぬ。アドへそれは王仁の歌に。難波津に芍藥の花ぞこもり今を春べとしやくやくの花と御座る。シテへ何かどうだやらとしやる。（前の歌をたい言で）シテへ何だやら。しやくやく。アドへなか/\。シテへ芍藥/\（トいうて笑ふ）アドへアヽこれ/\。身共が歌を吟ずれば。なぜにさう笑はつしやるぞ。こなたの分として。王仁の歌を笑ふ事はなりますまいぞや。シテへ如何な/\。王仁の歌を笑ひは致さぬ。こなたの吟じやうが惡う御座る。アドへ何で惡う御座る。シテへ王仁の歌は。難波津に。咲くや此の花冬ごもり。今を春べと咲くやこの花。とこそあれ。どこにかこなたの樣に。芍藥/\。（笑ふ）アドへ身共は野遊びのお誘ひにこそ參れ。歌爭には參らぬ。最早かう行くぞ。シテへあゝこれ/\。身共もお供致しませう。アドへこなたにもお出でなさるか。シテへなか/\。アドへそれならばいざお出でなされ。シテへ心得ました。さて只今は御心安さのまゝ。ふと聊爾を申して御座る。必ず氣にかけて下さるな。アドへ何がさて。身共とこなたとの間で。氣にかけるのかけぬのと申す事は御座らぬ。シテへそれならば安堵致いて御座る。アドへ何かと云ふうちに野へ來ました。シテへ誠に野へ出ました。アドへあゝ春の野の氣色は何々として面白い事では御座らぬか。シテへいづれ此の樣な事を存じては。內にうか/\として居よう事では御座らぬ。是はつく/\しが御座る。アドへ誠に大きな土筆が御座る。シテへそこにもある。ふませらるゝな。アドへ心得ました。あゝそなたの足元にもある。踏ませらるゝな。シテへ心得ました。（トいうて二人ながら）シテへちと摘むで宿への土産にしませうか。アドへ是は一段とよう御座りませう。シテへさりながら。ただ摘むも如何ぢや。何ぞ云捨ての樣な事を申して摘みませうか。アドへ是

はなほふう御座りませう。シテ〽先づ案じて見させられい。アド〽心得ました。シテ〽何と御座らうぞ。アド〽何と御座らうぞ。シテかうも御座らうか。アド〽はや出ましたか。シテ〽先づ申して見ませう。アド〽何とで御座る。シテ〽春の野に。土筆しほれてぐんなり。〽シテなアド。シテの通り吟ず。アド〽何ぢやっぐんなりか〳〵。アド〽ぐんなり〳〵。笑ふ。シテ〽やあこれ〳〵。身共が歌をなかしさうに笑はつしやるが。此のぐんなりと云ふ事が。歌の留めにないと思はつしやるか。アド〽なんぼうの歌も聞いたが。ぐんなりと云ふ歌の留めはっ今が聞き始めぢやっぐんなり〳〵。ト云うて笑ふ。シテ〽それ慈鎮和尚の歌に。我が戀は。松を時雨の染めかねて。眞葛ヶ原に風さわぐんなりとあるは。アド〽又くはいた。シテ〽あゝこれ〳〵。身共が歌を笑はつしやるは苦しうないが。こなたの分として。慈鎮和尚の歌を笑ふ事は成りますまいぞや。アド〽如何な〳〵。慈鎮和尚の歌を笑ひは致さぬ。こなたの吟じやうが悪う御座る。シテ〽何と悪う御座る。アド〽慈鎮和尚の歌は。我が戀は。松を時雨の染めかねて。眞葛が原に風さわぐなり。とこそあれ。どこにかこなたの様にぐんなり〳〵。ト云うて笑ふ。シテ〽なう〳〵。なうそこな人。アド〽何ぢや。シテ〽總じて。人の身の上にはをかしい事がなうて叶はぬ。こなたの身の上には是よりまだをかしい事がある程に。其の様に笑ふものではおりない。アド〽いや身共が身の上になんぼうをかしい事があるか知らぬが。身共は此のぐんなり程をかしい事はない。ト云うて笑ふ。シテ〽云うたらば恥でおらうぞ。アド〽恥になる事は持たぬ。あらばおしやれ。シテ〽さらば申さう。それいつぞや月の夜。川原に相撲のあつたを覺えておゐやるか。アド〽それが爰へ出る事か。シテ〽先づお聞きあれ。身共も見物にいたれば。東の方屋から小男が出て。西の方を取りほした。最早あの相撲につゞく相撲はあるまいと。座中評判で有つた所へ。裸に成つてによろ〳〵出るを誰ぞと思うたら。おぬしではなかつたか。アド〽身共で有つたが。それが何とした。シテ〽先づお聞きあれ。あれは慥に誰殿ぢや。迚もあの相撲には成るまいに。置かれいでと思うて。相撲も立つ方と。手に汁を握つてぢつと見物して居たらば。案の如くヤット手合せをするといなや。彼の小男は手取りなり。わごりよの小腕をむずと捉へ。小股にあげて。見えたかと云うたらば。わごりよは上げられて居ながら。まだ見えぬとおしやつた所を。引ばづし。大地へズデイどうと打投げられて。笑ふ。そこでこなたは腰の骨を打折るか。膝の皿なすりむいたか。ちんばを引き〳〵かた屋の内へっ爰ちと御免なれ〳〵と云うて。おはいりやつた顔を今思ひ出せば。笑ふ。アド〽總じて。相撲は勝つもならひ負くるもならひぢやが。其時の身共が相撲に負けたがそれ程をかしいか。シテ〽それ〳〵其の様に腹をお立ちやる其の顔が。其の時相撲にお負けやつた顔に其の儘ぢや。アド〽扨は爰へ出る事でもない事ないひ出すからは。身共と相撲が望みか。シテ〽如何な〳〵。相撲は望みおりない。アド〽望みさうな。一番參らう。シテ〽いやぢやわいや〳〵。いや〳〵。ト云うて。アドシテの足を取つてこかす。シテ〽やい〳〵。やいそこなやつ。アド〽何ぢや。シテ〽相撲は一番で勝負が知れぬ。も一度戻つて勝負をせいやい。アド〽ならんぞ〳〵。ト云うて。追込み入るなり。

内沙汰（うちざた）

シテ　百姓右近

アド　妾

（入道具）

シテへ當所に住居致す右近と申す百姓でござる。内々の伊勢講が成就して。近日參宮を致す。それに就いて女共を呼出し。談合致す事がござる。なう〳〵これの人。居さしますか。お居やるか。女へ今めかしや〳〵。妾を呼ばせらるゝは何事でござる。シテへちと相談する事がある。先づかう通つておくりやれ。女へ心得ました。それは心許ない事でござる。先づ何事でござる。シテへ別に心許ない事ではない。内々の伊勢講が成就して近日參宮するが。何と目出度い事ではないか。女へ扨々それは目出度い事でござるのう。シテへそなたも連れて參らうぞ。女へそれは忝うござる。疾々の望でござる。どうぞ連れて參つて下され。して連れは誰々でござる。シテへイヤ誰と云うて外の者はない。先づ上の藤五三郎。柿の本のしぶ四郎左衛門。左近。其外連中殘らずでおりやる。女へ左近殿もお參りやりまするか。シテへ中々。女へそれならば妾は得參りますまい。シテへそれは又どうした事ぢや。女へあの衆は身代がよいに依つて。馬の乘物のと云うて。お參りやりませう。こち衆は身代がならぬに依つて。徒步跣で參る事は厭でござる。シテへ扨々むさとした事を云ふ。あの衆は身代がよいに依つて。馬になりとも乘物になりとも。はて乘りたい物に乘つて參らうぞ。こち衆は身上相應に。徒步跣で參つたと云うて。それが恥にも恥辱にもなる事ではあるまい。女へでも供の樣で惡うござるに依つて。兎角厭でござる。シテへもつけな事を云ひ出した。皆夫婦連れで參るに。身共一人參るも異な物ぢやが。イヤ何と牛に乘らうか。女へ牛になりとも乘りませうが。その牛は何處にござる。シテへ左近が所の牛は。身共が牛ぢや。女へそれは何時そなたの牛になりました。シテへ誠にまだこの話をそなたにせぬ。序ながら話して聞かせう。ようお聞きやれ。何時ぞやであつた。左近が所の牛が放れて來て。身共が山の手の田を食うてゐたに依つて。軈て牛の綱をぢつと捕へ。やい。汝畜生なれどもよう聞け。大事の御年貢をなす田を食うたに依つて。御年貢をも左近になさせうず。そちも向後身共が牛にするぞエイ。と云うたれば。畜生なれども心がある。モウと云うて返事をした。女へなう〳〵愚かな事を仰せらるゝ。自然畜生が鳴き合せたと云うて。それが返事をしたであらう事は。シテへ皆迄云ふな。左近にも道理をつめて置いた。女へ何とつめておかせられた。シテへはて。大事の御年貢をなす田を食はせた程に。牛をも引かうず。又御年貢をもそちなせと云うたれば。左近も道理に詰つて。につと笑うてゐた。女へなう〳〵。それは餘りそなたが愚かな事を云はつしやるに依つて。左近殿がをかしがつてお笑ひやつたものでござる。シテへイヤこゝな者が。男と男が云ひ交す事に。をかしがつて笑ふと云ふ事があるものか。この事に於いては。地頭殿へいて。公事にしてなりとも取つて見せう。女へまだそのつれを云はつしやる。左近殿には不斷地頭殿へは入り込うで。殿も宮も一杯に召さるゝ。こち衆は一年に一度のお見舞もせずに。何と公事に勝たるゝものでござる。シテへヤイ。上はせいすいなに依つて。理をもつて取るに取られぬと云ふ事はない。今でもいて取つて見せう。女へ先づ待たせられい。扨はそれ程に思ひ詰めさせられたか。シテへおんでもない事。女へそれならばとめもしますまい。さり乍ら。その樣に慌てふためいて行かせられたらば。理を持ち乍ら非になるまいものでござらぬ。總じ

て内沙汰と云うて。この様な事は家で公事の稽古をするものぢやと聞きました程に。そなたも公事の稽古をさせられい。シテ〽成程これは尤もぢや。この様に慌てふためいていたらば。理を持ち乍ら非になるまいものでもない。成程公事の稽古をせうが。さり乍ら。誰も地頭殿になつて聞いて呉るゝ者がない。女〽地頭殿には妾がなりませう。シテ〽あのおぬしがや。女〽中々。シテ〽そなたを地頭殿にはこはものでおりやる。女〽女ぢやと云うて理非の判らぬ事はござるまい。シテ〽成程。女ぢやと云うて。別(べち)に理非の判らぬ事はあるまいが。でもそのなりではどうも地頭殿とは思はれぬ。女〽地頭殿は不斷烏帽子を召し。太刀を佩いてござると聞きました。妾もその様に取繕(つくろ)ひませう。シテ〽それならば身拵へをおしやれ。女〽心得ました。ト云うて。笛座へくつろぎ。身拵へる。シテ〽負うた子に教へられて。浅瀬を渡ると云ふがこの事ぢや。常々何れもが。そちが女共は利口な者ぢやとおしやるが。どうでも身共よりは智慧があるかして。女共に教へられて。公事の稽古をすると云ふものぢや。女〽さあ〳〵拵へがようござる。シテ〽これはその儘の地頭殿ぢや。女〽必ず妾ぢやと思はず。地頭殿ぢやと思うて稽古させられい。シテ〽扨これはどちらから云うたものであらう。女〽先づ相手公事から云はせられい。シテ〽相手公事ならば左近が云ひ分ぢや。よう聞いてたもれ。女〽心得ました。アド腰をかける。シテ〽さて左近は不斷地頭殿へ入り込うで。殿も宮も一杯にするに依つて。先づ御門はつゝと通るであらう。扨お式臺へ至らば。番の衆がござらうに依つて。ホ。これは御當番でござるか。御苦勞に存じまする。今日はちと御訴訟の儀がござつて參りましたが。殿はどれに。エ。お廣間。ハアそれならばおゆるされませ。通りませう。おゆるされませ〳〵。ハアお見舞申上げまする。女〽左近か。よう來た。シテ〽この間は久しうお見舞も申しませぬ。御機嫌さうでお目出度う存じまする。女〽そちもまめさうで一段ぢや。シテ〽今日はちと御訴訟の儀がござつて參りました。女〽それは何事ぢや。シテ〽お下に右近と申す百姓がござる。これが山の手に田を持ちました。私の牛が放れて參つて。一穂二穂下されたさうにござる。右近が申しまするには。大事の御年貢をなす田を食はせたに依つて。牛をも引かうず。御年貢をもなせと申して。迷惑仕りまする。右近が參りましたらば。よろしう仰付けられて下されませ。女〽一穂二穂食うた分では牛は引かれまい。右近が來たらば。よい様に云ひ付けてやらうぞ。シテ〽それは有難う存じまする。最早お暇申しまする。女〽行くか。シテ〽ハア。女〽よう來た。シテ〽ハア。ト云うてえせ笑ふ。女〽なう〳〵。そなたは何時その様な物云ひにならせられた。シテ〽ヤイ常々身共を物云はずぢやと云へども。さあ云はうと思へば。云はずにはおかぬわいやい。女〽それでは。今度の公事には勝たつしやれたと云ふものぢや。シテ〽オヽ〳〵。この度の公事には身共が勝つたと云ふものぢや。女〽扨これからはそなたの番ぢや程に。念を入れて稽古させられい。シテ〽誠にまだ身共の番があるな。よう聞いてたもれ。女〽心得ました。シテ〽ハア。身共が番ぢやと思へば。わが家ながら胸がだく〳〵する。その上左近とは違うて。一年に一度の折見舞はせず。先づ御門へ至らば。番の衆が棒を突いて。何者ぢや。ハアヽ。おゆるされませ〳〵。私はお下に住居致す右近と申す百姓でござる。今日はちと御訴訟の儀がござつて參りました。通りませうがおゆるされませ。ハアヽ〳〵〳〵と云う

て。先づ御門は通るでおらう。扨お式臺へ至らば。番の衆が上下を召して。威儀の堂々となされてござつて。何者ぢや。ハア、お許されませ〳〵。私はお下に住居致すうこ。ハア、左近と申す百姓でござる。今日においと御詮議の儀があつて參りました。通りませうな。ハア、お許されませ〳〵、などと云うてよからうが。右を見ても左を見ても。御門衆に近付きはなし。アヽこれは來ればよかつたものを。その上こはい〳〵と思へば。胴は震ふ。足手に力はなし。ちりけもとからぞくぞくとつかみたつるやうな。女〽何者ぢや〳〵。シテ〽ハア、來ました〳〵。女〽來ましたとは何の事ぢや。シテ〽蛸が田が牛を食ひました。女〽蛸が田が牛を食うたとは何の事ぢや。ぬかしをらぬか。シテ〽もようござる。參りませう。女〽ぬかしをらぬと縛るぞよ〳〵。シテ〽申しまする〳〵、あのおれが山の手の田を。左近が所の牛が食うて居たに依つて。大事の御年貢をなす田を食はせた程に。牛をも引かうず。御年貢もそちなせ。と云へども。それでも左近が厭ぢや〳〵と申しまする。女〽して、その田の北は。シテ〽道でござる。女〽東は。シテ〽山でござる。女〽南は。シテ〽畑でござる。女〽西は。シテ〽沼でござる。女〽諸足踏み込うだか。片足踏み込うだか。シテ〽片足でござる。女〽居食か撫食か。シテ〽撫食でござる。女〽しされた〳〵。シテ〽アヽ悲しや。[illegible]。女〽なうこゝな人。何でござる。シテ〽重ねて參る事ではござらぬ。女〽はて変でござる。変で御座るわいの。シテ〽女共か。そちは何として駈け付けた。女〽これはいかな事。こゝは妾が内でござるぞや。シテ〽誠に身共が内ぢや。して、地頭殿はお歸りやつたか。女〽これはいかな事。地頭殿と云ふも妾でござる。シテ〽あの今。打ての。縛れの云うたはおぬしか。女〽中々。シテ〽これはいかな事。どこにお女の口から。今の樣な事を云ふ事があるものか。女〽まだそのつれな事を云はしやる。内でさへ月影な廻すなりで。地頭殿へいて。何と公事に勝たるゝものぢや。その上最前からの樣子を聞くに。左近殿は道理。そなたのは無理でござる。シテ〽無理とは。女〽總じて。昔から諸足踏み込うでの居食ならば。田主の利分。これは片足踏み込うでの撫食ぢやに依つて。左近殿は道理。こなたのは無理でござるわいの〳〵。シテ〽何ぢや。無理〳〵。ウヽよい〳〵。左近が事を相談すれば。何時でも左近がのは道理。身共がのは無理と云ふ。こ管がある。よしない者と相談した。女〽これ〳〵。管があるとは人聞き惡い。どうした事ぢや。シテ〽云うたらば恥であらう。女〽恥になることは持たぬ。あらば云へ。シテ〽さらば申さう。それ先の月の伊勢講は。上の藤五三郎ではなかつたか。女〽それがこゝへ出る事か。シテ〽先づお聞きあれ。身共は用があつて後から參れば。左近は早先へいてゐた。身共が行くを尻目にかけてついと立つた。やあら左近が立ち樣は合點の行かぬ立ち樣ぢや。その上聞いた事もあると思うて。跡をしたうて行て見たれば。そちは左近を。裏の藪からいなせぬか。よう知らぬかと思うて。女〽なう腹立ちや。その樣な事を見をつたらば。何故その當座にはぬかしたらぬぞいやい〳〵。シテ〽その當座に云ふは合點なれども。おれも男しやうを持つた者ぢやに依つて。ちつとこらへてゐたわいやい。女〽エヽ腹立ちや〳〵。おのれそれは誰が恥ぢや。誰が恥ぢやぞいやい。シテ〽誰が恥であらう。おのれが恥ぢや。女〽その指は誰にさいた。シテ〽おのれにさいた。女〽も一度さいて見よ。シテ

へさいたらば何とする。女へ打折つてのけるに。シテ笑ふ。シテへ俺が指には骨がある。女へ骨があらうとも打折つてのける。シテへさすぞよ。女へさゝせ。シテへさすぞよ。女へさゝせ。シテへそりやさいたは。女へエヽ腹立ちや／＼。食ひつかうか。しがみつかうか。おいれの樣な者はかうして置いたがよい。なう腹立ちや／＼。ト云うて引廻し。シテを打ちこかして入るなり。シテへやいやい。やいそこな奴。なんぼその樣に云うても。左近とおのれとはめうとぢやわいやい。ト留めて入る。

氏結（うぢなすび）　番外

シテ　山伏
アド　神子
アド　氏神

神子へわらはは當所の氏神に仕へまする神子で御座る。ちと立願の事が御座つて毎日參詣申しまする。今日も參らうと思ひまする。先づそろり／＼と參らう。まことに。國々在々に諸神多しと申せども。別して當社は何事も思ひのまゝにかなはせらるゝによつて。一入神前の賑々しう思はれまする。いや程なう參り着いた。先づすゞしめの御神樂を上げませう。御神樂こそ目出度うおはしませ　神樂。さて氏神殿へ申上げまする。私の立願を早うかなはせ給へ。今夜はこれに通夜を致さうと思ひまする。山伏へこれは此の邊りに住居する山伏で御座る。ちと宿願の事が御座つて、當社の氏神へ日參致す。今日も參らうと存じて罷り出た。先づそろり／＼と參らう。珍しからぬ申し事なれども。日本は小國なれ共神國にて、佛法繁昌の御代なれば、かなたこなたにて御祈誓の立願もあつて、我等如きの一日暇のない事で御座る。此の度は某の願ひで日々歩みを運ぶ事で御座る。いや參るほどにこれは早や神前ぢや。ト此まゝ。先づ拜みませう。さて氏神へ申上げまする。早々諸願成就に守らせ給へ。ト拜みます。いやあれに神子も籠つてゐらるゝ。なう／＼。そなたはこゝいきいお參りぢやが。此の所の宮守か。但し外からの參詣か。神子へ御不審尤もで御座る。妾は此の御宮の神子で御座るが、ちと立願が御座つて。今宵も通夜を致しまする。山伏へこれは幸ひぢや。某も宿願で御座る。夜もすがら話しませう。神子へなう／＼。お話し申しませう。さて其方は如何やうの立願で再々參らせらるゝ。山伏へ某はいまだ妻を持たぬによつて、其の願ひで參ることでおりやる。神子へ當社はあらたかな御神なれば、やがて似合はしい妻を授けなさせられう程に。隨分御祈念を結ばせられい。山伏へ扨そなたはいか樣の願でおりやる。神子へ妾が願は聞かせらるゝに及びませぬ。山伏へそなたは物を思はするかおりや。包まずともちよつとおしやれ。神子へ何程に仰せられても申すことはなりませぬ。山伏へおしやらねば一入聞きたい。平におしやれ。神子へそれならば申しませう。妾もいまだ定まつた夫が御座らぬによつて。其の願ひで參りました。山伏へはてさて世間には似合うた事もあるものぢやの。何と幸ひのことぢや。身共と夫婦にならしますまいか。神子へいや／＼。其方のやうな山伏な夫に持たうならば。駒ざらへで集むる程あれども。それが厭さに好い男に添ふ爲に。この如く籠ることで御座る。山伏へなう／＼。其の樣にさのみ嫌しまるゝな。そなたも神子と見ゆるすれば似合うた事ぢや。ひらに夫婦にならう。神子へいや／＼。こなたとせり合うて居てはならぬ。妾はとかく鈴を參らせて。よい男を授けてもらはねばならぬ。山伏へそなたが鈴を

までを立てさせたではないか。殊に諸侍に一禮までを云はせて。此上は貸すとも借らうず。貸さずとも借らう。足許のあかい内貸さいでなあ。小アドへヤアラ此方は御人體に似合はぬ事を仰せらるゝ。身共も似合ひに旦那を持つた。弓矢八幡指もさゝす事でないぞ。シテへ推參なやつの。アドへアゝこれくく。其様な事云ふものでおりやるか。小アドへ何處にか生きて居る猿の皮を。呉れいと云ふ事があるものか。アドへそれならば何故に最前御請けを申した。小アドへそれはその時の仕儀によりまする。アドへ後で後悔おしやるな。小アドへでもならぬ事はならぬと云はにやなりませぬ。シテへのけくく。異議に及ばば猿引ともに射て取るぞ。小アドへ先づお待ちなされませ。シテへ何と待てとは。アドへさあくくお請けを申せ。小アドへ畏つて御座る。シテへイヤお畏りやるまいものを。小アドへ畏まつて御座る。アドへ畏まつたと申します。後つめる。常の如し。シテへさうなうては叶はぬ。急いで猿を打つて渡せと云へ。アドへ畏まつて御座る。さあくく早う打つて上げさしめ。小アドへ何と是はお詫事はなりますまいか。アドへ今となつて何とお詫事がなるものぢや。小アドへさやうならば仰せられて下され。あの大かりこなたで射させられたらば。猿の皮に傷がついて。お役に立ちますまい。爰に猿の一打と申して。唯一打で命の終る所が

御座る。これを打つてあげませう程に。暫しのお暇を下されと仰せられい。アドへ心得た。猿へ云ふ通り云ふて。シテへともかうもしてゝ早う打てといへ。アドへ畏まつて御座る。シテの通り云ふ。小アドへどうぞお詫はなりますまいか。アドへハテくどい事をおしやる。ならぬわいのう。小アドへハア是非に及ばぬ。ヤイましら。汝畜生なれども、今身共が云ふ事をよう聞け。そちは小猿の時より飼ひ育て。様々と藝能を教へ。今は汝が蔭で身命ならくくとおくるに依つて。汝が事をあだおろかには思はねども。これや。あれに御座るお大名が。そちの皮を呉れい。靱に掛けたいと仰せらるゝ。たつてお詫を申せども。革を上げぬにおいては。身共とも御成敗なさるゝとの御事ぢや。脊に腹に換へられず。不憫には思へども。今そちを打つ程に。かまへてくく草葉の陰からも。身共を恨みとばし思ふなよ。今が最後ぢや。ヤアエイ。ト云ふてなく。シテへヤイ太郎冠者。猿は打たいで。何をほゆるといへ。アドへ畏まつて御座る。シテの通り云ふべし。小アドへされば の事で御座る。きやつは小猿の時より飼ひ育て。様々の藝を教へ。中にも此の中上下に致さうと存じて。舟の艪を押す眞似を教へて御座れば。畜生のあさま

是は其方が作るかと仰せられたに依つて。何心もなうはあと申して御座れば。もそつと欲しいと仰せらるゝ。ふと申して後へも先へも參らぬさりながら。また今晩も參つて。もそつと瓜を取つて歸らうと存ずる。思へば。盜み程面白いものは無い。人に辛勞をさせて。我がものは少しも要らず。唯取ると言ふ事は。何を致さうよりましで御座る。これぢや。笑ふ。扨も〱油斷な畑主ぢや。まだ見舞はぬと見えて垣が其のまゝである。是でも見事な瓜を作る事ぢや迄。ト言うて。出を見て。案是は如何な事。また案山子を拵へて置いた。扨は知つたさうな。たうそなたを人かと思うて。いかう膽を潰してのう。扨も〱良う人に似た。これや〱其のまゝの罪人ぢや。是に就いて思出した事が有る。當年祇園會の頭に當つた。何れもがおしやるは。鬼が罪人を責むる所を拵へて出さうとやらおしやつた。されば此の案山子を罪人にして。身共が鬼に成つて。責めて見ようと存ずる。ト言うて。杖に持つるかに罪人を一責め責めて い 先づ是で良いさりながら。圖の習ひぢやに依つて。身共が罪人に成るまいものでない。今度は此の案山子を鬼にして。身共が罪人に成つて。責められて見う。ト言うて。繩をすじ持ち。 いから

悲しい。是程參り候に。さのみな御責め候ひそ。是や地獄の習ひとて。是や地獄の習ひとて。行かんとすれば引留む。止まれば杖にてちよロ傳。やい〱。飛礫を打つは何者ぢや。身共は畑主ぢやぞ。何處から打つた知らぬ。案山子の後(うしろ)に人も居ず。今繩を引いたれば上がる。出來た。ゆるめた時これであつた。扨扨これは良う拵へたものぢや。引けば上がる。ゆるむれば落つる〱。笑ふ。扨々これには良う拵へたものぢや。もそつと責められう。ト言うて。初めの通り。アドへがつきめ。シテへ是は何とする。アドへ己れは憎い奴の。ト言うて。退込みあるなり。

魚說法(うをせつぽふ)

シテ　新發意

アド　所の者

アドへこれはこの邊りの者で御座る。某親の追善の爲め。一間四面の堂を建立致いて御座る。此の堂供養または追善の爲め。一座の法談を執り行うて貰はうと存ずる。先づ御寺へ參り。御住持樣をお願ひ申上げて參らうと存ずる。シカ〱。まことに。御住持樣が御寺に御座ればよいが。内にさへ御座つたらば。定めてお出で下さるゝであらう。何かといふうち早これぢや。案内乞ふ。常の如し。御住持樣は御内に御座りまするか。シテへ住持は田舍へ參られて留守で御座る。アドへそれでは何時お歸りなされまするぞ。シテへまだ五日や三日のうちでは御座るまい。アドへそれは氣の毒で御座る。唯今參るは別の事では御座らぬ。某親の追善の爲め。一間四面の堂坊建立致して御座る。此の堂へ供養または追善の爲め。一座の法談を執り行うて貰ひ度う存じ。御住持樣を御願ひ申しに參つて御座る。御留守で氣の毒に存じまする。シテへ住持が留守で御笑止に御座る。アドへ申してさへ御座らば。何時でも御出でなされて下されうと存じ。はや御布施なども用意致して御座る。シテへ其の樣な事を聞かれたらば。なほ殘多う思はれませうな。アドへ誰れ彼れと申さうより。お前お出でなされて下されい。シテへ私は新發意(しんぼち)のことで御座れば。法事も心許なう御座る。得參りますまい。アドへお前ぢやと申して。御住持樣の御弟子のことで御座る。是非ともお出でなされて下されい。シテへそれならば。身拵へをして參りませう。暫くそれに御待ち下されい。アドへ心得ました。シテへ是はいかなこと。は

樣な顔をせらるゝ。アドへこゝな奴に物をいはせて置けば方途がない。己れのやうな奴はかうして置いたがよい。シテへあゝ生蛸〳〵。アドへまだ言ふか。シテへみようきち參らう。アドへこれはいかなこと。シテへこちはただ飛魚せう〳〵。アドへあの横着者。遣るまいぞ〳〵。追込み入るなり。

【え】

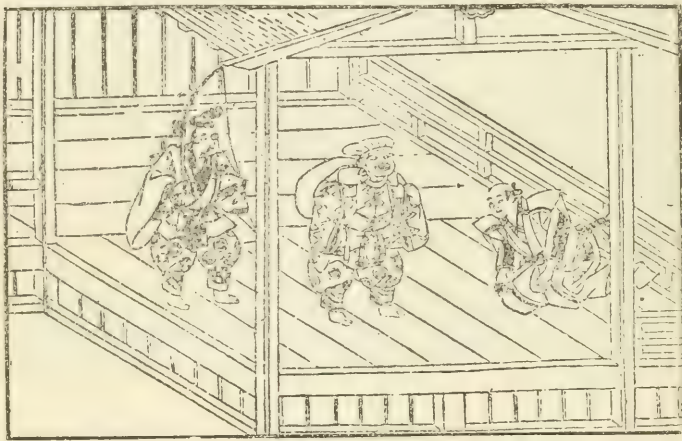
夷大黒（えびすだいこく）

シテ

アド　男

蛭子

（入道具）

次第アドへ歸る嬉しき古里に。〳〵。行きて妻子に會はうよ。これは河内の國片野の里に住居する者でござる。某親に孝を盡くす故にや。次第に富貴の身となつてござるさりながら。猶ほ子孫繁昌致すやうに。比叡山三面の大黒天へ祈誓申してござれば。西の宮の蛭子三郎殿へ參詣申せと。あらたに御夢想を蒙つてござる。それ故直ぐに西の宮へ參詣申してござれば。家の内に勸請申せと。則ち蛭子三郎殿の御告でござる。斯樣の有難い事はござらぬ。先づ急いで歸つて勸請致さうと存ずる。シカ〳〵。誠に。信あれば德ありと申すが。日頃某が正直に致すに依つて。斯樣の御利生もござると存じて。別して忝い事でござる。イヤ何かと申す内に私宅ぢや。斯樣の事は妻子にも知らさぬ事ぢや。先づ急いで注連を張り。勸請致さうと存ずる。ト云うて。ワキ正面ヨリ。目附柱よりシテ柱まで。目程位の高さに注連を張るなり。一段とよい。先づ樣子を伺はうと存ずる。下りはにて二人出で。一の松にて二人とまる。太鼓打上げ。シテへ大黒と。二人へ大黒と。蛭子は心合はせつゝ。多くの寶取り持つて。衆生にいざや與へん。〳〵。アドへこれへ賑々とお出でなされたは。どなたでござる。エへこれこそ西の宮にて契約したる夷三郎殿。これ迄現れ出てあるぞとよ。シテへこれは比叡山三面六臂の大黒天なるが。某へ歩みを運び信仰する故に。福を與へんと思ひ。これ迄出現してあるぞとよ。アドへ扨も〳〵有難い事でござる。迚もの事に。家の内へ御來臨遊ばされませ。ト云うて。二人とも葛桶へ腰掛けさせる。アドへおそれおうござれども。何卒御兩所樣ともに。此家の内に成德を仰せ殘され

て下されうならば。有難う存じまする。エへさあらば追付け威德を語らう程に。よう聞け。アドへ畏まつてござる。エへ抑も蛭子三郎といつぱ。伊弉那岐伊弉那美の尊。天の岩倉の苔筵にして。男女の語らひをなし。日神月神蛭子素戔嗚尊を儲け給ふ。天照太神より三番目の弟なるに依つて。西の宮の夷三郎殿と祀はれ。氏素姓誰にか劣り申すべき。貧なる者には福を與へ。富貴萬福に榮えさするも。皆某が守る所なり。なんぼう奇特なる仔細にてはなきか。アドへこれは有難い御系圖を承つてござる。則ち大黒天へも願ひまする。シテへ某は三ぶの系圖には劣らうけれども。追付語つて聞かせう。語 抑も比叡山延暦寺は。傳教大師桓武天皇と御心を一つにして。延暦年中に開闢し給ふ。されば一念三千の機を以て。三千人の衆徒を置き。佛法今に繁昌たり。其時傳教大師。三千人の守らん天部を祈誓す。其時この大黒天出現す。傳教のたまはく。イヤ大黒は一日に千人をこそ扶持し給ふ。此の山は三千人の衆徒あれば。それを守らん天部をこそ案じあるべけれとありしかば。其時この大黒天大きに怒りをなし。いでさらば奇特を見せんとて。忽ち三面六臂と現じ給ふ。これこそ三面の大黒天の謂れなれ。なんぼう奇特なる事にて候はぬか。アドへ扨々これも有難い事でござる。いで〳〵末繁昌にお守りなされて下され エへさらば寶を與へ申さうぞ。シテへ某も與へうぞ。アドへ有難う存じまする。エへ治まる御代のお肴に、[illegible]一段[illegible] 治まる御代のお肴に、夷は釣を垂れんとて根つなぎをしつつ釣を垂れ、「目出たい」な釣り上げたる。寶をわどのに取らせけり。シテへ其時大黒進み出で。[illegible]一段[illegible] その時大黒進み出でゝ。打手の小槌を取りのべて。大地を丁々と打つ跡よりも。七珍萬寶涌き出でたる。數の寶を袋に入れて。汝にこそは取らせけり。二人へ何れも劣らぬ夷大黒。歸らんとせしが又立歸り。猶も所の福神と。ならん〳〵と此所にこそ納まりけれ。イヤアと。くッし とめにてよし。

蛭子毘沙門

シテ　蛭子
アド　有德人
毘沙門　（入道具）

アドへ此邊りに有德な者でござる。某美人の一人娘を持つてござる。誰にはよるまい。氏素姓氣高くて。富貴にあらうずる人を聟に取らせて下されと。鞍馬の毘沙門。西の宮の夷三郎殿に祈誓申してござれば。先づ高札を打てよと御示現を蒙つてござる。急いで高札を打たうと存ずる。一聲。ヒへ抑もこれは。鞍馬の毘沙門とは我が事なり。さる程に。邊り近い所に有德な者のある。美人の一人娘を持つた。誰にはよらず。氏素性氣高くして。富貴な者を聟に取らせて見れとの某に祈誓する。先づ高札を打てよと示現をおろした。總じて某程。氏素性氣高くして富貴な者はあるまいと存ずる程に。急ぎ參つて聟にならうと存ずる。ト云うて。橋懸りにて案内を乞ふ。アドへ案内とはどなたでござる。ヒへ高札の表について。鞍馬邊より聟が參つてす。アドへ鞍馬邊と仰せらるるは。若し多門天殿にてばしござるか。ヒへ先づ其樣な者ぢや。アドへ扨もこれまでの御來臨有難う存ずる。先づ奥へ御通りなされませ。ト云うて。腰掛けさす。シテへ抑もこれは。西の宮の。夷三郎にておぢやります。名乘り毘沙門の通りなり。シカ〳〵。誠に。某聟になつたら。其の身の事は云ふに及ばず。隣郷迄も富貴になる事疑ひもない事ぢや。これぢやつ。高札を墨黑に書いて上

げたよ。これは身共が引出すト云うて案内を乞ふ初めの通りに出る。シテへ西の宮邊より聟の望で參つた。アドへさう仰せらるゝは夷三郎殿でばしござるか。シテへおそい推〳〵。夷三郎これ迄出現してあるぞ。アドへこれ迄のお出で忝うござるさり乍ら。最前鞍馬の毘沙門天が聟の望と仰せられてお出でゞござる。シテへなに毘沙門が參つた。あれは佛體を得た者ぢやが程に。來まい事ぢやが。ヒへ舅々。表に聟穿鑿のあるは何事ぢや。シテ共内こ通る。後見床几を出し。腰かけさせる。アドへ西の宮より夷三郎殿のお出でゞござる。ヒへヤイヤイ。それへ來たは西の宮の三ぶかいやい。シテへさう云ふは毘沙か。ヒへ舅々。あの三ぶが此所へ來たな。急度某の推量した。身共の聟入が。西の宮迄隱れがなうて。定めて生魚が夥しういらうと思うて。魚を商賣に來たものであらうと存ずる。シテへ舅。某も推量した事がある。此度夷三郎殿の聟入が。鞍馬の奧迄隱れがなうて。定めて生魚が大分あらうず。蟲を起させてはなるまいと思うて。山椒の皮を賣りに出たと存ずるよ。アドへ互に雜言は御無用でござる。とかく何れなりとも。富貴にござつて位が高い方を。聟にせうと存ずる。ヒへ舅よい所をおしやつた。總じて我と我は云ひ難い。三ぶが身の上を語つて聞かせう。語それ多門と云つぱ。四王地主として須彌の衆生

を守り。貧なる者には福を與へて。富貴萬福に榮えさす事は此の多門が守る所なり。さるに依つて。年の初めの初寅と云はれ威光をあらはす。又あの三ぶが身の上を語つて聞かせう。神と祀はれば。いかにも綺麗なる森林にも住まず。市の中に住んで。草鞋はきものに踏越えられ。たま〳〵思ひ出せんとては。小舟にとり乘り。沖の方へ出て。ほうすべの先にて造酒を飮み。絹のたちはづし布のたちはづし着たる分にて。衆生濟度はなるまいぞ。シテへそれ衆生濟度の爲なり。いで某が身の上を語つて聞かせう。伊邪那岐伊邪那美の尊。天の岩倉の苔莚にて男女の語らひをなし。日神月神蛭子素盞嗚尊を儲け給ふ。蛭子とは某が御事。天照大神より二番目の弟なるに依つて。西の宮の夷三郎殿と云はれ。氏素姓誰にか劣るべき。あの毘沙門が佛とならば。人間近き所に住みもせで。鞍馬のつうと奧に住んで。敵も持たぬつゝぬ用心。これ先づ以て無用なり。其上あの毘沙は主があるぞとよ。ヒへ主がある事は。シテへ增長廣目多門持國と云ふ時は。大佛の汝が主ではないか。ヒへ主ではない。シテへ主ぢや。ヒへつかふぞよ。シテへつかふぞよ。ノル。アドへいかにや〳〵聞き給へ。誠の聟になりたくは。寶を我にたび給へ。

ヒヘいで〳〵寶を與へんとて。打上。いで〳〵寶を與へんとて。悪魔降伏災難を。拂ふ鉾を汝に取らせけり。シテヘわどのにおれも劣るまじ。笑ひ上た。わどのにおれも劣るまじとて釣り冥加。商ひ冥加の幸ひあらする釣針を。魚ならこそは取らせけり。ヒヘ猶も舅にましおりて。甲を脱いで舅に取らせ。シテヘ烏帽子を脱いで舅に取らせ。二人ヘ何れも劣らぬ福天なれば。〳〵。此所に三納まりけり。

【お】

鬼瓦（おにがはら）

シテ　何某

アド　太郎冠者

（入道具）

シテヘ遥か遠國の者で御座る。永々在京致す所に。訴訟悉く相叶ひ。安堵の御教書を頂戴致し。あまつさへ。お暇迄を下され。近日本國へ罷り下る。太郎冠者を呼出し。其由申し聞せ悦ばせうと存ずる。如常。シテヘ汝呼出す別の事でない。お暇を下されて近日本國へ下るは。何と目出度い事ではないか。アドヘ内々此儀を待ち得ましたに。斯程お目出度い事は御座りませぬ。シテヘ是と云ふも。ひとへに因幡堂の薬師如来を信仰して。逗留中歩み

を運び祈願したが。則ち其願成就と云ふものぢや。お禮かた〴〵お暇乞に參詣せうと思ふが。何とあらう。アドヘ御意もなくば申上げうと存じて御座る。一段とよう御座りませう。シテヘそれならば。追付け參詣せう。汝供をせい。アドヘ畏まつて御座る。シテヘさあ〳〵来い〳〵。シカ〳〵。誠に。國許を出る時は。何時本國へ下らうぞと思うたに。首尾よう願ひも叶ひ。お暇を下されて本國へ歸るは。目出度い事ではないか。アドヘお供の我等ごとき迄。此様な悦ばしいことは御座りませぬ。シテヘ追付け下る事は知らいで。國許には皆待兼ねて居ようぞ。アドヘ定めて今や〳〵とお待兼ねなされて御座りませう。シテヘ何かと云ふ内に因幡堂ぢや。アドヘ誠にお參り著きなされて御座る。シテヘさらばお前へ向はう。じやぐわん〳〵。拜む。シテヘ最前も云ふ通り。此度訴訟思ひの儘に相叶ひ。首尾よく歸國するは。ひとへに此薬師如来の御利生ぢや。國許へ下つたらば。是程にはあるまいとも。小さうなりとも堂を建立して。則ち此薬師如來を勸請し。日參せうと思ふが何とあらう。アドヘ是は一段とよう御座りませう。シテヘそれならば。國許の大工に云付ける爲ぢや。堂の

樣子を惡く見覺えて歸らう。汝もとくと見覺えて置け。アドへ畏まつて御座る。シテへ是はいにしへ飛驒の內匠が建てた堂ぢやと云ふが。どれからどれまで結構に建てた。組み樣。彫物の樣子。しゝおき。尤も斯樣にありさうな事ぢや。アドへ見事な細工で御座りまする。シテへ御廚子。來迎柱。何れも結構な箔色ではないか。アドへ金色と申すが此事で御座りまする。シテへさて是からうしろ堂へ廻らう。先づは大きな御堂ではないか。アドへおびただしい御堂で御座る。シテへあれ／＼あの升形垂木は。ふ扱も見事／＼。此緣の板は楠と見える。アドへ何かは存ぜず見事な板で御座る。シテへ欄干の金物。總じて釘隱し眞中四分の一煮くろめ。一つとしておろかなはない。アドへ左樣でござる。シテへ何と國許の大工が此樣な事を篤と合點してをらうか。アドへ仰付けられたらば。隨分精を出して致すでござりませう。シテへイヤ／＼精を出したりとも。今々の細工人では中々これ程には得せぬであらう。ヤイ太郎冠者。あのづつと空に黑い物が見える。あれは何ぢや。アドへ何でござりますか。シテへあれ／＼。あの黑い異形な物は何ぢや。アドへ鬼瓦の事でござるか。シテへ誠に鬼瓦ぢや。あの鬼瓦は誰やらの顏によう似たな。アドへ誠に似ましたぞ。シテ泣く。アドへ申し／＼。お前は俄に御落淚の體でござる。それは何事でござる。シテへさればあの鬼瓦がお誰やらに似たと思うたれば。國許の女共が。妻戶の脇まで送つて出て。軈て御息災でお歸りなされい。目出度うお目に掛りませうと云うて。につと笑うた顏に其儘ぢや。ト泣く。アドへ何れさう仰せらるれば。どこやらが似ましてござる。シテへどこやらといふ事があるものか。それは似ぬも同じ事ぢや。これは似たも／＼大抵の事ではない。まぶたのおほいきさつ所。猿田彥の鼻程きよいと高いは。ト泣く。アドへ成程。只今見ますればよう似ましてござる。シテへまだ口の耳せゝまで切れた所。首筋に苔の生へたは其儘の女共ぢや。ト泣く。アドへ申し／＼。追付お下りなさるれば。早速にお會ひなさるゝ事でござる。何故御落淚なされまするぞ。シテへ誠にさうぢや。追付國許へ下れば會ふ事ぢや。よしない事に落淚した。此樣な時はどつと笑うてのかう。つつとこれへ寄れ。アドへ畏まつてござる。シテへさあ笑へ。アドへ先づお笑ひなされませ。シテへ先づ。アドへ先づ。二人へ先づ／＼。ト二人笑うて入る。

鬼繼子（おにのまゝこ）

シテ　鬼
アド　藤五三郎の妻
（入道具）

アド女へ越中の國蘆倉の里に藤五三郎と申す者の妻で御座る。妾が連合ひは。こぞの秋お死にあつたに依つて。それより面白からぬ月日を送る事で御座る。又親里から呼びに參つた程に。先づあの方へ行かうと思ひまする。シカ／＼。誠に。夫に別れた時は。髮をおろし樣を變へうと存じて御座れども。此の忘れ形見に心がひかれて。一日一日とのびる事で御座る。是はいかな事。思ひの外けふは日がばんじた。其の上人通りもなし。氣味の惡い事ぢや。シテへ人くさい／＼。是はたゞならぬ事ぢや。さればこそ。とつてかまうとつてかまう。女へなう恐ろしや／＼。シテへやい。おのれは不敵なやつぢや。此の所は七つ下れば人通ひもないに。見ればまだ年若な女ぢや。唯一人通るは定めていたづら者であらう。女へいやいたづら者では御座らぬ。命を助けて

下され。シテ〜まだぬかし居る。おのれたつた一日に服せうと思へども。容儀も十人なみぢやに依つて不憫に思ふ。心静かに服する。こう心得い。扨おのれはいづくの者ぢや。女〜妾は越中の国蘆倉の里に。藤五三郎と申す者の妻で御座る。親里へ用があつて参りまする。シテ〜藤五三郎が妻か。これはいかな事。誰でと思うたれば。三郎が妻ぢやよなう。蘆倉の藤五三郎は去年の秋死んだが。其の後外の男を持たずにゐるか。女〜そなたは知つた様にいはつしやるが。藤五三郎をどうして御存じで御座るぞ。シテ〜不審尤もぢや。藤五三郎は婆娑の業が深いに依つて。地獄へ墮ちて。夜に三度日三度の責を受くる。我々が役として。朝夕手にかくるに依つて。よう知つて居る。女〜なう〳〵悲しや。様々の佛事をなし。跡を弔ひまするが。其のかひも御座らぬかいの。さて先づどの様な責に遭はしやれますぞ。シテ〜以ての外罪が深い。中にも三郎が伯父の馬を盗んで来て。老馬の歯をもぎ。四足より血を取つて。若馬に作りなし。白い所を墨で塗つて。他郷の市へ牽いていて賣つた。此の罪甚だ輕からず。閻魔王の怒強く。舌を抜かれ臼ではたかれ。箕でひられ。片時も安い事がない。女〜扨も〳〵それは痛はしい事で御座る。様々の弔ひも致せども。

其のかひも御座らぬよなう。シテ〜重い罪ぢやに依つて。なか〳〵とゞく事ではないぞいやい。女〜どうぞお前を頼みまする。閻魔様とやらへ取合を仰せられて。三郎を極楽にやつて下され。シテ〜そちは三郎に別れて未だ男は持たぬか。女〜三郎はなさきな闘楽で御座る。何の外の男を持ちませう。シテ〜それは奇特ぢや。然らば身共が言ふ事を聞かうならば。三郎を極楽へやつてやらう。女〜三郎をだに極楽へやつて下さるるならば。何なりとも云はせらるゝ事を聞きませう。シテ〜別の事でもない。爰にほころびがある。縫うてくれぬか。女〜なふなう恐ろしや〳〵。鬼の妻にならるゝものかいやい〳〵。シテ〜ほころびの事を言へば。妻の詮索を召されて。一しほ心がひかるゝ。此の上は何を隠さう。身共も此の年に成るまで獨り身ぢや。近比言ひ兼ねたが。どうぞ身共が妻になつてくれさしめ。女〜不興や〳〵。其の様な事はならぬわいの〳〵。シテ〜いやならばおのれ一口に取つてかまう。女〜先づ待たせられ

い。妾に藤五三郎と妾が中に忘れ形見が御座る。之をかあいがつて下さるゝならば。どうなりともしませう。シテへ忘れ形見とは何の事ぢや。女へこれ此の樣な子で御座る。シテへ扨々重荷を持つたなあ。どれ〳〵見せい。

女へ何と美しい子で御座るが。シテへ是はどうやらうまさうなものぢや。女へなう〳〵恐ろしや。大事の子なうまさうなと云ふ事があるもので御座るか。シテへ其の樣な物は齒ごたへがあるまい。連れていても役にたゝぬ。捨てゝ來い。女へ扨も〳〵どうよくな。此の子故にこそ面白からぬ月日も送れ。此の上はわらは共にいか樣になるとても。そなたの妻になる事は成りませぬ。シテへもつけな事をいふ。是非に及ばぬ。其の子共に連れて來い。

女へ必ず胴慾にせずとも。そなたの眞實の子ぢやと思うて。かあいがつて下されいや。シテへ其の段は氣づかひせずともさあ來さしませ。女へ扨そなたの宿はどこもとで御座る。シテへ身共が宿は地獄ぢや。女へこはやこはや。死んでさへ地獄へ行きとむないに。活きながら地獄へ。何と行かるゝものぞいの。シテへいや。聞けば恐ろしけれども。地獄にも知る人と言うて。住馴れては住みよい所ぢや。早う來さしめ。女へ其の地獄へは程が遠う御座るか。シテへいや程はない。鬼の妻が其の樣ななまぬるい體では似合はぬ。身拵へをして道を急がしめ。女へそれならば身拵へをしませう。此の子の守りをちとして下されい。シテへおれは終に子守をした事がない。

女へ妾が忙しい時には。子守もさせられねばなりませぬ。繼子ぢやと思はずとも。眞實の子ぢやと思うて。守をさせられい。シテへどれどれ。是はいかう柔かい氣味の惡い物ぢや。（此の内に女[illegible]を取出し。下に置て。ひなんなほして。衣裝をつくらふ心持なり。）シテへこれに就いて思出した事がある。此の中閻魔王の前へ、女の罪人が出た程に。何者かと問うたれば。娑婆で繼子を憎んで。つらう當つた科で。地獄へ落ちたといふ事ぢやが。繼子と思へば餘りかあいうないものぢや。女へむさとした事を言はずとも。先づあいなさせられい。シテへ扨も〳〵。子供は正直なものぢや。とゝお親をこはいとも思はず。ほや〳〵笑ふは。

女へそれを見させられたらば。かあいう成りませう。シテへこれはしならしい事ぢや。（ト言うて。嬉しがり。笑ひ色々あるべし。）女へ其の子には妾が御座る。シテへ何をする。女へてうち〳〵と云はつしやれ。シテへてうちとは何の事ぢや。女へ先づさう言うて見さつしやれ。シテへさあ〳〵てうちが見たいの。てうち〳〵。わア小さい手を出して何やらするぞや。女へそれがてうちで御座る。シテへ扨々いたいけな。まだ何ぞないか。女へ鹽の目をせいと云はせられい。シテへさあ鹽の目〳〵。あれ〳〵。目をしば〳〵する。しほの目しほの目。（ト言うて笑ふ。鬼の心持仕樣有るべし。）女へこれ〳〵餘り大きい聲をさせらるゝな。かいを作りまする。シテへわあ〳〵ほえるぞよ。女へすかさつしやれ。シテへどりや肩へ上げてすかさう。（シテ抱子にのる。仕樣有るべし。）シテへ鬼の繼子を肩に載せて御所へ參らう。れろ〳〵〳〵や。びよろん〳〵〳〵や。女へそれ〳〵機嫌が直りまする。（ト言うて。女もつれて浮く。）シテへやう〳〵とほえ止んだ。扨も〳〵かしましい。ちとおろして休まう。女へちと下に置かせられい。（子を下に置き。あゝと云うて。食ひつかんとする。女ちやつと子を抱上げて。）

女へなう〳〵それは何とさつしやる。シテへ思へば〳〵うまさうな。一口ほうばらう。女へなう〳〵悲しや誰もないか。助けてくれい。シテへ取つてかまう〳〵。（ト言うて追込む。女逃げて入るなり。女昔は袋を着き。袋の内に紅ちよくなど入れ持つて出る。紅かねをつけ。嫁入を嚙むと云ふ。シカ〳〵あり。當代好まず。袋なし。鏡は後見出す。）

御冷（おひやし）

シテ　太郎冠者
アド　主人

アド〽この邊りの者で御座る。この中は殊の外の暑氣で御座る。今日はどれへぞ涼みに參らうと存ずる。（ト言うて呼出す。出る。常の如し。）この中は別して暑氣が強いに依つて。今日はどれへぞ涼みに出ようと思ふが。何とあらう。シテ〽御意も無くば申上げうと存じて御座る。一段とよう御座りませう。アド〽それならばどこへ行く。シテ〽さればどれがよう御座りませうぞ。アド〽どれがよからうなあ。シテ〽どれこれと仰せられうより。東山邊がよう御座りませう。アド〽東山に取つてもどこ許とがよからうなあ。シテ〽御參詣かた〲清水へお出でなされい。瀧の下でお涼みなされたらばよう御座りませう。アド〽是はよからう。それならばさあ〱來い〱。シテ〽畏まつて御座る。シカ〱。アド〽さて何と思ふ。時分柄とは言ひながら。別して當年の樣な強い暑氣はあるまいなあ。シテ〽仰せらるゝ通り。當年の樣な強い暑氣は覺えませぬ。アド〽いや何かと言ふ内に清水西門ぢや。シテ〽さやうで御座る。アド〽先づお前へ參らうか。瀧へ下りて涼まうか。シテ〽いや先づ瀧へお出でなされて。お手洗でもお使ひなされて。その上本堂へお參りなさるゝがよう御座りませう。アド〽是は尤もぢや。シカ〱。さあ〱來い〱。何と思ふぞ。外へ出れば氣の晴るる故か。内に居るより格別涼しいなあ。シテ〽なか〱。草木の色を見晴らしまして暑さを忘れまする。アド〽これ〱瀧へ來た。扨も〱せい〱と見事な瀧ぢやなあ。シテ〽潔い事で御座る。アド〽あれへいてお冷しを掬んで來い。シテ〽何がどうぢやと仰せらるる。アド〽いや。あの瀧のお冷しを掬んで來いと言ふ事ぢや。シテ〽あの瀧の水を汲んで來いと仰せらるゝ事か。アド〽中々。シテ〽水ならば水汲むでよい事を。お冷しを掬べ。（ト言うて笑ふ）アド〽それは汝が何も知らぬに依つてぢや。昔上々内裏方の上﨟達は。お冷しを掬ぶとこそ仰せられて。水を汲むなどとは仰せられぬ。そちも今から言ひならへ。シテ〽尤も上々の上﨟達や稚兒若衆などは。お冷しとも掬ぶとも仰せられうか。お前の樣な大きな口からお冷しを掬べ。（ト言うて笑ふ。）アド〽扨々さもしい事を言ふ。とかくきやしやな事は言ひならふものぢや。シテ〽まだそのづれな事を仰せらるゝ。爰に物語が御座る。語つて聞かせませう。語　昔鳥羽院の御時。佐藤兵衛則清と云つし人浮世を厭ひ元結を切り。名を西行法師と名付く。かの西行諸國を修行して。或る時近江の國左女牛の宿に着き給ふ。頃は水無月半ばの事なりしに。麥の水粉といふ物を參らんと。頭陀袋より取出し給ふ所に。折節川風激しくして。水粉をぱつと吹散らす。その時西行のお歌に。賴みつる。麥粉は風に誘はれて。今日左女牛の水をこそ飲め。と。斯樣に詠まれてこそ候へ。やはかお冷しを掬ぶとは承らず候。アド〽それに待て。是はいかな事。太郎冠者と不圖爭うて御座れば。はつたと詰つた。何とせうぞ。いや致し樣がある。やい〱。こなたにはお冷しと作られた謠が有る。謠うて聞かせう。シテ〽承りませう。アド〽妻戸をきりゝと押明けて。お冷し持ちて參りたり。しよりやうの神として。弓矢の家を守らしめ。岩清水。（ト言うて口を塞ぐ。）シテ〽一段の事を仰せらるゝ。この後で持つて參らうと存ずる。申し申し。その後は。岩清水の流を受けて。放生川の水汲まん。アド〽時々は主にも負けて居

よ。（と言うて入る也。）

音曲聟（おんぎょくむこ）

シテ　聟
アド　舅
小アド　太郎冠者
教人
（入道具）

アド〽この邊りの者で御座る。（アド名乗り。太郎冠者を呼出だし。云附け。座に着かして。出て名乗り。シカ／＼。シテ案内乞ひ。數入出て。セリフ。聟入の作法を教ふるまで。悉く懐中聟に同じ。）教〽先づ舅の門前で調子を窺ふ事でおりやる。シテ〽それ幸で御座る。御存じの通り。私は御酒ずきで御座る程に。一銚子も二銚子も聞きませう。教〽いや／＼其の銚子ではない。三ツ調子を打つて。時の調子を合はす事でおりやる。シテ〽アヽ。教〽さて音曲にかゝつて。案内をして。後（あと）を吟ずる。又内へおはいりやつたらば。舅の前へ出る時は。三はりさしといふ事をする。シテ〽それは何の事で御座る。教〽先づ向うへ三足出て。又後（あと）へ三足戻つて。きりゝと廻つて。下に居て。さて三ツ拍子を打つて。云ふべい事を音曲にかゝつて後（あと）を吟ずる。之を當世様の音曲聟と申す。シテ〽さてはさうさへすれば。よう御座りまするか。教〽さうさへ召されば。物知りぢやと云うて。ざつと聟入がすむ事でおりやる。シテ〽忝う御座る。（是より懐中聟に同じ。）シテ〽何かといふうちこれぢや。さらば調子を聞かう。（と云うて。一ノ松にて扇にて手のひらを三ツ叩く。）シテ〽聟が參りて候。これ／＼御申し候へ。（フウと云うて。後を吟ずる。）小アド〽表がいかう騒がしい。何事ぢや知らぬ。シテ〽汝はこれの者か。（是より懐中聟に同じ。）小アド〽かうお通りなされませ。シテ〽心得た。（と云うて通り。三はりさしする。下に居て。三拍子にて。）シテ〽早々參り候べきを。何かと延引迷惑仕り候。其の段はお娘御に免じて御免候へ。（フウと云うて。後を吟ずる。）アド〽やい／＼太郎冠者。今のは何の眞似ぢやいな。小アド〽興がつた事で御座る。（聟殿律義ぢやと云ひ。舅聟の通りをする。）アド〽早々申受くべき所に。何かと延引迷惑仕り候。（聟の通り。）シテ〽不案内に御座る。アド〽初對面で御座る。シテ〽早々參るな。何かと延引致して御座る。アド〽聟殿は兼ねてお隙なしと承つて御座るに。今日の御出で忝う御座る。（これより盃を引くまで懐中聟に同じ。）シテ〽何事もかごとも。親子の契約する者は。唯平に御免候へ。アド〽も一つ參れ聟殿。シテ〽も一つ召せや舅殿。アド〽三々九度も重ぬれば。二人〽彼は酒興の餘りにや。聟も舅ももろともに。相舞まうてぞ入りにける。（二人面を見合はせ。フウと留めて入るなり。）

御田（おんだ）

シテ　賀茂明神の神主
立衆　早乙女
（入道具）

シテ〽斯様に候者は。當社賀茂の明神に仕へ申す神主にて候。每年御嘉例として今月今日神の御田を極め申す。則ち當社の氏子の早乙女寄集まり。神の御田を植ゑはじめ。神水を受けて。それより衆生の御田をも極め申せば。五穀成就し。民も裕に。子孫も繁昌にて。在々までも富貴すること。これまた當社の氏子たる故なり。漸ういつもの時分に相當りて候程に。早乙女どもを呼出し。御田を極めさせ申さばやと存ずる。いかに早乙女たち。漸ういつもの時分にて候程に。早々出て御田を極められ候へや。（と云うて。笛座の上の下にゐる。さゝりは打出す。一の松にて打上げる。）立頭〽神山の。同〽神山の。賀茂の川浪豊かなる。御十代御田を植ゑんとて。早乙女の袖を列

植。笠の端を並べつゝ、いざ御田植を急がんと。[illegible]の樣に[illegible]一　立衆ヘ苗代の。一同ヘ苗を作りのとろりと[illegible]すまし〳〵、水も豊に水口な。祭り[illegible]る[illegible]御田植ゑも程なく[illegible]ける。い〳〵。シテヘこれはいかなこと[illegible]。早乙女たちが[illegible]々と囃子[illegible]で出られた。頓て言葉をかけう。いかに早乙女たち。いつ〳〵とは申しながら、別して當年はきらびやかに出で立たれて候。何とて左樣に綺麗に出で立たれ候ぞ。立頭ヘそのことにて候。いつもとは申しながら。當年の樣な目出度い御田植は御座らぬに依つて。何れも綺麗に出で立ちて候。シテヘ尤もで御座る。水口を祭らうずる間。方々も肖揃へな召され。立頭ヘ心得ました。シテヘ參らせ候〳〵。敬つて白す。それ。春の種おろしは少くとも。一粒萬倍たるべし。凡そ當り來れる年號はよき年號。月の並びは十月二月。日の並びは三百五十餘ヶ日。しゆせつ和合して白銀(しろがね)の花咲き。黄金(こがね)の實成り。せまちに千束。萬に萬束と。よき日のよき時を以て。水口を祭りすまして幣を上げ。田植は早乙女。植ゑい植ゑい早乙女。立衆ヘ目出度い御田植に。苗代におり立ち。シテヘおり立ちて。〳〵。田植は早乙女笠買うて被せうぞ。立衆ヘ笠買うてたぶならば。[illegible]も田を植ゑうよ。シテヘいかに早乙女。宮[illegible]山に白百合の花の咲いた見たあ[illegible]。立衆ヘ八千代小苗植ゑて咲いたるぞ目出度さ。シテヘいかに早乙女。早苗取るとて手たとるぞなかしき。立衆ヘ取つたら[illegible]大事な。若い時の習ひよ。シテヘ早苗とる山田の筧もりにけり。立衆ヘ引き注連に[illegible]そかゝりたる。シテヘ五月(さつき)の早女房と春の鶯と。立衆ヘ聲くらべせう春の鶯と。シテヘいかに早乙女。懸想文が欲しいか。立衆ヘ懸想文たふならばさぞな嬉しからまし。シテヘ懸想文とつたり何にしようぞ。容貌(かほ)かわる。立衆ヘ面白い男のいうたことの腹立ち。シテヘまことに腹が立つかや。まことに腹が立つならば水鏡を見よかし。立衆ヘ早乙女の影映す苗代の。すみすみの水は鏡かは。シテヘ鏡は見たりとも。顏はよごれたり。立衆ヘ顏は汚れたりとも。想ふ人は持ちたり。シテヘいかに早乙女。此の所の山々に花の咲いた見たるか。立衆ヘまことに幾度見たれば。黄金の花も咲きたる。シテヘあう目出度や。立衆ヘ目出度や。シテヘ實に目出度かりけり。まことに目出度かりけり。立衆ヘ目出度い御代には。千丈萬丈富ふれり。ふれりや〳〵富ふれり。シテヘや。

【か】

柑子(かうじ)

シテ　太郎冠者
アド　大名

アドヘこの邊りの者で御座る。夜前さる方へ振舞に參つて御座れば。菓子に見事な柑子が出た。取上げて見れば三つ成りであつた。世に二つ成りさへ珍しいに。まして三つ成りは稀な物ぢや。土産にせうと存じて。太郎冠者に持たせて置いた。呼出して尋ねうと存ずる。（ト云うて。呼出す。常の如し。）汝呼出すは別の事でない。何と夜前はいつ〳〵よりも大御酒ではなかつたか。シテヘ御意なさるゝ通り。何れも御機嫌と見えて御座る。アドヘそれにつけて菓子に見事な柑子が出た。取上げて見れば三つ成りであつた。世に二つ成りさへ珍しいに。まして三つ成りは稀なものぢや。土産にせうと思うて。汝に持たせて置いた。急いで此方へ渡せ。シテヘ夜前は下々(したじた)も大御酒を下されて。何がどう御座つたやら覺えませぬ。アドヘ是は如何な事。如何に酒を呑めばとて。覺えない程

飲むといふ事があるものか。慥に汝に持たせて置いた。急いで此方へ渡せ。シテへさう仰せらるゝに就いて。思ひ出して御座る。アドへまた思ひ出さいでならうか。シテへ世に二つ成りさへ珍しいに。まして三つ成りは稀なものぢや。大事にかけうと存じて。鎗の鐺首元にきつと結付けて參つて御座る。何とやら一つほぞ拔け致して。ころ／＼と落ちましたに依つて。頓て詞を掛けて御座る。アドへ何と掛けた。シテへ柑子文の出すといふことがある。止まれ／＼。と申して御座れば。草木心なしと申せども。柑子には心が御座るやら。木の葉の一葉をたてについて。乾度止まつて御座る。尤も止まつた所はやさしけれども。つれなう落ちた所が憎いと存じて。頓て取上げまして皮を剝き。中の白筋などを去りまして食ひまして御座る。アドへ是は如何なこと。それを食ふといふことがあるものか。さりながら。食うたとあれば是非に及ばぬ。殘つた二つの柑子を急いで此方へ渡せ。シテへそれから大事に掛けまして。懷の中へ入れて參つて御座る。アドへそれは出來した。シテへいつもお叱りなさるれども。夜前のお供は晴れがましいと存じて。例の角鍔をさいて參つて御座る。すはお立ちと申せば。何が大勢のお供が立ち騷ぎ押合ひまするうちに。懷のうちが冷いやり致いたに依つて。異なことぢやと存じて。そつと手を入れて見ましたれば。大事のことの。アドへ何と。シテへ角鍔に押されてまた柑子が一つ潰れて御座る。アドへこれは如何なこと。シテへこれも潰れたものは御役に立つまいと存じて。此度は皮をも去りませず。其の儘すゝり食べに致いて御座る。アドへそれぢやに依つて角鍔をさし居るなといふに。さし居るに依つての事ぢや。何のかのというて。柑子をみな食うた。これとても食うたものは是非に及ばぬ。殘した一つの柑子を急いで此方へ渡せ。シテへその一つ殘した柑子に依つて。憐れな物語が御座る。御聞きなされませ。アドへいや／＼物語は聞きたうない。早う柑子を此方へ渡せ。シテへ一は柑子の爲めで御座る。御聞きなされませい。アドへそれならば聞かう程に。急いで語れ。シテへ畏まつて御座る。語扨も平相國の御時。三人の流人有りし。丹波の少將成經。平判官入道康頼。俊寛僧都。かの鬼界が島に流さるゝ。二人は赦免あつて。俊寛一人鬼界が島に殘しおかるゝ。其の如く三つありし柑子が一つはほぞ拔け。ひとつは潰れ。はや太郎冠者が六はらにをさまりぬ。人と柑子はかはれども。思ひは同じ涙なり。アドへ扨も／＼汝は憐れな物語を思出した。古への俊寛のお心のうちが察じやられてお傷はしいなア。シテへ左樣で御座る。アドへこれは古への俊寛の物語。今の殘つた柑子を急いで此方へ渡せ。シテへその一つ殘つた柑子は。物と致いて御座る。アドへ何と。シテへ物と。アドへ何と。シテへ是も太郎冠者が六波羅に納めて御座る。アドへあのやくたいもない奴。しさり居れ。シテへハア。アドへエイ。シテへハア。ト云うて。留める。

柑子俵（かうじだはら）

シテ　柑子買
アド　山家の者
小アド　山家の者の子
（入道具）

シテへ此邊りに住居致す者で御座る。何かと申す内にはや年の暮になつて御座る。いつも丹波へ參り柑子を買集めて。さて都の町へ出して商賣致す。やう／＼例年の時分で御座る。柑子を取りに參らうと存ずる。シカ／＼。

誠に。山坂を越えて渡世致す事辛勞に御座れども、年々斯樣の商賣を致しつけて。今更外の事も存ぜず。是も手を違ふ事で御座る。何かと申す内丹波の山家へ着いた。則ち此家にも柑子を求めておいた。まづ案内を乞はう。ト云うて。常の如し。アド〽是は早御下りで御座るか。シテ〽正月も近附きまする。柑子を取りに來ました。アド〽いつもよりは早う御座つた。シテ〽先へよれば雪も恐ろしいによつて。ちと早う來ました。扨柑子の代銀は先達て下したが。定めて受取らせられたで御座らう。アド〽成程代物は確に受取りました。シテ〽さて柑子を俵へ入れて置かつしやれたか。アド〽いや未だ何も用意も御座らぬ。シテ〽それならばもそつと奥へいて來ませう程に。其間に柑子をいつもの樣に俵へ入れて。しつかりと括つておいて下され。アド〽成程心得ました。まづ奥へいておりやれ。ト云うて。常の如し。アド〽是はいかな事。先達てあの者へ賣つた柑子をば、外へ欲しいと申した程に。幸ひ代物の入用もあり。先へ賣つて遣した。その内あの柑子買が參つたらば。何卒柑子を外で才覺して渡さうと存ずる内に。以ての外早う取りに參つたによつて。差當つて致しやうがない。何とせうぞ。イヤ思出した事がある。かな法師あるか。出る。常の如し。汝を呼出す事別の儀でない。定めてわごりよ親の云ふ事は何事によらずお聞きあらうなあ。小アド〽今めかしい事を仰せらるゝ。親の云ふ事を子として背くといふ事が御座らうか。アド〽尤もでこそあれ。近頃親子の中で云難い事なれども。そちを頼む事がある。いつも來る柑子買に。當年も柑子を約束して。はや代物まで受取つたまゝ何とやら。その賣つておいた柑子を又賣して。今日柑子がない。かの柑子買が追付け取りに來る筈ぢやによつて。そなたを俵の內へ入れてやらうず。何卒路次で柑子が化けた體にもてなし。きやつを威して逃げ戻れ。是を頼まうといふ事ぢや。小アド〽人をだますは科になると。寺のお師匠の堅う云付けさせられて御座れども。親の爲に致す事ぢや程に。成程參りませう。アド〽近頃滿足した。それならば拵へて置かう。ト云うて拵へる。アド〽さて。追付け柑子買が來たらば渡す程に。云ふ迄はないが。隨分首尾よう仕おほせて。頓て戻らしめ。シテ〽扨も〳〵。此年の樣な思ふ儘な幸はない。皆買集めて置いた柑子は荷移りがようて。皆馬に附けて上した。今一俵は某が背負うて上れば。辛勞にあれども寒氣を凌いで結句暖かにあらう。なんと都へ上つて仕合せを致さうと存ずる。亭主御座るか。アド〽是は戻らせられたか。シテ〽何と俵へ入れておかつしやれたか。アド〽成程とくと認めておいた。何時なりとも取つて行かしめ。シテ〽どれ。どこにある。アド〽是にある。シテ〽何と腐りはないか。アド〽いかな〳〵。一つも疵はない。シテ〽口をあけて見よ。アド〽ハテさて。折角繩をかけておいた。最早いらはずとおかしめ。一つでも惡いがあらば後で聞かうぞ。シテ〽いつも買ふ事ぢや。數に違ひもあるまい。アド〽今初めて賣るではなし。何の違ひがあらうぞ。シテ〽それならば背負うて、手傳うて呉れさしめ。アド〽心得た。シテ〽是はしつかりと持ちおもりがする。アド〽其筈ぢや。雨續きがよし。柑子がしたゝかよう出來た。シテ〽それは嬉しい。仕合せをしたらば裾分けをせう。アド〽それを待つ事ぢや。シテ〽又明年參らう。もはや參るぞ。ト暇乞ひ常の如し。シテ〽なう〳〵嬉しや。ざつと埒があいた。まづ急いで上らう。シカ〳〵。誠に。十分の首尾ぢや。いつも代物を先へ渡せば。柑子を受取る時分に何のかのと云うて隙をとる。代物を後

に渡せば、其内に餘の者が買うて了ふ。とかく思ふ樣にない。今年の樣な持のあいた事はない。何でも仕合せな致さう。扨これは兎角持ちおもりする。ちと下して休まう。小アドへ下すな／＼。シテへ誰ぢや。今下すなと云うたによつて見れば。あたりに人ぎれはないが。小アドへ木魂であつたものぢや。まづ下さう。小アドへ下すな／＼。シテへ合點のゆかぬ事ぢや。人影もないに物を云ふは氣味の惡い事ぢや。まづ休まずとも行かう。小アドへ靜かに行け／＼。シテへさあ／＼是は狐か狸の業であらう。アア氣味の惡い事ぢや。兎角道を急がう。小アドへヤイ／＼急ぐな／＼。シテへワア。是は俵の内から物を云ふ。是は合點のゆかぬ事ぢや。まづ下さう。小アドへ下すな／＼。シテへ是はいかな事。柑子が化けたさうな。終に柑子の化けた事を聞いた事がない。扨々迷惑な事ぢや。小アドへヤイ俵の口を解けいやい／＼。シテへ解くわいやい／＼。ト云うて解く。中より出て。取つて喰まうと云うて追込み入るなり。仕樣口傳。解く内シカ／＼云ふべし。

膏藥練（かうやくねり）

シテ　上方の膏藥練

アド　鎌倉の膏藥練

（入道具）

アドへ是は鎌倉に隱れもない膏藥練の大名人で御座る。某が膏藥ほど強い膏藥はあるまいと存ずる所に。又上方にも強い膏藥を練出すと申す。此度都へ上り。膏藥なすはせ較べて見うと存ずる。シカ／＼。誠に。某の膏藥ほど強い膏藥はあるまいと存ずるに。上方にも強い膏藥を練出すと申せば。そつとも油斷のならぬ事で御座る。すはせ較べたらば。樣子が知れうと存ずる。是迄參つたれば殊の外草臥れた。暫く休んで參らうと存ずる。シテへ上方に隱れもない膏藥練の大名人で御座る。某が膏藥に續く膏藥はあるまいと存ずる所に。又鎌倉にも膏藥練の上手があつて。強い膏藥を練出すと申す。此度尋ねて下り。膏藥なすはせ較べて見うと存ずる。シカ／＼。先づ急いで參らう。誠に。商賣の事で御座るに依つて。そつとも油斷は致されども。又鎌倉にも強い膏藥を練出すと申せば。なか／＼油斷のならぬ事で御座る。ハテ異な事の。是迄參つたれば。俄に松脂臭うなつた。アドへハテ異な事の。俄に松脂臭うなつた。シテへあれ／＼どこに松脂を取扱ふ事ぢや知らぬ。アドへ合點の行かぬ事ぢや。シテへ頻りに匂ふ。ト互ひに手にて鼻をとり。行きあたる。アドへヤイそこなやつ。シテへ何ぢや。アドへおのれは憎いやつの。この廣い街道をよけては通らいで人に行きあたる。先づお主は何者ぢや。シテへ此方からこそ云分があれ。この廣い街道をよけては通らいで人に行きあたる。先づ汝は何者ぢや。アドへ身共を知らぬか。シテへイヤ知らぬ。アドへ身共は鎌倉に隱れもない。膏藥練の大名人でおりやる。シテへあのお主がや。アドへなか／＼。シテへして何と。アドへ凡そ身共が膏藥ほど強い膏藥はあるまいと存ずる所に。又上方にも強い膏藥を練り出すと聞いたに依つて。此度尋ねて上り。膏藥なすはせ較べて見うと存じて是迄來たれば。しきりに松脂くさうなつて。今そなたに行當つた事でおりやる。シテへ扨はさうでおりやるか。何を隱さう。身共は上方に隱れもない膏藥練の大名人でおりやる。アドへあのそなたがや。シテへなか／＼。アドへして何と。シテへ某が膏藥ほど世に強い膏藥は無いと思ふ所に。又鎌倉にも強い膏藥を練り出すと聞いたに依つて。此度尋ねて下り。膏藥なすはせ較べて見うと思うて是迄來たれば。しきりに松脂くさうなつて。今わごり

よに行き當つた事でおりやる。アドへ扨はさうでおりやるか。爰で逢つたこそ幸ひなれ、暫く此處に逗留して。互ひに系圖をも語り。薬種をもあかしあひ。其後膏薬をすはせ較べて見うと思ふが。何とあらう。シテへこれは一段とよからう。アドへ先づ下にお居やれ。シテへ心得た。アドへ扨そなたの系圖から語らしめ。シテへ先づわごりよの系圖から語らしめ。アドへ語らう程にようお聞きやれ。シテへ早く語らしめ。アドへ昔鎌倉殿の御時。いけづきと申す名馬があつた。何とかしつらう。かの御馬が放れた。何が大きな馬ではあり。かんは強し。取つて出る程に。雲を割つて隠る。諸人これを見て。何となるぞと思へども何ともならず。はや御馬は遠うなつて。やう〳〵犬程に見えた。犬程かと思へば猫程になり。猫程かと思へば雀程になつた。シテへフン。アドへ其時身共が先祖通り合せ。あのお馬をとめたう思召さば。某一人してとめて參らせうずると申上げたれば。諸人一度にどつと笑はせられた。シテへさうであらう。アドへいや〳〵さのみな笑はせられそ。さらば留めて參らせうずるとて。腰なる胴亂よりかの膏薬を取出し。僅か山椒の芽程引きちぎり。指の腹につけ。息をはつとしかけ。かの御馬にちゝと向はせたれば。さ〳〵ほう強い膏薬ではないか。シテへ何とであつた。アドへそつとも向ふへ歩む事がならぬ。シテへさうであらう。アドへ雀程に見えたものが。猫程になり。猫程に見えたものが犬程になり。吸ふ程に〳〵ずら〳〵ひつたりと指の腹まで吸ひ寄せて。サア繋がせられいと申したれば。鎌倉殿は申すに及ばず。諸人肝を潰させられた。シテへさうであらうとも。アドへなのめならず御感の餘り、この膏薬の銘は何と云ふぞとお尋ねあつた。未だ定まる銘も御座らぬと申したれば。馬吸膏薬と銘を下され。あまつさへ膏薬司を頂戴した。何と聞き事な系圖ではないか。シテへ扨々聞き事な系圖でおりやる。身共がのはそれ程にはあるまいが。語らう程にようお聞きやれ。アドへ心得た。シテへ昔禁中に於いて。清涼殿の東の方にお庭を作らせらるゝ。ある人奏聞申しけるは。北嶺山の麓に見事なる大石のある由申上ぐる。さらば其石引けとあつて。洛中洛外より八千人の人足を以て。やう〳〵内裏の築地迄は引寄せたれども。大石なれば御門は通らず。築地を持ち越す事がならぬ。其時身共が先祖通り合せ。此石入れたう思召さば。某一人して入れて參らせうずると申上げたれば。公卿殿上人諸人一度にどつと笑はせられた。いや〳〵さのみな笑はせられそ。さらば入れて參らせうずるとて。腰なる火打袋よりかの膏薬を取出し。僅か芥子粒程引きちぎり。指の腹につけて。息をはつとしかけ。かの石に向はせたれば。なんぼう強い膏薬ではないか。アドへ何とであつた。シテへむつくり〳〵と地ばなれがして。難なく築地を持ち越した。迚もの事に置き所も好ませられいと云うて。お好みの所まで吸はせていて。下にどうど置いたれば。大地震のゆる如くであつた。アドへさうであらうとも。シテへなのめならず御感の餘り。その膏薬の名は何とあるぞとお尋ねの時、未だ定まる名も御座らぬと申上げたれば。石吸膏薬と銘下され。膏薬司を頂戴したが。今もその石が内裏にあつて。其時の膏薬かぶれの跡が少し殘つて見ゆると云ふ。なんぼう強い膏薬ではないか。アドへ是も聞き事な系圖でおりやる。此上は薬種をもあかし合はうと思ふが何とあらう。シテへ是は一段とよからう。アドへわごりよの薬種は何を使ふ。シテへ先づそなたの薬種は何を使ふぞ。アドへ身共のは別に縫

つた物も無いが。先づ海に生える竹の子。シテ〽ホイ。アド〽蚤の牙の一尺八寸あるの。シテ〽ホン。アド〽雷のまつ毛。シテ〽シタリ。アド〽先づ此様な物でおりやる。シテ〽扨々珍らしい薬種でおりやる。アド〽わごりよの薬種は何な使ふ。シテ〽身共が薬種は別に變つたものもないが。先づ經な飛ぶどぶ鑑。うけてシテの通り云ふ。シテ〽榎の木になつた蛤。六月の十三日に降つた雪の黒焼。其外家傳の薬種が二三味もいろ事でおりやる。アド〽扨々珍らしい薬種でおりやる。此上は膏薬な吸はせ較べて見ようと思ふが何とあらう。シテ〽それは身共も望む所ぢや。さて何處につけて吸はせう。アド〽先祖も指の腹であつた程に。矢張り指の腹につけて吸はせう。シテ〽尤もなれども。惣じて。人間の身に鼻程強いものはないと云ふ。鼻につけて吸はせう。アド〽是は一段とよからう。シテ〽先づ身拵へをおしやれ。アド〽心得た。シテ〽拵へがよくばあれへお出やれ。アド〽心得た。シテ〽さらば膏薬をむかはせう。アド〽一段とよからう。二人イヤ〳〵と合す。アド〽先づ鎌倉の方へ吸ひ寄せて見せう。シテ〽いかな〳〵。吸ひよせらるゝ事では無い。アド〽いや吸寄せて見せう。やつとな。シテ〽ホイ。ト三度引き寄せる。アド〽何と〳〵。シテ〽扨々強い膏薬ぢや。さりながら此度は上方の方へ吸ひ戻して見せう。アド〽いかな〳〵。吸ひ戻さるゝ事ではない。前の如く。シテ柱の方へ吸ひ戻す。アド〽今度は鎌倉の方へ捻ぢゆがめて見せう。シテ〽いかな〳〵。ねぢゆがめらるゝ事ではない。前の如く三度。仕方口傳色々シカ〳〵云ふ。アド〽扨々強い膏薬ぢや。此度は鎌倉の方へしやくり引きにして見せう。シテ〽いかな〳〵。しやくらるゝ事ではない。仕方口傳。シテしやくり戻す。三度め。アド〽南無薬師 トこける。シテ〽勝つたぞ〳〵。アド〽やい〳〵。やいそこなやつ。シテ〽何ぢや。アド〽今のは負けたのではない。足の裏に松脂がついて滑りこけたのぢや。シテ〽あの卑怯者。勝つたぞ〳〵。アド〽も一度戻つて勝負をせい。シテ〽ならんぞ〳〵。アド〽あの横着者。やるまいぞ〳〵。ト云うて。後より追込み入る也。

鏡男（かゞみをとこ）

シテ　田舎人
アド　鏡賣
女　妻
（入道共）

シテ〽越後の國松の山家の者で御座る。永々在京致す處に訴訟悉く相叶ひ。安堵の御教書を頂戴致し。唯今國許へ罷歸る。先づ急いで參らう。シカ〳〵。誠に。國許を出る時は。いつ戻らうと思うたに。早速埒が明いて。此の様な嬉しい事は御座らぬ。罷歸つたらば。さぞ一門共も悦ばうと存ずる。イヤはたと失念致した事がある。女共が方へ。何なりとも重寶になる土産を取らせうと約束致したを。ほうど忘れた。何ぞ求めて行き度いが。イヤ爰に色々の店を出した。これは何を求めうと儘な事ぢや。なう〳〵。その美しいは帯で御座るか。アド〽なか〳〵。帯で御座る。シテ〽又その丸い光る物は何で御座る。アド〽鏡で御座る。シテ〽鏡とは何の事で御座る。アド〽鏡を知らせられぬか。シテ〽いや。何になる物ぢやも存ぜぬ。アド〽先づ和御寮の國は何處ぢや。シテ〽越後の國松の山家の者で御座る。アド〽松の山家に鏡は無いか。シテ〽名を聞いたも今が初めて御座る。アド〽是は鏡と言うて寶物でおりやる。天照大神の御眞影と申すも此の鏡の事なり。わけて女の爲めには雙びない重寶でおりやる。シテ〽それは何故重寶になりまする。アド〽惣じて。女は形を

大事にする。されども。我と我が姿は見られぬ。此の鏡を前に置いて向へば。我が姿がありありと見ゆる事ぢや。シテ〽あの鏡で我が姿が見えまするか。アド〽なか〳〵。シテ〽どれ見させられい。はあ。是は見えませぬ。アド〽それは裏ぢや。表を見やれ。シテ〽どれ〳〵。表を見ませう。わあ。是は中に人が在る。アド〽それは和御寮の顔ぢやわいの。シテ〽これは如何な事。扨も〳〵能う見えまする。初めて私の面(つら)を見ました。アド〽何と重寶な物で御座らうが。シテ〽是は重寶な物で御座る。求めませうが。代物は何程で御座る。アド〽五百疋でおりやる。シテ〽それは高直に御座る。もそつと負けて下され。アド〽イヤ負けはない。否ならば止しに召され。シテ〽それとても求めませう。則ち代物は三條の大黒屋で渡しませう。アド〽成程。大黒屋存じた。あれで請取るであらう。シテ〽もかう參る。アド〽何とお行きやるか。シテ〽なか〳〵。二人〽さらば〳〵。シテ〽なう〳〵。嬉しや〳〵。重寶な珍らしい物を調へた。天照大神の御眞影も此の鏡ぢやといはるゝ。されば昔は神物で。容易く人間の手に觸るゝ事もならぬに。今この御代目出度ければ。上方にては上の方下々までも拜[illegible]すとはいへど。我が住む山家などでは。見た事はさて置き。話に聞いた事もない程に。國許へ下つたらば。女共は申すに及ばず。在所の者までも悦ばうと存ずる。扨も〳〵明らかに寫る。ト[illegible]を見て笑ふ。これは女の爲めには[illegible]でない重寶ぢや。此の鏡に向ひ。[illegible]紅白粉をつけて。身を嗜めば。醜い顔も麗しうなる。又男の爲めにも重寶ぢや。先づ若く旺んなる體を見ては滿足し。年寄りたる體うつらば。物事を學へ、分別し。老い屈まりたる體うつらば。何とぞして世を渡る營を遁れ。身を安うして佛道修行するならば。現當二世を取外すまいと。思ふは此の鏡で御座る。扨も〳〵。あり〳〵と見ゆる事かな。イヤ我ながら現(うつゝ)ない顔かな。ありや〳〵。笑ふは〳〵。笑ふ。さて〳〵機嫌のよい顔ぢや。イヤ又機嫌の惡い筈がない。訴訟は叶ふ。御暇は下さるゝ。腹の立たう樣がない。さりながら。今度はちと腹を立てゝ見う。なう〳〵。恐ろしや〳〵。腹を立てゝ向へば。忽ち繪に描いた夜叉ぢや。さて〳〵凄じい事かな。是に就いて思ひ當る事がある。在京中所々の寺々へ詣つて。說法を聽聞申して御座る。心から地獄へも墮ち極樂へも生まるゝと說かれた。眞(ま)つさうぢや。腹を立てて向へば。全く夜叉の如くに見ゆる。このやうな事を思うては。假にも怒る心は持たう事では御座らぬ。程なう松の山家に着いた。則ち私宅はこれぢや。先づ女共を呼出さう。なう〳〵。是の人。居さしますか。今下つておりやる。女〽是のうが戻らせられたさうな。なう〳〵嬉しや。戻らせられたか。シテ〽今戻つておりやる。女〽やれ〳〵。御息災で下らせられて嬉しう御座る。シテ〽なる程。身共も無事で下る。そなたも息災さうで嬉しうおりやる。女〽さて内々の御訴訟の事は何とで御座る。シテ〽されば十分の仕合はせぢや。悦ばしめ。女〽妾はそれのみ案じて居りましたに。此の樣な目出度い事は御座らぬ。シテ〽さて久々で下る事なれば。そなたへも何がなと思うたれども。別に土産もないぞ。女〽これは今めかしい事を仰せらるゝ。そなたの首尾よう息災で戻らせらるゝこそ嬉しけれ。何の土産が入りませう。シテ〽さりながら。そなたにおませうと思うて。世に稀な寶を求めて來た。追付けおませうぞ。女〽何で御座るの。シテ〽これ〳〵。之を見さしめ。女鏡の裏を見て。女〽扨も〳〵美しい物で御座る。松もあり。

竹もあり。シテへイヤそれは裏ぢや。表を見さしめ。女へ是は裏で御座るか。シテへ表をお見やれ。肝が潰れよう。女へわあ。中に女が居る。シテへそれは中に女が居るではない。もとそれは鏡と言ふ物で。一切向ふ物の影を映す物ぢや。お主が向ふに依つて。そなたの姿が映る。女へエヽ腹立ちや〳〵。これ程中に女が居るに。其の樣な事を言うて。妾を騙し居るかいやい〳〵。シテへ惡い合點な人ぢや。能うお聞きやれ。今言ふ通り。是は鏡と言うて。何でも向ふ物の影を映す物ぢや。扇を映せばあの如く扇が映る。お主が向へばそなたの影が映る。女へエヽ腹立ちや〳〵。中な女めがお主に吸付いた樣にして居をる。身が燃えて。腹が立つわいやい。シテへそれはそちが身共の側へ寄る。そちが影と一緒に見ゆるのぢや。女へ何の一緒に見ゆるといふ事があるものぢや。あれ〳〵。うすどほや〳〵。妾が此の樣にいへば。中の女が食ひつかうといふ樣な顏をしてなるわいやい〳〵。シテへそれもそちが腹を立てゝ向ふその顏ぢやわいやい。女へまだぬかし居る。永々在京中淋しからうと思うたに。能う此の樣な事を拵へて居たなア。おのれを何とせう。シテへ如何に女ぢやと言うて。餘り不合點な事ぢや。よい〳〵。そちに持たせて置くに依つてぢや。こちへよこせ。餘所へやる。女へ妾に見附けられて。しよう事がなさに餘所へ遣る。それならば。なぜ遙々連れて來た。己れに騙される事ではないぞいやい〳〵。シテへ扨もよしない物を求めて來て。迷惑をする事かな。女へ思へば〳〵腹が立つ。己れを存分にせねばならぬ。ト摑み附く。シテ逃げる。追廻はし追込み入る。

柿山伏（かきやまぶし）

シテ　山伏
アド　百姓
（入道具）

シテ次第へ貝をも持たぬ山伏が。〳〵道々嘘を吹かうよ。山伏名宣り。シカ〳〵。外の山伏狂言に同じ事なり。シテへ今朝齋の儘なれば咽が乾く。湯なりとも茶なりとも飲みたいものぢやが茶屋もなし。あれに見事な柿が出來てある。あの柿を一つ喰うたらば咽の乾きも止まうが。やあ〳〵そこもとに柿主は居ぬか。あの柿が一つ所望ぢやが。人音もせぬ。まづ飛礫を打つてみよう。ト云うて飛礫を打つ。二度打つてみる。中々そばへも行かぬ。さらば此刀でかつてみよう。ト云うて。小さ刀を拔き。二度かけてみる。いかな〳〵。届く事ではない。これによい足掛りがある。此枝を傳うて木の空へ登らう。ト云うて登る。シカ〳〵を云うて柿を喰ふ。いろ〳〵あるべし。種を吐出す趣専一なり。アドへ此邊りの耕作人で御座る。此間は畑へ見舞はぬ。今日（けふ）は柿の木畠へ參らう。シカ〳〵。百姓といふものは。年の始り年の暮迄忙しうない事は御座らぬ。何かといふ内身共が畠ぢや。異な事の。足跡がある。ト云うてみる内。シテ種を吹掛くる。アドの頭へあたる心なり。アドへ扨も〳〵憎い事かな。山伏が柿の木へ登つて。柿を盗んで喰ひをる。やい〳〵。シテ隠れる心なり。アド笑ひて。アドへあの大きななりで。木の陰へかごうだといふて見えまい事は。愚かな山伏ぢや。ちとなぶつて歸さうと存ずる。柿の木に登つてゐるを。人かと思へば人でない。シテへまづ人でないと云ふは。アドへ犬ぢや。何として柿の木の空へ登つてゐるぞ。シテへ犬には見えまい事ぢやが。アドへ犬ならば人音を聞いておどしさうなものぢやが。シテへ犬の啼く眞似をせう。ト云うて啼く。犬の眞似をする。アドへ扨も〳〵上手に眞似をする。犬かと思へば目が違うた。あれは猿ぢや。山近くぢやによつて來る筈ぢや。シテへまた猿ぢやと云ふ。猿には見えま

い事ぢやが。アドへ猿はみせゝりをして啼くものぢや。啼かうぞよ。シテへ是も啼いて悦ばせう。ト云うて。キヤ〳〵と云うて身ぜゝり。猿の眞似する。アド笑ふ。アドへ扨も〳〵面白い事かな。今一つ見れば鳶ぢや。シテへまた鳶ぢやと云ふは。アドへ鳶ならば。羽をのして啼きさうなものぢやが。シテへ是も眞似をせずばなるまい。ト云うて。扇にて羽をのす體をする。扨ヒイヨロ〳〵と云うて羽たゝきする。アドへありや〳〵。羽をのした。さて羽をのして啼いてからは飛ぶものぢや。追付け飛ぶであらう。シテへこの高い處から飛べと云ふ。これが何と飛ばるゝものぢや。アドへ飛ばずば鐵砲を持つて來い。打殺してのけう。シテへ南無三寶。こりや飛ばずばなるまい。アヽ飛ばれうか知らぬまで。アドへあれ〳〵。飛ばうと思うて羽繕ひをするは。飛ばうぞよ〳〵。飛びさうな〳〵。ト云うて囃す。拍子に合はす。拍子はやまり。シテ飛ぶ。アドへありや飛んだ。ト云うて笑ふ。シテへヤイそこな者。おのれは憎いやつの。この貴い山伏を。最前から鳥類畜類に喩へ居る。剩さへ鳶ぢやと云うた。山伏の劫を經たは鳶にもなると聞いたによつて飛んでみたれば。まだ産毛も生えぬにあの高い所から飛ばせをつて。したゝか腰の骨を打ちをつた。おのれが所へ連れていて看病せい。アドへ貴い山伏が柿を盗んで喰ふものか。シテへ看病をせずば目に物を見するぞよ。アドへそりや誰が。シテへ身共が。アドへ柿を盗んで喰ふやうな山伏が。目に物を見すると云うて。深しい事はあるまいぞ。シテへ構へて悔やむなよ。アドへどのやうに悔やまう。シテへ悔やむな男。葛嶺の雲を凌ぎ年行の。功を積む事一食斷食。立行居行。斯程貴き山伏に。諸神諸佛我に力を添へ給へと。いらたかの珠數のつめをに入れたるを。さらり〳〵と押揉んで。一祈りこそ祈つたれ。ぼろおん〳〵。祈も常の如し。アドへあれは何をぬかし居る。あの様な者には構はぬがよい。急いで歸らう。ト云うて。橋掛りへゆく。一の松より苦しむ體にて。ヒヨロ〳〵として戻る。シテの前にこける。シテへ貴い山伏は此様なものぢや。連れていて看病せい。アドへなう〳〵恐ろしや〳〵。こちへわたれ。ト云うて。シテを負ひて入るなり。

隠狸（かくしだぬき）

シテ　太郎冠者
アド　主人
（入道具）

アドへ此邊りの者で御座る。某一人召使ふ太郎冠者が。狸を釣ると承つて御座る。呼出し尋ねうと存ずる。ト云うて呼出す。出るも常の如し。汝呼出す別の事でない。聞けばそちは狸を釣ると云ふ事ぢやが。誠か。シテへ是は存じもよらぬ事を承りまする。私はつひに狸を釣つた事は御座りませぬ。アドへいや〳〵。うそをいはぬ人が仰せられた。かくさずとも有り様に云へ。シテへ何程仰せられても。つひに狸を釣つた事は御座りませぬ。アドへ扨はしかと釣つた事はないか。シテへ左様で御座る。アドへそれならば。身共は早やまつた事をした。シテへ何となされました。アドへ汝が狸を釣ると聞いたに依つて。狸汁をして各を申入れうと云うて。はや人を廻した。今にもお出でなされたらば。何としたものであらう。シテへ是は又早まつた事をなさりました。今にも各お出でなされたらば。何となされます。アドへ是非に及ばぬ。汝は太儀ながら。市へいて狸を求めて來い。シテへ畏まつては御座れども。市へ狸を持つてづる物やら。又持つて出ぬ物やら存じませぬ。是は御ゆるされませ。アドへいや〳〵。確に市へは持つて出ると聞いた程に。求めて來い。シテへ其上値が何程致すやらも存じませぬ。是はどうぞ御ゆるされて下され

ませ。アドへそれならば次郎冠者なりともやらう迄よ。シテへ扨は是非ともお求めなされねばなりませぬか。アドへどうあつても求めねばならぬ。シテへ左様ならば私が參りませう。アドへ行くか。シテへなか〳〵。アドへそれならば云ふ迄はないが。隨分念を入れて大狸を求めて來い。シテへ其段はそつともお氣遣ひなされまするな。アドへ急いでいて。頓て戾れ。ト云うてつめる。シテうける。常の如し。シテへ是はいかな事。身共が狸を釣るを。たが申上げて御存じぢや知らぬ。成程夜前大狸を一疋釣つて來て。今朝市へ持つていて賣らうと存じて。宿元にしたゝめて置いた。是は先づ何としたものであらうぞ。イヤ先づあの狸は市へ持つていて賣つて。後はどうなりともなり合に致さう。先づ急いで市へ參らう。シテ中入。アドへ是はいかな事。太郎冠者が狸を釣るを。全體身共に隱すと見えたさり乍ら。きやつは酒を一つ飲ませれば。隱す事も有り樣に申す。今日は市へさゝえを持つて參り。樣子を見うと存ずる。先づ急いで參らう。誠に。確に狸を釣ると承つては御座れども。しかとした證據を見ぬに依つて。是非とも申されぬ。今日市へ參つたらば。大方樣子が知るゝで御座らう。イヤ何かと申す内に市がちや。是はまだ市の樣子も早さうな。其上太郎冠者もまだ來ぬと見ゆる。暫く此所に待つて居ようと存ずる。シテへ狸は〳〵。

大狸賣らう。狸はいらぬか。狸々。あゝこれ〳〵。そこ許へ此樣な大狸はいらぬか。狸を賣らう。狸々。アドへされぱこそ是へ參つた。エイ太郎冠者。シテへエイ賴うだお方。アドへ何と狸は賣るゝか。シテへエヽ。アドへいやさ狸は賣るゝかと云ふ事ぢや。シテへ私は狸を買ひにこそ參れ。賣らうとは申しませぬ。アドへでも今賣らうと云うたではないか。シテへどこに申しました。アドへハテたつた今云うたではないか。シテへあの申しましたか。アドへなか〳〵。シテへハテ合點の行かぬ。何がお耳にとまつた事ぢや知らぬ。エヽそれは物で御座る。アドへ物とは。シテへ狸を賣らうならば買はうと申す事で御座る。アドへ扨々持つて廻つた買ひ樣ぢやなあ。シテへはあ。アドへして狸が有つたか。シテへ今朝に限つて一疋も持つて出ぬと申します。アドへいや〳〵。まだ市の樣子も早さうな。追付け持つて出るであらう。シテへ此の樣子ならば。最早持つて出ますまいによつて。私はもうかう歸らうかと存じまする。アドへなぜ

に其樣に氣をせく。身共は是で酒を吞まうと思うて。さゝえを用意した。そちにも振舞ふ程に。暫くそれに待て。シテヘ是はいかな事。この市場で酒を上りましたらば。人が笑ひませうぞ。アドヘ笑うても苦しうない。暫くそれにまて。シテヘそれは御無用になされませ。申し〳〵。是はいかな事。是は何としたものであらう。扨々迷惑な事ぢや。ト云うて。狸を隱すの仕方色々。工夫あるべし。口傳なり。アドヘさあ〳〵太郎冠者。酒を取つて來た。シテヘどうあつても上りまするか。アドヘさあ〳〵先づ下に居よ。シテヘ是は惡うは御座りますまいが。變つた思召しで御座る。アドヘさて身共から吞うで汝へさゝう。シテヘそれならばお酌を致しませう。アドヘいや〳〵身共は手酌がよい。扨是を汝へさゝう。シテヘ左樣ならばいたゞきませう。アドヘ身共が酌をしてやらう。シテヘ是はお酌慮外で御座る。アドヘ苦しうない。丁ど吞め〳〵。ト云うてつぐ。受けて吞む時心持あるべし。アドヘ何とあつた。シテヘ扨々結構な御酒で御座るが。是はどこの御酒で御座る。アドヘそちに酒を振舞うて惜しうない。是は身共が宮酒にたぶる遠來ぢや。シテヘなに御遠來。アドヘなか〳〵。シテヘさればこそ。私が並ならぬ結構な御酒ぢやとしたゝ覺えた事で御座る。アドヘ氣に入つたらば。も一つ吞め。シテヘ左樣ならばも一つ下されませうか。アドヘ又身共が酌をしてやらう。シテヘ是は度々お酌慮外で御座る。アドヘ苦しうない。シテヘあゝ御座ります〳〵。アドヘ丁ど飲め〳〵。シテヘ是は丁どつがせられた。ト云うて吞む心持有る可し。シテヘたぶればたぶる程よい御酒で御座る。是は慮外ながらお前に上げませう。アドヘどれ〳〵身共がいたゞかう。シテヘたべよごして御座る。アドヘ苦しうない。シテヘちとお酌を致しませう。アドヘいや〳〵身共は手酌がよい。シテヘ丁どあがりませ。アドヘ是は丁ど受持つた。太郎冠者。肴に何ぞひとさし舞へ。シテヘなに舞をまへ。アドヘなか〳〵。シテヘ是はいかな事。この市場で舞を舞ひましたらば。人が笑ひませうぞ。アドヘ笑うても大事ない。是非ともまへ〳〵。シテヘ扨は是非とも舞へで御座るか。アドヘなか〳〵。シテヘ是は迷惑な事で御座る。左樣ならば舞ひませうか。アドヘ早う舞へ。シテ小舞まふ也。兎の舞よし。但し舞樣有る可し。アドヘよいや〳〵。シテヘあゝ不調法を致しました。アドヘ今のは眞唯兎が出た樣にあつた。シテヘ何の其樣に御座りませう。アドヘいや〳〵兎ばかりではない。まだ外の物が出た樣にあつた。シテヘエヽ何ぞ出たを御らうじましたか。アドヘ狸が出た樣にあつた。シテヘわけもない事を仰せらるゝ。狸と申す物は。此樣な所へ出るものでは御座りませぬ。アドヘ狸はどこへ出る物ぢや。シテヘ山へ出ます。アドヘ山へ出るか。シテヘ先づ狸を取らうと存じますると。山へ參つて大きな穴を掘りまして。其穴の中へ上々の若鼠を油揚に致して入れて置きます。又狸が參る道へは。こまかな餌をちよぼ〳〵とまいて置きますれば。その香ばしい匂ひに引かされて。穴のはたへ參つて。ぢつと狙うで居りまして。頓て飛付かうと致す所を。獵師が手頃の棒を以てほうど打擲をして取ります。アドヘハテようしつてゐるな。シテヘいや。とやらして取ると申す噺を承つて御座る。アドヘ大方其樣にして取るであらう。シテヘしかとした事は存じませぬ。アドヘさて何かと遲なはつた。是を又汝へ差さう。シテヘ又いたゞきませうか。アドヘも一つ吞め。シテヘちと輕うおつぎなされませ。アドヘ迚も吞むなら丁ど吞め。シテヘ輕う〳〵。又アドつぐ。シテ吞み。むせる。アドヘ何とした〳〵。シテヘあまり大盃で。とつかけ〳〵下されたれば。ちときけました。アドヘそれな

らばしづかに呑め。シテ〽ちと休んでたべませう。アド〽肴にひとさし舞はうか。シテ〽なに。舞なお舞ひなされますか。アド〽なかなか。シテ〽是はよう御座りませう。アド〽地を謠うて呉れい。シテ〽畏まつて御座る。アド小舞。舞ひ様有る可し。舞の袖よし。シテ〽よいや/\。アド〽不調法をした。シテ〽久しう見ませぬ内。いかう舞をお仕上げなされました。アド〽何の其様にあらう。シテ〽是はたべずはなりますまい。アド〽さあ/\呑め/\。シテ〽たぶればたぶる程よい御酒で御座る。又是をお前へ上げませう。アド〽又身共が頂かう。シテ〽ちとお酌を致しませう。アド〽とかく身共は手酌がよい。シテ〽丁ど上りませ/\。アド〽こりや/\丁ど請持つた。さゝ太郎冠者。最前の兎の舞はあまり短うて見足らなんだ。今度はもそつと長い舞をまうて見せい。シテ〽最前の兎の舞でさへやう/\と舞ひました。是はどうぞ御ゆるされませ。アド〽ゆるせと云ふ事があるものか。是非ともまへ。シテ〽其上今日はちとさす神があつて。どうも舞がまはれませぬ。アド〽舞にさす神と云ふ事があるものか。早うまへ。シテ〽是はどうぞ御ゆるされませ。アド〽それならば物とせう。シテ〽何となされます。アド〽連舞にせう。シテ〽それは猶迷惑で御座る。アド〽さあ/\立て/\。シテ〽是は迷惑な事ぢや。アドより舞ひかける。鶺鴒の舞よし。シテうつきに舞ふ。仕方色々ある可し。アド〽よいや/\。シテ〽お蔭でやう/\と舞ひました。アド〽さて最前の兎の舞が云うても/\面白かつた。あれを身共に教へて呉れい。シテ〽何のお習ひなされいでも。よう御存じで御座る。アド〽いや/\。身共は曾て知らぬ程に。教へてくれい。シテ〽左様ならば又お屋敷でなりと教へませう。先づ今日は御ゆるされませ。アド〽それ迄何と待たるゝ物ぢや。それならば物とせう。シテ〽何となされます。アド〽是も連舞にせう。シテ〽また連舞で御座るか。アド〽さあ/\立て/\。シテ〽是は迷惑な事ぢや。ト云ふ内。アドより立ち。兎の舞まふ。シテも立つて舞ふ。色々あるべし。シテ〽うさぎぢや。アド〽ちやとすいした。シテ〽それそれ。アド〽狸ぢや。シテ〽あゝ其狸はどれから出ました。アド〽おのれが腰にあつたを取つておいた。シテ〽南無三寶。顯れた。アド〽おのれ横着者。やるまいぞ/\。ト云うて追込み入るなり。

角水聟（かくすゐむこ）

シテ　河内の聟
アド　長者
小アド　太郎冠者
聟二人
乙

（入道具）

アド〽この邊りの者で御座る。某娘を一人持つて御座る。何者にはよるまい。歌道に達した者を聟に取らうと存ずるさり乍ら。斯様に存ずるばかりでは人も存ぜぬ。此由を高札に打たうと存ずる。高札打つ。太郎呼び出すも常の如し。アド〽高札の表に就いて聟がわせたらば。此方へ申せ。小アド〽畏まつて御座る。つめる。座につく。舅　ツノムコ〽津の國の鄕に隱れもない歌讀で御座る。爰に有徳な人があつて。一人娘を持たれて御座る。何者には寄るまい。歌道に達した者を聟に取りたいと高札をあげられたと申す。某參つて聟にならうと存ずる。シカ/\。某が聟になつて御座らば。隨分舅の機嫌をとり。朝夕孝を盡したらば。定めて悦ばるゝて御座らう。イヤ何かと申す内に是ぢや。先づ案内を乞はう。

常の如し。 津へ高札の表について聟が參つた。小アドへ其由申しませう。暫く御待ちなされませ。津へ心得た。小アドへ申上げまする。高札の表について聟殿のお出でて御座る。 アドへかうお通りなされいと云へ。小アドへ畏まつて御座る。かう御通りなされませ。津へ心得た。不案内に御座る。アドへ初對面で御座る。先づこれは何方よりお出でて御座る。 津へ津の國の郷に隱れもない歌讀で御座る。 アドへようこそ出でさせられた。先づかうお通りなされ。津へ心得ました。アドへそれにゆるりと御座れ。

播へ播磨の國に隱れもない者で御座る。都方に有德の人があつて。一人娘を持たれて御座る。何者には寄るまい。歌を讀む者を聟に取りたいとの高札を打たれて御座る。身どもがすきの道で御座る。參つて聟にならうと存ずる。シカ〳〵。誠に。めい〳〵の好き〳〵とは申しながら。別して舅はやさしい人と見えて御座る。定めて歌をよませて。其上で聟に致さるゝで御座らう。何とぞ一首でかしたいもので御座る。參る程に是ぢや。ト云うて。案内を乞ふ。常の如し。

播へ播磨の國より聟の望で參つたとおしやれ。小アドへその通り申しませう。暫くそれにお待ちなされませ。播へ心得た。小アドへ申上げまする。播磨の國からと仰せられて。聟殿のお出でて御座る。アドへ次の間へ通しませ。小アドへ畏まつて御座る。是へお通りなされいと申されまする。播へ心得た。不案内で御座る。アドへ遠方よりようこそ出でさせられた。先づ是へお通りなされい。それにゆるりと御座れ。播磨の聟。津の國の次へ座につく。シテへ河内の國に住居致すもので御座る。上方に有德な人があつて嫁をお持ちやつた。何者には寄るまい。歌道に達した者を聟に取らうと高札を上げられたと申す。身共は恐らく歌學を致した程に。參つて聟にならうと存ずる。シカ〳〵。何れ舅は並々の人でないと見えた。先づ男の藝に讀書算用或ひは歌。とりわき歌には神も納受あると申す。さるに依つて。歌讀を聟に取らうとあるは。天晴舅は心のおかれた人ぢや。何かと云ふ内に是ぢや。則ち爰に高札がある。なに〳〵。歌道に達した人あらば聟にとるべきなり。扨も墨黑にべつたりと書かれた。先づこの高札は某が引くです。ト云うて。仕方案内常の如し。 シテへ河内の國より聟の望で參つておりやる。小アドへ其由申しませう。暫くそれにお待ちなされませ。 シテへ心得た。 小アドへ河内の國よりと仰せられて。聟殿のお出でて御座る。

アドへかう御通りなされと云へ 小アドへ畏まつて御座る。かうお通りなされませ。シテへ心得た。不案内で御座る。アドへようこそ出でさせられたさり乍ら。聟殿が三人迄お出でて御座る。扨かた〳〵へ申す。高札の表には。歌道に達した人をと打ちましたが。定めて何れも歌を讀ませらるゝで御座らう。則ち角水と申す題を出しまする。此題で一首づつお讀みなされい。その上で優れたを聟に致しませう。シテへ是はむつかしい題で御座る。何れも案じて見させられい。二人へ心得ました。ト云うて三人案ずる。

津へかうも御座らうか。アドへ何とで御座る。

津へ西の海。千尋の網をかくすいて。水はくゞりて魚はとゞまる。アドへ一段と出來ました。播へかうも御座らうか。アドへ何とで御座る、播へ播磨紙、いかなる人のかくすいて。筆は走りて文字は止まる。アドへこれも出來ました。此上は河内よりお出でなされたお方のお歌が承りたう御座る。シテへ何れも達者に詠ませられた。私はお耳に這入りますまいが。申して見ませう。アドへ何とで御座る。シテへ河内なる。わさ田を人のかくすいて。一粒蒔けば萬倍になる。アドへ是も出來ました。扨も〳〵。何

れもしやれつもなう歌道に達せらるゝと見えました。此上は娘をこれへ呼出しまして。娘にも各々見せませうず。娘が容儀を御覧なされて。その上は縁次第に致さう。太郎冠者。娘をつれて來い。小アド〽畏まつて御座る。ト云うて楽屋へ入り。女をつれて出る。アド〽尤も御縁次第では御座れども。御三人の内是非御一人は私の聟殿で御座る。此様な悦ばしい事は御座らぬ。扨娘が參つた。先づ津の國のが先で御座る程に。娘が容儀をそなたあれへいて御らうぜられ。津〽それならば仰せに委せませう。何れも早う御座る。ト云うて側へ行く。のぞきて肝をつぶす。津〽身共ははたと失念した事が御座る。ちよつと歸つて用事を調へて參りませう。アド〽それならばあとの衆に極めまするぞや。津〽私は望み御座らぬ。なう〳〵うるさや〳〵。と云うて入る。アド〽さあ〳〵播磨の人あれへ御座れ。播〽私はそれには及びませぬが。イヤ御様子を。ト云うてのぞく。津の國の通り。播〽あいた〳〵。アド〽何とさせられた。播〽俄に蟲腹が起りました。先づ歸つて養生を致しませう。アド〽醫者衆でも呼びにやりませうか。播〽イヤ宿に食べつけた藥が御座る。ちよつと喰べて參りませう。なう〳〵うるさや〳〵。ト云うて。尻目に見てかぶりふり笑ふ。アド〽是はいかな事。兩人ともに歸られた。縁で御座る。もはや此上は誰かれと申さうより。そなたにきめませう。最前から三人の中では。何とぞそなたをと存じましたに。幸ひで御座る。おごう何と思はします。女うなづき。さゝやく心。アド〽さうであらう。則ち今日は吉日で御座る。身共は隱居致す。なうおごう。向後は某が一せきを聟殿とそなたへ渡す程に。いよ〳〵夫婦の仲をようして。萬々年もつれそふ様にめされ。聟殿。今後はそなたを頼みまするぞ。さて身共ははや隱居へ參る。後で對面して。心易うさせられい。ト云うて舅は入る。此類同意。あとは恥しさうにモヂ〳〵する心持。この類多し。悦び笑ふ。シテ〽なう〳〵恥しや〳〵。物を云はうと思へば。ぞう〳〵とつかみたてる様で。胴は震ふ。足にも手にも力がない。とくと氣を鎭めて。男の心はふとうてもふとかれと云ふ。思切つて申さう。イヤなう〳〵。今舅殿の仰せられた通り。そなたと夫婦で御座る程に。五百八十年もつれ添ひませう。女うなづく。悦び笑ふ。シテ〽扨も〳〵。嬉しや〳〵。五百八十年もつれ添はうと云へば。ウヽ。ト笑ふ。さあ〳〵對面致さう。その衣をおとりやれ。女かぶり振る。シテ〽いやぢや。それは恥しいと云ふ事であらう。有様は身共も恥しいが。さう云うても濟まぬ事ぢや。先づおとりやれ。いやぢやと云ふ事があるものか。何時までその様にして居るものぢや。身共が取つてやらう。ありや何ぢや。きようがつたものぢや。乙〽申し〳〵。何處へゆかしやる。シテ〽どれへも行きはせぬ。乙〽こなたと妾は。シテ〽こりや〳〵。人が見るわいやい。乙〽五百八十年萬々年もつれそひませう。シテ〽おのれの様なやつはかうしておいたがよい。長者になると云うて。あれが何となるものぢや。乙〽何處へ行かしやる。シテ〽ゆるせ〳〵。ト云うて追込みにて入る。

蚊相撲

シテ　大名
アド　太郎冠者
小アド　蚊の精
（入道具）

シテ〽隱れもない大名。是より鼻取角力の通り。アト呼出し。新座の者を抱へる事を云付け。アドうけて上下の街道へ行き。シカ〳〵云ひ。下に居る迄同じ事。小アド〽是は江州守山に住む蚊の精で御座る。此度都へ上り人間に交り。人の血を吸はうと存ずる。まづ急いで參らう。シカ〳〵。誠に。人程賢いものは御座らぬ。夏になれば蚊遣火を拵へ。要

害をして蚊を防ぐによつて。何とも氣の毒に御座る。ト云ふ内〇アド見付けて言葉を掛けて同道して〇シカ〴〵云うて一通り〇。扱國を問ふ〇これ守山と云ふ〇其はと聞ふ〇弓何を云ふ〇扱都に着く〇シテを呼出し〇過ちを云うて見えたする迄のセリフ段々文角力等に少しも違はず〇此等同意同斷。　シテへきやつか。アドへきやつで御座る。シテへ扱々變つた面ぢや。何ぞ藝でもあるか。アド弓箭を云ふ〇生國を問はず〇段々あつて〇待た藝を問ふ〇角力をとると云ふて扱相手の事あり〇シテ身拵へする〇是迄文角力同斷〇小アド身拵へする〇太鼓座にくつろぎ〇小アド蚊の嘴(紙捲り)にてプウと云うて出る〇扱手合する〇紙捲を面の口にくはへう〇シテ目をまはす〇アド氣を付ける〇此所文角力の通り〇。　シテへ扱々合點のゆかぬ事ぢや。やつと手合せをするといなや。身共が鼻の先へきやつが面を寄するかと思うたれば。しく〳〵として目がくら〳〵とした。あの者の國は何處(どこ)ぢや。アドへ江州守山の者ぢやと申しまする。シテへ皆迄云ふな。疑ふ所もない。きやつは蚊の精ぢや。アドへそれはどうした事で御座る。シテへ惣じて守山は蚊所ぢや。劫を經た蚊は人程もあると聞いた。扱々蚊の分として人間に交り。しかも大名へ直(ぢき)の奉公をせうと思ふは不敵な奴ぢやなあ。アドへいづれ横着者で御座る。シテへ扱今の相撲は身共が負けか。アドへまづお勝ちとは申されますまい。シテへ蚊に負けると云ふは口惜(くちを)しい事ぢや。何卒して勝ちたいものぢやが。イヤ蚊屋を釣つて其中で相撲を取らうか。アドへ蚊屋の内で撲(すま)ふは不自由に御座りませう。シテへ蚊遣火をたいて其陰で取らうか。アドへ煙の中では手合せが知れますまい。シテへイヤ思出した事がある。惣じて蚊は風を嫌ふものぢや。大團扇であふぎ立てゝ嘴さへ取つたらば。其後は心安い。も一番取らう。是へ出よと云へ。アドへ畏まつて御座る。も一番取らうと仰せらるゝ。あれへ出さしめ。小アドへ心得ました。ト云うて小アド出る〇シテ大團扇を持つて出る〇太郎冠者行事する〇プウ〳〵と云うて寄る〇煽ぐ〇シテ嬉しがる〇笑ふ中にシテの小股を取つて打ちこかし小アドは入るなり〇シテ團扇を投捨てる〇　シテへ蚊の要害何の役に立たぬ。ト云うて入らんとする〇アドを見付け〇文角力等の通りにアドを引廻はし〇打ちこかし入る〇

歌仙

シテ　人丸
アド　繪馬打
太郎冠者
次郎冠者
僧正
猿丸
業平
小町
元輔
（入道具）

アドへ大果報の者。天下治りめでたい御代なれば。上々の御事は申すに及ばず。下々迄も有する儀のめでたい折柄で御座る。それに就き。某歌道に好いて祈願の儀が御座るによつて。玉津島の明神へ參詣致さうと存ずる。太郎冠者次郎冠者を呼出す〇　某歌道に祈願の仔細あるによつて。玉津島の明神へ參詣する。兩人共に供をせい。二人へ畏まつて御座る。アドへ扱云付け置いた歌仙の繪馬は出來たか。二人へ成程出來致して御座る。アドへそれならば持參せい。二人へ畏まつて御座る。アドへさあ〳〵來い〳〵。誠に。我等如きの歌道に好くなどといふは似合はぬ事なれども。和歌の德は夥しい事ぢやによつて。思ひ立つた事ぢや。太郎へ是は御尤もの事で御座る。アドへ扱此度は暫く逗留する程に。その用意をせい。次郎へ其段はお心の儘で御座る。アドへ何かといふ内に是ぢや。まづ神前へ向はう。太郎へ一段とよう御座らう。正面に向て拜む〇　アドへ何と殊勝な神前ではないか。次郎へ誠に有難い神前で御座る。アドへ急いで繪馬をかけい。二人へ畏まつて御座る。四方の柱へ二人繪馬を打つて〇暫く渇仰する心持〇　アドへ一段とよい。

誠に名人の書いた繪程あつて、人丸は其儘生きて御座るやうな。 太郎ヘ小町の繪に別して美しく御座る。 次郎ヘ僧正遍昭は豐かな御顏で御座る。 アドヘ猿丸太夫はしんまくな顏ぢやなあ。 二人ヘさやうで御座る。 アドヘいざ下向なせう。信をとつて拜なせい。 二人ヘ畏まつて御座る。 アドヘ心中の願成就なさしめ給へ玉津島大明神〱。あら奇特や。繪馬の樣子が變つた。 太郎ヘ申し〱。この繪馬の樣子が變つて御座る。 次郎ヘ此繪が動くやうに御座る。 アドヘ是に名人の書いた繪ぢやによつて。奇瑞もある筈ぢや。まづ傍へ寄つて樣子を見よう。兩人共是へ寄れ。 二人ヘ畏まつて御座る。 シテヘ豐かなる。 同ヘ豐かなる。今この御代の歌合せ　月雪花をとり〲に。目に見る事も聞く事も。皆和歌の種なれや。謡じて君を仰がん〱。 ワタリ拍子。句。打上。 シテヘ磯の波。 同ヘ磯の波。松吹く風の音迄も。所がらなる和歌の浦。名も面白や立出でて。いざ〱月に遊ばん。今宵の月に遊ばん。 この返しの内より皆々舞臺へ入りて下にゐる。何も云ふ事なし。面體各月を見る。 人丸ヘ誠に天地の開け始めしより此方。和歌を以て國を治め。目に見えぬ鬼神をも和ぐる、皆歌の德で御座る。 僧正ヘ仰せの如く日本は小國なれども。豐かにめでたい御國で御座る。 猿丸ヘげにも一首を詠ずれば。萬の惡念も遠ざかり。男女夫婦の媒となるも。皆歌の德で御座る。 業平ヘ何れ男女夫婦の道を和げて調法な事は。某のよう存じて居まする。 人丸ヘ殊更今宵は名月なれば。何方にも月を愛し。賤しい者迄も和歌を口ずさむで御座らう。 僧正ヘいかさま。今宵の月見に酒をしたゝか飮うで。生肴を賞翫するであらうと存じて、愚僧けなりい事で御座る。 元輔ヘ又々僧正の御麁相が出ました。 皆々笑ふ。 人丸ヘ御麁相に就いて思出しましたが。僧正は此頃落馬して腰を打たせられたげなが。まだ痛みまするか。 僧正ヘされば。嵯峨野のあたりを通りましたれば。女郎花が心よう咲いて御座つた　扨も見事なと存じてうか〱と見てゐまして。馬からころりと落ちまして。したゝかに腰の骨を打つて。腹立つ餘り一首づられて御座る。 人丸ヘ成程。其時われ落ちにきと人に語るなとの御歌。天晴れ出來まして御座る。 元輔ヘ名歌を詠ませられたと承つて御座る。 人丸ヘ兎角僧正は女郎花の類が御好物で御座る、 僧正ヘ又々惡口を仰せらるる。 人丸ヘ兎角日本に生れて歌を好かぬはさもしい事で御座る、 僧正ヘされば其處を知つて。當社へも夥しい參詣で御座る。 小町ヘ扨それに就いて。參詣の者が紙を嚙んで。妾が額へ打付けて御座る。 人丸ヘそれは力紙と云うて。力の願を掛けると聞きました。 僧正ヘいや。小町は隱れもない美人で額か美しさに。何ぞ外の願ひで御座らう。 人丸ヘすれば。某の額も美しいやら。折節身共へもあてまする。 猿丸ヘいや。それは的が違ふて御座らう。 元輔ヘ外れ矢で御座らう。 皆々笑ふ。 人丸ヘ扨今宵は何をなして遊びませう。 僧正ヘされば何がよう御座らう。 人丸ヘ猿丸太夫。題を出させられい。 猿丸ヘ成程。思ひよつた珍しい題を出しませう。 ト云うて。三方に短册を載せて持つて出る。 さあ〱何れも題をとらせられい。 人丸より段々題をとる。 人丸ヘさあ〱抜かせられい。 僧正ヘまづ愚僧は蛤によする長刀。と云ふ題で御座る。 業平ヘ某は。戀の千人切。といふ題で御座る。 人丸ヘこれはお家の事で御座る。 元輔ヘ某は。蜘蛛の巣にかゝる釣鐘。といふ題で御座る。 人丸ヘ小町は何といふ題ぞ。 小町ヘ紫によする紅。といふ題で御座る。 僧正ヘしをらしい。優しや。小町相應の題が向うた。 人丸ヘ太夫の題は何でおりやる。 猿丸ヘ富士の山によす

る石臼。といふ題で御座る。扨宗匠の題は何で御座る。人丸へ雪の夜山姥。といふ題で御座る。僧正へお年相應の面白い題で御座る。人丸へいや是は何れも難題で御座る。なかなか急にはうかみますまい。いざ酒盛を始めて。各へ是酒を得飲まぬ者から詠ませませうか。各へ是は一段とよう御座らう。人丸へ小町は酌にお立ちやれ。小町へ心得ました。人丸へとても の事に小町始めて。盃をどれへなりとも思ひざしに召され。小町へ是は恥しい事なれども。妾が始めませう。業平へ何と。あの盃はどれへゆきませうぞ。僧正へあの盃の落ちが知れませぬ。人丸へ某は此中美しい十二單(ひとへ)を調へ置いたが。あれは誰にやらうぞ。小町へ此盃は。慮外ながら僧正様へ進じませう。僧正へ是は有難い事ぢや。いつはたべずとも。一つたべませう。(ト云うて。僧正戴き飲む。おの／＼不機嫌の體なり。) 元輔へ是はこびた所へ盃が飛びました。人丸へ今宵の月見は面白う御座らぬ。業平へかつて面白う御座らぬ。僧正へこの坊主が盃誰も戴きたがる者もあるまい。小町へ戻して結びませう。小町へどれ／＼頂きませう。人丸へいよ／＼面白う御座らぬ。各へさん／＼の月見で御座る。人丸へ小町／＼。それはならぬ。丁度一つ飲ましめ。小町へいや妾は得たべませぬ。人丸へ飲まぬと云うて飲ませずには置かぬ。是非ともお飲みやれ。元輔へ酌致さうか。僧正へハテ扨。飲めもせぬ人に無理を云はせらるゝな。人丸へ御坊のお知りやつた事ではない。これ／＼小町。最前からの約束ぢや。酒を飲まずば最前の題で一首お詠みやれ。僧正へ人丸。銘々も覺えのある事ぢや。この難題が何と急に詠まるゝものぢや。人丸へそなたが知つた事でない。小町へ色見えて。うつらふものは世の中の。人の心の花にぞありけり。僧正へしたり／＼。出來た。今に始めぬ事ながら。達者な事ぢや。出かいた／＼。人丸へいや。此歌は合點がゆきませぬ。餘り面白う御座らぬ。まづ色見え、といふ五文字が合點がゆかぬ。色見えてと濁つたらば。題の心に叶ふ所もあるが。澄んでは面白うない。僧正へ是は宗匠の言葉とも覺えぬ事ぢや。まづ澄むと濁るとは現在未來の違ひぢや。色見えてと澄んでこそ心も深く。うつらふものはといふ歌の様も優しい。濁るには賤しい。兎角是は名歌でおりやる。人丸へヤアラ僧正は合點のゆかぬ事をおしやる。某はじめ各一統に惡いと云ふを。御坊一人贔負させらるゝ。但しこれは御坊と小町と内々で格別懇意な譯があるもので御座らう。僧正へこれ／＼人丸。そなたの言譯では。小町と愚僧が中に譯もあるやうにおしやる。心けがらはしい名を立つる様な事はおしやらぬものぢや。人丸へいや／＼心得難い。何れも。いつぞや清水寺の歌なども合點がゆきませぬ。僧正へいよ／＼人聞き惡い事をおしやる。今一度おしやつたらば。佛祖かけて堪忍致さぬ。人丸へ推參千萬な。言葉が過ぎると目にもの見するぞ。僧正へ何を見せる人丸。(ト云うて。立つてかゝる。四人立つて僧正をたたく。小町兩方をとめる。四人は臨座につく。) 僧正へ腹立ちや／＼。頓て思ひ知らせうぞ。(ト云うて中入する。小町留め／＼入るなり。) 猿丸へやあ／＼何といふぞ。遍昭が最前のを無念に思ひ。長道具を持つて此處(こゝ)へ押寄す。是はいかな事。なう／＼人丸。僧正が最前のを腹を立てゝ。是へ押寄すと申す。用心させられい。人丸へ苦しうない。何程の事があらう。構はさせられな。猿丸へいや／＼。油斷は大敵の基で御座る。まづ身構へをさせられい。人丸へそれならば何れも用意しませう。(ト云うて。四人杖を持ち臨座にならび居る。) 僧正一寄へ夜嵐の。二人へ物すさまじき荒磯に。よせて打取れ浦の浪。エイ／＼オウ。人丸へ三十六人の歌よみは。同へ各和歌をあらそひて。衆に判

ずるこそ優しけれ。（此所カケリ。一段。太皷打上げ留いて。）人丸へ其中に人丸。同へ其中に人丸進み出でて。ほのぼの見れば赤地の袿えならぬ香かをり來ぬれば。千年の坂をも越ゆると詠みし。筵竹の杖を押取りのべて。かゝり給へば。僧正へ花山の僧正馬より下り立ち。同へ人丸に渡りあひ。むんずと組めば。我も／＼と歌よみは。／＼。皆腰折れて休らひしが。シテへ夜明烏の聲々に。同へ夜明烏の聲に驚きて。元の繪馬となりにけり。（留め。初めの通り座につき。六人とも仕方あり。）

勝栗（かちぐり）

シテ　攝津の百姓
アド　大和の百姓
小アド　奏者

（入道具）

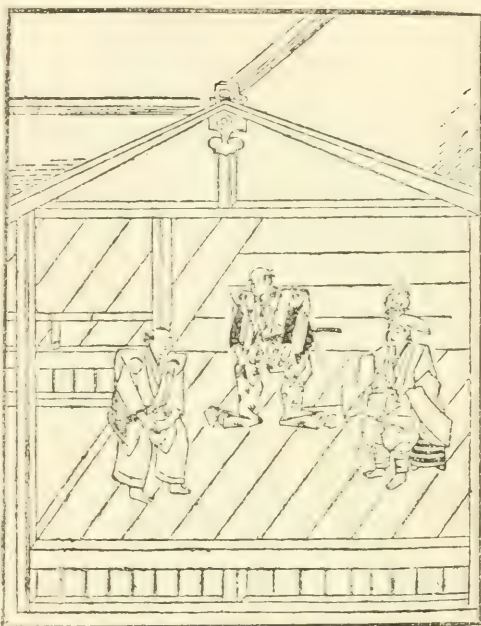
アドへ大和の國のお百姓で御座る。毎年御年貢として。大和柿ありの實を元日に上頭へ捧ぐる。（ト云うて。シカ／＼云うて廻る。道にて休む。如常。）シテへ津の國の御百姓で御座る。毎年御嘉例として上頭へ御年貢に。圓鏡に勝栗野老を捧ぐる。（ト云うて。シカ／＼あつて。アド呼びかけ。同道。年貢を納め披露して。二人を呼出す迄。ことごとく松楪に同じ。）小アドへ兩國のお百姓が同じ日の同じ時に參る事。御感に思召さるゝ。折節お歌の御會の砌に持つて參つた程に。兩國のお百姓に。御年貢によそへて歌を一首づつ詠めとのお事ぢや。急いで讀みませい。（この後餅酒と同じ事。）アドへ斯うも御座りませうか。シテへはや出たか。アドへ先づ申上げて見よう。皆人の。大和柿とて召さるれど。とかきますかき米は前がき。小アドへさあ／＼汝も詠め。（歌とは今の樣な物で御座るか。餅酒の通り。）シテへ是はむつかしい事ぢや。（ト云うて案ずる。）シテへ斯うも御座りませうか。住吉の。松のひまより月見れば。餅は鏡にたがはざりけり。（又。披露するなり。それより時の笑草。萬雑公事御赦免を云ふ。御前近い云ふても一首づつ云ふ。互ひに論無益云ふ。）小アドへ一段とでかした。シテへ今のさへやう／＼と詠うだに。迷惑な事かな。小アドへ津の國のお百姓。御年貢は何ぢや。シテへ圓鏡勝栗野老で御座る。小アドへ最前は鏡によそへてようだ。此度は外の御年貢によそへて詠め。又大和の國は何ぢや。アドへ私は大和柿ありの實を捧げまするが。はや柿によそへて詠みました。今一首はありの實によそへて詠みませう。小アドへ成程その通りぢや。急いで詠め。アドへかうも御座りませうか。世の中の。福ありの實と云ふ事は。惡事災難なしとこそ聞け。小アドへさあ／＼汝も詠め。シテへ扨々そなたは達者な。名代にようでたもれ。アドへわごりよの御年貢ぢや。そなた詠ましめ。シテへ又案じずばなるまい。斯うも御座りませうか。このところ。福壽の所よき所。初知に所領は增して來どころ。小アドへ是は野老によせてようだ。御年貢は兩人して五色なれども。歌は四首ならではない。勝栗の歌をも一首詠め。シテへ最前から色々と致して。やう／＼と詠みました。是は御免なりませう。小アドへいや／＼數が惡い。祝うて五首がよからう。シテへ扨々迷惑な事かな。又案じて見よう。（案ずる。）出ました／＼。申上げませう。くりごとを。申すも道理津の國の。難波につけて殿は勝栗。小アドへ一段と出かした。前世下されれどもお流を下さるゝ。是へ寄つて頂戴をせい。二人へ有難う存じまする。小アドへ引違へて三献づつたべませい。目出たく洛中を舞立ちに致せい。（カヽル）目出度かりける時とかや。（三段の舞。打上。）二人へやら／＼目出度や目出度やな。先づ初春のお具足の。お飾り御代も曇らぬ鏡の餅。夏は涼しき垣根の水の洗ひがは。秋の戰にかつ色の。軍に勝栗福ありの實と。榮ゆる所こそ目出度けれ。（ヤエイヤとくわつして留め。入るなり。）

金津地藏（かなつぢざう）

シテ　子
アド　田舍人
小アド　親
立　衆

（入道具）

アドへこれは越前の國金津の者でござる。在所中の老若心を合せて。一間四面の堂を建立致してござる。堂は思ふ儘に出來てござれども。未だ佛がござらぬ。この度都へ上り。御本尊を求めて參らうと存ずる。ト云うて○シカ〳〵○佛師に同じ○さて都につき○佛師の通り呼ばはる○何れも同前○段々あり○眞佛師おやと云ふ事○佛師に同じ○アドへ佛が欲しうござる。見せて下され。小アドへ幸ひ地藏のよう出來させられたがある。これを見せう、暫く待たしめ。アドへ心得ました。小アドへかな法師あるか。ト云うて呼出す。出るも常の如し。小アドへそちにちと云ふ事がある。これを云出して聞かうならば云はうぞ。聞くまいならば一向云ふまい。シテへこれは今めかしい事を仰せらるゝ。親の云ふ事を聞かぬ子はござるまい。何なりとも仰せられい。小アドへ近頃滿足した。別の事でもない。身共が身體がならいで。朝夕送り兼ぬるに依つて。そちを賣つてともかうもせうと思ふ。則ち夫婦相談ぢや。これを叶へて呉れうか。シテへ成程。何を致すも孝行は同じ事ぢや。何方へも賣らせられい。小アドへやら嬉しや。それに就いて。火急な事ぢやが様子を語らう。越前の國金津と云ふ所の人が佛を求めにわせた。身共は錫杖一本側（たつ）つた事もなけれども。代物さへ取ればよいに依つて。佛師ぢやと云うて騙いた。則ちそなたを地藏になして賣つてやる程に。さう心得さしめ。シテへ賣らば唯賣らせられいで。つひに地藏になつた事がない。小アドへイヤ地藏にまねてやる程に。少しも苦しうない。平にいて呉れさしませ。シテへ今行けば。父（とゝ）様にも母（かゝ）様にも逢はれますまいの。小アドへ先づ急に逢ふ事はならぬ。シテへそれは名殘惜しい。悲しい事でござる。小アドへ誠に。世に貧程悲しいものはない。子を賣ると云ふは。大體の事でなけれども。兎角今日を送り兼ねる故の惡心ぢやさり乍ら。氣遣ひするな。定めてそちを連れていて。かの堂に据ゑて置かうぞ。その時身共が後を慕うて下り。忍入つてそつと連れて歸らう程に。心安う思はしめ。シテへ忝うござる。必ず〳〵早う連れに來て下され。小アドへ先づ地藏の拵へをせう。こちへ寄らしめ。ト云うて。太鼓座にて。肩衣とり。法師頭巾。乙の面きせ。床几に腰かけさせ置くなり。アドへこれに居まする。小アドへ田舍人居さしますか。アドへちと彩色に直す所があつて隙を取つた。お待遠にあらう。アドへ左様にもござらぬ。小アドへさて地藏を拜ましめ。ト云うて。たれを上げる心にて拜ます。アドへ扨も〳〵殊勝な事かな。名作程あつて。その儘生きてござる様な。ト云うて。ほめて拜み。顔をいらいて驚く。アドへワア。どうやら人肌の様に温かにござる。小アドへ今彩色をして間がない。膠（にかは）の干ぬ内は温かなものでおりやる。アドへ尤もでござる。とくと拜む程人の様にござる。小アドへ最前も申す通り。安阿彌の流は某一人ぢや。恐らく自慢の細工ぢやに依つて。何と木佛とは見えまいが。アドへ奇特でござる。扨代物は何程でござる。小アドへ萬疋でおりやる。アドへ高直にはござれども。佛體ぢや。それとても求めませう。則ち代物は三條の大黑屋存じて居る。あれで渡しませう。小アドへ成程。大黑屋で請取るであらう。アドへ扨これは箱に入れて持ちませうか。小アドへそれでは氣づまりに思召さう。只肩に負はせられい。アドへ心得ました。ト云うて負ふ。アドへまだ膠（にかは）の干ぬ内は温かにござる。小アドへいや。それは膠が干ても。はや御佛心が備

はせられたに依つて。色々の奇瑞があらう。隨分信心を召され。又おぶくなどは。成程念を入れて上げさしめ。自然きこしめす事があらうぞ。物など仰せらるゝ事もあらう程に。さう心得さしめ。アドへ扨々あらたな事でござる。も斯う參る。小アドへ何とお行きあるか。アドへ中々。小アドへようおりやつた。アドへハア。なう〳〵嬉しや〳〵。ざつと佛を求めた。此由を在所の衆中に申したらば。一同に悦ばれうと存ずる。何かと申す内にこれぢや。ト云うて下し。葛桶に腰掛けさせおき。立衆へこなう何れもござるか。立衆へこれに居まする。アドへ只今歸つてござる。立衆へ扨々御苦勞でござる。アドへ則ち佛を求めて參つて。本堂へ直して置きました。急いで參らせられい。立へ心得ました。皆拜ませられい。立頭へ扨も〳〵殊勝な事でござる。ト云うて拜む。アドへさらば何れも香花を手向けませう、ト云うて扇を捧げ。香花を供養する。シテへ香華を呉れて嬉しけれど。饅頭こそは喰ひたけれ。アドへこれはいかな事。物を仰せられた。イヤ騷がれな。安阿彌の流。賢い都の町に只一人の佛師が刻まれた佛ぢやに依つて。樣々奇瑞がある。必ず驚きなどめさるな。信心に饅頭を捧げさせられい。立へ扨々あらたな事でござる。いざ上げませう。金津地藏に饅頭こそは手向けけれ。シテへ饅頭を呉れて嬉しけれども、ふる酒こそは呑みたけれ。立へいよ〳〵奇特でござる。これも上げませう。立へようござらう。とてもの事に丈夫に上げさせられい。立へ心得ました。金津の地藏に古酒こそは手向けけれ。シテへよう呉れた〳〵。樂しうこそはなさうぞ〳〵。アドへ何と思召す。この地藏尊は座像で堂に恰好致さぬ。物を仰せらるゝ程にあらた佛でござる。申して立像に致さうと存ずるが。何とござらう。頭へこれは一段とようござらう。アドへ心の浮いたお地藏樣でござる。拍子にかゝつて申さう。何れも囃させられい。立へこれは猶ようござらう。アドへ追付け囃しませう。皆立たせられい。ト同音。ノル。立へ金津の地藏の〳〵。おゆるぎやつたを見さいな〳〵。シテへゆるぎたうはなけれども。檀那の所望ならば。さらばそとゆるがう。アドへ金津の地藏の〳〵。お立ちあつた見さいな〳〵。シテへ立ちたうはなけれども、檀那の仰せならば。さらばそと立たうよ。立へ金津の地藏の〳〵。お踊りやつた見さいな〳〵。シテへ踊りたうはなけれども。檀那の所望ならば。さらばちと踊らう〳〵。ト云うて。何れも何遍もかへして踊る内に。小アドへかな法師が後を慕うて參つて樣子を

見ればよい時分ぢや。連れてすかさうと存ずる。（ト云うて。橋掛りより手を叩いて呼び出す。アド立衆は知らず踊つてゐる。）小アドへいとしい者よ。ちやつとこちへ來い。（ト云うて。負うて逃げ入る所なる。）頭へあれ／＼。何者やらお地藏樣を負うて行きまする。アドへあれは都で逢うた佛師で御座る。ヤイ／＼。ヤイそこな者。小アドへ何で御座る。アドへその地藏樣を負ひまして何とする。小アドへ檀那の仰せならば。さらば連れて退かうよ／＼。アドへきやつは賣僧ぢや。皆捕へさせられい。アドへあれ逃げまする。立へ追ひ懸けさせられい。やるまいぞ／＼。（ト云うて追ひ込み入るなり。）

金岡（かなをか）

シテ　金岡
女　妻
（入道具）

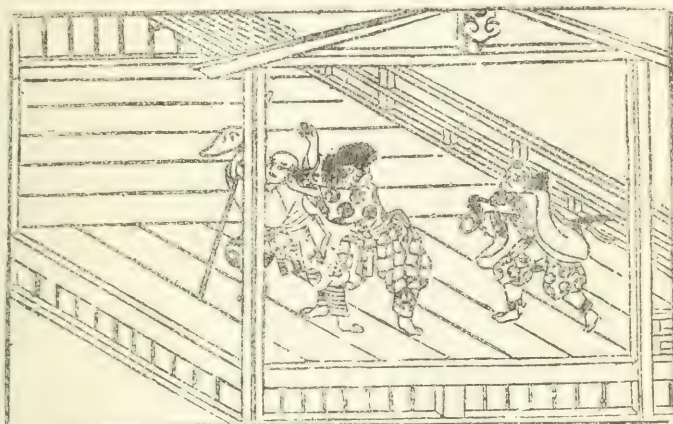
女へ妾は金岡と申す繪師の妻でござる。夫の金岡は十日餘りさきに。ふと内を出られてござる。それより今に歸られぬ。承れば狂氣めされて。洛外な物に狂うてありかるゝと申す。今日は尋ねに出でうと思ひまする。シカ／＼。誠に。氣の毒な事でござる。日頃正直な人でござるに。何が心にかゝつて狂氣になられたぞ。世間の聞えもわろうござる。何とぞ今日は連れて戻りたいものでござる。何かと云ふ内に清水ぢや。此所に待たうと思ひまする。一セイ小歌。シテへ花の都のたてぬき。しらぬ道をも心して。問へば迷はず戀路など。通ひ馴れてや狂ふらん。戀や戀。われ中ぞらになすな戀。戀風か。來ては袂にかいもつれて。なう袖のおもさよ。戀風はおもいものかの。ハアおもし。イロかの人のおもかげを。いつの春か見そめ思ひそめてわすられぬ。花の緣にや。花に緣やろ。清水の櫻の下で。若い衆と出會うて。一度すやしちよ／＼。貳度すやしちよ／＼。おぢきなの身やな。おれが身は。（ト云うて。下に居て泣く。）女へなう／＼ぶつけうや／＼。是は先づ何とした事でござるぞいのう。シテへ女共か。わごりよは何しに來た。女へそなたは十日餘りも外にござる。きけば狂氣して洛外をありかせらるゝと云ふに依つて。それ故たづねに來ましたが。是は先づ何故に狂はせらるゝ。シテへさて／＼むさとした事をおしやる。おれは狂氣はせぬ。氣遣ひめさるな。女へ其樣な取亂いたなりをして洛外をありかせらるゝ。それが狂氣であるまい事は。シテへ扨ははや色に顯れたか。さり乍ら。樣子なお聞きやつたりとも叶はぬ事ぢや。其分にめされ。女へハテ妾が心ひとつでならぬ事ならば。人を頼うでなりとも叶へて進ぜう程に。ひらに語らしめ。シテへそれならば云うて聞かせうさり乍ら。必ず聞いて腹を立てまいぞや。女へ何の腹を立てませう。早う仰せられい。シテへそれいつぞや御殿の繪を仰付けられて通うた事が有つた。御化粧の間。ふすま遣戸（やりど）をたてながら。四季の圖をかけと仰付けられた。畏まつて金岡が家の習ひ置く彩色繪。祕術を盡しかいてゐた。大勢の女中が芥子の花をかざり立てた樣に。結構な小袖をめして。我も／＼と覆ひ重なつて御見物ある。いづれとわけ難く美しい女中達で有つた。其中にまだ廿ばかりでもあらうか。美人が一人出させられての。女へ是はいかな事。シテへ必ず／＼腹を立てまいぞや。女へ氣遣ひめされずとも咄させられい。シテへイヤその顏のしならしさ。きやしやさ。物に譬へて云はゞ。雲のびんづら花の顏ばせ。漢の李夫人楊貴妃はいざしらず。繪にかく天人の姿もいかな／＼及ぶまい。扨も／＼美しい上﨟かなと思うて。しな／＼として暫しお顏をながめて居たれば。

かの上﨟が白い扇を出されて。是に繪をかいてくれいと仰せらるゝ。嬉しさは嬉し御意は重し。取敢へず表には。秋の野の草づくしを薄墨繪。裏には唐のざれゑ。ざつとかいて參らせたが。あまりたへかねて。かの扇を參らせしなに。お手をちつとしめたれば。尻目にかけてにつと笑はせられたその美しさ。あけても暮れても寢ても覺めても忘れいで。此様に物に狂ふ。ト云うて泣く所。色々心持あるべし。女〽エヽ腹立ちや/\。其様ないたづらな事があるものかいやい/\。シテ〽それお見やれ。いやと云ふものを無理にと云うて。聞いて腹をお立ちやる程にの。女〽いや。腹を立てるではない。先づ心を鎭めて聞かせられい。女と云ふものは。けはひ化粧をするに依つて美しう見えまする。別して其様な女中は。ふしかね紅白粉をつけ。長かもじをかけ。結構な小袖を召してござるに依つて。又とない様に思召す。妾ぢやと云うて。其様に取繕うて居たならば。その上﨟に負けるでもござるまい。シテ〽いかな/\。わごりよの様な黒い顔を三日三夜化粧したと云うて。傍へもよる事ではおりやらぬ。女〽それならばよい仕様がござる。幸ひこなたは天下に隠れもない繪師ぢや程に。妾が顔をいか様(やう)にも彩色して見させられい。シテ〽是は尤もぢや。知らぬ唐土の草木をも彩色し。その圖に似せる。ましてかの上﨟の面影は屹度覺えて居る。さらば家傳の繪具を取集め。筆にまかせてゑどつてみよう。先づ腰をかけさしませ。女〽心得ました。シテ〽げに面白きおたくみかな。にしのからにはにかはをとき。女〽繪の具箱を取出だし。シテ〽いで/\さらばゑどらん。カケリ常の如し。其の内アドの左右より二度[illegible]る。仕様あるべし。扨も小れに。シテ〽いで/\さらばゑどらんとて。同〽紅や白粉すりぬりたれど。下地は黒き山がらすの。よそにも人や笑ふらん/\。シテ〽もしもや似ると思ひつゝ。同〽又立ち寄りて。たんくわの唇。柔和の姿に。何とゑどれどこのつらは戀しき人の顔には似いで/\。狐のばけたに異らず。女〽エヽ腹立ちや/\。シテ〽先づ待たしめ。女〽何と待てとは。シテ〽そなたの様な色の黒い顔は。どの様に彩色しても。いかな/\似る事ではない。女〽エヽ腹立ちや/\。ト云うて追込むなり。

蟹山伏(かにやまぶし)

シテ　山伏
アド　强力
小アド　蟹の精
（入道具）

シテ〽大峯かけて葛城や/\。我が本山に歸らん。アド[illegible]る。名乘の間アド下に居る。シテ〽是は出羽の羽黒山から出でたる山伏。此の度大峰葛城を致し。唯今が下向道で御座る。先づ强力を呼出し。申附くる事が御座る。ト云うて。呼出す。出る常の如し。シテ〽此度は難行であつたに。別儀なう下向するは。目出度い事ではないか。アド〽御意の通り。此度は難行の道を首尾ようお勤めなされて。此の様なお目出たい事は御座りませぬ。シテ〽追附け下向せう。來い/\。アド〽はあ。シカ/\。シテ〽何と思ふ。山伏と云ふ者は。野に伏し山に伏し。或は岩木を枕とし。難行苦行捨身の行をもする。その奇特には。この目の前を飛ぶ鳥をも。祈落す様な行力になつた。アド〽御意の通り御法力の違した事は。詞にも及ばるゝ事では御座りませぬ。シテ〽さて某を世間では何と云ふぞ。アド〽生不動ぢやと申しまする。シテ〽これは憎からぬ事ぢや。そちが知る通り。行力に於ては誰

に劣らうとも思はぬに依つて。生不動と云ふも尤もぢや。某が生不動なら。そちが脇立ちやに依つて。こんがらせいたかでもあらうぞ。アド〽お蔭を存じまして。有難う存じまする。シテ〽さあ／＼。来い／＼。アド〽畏まつて御座る。シテ〽これはいかう山が深うなつた。アド〽誠に。物凄うなりました。シテ〽その上最前から何やらどう／＼と鳴る音がする。何であらうと思ふ。アド〽されば何で御座りませうぞ。シテ〽松風の音か川の瀬か。アド〽雷では御座りませぬか。シテ〽これは頻りに近う聞こゆる。アド〽まつ黒になりました。シテ〽唯事ではあるまい。ト云うて廻るうち。鐘の間を踏みならし小アド走り出る。山伏に行當る。シテ〽こりや何やら出たは。アド〽何やら恐ろしい物で御座る。シテ〽ちと往て見て来い。アド〽私は恐ろしう御座る。お前お出でなされませ。シテ〽いやこゝなやつが。己れが連るゝは斯様の時の為ではないか。早う往て見て来い。ト云うて。突きやる。アド怖がりて。アド〽これは御意とも覚えませぬ。斯様の時御出でなさるゝが。先達の役で御座る。これは是非ともお出でなされませ。ト云うて。突きやる。シテ太刀そり打ち。シテ〽やい其處な奴。この貴い先達の通るに。道へ出て障礙を為すは何者ぢや。小アド〽両眼天にあり。一甲地につかず。大足二足。小足八足。右行左行して世を渡る者の精ぢや。シテ〽強力／＼。何者ぞと思うたれば。きやつは蟹の精・ぢや。アド〽、それはどうした事で御座る。シテ〽、今云うたを聞かぬか。先づ両眼天にありとは。きやつが眼はひよいと出てある。アド〽誠に出て御座る。シテ〽一甲地につかずとは。甲が中に浮いてある。アド〽はあん。シテ〽大足二足とは二つの鋏の事。小足八足とは。両方にうざ／＼とした足が八本あるは。アド〽誠に八本御座る。シテ〽右行左行と云ふに。惣じて。蟹は右へか左へか横にならでは得ゆかぬに依つて右行左行。然れば疑ひもない蟹に極まつた。アド〽扨は蟹に極まりましたか。シテ〽おんでもない事。アド〽扨も／＼憎い奴で御座る。蟹の分として慮外千萬な致し様が御座る。シテ〽やい／＼。何をするぞ。アド〽私に任して置かせられい。シテ〽聊爾をするな。アド〽やい。おのれは憎い奴の。蟹の分として貴いお先達のお通りなさるゝ道へ出て妨なす。此の金剛杖で甲を微塵に打割つてのけう。蟹強力の耳を挟むなり。アド〽あいた／＼。シテ〽何とした／＼。アド〽挟みました。シテ〽それ見よ。置けと云ふに。聞かぬに依つて其の様な事ぢや。どれ／＼。離してやらう。アド〽あいた／＼。アド〽なほしめまする。シテ〽扨々気の毒な事ぢや。いや年月の行法は斯様の時の為ぢや。一ト加持して離させてやらう。

アドへそれは有難う存じまする。シテへそれ山伏といつぱ山伏なり。アドへあいた〳〵。シテへ何と聞えた事か。アドへ聞えた事さうに御座る。シテへ兜巾といつぱ布切れ一尺ばかり眞黑に染め。むさとひだを取つて頭にちよんと頂く故の兜巾なり。アドへあいた〳〵。シテへ何と殊勝な事か。アドへ殊勝な事さうに御座る。シテへいら高の珠數ではなうて唯だむさとしたる木の切を繋ぎ集め。いら高の珠數と名付けつゝ。明王の索にかけて祈るならば。などか奇特のなかるべき。ぼろおん〳〵。ト云うて祈る。アドへまうし〳〵お先達樣。お祈をやめて下され。シテへどうした事ぢや。アドへ珠數の音でなほ締めまする。シテへ締むるは追付け離さうと云ふ事であらう。鳥の印を結んで離させてやらう。アドへそれは有難う存じまする。シテへ如何に惡心深き蟹なりとも。鳥の印を結んでかけ。いろはにほへとんと祈るならば。などかちりぬるをわかなれ。ぼろおん〳〵。アドへあいた〳〵〳〵。シテへぼろおん〳〵。橋の下の菖蒲はたが植ゑた菖蒲ぞ。ぼろおん〳〵。ト云うて祈るうち。小アドシテを挾みによる。シテ下の座の方へ退いて祈る。左の耳を挾む。さて二人をつき倒し。蟹は入るなり。二人起上り。追込み入る。

鐘の音（かねのね）

アド　主人
シテ　太郎冠者

アドへ此の邊りの者で御座る。某悴を壹人持つて御座る。漸う成人致したに依つて。黃金作りの太刀をのしづけに作つて遣はさうと存ずる。それに就き太郎冠者を呼び出だし。申附くる事が有る。ト云うて呼出す。出るも常の如し。アドへ汝呼出だす別の事でない。悴もやう〳〵成人したに依つて。黃金作りの太刀をのしづけに作つて取らせうと思ふが。何と有らう。シテへ御意もなくは申上げうと存じて御座る。一段とよう御座りませう。アドへそれならば。汝は鎌倉へ下つて。金のねを聞いてこい。シテへ畏まつて御座る。アドへ所々で違ふであらう。念を入れて聞いて來い。シテへ其の段はそつともお氣遣ひなされまするな。アドへ急いで往て頓て戻れ。つめる。常の如し。シテへ火急な事を仰付けられた。先づ急いで鎌倉へ參らう。シカ〳〵。誠に。あのお子の御誕生なされたを昨日や今日の樣に存じて御座れば。早や御成人なされて太刀かたなの御詮索をなさるゝ。目出度い事で御座る。月日の立つは早いものぢや。いや何かと申すうちに鎌倉ぢや。扨も〳〵。聞及うだより賑々しい事ぢや。幸ひ是に寺がある。是は何と云ふ寺ぢや知らぬ迄。なに壽福寺。先づ寺の名は壽福寺。さて鐘樓堂は是處にある。さらば鐘をついて音を聞かう。東門なり。ジヤモウ〳〵ト云ふ。先づ是は大體の音ぢや。鐘の音も所々で違ふとおしやつた。又外の寺へ參らう。則ち是が寺町さうな。此の通りを眞直ぐに參らう。誠に。鎌倉は名所の多い所ぢやと聞いた。此度を幸に是處彼處をゆる〳〵と見物致さう。是處にも寺がある。此の寺は何と申す。なに圓覺寺。鐘樓堂は。エイ是處にある。先づついて見よう。南門なり。アント云ふ。是は薄い音ぢや。此の樣な薄い音はお氣に入るまい。又餘の寺へ參らう。頼うだお方はお功者な。所々で違ふで有らうとおしやつたが。鐘の音にも色々があるものぢや。又是處にも寺がある。物靜かな寺ぢや。さて鐘樓堂は是處にある。何やら是に高札がある。先づよんで見う。なに〳〵極樂寺境内禁制之事。先づ寺の名は極樂寺。一つ竹木折取る事。猥りに鐘つく事。堅く禁制なり。わあ外の禁制は構はぬが。此の鐘をつくなにはホウド困つた。

折角是處まで來て。此の鐘一ッ聞殘すも殘念な。幸ひ邊りに人もなし。咎めたらば咎めた時の事。先づついてみう。（西門なり。ジャグハン／＼ト云ふ。笑ふ。）こりや破れ鐘ぢや。そとへは見えぬか。内にひゞりでもあるかぢや迄。此の樣な破れ鐘が何の役に立つものぢや。又外の寺へ參らう。鐘なつくなと書いて置いたこそ道理なれ。あの樣なわれ鐘が何の役に立つものぢや。いやまた是處に大きな寺がある。なう／＼。此の寺の名は何と申す。なに建長寺。さればこそ尊い寺は門から見ゆると云ふが。鎌倉一番の建長寺。扨々綺麗な事かな。さて鐘樓堂はどこにある。さればこそ是處にある。さらば此の鐘の音を聞かう。（北門なり。コント鳴る。）扨も冴えたよい鐘の音ぢや。最前から聞くうちに。此の樣な冴えたよい音はない。是れに極めて歸らうさりながら。念の爲ぢや。も壹度ついてみう。つく。聞けばきく程よい音ぢや。先づ急いで歸らう。誠に。隙が入らうと存じたれば。重疊の鐘に出合ひ。早速に埒が明いてこのような嬉しい事はない。此の由を頼うだお方へ申上げたらば。さぞ御滿足なさるゝであらう。何かと云ふうちに戻つた。まうし頼うだお方。御座りまするか。（常の如し。）アドへやれ／＼。骨折や。何と金の値をきいて來たか。シテへ成程聞いて參つて御座る。アドへそれはでかした。所々で遊ふであらう。シテへ所々で遊ひまする。アドへさうであらう。して何程するぞ。シテへエ。アドへ何程するぞ。シテへはあ。何程致しますかは存じませぬが。先づ壽福寺の鐘を聞いて御座れば。ジャモウ／＼。先づ大體の音で御座る。アドへあれには何をぬかしをる事ぢや。シテへさて鐘の音も所々で違ふと仰せられたに依つて。それから圓覺寺の鐘をついて見ましたればパアン。それは／＼薄い音で御座る。アドへ呆れもせぬ事を云ふ。シテへ此の樣な薄い音にはお役に立つまいと存じて。今度は極樂寺へ參つて御座れば。まうし大事の事の。外へは見えませねども。内にひゞりでもあるかして。つくといなやジヤグハン／＼。われ鐘で御座る。アドへどうでもきやつは氣が違うたさうな。シテへ此の樣なわれ鐘は役に立たぬと存じて。それから鎌倉一番の建長寺へ參つて御座る。さすが建長寺で御座る。鐘の音を聞きましたが。コヲン引く。それは／＼冴えたよい音で御座る。どれこれと仰せられうより。此の建長寺の鐘にお極めなされたらばよう御座りませう。アドへ何ぢや。建長寺の鐘に極めい。シテへハア。アドへ扨はおのれは突き鐘の音を聞いて來たか。シテへ左樣で御座る。アドへやい。うつけ者。知らずば知らぬとなぜ問うて行かぬ。先づ心を鎮めてよう聞け。悴もやう／＼成人したに依つて。黃金作りの太刀をのし付けに作つて取らせうと思うて。金の値を聞いて來いと云ふに。うそつき鐘の音を聞いて來て。何の役に立つものぢや。シテへお前もまた黃金なら黃金と。初めからいうたがよう御座る。アドへ推參な事をぬかし居る。身が内には叶はぬ。出てうせう。シテへハア。アドへまだそこに居をるか／＼。シテへ御ゆるされませ／＼。アドへ扨々腹の立つ事ぢや。シテへ是はいかな事。以の外の御機嫌ぢや。身共はうつけた者ぢや。今よう思へば。黃金作りの太刀を作らせらるゝに。突鐘のいらうやうがない。是は誤つた。何としたものであらうぞ。イヤ頼うだ人は有興人ぢや。此の體を謠に作つて謠うて御機嫌の直さうと存ずる。（イロ）鎌倉へつと入相の鐘これなり。東門にあたりては壽福寺の鐘。諸行無常と響くなり。南門にあたりては圓覺寺のかね。是生滅法とひゞくなり。さて西門は極樂寺。是また生滅々已の理り。

北門は建長寺。寂滅爲樂と響き渡れば。何れも鐘の音聞きすまし。急いで登るかひもなく。さもあらけなき主殿の。そくびを取つてつきがれの〳〵。ひゞきに花をや直すらん。アド〽何でもない事。しさり居れ。ト云うて叱り。留めて入るなり。

川上（かはかみ）

シテ　盲目の夫
アド　妻
（入道共）

シテ〽大和の國吉野の里に住居致す者で御座る。某十ヶ年以前にふと目を煩うて御座る。様々療治を致したれども。その甲斐も無う遂に斯様の盲目となつて御座る。生れつきの盲ならば。その様にも御座るまいに。黒白を存じての俄盲の事なれば。不自由なと申さうか。斯様な迷惑な事は御座らぬ。又この山の奥川上と申す所に。天から降らせられたあらたな御地藏様が御座るが。殊の外驗佛者で。何事につけても。信心に祈誓申して願成就せぬと申す事はない。此中盲共が大勢參つたが。悉く目が明いたと申す。生れ付きの盲さへ目が明いたと申すに。まして身共は俄盲の事ぢやによつて、信心に祈誓申して願成就せぬと申す事はあるまいと存ずる。此上は某も此の川上へ參つて願をかけうと存ずる。先づ女共を呼び出して談合致さう。是の人居さしますか。お居やるか。アド〽今めかしや〳〵。妾を呼ばせらるゝは何事で御座る。シテ〽少し談合する事がある。先づ斯う通らしめ。アド〽心得ました。それは心許ない。何事で御座る。シテ〽別に心許ない事はない。身共がこの目の見えぬも。大方十ヶ年にもならうか。アド〽成。程妾が是へ參つてからで御座る程に。十年にもなりませうとも。シテ〽この目に就いて。様々の療治をしたれども少しも其驗がない。又承れば此の山の奥川上と言ふ所に。天から降らせられた貴いお地藏様があつて、此中座頭共が大勢參つて祈願をしたれば。悉く目を明けて下されたと言ふに依つて。身共も川上へ籠らうかと思ふが何とあらう。アド〽誠にこなたの目については。様々看病を致したれども。その甲斐も無うて氣の毒に思ひまする。成程その様なあらたな事なれば。早う參らつしやれたがよう御座らう。シテ〽卽ち思ひ立つ日が吉日ぢや。追付け參らう程に。そなたはよう留守を召され。アド〽お留守の事はそつとも氣遣ひなされな。シテ〽明日は早々戻つて會はうぞ。アド〽明日は目出度うお目にかゝりませう。二人〽さらば〳〵。シテ〽先づ急いで川上へ參らう。シカ〳〵。誠に。病と申すに。何一つ取得は無けれども。取分けこの目の見えぬ程。難儀な事は御座らぬ。春なればとて。花が何時咲くやら散るやらも存ぜず。秋なればとて月を詠める事もない。唯明けても暮れても。片隅にうか〳〵として居るばかりぢや。あいた〳〵。扨も〳〵いたやの〳〵。この物に蹴躓くにほうど困つた。扨も〳〵痛い事かな。今のは何であつたぞ。ト云うてさぐり。ハア是は石段ぢや。扨は參り著いたか。思ひの外早う參り著いた。先づ石段を上らう。えい〳〵〳〵。鰐口が有りさうなものぢやが。爰にあるは。ト云うて鰐口をならし拜む。常の通りなり。私只今參詣致す事餘の儀では御座らぬ。十ヶ年以前にふと目を煩ひまして。斯様の盲目となつて御座る。あはれ地藏菩薩のお蔭を以て。再び開目なされて下され。南無地藏菩薩〳〵。今宵は是に通夜を致さうと存ずる。扨も〳〵大參りと見えて賑々しい音がするは。ハア私の事で御座りまするか。私は是に籠りまする者で御座る。こなたはどれからの參詣で御座

りまするぞ。なに。近江の國。是は遠方からの御參詣で御座る。定めて何ぞ御蔭が御座りませう。あのこなたがや。扨々それは笑止な事で御座りまするさりながら。御信心をなされませ。あらたな地藏菩薩で御座るに依つて。御利生の無いと申す事は御座りますまい。成程今宵は申合せませう。忝う存じまする。是はいかな事。身共ばかり迷惑するかと思へば。又あの様に難儀をなさるゝ御方もあり。扨もおいたはしい事かな。ハア私の事で御座るか。成程兩眼共に見えませぬ。いやも不自由なと申さうか。御推量なされて下されい。扨お前はどれからの御參詣で御座ります。上方。是も遠方からの御參詣で御座る。何の御願で御座る。あの願成就の御禮詣り。扨も〳〵それはお羨ましい事で御座る。私もお前にあやかりまして。早う御禮參りが致したう御座る。忝う存じまする。又あの様にお禮參りをなさるゝお方もある。扨も〳〵羨ましい事ぢや。ハア夜が更けたと見えて。地藏の法號を唱へ。經陀羅尼の聲ばかりぢや。さらば身共もまどろまう。ハア〳〵。あら有難や。暫く睡眠の内にあらたな御靈夢を蒙つた。扨も〳〵忝い事かな。南無地藏菩薩〳〵。ハアこりやどう

やら暗い所に火をともす様に心持が思ふ。思ひなしか世間がうす〳〵と見ゆる様な。御夢想の通り目が明いたらば嬉しい事ぢやが。思ひなしかうじよ〳〵と目が痒うなつた。ハテ心面白い事かな。南無地藏菩薩〳〵。扨も〳〵有難い事ぢや。あれ〳〵いかう明かうなつた。ハテこりや目が明いた。笑ふ。扨も〳〵有難い事かな。先づ久し振りで天道をも拜し。青々とした草木の色をも眺める事ぢや。この様な忝い事はない。南無地藏大菩薩〳〵。さりながら。爰に一つ氣の毒な事がある。何としたものであらうぞ。いや〳〵とかく身共が目にはかへられぬ。それは又歸つてからの分別に致さう。笑ふ。杖を見て。是はいかな事。あさましい。まだ盲の癖が失さらいで。此杖は何ぢや穢らはしい。捨てゝ參らう。シカ〳〵。誠に。神佛の事を假初にも疑はう事では御座らぬ。様々の療治を致しても少しもその驗のないに。斯様に一夜の内に目が明くと申すは。何れ奇特な事で御座る。アド〽是の人は昨夜川上へ參られて御座る。心許なう御座る。迎ひに行かうと思ひまする。ト言うて。正面にて二人行きあたる。なう〳〵こちの人。戻らせられたか。シテ〽そなたは女共か。アド〽こなたは目が明きましたか。シテ

〽オヽ目が明いた。アド〽扨も〳〵目出度い。有難い事で御座るなう。シテ〽先づ目の中を見てたもれ。アド〽どれ〳〵。是はいかな事。今迄はどんみりとした目で御座つたが。黑い涼しい目になりました。シテ〽嬉しや〳〵。先づそなたの顔をも久々で見る。なんと是は有難い事ではないか。アド〽何れ是はあらたな事で御座る。妾もやがてお禮參りをしませう。シテ〽いやそなたは。禮に參るはいらぬものぢや。アド〽何故に妾に參るなと仰せらるゝ。シテ〽地藏様も唯明けては下されぬ。ちと様子があつて明けて下された。アド〽それはどの様な事で御座る。シテ〽この様子はこなたの前では言ひにくい事ぢや。アド〽是はいかな事。夫婦の中で何の言ひにくい事が有るもので御座らう。早う言はせられい。シテ〽何れはや言はねばならぬ事ぢや。それならば咄さう程に。必ず腹をお立てやるな。アド〽氣遣ひせずとも早う仰せられい。シテ〽先づ夜前あれへいて通夜をして居たれば。夜半の頃でもあらうか。忝くも地藏菩薩の御戸帳を開き。ゆるぎ出でさせられ。錫杖を以て某が額を三度まで撫でさせられて。やれやれ不憫の者や。そちは今迄迷惑させる者で

はなかつたれども。こちへも言はぬに依つて久々難儀をさせた。その仔細と言ふは。今連添うて居る女は。大悪縁ぢや。アド〽ヤア。シテ〽そなたと身共は悪縁ぢやといのう。アド〽是はいかな事。シテ〽早々歸つて離別せい。今こそ明けてとらするとあつて。此様に目を明けて下されたが。何と忝い事ではないか。アド〽エヽ腹立ちや〳〵。神や佛と言ふものは。夫婦の仲の悪いを。仲ようするこそ神佛の役なれ。どこにか是程仲よう添うて居るものを。去れと言ふ様な事があるものか。ヤイヤイ。してその返事は何と言うた。シテ〽何と言ふものぢや。有難う御座る。早々歸つて離別致しませうと申し上げたれば。お顔の様な美しいお聲で。善哉〳〵尤も〳〵と仰せられた。アド〽エヽ腹立ちや〳〵。あの川上のやけ地藏のくさり地藏めが。何の尤もとぬかしをる事があるものか。そちは妾を去らうと思ふか。シテ〽ハテ目には代へられぬ。不承ながらいんでたもれ。アド〽なう腹立ちや〳〵。なんぼでも妾はいぬ事ではないぞ。シテ〽いや。そなたとは悪縁ぢやに依つて。連添へば又目がつぶるゝといの。アド〽つぶれたら大事か。シテ〽それはそなたの無心別ぢや。折角目が明いたものを。又連添うてつぶさせうより。そなたも亦外へいて。よい男を持つたがよい。アド〽そのつれをぬかしをる。長々目の見えぬ内は苦痛させて。今また目が明いたれば。妾を去つて。後でよい女房を持たうでな。シテ〽そりや持たいでは。アド〽エヽ腹立ちや〳〵。その様な事はなるものかいやい〳〵。シテ〽さりとてはそなたは又不合點な人ぢや。最前から言ふを何と聞くぞ。そちと身共は悪縁ぢやに依つて。連添へば忽ち目がつぶるゝといやい。アド〽つぶれたれば大事か。今迄ぢやと思ひなつたがよい。シテ〽扨はつぶれても大事ないか。アド〽オヽさて大事ない。シテ〽是非に及ばぬ。今迄ぢやと思ふ迄よ。アド〽なんぢや添はう。シテ〽ハテしやう事がない。アド〽なう〳〵嬉しや〳〵。先づ戻らせられい。シカ〳〵。また神佛は御慈悲が深いに依つて。一旦明けて下された目を。今更つぶしもなされまいぞいの。シテ〽いやいや。かた〴〵のお約束ぢやによつて。とかく心許ない事ぢや。アド〽その様な心弱い事な仰せられずとも。さあ〳〵早う戻らせられい。シテ〽やい〳〵女共。アド〽ヤア。シテ〽どれに居るぞ。アド〽此處に居りまする。シテ〽そこにか。アド〽中々。シテ〽是はどうやら世間が暗うなつた様な。アド〽それはこなたの思ひなしで御座る。シテ〽いや。待て〳〵。是は中々思ひなしではないわいやい。女共どれに居る。アド〽爰に居りまするわいなう。シテ〽あいた〳〵。是は目がしきりに痛い痛い。アド〽是はいかな事。先づ目を明かせられい〳〵。シテ〽いやどうも明かれぬ。アド〽どれ〳〵。妾が明けて進ぜう。シテ〽あいた〳〵。その様にすれば痛い〳〵。アド〽何としませう。シテ〽先づ目の中を見てたもれ。アド〽心得ました。南無三寶。シテ〽何とした。アド〽今迄は黒い涼しい目で御座つたが。又白いどんみりとした目になりました。シテ〽何ぢや。白いどんみりとした目になつた。アド〽中々。ト云うて。二人とも坐りて泣く。シテ〽身共がまつかうあらうと思うて。色々と斷りを言へども。お聞き入らぬに依つて。此の様に又目がつぶれた。是は先づ何とした因果な事ぢや。アド〽妾もこなたが大切さの餘りで御座る。必ず怨みと思うて下さるな。シテ〽是は夢かやあさましや。夢か現か寢てか覺めてか。おら定めなや中々に。報ひ有りける浮世かな。今迄は黒眼にてありつるが。又眞白になりたる

事のあさましさよ。アドへよし〳〵それも前世の事と思ひ。さのみな歎き給ひそとよ。シテへ是かや事の喩へにも。二人へ是かや事の喩へにも。しゆくじうに目のつぶるゝとは。今身の上に。知られたり〳〵。シテへ此様な事を知つたれば。最前の杖をば捨てまいものを。シテへなういとしい人。こちへござれ。シテへ手を引いて呉れさしめ。アドへ心得ました。

ト言うて。留め。手を引き入る也。

川原太郎

シテ　川原太郎
アド　太郎の妻
立衆　所の者

（入道具）

アドへ妾は此の邊り酒を賣る者で御座る。今日は川原の市で御座る。參つて商を致さうと思ひまする。シカ〳〵。まだ早う御座れども。内にゐれば和男が酒を飲ませいと云うて。いろ〳〵せがみまするに依つて。それが聞きともなさに。市場へ早う參る事で御座る。何かといふうちに川原の市場ぢや。先づ店を出して酒を商はうと存ずる。シテへこれは此の所に太郎と申す者で御座る。今日は川原の市なれば。女共は早々から酒を商ひに參つて御座る。今朝はまだ酒を呉れなんだ。市場へ參つて酒を食べうと存ずる。シカ〳〵。身共が酒を好いて飲むことを。女共が何かといふて酒を呉れぬ去りながら。何とぞ呉れねばならぬ様にいうて。酒を食べようと存ずる。いや是は店が出たよ。今朝はいつもより早う御出やつた。何と酒がよう賣れるか。アドへいや買手が御座らぬ。シテへ何と一つ試みをせうか。アドへいやまだ酒の口をあけませぬ。シテへ口をあけぬとは。酒買が來てもあけぬか。アドへ酒買があれば明けいではなりませうか。シテへそれならば。迚も明ければならぬ事ぢや。ちよと今口を明けさしめ。アドへいやいや。賣初をせぬ内に酒を飲ますれば。一日酒が賣れませぬに依つて。進ずる事はなりませぬ。シテへならぬものを無理に飲まうでもないが。去りながら。此處に氣の毒がある。今にも何れもお出でなされて。太郎今日の酒の風味はよいかとお尋ねの時。いや何とか存じませぬとはいはれまい。一つは商ひの爲ぢや。試みに少し飲うて見う。アドへさても〳〵。むさとした事をおしやる。何れよりお問ひなされたら。つつとよい酒で御座るというたがよい。シテへ飲みもせぬ酒をよいといはるゝものか。その上今朝宿でも呉れなんだ。一つ飲まう。お出しやれ。アドへとかく賣初をせぬ内はなりませぬ。シテへ扨々そなたは心強い人ぢや。深い縁でなければ夫婦にもならぬに。俺を粗末に思ふかとの事ぢや。其の上その酒は身共がのではないか。俺が物を飲むに言分はあるまい。アドへようおしやるのう。妾が辛勞して造り出す酒を飲ませ果てなりませぬ。シテへすればどうでも呉れぬか。アドへ賣初をせぬ内は何とおしやつてもならぬ。シテ腹を立てる突き退けて。シテへ扨々憎いことかな。何とせうぞ。いや致し様がある。やい〳〵。酒を呉れずば後で悔むことがあらうぞよ。アドへ何も悔む事はおりない。シテへ構へて酒を皆賣つて來ずは。内へ寄せぬぞよ。アドへ賣らずば戻りはせまいぞ。シテへよい〳〵。頓て思ひ知らせうぞ。ト云うて。太鼓座に居る。立衆へなう。何れも御座るか。立衆へこれに居りまする。立衆へ今日は川原の市で御座る。太郎が店へ往て酒を飲うで。ゆる〳〵遊びませう。衆へ一段とよう御座らう。衆へさあ〳〵。何れも御座れ。シテへこれはお若い衆。御歴々

お揃ひなされてどれへお出でなされる。衆へ今日はいつもの通り川原の市ぢやに依つて。そちが店へ酒を飲みに行くは。シテへそれは御無用で御座る。衆へ何故に止めるぞ。シテへ私が酒が此の中腐りまして。酷う御座る。衆へ扨々そちは律氣な者ぢや。世の常の者ならば。たとひ／＼風味が悪しくとも。よいといふものぢやに。我が物を悪いといふに僞はあるまい。皆きかせられたか。今日は戻つて又重ねて出ませう。衆へ成るほど今日は歸りませう。衆へ太郎。それならば今日は歸る。又重ねて酒を飲みに行かうぞ。シテへよい所でお目に懸りました。又そのうちお出でなされて下され。衆へ心得た。さあ／＼何れも戻らせられい。衆へ心得ました。ト云うて。各入る。女立聞きして。アドへなう／＼。腹立ちや／＼。皆のお衆が酒を參らぬ様に。ない事を吐かし居る。あれは先づ誰が損ぢやぞいやい。扨も／＼苦々しい事かな。シテへやい／＼。女ども。酒が賣れるか。アドへ今の様なことをいうて。誰が酒を買ふものぢや。シテへ身共に酒を吳れぬ程に。酒が夥しう賣れるを見物に來た。アドへ皆酒を飲みに御座れども。酷いの苦いのと無い事を吐かし居つて。それは先づ誰が損ぢや／＼。シテへ定めて大分酒が賣れて。身だけ錢が溜らうと思うて。錢ざしを綯うて來た。つながう程に。さあ／＼賣溜の錢を出さしめ。アドへ物をいはすれば方量もない。あの身知らずの生き畜生奴。シテへ己れは憎い奴の。藁を束ねても男は男ぢや。畜生と吐かした頤を引つ殺いで退けう。ト云うて。酒林の竹にて追廻す。女逃げさまに杓と士器を持つて。橋懸りへ逃げる。追廻し。竹を振上げる。杓にて止める。アドへ堪へさせられい／＼。シテへそれで止めて何とする。アドへ一つ飲うで機嫌を直さしめ。シテへありやうはそちが心を引いて見たのぢや。本の女房に仲人なしといふ。仲を直らう。心安う思はしめ。アドへそれは嬉しうこそ御座れ。さあ／＼一つ參れ。シテへさらばお注ぎやれ。受けて飲む。シテへ扨も／＼よい酒ぢや。毎年とは申しながら。別して當年は精をお出しやつた故ぢや。さて今朝から飲み度い／＼と思つて居たに依つて。一杯飲んでは堪能せぬ。二つも三つも續けて飲まう。アドへそなたの物ぢや。氣に入つた様にして參れ。シテへちと差さう。お飲みやれ。アドへ戴きませう。ト云うて。アド飲む。シテ小謠うたふ。肴に舞ふといふて。舞をまふこともあり。又盃をシテへ戻す。悦んでひたもの飲む。シテへ何とこの小袖はどれぢや。アドへこれは去年ので御座る。シテへことしの着る物はなぜに着ぬぞ。アドへその様に新しいばかり着れば。つい損れまする。シテへ損れば何程でも拵へて着せる。入らぬ始末でおりやる。さて遂に浴び飲みをした事がない。浴飲をせう程に注いでお呉りやれ。アドへ浴び飲みとはどの様な事をして飲むことで御座る。シテへ盃を受けて飲うで居るうちに。ひたもの後から注いでお呉りやれ。アドへ成るほど。心得ました。さあ注ぐぞ。シテへ靜かに／＼。ト云うて。シテ飲む。アド酒を注ぐ。零るゝ心持にて。飲み／＼。靜かに注げといふ。アドそれを聞入れず。ひたもの注ぐ。後は歌へかゝり。目へ入る心持にて。苦しがるなり。アドへ卑怯者。飽くほど飲め。ト云うて。杓を顔へ差し寄せて。酒をかける態なり。シテ宥せといふて逃げるを。追込み入るなり。

鎌腹

シテ　太郎
アド　近所の者
女　太郎の妻
（入道具）

女へえい腹立ちや／＼。ト云うて。内より追つて出る。シテ逃げて出る。アド後より出て。中へ入り。留める。アドへ先づ待て。これは何事ぢや。女へ先づ聞いて下され。皆在所の

若どもは朝とうから起きて。山へ柴しに行きまする。和男にも行けと言うて。此の様な棒の鎌まで宛うて。色々と申せども。何の彼のというて行きませぬ。思つても見さつしやれ。山へ行かいで何を渡世が成るもので御座る。アドへ先づ待て／＼女共。屹度云付けてやらう。女へ還かしやれ。打殺して退けまする。アドへ屹度云付けて下され。アドへ心得た。やい太郎。シテへはあ。アドへこれは見苦しい。何事ぢや。シテへよい所へ出て下された。アドへよい所といふことがあるものか。またしても／＼女に恥らかされて外聞の悪い。何故山へ行かぬ。シテへ山へ行くまいでは御座らぬ。行かうと思うて。今朝から此の様に身拵へして居ますれども。何をいうても食ふ物を食はさぬに依つて。山へ行かうやうが御座らぬ。女へやい其處な奴。シテへ何ぢや。女へ己れ今朝喰つたを早や忘れ居つたか。シテへ何處に食はせた。己れこそはな。朝臥をし居つて。有明つて起きて。隣邊りへ往て。大茶を飲うで。人事を吐かし居るではないか。女へやい。己れこそ朝臥をし居つて。有明つて起きて隣邊りへ往て。なほ釜の下さへ燃ゆれば無理にいしがつて。何ぞ喰はれば戻らぬ様にし居る。

己れそれは誰が恥ぢやぞいやい／＼。シテへ誰殿。あれを聞いて下され。藁で束ねても男は男で御座る。それに女の口から今の様な

事を吐し居る。あの棒や鎌を取つて下され。アドへ心得た。これ／＼山へ行かうといふ程に。その棒や鎌を此於へおこさしめ。女へ山へ行かうといひますか。アドへなか／＼。女へそれならば早う行き居れといふて下され。アドへ心得た。さあ／＼棒や鎌を取つた程に。早う山へお行きやれ。シテへおこさつしやれ。扨も／＼腹の立つことぢや。女に今の様な事をいはれて。何と堪忍が成るものぢや。ト云うて。鎌をほどき棒を當てゝかゝる。アドへやい太郎。それは何をする。シテへ腹を切ります。アドへ身共が居るからは聊爾はさせぬ。ト云うて留める。女へこれ／＼何を云付ける。アドへ腹を切らうといふ。女へさてさて今めかしい。切り度くば切り居れといはつしやれ。シテへやい女め。女へ何ぢや。シテへおれが腹切るというて。ただ切らうと思ふか。腹十文字に切つて見せう。女へおゝ十文字になりとも。八文字になりとも。切り度い様に切り居れ。アドへその様な事はいはぬものぢや。シテへさあ退かしやれ。切りま

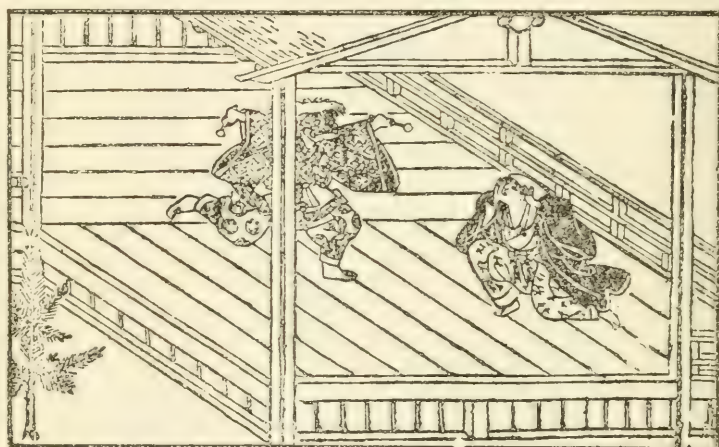
する。アドへやれ先づ堪忍をせい。女へこれこれ。そなたのその様に言はつしやるに依つて。あいつが人そばへをします。構はずと此方へ御座れ。ト云うて。無理にアドを連れて行く。此のところ仕方あり。シテへあこれ／＼。いま腹を切りますぞや。誰殿誰殿。これはいかなこと。つゝとお行きあつた。さて／＼苦々しい。留むるならとつくりと留めおふせ度いものではないか。此の様な生半着な事をして。これが何となるものぢや。また身共も最前の時よい留まり時機であつたものを。餘り強う引き過ぎて。いま後へも先へも行かぬ。何としたものであらう。腹を切らうといふたに。若し切らずは。常々身共を敷き居るに依つて。人のやうには吐かし居るまい。是非に及ばぬ。腹を切らう迄よ去りながら。鎌が切れずは痛からう。先づ鎌を砥いで。とても死ぬるならば痛うない様にして死なう。いうても／＼あの誰殿は。日頃地下で口を利く人ぢやが。肝腎の時には役に立たぬ人ぢや。とつくりと留めおふせさつしやれば。いま此の様な難儀には及ばぬものを。いや又誰殿は留めう心であつたれども。何をいうても女めがついと連れて行き居つた。さて／＼苦々しいことかな。おゝこりや鎌の刃が附いた。とても事に腹も能う採み柔げて。そつとなりとも痛うない様にせう。ト云うて。諸肌を脱ぎて。さて腹を切るといふは。先づ左手へ打立て。右手へ引廻すものぢやと聞いた。すれば無雙な事ぢや。何にもせよ。先づ鎌を左手へ打立て。ト云うて。鎌を打立てうとして。ちやつと退き。あゝ恐ろしや／＼。既に鎌が腹へ立たうとした。思ひなしか腹がひりひりする様な。扨も／＼危いことであつた。いや／＼。此の様な臆病な事ではならぬ。思ひ切つて死なう。いや。なう／＼誰殿。いま腹を切りまするが。出て見物さつしやれぬか。女め。いま腹を切るぞよ。さあ今が最期ぢや。ト云うて。兩手にて鎌を腹の方へ寄せる仕様あるべし。これは手が筋立つて鎌が腹の方へ寄らぬ。何の寄らぬといふ事はあるまい。寄せて見せう。ト云うて。力むなり。とかく寄らぬ。その上我と我が腹へ打立て難い。何卒無雜作に切様のありさうなものぢやが。いや。あの大木に此の鎌を括りつけて。さて木へ抱きついて。ぐつと突き通さう。ト云ふ。シカ／＼のうち。鎌を脇柱へ結付けるなり。これ／＼これでよいぞ。やい／＼女め。いま腹を切るぞよ。何某殿も出て見物させられぬか。さあ今が見頃ぢや。ト云うて。柱にとりつきて。これはまた腹が鎌の方へ寄らぬ。何の寄らぬ事があるまい。寄せて見せう。いかな／＼。後へは寄れども。先へは寄らぬ。何としたものであらうぞ。いやよい仕様がある。あれから走つてかゝつて一思ひに死なう。これ／＼。誰殿。いま腹を切りますぞや。女め出て見物せぬか。今が最期ぢや。さあ／＼／＼。ト云うて。走りかゝり。ちやつと前へ引く。恐ろしや／＼。いま一足であの尖つた鎌が此の柔かな腹へ突通つてよいものか。これでは切り難い。何とせうぞ。思かや／＼。最前からあの鎌が目に見ゆるに依つて。手が筋張つたの。鎌が寄らぬのといふ。いま合點が往た。今度は目を塞いで。あれから走りかゝつて。一思ひに死なう。いやこれ／＼。此處でけなげな者が鎌腹を切る。皆出て見物せぬか。女め今死ぬるぞ。誰殿も出て見物さつしやれぬか。さあおれが斯ういうたらば。誰殿がお留めあつても。いかな／＼留まる事ではないが。それもまた留め様に依つて留るまいものでもない。留めうなら今ぢや。留めさつしやれぬか。人音もせぬ。是非に及ばぬ。先づ目を塞いで。さあ今が最期ぢや。さあ／＼／＼。ト云うて。目を塞いで。走り掛り。鎌の前にて目を開く。あゝ扨も／＼。危い／＼。既に命を捨てうとした。扨も／＼。苦々しい事ぢや。これは延びれば延びるほど死にとむない。その上腹を切ると

いふは。渇りに大勢見物があつて。何の彼のと云うてこそ。腹も切りよかつたものなれ。今日に限つて人通りさへない。此の様な時に死ぬるは。畢竟犬死も同然ぢや。何としたものであらうぞ。いやよいことを思ひ出した。今日は止めに致さう。これ〳〵今日は腹を切ることは止めて。機嫌を直して山へ行かう。此の思案がとうから出ればよかつたものを。また重ねて死ぬるならば。先づ一番に女めを切殺し。其上へ飛乗つて。腹十文字に切つて退けう。カヽル。爰を見れども人もなし。彼処を見れども人もなし。制する程は止まずして。あら腹立ちや〳〵。可惜命を捨てんより。鎌と天秤棒を打擔げ。いざ柴刈に行かうよ〳〵。山から戻るは菊の代ではないか。ぢやあそれならば内へ言傳がし度い。腹を切らうと思うたれども。機嫌を直して山へ行く程に。洗足の湯を沸かして置けと云うて給れや。何ぢやいうて呉れう。おゝ健氣な者ぢや。頓て戻つて逢はうぞ。さらば〳〵。ト云うて。留めて。入るなり。

雷

シテ　雷
アド　藪醫者

次第　アド〽種薬を持たぬ下手醫師。〳〵。きわだや薬種なるらん。都方に住む藪醫者で御座る。上方には歴々の醫者衆が多いに依つて。某如きの療治は迚も〳〵の事で御座る。此度吾妻の方へ下り。一稼致さうと存ずる。シカ〳〵。誠に。國々よりは皆都へ〳〵と上ることぢやに。某は花の都を振捨てゝ。遠國へ下ると申すは。口惜しいことで御座る。何とぞ仕合を致して。再び都へ上らうと存ずる。これは廣い渺々とした野へ來た。これは何といふ所ぢやぞ。武藏野であらう。山も無く里も見えず。扨も〳〵廣いものぢや。シカ〳〵。すれば爰は武藏の國か。いかう道捗の參ることぢや。わあ〳〵俄に暗うなつた。これは夕立であらう。何にもせよ里近い方へ參らう。南無三雷ぢや。夥しう鳴るは。桑原々々。扨も光るは〳〵。シテ〽ぴかり〳〵。ぐわら〳〵〳〵。ト云うて。飛出るなり。行當り落ちた心なり。アド驚きて下に伏す。シテ〽あお痛やの〳〵。やい。それに居るは何ぢや。アド〽私は在方を巡る藪醫者で御座るが。おまへはどなたで御座る。シテ〽身共を知らぬか。アド〽いや存じませぬ。シテ〽雷ぢや。アド〽あゝお命を助けて下されませ。シテ〽其の段は氣遣ひするな。醫者ならば頼むことがある。アド〽大方の事ならばお宥されませ。シテ〽いや別の事でもない。おれはこのうち氣分が悪かつた。今日はちと快さに遊山がてら出たれば。雲ぢぎれを見損うて。踏外して此所へ落ちたが。したゝか腰の骨をうつて痛む程に。どうぞ療治をして呉れい。アド〽これは迷惑で御座る。人間の療治こそ致せ。お雷の御療治をつひに致した事は御座りませぬ。これはお宥されて下されい。シテ〽己れ療治をせずは掴み殺すぞ。アド〽あゝそれならば致しませう。シテ〽早う療治をせい。アド〽然らば先づ御脈を伺ひませう。シテ〽どうなりともせい。アド恐がるなり。シテの頭を強く掴む。シテ驚き。シテ〽これは何とする。アド〽いや餘りお騒ぎなされますな。惣じて人間の脈は。肺ひぬいもんの六脈を左右の手で取りまする。また雷殿は頭脈と申して。頭にあると承りましたに依つて。伺ひまする。シテ〽さて何とある。アド〽以ての外の邪氣で御座る。御病態は中風で御座る。シテ〽中風とは何の事ぢや。アド〽中風と申しても風で御座る。惣じて風は萬病の長たりと申して。諸の病も皆風から生じまする。されば中風は外來にもあらずと申して。殊のほか難しいこ

とで御座る。シテ〽高い所から落ちた故か。いかう氣がまく〳〵する。どうぞこれを治して與れい。アド〽それならば氣付を上げませう。ト云うて○印籠より扇に一出す心などする○さ一アド出す。シテ〽どりや。ト云うて一○呑む。さて〳〵苦い藥ぢや。アド〽苦う辛う甘いところも御座る。シテ〽先づ心がはつきりとした。アド〽その筈で御座る。今の藥の銘を雷能丹と申して。私の家傳の名方で御座る。シテ〽まく〳〵するが治つたが。强う腰を打つて痛む。これを療治して與れい。アド〽それは針を立てゝ上げませう程に。お横にならせられませ。シテ〽どうなりともして治して與れい。アド〽お側へ參りまする。構へて理不盡なことをなされまするな。シテ〽氣遣ひせずとも。側へ寄つて療治をせい。アド〽扨も〳〵。いかう汚血が滯りました。爰に大きな塊が御座る。シテ〽そこぢや〳〵。アド〽針を一本立てゝ巡らしませう。ト云うて○針を出す。とかく常にお腰の廻りに灸治をなされませ。シテ〽隨分とは思へども。熱いによつて斟酌ぢや。アド〽御雷殿には似合はぬことで御座る。さらば針を立てまする。ト云うて一○針を立てる。シラ〽あゝいた〳〵。早う針をとれ〳〵。ト云うてあせる。兩人とも仕樣あるべし。とかくあつて針をとる。アド〽扨も〳〵御卑怯な事で御座る。シテ〽餘程快いが。もそつと痛む。アド〽それはもう一本針を立てますれば。其の儘治りまする。シテ〽どうぞ痛まぬ樣に立てゝ貰ひ度い。强う痛むことなら嫌ぢや。アド〽隨分痛まぬ樣に立てませうが。身へ直に針を立てることで御座る程に。少しは痛みませう。今のやうにお騷ぎになつては立てられませぬ。御辛棒なされませ。シテ〽そのうち隨分そろ〳〵立てい。アド〽爰で御座るか。堪へまするか。シテ〽成程。その邊が氣味が惡い。アド〽さらば立てまする。ト云うて一立てる。初めの心なり。シテ〽そりや痛い。またいた〳〵。ト云うてあせる。前に同じ。アド〽針が折れまする〳〵。シテ〽早う拔けいやい。己れ拔かずは摑み殺すぞ。アド〽それ〳〵取りまする〳〵。扨も〳〵。人間さへ堪忍致すに。お雷殿には似合ひませぬ御卑怯なことで御座る。シテ〽それでも痛かつた。アド〽後がよう御座りませうが。シテ〽いかさま。氣味が惡う痛かつた所はすきと治つた。アド〽その筈で御座る。シテ〽やれ〳〵重疊の者に出逢うてよい仕合であつた。さらば天上する程にさう心得。アド〽先づ御待ち下さりませ。シテ〽何と待てとは。アド〽藥代を下されい。シテ

〽薬代とは何のことぢや。アド〽されば薬代と申して。斯様に療治を致して御本服させますれば。其の禮物を請けまして渡世致す。それを下されいと申すことで御座る。シテ〽尤もさうな事なれども。身共は今日はふと落ちたことぢやに依つて。持合せがない。汝が宿を云うて置け。近日一門眷族残らず引連れて。そちが所の前で乾度禮をいはうぞ。アド〽いかな〳〵。それは迷惑で御座る。必ず御無用で御座る。薬代は申請けますまい。その代りお雷殿へお願ひが御座る。シテ〽身共に似合うたことならば。何なりともいへ。叶へてとらせうぞ。アド〽別の事では御座らぬ。惣じて天地の間は雷殿のなされ度い儘であらうと存じまする。私共は在方を廻り。人の療治致せば。照り続けば旱損ぢやと申し。降り続けば水損ぢやと申して。薬代を呉れませぬ。此の後は照り続きも降り続きも致さず。ただ五穀成就致すやうにお守りなされて下され。シテ〽成程尤もぢや。當年からただ五穀成就なす様に守らうぞ。アド〽それを何とぞ頼みまする。シテ〽さて汝を典薬頭と祝うてやらうぞ。アド〽別してそれは有難う存じまする。シテ〽追付け天上する程に。さう心得。アド〽一段とよう御座らう。シテ〽ふつ〳〵てらいつ。同〽ふつつてらいつ。八百年がその間早損水損もあるまじ。御身は薬師の化現かや。中風を治す醫師を典薬頭といひ捨てゝ。また鳴神は上りけり〳〵。シテ〽ぴかりぐわら〳〵〳〵。

雁大名（かりだいみやう）

シテ　大名
アド　太郎冠者
小アド　肴屋の亭主
（入道具）

シテ〽遙か遠國の大名。なが〳〵在京致す所。訴訟悉く相叶ひ。安堵の御教書頂戴し。過分に新地を拜領し。あまつさへ御暇までを下されし。近日本國へ罷下る。此の様な悦ばしい事は御座らぬ。先づのき者を呼出し。此の儀を申聞かせ悦ばせうと存ずる。常の如く呼出す。なが〳〵在京致す所。訴訟思ひの儘に相叶ひ。安堵の御教書を頂戴し。剰へお暇まで下され。近日本國へ罷下る。此の様な目出度い事は無いなあ。アド〽内々斯様の儀を待ち得ました。いか程お目出度い事は御座りませぬ。シテ〽それに就いて在京中肝煎らせられた衆を。ざつと一振舞ふるまうて立たうと思うが。何とあらう。アド〽御意もなくば申し上げようと存じて御座る。一段と良う御座りませう。シテ〽良からう。アド〽はあ。シテ〽それならば身お薬所に振舞の役に立ちさうな魚が有るか。アド〽お薬所に振舞の役に立ちさうな魚は何も御座りませぬ。シテ〽何と肴屋町にはあらうが。アド〽何がさて肴屋町にはないと申す事は御座りますまい。シテ〽汝は大儀ながら肴屋町へ行て。振舞の役に立ちさうな魚を求めて來い。アド〽畏まつて御座る。シテ〽何と行かうか。アド〽何がさて參りませう。シテ〽やがて戻れ。つめる。大名事同じ事。アド〽火急な事を仰附けられた。先づ急いで肴屋町へ參らう。シカ〳〵。誠に。國元を出る時分は何時お暇が出ようと存じたに。早速お暇が出て。此様な悦ばしい事は無い。いや何かと言ふうちに肴屋町ぢや。さても〳〵。出したり〳〵。何を求めうと儘な事ぢや。是に見事な鳥が有る。御亭主それは何で御座る。小アド〽初雁で御座る。アド〽求めませうが。代物は何程で御座る。小アド〽五百疋で御座る。アド〽それは餘り高直な。三百疋に負けて下され。小アド〽初雁に限つて負けはない。いやならば止しにな

され。アドへ重ねて近附きになつて求める爲ぢや。どうぞ。三百疋に負けて下され。小アドへ重ねて近附きになつて求むる僞ぢやとおしやる程に負けて進ぜう。アドへそれは過分に御座る。小アドへこれ〳〵。代りも置かず何處へ取つてお行きやる。アドへ身共を知らつしやらぬか。小アドへいや存ぜぬ。アドへ賴うだお方の身內に太郞冠者と言ふ者ぢや。小アドへ是れは如何な事。賴うだお方をも存ぜず。まして此方をも知らぬに依つて。とかく代りが無ければ雁をやる事はならぬ。アドへ是は尤もぢや。それなれば代を取つて來う程に。暫く店を引いて置かしめ。小アドへ遲ければ出しますぞや。アドへ追附け取つて參らう。シカ〳〵。何れ亭主の申すが尤もで御座る。代り無しに肴を唯おこさう樣が御座らぬ。菜は粗相を致して御座る。まうし賴うだお方。御座りますか。（のさ者が居つたと云ふ。常の如し。）シテへ何と肴を求めて來たか。アドへ成程求めて參つて御座る。シテへ何を求めて來た。アドへ初雁を求めて參つて御座る。シテへそれは出かいた。急いで見せ。アドへいやまだ肴屋町に御座る。シテへいやこゝな者か。肴屋町にある物が何の役に立つものぢや。なぜ取つて來なんだ。アドへ代りが御座らねば肴をおこしませぬ。シテへ身が物ぢやと言はいで。アドへお前の物ぢやと申して御座れども。お前をも存ぜず。まして私をも知らぬに依つて。肴を唯おこさう樣が御座らぬ。シテへなぜ代りをやつて取つて來ぬ。アドへ代りをやらうにも此方には壹錢も御座らぬ。シテへそれ何時ぞや大分の鳥目を渡して置いた。それは何とした。アドへあの仰せらるゝ事は、ながく御在京に悉く使ひまして。最早壹錢も御座らぬ。定めてお前には御座りませう。シテへ恥しい事ぢやが。此方にも壹錢も無い。アドへそれは氣の毒で御座る。シテへそれよりまだ氣の毒がある。アドへ何で御座る。シテへ汝が肴屋町へやつた後で。何れもを申入れうと言うて早や人を廻した。今にもお出でなされたらば。何としたものであらう。アドへそれはまた早まつた事をなされました。私が歸つてからでも苦しうない事を。若し今にもお出でなされたらば何となされます。シテへ是非に及ばぬ。何と代りなしに肴のただ調ふ分別はあるまいか。アドへ代り無しに肴のただ調ふ分別は御座りまする。シテへ有るか〳〵。アド

へさりながら。お前にもお出でなされねばなりませぬ。シテへ何がさて肴さへただ調ふ事ならば。行かいでならうか。アドへそれならばざつとすみました。先づ五百疋と申す雁を三百疋に負けさせて。店を引かせて置きました。商賣人の事で御座る、定めて店を出さぬと申す事は御座るまい。シテへ出すであらうとも。アドへ所へお前がお出でなされて。きやつが申す値に召上げられて。持たせてお出で爲さるゝ所へ私が參つて。代りを持つて來た。雁を渡せと申しませう。お前へ上げたと申すで御座らう。其處でお前と私が散々喧嘩を致しまする。シテへして。アドへ時にお國言葉などをお出しなされて。刀の柄にお手などを掛けられたらば。よもや亭主が扱はぬと申す事は御座るまい。シテへ扱はうとも。アドへ其の良い間合を見透かして。かの雁をツイ。シテへ力笑工むだり〳〵。それでならぬと言ふ事は有るまいが。天下治まり目出度い御代に。喧嘩はいらぬものぢや。アドへいや是はお前と私との相對の事で御座るに依つて。そつとも苦しう御座らぬ。シテへそれもさうか。して肴屋町は何處ぢや。アドへいつもお出仕なさるゝ道に肴屋町が御座る。シテへ成程ある。アドへ其の通りを一町程眞直ぐに行て。左へきりつゝ廻つて。角から三軒目で御座る。シテへ大方合點ぢや。追附け行く程に。汝も番(つがひ)の抜けぬ様に來い。アドへ畏まつて御座る。つめる。シテへ先づ急いで參らう。シカ〳〵。誠に。利口な者を使へば。代り無しに肴のただ調ふ分別を思出した。何卒首尾よう仕終せたいものぢや。いや何かと言ふうちに肴屋町ぢや、先づ此の通りを一町程眞直ぐに行て、左へきりゝと廻つて。角から一軒二軒三軒。あれに見事な鳥が有る、定めてあの事で有らう。最早太郎冠者が來さうなものぢやが。アドへ最早よい時分で御座る、參らうと存ずる。ト一ノ松へ出る。うなづき。あれかと問ふ。仕方。シテへ亭主。こりやなんだ。小アドへ初雁で御座る。シテへ何だ初雁だ、身が買はず。代物はいくらだ。小アドへ五百疋で御座る。シテへがいに高い。もそつと負けろ。小アドへ初雁に限つて負けは御座らぬ。シテへよし〳〵、侍の値切るも如何ぢや。買つてやらず。持つて來ろ。小アドへ畏まつて御座る。シテへ亭主持つて來ろ。アドへこれ〳〵亭主代りを持つて來た。雁を渡さしめ。小アドへそなたが遲かつたによつて。早あなたへ上げた。アドへ是はいかな事、其の爲に店を引かせて置いた。さあさあ渡さしめ。小アドへ遲ければ店を出すと言うたではないか。シテへやい〳〵。身が買つた雁になぜ手を指す。アドへ是はお前の御存じない事で御座る。亭主と私の相對で御座る。シテへ亭主持つて來い。小アドへ畏まつて御座る。アドへとかく身が求めて置いた雁ぢや。早う渡さしあ。小アドへはてさてそなたが遲いによつて。あなたへ上げたと言ふに。シテへやい〳〵。やいそこな奴。ヤアラおのれは憎い奴の。最前から身が買うた雁に何故手を指す。みようたんを切つて斬下げてくれず。アドへやあら御仁體にも似合はぬ事を仰せらるる。身共も似合ふ旦那を持つた。弓矢八幡指もさゝす事では御座らぬ。小アドへ要らぬ事をおしやるな。シテへ推參な事をぬかし居る。たつた一打にしよう。小アドへ先づお待ちなされませ。シテへ何と待てとは。小アドへ亭主が扱ひまする。シテへ何ぢや亭王が扱ふ。小アドへはあ。シテへよし〳〵。亭主に免じて勘忍しよず。亭主持つて來い。此の間にシテ目くばせ。小アドへ畏まつて御座る。南無三寶、雁をしてやられた。二人うなづき笑ふ。シテへ何と良い首尾では無かつたか。アドへ重疊の首尾で御座りました。シテへ今某が刀の柄に手を掛けた所は何とて

あつた。アド〽流石お大名で御座る。とかう申された事では御座らぬ。又忙しいまぎれに棚の端へちよいとお手の參つた所は。早い事をなされました。シテ〽やい其處な奴。諸侍に恥を與ふる樣な事を言ふ。其の樣な事言はずとも。早う雁を出せ。アド〽お前ののをお出しなされねば。私の雁も出す事はなりませぬ。シテ〽さては見たが誠か。アド〽成程。見まして御座る。シテ〽あたりに人は無いか。アド〽いや誰も居りませぬ。シテ〽つッと寄れ。アド〽畏まつて御座る。シテ〽身共は國許の女共への土産にせうと思うて。之を取つて來た。アド〽私は雁を取つて參りました。シテ〽それはでかいた。急いで毛を引け。アド〽はあ。シテ〽えい。ト常の如く留めて入る。

雁（かり）礫（つぶて）

シテ　所の者
アド　使ひの男
小アド　所の目代
（入道具）

シテ〽隱れもない射手（いて）で御座る。かやうに過は申せども。漸う此の中から稽古致す。また遢り近い池に水鳥が數多居る。毎日參つて稽古がてら水鳥を狙ふ。また今日も參らうと存ずる。シカ〳〵。まことに。悴の時分は由ないいたづら事ばかり致いて。曾てかやうの事に心を寄せなんだ。それゆゑ今かやうに俄に精を出すことで御座る。いや何かといふ内に是れぢや。まだ時分も早うて鳥が下りぬ。身拵へを致さう。ト云うて。左の肩を脱ぎ拵へる内に。後見羽箒を持ち正面に置く。何とぞ今日は仕合はせを致し度い。昨日も今少しで惜しい鳥を射ぞこなうた。いや。あれへ雁が一羽下りた。どうぞあれを射おふせ度い。ト云うて。狙ふ心持あり。シカ〳〵。面白う隨分不調法に。アド〽急の使に參る者で御座る。シカ〳〵。まことに。主命とは申しながら。毎日々々方々を歩くさりながら。足手息災で奉公を致すが仕合はせで御座る。いやあれへ雁が一羽下りてゐる。さらば礫で打つて取らう。ト云うて。一ノ松より礫を打つ。仕舞。えい參つたの。なう〳〵嬉しや。ただ一打にとまつた。走りかゝり。取りて。詞。シテ〽やい〳〵。その雁を何處へ取つて行く。アド〽身共が内へ取つて行きまする。シテ〽己れは憎い奴の。身共が雁ぢや。元の處へ置いて行け。アド〽扨々異な事を仰せらるゝ。これは唯今某が礫を以て打殺しましたに依つて。身共が物で御座る。シテ〽推參な事をいふ。それは身共が大雁股（おほかりまた）で射殺した雁ぢや。取つて行かば目に物を見するぞ。アド〽やあら御仁體にも似合はぬ無態な事を仰せらるゝ。身共が雁を礫で打殺して置いた物を。理不盡におこせといふ事があるものか。シテ〽憎い奴の。所詮己れ共に射殺さうぞ。アド〽やあ出合へ〳〵。小アド〽これは何事で御座る。先づ待たせられい。シテ〽お主は誰ぢや。小アド〽所の目代で御座る。シテ〽扨々憎い奴かな。聞いてたもれ。身共が此の大雁股で射殺した雁を。彼奴（あいつ）が取つて行くに依つて。取るなといへば理不盡に取る。己れ彼奴（きやつ）ともに射殺して退（の）けう。小アド〽先づ待たせられ。身共が乾度申附けませう。やい〳〵。これは何事ぢや。アド〽先づ聞いて下され。私は此の邊りを通りましたれば。此の雁が下りてゐましたに依つて。礫を打ちましたれば。此の雁が落ちました。それをあの大雁股で射殺したとおしやりまする。御覽なされい。これが矢で射た疵で御座るか。これ程の證據は御座りますまい。小アド〽これは尤もぢや。あの者に樣子を聞きましたが。雁に大雁股で射た疵が見えませぬぞや。シテ〽いや疵は無い筈ぢや。

最前から某が大雁股で狙ひ詰めて狙ひ殺して置いた所へ。彼奴が礫を打つたさうな。身共が狙ひ殺した雁ぢや。どうあらうともこちへおこせとおしやれ。小アドへ今のを聞いたか。アドへ承りましたが。思召しても御覽なされい。どこにか狙ひ殺した疵といふことがあるもので御座るか。小アドへとかく無理な事をいふ人と見えた。身共が思ふは。その雁を最前の所に置いてあの者に射させて。當つたらばやらうず。當らずば汝がのにしたがよい。アドへ是は御意とも覺えませぬ。死んでゐる鳥を射損なふといふことがあるもので御座るか。小アドへいや／＼氣遣ひするな。様子を見るになか／＼弓は下手さうな。よもや當らうとは思はぬ。とかく身共次第にせい。アドへそれならば何事もお前に任せまする。よい様になされて下されい。小アドへ心得た。さて私の存ずるは。とかくこれでは埒が明きませぬ。最前の雁を前の所に置いて。そなたに射させて。當つたらば進ぜうず。若し當らずばあれに雁を遣はされ。シテへいやそれに及ぶ事でない。身共が雁に極つた程に。早うおこせとおしやれ。小アドへそれでは濟みませぬ。平に身共が申す通りになされ。シテへ扱はそなたの扱ひか。小アドへなか／＼。身共が扱ひまする。シテへ然らばそなたに免じて追付け射ようさりながら。大事の勝負ぢや。弓矢を改めて射よう。雁を元の所に直せとおしやれ。小アドへ心得ました。さあ／＼。雁を元の處に直せ。シテ弓矢を改め。弦を引くも。いろ／＼口傳。小アドへさあ／＼早う射させられい。シテへおゝ今射るぞ。アドへ是は暇の入る事ぢや。早う射させられ。シテへせはしういふな。いま弓矢を改めて居る。さらば仕らう。二人へそのやうな事があるもので御座るか。元の處から射させられ。シテへどれから射たら大事か。それならば射るぞ。二人へ早う射させられい。シテへさあ射るぞ。さあ／＼。ト云うて行く。アドへその様に飛びかゝらずと靜かに射させられい。シテへいろ／＼六ケしい事をいふ。どうして射たらば大事か。二人へ尋常に射させられい。シテへさらば射るぞ。やあ。えい。南無三寶。また射損なうた。小アドへやつと承つたの。なるまいぞ／＼。シテへやい／＼。やいそこな奴。アドへ何ぢや。シテへその雁は遣らう。せめておそい羽を一枚呉れい。茶はき羽にし度い。アドへならぬぞ／＼。ト云うて。雁をとりてへ入る。シテ後より追込み入るなり。仕方いろ／＼口傳。

鴈雁金（がんりがね）

シテ　和泉の百姓
アド　攝津の百姓
小アド　奏者

（入道具）

アドへ津の國のお百姓で御座る。毎年御嘉例として上頭へ初雁を捧ぐる。當年も相變らず持つて上らうと存ずる。ト云うてシカ／＼。末繁昌福相を云うて。是迄來たらばくたびれ云ひ。下に居る。シテへ和泉の國のお百姓で御座る。御年貢として初雁を捧ぐる。當年も相變らず持つて上らうと存ずる。ト云うてシカ／＼。是も下に居り云ふ。アド言葉かけ同道。餅酒の通り。アドへさて國隣りと云ふ事か。シテへなか／＼。アドへしてなんと。シテへ毎年上頭へ御年貢を捧ぐる。當年も上る事ぢや。アドへそのお持ち有つた藁苞は何ぢや。シテへいや某は在所から總名代に行く事ぢやに依つて。何が有るやら知らぬ。アドへ成程尤もぢや。同道召さるまいか。シテへ幸ひ獨りで連れ欲しう存じた。同道致さう。是より年貢納むる迄。餅酒の通り。シテへ和泉の國の百姓で御座る。毎年御嘉例として初雁を捧ぐる。當年も持つて上つて御座る。御前の首尾を賴み存じまする。小アド

へ御藏の前へ納めませい。アドへ畏まつて御座る。ト云うて納める内。アド聞きつけて。アドへ是は如何な事。きやつも初雁を上ぐると云ふ。身共は申し樣が有る。小アドへやい〳〵。百姓はそちばかりか。シテへ表に津の國のお百姓が居まする。小アドへ上頭へは一緒に申上げう。是へ出よと云へ。シテへ畏まつて御座る。アドへ何と上げさしめたか。シアへわごりよの事を申上げたらば。一緒に御上げられうとのお事ぢや。急いで出さしめ。アドへ心得た。ものも。案内も。小アドへ何者ぢや。アドへ是は津の國のお百姓で御座る。每年御嘉例として初雁金を捧げまする。當年も持つて上つて御座る。お前の首尾を頼み上げます。小アドへ御藏の前へ納めませ。アドへ畏まつて御座る。シテへ何と上げさしめたか。アドへ首尾よう上げておりやる。シテへ互ひに目出度う居りやる。小アドへ兩國のお百姓斯くの通り。ハア〳〵。やい〳〵。ト云うて呼ぶ。二人へそりや召すは。ト云うて出る。小アドへ兩國のお百姓。相變らず御年貢を捧ぐる事御懇に思召さるゝさり乍ら。一人は初雁と申し。又一人は初雁金と申す。仔細を存じて申すか。樣子を申上げいとのお事ぢや。急いで申上げい。二人へ畏まつて御座る。シテへお主が興がつた

事を申上げるに依つてぢや。アドへ何を言ふ。そちがむさとした事を言ふに依つてぢや。小アドへ互ひに論は無益。急いで申し上げい。アドへ然らば私から申上げませう。小アドへ早う申上げい。アドへ扨も住吉の神主國基の御歌に。薄墨に。かく玉章と見ゆるかな。かすめる月に歸るかりがね。仙洞此由を聞召され。それよりも住吉の神主殿を。薄墨の神主と申す。又ある詩に曰く。風白浪を飜せば花片々。雁天に點じては字一行。月は都。花は越路やまさるらん。秋來て春は歸るかりがね。其外雲井の雁。うはの空の雁とは承らず候。小アドへさあ〳〵汝も申上げい。シテへ扨も八幡太郞義家。安部の貞任を御追討の御時。討手の大將承つて東の旅に赴き給ふに。さればある野を御通りありしに。雁一群羽を亂す。八幡殿御覽じて。兵の野に伏す時は。飛雁行を亂すと云ふ。此の心を以て。扨は此野に御敵籠りけん。急ぎ物の具をして探せよとありしかば。頓て物の具して探されしかば。案の如く御敵籠り居たりしを。易々と攻め滅し給ひ。天下一統の御代となるも。この飛雁行を亂すと云ふ心の德なり。又秦の始皇の内裏にも。雁門なくては過ぎ難しと見えたり。蘇武が胡國に在りし時。

雁に文を託くる。それより文を雁書と云ひ。使を雁使と名付けたり。其外歸雁。旅雁。平沙の落雁とこそあれ。何時の習ひに平沙の雁金とは承らず候。小アドへ兩人共に一段と申上げた。兩國のお百姓斯くの通り。ハア〳〵。ヤイ〳〵。申上げたらば。汝等はやさしい者共ぢやと有つて御感心なさるゝさり乍ら。雁と云うも雁金と云ふも同じ名ぢや。詩歌と變るは唐國と日本の風俗ぢや。向後はさう心得て爭ふなとの御事ぢや。さて前に下された事はなけれども。お流れを下さるゝ。是へよつて頂戴を致せ。二人へ有難う存じまする。小アドへ汝等は冥加に叶うた者ぢや。引違へて三獻づつ飮め。二人へ猶以て有難う存じまする。小アドへ此上はお暇を下さるゝ。洛中賑々と舞立ちにせい。二人へ畏まつて御座る。アドへ雁金の。翼や文字を習ふらん。シテへ飛雁行をや亂すらん。三段の舞。太鼓打上げ。二人へやら〳〵目出度や〳〵な。何れの詩歌を引合すれど。シテへ鴈。アドへかりがねと。二人へ云ふも同じ名の。〳〵。名なれば雁くびになるこそ目出度けれ。エイヤ〳〵ト云うて。くわして入るなり。

【き】

牛馬（ぎっは）

シテ　牛商人
アド　目代
小アド　馬口勞
（入道具）

アド〽此所の目代で御座る。當所御富貴について市數多御座れども。重ねては牛馬の新市をお立てなされ。何者にはよるまい。早々參つて一の杭に繫いだ者は。市司を仰付けられ。萬雜公事を御赦免なさるゝとのお事で御座る。先〻此由を高札に打たうと存ずる。（ト云うて。シテ柱に高札打つ。）小アド〽ハイ／＼。此邊りに住居致す馬喰で御座る。當所御富貴について市數多御座れども。重ねて牛馬の新市をお立てなさるゝ。何者にはよるまい。早々參り一の杭に繫いだ者は。市司を仰付けられ。萬雜公事を御赦免なさるゝとの御事で御座る。まだ夜深には御座れども罷出でた。先づ急いで參らう。シカ／＼。誠に。今こそ斯樣に馬喰を致せども。一の杭に繫いで御座らば。ゆく／＼はよろしき商賣致して。樂々と命を送らうと存ずる。何かと申す內に市場ぢや。扨も／＼夥しい事ぢや。まだ一の杭は上さうな。もそつと上へ參らう。誰も知らねばよいが。さればこそ身共も隨分夜をこめて參つたに依つて何者も居ぬ。先づ一の杭に繫がう。是は殊の外夜深な。ちとまどろまう。シテ〽サセイホウセイ。此邊りに牛を商賣に致す者で御座る。（是より小アドと名のり同じ。）誠に。只今こそ斯樣の賤しい商賣を致すとも。一の杭に繫いで御座らば。ゆく／＼は金襴緞子純金などを商はうと存ずる。何かと云ふ內に市場ぢや。扨も／＼夥しい事かな。あれからずつとあれまでぢや。まだ一の杭は上さうな。云うても／＼。斯樣の目出度い御代に生合ふが仕合せぢや。是は如何な事。身共も隨分夜をこめて來たと思へばはや何者やら來て居る。きやつは定めて一昨日邊りからうせをつたもので有らう。身共も隨分精を出して參つた。彼奴より後に下るも口惜しい事ぢやが。いや致し樣が有る。（ト云うて小アドより前に出て。牛を繫ぐ心有り。）まだ夜深な。ちとまどろまう。（小アド起きて目をさます。）小アド〽ヤイそこな者／＼。（シテ起きて。きもを潰し。のくなり。）おのれは何者ぢや。シテ〽私は此邊りに牛を商賣致す者で御座る。先づお前はどなたで御座る。小アド〽身共を知らぬか。シテ〽いや存じませぬ。小アド〽身共は馬喰ぢや。シテ〽牛に喰らはれた。所の目代殿でも有るかと思うて。こはい肝を潰した。そちが馬喰をするならば。身共は牛を商賣するが。それがかまふか。小アド〽よし何を商賣しようと儘よ。身共が居る前をのけと云ふ事ぢや。シテ〽のきたくばお主のかう迄よ。小アド〽のかずば目にものを見するぞよ。シテ〽それは誰が。小アド〽身共が。シテ〽そちが目にものを見すると云うて。深しい事も有るまいぞ。小アド〽かまへて悔やむなよ。シテ〽何の悔やまう。小アド〽憎い奴の。ふめ／＼。シテ〽やれ。出合へ／＼。（ト云ふ內。目代出て留める。小アド御禮を云ふ。禮には及ばぬ。何事を論ずる。小アド當所御富貴云ふ。何れも同じ。）小アド〽あの樣な橫著者はきつと市末を仰付けられませ。アド〽扨は汝が早う來たか。小アド〽成程。私が早う參りました。アド〽先づあの者の口を聞かう。（ト云うて。口を聞く。シテ御禮を云ふ。當所御富貴を云ふ。言譯する。）シテ〽前に居る私にのけと申す。のくまいと申せば。あの馬に此の牛を踏ませまする。斯樣の正しい御代に。あの樣な橫著者はきつと仰付けられませい。アド〽ハテ同じ樣な事ぢや。ヤイ／＼。あれが早う來たと云ふぞよ。小アド〽よし前後の差別は差置

かれませ。先づこの御目出度い市始めに　あの牛が何と一の杭に繋がるゝもので御座る。また馬と申す物は目出度い物で。春の初めの駒くらべ。或ひは稚兒若衆のお寺通ひ。お里歸りのと申すも。皆馬ならでは召されませぬ。とかくあの様な賤しい物はづつと市末を仰付けられませ。アド「ヤイ／＼今のを聞いたか。シテ「成程承つて御座る。尤も彼奴が申す通り。馬と申す物はきやしやな物で。春の始めの駒競べ。稚兒若衆のお寺通ひ。お里歸りなどと申せば。馬ならでは召しますまいさり乍ら。又この牛にから鋤をかけまして。大地をくわつ／＼と鋤き割らせまして。扨それ／＼米たをおろし成長致せば供御に調味致して。上上へも進上仕り。下々も下された上では。駒競べもなされませうが。供御進上申さずば。如何なる稚兒若衆でも。おとがひで蠅を追はつしやれて。お寺通ひもお里歸りも何もいりますまい。アド「是も尤もぢや。今のを聞いたか。小アド「とかく彼奴はあの様な賤しい事ならでは得申すまい。其上馬には目出度い系圖が御座る。あの牛には御座るまい。お尋ねなされませ。アド「あの馬には系圖が有ると云ふが。牛にも系圖が有るか。シテ「馬にある系圖がお牛に無うてなりませう。先づおれから云へと仰せられませ。アド「サア／＼汝から語れ。小アド「畏まつて御座る。語「それ馬は馬頭觀世音の化身として。佛の作る法の舟。くわつしごくより漢土まで。馬こそおひて渡るなれ。周の穆王の八疋の駒。楚の項羽の望雲騅。安祿山のかりう途。何れも千里を駈くるなり。楚の管仲は旅に立ち。俄に大雪降る里に。歸らん道を忘れしに。馬を放ちて其後を知るべとしつつ歸りしは。馬の德とぞ聞えける。又我が朝に名を得しは。天のぶち駒を初めとして。光源氏の大將や。馬に稻乞ふ須磨の浦。曉なんりやう木の下や。よめなし月毛鬼あしげ。源太佐々木が名を擧げしは。生月摺墨太夫黑。雲の上にも望月の。駒迎へせし逢坂の。小坂の駒も心して。引く青馬の節會にも。牛のれり入る例なし。佛の前には繪馬をかけ。神には立つる幣の駒。胡馬北風にいばふれば。惡魔はさつと退きぬ。目出度い事を駒。されば本歌にも。逢坂の。關の清水に影見えて。今や引くらん望月の駒とこそ詠まれて候へ。何時の習ひにか望月の牛とは御座るまい。アド「是は聞き事ぢや。サア／＼。汝も急いで語れ。シテ「畏まつて御座る。語「それ牛は大日如來の化身として。牽牛織女と聞く時は。七夕も牛こそ寵愛し給へり。潙山和尚と云ふ人。其の身を牛になしてこそ。異類の法をも見せしむれ。許由といへる賢人は。王になれとの勅を受け。うるさき事を聞くぞとて。潁川の瀧にて耳を洗ひし水をさへ。巢父は牛に飼はざりし。佛の作る十牛や。法の花咲く牛の子の。桃林の春は面白や。今は昔に業平の。在五までの御契。さここそ心を筑紫牛。野飼の牛の一聲も。草苅笛にやまがふらん。又ある詩に曰く。風枯木を吹けば晴天の雨と。女牛吟ずる聲を男牛聞きて。月平沙を照せば夏の夜の霜と。此の兩牛の吟ずる聲を聞いてこそ。今の世までも詩には引かるれ。又ある歌に。涙路分け。都へ上る筑紫牛。草に盡きてや盛りなるらん。忝くも北野の御詠歌に。牛の子に。踏まるる庭のかたつぶり。角あるとても身をな頼みそ。や。今思ひ出したり。一天の君も御車に召さるれば。牛をこそ引き申せ。いつの習ひか痩馬の引いた例は御座るまい。アド「是も聞き事ぢや。ヤイ／＼。是でも埒が明かぬ。此の上は何で勝負せい。小アド「それならば駒競べを致しませう程に。彼奴も致すか御尋ねなされて下され。アド

ヘ心得た。これでは埒が明かぬに依つて。何ぞ勝負をせいと云へば。駒競べをせうと云ふ程に。急いで駒競べをせい。シテヘ私は馬を持ちませぬ。アドヘはて。その牛に乗れ。シテヘ牛に乗つて何と駈けらるゝもので御座る。アドヘそれならばそちが負になるぞよ。シテヘ是非に及ばぬ。此の牛ぢやと申して。あの痩馬程駈けぬと申す事は御座るまい。なる程駒競べ致しませう。アドヘそれへ出よ。サアサア。汝も是へ寄れ。兩人共に乗れ。小アドヘ畏まつて御座る。アドヘ扨。サアサアと聲をかけう。三つめの聲から駈出せ。二人ヘ畏まつて御座る。アドサアサアと聲をかける。三ツ目よりハイハイと云うて。小アド馬を駈ける。シテはさせいほうせいと云うて。二人かける。小アド一返廻る。橋懸り迄行くが。シテ埒明かぬ心こ鞭を打つて氣の揉がる心持。仕樣あるべし。小アドヘヤ。勝つたぞ勝つたぞ。シテヘこちも勝つた。小アドヘ何處に勝つた。シテヘおそ牛も淀ゝはや牛も淀と云へば。明後日(あさつて)の今時分は追附かうぞやい。サセイホウセイと云うて入る。小アドは駆けて入るなり。

不聞座頭(きかずざとう)

シテ　太郎冠者
アド　主人
小アド　座頭

（入道具）

アドヘ此邊りの者で御座る。用事有つて山一つあなたへ參る。一人召使ふ太郎冠者は聾で御座る。きやつ一人では心許なう御座る。是を頼うで留守に置かうと存ずる。先づ急いで參らう。シカシカ。誠に。内に居ればよう御座るが。内にさへ居たらば。身共が頼む事ぢやか程に。定めて來てくるゝで御座らう。是ぢや。ものも。菊市内に居さしますか。小アドヘ表に聞慣れた聲で案内がある。案内とはどなたで御座る。アドヘ身共でおりやる。小アドヘエイ爰な。何と思召してお出でて御座る。アドヘ今來るは別の事ではない。用事あつて山一つあなたへ行く。聾一人では留守が心許ない。大儀ながら相留守に頼みたい。何と來ておくりやらうか。小アドヘ幸ひ隙で居りまする。成程參りませう。アドヘそれは過分におりやる。さあさあおりやれ。小アドヘ是は慮外で御座る。扨また聾が怒(おこ)りまして御座るか。アドヘされば聾が怒つて迷惑致す事ぢや。小アドヘ是は御難儀で御座りませう。アドヘ何かと言ふ内に是ぢや。先づ是にゆるりと居さしませ。やがて戻らう。小アドヘやがてお歸りなされませ。アドヘ先づ太郎冠者を呼出し。留守の儀を申付けうと存ずる。アドヘ聾々。シテヘ召すと言ふか。召しますか。アドヘ用事あつて山一つあなたへ參る。よう留守をせい。シテヘまだ二三日は降りも致しますまい。アドヘさうではない。二三日用事有つて山一つあなたへ行く。よう留守をせいと言ふ事。シテヘ畏まつて御座る。アドヘさて菊市を留守に頼うでおいた。シテヘ心得ました。アドヘこりやこりやどこへ行く。シテヘ菊市を呼うて來いとは仰せられませぬか。アドヘ菊市は早や來て居る。シテヘ早や來て居りますか。シテ聞返す。アド又言ふ。シテヘやがて戻らうぞ。アドヘやがてお歸りなされませ。出られた。扨も扨も頼うだ人は愚かな人ぢや。あの様な目も見えぬ者を。留守に頼うで。何の役に立つものぢや。小アドヘ聾はどこになる事ぢやや知らぬ迄。ト言うて。探し悩む。驚たつく。シテ見付けて。シテヘイヤ菊市ようわせた。小アドヘ今日は相留守に頼まれて來た。シテ聞返す。小アド又言ふ。シテヘオゝ大儀大儀。小アドヘさて何と思ふ。そちは目が見ゆれども耳が聞えず。身共は耳が聞ゆれども目が見えぬ。若し盗人が入つたら。何としたものであらう。これよりとかく長き事。中にて問返す。短き事勿論。シテヘ是はよい所へ氣がついた。何れそちは目が見えず。身共は耳

が聞えず。若し盗人が入つたら何としたものであらう。小アド〽盗人が入つたと聞付けたら。ここちが膝つかう。其時は出て捕へ。シテ〽心得た。小アド〽必ずその筈ぢや。扨も〳〵聾に物を言へば。精も心も盡き果つる事ぢや。重疊の分別を思出した。小アド〽扨も〳〵淋しい事かな。ちと聾をなぶつて遊ばう こりや〳〵。ト言うて膝をつく。シテ〽心得た。盗人が入つた。出會へ〳〵。裏へも表へも人を廻せ。やるまいぞ〳〵。ト言ふ。小アドうれしがりて笑うて居る。シテ〽是はいかな事。盗人の入つたにあの様に笑ふ筈がないが。扨は身共をだましなつたさうな。扨憎いやつかな。ヤイ菊市。盗人は居なんだぞよ。小アド〽居よう程に捕へい。シテ〽盗人は居いで目出度い。身共は此の中に舞を稽古する。舞うて見せたけれども。そちは目が見えいで氣の毒ぢや。小アド〽目こそ見えずとも。音拍子を聞いてなりとも慰まう程に。何ぞ合圖をせい。褒めてやらう。シテ〽それならば舞を仕舞うたらば。合圖にそちが肩を撫でよ程に。褒めてくれい。小アド〽心得た。早う舞へ。シテ〽舞ふなと言ふか。小アド〽早う舞へといふ事。シテ〽心得た。ト言うて小舞あり。足にて肩を撫でる。小アド褒める。シテ〽扨も目の見えぬ者にあさましい者ぢや。足で肩を撫づるにえいや〳〵。

ト言うて笑ふ。小アド〽是はいかな事。足で肩を撫でなつた。扨々憎い事かな。シテ〽ヤイ〳〵菊市。何と面白かつたか。小アド〽いかう面白かつた。シテ問ひ返し。喜び笑ふ。小アド〽今の返禮に平家を語つて聞かせうか。シテ〽ヤア。平家侍のなれの果てぢやと言ふか。小アド〽さうではない。平家を語らうけれども。耳が聞えいで氣の毒ぢや。シテ〽是も何ぞ合圖をせい。褒めてやらうぞ。小アド〽語り仕舞うたらば斯う手を上げう程に。是を合圖に褒めてくれい。シテ〽オヽ褒めう程に早う語れ。小アド〽そもそも是の。聾と申すは。片輪者の癖として。根生がゆがうですぢつてもぢつて。意地わるい聾のかな聾めなり。シテ〽よいや〳〵。過分過分。小アド〽扨も耳の聞えぬはあさましいものぢや。おのれが身の上を言ふに過分〳〵。ト言うて笑ふ。シテ〽また笑ひなるさうな。扨は某が身の上の事がな言ひなつたさうな。扨々憎い事かな。ヤイ〳〵菊市。小アド〽ヤア。シテ〽菊市。ト引く。小アド〽ヤア。ト引く。シテ〽一番舞はうわいやい。小アド〽又肩を撫でいよ。シテ〽オヽその肩の撫でたさの事ぢや。小アド〽今度撫でなつたら仕様が有る。シテ又小舞あり。行つて足にて撫でる所を。小アド小股を取りて打ちこかし。笑うて杖を探して居る所を。又シテ座頭の小股を取り。謡ふしにて打ちこかし。參つたのと言うて入る。小アド〽目も見えぬ者をこの様に

しなつて。将來がようあるまいぞ。やるまいぞ／＼。（と言うて。追込み入る也。）

菊の花

シテ　太郎冠者
アド　主人

是までの文句。富士松文蔵同断。依つて略す。

アド〽さて汝は京内詣でをしたと言ふが。なんと都は賑かな事か。シテ〽なか／＼賑かな事で御座る。西山の茸狩。東山の御遊山などと申して。推しも分けられた事では御座らぬ。アド〽何がさて花の都ぢや。さうなうては叶はぬ。さて何も變つた事は無かつたか。シテ〽別に變つた事も御座らぬが。私は唯今まで雀と鳥を同じ鳥かと存じて御座れば。あれは親子で御座る。アド〽さう言ふは何ぞ子細があるか。シテ〽なる程子細が御座る。此度其處彼處と參つて御座るが。中にも北野の天神へ參詣致して御座れば。森に大きな松の木が御座つた。其の枝に鳥がとまつて居りました。又片枝に雀がとまつて居りました。かの雀が鳥の側へ參つて。チヽ／＼と申して御座れば。鳥が雀をきつと見まして。子か／＼と申して御座る。あれば疑ひも無い親子で御座る。アド〽扨々むさとした事を言ふ。それは銘々の囀り様でこそあれ。自然同じ木にとまり合はせたと言うて。それが親子であらう事か。その様なむさとした事ではない。何も變つた事は無かつたかと言ふ事ぢや。シテ〽それから歸るさにまた。とある小家に見事な菊の花を作つて置きました。立寄り見物致して。餘り見事に御座つたに依つて。菊の花を一本所望致して御座れば。心よい亭主で。祕藏なれどもと申して。中にも大輪なをくれました。きつと一禮を申して出ましたが。東山を見物致さうと存じて。三條通をそろり／＼と參つて御座れば。彼の花をただ手に提げるは心無いと存じて。私の髻に差いてゆらり／＼と參つて御座れば。後から内裏の上﨟と見えて芥子の花を簪り立てた様な美しい女中が。大勢お出でなされて。私が髻に差いた花を御覽なされて。扨々見事な菊ぢやとあつて。其儘歌を一首なされて御座る。アド〽何となされた。シテ〽都には。所は無きか菊の花。茫々頭に咲きぞ亂るゝ。となされて御座る。アド〽是はいかな事。さすが都上﨟ぢや。きやしやにようなされたなあ。シテ〽そこで私の存じまするは。總じて人に歌を詠み掛けられて。返歌をせねば口無い蟲に生まるゝと申すに依つて。唯今の返歌を鸚鵡返しに致して御座る。アド〽あの汝がや。シテ〽なか／＼。アド〽そちが鸚鵡返しは強物ぢや。先づ何とした。シテ〽都には。所はあれど菊の花。思ふ所に咲きぞ亂るゝ。と致して御座る。アド〽扨々存じの外出かしたわいやい。シテ〽そこでかの女中も殊の外肝を潰させられて。其方は田舍者さうなが扨々やさしい者ぢや。こち衆は祇園へ參るが來ぬかと仰せられたに依つて。はあと申して後からそろり／＼と參つて御座れば。程無う祇園へ着きました。さすが都で御座る祇園の森は西も東も幕ばかりぢやと思召せ。アド〽さうであらうとも。シテ〽かの女房達も。とある幕の内へ悉くお入りなされて御座る。私も這入られうかと存じて。暫く待合はせて御座れども。何の沙汰が御座らぬ。いや／＼田舍者ぢや。臆したと言はれまいと存じて。幕をつうと上げまして内へは入つて。つゝと下に居りまするど。おはしたが一人參つて。こりや／＼お主はそこに居る所ではない。こちへ來いと申さるゝ。私はどれに居り

ましてもよう御座る。ただ此の儘さし置かれませ。お構ひなさるなと申して御座れば、はて平にと申されて。いやと言ふものを無理にと言うて。私を一の上座に直されました。アドへさ様で御座る。アーヽ合點のゆかぬ事ぢや。汝を上座に直されさうなものではないが。何とそちが居た邊りは、銚子土器臺物などが有つたか。シテへさ様な物はずつと末座に御座つて。私の側には緒ぶとの金剛が幾らも脱ぎ捨てゝ御座つた。アドへそちは其の年に成つて上座下座を知らぬか。それは複脱ぎと言うて。一の下座ぢやわいやい。シテへ誠にさう仰せらるるに依つて。思ひ當つた事が御座る。金銀を鏤めた結構な膳を持つて參るに依つて。早やお料理を下さるゝさうな。天晴れ下されうと存じて。待つて居りましたれば。私の鼻の先を摩り擦つて。ついと奥へ持つて參りました。又その後へ、銚子土器臺の物持つて參るに依つて。最前のお料理は奥へ進ぜらるゝ。身共にはお氣が附いて。御酒を下さるゝさうなと存じて。わざと見ぬ顔して。衣紋などを取繕うて待つて居りましたれば。又これも私の側へ參りさうで參らいで。ついと摺り擦つて奥へ參りました。そこで私もむけりと腹が立ちまして。よしない所へ來たことかな。此の様な所に長居は要らぬものぢやと存じて。幕の内を出まして、道四五町も參ると。四十餘りのおはしたが解けた髪を上げ〳〵。おゝい〳〵と呼びまする。これは身共が立破つたに依つて、迷惑がつて呼ばるゝさうな。いかな〳〵。戻るまいと存じて。なほ足早やに參りましたが。扨も世には早い足の女が御座る。程無う追附きまして。やにはに私の右の腕を取つて。あいた〳〵。頼ぢ上げまする。これは何とするぞと申したれば。何とすると言ふ事があるものか。出せ〳〵と申すに依つて。是は理不盡千萬な。道ないもとて人も見る。曾て覺えは無い。離せ〳〵と申したれば。なか〳〵力の強い女で。まだそのつれを言ふか。出さぬに於ては出させ様が有ると申して。此の度は左の腕を。あいた〳〵。頼ぢ上げまして。出せ出せと申して責めまする。近頃これは迷惑ぢや。何も覺えは無けれども。先づどうもせう程に。離しておくりやれと申して。色々とたばかりまして。やう〳〵と離させまして。さて其の後を出かしました。アドへ何とした。シテへこれかと申して。懐から緒ぶとの金剛を出して、返して御座る。アドへおのやくたいも無いやつ。しさりをれ。（ト言うて。常の如くつめて留める。）

狐塚（きつねづか）

シテ　太郎冠者
アド　主　人
小アド　次郎冠者

（入道具）

アドへ此邊りの者でござる。毎年と申し乍ら。當年の様な豊年はござらぬ。何時も稻に實のいる時分は。村鳥が荒らす。太郎冠者を呼出し、狐塚の田へ鳥を追ひに遣さうと存ずる。（ト云うて。呼出すも出るも如常。）汝呼び出す別の事でない。毎年とは申し乍ら。當年の様な豊年はあるまいなあ。シテへ御意なさるゝ通り。當年の様な豊年はござらぬ。別して頼うだお方の田は畦を限つて。穂に穂が咲いて此様なお目出度い事はござらぬ。アドへそれに就き、いつも稻に實のいる時分は村鳥が荒らす。汝は大儀ながら、狐塚の田へ村鳥を追ひにいて呉れい。シテへ畏まつてござれども。あの狐塚には狐が大分ゐて。人を化すと申す。これはどうぞお許されませ。アドへイヤ〳〵。それに所の名

で。狐はゐぬ程にいて呉れい。シテへハア扨は狐はおりませぬか。アドへ中々。シテへそれならば畏まつて御座る。アドへ暫くそれに待て。シテへハア。アドへヤイ〳〵。此の鳴子をやる程に。稻木へゆひつけて。晝の間は精を出して鳥を追はうず。夜に入つたらば。猪猿などが出う程に。油斷なう追うて呉れい。シテへア丶猪と猿が出ますするか。アドへ其通りぢや。シテへ畏まつてござる。ト云うて。常の通りつめる。うける。同斷。シテへこれはいかな事。迷惑な事を仰付けられた。さり乍ら。行かずばなるまい。シカ〳〵。誠に。あの狐塚には狐が大分ゐて。人を化すと云ふは度々の事ぢや。どうぞ身共は化されぬ樣にしたいものぢやが。イヤ何かと云ふ內に狐塚ぢや。ア丶どの田も〳〵心地よう實がいつた。別して賴うだ人の田は。畦を限つて穗に穗が咲いて。此樣なお目出度い事はあるまい。さらば鳴子を稻木へゆひ付けう。あれあれ。餘所の田にも鳥を追ふやら鳴子の音がする。さり乍ら。人を得使はぬ者の田は。手が廻らぬに依つて。鳥を追うてゐる田は少々ならではない。これに秋入に日和さへよければ何も思ふ事はない。ハア。向ふから眞黑になつて來るは村鳥ではないか。オ丶。此の田へ

おろ丶。追はずはなるまい。ホウ〳〵。笑ふ。扨も〳〵愚かな者ぢや。身共が聲と鳴子に怖ぢて。皆餘所の田へ下りた。嘸餘所の田主が腹を立つるであらう。イヤ又賴うだ人が。鳥を追ひに行けと仰せらる丶は尤もぢや。此樣によう出來た田を。むざ〳〵と鳥獸に荒らさる丶は勿體ない事ぢや。ハアあの向ふの茂みから眞黑になつて來るは村鳥ではないか。ハアあれは森を越すさうな。後へ戾る。此の田をめがけて下ろ丶。追はずばなるまい。ホウ〳〵〳〵。云うても〳〵臆病なものぢや。皆森より下へ下りた。ハア日が暮る丶と見えて世間が暗うなつた。ホウこりや日がずんぶりと暮れた。サア〳〵これからこは物ぢや。ヨウ。あそこが光るは。狐火ではないか。こ丶も光るは。ア丶氣味の惡い事ぢや。イヤ此樣な時は聲を立て丶ゐるがよい。ホウ〳〵。これ〳〵これでよい。ホウ〳〵〳〵。小アドへ承れば太郎冠者が。狐塚の田へ村鳥を追ひに參つたと申す。淋しからうに依つて。見舞に參らうと存ずる。これは暗うて道が知れぬ。此邊から聲を懸けて參らう。ホヲイ太郎冠者ヤイ〳〵〳〵。シテへヨウ。何やら呼ぶぞよ。定めて狐か狸の仕業であらう。總じて狐は眉をようて

化すと云ふ。身共は化されぬ樣に眉をとくとしめしておかう。小アドへホウイ太郎冠者やい。シテへしきりに呼ぶ。ちと答へて見よう。ホウイ。さう云ふは誰ぢやヤイ〳〵。小アドへ次郎冠者わいやい。シテへさればこそ次郎冠者に化けて來をつた。次郎冠者が何しに來たぞいやい。小アドへ淋しからうと思うて見舞に來たわいやい。シテへ南無三寶。こ丶に來うとぬかしをる。何としたものであらう。よい〳〵。呼び寄せて鳴子繩で縛つて呉れう。ホウイ。次郎冠者ならば畦を傳うてホウイ。小アドへ暗うて道が知れぬわいやい。シテへ聲につけてホウイ。小アドへどつちや〳〵。シテへこつちや〳〵。何遍もあつて。シテへとつたぞ。小アドへ何とする。シテへ何とはよう來たなあ。小アドへ身共ぢやわいやい。シテへ次郎冠者合點ぢや。小アドへそちは氣は違ひはせぬか。シテへオ丶身共は氣が違うた。オ丶よう化けをつた。其儘の次郎冠者ぢや。おのれ友狐があらう。聲を立てをつたらば打殺してのくるぞ。小アドへこれは迷惑な事ぢや。アドへ太郎冠者を狐塚の田へ村鳥を追ひに遣してござる。淋しからうに依つて。見舞に參らうと存ずる。これは暗うて道が知れぬ。此邊か

ら醉を懸けて參らう。ホウイ太郎冠者ヤイ／＼。シテ〽ヨウ。又呼ぶぞよ。中々五疋や十疋ではないと見ゆる。アド〽ホウイ太郎冠者ヤイ。シテ〽しきりに呼ぶ。又答へずばなるまい。（これより次郎冠者の通り。）シテ〽身共合點ぢや。アド〽頼うだ者ぢやわいやい。シテ〽頼うだ人合點ぢや。アド〽おのれ主をくゝつたれば罰が當らうぞよ。シテ〽オヽ罰が當つても大事ない。アド〽何をぬかしをる。シテ〽扨も／＼よう化けをつた。其儘の頼うだ人ぢや。扨おのれらを何とせうぞ。青松葉を持つて來て。くすべて化けをあらはせう。アド〽迷惑な事ぢや。シテ〽アヽくすぼるは／＼。扨これはどちらからくすべうぞ。次郎冠者狐が先ぢや。次郎冠者けむたいか／＼。（ト云うてくすべる。）小アド〽あゝけむたいわいやい／＼。シテ〽けむたくば尾を出せ／＼。小アド〽何をぬかしをる。シテ〽わいと云へ／＼。小アド〽わい／＼。シテ〽わい／＼。笑ふ。其儘の次郎冠者なれども。己れが身のずつなさに。わい／＼。笑ふ。シテ〽扨これから頼うだ人狐の番ぢや。そりやけむたいか／＼。アド〽アヽけむたいわいやい／＼。シテ〽けむたからう。けむたくば尾を出せい／＼。

アド〽何をぬかしをる。シテ〽こんと云へ。アド〽こん／＼。シテ〽こん／＼。笑ふ。シテ〽仁體のよい頼うだ人なれども。己れが身のずつなさに。こん／＼。笑ふ。扨おのれらを何としよ。イヤ邊り近い所へいて鎌を借つて來て皮を剝がう。おのれらそこを去りをるな。先づ急いで鎌を借つて參らう。（ト云うて中入する。）小アド〽申し／＼。それにござるは頼うだお方ではござらぬか。アド〽さう云ふは次郎冠者ではないか。小アド〽お前も縛りましたか。アド〽して汝が繩は解けさうにはないか。小アド〽どうやら解けさうにござる。アド〽解けるならば解いて見よ。小アド〽ハア。アド〽早う解け。小アド〽ホウ解けました。アド〽解けたか／＼。早う身共がのも解いて呉れい。小アド〽解いて上げませうとも。嘸お手が痛みませう。アド〽ヤイ／＼。手に繩の跡がついた。小アド〽どうでもきやつは。誠に狐ぢやと存じたものでござらう。アド〽さり乍ら。餘り腹が立つ。何としたものであらう。小アド〽イヤよい致し樣がござる。邊り近い所へいて。鎌を借つて來て皮を剝ぐと申しました。定めてこれへ參るでござらうに依つて。お前と私としてきやつをゆりに上げて。それて腹をい

ませう。アド〽一段とよからう。それならばこれへ寄つてゐよ。小アド〽畏まつてござる。シテ〽オヽ鎌の刃がようついた。先づ皮を剝いて引敷にし。身は料理して食べよう。骨は黑燒にし膏藥練りに賣らう。ハア南無三寶。二疋ともどれへやら行きをつた。小アド〽申し／＼。あれへ參りまする。アド〽ちやつと捕へ。小アド〽私は恐ろしうござる。アド〽埒の明かぬやつぢや。とつたぞ。シテ〽何とする。アド〽次郎冠者。鎌を取れ／＼。小アド〽其鎌をこちへおこせ。アド〽引たくれ／＼。小アド〽心得ました。小アド〽鎌を取りました。アド〽足をとれ／＼。小アド〽心得ました。アド〽よいか。小アド〽ようござる。二人〽さあ／＼／＼。アド〽ちやつと來い／＼。小アド〽心得ました。シテ〽ヤイ／＼。古狐共が寄り合つて。身共を繩たらしにしをつた。誰そ捕へて呉れい。やるまいぞ／＼。（ト云うて入るなり。）

清水座頭（きよみづざとう）

シテ　座頭

アド　ごぜ

（入道具）

アトな〳〵此邊りに住居致すござぜで御座る。妾は三年以前。ふと目をわづらひまして。樣々養生致すれども。その甲斐もなう斯樣にござぜになつて御座る。奉公はならず。嫁入しようにも主はなし。なんとも迷惑致す。此上は清水の觀世音へ參り。身の行末を祈らうと思ひまする。シカ〳〵。誠に。片輪と申すは何一つの取得は御座らねども。取分け目の見えぬ程物憂い事は御座らぬ。殊に女の事なれば。一入難儀に思ふ事で御座る。參る程に清水寺の御前ぢや。ト云うて。下に居て扇をぬき。下に置きて手をあはすこ觀世音樣へ申上げまする。妾は目が見えませぬに依つて。たゞ行末を案じまする。哀れ不憫と思召され。心中の願ひを成就なさしめ給へ。南無觀世音〳〵。今宵はこの御堂に籠らうと思ひまする。シテ次第へわが世の中はまお黑に。〳〵。目のなき事や如何ならん。此邊りに住居致す座頭で御座る。某未だ定まる妻が御座らぬ。方々尋ぬれども。あるはいやなり思ふはならずとやらで。とかく妻を得ませぬ。此上は清水の觀世音へ籠つて。申妻を致さうと存ずる。シカ〳〵。目も見えぬなりで妻のせんさくを致すは。いたづらな樣に御座れどもさりながら。盲が二代續きもせまい。よい子を儲けて身命を繋々と送りたさに。妻の事を祈る事で御座る。ト云うて。犬に行きあたり。肝をつぶし。杖にて犬を追ふ仕方仕樣あるべし。まだ吠えるか〳〵。ト云うて犬を追ふ體する。近所に人もあるさうなが。犬が居ると云うて救へて呉れるか。またた犬を共々追うても呉れう事ぢやに。とかく情の有る人は無いものぢや。既に咬み付かれうとした。ヤレ恐ろしや。惣じて物に行當らうかと思うて危い。何かと云ふ内に御堂ぢやとみえて。鰐口の音が聞える。先づ御前へ向はう。ト云うて。鰐口をさぐりてみる心あり。ことにあると云うて。鰐口を打つて下に居て。シテへ某いまだ定まる妻が御座らぬ。あはれ觀世音の大慈大悲を以て。似合はしい妻をお授け下されい。南無觀世音〳〵。今宵はこの御堂に籠らう。扨も〳〵夥しい參詣と見えて賑々しい。ト云うて。立つて。アドにけつまづく。アドへ是は何とする。シテへ見えませぬ。許させられい。アドへ最前から鼻先で姦しう云うてゐて。見えぬと云ふものがあるものか。シテへ聲を聞けば年若な女中さうなが。扨々けんどんな物の言ひ樣ぢや。おいれば見れば行當りはしませぬ。それはそなたの目を開いて見て了簡のしたがよい。アドへなう〳〵腹立ちや〳〵。妾をなぶりなるか〳〵。シテへ扨も〳〵無理な事を言ふ女ぢや。おれが何でそなたをなぶるいの。アドへござぜに向うて目を開けと云ふは。なぶるでないか。シテへ扨はそなたは盲か。アドへそれこそそちが大きな眼を開いて見たがよい。シテへ扨も〳〵盲ぢやよなう。ト云うて笑ふ。アドへなう〳〵腹立ちや〳〵。信心にこの御堂に籠つてゐるに。妨げをするは何者ぢや。シテへ成程尤もぢやさり乍ら。腹をお立ちやるな。何をかくさう某も盲目でおりやる。アドへヤア〳〵。そなたも目の見えぬ人か。シテへ外に籠つて居る衆もあるさうな。それが證據ぢや。めくらでおりやる。アドへなう〳〵恥しや〳〵。其樣な事とは知らいで。若い衆がなぶらつしやるかと思うて。わゝしう申しました。眞平許して下されい。シテへ身共もそなたが目あきかと思うて。麁相な事を申した。さて兩人目の見えぬ者が寄合うた。此樣なをかしい事は御座らぬ。ト云うて笑ふ。シテへ扨お前は何ぞ願があつて籠らせられたか。アドへ、妾も程深い願があつて籠りました。シテへ身共も其通りぢや。いづれ是も他生の緣でがな御座らう。今宵はゆるりと話さう。アドへそれがよう御座りませう。シテへ先づ下に居さしませ。アドへ心得ました。シテへさて某はさゝえを持つて來た。一つ參らぬか。アドへ妾は不調法

に御座る。シテ〽先づ身共から一つ食べませう。アド〽酌をしませう。シテ〽いや手酌がよう御座る。ト云うて○扇ひろげて盃にする。腰の瓢箪よりついで呑む。シテ〽扨も〳〵ひいやりとしてよい氣味ぢや。サアそなたも一つ參れ。アド〽それならばちと飲みませう。ト云うて○扇ひろげて○呑んでつぐ。二人とも心持有るべしアド呑む。アド〽是は結構な酒で御座る。シテ〽身共はも一つ食べう。とかく酒を一つ呑まねば氣が屈して惡う御座る。アド〽いづれ酒をたべましたれば。心がうるはしうなりました。シテ〽唯居れば眠りが出る。平家を一句語らう。聞かしませ。アド〽是はよう御座らう。シテ〽さて一の谷の合戰破れしかば。源平互に入亂れ。向ふ者のおとがひを切らるゝも有り。逃ぐる者のきびすを切らるゝ者も有り。忙はしき時の事なれば。きびすを取つておとがひにつけ。おとがひを取つてきびすにつけたれば。生えうず事とて。きびすに髭がむくり〳〵と生えたりけり。冬にもなれば切れうずこととて。おとがひに胼りがはかり〳〵と切れたりけり。アド〽扨も〳〵面白い事で御座つた。シテ〽惣じて平家は此の音が大事で御座る。アド〽妾も酒に醉ひました。小歌を一節謠ひませう。シテ〽是はよからう。早う謠うて聞かさせられい。アド地主の小歌うたふ。シテ〽よいや〳〵。扨もよい聲で御座る。何と酒をも一つ參らぬか。アド〽いやたべますまい。シテ〽それならばしまひませう。宵には殊の外賑々しう御座つた。夜が更けたれば淋しうなりました。參詣の衆が觀音の法號を唱へ。念佛の聲ばかりで御座る。アド〽妾は少しまどろみませう。シテ〽一段とよからう。某もちと心を休めませう。ト云うて○二人共まどろむなり。アド〽アラ有難や。あらたな御告げがあつた。妾に似合はしい緣を結ばせらるゝ。則ち西門へ行て待つて居よ。連添ふ者が來るとの事ぢや。さらば西門へ參つて待たうと思ひまする。ト云うて○橋掛へ行き。一の松に立つてゐる。シテ〽あら有難や。少し睡眠の中にあらたな御夢想を蒙つた。西門に女が一人居る。それこそ汝が妻よと仰せらるゝと思うたれば夢が覺めた。扨も〳〵有難い事かな。先づ急いで西門へ參らう。シカ〳〵。誠にゝ神佛の事を疑ふ事ではない。此樣な事を存じたらば。とうに參ればよかつた物を。何かと言ふうち西門ぢや。定めて御夢想の妻が待つて居らるゝであらう。どの樣な妻を下さるゝぢや迄。何にもせよこの樣な嬉しい事はない。言葉を掛けたいものぢやが。目の見えぬなりで此方から物を言ひ掛けて。ひよつと違うたれば面目ない。あの方から見付けて言葉をかけられたいものぢやが。但しまだわせぬかぢや迄。ト云うて○せきばらひなどする。どうやら恥しいが。御夢想の事ぢや。外に紛らはしい事はあるまい。杖で探して見う。ト云うて○杖にて探す。シテの杖アドの杖に行當り○音をアド聞きて○アドめさぐる。シテ考へてうなづき。シテ〽イロ頓て杖にて推したり。アド〽イロこなたも杖にて推したり。シテ〽われ〳〵觀音に參籠申し。祈念をするにかくばかり。もし〳〵主なき人やらん。アド〽我はぬしなき花衣の恨むべき人もなし。シテ〽扨は夢想の末遂げて。二人〽互に目見えぬ。中なれども。契となれば。嬉しさよ。ちつか立てぬる錦木も。あはで朽ちにし習なるに。時をも移さずして。夫婦となるぞ嬉しき。シテ〽なういとしい人。こちへわたい。アド〽心得ました。ト云うて留めて入るなり。

木六駄（きろくだ）

シテ　太郎冠者
アド　主人
小アド　伯父
茶屋

アド〽奥丹波に住居する者で御座る。何か

と言ふうちに年の暮になつて御座る。それに就いて。いつも嘉例で都の伯父者人の方へ年暮の祝儀を遣はす。太郎冠者を呼び出し。持たせて遣はさうと存ずる。（呼び出す。出る常の如し。）汝呼び出す事別の儀でない。何かと言ふうちに年暮になつたではないか。シテ〽御意なさるゝ通り。殊の外押し詰まりまして御座る。アド〽それに就いて。いつも都の伯父者人の方へ。嘉例の通り年暮の祝儀を遣はす。卽ち木六駄炭六駄牛に附けさせて置いた。汝は大儀ながらあれを追うていてくれい。シテ〽畏まつては御座れども。木六駄炭六駄は十二匹の牛では御座らぬか。アド〽その通りぢや。シテ〽お前も能なよう見合して御らうじませ。十二匹の牛を私一人して。何と追うて參らるゝもので御座る。これはもそつと人を遣はされませ。アド〽成程尤もなれども。身共が内に汝より外に誰も遣はす者も無い。大儀ながらそち獨りして追うていてくれい。シテ〽是非に及ばませぬ。參りませうまで。アド〽暫くそれに待て。シテ〽心得ました。アド〽やい〳〵。これは手酒で御座る。お寝酒になされと言うて持つて行け。シテ〽あのこれも持つて行けで御座るか。アド〽なか〳〵。シテ〽あゝお前も人を使はせらるゝも大抵な御座る。十二匹の牛を獨りして追うて行け。それのみならずまた此樣な物まで何と持つて行かるゝもので御座る。アド〽扨々汝は物を仰山に言ふ者ぢや。牛は足が有つて歩く。汝に負はさうとは言ふまいし。一方には樽を持ち。又一方には鞭を持つて。牛を追うて往たがよい。シテ〽ものなれ易さうに仰せらるゝ。あの牛と申す物が。なか〳〵すなほに歩くものでは御座らぬ。其の上此の中の大雪で道は悪し。いやもこれはとかくなりませぬ。アド〽其の樣に言はずとも。持つていたらばよい事が有らう。シテ〽いたりともさのみよい事も御座るまい。アド〽當年は別して寒氣も強いに依つて。布子の綿も多う入れうず。足袋も切つてはかせうと。言附けて置いたれども。これもいらぬものか。シテ〽申し〳〵。それは誠で御座るか。アド〽何の嘘を言ふもいちや。シテ〽參りませう。アド〽行くか。シテ〽おう〳〵。私が參ると申して。骨を盗うては御座られども。お前に人も得お使ひなされぬ樣に世間から申せば。氣の毒ぢやと存じての事で御座る。まだ此の上に何なりとも遣はされませ。持つて參りませうぞ。アド〽いやも外に何も遣はす物も無い。春は早々參つてお目に掛かりませうと言うて。此の狀を持つていてくれい。シテ〽さ樣ならば身拵へをして。追付けのぼりませう。最前仰せられました私が身の暖かな事を。必ず忘れさつしやつて下されますな。アド〽忘るゝ事ではない。急いで行け。（常の如くつめる。うける事同じ。）シテ〽なう〳〵。嬉しや〳〵。當年は別して寒氣も強いに依つて。布子の綿も多う入れうず。足袋も切つてはかせうと言附けて置いたとおしやつた。此の樣な喜ばしい事は御座らぬ。先づ急いで身拵へして。都へ上らうと存ずる。（ト言うて中入る。）茶屋〽この邊りに住居する者で御座る。某が兄弟共に皆百姓で御座れども。身共は生れついて不達者に御座るに依つて。鋤鍬の業がならいで。それ故老の坂の峠へ茶屋店を出して。往來の人に茶を商うて渡世致す。さりながら。此の中は晴間も無い大雪で。上下の通ひも少う御座る。されども毎日出る事なれば。一日店を引く事もならぬ。又今日も參らうと存ずる。シカ〳〵。誠に。毎年とは申しながら。當年は雪年で御座る。其の上この四五日は降り續くに依つて。上下の通ひもひしと止まつた。何卒今日は少しなりとも商ひを致したいものぢ

やが。何かと言ふ内に峠ぢや。先づ店を出さうと存ずる。扨も〳〵。降るは〳〵。又眞黑になつて降る。これでは今日も中々人通りは有るまい。常は往來の衆が皆この峠で休むに依つて。茶を汲み兼ねる程忙しけれども。此の頃は雪が深いに依つて。皆て上下も無い。先づ茶を沸かさう。後シテ〽させいほうせい。ちやう〳〵。アヽこりや〳〵。此の細い道を竝ばずとも。一匹づつ行けいやい。ほうせい〳〵。ちやう〳〵。あゝ竝うだり竝うだり。十二匹の牛の竝うだな見れば。あれからつうとあれ迄ぢや。あれ〳〵。ものを言へば後へ下りおる。うせ居らぬかいやい〳〵。ほうせい〳〵ちやう〳〵〳〵。アヽ危い。そこは崖ぢや。荷が反へる。こちへ寄り居れ。扨々世話を燒かしなる事かな。ほうせい〳〵。ちやう〳〵。アヽ降るは〳〵。こりやまた眞黑になつて降る。此の大雪に身すがらさへぢやに。十二匹の牛を獨りして追はねばならぬ。それに己れ等がはたさぬに依つて。道はがゆかぬわいやい。ほうせい〳〵。ヤアあの餄牛が早や鞜(くつ)を踏み切つたか。たつた今後の松の木の側で掛け換へた鞜を。早や踏み切つた程に。己れが樣な腥の達者な牛は見た事が無い。是非に及ばぬ。掛け換へずばなるまい。おう〳〵〳〵。ヤア。おのれやおれを蹴るか。己れが身共を蹴つたと言うて。何と思ふものぢや。扨々憎いやつの。其の根性ぢやに依つて。牛に生まれ居るわいやい。そりや〳〵。それで冷たうてよからう。うせ居らう。ほうせい〳〵。ちやう〳〵。アヽそこは崖ぢや。荷が反へる。こちへ寄り居れ。〳〵やい。扨々危い事かな。ほうせい〳〵。せめて老の坂の峠までいたらば。一休みしようと思へども。己れ等がはたさぬに依つて。道はかがゆかぬわいやい。ほうせい〳〵。いや何かと言ふうちに峠へ來た。さらば是處で休まう。おう〳〵。あれ〳〵。留まれと言へば行きたがる。是處で休むのぢやわいやい。おゝ世話な燒かし居る。茶屋お出やつたか。茶屋〽おゝ是はまたお上りか。シテ〽見ておくりやれ。此の大雪に身すがらさへぢやに。十二疋の牛を獨りして追うて行かればならぬ。茶屋〽扨々御苦勞な事ぢや。ちと休んで行かしめ。シテ〽ちともそつとも休まねばならぬ。茶屋〽どれ〳〵手傳うてやらう。シテ〽手傳うておくりやれ。茶屋〽あゝこれは夥しい雪を負ふのう。シテ〽何と當年は大雪ではないか。茶屋〽近年に及

ばぬ大雪ぢや。シテへさりながら。大雪の後には必ず豐年ぢやと言ふ。それを樂しみに召されい。茶屋へおしやる通り。それを樂しみに居る事ぢや。シテへさても寒い事かな。茶屋へ寒からうとも。どれ〳〵、茶を沸かしてやらう。シテへあゝこれ〳〵。茶所ではない。早う其の酒を飲ましておくりやれ。茶屋へいや酒はきらいた。シテへ何ぢや酒をきらいた。茶屋へなか〳〵。シテへ是はいかな事。是處で一つ飲まうと思うて。泳ぎ着く様にして來たが。何と才覺は成るまいか。茶屋へお見やる通りの大雪で。里の通りが無いに依つて。どうも才覺はならぬ。シテへあの才覺はならぬか。茶屋へなか〳〵。シテへそれは力を落した。茶屋へやい太郎冠者。シテへやあ。茶屋へその前なは何ぢや。シテへこれか。茶屋へなか〳〵。シテへこれは酒ぢや。茶屋へそれをお飲みあれ。シテへいかな〳〵。これは頼うだ者から都の伯父御へ年暮の祝儀に遣らるゝ酒ぢやに依つて。指を差す事はならぬ。茶屋へ扨々堅い事を言ふ人ぢや。其の澤山な内を一杯飲うだと言うて。苦しうあるまい。シテへ何れ澤山の内ぢやに依つて。一杯飲む分は苦しうあるまいけれども。後がだぶつく。茶屋へそれはよい仕様が有る。シテへ何とする。茶屋へだぶつかぬ様に後へ水を入れてお行きあれ。シテへいか様これはよい酒ぢやに依つて。一杯飲うで。後へ水を入れたと言うて。知るゝ事ではあるまい。茶屋へ何の知るゝものぢや。シテへ何を言うても命あつての事ぢや。一つ飲まう。其の盃を貸しておくりやれ。茶屋へ心得た。さあ〳〵。盃を取つて來た。どれ〳〵。其の燗をしておませう。シテへあゝこれ。燗をする間が待たるゝものか。茶屋へこれは尤もぢや。どれ〳〵と注いでおませう。シテへ早う注いでおくりやれ。茶屋へ心得た。どぶ〳〵〳〵。シテへおゝ有つた〳〵。さらば之を一つ飲うで暖まらう。茶屋へ何とあつた。シテへただひいやりとして。何とも覺えぬ。茶屋へそれならばもう一つ飲うで。味を覺えさしめ。シテへもう一つ飲うでも。大事あるまいか。茶屋へおゝ苦しうもあるまい。シテへ一つ飲むも二つ飲むも同じ事ぢや。茶屋へそれ〳〵。シテへもう一つ飲まう。又注いでおくりやれ。茶屋へ心得た。（どぶ〳〵と注ぐ。また飲む。）シテへおゝ有る〳〵。こりやまたちやうどお注ぎやつた。茶屋へ其の通りぢや。何とあつた。シテへ今覺えた。茶屋へ何とぢや。シテへ酒は結構なものに極まつた。ただ入るゝ時は。鼠ただ氷を含む様にあつたが。早や身の内が暖かに成つた。茶屋へ扨々結構な物ぢや。シテへおゝそなたの顔も寒さうな顔ぢや。茶屋へいやもう殊の外寒い事でおりやる。シテへ何と一つ振舞はうか。茶屋へ飲うでも大事あるまいか。シテへどうも見せて置かれぬ。一つ振舞はう。茶屋へそれは近頃忝い。シテへ身共が酌をしておませう。茶屋へこれは慮外でおりやる。シテへ先づそれを一つ飲うでお見やれ。何とぢや。茶屋へ扨々これは結構な酒ぢや。シテへ何とよい酒で有らうが。茶屋へなか〳〵よい酒でおりやる。シテへ其の筈ぢや。これは頼うだ人の自慢の手酒ぢや。茶屋へ道理でこそ格別よい酒ぢやと思うた。シテへ氣に入つたらば。もう一つお飲みやれ。茶屋へもう一つ飲うでも大事あるまいか。シテへ堅い事を言ふ人ぢや。もう一つ飲ましぬ。茶屋へそれならばもう一つ振舞うておくりやれ。シテへまた注いでやらう。茶屋へこれは度々慮外でおりやる。注ぐ。またちやうどお注ぎやつた。シテへ其の通りぢや。茶屋へ扨々飲めば飲む程よい酒ぢや。之をまたそなたへ差さう。シテへどれ〳〵。戴かう。茶屋

へちと謠はうか。シテへ一段とよからう。小謠有るべし。シテへよいや〳〵。扨々面白い事ぢや。茶屋へざつと酒盛りに成つた。シテへさあ〳〵。またそなたへ差さう。茶屋へ戴かう。シテへもう一つ飲ましめ。茶屋へちと輕う注いでおくりやれ。シテへいや〳〵。ちやうどお飲みやれ。茶屋へこれはまたちやうどお注ぎやつた。これはなか〳〵急には飲まれぬ。シテへ何ぢや急には飲まれぬか。茶屋へなか〳〵。シテへそれならば。肴に一差し舞はうか。茶屋へそれは一段とよからう。シテへ其の團扇を貸しておくりやれ。茶屋へ心得た。シテ小舞有るべし。但し柳の下よし。シテへ地を謠うておくりやれ。茶屋へ心得た〳〵。よいや〳〵。爰にてまた謠ふ。シテばかりざんざ謠ふ。茶屋へさあ〳〵。また差さう。シテへ戴かう〳〵。注ぐ。受ける。シテへオヽある〳〵。茶屋へ太郎冠者。シテへやあ。茶屋へこれはいかう殘り少なになつた。シテへまだ其樣にあるまい。茶屋へいや〳〵。殊の外殘り少なうなつた。シテへどれ〳〵。誠に殘り少なになつた。茶屋へ其通りぢや。シテへ何とこゝへ水は入れられまいか。茶屋へそこへ水を入れたらば。酒の匂ひのする水であらう。シテへ匂ひばかりでは何の役に立たぬものぢや。茶屋へそれ〳〵。

シテへ物とせう。茶屋へ何とする。シテへいつそ皆飲うで仕舞はう。茶屋へそれがよからう。シテへどぶ〳〵。びしよ〳〵。笑ふ。ざつと埒が明いた。茶屋へ其の通りぢや。シテへあゝ今日はそなたの蔭でよい慰みをした。茶屋へこれはあちらこちらぢや。そなたの蔭で身共までがよい機嫌に成つた。シテへさて物ぢや。茶屋へ何とは。シテへそなたは木は要らぬか。茶屋へいやも毎日焚く事ぢやに依つて。夥しう要る事ぢや。シテへサヽそこの事ぢや。幸ひあれに木が六駄有る。あのうち壹駄和御寮におまする。茶屋へそれは忝い。シテへ殘り五駄は。欲しいと言ふ者が有らば賣つておくりやれ。春の小遣ひにする。茶屋へ成程よい樣にして置かう。シテへ牛もどれになりとも繋いで置いておくりやれ。戻りに寄つて。牽いて歸らう。茶屋へ合點ぢや。シテへさてもう行かう。茶屋へお行きあるならば。どれどれ笠をおませう。シテへこれは何とする。茶屋へはて何とするとは。雪が降るは。シテへこの雪がちら〳〵と顔へ掛かるが面白い。茶屋へそれもさうか。シテへもうかう參る。茶屋へお行きやるか。二人へさらば〳〵。シテへ笑ふ。扨々よい機嫌になつた。さらば行かう。

ヤア和御寮たちはまだそこに待つて居るか。これはお待遠に御座りませう。さあ〳〵。お行きあれ〳〵。あゝこれは夥しい雪を負うたなあ。重荷に小附ぢや。ほうせい〳〵。ほうせい〳〵。ちやう〳〵〳〵。こりやいかう面白い。ちと謠はう。小謠有るべし。何ぢや。あの餓牛めが角を生やいておれを睨うだと言うて。何と思ふものぢや。何ぢや。もう。笑ふ。これは尤もぢや。さあ〳〵。お行きあれ〳〵。ほうせい〳〵。その代りには伯父御樣の方へいたらば。御好物の粥を申附けう。さあ〳〵。ほうせい〳〵〳〵。いや何かと言ふうちに早やこれぢや。扨々早う來た。さらば先づ牛を繋がう。おゝこれは夥しい雪を負うた。其の上どうやらふら〳〵する。酒に醉うたか知らぬ。物まう〳〵。小アドへ表に案内が有る。案内とは誰そ。シテへおれぢや。小アドへ何として來た。シテへお使に參りました。小アドへ何と言うておこされた。シテへそりや知りませぬ。小アドへ是はいかな事。使に來て知らぬと言ふ事が有るものか。シテへエイこれに御狀が御座ります。小アドへムヽ狀が來たか。シテへ之を御覽なされたらば。大方樣子が知れませう。小アドへどれ〳〵。シテへ書

いた物は重寶で御座る。小アド〽やい太郎冠者。シテ〽はあ。小アド〽炭六駄は見ゆるが。木六駄は見えぬぞよ。シテ〽いや木は參りませぬが。小アド〽でも狀に書いて有る。シテ〽いや木は參りませぬ。小アド〽そちも物を書く者ぢや。これへ寄つて此の狀を見よ。シテ〽どれ〳〵。小アド〽それ〳〵。シテ〽これは筆者の誤りぢや。小アド〽筆者の誤りとは。シテ〽おれは此の中名を變へました。小アド〽何と變へた。シテ〽木六駄と變へました。小アド〽何ぢや木六駄。シテ〽木六駄に炭六駄のぼせ申し候ぢや。小アド〽はて變つた名を附けたなあ。シテ〽よい名を附けました。小アド〽なほ〳〵手酒壹樽。手酒は何とした。シテ〽いや手酒は參りませぬ。小アド〽これも是處に書いて有る。シテ〽でも參りませぬ。小アド〽いやこゝなやつが。最前から何を問うても。あれも知らぬ。是も知らんとぬかし居る。其の上見れば酒に醉うて居る體ぢや。知つたがじやうか知らぬがじやうか。眞直ぐに言へ。シテ〽あゝ先づお待ちなされませ。小アド〽何と待てとは。シテ〽物で御座る。小アド〽物とは。シテ〽餘り寒う御座つたに依つて。老の坂の峠の茶屋で。皆ごぶ〳〵と致して御座る。小アド〽どうでも其の樣な事であらうと思ふ。シテ〽御許されませ。小アド〽己れ憎いやつの。シテ〽許して下されい。ト言うて。追込み入るなり。

吟三郎（ぎんざぶらう）　鷺流

シテ　聟
アド　男
アド　舅
アド　太郎冠者

（入道具）

舅〽これは此の邊りで大果報の者で御座る。今日（こんにった）は最上吉日で御座るによつて。聟殿の見えらるゝ事も御座らう程に。其の由申附けうと存ずる。太郎冠者あるかやい。太郎冠者〽はあ。舅〽居たか。太郎〽お前に。舅〽汝呼出すは別の事でもない。今日は日もよいによつて。聟殿のわせうも知れぬ。さうあれば何方も念を入れて掃除を云附けうず。又見えられたならば知らせい。太郎〽委細畏まつて御座る。舅〽えい。太郎〽はあ。ト兩人とも座着居る。シテ〽罷出たるは。舅のいとしがる花聟で御座る。度々聟入を致せと人をこされますれども。とやかくなりにくい事が御座つて遲なはつて御座る。今日は日もよいと申す程に。聟入を致さうと存じて。此の間方々へ申して漸う是程に調へて御座る。爰に常々お目かけらるる方が御座るが。某が事を常に世話になさるる程に。參つて此の段を申し入れ。お人をも借りて參らうと存ずる。先づ急いで參らうずる。何とお宿に御座らうか御座るまいか知れぬ事ぢや。ト道行例の通りして。シテ柱きはにて案内を乞ふ常の如し。アド案内をきゝ出る。辭儀例の如し。アド〽扨これは常には變つて取繕らうておりやつたが。聟入をしさしますか。シテ〽扨も〳〵早いお目で御座る。如何にも聟入で御座りまするが。常々お目を下さるゝ所で此の段を申しながら。ちと御無心申す事があつて參じまして御座る。アド〽何事でおりやるぞ。物によつて聞いてやらう。シテ〽いや別の事では御座りませぬ。舅の所へ初めて參るに。自身樽をかたげて參るも。餘り見苦しう御座る程に。お人を貸して下されませい。アド〽易い事ぢやが。折節今日用あつて。悉く方々へやつて。一人も居らぬ所で。何ともなり難い。氣の毒な事ぢや。シテ〽なりますまいか。これは氣の毒な事で御座る。いまゝ俄に外で雇ひませう心當ても御座らず。某が一代の晴

れて御座りまする程に。何卒御了簡なされて下されませい。アドへそれはおしやるに及ばず。そなたの事なれば如才はないが。差當つては何ともせうやうもない。ちと前方におしやれば。如何樣にもなる事ぢやに。なんとも今はせう事がない。ト少し案じて。いや思附いたる事がある。シテへそれは一段の事に御座りまする。何となされまする。アドへそれでは。見知る人もあるまいによつて。別に某は隙のいる事はなし。慰みながら身共が持つて同道申さう。シテへ是は存じも寄らぬ事を仰せられまする。何とこなたが供に連れらるゝもので御座らう。これは御無用で御座りまする。アドへいや／＼。少しも苦しうない。珍しうこのやうな事に又と無い事ぢや。所で平に身共に持たせてくれさしませ。シテへいや何と仰せられても慮外な。なにと供に連れられませう。幾度もお斷りな申しませう。アドへはて聞き分けもない。最前から事を分けて云ふに。まだ何かと云はします。是非とも身共が行くぞ。シテへそれならば。ともかくもお心次第で御座りまする。アドへそれならば。先づ樽なおこさしませ。シテへあゝ近頃慮外に御座りまする。トアドへ樽を渡す。アドへさあ／＼おり

やれ。シテへいや先づ御座りませい。アドへ爰な人は。御座りませいと。何處に下人を御座りませいと云ふことがあらう。今日はそなたの家人ぢや。所で内の者ぢやと思うて。何かと云うてお使やれ。只今の體ではなか／＼急にはなり難からう。所で道すがら家人にして稽古に使うて見さしませ。シテへ心得ました。如何にも急にはなりますまい。所で憚りながら道々稽古につかうて見ませう。さらばお先へ參りまする。アドへお先へ。詞の下からはや其の樣な事を云はします。下人に其の樣な事を云ふものか。身共ぢやと思はず。あとを見ずに呼ばしませ。シテへさらば呼びまする。アドへ其の斷りにも及ばぬ。呼ばしませ。シテへ心得ました。やい／＼來るか。アドへはあ參りまする。シテへ御免なされませい。ト下に膝つく。アドへこれ／＼。なにとそのやうにくど／＼として埒が明かう。思切つて呼ばしませ。シテへいや如何樣にしてもなりませぬ。生れてつひに此の年まで。人といふを使うた事が御座らぬによつて。何ともなりませぬ。アドへならぬ。それならば何としてよからう。何と下人を使はずとも。友になりとも。常に下人も同じ樣に。詞を下げて云ふものはない

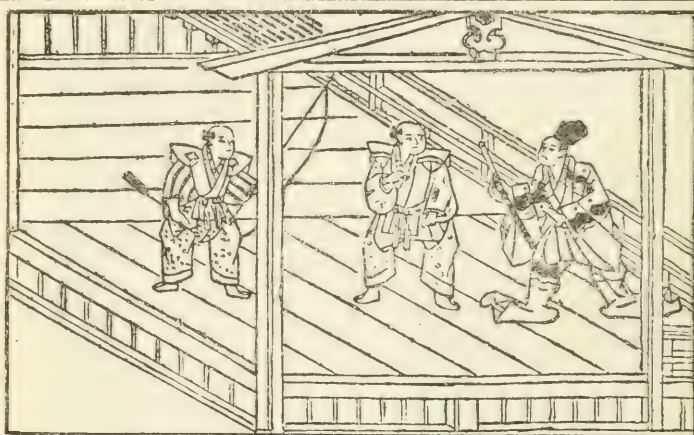
か。シテへそれは御座りまする。中にも隣りに吟三郎と申して。心安う朝暮出會ふ者が御座りまする。アドへそれならば。今日は某が吟三郎にならう程に。吟三郎と云うてお使やつたならば。常に云ひつけた事ぢや程に。如何樣にも使ふ事がおなりやらうぞ。シテへいづれこれでは申附けて御座る程に。心からくつろいで申されませう。アドへそれならばざつとすんだ。さあ／＼おりやれ。シテへ心得ました。さらば申しまする。やい／＼。吟三郎來るか。アドへはあ。シテへ云ひつけた物をよう念を入れて持つて來い。ト道行して橋掛りへ行き。常の如く案内いふ。太郎冠者出で。どなたからお出なされたと云ふ。シテへ聟が參つたとおしやれ。太郎へ聟殿で御座るか。其の通り申しませう。ト舅へ行きて。まうし聟殿の御出でなされて御座る。舅へ聟がわせた。急いで是へといへ。太郎へ畏まつて御座る。トシテへ向きて。あれへお通りなされませい。シテへ心得た。ト云うて通る。舅に向かつて。不案内で御座る。舅へ初對面で御座る。シテへ早々參りたう存じて御座れども。かれこれ致いて遲うなりまして御座る。其の段は内のおごうに免じてごゆるされませい。舅へ一入で御座る。アドへまうし誰ぞ賴みませう。ト橋掛にて云ふ。太郎へ何事ぞ。アドへこれ

は聟殿の目出度う持參で御座る。ト太郎冠者へ渡す。太郎冠者受け取り。アドを不審さうに見て聟の前へ持出る。太郎へ聟殿の御持參で御座りまする舅へ幾久しう目出度う御座る。トシテに向つて云ふ。太郎へまうし。聟殿はまだ門前に御座りまする。舅へとは何とした事ぢや。これ程座敷へ通つて御座るに。何事を云ふぞ。太郎へいや誠の聟殿はあなたに御座りまする。シテへいやあれは某が隣りの者ぢや。太郎へいやおかまやつそ。こう此の賢い太郎冠者が見紛ふ事はおりやらぬ。舅へ急いで呼びませい。太郎へ畏まつて御座る。ト樽を置き。橋掛へ行き。申し。舅申しまする。聟殿はなぜそれに御座りまする。お通りなされいと申されまする。アドへいや某はそれへ參る者では御座らぬ。聟殿は最早とう通らせられて御座る。太郎へまだ左様な事を仰せられまする。心をごらうじらるゝもよい程になされませい。斯うお通りなされませい。ト無理にアドの手を引き。シテの上座へ通して。聟殿のお通りなされて御座る。シテへいや聟殿は某ぢや。太郎へまだそなたは其のつれな事をいふか。あすこへいて居さしませ。トシテを引き立て橋掛へ突きやる。シテうろうろとシテ柱のきは迄寄り居る。舅アドに向かつて。舅へ初めより通らせられいで。なぜに色々と心をごらうじられて御座る。アドへいや御心を見ませうでは御座らぬ。某が在所ではかやうな戯れを致すによつて。所の風俗も知らせませうと存じての事で御座る。親子の中の戯れと思召して下されませい。舅へ誠に仰せらるれば其の通りで御座る。トいろいろ詞あり。さて盃舅始めにアドへさす。アド受取り飲むうち。見合せ樽を見て招く。シテそろそろとアドの後へ行く。三献目の時。太郎冠者太刀持ち出て。代々わざよしとて進上するとアドへ渡す。舅へ目出度う御座る。アドへ親子の契約申す上は。萬事御意見を頼みまする。最早お暇申しませう。舅へ御座るか。ト暇乞常の如し。舅太郎冠者は切戸より入る。アドは太刀左に持ちて。アドへ存じも寄らぬ仕合はせで御座る。急いで歸らう。ト橋掛へ行く時。シテ兩手をひろげて。出で向ふ。シテへやあやあ。其の太刀に某がちや。おこせられい。アドへ尤もそなたのも聞えた樣なれども。聟になつての上に引出物にくれられたを。何故そちへやらう仔細がない。シテへどうあつても此方へおこせい。ト取付き奪ひ合ふ。アドはシテを押し伏せ。叩きて入る。シテへこれは散々の體にしないた。最早何の面目に宿へも行かれまい。何方へぞ足にまかせていて。自然入聟の用の所があらば。足を留めるやうに致さう。ト正面へ向きて。なうなう聟の餘つたは御用にはないか。無緣の聟には。はつちはつち。

禁野（きんや）

シテ　大名
アド　通行人
（入道具）

シテへ隠れもない射手で御座る。今日は禁野へ出て鳥を狙はうと存ずる。シカシカ。誠に。某は人數多使ふ者なれども。今日は用事があつて方々へ遣したれば。それ故供をつれずに出たれば不自由な。暫く此所に休らうて。似合はしい者も參らば召連れうと存ずる。アドへ急の使に參る者で御座る。誠に。主命と申しながら。毎日毎日方々へ使に參ると申すは辛勞な事で御座る。シテへ一段の者が參る。なうなうこれこれ。アドへ私の事で御座るか。シテへおぬしはどれからどれへ行くぞ。アドへ急の使に參る者で御座る。シテへ某も道を急ぐ。同道致さう。アドへ見ますれば御仁體で御座る。殊に私は主人の使に先へと急ぎまする。お連には似合ひませぬ。お先へ參りまする。シテへこれこれ。身共が斯樣に申しかゝつては。いやでも應でも同道せねばならぬ。さう心得さしめ。アドへそれは御無體で御座る。

最前から申す通り主命で御座る。何卒御了簡なされて下され。シテ〽くどい事を云ふ。たつた一しつに射てとるぞ。アド〽まづお待ちなされませ。シテ〽何と。待てとは。アド〽成程お供申しませう。つめる。シテ〽今のはざれ事ぢや。斯う云ふも同道したさの事ぢや。心にお掛きやるな。アド〽扨々こはいおされ事で御座る。シテ〽何と先へお行きやらぬか。アド〽何が扨お出てなされませ。シテ〽それならばさあ〳〵おりやれ。シカ〳〵。扨某は人數多使ふ者なれども。今日は用事が重つて方々へ遣して。宿に一人も居らぬ。それ故獨りで淋しさに。わごりよと同道したいと云ふ事ぢや。アド〽扨おまへはどれへお出でなされまする。シテ〽今日は禁野へ鳥を射にゆくは。アド〽あの禁野と申すは殺生禁斷の所では御座らぬか。シテ〽されば殺生禁斷の所ぢやによつて。誰も殺生に出る者がない。鳥類なれども賢い。人の行かぬ所を知つて。餘の所より鳥が多う集る。それ故忍び〳〵に出る事ぢや。アド〽若し人が咎めたらば何となされまする。シテ〽其爲にとがり矢。何の詮儀もない。射殺してのける。アド〽扨もそれは。引く。シテ〽何と〳〵。アド〽氣味のよい事で御座

る。シテ〽何かと云ふ内に禁野ぢや。今日は何としてやら鳥がおりぬ。見付けたら知らせてお呉りやれ。アド〽あれ〳〵。あそこへ大きな雁が一羽おりました。シテ〽心得た。ト云うて。左の肩拔ぎ。弓矢をつがふ。アド〽さあ〳〵早うなされい。鳥が立たうとてか羽根づくろひを致す。シテ〽どれ〳〵どこに居るぞ。アド〽ハテあの田の畔に居まする。シテ〽どれぢや。見えぬが。アド〽エヽもどかしい。はや立ちまする。ト云うて。無理に弓矢を引取る。アド〽どれ〳〵私が射ませう。シテ〽兎角身共は見付けぬ。アド〽がつきめ。わらぬぞ。最前から身共を色々侮つたがよいか是がよいか。おのれが胴中を射拔かうぞ。シテ〽まづ待たしめ。近頃誤つた。急の使に行くといふ人を同道するによつてぢや。最早連はいらぬ。勝手にお行きやれ。アド〽まだそのつれを云ふか。咽首を射拔いてやらうぞ。シテ〽やれ赦して呉れい。手を合はす〳〵。アド〽命が惜しくば助けてもやらう。その一腰をこちへおこせ。シテ〽侍の一腰離されうか。アド〽おこすまいか。シテ〽やる〳〵。アド〽柄の方を取直しておこせ。シテ〽やり様が氣に入らずはおけ。アド〽おこすまいか。シテ〽ハテやると云ふに。氣の短い。ト云うて。柄をやる。アド〽その着てゐる小袖上下をおこせ。シテ〽小袖上下を拔いだら見とむないものであら

う。赦して呉れい。アドへいや〳〵取らねばならぬ。はやうおこせ。シテへ扨も胴慾な事ぢや。ト云うて。素袍のしめぬぎてやる。アドへおのれ助くるやつではなけれども。了簡なうして命を助くる。足許のあかい内にどちへなりとも行きたらう。まづ急いで歸らう。シテへやい〳〵若者。あまり身が見苦しい。小袖は戻して呉れい〳〵。南無三寶。さん〳〵の體ぢや。是について。則ちこの禁野に於いて昔物語のあるを思出した。昔津の國長柄の橋を掛けらるゝに。此橋終に成就せず。ある人の申すは。人柱を立てられなば。必ず成就仕るべきと申す。奉行詮儀して。科なき者を罪になさんも流石なり。兎角この事を云出したる者を人柱に立てんとて。則ちかの者を人柱に入れけるに。思ひの儘に此橋成就する。さる程に。かの者一人の息女を持つ。或人かしづきて緣につくるに。如何なる事にや。三年の間物云はざりしかば。詮方なく故郷へ送りける時。この禁野を通るに。雉の鳴きければ。供の者共これを聞付け。かの雉を取つて殺しける。輿の内よりかの女一首の歌に。物云はじ。父は長柄の人柱。鳴かずば雉も射られざらましと。斯様に口ずさみける。扨何として三年の間物仰せざりけると不審をなし申せば。かの女。我が父は口故長柄の人柱に立ち給ふ。唯物云はぬ程こそよけれといふ。それより又輿を戻し。緣を結び。子供數多出來富貴の家となる。某も最前の者に言葉をかけずば。斯様のなりにはなるまい物を。しないたり。なりかな。ト云うて。とめて入るなり。

【く】

茸（くさびら）

シテ　山伏
アド　所の者
立衆　茸
（入道具）

アドへ此の邊りの者で御座る。某の屋敷へ當年はじめて何とも知れぬ茸が生えた。取つては捨つれども。夜の間には生え〳〵。幾度取つてもまた元の如く生える。斯様の不思議な事は御座らぬ。何とやら心懸りに御座る。爰に法力の強いお山伏がある。日頃お目を下さるゝに依つて。これを頼うで。祈禱をして貰はうと存ずる。シカ〳〵。誠に。苔と申す物は。大木などの朽ちたところ。或は山中に出來るは珍らしからざる事で御座る。人居屋敷にあの様に出ると申すは。何とも心得ぬ事で御座る。法印へお願ひ申して。心を晴らし度う存ずる。何かといふうちこれぢや。ト云うて。樂屋に案内をこふ。シテへ九識の窓の前。十乘の床の傍に。瑜珈の法水を湛へ。三密の月を澄ますところに。案内申さんとはいかなる者ぞ。アドへ私で御座る。シテへ足もとから鳥の立つやうに。我御寮ならば案内なしに通りはせいで。何としてお出でやつた。アドへ唯今參ること別の義で御座らぬ。私の屋敷に。此頃何とも知れぬ大きな茸が生えまするに依つて。隨分取つて捨つれども。夜の間には生え〳〵。とかく取り盡されませぬ。斯様の不思議なことは御座らぬ。何卒お出でなされて。様子を御覽なされて。一加持なされて下されたらば。辱う存じませう。シテへ此の間は別行の子細あつて何方へも罷り出ぬ。尤もそなたの事ぢや。行てやらう。アドへそれは有難う存じまする。いざお出でなされませ。シテへ案内者の爲め。そなた先へ行かしめ。アドへ畏まつて御座る。お先へ參りませう。シカ〳〵。私も今まで隨分こらへまして御座れども。とかく

取り盡されませぬに依つて。ただ心許なう御座る。シテへ何とその茸は大きいか小さいか。アドへいや餘程大きな物で御座る。シテへとかく見れば様子が知れぬ。さて何時ぞや祈念した病人は何とした。アドへされば奇特な事で御座る。次第々々に快う御座つて。今少しで御座ります。シテへ成る程。急に直し様もあれども。それは悪い。そのやうにそろりそろりと快氣するが。誠の本腹ぢや程にの。アドへ御尤もな事で御座る。とかく彼れこれにつけて。ただお前の行法を深く信仰仕りまする。シテへそれは外聞かたがた身共も悦ばしう存ずる。アドへ何かと申すうちにこれで御座る。いざお通りなされませ。シテへさて彼の茸は何處にあるぞ。アドへこれで御座りまする。ト云ふ。シカシカ。内切戸よりずつと出て。脇座に居る。シテへこれはいかなこと。何ほどの茸も見たが。これは全く人體の様な。あれあれ思ひなしか。縋に目鼻手足の様な物が見ゆる。アドへされば次第々々に成長仕りまする。シテへ尤も小さい茸の生ゆる事はあるものぢやが。此様な恐ろしい凄じいは見た事がない。アドへこれはどうでも不吉であらうと存じまする。シテへいやいや。心安う思はしめ。一加持して退く様にしてやらう。アドへそれは有難う存じまする。シテへそれ山伏といつぱ。これより祈り常の如し。祈るうち。また二人出る。方々に座す。アドへまうしまうし。また出ました。シテへ出る筈ぢや。和御寮が今まで何程取り退けても。後からひたもの出るといふではないか。身共が行力が達した故に。地の底にある分が皆出る。今出たは松茸椎茸ぢや。最早餘り多うはあるまい去りながら。有る分は皆祈り出さればならぬ。いよいよ我が頼む三つのお山を勸請申し。肝膽を砕き祈るものなり。ぼろおんぼろおん。ト祈るうち。また出る。アドへまた出ました。シテへこれは姫茸いくちしめじぢや。物の滅するとては此の様に増すものぢや。此の上はなすびの印といふて祕法がある。此の印を結んで今一加持せう。役の行者の後を繼ぎ。行法様々なりと申せども。中にも妙なる茄子の印を結びかけて。ぼろおんぼろおん。ト祈るうち。各シテの側へ寄り。取付く。シテ迷惑がるなり。アドへこれは夥しいことかな。申し申し。最前からお祈りなさるほど結句多うなりました。どうぞ鎭まる様になされて下されい。シテへ扨々毒々しい茸ぢや。何卒退轉するやうにせう。そなたも心中に祈誓召されい。いかに惡心深い茸なりとも。祕法の加持を執行して。いろはにほへとんと祈るならば。などかちりぬるをわかなれ。ト祈るうち。鬼茸橋掛り一の松へ。笠半開きにて。顔を隠し出る。シテ見付け驚きて。やあ。あれへ事々

しい牛びらの茸が出た。あれが開いたらさぞ夥しい事であらう。これは先づ何とせうぞ。アドへあゝお前は唯今まで生不動の様に存じて居たれば。扨々案の外な。これは屋敷中が茸に成りました。まことに。あれ／＼皆仇を致す。こなたを頼まずは此の様には成るまいものを。これは何とした事で御座る。シテへ身共も年月の行法殘らず執行致し。いろ／＼祈れども。此の様に夥しう廣がつては。なかなか祈禱も行き亙ることではない。アドへその様に心弱うては成りませぬ。心をはつたりとして。もそつと祈らせられい。シテへよもやこれほどにあらうと思ひませなんだ。アドへといふて。これが今と成つて。何となるもので御座る。シテへ然らばもう一祈りしませう。惡事災難なうちはらひ。祈願如意滿足。ぼろおん／＼。ト云うて。祈るうち。笹をひろげて。取つて嚙まう／＼と云うて。シテを追込め。殘りの茸皆々後に取附き。二人を追込め入るなり。

闖罪人（くじざいにん）

シテ　太郎冠者
アド　主人
小アド　立衆頭
立衆
（入道具）

アドへ此の邊りの者で御座る。何かと申すうちに祇園會も近々になつて御座る。又當年は某が山の當番にあたつて御座る。今日は何れも寄合うて山の相談を致さう筈で御座る。最早時分もよう御座る。太郎冠者を呼出し。何れもへ遣はさうと存ずる。呼出す。出る。常の如し。何と祇園會も近附いたでないか。シテへ御意なさるゝ通り。祇園會も近々に成りまして御座る。アドへそれに就いて。汝は何れもへ行て。最早時分もよう御座る程に。お出で成されて。山の御相談をお極めなされて下されと。言うて行て來い。シテへ畏まつて御座る。アドへさて言ふまでは無けれども。汝はとかく物事に差出る。今日各お出でなされても。必ず差出る事は成らぬ程に。さう心得。シテへ心得ました。ト云うて受ける。つめる。常の如し。シテへなう／＼。嬉しや／＼。祇園會も近々になつた。當年は頼うだ者が山の當番にあたられた。あゝ身共も餘程骨を折らずばなるまい。扨これは何處へ參らうぞ。いや誰殿が近い。先づ誰殿へ參らう。ト言うて。橋懸りへ行き。案内乞ふ。常の如し。頼うだ者申します。最早時分もよう御座る。お出でなされて。山の御相談をお極めなされて下されと。申し越して御座る。立頭へ成程。何れもお出で成されうとあつて。皆此方へお揃ひぢや。シテへそれならば御銘々參るに及びませぬが。立頭へ銘々行くには及ばぬ。追付け同道して行かう程に。汝は先へ行け。シテへそれなればお先へ參ります。追付けお出でなされませ。立頭へ心得た。シテへ申し上げまする。アドへ何事ぢや。シテへ唯今誰殿へ參つて御座れば。何れもあれにお揃ひで。追附けこれへお出でで御座る。アドへお出でなされたらば此方へ知らせい。シテへ畏まつて御座る。立頭へなう／＼何れも御座るか。立衆各へ是に居りまする。立頭へ唯今誰殿から人が參りました。いざ參りませうか。立衆へ一段とよう御座らう。立頭へそれならば。さあ／＼御座れ。立二へ心得ました。何れもお出でなされい。各へ心得ました。ト言うて。案内乞ふ。太郎冠者に云ふ。弓矢同斷なり。立頭へ御當日出度う御座る。アドへようお出でなされた。先づ下に御座れ。各へ心得ました。アドへさて。何と思召す。去年の神事を昨日や今日の様に存じて御座れば。早や祇園會に成りました。立頭へ仰せの通り月日のたつは早いもので御座る。立二へ光陰矢の如しで御

座る。アドへさて今日は是非山の御相談をお極めなされて下され。立頭へ成程今日は是非とも山の御相談を極めませう。各へそれがよう御座らう。シテへこれは何れも樣御苦勞に存じまする。さて當年に賴うだ者が。山の當番にあたりまして御座る。御存じの通りつッと不調法者で御座るに依つて、何れも樣宜しう賴み申しまする。立頭へおゝ心得た。アドシテの袖引き。目はじきして引込めと言ふ心持なり。アドへさて何れも思召しの山も御座らう程に。御遠慮なう仰せられて下され。立頭へ成程各存じよりも御座らうが、先づこれはお頭人の役に。御亭主の思召しから承りたう御座る。なう何れも。アドへそれならば存じつきを申して見ませう。各へ一段とよう御座らう　アドへ私の存じまするは。先づ大きな山を拵へまして。如何にも逞しい猪を造りまして。それへ仁田の四郎が乘つた所を。囃子物には何とて御座らう。立頭へ是れは何れもよう御座らうのう。各へ是はよう御座らう。シテへあゝまうし〳〵。先づお待ちなされい。立頭へ何と待てとは。シテへお前方は此の山をよからうと思召すか。立頭へ成程よからうと思ふ。シテへ私は惡からうと思ひまする。立頭へそれはどうした事ぢや。

シテへ先づあの猪と申す物は。第一不調法な物で御座る。それ仁田の四郎が乘つたと言うて。別に面白い事は御座りますまい。アドへこりや。ト云うて叱る。立頭へ如何樣これは太郎冠者が申す通り。餘り面白うも御座らぬのう。各へ其通りで御座る。アドへいや其處が御相談で御座る。又何れもの內から思召しを仰せられて下され。立頭へさ樣ならば。私の存じよりを申して見ませうか。アドへ一段とよう御座らう。立頭へ私の存じまするは。やはり山は山で御座る。其の山の上に土俵を築きまして。河津と俣野が相撲の所は。何とて御座らう。アドへ如何樣これが善う御座らう。各へこれに極めさせられい。シテへあゝまうし〳〵。先づお待ちなされませ。立頭へ何と待てとは。シテへこれはまたお前の思召しとも覺えぬ事を仰せらるゝ。何處にか山の上で相撲を取ると申す事は。終に聞いた事が御座らぬ。それにかうお揃ひなされたは。皆お歷々では御座らぬか。何ぞや相撲をとり候と言うて。裸になつて目口はだけて。氣張りまはつて。やあおてつ參つたの。笑ふ。京中の笑ひ物で御座らう。トまた叱る。太郎冠者引く。立頭へ太郎冠者が申す通り。これは善う御座らぬ。立二へいやこれはよい山で御座る。アドへこれに極めさせられい。立頭へいやこれは粗相を申しました。こなた思召しも御座らう程に仰せられい。立二へそれならば私の存じよりを申して見ませう。立頭へ一段とよう御座らう。シテへまたあの誰殿に譯も無い事を言はるゝであらう。立二へ私の存じまするは。山は山で御座る。其の山の上に大きな瀧を拵へまして。それへ鯉の登る所を。囃子物には何とて御座らう。シテへさればこそ言はぬ事か。各へこれは一段とよう御座らう。シテへあゝまうし〳〵。先づお待ちなされませ。立頭へ何と待てとは。シテへ當年は何ぞ珍らしい人の面白がる山をと有つて。前廣から御相談では御座らぬか。立頭へ其の通りぢや。シテへそれに鯉の瀧登りが何の珍らしい事が御座る。每年鯉山の町とて出まする。立二へこれは不調法を申しました。立頭へ何れも何と思召す。最前から太郎冠者がとやかう申しまする。あれが何ぞ思ひよつた事が有ると見えます。呼うで承りませうか。各へこれは一段とよう御座りませう。アドへあゝ先づお待ちなされませ。扨々むさとした事を仰せらるゝ。あれらつれの申す事が何と取上げらるゝもので御座る。あれにお構ひ

なされずとも。各のうちからお極めなされませ。立頭へいや／＼。あれぢやと申しても、よい事を申せば、取上げねばなりませぬ。いざ呼びませう。各へよう御座らう。立頭へやい／＼太郎冠者。シテへはあ。立頭へこれへ来い。シテへ何ぞ御用で御座るか。立頭へ成程用が有る。シテへ畏まつて御座る。立頭へさて最前からとやかう言うが、何ぞ珍らしい山を思ひ寄つて居るものであらう。遠慮なう言うて聞かせい。シテへされぱの事で御座る。當年は頼うだ者が山の當番に當りまする。又前廣から承れば。當年は何ぞ人の面白がる山と有る御相談で御座るに依つて、晝夜とつおひつ思案を致して。珍らしい人の面白がる山を二つ三つ思寄つて居りますれども、何を申しても。ト言うて。主の方を指差して。かぶり振りて逃げる。立頭へやい／＼太郎冠者。それはそつとも苦しうない、遠慮なしに早う言へ。シテへ苦しう御座りませぬか。立頭へおゝ苦しうない。シテへさ様ならば申しませう。私の存じまするも。山は山で御座る。其の山を二つ拵へまする。立頭へ何二つ。シテへなか／＼。立頭へ先づ此の二つが珍らしう御座る。各へ其通りで御座る。立頭へして何とぢや。シテへ一つの山は如何にも嶮岨に作りまして。又一方の山は草茫々と物凄き山に作りまして、かの草茫々とした物凄き山からは、如何にも弱々とした罪人を作りまする。又一方の嶮岨な山からは。牛頭馬頭阿呆羅刹などと申す様な怖ろしい鬼を作つて置きまして。かの罪人を山の上へ責め登し責め下し致す所を、囃子物では何とで御座らう。アドへまた差出をる。ト言うてたゝく。立頭へこれ／＼。先づお待ちなされい／＼。何といづれも。是は珍らしい山では御座らぬか。各へいづれ是は善い山で御座る。立二へこれに上越す山は御座るまい。これに極めませう。アドへはあ。いづれも此の山をよからうと思召すか。立頭へ成程よからうと存じまする。アドへそれはどうした事で御座る。先づ思召しても御覧じませ。神事と申す物は前廣から身を浄め、祝ふが上にも祝ふもので御座る。それに何ぞや忌はしい鬼が罪人を責むるなどと。是れは散々の山で御座る。止しにさせられい。シテへいや申し／＼。とかく此様な珍しい人の面白がる山は悪う御座りまする。最前頼うだ人の御申しやりました。不調法な猪が善う御座りませう。アドへまた出をつた。ト言うてたゝく。立頭止める。立頭へあゝ先づ待たせられい／＼。とかく何れも此の山が御同心で御座る。アドへ扨はどうあつても此の山が御同心で御座るか。立頭へなか／＼。アドへそれならば是非に及びませぬさりながら。鬼にはなり手が御座らうが、罪人になり手が御座るまい。シテへそれこそ例年の鬮取りになされませ。アドへまた出をるか。ト言うてたゝく。立頭へあゝ先づ待たせられい。如何さま太郎冠者の申す通り、鬮取りが善う御座らう。やい／＼太郎冠者。其の鬮を拵へて持つて来い。シテへ畏まつて御座る。鬮を拵へました。お取りなされませ。立頭へいづれもお取りなさらぬか。各へ先づお取りなされませ。ト言うて。段段立衆へ鬮を持つて廻り。主の方へ往かんとし。さてこはさうらに主の後より蒟蒻の蕁突きやる。主も取り着突出す。シテへこれは鬮が一つ残りました。立頭へそれは汝取れ。シテへ私も取りませうか。アドへいや／＼あいつに取らす事はなりませぬ。立頭へいつも頭人より人が一人宛出ます。アドへ人が要れば雇うて出しまする。立頭へ是は如何な事。内に在る人を差置いて。雇ふと言ふ事は有るもので御座るか。太郎冠者苦しうない。汝取れ。シテへ畏まつて御座る。ト言うて。鬮懸りへ行き。鬮を開きみて。嬉しがり。勢くなり。立頭へさあ／＼。いづれも鬮を開かせられい。各へ心得まし

た。立頭〽私は笛の役で御座る。それより段々鼓鉦太鼓笛の役と。段々言ふ。アドも扇を開き見て。また畳みて。持つて居る。立頭〽何と御當家は何の役で御座る。アド〽私はまだ圖は見ませぬが。あゝこれは餘りようない出で御座る。立頭〽是程までに相談のきまつた事を。なぜに其の様に仰せらるる。さあ〳〵早う圖を開かせられい。アド〽それならば圖は三度のもので御座る。親うて取直しに致しませう。シテ〽終に祇園會の圖を取直した例が御座らぬ。アド〽また出をつた。ト言うてたゝく。立頭〽それならば私が見ませう。亭主は罪人、シテ〽鬼はこゝに。アド〽また出をつた。トたゝく。立頭〽あゝこれ〳〵。其の様に叱らせられた。さあ〳〵役が極まりました程に。稽古をさせられい。各〽心得ました。立頭〽太郎冠者も稽古をせい。シテ〽畏まつて御座る。ト言うて。板付より杖持出る。アドもワキ座にて杖持つて立つて。常の如く責め一段。仕様色々あり口傳。シテ〽如何に罪人急げとこそ。アド〽己れは憎い奴の。シテ〽ちやつと止めて下され。立頭〽あゝお先づ待たせられい。これは何事で御座る。アド〽稽古に事寄つて某を打擲致す。のかつしやれ。打殺して除けませう。立頭〽あゝ先づお待ちなされ。身共がきつと申附けませう。アド〽きつと言附けて下され。立頭〽心得ました。やい〳〵太郎冠者。稽古に事寄つてなぜに主を打擲する。シテ〽何も打擲は致しませぬ。鬼の責むる勢に。杖の先が一寸など當るまいものでも御座らぬ。それに何ぞや私をしたゝかな目に合せられまする。お前もよう思召しても御覽じませ。總じて。昔から鬼が罪人を責むるところこそ御座れ。何處にか罪人が鬼を責むる事は。終に聞いた事が御座らぬ。私は最早責めますまい。立頭〽やい〳〵太郎冠者。其の様に言はずとも機嫌を直して稽古をせい。シテ〽さ様ならば稽古を致しませうが。やゝもすればあの大きな目でお睨みやるに依つて怖ろしうてどうも稽古がなりませぬ。是處に風流の面が御座る。之を被て稽古を致しませう程に。賴うだ者もどうぞ罪人の様に取繕うて下され。立頭〽いやなう〳〵。其の由申したらば。鬼の責める勢に。杖の先が當つたと言うて。殊の外迷惑がります。又太郎冠者は鬼の面を被て稽古なしようと申す。此方も罪人の様に取繕はせられい。アド〽やはり此のまゝ責め居れと言うて下され。立頭〽はてそれでは稽古になりませぬ。平に身拵へをさせられい。アド〽これは何となさる。立頭〽先づこれへ寄らせられい。アド〽此方衆が何のかのと言はせらるるに依つて。圖に乗つて様々の事を吐かし居る。今日は各方に免じて了簡致す。祭過ぎたらばただ置かうと思ふか。立頭〽なぜに其の様に腹を立てさせらるゝ。何事も神事の事ぢや程に了簡させられい。アド嫌と言ふを。無理にワキ座の方へ押しやり。髪さばき。肩衣取り。白鉢巻するうちに。此のシカ〳〵を云ふ。シテも此の内に肩衣取り。つぼ折り。面被るなり。アド〽拵へがよくばこれへ出て責めなれと言うて下され。立頭〽心得ました。やい〳〵太郎冠者。拵へが善くば。是へ出て稽古をせい。シテ〽畏まつて御座る。アド〽あらいかなしやこれ程參り候に。さのみなお責め候ひそ。シテ〽如何に罪人。地獄遠きに非ず。極樂遙かなれ。急げとこそ。責め一段あり。責めのうちに主を怖がる所第一なり。竹馬に乗り。橋懸りへ行く事の段もあり。さて舞臺へ出て打込み。ぐわつし。又杖にて主を打つ。アド腹を立て。散々にたゝく。追込め入る。立衆各挨拶して入る。

口眞似（くちまね）

シテ　太郎冠者
アド　主人
小アド　何某
（入道具）

アド〽これは此の邊りの者で御座る。さる方から樽肴を貰うて御座る。獨り食ぶるもい

かがて御座るに依つて。相手を拵へて。面白う一つたべうと存ずる。まづ太郎冠者を呼出し。申附くる事が御座る。太郎冠者あるか。シテ〽ハア。アド〽居たか。シテ〽お前に。アド〽念なう早かつた。汝呼び出す別の事でない。さる方から樽肴を貰うた。獨りたぶるもいかがぢや。相手を拵へ面白う一つ食べうと思ふが。相手には誰がよからうぞ。シテ〽誰かれと仰せられうより。私になされませ。アド〽汝が様な者が何と相手になるものぢや。急には思出されぬ。汝が才覺をもつて。酒を一つ參るやうで參らいで。又參らぬかと思へばふと一つ面白う參るお方をお供して來い。シテ〽畏まつて御座る。アド〽急いで往て頓て戻れ。シテ〽はあ。アド〽えい。シテ〽はあ。むづかしい事を仰附けられた。酒を一つ參るやうで參らいで。參らぬかと思へばふと一つ參るお方をお供せいと仰せらるゝ。誰がよからうぞ。いや上の町の誰殿を呼うで參らう。まづ急いで參らう。誠に。内に御座ればよいが。内にさへ御座つたならば。御酒好きぢやに依つて。定めてお出でなさるゝで御座らう。いや。何かと云ふうちにこれぢや。まづ案内を乞ふ。ものもう。案内もう。小アド〽表に案内がある。案内とは誰そ。シテ〽私で御座る。小アド〽えい、太郎冠者。何と思うて來た。シテ〽頼うだ者申しまする。さる方から樽肴を貰うて御座る。之を料理して御酒を一こん上げませう程に。お出でなされて下されいと申し越して御座る。小アド〽それは行きたいものなれど、そちの頼うだ者とは。ついに近附きにならぬ。定めて門違ひであらう。シテ〽いや。ついにお近附きにならぬに依つて。此度を幸ひにとあつて。私をおこされて御座る。小アド〽その様な御念の入つた事ならばいてやらうぞ。シテ〽それは忝う御座る、いざお出でなされませ。小アド〽案内者の爲め。わごりよからお行きやれ。シテ〽それならば。お先へ參りませう。さあ〳〵。お出でなされませ。小アド〽心得た。シテ〽さて。お出ての通りを申して御座らば。さぞ悦ばるるで御座らう。小アド〽身共は近附きではなけれども。是非と云ふに依つて行く。そこの首尾を頼むぞ。シテ〽その段はそつともお氣遣ひなされまするな。何かと申すうちにこれで御座る。お出での通りを申しませう。暫くそれにお待ちなされませ。小アド〽心得た。シテ〽まうし頼うだお方。御座りまするか。アド〽いや。太郎冠者が戻つたさうな。シテ〽御座りまするか。御座るか。アド〽戻つたか〳〵。シテ〽御座りまするか。アド〽えい。太郎冠者。シテ〽はあ。アド〽戻つたか。シテ〽唯今歸りました。アド〽やれ〳〵骨折りやつて。誰をお供して來た。シテ〽誰殿をお供致して御座る。アド〽それは上の町のではないか。シテ〽さやうで御座る。アド〽これはいかなこと。あの人を何と思うて連れて來た。シテ〽御酒をよう參るに依つて。お供致して御座る。アド〽まだそのつれを云ふ。あれは大の醉狂人で。一盃飮うでは一寸ぬき。二盃飮うでは二寸ぬき。後にはずわとぬいて醉狂召さるゝ。あのやうな人を呼うで來ると云ふやうな事があるものか。シテ〽それならば追返しませう。アド〽まづ待て。せつかく此處まで連れて來て追返されもせまい。身共がよい様にあしらうて返さう。いはれぬ汝が才覺をやめて、身共が云ふやうにする様にせい。シテ〽さてはお前の眞似をや。アド〽まだぬかしをる。かう通し居れ。シテ〽心得ました。かうお通りなされませ。小アド〽心得た。不案内に御座る。アド〽初對面で御座る。小アド〽今日は太郎冠者を下されて忝う御座る。

アドへ今日はさしたる事も御座らぬに。お出で忝う御座る。太郎冠者。盃を出せ。シテ同断。アドへ盃を出せとはおのれが事ぢや。シテ同断。アドへさては最前身共が云ふ様する様にせいと申したれば。眞似をするさうな。シテ同断。アドへそれはおのれが事ぢや。シテ同断。小アドへあいた〳〵。アドへおのれを何とせう。シテ同断。アドへおゝ痛みませう。こちへ御座れ。小アドへ苦しう御座らぬ。シテアドと同じ事を云ふ。小アドへこれは何とする。アドへえい苦々しい奴ぢや。シテ同断。アドへおのれはものに狂ふか。シテ同断。小アドへあいた〳〵。アドへ痛みませう。こちへ御座れ。小アドへ苦しう御座らぬ。シテアドと同じ事を云ふ。アドへ離しをれ。シテ同断。小アドへ何とし居るぞいやい。アドへ離し居らいでなお。シテ同断。アドへこゝな奴にものを云はせて置けば方途がない。おのれの様な奴は。かうして置いたがよい。小アドへちとさ様になされてもよう御座る。アドへそれにゆるりと御座れ。追附け御料理を申附けませう。小アドへこれへはお構ひなされまするな。シテへこゝな奴に。小アドへなんとするぞ。シテへものを言はせて置けば方途がない。おのれが様な奴は。かうして置いたがよい。それにゆるりと御座れ。追附け御料理を申附けませう。ト云うて。留めて入る

口眞似聟（くちまねむこ）

シテ　聟
アド　舅
小アド　太郎冠者
教人

アドへこの邊りの者で御座る。アド名乗り。太郎冠者を呼出だし。云附け。座に着かく。シテ出て名乗り。シカ〳〵して。案内乞ふ。教人出てセリフ。聟入の作法を教ふるまで。懐中聟に同じ。教へ先づ舅の方へお行きやつたならば。舅が出て逢はるゝであらう。其の後はとかく何事も舅殿のおしやる通り。諸事眞似を召されい。別して詞などは少しも違はぬ様に口眞似をする。之を當世様の口眞似聟と申す。シテへさては舅のおしやる通り。云はるる通り。別して口眞似をしてさへゐれば。仕儀作法がすみまするか。教人へなるほどさうさへ召さるれば。物知りぢやと云うて褒むる事でおりやる。其の上。舅のせらるゝ通りにして。お云ひやる通り口眞似を召さるれば。とかく舅の召さるゝ事。お云ひやる事を用ひて勤むると思うて。舅が満足せらるゝ事でおりやる。シテへさて〳〵これは心安い事で御座る。先づ急いで參つて。今日祝儀をしまひませう。教へ早うお行きやつたならばよからう。シテへ承ればあの方に引出物が。餘多用意せられたと承つて御座る。取つて歸つてお裾分けを致しませう。教へ必らずそれを待つことでおりやる。暇乞如常。シテへなう〳〵嬉しや〳〵。是よりシカ〳〵。案内乞うて盃の出るまで。懐中聟に同じ。アドへ聟殿は兼ねてお隙なしと承つて御座るに。今日の御出で忝う御座る。太郎冠者盃を出せ。小アドへ畏まつて御座る。ト云うて立つ所をつかまへ。シテへ舅殿は兼ねてお隙なしと承つて御座る。太郎冠者盃を出せ。太郎冠者不思議な顔をする。アドへ盃を出せとはおのれが事ぢや。シテへ盃を出せとはおのれが事ぢや。小アド笑ふ。アドへやい〳〵おのれは不躾な奴ぢや。聟はむこ子と云うて。身共が爲には子ではないか。すればおのれが爲めには主ぢや。其の主の云附くる事を返事もしか〳〵せず笑ひ居る。言語道斷憎い奴ぢや。あちへうせい〳〵。扇にてたゝく。行く所をつかまへて。シテ此の通りを云ふ。太郎冠者笑ふ。アドへ總じて聟の恥は舅の恥。舅の恥は聟の恥ぢや。さても〳〵苦々しい事かな。ト云うて。耳を持ち廻る。シテも此の通り云ふ。小アド笑ふ。アドへ所詮おのれに物を云はせて置くに依つてぢや。おのれが様な

なはかうし置いたがよい。それにゆるりと御座れ。おつつけお料理を申附けませう。（小アド起上がる所を。シテ舅の運びたる菜を一人にて喰ふなり。）

杭か人か

シテ　太郎冠者
アド　主人
（入道具）

アドへ此の邊りの者で御座る。某一人召使ふ太郎冠者が。身共が留守になれば。片時も内に居ぬと申す。されども人の申事なれば折檻も致されぬ。今晩はたばかつて見屆けうと存ずる。（呼出す。出る。常の如し。）アドへ汝呼出す別の事でない。此の中方々の御參會に夥しい事ではないか。シテへ御意なさるゝ通り打續きました事で御座る。アドへ今宵も近所へ振舞に行かうと思ふ。留守をせい。シテへ畏まつて御座る。アドへさて改めて言ふには及ばねど、奧は皆女童の事なり。すはと言へばそち一人ぢや。身共が留守に外へなど出たらば。きつと言附ける。隨分大事にせい。シテへこれは御意とも覺えませぬ。お留守に何しに外へ出ませう。其の段はそつともお氣遣ひなされますな。

アドへそれならば行くぞ。シテへやがてお歸りなされませ。アドへ心得た。シテへ出られたに。扨々此の中はあなたこなたのお茶の湯お振舞お續く事ぢや。あれ程内に御座つたならば。身共は骨も續く事ではない。總じて。高いも低いも宮仕へ程辛勞なものは御座らぬさりながら。非番の時は小宿へ參つて休息をなし。又お留守の内はそつと外へ出て御酒などを食べ。相應の心樂を致してこそ勤まつたものぢや。さもなうて奉公がなりさうなものではない。扨また頼うだ人のいつに變つて。お留守の事をきつと言付けられた。但しいつもお留守に身共が外へ出る事を誰そ申上げたぢやまで。何とやら氣味の惡い言ひ樣であつた。とかく今宵は外へ出られまい。是非に及ばぬ。お留守をするぢやまで。（くつろぐ。）アドへされば こそ。最前から立聞をして居れば。人の言ふに少しも違はぬ。扨々憎いやつぢやさりながら。あの體ならば定めて今宵は出ぬであらう。されども屋敷の邊りを離れずに。今宵の樣子を見屆けうと存ずる。シテへ誠に。人は惡う癖を附けうものではない。お留守に終に内に寢た事が無い。今宵ばかり内にゐれば。足がうぢよ／＼として。とかく心が打着かぬ。いちやが

所爰に近い。ちと往て來うか。いや／＼僅か一夜の事を得堪へぬと言ふは卑怯な事ぢや。お留守ぢやと思ふに依つて惡い。御内に御座ると思へばすむ事ぢや。先づ下に居よう。ざつとよい。かうさへ思へば堪へらるゝものな。よしない物思ひをした。まて今宵は頼うだ人はどれへお出でなされたであらうぞ。定めて今時分は御酒最中で。謠ひつ舞ひつ。さぞ面白い事であらうさりながら。每夜の事ぢや程に。其の樣にも思召すまい。結句身共等がたま／＼小宿へ參つての樂しみは七賢にもまさつた事ぢや。あゝまたよしない事を思出して物淋しうなつた。はて氣の毒な事ぢや。何としようぞ。此樣にして居ようよりは寢たがましかぢや。先づ横にならう。えい／＼。扨も／＼。樂やの／＼。世の中に寢る程樂は無きものを。知らぬうつけが起きて働く。（笑ふ。）扨も／＼面白い。ちと謠はう。（三井寺のクセ）枕勝手の惡いは寢られぬものぢや。枕を變へう。（後で謠ふ。）物は思ふ樣には成らぬものぢや。何ぞ御用を仰附けられて、善惡起きて居ればならぬと言ふ時はねむたし。今また一寢入りせうと思へば。目が冴えて寢られぬ。何としたものであらう。いや氣晴らしにちと外へ出て來

たらばよからう。いや思出した。きつと留守なさいと仰附けられたに就いて。幸ひ用心時ぢや。屋敷の外を夜廻り致さう。さうぢや。先づ棒を取つて參らう。これ〳〵はあ外へ出たれば氣が晴るゝ。扨も〳〵心が晴れりとした。此の體を若し人が見附けて。賴うだお方へ申上げたりとも言譯が有ると言ふものぢや。や。隣りの窓の内に夥しい火の影が見ゆる。あれは誰ぞ起きて居るか。夜更けては餘りな事ぢや。是は咎めう。やあ〳〵そなたの窓の内に夥しい火の影が見えまする。用心時で御座る。誰ぞ起きて御座るか。やほい。これはいかな事。物を言はず火を消した。扨は寝て居たものであらう。扨も〳〵不用心な事ぢや。さてまた今宵の暗さと言ふ事は。雨が近いやら星が一つも無い。正眞の闇の夜と言ふは今宵の事ぢや。某はふと氣晴らしに出たが。此の樣な事を思うては賴うだお方がお內に御座つても。折々夜廻りを致さう。其の上此の邊は常に物淋しいに依つて。折節は徒ら者が徘徊を致す。あはれ今宵も何者ぞ居らいで。此の棒で物をも言はず打つて〳〵。生けては歸すまいに。いやまた人に依つては。闇の夜は化物が出うと思うて。歩き憎いは。又雷が嫌ひぢやの。光り物を見れば目がまふなどと言ふ臆病者が多いが。身共は終にこはいと思うた事が無い。それ故友達どもが申すは。尤も男に生まれて健氣なはよいが。若し人と喧嘩など致さうかと思うて。案じると言うて。意見をするに依つて。隨分たしなめども。ただ心が橫着で氣の毒ぢや。あはれ今宵も何ぞ出よかし。此の棒で打殺してのけうものを。なう悲しや。何やらあそこに有るぞよ。あれは先づ何であらう。人ではないか。人ならば聲を掛けるか。身共を見たらば逃げさうなものぢや。默つて居るは合點のゆかぬ事ぢや。闇の夜はむさとした物を色々に見ゆるものぢや。胸はだく〳〵として胴は震ふ。あれは何であらう。能見たれば御內の女が洗物して居たが。それをあそこへ干して置いたか。夜まで干して置かう樣も無し。又あの邊りには古木の杭が有つたと思ふが。其の杭か。何を言うても暗いに依つて見ゆる事ではない。透かして見れば人の樣にも有り。此の上は松明篝（かゞり）を出させ吟味せうか。いや〳〵。人なればよいが。若しむさとした物に大勢集めるも外聞の悪い事ぢや。さうぢや。男の心は太いが上にも太かれぢや。命を捨てると思うて。此の棒で突いて見う。あゝ氣味の悪い事でもある。人か杭か。人か杭か。（ト言うて。棒でさはる。）アド〽杭々。シテ〽笑ふ。杭々。さればこそ杭であつた。其の筈ぢや。人ならば最前から默つては居ぬ筈ぢや。先づ安堵した。よい肝を潰した。あの樣な物はまた重ねても見違へれば悪い。此の棒で打込んで置くか。又打折つてなりとも仕舞はう。アド〽い、そこなやつ。扨も〳〵うつけたやつかな。シテ〽賴うだ人か。アド〽まだぬかしをる。己れ主の聲を聞忘れたか。シテ〽でも聞へば杭々と仰せらるゝに依つて。杭かと存じました。アド〽己れ古木の杭が物を言ふものか。其の上立聞きして居れば。いつも留守には外へ出て内を明けをる。重々憎いやつぢや。シテ〽用心時ぢやに依つて夜廻りを致して御座る。アド〽まだ其のれをぬかしをる。臆病者が何の役に立つものぢや。己れたゞ置かうと思ふか。シテ〽御許されませ〳〵。アド〽憎いやつの。やるまいぞ〳〵。（ト言うて。追込め入るなり。）

首引（くびひき）

シテ　鬼

アド　鎮西八郎
乙　鬼の娘
立衆　小鬼
（入道具）

アド〽鎮西八郎爲朝で御座る。某さる仔細あつて西國に罷在り。此度都へ上ることで御座る。シカ〳〵。誠に。某幼少より逞しう生れついて。品々において手柄擧げて數へられず。然れども未だ物具を脱ぎ。心に油斷は御座ない。何かといふうちに播磨の印南野ぢや。總じて此の所は暮に及うでは人の行通ひもない所ぢや。某天か下に於ては誰恐ろしいとも存ぜぬに依つて。晝夜難所を選ばず歩くことで御座る。シテ〽人臭い〳〵。此の所は何者ぞ參つたさうな。俄に人臭うなつた。さればこそ取つて噛まう〳〵。アド〽あゝ眞平お宥されませ。シテ〽さて〳〵。己れは横着者ぢや。此の所は七つ下ると人の行通ひもない所ぢや。獨り通るは先づ何者ぢや。アド〽これは旅人で御座る。左樣のことを存ぜいで通りました。とかく御宥されませ。シテ〽いや知らぬといふことはあるまい。己れが根性が横着なに依つて通つたものであらう。とかく宥すことは成らぬ。追付け取つて噛むほどに左樣心得い。さてそちを見て思ひ出したことがある。某祕藏の乙姫を持つた。これに未だ人の食初をさせぬ。幸ひ己れが樣な血の多い逞しい男な食はせ度い。とてものことに身共に噛まれうか。姫に喰はれぬか。アド〽とても助けさせられまいならば。お姫樣に喰はれませう。シテ〽己れも見かけよりは心に少し優しい所もあるさうな。それならば先づ姫を呼出さう。やい〳〵。姫來い〳〵。乙姫〽父樣。何で御座る。シテ〽汝は父が祕藏子ぢやに依つて。常々可愛がる。されども未だ人の喰物をさせぬ。幸ひ今日はよい若い者が來て居る。あれへ行て喰はい〳〵。乙〽それでも男の傍へ寄ることは難しいもの。シテ〽大事ない。早う行けい。乙〽どれ〳〵。何處に居るぞ。シテ〽あれ〳〵。あそこにゐる男ぢや。乙〽あれはよい男ぢや。おいしからうのう。シテ〽甘さうなに依つて。父が喰はうと思へども。姫に喰初をさせうといふことぢや。早う行て喰はい。乙〽それならば喰はう。（ト云うて。側へ寄る。アド扇にて叩く。）乙〽あいた〳〵。シテ〽何とした。乙〽あれが叩いた〳〵。シテ〽泣かいぞ〳〵。父が叱つてやらう。こらへい〳〵。やい〳〵。己れは憎い奴の。祕藏の娘をなぜ打擲した。アド〽いや、今のは私の腕に行當らせられたさうに御座る。シテ〽構へて〳〵聊爾なしたらば。己れを俺が毟り喰ひにする程にさう心得い。さあ〳〵早う行て喰はい。乙〽妾はもはや喰ふことは嫌ぢや。シテ〽嫌といふことがあるものか。思ひ切つて喰はしめ。乙〽それならば頭から喰うても大事ないか。シテ〽どれからなりとも好きな所から喰はい。乙〽喰うぞや（ト云うて。脇見々々行く所をまた扇にて叩く。）乙〽あいた〳〵。また叩いた。（と云うて泣く。）シテ〽さても〳〵腹の立つことかな。やい〳〵。言語道斷憎い奴ぢや。この上は某が一口に取つて噛まう。アド〽先づ御待ちなされ。ちと申上げ度いことが御座る。昔より鬼神に横道なしと申す程に。故なう服なされずとも。何ぞ勝負になされて。負けたらば如何やうにも服なされませ。シテ〽これは尤もぢや。さして科もなけれども。暮に及うで人の通らぬ所を通るに依つてのことぢや。さて勝負は某とするか姫とするか。アド〽それはお姫の喰初に上りますることで御座る。お姫樣を勝負の相手に致しませう。シテ〽勝負には何をするぞ。アド〽腕押しを致しませう。シテ〽これは一段とよからう。これ姫。あれと勝負に腕押しをせい。乙〽腕押

しは嫌ぢや。おれは腹押しならせう。シテ〽さもしい事ないはぬものぢや。急いで腕押しをさしめ。さあ〱これへ寄れ。二人押す。アド乙の手を強く押付ける。乙〽あいた〱。きつう擦りつけ居るわいの。シテ〽さても〱憎い奴な。やい〱。何故に姫を傷める。アド〽傷めは致しませぬ。美しいお手へ私の荒くもしい手が觸りましたに依つて。あのやうに仰せられまする。とかく今度は脛押しを致しませう。シテ〽これは尤もぢや。これ〱姫。さあ〱あれへ出て脛押しをさしめ。二人また脛押しする。乙また負けて退く。乙〽あいた〱。シテ〽何とした〱。乙〽太い足を押込むに依つて。どうにも成らぬ。シテ〽可哀さうな事をし居る。叱つてやらう。泣かしむな。やい〱。最前から姫をいろ〱痛め居る。なぜ尋常に勝負をせぬ。アド〽とかく柔かなお身へ。私の不束な手足が觸りまするに依つて。御機嫌を損じまする。所詮此度は首引を致しませう。シテ〽これは尤もぢや。やい〱姫。美しい生付きぢやに依つて。あいつが荒くもしい手足が強う當る。首引をせうといふ程に。早う行て首引なさしめ。乙〽いや。男を喰はいでも大事ない。首引をすることは嫌ぢや。シテ〽さて〱卑怯千萬な。父が子に生れて。人を喰うことを嫌といふことがあるものか。父がいふ事を嫌というたらば。

つめ〱するぞへ。乙〽それでも恐いもの。ト云うて泣く。シテ〽はて蟲が出る。涙を流すない。やい〱。さて〱涙脆い子かな。こりや〱いかなものぢや。あれへ行き。父が後から捉へて居てやらうぞ。ト云うて。布を持出して。二人の首へかけさせる。シテ〽さあ〱。尋常に首引せい。アド〽畏まつて御座る。エイヤと云うて引く。乙負けになる。アド扇にてしばく。シテ後より手をかける。アドシテ退きて。乙の負になる時。ひたもの初めの樣にアドシテを打つ。シテ〽姫が首引に負けさうな。精を出して引け〱。立衆〽心得た。えいとう〱。シテ〽拍子にかゝつて引け〱。えいやらさ〱〱。立衆〽心得た。えい〱〱。えいやらさ〱〱。シテ〽姫が方が弱いは。立衆〽えいやらさ〱〱。舞臺を一遍廻り。アド橋懸へ行く。小鬼共舞臺の眞中程太鼓座の邊へ來る時。繩を外し。アドは逃げて入る。小鬼共各々將棊倒にこける。後より皆々やるまいぞ〱と云うて。追込むなり。

鞍馬參（くらままゐり）

シテ　太郎冠者
アド　主人

アド〽此の邊りの者で御座る。今日は初寅で御座る。いつも初寅には鞍馬へ參る。今日も參らうと存ずる。先づ太郎冠者を呼出し申付ける事が有る。ト言うて。呼出す。出る。常の如し。アド〽汝呼出す別の事でない。何と今日は初寅ではないか。

シテ〽御意なさるゝ通り今日は初寅で御座る。アド〽いつも初寅には鞍馬へ參る。當年も參る程にさう心得い。シテ〽畏まつて御座る。アド〽道具を持てと言へ。シテ〽畏まつて御座る。やい〳〵賴うだお方が鞍馬へお參詣なさるゝ。道具を持てと仰せらるゝ。ジヤア。其由申上げう。申上げまする。アド〽何事ぢや。シテ〽道具とは何の事ぢやと申しまする。アド〽身が内に有りながら道具を知らぬか。弓なりとも鑓なりとも持てと言へ。シテ〽畏まつて御座る。やい〳〵、御内に有りながら道具を知らぬか。弓なりとも鑓なりとも持てと仰せらるゝ。ジヤア。是も尤もぢや。申上げまする。弓は御座れども矢が御座らぬ。鑓は人の外を持つて通るは見ましたが。御内では終に見ぬと申しまする。アド〽シイ。汝は物を聲高(こはだか)に言ふ。天下治まり目出度い御代に。長道具は入らぬ物ぢや。汝一人供をせい。シテ〽畏まつて御座る。アド〽追付け行かう。さあ〳〵來い〳〵。シテ〽はあ。アド〽さて何と思ふぞ。毎年〳〵相變らず鞍馬へ參詣するは。目出度い事ではないか。シテ〽御意なさるゝ通り。御供の我等如き迄足手息災で詣でまするは。ひとへに多門天の御蔭で御座る。アド〽それよい〳〵。何かと言ふ内にはや參り著いた。シテ〽誠にお參り著きなされて御座る。アド〽先づお前へ向はう。シテ〽一段とよう御座りませう。アド〽しやぐわん〳〵。シテも打つ。主。シイと言うて。扇を叩く。アド〽そちも拜まんか。シテ〽モよう御座る。アド〽いつも宿坊へ參れども。當年はさる仔細有つて宿坊へ寄らぬ。身共は是に通夜なする程に。汝はそれに起きて居て。東が白うだらば起せ。シテ〽畏まつて御座る。是はいかな事。内で使ふが使ひ足らいで。はる〳〵の所を連れて來て。身共に起きて居よと言はるゝ。是が何と起きて居らるゝ物ぢや。致し樣が有る。申し〳〵。アド〽何事ぢや。シテ〽宿坊へお寄りなされませぬか。アド〽成程宿坊へは寄らぬ。東が白うだら起せ。シテ〽畏まつて御座る。笑ふ。扨々面白い事ぢや。もそつと起してなぶらう。申し〳〵。アド〽姦しい。何事ぢや。シテ〽宿坊へお寄りなされずば。お寄りなされぬと申して。私が寄つて參りませうか。アド〽汝がやる程なれば身共が行く。最前言うたを何と聞いた。さる仔細あつて宿坊へは寄らぬと言ふに。ハアさう言ふも。臥せり度いと言ふ事であらう。汝もそれにまどろうで。東が白うだら起せ。シテ〽畏まつて御座る。笑ふ。是を聞かう爲ばかりぢや。さらば身共もまどろも。ト言うて眠る。ハアあら有難や。暫く睡眠の内に多門天の御福を下された。扨々有難い事ぢや。はや東が白うだ。賴うだ人を起こさう。申し〳〵。アド〽何事ぢや。シテ〽東が白みました。アド〽誠に東が白うだ。追付け下向せう。さあ〳〵來い〳〵。シテ〽畏まつて御座る。アド〽何と思ふ。毎年とは言ひながら。當年も大參りではなかつたか。シテ〽御意なさるゝ通り。大籠りで御座りました。アド〽さて夜半の頃でもあらうか。汝が聲でわつぱと言うたは何であつたか。シテ〽それは私では御座りませぬ。誰ぞ餘の人の聲とお聞違へなされたものでがな御座らう。アド〽幼少より召使ふ汝が聲と。餘人の聲と聞違ふ事ではない。隱さずとも有りやうに言へ。シテ〽扨はお聞きなされたか誠で御座るか。アド〽いかにも聞いた。シテ〽さやうならば申しませう。夜半頃でも御座らうか。八十餘りの老僧が。紅の衣に紅の袈裟。皆水晶の珠數をつまぐり。鳩の杖に縋らせられて。汝年月主の供をして歩みを運ぶ事神妙に思召す。さうあれば。とう下されしを何かと御延引あつた。今こそ取らするとあつて。福あり

のみを下されて御座る。アド〽それは汝にか。シテ〽中々。アド〽暫くそれに待て。シテ〽畏まつて御座る。アド〽是はいかな事、身共へ下されさうな御福な。太郎冠者にお取らしやつたは合點のいかぬ事ぢや。何と致さうぞ。いや致し様が有る。ヤイ〳〵太郎冠者。こなたにも目出度い事が有る。シテ〽それはいかやうの事で御座る。アド〽様子は似た様な事ぢや。夜半の頃でもあらうか、八十餘りの老僧が。香の衣に香の袈裟、皆水晶の珠數をつまぐり。鳩の杖に縋らせられて、汝年月歩みを運ぶ事神妙に思召す。とう下されうが何かとおそなはつた。今こそ取らするとあつて　福ありのみ下された。シテ〽それは主従共に目出度い事で御座る。アド〽即ち汝に持たせて置いた、路次で受取れとのお事ぢや。急いでこなたへ渡せ。シテ〽いやお前へ下さるゝお福ならば。直に下されうもので御座る。是は私へ下された御福ぢやに依つて、進ずる事はなりませぬ。アド〽でも多門天の仰せられた様にせい。シテ〽どう御座つてもなりませぬ。アド〽扨はおのれはしかと渡さぬか。シテ〽先づお待ちなされませ。アド〽何と待てとは。シテ〽重ねて多門天の仰せられた事をお聞きなされましたか。アド〽いや何も聞かなんだ。シテ〽若し人に福を渡さば。福渡しと言ふ事なして渡せと仰せられて御座る。是はお聞きなされませう。アド〽其様な事は曾て聞かなんだ。してそれはむつかしい事か。シテ〽別にむつかしい事でも御座らぬ。鞍馬の大悲多門天の御福を、主殿に參らせたりや〳〵と申せば、たばつたりやと仰せられて。受取らせらるゝ事で御座る。アド〽それは心安い事ぢや。受取る程に急いで渡せ。シテ〽畏まつて御座る。ト言うて○鞍馬の大悲を言ふ。アド〽して是にはいつ頃言ふ事ぢや。シテ〽おひて明後日(あさつて)あたりがよう御座りませう。アド〽さう言ふは早いと言ふ事か。シテ〽遅いとも早いとも申された事では御座らぬ。アド〽言葉の下から受取らう程に急いで渡せ。シテ〽畏まつて御座る。ト言うて○又前の如く言ふ。アド〽たばつた〳〵。たばつた〳〵。シテ〽アヽ慈しや〳〵。それは餘り早う御座る。最前の遅いと。只今の早いとの間な。左右小拍子に掛かつて受取らせられねばなりませぬ。アド〽左右小拍子には身共が得物ぢや。受取らう程に急いで渡せ。シテ〽畏まつて御座る。鞍馬の大悲多門天の。御福を主殿に參らせたりや〳〵。アド〽たばつたりや〳〵と。シテ〽多門天の御福を。主殿に參らせたりや參らせた。アド〽たばつたりや〳〵。シテ〽御福を主殿に參らせたりや〳〵。アド〽たばつたりや〳〵。シテ〽參らせた。アド〽たばつた。シテ〽參らせた。アド〽たばつた。シテ〽申し主殿。目出度い事が御座る。アド〽それは何事ぢや。シテ〽只今の御福に。こなたの御藏へとうと納めて御座る。アド〽それこそ目出たけれ。いて休め。アドつめる。常の如し。

鞍馬聟(くらまむこ)

シテ　聟
アド　舅
小アド　太郎冠者
女　妻
京の聟

アド〽この邊りの者で御座る。某娘を兩人持つて御座る。姉は鞍馬へ四五年以前嫁入させて御座る。妹は當春近所へ縁付致させて御座る。近所ゆゑ聟も度々見舞うて呉れらるゝ。鞍馬の聟は殊の外渡世に精を出されて隙惜しみ故。ついに身共が方へ參られぬが、今日聟

りませう。アドへ太郎冠者。通らせられいと申せ。小アドへ畏まつて御座る。申し〳〵。お前は鞍馬の聟殿で御座るか。シテへ先つその樣な者ぢや。小アドへかうお通りなされませ。シテへ心得た。不案内に御座る。アドへ初對面で御座る。シテへ早々參る筈な何かと延引致いて御座る。アドへ夥しいおもたせで過分に御座る。シテへ何かから何事も心安づくと申すお約束故。心ばかりで御座る。アドへ供の衆が大勢あらう。皆表へ通して休息せらる樣にしたらよからう。シテへいや〳〵大勢供な連れましたれども。ちと忘れた物があつて取りに遣しました。アドへ大勢のお供を皆お歸しなされたか。シテへ片身恨のないやうに皆歸して御座る。アドへおごう。そなたの聟が來て居らるゝ。聟殿も退屈さにせう。女へ一段とよう御座りませう。アドへ太郎冠者。お一家の聟殿に出させられいといへ。小アドへ畏まつて御座る。申し〳〵。あれへお出でなされませ。京へ心得た。是は鞍馬の聟殿ようお出でなされた。シテ見て逃げる。シテへ南無三寶。これはもつけな所へ出くはした。何としたものであらう。アドへおごう。聟殿は何やら遠しい體で立たせられた。太郎冠者な見せに遣らう。女へ妾が見て參りませう。なう〳〵。何とせられた。シテへそなたは知るまい。今出た姨聟は身共に殊のほか差支がある。女へそれは何事で御座る。シテへいつぞやあの人は身共の所へ材木な買ひにわせた。目ではつてともてなし。材木を賣附けて置いた。また外よりも其の木な望まれて。直段も高直にあつた程に。こちらへ遣はして。あの人の方へは少し細い木な渡したれば。約束の木とは違ふというて。散々惡口せられた。身共もむけりと腹が立つた。氣に入らずば賣らぬまでぢやというて，餘程喧嘩をしたに依つて。面目がない。よい樣に云うてたもれ。身共は歸るぞ。女へこれはいかなこと。それはそなたの餘り欲が深いに依つてぢや。というて一門に違ひはない。一生出合はぬ事もなるまい。幸ひ姨も參つて居るに依て。妾が言譯をしませう。知らぬ顏で出させられい。シテへでも面があはしにくい。いや思ひ出した。顏を蟲に刺されて痛むに依つて。藥をつけに立つたと言うて置かしめ。取繕うて出うぞ。女へどうしてなりとも早く出させられい。シテへ心得た。仕様ロ傳。女へ見ましたれば。顏な蟲が刺いて痛むというて。藥なつけに立たれたさうに御座る。追附けこれへ出られまする。アドへそれはあぶない事であつた。シテへ京の聟殿。初對面で御座る。京へ今日は目出度う御座る。アドへ唯今は何とせられた。シテへ唯今顏がしく〳〵と致いて御座るに依つて。驚いて次へ立ちまして見ますれば。大きな山蜂が一疋とまつて居りました。頓てその蜂を拂落して。後へ藥を付けまして。見苦しう御座らう。暫く御免なさりませ。アドへそれは苦しう御座らぬ。太郎冠者。盃を出せ。小アドへ畏まつて御座る。お盃持ちました。アドへ何とそれへ參らぬか。シテへ先づ參つて下され。アドへ食べて進ぜう。太郎冠者注げ。小アドへ畏まつて御座る。アドへさて之をそれへ進じませう。シテへ頂きませう。常の如し。幾久しう目出度う御座る。アドへ其の通りで御座る。シテへ辛し〳〵。女シイ〳〵といふ。芙を避もぞにするやうな酒ぢや。アドへ辛うて惡くば甘いを進じませうか。シテへいや。私は此の辛いが好きで御座る。も一つ食べませう。アドへそれは嬉う御座る。シテへ太郎冠者。一つ注いで呉れい。小アドへ畏まつて御座る。アドへさて〳〵聟殿は機嫌よう酒を參つて悦ぶことぢや。目出度う舞はせられい。京へ心得ました。

小謡。シテあくびする。女あせる。シテ〽之を舅殿へ進じませう。京〽いや。お近附の爲め。お聞て私が頂きませう。アド〽それはよう御座らう。シテ〽それならば。慮外ながら進じませう。京〽頂きませう。シテ〽食べてよごして御座る。京〽目出度う御座る。シテ〽舅殿は果報の人で御座る。兩人の娘達は仕附けさせらるゝ。頓て大勢の孫を見させられう。よいお樂しみで御座る。アド〽おごうがそれへ參つて餘程になりまするが。まだ孫の沙汰も御座らぬ。シテ〽いや。このうちは頻りに青梅を好うで食べられまする。たゞごとでは御座りますまい。女〽何をわけもないことをいはせらるゝ。アド〽それは耳寄りで御座る。京〽扨これおたげませう。シテ〽これへ下されい。京〽食べよごして御座る。シテ〽目出度う御座る。アド〽おいちやの聟殿。目出度う一さし舞はせられい。京〽心得ました。シテ仕なう。いろ／＼口付に。シテ〽面白さうなことで御座る。延引になりました。舅殿。それへ進じませう。アド〽是へ下され。シテ〽慮外で御座る。アド〽一つ請持ちました。聟殿。何ぞ肴が所望で御座る。シテ〽肴は何も御座らぬが。イヤ御座る／＼。苞取りに入る。これ／＼。是は鞍馬の名物。木の芽漬。京の聟殿へは山椒の皮。名物で御座る。何とよい肴で御座らうが。アド〽いや。此の事では御座らぬ。肴に何ぞ立姿が見度う御座る。シテ〽立姿。案じて。成程。仕りませう。女ども／＼。女〽何で御座る。シテ〽さあ手傳うてたもれ。女〽何をさせらるゝ。シテ〽立姿を所望ぢや。好物の相撲をとる。女〽わけもない事をいはしやる。置かせられい。シテ〽そなたが何を知つて。早う脱がせい。ヤアお相手一番まゐらう。アド〽これは／＼。聟殿は相撲が好きさうな。さて／＼氣さくな人ぢや。いや。もうお肴には及ばぬ。もとの座敷へ直らせられい。シテ〽、舅殿。それは御卑怯で御座る。鞍馬に於ては誰彼と選まれた葉ぢや。相手には構はぬ。さあ／＼出させられい。女〽人を取つて投げて何の手柄になりまする。平に置かせられい。シテ〽己れが差し出ることでない。すつ込うで居よ。京〽それならば身共が相手になりませう。シテ〽いや／＼。あの人は相手に不足な。京〽太郎冠者。行司なせい。小アド〽畏まつて御座る。シテ〽待たしめ。後に取りませう。アド〽さてもあぶない。怪我はないか。おごう。お見やれ。女〽これぢやに依つて置かせられといふに。痛みもしませぬか。振廻しつけ木持出す。アド〽さて／＼あぶない事でおりやつた。なといふうちに。シテ〽身共が力を見て置け。アド〽あぶない／＼。先づ待たせられい。女〽えゝ恥知らず。これは悲しや。あぶない／＼。早う逃げさせられい／＼。舅をかこひ入る。シテ〽せめて己れなりとも。ただは置くまい。小アド〽私で御座りまする。シテ〽私で御座る。いや／＼。小アド〽あぶなう御座る。御宥されませ／＼。太郎冠者を追廻し。追込め入るなり。仕方いろ／＼仕様あり。留て口傳。

蜘盗人（くもぬすびと）

シテ　連歌師
アド　主人
小アド　太郎冠者
立衆　客人

（入道具）

アド〽この邊りの者で御座る。某初心講を結んで。今晩連歌の會の當にあたつて御座る。表は騒がしう御座る。奥の亭へおいでなさるゝ様にと。約束致したに依つて。太郎冠者を見張りに付けておいた。日も暮れたに依つて。各お出でなされうと存ずる。太郎冠者が案内（あない）次第。亭の入口へ出向かうと存ずる。

小アド〽やれ〳〵。早や各表へお出でぢやと云ふか。急いで申上げう。申上げまする。アド〽何事ぢや。小アド〽お客様方が早やお出でて御座る　アド〽心得た。身共は表へ向かはう。云付けて置いた通り。皆用意が調うたか。小アド〽悉く調ひまして御座る。アド〽其の外萬事氣をつけい。　小アド〽畏まつて御座る。シテ〽此の邊りに住居致す者で御座る。　某連歌に好いて。常々口ずさむ事で御座るさりながら。勝手不自由に御座るに依つて。好物の連歌の會なども。自他共に懈怠致す。今晩は誰殿方に連歌の會を致さるゝと承つて御座る。前々身上ともかうも致いた時分は。推參致し出會うて御座れども。近年貧しい身柄をおめて。會にも罷り出でねば。おのづから疎遠に御座る。今晩は何卒坪の內へ忍び入つて。會の様子をよそながら立聞き致さうと存ずる。シカ〳〵。誠に。家貧にしては親知少なく。身賤しうしては古今疎しと申す。身上不如意に御座れば。何方へも疎々しう御座る。何かと云ふうちにこれぢや。此の中作り事をせられたと聞いたが。さても〳〵結構なことぢや。門の柱長屋の様子。さぞ式臺なども美をつくされたものであらう。勝手ともかうもする人は。長生殿不老門。目の前に現るゝ。さて〳〵羨しい事ぢや。まづ裏へ廻らう。作り事の序に裏もしまりが出來たかぢや迄。これ〳〵裏は前の如く竹垣ぢや。いざこの竹垣を破らう。か様の時の爲めと存じて。鋸を用意致いた。まづよし。垣を破らう。ずか〳〵〳〵。めり〳〵ぐさり。さても〳〵。夥しう明いたことかな。誰も聞附ければよいが。小アド〽裏の方が崩るゝ様な音が聞えた。其の上足音がするやうな。合點のゆかぬ事ぢや。シテ〽南無三寶。聞き付けたさうな。小アド〽わあ。裏の垣が破つてある。さては盗人が這入つた。まうし〳〵。お庭の方へ盗人が這入つて御座る。ちやつとおいでなされませ。アド〽何ぢや。盗人が這入つたと云ふか。大勢か〳〵。小アド〽人數は知れませぬ。早うおいでなされませ。アド〽何れも出會うて下され。出會へ〳〵。立衆〽何。盗人。此の口は私共が防ぎませう。表の座敷庭の方を固めさせられい。アド〽松明を。出會へ〳〵。シテ〽これは苦々しい事ぢや。先づ森の茂みへ影を隠さう。小アド〽此の森のしげみに影が見えました。アド〽急いで森の中を探せ。小アド〽畏まつて御座る。さればこそ。こゝに居りまする。アド〽弓矢を持つて來い。立〽其のやうな事には及びませぬ。引出して大勢寄つて。手捕らまへにしませう。シテ〽まづ待たせられい。盗人では御座らぬ。聊爾をなさるな。アド〽夜中に垣を破つて。屋敷の內へ忍び入つて。盗人でないとは。シテ〽全く盗人では御座らぬ。申譯を致したけれども。大きな蜘の巣にかゝりまして。え動きませぬ。暫く御待ちなされて下されませ。アド〽見付けられた當惑の餘り。うろたへた事を申しまする。人が蜘の巣にかかつて。動かれぬと申す。各笑ふ。シテ〽古き言の葉に。蜘の家に。あれたる駒は繋ぐとも。ふた道かくる妻なたのみそ。斯様にある時は。馬さへ蜘の巣にかゝるならば。人間ぢやと申してかゝるまいものでも御座らぬ。アド〽何れも聞かせられたか。あの様な古歌を申せば。心のある者と見えて御座る。立〽いかさま。いたづら者で盗人になつたでは御座るまい。とくと様子をお尋ねなされい。アド〽いや〳〵。唯今の様子は實にも心ある者と見えた。何として夜中此の內へ盗みには這入つたぞ。シテ〽さればの事で御座る。私は殊の外連歌好きで御座れども。身上不如意に御座れば。自他共に連歌の會にも出勤致しませぬ。

其の上にこの小袖。旅は道づれ世は情。思へば蜘の巣にかゝる褒美な貴い恩徳に。富貴榮えな納りつゝ。謠ひ納めて歸りけり。お暇申しまする。アド〽ようおりやつた。シテ〽はあ。（ト言つて入る）

栗燒（くりやき）

シテ　太郎冠者
アド　主人
（入道具）

アド〽この邊りの者で御座る。太郎冠者を呼出し。（トいふ一つ時出す。出る。常の如し。）推參（すゐ）をさする物が御座る。汝呼出す別の事でない。汝に推をさする物が有る。暫くそれに待て。シテ〽畏まつて御座る。アド〽やい〳〵。此の内に有る物を何で有らうと思ふぞ。シテ〽されば何で御座らうぞ。アド〽何で有らうぞ。シテ〽御菓子のたぐひでは御座りませぬか。アド〽先づ其の様な物ぢや。シテ〽御菓子のたぐひならば。源平餅か花煎餅などで御座りませぬか。アド〽いや。シテ〽但し饅頭では御座りませぬか。アド〽いやこれぢや。シテ〽はあ栗で御座るか。アド〽なか〳〵。シテ〽扨々これは見事な栗ぢや。これはどこ許から參りました。アド〽丹波の伯父者人から下された。シテ〽丹波は栗の名物と承つては御座る。此の様な見事な栗は終に見た事は御座りませぬ。アド〽さりながら。是處に不審な事が有る。五十ならば五十。乃至百くれられさうなものを。四十くれられたはどうした事であらう。シテ〽どうした事で御座るぞ。アド〽どうした事であらう。シテ〽はあ。そりや物で御座る。丹波の伯父御様と御前と。始終末代仰せ合はされうとあつて。四十遣されたもので御座らう。アド〽扨々汝は目出度う言ひ居つた。之な賞翫に一族たちを申入れうと思ふが。何とあらう。シテ〽御意も無くは申し上げうと存じて御座る。一段と良う御座らう。アド〽さて是は水栗にしたものであらうか。但し燒栗にしたがよからうか。シテ〽水栗も良う御座らうが。いや。是はただ燒栗がよう御座らう。アド〽身共もさう思ふさりながら。客は大勢。栗は僅か四十ならでは無し。是では行屆くまいが。何としたものであらう。シテ〽されば何が良う御座らうぞ。アド〽何としたものであらう。シテ〽二つや三つに割つて敷きませう。アド〽いや此のまゝ丸い所が賞翫ぢや。シテ〽はあ。丸い所が御賞翫で御座るか。アド〽なか〳〵。シテ〽それならばなほ良い仕様が御座る。アド〽何とする。シテ〽まんまと栗を燒きすまして。澁皮なども去りまして。摺鉢へ入れて摺り碎き。人數に團して敷きませう。アド〽さて〳〵汝はむさとした事を言ふ者ぢや。其のまゝ大きな丸い所が御賞翫ぢや。シテ〽はあ。其の儘大きな丸い所が御賞翫で御座るか。アド〽なか〳〵。シテ〽さ様ならば是非に及びませぬ。御くわしは私が燒きませうに依つて。上座に御座るお方へは悉く栗を進ぜませう。又末座に御座るお方へは。敷いたり敷かなんだり。他（よ）のお菓子なりとも取替へて敷きませう。アド〽せめてさうなりともせずばなるまい。乃ち汝に言付くる。大儀ながら燒いて置け。シテ〽畏まつて御座る。（ぐわら〳〵と言うて。扇子を投げて戸を開ける。）アド〽さて燒け過ぎたも惡し。生燒なも惡い。隨分念を入れて燒いて置け。（つめる。常の如し。）シテ〽是は如何な事。難かしい事を言附けられた。これはお臺所へ行て燒かうか。但しお次で燒いたものであらうか。いや〳〵お次で燒いたらば。お子様方が出させられて。ついて太郎冠者。其の栗を一つ呉れいと仰せらるゝ。上げずはおむ

つがらうず。上げたらば唯さへ數の足らぬ栗な。良いとは仰せられまい。いや是はお臺所へ行て燒かう。誠に。丹波は栗の名物と承つては御座れども。此の樣な見事に打揃うた栗は。なか〳〵外の國には御座るまいぞ。はあ。これは栗を燒かうと言はぬばかりに重疊の炭火がおこして有る。さらば是處で燒かう。此の火をおこして居たらば。なか〳〵埒の明かう事ではない。これは良い手間助かりぢや。ト言うて。圍爐の下に有るをかき廻し。栗を中へ入れて。扇にて煽ぐ。あゝおこるは〳〵。總じて炭火のおこつたは。人の身代に表したものぢやと言うが。此の樣にくわ〳〵〳〵とおこつた所は。富貴な目出度いものぢや。ト言うて笑ふうち。栗とぶ。にげる。口傳。これは栗が飛んだ。何として飛んだか知らぬまで。さうぢや目を切る事をはつたと忘れた。扨も〳〵油斷した事かな。ト言うて。また中へかゝつて。栗を皆出し。目を切るに。此の目を切る事を忘れて居たらば。栗は皆飛んで一つも役には立つまい。さりながら。未だ良い時分に氣が附いた。さあ是でよい。あゝ燒けるは〳〵。あそこの栗が動くぞよ。おゝ此處の栗がむく〳〵めさる。定めて飛ばうと言ふ羽根づくろひであらう。如何な〳〵。目を切つて置いたに依つて。お飛びやる事はなりますま

い。やあ〳〵。なるまいぞや〳〵。笑ふ。栗共は何か面白いやら。飛ぶけんようはなうて。小歌節でフヽヽチウ〳〵。笑ふ。はあ是は栗がこげる。扨も〳〵油斷のした事かな。あつゝ。生で見たとは格別見事ぢや。あつつ。ト言うて。仕樣有り。山吹色と言ふは此の事ぢや。あつゝ。言うても〳〵見事な栗ぢや。なう〳〵嬉しや〳〵。先づ急いでお目に掛けう。ト言うてかくる。あゝ是は良いにほひぢや。これは一つ食ひたいものぢや。いや〳〵。唯さへ數の足らぬ栗を。食うたらば良いとは仰せられまい。さりながら。爰に氣の毒が有る。何れもが。やい太郎冠者。其の栗の風味は何とあるぞとお尋ねの時。身が内に在りながら。存ぜぬとは申されまい。幸ひ是に小さいのがある。之を一つ食はう。ト言うて食ふうちに。色々仕樣あり。扇子にのせて食ふ。ほ。是は皆になつた。是は如何な事。唯さへ數の足らぬ栗を。食うて良いとは仰せられまい。何としたものであらう。いや。シカ〳〵。賴うだ人は愚かな人ぢや。身共が口重寶を以て。良い樣に申しなさうと存ずる。まうし。賴うだ人御座るか。ト言うて。常の如し。アドへえい太郎冠者。シテへはあ。アドへ何と栗は燒いたか。シテへまんまと栗を燒きまして御座る。アドへ定めて

見事であらう。シテへいやもう生で見たとは格別見事で御座る。アドへさうで有らう。急いで見せい。シテへそれに就き目出度い事が御座る。アドへそれは何事ぢや。シテへまんまと栗を燒いて。お目に掛けうと思うて持つて參ると。後から。ほい太郎冠者〳〵。と呼ぶ聲が致しまするに依つて。はて異な事ぢやと存じて。後をきつと見向いて候へば。おせ頭に戴き。鬢髮に黑き髮も無く。老人と老女と夫婦來り給ひて。我はこれ竈の神三十四人の父母なり。汝栗をくれたらば。主從共に富貴に爲すべしと。事詳しうも宣へば。あら貴やと思ひて。夫婦に栗を進じて御座る。アドへ竈の神が出でさせられたか。シテへ竈の神が出でさせられて。其の栗一つくれいと仰せられたに依つて。何が惜しう御座らうず。あそこへも。ハア是處へもと申して。悉く栗を進じて御座る。アドへやれ〳〵。それはようこそ進上申した。殘つた栗があらう。急いで見せ。シテへ栗は殘りはしませぬ。アドへ殘らうがな。シテへ先づお聞きなされませ。二人の竈の神で二つ。アドへ二つ。シテへ三十四人の公達で三十六。アドへ六。シテへまた二人のお見立てで三十八九四十丁度合ひます。アド

へ扨々そちは不算用な者ぢや。先づ聞け。二人の篭の神で二つ。シテへ二つ。アドへ三十四人の公達で三十六。シテへ六。アドへまだ四ツ残る筈ぢや。シテへそれは中に蟲食ひが御座つて、揉みましたらば粉になりました。アドへでもまだ三つ残る筈ぢや。シテへはあさてはお前には栗焼人の詞を御存じ御座らぬか。アドへいや知らぬ。シテへ栗焼詞にも〳〵。逃げ栗追ひ栗はひ紛れとて。三つは失せて何も無し。御主殿の御心中お恥しう候。アドへあのやくたいもない奴。しさり居れ。シテへはあ
アドへえい。シテへはあ。

懐中聟（くわいちうむこ）

シテ　聟
アド　舅
小アド　太郎冠者
教人
（入道具）

アドへ此のあたりに住居する者で御座る。今日(こんにった)は最上吉日ぢやによつて聟がわする。まづ太郎冠者を呼出だし。申附ける事が御座る。如常。アドへ今日は最上吉日ぢやによつて聟がわする筈ぢや、云附けた物は用意したか。小アドへなる程悉く用意致して御座る。アドへ聟殿が見えたらば此方へ知らせ。小アドへ畏まつて御座る。如常つめる。シテへ舅に可愛がらるゝ花聟で御座る、今日は最上吉日で御座るによつて、聟入を致さうと存じて。方々で借り着へ、漸々(やう〳〵)と是程までに出立つて御座る。さてあの聟入と申すものは。殊の外仕儀作法のむつかしいものと承つて御座る、また爰に誰殿と申して。物ごと御功者な御方が御座る。是へ参つて聟入の仕儀作法を習うて。直(すぐ)に聟入を致さうと存ずる。シカ〳〵。誠に。内に御座ればよいが。内にさへ御座つたらば。身共(みども)が申す事ぢやによつて。定めて教へて下さるゝであらう。何かと云ふうちに是ぢや。まづ案内を乞ふ。如常。シテへ私で御座る。教へエイこゝな。まづは綺麗な出立(いでたち)でおりやる。シテへ何とよう御座りまするか。教へいわごりよが是へ生縮ってつひに見ぬ綺麗な出立でおりやる。シテへよい、お目利で御座る、何を隠しませう、私は今日聟入を致しまする。教へそれは目出度い事ぢや。其様な事を知つたらば。人を以てなりとも申さうものを。曾て存ぜなんだ。シテへ御存じない筈で御座る。今日只今の事で御座る。教へ何なりとも用があらばおしやれ。シテへ早速御無心申しませう、教へ何でおりやる。シテへあの聟入と申すものは、殊の外仕儀作法のむつかしいものと承つて御座る、お前にはせつ〳〵聟入をなされて。よう御存じで御座らう。どうぞ教へて下され。教へそなたは人聞き悪い事をおしやる。身共がいつ其様にせつ〳〵聟入をした事がある。シテへでも路次で御目にかゝりました時。どれへ御出でなさるゝと申せば。舅の方へ〳〵行くとは仰せられぬか。教へそれは舅の方へ時折節の見舞でこそあれ、聟入と云ふものは、一代に一度ならではせぬものでおりやる。シテへさては聟入と申すものは。一代に一度ならではせぬもので御座るか。教へ中々。シテへ、すれば私は麁相(そさう)な申して御座る、舅の方へ御出でなさるゝ度毎が聟入かと存じました。教へお知りやらねば尤もでおりやる。さて聟入の仕儀作法が習ひたいか。シテへどうぞ教へて下され、教へ其の様な事は空(そら)では覚えぬ、物の端(はし)に書いて置いた。見ておませう。暫くそれにお待ちやれ。シテへ心得ました。教へこれはいかな事。世にはうつけた者が御座る、聟入の仕儀作法を存ぜいで習ひに参

お盃て御座る。シテへたべよごして御座る。アドへ幾久しう目出度う御座る。さても一つ参らぬか。シテへもうたべますまい。アドへそれならばしまひませう。シテへそれがよう御座らう。アドへ太郎冠者硯などれ。また云含めた物を出せ。小アドへ畏まつて御座る。アドへそれは[illegible]ばしたけれども重代で御座る。今日の祝儀にこなたへ贈りまする。シテへこれは長い物を下さりまして添う御座る。（ト云ひながら一腰中する。色々引付ける内に）アドへ私の先祖は其の弓について。殊の外高功が御座つたに依つて。吉例として此の弓を贈りまする。（ト云ふうち弓を懐中。色々仕様あり）シテへさて長い物を下され。懐中がむつかしう御座る。暫くくつろいで参りませう。アドへともかくもさせられい。（[illegible]）シテへこれは迷惑な物をくれられた。何としたものであらう。（ト云うて。弓を折つて。柱に当て。たわなど。シカ〳〵云ふ。漸々と袖より逆して懐中す。）シテへこれ〳〵これでこそ〳〵と懐中致しました。（ト云うて元の座へ直る。）アドへ太郎冠者。あれは何の真似ぢや。（聟太郎冠者見て。口へ手を当て。立ち笑ふ。）小アドへされば何の真似で御座りませう。アドへ聟殿はつゝと律義な人と聞いた。定めて誰ぞなぶつておこしたものであらう。さりながら。餘り興がつた事ぢや。舞を所望して迷惑がらせう。小アドへ一段とよう御座りませう。アドへ聟殿。此の座の大法で御座る。目出度う一さし舞はしやれ。シテへなに。舞を舞へて御座るか。アドへ中々。シテへ畏まつては御座れども。珍しい引出物を下され。懐中がさしつかへまする。御免されて下され。アドへても處の大法には破られませぬ。よそ外の者も御座らぬ。ぴらに一さし舞はつしやれ。シテへそれならばどうぞ舞うてみませう。（ト謡うて。笛吹出す。左右して。直に段をとおいて。又右へ一つ廻る。目出度と云ふて）目出度かりける時とかや〳〵。アドへなぜに左右へ廻らつしやれぬ。シテへにて今の程舞ひました。今日は免して下され。アドへいや〳〵[illegible]御座る。重々と舞はつしやれ。シテへハアそれならば舞ひませう。祝ふ心は萬歳楽〳〵〳〵。（ト云うて。又左右して。二段舞ふ。[illegible]）アドへ[illegible]御座る。シテへ今日は右[illegible]舞ひませぬ。アドへ舞にさす手は御座るまい。それならば連舞に致さう。立たせられい。シテへこれは迷惑で御座る。[illegible]な真似けり〳〵。（ト云うて三段の舞[illegible]二段目の取替へる。手叶はず。口にくはへ。左へ返す。さて三段目にて。また叶はず。同じく口にくはへて扇を取替へるを。聟見附けて笑ふ。其の時弓のほこ先にて。ヤア〳〵と云うて。聟を追込む。シカ〳〵云うて。逃げて入るべし。口傳なり。但しアシラヒなき時は。二人袴のアシラヒなき時の通り。[illegible]）

蝸牛（くわぎう）

シテ　羽黒山の山伏
アド　主人
小アド　太郎冠者
（入道具）

シテへ出羽の羽黒山より出でたる山伏。此度大峯葛城を仕舞し。唯今下向で御座る。シカ〳〵。まことに。山伏といふ者は。野に伏し山に伏し。或は岩木を枕とし。難行苦行捨身の行を致すに依つて。その功徳には。いま目の前を飛ぶ鳥も祈り落す程の行力ぢや。いや[illegible]の中の長旅で。殊の外草臥れた。ちと寝て行き度いものぢやが。幸ひこれに藪がある。先づ這入つて見よう。やつとな。さて〳〵渺と打開いた藪ぢや。さらば寝て行かう。えい〳〵〳〵。（ト云うて寝る）アドへ此の邊りの者で御座る。某御寿命目出度い祖父を持つて御座る。先づ太郎冠者を呼出し。蝸牛を取りに遣はさうと存ずる。（呼出す。常の如し。）アドへ汝呼出すは別の事でない。こちの祖父の様な御寿命目出度い御方はあるまいなア。小アドへ御意なさるゝ通り。御長命といひ。御富貴といひ。

何不足のない目出度い御祖父御様で御座る。アド〽またこれに蝸牛を用ふれば。尚々御壽命御長遠なと申す。汝は大儀ながら蝸牛を取つて來て呉れい。小アド〽畏まつて御座れども。蝸牛と申すものは何處許にある物やら。またどの様な物やらも存じませぬ。アド〽いや〳〵藪には澤山にある物ぢや。小アド〽はあ。藪には澤山に居りまするか。アド〽中々。先づ頭の黒い物で。腰に貝をつけて。折々は角を出すものぢや。小アド〽あゝ。角を出しまするか。アド〽大きいは人ほどもあると聞いた。隨分念を入れて大きいを取つて來い。小アド〽其段はそつとも御氣遣ひなされまするな。（ト云うて。常の如くつめる。）これは火急な事を仰付けられた。先づ急いで參らう。シカ〳〵。まことに。此方(こち)の祖父御様の様な。御壽命といひ。御富貴といひ。目出度い祖父御様ぢや。これに蝸牛を用ひさせられたらば。いよ〳〵御壽命長遠にあらうと存ずる。いや何かといふうちに藪へ來た。先づ這入つて見う。やつとな。さても〳〵。繁々と打茂いた藪ぢや。扨かの蝸牛は何處許にあることぢや知らぬ。頭の黒いものぢやとおしやつたが。どの邊にある事ぢや知らぬ。（ト云うて。行當る。）いや。されぱこそ。あれに何やら頭の黒い物が寝てある。定めて、あの事であらう。なう〳〵。ちやつと起きて下されい〳〵。シテ〽むう。寝たことかな。はあ。今身共を起したは汝か。小アド〽なる程私で御座る。シテ〽何の用で起こした。小アド〽卒爾ながら存じ、お前は蝸牛殿で御座らぬか。シテ〽何ぢや。蝸牛ではないか。小アド〽左様で御座る。シテ〽身共を蝸牛とはどうして見た。小アド〽頭の黒い物と承りましたに見ればお前は頭が黒う御座るに依つて。蝸牛殿では御座らぬかと申すことで御座る。シテ〽して蝸牛を尋ねて何にする。小アド〽されぱのことで御座る。私の頼うだ者は。御壽命目出度い祖父御を持たれて御座るが。それに蝸牛を用ふれば。尚々御壽命御長遠なと申すに依つて。尋ねることで御座る。シテ〽これにもまたぢや。暫くそれに待て。小アド〽畏まつて御座る。シテ〽世には虚けた者が御座る。身共を見て蝸牛でないかと申す。散々嬲(なぶ)つて歸さうと存ずる。やい〳〵。さて〳〵汝は仕合者ぢや。身共は蝸牛ぢや。小アド〽いかにお前が蝸牛殿で御座るか。シテ〽なか〳〵。小アド〽さて〳〵仕合者で御座る。さりながら。蝸牛と申すものは。腰に貝をつけて居ると承りましたが。貝が御座るか。シテ〽なに貝が見たいか。小アド〽どうぞ見せて下され。シテ〽追付け見せてやらう。そりや〳〵。何と貝であらうが。小アド〽まことに見事な貝で御座る。また折々は角を出すと承りましたが。角が御座るか。シテ〽なに角が見たいか。小アド〽どうぞ見せて下され。シテ〽暫らくそれに待て。小アド〽心得ました。シテ〽これはいかなこと。この角にはほうど困つた。何としたものであらうぞ。いや致し様が御座る。やい〳〵。角が見度いか。小アド〽どうぞ見せて下され。シテ〽見せては遣らうが。必ず人にいふなよ。小アド〽いかな〳〵。申すことでは御座らぬ。シテ〽追付け見せてやらう。そりや〳〵〳〵。何と角が出たか。小アド〽まことに角が出ました。いや。もう疑もない蝸牛殿で御座る。どうぞ來て下されい。シテ〽いてやり度いものなれども。此の中は方々の祖父御に蝸牛を用ひさせらるゝに依つて。一向暇がない。え行くまい。小アド〽それは氣の毒で御座る。是迄で逢うたこそ幸ひなれ。どうぞ來て下されい。シテ〽其の様にいふことぢやに依つて。往てやらうぞ。歩いては行かれぬ。負はれて行かう。小アド〽こ

れに迷惑ながら御座る。私はつうと非力に御座るに依つて。お前を負ふことはなりませぬ。どうぞ歩いて來て下され。シテへ歩いては行かれぬ。それならば。囃子物に乘つて行かう。小アドへしてそれは難かしいことで御座るか。シテへ別に難かしいことでもない。雨も風も吹かぬに出ざかま打割ろ〳〵といへ。身共はでん〳〵むし〳〵。でん〳〵むし〳〵。というて浮かれる。浮かれて行くことぢや。小アドへ先づ申して見ませう。雨も風も吹かぬに出ざかま打割ろ〳〵。かうで御座るか。シテへさうぢや〳〵。囃せ〳〵。小アドへ心得ました。ト云うて囃す。シテへでん〳〵むし〳〵。でん〳〵むし〳〵。是より段々あつて三遍目に主立つ。アドへ太郎冠者を蝸牛を取りに遣はして御座るが。歸りが遲う御座る。見に參らうと存ずる。さればこそこれへ戻り居る。やい〳〵。太郎冠者太郎冠者。小アドへはあ。アドへ蝸牛は何とぢや。小アドへ追付けこれへ連れて參りまする。アドへ何をいふ。あれは山伏ぢや。シテへどりや〳〵。囃さぬかいやい〳〵。小アドへあゝ。と云うて囃す。アドへこれはいかなこと。やい太郎冠者。蝸牛は何とぢや。小アドへ追付けこれへ連れて參りまする。アドへ何をいふ。あれは山伏ぢや。小アドへ何を仰せらるゝ。あれが生身(しやうじん)の蝸牛で御座る。アドへ山伏ぢやわいやい。シテへこりや〳〵。囃さぬかいやい〳〵。小アドへおゝ。と云うて囃す。また囃を引きこ アドへこりつ〳〵よう聞け。あれは山伏ぢや。早うちよちや〳〵をせい。小アドへさては山伏に極(きはま)りましたか。アドへ早うちよちや〳〵をせい。シテへこりや〳〵囃さぬかいやい〳〵。小アドへやい其處な奴。シテへ何ぢや。小アドへ己れは山伏ぢやげな。シテへ何をいふ。身共こそこふりようを經た。のう。小アドへあゝ。シテへむし〳〵。小アドへ雨も風も。囃す。アドへやい〳〵。あれは山伏というて賣僧ぢやわいやい。小アドへさては賣僧に極まりましたか。アドへおんでもないこと。シテへこりや〳〵。囃さぬかいやい〳〵。小アドへやい其處な奴。シテへ何ぢや。小アドへ己れは山伏で賣僧ぢやげな。と云うて頭をふりたげる。シテへでん〳〵むし〳〵。小アドへあれ。あのやうに角を出します。アドへ早うちよちや〳〵をせい。シテへでん〳〵むし〳〵。小アドへあれ〳〵。シテへでん〳〵むし〳〵。カヽル でん〳〵むし〳〵。でん〳〵むし〳〵。小アドまた囃す。シテへもそつと嬲つてやらう。と云うて。名乘座に行つて。山伏通印結ぶ。アドへやい〳〵太郎冠者。心を鎭めてよう聞け。あれは山伏で賣僧ぢや。小アドへさては賣僧に極まりましたか。アドへ早うちよちや〳〵をせい。小アドへ己れは憎い奴の。と云うて。ふり上げる。アドへそれ見よ。それぢやに依つて。早うちよちや〳〵をせいといふに。小アドへどれへ參りましたやら。シテへでん〳〵むし〳〵。笑ふ。兩人こける。シテへ虚(うら)けよ〳〵。アドへさればこそ。あれへ行く。ちやつと捉へい。やるまいぞ〳〵。小アドへやるまいぞ〳〵。と云うて。追込め入るなり。

【け】

鷄流(けいりう)

シテ　太郎冠者
アド　主人

アドへ此邊りの者で御座る。明日は早朝から用事あつてさる方へ參る。太郎冠者を呼出し申付けうと存ずる。ト云うて呼出す。如常。アドへ汝呼出す別の事でない。明日は早朝から用事あつて。山一つあなたへ行く程に。一番鷄がうたうたらば早々起せ。シテへ畏まつて御座る。アド

シテ　僞出家
小アド　新發意
立衆　田舍人
同

（入道具）

アドへこの邊りに住んで御座る。此度一在所として佛堂を建立致して御座る。常は思ふまゝに出家も御座れども、ただ似合はしい堂守が御座らぬ。今日は此の街道へ參つて、相應の御出家も通らるゝならば、同道致して參らうと存ずる。誠に。田舍と申すものは不自由なもので御座る。堂守が御座らぬ。何とぞ似合はしい御出家を誘引致したい事ぢや。何かと云ふうちに上下の街道ぢや。暫く此の所に待たうと存ずる。シテへしないたりや。もむ程に／＼、此の角の鐘にふる程もうで御座ればきむ／＼もみそこなうて、金銀は申すに及ばず、家財まで打込うでばらりさんと成つて。あとへも先へも參らぬ。難儀の餘りふと出家致して御座れば、佛法の事なれば學問はなし。經陀羅尼は存ぜず。たれ一飯のわけ手が御座らぬ。此の上は在方を廻り。田舍者をたぶらかし、佛堂をなりとも求めうと存ずる。又愛に譜代召使ふ者が御座る。某が不仕合せ故。きやつまで出家致させて置いた。此の者を呼出だし、相談致さうと存ずる。新發意おりやるか。（ト云うて呼出す。出る。常の如し。）誠に。身共が不仕合せ故。汝まで迷惑させて、此の様な面目もない事はあるまい。小アドへまつかう有らうと存じて、前方から色々御意見を申せども、御承引なされいで斯様に成つて、此の通りで御座る。シテへ今の様な事は今に立たぬぞやい。扨そちが知る通り、出家に成つても誰れ一飯のわけ手がない。此の様にしては難儀な、せう様がない。何とぞ在方を廻りて、田舍者をたぶらかして、佛堂をなりとも求めうと思ふが、何とあらう。小アドへお經も御存じなうて。寺持にはなれますまい。シテへそれも思案をした事がある。いつも博奕の場で仕合はよい時、其の傘を持つて踊る小歌がある。覺えて居るか。小アドへそれは何とやら云ふ事で御座りました。シテへはて、きのふ通る小傘がけふも通り候。あれ見さいたいよ。これ見さいたいよ。と云ふ事ぢや。小アドへそれが御經に聞えまするか。シテへ此の様に云うてはお經にならぬ。きのふ通る云うてなどと云へば。お經に成るでは無いか。小アドへいかさま御經に聞えまする。シテへ汝も云うてみよ。小アドへ畏まつて御座る。きのふ通る小傘けふも通り候。シテへやい／＼。其の様に云うては、唱歌のありくと聞えて惡い。聲にうなりを附けて、（トまたきのふ通るを云う二つ。）と云へば。お經の様に聞ゆるではないか。小アドへそれならば此度は同音に申して見ませう。（ト云う二つ。二人いふ。）小アドへこれでは後がつまらぬもので御座る。シテへ此の後へなまいだ／＼と云ふ事を入れう。小アドへこれはよう御座らうか。若しお經が出ましてお讀めと申したらば、何となされます。シテへそれは庵室に忘れて來たと云ふ。小アドへ先にお經が有つて讀めと云うた時は。何となされます。シテへそちが様に物の先を折る様に云うてはならぬ。それは身共が口重寶を以て面白うなかしう云はう。氣遣ひせず共。身共について。さあ／＼こい／＼。小アドへハア。シテへ誠に。角力の果は喧嘩になり。博奕の果は盗みに成ると云ふが、是はぬすみ同前の仕合はせぢや。小アドへ何れぬすみに餘り違いものでは御座らぬ。シテへ身から出た錆なら、誰を恨む事はならぬ。アドへこれへ一段の出家が通らるゝ。まうしこれ／＼。シテへ此方の事で御座るか。アドへなる程出家の事で御座る。これはどれからどれへお通り

なさるゝ。シテ〽愚僧は風に木の葉の散る如しで御座る。アド〽これは面白い御返答で御座る。それには心が御座るか。シテ〽、別に心と申しても御座らぬ。木の葉と申すものは。風がさそへば何方へも散りまする。愚僧もまづ其の如くさそはるゝ方へ參るに依つて。風に木の葉の散る如くと申す事で御座る。アド〽御尤もで御座る。それならば留まらせらるるか。シテ〽、それには只今も申す通りで御座る。アド〽幸ひの御方に詞をかけて御座る。此度一在所として信堂を建立致しまして御座る。堂は思ひの儘に出來ましたれども。未だ似合はしい堂守が御座らぬ。何卒お出でなされて下されますまいか。シテ〽それこそ出家の望む所で御座る。なる程參りませう。アド〽何も御望は御座らぬか。シテ〽別に望も御座らぬ。冬紙子常に衣壹重さへ下さるればよう御座る。アド〽それは心易い事で御座る。何と今でも御出でなされうか。シテ〽何時なりとも參りませう。アド〽さあ〳〵。お出でなされませ。シテ〽相談が極つた。汝も來い。小アド〽畏まつて御座る。アド〽あの御方はどなたで御座る。シテ〽あれは愚僧が弟子で御座る。アド〽イヤお前おひとりお出でなされて下されませ。シテ〽御尤もで御座るが。法事の時分は是非入が入りまする。常は修行託鉢とも云ふ。になりとも出しませう。在所中の御世話はかけますまい程に召連れさせて下され。アド〽左樣の事ならば御勝手次第になされませ。いざお出でなされ。シテ〽、案内者の爲め先へ御座れ。アド〽それならばお先へ參りませう。さあお出でなされませ。シテ〽心得ました。アド〽誠に。ふと詞をかけましたに。早速御同心なされて。此樣な悅ばしい事は御座らぬ。シテ〽、袖の振合はせも他生の緣と申すが。定めて佛のお引合はせで御座らう。アド〽それは有りがたい事で御座る。シテ〽、さて此度建立の堂は何程に出來ました。アド〽三間四面で御座る。シテ〽大きい堂ぢやなあ。小アド〽左樣で御座る。シテ〽佛具なども悉く御用意で御座るか。アド〽殘らず調ひまする。お經も用意致して御座る。シテ〽やあお經が御座るか。アド〽なか〳〵。シテ〽扨々苦々しい物があるでは無いか。小アド〽いらぬ物が御座る。アド〽申し〳〵。御出家のお經を。苦苦しい要らぬ物と仰せらるゝはどうした事で御座る。シテ〽御不審尤もで御座る。先づ某は小僧の時より學問を嫌ひ。一切經を知らず存じて居まする。師匠が申さるゝは。後生の爲には念佛に上越す事はない。若しお經などを續けたらば勘當ぢやと申されたに依つて。苦々しい要らぬ物があると申す事で御座る。アド〽、是は御尤もで御座る。又見ますれば傘を御用意で御座る。あれも何ぞ法事に要りまするか。シテ〽、傘こそ佛具の第一の物で御座る。それ佛のうしろに後光と云ふ物が有る。アド〽なる程御座りまする。シテ〽ふな後光。或は傘後光などと申して。別して法事の時分入用の佛具で御座る。アド〽謂れを聞けば尤もで御座る。此の由を在所中へ申して御座らば。さぞ有難う存ずる事で御座らう。シテ〽かう參るからはそなたを寄親殿と頼みまする。萬事引廻して下され。アド〽其段はそつとも御氣遣ひなされまするな。シテ〽して程は遠う御座るか。アド〽何かと申すうちに早やこれで御座る。シテ〽これで御座るか。アド〽先づかう御通りなされませ。シテ〽心得ました。アド〽則ち此度建立の堂も是で御座る。シテ〽信は莊嚴より起ると申すが。結構な莊嚴で御座る。アド〽結構な御挨拶で御座る。さて御下向の由を在所中へ申しませう。暫く御休足なされませ。シテ〽心得ました。アド〽な

う〳〵何れも御座るか。立衆〽これに居まする。アド〽只今歸りました。立衆〽やれ〳〵。それは御苦勞で御座る。アド〽都より似合はしいお住持を同道致した。則ち今日入院の儀式また堂供養の法事も御勤めなさるゝ。皆同道して參詣致しませう。さあ〳〵御座れ。立衆〽心得ました。アド〽在所の衆が何れも參られて御座る。シテ〽さて何れも氣の毒によう參らせられた。立衆〽遠方の所御苦勞に存じまする。シテ〽愚僧も不思議の緣で此の所へ參りました。是からは在所中の世話になるで御座らう。賴みます。立衆〽結構な御挨拶で御座る。シテ〽扨これから法事を始めませうか。さりながら。ただ參らしやれては功德が薄い。志の施物を上げさせられい。立〽今日は俄の事で御座るに依つて。何も布施の用意も御座らぬ。シテ〽さもしい事を云ふ人ぢや。塵を結んでも志ぢや。此の樣な法事を幸ひに。弔ひたい亡者もあらば弔うたがよい。それも地獄へやりたくば勝手に召され。小アド〽さあ〳〵。さん物を擲つて。現當二世安樂を祈らせられい。尼〽まうし〳〵お長老樣。妾は此の小袖を上げませう程に。後世菩提を拜ませられて下され。シテ〽おゝ奇特な志ぢや。菩提を祈らう程に。心安う思はしませ。小アド〽さあ〳〵何れも上げさせられい。立〽私はこれを上げませう程に。明日は志す日で御座る。自他平等利益を行うて下され。（ト云うて銘々小さ刀拔き。）シテ〽おゝ成程。行うて進ぜう。（色々云うて上ぐる。其外よきつまを持つなど云ふ。息災延命二世安樂色々云ふべし。）シテ〽何れも精が出るな。小アド〽左樣で御座る。アド〽何れも御精が出まする。シテ〽さらば法事を始めませう。アド〽一段とよう御座らう。（シテ小アド立つて鉦を打ち。佛前を拜する心持。傘をひろげ向合はせ。きのふ通るを云うて。一遍廻る。立衆各ついて廻る。入違ひ行道。其のうちシテ顏にて。小アドに透間あらば。道具を取れと云ふ心持。色々口傳。尼向うへ出て拜む。のけと云ふ仕方踊り。念佛。立衆浮かれるうち道具を取り迯げる所。總て仕方口傳。近代の工夫なり。）シテ〽一段の仕合はせぢや。小アド〽よい首尾で御座る。シテ〽ちやつとすかせ〳〵。（ト云うて。入るなり。）立〽なう〳〵。今の御出家が見えませぬ。扨は賣僧坊主ぢや。皆追懸けさせられい。やるまいぞ〳〵。尼〽エヽ腹立ちや。孫にも取らせぬ小袖を盜み居つた。ちやつと捕へて下され。エヽ腹立ちや〳〵。（ト云うて。尼後より入るなり。）

腰祈（こしいのり）

シテ　祖父
アド　山伏
小アド　太郎冠者
（入道具）

アド〽い、い、大峯かけてい、い、い、い、葛城や。い、〳〵。い、い、い、我が本山にい、い、歸らん。（出羽の羽黑山云うて。シカ〳〵。飛鳥を祈落すを云ひ廻る。常の如し。）いや何かといふうちに本國へ戻つた。則ち此の家に祖父が御座る。先づ案内を乞はう。（常の如し。）小アド〽えい。京の殿。ようお出でなされました。アド〽身共も大峯山上こと故なう仕舞うて。唯今下向道ぢや。小アド〽扨々それはお目出度いことで御座る。アド〽祖父御樣は御息災なか。小アド〽なるほど相變らず御息災に御座る。お出での通り申しませう。先づかうお通りなされませ。アド〽心得た。小アド〽まうし〳〵。祖父御樣。御座りますか。京の殿のお出でゝ御座る。シテ〽やい〳〵。何ぢや。今日は魚をくれう。なうなう嬉しや〳〵。魚をくるゝとも。魚頭中落はそなた衆喰うて。身どころばかりくれさしめ。小アド〽いや。今日は京の殿のお出でゝ御座る。シテ〽何ぢや。京の殿が來たといふか。小アド〽左樣で御座る。シテ〽やい〳〵。珍らしや〳〵。早う出て會はうぞ。えい〳〵。小アド〽祖父御樣のこれへお出でゞ御座る。

シテへどれ〳〵。京の殿は。アドへこれに居りまする。シテへやれ〳〵。よう來たなア。アドへ久しうお目にかゝりませぬ。これは御機嫌がようて大慶に存じまする。シテへ祖父は隨分息災ながら。京の殿もまめさうで嬉しいことぢや。はて好う來たなア。何ぞ京の殿におまし度いが。おゝそれ〳〵。思ひ出した。やい〳〵太郎冠者。此のうち見れば犬の子が生れた。京の殿はえのころが好きぢや。中にも毛並のよいうつくしいを一つおましてくれい。小アドへ畏まつて御座る。アドへこれはいかなこと。身共をまだ子供の樣に思召すさうな。シテへいつかなう京の殿。祖父は殊のほか年が寄つて。齒は抜ける。目は惡し。別して腰がかゞうで。不自由におりやる。アドへ御尤もで御座る。やい太郎冠者。祖父御樣は殊のほか御不自由にあらう。別してお腰がかゞうで。お傷はしい事ぢや。小アドへ朝夕殊のほか御不自由で御難儀をなされます。アドへ身共が思ふ年月の行法は。斯樣の時の爲ぢや。一加持して。あのお腰のかゞうだを祈り伸して上げうと思ふが。何とあらう。小アドへそれはお悦びなさるゝで御座りませう。アドへその通り伺うて見よ。小アドへ畏まつて御座る。申上げまする。京の殿の仰せらるゝは。祖父御樣はお腰がかゞみまして。殊のほか御不自由に御座らうに依つて。一加持なされて。その腰を伸して進ぜられうと仰せられます。シテへなう〳〵。孝行な京の殿や。何卒早う祈つて腰を伸してたもと。いうて呉れい。小アドへ畏まつて御座る。殊のほか御悦びなされまする。アドへそれならばゝ追附け加持をせう。ト云うて
たゞ山伏といつぱ山伏なりを云うて。小アドに向ふ。両手のさつくに掛けて云ふ。ぼろおん〳〵と云うて祈る。何れも回す。シテへなうな
う〳〵。尊とや〳〵。久しく天道も拜せず。日月を見ることもなかつたに。京の殿の蔭で腰が伸びた。やれ〳〵嬉しや〳〵。南無阿彌陀佛〳〵。小アドへ殊の外お悦びなされます。シテへさてこれはいつまで此の樣にして居ることぢや。アドへいや。一期その通りで御座る。シテへなう〳〵。窮屈や〳〵。これはまた辛勞でどうもならぬ。どうぞもそつと屈めておくりやれと云うてくれい。アドへ何れ是は少し祈り過ぎた。もう一祈り祈つて緩めて上げませう。小アドへ一段と好う御座りませう。アドへ重ねて三つのお山に願を掛け。いろはにほへとんと祈

るならば。などかちりぬるをわかなれ。ぼろおん〳〵。シテへなう〳〵。腹立ちや〳〵。孝行な京の殿かと思うたれば。この年寄を嬲りに來たさうな。元の様にして返せ〳〵。アドへどうでも身共が行力が強過ぎるさうな。もう一祈り祈つて。此の度は此の方からよい時分に離なかけう。そちはぬからぬ様につゝばりなせい。小アドへ畏まつて御座る。アドへいかに祈り過ぎたる腰なりとも。烏の印を結んで掛け。いま一祈り祈るならば。などか功徳のなかるべき。ぼろおん〳〵。太郎冠者。つゝばりか〳〵。シテへ太郎冠者。杖をおこせ。小アドへ畏まつて御座る。シテへ京の殿はどれに居る。アドへこれに居りまする。シテへ孝行な者かと思うたれば。年寄つた者を嬲りに來た。己れは打殺して退けう。アドへ危なら御座る〳〵。

子盗人（こぬすびと）

シテ　盗人
アド　乳母
小アド　主人
（入道具）

アドへなう〳〵。このお子の様なわゝしいお子は御座らぬに依つて。妾は縫針の暇が御座らぬさりながら。今宵はようお鎮まつた程に。奥の間へ連れましていておよらしませうと思ひまする。嬉しや〳〵。やう〳〵とお鎮まつた。この間に妾が用を調へうと思ひまする。シテへ此の邊りに住居する博奕打で御座る。人の異見を聽かいで。ひたもの打つて御座れば。さん〴〵不仕合はせで。金銀は申すに及ばず。家財まで打ちこうで。はらりさんとなつて。後へも先へも參らぬ。今一勝負して取返さうにも元手はなし。何と致さうと晝夜分別致せども。さして纏つた思案も御座らぬ。此の上は人の物を盗み取つて。それを賣りしろなして元手を拵へ。今一勝負致さうと分別を極めて御座る。また近所に有徳な人がある。これへ今晩忍び入つて。何なりとも道具を一色二色。案内なしに借りて參らうと存ずる。シカ〳〵。誠に。相撲の果は喧嘩になり。博奕のはては盗みになると申すが。今身の上に思ひ當つた。何かと云ふうちにこれぢや。これは此の中普請をせられたと見えて。中々厳しい體ぢや。これでは這入られまい。裏へ廻つて見う。シカ〳〵。裏も此の體ならば氣の毒ぢやが。いかなりとも表程にはあるまい。これ〳〵。表に似ぬ裏ぢや。また高塀一重ぢや。是を越せば早や坪の内ぢや。何卒この塀を越したいものぢやが。足懸りもなし。ここらで木に飛びついて越さう。いやこりやなか〳〵届かぬ。何としたものであらうぞ。いやこれに餘程の穴がある。これは犬のくゞつた跡であらう。随分と身をひそめたらば。くゞられさうなものぢや。どうぞくゞつて見う。仕合。やう〳〵とくゞつた。これさへ越せば心安い。さて此の戸を開ければ座敷ぢや。先づ戸を開けう。ごろ〳〵〳〵。南無三寶。火がとぼつてある。誰も起きてはゐぬかの。いや〳〵人音もせぬ。扨は有明を置かれたものであらう。よい肝をつぶした。何れしつけぬ事はうろたへるものぢや。見附けられうはしか胸がだく〳〵する。先づそつと座敷へ通らう。これは宵に客があつたと見えて。道具が取散らしてある。これは茶の湯の道具ぢや。風爐茶碗茶入。扨も結構な道具ぢや。これは床か。見事さうな掛物ぢや。いや是處によい小袖がある。此の中不仕合せなに依つて。女共が衣類まで打ちこうで。殊の外不機嫌な。先づこの小袖は女どもへの土産に致さう。（小袖取らんとして。肝をつぶし退き。）人が寝て居る。大人かと思

うたればゝ小さい子を寢させて置いた。この人遠い所にあの小さい子を。何として獨り寢させて置いた事ぢや。定めてこれにはお乳が自分の用を調へうと思うて。寢させて置いたものであらう。扨も〳〵よう寢入つて居るは。色白な鼻筋の押し通つた美しいよい子ぢや。はあ〳〵。目をほちりとあいて。なう〳〵。こはい者では御座らぬ。俺は伯父ぢやぞや〳〵。笑ふ。扨も〳〵機嫌のよい子かな。寢起なれども人おめもせず。ほや〳〵笑ふは〳〵。扨も扨もよい子かな。なう〳〵。そなたを誰が是處に獨り置いた。やあちいかや。オヽお乳であらう。道理〳〵。笑ふ。扨もいたいけや。伯父がちと抱いて進ぜうかや。あれ〳〵。抱かれうと云ふ事やら。手を出していの。どれ〳〵抱きませう。さあ御座れ。そりや抱いた。何と嬉しいか。嬉しいやらにこ〳〵笑ふは〳〵。笑ふ。此の樣な氣高い子はあるまい。そなたの樣な子を持つた親の心はさぞ嬉しい事であらう。さて何も藝は無いか。てうちは出來るか。サアてうち〳〵。オヽ扨も上手ぢや。鹽の目はならぬか。オヽそれが鹽の目か。笑ふ。かぶりは〳〵ならぬか。伯父がして見せうか。ふり〳〵。笑ふ。扨々藝者ぢや。ついでにあわゝ見ませう。あわゝ〳〵。ト云うて。われもあわゝをし。又子の口にもあて。あわゝ〳〵。笑ふ。是はいかな事。大きな聲をして笑うたに依つて機嫌が損れた。わあ。かいをつくる。これはどうやら泣きさうな。どりや〳〵。ちとこそぐつて機嫌を直さうぞ。くつ〳〵〳〵。そりや機嫌が直つた。扨も〳〵子供と云ふものはまた機嫌の直るも早い。どれ〳〵。ちと肩へ上げてすかさう。ヤアエイ。れろ〳〵〳〵〳〵や。ひよろゝん〳〵〳〵や。何返も返して浮く。女立つ。一の松。

アド〽奥の座敷が騷がしい。何事ぢや知らぬまで。なう恐ろしや。盜人が入つた。まうし〳〵旦那樣。盜人が這入りました。ちやつとお出でなされませ〳〵。

小アド〽何事ぢや〳〵。なに盜人が這入つたと云ふか。裏へも表へも人を廻せ。盜人が這入つた。松明を出せ〳〵。

シテ〽これは聞附けたさうな。女あせる。

小アド〽がつきぬ。やらぬぞ。女留めて。

シテ〽聊爾をなされな。盜人では御座らぬ。

小アド〽夜中に人の内へ這入つて盜人でないとは。

シテ〽お座敷が綺麗なと聞いて。見物に參りました。

小アド〽夜中に見物と云ふ事があるものか。たつた一打にせう。

シテ〽これ〳〵。そなたはいかうせかせられたさうな。某を斬らつしやれば此の子も斬れるが。此の子は可愛うはないか。

小アド〽何の其の子ともに斬り放してのけう。

アド〽なう悲しや。大事のお子ぢや。そこに置いて早う逃げいやい〳〵。

シテ〽斬つてよくばさあお斬りやれ。

小アド〽おのれは憎い奴の。

シテ〽そりや斬れ。

小アド〽おのれまだそこに居るか。ト追込み入る。

アド〽なういとしいお子や。このお子の御壽命五百八十年萬々年。ちやつと御座れ。ト云うて。留めて入るなり。

木實爭（このみあらそひ）

シテ　茄子
アド　橘
小アド　柿
柿方立衆
茄子方立衆

アド〽斯樣に候者は。橘の精にて候。每年とは申しながら。當年の樣な長閑な春は御座らぬ。吉野山の花も盛りの由申す程に。見物の望にて罷出でて候。まづそろり〳〵と參らう。シカ〳〵。誠に。春宵一刻價千金と申して。唯今の一時は長日なれども別して名殘を惜しむ事で御座る。何かと云ふ内に山の麓へ著い

た。静かに坂を登らうと存ずる。シテ〽なう〳〵あれなるは何方への御出でにて候ぞ。アド〽さん候これは橘の精にて候が。當山の花を見ん爲に是迄出でて候。シテ〽我等は茄子の精なるが。花の盛りを見物の望にて候程に。御供申したく候。アド〽これこそ幸ひにて候。御供申し候べし。シテ〽あら嬉しや。さらば斯う御渡り候へ。シカ〳〵。アド〽何と世上の花も咲き申さうずるか。シテ〽時節になりて候程に。國々所々の花も咲かうずるにて候。アド〽最早此邊りから櫻の木はひしと見ゆるよ。シテ〽谷へ近い所は皆陰ぢやによつて。なか〳〵花が咲きさうにも見え申さぬよ。アド〽谷水の流るゝも一景ではおりないか。シテ〽いかさま。岩にあたる水が波となつて。せい〳〵と見事にはあるぞ。アド〽次第〳〵に山が深うなる。精出して登らしめ。シテ〽そなたは達者さうな。某は辛勞におりやる。アド〽あれ〳〵。此邊りの花に走り穗に咲いた。シテ〽何がどうぢやとおしやる。アド〽此邊りの花は走り穗が咲くと申す事ぢや。シテ〽走り穗〳〵。ト云うて笑ふ。アド〽何がなかしうて笑ふぞ。シテ〽惣じて走り穗などと申すは。耕作の上にこそある言葉なれ。花の走り穗〳〵。ト云うて。また笑ふ。アド〽我等も唯は云はぬ。本歌があるぞよ。シテ〽さて本歌は何とある。アド〽吉野山。たが植初めし櫻だに。かず咲初むる花の走り穗。シテ〽又くはいた。笑ふ。アド〽某の云ふ言葉ではなし。茄子などの分として古歌の心を知る事ではあるまい。シテ〽いよいよ聞えぬ事を云ふ。汝等が口より茄子を下しまふ筈もなし。其上只今の古歌は隱れもない歌なれども。違うてある。アド〽何と違うた。シテ〽吉野山。たが植初めし櫻だに。數咲初むる花のはじめにとこそあれ。走り穗〳〵。笑ふ。アド〽いや〳〵歌は兎も角も。橘といふものは系圖正しいものなり。茄子などの曖しいものとは籍が違ふ。シテ〽それは如何なる仔細で橘には威勢があるぞ。アド〽橘といふものは。上樣の御手にも觸れられ。紫宸殿の御庭の傍にも近う植置かれ。年始の御儲物にも据ゑ侍られ。御そうきやうある。なか〳〵茄子などは似た事もあるまい。シテ〽いや〳〵茄子はすはなり初めて花落より秋茄子に至る迄。御上座樣の御膳に調進する。まづよく湯たきして。柔かになる程あんばいよく調へて參らすれば。別して御老體樣方は每度御賞翫なさるゝ。すれば上々の御手に觸れるも同前ぢやによつて。少しも橘に劣る事ではないぞ。アド〽いや橘はめでたい系圖のあるものぢや。尤も貴人の御詠歌もあるが。茄子も其樣な事があるか。シテ〽橘になんぞめでたい古歌があるか。アド〽井手の左大臣諸兄公の御歌に。橘は。實さへ花さへ其葉さへ。霜はおくともただときになれとある。何と茄子にも古歌があるか。シテ〽急には思出されぬ。歌より近い事がある。茄子は何料理にしても風味のよいものぢやによつて。上つ方も召上らるゝ。橘は風味のないものぢやによつて。茄子に劣つたものぢや。アド〽歌になければ曖しいものぢや程に。某に禮拜なせい。シテ〽草木と別れて別に高下のないものぢや。そちに禮拜なせう仔細がない。アド〽禮拜なせずは目に物を見せう。シテ〽そりや誰が。アド〽身共が。シテ笑ふ。シテ〽茄子が橘に恐れう樣がない。目に物を見すると云うて深しい事はあるまい。アド〽につくいやつの。詞か〳〵。シテ〽なう〳〵腹立ちや〳〵。一切の非情草木の類に何の貴賤があらうぞ。斯程迄おとしめ打擲した程に。皆云合せて來て。今に思ひ知らせうぞ。ト云うて。中入する。小アド〽何れも出られたか。立衆〽何ぢや〳〵。小アド〽最前茄子

と橘と歌爭なして。茄子が打擲にあうたな恨に思うて。皆大勢を語らひ押寄せると聞いたが、何と是は一大事ではおりないか。立棗〳〵是は苦々しい事が出來た。小アド〳〵日頃の誼みぢや。いざ橘の味方に參らう。立棗〳〵一段とよからう。小アド〳〵なう〳〵。檬々。アド〳〵是に何れも何として出られた。小アド〳〵最前茄子と何やら爭ひをなされたげな。それな憤りて總て大勢押寄せるといふによつて。味方に參つておりやる。アド〳〵それ〳〵過分にこそあれさり乍ら。茄子の分として押寄せるも深しい事はあるまいぞ。小アド〳〵いや〳〵。用心はして悔めと云ふ。油斷はなるまい。ひらに拵へさしめ。アド〳〵それならば皆頼む程に。是へ寄らしめ。シテ一聲〳〵言の葉に爭ふ今の恨ぞと。心も猛く押寄する。エイ〳〵オウ。アド〳〵味方の勢は誰々ぞ。同〳〵味方の勢は誰々ぞ。昔も今も花やかなる橘の何某。色々しきは僕の十郞。柿の木には人もあり。のみ飛礫を打てやづれい桃。數にはあらねどみかんきんかんたてびは其なへかせつゝ。なめき叫んで押寄けり〳〵。エイ〳〵オウ。シテ〳〵押手の勢は誰々ぞ。同〳〵押手の勢は誰々ぞ。茄子の與市を納めとして。柚の皮の三郞太郞。栗の伊賀守都も近し梅津の何某。涼しき出立ち棗どの胡椒山椒の罪深けれど。一念にうかみかゝれる菩提樹かな〳〵。太鼓。カケリ。合戰の所。太鼓打上。シテ〳〵やら〳〵不思議や不思議やな。同〳〵俄に嵐吹落ちて。木末を拂ひ芝吹返す如くなり。永保の風も斯くやとばかり。あら〳〵寒やあら寒やと。あそこや此處にかゞめど寒さはやまぬ。木の實の精は如何ならん。木の實の精は如何ならんと。わが山々にぞ歸りける。

昆布賣（こぶうり）

シテ　昆布賣
アド　何某
（入道具）

アド〳〵この邊りの者で御座る。今日は北野のお手水の夜で御座る。參らうと存ずる。誠に。身共は人數多使ふ者なれども。今日は方々へ遣して。一人も宿に居ぬによつて。自身太刀を持つて御座る。斯う參る道すがら。似合はしい者も通らば言葉をかけ。この太刀を持たせて參らうと存ずる。先づ暫くこれに休んで參らう。シテ〳〵若狹の小濱の昆布賣で御座る。毎年都へ昆布を商賣に持つて上る。當年も相變らず上らうと存ずる。誠に。商賣人と申す者は淺ましいもので御座る。天氣の良いにも惡しいにも。持つて上らねばならぬ事で御座る。アド〳〵是へ一段の者が參る。言葉を掛けうと存ずる。なう〳〵これ〳〵。シテ〳〵此方の事で御座るか。アド〳〵成程わごりよの事ぢや。そなたはどれからどれへ。お行きやる。シテ〳〵若狹の小濱の昆布賣で御座る。毎年都へ昆布を商賣に持つて上りまする。當年も上る事で御座る。アド〳〵言葉を掛けるは別の事でも無いが。何と同道めさるまいか。シテ〳〵見ますれば御仁體で御座る。お連には似合ひませぬ。お先へ參りませう。アド〳〵連には似合うたもあり。又似合はぬもあるものぢや。是非とも同道致さう。シテ〳〵扨は是非ともで御座るか。アド〳〵なか〳〵。シテ〳〵それならばお供申しませう。アド〳〵何とお行きあるまいか。シテ〳〵何が扨。お出でなされませ。アド〳〵それならば。さあ〳〵おりやれ。シテ〳〵心得ました。アド〳〵扨ふと言葉をかけたに。早速同道召され。此樣な悦ばしい事はない。シテ〳〵お連には似合ひませねども。是非と仰せらるゝによつてお供致す事で御座る。アド〳〵何

とその昆布は大分賣れる事か。シテ〽大分賣る事も御座れ。又曾て賣れぬ事も御座る。アド〽何が扨商賣ならひぢや。さうなうては叶はぬ。さて初めて會うて馴れ〳〵しけれども。ちと無心があるが。聞いておくりやるまいか。シテ〽私づれに御用は御座りますまいが。似合ひました御用ならば承りませう。アド〽何しに似合はぬ用を云はうぞ。似合うた用ぢや程に。聞いてたもれ。シテ〽さやうならば畏まつて御座る。アド〽無心の云はうと云へば。聞いてくれうとあつて滿足致す。まづ禮を申す。シテ〽これは御用を仰付けられぬ先に御禮とあつて迷惑致す。まづ御用を仰付けられませ。アド〽きつと一禮申しておりやるぞや。シテ〽ハア。アド〽無心と云つぱ別の事でない。某は人數多使ふ者なれども。今日は方々へ遣して一人も居ぬ。それ故。お見やる通り自身太刀を持つた。この太刀が持つて貰ひたいと云ふ事ぢや。シテ〽其樣な結構なお太刀は終に見ました事も御座らず。又まして持つた事も御座らぬ。是はおゆるされませ。アド〽結構なとおしやれば迷惑ぢや。隨分麁末な太刀ぢや。持つておくりやれ。シテ〽どう御座らうとも御ゆるされませ。アド〽扨は諸侍に一禮まで云はせておいて。しかと持たぬか。シテ〽まづお待ちなされませ。アド〽何と待てとは。シテ〽成程畏まつて御座る。アド〽いや。お畏まりやるまいものを。シテ〽畏まつて御座る。アド〽畏まつた。シテ〽ハア。アド笑ふ。アド〽是はざれ事ぢや。氣にかけずとも持つておくりやれ。シテ〽おまへのおざれ事は。こはいおざれ事で御座る。アド〽斯う云ふも。賴まう者のなさの事ぢや。さあ〳〵おりやれ。シテ〽ハア。アド〽おりやるか。シテ〽參りまする。アド〽これは如何な事。それは昆布の片荷ぢや。手に持つておくりやれ。シテ〽手があきませぬ。アド〽こちらの手があいてある。シテ〽これは斯う肩を替へる時に要りまする。アド〽又こちらの手があいてあるぞや。シテ〽是もまた斯う肩を替へる時に入りまする。アド〽所詮その昆布があるによつて何かとおしやる。昆布は身共が買うてやらう。シテ〽それは有難う存じまする。アド〽さあ〳〵。昆布は身共が買うた程に。手に持つておくりやれ。シテ〽畏まつて御座る。アド〽さあ〳〵おりやれ。シテ〽ハア。アド〽おりやるか。シテ〽參りまする。アド〽これは如何な事。それは進上太刀の持ちやうぢや。身にひつ添うて持つておくりやれ。シテ〽身にひつ添うて御座るか。アド〽なか〳〵。シテ〽畏まつて御座る。アド〽さあ〳〵おりやれ。シテ〽ハア。アド〽おりやるか。シテ〽參りまする。アド笑ふ。アド〽身にひつ添うてと云へば。しつかい子を抱いたやうな持ち樣ぢや。扨は眞實太刀の持ち樣を知らぬと見えた。ついで乍ら敎へてやらう。シテ〽それは忝う存じまする。アド〽惣じて。自身の太刀は左に。持主の太刀は右に持つものぢや程に。右に持つてお吳りやれ。シテ〽いや私はお前の内の者では御座らぬ。アド〽されば内の者ではなけれども。賴む上からぢや程に。持つてお吳りやれ。シテ〽さやうならば。斯うで御座るか。アド〽それ〳〵。最前の麁末とは違うて。いかう持ちぶりが上つておりやる。シテ〽イヤさうも御座らぬ。扨此上は私を内の者のやうに云うて呼ばせられい。答へませう。アド〽それは近頃過分な。身が使ふ者は太郎冠者と云ふ。太郎冠者と云うて呼ばう程に。答へてお吳りやれ。シテ〽畏まつて御座る。アド〽稽古の爲に呼うで參らう。シテ〽一段とよう御座らう。アド〽やい〳〵太郎冠者。シテ〽ハア。アド〽來るか。シテ〽ハア。アド〽引附いて來い。

笑ふ。今日は一段の者を連れて。此樣なよい慰みはない。シテ〽扨々腹の立つ事ぢや。がつきめ。やらんぞ。アド〽是は何とする。シテ〽最前から身共を色々となぶつたがよいか。是がよいか。たつた一打ちにせう。アド〽ア、先づ待て〳〵。所詮その太刀を持たせておくによつてぢや。その太刀をこつちへ戻せ。シテ〽何の戻せ。アド〽あぶないわいやい〳〵。シテ〽そのおのれが差いてゐる一腰をおこせ。アド〽諸侍が一腰を渡してよいものか。シテ〽おのれ。おこすまいか。アド〽やるわいやい〳〵。そりや。シテ〽柄（つか）の方を取直しておこせ。アド〽やりやうが氣に入らずばおかう迄よ。シテ〽おこすまいか。アド〽やる〳〵。シテ〽早うおこせ。アド〽そりや。シテ〽どりや。やい〳〵。この昆布を賣れ。アド〽侍が昆布を賣つた事はない。シテ〽おのれ。お賣りやるまいか。アド〽賣るわいやい〳〵。シテ〽早う賣れ。アド〽ヤイ。昆布買へ〳〵。シテ〽ヤイそこなやつ。アド〽何ぢや。シテ〽その樣に云うて誰（た）が召すものぢや。昆布召され候へ〳〵。若狹の小濱のめしの昆布召上られ候へ〳〵と。いかにも慇懃に賣れ。アド〽慇懃に賣つたらば。太刀も刀も返すか。

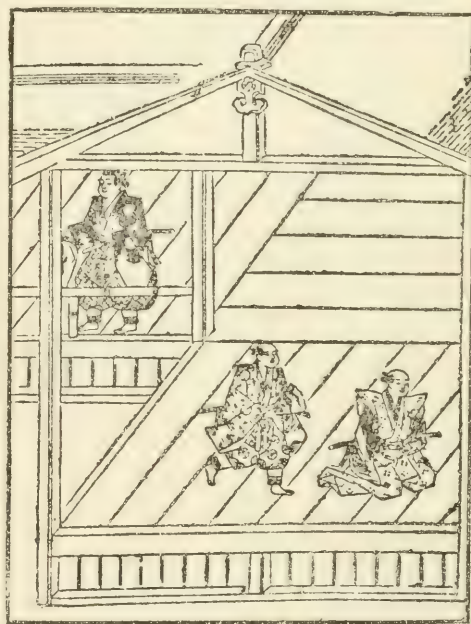
シテ〽まづ賣れ。アド〽昆布召され候へ〳〵。若狹の小濱のめしの昆布召上られ候へ〳〵。さあ〳〵返せ〳〵。シテ〽何の返せ。アド〽あぶないわいやい〳〵。シテ〽此度は謡ぶしに賣れ。アド〽その樣な事は知らぬ。シテ〽知らずは敎へてやらう。昆布召せ〳〵お昆布召せ。若狹の浦のめしの昆布〳〵。と賣れ。アド〽さう賣つたらば。太刀も刀も返すか。シテ〽まづ賣れ。アド〽心得た。昆布召せ〳〵お昆布召せ。若狹の浦のめしの昆布。若狹の浦のめしの昆布。さあ〳〵返せ〳〵。シテ〽何の返せ。アド〽あぶないわいやい。シテ〽此度は淨るりぶしに賣れ。是も賣つて聞かせうぞ。アド〽色々の事をぬかしをる。シテ〽つれてん〳〵てれ〳〵てん。アド〽それは何ぢや。シテ〽まづ三味線の心持ぢや。アド〽ハテこなたものぢや。シテ〽昆布召せ〳〵お昆布召せ。若狹の小濱のめしの昆布。つれてん〳〵てれ〳〵てん。と賣れ。アド〽似はせまいけれども。賣つて見ようぞ。つれてん〳〵てれ〳〵てん。斯うか。シテ〽まづ其樣なものぢや。アド〽昆布召せ〳〵お昆布召せ。若狹の小濱のめしの昆布。つれてん〳〵てれ〳〵てん。さあ〳〵返せ。シテ〽何の返せ。

此度は踊ぶしに賣れ。これも賣つて聞かせうぞ。アド〽樣々の事をぬかしをる。シテ〽昆布召せ〳〵お昆布召せ。若狹の小濱のめしの昆布〳〵。このしやつきしや〳〵しやつき〳〵しやつきしやと。浮きに浮いて賣れ。アド〽さう賣つたらば。太刀も刀も返すか。シテ〽まづ賣れ。アド〽心得た。（アドはシテの通りに踊ぶしに賣る。）シテうつる。シテ〽扨も〳〵器用なやつぢや。アド〽さあ〳〵返せ〳〵。シテ〽何の返せ。アド〽あぶないわいやい〳〵。シテ〽二字蒙つた者をいつ迄なぶらうぞ。此上は身共が行末繁昌と賣つたらば。太刀も刀も返すぞ。アド〽それは誠か。シテ〽誠ぢや。アド〽眞實か。シテおんでもない事。アド〽やら〳〵數知らずの君が御代のよろこぶや。シテ〽何とよろこべど。返すまいぞ。この太刀刀（かたな）。これが欲しいか。アド〽それは身共のぢや。こちへ返せ。シテ〽ならんぞ〳〵。アド〽あの横着者。どつちへ行くぞ。やるまいぞ〳〵。（ト云うて。追込み入るなり。）

昆布柿（こぶがき）

シテ　丹波の百姓
アド　淡路の百姓

小アド　奏者

アド〽淡路の國のお百姓で御座る。毎年御嘉例として御年貢に淡路柿を奉る。當年も相變らず持つて上らうと存ずる。シカ〳〵。誠に。毎年〳〵相變らず御年貢を納めると申すは目出度い事で御座る。當年も首尾よう納めて參ればよう御座るが。イヤ是迄來たればいかう草臥れた。暫く此處に休らうて。誰ぞ似合はしい人も通らば。言葉を掛け。同道致さうと存ずる。ト言うて。下に居る。シテ〽丹波の國の御百姓で御座る。毎年御嘉例として御年貢に昆布と野老を奉る。當年も相變らず持つて上らうと存ずる。シカ〳〵。誠に。戸ざさぬ御代と申すは今此時で御座る。天下治まり目出度い御代なれば上々の事は申すに及ばず。下までも存ずる儘の目出度い折柄で御座る。アド〽イヤ是へ一段の人が見えた。言葉を掛けう。なう〳〵これ〳〵。シテ〽ハアこなたの事でおりやるか。アド〽成程わごりよの事ぢや。こなたはどれからどれへお行きやる。シテ〽身共は用を前に當て。後から先へと行く者でおりやる。アド〽是はいかな事。誰あつて用を後に當て。先から後へ行く者は無い。眞實どれからどれへお行きやる。シテ〽先づわごりよはどれからどれへお行きやる。アド〽身共は淡路の國の御百姓。御年貢持つて上ると言ふ。シテ〽すれば同じ様な事ぢや。身共は丹波の國の御百姓。同斷。アド〽言葉を掛くるは。と言うて御館著き迄餅酒同斷。上げるも同斷。小アド〽淡路と丹波は海川山を隔てたに。同じ日の同じ時に持つて上つたとあつて。御感に思召す。さうあれば。折節お歌のお會の砌なれば。兩國のお百姓に御年貢によそへて歌を一首づつ詠めとのお事ぢや。急いで詠みませ。餅酒の通り。せり合言うて。シカ〳〵。

アド〽今年より。所領の日記かきまして。シテ〽よろこぶ儘にところ繁昌。小アド〽一段と出かいた。ト言うて披露する。同事。やい〳〵。時の御笑草に仰出されたな。一段と出かしたとあつて。御滿足に思召す。さうあれば。萬雜公事を御赦免なさるゝ。二人〽それは有難う存じまする。小アド〽その上前世下されたる事は無けれども。お流れを下さる。是へ寄つて頂戴せい。シテ〽それは忝う存じまする。アド〽有難う存じまする。小アド〽さあ〳〵飲め飲め。二人〽ハア。小アド〽扨々汝等は冥加に叶うた者ぢや。シテ〽何れ冥加に叶ひました者で御座る。小アド〽引達へて三獻づつ飲め。アド〽猶以て。二人〽有難う存じまする。小アド〽さて汝等が名を御帳面に留めさせらるゝ。急い

で申上げい。 シテへいや私共は名も無い者で御座る。 小アドへ名の無いと言ふ事があるものか。先づ淡路の國の御百姓名はなんと言ふ。 アドへ問うて何にしよ。 小アドへ何にしよともそちが構ふ事はない。 アドへ問うて何にしよ。 小アドへ推參なやつの。御意ぢやがしかと申さぬか。 アドへいや。問うて何にしよと申すが私の名で御座る。 小アドへ是は珍しい名ぢや。さあ〳〵汝も申し上げい。 シテへ栗の木のぐせいにたりうだにもりうだもりうだにたりうだばい〳〵にきんばばいさんばばいにばいやれ。 小アドへやい〳〵やいそこなやつ。御前近い。それは何事を言ふぞ。 シテへ是は私の名で御座る。 小アドへ何ぢや。それが名か。 シテへさやうで御座る。 小アドへ扨々長い名かな。その様な長い名は身共は得申上げぬ。汝等御白洲へ廻つて直に申上げい。 シテへ畏まつては御座れども。私共は異體な者共で御座るに依つて。お奏者へお願ひ申上げまする。 小アドへいや〳〵その儀は苦しうない。とかく直に申上げい。 シテへさやうならばお奏者へお願ひが御座る。 小アドへそれは何事ぢや。 シテへ私共は國の習ひで。問ふ事もいらゆる事も。左右小拍子に掛かつて申し習うて御座る。あはれお奏者にも。小拍子に掛かつてお尋ねなさるゝならば有難う存じまする。 小アドへいや〳〵それはづッと不調法な。許してくれい。 アドへさやうに仰せられずとも。どうぞお頼み申上げまする。 小アドへそれならば尋ねうが。して是はどちらから尋ねう。 シテへ淡路は國の初めと申す。淡路の國からお尋ねなされませい。 小アドへ汝等は小ざかしい事を言ふ。それならば淡路の國から尋ねう。ト言うて拍子に掛かる。囃子方アシラフなり。 小アドへ淡路の國のお百姓の名をば何と申すぞ〳〵。 アドへ問うて何にしよ。 小アドへ丹波の國のお百姓の名を何と申すぞ〳〵。 シテへ栗の木のぐせいに。たりうだにもりうだ。もりうだにたりうだ。ばいばいにきんばばいきんばばいにばいやれ。ト云うて。三人共うき。段々つめて拍子にかゝり。三べん云うてまはり。シヤギリ吹きかゝる。三人共常の通りとめて入る。

【さ】

塞翁　鷺流

シテ　祖父
アド　子
アド　立衆

アドへこれは此の邊りの者で御座る。隨分仕合せもよう繁昌致いて。兄弟も數多もつて御座る。某をはじめ皆成人の悴を持つて御座る。それにつき今に稚名で御座る。所で名を改めとらせたいと存じ。兄弟打寄り談合致いて御座るが。親ぢや人は。若い時より善い事も悦ばず。悪しい事も悲しまず。ただ何事も人間萬事塞翁が馬とばかり言うて居られまするに依つて。皆何れも異名に塞翁とつけて置かれました。斯樣の事で御座るによつて。とにかくに親ぢや人の篤と合點でなくはなりますまい。所で今日は皆同道致いて參つて。其の由を申さうと申し合はいて御座る。何れも居さしますか。 立衆頭へこれに皆居りまする。 アドへ申合はいた通り。追附け參らう。 立頭へなか〳〵。皆待つて居りまする。急いでお供申しませう。ト同道にて行く。アド先に立つ。 アドへまうしお内に御座りまするか。兄弟の者共皆打揃うてお見舞に參りまして御座る。 シテへ祖父を呼ぶは誰ぞ。いやこれは和御寮か。 アドへ私で御座りまする。兄弟とも親子づれでお見舞を申し上げまする。 シテへようおりやつた。先づ通らしませ。シテ舞臺の眞中に腰かける。右のかたにアド。左に立衆居る。

アドへ久しうお目懸も申し上げませぬが。身代な稼ぎまする故他國へも參り。何かと致す故再々は參りませぬ。殊の外御息災さうに御座つて目出度う存じまする。シテへそれはよい心がけておりやる。祖父も若い時稼いだ故に今樂な致すが。これも人間萬事塞翁が馬でおりやる。この中は息災な事もあり。又さうも無い事もある。所で皆塞翁が馬でおりやる。やい〳〵。皆たまさかにわせたに。飴でも舐らせませいやい。アドへさて今日參りましたは別の事でも御座らぬ。三人の者共が皆成人仕つて御座るが。稚名で御座るによつて。名を變へて下されまするやうにと存じ。これ迄召し連れて參りまして御座る。シテへ何と子供に名をかへてやらうと思うて連れて來た。いはれぬ事。今迄の名で置かしまさいて。かへてよからうかわるからうか。ただ何事も人間萬事塞翁が馬と思つて居ればよい。アドへいやさやうては御座れども。皆願うてこれまで參り。是非ともと申してかへてくれいと申しまする。シテへいやならぬといふに。アドへいや尤も人間萬事塞翁が馬と仰せられまするが。お前こそ塞翁ですみますれ。又世に交りますれば。さやうにもなりませぬ。最早此の間皆嫁共が青梅な好みまする。それに親にならう者共が。童名では置かれませぬ。シテへこれをお聞分けなされて下されませい。シテへこれは一段と目出度い。それならばかへてもやらう。是處へ連れておりやれ。シテへさらば何と附けてやらうぞ。先づ興がつた事な云うて來た程に。そちが名ならば。興がりと附けう。（言葉のべて悦ぶ。）シテへそなたが子は。やようがりと附けう。又これも面白い。所でこゝなは。面白うと附けう。（一同悦び。言葉を云ふ。）何と氣に入つたか。（皆よきやうに云ふ。）満足した。折角附けても氣に入らねば如何なが。さてこのやうな祝には。太刀の刀のと云うて出すが。祖父は稲御寮たちへ、その様なものは讓つて。手前には金銀米錢ばかりおや。所で此の引出物には鳥目百貫づつおまするぞ。（何れも禮を云ふ。）禮に及ばぬ。さてむさと費はずと。私物として段々殖やさしませ。一同へ畏まつて御座る。隨分殖やしませう。シテへさて今つけて名を早忘れた。そちは何と附いたぞ。（ト一人〳〵に名を聞く。）年寄つて今の事も忘るゝ。何卒覺えたいが。何とせうぞ。アドへそれならば。お慰みながら目出度う囃子物になさい。何遍も問はせられたならば。覺えさせられませう程に。塞翁が孫嫡子の名ならば何と云ふやらん。と仰せられませい。皆拍子にかかつて答へませう。シテへ是は一段とよからう。さあらば問はうぞ。塞翁が孫嫡子の名をば何といふらん。アドへけうがりも候。立衆頭へやよがりも候。立衆へ面白うも候。シテへ塞翁が孫嫡子の名をば何といふらん。アドへけうがりも候。立頭へやよがりも候。立衆へ面白うも候。（ト幾度もかへし。間次第にウツキリ。シヤツキにて留める。一同立ち。シテのあとにつき。シヤギリにて廻り。シテは先に出で。アド立衆はあとにならび。留めるもあり。先づはシテばかりにて。シヤギリ止めにするがよし。）

賽の目

シテ　聟
アド　舅
小アド　太郎冠者
聟二人
乙
（入道具）

アドへこのあたりに有德な者で御座る。某娘一人持つて御座る。何者にはよるまい。算勘の達したるを聟に取らうと存ずる。さり乍ら。斯様に申すばかりでは人も知るまい。此由を高札に打たう。（ト常の如く打つ。）アドへ太郎冠者

あるか。（出る。常の如し。）　アドへ高札の表に就いて聟がわせたらば。此方へ知らせ。小アドへ畏まつて御座る。アドへエイ。小アドへハア。ムコへこの邊りの者で御座る。近所に有德人があつて一人娘を持たれて御座る。何者にはよるまい。算勘の達したるを聟に取らうと高札を上げられた。某參つて聟にならうと存ずる。シカ〳〵。世間には面白い人が御座る。聟と云はゞ先づ器量好み。或は筋目の詮議をもせられさうなものぢやに。算勘を達した者とは。變つた物數寄で御座る　何かと云ふ内に是ぢや。先づ案内を乞はう、（案内を乞ふ。出る者常の如し。）　ムコへ高札の表について聟が來たとおしやれ。小アドへ其由申しませう。暫くそれにお待ちなされませ。ムコへ心得た。小アドへ申上げまする。アドへ何事ぢや。小アドへ高札の表について聟殿のお出でて御座る。アドへかうお通りなされと云へ。小アドへ畏まつて御座る。かうお通りなされませ。ムコへ心得た。不案内に御座る。アドへようこそ出でさせられたれ。高札に算勘の達したお方と打ちましたが。さやうで御座るか。ムコへ忰の時分から好きまして稽古致して。おそらく達して御座る。アドへ然らば先づお尋ね申さう。五百具の賽の目の數は何程で御座る。仰せられい。ムコへされば何程御座らうぞ。是は存じがけない事をお尋ねで御座る。およそ五六三拾。五五二拾五。三千七八百も御座らうか。アドへ其樣な事では埒が明きませぬ。殊の外算勘は未熟に御座るさうな。ムコへ先づ待たせられい。五百具は賽の數が千ぢやに依つて。一が千でこれが。（ト云うて指を折る。）　アドへいや〳〵。それではなりませぬ。太郎冠者。戻しませい。小アドへ畏まつて御座る。サア〳〵歸らつしやれ。ムコへ扨も〳〵氣の短い事かな。（ト云うて入るなり。）　ニムへこれはこのあたりの者で御座る。あたり近い有德人があつて。一人娘を持たれた。何者にはよるまい。算勘の達した者を聟に取らうと高札を上げられた。某參り聟にならうと存ずる。シカ〳〵。誠に男は算勘の好まるゝは殊の外勘辨な人と見えた。某が聟になつて御座らば。渡世に氣を附けて。孝行に致さうと存る。參る程に是ぢや。先づ案内を乞はう。（此の間の事前に同じ。）　小アドへ申上げまする。聟殿のお出でて御座る。アドへかう通しませい。小アドへ畏まつて御座る。かう御通りなされませ。ニムへ心得た。不案内に御座る。アドへ初對面で御座る。さて高札の表にしるしました。定めて算勘に達しさせられたか。ニムへ幼少より好きまして。おそらく達して居りまする。アドへそれならば。五百具の賽の目の數は何程で御座る。ニムへこれは終につもつて見た事が御座らぬ。先づ算盤をお出しなされい。アドへ算盤に及ぶ事では御座らぬ。そなたは算勘に達した人では御座るまい。ニムへ算は中つもりには心許なう御座る。アドへ算法を御存じないさうに御座る。先づ歸らつしやれ。ニムへそれならばとくとつもりまして。明日參つて申さう。アドへいかな〳〵。その樣な事ではなりませぬ太郎冠者。戻しませい。小アドへ畏まつて御座る。サア〳〵先づお歸りなされい。（ト云うて引き出す。）　ニムへ扨ゝ短氣な事かな。（ト云うて入るなり。）　シテへ隱れもない算者で御座る。近所に有德人があつて一人娘を持たれて御座る。何者にはよるまい。算勘の達したものを聟に取らうと高札をあげられた。某參つて聟にならうと存ずる。シカ〳〵。惣じて男の藝は讀み書き算用と申すが。中にも算用より一切の事を割出して。如何やうの夥しい積りも即座に知るゝは算勘の德で御座る。何かと云ふ内に是ぢや。是に高札がある。扨も〳〵墨黑に書かれた。（ト仕方あり。）　先づ是はこの花聟がひくです。先づ案内を乞

はう。常の如し。　シテ〽高札の表について聟が來たとおしやれ。　小アド〽其由申しませう。暫くそれにお待ちなされい。　シテ〽心得た。　小アド〽申上げまする。　アド〽何事ぢや。　小アド〽高札の表について又聟殿がお出でて御座る。　アド〽かう通しませい。　小アド〽畏まつて御座る。かうお通りなされませ。　シテ〽心得た。不案內に御座る。　アド〽初對面で御座る。さて高札に算勘を達した人と打ちましたが。如何で御座る。　シテ〽凡そ日本に私に竝ぶ算者はあるまいと存ずる。唐算なりとも投算なりとも。お望み次第合してお目にかけませう。　アド〽然らば早速申さう。　五百具の賽の目の數は何程で御座るぞ。　シテ〽それは知れた算で御座る。どうぞむつかしい事を仰せられい。　アド〽いや先づそれが承りたい。　シテ〽然らば申して聞けませう。　壹一千に貳二千。三三千に四四千。合すれば一萬。五五千に六六千。合すれば壹萬千五百具の賽の目の數が。都合貳萬千也。やはか違ひは候ふまい。　アド〽扨々そなたはいかい算者で御座る。此上は如何にも聟に致さう。早速で御座れども。幸ひ今日は吉日で御座れば。この跡式を渡しませう。則ち娘にも引合はせませう。太郎冠者。おごうをつれて來い。　小アド〽畏まつて御座る。ト云うて樂屋に入り。乙をつれて出る。　アド〽さて身共は隱居へ引込みまする。この上は隨分精を出して家相續する樣にして下され。なう／＼おごう。是に御座るは聟殿ぢや。向後夫婦にするからは。兩人仲ようして。世帶の事を大事にして。身共へも孝行にしてたもれ。聟殿賴みまする。最早身共は奥に參る。ト云うて舅は樂屋へ入る。太郎冠者もついて入る。シテもぢ／＼恥かしさうにして立つ。　なう／＼嬉しや／＼。ざつと濟んだ。ト物を云ひかけ笑ふ。これより後。角水に同斷。

財寳（ざいはう）

シテ　祖父　（入道具）
アド三人　孫

アド〽この邊りの者でござる。こゝに財寳と申して目出度い祖父御を持つてござる。今日は最上吉日でござる。烏帽子を著せて貰はうと存ずる。又某の樣な孫共がござる。これを呼び出して同道致して參らう。なう／＼ござるか。　二人〽これに居まする。　アド〽今日は最上吉日でござる。內々申す通り。財寳のお方へ參り。烏帽子を著せて貰ひませうと存ずるが何とござらう。　二人〽一段とようござらう。　シカ／＼。　アド〽誠に。あの祖父御の樣な果報なお方はござるまい。御富貴と申し。御壽命と云ひ。何おろかのないお方でござる。　小アド〽何とぞあの祖父御樣にあやかりたい事ではござらぬか。　次アド〽その通りでござる。　アド〽何かと申す內にこれぢや。先づ案內を乞ひませう。ト云うて案內を乞ふ。　シテ〽表に案內がある。案內とは誰そう。　アド〽孫共がお見舞申しましてござる。　シテ〽扨々珍らしや／＼。先づかう通れ。小アド床机を出し。シテ腰かけさせる。　シテ〽この中も、この孫共はちと見舞うても吳れさうな事ぢや。祖父を見限つて來ぬかと思うた。今日はどち風が吹いて來さしました。　アド〽お恨みは御尤もに存じまする。この中は何れも渡世に隙を得ませいで。御無沙汰を申上げました。　シテ〽その樣な事とは知らいで恨みたさり乍ら、孫共が來たらば取らせうと思うて。美しい物を調へて置いた。取らせう程にこゝへ來い。こりやこれなやらうぞ。ト云うて人形をやる。　アド〽扨も／＼美しい物でござりまする。　シテ〽人おこせと云はうともやるなよ。汝もやらうぞ。ト云うて。張子の類をやる。　小アド〽これは見事な物でござる。　シテ〽わるさを云ふとやらぬぞ。

小アド〽畏まつてござる。シテ〽汝も欲しいか。ニアド〽私も欲しうござる。シテ〽こりや〳〵。これは面白い物ぢや。ちと吹いて見よ。アド〽さあ〳〵吹いて見さしやれ。次アド貰うて笛を吹く。シテ〽扨も〳〵よう鳴るは。アド〽何れも祖父御様はまだ其のやうに思し召すさうにござる。二人〽その通りでござる。シテ〽さて今日は何と思うて。三人云ひ合せて來たぞ。アド〽今日は最上吉日でござる。祖父御様に烏帽子を著せて貰ひませうと存じて參りました。シテ〽何ぢや。あまぼしを呉れうと云ふか。やれ〳〵。孝行な孫共ぢや。祖父は年が寄つて齒が惡い。別してあまぼしはよからう程に。何程も呉れい。アド〽成程あまぼしも上げませう。今日は最上吉日でござる。烏帽子を著せて貰ひませうと存じて參りました。シテ〽烏帽子著せて貰ひたいと云ふか。アド〽左様でござる。シテ〽やれ〳〵奇特に思ひ立つて來たなあ。誠にこの祖父は果報な者ぢや。あやかる様に烏帽子を著せてやらうぞ。二人〽それは有難う存じまする。シテ〽何とつけうぞ。先づ汝は幼い時から愛嬌のある者ぢや。愛嬌の嬌の字を取つて。嬌ありと付けうぞ。アド〽これはよい名でござりまする。シテ〽又そちは外どもより田も多く作れども。終に不作をせず。兎角冥加に叶うた者ぢやと仰せらるゝ。冥加ありと付けてやらう。小アド〽これは有難う存じまする。シテ〽そちは幼少の時から亂舞に好いて。所の參會にも舞ひ遊び。面白う生付いたと何れも仰せらるゝ。面白うと付けう。ニアド〽これもよい名でござる。シテ〽皆氣に入つたか。アド〽成程宜しうござりまする。シテ〽祝うて盃をせう。銚子を出せ。小アド〽畏まつてござる。ト云うて。直に扇を擴げて立つ。各盃にて呑む。小アド御子孫もをうたひ出す。シテ〽嬌あり。一さし舞へ。アド〽畏まつてござる。アド小舞を舞ふ。舞ひ過ぎると。小アド小謡うたひて酌に立つ。シテ兩人連舞所望する。小アド二人連舞。すむとアド酌に立ち。さゝんざを謡ふ。シテ〽祖父が舞納めう。盃を取れ。ト云うて一舞[illegible]舞ひ様口傳あり。皆々ほめる。シテ〽扨この上は。孫共が手車に乘つて奧へ行かう。手車を拵へて呉れい。二人〽畏まつてござる。二人手車拵へる。一人後より介抱する。シテ〽拍子にかゝつて名を尋ねう。又そち衆も拍子にかゝつて答へて呉れい。アド〽畏まつてござる。これより囃子物。大小太鼓應答にて。財寶が孫共が名をば。何と申すぞと云ふ。嬌ありも候。冥加ありも候。面白うも候と申す。段々あり。手車に乘り。橋掛りにてシャギリ吹き出す。留めて入るなり。

咲嘩（さくくわ）

シテ　太郎冠者
アド　主人
小アド　咲嘩

（入道具）

アド〽この邊りの者で御座る。某初心講を結んで。近日連歌の當家にあたつて御座る。いづれもが連中で宗匠を頼めとおしやれども。身共が氣に入らぬ。又都のお伯父御様は。連歌をなさるゝに依つて。此度の宗匠に頼みに遣らうと存ずる。ト云うて呼出す。常の如し。アド〽汝呼出す別の事では無い。初心講を結んで。近日連歌の當家に當つた。いづれもは宗匠を頼めとおしやれども。身共が氣に入らぬ。又都の伯父御は。よう連歌をなさるゝに依つて。此度宗匠にお頼み申し度いと云うて來い。シテ〽畏まつて御座る。アド〽少々お隙入りが有らうとも。五日三日は逗留してなりとも御供して來い。シテ〽其段なそつとも御氣遣ひなされまするな。アド〽急いでいて頓て戻れ。ト云うてつめる。シテ〽火急な事を仰付けられた。先づ急いで參らう。誠に。身共は未だ都を見物致

さぬ。此度を幸ひに此處彼處をもゆる／＼見物致さうと存ずる。ヤア／＼。是は都近くと見えていかう賑かな。さればこそ都ぢや。田舎の家作とは違うて。軒と軒と仲よささうに。ひつしりと竝べた。扨も／＼賑かな事ぢや。ハア。身共ははつたと失念した事がある。伯父御様は何處もとに御座るやら。どの様なお方やら存ぜぬ。とくと聞うて來ればよかつたものを。遙々の所を問ひにも戻られまいし。何としたものであらう。ヤア。笑ふ。流石は都ぢや。賣買ふものも。呼ばはれば事が調ふと見えた。さらば身共も呼ばはつて參らう。しい／＼。そこもとに伯父御様は御座らぬか。田舎に甥を持つた伯父御様は御座らぬか。ト云うてゐる中。小アド出る。同斷。小アドへ洛中に心のすぐに無い者で御座る。あれに田舎者と見えて。何やらわつぱと申す。ちときやつにたづさはつて見ようと存ずる。なう／＼これ／＼。シテへ此方の事で御座るか。小アドへ成程そなたの事ぢや。そなたは此廣い街道を。何をわつぱとおしやる。シテへ田舎者の事で御座るに依つて。わつぱの法度をも存ぜいて申した。眞平御免なれ。小アドへいや／＼。わつぱの法度を咎むるではない。何をおしやる。事に依つたらば叶へておませうかと云ふ事ぢや。シテへそれは忝う御座る。私は頼うだ者の伯父御を尋ねまする。小アドへして其の伯父御を見知つておいやるか。シテへ是は又都人とも覺えぬ事を仰せらるゝ。存じてゐれば此様に呼ばはつてありきませぬ。知らぬに依つて呼ばはつてありく事で御座る。小アドへ是は身共が誤つた。すればそなたは仕合せ者ぢや。シテへイヤ仕合せと申しても。斯う見えた通りの者で御座る。小アドへいや／＼。其様に袖褄についての仕合せではない。身共にお會やつたが仕合せと云ふ事ぢや。シテへそれは又どうした事で御座る。小アドへ洛中に人多しと雖も。そなたの尋ぬる伯父は身共でおりやる。シテへヤア／＼。扨はお前がお伯父御様で御座りまするか。小アドへなか／＼。シテへすれば私は仕合せ者で御座る。さう仰せらるゝと。どうやらよう似まして御座る。小アドへして此度は何と云うておこされた。シテへ頼うだ者申しまする。初心講を結んで近日連歌の當にあたらせられて御座る。何れもが連中で宗匠を頼めとおしやれども。頼うだ者氣に入りませぬ。又お前には連歌をなさるゝに依つて。此度の宗匠にお頼み申したいとあつて。私をおこされて御座る。小アドへ行きたいものなれども。隙入があるに依つて得

行くまい。シテ〽少々お隙入があらうとも。五日三日は逗留してなりともお供して來いと申付けました。小アド〽其樣な御念の入つた事なればいてやらうぞ。シテ〽それは忝う御座る。いざお出でなされませ。小アド〽案内者の爲。汝先へ行け。シテ〽それはらばお先へ參りませう。小アド〽一段とよからう。シテ〽さあ〳〵お出でなされませ。小アド〽心得た。シテ〽扨お前のお出での通り申して御座らば。悦びませう。小アド〽して頼うだ者は。よう連歌を召さるゝか。シテ〽よう連歌をめさるゝやら。邊りの衆が氣に入りませぬ。小アド〽すればよう召さるゝと見えた。シテ〽イヤ何かと云ふ内に是で御座る。お出での通り申しませう程に。暫くこれにお待ちなされませ。小アド〽心得た。シテ〽申し。頼うだお方御座りまするか。（ト云うて案内。出る常の如し。）アド〽エイ太郎冠者。シテ〽ハア。アド〽戻つたか。シテ〽唯今歸りました。アド〽何と伯父御をお供して來たか。シテ〽成程お供致して御座る。アド〽何處においた。シテ〽御門前におきました。アド〽人は幾たりお連れなされた。シテ〽只御身すがらで御座る。アド〽それは合點の行かぬ事ぢや。あの人は假初に出らるゝにも。人の五人や拾人は連れられぬと云ふ事はない。シテ〽畏まつて御座る。（ト云うて。主に物かげより見せる體なり。）アド〽是はいかな事。あれを連れて來ると云ふ事があるものか。シテ〽御隙入があると仰せらるゝな。色色と申してやう〳〵とお供致して御座る。アド〽まだそのつれを云ふ。あれは見ごひの咲吪と云うて。大の盜人ぢや。シテ〽あのきやつがや。アド〽見ごひと云ふ仔細を知るまい。世の常の盜人は。人の目かはを忍んで取る。きやつは見た物を乞うて取る樣な者ぢやに依つて見乞ひ。咲吪とは盜人の異名。あの樣な者を連れて來ると云ふ樣な事があるものか。シテ〽扨は盜人にきまりましたか。アド〽おんでもない事。シテ〽扨々憎い奴で御座る。私をまんまとだましました。いでからめ取つて參りませう。アト〽アヽ先づ待て〳〵。如何に盜人ぢやと云うて。目に見た事もないに聊爾にからめとれはせまい。その上あの樣な者を荒立つれば。却つて仇をなすと云ふ。身共がよい樣にあしらうて歸さう程に。斯う通せ。シテ〽それはいらぬ事で御座る。アド〽おのれが何を知つて。斯う通しをれい。シテ〽アアいらぬ事ぢやがのう。そなたは物ぢやげな。小アド〽物とは。シテ〽見ごひの咲吪と云うて大の盜人ぢやげな。つらはしない身共を騙して。ようおりやつたの。小アド〽それぢやに依つて。身共は來まいと云ふものを。無理に云うて連れて來た。身共は最早歸るぞ。シテ〽アヽ先づお待ちあれ。頼うだ人のおしやるには。そなたの樣な人を荒立つれば。却つて仇とやら召さるげな。よい樣にあしらうて歸さうと仰せらるゝ。斯うお通りやれ。小アド〽いやも其樣な不首尾な所へ行く事はいやでおりやる。シテ〽アヽこれ〳〵。そなたをいなせば身共が迷惑をする。ひらに通つてお呉れやれ。小アド〽それならば通らう程に。そこな首尾を頼むぞ。シテ〽心得た。咲吪。（アド目はじきする。）小アド〽不案内に御座る。アド〽初對面で御座る。小アド〽私も田舍に甥を持つて御座る。若し彼が方から呼びに參つたと存じて。ふと參つて面目も御座らぬ。アド〽イヤ其樣な人違ひはあるもので御座る。私が是におりませうなれども。結句御窮屈に御座らう。太郎冠者を是におきませう。ゆるりと御休息なされませい。小アド〽是へはお構ひなされまするな。アド〽其間に御料理を申付けませう。小アド〽それは忝う御座る。アド〽太郎

冠者。是に居て御馳走申せ。シテ〽畏まつて御座る。さあ〳〵らくにお居やれ。小アド〽心得た。是は扨頼うだお方のお屋敷か。シテ〽成程頼うだ人のお屋敷ぢや。小アド〽扨も〳〵廣い事ぢやのう。シテ〽いや。まだあれからつツとあれ迄廣い事でおりやるは。小アド〽何れも廣い事ぢや。ト云ふ中。アド子を叩き呼ぶ。シテ〽呼ばるは。いて來うぞ。小アド〽いておりやれ。シテ〽何で御座る。アド〽あの樣な者は。つうと日恥しいものぢや。何を好くと云うて聞はゞ。小鳥を好くと云へ。シテ〽畏まつて御座る。アド〽中にも鶯を好くと云はう。シテ〽心得ました。さあ〳〵らくにお居やれ。小アド〽頼うだお方は何ぞお好きがあるか。シテ〽あるとも〳〵。小アド〽何な好かせらるゝ。シテ〽小鳥がお好きぢや。小アド〽何れ小鳥は面白い物ぢや。して小鳥の中にも何な好かせらるゝ。シテ〽物ぢや。小アド〽物とは。シテ〽何やらであつたが忘れた。アド〽忘れ居つたさうな。シテ〽それ。是程の小さい鳥が藪の中ならり〳〵とするものぢや。お主は知らぬか。シテ小アド〽それを身共が知らう樣がない。シテ〽ア、何やらであつた。オヽそれ〳〵。ぐひす〳〵。小アド〽何ぢや。ぐひす。シテ〽なか〳〵。小アド〽ぐひすと云ふ鳥は終に聞かぬぞ。アド〽是はいかな事。アドせいて又呼ぶ。シテ〽又呼ばるゝ。何で御座る。アド〽おのれ。ぐひすと云ふ鳥があるものか。鶯ぢやわいやい。シテ〽ア、これ〳〵。今のは違うた。小アド〽何と違うた。シテ〽鶯ぢや。小アド〽さうであらう。ぐひすと云ふ鳥は終に聞いた事がない。シテ〽それな忘れたと云うて。したたか叱られた。小アド〽ハア叱らいでも大事ない事な。シテ〽いつもあれでおりやる。アド呼ぶ。シテ〽又呼ばるゝ。いて來う。小アド〽いておりやれ。シテ〽何で御座る。アド〽また何な好くと云うて聞はゞ。鷹を好くと云へ。シテ〽心得ました。アド〽よう取ると云はう。シテ〽合點で御座る。こりや〳〵。まだお好きがある。小アド〽何ぢや。シテ〽鷹々。小アド〽何れ鷹はお大名の好かせられいで叶はぬものぢや。してよう取るか。シテ〽取るとも〳〵。昨日（きのふ）も肴屋町にいてするめ五連鰹節取つたは〳〵。小アド〽ア、鷹がや。シテ〽なか〳〵。小アド〽あの鷹がや。シテ〽おんでもない事。小アド笑ふ。アド〽是はいかな事。扨も苦々しい事ぢや。ト云ふこ。アドあせる。シテ〽又呼ばるる。何で御座る。アド〽扨々憎い奴の。鷹がするめや鰹を取つてよいものか。シテ〽でも昨日お臺所の鷹之介が取つて參つたでは御座らぬか。アド〽、あれは脊が高いに依つて。異名を高々とこそ云へ。鷹がするめや鰹な取つてよいものか。どうかう云ふ内に料理が出來た。給仕には誰を使はうぞ。シテ〽誰彼と仰せらるゝより。私になされませ。アド〽おのれが樣な腰の高い者が。何とやらゝるものぢや。シテ〽腰が高くば。いか程でも低めませう。アド〽ヤイ。腰の高いとは。おのれがやうな不調法者の事ぢや。ぢやと云うて。誰を使はう者がない。汝なりとも使はればなるまい。いはれん汝が才覺をやめて。身共が云ふ樣する樣にせい。シテ〽扨はお前の眞似なや。アド〽まだぬかしをる。最前から不調法者を使ひまして。こなたの手前へ面目も御座らぬ。太郎冠者。盃を出せ。小アド〽是は結構な御挨拶で御座る。シテ。アドの云ふ通り眞似するなり。アド〽盃を出せとはおのれが事ぢや。シテ。同じ樣に云ふ。アド〽いや最前身共が云ふ樣する樣にせいと云うたらば。眞似なするさうな。シテ同斷。アド〽それはおのれが事ぢや。シテ同斷。アド〽おのれな何とせう。ト云うて。アドシテを叩く。シテ同じ樣に云ひて小アドを叩く。小アド〽あいた〳〵。アド〽痛みませう。此方（こち）へ御座れ。

（シテ同断。）アドへエ丶苦々しいやつかな。（ト云うて。耳を持つて小廻りする。シテ同断。）アドへおのれは物に狂ふか。（ト云うて叩く。シテ同断。小アドを叩く。）アドへ痛みませう。こちへ御座れ。（シテ同断。）アドへ放しをれい。（シテ同断。）アドへ放しならいでなあ。（シテ同断。）アドへこゝな奴に物を云はせば方量がない。かうして置いたがよい。（ト云うて。シテを引廻し。打ちこかす。）小アドへちと其様になされたがよう御座らう。アドへそれにゆるりと御座れ。追付けお盃を出しませう。（ト云うて入る。）小アドへ是へはお構ひなされまするな。（シテ。アドの通り。此處な奴をと云うて。打ちこかす。アドの通り。挨拶して入るなり。）

酒講式（さけかうのしき）

シテ　師匠坊
アド　在所の者（三人又は二人、又は一人にても）

アドへこの邊りの者で御座る。某悴を一人持つて御座る。漸う成人致したに依つて。寺へ上せて手習を致させまするが、師匠坊が殊の外酒を呑うて。酔狂のあまりに。科もない子供を打擲せらるゝと申す。手前の悴も。此の間疵をつけられて。母に見せたと申す。在所の衆を呼出だし。相談致さうと存ずる。なう／＼御座るか。小アドへこれに居りまする。三人へ何事で御座るぞ。アドへ別の事でも御座らぬが。寺の師匠坊が酔狂をして、子供を打擲せらるゝと申すが。御存じで御座るか。小アドへなるほど承りました。三人へ此方（こなた）の悴も打擲に遭ひましたと申しまする。アドへ言語道断の事で御座る。今日（こんにた）は何れも申合はせて參り。よそながら意見を致さうでは御座らぬか。二人へ一段とよう御座らう。アドへさりながら。ただ參つては氣をふらるゝ事も御座らうに依つて。樽肴を持つて參りませう。三人へ心得ました。用意なさせられい。（樽を左に持つて出る。）用意よう御座る。アドへさあ／＼御座れ。小アドへ心得ました。アドシカ／＼。アドへ何と思召すぞ。出家と申し老人と云ひ。氣の毒な事では御座らぬか。小アドへ仰せらるゝ通り。あの樣に大酒を致されて。酔狂せらるゝは。笑止な事で御座る。三人へ其の通りで御座る。アドへ何かと申すうちにこれで御座る。（シテ柱の上舞臺の内より橋懸りへ見込む。）先づ案内を乞ひませう。（樽を後見座に置く。案内を常の如し。）三人へ私共で御座る。シテえい／＼（と云うて。一の松にて止り。表に案内が有るを云ふ。常の如し。）シテへようこそわせられたれ。先づかう通らしませ。アドへ畏まつて御座る。（表にて又逢ふ。シテ上座にアド下座につき下に居る。）シテへ此の中は久しう見えなんだが。毘に變つた事もないか。アドへ別に變つた事も御座りませぬ。小アドへ、お前にも御息災さうで。お目出度う存じまする。シテへいや餘り息災にもなけれども。一日／＼と暮らして居る事ぢや。三人へいや／＼御氣ぢやうに見えまする。シテへさてそちの子息（むすこ）もいかう手を上げた。アドへそれは御挨拶で御座りませう。シテへ、いやおれは嘘を云ふ事は嫌ひぢや。中々見事に書くて。アドへ此の中も清書を見ましたが。さのみ手を上げた様にも存じませぬ。シテへされば知らぬ衆の悪いと思ふが。結句手を上げたいぢや。アドへそれならば喜ばしい事で御座る。シテへさて此の間は一兩日も見えぬが。何とぞしたか。アドへされば其の事で御座る。どこが悪いとも見えませぬが。此の間はあそこやこゝが痛むと申しまする。又母が申しまするは。肩先に竹などで打擲した樣な跡が見ゆると申しまするが。誰ぞに打擲せられた事かと存じまする。シテへ其の樣な事もあらう。聞けば此の中子供が籔の中で相撲を取るとやら聞いたが。定めてあの子も。大きい者にかな取つて投げられて。疵を求めたものであら

う。アドへさ樣の事なれば。言語道斷憎い事で御座りまする。シテへいやもどの子供も〳〵。惡さなかうて。師匠に世話なかけるいの。（此の文句の中に立つて樽を持出で。シテの前に直す。）（三人下に居て樽を出し。）へさて是は。今日何れもお見舞申しました印に差上げまする。シテへこれはいはれぬ心遣ひを召されたの。アドへ手酒で御座る。お寢酒になされて下され。シテへ愚僧は。此の酒に上こす樂しみはないわいの。アドへ何とお慰みに一つ上りませぬか。シテへ是はよからう。早う開かしませ。三人へ畏まつて御座る。（後見座へ樽を持って入り。扇ひらき。葛桶の蓋と持出る。）シテへさて〳〵けふは徒然にあつたに。よい伽があつて。此樣な嬉しい事はおりやらぬ。（此の文句獨言に云ふなり。葛桶の蓋シテの前に置く。）三人へさらば一つ上りませ。シテへどれ〳〵。唯冷（ひい）やりとして覺えぬ。も一つ呑うで風味を覺えう。小アドへ一段とよう御座りませう。シテへ今覺えた。いつこれは格別よい酒ぢや。アドへお氣に入りましたか。シテへちとさゝう。そなたも一つ呑ましめ。アドへお盃は戴きませうが。私は下戸で御座るに依つて。御酒はえ下されませぬ。シテへ苦々（にがにが）しい男が。酒を呑まいで役に立つものか。思切つて一つ呑うでお見やれ。アドへ生れついて一ッ吸もえたべませぬ。シテへそれならば。老僧が若い時習うた舞を舞うて見せう。それを肴にちやうど一つ受けさしめ。アドへさ樣に仰せられまする程に。一つ受けても見ませうか。シテへ酌をしようか。三人へあの樣に仰せらるゝ。ちやうど受れ。（アド一人なれば。手酌よと御座る。）シテへおゝでかいた〳〵。（アド盃を下に置きて。）アドへお約束で御座る程に。御苦勞ながら一さしお舞ひなされて下されませ。シテへどりや〳〵。舞うて見せう。地を諷うてたもれ。アドへ畏まつて御座る。（爰にて小舞あり。）シテへあゝ腰が（但し景清の舞よし。老人の舞樣工夫あるべし。靜かなる方よし。口傳。）いたうて。中々舞はれぬ。アドへよいや〳〵。さても面白い事で御座りました。これはたべずばなりますまい。（アド呑んでシテにさす。）アドへ慮外ながら上げませう。シテへ是へおこさしめ。小謡。アドへお前はよう御酒を上りまする。シテへさうもなけれども。ただ酒が好きぢやに依つて。其の樣に見ゆるものぢや。アドへさて御機嫌もよう御座る程に申上げまする。蔭ながら承りますれば。此の間はいかう御酒が過ぎまするとやら。又お過ぎなされさうなとやら申しまする。ちとお控へなされたらよう御座りませう。（シテ此の文句を聞きて。きつとなり。）シテへわごりよはそれを誰に聞いた。アドへ誰と申す事も御座りませぬ。唯うす〳〵と風の吹く樣に承りました。（シテかぶりをふり。）シテへいや〳〵。これはそちの子息（むすこ）が云うたであらう。アドへいや悴が申したでは御座りませぬ。シテへ總じてそちの子息は。年のゆかぬなりで口がまふで。問はず語りをして。申ごとな云ふとあつて。在所の衆が憎む。ちと云附けて置かしめ。（アドも少しむつとして。）へさ樣の惡い事が御座らば。お師匠のお役に。きつと御意見をなされて下されたがよう御座る。シテへいや世間の子は。親に似るものぢやと云ふが。先づ第一わごりよが合點のゆかぬ人ぢや。アドへこれは迷惑で御座りまする。（シテ又かぶりをふり。）シテへいや〳〵。いやとは云はれまい。愚僧が呑まうとも云はぬ酒を持つて來て。振舞ふといふも。そなたまた呑むなと云ふも。おぬしたち。これは身共を嬲（なぶ）りに來たのか。（シテりきむ。）アドへさて〳〵勿體ない。私が何しにお前を嬲りませう。何と申してもお年の上で。若し御酒が過ぎましては。お煩ひでも出ますれば。如何と存じまして。か樣に申上げまする。シテへまだ其の樣な文盲な事をお申しやる。酒は百藥の長たりと云うて。諸の病を治するものぢや。その結構な酒を呑むなと云ふは。（少し思案して。）何ぞ愚僧に意趣があるもので

あらう。さあ〳〵出家でこそあれ、[illegible]覺悟を極めた。さあ〳〵意趣なおしやれ。少し進む 聞かう〳〵。アドへさて〳〵これは御無體で御座る。お前に御酒たげとむなう御座れば。今日一樽は持參致しませぬ。一つ上げませうと存じて。此の樽を持つて參りました。これでお疑ひを晴らさせられて下され。シテへそれならば。酒をふつゝりと呑むなではないか。小アドへいかな〳〵。さ樣では御座りませぬ。總じて蔭でも打寄りまして。酒を呑まうならば、お前の樣にこそたべたけれ、似合ひましたよい御酒振ぢやと申して、殊の外褒めまする。シテへそれはさういふ筈ぢや。上戸にも色々の癖があつて。醉狂ひして喧嘩をしたり、又は腹を立てゝ無理を云ひ、わあ〳〵と云うて。泣く樣なのもある。おれはただ酒を好いて。呑めば呑む程機嫌がようなつて面白い。それについて爰に酒講の式といふものがある。何と之を見たか聞いた事があるか。アドへいや終に見た事も聞いた事も御座りませぬ。アドへむさとは云はれども。云うて聞かせう。聽聞めされい。アドへ畏まつて御座る。シテへ酒が呑みたうて云ふではないが、此の式目を演舌するならば。先づ酒をしたゝかなうてからの事にせいとある掟ぢや。もそつと酒を出さしめ。三人へまだ酒があらうか存じませぬ。シテへはてそつとなりともあり次第〳〵。三人へ畏まつて御座る。シテ柱の上に立つて。さても〳〵面の憎い事かな。一向あの樣な者には呑ませてしまふがよい。爰にて後見座より樽を持出で。酒を出しました。シテへこれは樽ともに出したか。三人へあり次第と仰せらるゝ程に。樽ともに出しました。シテへ出かいた〳〵。さあお注ぎやれ。樽をふつて見て。三人へこれは皆になりました。シテへはお皆になつたか。えゝ道理〳〵。小さい樽ぢやもの。さてかの式目を讀うで聞かせう。床几を出さしめ。三人へ畏まつて御座る。樽を持つて入り。お相持出で。腰をかけさする。シテへ抑も酒に百遊の徳あり。茶に林間のなさけあり。佛雪山を出でし時、寒風烈しかりしかば、民糟といふ物を暖めて參らする。師走八日の温糟も此の題號なるべし。温糟とは糟を温めると書きたるも此の謂れなり。此のあたりよりそろ〳〵醉出すし 糟だにも重寶なれば。ましてしん〳〵の酒は。詞にも述べ難し。又佛の御弟子に。比丘には酒を許すとありしかば。且那のもとに行き。段々に醉ふ。餘りに〳〵入りほがし。佛前に歸るが歸りえで。嘆しき體に伏し轉び。蛭蛙に身を吹はれ。報の程を知らしめんが爲に。飲酒戒とは戒めたり。但しかくすが祕事ぞとよ。かくしてもかくしがひなき。あかみ上戸は笑止のものなり。又極寒 此の文句のあたりより追々に醉出し。後には大きに醉ふなり。床几にかゝり。ひよろつく事故。居眠る樣に見ゆるなれば。其の心得第一なり。腰より足のあたりにてひよろつく樣に工夫すべし。但し語の終までに。強く醉ふ樣の工夫專一なり。 極熱とて。暑き苦あり寒き苦あり。かの極熱の照りに照るに、冷し物に酒を冷し。一盃は呑み足らず。二盃は數惡し、三盃ばかり呑みぬればいいかなる阿加陀藥蘇香圓順胎散と申すとも。酒にはよも増さり候べき。又極寒の折節は。濁酒が重寶で。燗の程たしけまして三盃四盃六七盃。十盃ばかり呑みぬれば。額に汗はぢり〳〵と。極木のつらいも劣るまじ。風三ぞんな身なさるべし。かゝる目出度き講の式。これを見きけん檀那は。貧僧を供養せば。命と共に長持の酒の醉は憎みそよ。これこそ酒の講の式。よく聽聞し給へ。よく〳〵聽聞し給へ。アドへ何れも。アドシテの詮一ぱいになる樣に心得て立ち。此の文句をいふなり。二人へ何事で御座る。アドへ何と憎い事では御座らぬか。二人へさて〳〵腹の立つ事で御座る。アドへもはや堪忍袋が切れました。二人へ其の通りで御座る。アドへ致し樣が御座る。やいそこな坊主。突きこかす。シテこけて其のまゝ居る。シテへ何

ちや。アドへ最前から子供が師匠ぢやと思うて。云はせて置けば方途(はうと)もない。何を云ふぞと思へば、酒呑の贔屓ばかりなしなる。此のあたりよりそろ／＼起きる。シテアドを見て。その式目が何が有難い事がある。シテへ、酒を呑まぬに依つて何も知らぬ。上戸は此の式目を不断戴いて居る。少しあやかる様に。皆に一寸お突きしてそろそろ立ち、ひよろつく。そちたちにも戴かせうか。アドへ、まだ其のつれを云ふか。在所中云合はせて。子供を一人も手習にはやらぬぞ。シテへいやも子供はこいでも苦しうない。今日の様におもたせな。ト云うて。左の手出して招く。各へあの横着者やるまいぞ／＼。ト追込むなり。又アド腹を立てつゝ先に入つても。後より笑ひ／＼入るまあし。

茶子味梅(さすあんばい)

シテ　唐人

アド　妻（日本人）

小アド　處の者

（入道共）

アド女へこの邊りの者でござる。妾が連合(つれあひ)は唐人でござる。連れ添うてからは十年にも餘りまするに依つて。日本の言葉に通じまする。この中は何やら異な事を申して。ひたもの泣きまする。又こゝに物事御巧者なお方がござる。これへ參つて尋ねうと思ひまする。シカ／＼。誠に。知らぬ内は。何事を申すぞと思うて。心許なうござる。今日參つて樣子を申したらば。定めて知れうと思ひまする。これぢや。ト云うて案内を云ふ。出る事常の如し。女へ御存じの通り連合は唐人でござる。連れ添うてからは十年にもなりまするに依つて。何事も日本の言葉に通じまする。此中はこびた事を申してひたもの泣きまするに依つて。それをお前へ尋ねませうと存じて參りました。小アドへそれは何と云うて泣くぞ。女へ日本人無心我唐妻戀と云うて泣きまする。小アドへはて六ヶ敷い事ぢや。これをやはらげて見た時は。物と云ふ歌ぢや。日の本の。人の心のなかりけり。我唐土の妻ぞ戀しき。と云ふ歌ぢやに依つて。これは大方唐土(もろこし)の妻を戀しがると見えた。女へなう／＼腹立ちや／＼。妾がすき好うで夫に持つたではござらぬ。その上只今も申す通り、連れ添うて十年にも餘りまするに依つて、

何事も日本の言葉に通じまするに。妾が聞かぬ樣にもろこしの妻を戀しがると云ふ事があるものでござるか／＼。小アドへこれは腹の立つが尤もぢや。さり乍ら。きやつは異國の者の事ぢや。何事も堪忍召され。女へまだござる。茶子味梅と申しまする。小アドへそれは茶を呑まうと云ふ事ぢや。女へきすあんばいとも申しまする。小アドへそれも酒を呑まうと云ふ事ぢや。酒でも呑ませて隨分機嫌を取らしませ。女へいよ／＼こなたの前へも面目もなうござる。妾がむごうつらう當つて。茶も酒も呑まさぬ樣に思召す所もお恥しうござる。小アドへ尤もではあれども。今云ふ通り。わごりよより外にかたらうどもない者の事ぢや。おぬしが見離してはなるまい程に。隨分いたはつてやらしませ。女へ添うてこそござれ。何事も堪忍をしていたはりませう。小アドへそれは一段でおりやる。女へもうかう參りまする。小アドへようおりやつた。女へ扨も／＼ざつと樣子が知れた。先づ急いで歸らう。シカ／＼。云うても／＼。妾が聞かぬ樣に何かと申すは憎い事でござれども。誰殿の御意見に任せて。今日は酒(ささ)を用意致して。機嫌を取らうと思ひまする。ト云うて下に居る。シテ一セイへ唐

の東かつの西　日本地に住める者なり。これは唐土たいけん國に。そさんはいと云へる者なるが　十ヶ年以前日本に捕はれ。箱崎の浦に住居せり。日本人むしんぶとうさいれん。ト云うて泣く。　女へやいそこな奴　それ程唐土の妻が戀しくば。往にをつたがよい〳〵。シテへ茶子味梅。女へそれは茶を呑まうと云ふ事ぢや。シテへきすあんばい。女へそれも酒を呑まうと云ふ事ぢや。大方何事も日本の言葉に通ずるものを。人の聞かぬ様に云ふといふ事があるものかいやい〳〵。さり乍ら。今日は機嫌を取らうと思うて。酒を用意した。さあ〳〵これを飲うで機嫌を直さしめ。ト云うて。シテ唐音使ふ。盃を見て悦ぶ。　女へこなたは大きいが好きぢやに依つて。これを出しました。シテ唐音あり。酒を呑みて悦ぶ。

女へさゝが氣に入つて嬉しうござる。シテ唐音。

女へ成程戴きませう。ト云うて。女酒つぐ。シテ唐音。一度飲めと云ふ心なり。

女へ妾はその様には飲みませねども。それ程におしやる程に。一つ呑みませう。シテ唐音。　女へ一つ請持ちました。こなたの機嫌のよい時うたはつしやる詩とやら云ふ事をうたうて聞かせさつしやれ。シテ唐音。〳〵と云ふなり。たふけ　女へ厭と云ふ事があるものか。外に人はなし妾ばかりぢや。ひらにうたはつしやれ。シテ唐音。人に云ふなと云ふ心也。

女へ誰に云ふものでござる。早う云はつしやれ。シテへフウランドンニゴイテウフユカンナンツルホロケナンガンニイセンガンゴイチエツハチニイヨウテウニダラ。女へ扨も〳〵面白い事でござつた。さらばこれを進ぜう。シテ唐音。戴く。　女へ機嫌がようて嬉しうござる。シテ唐音。周囲に二さい。住居などし。女舞へと云ふ心なり。　女へなう〳〵きやうこつや。妾に舞を舞へとおしやるか。シテ唐音。

女へいかな〳〵。つひに舞うた事がござらぬ。許して下され。シテ唐音。是非と云ふ。　女へそれならば舞ひませう。ト云うて。シテ唐音。よろこびほめる。

女へ何の面白うござらう。シテ唐音。何にても小舞まふ。又女に盃をさす。アド戴き。ちよつとつぐ。無理に呑めと云ふ心なり。　女へその様には呑めませぬ。許して下され。シテ唐音。　女へ成程。それならば丁度呑みませう。唐土の樂とやら云ふ事を舞うて見せさつしやれ。シテ唐音。たふけ〳〵と云ふ。　女へ妾さへ舞ひましたに。ならに舞はつしやれ。シテ唐音。

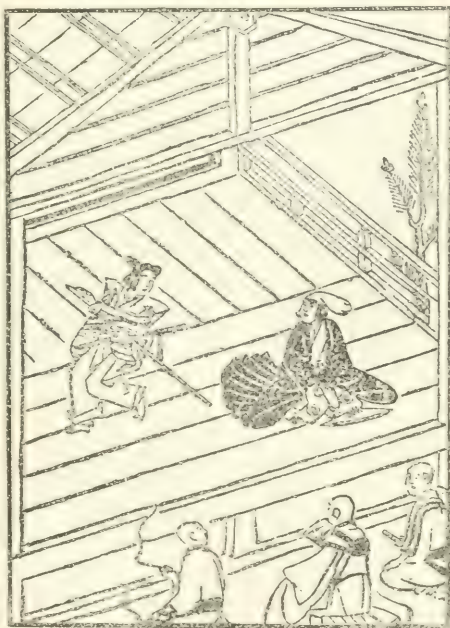
女へ何の誰にも云ふ事ではござるまい。シテ樂舞ふ。三段仕舞在語のまいて。たれに聞かするぞ。しきりのかゝりに唐音にふつ。扇にかけて。たつけいするに箱崎を指し。がくに三段。さて又日本人をなたものに云うて泣く。　女へエヽ腹立ちや〳〵。この様に機嫌を取るに。まだその様な事を云ふか。それ程唐土の妻が戀しくば往ねいやい〳〵。シテ唐音。腹立てる心にて。杖ふり上げる。　女へおのれ。ならば打つて見よ。シテ杖にて打つ所を。アドひき外し。杖引きとり。シテを叩き追込み入るなり。

嬉しき　さゝ事　呑むと云
フウライ／＼。ホウチヤウ／＼。テウカチ
ふ事　その通り　人に云ふ
ウレイシ。ヤアライインヒンチウ。アンラ
なと云ふ事　いたゞく　舞へと云ふ
ンフウコウセイ。チウライカ。テウカンシ
ならぬと云ふ
ンコイウセイリン。ケンランコウセイ／＼。
面白い　いやと云ふ事
チウクハン／＼。タフイ／＼。

薩摩守（さつまのかみ）

シテ　僧
アド　茶屋
小アド　渡守
（入道具）

シテへはるか遠國の坊主で御座る。某いまだ住吉天王寺へ參詣致さぬ。此度思ひ立ち住吉天王寺へ參らうと存ずる。シカ／＼。誠に。若い時旅を致されば。老いての物語がないと申すに依つて。ふと思ひ立つた事で御座る。いや。けさ齋（とき）のまゝなればいかう喉が乾く。湯なりと茶なりとも呑みたいものぢやが。アドへなう／＼御坊。茶を一つ參らぬか。シテへ唯今も獨言に申して御座る。成程一つたべませう。アドへまづ下に御座れ。さて御坊は旅立ちと見えたが。どれからどれへお行きやる。シテへ某は坂東方の者で御座るが。住吉天王寺へ參詣致すことで御座る。アドへ扨々それは奇特な事で御座るなう。シテへ若い時旅を致されば。老いての物語がないと申すに依つて。それ故思ひ立つた事で御座る。アドへ誰しもさう思へども。そのやうにはならぬものでおりやる。さあ參れ。ト云うて。茶を出す。シテ呑んで。シテへこりや熱う御座る。アドへむめて進ぜう。さあ參れ。ト云うて出す。シテ呑んで。シテへこれはあまりぬるう御座る。アドへよい加減にして進ぜう。これ／＼。シテへこれはよい加減で御座る。アドへも一つ參らぬか。シテへいやもたべますまい。アドへそれならばしまひませう。シテへ茶屋殿過分に御座る。アドへあゝこれ／＼。代りも置かずにどれへお行きやる。シテへ代りとは。アドへ茶代りを置いて行かしめ。シテへはあ今の茶に代りがいりまするか。アドへこれはいかな事。街道にゐる茶屋の茶を呑うで。代りの要らぬと云ふことがあるものか。シテへそれならば呑みますまいものを。アドへそれはどうした事でおりやる。シテへ恥かしい事で御座るが。代りと云うては一錢も持ちませぬ。アドへそなたは最前。住吉天王寺へ參るとはおしやらぬか。シテへ成程その通りで御座る。アドへこのあなたに神崎（かんざき）の渡しと云うて。大事の渡しがある。これは船中で船賃（せんちん）を取らねば渡さぬが。御坊は何と召さるゝ。シテへ何とおしやらるゝ。このあなたに神崎の渡しと申して御座るが。これは船中で船賃を取らねば渡さぬとおしやらるゝか。アドへなか／＼。シテへそれならば是非に及びませぬ。あれへ參つて拜うだも。これから拜うでも同じ事で御座る。これから拜うで下向致しませう。ト云うて。向ふへ出て下に居て拜む。アドへこれはいかな事。茶代りのないが誠さうな。茶代りは許してやらうと存ずる。いやなう／＼御坊。茶代りのないが誠さうな。茶代りは許し。船賃をもおませうぞ。シテへそれは忝う御座る。これへ下され。アドへいや／＼。そのやうに笠の内へ入れるものではない。神崎の渡し守は秀句好きぢやに依つて。船にたゞ乘る秀句を教へてやらうと云ふことぢや。シテへそれは忝う御座る。教へて下され。アドへ先づあれへお行きやつて。船に乘らうとおしやれ。一人や二人は乘せぬと云ふであらう。道者あまたあると云うて。たばかつて船に乘つたがよい。さて船中で船賃をおこせと云はゞ。平家の公達とおしやれ。心はと云はゞ。薩摩守。又心はと云はゞ。忠度とおしやれ。こ

れにはわけがある。昔平家の公達薩摩守と云ふ人があつた。その名乗を忠度と云ふた。今そなたがあれへいて。船に只乗りと言ふ薩摩守の名乗をよせ合はせて。忠度と云ふに何と面白うはないか。シテへこれは面白う御座る。アドへさうさへおしやれば。船頭が悦うで船にたゞ乗することでおりやる。シテへやれ〳〵。忝うこそ御座れ。下向道には参つて。きつとお禮を申しませう。アドへ必らずそれな待つことでおりやる。シテへもうかう参る。アドへ何とお行きやるか。シテへなか〳〵。アドへようおりやつた。シテへハア。なう〳〵。嬉しや〳〵。まづ急いで参らう。誠に。旅は道づれ世は情と申すが。茶代りな許すのみならず。船にたゞ乗る秀句まで教へてくれられた。茶屋のかげでざつと住吉天王寺へ参ると云ふものぢや。わあ。是に大きな川がある。これには定めし茶屋のおせあつた川でおらう。幸ひあれに船が見ゆる。おゝイ船に乗らうやい。小アドシカ〳〵の内に立つて神崎の渡守で御座る。ト名乗りて。舞臺に居る。その内シテより呼ぶ。但し今は名乗らぬ事あり。小アドへオ、イ此所は大事の渡しぢやに依つて。一人や二人は乗せぬわいやい。シテへ道者あまたあるわいやい。小アドへ何ぢや。道者あまたある。シテへなか〳〵。小アドへそれを今朝から待つてゐた。さらば船を寄せて乗せうぞ。エイ〳〵。道者あまたあるとおしやつたが。そなた一人か。シテへ道者あまたあれども。身共は先に船を取りに行く者ぢや。どうぞ乗せておくりやれ。

小アドへこれは尤もぢや。それならば。さあ〳〵乗らしめ。シテへ心得た。ト云うて乗る。ぐれつく心にて。シテへあゝ船頭船がかへる。小アドへこゝな者が云ひ出したことは。ト云うて。つき出す。シテへまうし〳〵船頭殿。まうし〳〵船頭殿。小アドへかしましい。何ぢやいやい。シテへ船の中で今の様なことは云はぬもので御座るか。小アドへどこにか船の中で今の様な事は云ふものでおりやるか。シテへ私は不案内に御座る。その上出家の事で御座る。どうぞ堪忍して乗せて下され。小アドへ乗せまいと思へども。云分がよいに依つて。了簡なして乗せてやらう。さあ〳〵お乗りやれ。シテへ船をぢつと留めてゐて下され。ト云うて。飛乗る。小アドへ心得た。こりや最前の麁相とに違うて。いかう乗振りが上つておりやる。シテへさうもおりない。小アドへさらば船を出すぞ。シテへ一段とよからう。小アドへエイ〳〵。さて御坊は旅立ちと見ゆるが。どれからどれへお行きやる。シテへ坂東方の者で御座る。此度住吉天王寺へ参る事で御座る。小アドへ扨

々若いに奇特な事ぢやなう。 シテ〽若い時旅をせねば。老いての物語がないと申すに依つて。思立つたことで御座る。 小アド〽誰しもさうは思へども。なか／＼そのやうにならぬもので御座る。さて聞きも及ばれう。此所は大事の渡しぢやに依つて。結句て船賃を取らねば渡さぬが。定めて御坊も船賃をお持ちやつたてあらう。 シテ〽船賃も持たいで船に乗るものでおりやるか。 小アド〽これは身共が誤つた。いつも此のあたりで取る。さあ／＼出しませ。 シテ〽やらうとも。 小アド〽いやこゝな者が。やらうぞいの／＼。やりもやらうず取りも取らうず。いつも此のあたりで取るに依つて。お出しやれといふことぢや。 シテ〽さてはどうあつても取らねばきかぬか。 小アド〽きかぬかと云ふことがあるものか。早う出さしめ。 シテ〽船賃は物ぢや。 小アド〽物とは。 シテ〽平家の公達。 小アド〽何ぢや平家の公達 シテ〽なか／＼。 小アド〽これはいかな事。船賃をお出しやれと云へば平家の公達。これはいかう合點がゆかぬ。 シテ〽神崎の渡守が。是程の事が合點がゆかぬと云ふことはあるまい。 小アド〽何ぢや。神崎の渡守が。これほどの事が合點がゆかぬと云ふ事はあるまい。 シテ〽なか／＼。 小アド〽何とやらおしやつたの。 シテ〽平家の公達。 小アド〽おゝ。平家の公達／＼。ハア若しこれは秀句ではないか。 シテ〽先づその様な事でもあらうかぢやまで。 小アド〽あらうかぢやまで、笑ふ。扨は御坊は秀句を云ふか。 シテ〽おんでもない事。 小アド〽扨々面白い人を乗せ合はせた。さりながら不審がある。神崎の渡守が秀句に好くと云ふことを。何としてお知りやつた。 シテ〽神崎の渡守が秀句に好くと云ふ事は。東(あづま)の果までかくれがない。 小アドそれは誠か。常の如くつめる。 小アド〽笑ふ。さてもう世には口のまめな者がある。身共が事でなくとも。外に咄も多からうに。神崎の渡守が秀句に好くと云ふ事を。東の果迄もついていて云ふような。壁に耳ぢや。笑ふ。何とやらおしやつたの。 シテ〽平家の公達。 小アド〽定めてこれには心があらう。 シテ〽おゝ心があるとも。 小アド〽その心が聞きたいの。シテ〽今の心には薩摩守。小アド〽又くはいた。笑ふ。扨々面白い人を乗せ合はせた。 あの向ふに見ゆるくず家は身共が所ぢや。船が着いたらば。身共が所へ連れていて。五日も十日も逗留させて。住吉天王寺へも身共が案内して拜ませう。 シテ〽成程船が着いたらば。そなたの所へ上つて五日も十日も逗留して。夜もすがら秀句を云うて遊ばうぞ。小アド〽それは腹が立たうぞ。笑ふ。今のは何とやらおしやつたの。 シテ〽薩摩守。 小アド〽成程薩摩守。これにも心があらう。 シテ〽おゝあるとも。 小アド〽さあ／＼。早うその心が聞きたい。 シテ〽いや此の心は大事の心ぢやに依つて、。向ふへ船が着かねば云ふことはならぬ。 小アド〽それならば。早う船を着けて心を聞かうぞ。エイ／＼。そりや／＼船が着くぞ。 シテ〽誠に。船が着くぞ。 小アド〽それ着いた。さあ／＼上らしませ。シテ〽心得た。船頭殿過分に御座る。 小アド〽あゝこれ／＼。今の心も云はずどれへお行きやる。シテ〽今の心は下向道に申さう。 小アド〽これはいかな事。船の着く間さへ待兼ねた。下向道迄何と待たるゝものぢや。さあ／＼早うおしやれ。 シテ〽今の心は茶屋が何とやらおせやつた。 小アド〽これはいかな事。今の心に何の茶屋が要るものぢや。早うおしやれ。シテ〽今の心は平家の公達。 小アド〽さればこそ平家の公達。公達の心に薩摩守。その薩摩守の心をおしやれと云ふことぢや。 シテ〽はて

薩摩守の心は薩摩守。小アド〽言語道斷。こゝな者　身共なぶる　見える。此の心を云はねばどつちへもやらぬぞ　シテ〽それは誠か。つめる。シテ〽いや今思ひ出したもいな。つめる。シテ〽青のりのひさぼし。小アド〽あのやくたいもない。とつとゝお行きやれ。シテ〽面目もおりない。ト云うて留めて入るなり。

佐渡狐

シテ　佐渡の百姓
アド　越後の百姓
小アド　奏者

アド〽越後の國のお百姓で御座る。毎年御嘉例として上頭へ御年貢を奉る。當年も相變らず。今持つて上らうと存ずる。シカ〳〵。誠に。毎年〳〵相變らず御年貢を納めると申すは目出度い事で御座る。當年も首尾よう納めて參ればよう御座るが。イヤ是迄來たればいかう草臥れた。暫く此所に休まう。似合はしい人も通らば言葉を掛け同道致さうと存ずる。ト言うて下に居る。シテ〽佐渡の國のお百姓で御座る。毎年〳〵御嘉例として。上頭へ御年貢を奉る。當年も相變らず。今持つて上らうと存ずる。シカ〳〵。誠に。戸さゝぬ御代と申すは今此時で御座る。天下治まり目出度い御代なれば。上々のお事は申すに及ばず。下々迄も存ずる儘の目出度い折柄で御座る。アド〽イヤ是へ一段の人が參つた。言葉を掛けう。なう〳〵これ〳〵。シテ〽ハアこなたの事でおりやるか。アド〽成程わごりよが事ぢや。そなたはどれへお行きある。シテ〽身共は用を前に當てゝ。後から先へと行く者でおりやる。アド〽是はいかな事。誰有つて用を後へ當てゝ。先から後へと行く者は無い。眞實どれからどれへお行きある。シテ〽先づわごりよはどれからどれへお行きやる。アド〽身共は越後の國のお百姓でおりやる。毎年〳〵御嘉例として。上頭へ御年貢を奉る。當年も相變らず。今持つて上る事でおりやる。シテ〽扨はさうでおりやるか。すれば其方の向ひの者ぢや。アド〽向ひでは終に見ぬ人ぢやぞや。シテ〽佐渡の國のお百姓でおりやる。アド〽ハア扨は國向ひと言ふ事か。シテ〽中々。アド〽して何と。シテ。アドの運り言ふ也。アド〽言葉を掛くるは別の事でないが。何と同道めさるまいか。シテ〽幸ひ一人て連れ欲しう存ずる。成程同道致さうぞ。アド〽それならば何とお行きある。シテ〽何が扨。わごりよが先ぢや。わごりよからお行きやれ。アド〽それならば身共から參らう。さあ〳〵おりやれ。シテ〽心得た。アド〽さて不圖言葉を掛けたに。早速同心召され。此樣な喜ばしい事はない。シテ〽牛は牛連れ馬は馬連れと言ふが。こなたも百姓身共も百姓。アド〽それ〳〵。シテ〽此樣に似合はしいよい連れはない。アド〽さて佐渡は離れた島ぢやに依つて。何か物事不自由であらう。シテ〽いかな〳〵。佐渡は大國によつて。何も不自由な事はない。アド〽いや〳〵。餘國に澤山に有る物が佐渡には無いと聞いた。シテ〽いやも餘國に澤山に有る物に。佐渡に限つて無いと言ふ物は無い。アド〽いや〳〵。佐渡には狐なども無いと聞いた。シテ〽狐か。アド〽中々。シテ〽狐はをる。アド〽いや〳〵狐は居らぬ筈ぢや。シテ〽狐に限らず猪猿狼狸何でも居る。アド〽餘の物は居ようが。狐に限つて居らぬ筈ぢや。シテ〽取分け澤山に居る。アド〽しかと言ふか。シテ〽しかと言ふが何とした。アド〽それならば賭祿にせう。シテ〽何ぢや賭祿にせう。アド〽中々。シテ〽成程賭祿にせうが。して賭け物には何を賭けう。アド〽銘々一腰賭けにせう。シテ〽それならば身

共も一腰賭けう。アド〽扨この批判を誰に頼まう。シテ〽イヤ今日のお奏者に頼まう。アド〽是は一段とよからう。さあ〳〵。おりやれ〳〵。シテ〽心得た。アド〽扨今日はそなたの蔭で。思ひも寄らぬ一腰を申請けると言ふ物ぢや。シテ〽それはあちらこちらぢや。そなたの蔭で思ひも寄らぬ一腰を申請けると言ふものぢや。アド〽それは追付け知るゝ事ぢや。シテ〽其通りぢや。アド〽イヤ何かと言ふ内に。はや御館(みたち)ぢや。シテ〽誠に御館(みたち)ぢや。アド〽さて汝は時の御奏者で上げるか。但し引附が有つて上げるか。シテ〽身共は引附が有るに依つて。身共から上げよう程に。暫くそれにお待ちやれ。アド〽心得た。小アド〽今日の御奏者で御座る。シテ〽物も案内も。小アド〽何者ぢや。シテ〽佐渡の國のお百姓で御座る。毎年御嘉例として御年貢を捧げまする。當年も今持つて上つて御座る。小アド〽御藏の前へ納めませ。シテ〽畏まつて御座る。小アド〽ヤイ〳〵。百姓は汝一人か。シテ〽御門前に越後のお百姓が居りまする。小アド〽上頭へは一緒に申上げう程に。是へ出よと言へ。シテ〽畏まつて御座る。扨お奏者にちとお願ひが御座る。小アド〽それは何事ぢや。シテ〽只今越後の國のお百姓と。不圖道連れに成りまして。何か物事噺し合ひまする内に。佐渡は離れ島ぢやに依つて。何か物事不自由にあらうと申しまする。又私は國贔屓を致して。何も不自由な事はないと申せば。佐渡に限つて狐が有るまいと申しまする。又私は有ると申しまする。この狐の有る無いと申す事を申上げて賭禄に致して御座る。何卒この御批判を宜しう頼みまする。小アド〽扨々それはむつかしい事を賭禄した。して佐渡に狐が有るかいやい。シテ〽エイ。小アド〽佐渡に狐が有るかいやい。シテ〽ハア、笑ふ。ア、是は近頃寸志ながら。どうぞお袖の下へお納めなされ下され。小アド〽ヤイそこなやつ。爰をどこぢやと思ふ。役所に於いて其樣な賂(まいなひ)がましい事はならぬ。取つて行け〳〵。シテ〽どうぞお納めなされて下され。小アド〽是はまた迷惑な事ぢや。シテ〽忝う存じまする。互ひに見合ひ。笑ふ。小アド〽して佐渡に狐が有るか。シテ〽御座りませぬ。小アド〽それならば。なり恰好も知らぬであらう。シテ〽終に見た事も御座らぬ。小アド〽越後の國のお百姓が尋ねたらば迷惑するであらう。なり恰好もあらまし教へてやらう。シテ〽それは忝う御座る。小アド〽先づ狐と言ふ物は。犬よりはすこうし小さい物ぢや。シテ〽ハア犬よりは小さい物で御座るか。小アド

へ面は細長う尖つてある。目は縦に切れてある。シテ〽たつに切れて御座るか。小アド〽口は耳せゝり迄切れてある。尾はふうさりと長い物ぢや。シテ〽ハア。小アド〽毛色は狐色と言うて薄赤い物ぢや。シテ〽あの薄赤い物て御座るか。小アド〽間には白いも有る。さうさへ言うたらば、汝が勝に成るであらう。シテ〽忝う存じまする。小アド〽汝は何も知らぬ體で。越後の國のお百姓に。是へ出よと言へ。シテ〽畏まつて御座る。アド〽何と上げさしましたか。シテ〽唯今請取めておりまする。わごりよの事を申上げたらば。上頭へは一緒に申上げうとの御事ぢや。急いで上げさしめ。アド〽心得た。（ト言うて。案内乞ふ。常の如し。前の通り。）アド〽扨お奏者にちと御願ひが御座る。小アド〽それは何事ぢや。アド〽只今佐渡の國のお百姓と不圖道連れに成りました。何か物事咄し合ひまする内に。佐渡に狐が有るまいと申し[illegible]きやつは有ると申しまする。この有る無いと申す事を申上げて賭禄に致して御座る。何卒この批判の宜しう賴み存じまする。小アド〽何と言ふぞ。佐渡に狐の有る無いと言ふ事を賭禄にしたと言ふか。アド〽さやうで御座る。小アド〽それは汝が口ばかり聞いては分らぬ。

佐渡のお百姓も是へ出よと言へ。アド〽畏まつて御座る。イヤなう〳〵。佐渡の國のお百姓。シテ〽何事ぢや。アド〽そなたにも御用が有るとのお事ぢや。急いでお出やれ。シテ〽心得た。ハア佐渡の國のお百姓出まして御座る。小アド〽今越後の國のお百姓の言ふを聞けば。佐渡に狐の有る無いと言ふ事を賭禄にしたと言ふは誠か。シテ〽さやうで御座る。小アド〽扨は是はむつかしい事を賭禄した。して賭け物には何を賭けた。シテ〽銘々の一腰賭けに致して御座る。小アド〽それならば先づ一腰を是へ出せ。シテ〽畏まつて御座る。是は私ので御座る。小アド〽これは見事な拵へぢや。アド〽是は私ので御座る。小アド〽是も劣らぬ拵へぢや。扨佐渡に狐の有ると言うたは。シテ〽私で御座る。小アド〽汝は佐渡の國のお百姓ぢやな。シテ〽さ様で御座る。小アド〽又狐の無いと言うたは。アド〽私で御座る。小アド〽汝は越後の國のお百姓ぢやな。アド〽さやうで御座る。小アド〽扨々むつかしい事を賭禄にした。佐渡に狐は。シテ〽ハア。小アド〽オヽ。シテ〽御座りまするか。小アド〽ムヽ有る〳〵。シテ〽御座りまするか。小アド〽汝が勝ぢや。シテ〽私が勝て御座る。

小アド〽早う取つて行け。シテ〽有難う存じまする。アド〽アヽ先づお待ちやれ。シテ〽何と待てとは。アド〽まこと佐渡に狐が有るならば。なり恰好を知つて居るか。シテ〽それを知らいでよいものか。アド〽なり恰好はどの様な物ぢや。シテ〽なり恰好か。アド〽中々。（シテ言ひ兼ねる所仕様有るべし。アドせき立てる。小アド氣の毒がりて。あせる。三人共色々工夫有るべし。尋ねる間同斷。仕様有り。口傳。）シテ〽物ぢや。アド〽物とは。シテ〽猪ぢや。アド〽何ぢや。猪。シテ〽いや猪より少し小さい物ぢや。アド〽成程猪よりは少し小さい物ぢや。面は。シテ〽面はかうぢや。（ト言うて。小アド傍よりして見する通りする也。凡て仕方有るべし。）アド〽かうとは何の事ぢや。シテ〽細う尖つて御座りまするなあ。小アド〽ホヽ細う尖つて有る。アド〽成程細う尖つて有る物ぢや。それならば目は。シテ〽二つ有る。アド〽二つ無うてなる物か。どの様になつて有る。シテ〽かうぢや。アド〽かうとは。小アド〽たつに切れて有るか。シテ〽たつに切れて御座りまする。アド〽成程たつに切れてある。それならば口は。シテ〽口は耳ぢや。アド〽耳とは何の事ぢや。（小アドあせり。小さき聲をして言ふ。仕方して見せるをアドは小アドを指々見る也。）シテ〽耳せゝり迄切れてある。アド〽尾は。シテ〽尾は無い。アド〽尾の無い狐

が有る物か。シテ〽丸い〳〵。アド〽何ぢや丸い。シテ〽いや〳〵ふつさりと長いものぢや。アド〽成程ふつさりと長いものぢや。それならば毛色は。シテ〽毛色か。アド〽中々。シテ〽黒い〳〵。アド〽黒い狐がどこに有る。シテ〽狐色と言うて薄赤いものぢや。アド〽成程薄赤いものぢや。小アド〽間には白いも有らうが。シテ〽成程白も御座ります。小アド〽はてよう知つて居るなあ。アド〽成程白いも有るものぢや。小アド〽是は汝が勝ぢや。シテ〽私が勝ちで御座りまするか。小アド〽それを取つて行け。シテ〽それは有難う存じます。さやうならば。もうかう參りませう。小アド〽もう行くか。アド〽私も參りませう。小アド〽兩人共よう來た。二人〽ハア。シテ〽なうなう嬉しや〳〵。今日はお奏者の蔭で。思ひも寄らぬ一腰をこなたへ申請けたと言ふものぢや。是は身共がよりは大分拵へがよい。此樣な嬉しい事はない。アド〽扨々合點のゆかぬ事ぢや。佐渡に狐は居ぬ筈ぢや。其上お奏者の頼附さも合點がゆかぬ。イヤ致し樣が有る。ヤイ〳〵佐渡の國のお百姓。シテ〽何事ぢや。アド〽まだ問ひ落した事が有る。シテ〽いや何も問ひ落した事は有るまい。アド〽いや〳〵。狐の鳴く聲を聞かなんだ。シテ〽それは最前言うた。アド〽いや聞かなんだ。シテ〽鳴き聲か。アド〽中々。シテ〽口で鳴く。アド〽口で鳴かいでどこで鳴く。何と言うて鳴く。シテ〽鳴き聲か。アド〽中々。シテ〽犬よりは少し小さい物ぢや。アド〽それはなり恰好の事ぢや。シテ〽鳴き聲はたつに切れてある。アド〽はてそれは目の事ぢや。鳴き聲を言へと言ふ事ぢや。シテ〽狐色と言うて薄赤いものぢや。アド〽それは毛色の事ぢや。シテ〽聞には白いも有るわいやい。アド〽おのれ鳴き聲を言はねば。どつちへもやらんぞ。シテ〽何ぢや。鳴き聲を言はねばどつちへもやらん〳〵それは誠か。常の如くつめる。シテ〽今思ひ出した。物と。アド〽何と。常の如くつめる。シテ〽月星日と鳴く。アド〽おのれそれは鶯の事ぢやわいやい。ト言うて。兩腰共引つたくりに入る也。シテ〽やい〳〵。せめて身共が一腰なりとも返してくれい。アド〽ならんぞ〳〵。トいうてはいる。

猿座頭（さるざとう）

シテ　座頭
アド　座頭の妻
小アド　猿曳
猿

（入道具）

シテ〽勾當で御座る。天下治まり目出度い御代なれば。毎年とは申しながら。當春の樣な長閑な事は御座らぬ。また承れば西山の花が最中で。男女老少によらず。夥しい花見ぢやと申す。それに就いて女共も花見に參りたがると承つて御座る。呼出し。相談致し。夫婦連で花見に參らうと存ずる。これの人ゐさしますか。樂屋より女出る。女〽今めかしや〳〵。妾な呼ばせらるゝは何事で御座る。シテ〽ちと相談する事がある。まづかう御出やれ。女〽心得ました。それは心許ない。先づ何事で御座る。シテ〽別に心許ない事ではない。聞けば西山の花が盛りぢやといふが。お聞きやつたか。女〽なるほど花が最中で。夥しい花見ぢやと承りました。シテ〽和御寮も何と花見に行き度うはないか。女〽花見に行き度う御座れども。とても遣らせられまいと思うて。言出しもしませぬ。シテ〽さればさう聞いたに依つての事ぢや。幸ひ今日は身共も暇ぢやに依つて。夫婦連で花見に行かうと思ふが。何とあらう。女〽なう〳〵。お前の目も見え

ぬなりで、何が面白うて花見に御座る。シテ〽、摂々晶かな事をおしやる。花をばかり見ると思はしむるか。昔の歌にも。この春は。知るも知らぬも狂静の。行きかふ袖の花の香ぞする。などと詠み置かれた。その樣にある時には。和御寮こそ花を見にお行きやらう。身共は花を嗅ぎに行かうと思ふ。女〽これは御尤もで御座る。なるほど御供申しませう。シテ〽それならば先づ竹筒(ささえ)を持たしめ。女〽心得ました。やい〳〵。今日は勾當の御坊の花を嗅ぎにお出でなさるゝ。竹筒を持て。えい、申附けて御座る。シテ〽さてどれへ行かうぞ。女〽承れば地主の花が最中ぢやと申す。清水邊りへお出でなされたらば好う御座りませう。シテ〽それならば清水邊りへ出う。さあ〳〵、お出であれ。手を引いて呉れさしませ。女〽心得ました。シテ〽何と思はします。人間に生れたほど忝い事はあるまい。身共が樣に目が見えいでさへ。花を嗅ぎに行くの涼に出るの。蟲の音を尋ねるの雁の聲を聞くのというて。樣々の樂しみがある。まして目の見える者はさぞ樂しみがあるであらう。女〽なるほど仰せらるゝ通りで御座るさりながら。また目の見える者は見とむない物も見ねばなりませず。由ない物を見出しては惡い心も出ますする。シテ〽その樣の時は勾當の御坊がましで御座る。シテ〽二つとりに目の見ゆるがましであらう。女〽何かといふ内に清水で御座る。シテ〽さても〳〵賑々しい事ぢや。女〽夥しい花見で御座る。シテ〽さて此の邊りの花はみな咲いたか。女〽咲きも殘らず散りも始めず。と申すが此の事で御座る。シテ〽あゝいかう匂ふは。えいやい〳〵。さても〳〵賑かな事ぢや。よい場所を取らしめ。女〽それならば此の花の下(もと)が好う御座りませう。シテ〽好い香がするは。女〽先づ下に御座れ。シテ〽心得た。先づ竹筒を開かしめ。女〽心得ました。トいうて二つ[illegible]樽の蓋を開ける。シテ〽この樣な事を思うては。春の日はうか〳〵として暮さう事ではない。女〽香を嗅いでさへ心がわつさりとなつた。女〽何れ面白い事では御座る。先づ酒(ささ)を參れ。シテ〽どれ〳〵。ト云うて飲む。座頭飲み樣心得あるべし。さらば差さう。飲ましめ。女〽戴きませう。ト云うて飲む。シテ〽ちやうどお飲みやれ。シテ小謡うたふ。シテ〽あれ〳〵。餘所(よそ)にもいかう謡うつ舞ひつする。身共も慰みに一さし舞はう。景清「日こそ」舞。女〽さても〳〵。面白い事で御座る。シテ〽危(あぶな)うてなか〳〵舞はるゝことではない。女〽これをお前へ進じませう。シテ〽貰(もら)ふとも。ト受け[illegible]一つ受持つた。小唄を一節謡(うた)はしめ。女〽恥かしう御座る。宥して下され。シテ〽夫婦の仲で何の遠慮があるものぢや。一節謡はしめ。女〽それならば謡ひませう。ト地主の[illegible]謡ふ。シテ〽さても〳〵久しう聞かなんだが面白い事であつた。また盃を差さう。[illegible] 女〽扨お願ひが御座る。久しう承りませぬ程に。平家を一句語つて聞かせられい。シテ〽むさとは語られども。そなたの所望ぢや。一句語つて聞かせう。一ノ谷語るうち猿曳出るなり。小アド〽これは洛中に住居致す猿曳で御座る。此のうちは山々の花が盛りぢやに依つて。夥しい花見ぢやと承つた。今日は東山邊りへ出て仕合はせを致さうと存ずる。誠に。この猿は子猿の時より樣々の藝を教へたに依つて。上々の能猿になつて御座る。何かと申す内に清水ぢや。さて〳〵夥しい花見ぢや。いやあれに座頭が花見に來て居る。何を見ようと思うて來たぞ。殊に夫婦連さうな。さて〳〵見態(みざま)のよい女房ぢや。ちと呼うで嬲らうと存ずる。ト云うてこの女を呼ぶ。女〽妾がことで御座るか。小アド〽あの座頭は和御寮の配偶(つれあひ)か。女〽なか〳〵。妾が夫で御座る。小アド〽そなたは無分別な人ぢや。その樣に十

人並に生附いて。盲目に添ふといふ事があるものか。よい所へ肝を煎つてやらう。來さしめ。女へなう〳〵。不興や〳〵。幼馴染を捨てゝ何處へ行くぞ。その樣な事はいうてもくれさしますな。小アドへはて氣の毒な事ぢや。どうぞ騙して連れて行き度いものぢやが。トまた呼ぶ。女頭を振る。シテへなんと面白いか。平家といふ物は此の音が大事ぢや。さあ〳〵。今の盃をおこさしめ。女へ心得ました。ト云うて。盃を持たせて。音がするうち。密かに呼ぶ。女へなんで御座る。小アドへよう思案をさしめ。この短い浮世に。あの樣な盲目と連添うて居るものか。平に身共次第に召されい。女へそなたはお内儀が御座るか。小アドへ身共は未だ妻を持たぬ。女へその年に成るまで妻を得持たいで。をかしいまでぢや。ト云うて。シテの側へ行く。シテ酒を飲める。シカ〳〵あれ。小アドへいかう日が和いだ。シテへ今日は念を入れたと見えて好い酒ぢや。シテへそなたは女共〳〵。女へ何で御座る。シテへそなたは今どれへぞ往たか。女へいや。どれへも參りは致しませぬ。シテへでもお主は何をいうても挨拶も召されぬ。さあ〳〵。盃を差さう。も一つお飲みやれ。女へどれ〳〵戴きませう。シテシカ〳〵分別していふべし。小アド橋掛にていろ〳〵心持あり。又呼ぶ。その時女盃見せる。小アドさし足して行く。酒を猿曳に飲ませる。女をつれて立つ。シテへ何と思はします。某の樣な果報者はあるまい。尤も盲目とは生れついたれども。勝手ともかうもするに依つて。冬寒い事もなし。夏暑さを淩ぐ。折節は此の樣に遊山に出て。好物の酒を思ふまゝに呑うで心を慰むは何と有難い事ではないか。此のうちに。小アドへさりとては惡い合點ぢや。女へそれなら平に身共次第にしておりやれ。女へそれならば是處の樣子を見て。後からなりとも行きませう。小アドへはてさて今おりやれ。其のうちシテ女を尋ね。大きい聲にて呼ぶ。女へ何で御座る。シテへお主は何處へ往た。女へあそこに人立があつたに依つて。見に行きました。シテへこれはいかなこと。此の目も見えぬ者を捨てゝ何處へお行きやる。身共が仕樣がある。ト云うて細き繩を懷中より出し。女の帶とシテへ括りつける。女へこれは何となされます。人が笑ひまする。シテへ人が笑うても苦しうない。これでゆるりとした。遊山には來いで。世話なしに來た樣なものぢや。小アドへ扨々何やらいかう叱る。ト云うて。いろ〳〵心持ありて。女を呼ぶ。繩を見せる。猿曳女と猿と繩をつけかへ。女を連れて入る。小アドへなう〳〵。餘所へ遣らうといふは嘘。身共が五百八十年も連添ふであらう。なういとしい人。こちへおりやれ。女へ心得ました。ト云うて。二人先きへ入るなり。シテへいかに身共が目が見えぬ者ぢやというて。その樣に侮らぬものぢや。さあ〳〵盃をおこさしめ。なう〳〵。こりや物をいはぬか。さては身共が叱つたに依つて腹を立つるか。あゝそなたは惡い合點ぢや。そなたが憎うてはいはぬ。群集の中で若し怪我でもおしやつてはと思うていふに。腹を立てゝ物をいはぬといふ事があるものか。その樣にいぶりにおしやるれば。なほ側へ引寄せて置く。ト云うて。繩を引寄せる。猿かきつく。シテへ。あいた〳〵。さても〳〵長い爪かな。女の不嗜みな。ちと爪をお取りやれ。其上人も見るものぢやに。夫を搔きむしるといふ事があるものか。ト云うて。引寄せる。猿きやつ〳〵といふて。搔きつき。シテを追込め入るなり。あゝ悲しや。女共が猿になつた。誰も居ぬか。ト云うて。いろ〳〵仕樣。口傳。

猿聟（さるむこ）

シテ　聟猿
アド　舅猿
その他猿大勢
（入道具）

（嵐山の間に舅猿亂序にて出る。但し間の時は。詞つかひ間らしく心得あるべし。）　アドへ是は都の西嵐山に年久しく住んでめでたきましらで御座る。某大和の國吉野山に聟を持つて御

座る。今日吉日なれば聟入を致さるゝ。此由申付けうと存ずる　ト云うてキャツ／＼と云ふ。太郎冠者出る。皆々悦しき詞。アドキャツ／＼と云うてよし。アドへ聟殿が見えたらば此方へ申せ。シテ一聲へはふ所にて　同へ千里の日吉とて聟入するこそ嬉しけれ。シテへ是は三吉野の山に住む猿で御座る。某嵐山に舅を持つて御座る。今日吉日なれば、唯今聟入仕り候。道行み吉野の花の梢を立出でゝ同へ／＼。馬に乗られど車坂、裘抱袴を着ながらも大日峠打過ぎて、こあめじまキャも除所に見て、三笠の山、梢なる木の葉隠をも通りつゝ、嵐の山に着きにけり／＼。シテへ急ぐ程に嵐山に着いた　キャツ／＼と云うて太郎冠者出る。同じく出る。シテへ急いで案内を申せ　トて猿キャツ／＼と云うて案内乞ふ。聟方の者も遠出て。同じくあしらふ。太郎へ聟殿の御出で御座る。アドへ此方へと申せ。又キャツ／＼と云うて心持あり。聟方の猿の内を案内へてキャツ／＼と云うて皆々通る。其後お互に挨拶する。各キャツ／＼と云ふ。シテへ不案内に御座る。アドへ初對面で御座る。シテへ早く参らうか。何かと延引致して御座る。アドへ今日のお出で。殊に御持参に預つて忝う御座る。太郎冠者、盃を出せ。キャツ／＼と受けて盃を出す。直に献ずる。アドへ是から祝うて食べて進じませう。ト云うて呑む。シテへさす。アドへそれへ進ぜう。シテへ戴きませう。アドへ食べよごして御座る。シテへ幾久しう目出たう御座る。

アドへ其通りで御座る。シテ云うて呑む。アド舅呑む。アドへ猿子を抱いて。同へせいしやうの影に寄られぬ。鳥花をふく／＼て、きよ／＼の前におゝなるも。今更思ひ知られたり。花見ずばいかでか此山に一夜あかさん。いづれもキャツ／＼と云ふ。シテへそれへ進じて結びませう。アドへ是へ下され。シテへ食べよごして御座る。アドへ苦しう御座らぬ。聟受けて呑む。シテ小謡歌ふ。シテへあかつきばさあまりにことに。まさるお参りで。のふ仕るありがたいことに曲しゆ／＼だ。キャツ／＼と挨拶する心。アドへ扨もはや参らぬか。シテへいやもうたべますまい。アドへそれならば下々へ盃をまはしませい。何れも盃を廻す。キャツ／＼と云うて呑む。アドへさて聟殿。盃も納まりました。目出たう舞納めさせられい。シテへ心得ました。目出たう舞納めませう。アドへ一段とよう御座らう。シテキャツ／＼と受けて。皆地を謡へと云ふ心にて立舞を見廻してキャツ／＼と云ふ。シテへあふ目出度やな／＼。み吉野の猿嵐の山に聟入の事。由々に於いてその隠れあるべからず。カヽル悦びに又悦びを重ねけり。三段の舞。心得あるべし。但し大事とする。舞の内身ぶりあり。業打上まつる。シテへ酒宴半ばの猿の興。同へ酒宴半の猿の興。さす盃の度重なれば。皆お顔は真赤になつて。きつ／＼と並ばせ給ふ。面白かりける風情かな。／＼。アドへ舅は是を見るにも。同へ舅はこれを見るよりも。聟殿のかたちあかる。舞の手の面白さに。出せる駒は一どれ／＼ぞ。一のへいたで、二のへいたで。〜に黒駒しなのなとれ。聟殿こそゆうけんあれ泊り。なおかおり。この父獅子と申すには、百濟國には普賢文殊の出されたる。猿と獅子とは御使者の者。是れば御代に納めぬ。なほ千秋の萬歳と。猿は重ねて面々に。い。猿を重ねて面々に。たいしうなるこそ目出度けれ。シテと舅向ひ合うて、キャツ／＼と云うて皆々退る／＼るなり。

三人片輪（さんにんかたわ）

シテ　啞
アド　主人
小アド　座頭
小アド　躄

主人へこれは此の邊りに住居する有徳な者で御座る。某存ずる仔細ある間。片輪者の扶持致さうと存ずる。先づこの由高札を打たう。座頭へこれは此の邊りの者で御座る。例の手慰みを致いたれば。散々不仕合せで。何ともならぬところに。また世に御慈悲な人が御座る。片輪者に扶持なされうとあつて、高札な

打たせられた。某は生れつき片輪ではなけれども。友達どもお目の早い者ぢやと申す程に。それを引違へて盲になつて參らうと存じて用意致した。先づ參つて樣子を見うと存ずる。誠に。一人の意見致す時に留れば。ヲ云ふ。いや何かといふうちにこれぢや。幸ひ邊りに人も居らぬ。さらば盲になつて參らう。案内常の如し。私は高札について參つた盲目で御座ります。主へようこそ來たれ。さぞ不自由にあらう。いかにも扶持をせうから通れ。座へそれは忝う存じます。主へ身共が手を取らう。座へそれは慮外で御座ります。主へそれにゆるりと居よ。座へ畏まつて御座る。壁へこの邊りの博奕打で御座る。このうちは散々打負けて家屋敷まで人に取られ。難儀致すところ。山一つあなたに有德人があつて。片輪者を大勢抱へさせられるとの事ぢや。參つて扶持を得ようと存ずる。誠に。勝てば面白うなるに依つて打ちたうなり。負くれば取返さう〳〵と存じて止められず。此の樣に成り下つたことぢや。いや何かといふうちに是ぢや。さて身共うかと來たが何になつたものぢや知らぬ。それそれ身共は不達者ぢやじ仍つて。それを幸に壁にならう。誰も居らぬか知らぬ。幸ひ誰も居らぬ。さらば壁になつて案内を乞はう。案内常の如し。壁へ御免なりませ。主へ先づ立たしませ。壁へ私は立つことのならぬ者で御座りまするが。御高札について參りました。主へさては壁か。シカ〳〵。主へやれ〳〵それは不憫なことぢや。抱へうから通れ。壁へ有難う存じます。主へそれにゆるりと居よ。壁へハア。啞へしないたり〳〵。鹿の角の碎くる程も揉んで御座れば。終にもみ損うて手と身とに成つて。今日を暮さう手段(てだて)もないところに。天道人を殺さずで御座る。邊り近い所に有德な人が。片輪者を抱へさせられうとのことぢや。それについて別に片輪ではなけれども。常に口のまめなと申して人が叱るに依つて。啞になつて參らうと存じて。此の樣な物を用意致いた。啞は之をかうして。おゝとさへいへばざつと濟む。先づ急いで參り。一日なりとも扶持をからうと存ずる。誠に。角力のはてには喧嘩になり。ヲ云ふ。いやこれに高札がある。あゝ〳〵これぢや。さらば啞になつて參らう。おゝ〳〵〳〵。主へ何やら表が騷がしい。何事ぢや知らぬ。啞へおゝ〳〵。主へ汝は何者ぢや。啞へおゝ〳〵。主へムヽ高札について來た啞か。常の如し。これはいかなこと。啞がものを云うた。さて〳〵合點の行かぬことぢや。あゝ思ひ出したことがある。啞の一聲といふて。何ぞ嬉しい事があつて。一代に一度ものをいへば。其の身はいふに及ばず。あたりまで富貴すると聞いた。いよ〳〵抱へうと存ずる。やい〳〵。座頭へハア。主へ某は用事あつてさる方へ行かう。留守をせい。座頭へ畏まつて御座る。主へまた汝の前のは輕物藏(かるものぐら)ぢや。そちに預ける程に番をせい。座頭へ目こそ見えませね。耳は早う御座る程に。お留守のこと御氣遣なされまするな。主へおゝ油斷をするな。かう行くぞ。座頭へおゆるりとお出でなされませ。主へやい〳〵壁。壁へハア。主へ用事あつて山一つあなたへ行く。汝の前のは酒藏ぢや。氣をつけて留守をせい。壁へ足こそ立ちませね。何事ぞ御座つたらば。邊りに聞ゆる樣に呼ばはりませう。主へこれは尤もぢや。かう行くぞ。壁へお早うお歸りなされませ。主へやい〳〵啞。啞へおゝ〳〵。主へ身共はさる方へ行く。よう留守をせい。啞へおゝ〳〵。主へまたそちが前にあるは錢藏ぢや。預ける程によう番をせい。啞へおゝ〳〵。主へよい合點ぢや。かう行くぞ。啞へおゝ〳〵。座頭へイヤはや御座つたさうな。

さらに目を明いて見う。おゝ、氣詰りやの〳〵。これは目を明いたれば氣が廣うなつた。久しう目を塞いでゐたれば。目の端が痛い。壁〳〵とつと御座つた。やれ〳〵窮屈や〳〵。立つことがならぬと思へば。殊の外難儀なもので御座る。ちと立つて見う。えい〳〵。これは足がすくうだ。膝頭がむり〳〵といふやうな。座頭へはあ。あちらに人音がするが。これはいかなこと。名を云ふ誰ぢや。やい〳〵。やいそこな者。壁へハア。座頭笑ふ壁へこれはいかなこと。頼うだ人と思うてよい潰な肝した。お主は先づこれへ何として來てゐるぞ。座へ何といふことがあるものか。このうちの不仕合はせ故に來たわいやい。座へさて〳〵。汝もぬからぬ者ぢや。壁へそちも其の通りか。壁へ知れたことぢや。二人笑ふ座へこれは云合はした樣なことぢや。壁へ其通りぢや。さてあちらで聞き馴れたやうな聲で。何やらうめく音がするが。合點の行かぬ事ぢや。座へそれは合點の行かぬことぢやが。友達どもではないかの。壁へさらばそと見うか。座へお見やれ。壁へ來たは〳〵。座へ誰ぢや。壁へ誰ぢや。座へ彼奴は口悧巧なことをいうて居たが。仕樣がないと見えた。壁へ其の通りぢや。座へ聲をかけて應すまいか。座へよからう。二人へやい〳〵〳〵。唖へおゝ〳〵。二人笑ふ唖へこれはいかなこと。お主達は何としてこれに居る。座へ何といふことがあるものか。このうちの不仕合はせ故ぢやわいやい。唖へこれは三人が云合はしたやうなことぢや。さてそちはこびた裝ぢやが。何になつて來た。座へされば何に見える。唖へされば何であらう。座へ其日頃お主達が目の早い者ぢやといふに依つて。それを引違へて盲になつて來た。唖へその裝で目を塞いだらば。その儘の座頭であらう。三人笑ふ座へ汝は何になつて來た。壁へ身共はお主達が知る通り不達者なに依つて。それを幸に壁になつて來た。唖へこれはよい思案ぢや。座へそちは何になつて來た。唖へ某は常々そち達が口まめなというて叱るに依つて。とかく物をいはぬがよいと思うて唖になつて來た。座へ今のが唖の眞似か。唖へなか〳〵。三人笑ふそれについて大事があつてな。座へ何事ぢや。唖へ頼うだ人の。唖といふ者は藝のあるものぢや。何ぞ藝はないかとおせあつたに依つて。差當つて仕樣はなし。槍を使ふ眞似。弓を射る眞似。茶をひく眞似などをしたれば。さて〳〵そちは萬能達した者ぢや。扶持をくれうとせうと仰せあつたに依つて。餘りの嬉しさにハアと云うてな。座へ南無三寶。壁へ是はいかなことに。唖へさお持が叩いたかと思うたれば。また有徳な人の思案は違うたものぢや。座へ何とぢや。唖へ唖の一聲というて。何ぞ嬉しい事があつて、一代に一度もいないへば。其の身はいふに及ばず、邊りまで富貴するというて。いよ〳〵抱へられたわいやい。座へさて〳〵これは仕合せであつた。壁へあぶない事であつたなア。唖へ其通りぢや。さて頼うだ人は何處へお行きあつたか。お主達は何も預りはせなんだか。座へいかにも預つた。唖へ何を預つた。座へ輕物藏を預つた。唖へさて〳〵よいものを預つた。壁へこれはよいものぢや。唖へそちは何を預つた。壁へ身共は酒藏を預つた。唖へこれもよい物ぢや。壁へそちは何を預つた。唖へ某は今一勝負しようと儘なことぢや。壁へそれは何ぢや。唖へ錢藏。〳〵。〳〵。座へこれは中でもよいものぢやなア。壁へ嬉しいことの。座へやい〳〵壁。壁へ何ぢや。座へ某の思ふは。身共が預つた輕物藏を明けて。一かたげ宛して退かうと思ふが。何とあるか。壁シカ〳〵。座へさあ〳〵

來い。壁へシカ〳〵。啞へあゝ先づ待て〳〵。二人へ待てとは。啞へそれは惡い思案ぢや。二人へ何が惡い。啞へ先づ身共が思ふは。このうち飮みたい〳〵と思うたことぢや程に。壁が預つた酒藏を明けて。酒を飮うて。座へムヽ。啞へさて其上で。身共が預つた錢をお主達に貸して。また一勝負して。壁へムヽ。啞へ其の上でかる物を取つて退かうではあるまいか。座へこれは一段の分別ではないか。壁へ日本一の思案。さらば先づ藏の戸を明けう。座へ早う明けい。啞へこれは大事の物ぢや。そちが道具と一所にして置いて見れい。座へなる程。合點ぢや。壁へぐわら〳〵〳〵。ハアヽ夥しい壺ぢや。座頭シカ〳〵。壁へさてどの壺にしよう。啞へそれは亭主の物好きにさしませ。壁へはや身共を亭主にするか。三人笑ふ。壁へさらば此の澁紙で覆のしたのにしよう。座頭シカ〳〵。啞へ一段とよからう。壁へめり〳〵〳〵。ムヽよい匂ひぢや。座へこれまで匂ふわいやい。啞へうまい匂ひぢや。座へさあ〳〵飮め。座へ心得た。壁へ丁ど飮め。啞へあるぞ〳〵。座へホ。先づはよい酒ぢや。啞へ一つ飮うだれば。氣がはつきりとした。壁へさうであらう。座へどれ〳〵。亭主にも飮ませう。壁へ早う飮ませて見れい。座へ面白うなつた。ちと謡はう。啞へ一段とよからう。謡へ〳〵。座頭小謡「へだてぬ中」。三人笑ふ。啞へこれはいかう面白うなつて來た。座へ其の通りぢや。啞へやい〳〵。座頭。座へ何ぢや。啞へ一さし舞へ。座頭笑ふ。座へ何とこの裝で舞が舞はれるものぢや。啞へそこが面白い。平に舞へ。座へムヽさうあらば舞うても見うか。啞へ一段とよからう。座頭舞「目こそくちたれ」ト獨吟。目をふさぎて舞ふ。舞ふうち二人にて。二人へよいや〳〵。座へ笑ふ。をかしい事ぢや。啞へいやいつもとは違うて。格別面白いことであつた。座へ小謡。酌。「おもしろの都」。三人笑ふ。啞へさあ〳〵。壁も舞へ。壁へいや變な者が。壁が何と舞が舞はるゝものぢや。啞へいや〳〵。盲が舞うたに依つて。壁も舞はねばならぬ。舞へ。壁へさて〳〵迷惑なことをいふ。座へさあ舞へいやい。壁へさうあらば舞うて見うか。啞へ舞へ〳〵。壁。舞。「松はもとより常盤にて」獨吟。下に居て舞ふ。云ふことなし。二人へよいや〳〵。壁へ笑ふ。あゝ不調法なことぢや。啞へ壁が立たぬところは出來いたわいやい。三人笑ふ。座へ殊のほか面白い事であつた。啞へ珍らしう辭をせう。座へ一段とよからう。啞へ小謡。繰返し〳〵。三人笑ふ。座へさて〳〵面白うなつた。座へさあ〳〵啞殿。順ぢや程に舞はしめ。啞へこれは迷惑なことぢや。身共は宥して見れい。壁へ何故に。啞へはて今の盲や壁の舞の後で、何と啞の舞ひ樣があるものぢや。座へその無いところが所望ぢや。そちは盲が舞ふに依つて。壁も舞はねばならぬというて。某に舞はせたではないか。なア座頭。座へこれは尤もぢや。壁へさあ〳〵。早う舞へ。啞へなる程さうは思うたれども。これは舞ひ樣がない。堪忍をして見れ。壁へさうあらば。得舞はずは其の過意に。最早そちには酒を飮まさぬがよいか。啞へさて〳〵意地の惡い事をいふものぢや。座へやい〳〵啞。何とも舞へいやい。啞へされば何とぞ舞ひ度いものぢやが。いや啞の舞を舞はう。壁へとくと謡を聞かしめ。壁へはあ。啞の謡承らう。座へこれは面白さうな事ぢや。啞へ舞。見ざるいはざる。きかざるところこそ有るべきを。何ゆゑにたゝざるあり。曲もなやたゝざるは。何の用にもたゝざるぞ。いはぬはいふにいやまさる。いはざるぞ目出たき。物いはざるぞめでたき。二人へよいや〳〵。啞へ笑ふ。何と啞の謡。聞えたか。壁へ言語道斷。出來いた。座へとつくに賢い奴ぢや。壁へ某も聾になつ

て來ればよかつたものを。口惜しい事をなした。三人笑ふ。 啞〽これは飲ませずばなるまい。小舞二三番。三人笑ふ。 啞〽ざつと酒盛になつた。 座〽此のうちの憂さを忘れたわいやい。 壁〽其の通りぢや。三人笑ふ。 主〽片輪者に留守を申附けて置いた。殊のほか長居を致いた。待ち兼ねてゐるであらう。急いで歸らう。ハア謠の聲がする。これはいかなこと。壁が立つた。盲が目を明いた。啞がものをいふ。さて／＼憎いことかな。やい／＼。戻つたぞ／＼。 座〽それ頼うだお方ぢや。 啞〽何ぢや。お歸りなされた。 主〽さて／＼己れらは憎い奴の。 座〽お歸りなされました。 啞竹たゝき出る。 主〽おのれは盲ではないか。 座〽あゝお宥されませ／＼。 主〽憎い奴の。 壁〽こちへおこせ。 啞〽こちへおこせ。 壁〽放せ。ハアお早う御座りました。 杖つきを目先へ出る。 主〽おのれは壁ではないか。 座〽アゝ忘れました。 主〽さて／＼憎い奴の。 壁〽あゝ早う逃ぐればよいに。なう／＼恐ろしや／＼。 啞〽お宥されませ／＼。 主〽やいそこな奴。 啞〽お歸りで御座りまするか。 主〽己れは啞ではないか。 啞〽誠に取違へました。 壁〽何をしてゐる事ぢや。ちやつと來ればよいに。 啞〽あゝお宥されませ／＼。 壁〽早う來い／＼。 啞〽心得た／＼。 主〽おのれ等にどちへ失する。 二人〽宥させられい／＼。 主〽あの横着者。遣るまいぞ／＼。 二人〽宥させられい。

三人長者（さんにんちやうじや）

シテ　せゝなぎ長者
アド　蒲生の長者
小アド　一森長者

アド〽これは近江の國蒲生の長者で御座る。 小アド〽大和の國一森長者で御座る。 アド〽何と思召す。この様に一緒に願ひが叶うて。國許へ下ると申すは。目出度い事では御座らぬか。 小アド〽仰せらるゝ通り。互に首尾よう長者號を拜領すると申すは。忝い事で御座る。 アド〽扨ついでながら。此邊を少し見物致し。其後國許へ下らうと存ずるが。何とで御座らう。 小アド〽是は一段とよう御座らう。 アド〽それならば暫く休息致さう。是へ御座れ。 小アド〽心得ました。 シテ〽河内の國せゝなぎ長者と申す者で御座る。此度都へ上り。上頭への願ひ相叶ひ。長者號を拜領致し。十分の仕合せで只今國許へ下る。先づそろり／＼と參らう。シカ／＼。誠に。年月の念願で御座つたに。此度成就致し。此様な嬉しい事は御座らぬ。國許の一家一門迄さぞ喜ばうと存ずる。 アド〽これへ歴々と見ゆる人が通らせらるゝ。言葉を掛けませう。 小アド〽よう御座らう。 アド〽申し／＼。 シテ〽こなたの事で御座るか。 アド〽見ますれば御仁體で御座る。どれからどれへ通らせらるゝ。 シテ〽私は河内の國せゝなぎ長者で御座る。此度長者號の願に罷上り。十分の仕合せで只今本國へ歸る事で御座る。 アド〽成程承及うて御座る。私は近江の國蒲生の長者で御座る。 小アド〽某は大和の國一森長者で御座る。 シテ〽是は不思議な所でお目に掛かつて御座る。卽ち都で御兩人の事も承つた。何と思召す。此上は三人共此所に逗留致し。長者になつた謂れを互ひに咄合はうと存ずるが。何と御座らう。 アド〽是は一段とよう御座らう。 シテ〽それならば先づ下に御座れ。 二人〽心得ました。 シテ〽扨一森殿から先づ語らせられい。 小アド〽心得た。先づ某を一森長者と申すは。葛城や高間の山の麓に。一の森二の森三の森とて三つの森が有る。中にも一の森の林は。稲荷大明神を勸進の地なるにより。我常々正直の首（かうべ）を傾

け、造酒洗米を供へ、信心に富貴繁昌を祈りければ。かくの如く御利生あつて、程なく榮華榮耀の身となり、方八町に館を建て。藏に藏を打ち。五穀萬寶滿したる。なんぼう夥しき謂れにては候はぬか。シテへ扨々奇特な系圖で御座る。アドへ身共も語つて聞かせう。アドへ先づ某が先祖は、近江の國蒲生のなにがしとて隱れもなき貧者にて。餘り苦しき憂き住居、朝夕の煙絶え〳〵なりしに。とかく佛神に祈り、神德を得んと思ひ、山王權現に一七通夜申しけるに、まんずる曉。權現枕がみに立たせ給ひ。汝先立ちし二親に不孝なりし罰にて。かゝる貧賤の身となる。此後法華經を讀誦して父母に供養せば。二親忽ち佛果を得、汝は富貴の身とならんと、忝くも夢のお告げを承り。それより頻りに菩提を弔ひしかば。めつき〳〵と仕合せ直り。某が代に至りても。金銀米錢滿ち〳〵たり。末廣がり蒲生の長者と仰がれ申す。なんぼう奇特な事にては候はぬか。シテへ扨も〳〵、聞き事で御座る。さらば某も咄しませう、某をせゝなぎ長者と申す事は。淺き所に水流るゝをせゝなぎと申す。されば某は生れ付き正直正路にして。老いたるを敬ひ稚きを憐み。友に交りて爭はず。謙りて驕らず、富めるに諂はず貧しきを侮らず。慈悲を忘れず善に誇らず。されば天もあはれと見候や。ある夕暮に。何心も無く杖を持ち。かのせゝなぎをせゝりけるに、光明赫奕たる物をせゝり出す。見れば閻浮提金の大黒天なり。是は目出度い福の神と祝ひ、祝ひこめしより此方。七寶萬寶雨と降り涌き。隱れ蓑に隱れ笠打出の小槌の威德を以て。庭には金銀の砂を敷き。四方に四面の藏を打ち。活計歡樂に誇る事も。ひとへにせゝなぎ大黒天の御利生なれば。河内の國せゝなぎ大福長者と呼ばれ申す。なんぼう正しい謂れにては候はぬか。アドへ是は承り事で御座る。シテへさて此樣に三人の長者が此所へ集ると申すに不思議な事で御座る、是と申すも天下安全の驗なれば。いざ酒宴を始めて、其後は三人共に高らかに名乘つて。國許へ歸らうと存ずる。何とで御座らう。アドへ是は一段とよう御座らう。シテへ然らば私が御酌に立ちませう。ト云うて。シテより段々酌に立ち。色々有るべし。君は千代末世を小謠ふ也。シテ小舞を舞ふもよし。シテへかゝる目出度き折なればこそ。三人連舞に舞ひませう。二人へ心得ました。シテへいざ立たせられい。三人へ時とかや。シテへ目出度かりける。三段の舞常の如し三人連舞。但しシテばかりにても。太鼓打上。シテへあれなる長者の名は如何に。小アドへ大和の國に隱れもなき。一森長者とは我が事なり。シテへ爰なる長者の名は如何に。アドへ近江の國に隱れもなき。蒲生の長者とは我が事なり。小アドへそこなる長者の名は如何に。シテへ高き屋に〳〵。登りて見れば煙立つなる民の竈は賑はふ家に。いつも物は澤山なる。せゝなぎ長者とは我が事なり、三人へ何れも劣らぬ三人の長者悉く名乘りあふ、何れも劣らぬ三人の長者國々さしてぞ歸りける。

三人夫（さんにんぶ）

シテ　美濃の百姓
アド　淡路の百姓
小アド　尾張の百姓
奏者

（入道具）

アドへ淡路の國のお百姓で御座る。毎年の通り御年貢を持つて上らうと存ずる。又此處に尾張の國のお百姓が御座つて。是も御年貢を納めるために上るに依つて道連れになつて御座る。なう〳〵居さしますか。小アドへ是に

居まする。アド〽都へも程近う御座るに依つてそろ／＼參らう。いざ御座れ。シカ／＼。每年相變らず御年貢を納むるは目出度い事では御座らぬか。小アド〽何も相變らず足手息災で上ると申すは。目出度い事で御座る。アド〽是迄參つたらば殊の外くたびれた。暫く休みませう。小アド〽一段とよう御座らう。シテ〽美濃の國のお百姓で御座る。每年御年貢を納める。當年も相變らず上らうと存ずる。シカ／＼。誠に治まる御代と申すは。ト云ひ廻る內。アド見て言葉かける。同道して都につく。奏者出て次第々々に御年貢を納め。奏に百姓が二人居ると云ひ。一しよに申上げると云ふ。尾張出る。今一人の者早う出よと云ふ。シテ出様こと／＼く外の百姓物に少しも違はず。さて披露する。三人共に何も申さず。御歌の望みぎと云ふ。シテよりおおすらいを云ふ。何れも同斷。それより案ずる。又國によそへて三人して一首詠めと云ふ。三人案ずるなり。アド〽淡路より。種蒔きそめて三つ葉ざし。小アド〽花咲くなはり。シテ〽みのなるは稻。奏者披露して。時の笑草あつて。奏〽ヤイ／＼汝等が名は何と云ふぞ。と尋ねて置けいと仰せらるゝ。急いで申上げい。アド〽つうじと申しまする。奏〽つうじ。こゝな頭の事か。ト云うて頭をさして笑ふ。アド〽いや。つうじで御座る。奏〽尾張のお百姓。名は何と云ふ。小アド〽まかちと申す。奏〽まかけとはこのまかけか。ト云うて。目の上に手をあてゝ笑ふ。小アド〽いや。まかちでござる。奏〽汝も申せ。シテ〽是へ參らう。奏〽是へ參つてゐる。名を申せ。シテ〽いや。是へ參らうと申すが私が名で御座る。奏〽扨も／＼珍らしい名共ぢや。兩三ヶ國のお百姓が／＼一通り。ハヽア／＼。仰せ出さるゝは。何れも面白い名を付けた。其名によそへて。三人して一首歌を詠めと仰せらるゝ。急いで詠め。三人〽畏まつて御座る。シテ〽むさとした名を申上げるに依つてぢや。アド〽何を言ふ。そちがむさとした名を申上げるに依つてぢや。奏〽互ひに論は無益ぢや。早う申上げい。アド〽淡路より。多くの寶通じ船。小アド〽眞帆が濟いで。シテ〽是へ參らう。奏〽一段と出かいた。又披露する。奏〽ヤイ／＼。一段と出かいたとあつて。御褒美に萬雜公事を御赦免なさるゝ。さて前世下された事は無けれども。此度はお流れを下さるゝ。是へよつて頂戴致せ。三人〽是は有難う存じまする。ト云うて。三つ宛呑む。奏〽此上は御暇を下さるゝ。目出度く洛中を罷立ちに致せ。カヽル。シテ〽目出度かりける時とかや。三人連舞ひ。三段の舞。打上聞きて。やらいゝいゝいゝ〽目出度やいゝいゝいゝいゝいゝ／＼な。治まる御代のしるしとていゝいゝいゝ國々よりも參る御調。いゝいゝいゝいゝ幾久しさも限らじな。いゝいゝいゝいゝ幾久しさも限らじなと。申し納めて歸りけり。

三本柱（さんぼんばしら）

シテ　主人
太郎冠者
次郎冠者
三郎冠者

（入道具）

シテ〽大果報の者。天下治まり目出度い御代なれば。上々の御事は申上ぐるに及ばず。下々迄目出度い事の重つた折柄でござる。それにつけて。某此間作事を致したが。首尾よう成就致した。それに就きのき者を呼出し申付くる事がござる。ト云うて。太郎冠者を呼出す。何れも常の如し。シテ〽次郎冠者三郎冠者も呼べ。太郎〽畏まつてござる。ヤイ／＼兩人の者。召すは。二人〽何ぢや召すと云ふか。太郎〽早う出さしめ。二人〽心得た。兩人の者お前に。シテ〽汝等を呼び出すは餘の儀でない。誠に此度は夥しい普請を云付けた所に。首尾よう成就して。此樣な悦ばしい事はないわいやい。太郎〽御意なさるゝ通り。斯樣な目出度い事にござりますまい。シテ〽それに就いて。金藏の柱にせうと思うて。吉正の木を上の山に三本切らせて

置いた。汝等に云付くる程に。三本の柱を三人して。二本づつ持つて來い。シテへ畏まつてござる。常の如くつめて云附ける。うける。大名の通り。太郎へヤイヤイ。何と思ふ。頼うだお方は。何事もはなやかに仰せらるゝに依つて。奉公がしよいなあ。次郎へいかさま。氣味のよい事ぢやなあ。三郎へ其通りぢや。太郎へいざ山へ行かう。サアサア來さしめ。二人へ心得た。シカ〳〵。太郎へ何と思ふ。此度夥しい普請であつたに。首尾よう濟んで此様な目出度い事はあるまいと思ふ。次郎へいかさま目出度い事ぢや。これと云ふも。こち衆の骨を折つた故ぢや。太郎へ何かと云ふ内に山へついた。何と思ふ。此様に生え茂つた山はあるまいぞ。シテへ何程材木を出しても。一本切つた様にも思はれぬ。次郎へ扨かの材木は何處にある事ぢやなあ。太郎へ金藏の柱ぢやとおしやつた程に。上へ登らば知るゝであらう。次郎へいかさま隱れはあるまい。三郎へ見まがふ事はあるまい。シカ〳〵。橋懸りへ行く。太郎へ何れ頼うだ人は果報な人ぢや。山は持つて居らるゝ。材木は澤山なり。どの様な普請をせられうと儘な事ぢや。次郎へわごりよが云ふ通り。思ひの儘な事ぢや。太郎へイヤ爰に材木がある。次郎へ誠にあるは。太郎へ何と見事ではないか。三郎へどれが本やら末やら知れぬ。次郎へ節が一つ見えぬ。太郎へさらば三郎冠者から持たせう。ト云うて〇太郎次郎二人〇柱の兩方を持つて〇三郎冠者に持たす。太郎へ次郎冠者にも持たせう。ト云うて〇太郎〇柱の一方を上げて〇扇を入れさし〇次郎に持たす〇次郎柱をつぎへ退く〇太郎へ扨わごりよ達には手傳うて持たせたが。身共は何として持たうぞ。次郎へ何れも手傳なたけれども。重い柱を持つてゐてゆかれぬ。何とする。三郎へどうぞよい分別はないか。太郎へよい思案がある。ト云うて〇柱の一方ばかり上げて〇押して行き〇向ふの柱に三郎を入が指す〇次郎へこれは出來た出來た。太郎へサア〳〵持つた。いざ行かう。是より舞臺へ出る内のシカ〳〵。太郎へ何と重い事ではないか。太郎へ餘程持ち重りがする。三郎へイヤ見事な柱ぢやに依つて其筈ぢや。太郎へ中々。一息には行かれまい。此先で少し休まうぞ。次郎へいかさま。休まずば行かれまい。三郎へ休んだらよからう。太郎へさらば爰へ下して休まうは。太郎へ扨わごりよ達が頼うだ人の仰せられた事を聞いたか。次郎へ身共は何も聞かなんだ。太郎へ三郎冠者はお聞きあらう。三郎へいかさま何とやら仰せられた。うつかりと聞いてゐたに依つて覺えぬ。太郎へ三人の者に云付ける程に。三本の柱を三人して二本づつ持つて來いと仰せられた。次郎へ誠に其様な事をおしやつた。三郎へこれはむつかしい事ぢや。太郎へわごりよ達はどうして持たうと思ふ。次郎へ六本あれば。二本づゝ持たれると云ふものぢや。太郎へそれは知れた事ぢや。三郎冠者何と思ふ。三郎へよい仕様がある。兎角此柱を眞中から二本づつに切つて持たう。太郎へいかな〳〵。其様なむさとした事ではない。次郎へそなた思案があるか。太郎へ成程身共は思案なしておいた。則ち今から下して休んだに就いての事ぢや。此柱の隅々を持てば。三人して二本づつ持つと云ふものではないか。二人へどりや〳〵。次郎へ誠にさうぢや。三郎へこれは成程尤もぢや。太郎へこれは定めて身共等が智慧の程な見うと思うてなされたものであらう。唯持つもいかゞぢや。此體を囃子物にして戻らうと思ふが。わごりよ達は何と思ふぞ。二郎へ成程。頼うだお方は常々有興人ぢや。これは一段とよからう。三郎へ囃子物で歸つたらば。悦ばせられう。二郎へ扨何と云うて囃さうなあ。太郎へ有様の通り。三本の柱を。三人の者共が二本づつ持つたり。これ〳〵御覧候へ。と云うて囃さう。二人へこれは一段とよから

う。太郎〽さらば云うて見さしめ。ト云うて。三人同音にて云ふなり。二郎〽これではあとがつまらぬものぢや。太郎〽そのおとで。げにもさあり。やよ。がりもさうよの。と云ふ事を入れて囃さう。二人〽これは一段とよからう。太郎〽それならば。これへ寄つて持たしめ。二人〽心得た。ト云うて。三人柱の角々を持つ。太郎冠者上にゐて肩へもつ。次郎冠者下に居て左の肩に持つ。三郎冠者大小の前にて右の肩へ持つなり。考ふべし。太郎〽エイ〳〵。よいか〳〵。二人〽よいぞ〳〵。太郎〽さらばおりやう。二人〽一段とよからう。三人〽エイトウ〳〵。エイ〳〵オウ。笑ふ。太郎〽さらば囃さう。二人〽囃せ〳〵。是より拍子物になる。大小太鼓あしらふ。太郎〽や。三人〽三本の柱な。三人の者共が二本づつ持つたり。これ〳〵御覧候へ。げにもさあり、やよ、がりもさうよの。〳〵。段々囃す。シテうつる。何れも同じ事。シテ扇開き。見て笑ふ。末廣に同じ。シテ〽三人の者共が。面白い囃子物なして歸る。これはちと出ずばなるまい。イロ三本の柱な。三人の者共に二本づつ持てとは。智慧の程を見ん爲。よくこそは持つたれ。先づ内へつと入つて。イロ鰌の鮨を頰張つて。諸白を飲めかし。三人の者。これより囃しかゝる。シテ〽兎角の事はいるまい。早う内へ持ちこめ。げにもさあり。やよ。がりもさうよの〳〵と囃す。シテ其内うつり〳〵。柱の中へ搭つて入ると。しやぎり留にくわする。其時柱を三人とも一本づつかたげて。しやぎり留に合せて留まる。よく〳〵云ひ合すべし。柱の分けやう筆紙に述へがたし。口傳。

【し】

秀句傘（しうくがらかさ）

シテ　大名
アド　太郎冠者
小アド　秀句
（入道具）

シテ〽隱れもない大名。天下治まり目出度い御代なれば。此中方々の御參會は夥しい事で御座る。それに就いて太郎冠者を呼出し尋ねる事が御座る。ト云うて呼出す。出るも常の如し。シテ〽何と思ふぞ。此中方々の御參會は夥しい事ではないか。アド〽御意なさるゝ通り。事長（ちやう）じた事で御座る。シテ〽それについて。夜前の座敷で各々（おのおの）一度にどつと笑はせられたを聞いたか。アド〽成程。承つて御座る。シテ〽あれは何を言うて笑はせらるゝ。アド〽扨はお前は御存じ御座りませぬか。シテ〽いや曾て知らぬ。アド〽只今世間に秀句と申す事がはやりまする。それを仰せられて。お笑ひなさるゝ事で御座る。シテ〽それならば安堵した。身共は其樣な事は知らず。各あそこの隅で一言（ひと）云うてはドッと笑ひ。此處（こゝ）の隅で二言（ふた）いうてはドッと笑ひ召さるゝに依つて。若し身共が事ながな云うて笑はせらるゝかと思うて。殊の外氣遣ひをした。アド〽御存じなければ御尤もで御座る。シテ〽してその秀句とやらが世間にはやるぢや迄。アド〽左樣で御座る。シテ〽何れも其樣におしやる。秀句を身共一人知らぬと云ふも口惜（くちを）しい事ぢやが、何と習うてはならぬか。アド〽何が扨。お習ひなされてならぬと申す事は御座りますまい。シテ〽それならば誰に習はうぞ。アド〽誰がよう御座りませう。シテ〽そちは秀句を言はぬか。アド〽私も曾て申さぬでは御座らねども。お前へ教へまする程の事は得申しませぬ。いや秀句を云ふ者を抱へたものであらうぞ。シテ〽何として。それに習はうか。アド〽是は一段とよう御座りませう。シテ〽幸ひ此中の樣に方々をすれば。そち一人では使ひ足らぬに依つて。新參の者を抱へう程に。汝は大儀ながら上下の街道へいて。秀句を云ふ利根さうな者を抱へて來い。ト云ひつける。是より今參尋ねに同斷。シカ〳〵あつて街道に着く。此類同斷也。小アド〽是は坂東方の者で御座る。某以前は傘張りで御座つたが。此度上方へ上り。此處か

しこを見物致し。似合はしい所もあらば。足をもとめうと存ずる。ト云うて。若い時旅をせねばのシカ〳〵云うて廻る。アド見付けて言葉をかくる。此類大名狂言同斷なり。但し直ちに甕を伺ひ。國を問うて。一遍廻るなり。アド〽色々事を覺えて居さします。何と秀句はならぬか。小アド〽曾て申さぬでは御座らぬ。私以前は傘張りで御座つた。今も手張りの傘を持つてゐます。この傘(からかさ)に就いての秀句ならば。如何程も申しまする。アド〽それならば重疊の事ぢや。斯樣に申すは別の事でない。賴うだお方が殊の外秀句好きぢやに依つて尋ねる事ぢや。シカ〳〵。其由を賴うだ御方へ申上げたらば。さぞ御滿足なさるゝであらう。小アド〽かう參るからは。そなたを寄親(より)殿と賴みまする。萬事引廻して下されい。アド〽其段はそつとも氣遣ひをしやるな。小アド〽して程は遠う御座るか。アド〽何かと云ふ内に是ぢや。そなたを同道した通りを申上げう程に。暫くそれに御待ちあれ。小アド〽心得ました。是よりシテを呼出し。色々セリフ有つて。過を云うて床机にかゝり。小アド目見えありて。さて國。甕を問ふ。馬のふせ起しありて。但し目にて今參の通りつかふもよし。此類大名狂言同斷なり。シテ〽扨かの秀句は何とぢや。アド〽其儀も路次で尋ねて御座れば。きやつは以前傘張りで御座つた。今も手張りの傘を持つて居りまする。この傘に就いての秀句は。何程でも云ふと申しまする。シテ〽それは重疊の事ぢや。あれへいて云はうは。ゆく〳〵は名をも付けうなれども。先づ當分は秀句と呼ばう。秀句が聞きたい。是へ出よといへ。アド〽畏まつて御座る。なう〳〵。ゆく〳〵は名をもお付けなされうずれども。先づ當分は秀句とお呼びなされう。さうあれば秀句が聞きたい。あれへ出よと仰せらるゝ。小アド〽畏まつて御座る。アド〽秀句。シテ〽ム、秀句。小アド〽ハア。シテ〽秀句はどれからわせた。小アド〽しまから參つた。シテ〽ハテ遠方からわせたのう。小アド〽骨を折つて參つた。シテ〽骨が折れうとも。小アド〽小骨を折つて參つた。シテ〽さて秀句が聞きたいなう。小アド〽軒にひかへて申さう。シテ〽いや。此處(こゝ)でおしやれ。小アド〽つれ〴〵に申さう。シテ〽いま聞きたい。小アド〽え申さぬ。シテ〽え言はぬ者が。秀句を言ふと云うて來たはどうした事ぢや。小アド〽かみげに御座る。シテ〽しさりをれ〳〵。小アド傘の柄を持つて。さへのきにする。シテそり打つ。シテ〽未(ま)だ其處になるか。アド〽何となされまする。シテ〽今のを聞かぬか。秀句を云へと言へば。徒然(つれ〴〵)に申さうの。え申しませぬ。あまさへかみげなどぬかしをる。惣じてかみげなど云ふは。物の怪(け)のついたをこそ云へ。あの樣な者が何の役にたつものぢや。早ういなせ。アド〽いやお前は何とお聞きなされました。最前からきやつが申したは。みな傘についての秀句で御座る。シテ〽それはどうした事ぢや。アド〽先づしまから參つたと申すは。しまろくろの事。扨え申さぬと申すは傘の柄の事。かみげなと申すも則ち傘の紙の事。殘らず傘(からかさ)に就いての秀句で御座る。シテ〽いかさまそちが言へば。みな傘に就いての秀句ぢやなあ。アド〽左樣で御座る。シテ〽南無三寶。身共を何も知らぬ者ぢやと思うて笑はうなあ。アド〽餘り褒めは致しますまい。シテ〽面目ない事ぢや。何としたものであらうぞ。イヤあれへいて言はうは。唯今の秀句一々聞き事でこそあれ。尤も秀句とは知つたれども。年久しう召使はうと思うて。わざと刀の柄に手を掛けたれば。唯ものかいで。傘の柄でさへのきにせられた所。比類もない。見事ぢや。いよ〳〵扶持をもせうず。猶々秀句を聞かう程に。是へ出よと云へ。アド〽畏まつて御座る。シテ〽やい〳〵。すればきやつが言出す事は。みな傘に就いての秀句ぢやな。アド〽左樣でござる。シテ〽合點ぢや。今の通りを言へ。アド

へ心得ました。なう〱〱。頼うだ御方の仰せらるゝには。唯今の秀句聞き事でこそあれ。尤も。秀句とは御存じなれども。心を引き見ん爲。最前の樣に仰せられた。いよ〱御扶持も下されうず。猶々秀句を聞かうと仰せらるゝ。小アドへ心得ました。アドへあれへ出さしめ。アドへ秀句。シテへ秀句。扨々唯今傘についての秀句。いや〱聞き事でこそあれ。尤も秀句とは知つたれども。年久しう召使はん爲に。わざと刀の柄に手をかけたれば。唯ものかいで。傘の柄でさへ。退きにせられた所。此類もない見事ぢや。猶々扶持くわつとせうぞ。小アドへそれは有難う存じまする。シテへ何ぢや。有難い。シテ吟じて笑ふ。ハテ有難のがの字が。傘に就いての秀句ぢや。シテへやい太郎冠者。はや秀句ぢや。笑ふ。これ〱。此扇は持ち古びたれども。今の褒美にやるぞ。小アドへ結構なお扇を下されて。忝う存じまする。シテへ又。くはいた。笑ふ。傘に就いての秀句に。忝い〱。笑ふ。さて此刀は重代なれども。是も汝にやるぞ。小アドへ結構な御刀を拜領致して。冥加に叶ひまして有難う存じまする。シテへ冥加〱。笑ふ。やい〱。そちも何ぞやつて。秀句を聞かぬかいやい。

アドへ私は何もやる物が御座りませぬ。シテへ、何ぞもそつとやつて秀句を聞きたいものぢやが。ト云うて。素袍熨斗目をぬぐ。シテへやい〱。是を脱がせ。アドへそれは御無用になされませ。シテへおのれが何を知つて。この面白い秀句を聞かいで何と堪忍がなるものぢや。やい〱是もやるぞ。小アドへ大慶に存じまする。シテへ大慶〱。笑ふ。大慶の慶の字が秀句ぢや。ト云うて。笑うて居る内。小アド太鼓座へ行き。素袍。刀。熨斗目。皆殘らず置きて。傘を持ちて出るなり。小アドへ太郎冠者殿。これは手張の傘で御座る。頼うだお方に上げて下され。アドへ心得た。小アドへ一段の仕合せぢや。すかさうと存ずる。ト云うて入るなり。アドへ申上げまする。是は秀句が手張りの傘で御座る。お前へ上げて見れいと申しまする。シテへ何ぢや。是を身共に見るゝと云ふか。アドへなか〱。シテへして秀句は。アドへどれへやら參りました。シテへ何ぢや。どれへいらいた。アドへハア。シテへフム。雨の降る夜はなおりやり候そ。傘故に身はほろれ。アヽ秀句と云ふ物は寒いものぢや。ト云うて。留めて入る也。

磁石（じしやく）

シテ　人賣
アド　田舍者
小アド　茶屋

アドへこれは遠江の國見附の郷の者で御座る。某國許で計らず留論を致して。在所の住居もなりにくう御座るに依つて。此度上方へ上り。此處彼處も見物致し。似合ひ所でも有らば。足をも留めうと存ずる。先づ急いで參らう。シカ〱。誠に。若い時旅を致さねば。老いての物語が無いと申すに依つて。計らず思ひ立つた事で御座る。はアあれに大きな宮建が有る。あれは何處ぢや。なに尾張の國熱田の明神ぢや。さて〱聞及うだよりは大社ぢや。此度參詣致したけれども。上方へ急ぐ。此度は不參を致さう。又あれに青々と見ゆるは何ぢや。なに近江の湖ぢや。扨も〱夥しい事かな。別してそこ許のどよめくは何ぢや。なに大津松本の市ぢや。これはちと立寄つて見物致さう。シテへ人を賣つて渡世致す者で御座る。今日は大津松本の市で仕合はせを致さうと存ずる。イヤあれに田

舍者と見えて、市を見物して居る。ちと彼奴にたづさはつて見うと存ずる。アドへ、おゝ出したり／＼。是は何を求めうと儘な事ぢや。シテへ何れ何を求めうと儘な事ぢや。アドへこれは子供の玩具ぢや。シテへ誠に子供の玩具ぢや。アドへ雛張子。シテへ雛張子。アドへ土で作つた狗の子。起上り小法師振鼓。これは何を求めうと儘な事ぢや。此のシカ／＼アドの云ふ通り吟ずるなれ。仕様あるべし。シテへエイ何と。アドへ氣味の悪い奴ぢや。シテへ目の鞘の外れた奴ぢや。アドへこりや店を構へて見物致さう。シテへはゝ店を構へ居るさうな。アドへこれはまた茶の湯の道具ぢや。アドへ風爐釜。茶碗 茶入。水翻。何を求めうと儘な事ぢや。シテ吟ずる。前に同じ。シテへエイ何と。アドへ和御寮は最前から近附の様におしやるが。身共は曾て知らぬぞや。シテへ知らぬといふ事が有るものか。そなたは物の人ぢや。アドへ物とは。シテへハテそれ物いのう。アドへ某は岡崎の者ぢや。シテへおゝそれ／＼岡崎の人ぢや。アドへ岡崎の橋を。シテへ橋を。アドへ渡らうと。二人へして。アドへ渡りはしませぬ。シテへいかな／＼渡る事では居りない。アドへはて能う知つて御座るのう。シテへ能う知つてゐるとも。アドへそれならば眞實申さう。遠江の國見附の郷の者で御座る。シテへ有様は遠江の國見附の郷の人ぢや。アドへ見附の町を。シテへ町を。アドへ一町ほど眞直ぐに行て。シテへ行て。アドへ左へきりりと廻つて。シテへ廻つて。アドへ角から三軒目の。シテへ目の。アドへ者で御座る。シテへ成程三軒目の人ぢや。アドへはて能う知つて御座るのう。シテへおゝ能う知つてゐるとも。して此度は何として物したぞ。アドへさればの事で御座る。國許でふと口論を致して御座ればの。在所の住居もなりにくう御座るに依つて。此度上方へ上り。此處彼處をも見物致し。似合はしい所もあらば。足をも留めうと存じて。唯今上る事で御座る。シテへさては左様でおりやるか。和御寮の小さい時、親達のおしやるは。あれは成人の後。人と喧嘩をせいで叶はぬ者ぢやとおしやつたが。違はぬものぢや。してそなたの物は息災なか。アドへ物とは。シテへハテそれ物いの。アドへえゝ伯母の事で御座るか。シテへなる程。伯母の事ぢや。アドへ隨分息災に御座る。シテへ身共は其の伯母にいかう世話になつた者でおりやる。アドへさては此方の事で御座るか。上方に心易うせいで叶はぬ者が有るとおしやりましたが。シテへなる程。それは身共の事ぢや。此處で逢うたは幸なれ、奉公が仕度くばさせうず。また商が仕度くば。元手を宛がうて商をさせう程に。心安う思はしめ。アドへそれは近頃忝う御座る。とかく此方を頼みまするぞ。シテへしてそなたは石山の觀世音へ詣つた事が有るか。アドへ聞及うだれども。ついに詣つた事が御座らぬ。シテへそれならばお禮旁々連れて詣らうぞ。さあ／＼おりやれ。アドへ心得ました。シテへさてあの石山の觀世音は。靈現あらたかな御佛ぢや。身の行末を祈らしめ。アドへなる程。信を取つて身の行末を祈りませう。シテへ幸ひ坂に存じた茶屋が有る。これへ連れて寄つて休ませうぞ。アドへそれは忝う御座る。シテへいや何かと言ふうちにこれぢや。さあ／＼ずつと通らしめ。アドへ通つても苦しう御座らぬか。シテへ苦しうない。ずつとお通りあれ。アドへ心得ました。さて私はいかう草臥れました。暫く微睡みませう。シテへそれならば洗足をおしやれ。アドへいやもう洗足には及びませぬ。暫く微睡みませう。シテへやい／＼若い者。洗足をせい。若い者洗足をせいでな。なう／＼御亭主御座るか。小アドへこれに居りまする。シテ

に、又よい者を連れて來た程に。求めておかしめ。小アド〽先度も其の樣におせあつたれども、取逃げなしで損なしておりやる。シテ〽此度は格別よい者ぢや程に。求めておかしめ。小アド〽それならば。先づ人柄を見う。シテ〽お見やれ。あれでおりやる。小アド〽なる程あれは人柄も好ささうな。求めうが代物は何程でおりやる。シテ〽五百疋でおりやる。小アド〽それは餘り高直な。三百疋に負けてお呉りやれ。シテ〽いや〳〵負はない。いやならばおかしめ。小アド〽でも先度の者で損をしたに依つて。三百疋に負けてお呉りやれ。シテ〽先度の者で損をしたとおしやる程に。三百疋に負けておきませう。小アド〽それは過分な。シテ〽さて代物は明朝六ツ太鼓を打つ時。塀越しに受取るであらう。小アド〽成程。塀越しに渡さう。シテ〽、身共もいかう草臥れた。暫く微睡まう。小アド〽それがよからう。シテ〽やい〳〵若い者。洗足をせい。若い者洗足をせいでなア。アド〽なう〳〵恐ろしや〳〵。彼奴は最前近附の樣に申したに依つて。誠と存ずれば。あれは人賣ぢや。はつちや恐物。急いですかさう。イヤ〳〵タア身共を鳥目三百疋に賣つた。致し樣が御座る。

小アド〽何者ぢや。アド〽約束の者。小アド〽心得た。渡した。アド〽、受取つた。これさへ有れば心易い。急いですかさう。シテ〽むゝ寢た事かな〳〵。これはいかな事。夜ががら〳〵がりと明けた。扨も〳〵寢過した事かな。小アド〽何者ぢや。シテ〽約束の者。小アド〽渡した。シテ〽いや受取らぬ。小アド〽いや渡した。シテ〽はて身共でおりやる。小アド〽でも渡した。シテ〽何ぢや渡した。小アド〽なか〳〵。シテ〽はて合點の行かぬ事ぢや。南無三寶。またすかされた。小アド〽それお見やれの。シテ〽さて憎い奴ぢや。どつちへ往たか知らぬ迄。あゝまだ遠くへは行くまい。寢た跡が如來膚な。追駈けう程に其の太刀を貸してお呉りやれ。小アド〽心得た。これは身共が重代ぢや。損ねぬ樣に持つてお行きあれ。シテ〽心得た。さて〳〵腹の立つ事ぢや。どちへ行き居つた事ぢや。今に思ひ知らせてくれう。アド〽なう恐ろしや〳〵。あまの命を拾うたと言ふものぢや。シテ〽がつきめ。遣らぬぞ。アド〽存まう。シテ〽何の存まう。アド〽あゝ。シテ〽あら不思議や。身共が拔いた太刀を見て。存まうの。あゝのと言ふ。己れは何者ぢや。アド〽身共を知らぬか。

シテ〽いゝや知らぬ。アド〽唐土日本の潮境に磁石山といふ山がある。其の山に住む磁石の精ぢや。シテ〽何ぢや磁石の精ぢや。アド〽なか〳〵。シテ〽して何と。アド〽昔は渡海の船が釘鎹であつたに依つて。吸寄せてはずつと呑み。引寄せてはずつと呑みしたれども。今は人間が賢うなつて。藤からみ漆喰詰にするに依つて。磁石山の飢日以ての外ぢや。さるに依つて此度日本へ渡り。鐵を呑まうと思ふ所に。タア身共を鳥目三百疋に賣つた。シテ〽いゝや賣らぬ。アド〽いや賣つた。シテ〽して何と。アド〽それを呑うだれば青錆であつたに依つて。喉に詰まつて心地が悪い。今また汝が拔いた太刀は。天晴れ一銘抱へた物と見請めた。切先から鎺元まで。たつた一口に呑まう。シテ〽あの呑まう。アド〽あゝ。シテ〽これはいかな事。磁石の精ぢやと思ひなしか。どうやら此の太刀がどんよりとしたやうな。イヤ致しやうが御座る。アド〽これはいかな事。餘りの危さに磁石の精ぢやと申せば。誠かと存ずる。愈々たばからうと存ずる。シテ〽やい〳〵磁石。アド〽何ぢや。シテ〽此の太刀を見すれば何とある。アド〽心が清々する。シテ〽隱

なば。アド〽まく／＼とする。シテ〽鞘に納むれば。アド〽あゝ納めて呉るゝな。命がない。シテ〽何ぢや命がない。アド〽なかなか。シテ〽やれ／＼嬉しや。汝をこれ迄追駈けたも命を取らう爲ばかりぢや。さらば鞘に納めるぞ。アド〽あゝ納めてくれな／＼。シテ〽そりや納むるは／＼。やい磁石。また騙しはせぬかよ。磁石。やい磁石。こりや死んだが誠さうな。あゝ安大事をした。天下治まり目出度い御代に。若い者を二人迫ツつまくつした。一人は死する。今一人はとお訊ねの時。身共が迷惑する。何としたものであらう。いや彼奴は此の太刀故に命を失うた者ぢや。此の太刀を彼奴に手向けた上。蘇生を祈らうと存ずる。如何に磁石確かに聞け。汝が好む太刀の鎺元二三寸抜き寛げ。磁石が枕元にどうと置き。くわつ／＼の文を唱へ。磁石が上をあなたへはひらり。こなたへはひらり。ひらり／＼と如何に磁石よ／＼。アド〽たいゝそいゝや邊いゝいゝりに音するは。シテ〽古いゝいゝのたいゝらいゝ／＼よ。アド〽有いゝいゝなも聞かじいゝいゝ怨めしいゝいゝや。シテ〽怨いゝいゝむるも道いゝいゝ理なり。げにいゝいゝ怨むるも道理なり。アド〽がつきめ遣らぬぞ。シテ〽また騙し居つたか。アド〽たつた一打にしてくれう。シテ〽宥してくれい／＼。アド〽憎い奴の。どちへ行くぞ。シテ〽宥せ／＼。アド〽遣るまいぞ／＼。追込。

二千石（じせんせき）

シテ　主人
アド　太郎冠者
（入道具）

シテ〽此邊りの者で御座る。某一人召使ふ下人が。身に暇も乞はず何方へやら參つて御座る。聞けば夜前歸つたと申せども。未だ目見えを致さぬ。今日はきやつが私宅へ立越え、たばかり出して乾度折檻の致さうと存ずる。まづ急いで參らう。誠に。憎いやつで御座る。身に一言の斷りを申して御座らば。いか程なりとも暇を取らせうものを。出し抜いて參つた段は言語同斷憎い仕合せで御座る。何かと申す内にきやつが私宅は早や是ぢや。某が聲と聞き知つたらば留守を使ふで御座らう。作り聲をして呼出さうと存ずる。物も。案内も。アド〽やら奇特や。夜前罷歸つたを早やどなたやら御存じあつて。表に案内がある。案内とは誰そ。シテ〽ものも。アド〽どなたで御座る。シテ〽しさりをれ。アド〽ハア。シテ〽俄の慇懃迷惑致す。ちとお手を上げられい。アド〽是は何とも迷惑に存じまする。シテ〽おのれは此中誰に暇を乞うて何方へ行た。アド〽さればの事で御座る。お暇の儀を申上げうと存じて御座れども。一人召使はるゝ下人の事で御座れば。申したりともやはか下されまいと存じて。忍うで京内詣を致して御座る。シテ〽やら珍らしや。一人召使ふ下人が京内詣をすれば。主に暇を乞はぬが法ですか。アド〽ハア。シテ〽エイ。アド〽ハア。シテ〽憎いやつの。きつと折檻のせうと思うて是迄は來たれども。京内參りをしたと云へば。都の事もなつかしい。此度は赦す。そこを立て。アド〽それは誠で御座るか。シテ〽弓矢八幡助くるぞ。アド〽やら心安や。シテ〽何と今の間は窮屈にあつたか。アド〽いつもの御氣色とは違ひまして。すは御手打にもあひますかと存じて。身の毛をつめて居りました。シテ〽さうであらう。身もいつもより腹が立つた。以來はきつと嗜め。アド〽畏まつて御座る。シテ〽さて京内詣をしたと云ふが。都は賑かな事か。アド〽なか／＼。東山の御遊山西山の花見などと申して。おしもわけられた事では御座らぬ。シテ〽何が扨花の都ぢやもの。さ

うなうては叶ふまい。さて何も珍しい事はなかつたか。アドへ別に珍しい事も御座りませぬが。都には謠がはやりまする。シテへイヤこゝなものが。天下治りめでたい御代に。謠のはやるが何の珍しい事がある。アドへいや左様にも仰せられまするな。お前は所で口をもお利きなさるゝによつて。おの〳〵の御參會と申せば。上座をもつめなさるゝ。すは亂舞と申せば。下座へ下つて疊の塵をむしつて御座るな。陰ながら見ましてお笑止に存じて。お前に教へまするに存じて。謠を都で習うて參つて御座る。シテへ何と云ふぞ。身は所で口をもきく者なれば。おの〳〵の御參會と云へば上座をもつめる。すは亂舞と云へば下座に下つて疊の塵をむしつて居るを。陰ながら見て笑止に思ひ。身共に謠を教へうと思うて。謠を習うて來たと云ふか。アドへさやうで御座る。シテへ扨々それは出かした。して今でも謠ふか。アドへ何時でも謠ひませう。シテへそれならば先づその床几を呉れい。アドへ畏まつて御座る。シテへ何と囃子の者でも呼びにやらうか。アドへいや。私が心拍子を以て謠ひまする。シテへそれは一段ぢや。急いで謠へ。アドへ畏まつて御座る。アドへ二千石の松にこそ。千年を祝ふ後迄も。其名は朽ちせざりけり。〳〵。日本一の御機嫌に申上げた。もそつと謠はう。シテへしさりをれ〳〵。アドへハア。（ト云うて。左の方へ二千石を謠ふ。又右の方へ松にこそを寄り謠ふ。正面に出て。）シテへ南無謠の大明神。只今の謠は某が存じて謠はせたでは御座らぬ。眞平御免あれ南無謠の大明神。ヤイそこなやつ。アドへハア。シテへ今の謠の仔細を。知つて謠うたか知らいで謠うたか。アドへいや何も存じませねども。都にはやりましたによつて謠ひました。シテへ何の都にはやらうぞ。おのれが持つて行てはやらしたものであらう。アドへいや左様では御座りませぬ。シテへ早速成敗するやつなれども。謠の仔細も語らずに成敗したらば後難も如何ぢや。ここの謠の仔細を語り。其後成敗する程にさう心得。アドへ其樣な事ならば謠ひますまいものを。シテへまだぬかし居る。つッと是へ寄つて聞きをろ。アドへハア。シテへ扨も某が親の親は祖父よな。アドへハア。祖父御樣で御座りまする。シテへその親の親のつッとあなたの代の事にてありし。安部の貞任奥州衣川の城廓に籠り。盛昌我意にまかせらるゝ間。都より討手の大將下さるゝ。其時の大將軍は。忝くも八幡殿にてありしよな。アドへハア。シテへ先づは攻めも攻め。耐へも耐へけるぞ。前九年後三年合せて十二年三月といふもの攻めらるゝ。其時八幡殿に御酒宴のありし。某が先祖の祖父お酌に立つ。大將たぶ〳〵と受け給ひ。祝言一つとありしかば。鐔の引合せより扇を拔出し。銚子の長柄をちやう〳〵と打つて。二千石の松にこそ。千年を祝ふ後迄も。其名は朽ちせざりけり。と押返し三度迄謠ふ。大將なのめに悦うで三盃はし給ひ。程なく敵を亡し天下一統の世となし給ふ。其時八幡殿。いでかの謠の恩賞を與へんとあつて。宇田の庄といふ大庄を賜はり。彦々祖父より曾祖父祖父親である者。今某に至る迄。活計歡樂に誇る事も。ひとへに此二千石の祝言の故なり。イヤ斯樣の大事の御謠を。おろそかにしては叶はじと。乾の隅に壇の築き。石の唐櫃を切つて据ゑ。二千石の御謠を。一つ謠うてはとうど入れ。二つ謠うてはとうど入れ。石の唐櫃の蓋のふつとなる迄謠ひ入れ。七重に注連をはり。南無謠の大明神と。額を打つて崇め申す程の御謠を。なんぞやおのれが。主に暇も乞はず餘所へ失するのみならず。あそこへ行ては二千石。爰へ行ては二千石と。祝言の謠ふは曲事にて

あるぞとよ。お直り候へ成敗致す。アドへそれは誠で御座るか。シテへ弓矢八幡打つて捨て申す。アド泣く。シテへ扨々未練なやつの。武に首をもさげられうずる者が。餘人へも仰付けられいで。お手打に預つて忝いなどと云うて。につこと笑うて直りさうなやつが。最期に及うではゆるは。切先はござ元。但し女子に名殘が惜しいか。眞直にぬかせ。アドへ切先はござ元女子に名殘は惜しうは御座らぬが。昔が思ひ出されて。シテへ昔が思ひ出されてとは何の事ぢや。アドへさればの事で御座る。大殿様の御代の時。あるつれ〴〵に。違ひ棚にある尺八を取つて來いと仰せられたな。取つて參るとて。疊のへりにつまづいて轉うだな。無躾なやつぢやとあつて。かの尺八をおつ取つて。投打ちになされたお手許と。今。直れ。切らう。と仰せらるゝお手許が餘りよう似まして。それがあはれで。ト云うて泣く。シテへ何と云ふぞ。親ぢや人の御代の時。或るつれ〴〵に。違ひ棚にある尺八を取つて來いと仰せられたな。取つて來るとて。疊のへりに躓いて轉うだな。無躾なやつぢやとあつて。かの尺八をおつ取つて投打ちになされたお手許と。今身共が。直れ。切らう。といふ手許が餘りよう似たによつて。それがあはれでほゆると云ふか。アドへ左様で御座る。シテへあの。それがや。アドへハア。二人とも泣く。シテへ惣じてけなげな者は。最期に及うてあはれな事を思ひ出すといふ。そちはあはれな事を思ひ出したな。最早切られはせまい。命を助くる。そこを立て。アドへそれは誠で御座るか。シテへこりや〳〵。太刀も鞘に收むるぞ。アドへ誠に大殿様は。常々立板に水を流す様なお心で御座つたが。其様に早うお氣の直らせらるゝ所は。よう似ました。シテへやい〳〵。是は重代なれども。汝にやるぞ。アドへ此様に物を下さるゝ所は。よう似まして御座る。シテへ是も似たと云ふか。アドへハア。シテへ是はわざよしなれども。是もやるぞ。アドへ此様にお氣の廣い所は。猶よう似ました。シテへ斯う行く姿は。アドへ其儘で御座る。シテへ戻る姿は。アドへ生寫しで御座る。シテへあまり汝が似た〳〵と云ふによつて。親じや人の事が思ひ出されて。ト云うて泣く。シテへやい太郎冠者。惣じて昔から子が親に似たといふは。めでたい事ではないか。アドへ誠に是はおめでたい事で御座る。シテへ由ない事に落涙なした。此様な時は。いざどつと笑うてのけう。アドへよう御座りませう。シテへつツと是へ寄れ。アドへ畏まつて御座る。シテへさあ笑へ。アドへまづお笑ひなされませ。シテへまづ。アドへまづ。二人へまづ〳〵。ト云うて笑ひとめて。入るなり。

止動方角（しどうほうがく）

シテ　太郎冠者
アド　主人
小アド　伯父
馬
（入道具）

アドへ是は此邊りの者で御座る。今日俄に東山に於いて御茶競べが御座る。某が茶はまだ口を切らぬに依つて。太郎冠者を呼出し。伯父や人の方へ借りに遣さうと存ずる。呼出す。出る。常の如し。アドへ汝大儀ながら伯父や人の方へいて。今日は俄に東山に於いて御茶競べが御座る。こなたの茶はいまだ口を切りませぬに依つて。お前の宜しい極を一たいわたしに入れて。お借しなされと言うていて來い。シテへ畏まつては御座れども。茶も詰めでの茶競べには。慮外ながら御無用になされませ。

アドへおのれ何をしつて。兼日からの約束ぢや。又何れも下に太刀を持つ。太刀も借つて來い。又何れも馬上でお行きやるに依つて。馬も借つて來い。 シテへ、ハテ人は殿人御遣しなされます。 アドへ身が内に汝より外に誰が有る物ぢや。汝一人して借つて來い。 シテへあの仰せられます事は。御茶から御太刀御馬まで。私一人で何となる物で御座る。是はもそつと人を遣されませ。 アドへそれならば口取り共に借つて來い。 シテへいかに伯父御樣がお心易いと申しても。口取り迄の御無心はなりますまい。 アドへ太郎冠者。汝と伯父御樣は合口ではないか。よい樣に言うて借つて來てくれいやい。 シテへなるならぬは存じませねども。先づ參つて見ませう。 アドへ急いでいて。やがて戻れ。 つめる。常の如し。 シテへ是はいかな事。迷惑な事を言付けられた。ぢやと言うて行かずばなるまい。シカ〳〵。誠に。こちの頼うだ人の樣な我儘な人は御座るまい。どこにか茶も詰めての茶競べはおいて貰ひ度い。それはさうでは御座るまいと申せば。おのれが何を知つてと言うて齒を出さるゝ。扨も〳〵氣の毒な人ぢや。イヤ何かと言ふ内にはや是ぢや。ト言うて。案内乞ふ。小アド出る。常の如し。 小アドへ頼うだ人は何と言うておこされた。 シテへ今日俄に東山に於て御茶競べが御座る。こなたの茶はいまだ口を切りませぬに依つて。お前のよろしい極一たいわたしに入れて。お貸しなされと申越して御座る。 小アドへやい太郎冠者。茶も詰めての茶競べは。要らぬ物ではないかいやい。シテへいや兼日からの約束ぢやたら申されます。 小アドへ兼日からの約束ならば。今更へんかいもなるまい。貸してやらうぞ。シテへあのお貸し下されますか。 小アドへ暫くそれに待て。 シテへハヽ。やれ〳〵嬉しや。先づ一色は埒が明いた。 小アドへやい〳〵。是を持つて行け。 シテへ是は結構なお茶と見えて。外入れまでが結構に御座る。 小アドへ今日ははりがましからうと思うて。よいのを貸してやる。大事に掛けて持つて行け。 シテへ畏まつて御座る。してまだ御座ります。 小アドへそれは何ぢや。 シテへ何れも下々に太刀を持ちます。こなたの太刀は芝引が損じて。金具屋へ直しにやつて御座る。これ一色は頼うだ者が申付けは致しませぬが。どうぞ私にお貸しなされて下されい。 小アドへ何れ一色貸すも二色貸すも同じ事ぢや。是も貸してやらうぞ。ト言うて取りに行く。前の如し。 シテへ是は有難う存じます。先づ是も埒が明いた。 小アドへさあ〳〵是も持つて行け。 シテへ是は餘り結構な御太刀で御座る。もそつと惡いをお貸しなされて下され。小アドへいや〳〵。是は重代なれども貸す。損はぬ樣にして持つて行け。 シテへ忝う存じます。ト言うて。せゝら笑ひする。 小アドへ太郎冠者。もう行くか。 シテへえ。 小アドへいやさ。もう行くかと言ふ事ぢや。 シテへ笑ふ。まだ御座りまする。 小アドへ何ぢや。まだ有る。 シテへ何れも馬上でお行きやりまする。こなたの頼うだ者ばかりかち跣で參つては。お前の御外聞もいかゞで御座る。何卒お馬もお貸し下されうならば忝う存じます。 小アドへ何れ小身では馬は持てぬ。是も貸してやらうぞ。シテへ、あの是もお貸し下されますか。 小アドへ暫くそれに待て。ト言うて。樂屋へ馬を引きに入る。 シテへなう〳〵嬉しや〳〵。何が案じつらう内に。三色ともざつと埒が明いた。小アド樂屋より馬を連うて出る。 小アドへはい〳〵。 シテへホッ是は御自身御苦勞に存じます。いかうお馬が太りました。小アドへ何と太つたであらうが。 シテへどうでも飼はせられ樣がよう御座るに依つて。いかうお馬が太りました。小アドへして是は汝一人か。 シテへ私一人で御座る。小アドへ一人ではなるまいな

あ。シテ〽何れお壺からお太刀お馬迄。私一人てはなりますまい。どうぞ口取り衆を一人お貸し下されうならば忝う存じます。小アド〽易い事なれども。今日は方々へ使ひに遣して。一人も宿に居ぬ。シテ〽あの一人もお宿に居りませぬか。小アド〽中々。シテ〽さやうならば是非に及びませぬ。一方ではお壺とお太刀又一方はお馬を引いて歸りませう。小アド〽せめてさうなりともせずばなるまい。して其馬にはちと惡い癖がある。シテ〽それは又いか樣な癖が御座る。小アド〽其馬の後ですはぶきをすれば。忽ち取つて出る事ぢや。シテ〽是は惡い癖で御座る。私は存じて居りまするに依つて。すはぶきは致しますまいが。若し行き通りの人が存ぜいですはぶきを致して。取つて出ましたらば何と致しませう。小アド〽それには早速鎭まる呪文がある。敎へてやらうぞ。シテ〽それは忝う存じます。小アド〽物と言ふ事ぢや。寂蓮導師六萬菩薩。鎭まり給へ。止動方角。と言ふ事ぢや。シテ〽何と仰せらるゝ。寂蓮導師六萬菩薩。鎭まり給へ。ト引いて。何で御座ります。小アド〽止動方角。シテ〽止動方角。と言ふ事で御座るか。小アド〽中々。シテ〽もう大方覺えました。小アド〽汝に賴む事が有る。シテ〽それは又いか樣な事で御座る。小アド〽是迄そちへ色々道具を貸せ

ども。終に一色も戾つた事が無い。此度は數

數祕藏な道具ぢやに依つて、あいたらば早々返して呉れい。シテ〽其段なそつとも御氣遣ひなされまするな。あきましたらば早速私が御返辨申します。小アド〽必ずそれを賴む事ぢや。シテ〽してもう斯う參りませう。小アド〽何と行くか。シテ〽中々。小アド〽よう來た〳〵。シテ〽ハア。なう〳〵嬉しや。何が案じつらう内に。三色共ざつと埒が明いた。先づ急いで戾らう。シカ〳〵。誠に。あの樣な結構な伯父御樣は御座るまい。いつ何時何な借りに參つても。それをいやと仰せられた事はない。はい〳〵〳〵。あの伯父御樣が無くば。こちの賴うだ人は何で公儀を召されうぞ。はい〳〵〳〵。あの伯父御樣を惡う思うたらば罰が當るものぢや。はい〳〵〳〵。アド〽太郎冠者な。伯父や人の方へ使に遣したが。餘り歸りが遲う御座るに依つて。見に參らうと存ずる。さればこそあれへのろり〳〵と歸りをる。やい〳〵。やいそこな奴。シテ〽ヤア。アド〽おのれ今迄何をして居た。シテ〽何をして居ませうぞ。是が一色や二色の物では御座らぬ。伯父御樣の御機嫌の損ねぬ樣にと思うて。色々と言うて借つて來ました。アド〽おのれそれ程の物を借るに、何の追從が要る物

ぢや。最早何時ぢやと思ふ。何れも遲いと言うて。はや先へお行きあつたわいやい〳〵。シテ〽あれ〳〵よう借つて來た事はいきなろ。六はいで。又あれぢや程に。アド〽うせならぬかいやい。シテ〽行きまする。あのお壺やお太刀は誰が持ちまする。アド〽誰が持つ物ぢや。おのれ持つて來い。シテ〽持つて行きますわい。アド〽持つてうせう。はい〳〵。はい〳〵。やい〳〵〳〵。やいそこな奴。シテ〽ヤア。アド〽おのれ道も無い所へ。どこへうせるのぢや。シテ〽道が無くば戻りますわい。アド〽戻りならう。シテ〽戻ります。へン。湯な沸かして水に入るとは此の事ぢや。まめしげもない奉公をする事ぢや。アド〽ヤイ。おのれが樣な者は。身にひつ添うてうせう。シテ〽ひつ添へならばひつ添うて來たがよい。ト言うて。アドのはたにひつく。アド〽エイ。身にひつ添へと言へば。蔽ひ重なる樣にしをる。おのれが樣なやつは前へうせう。シテ〽前へ行きませうか。アド〽前へうせう。シテ〽前へ行けならば先へいたがよい。ト言うて。むかつき顔をして先きへ行く。アド〽エイ。あの不承さうな面わいやい。おのれ供先ならこそ了簡して置く。宿許へ歸つて只置かうと思ひ居るか。やい〳〵。やいそこな奴。シテ〽ヤア。アド〽ヤア。おのれ先へ行けばとて。方量もなう先へうせるがな。シテ〽こなた先へ行けと言はつしやらぬか。アド〽いかに先へ行けばとて。供の仕樣な知らぬか。よい加減な知り居らぬかいやい。シテ〽おのれぢやと言うて何としませう。どれ程がよい加減や知りませぬわいのう。アド〽まだそのつれな言ひなる。戻りなる〳〵。シテ〽戻りますわい。アド〽戻りならう。シテ〽扨々腹の立つ事ぢや。ちと落してやらう。ト云うて。馬の後にて咳拂ひをする。馬はねる。アド落つると。シテ乘るなり。シテ〽寂蓮導師六萬菩薩。鎭まり給へ。止動方角〳〵。笑ふ申し。落ちさつしやれたか。アド〽おのれが世話をやかすに依つて落馬した。シテ〽扨々それは危い事で御座りました。それへ參つて御介抱が致し度う御座れども。お馬が取つて出まするに依つて。乘り鎭めて居ります。どこも痛みは致しませぬか。アド〽したゝか腰を打つた。シテ〽扨々危い事で御座りましたさりながら。大方お馬も鎭まりました。いざ召しませ。アド〽いやも其樣な馬に乘る事はいやぢや。シテ〽いやぢやと仰せられて。このお馬を何と致しませう。アド〽ハテ。それから追返せ。シテ〽是はいかな事。伯父御樣の御秘藏のお馬を。馬取り無しに追返さるゝもので御座る。アド〽それならば汝乘つて行け。シテ〽御意ならば乘りも致しませうが。あのお壺やお太刀は誰が持ちまする。アド〽誰が持つ物ぢや。汝持つて行け。シテ〽是は御意とも覺えませぬ。お前召しつけて御座つてさへ御落馬をなさるゝ。まして私が乘りつけもせいで。あのお壺やお太刀を持つて乘りましたらば。そりや落ちるにかゝつて居りませう。ひらに召しませなう。アド〽アヽいやぢやと言ふに。よしれもない物を借つてうせるに依つてぢや。是非に及ばぬ。壺や太刀は身共が持つてやらう。シカ〳〵。シテ〽あのお前がお持ちなされますか。アド〽中々。シテ〽それは御苦勞な事で御座る。アド〽さあさあ行け。シテ〽さやうならばお先へ參ります。アド〽行け〳〵。シテ〽はい〳〵〳〵。アド〽やい太郎冠者。シテ〽ハア。アド〽そちはいかう馬上が見事ぢや。シテ〽何とよう御座りますか。アド〽いやも殊の外見事な事ぢや。シテ〽お言葉にあまえて申すでは御座らぬが。お前が御立身なされたらば。私ぢやと申して。馬に腰を掛けまい物では御座らぬ。其時人を使ひつけいで使うたら。嘸不都合に御座らう。

幸ひ今日は後先に人も無し。誰そ似合はしい者も有らば。内の者の様にして呼うて見たいものて。笑ふ。申しますまい〳〵。アド〽何と身共が立身したら。そちぢやと言うて馬に腰を掛けまいものでもない。其時人を使ひつけいて使うたら。嘸不都合にあらう。幸ひ今日は後先に人も無し。身共を内の者にして呼うで見たいと言ふか。シテ〽御勿體ない。お前と申す事では御座らぬ。誰そ似合はしい者も有らばと申す事で御座る。アド〽それはよい心掛けぢや。また身共も終に内の者になつて見た事が無い。今日は幸ひぢや程に呼うで見せ。シテ〽さやうならば呼うて見ませうか。アド〽早う呼べ。シテ〽エヽ。笑ふ。是も中々呼ばれさうには御座らぬ。アド〽其様な事が有るものか。思切つて呼べ。シテ〽さやうならば思切つて呼びませう。アド〽それがよからう。シテ〽やい〳〵太郎冠者。アド〽ハア。シテ〽来るか。アド〽ハア。シテ〽御座りますか。アヽ勿體ない。御許されませ〳〵。アド〽是はいかな事。シテ〽いやもお顔を見ましては。そら恐ろしうて中々呼ばるゝ事では御座らぬ。アド〽其様な氣の弱い事で中々立身はならぬ。許す上からはのし切つて呼べ。シテ〽爰は聞き所で御座る。御許さるゝに依つて。のし切つて呼べて御座るか。アド〽其通りぢや。シテ〽それならば。構へて御許されませ。アド〽オヽ許す〳〵。シテ〽やい〳〵太郎冠者。アド〽ハア。シテ〽来るか。アド〽ハア。シテ〽ヤイそこた奴。おのれ今迄。是より。前にアドの言うた様色々言ふ。同じ事故。呟す。アド〽扨々腹の立つ事ぢや。ト云うて一ろ馬より突落す。アド馬に乗り。睨む。口傳。アド〽やいそこなやつ。シテ〽ヤア。アド〽ヤア。己れ今のは何ぢや。シテ〽許す。呼べと仰せられたに依つて呼びました。アド〽いかに許すと言はゞとて。主に使ふ言葉を知らぬか。おのりや最前の言返しをぬかしをつたな。シテ〽おれ〳〵。許すと言うて早やあれぢや。アド〽まだぬかしをる。うせ居らう。シテ〽行きます。アド〽うせ居ろ。シテ〽アヽ。アド〽扨々憎い奴かな。シテ〽扨々腹の立つ事ぢや。また落してくれう。ト云うて。咳拂ひする。馬アドを蹴落し。楽屋へ入るなり。アド落ちる。シテ主に飛掛る。シテ〽はい〳〵〳〵。寂蒲導師六萬菩薩。鎮まり給へ。止動方角〳〵。アド〽ヤイ〳〵。身共ぢやわいやい。シテ〽エイ。頼うだお方で御座るか。アド〽アノ頼うだお方とは。シテ〽御許されませ。アド〽憎いやつの。ト言うて追込む。

痺り（しびり）

シテ　太郎冠者
アド　主人

アド〽此邊りの者で御座る。此中方々のお振舞は夥しい事で御座る。某も明日は各を申し請くる。それにつき。太郎冠者を呼出し申付ける事が御座る。太郎冠者あるか。シテ〽ハア。アド〽居たか。シテ〽お前に。アド〽念なう早かつた。汝呼び出す別の事でない。何と此中方々の御參會は夥しい事ではないか。シテ〽御意なさるゝ通り。事長じた儀で御座る。アド〽さて明日は各を申し請くるが。知つたか。シテ〽中々。存じて御座るに依つて。露路の掃除なども致して御座る。アド〽それは出かいた。扨こゝもとの肴では馳走にならぬ。汝は大儀ながら。和泉の堺へいて肴を求めて來い。シテ〽畏まつては御座れども私は御内證に御用も御座らう。次郎冠者を遣されませ。アド〽次郎冠者にも相應の用を云付くる。とかく汝行け。シテ〽それならば參りませう迄。アド〽急いで行て。頓て戻れ。シテ〽ハア。アド〽エイ。シテ〽ハア。これは迷惑

な事を云付けられた。あそこへは太郎冠者。こゝへは太郎冠者と使はれては。身も骨も續くことではない。よし今一度は參らうが。重ねての例になる。何卒して參りとむないものぢやが。イヤ致し樣がある。作病を起して參るまいと存ずる。あいた〳〵。アドへ太郎冠者の聲ぢやが。エイ太郎冠者。何とした。シテへ痺りがきれました。アドへこれはいかな事。痺り程の事を仰山に云ふ。身共が直してやらう。それ〳〵。それでよからうぞ。シテへこれは何で御座る。アドへ痺りのまじなひに。額に塵をつければ直ると云ふに依つてつけた。大方それてよからうぞ。シテへいかな〳〵。私の痺りは親の讓りの痺りで御座るに依つて。藁の一駄や二駄つけた分では直りませぬ。アドへさう云ふには何ぞ仔細があるか。シテへ中中仔細が御座る。先づ私の親は子を數多持たれて御座る。兄々へは田山家財を讓られまする。私は末子の事で御座るに依つて。何も讓らう物がないとあつて。此痺りを讓りに受けて御座る。アドへ扨々ゆずらう物も多からうに。こびた物を讓りに請けたなあ。暫くそれに待て。シテへ畏まつて御座る。アドへ太郎冠者が。和泉の堺へ參るまいと思うて作病をおこして御座る。何とぞしてやりたいものぢや。致し樣がある。アドへヤイ〳〵。何と云ふぞ。今日は伯父御の方に。酒肴を賣はせられてお料理をなさるゝ。身共にも來い。又太郎冠者も連れて來い。某は參らうが。太郎冠者は痺りがきれた程に。得參るまいと云へ。エイ。シテへ申し〳〵。それは何な仰せられまする。アドへ伯父御の方に。酒肴を賣はせられてお料理をなさるゝ。身共にも來い。又そちも連れて來いとある事なれども。そちは痺りがきれたに依つて。得參るまいと云うてやつた。シテへ私も參りませうものを。アドへ共體で何と行かるゝ物ぢや。シテへ最前も申す通り。親の讓りの痺りで御座るに依つて。やさしい所があつて。せんゆうな合めますれば直りまする。アドへそれは一段の事ぢや。急いで直せ。シテへ畏まつて御座る。ヤイ痺り。よう聞け。今日は伯父御の方にお振舞があつてお供に行かねばならぬ。何時は起らうとも。今日ばかりは直つてくれい。痺りよ〳〵。ホウ。アドへそれはなんぢや。シテ

ヘ痺りが直らうと云ふ返事で御座る。アドヘ扨々こびた物が返事をしたなあ。シテヘ左様で御座る。アドヘしてよいか。シテヘ大方よささうに御座る。アドヘ少々立つて見よ。シテヘ慮外ながら手を引いて下され。アドヘ心得た。靜かに立て／＼。これはいかうよさゝうな。シテヘ思ひの外よう御座る。アドヘちと向ふへ出て見よ。シテヘハア。アドヘ後へ戻つて見よ。シテヘハア。アドヘとんで見よ。シテヘ畏まつて御座る。アドヘ其體ならば何方へも行かれうぞ。シテヘ中々何方までも參りませう。アドヘそれならば伯父御のお振舞は嘘。汝は和泉の堺へいて肴を求めて來い。シテヘ和泉の堺と仰せらるれば又痺りが。あいた／＼。アドヘあのやくたいもない。しさり居れ。シテヘハア。アドヘエイ。シテヘハア。ト留める。

清水（しみづ）

シテ　太郎冠者
アド　主人
（入道具）

アドヘこの邊りの者で御座る。此中方々のお茶の湯は夥しい事で御座る。某も明日は各（おのおの）を申請くる。それに就いて。太郎冠者を呼出し申付ける事が御座る。太郎冠者あるか。シテヘハア。アドヘ居たか。シテヘお前に。アドヘ念なう早かつた。汝呼出す別の事でない。何と此中方々のお茶の湯は夥しい事ではないか。シテヘ御意なさるゝ通り。事ちやうじた儀で御座る。アドヘさて明日は此方へも各を申請くる。茶の水にはどれがよからう。シテヘされば。どれがよう御座りませうぞ。アドヘどれがよからうぞ。シテヘイヤどれ是と仰せられうより。野中の清水は何とで御座らう。アドヘ身共もさう思ふ事ぢや。卽ち汝に云付くる。いて水を汲んで來い。シテヘ畏まつては御座れども。私は御内證に御用も御座らう。是は次郎冠者を遣されませ。アドヘ次郎冠者にも相應の用を云付くる。とかく汝行け。シテヘそれならば參りませうまで。アドヘ暫くそれに待て。シテヘ畏まつて御座る。アドヘ此手桶は祕藏の手桶ぢや程に。隨分と損はぬ様持つてゆけ。シテヘ畏まつて御座る。アドヘ扨そちは水の汲み様を知つてゐるか。シテヘいや存じませぬ。アドヘ惣じて野中には木の葉がある。上の木の葉をかきのけて。下のたゝぬ様に中程を汲んで來い。シテヘそれ程の事は知つて居りまする。アドヘまた知つた者をやらいで知らぬ者をやらうか。急いでいて。頓て戻れ。トつめる。シテヘ扨も／＼苦々しい事を云付けられた。此水を汲む程の事は。女わらべでも濟む事を。あそこへは太郎冠者爰へ、は太郎冠者と。此様に使はれては身も骨も續く事ではない。よし今一度は參らうが。此様な事は重ねての例になりたがるものぢや。何卒して參りとむない事ぢや。イヤ致し様が御座る。まづ此手桶は爰に置いて。なう悲しや。あいた／＼。アドヘ今のは確かに太郎冠者の聲ぢや。何とした／＼。シテヘ誰ぢや。アドヘ身共ぢやが。何とした。シテヘ頼うだお方で御座るか。後から誰も追うては來ませぬか。アドヘいや誰も追うては來ぬが。シテヘ爰もとに齒形は御座らぬか。アドヘ其様なものも見えぬ。まづ心許ない。何事ぢや。シテヘ扨も恐ろしい目にあひました。アドヘそれはまづ何事であつた。シテヘまづ仰付けらるゝと其儘清水へ參つて。水を汲まう汲むまいと存ずる内に。向ふの山がどど／＼と鳴つて參ると。いかめの鬼が出てまして。取つて嚙まう／＼と申して御座るによつて。爰へどの様にして

逃げ〳〵參つたやら覺えませぬ。アドへ是は如何な事。あの清水へ鬼の出るといふ事は終に聞いた事がない。して其手桶は何とした。シテへよう其手桶の事が思ひ出さるゝ事では御座らぬ。アドへあの手桶は身共が秘藏の手桶ぢや。損はぬやうにして持つてゆけと云ふに。覺えぬといふ事があるものか。シテへさう仰せらるゝに就いて思ひ出して御座る。アドへまた思ひ出さないでならうか。シテへ餘り鬼がぎしらう追うては參る。致さうやうは御座らず。かの手桶を追取つて。鬼の面へほうど投付け。逃げ〳〵聞きますれば。ぐわりゝ〳〵と嚙割る音が致して御座る。最早參つたりとも手桶は御座るまい。アドへこれは如何な事。鬼が手桶を食ふといふ事は終に聞いた事がない。其上あれは秘藏の手桶ぢやによつて。そちが命にも換へる事ではない。シテへ是は御意とも覺えぬ事を仰せらるゝ。あの手桶は今仰付けられても何程も調ひまする。年久しく召使はれまする太郎冠者が命にもお換へなされまいとは。餘りお情ない存じまする。アドへ何をぬかしをる。行て取つてうせう。シテへあの樣な鬼の出る所へ行く事はいやで御座る。アドへ汝が行かずば身共が行かう。

シテへまづお待ちなされませ。確に鬼が出ますぞえ。アドへ何をぬかしをる。退きをろ。

シテへこれは如何な事。行かれたりとも鬼は出まい。致しやうが御座る。アドへ扨々憎いやつぢや。あの清水へ鬼の出るといふは終に聞いた事がない。臆病者で御座る。定めてむさとした物を見て。鬼ぢやと云ふ存じたもので御座らう。シテへ取つて嚙まう〳〵。アドへア、御ゆるされませ〳〵。シテへやい。おのれは憎いやつぢや。最前の手桶が惜しさに取りに來をつたな。アドへいや左樣では御座らぬ。命をお助けなされて下されい。シテへまだぬかしをる。惣じておのれは人使ひの惡いやつぢや。汝が使ふ者に太郎冠者と云うてあらうが。アドへ成程御座りまする。シテへかれはつツと心の優しい者で。そちが事を大切に思うて奉公をするに。夜ともなく晝ともなく使ひ居るげな。其上かれは一つ飲む者の事なれば。夏ならば冷。冬ならばはつたりと燗のしすまして。彼が飲まうと云ふ程飲ませうか。又飲ませまいならば取つて嚙まう。アドへ成程飲ませませう。どうぞ命ばかりはお助けなされて下され。シテへなに。

飲ませう。アド〽ハア。シテ〽まだある。聞けば夏蚊帳を釣つて寝させぬげな。よう思うても見よ。夏蚊帳なつらいで何と寝らるゝものぢや。今から蚊帳を釣つて寝させうか。寝させまいならば。アヽ／＼。アド〽成程寝させませう。どうぞ命をお助けなされて下されい。シテ〽何。寝させう。まだある。聞けば給分の殘りも算用せぬげな。早々歸つて算用せうか。算用せまいならば取つて噛まう。アド〽成程算用致しませう。とかく命をお助けなされて下され。シテ〽何ぢや。算用せう。アド〽ハア。シテ〽すればおのれが心も直つたさうな。命の儀は助くるぞ。アド〽それは有難う存じまする。シテ〽惣じて鬼の行く姿を見ぬものぢや。見居るな。アド〽見る事では御座りませぬ。シテ〽見たらば取つて噛むぞよ。アド〽いや。見は致しませぬ。シテ〽見るな見るな。（ト云ふ内。アドはつと顔を上げる。ト杖でたゝき。謡けいたゞく。）シテ〽そりや見居つたは。見るなと云ふに見をる。扨々憎いやつの。見るな。（前の如く云々。シテ太鼓座へ入る。）アド〽見る事では御座りませぬ。なう／＼恐ろしや／＼。太郎冠者が申したを嘘かと存じたれば。誠に鬼が出た。まづ急いで歸らう。シテ〽もよい時分で御座る。迎ひに參らうと存ずる。アド〽エイ太郎冠者。シテ〽エイ賴うだお方。アド〽汝はどれへ行く。シテ〽餘り遲さにお迎へに參りまする。アド〽いらぬ迎ひの。シテ〽お前はいかうお色が惡う御座る。何とぞなされましたか。アド〽別に色の惡い筈はないが。シテ〽いや。きようがつたお色で御座る。アド〽扨は色の惡いはぢやうか。シテ〽人の色では御座らぬ。アド〽邊りに人はないか。シテ〽誰も御座らぬ。アド〽つッとこちへ寄れ。さて汝が云うたを嘘かと思うて清水へいたれば。誠に鬼が出てな。シテ〽何の鬼が出ませう。アド〽それに就いて。もしそちは鬼に親子は持たぬか。シテ〽お前も餘程の事を仰せられます。鬼に親子を持つてよいもので御座るか。アド〽でも汝が事をいかう贔屓をしてゐたぞよ。シテ〽あの私が事をや。アド〽なか／＼。シテ〽ハテ合點の參らぬ事で御座る。それは物で御座らう。アド〽物とは。シテ〽私が先祖があの清水へ身を投げたとやら申しまするが。定めて孫子の末を憐みまして。お歎きながな申したもので御座らう。アド〽皆迄云ふな。さうであらう。扨そちがいた時も。向ふの山が鳴つたか。シテ〽なか／＼。向ふの山がどゞ／＼どつと鳴つて參ると。いかめの鬼か出まして。取つて噛まう／＼と申して御座る。アド〽なに。云うた。シテ〽ハア。アド〽暫くそれに待て。是はいかな事。最前の清水の鬼の聲と。今太郎冠者の聲が一つで御座る。合點のゆかぬ事ぢや。太郎冠者／＼。ヤイ太郎冠者。シテ〽ハア。アド〽鬼は何と云うた。アド〽取つて噛まうと申して御座る。アド〽最前のやうに云うて見よ。シテ〽最前のやうに取つて噛まうと申して御座る。アド〽最前のやうにいかい聲をして云うて見よ。シテ〽最前の樣にいかい聲をして。取つて噛まうとちよと申して御座る。アド〽扨はしかと云はぬか。シテ〽まづお待ちなされませ。アド〽何と待てとは。シテ〽申しませう。アド〽急いで云へ。シテ〽取つて噛まう。アド〽も一つ。シテ〽取つて噛まう。アド〽思へば／＼手桶が惜しい。も一度取りにゆかう。シテ〽一度で懲りいで二度の死をなさるゝとはお前の事で御座る。御無用になされませ。アド〽何をぬかし居る。退きなされ。シテ〽又行かれた。鬼にならずばなるまい。アド〽扨々憎い事ぢや。最前のは正しく太郎冠者であつたものを。よい肝を潰した。今度出をつたらば打殺してのけう。シテ〽取つて

嚙まう。アド〽御ゆるされませ。シテ〽取つて嚙まう。アド〽何の取つて嚙まう。シテ〽取つて嚙まう。アド〽おのれは太郎冠者ではないか。シテ〽アヽ違ひました。おゆるされませ〳〵。アド〽あの横着者どちへゆく。やるまいぞ〳〵。ト云うて。追込み入るなり。

舍弟

シテ　弟
アド　何某
小アド　兄

シテ〽この邊りの者でござる。某一人兄を持つてござるが。この兄の方へ參れば。有る名は申されいで。舍弟よう來た。舍弟どうかう申さるゝ。この舍弟と云ふ事が。よい事やらわるい事やらも存ぜぬ。爰にお目を下さるるお方がござる。是へ參つて樣子を尋ねて參らうと存ずる。シカ〳〵。誠に。內にござればよいが。內にさへござつたらば。某の申す事ぢやに依つて。定めて敎へて下されうと存ずる。何かと申す內に是ぢや。案內常の如し。出るも常の如し。アド〽エイ爰な何としてお出でやつた。シテ〽私の兄を御存じでござるか。アド〽そなたの兄は誰。成程存じた。それが何とした。シテ〽この兄の方へ參れば。有る名は申されいで。舍弟よう來た。舍弟どうかう申さるゝ。この舍弟といふ事が。よい事やら。又わるい事やらも存じませぬ。お前へ尋ねませうと存じて參つてござる。どうぞ敎へて下され。アド〽其樣な事は中々そらでは覺えぬ。物のはしに書いておいた。見てやらう。暫くそれに待ちやれ。シテ〽畏まつてござる。アド〽扨も〳〵世にはうつけ者がござる。舍弟と云ふ事を知らいで尋ねに參つた。おの〳〵のお笑ひ草に。さん〴〵なぶつてやらうと存ずる。なう〳〵。お居やつたか。シテ〽是に居ります。アド〽見ておりやるが。舍弟と云ふ事は。そなたの前ではちと云ひにくい事ぢや。シテ〽それは心許ない事でござる。早う仰せられて下され。アド〽兄の方へお行きやつて。存分のおしやらずば云はうず。存分のおしやるならばえ云ふまい。シテ〽何が扨。兄の方へ參つて存分の申す事ではござらぬ。早う仰せられて下され。アド〽それならば云うて聞かせう。舍弟と云ふ事は。人の物を案內なしに取つてくるを舍弟と申す。シテ〽それはぬすびとの事でござるか。アド〽先づ盜人の唐名の樣な物でおりやる。シテ〽扨も〳〵腹の立つ事かな。餘の者が其樣な事を云はうとも。とも〴〵に取りなしをも云うてくれう兄が。弟に惡名を付くるといふ樣な事があるものでござるか。アド〽それ〳〵。爰でさへ其樣に腹をお立ちやる。定めて兄の方へおゆきやつたらば。存分のおしやるであらう。シテ〽何が扨。爰でこそ此樣に申せ。兄の方へ參つて存分の申す事ではござらぬ。アド〽それは一段でおりやる。シテ〽もうかう參りませう。アド〽お行きやるか。シテ〽なか〳〵。アド〽ようおりやつた。シテ〽はあ。扨も〳〵腹の立つ事ぢや。是が何と存分の云はずにおかれうか。此の足で直ぐに參つて。この存分の云はいではおくまい。扨も〳〵腹の立つ事ぢや。何かと云ふ內に是ぢや。なう〳〵。兄ぢや人うちに居さしますするか。小アド〽表に舍弟の聲がする。エイ舍弟か。ようおりやつた。シテ〽そなたはまだ舍弟と云ふか。小アド〽是は殊の外きげんがわるい。もし道で喧嘩でもしはせんか。シテ〽いかな〳〵。喧嘩などするやうなものではおりない。小アド〽扨は酒に醉うたか。シテ〽呑みもせぬ酒になんの醉ふものでござる。小アド〽それ

てもいかう不機嫌なぞよ。シテへ今迄は舍弟と云ふ事を知らいで云はれた。向後は存じたに依つて云はるゝ事ではおりない。小アドへハア扨はそちは舍弟と云ふ事を知らぬと見えた。舍弟と云ふ事は何の事ぢやと思ふ。シテへ知るまいと思はつしやるか。ぬすびとの事ぢや。小アドへいよ／＼誰ぞになぶられて來たと見ゆる。知らずば序ながら云うて聞かせう。先づ人のてゝ親をしんぶと云ふ。母親をお袋。兄を舍兄。弟を舍弟。そちは身共が爲に弟ぢやに依つて舍弟と云ふが。別に腹の立つ事ではあるまい。シテへなう。よし人の父親をしんぶとも五んぶとも云へ。母親をお袋とも云はうずばん袋とも云はう迄よ。身共は終に舍弟した事はない。おぬしこそ舍弟めされた。小アドへ舍弟したとは何の事ぢや。シテへ云うたらば恥であらう。小アドへ恥になる事は持たぬ。あらば云へ。シテへさらば申さう。それいつぞや隣郷でまだらの牛を一疋ぬすんで來て。白い所は墨で塗つて。たごふの市へ引いていてお賣りやつた。それを此方ではまだら舍弟のぬり舍弟と申す。小アドへすれば汝も舍弟した事があるぞよ。シテへ身共がいつ舍弟した事が有る。小アドへそれ去年の秋。川原に稲がほしてあつたを汝は舍弟した。それを此方では川原舍弟の稲舍弟と申す。シテへおぬしはまだござる。小アドへ有らば云へ。シテへまた申さいでは。いつぞや振舞の座敷で濃茶がたつた。その茶碗をほめさまに。そろりとふところへ舍弟めされた。それを此方では天目舍弟と申す。小アドへあれはあまり見事にあつたによつて。所望して貰うて來たが。それがなんとした。シテへなう。笑ふ。所望して貰うてきた物が。後から呼戻されて取返さるゝものか。シテ笑ふ。小アドへ愛なやつに物を云はせておけば。方量もない事を云ふ。おのれの様なやつはかうしておいたがよい。シテへ兄ぢやと云うて負けて居ようか。小アドへ何とする。シテへおぬしの様な人はかうしておいたがよい。勝つたぞ／＼。小アドへ兄を此様にして將來がようあるまいぞ。ト云うて○追込み入るなり。

宗論（しゅうろん）

シテ　淨土僧
アド　法華僧
小アド　宿屋
（入道共）

アドへ是は都本國寺の寺僧で御座る。此度甲斐の國身延へ參詣致し。只今が下向道で御座る。先づそろり／＼と參らう。シカ／＼。誠に。わが宗旨をほむるでは御座らねども。此度身延へ參詣致したれば。いやましに有難く存ずる。殘りの寺僧達がさぞ羨しがらるゝであらう。是迄參りたれば殊の外草臥れた。暫く此所に休らうて。似合はしき者も通らば。言葉を掛け同道致して參らう。シテへ是は都東山黑谷の寺僧で御座る。此度信濃の國善光寺へ參詣致し。只今が下向道で御座る。先づそろり／＼と參らう。誠に。年月の念願で御座つたに。此度願成就致して此樣な嬉しい事は御座らぬ。寺へ歸つたらば殘の寺僧達がさぞ羨しがらるゝで御座らう。アドへ是へ一段の人が見えた。言葉を掛けて同道致さう。しゝ申しこれ／＼。シテへ此方の事で御座るか。アドへ成程こなたの事で御座る。是はどれからどれへお出でなさるゝ。シテへ愚僧は都へ上る者で御座るが。何ぞ用でばし御座るか。アドへ愚僧も都へ上りまするが。何と同道なされまいか。シテへ幸ひ一人で連欲しう存じた。成程お供致しませう。アドへそれならばいざ御座れ。シテへ何が扨御坊が先ぢや。まづこ

なたから御座れ。アドへ先と仰せらるゝ程に。愚僧から参りませうか。シテへ一段とよう御座らう。アドへさあ／＼お笠召せ。シテへ心得ました。アドへ扨ふと言葉を掛けましたに。早速御同心なされて。此様な悦ばしい事は御座らぬ。シテへ連には似合うたもあり。又似合はぬもあるもので御座るが。そなたも御出家愚僧も坊主。此様な似合うたよい連は御座るまい。アドへ此上は互ひに隙がいりませうとも。待合うて。都迄はとくと同道致しませう。シテへ扨々頼母しい事を仰せらるゝ。必ずその筈で御座る。アドへ扨そなたは都はどこもとで御座る。シテへ愚僧は都と申してもつうと片邊土の者で御座る。アドへ愚僧は都木國寺の寺僧で御座る。まづ御坊は都はどれで御座る。シテへホイ。アドへ此度甲斐の身延へ参詣致し。只今が下向道で御座る。アドへなか／＼。シテへハン。笑ふ。アドへハテ。異なへ何ぢや。身延へお参りあつた。顔なする。シテへ例の情强者に出合うた。路次すがらなぶつて参らう。アドへなう／＼御坊。シテへヤア／＼。アドへそなたは都どこもとで御座る。シテへ愚僧は最前も申す通り。都と申してつツと片邊土の者で御座る。又路次でなりとも申さう。いざ御座れ。アドへこれ／＼。其様に仰せられては。互ひに心が置かれて悪う御座る。是非とも仰せられい。シテ

へ扨は是非ともで御座るか。アドへなか／＼。シテへそれならば申さう。都は東山で御座る。アドへ東山にとつてもどこもとで御座る。シテへ黒谷の寺僧で御座る。アドへホイ。シテへ此度信濃の國善光寺へ参詣致して。唯今が下向道で御座る。アドへ何ぢや。善光寺へお参りあつた。シテへなか／＼。アドへ何れそなたの體(なり)を見るに。その善光寺とやらへ参らいで叶はぬ體(なり)でおりやる。シテへ如何にも参つておりやる。アドへイヤ。シテ笑ふ。シテへはやいやがるは。アドへもつけな者と同道した。何としたものであらうぞ。イヤ致し様がある。なう／＼御坊。愚僧はハタと失念した事がある。シテへそれは何で御座る。アドへあれあの向ふに見ゆる在所へ寄らいで叶はぬ事があつたを。ハタと失念してこなたとお約束申した。愚僧はあれへ寄つて参らう程に。そなたは先へいて下されい。シテへ出家同士の申合せたはそこで御座る。そなたにひまがいりまするならば。ひまがあく迄待ちませうはさて。アドへいや此隙(ひま)が五日三日で濟めばよう御座れども。廿日かゝらうやら、乃至三十日かゝらうやらも知れませぬ。とかく先へいて下され。シテへいや廿日三十日の事は扨おかせられ。五年が十年でも待ち

ませう。アドヘ何ぢや。五年が十年でも待たう。シテヘおゝ扨。アドヘいや愚僧は其樣にひまをいれてゐる事はならぬ。先へ行くぞ。シテヘおぬしが行かば身共も行くぞ。アドヘそちと身共と編連れた身ではあるまいぞ。シテヘハテ出家同士の云合せたからは。編連れた身程のものよ。アドヘイヤ。シテ笑ふ。シテヘ扨々面白い事ぢや。なう〳〵御坊。そなたにちと意見のしたい事がある。アドヘ何が意見がしたい。シテヘまづわごりよの宗旨の樣な事くどい法はない。式は法花經一部八巻二十八品などと云うて。其樣な生長い事を唱ふより。身共の宗旨にならしませ。愚僧が宗旨の有難さは。南無阿彌陀佛の六字をさへ唱ふれば極樂往生疑ひない。即ち珠數は。元祖法然上人よりさる仔細あつて傳はつた珠數ぢや。是を頂いて愚僧が宗旨にならしませ。アドヘその珠數がそれ程有難くば。おぬしばかり頂いて居よ。シテヘさう云はずともちと頂け。アドヘいやぢやわいやい。シテヘちと頂け。ひたもの頂かす。シテ笑ふ。アドヘしたゝかに頂かせ居つた。シテヘ扨も〳〵面白い事ぢや。アドヘなう〳〵御坊。シテヘヤア〳〵。アドヘそなたにもちと意見のしたい事がある。シテヘ何が意見がしたい。アドヘそなたの宗旨の樣な埒のあかぬ法はない。あそこの隅ではぐど〳〵。こゝの隅ではぐど〳〵。黒豆を數ふる樣な事でなか〳〵佛にはなられぬ。愚僧が宗旨にならしませ。愚僧が宗旨の有難さは。妙法蓮華經の題目をさへ唱ふれば。即身成佛疑ひない。これこの珠數は高祖日蓮上人より傳はつた珠數ぢや。是を頂いて身共が宗旨にならしませ。シテヘその珠數がそれ程有難くば。おぬしばかり頂かしめ。アドヘさう云はずともちと頂かせう。シテヘ厭ぢやわいやい。アドヘちと頂け。シテヘそれならば是を頂け。アドヘいやぢやわい〳〵。口傳。アドヘ扨も〳〵したゝかに頂かせ居つた。何としたものであらう。イヤ致し樣がある。御亭主御座るか。小アドヘ是に居ます。アドヘ旅の坊主で御座る。一夜の宿を貸して下され。小アドヘ易い事で御座る。斯う通らせられい。アドヘこれは添う御座る。シテヘなんぞや此珠數があの笠にもついてあるものゝ樣に。打拂ひ〳〵いやがる。ちと頂け〳〵。ハテ合點のゆかぬ。たつた今迄爰に居たが。どれへいた事ぢやぞ。大方此内へはいつたものであらう。ものも。案内も。小アドヘ表に案内がある。案内とはたそ。シテヘ旅の坊主で御座る。一夜の宿を貸して下されい。小アドヘ易い事で御座る。お宿申さう。斯う通らせられい。シテヘ最前愚僧が樣な出家は參らなんだか。小アドヘ成程お宿申して奥に御座る。シテヘそれは愚僧が連て御座る。小アドヘお連ならば云合せて一所に御座れ。シテヘ心得ました。どれに居る事ぢや知らぬ。さればこそあれにつくりとして居る。おぬしも來るなら來ると云ひたいものを。アドヘおぬしは又來たか。シテヘ連ぢやもの。來いでは。アドヘなう〳〵御亭主。別の間は御座らぬか。小アドヘいや。別の間は御座らぬ。シテヘなう。別の間は御座るまい。アドヘあるやら無いやらおぬしが何を知つて。シテヘても。無いとおしやるは。アドヘイヤ。シテヘ御坊〳〵。なう御坊。アドヘかしましい。何ぢやぞい。シテヘなぜに其樣に腹をお立ちやる。出家同士の只居るは如何ぢや。夜もすがら宗論のしようと思ふが何とあらう。アドヘ何ぢや。宗論のせう。シテヘなか〳〵。アドヘ最前からおぬしのおせやる事は一として耳に入らぬ。成程宗論よからうさり乍ら。身共が勝つたらば此方の宗旨にするぞや。シテヘ成程負けたらばそなたの宗旨にならう。又身共が勝つたらば。

身共の宗旨にすべぞや。アドへそれは其時の仕儀によらう。シテへそれ／＼それからが早やしやつ強い。まづ法文のお説きやれ。アドへ説いて聞かせう。ようお聞きあれ。シテへ心得た。アドへそれ法文様々ありと雖も。中にも五十轉々隨喜の功德。又は隨喜の涙とも説き示げさせられた法文がある。何とおぬしはお聞きやつたか。シテへ如何さまどこてやら聞きはつツた様な。アドへ聞かいでならうか。およそ日本にはびこる程の法文ぢや。シテへ大きい事を云はずとも。早う法文のお説きやれ。アドへまづ此心は。春園に芋といふ物を植ゆる。シテへ成程植ゆる。アドへ雨露の惠をうけて七八月頃になれば。かの芋よりずゐきといふ物が生々する。シテへ如何にも生々する。アドへ所な刄物を以て手一束に苅取り。よく湯だきをなして。山椒の粉などをはないて喰ふれば。あらうまやと思うて涙がほろりとこぼるゝ。爰を以て。五十てん／＼隨喜の功德。又は隨喜の涙とも説き置かせられた法文ぢや。何と有難うはないか。シテへ由ない事を云はずとも。早う法文のお説きやれ。アドへおぬしは何を聞く。是が法文ぢや。シテへ何ぢや。それが法文ぢや。アドへなか／＼。

シテ笑ふ。シテへいつ釋迦がずゐき汁をお參りやつた事がある。アドへ其様な惡口を云はずとも。早う法文をお説きやれ。シテへ此後で説く様な法文ではなけれども。そこが宗論ぢや。説いて聞かせう。ようお聞きやれ。アドへ心得た。シテへそれ法文様々ありとは雖も。中にも一念彌陀佛即滅無量罪。又は無量のさいとも説き置かせられた法文があるが。聞いた事があるか。アドへ何れ空吹く風のやうに聞いた。シテへ聞かいでならうか。唐土天竺我が朝三國にもはびこる程の法文ぢや。アドへ大きい事を云出した。其様な大きい事を云はずとも。早う法文のお説きやれ。シテへまづ此心は。世には事足らうたお方もあり。又事足らはぬお方もある。アドへ成程ある。シテへかの事足らうたお方へお齋に參れば。膳の向ふに。牛蒡。湯葉。紅麩。椎茸。醍醐のうどめ。鞍馬の木の芽漬。あるとあらゆる種々無量の菜を取調へて下さるゝ。アドへ如何にも下さるゝ。シテへ又事足らはぬお方へ參れば。鹽山椒のていで下さる。アドへ是は斯うもありさうな事ぢや。シテへ其時觀念の仕様がある。アドへ何と觀念する。シテへまづ目を屹度ふさいで。一念彌陀佛そくめつ無量さいと唱ふれば。何はなくとも膳の向ふには。牛蒡。湯葉。紅麩。椎茸。醍醐のうどめ。鞍馬の木の芽漬。あるとあらゆる種々無量のさいがある。ある／＼と思うて下さるゝ所を以て。一念彌陀佛即滅無量さい。又は無量のさいとも説き置かれた法文ぢやが。何と有難うはないか。アドへ由ない獻立を云はずとも。早う法文のお説きやれ。シテへおぬしは何を聞く。是が法文ぢや。アドへヤアそれが法文ぢや。シテへなか／＼。アドへそれは誠か。シテへ誠ぢや。アドへ眞實か。シテへおんでもない事。アド笑ふ。アドへそれは悉皆むさい餓鬼ぢや。シテへむさい餓鬼であらう事は。アドへハテありもせぬ物をある／＼と思うて喰ふは。むさい餓鬼ではないか。シテへ非學者論議に負けずと云ふはおぬしが事ぢや。わごりよの様な人と起きて居てしやべらうよりは。身共は念佛者を致さう。アドへもそつと起きて居てしやべらいでな。宵からの戯談が過ぎたと思うた事ぢや。おぬしが念佛者をするならば。身共は寐法華を致さう。シテへ扨も／＼よう寐た事かな。是は早じんじようの時分ぢや。勤を致さう。クワン／＼／＼。奇妙無量壽如來西方極樂世界。（經を讀み。アドを見て。）ア　南無阿彌陀佛。（口傳。）

アド〽アヽきやつは夜もろくに寐んさうな。ホ是は早や勤行の時分ぢや。勤を致さう。チン〳〵。妙法蓮華經だらにほん第二十六卷。ト經を讀む。それより二人色々仕様あり。口傳。 シテ〽負けじや劣らじと經を讀む。踊念佛と持つて迷惑がらせう。クリン〳〵。なもだ〳〵。 アド〽きやつは氣が違つたさうな。致し様がある。ト云うて。南無妙法蓮華經。互ひにツマリ顔見合せ。口へ手をあてる。口傳。 シテ〽ノルげに今思ひ出したり。昔在靈山妙法華。 アド〽今在西方妙阿彌陀。 シテ〽娑婆示現觀世音。 アド〽三世利益。 シテ〽同。 二人〽一體と。此文の聽く時は。〳〵。法華も彌陀も隔はあらじ。今より後はふたりが名を。〳〵。妙阿彌陀ぶとぞ申しける。拍子どめ。

柱杖(しゆぢやう)

シテ　旅僧
アド　細工屋
小アド　妻

（入道具）

シテ〽諸國修行の僧で御座る。此の度上方へ上り。此處彼處を見物致して御座る。それに就いて柱杖を一本調へうと存じて。即ち細工屋に誂へて置いた。大方出來つらう程に取りに參らう。 シカ〳〵。 誠に。出家の境界ほど心安いものは御座らぬ。先づ妻子がなければ家もなし。家がなければ故郷もなし。ただ三界を家と致す。斯様の有難いことは御座らぬ。何かといふうちに是ぢや。先づ案内を乞はう。常の如し。 何と柱杖は出來ましたか。 アド〽なるほど出來ました。進ぜう。暫くそれに待たせられい。トいうて。柱杖持出る。 これ〳〵。 シテ〽これは何とやら麁相に見えまするぞや。 アド〽お僧に一句持つて參らう。 いかなればこれ白木の柱杖。 シテ〽漆なければ得塗らずして。ト仕方あり。 アド〽はなぬりまでに遊ばしたよ。さてその柱杖を追つ取つての後は如何に。 シテ〽一念はつく。二念はつかじ。 アド〽さて〳〵殊勝なお僧かな。一飯を申さう。かう通らせられい。 シテ〽いや早や行きませう。 アド〽いや。ちと申上げ度いことも御座る。先づかうお通りなされい。 テシ〽それならば通りませう。 アド〽先づそれにゆるりと御座れ。 シテ〽心得ました。 アド〽やい〳〵。お僧へ一飯を進上致す。早う拵へて出せ。えい。さてお僧へ御無心が御座る。 シテ〽何事で御座る。 アド〽あの地獄極樂と申すは。有るが誠で御座るか。無いが誠で御座るか。 シテ〽地獄極樂が無うて何となりませう。先づ地獄の體(たい)相あら〳〵申さば。無間。永沈(やうちん)。劔の山。血の池。嘘をいうた者は舌を拔かれ。臼ではたかれ。箕(み)で干られ。暫時も安からぬ事ぢや。また極樂の有難さは生死がない。生死とは生まれ死するが無いぢやまで。二十五の菩薩の音樂を聞き。百味の飲食(おんじき)は充ち滿ちて。暑いといふ事もなく寒いといふ事もなし。それは〳〵有難い所ぢや。また人間の身も果敢ないもので御座る。旦(あした)に咲き誇りたる花も。夕には露の塵となり。水に宿れる月も。あるをありとて賴むべきかはなどと。人間も旦にあつて夕にない命。それは〳〵はかない者ぢや。それゆゑ極樂の有難い所へ行きたさに。此の様に出家に成つて後生を願ふことでおりやる。 アド〽扨々有難いお示しを承りました。豫て某も渡世の事に飽き果て。似合はしい御出家もあらば剃刀を戴いて。お弟子になり。諸國を修行して。何卒此の世の苦を遁れ度い朝夕の願で御座る。幸ひお出でゞ御座る。頭(つむり)を剃つて弟子になされて下され。 シテ〽扨々それは奇特千萬にこそ御座れさりなが

ら、左様の事は親類共と篤と能う相談をなされて。その上の事になされたが好う御座る。アドへされば其の事で御座る。常々その望で御座るに依つて。一門どもへも此の存念を申聞かせて御座れば。左様に思ひ立つた事ならば。止めたりとも思ひ止まらぬであらう。似合はしいお出家もあらば。勝手次第に出家になれと。寄り〳〵相談が極め置きました程に。早うお剃りなされて下され。シテへいや〳〵。見れば御内儀も有るさうな。後生といふは俗では願はれぬ。出家に成つて願はれば。佛には成られぬといふことではない。平に御内儀へもとくと御相談させられい。アドへさりとてはお氣遣ひなされまするな。常に女共が申すは『現世の事ばかりうか〳〵と祈らずとも。後世を祈れ。夫婦共に成佛仕りたいと申して。朝夕勸めまする。かれが事など少しもお氣遣ひなされずとも。早うお剃りなされて下されませ。シテへその様に念の入つた事ならば剃つて遣りませう。剃刀も持合せて居りまする。先づ身拵へをさせられい。アドへ畏まつて御座る。(太鼓座にて肩衣取り。肩脱げて。頭を撫む。) シテへ愚僧はその間に剃刀を合はしませう。扨々奇特な事で御座る。なる程。出家に成つて願ふ後生は格別で御座る。さて三歸を授くる。合掌さつしやれ。アドへかうで御座りまするか。シテへさうぢや〳〵。南無歸依佛。(アド口移しにいふ。) シテへ南無歸依法。同じ。シテへ南無歸依僧。同じ。シテへ剃りよいお頭(つむり)で御座る。アドへ御手の輕いことで御座る。シテへさあ剃りました。アドへはや好う御座るか。シテへさても〳〵好う似合ひました。アドへお蔭で私の大願成就致いて御座る。シテへ幸ひ愚僧が懸け替への衣がある。そなたへ讓りませう。アドへそれは有難う御座る。シテへとてもの事に着せて進ぜう。やれ〳〵。衣を着さつしやれば。今々の出家の様には御座らぬ。アドへ何とよう似合ひましたか。シテへなか〳〵。よう似合ひました。アドへ忝う御座る。此の度は何方へもお供申しまして。なほ〳〵御教化を請けませう。女へなう〳〵。お食がよいが。これの人はどれに居させらるゝ。アドへいや。女ども。此處にゐる。シテへこれ〳〵。坊主に成つて女どもとはどうした事ぢや。女へヤアお主は坊主に成つたか。何として坊主に成つた。アドへ常に後世を願へ〳〵といふに依つて。とかく此の世界は僅かの事と見限つて。それ故坊主に成つたが。よう似合うたか。女へ何の似合うたかといふ事があるものか。妾に斷りなしになぜ坊主に成りをつた〳〵。アドへ扨々合點の惡い。某が出家すればそちまでが浮むことぢや。女へ何の浮むといふことがあるものか。誰(た)が剃つた〳〵。アドへあのお出家に剃つて貰うた。女へやい。そこな坊主。こちの人をあの様に剃りをつたな。元の様に毛を生やして返せ〳〵。シテへ先づお聞きあれ。愚僧がまつかうあらうと思うて。先づ一門中とも御内儀とも。よう相談を召されいと云うたれば。談合は濟んである。早う剃つて呉れとおしやつたに依つて剃つた。愚僧は何も知らぬ事ぢやぞ。女へすれば彼奴が成りたうて成つたか。シテへ先づその様なものぢや。女へなう〳〵。腹立ちや〳〵。とかく己れが成りたうて成り居つたげな。食ひ裂かうか摑みつかうか。なぜに剃り居つた〳〵。アドへさても〳〵不合點な者ぢや。此の世は少しの事ぢや。そちも尼になれ。夫婦一緒に成佛せうぞ。女へまだそのつれをぬかし居る。妾は成佛せいでも大事ない。とかく元の様に成り居らぬか〳〵。シテへさても〳〵苦々しい所へ來かゝつた。ただ外さう。(柱杖を捧げ。さし足にて逃げる。) アドへなう〳〵お師匠様。私もお供申しませう。

女へいや／＼。何處へも遣ることではないぞ。シテへやれ離して呉れい。アドへやれ離せ／＼。アドはシテに取りつく。女はアドを引き止める。互に引合ふ。舞臺眞中にて三人引合ひ。シテとアド手を取り組んでこける。女は上の方へこける。二人逃げて入る。女後より追込み入るなり。

眞奪（しんばひ）

シテ　太郎冠者
アド　主人
小アド　道行人
（入道具）

アドへこの邊りの者で御座る。此のうち方々の立花のはやるは夥しい事で御座る。今日は深草へ眞を取りに參らうと存ずる。呼出す。常の如し。此のうち立花のはやるは夥しい事ぢや。今日は深草へ眞を切りに行かうと思ふが何とあらう。シテへ御意もなくば申上げうと存じて御座る。一段とよう御座りませう。アドへ先づ太刀を持て。シテへ畏まつて御座る。アドへさあ／＼。來い／＼。さて深草邊に似合はしい眞があらばよいが。シテへ此の内もさる人が參られまして。よい下草や眞が澤山に有ると申されました。アドへさりながら。思ふ樣なは無いものぢや。小アドへこの邊りの者で御座る。さる御方に眞を約束致した。持つて參らうと存ずる。シカ／＼。誠に。此のうち方々に立花のはやるは夥しい事で御座る。それ故所々に眞を欲しがらせらるれども。とかく思ふ樣によい眞がない。此の眞は天晴れよい木ぢや。ト云うて。眞をためなどして。色々分別あるべし。シカ／＼。長きがよし。其の内アドシテ見付く。シテへあれへ見事な松の眞を持つて參りまする。貰うて參りませう。アドへ人の物を聊爾に貰はるゝものか。措け。シテへ私次第になされませ。なう／＼これ／＼。小アドへ身共が事か。シテへそなたの事ぢや。ちと無心がある。あれに立たれたは身共が賴うだお方ぢや。其の眞を見て殊の外惜しがらせらるゝに依つて。おくりやれ。小アドへいや。是はさる方へ約束して持つて行くに依つてならぬ。シテへ尤もなれども。賴うだ人は歷々ぢや。餘の物なれば金銀を積んで求めらるゝに依つて。不自由はなけれども。是は格別の無心ぢや。是非ともたもれ。小アドへ成程。御人體と申し。格別の御所望に進ぜぬと申すも如何なれども。かたがたの約束ぢやに依つて。今持つて行く程に。どうもならぬ。シテへ身共も言ひかゝつた事ぢや。これぱかりはどうあらうともおくりやれ。小アドへならぬと言ふに。諄い事をいふ人ぢや。シテへはてお呉りやれ。ト云うて。無理にむさぶりつく。小アドへこれは無體な。何とする。シテへかう言ひかゝつては。否でも應でも貰はねばならぬ。ト云うて。取附く。捩合の内に取違へ。シテ眞を取り。小アド太刀をとる。小アドへ一段の仕合せぢや。ト云うて。太鼓座に居る。シテへまうし／＼。眞を貰うて參りました。アドへ出來した／＼。さても／＼見事な眞ぢや。シテへ他所へ約束して持つて參るを。私が無理に所望致して取つて參りました。アドへさて太刀は何とした。シテへ御座りませぬ。アドへ御座りませぬとは。あれは身共が重代ぢやが。何とした。シテへ今思出しました。物で御座らう。ならぬと申したを無理に貪りついて取りましたが。其時きやつが取つたもので御座らう。アドへこれは如何な事。身共が措けといふものを聞かぬに依つてぢや。此の眞と太刀と換へらるゝといふ事があるものか。シテへ最前の者は近所の者と見えました。又愛へ參らぬ事は御座るまい。これに待つてゐて捕へませう。アドへせめてさうなりともせう。さてあの男を見知つて居るか。シテへなる程見知つて居りまする。アドへ先づこれへ寄つて居よ。シテへ畏まつて御座る。小アドへ今日は存じ寄らぬ仕合はせ

ぢや。さても／＼結構な拵へした太刀ぢや。シテ〽彼奴で御座る。アド〽早う捕へい。シテ〽私は恐ろしう御座る。お前お捕へなされませ。アド〽とつたぞ。小アド〽これは何とする。アド〽やい太郎冠者。太刀を取れ／＼。シテ〽心得ました。（ト云うて。太刀を取る。）シテ〽己れ。最前眞と太刀とようすり換へ居つたなア。（ト云うて。鼻竹箆あて掛繩綯ふ。色々仕方あるべし。）アド〽何をしてゐる。早う繩を持つて來い／＼。シテ〽繩か／＼。（ト云うて。法師縄持つて出で。足の指にかけて。繩なふ。色々口傳あるべし。）アド〽さあ／＼早う縛れ／＼。シテ〽愛へ足を入れ居れ。（ト云うて。繩を丸輪にして置く。其の時小アド足にてこかすなり。）シテ〽さても／＼。脛のまぬな奴ぢや。アド〽それは何をし居る。シテ〽わなにして引掛けまする。アド〽あの虚けがぬかし居る事は。後から掛け／＼。シテ〽後からで御座るか。心得ました。（ト云うて。主に繩をかけるなり。）シテ〽サア掛けました。アド〽放すぞよ。（ト云うて放す。小アド逃げて入る。シテアド二人ともこけるなり。）シテ〽己れは憎い奴の。アド〽これは身共ぢやわいやい。シテ〽賴うだお方で御座るか。アド〽いたづら者はどれへ往た。シテ〽あれへ參りまする。アド〽ちやと捕へい。シテ〽ちやと捕へさせられい。小アド〽なう／＼嬉しや／＼。アド〽あの横着者。やるまいぞ／＼。（ト云うて。追込み入るなり。）

【す】

素襖落（すあうおとし）

シテ　太郎冠者
アド　主人
小アド　伯父
（入道具）

アド〽この邊りの者で御座る。某俄に思立つて參宮を致す。それに就き。太郎冠者を呼出し。申附くる事が御座る。（ト言うて。呼出す。出る。常の如し。）俄に思立つて參宮する。汝は大儀ながら伯父や人の方へいて。兼々御約束で御座るに依つて申し達しまする。御同心に於ては。早々此方へ向けてお出でなされと言うていてこい。シテ〽してそれはいつの事で御座る。アド〽今日唯今の事ぢや。シテ〽何。今日唯今。アド〽なか／＼。シテ〽是はいかな事。參宮と申すものは。前廣から身をも清め。其の用意してこそ御參りなさるゝものなれ。何處にか今日の參宮を今言うて遣されて。何と伯父御樣が御同心なさるゝもので御座る。これはもそつとお延べなされたが良う御座りませう。アド〽己れが何を知つて。身共さへ良ければ何時でも參らうとおしやつた。其の上あの方への土産物も。悉く此方に用意致して御座る。ただ御身すがらお出でなされと言うて往て來い。シテ〽心得ました。アド〽さて汝も供に行くかと言うてお問やつたらば。まだ知れぬと言へ。シテ〽扨は私はお供には參りませぬか。アド〽いや汝には連るれども。若しお問やつたらば。まだ知れぬと言へと言ふ事ぢや。シテ〽畏まつて御座る。アド〽急いで行て頓て戻れ。（ト言うて。つめる。うける。常の如し。）シテ〽扨々火急な事を言附けられた。さりながら。行かずばなるまい。シカ／＼。誠に。こちの賴うだ人の樣な我儘な人は有るまい。何處にか今日の參宮を今言うてやつて。何と伯父御樣が御同心なさるゝものぢや。それを言へば。己れが何を知つてと言うて齒を出さるゝ。此樣な氣の毒な事は御座らぬ。いや何かと言ふうちにこれぢや。（ト言うて。案内乞ふ。出るも。常の如し。）賴うだ者申しまする。兼々お約束で御座るによつて申し達します。俄に思立つて參宮を致す。御同心に於ては。早々此方へ向けてお出でなされと。申し越して御座る。小アド〽してそれは何時の事ぢや。シテ〽今日唯今の事で御座る。小アド〽これは如

何な事。參宮と申すものは。前廣に身をも清め。其の用意をしてこそ參るものなれ。何處にか今日の參宮を。今言うて來るといふ事があるものか。シテ〽いやあの方へのお土産物も。此方で悉く用意致して御座る。ただ御身すがらお出でなされと申し越して御座る。小アド〽如何にさうあればとて。汝もよう思うてみよ。今日の事を今言うておこして。それが何と參らるゝものぢや。歸つていはうには。參宮めさるげな。目出度うこそあれ。身共は叶はぬ隙入りが有るに依つて得行かぬ。やがて目出度う下向を待つてこそあれと言うてくれい。シテ〽さてはお前にはお出でなされませぬか。小アド〽なか〳〵。シテ〽それはお殘り多う存じまする。小アド〽さて汝も供に行くか。シテ〽それはまだ知らぬさうに御座る。小アド〽これは如何な事。今日參るに。今まで供の知れぬといふ事が有るものか。定めて汝が參るであらう。參つたら目出度う下向せい。シテ〽忝う存じまする。小アド〽さて何と一つ飲んで行かぬか。シテ〽いや今日は内も殊の外忙しう御座る。もうかう參りませう。小アド〽常に來てさへ呑ます。殊に今日は參宮の門出ぢや。平に一つ飲んで行け。シテ〽さ樣ならば。たつた一つ下されませう。小アド〽先づ下に居よ。シテ〽扨々お氣のつかせらるゝお方ぢや。小アド〽サア〳〵一つ飲め。シテ〽これはまた例の大盃をお出しなされました。小アド〽そちは小さいが嫌ひぢやによつて。大盃を出した。シテ〽いづれ是で一つ下されたらば。惡うは御座りますまい。小アド〽さあ〳〵。飲め〳〵。シテ〽これはお酌慮外で御座る。小アド〽身共が慰みに注いでやらう。シテ〽お〳〵。御座りまする〳〵。これは丁度つがせられた。シテ飲む。小アド〽何とあつたぞ。シテ〽ただひいやりとばかり致して。何も覺えませなんだ。小アド〽それならばもう一つ飲んで味を覺え。シテ〽いかさま。も一つ下されて味を覺えませう。小アド〽サア〳〵。飲め〳〵。シテ〽これは毎度慮外で御座る。小アド〽苦しうない。小アドまた注ぐ。シカ〳〵。常の如し。シテ〽今覺えました。小アド〽何とあつた。シテ〽これは結構な御酒で御座る。どの御酒で御座る。小アド〽其方(そち)に振舞うて惜しうない。身共が寢酒に食ぶる遠來ぢや。シテ〽なに御遠來。小アド〽なか〳〵。シテ〽さればこそ。私が並ならぬ結構な御酒ぢやと食べ覺えた事で御座る。さて御酒を下されて申すでは御座らぬが。お前の事を世間で人が譽めます。小アド〽それは何と言うて譽める。シテ〽先づ第一お慈悲が深い。下々までに細かにお氣が附かせらるゝ。あのお心入れならば。追附け御立身を成されうと申して。いかう人が譽めます。小アド〽それは惡い事を聞くやうに無うて。身共も喜ぶ事ぢや。シテ〽扨それに就きつ此方の賴うだ者をちと御意見なされて下されませ。小アド〽それはどうした事ぢや。シテ〽いやも我儘でどうもなりませぬ。ちと御意見をなされませ。小アド〽なる程身共も言はうが。そちも年久しう居る者の事ぢやによつて。折々ちと言うたがよい。シテ〽よう私共の申す事をお聞きやりませうぞ。最前も供に行くかと言うて。お尋ねなされました。小アド〽なる程尋ねた。シテ〽參りまする。小アド〽行くか。シテ〽あゝ。小アド〽さうであらう。シテ〽されば若しお問やつたらば。まだ知れぬと言へとおしやりました。小アド〽はて隱さいでも大事ない事な。シテ〽これには大分樣子の有る事さうに御座る。小アド〽樣子とは。シテ〽先づ此度私が參ると申したらば。何がお前のお氣ぢやによつて。私へ餞けをなされませう。又其方(こなた)の御家來衆の參らしやつ

た時に。その返事をせねばならぬと言ふ様な事でがな御座りませう。小アド〽何の其様な事であらうぞいやい。シテ〽言はれぬ人の世話な焼かれまする。さて此度お前には得お參りなされぬによつて。神前で御長久な様に御祈念を致しまして。目出度うお前へはお祓を上げませう。小アド〽それは過分な。シテ〽奥様へは伊勢白粉。お子様方へは喜ばせらるゝ様に。ぜゞ貝や笙の笛を上げませう。小アド〽いやも其様に銘々にはおいてくれい。シテ〽私の事で御座るによつて。正眞の心ばかりで御座る。小アド〽まだ飲むか。シテ〽獻が惡う御座る。小アド〽過ぎはせぬか。シテ〽何のこの結構な御酒な二つや三つ下されたと言うて。何の醉ふもので御座る。小アド〽酒は惜しまぬが醉はぬ程飲め。シテ〽さりながら。輕う注いで下され。小アド〽迚も飲むならば丁度飲め。シテ〽輕う〱。小アド〽丁度〱。シテ〽ア、越します〱。ト云うて笑ふ。シテ〽こりやまた丁度つがせられた。あゝ強いお酌ぢや。ト言うて。半分程飲んでむせる。小アド〽何とした〱。シテ〽餘り大盃でとつかけ〱下されたらば。ちと利けました。小アド〽靜に飲め。シテ〽休んで下さりませう。小アド〽それが良からう。

シテ〽さていつぞは申さう〱と存じましたが。お前の事をいかう世間で人が譽めます。小アド〽それは最前聞いた。シテ〽早や聞かつしやれたか。小アド〽なか〱。シテ〽所で此度お前にはお參りなされぬに依つて。神前で御長久な様に御祈禱を致しまして。目出度うお前へは伊勢白粉を上げませう。奥様にはぜゞ貝や笙の笛。お子様方に悦ばしやる様にお祓を上げませう。小アド〽其様に銘々にはおいてくれい。シテ〽いやも私が事で御座るに依つて。正眞の心ばかりで御座る。ト言うて。飲んでしまふ。シテ〽さあ取らつしやれ。小アド〽最早飲まぬか。シテ〽もう嫌ぢや。小アド〽それならば取るぞよ。シテ〽はて取つたがよい。あゝくどい人ぢや。ト笑ふ。シテ〽お前はぜゞ貝 奥様は御祓。お子様方には悦ばせらるゝ様に伊勢白粉を上げませう。小アド〽太郎冠者。やい太郎冠者。シテ〽やあ。小アド〽立て。シテ〽何ぢや立て。小アド〽ふむ〱と。シテ〽立つて見せう。そりや立つたは。小アド〽さて何がなと思へども。これは身が著古びたれども其方にやる程に。之を著て目出度う宮廻りをせい。シテ〽あの是を頼うだ者へか。小アド〽いや〱。汝にやる。シテ〽あの私に。小アド

〽なか〱。シテ〽先づ以て有難うは存じまするがさりながら。此様な結構な物。私には似合ひませぬ程に。御斟酌を申しませう。小アド〽それはいらぬ辭儀ぢや。取つて置けい。シテ〽さ様ならば戴いて置きませう。小アド〽それがよからう。シテ〽頼うだ者が見ましたらば。此方へおこせと申しませう。小アド〽むゝ。シテ〽所を。遣りますまい。小アド〽ともかくもせい。シテ〽さて物ぢや。小アド〽物とは。シテ〽もう行くは。小アド〽もう行くか。シテ〽はあ。小アド〽よう來た〱。シテ〽はあ。さて〱結構な伯父御様ぢや。いやと言ふものゝ大盃で三つ　また其の上に此の様な物を下された。これはいかう醉うた。ちと謡うて行かう。あの山見さい此の山見さい戴きつれ〱。あの山も此の山も皆これ　ぢや。ト笑ふ。アド〽太郎冠者を伯父ぢや人の方へ遣して御座るが餘り踊りが遲う御座る。見に參らうと存ずる。さて〱暇のいる 何をして居る事ぢや知らぬ。さればこそこれへ戻り居る。やい〱〱〱やい其處な奴。シテ〽何者ぢや。アド〽何者とは主を見忘れたか。シテ〽むゝ頼うだ人か。アド〽なか〱。シテ〽こなた是處へ何しに御座つた。アド〽餘り遲さに迎へ

に來た事ぢや。シテへあゝ要らぬ迎ひの。おりや道よう知つて居る。先へいなつしやれ。アドへして參宮の返事は何とぢや。シテへ參宮の返事か。アドへなか／＼。シテへ參宮は參宮でこそあれぢや。アドへ是は如何な事。參らうとおしやつたか。參るまいとおしやつたか。シテへ參らうとやら。又參るまいとやらぢや。アドへ是は如何な事。それては知れぬ。參らうとおしやつたか。但し參るまいとおしやつたか。シテへようこそ太郎冠者を遣されたれどもの。アドへおゝ。シテへ面白いか。アドへおゝ面白い。シテへ如何にも參るまい。アドへ參るまいとおしやつたか。シテへ嫌ぢや／＼。とおしやつた。アドへそれて知れた。失せ居らう。シテへこれ／＼を知らいで。戴きつれて。あの山もこの山も皆これ／＼ぢや。アドへまアあの樣に飲む者も。又飲ます伯父や人も聞えぬ事で御座る。されぱこそ。機嫌が良いこそ道理。此の樣な物な貰うてうせ居つた。致しやうが御座る。シテへたつた今これにおつたが。どれへいた事ぢや知らぬ／＼。アドへ太郎冠者／＼。シテへやあ。アドへちと諷はぬかいやい。シテへ諷ひたか此方諷はつしやれ。アドへ汝は俄に不機嫌になつた。其の上見れば何やら尋ぬる體ぢや。何も落しはせぬか。シテへ俺は何も落しはせぬが。こなたまた何ぞ拾ひはせぬか。アドへ身共は物を拾うた。シテへ何を。アドへ物を。シテへ何を。アドへ此樣な物を拾うた。シテへあゝ。それは身共がお伯父御樣で貰うて來たので御座る。アドへこれは身共が拾うたのぢや。シアへこちへ返して下され。テドへならんぞ／＼。シテへ返して下され／＼。アドへならんぞ／＼。ト言うて。主より先へ入る。シテ追込み入るなり。

双六（すごろく）

シテ　九郎藏の亡靈
ワキ　僧
アヒ　所の者
（入道具）

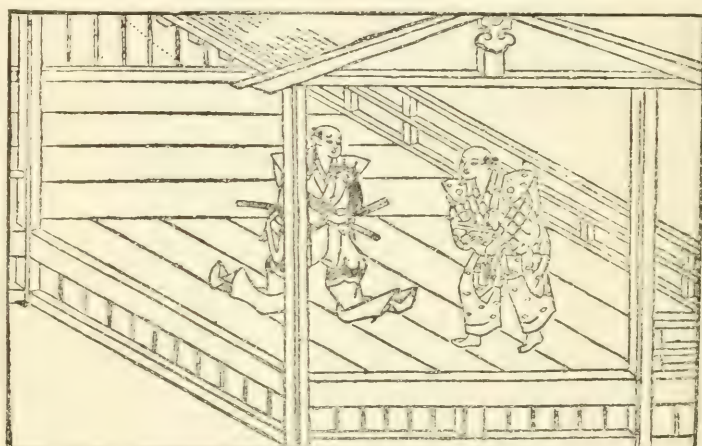
次第ワキへ我等ふる賽を振捨てゝ。／＼。ろく地なさして出でうよ。是は近江の國甲賀郡より出でたる僧にて候。我れ俗にて有りし時双六に好きあなたこなた住りて候が。とかく浮世をあぢきなく思ひ。此樣の姿と成りて候。又關東に九郎藏と申して双六の上手のある由承及び候程に。彼の人を尋ねて下らばやと存じ候。道行住馴れし。甲賀の里を立出でて。／＼。足に任せて行く程に。／＼。知らぬ里にも着きにけり。急ぎ候程に。關東に着きて候。又これなる塔婆を見れば。出離生死頓生菩提九郎藏と書かれて候。不思議なる事にて候間。所の人に尋ねばやと思ひ候。所の人の渡り候か。間へ所の者とお尋ねは。誰にて渡り候ぞ。ワキへこれなる塚は。いかなる人の跡にて候ぞ。間へさん候此の所に九郎藏と申して。双六打ちの上手の候が。双六に好き終に打死せられて候。所の者いたはしく存じ。これなる塚につき籠め申して候。お僧も双六に好き給はずとも逆緣ながら弔うて御通り候へ。ワキへ懇に御物語祝着申して候。さあらば立寄り弔ひ申さうずるにて候。間へ重ねて御用もあらば仰せられい。ワキへ賴みませう。間へ心得ました。ワキへ扨は九郎藏の果なるかや。我れ遠國に下る事も。彼の人に逢はんためなり。カヽル痛はしや其の身は野邊の土となつて。名ばかり殘るいたはしさよ。南無二六佛／＼。一セイシテへ双六の。おくれの筒をふるあした。ひとはばかりな待つぞはかなさ。ワキへ不思議やなさも古塚の内よりも。でつちり／＼と見え給ふは。いかなる人にてましますぞ。シテ

へいかなる者ぞとお尋れある。御身これまで来り給ふも。我に逢はん爲ならずや。御弔ひ有難さに。九郎藏が闘靈これまで現れ參りたり。ワキへ扨は九郎藏が闘靈にてましますかや。古へ双六を打ち給ひし。其の妄執を語り給へ。後をとうて參らすべし。シテへいで〳〵さらば語つて聞せ申すべし。後をとうて賜はり候へ。ワキへ心得申し候。シテへ扨も双六の起りを尋ぬるに。地へ玄宗楊貴妃を寵愛の時。この双六を作り出だす。カケリ常の如し。シテへ盤の目を十二筋に割る事。これ一ヶ年の月の數なり。石の數を三十に定めたるは。これ一ヶ月の日の數なり。地へ石の黒白は夜晝の色。二つの賽は日月。筒は須彌を表すと云へり。シテへされば相手の上手は。必ず石をふりして賽を打つものなり。ワキへかるが故にかく事を一大事とすと云へり。シテへ幾度かくとも打つならば。ワキへ頓て喧嘩にしなしつゝ。シテへ腰の刀に手を掛けて。ワキへしはさんざらりと。シテへひんぬいて。地へさふろくがひりに掛かるならば。ノヽ。其の儘はよき手をつかひ。かい違うてむんずと組むで。でつちと土に打伏せられて。五六のやうなるばうきい棒にて。こん徴塵に打附けられて。其儘茲にて四の二けり。ノヽ。地へ地獄を住家と四三ぞや。五さうを助けてたび給へとて。かきふくがうにぞ失せにける。

鱸庖丁（すゞきはうちやう）

シテ　伯父
アド　甥
（入道具）

アドへ是は淀邊に住居致す者で御座る。某伏見に伯父を一人持つて御座るが。此の度官途なりを致さるゝに就いて。尺の鯉を求めて呉れいと頼まれて御座るを。はたと忘れて御座る。今日は參り。面白をかしう斷りを申して歸らうと存ずる。誠に。堅い人で御座るに依つて。忘れたなどと申したらば。よいとはおしやるまい。口調法を以てまつかい樣に申しなさうと存ずる。何かと云ふ内に是ぢや。案内を乞はう。物も。案内もう。シテへ表に案内がある。案内とは誰そ。アドへ私で御座る。シテへエイ。そなたならば案内なしに通りはめされいで。よそ〳〵しい。何事でおりやる。アドへ面目もない事が御座る。シテへそれは何事でおりやる。アドへ兼ね〳〵御約束の尺の鯉をまんまと求めまして。迚もの事につなぎ鯉に致して上げませうと存じて。淀橋の三番目の杭につないで置きまして。今朝持つて參らうと存じて。そろ〳〵と縋をたぐりまして、御座れば。どうやら手の内が輕う御座つたに依つて。水ばなれが大事ぢやと存じて。ついと引き上げましたれば。申し。大事の事の。シテへ何と。アドへ片身さがうて川獺が食ひて御座る。シテへ是はいかな事。アドへ斯様の目出度い折柄に。傷のつきました物は如何と存じまして。鯉は捨おきまして。其斷りに參りました。シテへ扨々それは念の入つた事ぢや。某官途なりをするに就いて。方々から肴を貰うてみたが、〳〵てある。其の鯉が無いとおつてもそつとも苦しうない。必ず心に掛けますな。アドへそれならば安堵致して御座る。私は此のお斷りに參りました。もかう參りませう。シテへ何ぢや行かう。アドへハア。シテへイヤ変な人が。ちと前廣から來て。手ながをもして呉れう人が。表からいなうと云ふ事があるものか。馳走を致さう。先づかう通らしめ。アドへ畏まつて御座る。シテへそれにゐるりとおいやれ。シテへ是はいかな事。只今參つた者は。某が爲にはのがれぬ者で御座る

が。この官途なりを致すについて。尺の鯉を求めて異れいと賴うで御座るが。惣じてきやつが申す事は。百に一つも誠がないと申す。此度の鯉も求めは致すまい。定めて口調法を以て申しなすと見えた。又某も口てぼつてともてなして歸さうと存ずる。なう〳〵おいやるか。アドへ是に居りまする。シテへさて最前も云ふ通り。某を人と思召して。方々から肴を貰うてみら〳〵てある中にも。鱸を三獻得た。内一こん料理してておませうぞ。アドへそれは忝う御座るさりながら。先づ此度のお振舞の役にお立てなされたらばよう御座らう。シテへいや〳〵。振舞の心味ぢや。迚もの事に料理をも好ましめ。アドへそれならば何に致してたべませうぞ。打身に致しませう。シテへいや鱸でおりやる。アドへ成程鱸で御座る。シテへあの鱸をや。アドへ左様で御座る。シテ笑ふ。シテへ扨はそなたは打身の仔細を知らぬと見えた。ついでながら語つて聞かせう。アドへそれは忝う御座る。シテへ其の間に鱸を洗はせう。アドへ一段とよう御座りませう。シテへやい〳〵。最前の鱸の三獻ある内。中にも大きなを一獻洗うて板に据ゑて出せ。エイ、鱸を洗ふ内に打身の仔細を語らう。よう聞かしめ。アドへ畏まつて御座る。シテへ抑も打身と云ふ事は。寛和元年乙の酉の年。花山院其

頃御世を御持ちありしに、四季折々の御遊び。殊には御狩を本とし給へり。政頼に鷹を据ゑさせ。國々をお廻りありしに。或時遠江の國橋本の長が宿所におつきある。長は出會ひ種々にもてなし申す。三獻の土器すゑたりしに。何となく鯉を一獻板に据ゑて出す。其時の庖丁人は。神官の太夫忠政にてありし。忠政それ〳〵とありしかば。三ぞうけん。据ゑたる鯉を切らずして。養の子の板を一間はづし。下なる魚を挾んて上げ。みさごの鰭をはらりとおろし。魚を放てば。魚は悦び。石菖の陰に隠れぬ。扨そばなる魚を取つて引寄せ。すつぱと切つてはしつと〻打付け。すつぱと切つてはしツと〻打付け。並居給へる上北面に下北面。納言宰相黒袴に至らせ給ふ迄。皆三刀づつ參らせしかば。忠政が庖丁いつ〳〵よりも神妙なり。勳功は乞ふによるべしとありしより此方。打身といふ事始まりたり。惣じて打身といふ事は。海の物にては鯛。川の物にては鯉ならではあるべからず。御身の親は庖丁人。庖丁人の子孫として家を繼がうずる其人が。鱸に打味たべうなどと云ひて。立居

の人に笑はれ給ふな。惣じてない事でおりやる。アド〽扱はない事で御座れ。シテ〽身共が前では苦しうない。他所でおしやるなと云ふ事ぢや。アド〽畏まつて御座る。シテ〽料理は身共に任せておかしめ。アド〽ハア。シテ〽手ればな者に云付けたれば果さぬ。やいやい。最前の鱸かよくば。早う板に据ゑて出せ。エイ。内よりも鱸いで來て候とて。切目尋常なる俎に。青木のまな箸。備前庖丁紙一重おつとり添へ。板をばそれの前に置かする時。わごりよのおしやらうには。是のお事は承及うだ。庖丁人にて候程に。お手前が見ましたいとおしやらう。さらば切つて見せ申さうずるとて。板取つて引寄せ。箸刀おつとり。紙を三つに切り。二つをば下におろし。一つをば俎頭になほし。禮式の水こそげ。さつ〳〵と三度する儀に。刀の裏表をしつとり〳〵と拭ひ。立所に箸立て。一の刀にて魚頭をつぎ。同じく俎頭になほし。二の刀にて上身を下し。下しも敢へずしつとゝ返し。下身を下し。中落とう〳〵としていざ煎り物にしてたべう。アド〽是はよう御座りませう。シテ〽魚頭を三枚六枚に崩し割りに割り。あなたへ遣し。拵へうずる逗留に。何とてそなたと身共が素物語にて候べし。幸ひ殘つて候上身下身を。膾に作つてたべう。アド〽是は猶よう御座りませう。シテ〽膾にも作り様があつて。大きいを小さかれ。小さいを大きかれと。引筒違うて刀ばやに。すつぱり〳〵すぱ〳〵すつぱりと作つて。如何にもきつ〳〵としたる酢にてあへ。深草の土器にちよぼ〳〵とよそうて。わごりよにもおまし。身共も食べう時。日本一の御酒をたぶ〳〵とついで持つて參らうを。塗物を以て七盃づつお飲みあらうか。アド〽成程下されませう。シテ〽何ぢや。呑まう。アド〽ハア。シテ〽近頃滿足した。さて内よりも煎り物出來て候とて。楠の葉の香頭。貝杓子などをおつとり添へて持つて參らうを。是も身共がよそひ所をほつてとよそうて。わごりよにもおまし。某もたべう時。今度は色の變つたお酒をたぶ〳〵とついで持つて參らうを。左を以て五杯はお呑みあらうか。アド〽最前の御酒が夥しう御座る程に。是は得たべますまい。シテ〽最前なますの上でさへお參りやつた。殊に是は鹽のからい物ぢや。是非ともお參りやれ。アド〽お前にも上りまするならば。ねらうても見ませうか。シテ〽何が扨。お爲ならばたべいでは。アド〽それならば下されませう。シテ〽何ぢや呑まう。アド〽なか〳〵。シテ〽やれ〳〵嬉しや〳〵。さて此上は小盃を以て。あなたこなたと廻さうか。但し當世樣に取らうか。アド〽イヤモお取りなされませ。シテ〽それならばとるぞや。アド〽それがよう御座らう。シテ〽さて此後で濃茶は何とあらう。アド〽それや猶よう御座りませう。シテ〽そなたのお知りある通り。不斷勝手には湯がりん〳〵とたぎつてある。しつけにしつけたる若い者が。木の茶といふ物を。湯七分に泡八分。猶の香たてた如く。ほう〳〵やは〳〵むく〳〵と。中高にほつてとたてなして持つて參らうを。そなたは謹んで押戴き ひと口飲うては吹出し。二口飲うてはふつと鼻へ吹出し。今日は種々御馳走の上。お茶迄下されて忝いと云ふ禮はおしやらう。アド〽申しませうとも。シテ〽時身共が申さうは。宇治邊に知音を持つたれば。種を數多挽き得た。いか程なりともお參りたい程お參れ。とは申さうが。聞けばそなたも侘好きの緣の端に腰をもかくるといふ程に。よもや濃茶を續けて二ふくとは得飲むまい。アド〽何の下されませう。シテ〽それならば是も仕舞はう。アド〽お仕舞ひなされませ。シテ

へさて醉の出ぬ内に門(かど)送りなせう。お立ちやれ。アドへそれは御料理の下された上の事に致しませう。シテへ料理も追付出來る。先づ立たしめ。アドへ畏まつて御座る。シテへさて五杯と七杯とは十二杯ではないか。アドへ左樣で御座る。シテへ十二杯といふ酒を呑うだらば。いかなそなたがさしもの上戸なりとも。云ひぐい時宜も得云はず。舌元でむさうなつて。科(とが)もない扇を繩になうて。今度は持つて參らう鯉を持つては參らいで。結句樣々下さるゝ。重ねては鯉にても候へ。鯰(なまづ)にても候へ。持つて參つてきつと御禮を申さう。さらば／＼とこくる程盛つてはやりたけれども。そなたの鯉を川獺が食うた如く。身共が振舞も北條といふ蟲が喰つて何もない。是許のあかい内にとつとゝ行かしめ。アドへ面目も御座らぬ。シテへようおりやつた。アドへハア。留めて。アドより入る。

酢(す)薑(はじかみ)

シテ　酢賣
アド　薑賣

アドへ津の國の薑賣で御座る。毎年都へ薑を商賣に持つて上る。當年も相變らず持つて上らうと存ずる。シカ／＼。まづ急いで參らう。誠に津の國は薑の名物で御座るに依つて。毎年夥しう賣る事で御座る。當年も大分商ひ致したいものぢや。イヤ何かと云ふ内に都ぢや。暫く此所に休らうて。心靜かに商賣を致さうと存ずる。シテへ是は和泉の堺の酢賣で御座る。毎年都へ酢を商賣に持つて上る。當年も持つて上らうと存ずる。シカ／＼。誠に。酢と申すものは。五味の中のその一つで御座れば。すは御料理と申せば。酢が差出いで叶はぬ事で御座る。誠に和泉酢は名物で御座るに依つて。毎年／＼大分賣る事で御座る。イヤ何かと申す内に都へ着いた。さらば此邊りから心靜かに商賣を致さうと存ずる。シイ／＼。其の許へ酢は召さぬか。和泉酢は召すまいか。酢は／＼。酢買う／＼。和泉酢は召さぬか。アドへ是は如何な事。身共が是に居るを知らぬさうな。やい／＼。やい其處(そこ)な奴。シテ受け平伏する。シテへハア。アドへおのれは何者ぢや。シテへ私は和泉の堺の酢賣で御座る。お前はどなたで御座る。アドへ身共を知らぬか。シテへいや存じませぬ。アドへ津の國の薑賣ぢや。シテへ何ぢや。アドへ薑賣ぢや。シテへ牛にくらはれた。所の目代殿でもあるかと思うてよい肝を潰した。うぬしが薑賣ならば身共は酢賣ぢやが。それが何とした。アドへよし何を商賣にせうと儘よ。身共へ斷りなしに賣らす事はならぬ。シテへそれはどうした事ぢや。アドへ某が先祖は參内して商人司を頂戴したに依つて。某へ斷りがなければ賣らせる事はならぬ。シテへおぬしの先祖が參内して商人司を頂戴したれば。身共が先祖も參内して商人司を頂戴したに依つて。身共へも斷りなしに賣らす事はならぬ。さり乍ら。わごりよの先祖が參内したが誠ならば。定めて系圖があらう。語らしめ。アドへ語らう程によう聽かしめ。シテへ心得た。アドへ扨もからく天皇の御時。薑賣帝(みかど)に參りしかば。ヤアあれなる薑賣此方(こなた)へと御諚ある。シテへフン。アドへ畏まつて候とて。唐橋を打渡り。唐門に入り唐竹椽に畏まる。其時唐紙障子をからりとあけ。如何にも辛き御酒を下さるゝ。肴には。辛子唐桃(からもゝ)から蒜(ひる)や。から木を焚いてから煎りにせんとこそあれ。やはか。すいきを焚いてすいりにせんとはおりやるまいぞ。シテへ是は聞き事な系圖でおりやる。身共のはそれ程にはあるまいが。語らう程によう聽かしめ。アドへ

へ心得た。シテへ扨も推古天皇の御時。酢賣帝に參りしかば。ヤアこれなる酢賣此方へとせんずある。アドへフン。シテへ畏まつて酢賣らうとて。簀子橋なうち渡り。簀子椽にかすこまる。其時御簀の内よりも。すき御すな下さるゝ。一すは斯うぞ聞えける。住吉の。すみに雀が巣を組んで。さこそ雀も住みよかるらん。其外。千すう萬歳重りて。巖の上に龜遊ぶ。松の枝に鶴すくふとこそあれ。いつのならひに。薑の枝に鶴すを喰うた例はおりやるまい。アドへ是も聞き事な系圖でおりやる。此上は互ひの商賣物によそへて秀句を云うて。その秀句云ひ勝つた者を商人司にせうと思ふが何とあらう。シテへ何ぢや。秀句を云ふ。アドへなか／＼。シテへ暫くそれにお待ちやれ。アドへ心得た。シテ退き笑ふ。シテへきやつは秀句好きさうな。秀句は身共が得物ぢや。アドへなう／＼。秀句一段とようおりやらう。アドへそれならば。さあ／＼わごりよからおゆきやれ。シテへ何が扨わごりよが先ぢや。わごりよゆかしめ。アドへ先とおせやる程に。身共から參らう。シテへ其方の商賣物は薑ぢやの。アドへなか／＼。シテへ薑の辛い縁によそへて身共から。アドへオヽから。シテへから。アドへから。二人笑ふ シテへ是は初手を喰はした。アドへさうもおりない。シテへ某は此通りを眞

まつすぐ。シテへオヽすぐ。アドへすぐ。シテへすぐ。二人笑ふ アドへさあ／＼おりやれ。シテへ心得た。アドへあれ／＼。あの向の木をお見やつたか。シテへ成程見ておりやる。アドへあれは物こ唐松さうな。シテへそばに杉の木もあるぞや。アドへ纏うたは唐草か。シテへそれは其方の目違ひぢや。あれは忍冬でおりやる。アドへ枝にとまつたは山雀さうな。シテへ巣立ちと見えて竦うで居るは。アドへ何ぢや。竦うで。シテへオヽ竦うで。アドへ竦うで。シテへ竦うで。笑ふ。アドへさあ／＼來さしめ。シテへ心得た。アドへ扨々そなたはいかい目利でおりやる。シテへいかな／＼。其方が口利ぢやに依つて。中々追付きかぬる事ぢや。アドへ何かと云ふ内に唐物見世へ着いた。シテへ誠に數寄屋道具もあるぞや。アドへちと見物致さう。シテへ一段とよからう。アドへあれ／＼。あの鏡をお見やつたか。シテ

直にゆかう。アドへ其方の商賣物は酢ぢやの。シテへなか／＼。アドへ酢のすい縁によそへて

ヘ成程見ておりやる。アドヘあれは唐の鏡さうな。シテヘ姿見にしたらよからう。アドヘ向の掛物は唐繪さうな シテヘ何かは知らぬが墨繪にかいた。アドヘ讃も唐筆と見ゆる。シテヘすごうが自畫自讃と見ゆる。アドヘ何ぢや。すごう。シテヘオヽすごう。アドヘすごう。シテヘすごう。笑ふ。アドヘさあ／＼おりやれ。シテヘ心得た。アドヘ云うても／＼其方はいかい口利きでおりやる。シテヘいかな／＼。其方がいかい口利きぢやによつて。やゝもすれば負けさうにおりやる。アドヘあれ／＼。雨も降らぬに傘をさいてゆくは。シテヘ後から菅笠も着てゆくぞや。アドヘ何かと云ふ中に五條の橋へ着いた。シテヘ誠に五條の橋へ着いた。アドヘあれ／＼。あの川を渡る者がからげて渡る。シテヘあれは裾を濡らすまいと云ふ事であらう。アドヘ何ぢや。裾な。シテヘオヽ裾な。アドヘ裾な。シテヘ裾な。笑ふ。アドヘイヤ此様に云うてゐては埒があかぬ。何としたものであらう。シテヘ身共が思ふは。惣じて昔から酢薑と云うて。酢の要る處へは薑が要り。薑の要る處へは酢が差出いで叶はぬ事ぢや。向後は相談のして相商ひにせうと思ふが何とであらう。アドヘ是は一段とよからう。シテヘ稽古の爲買つてお見やれ。アドヘ心得た。薑買う。シテヘ酢買う。ト互ひに云ひ。一邊または段々つめて。笑ふ。シテヘなう／＼。今日は日も晩じた。明日からは相商ひに致さうぞ。アドヘ必ず其筈でおりやる。シテヘも斯う參る。アドヘ何とおゆきあるか。シテヘ中々。二人ヘさらば／＼。アドヘ暇乞の爲一句持つて參らう。シテヘ一段とよからう。アドヘ斯うもあらうか。シテヘ何と。アドヘ蓼湯とて。シテ吟ず アドヘ何とて辛くなかるらん。シテヘ椒水とても。アド吟ず。シテヘすくもあらばや。アドヘ一段と出來た。シテヘいざ。どつと笑うて退かう。アドヘ一段とよからう。シテヘつゝと寄らしめ。アドヘ心得た。シテヘさあ笑はしめ。アドヘまづ笑はしめ。シテヘまづ。アドヘまづ。シテヘまづ。二人ヘまづ／＼／＼。ト二人笑留めて入るなり。

墨塗

シテ　大名
アド　太郎冠者
小アド　女
（入道具）

シテヘはるか遠國の大名。永々在京致す所。訴訟悉く相叶ひ。安堵の御教書頂戴し。過分に新地を拜領し。剰へお暇迄を下されし。近日本國に罷下る。斯様の悦ばしい儀は御座らぬ。先づのさ者を呼出し。此儀を申聞かせ悦ばせうと存ずる。やい／＼。なるかやい。此頭三べん呼出し答と同じ事。シテヘ念なう早かつた。永々在京致す所。訴訟悉く相叶ひ。安堵の御教書頂戴し。新地を過分に拜領し。剰へお暇を下されて近日本國へ罷下る。斯様のめでたい事はないなあ。アドヘ内々斯様の儀を待ち得ましたに。斯程おめでたい儀は御座りませぬ。シテヘめでたいなあ。アドヘ左様で御座る。シテヘさてかの人の方に暇乞に行たものであろか。但し此儘立たうか。アドヘ是はおいでなされずばなりますまい。シテヘそれならば追付け行かう。さあ／＼來い／＼。アドヘ畏まつて御座る。シテヘさて此間は久しう音信をせなんだ程に。さぞ疎しう云うてあらう。アドヘ御意の通りで御座る。又其上にお暇の出ました事をお聞きなされましたらば。肝を潰させらるゝて御座らう。シテヘそれは汝取繕うて云うて呉れい。アドヘ畏まつて御座る。シテヘ何かと云ふ内是ぢや。身共は直ぐに奥へ通らう。床几を呉れい。アドヘ畏まつて御座る。お

床几。（ト云うて。葛桶を出し。脇座に腰掛けさせる。）シテへ身共が來た通りを云へ。（アドうけて。）アドへ申し御座りまするか。女へやれ／＼珍しや／＼。太郎冠者ようこそわせたれ。さて頼うだお方は御機嫌がよいか。アドへいや今日は是へお出でゝ御座る。女へなう／＼嬉しや。どれに御座る。アドへすぐに奥へお通りなされて御座る。女へやれ／＼。御なつかしや／＼。此中は久しうお便りも御座らぬによつて。お心許なう存じましたが。御機嫌もようて妾も嬉しう御座る。シテへそなたも息災で一段でおりやる。女へあまり久しう打絶えて音信さへ御座らぬによつて。最早お心も變りましたかと存じて案じました。シテへ尤もでおりやる。此中は何かと隙入りがあつて。存じながら御無沙汰を申した。女へお出でなさるゝ事がなりませずば。文なりとも又太郎冠者でも下されさうなものぢやと思うて。たんと恨んで居りました。さて今日はどち風が吹いてお出でなされました。シテへさて今日來るは別の事でもない。ちとそなたへ話す事があつて來た。女へそれは何事で御座る。シテへさりながら。これは直には云ひにくい。太郎冠者。汝云うて呉れい。アドへ是はお前仰せられたがよう御座る。

女へ心許ない、何事で御座る。シテへ云はねばならず云ふも氣の毒。苦々しい事ぢや。女へ人に物を思はせずとも。早う仰せられい。

シテへ是非に及ばぬ。思ひ切つて云はう。何を隠さうぞ。菅尼ようお暇を下されて。近日本國へ下る事でおりやる。女へさればこそ此中久々お入さへ下されぬと思へば。頓て本國へ下らせらるゝ。妾は後で何と致さう。（ト云ふ／＼。大鼓座へ行き。びん水入持出で。水を目へ塗る。）シテへそれぢやによつて汝云うて呉れいと云ふに。アドへさて／＼氣の毒な事で御座る。シテへなぜに其様におしやる。又頓てお禮に上る事なり。それ迄は文を上さう程に。さう心得さしませ。女へ妾でこそ其様に仰せらるれ。お國元へお下りなされたらば。又ます花が御座らう。妾が事は思ひ出しもなされまい。シテへ弓矢八幡も照覽あれ。必ず／＼心強く待つてお居やれ。（ト云うて泣く内。アド橋掛りへ立ち。女が目へ水塗るを見付け。）アドへ苦々しい事かな。何とせうぞ。是は如何な事。誠に泣くと思へば。びん水入をそばに置いて。その水を目へ塗つて泣く眞似をする。扨々憎い事かな。（ト云うて。シテの袖を引き。橋掛りに呼んで。）アドへお前はあれを誠に

泣くと思召すか。シテ〽また誠に泣かいで嘘に泣かるゝものか。アド〽いやあれはびん水入をそばに置いて。その水を目へ塗つて泣く眞似をしまする。シテ〽扨々おのれは不得心なやつぢや。惣じて涙といふものは。四十餘の節々が潤はねば涙一滴出ぬものぢや。そちがさう云ふも合點ぢや。頓て國元へ下るによつて。女共への土産に告げ口をせうといふ事か。いかな〳〵。その様な事は云はぬものぢや。女〽申し。どれへお出でなさるゝ。シテ〽いやどれへも行きはせぬ。女〽お目にかゝるも今暫くで御座る。妾がそばに居て下され。シテ〽身共とても名殘は同じ事ぢや。アド〽扨々うつけた人ぢや。致し様が御座る。ト云うて。墨を入れたるびん水入と取換へる。女〽此様な事なれば。初めから馴れませぬがましで御座る。シテ〽其様におしやれば身共迄心が亂るゝ。首尾を見て迎ひに人を上さうぞ。女〽其様な事を待ちわびて。何と月日が送られませうぞ。せめて愛に居させらるゝ内。とくとお顔をも見せて下され。又妾が顔をも見させられて下され。ト云うて。泣く〳〵女顔を上げる。シテ〽身共とても同じ事ぢや。身共が顔を見ておいておくりやれ。又そなたの顔も見せておくりやれ。ト云うて。女の黒き顔を見て驚き。橋掛りよりアドを呼ぶ。シテ〽あの面は何ぢや。アド〽それ御らうじませ。水を目に塗ると申せども聞かせられぬによつて。墨と取替へて置きました。シテ〽何ぢや。墨と取替へておいた。アド〽なか〳〵。シテ〽扨も憎い事かな。是迄身共をまんまと抜き居つた。何とぞして恥をかゝせたいが。思ひ出した。こりや此鏡を形見にやる程に。身に添ふと思うて朝夕見よと云へ。アド〽畏まつて御座る。頼うだ人申されまする。是は身を離さぬ鏡なれども。形見に進じまする。頼うだ人ぢやと思召して。朝夕御覽なされいと申されまする。女〽いや〳〵。其様な物を見れば思ひが増鏡ぢやによつて。見るはいやで御座る。シテ〽なう〳〵。それは心強い。身共ぢやと思うて。たつた一目見ておくりやれ。女〽是は思はぬ別れになりまする。ト云うて。鏡を見て。肝をつぶす。ワア誰がした。二人笑ひながらうろうろする。誰がした〳〵。シテ〽太郎冠者ぢや。女〽憎い奴の。ト云うて掴へ。墨をぬる。アド〽頼うだ御方ぢや〳〵。女〽なう〳〵腹立ちや〳〵。ト云うて。シテにも塗り。追込み入るなり。

末廣（すゑひろ）がり

シテ　大名
アド　太郎冠者
小アド　末廣賣
（入道具）

シテ〽大果報の者。天下治まり目出度い御代なれば。上々の御事は申上ぐるに及ばず。下々迄も存ずる儘のめでたいお正月でござる扨いつも嘉例で節を致す。上座にござる御方へは悉く末廣がりを進上致す。先づのさ者を呼出し申付けうと存ずる。ト云うて。呼び出す。出る。如常。シテ〽何と當年の様な目出度いお正月はあるまいなあ。アド〽御意なさるゝ通り。目出度いお正月でござる。シテ〽それに就いて。いつも嘉例で節を致す。上座にござるお方へは末廣がりを進上致す。何とその用意があるか。アド〽いや末廣がりは覺えませぬ。シテ〽そちが覺えずばないであらう。何と都にはあらうか。アド〽何が扨。都にないと申す事はござりますまい。シテ〽それならば。汝大儀ながら都へいて。末廣がりを求めて來い。アド〽畏まつてござる。シテ〽さて好みがある。アド〽

それはいか様のお好みでござる。シテへ先づ地紙よう骨に磨きなあて要しつとくして。戯綸ざつとあらうずるな求めて來い。アドへその段なそつともお氣遣ひなされまするな。ト云うてつめる。大名[illegible]火急な事な仰付けられた。先づ急いで參らう。シカ〳〵。誠に。某は未だ都な見物致さぬ。此度な幸ひに。こゝかしこなも見物致さうと存ずる。ハア〳〵。都近くと見えていかう賑やかな。さればこそ都ぢや。田舍の家作と違うて。軒と軒とは仲良ささうにひつしりと立て並べた。扨も〳〵賑かな事かな。ヲア。身共ははつたりと失念した事がある。かの末廣がりと云ふ物はどこ許にあるやら。どの様な物やらも存ぜぬ。とくと問うて來ればよかつたものな。遙々の所な問ひに戻られもせぬ。何としたものであらう。ヤア〳〵。笑ふ。さすがは都ぢや。賣り買ふ物な呼ばはれば。事が調ふと見えた。さらば身共も呼ばはつて參らう。シイ〳〵。そこ許に末廣がり屋はないか。何ぢやない。末廣がり買はう〳〵。小アドへ洛中に心の直にない者でござる。あれに田舍者と見えて。何やらわつぱと云ふ。ちときやつにたづさはつて見ようと存ずる。なう〳〵これ〳〵。アドへ此方の事でござるか。小アドへ成程そなたの事

ぢや。わごりよは此廣い街道な。何なわつばとおしやる。アドへ田舍者の事でござれば。わつぱの法度なも存ぜいで申した。眞平御免あれ、小アドへいや〳〵わつぱの法度な咎むるではない。何なおしやる。事に依つたらば叶へてもおませうかと云ふ事ぢや。アドへそれは添うござる。私は末廣がりがほしさに呼ばはつて歩くことでござる。小アドへして其の末廣がり屋の亭主な見知つておいやるか。アドへこれは又都の人とも覺えぬ事な仰せらるゝ。存じて居れば。此樣に呼ばはつてはありきませぬ。知らぬに依つて呼ばはつてありきまする。小アドへこれは身共が誤つた。すればそなたは仕合せ者ぢや。アドへ仕合せと申して。かう見えた通りの者でござる。小アドへいや〳〵。其樣に袖つまに付いての仕合せではない。身共にお逢ひやつたが仕合せといふ事ぢや。アドへそれは又どうした事でござる。小アドへ洛中に人多しと雖も。そなたの尋ぬる末廣がり屋の亭主は身共でおりやる。アドへ扨はこなたは末廣がり屋の御亭主でござるか。小アドへなか〳〵。アドへすれば私は仕合せ者で御座る。それならば末廣がりが欲しうござる程に。見せて下され。小アドへ見せう程に。暫くそれにお待ちやれ。アドへ心

得ました。小アド〽田舍者をまんまと騙してはござれども。何を末廣がりぢやと申して。賣つて遣さう物がござらぬ。こゝに古い傘がござる。これを面白をかしう申して賣つてやらうと存ずる。なう〳〵おいやるか。アド〽これにゐまする。小アド〽サア〳〵。末廣がりを見せう。アド〽どれ〳〵。此樣な物はいりませぬ。先づ末廣がりを見せて下され。小アド〽ハア扨はそなたは眞實末廣がりを知らぬと見えた。追付け末廣がりにして見せう。それ〳〵。何と末廣がりになるではないか。アド〽成程これは末廣がりになりました。さて好みがござる。小アド〽それはいかやうのお好みぢや。アド〽先づ地紙よう骨に磨きをあて要しつととして。戯繪ざつとあらうずるを求めて來いと申されました。小アド〽成程お好みにも悉く合うてある。先づ地紙ようと云ふは此紙の事。美濃紙の上々を以て天氣のよいに張つたに依つて。こん〳〵致す。アド〽誠にこん〳〵致す。小アド〽骨に磨きをあてと云ふは此の骨の事。物の上手が信濃木賊で椋(むく)の葉を以て七日七夜磨いたに依つて。これすべ〳〵致す。アド〽ムウ。小アド〽要しつとゝ云ふも此の要の事。是をかうして。いつ

く何方へ參つても。ざつくりとする事ではおりない。アド〽さて戯繪な。小アド〽何ぢや戯繪。アド〽中々。小アド〽暫くそれにお待ちあれ。アド〽心得ました。小アド〽此の戯繪にほうど困つた。何としたものであらうぞ。イヤ致し樣がござる。ト云うて。傘の柄にて。ヤア〳〵と云うて。アドにつきかゝるなり。アド〽これは何とさつしやる。小アド〽餘りお騷ぎあるな。此の柄で戯(さ)れるに依つての戯柄。繪の事ではおりない。アド〽ハア扨は其の柄で戯るるに依つての戯柄。繪の事ではおりないと仰せらるゝか。小アド〽中々。アド〽これは好みに悉く合ひました。求めませうが。代物は何程でござる。小アド〽萬疋でおりやる。アド〽それは餘り高直にござる。もそつと負けて下され。小アド〽いや〳〵。末廣がりに限つて負けはない。いやならば置かしめ。アド〽それとても求めませう。則ち代物は三條の大黑屋で渡しませう。小アド〽成程大黑屋。存じてゐる。あれで受取るであらう。アド〽も斯う參る。小アド〽何とお行きやるか。アド〽中々。二人〽さらば〳〵。小アド〽なう〳〵。先づお待ちあれ。アド〽何事でござる。小アド〽餘りそなたは氣さくな買手ぢや。添へしておませう。アド〽それは忝う

ござる。これへ下され。小アド〽いや〳〵。其樣に手の内へ入るゝ物ではない。見れば主持さうな。總じて人の主と云ふ者は。機嫌のよい時もあり。又惡い時もあるものぢや。その機嫌の惡い時に。御機嫌を直す囃子物を敎へてやらうと云ふ事ぢや。アド〽それは忝うござる。敎へて下され。小アド〽物と云ふ事ぢや。アド〽何とでござるぞ。小アド〽笠をさすなる春日山。これも神の誓とて。人が笠をさすなら。我も笠をさゝうよ。げにもさあり。やふ。がりもさうよの。と云ふ事ぢや。アド〽成程大方覺えました。忝うござる。も斯う參る。小アド〽何とお行きあるか。暇乞如常。アド〽なう〳〵嬉しや〳〵。隙がいらうかと存じたれば。重疊の末廣がり屋に出會うて。此樣な嬉しい事はござらぬ。此由を賴うだお方へ申上げたらば。さぞ御滿足なさるゝであらう。何かと云ふ内に戻つた。先づこの末廣がりは爰に置いて、申し。賴うだお方ござりまするか。呼出す。シテ出る常の如し。シテ〽やれ〳〵骨折やして末廣がりを求めて參りました。シテ〽それはでかいた。急いで見せい。アド〽畏まつてござる。さらばお目に懸けませう。シテ〽どれ〳〵。ハア。汝は

都へ上つて雨に逢うたと見えて。傘を求めて來たが。先づ其末廣がりを見せい。トいうて。傘を捨てる。アドへハア扨はお前にも御存知ないさうにござる。追付け末廣がりに致してお目に懸けませう。それ〳〵何と末廣がりになりませうが。シテへあれは何をぬかしをる事ぢや。アドへ扨お好みにも悉く合ひました。先づ地紙ようと申すは此紙の事。美濃紙の上々を以て天氣のよいに張りましたに依つて。これこん〳〵致す。シテへきやつは氣が違うたさうな。アドへ骨に磨きをあてと申すも此骨の事。物の上手が信濃木賊椋の葉を以て七日七夜磨いたに依つて。これすべ〳〵致す。シテへ呆れもせぬ事をぬかしをる。アドへ要しつとゝしてと申すも此要の事。これをかうして何處何方迄參つても。ぎつくりとも致す事ではござらぬ。シテへまだおりやらうが。アドへ戯繪な。シテへ扨々憎い奴かな。アド傘の柄にてヤア〳〵と云うてかゝる。シテへこれは何としをる。アドへ餘りお騷ぎなされまするな。此柄で戯るゝに依つての戯柄。繪の事ではないと申しまする。シテへ扨々うつけた奴かな。知らずば何故に問うて行かぬ。末廣がりといふは扇の事ぢやわいやい。アドへア丶扨は扇の事でござるか。シテへ常の扇をしゝめ扇と云ひ。末ひくわつと開いたを末廣がり。地紙ようと云ふは此紙の事。骨に磨きをあてと云ふも此骨の事。要しつとゝ云ふも此要の事。戯繪ざつと云ふは。例へば表には秋の野の草盡しを書き。裏には唐子の戯るゝ所を書いたをこそ戯繪と云へ。何ぞやその古い傘の柄で戯るればとて。それが戯繪であらう事は。アドへでも都の者が。これを末廣がりぢやと申したに依つて。求めて參りました。シテへまだそれをぬかしをる。末廣がりと云ふは根本扇の事ぢやわいやい。アドへ扇ならば扇と云ひたいものでござる。シテへ扨々憎い奴の。身が内には叶はぬ。出て失せう。アドへア丶。シテへまだそこにをるか。アドへ御ゆるされませ。シテへあちへ行け。まだそこに居るか。アドへ御ゆるされませ〳〵。シテへ扨々腹の立つ事かな。アドへこれはいかな事。以ての外の御機嫌ぢや。誠に。今よう見れば。お臺所に澤山な傘ぢや。ア丶身共は麁相な事をした。これは先づ何としたものであらうぞ。ア丶さすが都の者ぢや。ぬかば唯もぬかいで。御機嫌を直す囃子物を敎へて呉れた。何とやら云ふ事であつた。オ丶それ〳〵。笠をさすなる春日山。これも神の誓とて。人が傘をさすなら。我も笠をさゝうよ。げにもさあり。やよ。がりもさうよの。かうであつた。さらば囃して御機嫌を直さう。トいうて。囃子方になる。拍子あり。あしらひあれ。シテ移り。笑ふ。シテへ太郎冠者が都でぬかれて來をつて。某が機嫌を直さうと思うて囃子物を致す。これは出ずばなるまい。イロいかにやいかに太郎冠者。アドへそりやお聲ぢや。シテへぬかれたは腹が立てど。囃子物が面白い。先づ内へつと入つて。アドへ囃す。鯖の鮨を頬張つて。諸白を飲めかし。シテへ兎角の事はいるまい。早う來てさしかけ。アド。げにもさありと囃して。走り廻る。二人しやぎりにてとめて。入るなり。

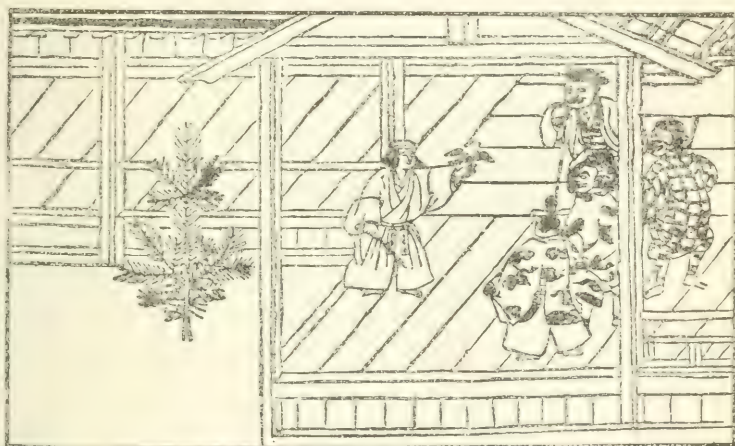
【せ】

政頼（せいらい）

シテ　政頼
アド　閻魔大王
小アド　獄卒
勢子
犬

アド。次第朝比奈の通り。名乘も同断なり。地獄の飢饉以ての外。さるによつて。此度獄卒どもを召連れ。自身六道の辻へ出で。罪人が來らば。責めて取つて喰せばやと存ずると名のる。さて道行朝比奈の通りなり。

アドへ急ぐ程に。六道の辻に着いた。獄卒ども居るか。（一統小鬼らける。常の如し。）罪人も來たらば責落とせ。必ず油斷をするな。（ト云うて。大名狂言の様に。長返事する。閻魔脇座に葛桶に腰かける。但し葛桶は後見出す。）次第シテへ罪をつくらぬ罪人を。〳〵。誰かはよつてせかうよ。詞これは娑婆に隱れもない政賴と申す鷹匠で御座る。壽命の程も定まりぬるか。無常の風に誘はれ。唯今冥途へ赴き候。道行住馴れし。娑婆の名殘を振捨てて。〳〵。足弱々と行く程に。六つの道にも着きにけり。詞これに道が數多御座る。どれへ參つてよからうぞ。先づそろ〳〵と參らう。前鬼へ俄に人臭うなつた。後鬼へ何れ辺りに人臭い。前へされば こそ罪人が來た。急いで責落とさう。後へ一段とよからう。前へいかに罪人。二人へ急げとこそ。（ト云うて。二人責め一順して。是處彼處と逃げる。）シテへ私は責めらるゝ者では御座らぬ。前へさておのれは。娑婆に於て何をする者ぢや。シテへ私は政賴と申す鷹匠で御座る。後へすれば手に据ゑて居る鳥は。鳥を捕らせる鷹ではないか。シテへ中々。此の鷹に數多の鳥をとらせまする。前へそれ〳〵。おのれは殺生をする重い科人ぢや。後へ大惡人ぢや。シテへ是は迷惑で御座る。鷹匠と申す者は。鷹に鳥を捕らせ。則ち皆鷹の餌に致すに依つて。鷹を養ひまする。これは殺生では御座るまい。前へいや科の輕重は追つての事。今一責せめて大王の御前へ出さう。後へ一段とよからう。前へいかに罪人急げとこそ。（ト云うて。また責常の如し。色々あつて。閻魔の前へ出る。）アドへやい〳〵。此の罪人は何者ぢや。前へ御前で眞直ぐに申上げい。シテへ私は娑婆で隱れもない。政賴と申す鷹匠で御座る。アドへ政賴とは汝が事ぢやなあ。すればそちは先達て淨玻璃の鏡に映つた。殺生をする科で。地獄へ落とさねば叶はぬ事ぢや。シテへいや鷹に鳥を捕らせて。則ち鷹の餌に致しまする。鷹匠が鳥を捕るでは御座らぬに依つて。科にはなりそむないもので御座る。アドへまだぬかし居る。鷹が捕らうとも云はぬものを。無理に鳥を捕らせて。鷹にも骨を折らせ。諸鳥を殺し。已れが服するではないか。シテへそれは鷹野の樣子を御存じ御座らぬに依つて。左樣に思召しまする。鷹に諸鳥を捕らせて。早速餌に致し。殘りは餌がらと名附けて。音信にも致し。第一鷹野と申すは。娑婆に於て。貴人の御遊山なさるゝ事で。科にならう事では御座らぬ。アドへいや〳〵。科にならいで叶はぬ事ぢや。第一喰物のさんさくぢやに依つて。貴人の遊び事ではあるまい。下郎の業であらう。シテへ下賤の致す業では御座らぬ。則ち往古帝王の御遊覽より。事起つたことでは御座ると申しまする。アドへそれならば。鷹野の起り。鷹の子細を。急いで語れ。シテへ畏まつて御座る。語抑も鷹逸物の吉相は。まかぶらに日ざしなさせ　日は明星の如く。嘴爪は三日月の如く。前には山を戴き。後には山川を流すと。呉服は毛綾をたゝむうば。毛なみをするうれへの毛。涙をとゞむひうち羽。かざきりほろ羽に至るまで。鷹の名所逸物の吉相なり。とつては毛なし。はぎもげあがり。打爪かけ爪鳥がらみ。かえるこに至るまで。これ皆爪の詞なり。さて尾に至つては。大石打小石打なし尾奈夏柴助け鈴づけに至るまで。これ皆鷹の名所なり。惣じて鷹の名は。國々に於いてかはりあり。摩揭陀國にはしゆおうと云ひ。契丹國にはかんせんと云へり。新羅國にはこてうと申し。百濟國はくりてうと云ひ。大唐にてはしゆてうと名附け。日本にては鷹と云へり。抑も我が朝に於ては。鷹をつかふ事。人皇十七代。仁徳天皇四十二年に。初めて御狩に行幸あつて。御鷹を放ちて雉子を捕らしめ給ふ。これ鷹狩の濫觴なり。されば こ

の代に至るまで、娑婆に於て鷹をつかふ事。これ第一の罪業とせり。なんぼう面白き物語にては候はぬか。アドへやれ／＼。子細を聞いて肝を潰した。さて何と鷹をつかふは面白いものか。シテへいや。これに上越す遊興は御座らぬ。アドへどうぞ鷹をつかうて見する事はならぬか。シテへ鳥だに御座らば。捕らせてお目に懸けませう。アドへあれ／＼。あの大山は死出の山といふ。あの麓には。大分諸鳥がなる事ぢや。アドへ犬は御座らぬか。アドへ犬は何になる。シテへ犬引と申す者が。犬を引きまして。草原をかゞせまするど。犬が鳥を追出しまする。アドへ犬は畜生道に何程もある。シテへさて勢子と申して。大勢草を打拂ふ役人が要りまする。アドへ勢子には鬼どもを使はう。其の外餓鬼道より罪人ども呼ばせてつかはうず。やい／＼。汝等畜生道へいて犬を連れて來い。勢子になりさうな罪人も連れて來い。鬼へ畏まつて御座る。ト云うて○罪人へ入つて連れて出る。罪人へまうし／＼。これはどれへ參りまする　鬼へこれは大王の御用ぢや。急げ／＼。罪人へこれにこはい事で御座る。鬼へ犬を連れて參つて御座る。餓鬼道より罪人どもも參つて居りまする。アドへさあ政頼、早う鷹をつかうて見せい。シテへ先づ勢子を立てませう。アドへ某が犬を引かう。

シテへ一段とよう御座りまする。ト云ひて立つ。アドは犬の綱を引いて小鬼皆々笹の枝を持ち一同草を打ふ心にてあるき。扶竹にてよりに。ホウ／＼／＼トリ／＼ト云ふて一同舞臺を一回廻り一同シテは舞臺へ一の松に立つ。大王は臺に立つ。勢子は皆々同じ所にて居る。シテへいで／＼鷹をつかはんとて。同へいで／＼鷹をつかはんとて。十王犬をかり結び。鬼は草を打ちぼつて。死出の山の南の方より雉鳥一羽。飛來たる。政頼これを見るよりも。たばなしなしつゝあはせければ。中にてかけてぞ捕つたりける。アドへそりやとつたは。ト云ふて○雉をす○鷹の口に手をあて○ボウ／＼と云ふ○鬼どもは面白がる。シカ／＼。シテへ先づゑぶらを大王へ上げさせられい。鬼へ心得た。ト云ふて○雉をひろげ。ゑぶらを大王に上る。鬼へゑぶらで御座る。アドへどりや服せう。ぬり／＼。ぱり／＼。さてもうまい事ぢや。人よりは日當たりが柔かな。汝等も少しづつ喰へ。次第／＼に小鬼喰うて喜ぶ。アドへさて／＼珍しい事をして見せて。よい慰をした。其の代りに。何なりとも望を叶へてとらせうぞ。シテへそれは有難う存じまする。アドへ定めて其方が望は。極樂へやつてくれいといふ様な事であらうが。同じくは地

獄に於て。鷹をつかうて。身共を慰めてくれい。シテヘ私の願ひには。今一度娑婆へお歸しなされて下され。アドヘ娑婆へ歸つたらば苦をなさうず。其の上一日冥途へ來たものを。二度娑婆へ返した例がない。シテヘいや娑婆に大事を申し殘して御座る。其の上娑婆には。鶴の雁のと申すよい鳥が數多御座る。ゑがらを大分上げませう程に。是非ともお暇を下されい。アドヘ然らば三年のうち。娑婆へ暇をとらする。三年過ぎたらば。早速歸れ。シテヘ畏まつて御座る。アドヘさて其の内には。病死したり。又は弓箭にかゝつて死する者もあらうず。便宜次第ゑがらをおこせ。シテヘ畏まつて御座る。アドヘいかにやいかに政頼よ。同へさらば暇をとらするなり。娑婆に歸りて三年の間。鷹をつかうて雉子鴨鶴雁諸鳥をとらせ。ゑがらを慥かに與ふべしと。仰せを委しく承りて。御前を立つて出でけるが。十王餘りに名殘を惜しみ。招き返して玉のかんざし石の帶を。政頼に與へたび給へば。忝くも頂戴致し。忝くも頂戴致して二度娑婆にぞ歸りける。

節分

シテ　鬼

アド　女

（入道具）

女ヘ妾は此家の主で御座る。是のうは出雲の大社へ年を取りに參られて御座る。妾ばかり內悅びをせうと思ひまする。シテ次第。打切ヘ節分の夜にもなりにけり。〳〵。いざ豆拾うて囃まうよ。是は蓬萊の島の鬼で御座る。いつも節分の夜は日本へ渡る。當年も相變らず日本へ渡り。豆を拾うて囃まばやと存じ候。蓬萊の島をば後に見なしつゝ。島をば後に見なしつゝ。行末とへば白雲の。〳〵。足にまかせて行く程に。〳〵。日本の地にも着きにけり。急ぐ程に日本の地に著いた。アヽ草臥れやの〳〵。ちと軒へなりとも立寄つて休みたいものぢやが。イヤあれに火の光が見ゆる。まづ內の體を見よう。あいた〳〵〳〵。扨も〳〵痛い事かな。今思ひ出した。いつも節分の夜には門々に柊を裂いて置くと云ふ事をはつたと忘れて。したゝか目をついた。扨も〳〵痛い事かな。餘りに日本の戀しさに。窓より內を覗けば。柊を裂いて目をついた。あら目ひらさや。此の樣なものはかち落して置いたがよい。まづ案內を乞はう。ト云うて。案内乞ふ出るも常の如し。

女ヘ表に案內がある。案內とはたそ。さらさら〳〵。ト云うて。扇をひろげて門をあける體なり。是は誰もないものを。さら〳〵〳〵。ト云うて。さす體。シテはアド座についてゐる。シテヘ是は如何な事。たつた今女が出て。身共が鼻の先に居るに。誰もないものをと云うて這入つたはどうした事ぢや。ハア隱れ蓑に隱れ笠を着てゐるによつてぢや。是は尤もぢや。まづ蓑笠を取らう。又案內を乞はう。ト云うて。太鼓座より。笠取り。出るなり。女ヘ又案內がある。案內とはたそ。さら〳〵〳〵。なう恐ろしや鬼が來た。あちへ行け〳〵。シテヘあゝこれ〳〵。そなたはいかう恐ろしがるが。何ぞこはい者でもあるか。女ヘ鬼がこはうなうて何がこはからう。あちへ行け。あちへ行けいやい。シテヘそれならば安堵した。身共は又何ぞ外にこはい者でもあるかと思うて。よい肝を潰した。イヤなう。身共は蓬萊の島の鬼と云うて。こはい者でも恐ろしい者でもおりないぞ。女ヘなう恐ろしや。あちへ行け。あちへ行けいやい。シテヘそれ程こはくば あちへ行きもせうが。遙々來たればいかう徒然な。何ぞ喰

ふものがあらばお吳りやれ。女〽喰ふ物をやつたらば去ぬるか。シテ〽マアお吳りやいのう。女〽そりや。シテ〽どりや。是は何ぢや。シテ〽何ぢや荒麥ぢや。女〽三寶のお袋の荒麥ぢや。シテ〽鬼の心は荒麥の。〳〵。喰ふ物とは知つたれど。調ずる術を知らざれば。てんざいのかはにせい。女〽エヽあの罰當りのしをる事わいの。シテ〽おのれ其の樣に云はゞ。猶斯うかきまはいて置いたがよい。女〽其樣な根生ぢやによつて鬼になりをるわいやい〳〵。シテ〽イヤなう。見ればそなたはようきもよいが。何と此內に獨り居るか二人居るか。女〽獨り居ようと二人居ようと。構うてのようは。シテ〽それがちと構ひたいといふ事ぢや。女〽なう恐ろしや〳〵。あちへ行け。あちへ行けいやい。シテ〽あら美しの女房や。〳〵。漢の李夫人楊貴妃。小野小町は見れば知らず。是程美しい女房は。世にもやはかあるらん。あらほそ堪へがたや。爰に綻びがあるが。縫うてお吳りやるまいか。女〽鬼の妻に何とならるゝものぢや。あちへ行け。あちへ行けいやい。シテ笑ふ。シテ〽綻びの事を云へば。妻の穿鑿を召されて一入心が曳かるゝ。爰に蓬萊の島にはやる面白い小歌がある。諷うて聞かせうか。女〽いや聞きたうない。シテ〽ハテまあお聞きやいのう。あの島先におりやればこそ。お手をかくれば。たはらねそのやさきにお手をかくるでもなし。あらおいらいらしやおきやうこつやの。何と面白いか。女〽いや面白うない。シテ〽もそつと諷はう。津の國の中島に。なかつ川原をせきかねて。土持が持ちかねて〳〵しひ持もせでもこなう〳〵其下にこそ千鳥足をふめ。えいやらさらとこ。〳〵。えいとやつとえいやらさ。餘りの徒然に。〳〵。あ門に瓢簞つるいて。折節風が吹いて來て。そなたへはちやつきりひよ。此方へはちやつきりひよ。ひよひよらひようひよ。瓢簞つるいて面白や。イヤなう。近頃云ひかれたが。此杖の先をちよつとねぶつてお吳りやるまいか。女〽其樣な事がなるものか。あちへ行け。あちへ行けいやい。シテ〽もそつと諷はう。忍ぶその夜の太刀は鐺白し。大長刀はぎやう〳〵し。鑓は柄長ぢやの。弓靭は犬が吠え候。竹杖はおいまいましや。棒さい棒がな突いて行かう。もんかりは目むこへて。なんぼうさきの宵よ。さきのよ忍ぶ小切戸が。きりりと鳴る程に。たそよと思うて走り出でて見たれば。北風の山颪めが吹き來て妻戸におたいたな。やしやわごりよと思うたりや。うしやへんなやなう風ぢやもの。しめ〳〵と降る雨も。西が晴るればやむものを。何とてかわが戀のはれやる事の泣かるゝ。ト云うて泣く。扨も〳〵胴慾な人ぢや。最前からとつおいつ口說けども承引めされぬ。扨も〳〵心強い人ぢや。ト云うて泣く。女〽是はいかな事。まこと姿に思ひ入つたが誠さうな。蓬萊の島には數の寶があると申す。此方へ取らうと思ひまする。いかにやいかに鬼殿よ。まこと姿を思ひなば。寶を我にたび給へ。シテ笑ふ。シテ〽そなたも慾の道はよう知つてのう。易き間の御所望なり。〳〵。さらば寶を參らせん。蓬萊の島なる〳〵。おれが持つ寶は。隱れ蓑に隱れ笠打出の小槌。諸行無量常々くわつしこくに。くわつとそへて取らするぞ。女〽是さへ取れば心安い。シテ〽是でざつと埒があいた。是から此處の亭主ぢや。是へ寄つて腰を打つてお吳りやれ。アヽ草臥れやの〳〵。女〽やう〳〵節分の豆を囃す時分で御座る。せちぶの豆を取出だし。福はうち〳〵。鬼はそと〳〵。シテ〽ハア〳〵。ト云うて。逃げて入る。女追込み入るなり。

蟬（せみ）

シテ　蟬の亡魂
ワキ　旅僧
アヒ　處の者
（入道具）

ワキ次第へいづくともなき往來の。〳〵。身の果何となりぬらん。是は行脚の僧にて候。我未だ信濃國善光寺へ參らず候程に。只今思立つて善光寺へと急ぎ候。道行信濃なるそばの懸橋名にし負ふ。そばの懸橋名にし負ふ。亂れし糸は更科の。月影殘る淺間嶽。宿も定めぬ遠近の。おけ松の里に著きにけり。急ぎ候程に。おけ松の里に著きて候。是なる松の一木を見れば。あまり見事に老い繁り候程に。立寄り休らはばやと思ひ候。あら不思議や。由ありげなる短冊のついて候。蟬の羽に。かき置く露のこがくれて。忍び〳〵に濡るゝ袖かな。扨も此歌は空蟬長き別の跡となし言の葉ぐさと見えて候。謂れのなき事は候まじ。所の人に尋ねばやと思ひ候。所の人の渡り候か。アヒへ誰にて渡り候ぞ。ワキへ是なる松に樣ありげなる短冊のついて候。謂れのなき事は候まじ。御物語り候へ。アヒへさん候この松原はいつも夏になり候へば。蟬の深しく聞えて。昔人この松原にて。歌を詠み詩を作り遊び給ふが。去年の夏此枝に大きなる蟬とまり申して候を。烏ども集り。程なくかの蟬を取つて候。人不憫に思召し。それよりこの小短冊をかけられて候。今も心ある人は立寄り御詠めなさるゝ。お僧も逆緣ながら弔うて御通り候へ。ワキへ懇に御物語祝着申して候。さあらば立寄り弔うて通らうずるにて候。アヒへ重ねて御用もあらば仰せられい。ワキへ賴みませう。アヒへ心得ました。ワキへ痛はしや其身ははかなき夏の蟬の。春秋知らぬ露の命。短き內の夢の世を。見はてぬるこそびんなけれ。南無きやらたんのうとらや〳〵。シテへ空蟬の。身をかへてける木の下に。猶人がらのなつかしきかな。ワキへ不思議やなまどろむとなき枕かげに。人間とは見えぬ有樣は。如何なる者ぞ何者ぞ。シテへ是は蟬の亡魂なるが。御弔ひの有難さに。是まで現れ出でたるなり。ワキへ扨は蟬の亡魂假に現れたるとや。苦果の緣を轉じ。人畜無差別の御法を說いて得さすべし。懺悔に消ゆる罪業を。詳しく語り聞かせよかし。シテへいで〳〵さらば遁れ得ぬ。苦患の程を語らんと。夕村烏羽をのして。同へ夕村烏羽をのして。鳶より先に飛來り。身は碎けよと鷲摑み。不淨の嘴打立てゝ。微塵になせども友蟬も。木の葉に隱れ朽木に遁れて。助くるものこそなかりけれ。〳〵。シテへさて數々の冥途の有樣。同へさて數々の冥途の有樣。娑婆にて手馴れし梢に登れば。忽ち劍の枝と變じて。此身を裂き虛空を飛べば。黑金の山蜘蛛の。縱橫無隅に張りまはす。網にかゝれば千筋の繩。くるり〳〵くる〳〵くる。暮るればみゝづく梟の。餌食となるこそあさましき。夜晝わかたぬ此の業報の。身なれども今御僧の弟子となれば。成佛得脫疑ひあらじと。髮剃り落し五戒を授かり。扨こそ蟬の羽衣きて。つく〳〵法師となりにけり。

煎物（せんじもの）

シテ　煎じ物賣
アド　當人
小アド　太郎冠者
立衆
（入道具）

アドへ此邊りの者で御座る。此所の神事も

近々になつて御座る。當年は某が當人で御座る。今日は山の稽古を致す筈ぢや。何れもへ人を遣さうと存ずる。ト云うて。太郎冠者を呼出し云付るも常の如し。アド〽今日は山の稽古をする筈ぢや。汝は何れもへ行て、やう〳〵時分もよう御座る。お出でなされいと云うて行て來い。小アド〽畏まつて御座る。なう〳〵嬉しや〳〵。祭が近々になつた。扨どなたから參らうぞ。まづ誰殿が近い。あれへ參らう。橋掛りへゆき。案内乞ふ。立頭出るも常の如し。小アド〽やう〳〵時分もよう御座る。お出でなされて。山の稽古をなされて下さるゝ様にと申越しました。立頭〽いづれもお出でなされうとあつて。其にお揃ひなされて御座る。追付け同道してゆかう。汝は先へ歸れ。小アド〽畏まつて御座る。おの〳〵お揃ひなされて。追付けおいでで御座る。アド〽心得た。立頭〽いづれも御座るか。當人から人が見えました。追付け參りませう。立衆〽一段とよう御座らう。立衆〽お當めでたう御座る。皆々も云ふ。アド〽何れもようこそお出でなされたれ。神事も近々になりまして御座る。頭〽誠に近々になりました。アド〽今日は兎角稽古を仕上げませう。先づ斷うお通りなされ。立衆〽心得ました。アド〽時雨の雨に濡れじとて。同〽時雨の雨に濡れじとて。鷺の橋を渡いた。鵲の橋を渡いたりやさうふ。ハヤシアシラヒ。ハヤシ方の内シテ出る。橋掛りに一名宣る。ハヤシ打やすむ。シテ〽此邊りに住居致す煎じ物賣で御座る。やう〳〵神事も近々になつて御座る。若い衆が囃子物の稽古をなさるゝ。毎例の通り煎じ物を賣りに出うと存ずる。又ハヤシ物始める。シテ〽是は〳〵。はや稽古が始まつた。扨も〳〵賑々しい事かな。今年は面白い囃子物ぢや。お當めでたう御座る。何れもめでたう存じます。是は御歴々お揃ひなされた。扨も御苦勞に存じまする。さらば煎じ物を進上致さう。ト云うて。煎じ物を汲む心持して。持ちて出る。皆々いやと云ふ。シテ〽とかく云ふ内にぬるうなつた。ト云うて茶碗をすゝぎ。汲み直し持つて出る。初めの通り。いやと云ふ。シテ飲んで。むまいと云ふ。アド〽暫く待たせられい。太郎冠者。煎じ物賣に囃子物の邪魔になる。賣るなと云へ。小アド〽畏まつて御座る。やあ〳〵。囃子物の邪魔になると仰せらるゝ。お賣りやるな。シテ〽毎年賣るものを賣るなとはどうした事ぢや。嘉例ぢやによつて。賣らねばならぬ。小アド〽でも賣るなと仰せらるゝ。シテ〽おぬしが知つた事ではない。差出ずとも引込うでゐよ。アド〽なう〳〵。曾てお賣りやるなではない。囃子物の邪魔にならぬやうにお賣りやれといふ事ぢや。シテ〽さう仰せらるれば尤もで御座る。太郎冠者のやうに聲賣におしやるによつての事で御座る。私も年久しう嘉例で賣りに參る事で御座る。どうぞ囃子物の邪魔にならぬやうに。拍子にかゝつて賣りたう御座るが。何と御座らう。アド〽それが一段とよからう。賣らしませ。シテ〽畏まつて御座る。アド〽さあ〳〵。又囃させられい。ト云うてハヤス。是より煎じ物賣る。煎じ物召せ煎じ物とて。陳皮乾薑甘草を加へて。立てきり候。聲の出で候。煎じ物召せ。うらう。色々あり。アド拵へ。拍子色々あり。笛座へアドくる。装束着附烏帽子取拵へ。羯鼓かけ。羯鼓つける。出る。羯鼓吹出す。シテ案が渡るとて。喜びうつる。羯鼓打つを見て。炮烙つけ。鍋とりにて打つ。鍋八撥の仕様同じ事。後にアド水車にて入る。シテ眞似て入るなり。炮烙割り口傳。

【そ】

宗八(そうはち)

シテ　料理人
アド　何某
小アド　僧
（入道具）

アド〽この邊りの者で御座る。某存ずる仔細あるに依つて。出家と料理人を抱へうと存

ずる。先づ此山を高札に打たう。ト言うて。頭にシテ柱へ高札打つなり。小アドへこの邊りに住居致す持佛堂坊主で御座る。某近い頃まで料理人で御座つたが。料理と言ふものは。數多の魚鳥を殺し。思はぬ殺生をし。其の上鹽按排の何のかのと言うて。殊の外辛勞なもので御座るに依つて。不圖出家に成つたれば。俄坊主の事なれば鐘陀羅尼は存ぜず。誰れ一飯の分け手が無い。何と致さうと存ずる所に。山一つあなたに有徳人が有つて。持佛堂坊主を抱へうと高札を打たれた。定めて佛前の掃き掃除。佛に香花を取るばかりですむ事かと思ふに依つて。參つて扶持を得ようと存ずる。シカ／＼。誠に。出家に成つたらば。身命を樂々と暮さうと存じたに。これは思ひの外の事で御座る。何卒首尾よう扶持を得ればよう御座る。いや何かと言ふうちに早やこれぢや。ト言うて。案内乞ふ。小アドへ高札の表に就いて參つた持佛堂坊主で御座る。アドへなる程抱へうが。何ぞ望が有るか。小アドへいやも出家の事で御座れば。別に望は御座らぬ。冬紙子常に衣一重下されさへすればよい事で御座る。アドへそれは心安い事ぢや。抱へう程にかう通らしめ。小アドへそれは有難う存じまする。アドへつうと通らしめ。小アドへ畏まつて御座る。アドへそれにゆるりとお居やれ。小アドへ畏まつて御座る。シテへこの邊りに住居致す宗八と申す料理人で御座る。某近頃迄出家で御座つたが。出家と申す者は。先づ第一朝起きをせねばならぬ。佛前の掃き掃除。佛に香花を取り。其の上檀那應答の何のかのと言うて。殊の外辛勞なものぢやに依つて。不圖還俗致したらば。佛の罰やら後へも先へも參らぬ。何と致さうと存ずる所に。山一つあなたに有難い人が有つて。料理人を抱へうと高札を打たれた。某も寺に居た時分は。見事牛蒡大根の切り刻みは致したに依つて。それですむ事かと思ふ。參つて扶持を得ようと存ずる。シカ／＼。誠に。俗に成つたらば。身命を樂々と暮さうと存じたに。商ひをせうにも元手は無し。覺えた職は無し。此の様な氣の毒な事は御座らぬ。何卒首尾よう扶持を得たいもので御座る。いや何かと言ふうちにこれぢや。ト言うて。案内乞ふ。常の如し。シテへ高札の表に就いて參つた料理人で御座る。アドへなる程抱へう。名は何と言ふ。シテへ何となりとも呼ばせられい。答へませう。アドへ今迄の名は何と言うた。シテへ唯今までは宗八と申しました。アドへ宗八はよい名ぢや。抱へう程にかう通らしめ。シテへそれは忝う御座る。アドへつうと通らしめ。シテへはあ。アドへそれにゆるりとお居やれ。シテへ心得ました。アドへ出家と料理人を抱へて御座る。某は用事あつて山一つあなたへ參る。それ／＼に留守の儀を申付けうと存ずる。イヤなう／＼御坊。小アドへはあ。アドへ某は用事あつて山一つあなたへ參る。これは心經ぢや。勝手へ聞える様に高々と讀うでおくりやれ。小アドへあのこれを私に讀ふで御座るか。アドへなか／＼。小アドへ畏まつて御座る。アドへ聽て戻らう。小アドへ聽てお歸りなされませ。アドへ心得た。なう／＼宗八。シテへはあ。アドへ某は用事あつて山一つあなたへ參る。上の鮒は鱠。下の鯛は脊切りにしておくりやれ。歸つて食ぶるぞ。シテへこれを私に切れで御座るか。アドへなか／＼。シテへ畏まつて御座る。アドへ聽て戻らう。シテへ聽てお歸りなされませ。アドへ心得た。シテへ出られた。小アドへお出やつた。小アドへこれはいかな事。佛前の掃き掃除ですむ事かと思うて來て見たれば。初手から此の様な御經をあてがはれた。四角い字許りで一字も讀めぬ。扨も／＼迷惑な事ぢや。シテへこれはいかな事。牛蒡大根

い切刻みですむ事かと思うて來て見たれば。初手から此の様な生臭い魚をあてがはれて。アヽ生臭い匂ひがする。これは先づ何とした ものであらう。おぶを事さうか。此のぎろ／＼とした目をえぐり出さうか。何にもせよ先づおぶを離さう。小アド〽あゝ先づ待て／＼。シア〽何と待てとは。小アド〽和御寮は料理人か。シテ〽なる程料理人ぢや。小アド〽いや／＼料理人ではあるまい。シテ〽イヤこゝなやつが。料理人を見て料理人でないとは。小アド〽いか程おしやつても。和御寮は料理人ではあるまい。先づ和御寮は新座者であらう。シテ〽なる程新座者ぢや。小アド〽身共も新座者ぢやが。身共は近い頃迄そなたの様な料理人であつた。シテ〽あのそなたがや。小アド〽なか／＼。シテ〽してなんと。小アド〽料理人と言ふ者は。數多の魚鳥を殺し。思はぬ殺生をし。其の上鹽按排の何のかのと言うて。餘り辛勞なものぢやに依つて。不圖出家に成つたれば。俄坊主の事なれば。經陀羅尼は存ぜず。誰れ一飯の分け手が無い。何と致さうと存ずる所に。幸ひこれに持佛堂坊主を抱へうと高札を打たれた。定めて佛前の掃き掃除。佛に香花を取るばかりですむ事かと思うて。來て見たれば。初手から此の様な佛經をあてがはれて。四角い字ばかりで一字も讀めぬ。今また和御寮が料理を仕兼ねる體を見て。身共が身につまされて。不圖詞を掛けた事でおりやる。シテ〽扨はさうでおりやるか。恥を言はねば理が聞こえぬ。身共は近い頃迄そなたの様な出家であつた。小アド〽あのそなたがや。シテ〽なか／＼。小アド〽して何と。シテ〽出家と言ふ者は。先づ第一朝起きをせねばならぬ。佛前の掃き掃除。佛に香花を取り。其の上檀那應答（あしらひ）の何のかのと言うて。殊の外辛勞なものぢやに依つて。不圖還俗したれば。佛の罰で後へも先へも參らぬ。何と致さうと存ずる所に。幸ひこれに料理人を抱へうと高札を打たれた。定めて牛蒡大根の切り刻みですむ事かと思うて。來て見たれば。初手から此様な魚をあてがはれた。さりながら。そなたが近頃まで身共が様な料理人であつたらば。此の様な魚をよう切るであらうのう。小アド〽おゝ。料理一通りは何でもする。シテ〽あゝ羨ましい事ぢや。小アド〽いやまた和御寮が近い頃迄身共が様な出家であつたらば。此の様な御經はよう讀むであらうのう。シテ〽おゝ。本經には及ばぬ。何でも讀む。小アド〽あゝ羨ましい事ぢや。身共が思ふには。此の上は互にしても料理はそなたに教へうず。御經は和御寮に習はうと思ふが。何とで有らう。シテ〽これは一段とよからう。小アド〽それならば。是へ寄つて御經を讀うでおくりやれ。シテ〽心得た。さて和御寮は此の御經の名を知つておいやるか。小アド〽それは何經とやらおしやつた。シテ〽これは心經ぢや。小アド〽おゝ心經／＼。勝手へ聞こゆる様に高々と讀めとおしやつた。シテ〽さうであらう。祈禱經ぢや。小アド〽さあ／＼早う讀うでおくりやれ。シテ〽心得た。（ト言うて一言も讀まなし）小アド〽あゝ讀むは／＼。あの様な四角い字をよう讀み覺えた事ぢや。身共もいつあの様に成る事ぢや知らぬ。シテ〽これ／＼。其の魚を料理しておくりやれ。小アド〽心得た。身拵へをする程に。これへ寄つて手傳うておくりやれ。シテ〽心得た。これはりゝしい體ぢやなあ。小アド〽料理と言ふものは。此の様にせねば出來ぬものでおりやる。シテ〽何れ衣の袖に着いたらば生臭からう。小アド〽さて和御寮は此の魚の名を知つておいやるか。シテ〽何とやらおしやつた。小アド〽上のが鮒で。下のが鯛ぢや。シテ〽オヽさうであつた。

小アド〽して。此の鮒は何にせいとおしやつた。シテ〽何酢とやらおしやつた。小アド〽鱠か。シテ〽おゝ生酢〳〵。小アド〽さうであらう。料理は大體知れたものぢや。さてこれをかうしてかうする事でおりやる。シテ〽ハア初手は皮をむくの。小アド〽何ぢや皮をむく。シテ〽なか〳〵。小アド〽笑ふ。是は鱗をふくと言ふは。シテ〽ムゝそれがいろこをふくと言ふか。小アド〽よう覺えさしめ。シテ〽心得た。小アド〽さてこれをかうしてぐわらり。シテ〽オゝかぶを離いた。小アド〽何ぢや。かぶを離いた。シテ〽なか〳〵。小アド〽笑ふ。これを魚頭をつぐと言ふは。シテ〽ハアそれが魚頭をつぐと言ふか。小アド〽よう覺えさしめ。シテ〽心得た。小アド〽さてこれをかうして。又これをかうしてかうする事でおりやる。シテ〽三つにへいだか。小アド〽何ぢや三つにへいだ。シテ〽なか〳〵。小アド〽笑ふ。これが三枚に卸すと言ふは。シテ〽それが三枚に卸すと言ふか。小アド〽よう覺えさしめ。シテ〽心得た。小アド〽さて鱠には作り樣が有つて。大きいを小さかれ。小さいを大きかれと。ひつすいかいて。刀早（かたな）やにすつぱり〳〵。すつぱ〳〵すつぱり。シテ〽ほう。松葉に刻うだ。小アド〽何ぢや松葉に刻うだ。シテ〽なか〳〵。小アド〽これを鱠に作ると言ふは。シテ〽それが鱠に作ると言ふか。小アド〽よう覺えさしめ。シテ〽心得た。小アド〽さあ〳〵その經を讀うでおくりやれ。シテ〽心得た。ト言うて讀む。小アド〽讀むは〳〵。眞（まつ）ただ立板に水を流す樣に讀む。シテ〽あゝこれ〳〵。その赤い魚も切つておくりやれ。小アド〽心得た。さて此の鯛は何にせいとおしやつた。シテ〽何切りとやらおしやつた。小アド〽脊切りか。シテ〽おゝ脊切り〳〵。小アド〽料理は大體極まつたものぢや。又これをかうしてかうする事でおりやる。シテ〽とかく初手には皮をむくの。小アド〽いや変な者が。物覺えの惡い。これが鱗をふくと言ふは。シテ〽忘れた。小アド〽よう覺えさしめ。シテ〽心得た。小アド〽さてこれをかうしてぐわらり。シテ〽魚頭をついだの。小アド〽何ぢや魚頭をついだ。シテ〽なか〳〵。小アド〽これは奇特に氣が附いた。シテ〽魚頭とは魚の頭と書くは。小アド〽それは御經の字で覺えたか。シテ〽先づ其樣なものぢや。小アド〽扨々羨ましい事ぢや。身共もいつその樣に成る事ぢややら知らぬ。さてこれをかうして。ぐわらり〳〵ぐわらり。シテ〽ホウ筏に切つたの。小アド〽何ぢや。筏に切つた。シテ〽なか〳〵。小アド〽笑ふ。是が脊切りと言ふは。シテ〽それが脊切りと言ふか。小アド〽よう覺えさしめ。シテ〽心得た。小アド〽さてこれから料理も大體同じ事ぢや。さあ〳〵お經を讀うでおくりやれ。シテ〽心得た。ト言うて讀む。小アド〽魚頭を三枚六枚崩し割りにぐわらり〳〵。アド〽やう〳〵唯今戻つて御座る。定めて兩人の者が待ち兼ねて居るで御座らう。これはいかな事。料理人が經を讀み。出家が料理をする。やい〳〵。戻つたぞ〳〵。二人〽そりやお歸りなされた。ト言うて。兩人とも肝を潰し。小アド鯛を持ちて御經を讀む。シテはお經を持つて。料理をするなり。アド〽扨も〳〵。腹の立つ事かな。やい〳〵。やいそこなやつ。小アド〽はあ。お歸りなされましたか。アド〽お歸りなされた。小アド〽はあ。アド〽己れ。それは鯛ではないか。小アド〽アゝ違ひました。アド〽何の違ひました。小アド〽御許されませ〳〵。ト言うて。半ば追込む。アド〽やい〳〵。やいそこなやつ。シテ〽はあ。お歸りなされましたか。アド〽何ぢや。お歸りなされました。シテ〽はあ。アド〽己れ。それはお經ではないか。シテ〽アゝ違ひました〳〵。ト言うて。追込め入るなり。

空腕

シテ　太郎冠者
アド　主人

（一人道具）

アドへこの邊りの者で御座る。某一人召使ふ太郎冠者は。臆病者の癖として。空腕立を申す。今日は遠方へ遣し。樣子を見うと存ずる。（ト云うて呼出す。出る常の如し。）汝は大儀ながら。今から淀へいて。鯉なりとも鱸なりとも求めて來い。シテへ畏まつて御座れども。最早今日は日が暮れまする。明日の事になされませ。アドへ日が暮るれば。淀へは人を通さぬか。シテへイヤ通さぬでは御座らぬ。あの道はつッと不要心に御座つて。殊に打剥追剝などが出まして。なか〳〵獨りなど通らるゝ道では御座らぬ。アドへすれば。日頃お馬の先で討死を致さうなどと云ふは。皆空腕立ちやな。シテへそれとは格別事の違うた事で御座る。アドへまだぬかし居る。今から淀へ行かぬやつが何の役に立つものぢや。行かうか行くまいか眞直に云へ。シテへ先づお待ちなされませ。アドへ何と待てとは。シテへ成程參りませう。（常の如くつめる。）シテへ畏まつては御座れども。如何に致しても丸腰では心許なう御座る。何なりとも切れ物をお貸しなされて下されい。アドへ是は尤もぢや。貸さう程にそれに待て。シテへ畏まつて御座る。アドへヤイ〳〵。是は身共が重代ぢや。そこなはぬ樣にして持つて行け。シテへ其段はお氣遣ひなされまするな。アドへ片時も急いで夜通しに戻れ。（常の如くつめる。）シテへ是はいかな事。迷惑な事を云付けられたさりながら。行かずばなるまい。先づ急いで參らう。誠にこちの頼うだ人は。終に此樣な事を云付けられた事は無いが。今日は何な思出して。人に迷惑をさせらるゝ事ぢややしらぬ迄。爰は何處ぢや。東寺か。是は世間がいかう暗うなつた。最早日が暮るゝか。ホヽ南無三寶。日がづんぶりと暮れた。サア〳〵是からがこは物ぢや。兎角安穩に淀へ行きつかうとは思はぬ。其上身共は悪い癖で。こはい〳〵と思へば。胴は震ふ。手足に力は無し。ちりけ元からぞう〳〵とつかみたつる樣な。なう恐ろしや。御免されませ〳〵。私は何も取目のある者では御座らぬ。淀へ用あつて參る者で御座る。どうぞ命をお助けなされて下されい。通りませうか。申し〳〵。何故に物を仰せられぬ。それでは何とも迷惑に存じまする。通りませうか。申し〳〵。そなたは誰ぢや。是はいかな事。人か〳〵と思うたれば。茨畔ぢや。世間に臆病な者も多からうが。身共の樣な者は又とあるまい。茨畔が人に見えたぢや迄。惣じてこの恐い〳〵と思ふは。何からするぞと思へば。皆心からぢや。その心と云へば。この眼で物の色品を見て。命を惜しむに依つてぢや。さうぢや。是は目をふさいで行かう。先づ目を屹度ふさいで。これ〳〵かうして行けば。何も見えぬに依つて。こはい事も恐ろしい事もなんともない。何ぢや。松の木か。又目をふさいで行けば。物に行きあたつて。一足もありけぬ。アヽ愚かや〳〵。命を捨つるからは。眼を屹度見開いて行く筈ぢや。さうぢや。身共は命が捨てた。これ〳〵この思案が最前から出れば。今迄道にはかゝらぬものを。命を捨つるからは。假令天魔鬼神が出たりとも。こはい事も恐ろしい事も何ともない。ヨウ。又あれに何やら眞黒になつて見ゆる。あれは人ではないかい。サア〳〵又思案が違うた事になるまいか。大勢と見えて眞黒になつて見ゆるさりながら。最前も茨畔が人に見えたに依つて。今度はと

くと見定めて行かう。あれは人かの。人かと思へば人の樣にもある。又さうない樣にもあり。人か人でないか。ワア〳〵動くぞよ。ありや此方へ來るは。アヽ御免されませ。私は何も取目のある者では御座らぬ。淀へ用事あつて參る者で御座る。どうぞ命をお助けなされて下され。是に金作の太刀が御座る。是を進じませう程に。どうぞ命をお助けなされて下され。申し〳〵。 アドへ太郎冠者を淀へ使に遣して御座る。路次の程が心許ない。後を慕うて參らうと存ずる。さればこそ是に居る。相手もないに。金作りの太刀を進ぜうなどとぬかし居る。致し樣がある。がつきめ。先づ歸つて樣子を見うと存ずる。 ト云うて笛座へ入る。シテあほのきにこける。おき上り。 シテへ切つたり〳〵。大袈裟に切つた。惣じて切物で切つたは痛まぬものぢやと云ふが。こりや痺りのきれた樣にもない。扨は身共は死んだぢや迄。扨も〳〵非業の死をした事かな。惣じて冥土には六道と云うて。六つの道がある。是では必ず迷ふと聞いた。身共は迷はぬ樣に見定めて參らう。あの向ふに見ゆる在所は。どこやらによう似た在所ぢやが。ヤヽそれ〳〵。娑婆で鳥羽といふ在所によう似た。知らぬ事の。冥土にも鳥羽といふ在所があるぢや迄。あれは其儘の鳥羽ぢや。又誠の鳥羽なれば。秋の山がありさうな物ぢやが。ヨウ。秋の山があるぞよ。扨は身共は切られはせぬか。切られもせぬやら血もたらぬ。それならば。最前のお太刀がありさうなものぢや。お太刀ないたづら者が取つて。身共が命は助けたものであらう。太刀も刀も命には換へられぬ。先づ急いで歸つて。頼うだお方へは。口調法な以てまつかいさまに申しなさう。申し頼うだお方御座りますか。 常の如し。 アドへやれ〳〵骨折や。して魚を求めて來たか。 シテへイヤよう魚の段で御座らうぞ。恐ろしい目に逢ひました。 アドへそれは何事であつた。 シテへさりながら。いかい手柄を致しました。 アドへそれは心許ない。先づどの樣な事であつた。 シテへ先づ仰付けらるゝと其儘。淀へ參つて御座れば。早や東寺で日がづんぶりと暮れました。 アドへさうであらうとも。 シテへ是からが大事ぢやと存じて。左右へ目を配つて五六町參ると。物めが四五人出ましてな。 アドへ是はいかな事。 シテへ頓て言葉をかけて御座る。 アドへ何とかけた。 シテへやい〳〵。それに居るは何者ぢや。身共は用事あつて淀へ通る者ぢや。其處をのけ。のかぬか。と申して御座れば。流石は物して御座る。畔道をつたうてこそ〳〵と逃げて御座るを。さうもおりやるまいと申して。先づ爰は通りましたが。さて上鳥羽と下鳥羽の間で。大勢に出會ひました。 アドへ何程に出會うた。 シテへ凡そ七八十。イヤ〳〵百人も御座らうか。眞黑になつて來ると思召せ。 アドへ是はいかな事。 シテへ是もあの方から言葉を掛けられては。返答がむつかしい。かさにかゝつてけんを取らうと存じまして。先づ前をくわつと取り。お太刀のはゞき元二三寸拔きくつろげ。又言葉をかけて御座る。 アドへ何とかけた。 シテへやい〳〵。それに居るは打剝追剝と見たはひが目か。 アドへウ。 シテへの。 アドへ出來た。 シテへかう申す某は。頼うだお方の御内に一騎當千と呼ばるゝ太郎冠者。御用があつて淀へ通る。そこをのいて通せばよし。のかぬに於いては目に物を見する。と大音聲に申して御座れば。すは推參を云ふは。慮外を働くは。と云ふ内より。六尺餘りの大男が。五尺ばかりの太刀を拔いて。會釋もなう討つて參ると思召せ。 アドへ是はいかな事。 シテへそこで私も。かのお太刀をするりと拔き。きつと斜に構へ。討つて參るをひつぱつし。

首をちやうど打落し。御座る　アド〽是は何とする。シテ〽仕方咄で御座る　アド〽如何に仕方咄なればとて。主の首を打つ眞似をすると云ふ事があるものか。シテ〽その樣に仰せられては咄はなりませぬ。先づお聞きなされませ。アド〽して何と。シテ〽すは切つた。狼籍をしたと云ふ内より。大勢の者共が。太刀刀を茅花の穗の如く拔きつれて。右往左往より打つて參ると思召せ。アド〽是はいかな事。シテ〽そこで私も。迚ものがれぬ百年目。假令此處で打死致すとも。賴うだお方のお名は下すまいと。ぢつと極めて御座れば。申し。私の胸は黑金よりも強うなつたと思召せ。アド〽さうであらう。シテ〽時大勢の中へ割つて入つて。向ふ者をば拜打。大袈裟小袈裟車切。筒切胴切唐竹割などと申す物に。凡そ手の下に十四五人も切伏せませう。アド〽夥しう切つたなあ。シテ〽殘る者はなるまいと存じてやら。蜘蛛の子を散らす如く。ばら〳〵と逃げて御座るを。やるまいと申して。餘程追うては御座れども。いや〳〵かくるも引くも時による。長追ひは無用と存じて立歸り。お太刀の仰りましたを。大木に押當て。しつとり〳〵と撓直し。あたりなる松ヶ根に腰を掛け。大息ついで居る所へ。難儀なものをおこしました。アド〽何をおこした。シテ〽飛びかね。アド〽飛金とは何の事ぢや。シテ〽是程な竹の先に。尖つた金のついた物を。ヒウ〳〵と幾らもおこしました。アド〽おのれ。それは矢の事ではないか。シテ〽オヽそれ〳〵。矢の事で御座る。アド〽おのれ。その年になるまで弓矢を知らぬか。シテ〽忘れました。アド〽イヤ弓矢を知らぬと見えた。シテ〽先づお聞きなされませ。アド〽して何と。シテ〽是も上へ參るをばはづし。下に參るを躍り越え。眞唯中さいて參る矢を。切折り〳〵致して御座れば。一本も中らばこそ。アド〽さうあらうとも。シテ〽もはや敵の矢種もつきたと見えまして。今度は長道具でしかけました。アド〽何でしかけた。シテ〽凡そ柄の十四五間もあらう大身の鑓を。私の鼻の先へによつき〳〵とおこしました。アド〽扨々長い鑓であつたなあ。シテ〽是も右へ參るをちよ。左へ參るをちよ。チヨ〳〵〳〵と切拂ひ〳〵致して御座れば。申し。大事の事の。アド〽何と。シテ〽お太刀に燒切が御座つたか。但し大勢と戰ひました故か。お太刀のはゞき元二三寸おきまして。ほつきと折れました。アド〽是はいかな事。シテ〽そこで私もほうど力は落ちまする。致さう樣は御座らず。間近う進む小男の目と鼻との間へ。かの折れたお太刀をほうど投げつけまして。後も見ずして歸りましたが。何といかい手柄を致したでは御座らぬか。アド〽扨々いかい手柄をした。そちが樣な者は世間にも一人とはあるまい。シテ〽世間は廣い事で御座るに依つて。お尋ねなされたらば無いと申す事は御座るまい。アド〽イヤ〳〵。何程尋ねたりとも一人とはあるまい。シテ〽それ程に思召せば。私も大慶に存じまする。アド〽さて太刀の折れたは誠か。シテ〽惜しい事は。眞二ツに折れました。アド〽イヤ氣遣ひするな。物には幸のあるものぢや。汝をやつた後で。さる方から太刀を賣りに來て求めておいた。見せう程にそれに待て。シテ〽畏まつて御座る。先づ是程までには申しなしたが。（アド笛座より太刀を持ち出る。）アド〽こりや〳〵是を見よ。シテ〽是は結構さうなお太刀で御座る。アド〽手に取つてとくと見よ。シテ〽畏まつて御座る。（わきへのきて。）シテ〽ワア。この太刀が何として爰へ戻つた事ぢや。合點の行かぬ事ぢや。アド〽定めて肝を潰すで御座らう。太郎冠者〳〵。ヤイ太郎冠者。

シテ〽ハア。アド〽何とその太刀は見知つて居るか。シテ〽イヤ見知りは致しませぬが。結構さうなお太刀で御座る。アド〽見知らうがな。シテ〽イヤ。アド〽おこしをれ。扨々憎い奴の。云はせて置けば方量もない事を云ふ。常に臆病者を知つて居るに依つて。後を慕うて見たれば。上鳥羽と下鳥羽の間で。相手もないに。命を助けて下され。黄金作りの太刀を進ぜう。などとぬかしてゐをつたに依つて。人に取られてはなるまいと思うて。おのれが背中を打擲したれば。太刀は身共が取つて。シテ〽ア、目がまふ〳〵。アド〽それ〳〵。それ程の事にさへ目鼻をまはすなりで。なに空腕立。シテ〽さうも仰せられな。落武者は薄の穂にさへおぢると申す譬が御座る。アド〽まつそのつれであつたに依つて。太刀は身共が取つて来た。折れたが眞か折れぬが眞か。眞直に云へ。シテ〽先づお待ちなされませ。アド〽何と待てとは。シテ〽成程お太刀は折れましたが。それに就いて目出たい事を思出しました。アド〽それは何事ぢや。シテ〽追付け御立身のなされ。御普請のなされう御瑞相に。お太刀も瘉えまして。私より先へ戻つたもので御座らう。アド〽まだそのつれをぬかしをる。一打にせう。シテ〽御免されませ〳〵。（ト云うて。太）アド〽あの横着者。やるまいぞ〳〵。（刀を抜き。追込み入る。又叱り留めにもするなり。）

【た】

太鼓負（たいこおひ）

シテ　所の者
アド　妻
立衆　所の者
（入道具）

シテ〽當所に住居する者で御座る。今日（こんにつた）は此の處の神事で御座る。祭の渡る時分は。いつもの役にさゝれて警固に出る。先づ女どもを呼出し。申附くる事がある。なう〳〵是の人。居さしまするかおりやるか。女〽今めかしや〳〵。わらはを呼ばせらるゝは何事で御座る。（女初より笛座に居るもよし。）シテ〽一年に一度の祭ぢやに。皆息災で祭に出るは。目出度い事ではないか。女〽何れ相變らず祭をすると申すは。目出度い事で御座る。さて今年の役は何で御座る。シテ〽いつもの通り警固の役に出る程に。そなたは内祝をさしませ。女〽是はいかな事。今々の衆さへ色々のよい役をさせらるゝ。そなたは代々此の處に住居して。今時には庄屋年寄にもなつて。ある所で口をきかつしやる筈なれども。律義なばかりで。分別のないそなたぢやに依つて。毎年〳〵棒を突いて。人らしい顔で警固に出さしやる。耻かしいとも思はつしやれぬか。シテ〽其の様にそなたが云へば。どうやらおれがうつけの様に聞こえる。身どももぬかりはせぬ。毎年々々同じ警固の役をする程に。何ぞよい役をさして下されと云うたれば。庄屋殿のお申しやるには。役をするも大儀な事ぢや程に。やはり相變らず警固の方をせいとおいやるに。詞を返しても云はれぬ。女〽まだそのつれを云はつしやる。警固に出て。見物の世話をする程骨折があらうか。其方が何の役に立たぬと思うて。其様におしやるであらう。一向斷りを云うて。警固の役にも出さしますな。シテ〽折角云附けられた事を。其様な我儘な事が云はるゝものか。女〽いや〳〵。人にすぐれて悪い役をさつしやるを。うか〳〵と見て居る事はならぬ。も一度庄屋殿へいて。斷りを云うて御座れ。シテ〽人中へ出て物數をいふもむつかしい。了簡して置かしめ。女〽エイ

もどかしい。女でさへ、とやかう思ふに、そなたは其の様な事を云うて居さつしやる。とかく斷りを云うて。よい役と替へさせらるればよし。さもなくば。内へは寄せぬ程に。戻らしやれな。　シテへ何ぢや。役を替へて貰はずば。内へは寄せまいといふか。　女へおゝ扨。よい役をさせられねば、内へは寄せませぬ。　シテへさて／＼短氣な事を云出した。　わゝしい女は夫を喰ふと云ふが、そなたの事ぢや。同じくは堪忍して。内へ寄せいでなあ。　女へなう／＼腹立ちや／＼。まだなまぬるい事をおしやる、早う行かしめ。ト云うて○笛座に入る。　シテへこれはいかな事。またなどもの氣が違うた。久しう叱られなんだが。苦々しい是非に及ばぬ。此の足で直ぐに庄屋殿へ參らうと存ずる。ト云ふ中入する。　女へさても／＼氣の毒な事かな。餘り弱い人ぢやに依つて。わざと威してやりました。何ぞよい役當たられたか知らぬ迄。漸う祭の渡る時分ぢや程に。人陰から見物せうと思ひまする。ト云うて笛座に入る○笠を着て○後に脇座へ出る○諸役。　立頭へこの邊りの者で御座る。今日は牛頭天王の祇園會で御座る。何れも同道致して祭を見物に參らうと存ずる。なう／＼何れも御座るか。　立衆へこれに居りまする。　頭へけふはいつ／＼よりも目出度い神事で御座る。御祭禮も追付け渡らせらるゝやら。殊の外賑々しうなりました。いざ森へ參つて。御神事を拜みませうか。　衆へ一段とよう御座らう。　頭へさあ／＼。御座れ／＼。　衆へ心得ました。　頭へ最早お渡りも間もないと見えまする。　衆へあれ／＼。神前の人を拂ひまする。　衆へ誠に。間もないやら、笛太鼓の音が聞こえまする。　頭へ然らば間も御座るまい。森へ參つて見物しませう。さあ／＼これへ御座れ。　衆へ心得ました。ト諸役の方に見ゆる○女立つて立衆の上に立つ○下り端打上。　シテへ祇園囃子に。吹く笛の太鼓負ひ。是程汗の出る我を。心あらば見てとれ。此の心あらば見てとれ。ト渡り拍子六遍り○其の内太鼓打つ○シテ財布を出す○ひそ／＼する所作あるべし○シテ女を見附け○役をへらかす心第一なり○渡り拍子の內○別して仕様あるべし○　渡打上　シテへあら有難や／＼。いま目の前に明らけき。天照神の教とて。人の心も清かなる。御代のしるしの神祭。　神は人の敬ふに依つて威をます。氏子繁昌長久と。　囃す風流は面白や。／＼ト云ふまでに○皆々舞臺へ入る○シテは常の座へくつろぐ○直に舞○大小の前に列ぶ○　舞人へ目出度かりける時とかや。太鼓打上。　へ舞の袂も數々の。巖の上に鶴すめば。君萬歳と龜やすむ。松に幾千代齢も久しき。竹の園生の。末葉も榮ゆる神いさめ。祭の儀式ぞ目出度けれ。ト云うて○舞の内女橋懸へ行く○下の方より　女へなう／＼こちの人／＼。　シテへ女どもか。　女へさても／＼よい役に當たらせられたいの。　シテへ何とよい役か。　女へ中々。よい役で御座る。　シテへこれでは内へ寄せてくるゝか。　女へ内へ寄せいでなりませうか。わらはは先へ戻つて。さゝの燗をして待つて居まする程に。早う戻らせられ。　シテへ儀式がすんだらば。早く戻らうぞ。　女へ早う歸らせられい。　シテへ心得た。　シテへハア神子殿が神樂を上げらるゝ。よいや／＼。面白い事ぢや。ト云ふまでに○立衆皆々下に居るなり○太鼓の前へ行き○神樂にては○面白う太鼓を打ちかゝる○神樂すみ○兒へ拝む○ヤと聲かけ○鷄鼓吹出す○　シテへハアお兒が舞はるゝ。さても見事／＼。面白い事ぢや。よいや／＼。段々うつる○色々あるべし○相舞にもなる○鈴八撥前○何鼓○近代の工夫にて○神樂の代りに○太鼓持ちあるき○太鼓を打つ時○太鼓を打つ○太鼓になる○兒は入る○見送つて太鼓しかね○鈴八撥の通り○撥をつき○二返かへる内○シヤギリ吹出すを聞きて○はしりごきして廻り○常の通り○留所にて○太鼓を打ち○かたげて入るなり○ヤと留める○

大黒連歌（だいこくれんが）

シテ　大黒
アド　主人
小アド　太郎冠者

アドへ此邊りに有徳な者で御座る。毎年嘉例で子祭りを致す。當年も相變らず。目出度く大黒殿を祭らうと存ずる。いつも連歌を致すに依つて。知音の衆を申請くる。太郎冠者を呼出し。おの／＼を呼びに遣さうと存ずる。ト云うて呼び出す。常の如し。　アドへ今日は嘉例で子祭りをなする。そちは何れもへ、いいて。御時分もよう御座る。お出でなされて下されと云うていて來い。小アドへ畏まつて御座る。ト云うて。つめる。　小アドへなう／＼嬉しや／＼。今日は子祭で何れもお出でなさるゝ。定めて賑々しからうと存ずる。先づ何某殿は近い。扨これはどなたへ參らうぞ。先づ何某殿は近い。あれへ參らう。ト云うて。一の松にて案内を乞ふ。それより立頭出る。千切木弓矢同斷。小アドはアドへ申し上げる。何れも同斷。　立頭へ今日は目出度う御座る。アドへ何れもようお出でなされた。先づつうと奥へお通りなされい。立頭へ心得ました。アドへ扨々。相變らず何れもお出で忝う御座る。立へ相變らず子祭をなされ。召寄せられまする。忝う御座る。アドへさて嘉例の通り連歌を致さう、各の内。發句をなされて下され。立へ今日は珍しい御亭主の御發句がよう御座る。アドへいや／＼。客發句に亭主脇と申す。兎角各の内からなされて下され。是非とも御亭主の御發句をなさせられい。アドへそれならば御意次第に致しませう。かうもござらうか。立へ何とで御座る。アドへ大黒の年貢納むる今宵哉。立へこれは面白う御座る。私脇を致さう。かうも御座らうか。アドへ何と。立へこゝやかしこに俵多さよ。アドへこれも出來ました。サア／＼。どなたなりともなされて下されい。衆へそれならば私致さう。鼠ども人の物をや論ずらん。アドへ扨も／＼、何れも面白う御座る。今日は別して連歌がよう出來て御座る、先づ急いで奉納致さう。太郎冠者は盃を出せ。小アドへ畏まつて御座る。奉納は仕方なし。小アド扇擴げ出て。立頭より段々に酌して通る。立頭より挨拶ありて。受けて呑む。アトより小舞謠ふ。立衆の中少人出る時は小舞所望するなり。　アドへあら奇特や。何とやら氣色が變りました。立へいかさま。異香薫じ唯ならぬ樣子で御座る。アドへ先づ何れも是へよらせられい。衆へ心得ました。シテへ抑もこれは。衆生に寶を與ふる大黒と云へる福天なり。アドへこれへ出現なされたはどなたで御座る。シテへこれは汝等が信仰する大黒天にてあるぞとよ。目出度う相變らず子祭して連歌をするに依つて。悦びの餘り。これ迄出現してあるぞとよ。アドへ有難う存じまする。先づこれへ御來臨なされませ。ト云うて葛桶出す。シテ腰をかける。　シテへヤイ／＼。汝等常々この大黒天を信仰して子祭をする。何の爲に大黒を信ずるぞ。アドへ總じて大黒天は福神でござる。富貴を祈りましての事で御座る。シテへ身共が推量に違はぬ。内々福を與へうと思へども。何かと取紛れて延引したに追付け福を與へうぞ。アドへそれには有難う存じまする。シテへ扨これに居る者共は。いつも子祭の時分は參會する。定めて友達であらう。アドへ成程知音の者で御座るが。毎度子祭には伽を致してくれまする。此者共も御福を下されませうならば。猶々忝う存じまする。シテへ扨々奇特な事ぢや。人は權に仕へよ。賤しきにまじろべからず。伽をするも信心あつての事ぢや。同じく富貴に守らうがさり乍ら。大黒天も氣が弱うて。衆生を見ては皆悉くよかれかし／＼と思ふに依つて。方々へ福を與へたう思ふ。別して此節は所々の子祭で。大黒天も一向暇を得ん。總じて富貴になるは。唯薄紙を重ねる樣に。そろり／＼と樂しうなるがよい程に。ゆる／＼と思うて猶々信仰なせい。さて最前から吟じたは何であつた。アド

へそれは連歌て御座る。シテへいよ〳〵奇特なものぢや。扨その連歌はいかに〳〵。アドへ大黒の。年貢納むる今宵かな。立へこゝやかしこに俵ぞさよ。與へ鼠ども。人の物をや論ずらん。シテへ大黒連歌の面白さに。三段舞。太鼓打止ハヽ。七珍萬寶打出す打手の小槌。これをばどのに取らせけり。立へやら〳〵けなりや〳〵な。我にも福をたび給へ。シテへほしがる所も尤もなり〳〵とて。一大三千大千世界の寶を入れたる大黒の。袋を汝に取らせけり。シテへあそこのをのこの物云はぬは〳〵。若し大黒を恨みやすると。色々の寶の衣裳を脱いで彼等に取らせ。これ迄なりとて大黒は。これ迄なりとて大黒天は。此所にこそ納まりけれ。ト云うて。留めに入るなり。

太子の手鉾

シテ　太郎冠者
アド　主人
（入道具）

アドへ此邊りの者で御座る。某一人召使ふ下人が。身に暇も乞はず。何方へやら參つて御座る。聞けば二三日以前に歸つたとは申せども。未だ目見えを致さぬ。今日はきやつが私宅へ立越え。たばかり出し。屹度折檻の致さうと存ずる。誠に。憎いやつで御座る。身に一言の斷りを申して御座らば。如何ほどなりとも暇をとらせうものを。出し拔いて參つた段。言語道斷憎い仕合せで御座る。何かと申す内に。きやつが私宅は早や是ぢや。身共が聲と聞き知つたらば。留守をつかふで御座らう。作り聲をして呼出さう。常の如し。シテへやら奇特や。此間罷歸つたを。早やどなたやら御存じあつて。表に案内がある。案内とはたそ。アドへ物もう。シテへ何方で御座る。アドへしさり居れ。シテへハア。アドへ俄かの慇懃迷惑致す。ちとお手を上げられ。シテへこれは何とも迷惑に存じまする。アドへおのれは憎いやつの。身に暇も乞はず。何方へやら失するのみならず。二三日以前に歸つたげなが。何故に身共が前へ出ぬ。シテへさればの事で御座る。お暇の儀を申上げうと存じては御座れども。一人召使はるゝ下人の事で御座れば。申上げたりとも。やはか下さるまいと存じ。忍うで京内參りを致し。二三日以前歸つては御座れども。打續いての大雨に濡れて。お前へ延引致して御座る。アドへ雨が降らば。猶々出て奉公をしよう筈ではないか。雨中ぢやに依つて。大酒をして。遊山をして居たであらう。シテへお臺所にさへ自由にならぬ御酒が。私が何となるもので御座る。アドへそれならば早う出をつたがよい。シテへそれには仔細が御座る。餘りおばら屋で。私の家は外に雨が三つ降ると。内には十降りまする程に。妻子が難儀致しまして。あそこやこゝへかがうでなりまする。それをいたはりまして。只今迄おそなはりました。アドへ此中久々どれへやらいた内に。日上がつておりやる。きつと折檻をせうと思うてこれ迄は立越えたれども。此度は許す。其處を立て。シテへそれは誠で御座るか。アドへ弓矢八幡たすくるぞ。シテへやら心安や。アドへ何と今の間は窮屈にあつたか。シテへ何時もの御氣色とは違ひまして。すはお手打にもあひませうかと存じて。身の毛を詰めて居りました。アドへさうであらう。身も何時もより腹が立つた。以來を屹度たしなめ。シテへ畏まつて御座る。アドへさて其方は太子の手鉾と云ふ物を所持して居るげな。ちと見せい。シテへ是は思ひもよらぬ事を承ります。名を承つたも今が初めで御座

る。アドヘイヤ身共がよう知つて居る。見たらばおこせと云ふかと思うて。隠すさうな。取りはせまい。ちと見せ。シテヘ扨はお聞きなされたが誠で御座るか。アドヘおんでもない事。シテヘそれならば暫くそれにお待ちなされませ。アドヘ心得た。シテヘ扨も〳〵こびた事を仰せなされた。常々屋根の漏りをとむるために。槍を竹の先にゆひ付けておいた。漏りをとむると云ふ義理で。名を太子の手鉾と付けておいた。此事を聞かれたものであらう。面白なかしうお目に懸けうと存ずる。何とお手に綺麗に御座るか。これで御座る。アドヘ先づ太子の手鉾を見せい。シテヘ勿體ない。これが太子の手鉾で御座る。アドヘさう云ふには仔細があるか。シテヘなか〳〵仔細が御座る。追付け語つて聞かせませう。アドヘ早う語れ。シテヘ昔聖徳太子の御時。佛法の大敵守屋を退治せんと。河内の國稲村の城に押寄せける。初めは少し負け軍なりしが。又取つて返し。此鉾にて守屋が首を取り。御父用明天皇の孝養にそなへ給へば。それよりして國土治まり。萬民安堵の思ひをなす事。是皆佛法の威力。又この鉾の奇特。なんぼう目出度い鉾にては候はぬか。アドヘ扨は聖徳太子の守屋を退治なされた鉾がそれか。シテヘあながち是ばかりでも御座るまいが。此鉾も敵を滅したさうに御座る。アドヘ其様な鉾で。中々大敵は滅されまい。シテヘまだ仰せらるゝ。さあらば敵を滅した様體を。まなうでお目に懸けませう。さり乍ら。お前にも小拍子にかゝつて。太子の手鉾のいはれは如何にと。慎んで仰せられねばなりませぬ。アドヘなる程云ふ程に。まなうで見せ。シテヘ畏まつて御座る。さらば仰せられい。アドノルヘ太子の手鉾の謂れはいかに。シテヘ太子の手鉾の謂れを申さん。太子の手鉾と云ふ事は。あそこの守屋をちよつとは刺し。こゝの守屋をしくとは刺し。あそこもこゝもあまりに多き守屋なれども。つひにこれにて刺しとむる故に。太子の手鉾と申すなり。アドヘあのやくたいもない。しさりなれ。常の如く。つめて。とめる。

唐相撲（唐人相撲）

シテ　唐土の皇帝
アド　日本の相撲取
ツウジ　唐土人
小唐人大勢

（入道具）

アドヘ是は日本の相撲取で御座る。某さる仔細あつて此所に久々罷在る。故郷なつかしく存ずる折節。今日は此殿へ御幸と承つて御座る。お暇を奏聞申さうと存ずる。眞の亂序にてシテ出る。長柄をさしかけ。先へ小童正鉞持ち。小唐人列おさへ。ツウジ人。ツウジヘ皆々承り候へ。今日此殿へ御幸にて候間。奏聞ありたき面々は罷出でゝ申上げ候へ。其分心得候へ〳〵。アドヘ如何に奏聞申し候。ツウジヘ奏聞とは何事であるぞ。アドヘ是は日本の相撲取で御座る。久々此所に逗留致して御座る。餘り故郷なつかしう御座る程に。此度歸朝仕りたう御座る。此段御取合せを以て仰上げられて下されい。ツウジヘ御機嫌を以て申上げうずるにてあるぞ。暫く待ちませい。こゝにて。シテ唐人あつてから。ツウジ王の前に座し。日本人歸朝の心持。唐音つかふ。王ツウジに向つて唐音つかふ。ツウジうけこ。ツウジヘ日本人。居まするか。アドヘ是に居まする。ツウジヘ其由奏聞申したれば。則ち御暇を下さるゝとのお事ぢや。有難う存じませい。さりながら。名殘に今一度相撲を叡覧なされうとのお事ぢや。身拵へなして相撲を取りませ。アドヘ畏まつて御座る。ツウジ唐音にて小唐人へ觸れる。唐人皆々唐音。アド太鼓座にて肩衣とる。ツウジヘ拵へ、がよくば。日本人あれへ出ませい。アドヘ畏

まつて御座る。ト云うて出る。それより代り／＼小唐人出る。ツウジ指圖し相撲を取らせる。唐人負けるとまたツウジ行くなり。王相撲の時ツウジ呼んで云ふ。唐音なり。ツウジへ日本人居まするか。アドへ是に居まする。ツウジへ殊の外相撲を出かしまするとあつて御感心なされる。有難う存じませい。アドへ冥加に叶ひまして御座る。ツウへ暫く休息致しませい。アドへ畏まつて御座る。ツウジ。小唐人へも唐音。精を出せといふ心持なり。ツウへ日本人出ませい。アドへ畏まつて御座る。また相撲あり。王相撲の間。色々心持あり。さて相撲過ぎて。ツウジを呼び。せく心にて。相撲をとらんと云ふ心を唐音にて云ふ。ツウへ日本人。此度は帝王がお取りなされうといお事ぢや。有難う存じませい。アドへ忝なう御座れども、勅諚なれば有難う存じまする。ツウへお身構へ、なさるゝ内。暫く待ちませい。アドへ畏まつて御座る。これより樂笛吹き出す。シテ舞ふ。臺の上にて一段舞ふ。唐團扇腰帯狩衣大口着附ことゞゞく。樂に合せて段々に渡す。小唐人次第／＼に請取り。次へまはす。衣裝皆脱ぎて。ツウジを呼ぶ。中興の工夫に。王樂一段舞うて。小唐人を呼うで私語く。小唐人は次の小唐人二人を招いて。前後より行衣裝を手に持ち脱がせるなり。さてツウジを呼ぶ。唐音あり。樂とめて。二人ツウジ畏まりて。王申付る。常の通り裝は違うて。さて日本人を出し。行事をする。日本人取りつかんとす。日本人を拂うて臺の上へ逃げて上がる。小唐人大勢出て。日本人たゝける。王ツウジを呼んで。唐音つかふなり。ツウへやい／＼。勅諚には。下々の分として玉體にさはりましたによつて。むさう思召さるゝとあつて。逆鱗甚しい。さるによつて重ねては。御身に荒莚を觸はせられて。相撲をお取りなされうといふ御事ぢや。暫く待ちませい。アドへ畏まつて御座る。また樂吹出す。小唐人二人。莚に紐をつけて正面に持ち出てゐる。一段舞うて。樂の内に莚の穴を見て。手をかけんとする。あやふき心持色々あるべし。然しながら。あまり長きは惡し。遂に莚の穴へ兩手を通すなり。小唐人二人とも。後にことゞく結び入る。王莚の中へ行きて莚を掛けてゐる。莚の中を大樣にする仕事一なり。さてツウジを呼ぶ。唐音つかふ。樂とめる。ツウジ出て畏まる。ツウへ日本人出ませい。アドへ畏まつて御座る。アド出て平伏する。ツウジ行事する。常の通り殘違うて相撲とる。アド引返し小股取る。王せきて唐音つかふ。小唐人大勢。寄り一て引分けて。日本人を叱る心持あり。ツウへ日本人退出せい。アドへ畏まつて御座る。ト云うて入るなり。跡大勢小唐人にて王を抱きかゝへて入るなり。但し王入る時。手車にのせて入る。

大般若

シテ　僧
アド　神子
小アド　施主

アドへ妾は此の邊りの神子で御座る。毎も月の末にはさる御方へ神樂をあげに參る。今日も參らうと思ひまする。シカ／＼。世には信心な御方も御座る。毎月／＼神樂を參らせらるゝに依つて。次第に御繁昌なさるゝ事で御座る。何かと申すうちにこれぢや。ト云うて案内乞ふ。常の如し。小アドへようこそ出られたれ。先づかう通らしめ。アドへ心得ました。小アドへ供物の用意なして案内するまで。暫く神樂をまたしやれ。先づ休息めされ。アドへ心得ました。シテへ此の寺の住持で御座る。毎月定つてさる御檀那へ、御祈禱に參る。今日參る樣にと昨日自身賴みに見えた。唯今參らうと存ずる。誠に、毎月懈轉なう御祈禱なさるゝに依つて。其の身の事は云ふに及ばず。御一門まで次第／＼に御繁昌なさるゝ事で御座る。ト云うて案内乞ふ。常の如し。小アドへえい御坊樣。御苦勞に存じまする。シテへきのふは御念の入らせられて。御自身の御出で忝う存じまする。小アドへわざと參つたでも御座らず。御近所へ參つて序ながらて御座つた。シテへ茶でも參つては御座らいで。早々に御歸り。今に殘多う存じまする。さて此の中夥しい手柄を致しました。小アドへ何とで御座る。シテへさる方に大切な病人が御座つて。藥針或は氏神へ湯を參らせ。祈念祈禱色々の事どもを召さるれども。少しも其の驗が御座らぬ。某へ賴うで參つたと思召せ。何お方々の祈禱がきて忙しう御座つたれども。人を助くるは出家の役と存じて。何がもみにもうで大般若經を轉讀致したれば。お經の功德は忝い事で御座る。手のうらを返す樣に。めつき／＼となほつて。二三日のうちに。つ

い木服めされました。何が一家一門の悦び。金銀卷物を持つて自身禮に見えました。小アド〽扨々いかいお手柄で御座りました。これと申すもお經の功德。又はお前の正直正路に殊勝なお志で御座る。シテ〽これへ參る道すがらも獨言にも申して御座る。每月〳〵こなたには油斷なく祈禱をなさるゝに依つて。御一門末々まで御繁昌なさるゝ事で御座る。小アド〽これと申すも皆お蔭で御座る。いざお通りなされませ。シテ〽さらば每もの通りお祈禱を始めませう。小アド〽一段とよう御座らう。シテ正面向き。印を結ぶ。なう〳〵神子殿。神樂を始めさせられい。アド〽心得ました。おう遙かなる沖にも石のあるものを。恵のごせの腰懸けの石。神樂。一段舞ふ。シテ立つて。シテ〽御亭主〳〵。神樂の鈴がかしましうて。大般若が讀まれませぬ。小アド〽心得ました。なう〳〵神子殿。鈴の音に紛れて經が讀まれぬと。御出家が仰せらるゝ。暫く待たしめ。アド〽いやお經は佛道。神樂は神道。別の事で御座る。鈴の音に紛れて讀まれぬならば。お讀みあるなと仰せられい。小アド〽今のを聞かせられたか。シテ〽推參な事を申す。忝くも大般若と申すは名經なれば。是を讀誦申してこそ祈禱になる。神子づれが袖神樂を參らせたと云うて。何の役に立ちませう。とかくやめいと仰せられい。小アド〽今のをお聞きあつたか。アド〽無理な事を云ふ人で御座る。佛在世の時より。一切の經は皆衆生を濟度せん爲で御座る。又神樂と申すは。天照大神岩戸に閉籠らせられ。世界暗闇となつて。夜晝の分ちもなかりし所に。諸神之を歎き。岩戸の前にて神樂を奏し給へば。神は悅び岩戸を開き出でさせられしより。日月の光も明らかに御座る。これ皆神樂の威德で。今生の祈禱と申すはこれで御座る。神樂をやめる事はならぬと仰せられい。小アド〽聞かせられたか。シテ〽なる程承りました。つべ〳〵〳〵とよう物をいふ女で御座る。第一そなたが聞こえませぬ。あの神子と愚僧を同じ樣に思召すさうな。小アド〽これは迷惑で御座る。何しに同じ樣に存じませうぞさりながら。其の樣に仰せらるれば。何とやら似た樣に御座る。とかく神子にお構ひなされぬがよう御座る。シテ〽何れ其の樣なもので御座る。愚僧はあれに構はずともお經を讀みませう。シテ讀む。神樂始むる。小アド〽さあ〳〵神子殿。神樂を參らせられい。アド〽心得ました。おゝ臣齒壓やな〳〵。唯今の御神樂の感應により。夜の驚きなく晝の騷ぎなく　何事も思ふ所望を叶へ給ふ。

有難や。（鈴振出す。舞ひ様色々あり一々口傳なり。）

寶（たから）の笠（かさ）

シテ　太郎冠者
アド　主人
小アド　寶屋
（入道具）

アド〽この邊りの者で御座る。（これより寶の槌同斷。）

小アド〽これは如何な事。田舍者をまんまとだましては御座れども。何な寶ぢやと申して賣つてつかはさうものが御座らぬ。是處に古い管笠が御座る。之を面白うをかしう申して賣つてつかはさうと存ずる。なう〳〵おいやるか。シテ〽これに居まする。（これより寶の槌の通り。槌と笠との違ひなり。）シテ〽謂れを聞けば尤もで御座る。して目の前に現奇特が御座るか。小アド〽奇特と云つぱ。此の笠を着ればそのもの丶姿が見えぬ事でおりやる。シテ〽さて〳〵それは奇特なもので御座る。それならば早う着て見せさつしやれ。小アド〽いや〳〵。寶と言ふ物は主を思ふもので。和御寮が求めうとおしやれば。此の寶は早やそなたに傳はつてある。そなた着てお見やれ。シテ〽それならば私が着て見ませうか。小アド〽それがよからう。シテ〽それならば着まするぞや。小アド〽はやうお着やれ。シテ〽さあ着ました。小アド〽これは如何な事。田舍人はどれへお行きやつた。シテ〽是處に居りまする。小アド〽聲はすれども姿が見えぬ。どれへおいやる。シテ〽ハテこれになりまするわいの。小アド〽えい田舍人。和御寮はどれへお行きあつた。シテ〽さては見えぬが誠で御座るか。小アド〽誠とも誠とも。そつとも見える事ではおりない。シテ〽さて〳〵是は奇特な寶で御座る。求めませうが。代物は何程で御座る。小アド〽萬疋でおりやる。（寶の槌の通り。）アド〽急いで見せい。シテ〽畏まつて御座る。（ト云うて。寶を見せる。手はきれいな云ふ。それより語り前の通り。）アド〽謂れを聞けば尤もぢや。して目の前に現奇特があるか。シテ〽奇特といへば。此の笠を着れば其の者の姿が見えぬ事で御座る　アド〽それは奇特なものぢや。それならば汝着て見せい。シテ〽都のものが申しまするは。寶と云ふものは主を思ふもので。お前が求めうと仰せらるれば。早や此の寶はお前に傳はつて御座る。お前召して御覽じませ。アド〽これは尤もぢや。それならば身共が着て見よう程に。是へおこせ。シテ〽畏まつて御座る。アド〽今着るぞよ。シテ〽早う召しませ。アド〽そりや着たは。シテ〽これは如何な事。あれは見ゆると云ふ段ではない。さては都の者がだましをつたさうな。アド〽やい〳〵太郎冠者。何と見ゆるか。見えぬか。太郎冠者。シテ〽これは如何な事。賴うだお方はどれへお出でなされた。アド〽やい〳〵是處に居る。シテ〽いやお聲はすれども姿が見えませぬ。どれへお出でなされました。アド〽はて是處に居るわいやい。シテ〽えい賴うだお方。お前はどれへお出でなされました。アド〽さては見えぬが誠か。シテ〽そつとも見ゆる事では御座らぬ。アド〽さて〳〵重寶な寶を求めて來た。此度の寶競べには。身共が勝と云ふものぢや。シテ〽仰せらるゝ通り。此度のお寶競べにはお勝ちなされたと云ふもので御座る。アド〽さあ〳〵。これから汝着て見せい。シテ〽最前も申す通り。主を思ふもので御座るに依つて。私が着ますれば見えまする。アド〽誠にさう云うたなあ。シテ〽左様で御座る。アド〽それならば是を汝に貸さう程に着て見せい。シテ〽お貸しなされても。元がお前の物で御座るに依つて。見えまする。アド〽はて氣の毒な事ぢや。何卒人が着て見

えぬ處が見度いものぢやが。是非に及ばぬ。是な汝にやらう程に着て見せい。シテへこれは如何な事。大分の價なお出しなされたものな。私へ下さらうと申す事がある もので御座るか。是は御無用になされませ。アドへ汝は異な事を云ふものぢや。身が物を身がやらうと云ふに。誰が何と云ふものぢや。其上人が着て見えぬ處を見てこそ面白うあれ。自身着て何の面白い事があるものぢや。早う着て見せい。シテへでも餘り勿體ない事で御座る。アドへハア。扨は己れは都でだまされて來居つて。見ゆるものを見えぬと云うて。身共をだますか。シテへいや左樣では御座らぬ。アドへそれならば着て見せい。シテへこれは平に御無用になされませ。アドへまだぬかし居る。しかと着まいか。シテへ先づお待ちなされませ。アドへ何と待てとは。シテへなる程着ませう。アドへ何ぢや着よう。シテへはあ。アドへさう無うては叶はぬ事ぢや。急いで着よ。シテへこれは迷惑な事ぢや。それならば着まするぞや。アドへ急いで着よ。シテへ今着ますぞ。アドへそりや〳〵見ゆるは。シテへハテさてせはしい。今着ようとして居る處で御座る。アドへさて〳〵暇の要る事ぢや。早う着ぬかいやい。

シテへ今着まするぞや。アドへ早う着よ。シテへさあ着ました。アドへそりや是處が見ゆる。シテへ見えますまい。アドへ是處が見ゆる。シテへ見えますまい。アドへ是處が見ゆる。シテへ見えますすまい。アドへおのれは憎い奴ぢや。シテへあゝ御許されませ〳〵。アドへやう身共をだましました。シテへゆるさせられい〳〵。（ト云うて追込み入るなり。）

寶の槌

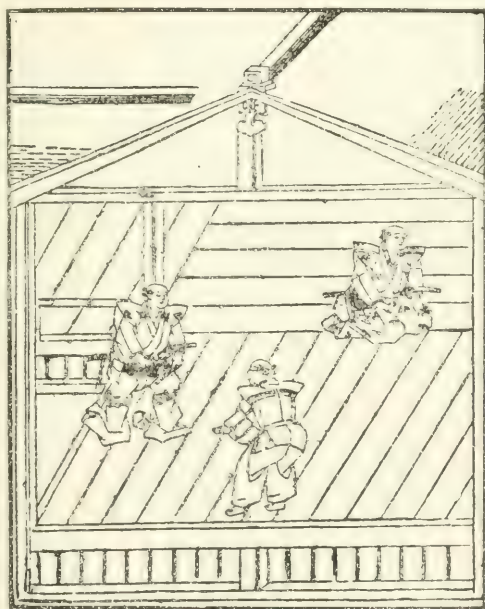
シテ　太郎冠者

アド　主人

小アド　寶屋

（入道具）

アドへ是は此邊りの者で御座る。此中方々に御寶競べは夥しい事で御座る。それに就き。太郎冠者を呼出し申付ける事が御座る。（ト云うて呼出す。如常。）此中方々に御寶競べは。何と夥しい事ではないか。シテへ御意なさるゝ通り。事ちやうじた儀で御座る。アドへそれに就き。此度は何と思召してやら。重ねては目の前に驗奇特のある寶を競べさせらりよとの御事ぢや。身が内にも其樣な道具があるか。シテへ御道具は悉く存じて居ますが。目の前に驗奇特のある寶とやら存じません。アドへそちが知らずば無いであらう。何と都にはあるまいか。シテへ何が扨。都にないと申す事は御座るまい。アドへそれならば。汝は大儀ながら都へ行て求めて來い。シテへ其段なそつともお氣遣ひなされまするな。アドへ急いで行てやがて戻れ。（ト云うてつめる。）シテへ是は火急な事を仰付けられた。まづ急いで參らう。シカ〳〵。誠に。某は未だ都を見物致さぬ。此度が幸ひ。此處彼處を見物致さうと存ずる。ワア〳〵。都近くとみえていかう賑かな。さればこそ都ぢや。又田舍の家作りとは違うて。軒と〳〵を仲良ささうにひつしりと建並べた。扨々賑かな事ぢや。ヨウ。身共ははたと失念致した事がある。寶屋は何處許にあるものやら。又どの樣なものやら存ぜぬ。とくと問うて來ればよかつたものを。この遙々の所を問ひにも戻られまいし。何としたものであらうぞ。ヤア〳〵。（笑ふ。）さすがは都ぢや。賣り買ふ物も。呼ばはれば事が調ふと見えた。某も此邊りから呼ばはつて參らう。シイ〳〵。そこ許に寶屋は御座らぬか。寶買はう〳〵。あゝこれ〳〵。その邊りに寶屋は御座らぬか。寶買は

う。寶買ひす。小アドへ是は洛中に心の直ぐにない者で御座る。あれに田舎者と見えて。この廣い街道をわつぱと申す。ちときやつにたらさはつて見うと存ずる。なう／＼これ／＼。シテへ此方の事で御座るか。小アドへ成程わごりよが事ぢや。わごりよはこの廣い街道な。何なわつぱとおしやる。シテへ田舎者の事で御座れば。わつぱが法度も存ぜいで申した。眞平御ゆるされませ。小アドへいや／＼。わつぱが法度を咎むるではない。何をおしやる。事によつたらば叶へておませうかといふ事ぢや。シテへそれは忝う存じまする。私は何を隠しませうぞ。寶がほしさに寶屋を尋ねて歩く事で御座る。小アドへして。その寶屋の亭主を知つておいやるか。シテへ是は都人とも覺えぬ事を仰せらるゝ。存じてゐれば此樣に呼ばはつて歩きません。知らぬによつて呼ばはつて歩く事で御座る。小アドへ是は身共があやまつた。すれば其方は仕合せ者ぢや。シテへイヤモ仕合せと申して。斯う見えた通りの者で御座る。小アドへいや／＼其樣に袖褄についての仕合せではない。身共に御會ひやつたが仕合せといふ事ぢや。シテへそれはマどうした事で御座る。小アドへ不審尤もぢや。洛中に人多しと雖も。其方が尋ぬる寶屋の亭主は身共でおりやる。シテへヤア／＼アノ此方が寶屋の御亭主で御座るか。小アドへ中々。シテへすれば私は仕合せ者で御座る。寶が欲しう御座る。見せて下されい。

小アドへ成程見せう程に。暫くそれにお待ちやれ。シテへ心得ました。小アドへ田舎者をまんまと騙して御座れども。何な寶ぢやと申して賣つて遣さう物が御座らぬ。又此處に古い太鼓の撥が御座る。是を面白をかしう申して賣つて遣さうと存ずる。イヤなう／＼田舎人おいやるか。シテへ是に居まする。小アドへさて寶を見せうが。手は綺麗なか。シテへ随分と手は綺麗に御座る。小アドへそれならばさあ／＼お見やれ。シテへどれ／＼。イヤ此樣なものは要りませぬ。まづその寶を見せて下されい。小アドへアヽ南無寶／＼。扨々わごりよは粗相な人ぢや。是が寶でおりやる。シテへそれを寶と仰せらるゝには。何ぞ仔細が御座るか。小アドへ成程仔細がある。追付け語つて聞かせう。昔鎮西八郎為朝といふ御方があつて。さる仔細あつて鬼ヶ島へ渡られたれば。鬼共が取つて服しようといふな。いや／＼むさとは服せられまい。何なりとも力勝

負なして。負けたらば服せられうず。勝つたらば蓬萊の島の寶を渡せとの御約束で。色々と力勝負をなされたが。みな爲朝が御勝ちなされた。鬼神に横道なしと。蓬萊の島の寶、隱蓑に隱笠。打出の小槌。三つの寶を我朝へ渡す。蓑と笠とはさるお大名にある。又この槌は都の重寶にとあつて殘し置かれたれども。餘りわごりよが欲しさうにおしやるによつて。預つてもやらうかといふ事ぢや。シテ〽謂れを聞けば尤もで御座る。して目の前に驗奇特が御座るか。小アド〽奇特と云つぱ。この槌から打出せば。何でも出る事でおりやる。シテ〽それは調法なもので御座る。それならば打出して御覽じませ。小アド〽いや〳〵。寶といふ物は主を思ふもので。わごりよが求めうとおしやれば。はや此寶はわごりよに具つてある。わごりよ打出しておみやれ。シテ〽是は御尤もで御座る。それならば私が打出しませうか。小アド〽是は只では出ぬ。むつかしい呪文がある。敎へてやらうぞ。シテ〽それは忝う存じまする。小アド〽蓬萊の島なる〳〵。鬼の持つ寶は。隱蓑に隱笠打出の小槌。諸行無量。常々くわし國に。くわたり〳〵。と云うて左右へ廻り。我を忘れて打出す事でおりやる。シテ〽大方覺えました。それならば打出しませう。小アド〽さあ早う打出しておみやれ。シテ〽畏まつて御座る。（謡舞。蓬萊の島を云ふ。くわし國にくわたり〳〵と云うて。寶を打出す。此時股より脇差を出す。シテ笑ふ。）小アド〽出たは〳〵。（ト云うて）シテ〽誠に出ました〳〵。まづ是は私のに致しませう。小アド〽ヤア〳〵これ〳〵。寶を求めぬ先にそれを差すといふ事があるものか。シテ〽成程是は尤もで御座る。求めませうが。代物は何程で御座るぞ。小アド〽萬疋でおりやる。シテ〽それは餘り高う御座る。もそつと負けて下され。小アド〽いや〳〵寶に限つて負けはない。いやならばよしに召され。シテ〽それとても求めませう。則ち代物は三條の大黑屋で御渡しませう。小アド〽成程大黑屋存じてゐる。あれで請取るであらう。シテ〽もう斯う參ります。小アド〽何とお行きやるか。シテ〽中々。シテ小アド〽さらば〳〵。シテ〽なう〳〵嬉しや〳〵。まづ急いで歸らう。シカ〳〵。誠に。暇がいらうかと存じたに。重疊の寶に出合ひ。此樣な悦ばしい事はない。此由を頼うだお方へ申上げたらば。さぞ御滿足なさるゝであらう。イヤ何かと云ふ中に戻つた。まづ此寶は此處に置いて。申し。頼うだお方御座りまするか。アド〽太郞冠者が戻つたさうな。シテ〽御座りまするか。アド〽戻つたか〳〵。シテ〽御座りまするか。アド〽戻つたか。シテ〽只今歸りました。アド〽やれ〳〵骨折ぢや。して寶を求めて來たか。シテ〽成程求めて參りました。アド〽急いで見せ。シテ〽畏まつて御座る。扨寶を御目に掛けませうが。何と御手は綺麗に御座るか。アド〽隨分手は綺麗な。シテ〽ちと御手水でもなされませぬか。アド〽手は綺麗なと云ふに。シテ〽それならばさあ〳〵御覽じませ。アド〽どれ〳〵。イヤ此樣なものは要らぬ。まづその寶を見せ。シテ〽南無寶〳〵。扨々お前は粗相な人ぢや。是が寶で御座る。アド〽それを寶といふには。何ぞ仔細があるか。シテ〽成程仔細が御座る。追付け語つて聞かせましよ。（前に小アドの語つた通りに語る。）シテ〽色々と云うて。やう〳〵求めて參りました。アド〽謂れを聞けば尤もぢや。して目の前に何ぞ奇特があるか。シテ〽奇特な。アド〽中々。シテ〽これ。これを御覽じませ。アド〽ハアヽ。汝は都へ上る時には丸腰であつたが。その腰の物を求めて來たか。シテ〽いかな〳〵。則ち此槌から打出しました。アド〽それは調法な物ぢや。それならば何ぞ打出して

見せ。シテ〽いや部の者が申しますは。寶といふ物は主を思ふものでお前が求めようと仰せられますれば。はや此寶はお前に具つて御座る。お前打出して御覽じませ。アド〽是は尤もなれども、身共は不案内なによつて、其方名代に打出して呉れい。シテ〽ハアお前の御名代に打出しましよか。アド〽中々。シテ〽それならば何を打出しましよ。アド〽何がよからうぞ。シテ〽長柄を五十筋ばかり打出しましよか。アド〽其様なものは當分いらぬ。シテ〽それならば鐵炮を百から。アド〽いや其様なものも當分いらぬ。此節馬に好いて乘れば。馬に事を缺ぐ。どうぞ馬を打出して呉れい。シテ〽ハア丶。馬をや。アド〽中々。シテ〽畏まつて御座る。是も只は出ませぬ。むつかしい呪文が御座る。アド〽さうであらう。（それよりして蓬萊の島の謡舞。仕様口傳。）シテ〽くわつたり〳〵。〳〵〳〵。アド〽出たか〳〵。〳〵〳〵。シテ〽追付け出ましよが。只馬ばかり仰せられましたによつて出ませぬ。毛色は何に致しませう。アド〽何がよからうぞ。シテ〽連錢蘆毛は何とで御座りませう。アド〽それは氣に入らぬ。シテ〽それならば月毛河原毛。アド〽それも氣に入らぬ。只黑い馬を打出して呉れい。シテ〽ハア只黑の馬で御座るか。アド〽中々。シテ〽畏まつて御座る。（ト云うて。蓬萊の島を繰返し舞ふ。）アド〽出たか〳〵。シテ〽追付け出ませうが。何とこい馬に足を八本附けたら何とで御座りませう。アド〽それは又どうした事ぞ。シテ〽四本でさへ早う御座るに。八本附けたらば猶早うてよう御座りませう。アド〽是はいかな事。足の八本ある馬が何の役に立つものぞ。只黑の馬を打出せ。シテ〽ハア只黑の馬で御座るか。アド〽中々。シテ〽畏まつて御座る。鬼の持つ寶は、隱蓑に隱笠打出の小槌、諸行無量、常々くわし國に。くわつたり〳〵〳〵〳〵。アド〽出たか〳〵。シテ〽イヤお馬の後先に頭を附けたらば何とで御座らう。アド〽それは又どうした事ぞ。シテ〽細道假橋など御通りなさるゝ時。向ふからも馬が參ると。斯う後しさりする勝手のよいやうに。後先に頭を附けたらばよう御座りませうに。アド〽いや後先に頭のある馬が何の役に立つものぞ。只黑の馬を打出せ。シテ〽ハア只黑の馬で御座るか。アド〽中々。シテ〽畏まつて御座る。（ト云うて。鬼の持つ寶を云うて舞ふ。）アド〽出たか〳〵。シテ〽ハヽ。今出る處な。お前が餘り姦しう仰せらるゝによつて。又ひつ込みました。アド〽扨々暇の要る事ぢや。シテ〽イヤ追付け是へ出ませうが。今是へ打出しましては荒馬で御座るによつて。お座敷の戸障子もたまりますまい。まづ今日は御寶藏へ納めて置きまして。又重ねて打出しませう。アド〽それがまあ何と待たるゝものぞ。今汝が是へ打出せば。其儘身共が乘り鎭める。シテ〽お前が召しまするか。アド〽中々。シテ〽畏まつて御座る。（ト云うて。又蓬萊の島を舞ふ。仕方口傳。）シテ〽くわつたり〳〵。〳〵〳〵。アド〽どう〳〵。〳〵〳〵。シテ〽イヤ申し。私て御座りまする。アド〽太郎冠者か。シテ〽ハア。アド〽して馬は何とぢや。シテ〽馬は追付け出ませうが。それに就いておめでたい事を思出しました。アド〽それは何事ぢや。シテ〽追付け御立身なされて。御普請なされう御瑞相に。あそこや此處に鍛冶番匠の音が。くわつたり〳〵と聞えて御座る。アド〽それこそめでたけれ。行て休め。シテ〽ハア。（ト云うて常の如くつめる。）

竹の子

シテ　藪主
アド　百姓

小アド　扱人

（入道具）

アド〽此邊りの百姓でござる。當年某が畑へ初めて竹の子が出來てござる。今日は參り。少々取つて歸らうと存ずる。シカ〳〵。誠に。當年さへあれ程に出來てござるに依つて。近年の内には大藪に致いて。上々の竹の子を夥しう取らうと存ずる。此樣な悦ばしい事はござらぬ。イヤ何かと云ふ内に畑ぢや。扨も〳〵此中見たよりは格別夥しう出來た。さらば先づこれを一本取らう。エイ〳〵。（ト云うて。竹の子をホンと云うて取る心。）扨も〳〵。是は見事な筍ぢや。今度はこれに致さう。エイ〳〵〳〵。（いろ〳〵あり。）シテ〽盜人の隙はあれども。守る人の隙がないと申す。此中身共が藪の筍を何者やら盜むと聞いた。今日は身共が參り。番を致さうと存ずる。これはいかな事　誰が取るぞと思へば。あいつが取り居る。扨々憎い事かな。ヤイ〳〵。ヤイ其處な奴。アド〽ホウお出でやつたか。シテ〽何ぢやお出でやつたか。アド〽中々。シテ〽此中身共が藪の竹の子を。何者やら盜むと聞いたが。取るぞと思へばおぬしが取るの。アド〽扨々人聞き悪い事をおしやる。わごりよの藪へ入つて取るではなし。身共が畑へ出た筍ぢやに取る。それが何とした。シテ〽畑は身共がのぢやと云はぬ。身共が藪の根をさいた筍ぢやに依つて。一本も取ることはならぬ。アド〽扨々無理な事をおしやる。總じて昔から。地頭殿の藪が根をさいた筍でも　畑主が取る作法ではないか。シテ〽よし地頭殿の藪が根をさいた筍を。畑主の取る作法にもせよ。身共が藪の筍は一本も取らすことはならぬ。アド〽こゝでこそ其樣な我儘な事をおしやれ。地頭殿へお行きあつて。其樣な無理な事は得おしやるまい。シテ〽地頭殿ぢやと云うて。云ふべき事を云はいでおかうか。アド〽地頭殿へお行きやつたら。ちんばぢやと云うて笑はうぞ。シテ〽扨々憎いやつぢや。身共がちんばが。今日にかゝつたか〳〵。アド〽アヽあぶないわいやい〳〵。出合へ〳〵。小アド〽先づ待て〳〵。これは先づ何事ぢや。シテ〽よい所へお出でやつた。先づ聞いてたもれ。此中身共が藪の竹の子を。何者やら盜むと聞いた。誰が取るぞと思へば。あいつが取り居る。おのきあれ。打殺してのけう。小アド〽先づ待て〳〵。身共が屹度云ひ付けてやらうぞ。シテ〽屹度云ひ付けてたもれ。小アド〽心得た。あれが藪の竹の子を何故に取る。アド〽いかな〳〵。あれが藪の筍を取りは致さぬ。御覽なさるゝ通り。私の畑へ出た筍ぢやに依つて取りまする。小アド〽扨は汝が畑へ出た筍ぢやに依つて取ると云ふか。アド〽左樣でござる。小アド〽これは尤もぢや。ヤイ〳〵。あれが畑へ出た筍ぢやに依つて取ると云ふは。シテ〽畑は身共がのぢやとは云はぬ。身共が藪が根をさいた筍ぢやに依つて。一本も取る事はならぬとおしやれ。小アド〽心得た。ヤイ〳〵。今のを聞いたか。アド〽成程承つてござる。扨々無理な事を云ふ人でござる。總じて昔から。地頭殿の藪が根をさいた筍でも。畑主の取る作法ではござらぬか。小アド〽成程其通りぢや。アド〽其上あの藪が畑隣にあつて。日影になつて。毎年不作を致せども。終に一言も申した事はござらぬ。根のさいた竹の子を取る事がならずば。今から根をさゝぬ樣にせいと云うて下され。小アド〽心得た。ヤイ〳〵。根のさいた竹の子を取るがならずば。今から根のさゝぬ樣にせいと云ふは。シテ〽何ぢや。根のさゝぬ樣にせいと云ふ。ハア藪を根から掘つて取れと云ふ事か。そもやそもあの大きな藪が。何と根から掘つて取らるゝ物ぢや。小アド〽でもこれは

汝が無理ぢや。シテ〽何ぢや。身共が無理ぢや。小アド〽中々。シテ〽無理〳〵。ムヽよい〳〵。竹の子をやらう。小アド〽何ぢや。筍をやるか。シテ〽中々。小アド〽それならばざつと濟んだ。シテ〽アヽこれ〳〵。其代りにあの方から來るものがある。それをこちへおこせとおしやれ。小アド〽してそれは何ぢや。シテ〽さうさへ云へばあいつが合點ぢや。小アド〽心得た。ヤイ〳〵。筍をやらうと云ふは。アド〽それならば。ざつと濟みました。小アド〽其代りに。何やら其方から來る物がある。これをおこせと云ふは。アド〽それは何ぢや。覺えぬと云うて下され。小アド〽心得たヤイ〳〵。何ぢや覺えぬと云ふぞよ。シテ〽ハテ忘れまい事を忘れをつた。それならば云うて聞かせう。それ何時ぞであつた。あいつが所の牛が放れて來て。身共がまやで子を產んだ。しをらしい事ぢやと思うて。鹽灰を打ち。かはらけなどをねぶらして馳走をしたれば。何時の間にやらあいつが來て。親牛を引いて行くは尤もぢやが。子牛迄引いて行きをつた。其時の牛の子を戻せとおしやれ。小アド〽何と牛の子と竹の子と一口には云はれまいぞよ。シテ〽地の上を這うて來て產んだ牛の子も。地の下を潛つて來た竹の子も同じ事ぢやとおしやれ。小アド〽心得た。ヤイ〳〵。今のを聞いたか。アド〽成程承つてござる。牛の子と筍と何と一口に云はるゝものでござる。小アド〽いやこれでは埒が明かぬ。何ぞ勝負にしたらばよからう。アド〽それならば私は歌を詠みまする。あの者も詠むかお聞きなされて下され。小アド〽心得た。ヤイ〳〵。これでは埒が明かぬに依つて。何ぞ勝負せいと云へば。あの者は歌を詠まうと云ふが。汝も詠むか。シテ〽あいつが歌を詠むに。身共が詠まいでなるものか。先づあれから詠めとおしやれ。小アド〽心得た。サア〳〵。汝から詠め。アド〽かうもござらうか。小アド〽何と。アド〽我畑へ。小アド〽我畑へ。アド〽隣の藪が根をさいて。思ひもよらぬ筍ぞ取る。小アド〽一段と出來た。サア〳〵汝も詠め。シテ〽かうもあらうか。小アド〽何と。シテ〽わがまやで。小アド吟ずる。シテ〽隣の牛が子を生みて。思ひもよらぬ牛の子ぞ取る。小アド〽是も一段と出來た。シテ〽あいつとならば何でも勝負をせうとおしやれ。小アド〽心得た。ヤイ〳〵。これでも埒が明かぬ。何ぞも一つ勝負せい。アド〽左樣ならば今度は相撲を取りませう。小アド〽これは一段とよからう。ヤイ〳〵。これでも埒が明かぬに依つて。も一勝負と云へば。あれは相撲を取らうと云ふは。シテ〽イヤこれはなるまい。小アド〽何故に。シテ〽身共は一方の足が不自由なに依つて。下に居ての勝負ならば何でもせうとおしやれ。小アド〽でも最前あれとならば何でも勝負をせうと云うたではないか。相撲をとらずばそちが負ぢや。シテ〽何ぢや。身共が負ぢや。小アド〽中々。シテ〽これならばとらう。これへ出よとおしやれ。小アド〽心得た。さあ〳〵これへ出よ。アド〽畏まつてござる。小アド〽身共が行司をしよ。シテ〽一段とよからう。アド〽御苦勞でござる。小アド〽お手つ。二人〽イヽヤ〳〵。シテ〽ヤヽ。勝つぞ〳〵。アド〽アヽあぶない。ちやと留めて下され。小アド〽先づ待て〳〵。アド〽申し〳〵。相撲はとらいで。何故に棒で打擲すると云うて下され。小アド〽心得た。ヤイヤイ。相撲はとらいで。何故に棒で打擲すると云ふは。シテ〽わごりよもまだ合點が行かぬさうな。總じて相撲は。手と足とで取るものぢや。身共は一方の足が不自由なに依つて。此棒は身共が足ぢや。其足がさはつたと云う

て。餘り仰山に云ふなとおしやれ。小アド〽心得た。シテ〽アヽこれ〳〵。今のはこひねりと云ふ手ぢやとおしやれ。小アド〽ヤイ〳〵。今のを聞いたか。アド〽成程承つてござる。扨々憎いやつでござる。何としたものでござらうぞ。小アド〽最前から無理ばかりぬかしなる。身共が思ふは。も一番とつて。どうぞあの棒を取りさへしたらば。汝が勝にならうぞ。アド〽成程合點でござる。も一番とらうと云うて下され。小アド〽心得た。ヤイ〳〵も一番とらうと云ふは。シテ〽きやつはぢやうごふがあなつと見えた。何番でも取らう。小アド〽これへ出よ。汝もこれへ出よ。アド〽心得ました。小アド〽また身共が行司をせう。シテ〽一段とよからう。小アド〽お手つ。二人〽ヤア〳〵。ト云うて。とびちがへ三度。アド〽とつたぞ。シテ〽こりや何とする。アド〽イヽヤ〳〵。シテ〽あぶないわいやい〳〵。アド〽イヽヤ〳〵。お手つ。參つたの。勝つたぞ〳〵。シテ〽ヤイ〳〵。ヤイそこなやつ。アド〽何ぢや。シテ〽牛の子も竹の子もやらう程に。其足を戻して呉れい。アド〽ならんぞ〳〵。シテ〽足を戻せいやい。アド〽勝つたぞ〳〵。シテ〽足を戻せい〳〵。アド〽ならんぞ〳〵。ト云うて追込み。常の通り。

蛸（たこ）

シテ　蛸の精
ワキ　僧
アヒ　處の者

ワキ次第〽我は佛と思へども。〳〵。人は何とか思ふらん。〳〵。これは日向の國の者にて候。われ未だ都を見ず候程に。此度都に上り候。道行筑紫人。そら言すると聞きつるに。〳〵。我は誠の修行して。清水の浦に着きにけり。〳〵。詞急ぎ候程に。清水の浦に着きて候。是なる卒都婆の陰に立寄り休まばやと思ひ候。シテ〽なう〳〵あれなる修行者に申すべき事の候。ワキ〽こなたの事にて候か何事にて候ぞ。シテ〽是は去年の春の頃。この清水の浦にて身まかりたる蛸の精にて候。なき跡弔うてたび給へ。ワキ〽不思議の事を聞くものかな。何とて魚類の身を轉じ。などか佛果に至らざらん。シテ〽げに〳〵仰せはさる事なれども。漁師に恨みをなす故か。うかみもやらぬ悲しさよ。かまへて〳〵お弔ひあれと。地〽かきけす様に失せにけり。〳〵。中入。ワキ〽扨々只今の者は蛸の精なる由申し候。是なる卒都婆に就いて謂れの候べし。所の人に尋ればやと思ひ候。所の人の渡り候か。アヒ〽所の者とお尋ねは。誰にて渡り候ぞ。ワキ〽是に立ちたる卒都婆は様ありげに見えて候。定めて謂れのなき事は候まじ。御存じ候はゞ語つて御聞かせ候へ。アヒ〽其事にて候。去年の春の頃。播磨の國はこの清水の浦にて大きなる蛸を引上げ申して候程に。漁師も悦び。又所の者共も是を料理致し喰べて候が。かの大蛸化生となつて。夜な〳〵罷出で候程に。所の者集り。この卒都婆を立て弔ひ申して候が。成佛仕りたると見えて其後は出で申さず候さり乍ら。今にも貴き人の御通り候へば。姿を見せ申すなどと承りて候。お僧も逆縁ながら弔うて御通り候へ。ワキ〽懇に御物語り祝着申して候。さあらば立寄り弔うて通らうずるにて候。アヒ〽重ねて御用もあらば仰せられい。ワキ〽賴みませう。アヒ〽心得ました。ワキ〽それ佛事は様々多けれども。取分き亡者の喜ばんと。中に妙なる心經の文。たことくあのくたら。三百三文に買うて佛に奉る。あゝなま蛸〳〵。シテ一聲〽あら堪へがたのしやうかいやな。猶々弔ひ給ふべし。ワキ〽不思議やな人家も見ゆる晝中に。化したる姿の現れたる

は、イロ如何なる者ぞ何者ぞ。シテ〽是は昨日の暮程に、言葉を交し參らせたる、蛸の幽靈にて候なり。御弔ひの有難さに。是迄現れ出でて候。ワキ〽扨は昨日の暮程に。言葉をかはす蛸の精か。最期の有樣懺悔せよ。跡をば弔うて得さすべし。シテ〽思ひ出づるもうとましや。漁師の網に引上げられ。澁皮もむけよ〳〵と洗はれて。削り立てたる俎の上に。カケリ常の如し。シテ〽引据ゑられて後より。地〽〳〵。庖丁を押當てらるれば。眼昏み息詰つて。うつぶきに押伏せられて。這はいてぞ伏したりける。〳〵。シテ〽而うして起上れば。地〽或ひは四方へ張蛸の。照る日に曝され。足手を削られ。鹽にさゝれて。隙もなき苦しみなるを。妙なる御法の庭に出でて。佛果に至る有難さよ。只一聲ぞ南無阿彌陀佛、只一聲ぞ生蛸とて。かきふくやうにぞ失せにける。

太刀奪（たちばい）

シテ　太郎冠者
アド　主人
小アド　通行人
（入道具）

アド〽此邊りの者で御座る。今日は北野のお手水の夜で御座る。參らうと存ずる。先づ太郎冠者を呼出し申付くる事がある。太郎冠者あるか。如常。アド〽今日は北野のお手水の夜ぢや。參らう程に、道具を持てと言へ、シテ〽畏まつて御座る。やい〳〵。頼うだ御方が北野へお參りなさるゝ。道具を持てと仰せらるゝ。フウ、其由申上げう。道具とは何の事ぢやと申しまする、アド〽侍の内にありながら、道具を知らぬか、弓なりとも槍なりとも。或ひは太刀なりとも持てと云へ。シテ〽畏まつて御座る。御内にありながら道具を知らぬか。弓なりとも槍なりとも。或ひは太刀なりとも持てと仰せらるゝ。ジヤア。是も尤もぢや。申上げまする。弓は御座れども。矢が御座らぬ　槍は人の外を持つて通るは見ますれども。御内ではつひに見ませず。お太刀は奥方に御座るかと存じまする。アド〽シイ。扨々物を聲高に云ふ、とかく天下治り目出度い御代に。長道具はいらぬ物ぢや。そち一人供をせい。シテ〽畏まつて御座る。アド〽追付け行かう。サア〳〵來い〳〵。シテ〽ハア。アド〽何と毎年此樣に參ると云ふは、目出度い事ぢやなあ。シテ〽お供の我等ごとき迄。足手息災で參詣致すは、有難いことで御座る

小アド〽急の使に參る者で御座る。誠に。主命とは申しながら。晝夜の分ちもなう方々をありく事で御座る。昔はたとひ遠方へ參つても、足手の骨折迄で御座る、夜中は盜賊の用心を致すに依つて。別して心勞致す事ぢや。ト。小アドしか〳〵。分別して。いろ〳〵長く云ふべし。其内にシテアドせりふあり。シテ〽あれへ見事な太刀を持つて參る。いて取つて參りませう。アド〽人の物を何ととらるゝものぢや。シテ〽私の心覺えが御座るさりながら。丸腰で御座る。そのお腰の物をお貸しなされませ。アド〽身共は同心にない。ト云ふを。小さ刀を無理にぬかせ。シテ行きて。小アド持つてゐる太刀のこじりに手をかける。小アド太刀振り上げる。小アド〽がつきめ。シテ〽ア、ゆるして下され。小アド〽人の持つて居る太刀に手を掛くる。いたづら者であらう。たつた一打ちにせう。シテ〽イヤいたづら者では御座らぬ。命を助けて下され。小アド〽おのれがそのさして居る物をこちへおこせ。シテ〽是は頼うだ人の重代ぢやに依つてならぬ。小アド〽おこさぬか。シテ〽成程やらう〳〵。ト云うて。小さ刀を脱いで渡す。小アドとりて。小アド〽身共は追付け戻りにも此處を通る。爰にうろたへて居たらば。一打ちにするぞ。シテ〽いかな〳〵。うろたへて居る事で

は御座らぬ。小アドへまだ其處に居るか。ト云うて。太刀に二足寄す。 シテへア、許して下され〳〵。ト云うて。橋がかりに隠れてゐる。 小アドへ一段の仕合せぢや。先づ急いで參らう。 シテへとつたぞ〳〵。 アドへとつたか〳〵。 シテへこちの刀をあちへとりました。 アドへ是はいかな事。あれは身共が重代ぢや。おけと云ふに聞かぬに依つてぢや。いて取つて來い。 シテへ私はあの様な者にかかり合ふ事は恐ろしう御座る。 アドへ扨々にが〳〵しい。おのれの様なうつけは又あるまい。 シテへお前は私を一人拾はせられた様なもので御座る。今の刀をやつたればこそ命を助けました。やられば私を斬ると申しました。 アドへまだぬかしをる。其時何故に刀を拔いて相手にならなんだ。 シテへもどかしさうに仰せらるゝ。あの氷をつゝと割つた様な太刀を。するりと拔いて斬らうとしたものが。何の思案も出るものでは御座らぬ。 アドへ是は口惜しい。何としようぞ。 シテへ申し〳〵。今の者が。戻りにも爰を通る。此邊にうろたへて居たらば。一討にせうと申した程に。早う爰をのいたらよう御座らう。 アドへあのうつけがぬかしをる事は。されどもせめての事を聞いた。 シテへ暫くも爰に居る事はいらぬもので御座る。 アドへエヽ、にが〳〵しい。おのれ隨分見違へぬ様にして。是へ寄つて居よ。 シテへハア。 小アドへ今日は存じもよらぬ仕合せを致した。扨も〳〵結構に拵へた刀ぢや。 シテへきやつで御座る。アドへ早ういて捕へい。 シテへ私は恐ろしう御座る。お前捕へさせられい。 アドへ埒のあかぬやつぢや。とつたぞ。 小アドへ是は何とする。 シテへ捕へさつしやつたか。 アドへ捕へた〳〵。 シテへきつと捕へて御座れ。 アドへ太郎冠者。刀をとれ〳〵。 シテへそれをこちへおこせ。 アドへひたくれ〳〵。 シテへそれをこちへおこしをれ。 小アドへ爰を放して下され。 アドへ放してよいものか。 おのれ。よう身共が刀を取りをつたな。 シテへやい。最前身共をよう切らうとしをつたな。それがよいか。是がよいか。 アドへ何をしをる。 シテへ鼻しつぺいをあてまする。

是よりあと。成上りの通り。

狸腹皷（たぬきのはらつゞみ）

シテ　尼（牝狸）
アド　獵師
（入道具）

アドへ隠れもない獵師で御座る。何時ぞやからふと廣野へ出て。狸を二つ三つ射て御座るが。なか〳〵面白いもので御座る。此間も女狸を射そこなうて御座る。今日もまた狙ひに出うと存ずる。 シカ〳〵。誠に。世に慰み多けれども。殺生程面白いものは御座らぬ。今日は何卒仕合せを致さうと存ずる。何かと云ふ内廣野ぢや。いつも此邊りへ狸は出る。まづ物陰に忍うで居ようと存ずる。ト云うて。笛座の下に居る。 シテ次第へ知られず住みし古塚を。〳〵。出づるや思なるらん。是はこの邊りに住む狸で御座る。爰にある者殊の外殺生を好み。毎日この邊りへ出て身共などを狙ふによつて。中々聊爾に里へ出る事もならぬ。此様な難儀な事はない。また妾が連添ふ者が。此のうち里へ行かれたが。何と致したか。二三日も古塚へ歸られぬによつて。心許なう思へども。妾も唯ならぬ身で尋ねにも得參らぬ。餘り心ならぬによつて。斯様に尼の姿に化けて。尋ねに行かうと思うて。ト云うて。我姿を見る。口傳。 まづ是迄に化けた。急ぎ里へ行かばやと思ひ候。 道行住馴れし。山の外陰を立出でて。〳〵。足に任せて行く程に。〳〵。里近くにもなりにけり。急ぐ程に里近くになつた。やれ〳〵嬉しや。是

迄來る内に何者にも會はなんださり乍ら。殊の外淋しい。此邊に人影の見えぬ時は。小歌ぶして參らう。小歌佛も衆生も隔なし。かのやしゆたら女の妹背の中も。今の衆生にかはらぬや。あれに火の光が見ゆる。もし狩人の燈の火ではないか。いや／＼人家の光さうな。扨々よい肝を潰した。さて連添ふ者はどれに居らるゝ事ぞ。心許ない事ぢや。小歌妾戀に。おのがありかはよしや唯。知るとも野邊に行きて見ん。アドへやう／＼人顔も見えぬ時分になつた。いつも今時分は狸が參るが。エイ。これは如何な事。此邊の尼寺では見知らぬ御方で御座る。殊に暮に及うで。何として此處へお出てて御座る。シテへ妾は此邊の尼寺に二百五十戒を保つ比丘尼ぢやが。そなたは何人で御座る。アドへ身共は每夜此處へ出て。殺生して慰む狩人で御座る。シテへ扨は聞及うだ獵師とやらか。アドへなか／＼。シテへ扨々慰みこそ多からうに。生あるものゝ命取るを慰みにすると云ふは。何とした恐ろしい事でおりやるぞ。アドへ別の事でも御座らぬが。殺生の内にも別して狐狸を取るが面白う御座る。シテへ狸をとりわけ面白がるはどうした事でおりやる。アドへまづ身は汁にして喰べます。シテへホイ。アドへ皮は剝いで引敷に致す。骨は打碎いて捨つる事で御座る。シテへ勿體なや／＼。假にも殺生を見物するさへ罪になると云ふに。其樣な胴慾な事があるものでおりやるか。妾に恐ろしい物語がある。語つて聞かせう程に。とくと聞いて。殺生をふつ／＼とまらしませ。アドへそれは如何やうの事で御座る。まづ語つて聞かせられい。シテへ心得た。語既に釋迦佛。天竺靈鷲山にして。御法を說き衆生を示し給ふにも。殺生偸盜邪淫妄語飲酒戒とて。取分けこの五つを戒め給ふ。中にも殺生戒は。第一の戒めに定め給ふ。それを如何にと申すに。その殺さるゝ者に限らず。或ひは親は子を失ひ。子は親に離れ。夫は妻を奪はれ。妻は夫に別れ。その歎きいくばくぞや。殊に畜類は。恩愛煩惱執着深く。別れの悲しみ人に勝り。その恨みの積り／＼て。殺生をするその人に限らず。子々孫々に至る迄。その報い。此世のみか未來永々遁るべからずとなり。なんぼう恐ろしき事にては候はぬか。今日よりしては。殺生をふつとお止まりあれかしと思ひすは。アドへ扨々是は恐ろしい物語を承つた。其樣な事ともゆめ／＼存ぜなんだ。此上はふツつと殺生をとまらうと思ふ事で御座る。シテへやれ／＼それは奇特な事をおしやる。扨はこの尼が今の物語を聞いて。ふツつと殺生をとまらうとおしやるか。アドへ如何にもとまらうと思ふ事で御座る。シテへそれはよい心入でこそあれ。此後は必ず／＼とまらしませ。アドへ何がさて恐ろしい物語を承つた。ふつ／＼殺生を思切つて御座る。シテへそれならば。妾は最早行きまする。アドへ某の宿はあたり近い所ぢや。同道してお茶でも申さうものを。シテへ忝うはあれども。今日は穢らはしい。重ねてお目にかゝりませう。アドへ最早御座るか。二人へさらば／＼／＼。ト云うて。橋掛りへゆく時。シテへ世には志のよい者がある。妾が恐ろしい教化を聞いて殺生をとまつた。扨も／＼奇特な人かな。ト云うて。口傳あり。なう／＼嬉しや／＼。まんまとたばかりすました。此樣な喜ばしい事はない。何處へ行くと云うても心にかゝる事はない。心靜かに犬を尋ねう。最前の者が此間。ひたもの狸を取つたと云うたが。もし妾が夫は取られはせぬか。心許ない事ぢや。ト云うて。口傳。シテへあら恐ろしや。向ふに犬が吠えて來る。まづ此邊へ隱れう。ト云ふ内にアド橋掛りへ立ち。アドへ最前の尼が。身共が殺生をする事

た殊の外戒めたが。あの尼と別れると。しきりに犬のおどす音がする。もし狐か狸が徘徊するではないか。何とも合點のゆかぬ事ちや。アドへされぱこそ。がつきめやらぬぞ。ト云うて。さがす内。尼を見付け。矢をつがひ。シテへなう悲しや。助けて下され〳〵。アドへ見れば最前の尼御ぢや。何故こゝにかゞうて居さします。シテへ犬の鳴くが恐ろしさに。忍うで居ります。アドへ扨はおのれは。此中おらう女狸ぢやな。既に化かされうとした。手とらまへにして皮を剝ぐぞ。ト云うて。門口より外へ追うて出る。シテへアヽ先づ待つて下され〳〵。アドへ待てとはなにと。シテへ最前夫を失ひ。子を思ふと申したも。皆身の上の事で御座る。此中夫は里へ出られて。今に古塚へ歸られませぬ。餘り心許なう御座るによつて尋ねに出ました。其上妾も唯ならぬ身で御座る。命は惜しみは致さねども。腹な子が不憫に御座る。どうぞ命を助けて下され。アドへイヤ愛なやつが。是迄度々狩そこなひ。その上最前の如く。身共をまんまとだましをつた。最早遁れぬ。射て取るぞ。シテへアヽ先づ待つて下され〳〵。アドへ何と待てとは。シテへ子を思ふ道に迷ふは人間に限らず。まして畜生は恩愛煩惱執着の深いもので御座る。未來永々迄も忘れは致さぬ。どうぞひらに命助けて下され。アドへ其樣に云へば不憫にもあり。それならば。命は助けてもやらうが。愛に狸の腹鼓といふ事があるげな。終に見た事もない。是を打つて見せたらば。命を助けてとらせうぞ。シテへ何が扨。命さへ助けて下されう事ならば。腹鼓を打ちませうが。眞實命を助けて下さるゝか。アドへ親子の別れを悲しむは。人間畜生の差別はあるまい。逃げさへせずば助けてとらせう。シテへ何しに僞りを申しませう。腹鼓を打つて見せませう。アドへそれならば助けう程に。化けを現して。急いで打つて見せい。シテへ心得ました。アドへとてもの事に。ゆるりと見物致さう。ト云うて。葛桶に腰掛ける。其内に。シテ橋掛りへゆく内。衣着附をとる。是より腹鼓いろ〳〵。口傳。アドへよく〳〵思へば。助くるは殘多い。致しやうがある、がいとあやからぬぞ。ト云うて。弓矢を番ひ。橋掛りより舞臺の欄の上に。上方を見廻し。アドへ是は如何な事。たつた今迄是にゐたが。ト云うて。見付けて。弓射かけると。シテはあちらこちらへ逃げる。アドへまた隱れ居つた。ト云うて。追ひまはり。シテが橋掛り迄逃げる時。アドへヤア。ト云うて。橋掛りへ弓をはなす。南無三寶また狩りそこなうた。ちやつと捕へて下され。やるまいぞ〳〵。ト云うて。追込み入る。

樽聟（たるむこ）（無緣聟とも）

シテ　聟
アド　舅
小アド　太郎冠者
何某

（入道具）

アドへこのあたりに住居する者で御座る。今日は最上吉日ぢやに依つて。聟がわする。先づ太郎冠者を呼出し申付ける事が御座る。ト云うて。呼び出す。出る常の如し。アドへ今日は吉日ぢやに依つて。聟がわする筈ぢや。云付けた物は用意したか。小アドへ成程悉く用意致して御座る。アドへ聟殿が見えたらば。此方へ知らせ。小アドへ畏まつて御座る。常の如くつめる。シテへ舅に可愛がらるゝ花聟で御座る。今日は最上吉日なれば聟入を致す。則ち祝うて斯樣に樽肴を持參致す。さり乍ら。自身持つて參るも如何で御座る。愛にお目をかけらるゝお方が御座る。是は人を使はせらるゝ。それへ參り。人を雇うて持たせて。直ぐに參らうと存ずる。シカ〳〵。人を使はぬと申す事も。終にはしれうけれども。初めて參る事なれば。少しは取

繕うて參る事ぢや。何かと申す內に是ぢや。ト云うて案內乞ふ。出るも常の如し。何某へ何としてお出でやつたぞ。シテへ今日は聟入を致しまする。何へ扨々めでたい事ぢや。存ぜいで人を以ても申さなんだ。何ぞ用があらばよばしめ。シテへ忝う御座る。則ち御無心があつて參つて御座る。何へ何なりともおしやれ。シテへ初めて參るに依つて。斯樣に樽肴を用意致いて御座る。自身持つて參るも如何で御座る。こなたの御家來を一人雇はして下されい。何へ何より易い事ぢやが。折節今日は方々へ使にやつて、一人も宿にをらぬ。シテへお前のお內に。人の一人や二人ないと申す事があるもので御座るか。何へ何しに僞りを云ふものぞ。さりとては今日に限つて一人も居らぬ。シテへそれならば是非に及びませぬ。常々何なりとも用があらば遠慮なう云へと仰せらるゝに依つて。此度に限らず度々御無心を申上げまする。又今日は私が一世一代の聟入で御座るに依つて。天晴お世話になりませうと存じて參つて御座る。兎角自身持つて參りませう。何へなうなう。今日初めて行くに。何と自身持つて行かるゝものぢや。さりとては今日に限つて人がありあはいで。此樣な氣の毒な事はない。その樽肴は身共が持つて行かうぞ。シテへお前は私をおなぶりなさるゝか。何へいや〳〵なぶりは致さぬ。シテへぢやと申して。お前に何と持たせて參らるゝもので御座る。何へそれは少しも苦しうない。おしやる通り一世一代の聟入に。某がこれ程の役になりとも立たいでは。日頃懇意な甲斐がない。是非とも身共が持つて參らう。ト云うていやと云ふを。無理に持つ。シテへ是は慮外千萬な事で御座る。何へさうおしやるな。少しも如在のない上からでおりやる。さあ〳〵おゆきやれ。シテへ先づさきへお出でなされませ。何へいらざる辭儀ぢや。先へゆかしめ。シテへそれならば參りませう。シカ〳〵の內。迷惑さうに行く事第一なり。心得あるべし。シテへ誠に。存じよらぬ御苦勞をかけまして。斯樣の氣の毒な儀は御座りませぬ。何へ何故にその樣におしやる。兎角某をわごりよの內の者ぢやと思はしめ。シテへそれは冥加恐ろしい事で御座る。何へいや〳〵。舅の方へ外聞ぢや。あれへお行きやつたりとも。太郎冠者〳〵と。のしきつて呼ばしめ。シテへそれが何と呼ばれませう。何へそれは埒のあかぬ。ちと稽古のため呼うでみさしめ。シテへそれならばちと呼うてみませう。ト云うて。呼んで見る。いろ〳〵あるべし。シテへどうもお顏を見ましては聲が出ませぬ。何へ聲が出ぬと云ふ事があらうか。思切つてお呼びやれ。シテへさやうならばお免されませ。呼うでみませう。何へ早う呼ばしめ。シテへやい〳〵太郎冠者。何へハア。シテへ御座りまするか。何へ是はいかな事。シテへお免されませ〳〵。何へ心弱い事ぢや。其樣な事で人が使はるゝものか。とかく身共ぢやと思はずに。家來の樣に呼うで行かしめ。シテへ畏まつて御座る。やい〳〵太郎冠者。何へハア。シテへ來るか。何へ參りまする。シテへ參れ〳〵。何へ參りまする〳〵。シテへ何かと云ふ內に是で御座りまする。何へシイ。ト云うて叱る。シテへ何かと云ふ內に是ぢや。某が參つた通り案內なせい。何へ畏まつて御座る。ト云うて案內乞ふ。小アドも常の如し。樽肴持參。何へ聟がわせて御座る。則ち是に持參で御座る。その通り仰せられて下され。小アドへ其由申しませう。暫くそれにお待ちなされい。何へ心得ました。小アドへ申上げまする。聟殿のお出でて御座る。則ち是は御持參で御座る。アドへかうお通りなされと云へ。小アドへ畏まつて御座る。かうお通りなされいと申されまする。何へ心得ました。かうお通りなされませ。シテへさやうならば出ませう。何某叱る。

シテ〽不案内に御座る。アド〽ようこそ出てさせられた。早々申入れませうな。何かと延引致して御座る。小アド〽いや。聟殿は表に御座りまする。アド〽あれは誰ぢや。小アド〽御内の衆さうに御座る。シテ〽これ／＼太郎冠者。そちは何と云ふぞ。身共が聟ぢや。表に居るは家來ぢや。アド〽それならばかう通しませい。小アド〽私がよう存じてをりまする。シテ〽いや。さりとては身共が聟ぢや。小アド〽これへお通りなされませ。何〽私はそれへ參る者では御座りませぬ。小アド〽扨々御辭儀も事に依つた事で御座る。ひらにお通りなされませ。ト云うて。無理に引摺り。伴れて行く。シテ〽これ／＼。それは雇うて來た家來ぢや。小アド〽まだ何やら云ふか。爰に居る人でない。外へ出さしめ。ト云うて。引立て、橋がかりへ突きやる。アド〽何故に初めからお通りなされぬ。何〽いや私はこれへ參る者では御座らぬ。アド〽扨々御遠慮深い事で御座る。何しにさやうに仰せらるゝ。御仁體と申し。隱れは御座らぬ。太郎冠者。盃を出せ。小アド〽畏まつて御座る。シテ〽これは如何な事。舅も麁相な人ぢや。太郎冠者は何を目當に。身共な聟でないと云ふぢや迄。アド〽これから食べて進ぜう。ト云うて呑み。さす。何某戴き。何〽お盃は戴きませうが。迷惑で御座る。アド〽何しに其樣な事を仰せらるゝ。サア／＼早う參れ。此の間。シテ橋がゝりにて。いろ／＼腹を立て。けなりがる。何某の袖を引き。盃をソット取り呑みなどする。併しやはり無き方よし。色々心得あるべし。つシカ／＼を云ふ事第一なり。アド〽聟殿はひとつ參るさうな。ト云うて。二人とも強ひる。何〽食べませねども。お強ひなさるゝ。もひとつ食べませう。アド〽太郎冠者。云付けて置いたもの出せ。小アド〽畏まつて御座る。ト云うて太刀を出す。聟色々シカ／＼云うてあせり。せく心持。アド〽これは麁末な太刀なれども。今日の祝儀に進上致す。何〽忝うは御座れども。私は貰ひます者では御座りませぬ。最前のが聟殿で御座る。アド〽それは何と致した事で御座る。御仁體と申し。但し舅が氣に入りませぬか。何〽いや。さやうでは御座らぬ。人違ひと申すもので御座る。アド〽まだ仰せらるゝ。私もこの邊りでは人に知られた者で御座る。最前の樣な人柄な者が。聟になる者で御座るか。假令人違ひで御座らうとも。この引出物はこなたへ進上致す。納めて下され。何〽これは何とも迷惑に御座れども。然らば戴きませう。扨これをそれへ進じませう。アド〽是へ、下され。最早參らぬか。何〽もはや食べますまい。アド〽それならば。太郎冠者盃をとれ。小アド〽畏まつて御座る。何〽扨お暇申しませう。アド〽最早御座らうか。よう御座つた。ト云うて暇乞。常の如し。何〽扨々思ひの外な仕合せを致した。シテ〽なう／＼。そなたを雇うて來ればよいものを。ひよんな人を伴れて來て。さん／＼の首尾で御座る。何〽されば氣の毒に思へども。お聞きやる通りの首尾ぢや。そなたも常々ちと人柄なよう持たしめ。シテ〽生れついた人柄が俄に直るもので御座るか。扨こなたは太刀を貰はしやれたの。何〽されば。存じもよらぬ仕合せを致した。シテ〽ちと見せさつしやれ。何〽これなか。見やれ。シテ〽是は身共が貰ふ筈の太刀ぢや。こちへおこさしめ。ト云うて。引たくり逃げて入る。何〽橫着もの。どちへ行く。シテ〽是が欲しいか。ならぬぞ／＼。何〽憎い奴の。やるまいぞ／＼。ト云うて。追込み入るなり。

【ち】

忠喜(ちゆうき)

シテ　忠喜
アド　庵主
（入道具）

アド〽當庵の住持で御座る。忠喜を呼出だし。申附くる事が御座る。ト云うて。呼出す。出るも常の如し。そなたを呼出すは別の事でない。此のうち寺僧達の勤に行かれた所を知つてお居やるか。シテ〽なる程存じて居りまする。アド〽則ち明日は結願ぢや。愚僧も導師に頼まれた。行かればならぬ。袈裟も衣も新しいを出して置かしませ。シテ〽畏まつて御座る。アド〽そなたも供に連れて行かうぞ。シテ〽それは忝う御座る。私もお供に參つて御座れば。お布施が大分御座らうと存じて。此の樣な悦ばしい事は御座らぬ。アド〽いやこゝな者が。どこにか出家の布施があつたらなかつたら大事か。シテ〽いやさうも仰せられな。お前もどれへお出でなされても。お布施が大分御座れば御機嫌がよう御座る。そつと御座れば中の御機嫌。又曾て御座られば。科もない私を呵らせらるるでは御座らぬか。アド〽愚僧がいつ其の樣な事がある。シテ〽いつもさ樣で御座る。アド〽これはいかな事。いかにさうあればとて。其の樣な事をいふと云ふ事があるものか。さて長髪ではゆかれまい。つむりを剃らねばならぬ。延喜は留守なり。誰に剃らしたものであらうぞ。シテ〽誰れ彼れと仰せられうより。

私が剃りませう。アド〽汝が樣な麁相者はあぶない。シテ〽あぶない事はなけれども。餘り剃りたうも御座らぬ。こなた次第ぢや。アド〽いやこゝな者が。大事に掛けて剃りませうとはいはいで。こなた次第とはどうした事ぢや。シテ〽はてお前次第ぢやに依つて。こなた次第で御座る。アド〽これはいかな事。悴の時分より氣隨に育つるに依つて。師匠に口をあかさぬやうに物をおしやる。と云うて誰に剃らせう者もない。汝になりとも剃らさずばなるまいさりながら、餘の麁相とは違うて。刄物を身に當つる事ぢやに依つて。隨分大事に掛けてお剃りやれ。シテ〽心得ました。アド〽剃刀が合はずば痛からう。剃刀を取つて來て合はしておくりやれ。シテ〽畏まつて御座る。アド〽愚僧は其の間につむりをもまう。やい〳〵忠喜。シテ〽はあ。アド〽最前も云ふ通り。刄物を身に當つる事ぢやに依つて。隨分大事に掛けてお剃りやれ。シテ〽畏まつて御座る。アド〽何と剃刀は合うたか。シテ〽なる程合ひました。アド〽つむりも大方もめた。さあ〳〵。是へ寄つてお剃りやれ。シテ〽心得ました。ト云うて。手合はせをして。アドに行きあたる。シテ〽あゝ御許されませ〳〵。アド〽これは何とする。シテ

〽剃刀の手合せをして參りましたれば。見えませなんだ。アド〽いかに剃刀の手合せをすればとて。この大きな坊主が見えぬと云ふ事があるものか。汝がやうな者はそれへ出よ。物をいうて聞かせう。シテ〽畏まつて御座る。アド〽總じて汝程師匠に慮外をする者はない昔から。弟子七尺去つて師の影を踏まずと云ふ事がある。此樣な事も知らぬであらう。シテ〽ハア唯今まではさ樣の事を存じませず。唯うか〳〵と暮らして御座る。此後は嗜みませう程に。唯今までの不調法はまつぴら御ゆるされて下されませ。アド〽せめてそれ程までにおしやれば。愚僧も滿足した。さあ〳〵これへ寄つてお剃りあれ。シテ〽畏まつて御座る。何と頭はようもめて御座るか。アド〽おゝようもめてある。シテ〽まだこちらの方がもめぬさうに御座る。アド〽はてよう揉めてあると云ふに。あれは何をしをる事ぢや知らぬ。シテ〽南無三寶。アド〽何とした。シテ〽唯今のお示しの下から。既にお前の影を踏まうと致して御座る。アド〽これはいかな事。それは譬でこそあれ。聊爾に物の云はるゝ事ではない。さあ〳〵。どうなりともして早うお剃りやれ。シテ〽畏まつて御座る。アド

〽ア、けふに限つて延喜は留守なり。此様な氣の毒な事は御座らぬ。シテ〽いで〱髪を剃らんとて。〱。弟子七尺をさつて師の影を踏まずと。云ふ事あれば剃刀のつかを。七尺五寸につぎ延べて。および剃りにぞ剃つたりける。アド〽なほ〱剃れやよく剃れや。シテ〽忠喜は師匠の仰に随ひ。剃刀を引寄せ手合せして。又剃刀を取延べて。前をうしろ。後を前へ逆剃して。鼻の先をぞそいだりける。アド〽あいた〱。シテ〽これはいかな事。アド〽師匠は肝を潰しつゝ。是處や彼處と立廻れば。シテ〽忠喜は餘りの迷惑さに。門前さして逃げければ。アド〽坊主は鼻を抱へつゝ。眠藏（めんざう）さして入りにけり。

千切木（ちぎりき）

シテ　太郎
アド　主人
小アド　太郎冠者
女　太郎の妻
立衆

（入道具）

アド〽これは此の邊りの者て御座る。若い衆と初心講を結んで連歌を致す。乃ち今日は某が當にあたつて御座る。最早や時分もよう御座るに依つて。太郎冠者を呼出だし。何れもへ人を遣さうと存ずる。（ト言うて呼出す。出る。常の如し。）アド〽汝は何れもへいて。最早や時分もよう御座るに依つて。お出でなされいと言うていて來い。小アド〽畏まつて御座る。アド〽又存ずる子細が有るに依つて。太郎方へは行くな。小アド〽心得ました。（ト言うて。アドつめる。常の如し。）小アド〽扨これは殿方へ參らうぞ。いや誰殿が近い。先づあれへ參らう。（ト言うて。樂屋向いて案内乞ふ。常の如し。）小アド〽頼うだ者申しまする。最早や時分もよう御座る。お出でなされて下されいと申越して御座る。頭〽何れもお出でなされうとあつて。身共が所にお揃ひぢや。小アド〽すれば御銘々へ參るに及びませぬか。頭〽銘々へ參るに及ばぬ。汝は先へ行け。小アド〽それならばお先へ參りませう。追附けお出でなされませ。頭〽心得た。小アド〽申上げまする。アド〽何事ぢや。小アド〽唯今誰殿へ參つて御座れば。何れもあの方へお揃ひで。追附けこれへお出てて御座る。アド〽お出でなされたらば。こなたへ知らせ。小アド〽畏まつて御座る。頭〽なう〱。何れも御座るか。各〽これに居まする。頭〽唯今誰殿から人が見えました。いざ參りませう。各〽一段とよう御座らう。頭〽さあ〳〵御座れ。各〽心得ました。（ト言うて。案内乞ふ。常の如し。）頭〽身共等が來た通りを言へ。小アド〽其の由を申上げませう程に。暫くそれにお待ちなされませ。頭〽心得た。小アド〽申上げまする。アド〽何事ぢや。小アド〽何れもお出でて御座る。アド〽かうお通りなされと言へ。小アド〽畏まつて御座る。かうお通りなされませ。頭〽心得た。お當目出度う御座る。アド〽ようお出でなされました。（立衆各挨拶する。受ける。常の如し。）アド〽何れもようお出で。先づ下に御座れ。各〽心得ました。アド〽扨いつも太郎が參れば。連歌の邪魔になりまするに依つて。わざと人を遣しませなんだ。頭〽私共もさし心得て寄りませなんだ。アド〽若し聞附けて參つたりとも構はせられな。各〽心得ました。アド〽さて今日の御發句はどなたて御座る。頭〽ちと珍しう御亭主からなされませ。アド〽いやいや。客發句亭主脇と申す事が御座る。やはり各のうちからなされませ。頭〽それならば出合に致しませうか。各〽これは一段とよう御座らう。アド〽先づ何れも案じて見させられ

い。各〽心得ました。シテ〽この邊りに住居する太郎と申す者で御座る。今日たれ殿方で連歌の會を勸むる。某も連中なれども。何故にやら身共が方へ人をおこさぬ。察する所は某を嫌ふと見えた。其の樣に嫌ふ所へはなほ參らう。あれ等ばかり寄つて。何と連歌がなるものぢや。ほう。こりや何れもお揃ひぢやの。各〽しい。シテ〽なう亭主。聞けば今日は連歌の會を召さるげな。おれも連中ぢやに。なぜ身共が方へ人をおこさぬ。但しおれが來れば何ぞ邪魔になる事が有るか。いやまた亭主は取込うて忘れまいものでもないが。和御寮たちは同じ來る道をなぜ身共が所へは誘はぬぞ。但しおれが來いでも連歌の會が勤まるか。あゝ合點の行かぬ衆ぢや。ハア懸物をかけられた。あれは亭主の自慢の布袋の川渡り。あゝ歪うだり〳〵。世には三寸の見直しと言ふ事が有れど。七寸も八寸も歪うで有る。何と何れもあれが目に見えぬか。ハア花を生けられた。あれは定めて摑み挿したと言ふ事であらう。あの樣な事をして置かうより。藁でくる〳〵と束ねてほり込うで置いたがよい。アド小アドを招き。去なせと言ふ事を。顏にて敎ふる。小アド立つて。小アド〽畏まつて御座る。太郎〳〵。シテ〽何ぢや。小アド〽ちよとおりやれ。シテ〽何ぢや。小アド〽そなたが來れば。何れも連歌の邪魔になると仰せらるゝ。お歸りやれ。シテ〽イヤこゝなやつが。おれも連中なればこそ來れ。己れが何を知つて。すつ込うで居をれい。イヤこさし出たやつの。アド〽また太郎が參りました。各〽其通りで御座る。アド〽必らず構はせられな。各〽心得ました。シテ〽あれ〳〵。硯文臺の置所が違うてある。あれに先の月も言うて聞かせたに。まだ覺えぬか。扨も〳〵。物覺えの惡い衆ぢや。アド〽太郎〳〵。シテ〽何で御座る。アド〽ちよつと來い。シテ〽何で御座る。アド〽用が有る。ちよつと來い。シテ〽何で御座る。アド〽そなたが來れば。何れも連歌の邪魔になると仰せらるゝ。料理が出來たらば呼びにやらう程に。お歸りやれ。シテ〽何ぢや。料理が出來たらば呼びにやらう程に去ね。アド〽なか〳〵。シテ〽イヤこれ誰殿。アド〽何ぢや。シテ〽おれも連中なればこそ來れ。料理を食ひには來ませぬぞや。常々そなたは人選みをすると言うて。世間の取沙汰が惡い。ちとお嗜みやれ。アド〽推參な事を言ふ。すつ込うで居をらう。シテ〽これは何とする。アド〽なう〳〵何れも。此度太郎が參つたらば。皆寄つて踏みませう。各〽よう御座らう。シテ〽金言耳に逆ふと言ふは此の事ぢや。よい事を言うて聞かせば腹を立てる。我を惡いとは曾て思はぬさうな。おれが來いで此の當座が勤まるものか。さあ〳〵。今日の發句は誰ぢや。發句をおしやれ。聞かうぞや。ト言うて居るうち。皆々めくばせし。立寄り打ちこかし。シテを踏むなり。各〽己れは憎いやつの。覺えたか〳〵。シテ〽あいたあいた〳〵。なう助けて下されい〳〵〳〵。女〽やあ〳〵。何と言ふぞ。太郎が踏まるゝ。それは誠か。なう腹立ちや〳〵。何者が踏み居るぞ。こちの人はどれに居る。さればこそ是處に居る。なうこゝな人。こちの人。妾で御座る〳〵。シテ〽いや重ねて參る事では御座らぬ。命をお助けなされて下されい〳〵。女〽これはいかな事。氣をはつたとお持ちやれ。妾で御座るわいなう。シテ〽エイ女ども。そちは何として見附けた。女〽何としてと言ふ事が有るものか。こなたが踏まるゝと聞いたに依つて。身も世も有られいで。驅着けました。これは先づ誰が踏んだぞいやい〳〵。シテ〽何ぢや踏まれた。女〽オヽさて踏まれたげな。シテ〽いやこゝな奴が。男が踏まれてよいものか。女〽ヤイそこな奴。シテ〽何

ぢや。女へおのれ踏まれたらばこそ。その足跡は何ぢや。シテへムヽ此の足跡が不審なか。女へおゝさて。シテへこれは物ぢや。女へ物とは。シテへ何れもが太郎の定紋は何ぢやとおしやたに依つて。まだ定まる紋も御座らぬと言うたれば。紛れぬ様に草履の紋を附けて貰うた。何とよう似合うたか。女へ何ぢや似合うたか。シテへなか〳〵。女へえい腹立ちや〳〵。己れ附けう紋も多からうに。草履の紋と言ふ事が有るものか。踏まれて其の分では居られぬ。いて果して來い〳〵。シテへあの踏まるれば果さればならぬか。女へ己れ果さいで勘忍がなるものか。シテへ踏まるゝ度に果さうならば。そりやぢごがない。女へ扨々此度ばかりかと思へば。度々踏まるゝか。シテへオヽ再々の事ぢや。女へえい腹立ちや〳〵。其の様な事を聞いて。何と勘忍がなるものぢや。先づ是へ寄れ〳〵。シテへこれは何とする。女へ先づこれを差せ。シテへ迷惑な事ぢや。女へ此の棒を持つていて果して來い〳〵。先せ居らう。シテへやい〳〵。汝は女ぢやに依つて何も知らぬ。はたと言へば。事に依ると身共が命が無いぞよ。女へ己れまた生きて居ようと思ひなるか。シテへすれば身共は死んでも大事ないか。女へオヽ死んでも大事ない。シテへ笑ふ。わゝしい女は夫を食ふと言ふが。お主の事ぢや。身共はどの様に踏まれても。死にたうはない。死んでよくば。そなた名代にいてくれい。女へまだそのつれを言ふか。是處へ來い。先づ生ぬるい此の肩た拔け。其の根性ぢやに依つて踏まれなる。是も差せ。シテへこれは迷惑な事ぢや。（ト言うて。素襖の右の肩脱き脱かせ。髪をほどき。小さ刀を差させ。右の手に棒を持たせて。向ふへ押すなり。）女へ此の棒を持つてはたしに行け。はたして來れば内へは寄せぬぞ。シテへ何ぢや。果して來れば内へ寄せぬ。女へおゝさて。シテへ南無三寶。身體爰に谷まつた。この内へ寄せぬにほうど困つた。それならば果しに行かう程に。お主も來てくろゝか。女へオヽそなたばかりでは心許ない。妾も行きませう。シテへそれならば安堵した。女へして今日の當家は誰で御座る。シテへ今日の當家は誰であつた。女へさあ〳〵。その誰方へ行かせられい。シテへ心得た。扨あの誰は日頃心易うする者ぢや。何と思うてやら。したゝかに踏みなつた。女へ心易いと言うて。それがあてになるものでは御座らぬ。シテへどうでも亭主振にかしたゝか踏み居つた。女へ扨

々それに憎い事で御座る。シテへ是處ぢや〳〵。女へ是處か。さあ踏込め〳〵。シテへ其の様に喧しうおしやるな。先づつうとそちへのいておいやれ。ものも。案内もう。女へやいそこなやつ。今はたすにものもう所か。踏込め〳〵。シテへそちは女ぢやに依つて。何も知らぬ。男は辭儀にあまれと言ふわいやい。女へまだ其のつれを言ふか。辭儀作法も要るものか。踏込んではたせ〳〵。シテへさりとては喧しう。そなたはつうとのいておいやれ。女へエイもどかしいやつぢや。シテへたれ内にか。アドへ留守。シテへ何ぢや留守。女へこれ〳〵。何と言ひまする。シテへ留守ぢや〳〵。女へ扨々殘り多い事ぢや。シテへ二つとりならば留守がよい。やい誰の卑怯者。留守が誠なら出て見なれ。出る所を此の棒で打つて〳〵打ち殺してやらうぞいやい。女へオヽお出かしやつた〳〵。シテへ何と出かしたものであらうが。女へさて此の次は誰ぢや。シテへ此の次は誰ぢや。女へさあ〳〵。其の誰方へお行きあれ。シテへ大勢の事ぢやに依つて。悉く行かいでも大事ありそむない。女へいや〳〵皆行かねばならぬ。シテへそれならば、さあ〳〵おりやれ。女へ心得ました。

シテへさて身共は大抵の者に負くる事ではないけれども。あの誰は大力ぢやに依つて。身共が小腕を摑ち上げて置いて。したゝかに踏み居つた。女へきやつが面は常々見たむないと思うて居るに。其の様に踏み居りましたかいのう。シテへ是處ぢや〳〵。女へ是處か。さあ〳〵。踏み込め〳〵。シテへ合點ぢや〳〵。そなたはつうとのいておいやれ。女へもどかしい事かな。シテへ何某様お宿に御座りますか。女へヤイそこなやつ。シテへ何ぢやいやい。女へ今はたすに。様とは何の事ぢや。シテへめとぬかせ〳〵。シテへめと言うたらば腹を立てうぞよ。女へ腹を立てゝも苦しうない。シテへめと言うても大事ないか。女へオヽ大事ない。シテへめと言うたらば腹を立てうが。め。内に居るか。頭へ留守。シテへ又留守か。女へ何と言ひました〳〵。シテへ又留守ぢや〳〵。女へ扨々殘り多い事ぢや。シテへ留守こそよけれ。やい誰の卑怯者。留守が誠なら出て見なれ。出なる所を此の棒で眉間のほうど突いたらば。あなのけにこけうに依つて。頓て兩の足を取つて。五町も十町も引いて〳〵引摺り殺してやらうぞいやい。女へオヽお出かしやつた〳〵。シテへ何と強い者か。女へ扨その次は誰であつた。シテへこの次は誰ぢや。女へさあ〳〵。そこへ行け〳〵。シテへいや是はよしにしよう。女へなぜに。シテへあれは見掛けには似合はぬ短氣者で。きかんと言へば矢も楯も溜まる奴ではない。あの様な所はやめにして。もそつと餘の所へ行かう。女へいや〳〵。其様な所へはなほ行かねばならぬ。シテへ何ぢややなほ行かねばならぬ。女へさあ〳〵。お行きやれ〳〵。シテへこれは迷惑の事ぢや。そなたさへ了簡すれば。波風立てずにすむ事ぢや。女へ其の根性ぢやに依つて。踏まれ居るわいやい〳〵。シテへあゝ苦々しい事ぢや。女へ早う行け〳〵。シテへ是處ぢや〳〵。女へさあ〳〵踏込め〳〵。シテへ先づ待て〳〵。女へ何と待てとは。シテへさりとては思案所ぢや。最前からの様に留守なればよけれども。ひよつと内に有り合はせた時は。矢も楯も溜まるものではない。是まで來たれば兩人の手柄の程も知れた。いざ來い。戻らう。女へなまぬるい。其の棒をこつちへおこしなされ。ト言うて。無理に棒を引取り行く。シテ退いて。シテ柱の蔭に隠れるなり。女へやい某。内に居るか。案二へ留守。女へ何ぢや。留守ぢや。シテへこれ〳〵女共。何と言うた。女へまた留守で御座る。シテ

〽なにまた留守か。　女〽中々。　シテ〽アヽ留守が誠ならば。お主ではなるまい。その棒をこつちへおこし居れ。イヤ女のこさし出た。すつこうで居をらう。やい誰の卑怯物。留守が誠ならば出て見をれ　出る所で胸板をほうどくはいたらば。ひよろ／＼とせう。其の時腰の刀をするりと拔いて。兩の腕（かひな）を打落し。諸足を薙いだらば。手も足も無い見たむないものであらうなあ。　女〽おゝ。見たむないもので御座らうとも。　シテ〽其時腹の上へ飛上つて。十も二十も踏んで／＼踏殺してやらうぞいやい。　女〽おゝ。お出かしやつたお出かしやつた。　シテ〽何と出かしたであらうが。　女〽おでかしやつたとも。　シテ〽さて何と思ふぞ。此樣に皆が皆まで留守ではあるまいけれども。兩人の威勢に恐れて留守を使ふと見えた。此樣な時は。いざどつと和歌を擧げて戻らう。　女〽一段とよう御座らう。　シテ〽是處を訪へども留守と言ふ。　地〽彼處を訪へども留守と言ふ。これかや事の喩へにも。いさかひ果てゝの干切木とは。／＼。かゝる事をや申すらん。　シテ〽エイ／＼かゝ。　女〽なうといとしい人こちへ御座れ。　シテ〽心得た／＼。（と言うて。女より先へ入るなり。）

兒流鏑馬（ちごやぶさめ）

シテ　當人
アド　妻
馬牽二人
馬
的持
小アド　立衆頭
立衆

（入道具）

シテ〽當所に住居致す者で御座る。今日は此の所の神事で御座る。乃ち某が當にあたつて御座るさりながら一つ迷惑な事が御座る。先づ女共を呼出し。談合致さう。（ト云うて呼出す。常の如し。）今日神事の當に當つたに就いて談合する事がある。先づかう通らしめ。　女〽心許ない。何事で御座る。　シテ〽お知りやる通り。當人の役で兒を出して流鏑馬を射させるうちに。馬その外道具などは用意したれども。兒がなうて迷惑する。何としたものであらう。　女〽是れはいかな事。そなたは先づ大膽な人ぢや。一年に一度ある大事の祭の當にあたつて。今まで兒がなうて何となる物ぢやぞいの。　シテ〽されば身共も色々隣郷まで尋ねたれども。とかくないに依つてしよう事がない。　女〽無いと云うて祭を渡さいでならうか。神の罰のあたらうず。其の上在所に人がおかうと思はしますか。これと云ふもそなたの常々大はずで人中をおしやらぬに依つて。此の樣な事ぢや。　シテ〽何程世間を勤めても。行跡がよくとも。ない兒をなす事はなるまいぞ。　女〽その心入れぢやに依つて。兒に事を缺かつしやる。餘所にも兒をもたぬ衆は多けれども。見事才覺して兒を出して。今まで當を勤めたではないか。　シテ〽それは何とぞ女房が利發で。雇うて出いたものであらう。　女〽其樣な事を恥しうもなうて云はします。女も男も。それ／＼の役がある。縫針にそなたを頼むか。此の樣な事は男の役でおりやるかいのう。　シテ〽それはともあれ。祭は今日唯今になり兒はなし。何としたものであらう。　女〽妾が何とするもので御座る。そなたの心で分別させられい。　シテ〽されば身共は分別を極めておいた。おぬしさへ同心すれば上々の兒がある。　女〽兒さへ調ふならば。どの樣な事なりとも合點せいでなりませうか。　シテ〽すればざつと濟んだ。とかく俄にない兒は出されぬ。

おぬし兒になつて祭を渡つてくれさしめ。女へなう〳〵悲しや〳〵。いつ神の前で女が流鏑馬を射た事が御座る。シテへそれは女と見えぬ樣に。いかにも笠を深々と着せて出すに依つて。そつとも苦しうない。女へいかにさうあればとて。祭の兒に女を似せて出すは。先づ神樣をだます樣なものぢやに依つて。こち衆が冥加がよからうと思はつしやるか。妾は其樣な事は聞くも恐ろしう御座る。シテへさて合點の惡い事を云ふ。これ程難儀して居てて。罰も利生も思はれた事か。どうしてなりとも祭を勤むるが手柄ぢや。身共が賴む程に兒になつてたもれ。女へこれは云うても〳〵迷惑な事なれども。それ程に云はせらるゝ程に。どうなりともしませうが。あの乳呑子は何としませう。シテへ誠に困つた。何とせうぞ。隨分前方に乳をよう呑ませて置いて行かう。女へいや〳〵。祭の渡る間は久しい事で御座る。置いては行かれますまい。シテへそれならば。どうぞ見えぬ樣に懷に抱かしませ。女へもし馬から落ちたらば。乳呑子が怪我をしませうぞや。シテへそれは馬の口をようとらせう程に。落しはせまい。女へそれならば妾が拵へませう。シテへさて弓矢を追取り。

流鏑馬の仕樣は合點か。女へそれは毎もの事ぢやに依つて。よう見覺えて居まする。シテへそれは一段ぢや。急いで拵へなさしめ。女へ心得ました。（ト云うて○二人中入○）立頭へこの邊りの者で御座る。今日は當所の神事で御座る。毎年神前に於て流鏑馬の儀式が御座る。例年當人から兒を出して。かの流鏑馬を兒に射させるが作法で御座る。さりながら。是に奇特な事が御座る。流鏑馬のあたつた年は豐年なり。又あたらぬ年は必らず不吉があると。昔より申しならはして御座るに依つて。當人は申すに及ばず氏子たる者は。一在所共に前廣から身をも清め。信をとつて。今日の祭禮を執行ふ事で御座る。乃ち神事過ぎて何れも拜殿で神酒（みき）を戴くに依つて。一在所共に流鏑馬の時分は。神前へ參る事で御座る。未だ時分も早う御座れども。何れも誘ひ合うて。そろり〳〵と參らうと存ずる。シカ〳〵。誠に。當年も何事なう流鏑馬があたればよう御座るが。祭禮の過ぐるまでは心の休まりにくい事で御座る。何かと云ふうちに是ぢや。（ト云うて○案内し○立衆出る○常の如し○）頭へ先づ以て今日の御神事目出度う御座る。立衆へ仰せの通り目出度う御座る。頭へさて時分はよう御座れども。いづれも誘

ひ合うて。そろり〳〵と參らうと存ずるが。何と御座らう。衆へ皆その樣に仰せられて。早や是にお揃ひで御座る。頭へそれは一段で御座る。追附け參りませう。衆へ暫くお待ちなされ。何れも御座るか。各へこれに居まする。一へ誰殿が誘ひに見えました。いざ參りませう。二へ一段とよう御座らう。一へさあ〳〵。皆々御座れ。各へ心得ました。頭へ何にも早うお出でて御座る。二へ先づ以て今日は互に目出度う御座る。各へ其通りで御座る。頭へそろり〳〵と森へ參つて。市を見物致いて。其の後神前へ參りませう。各へこれはよう御座らう。頭へさあ〳〵御座れ。シカ〳〵何れも何と思召す。いつもとは申しながら御神事の節は。一在所中が參詣致すに依つて。賑々しい事では御座らぬか。一へ年々の事なれども。御神事の節は夥しい參詣で御座る。頭へ何かと申すうちに森へ來ました。いざ市の樣子を見物致さう。何と夥しい商ひ市では御座らぬか。一へ誠に樣々の店を出しました。頭へ是は茶の湯の道具で御座る。二へ誠に風爐釜。三へ茶碗茶入れ。四へ水こぼし。五へ見事な茶入れで御座る。一へい

づれあの茶入が望みて御座る。頭〽これこれ是處に子供の玩びで御座る。一〽これは土産に求めませう。玩び人形類。立衆分けて。代り〴〵に云ふなり。さて武具馬具の見世を見て。同じ心なり。頭〽あれ〳〵。最早祭が渡るやら。いかう賑々しう御座る。一〽いや〳〵。まだで御座らう。頭〽いや馬場先の人を拂ひまする。二〽誠に人が走りまする。頭〽當年は殊の外早う御座る。一〽當人が精を出されたもので御座らう。ト云ふうちに。幕を上げて。暫くあつて。幕を下ろす。鏡の間に一寸幕上げたるうちなり。シテ〽お馬が參る〳〵。白丁〽馬場のけ〳〵。シテ〽當りとつた。頭〽はや流鏑馬が始まりました。衆〽馬が駈けまする。二〽矢があたればよう御座る。頭〽あれ〳〵あたりました。一〽扨も目出度い事で御座る。シテ〽お馬が參る〳〵。白〽馬場のけ馬場のけ。各〽お當日出度う御座る。シテ〽さらばお兒。神前へ拜なさせられい。兒馬より下り。正面に下に居る。シテ〽馬も牽いていづれも休息所へ行かしめ。馬牽〽心得ました。ト云うて。的持白丁馬牽皆々内に入り。ワキ座へ葛桶なほし。兒に腰かけさせる。シテ〽さあ〳〵。首尾よう濟みました。兒も暫く休ませませう。頭〽さてお精が出まして。神事もいつ〳〵より早う御座る。其上飾り物もなか〳〵きらびやかに見事なお拵へて。第一流鏑馬があたりまして。一在所が何程か悦びまする。シテ〽何もより私の大慶を御推量なされて下され。頭〽先づお兒へ。拜殿で毎もの通り神酒を戴かせませう。シテ〽先づ御待ちなされ。兒は酒が一滴なりませぬ。御無用で御座る。頭〽酒がなるならぬは格別。嘉例の祝儀で御座る。ちよと戴かせませう。シテ〽酒のならぬ兒に戴かせうより。名代に私何獻でも食べませう。頭〽そなた參りたくばいか程も參れ。兒にには神酒を戴かせねばなりませぬ。シテ〽それならば。あの笠を着せて置いて戴かせませう。頭〽異な事を仰せらるゝ。先づ例年の儀式を覺えさせられぬか。神事過ぎには兒を拜殿へ直し。一在所の者共が兒に對面して。一禮も申し。其上神酒を戴かせまする作法で御座る。笠を取らせまいとはどうした事で御座る。シテ〽是には様子が御座る。御存知の通り。私手前に兒がないに依つて。あの兒は雇うて參りましたが。顔を人に見せぬ事ならば雇はりやるとおしやりましたに依つて。成る程顔を人に見せぬ様にと云ふ約束で雇ひました。今笠を取らせては氣の毒で御座る。これは兒の望の通りにして下され。頭〽それはいよ〳〵そなたの不調法で御座る。當年初めての事では御座らぬ。毎年の事ぢやに依つて。作法を知らぬとは云はれまい。顔を見せる事のならぬ兒を雇はつしやつたが誤りぢや。とかく所の例は缺かされぬ。いやでも應でも對面しまする。シテ〽ヤアラ聞分のない事をおしやる。此の上は兒が笠を取つて對面しようとおしやつても。身共が笠を取らせまいが何とする。頭〽推參千萬な。いづれも押寄せてむたいに對面しませう。押寄せさせられい。各〽心得ました。ト云うて。右の肩を脱ぎ。杖竹を振上げて。各〽えいとう〳〵。シテ〽お兒ぬからせられな。ト云うて。シテも肩ぬぎ。われ竹を以て出で防ぐ。米市の通り。シテ〽えいとう〳〵えい〳〵おう。さうもおりやるまい。ト云うて。兒の前にて。仕様米市の通り。頭〽強いやつで御座る。そなた衆やはり押寄させられい。身共は後へ廻つて。あの笠を取りませう。各〽なる程心得ました。ト云うて。また押寄する。シテまた防ぐ。立頭後へ廻り。兒の笠をとる。女〽なう悲しや。子が泣きまする。頭〽これは女房ぢや。シテ〽南無三寶。露れた。頭〽あの横着者。やるまいぞ〳〵。ト云うて。兩人を追込み入るなり。

地藏舞（ちざうまひ）

シテ　旅僧

アド　亭主

（入道具）

シテへ諸國修行の坊主で御座る。某未だ上方を見物致さぬ。此度思立ち都へ上らうと存ずる。先づそろり／＼と參らう。シカ／＼。誠に出家と申す者は心安い事で御座る。衣一重珠數一れんあれば。どれからどれへ參らうと儘で御座る。いや。是まで參つたれば日が暮れさうに成つた。宿を借りたいものぢやが。何やらこれに高札がある。先づ讀うで見う。何々。往來の獨り旅人に宿を貸す事堅く禁制なり。ワア是は宿を貸すなと出てある。何としたものであらうぞ。先づ此の高札を見ぬ體て宿をからうと存ずる。幸ひこれに家がある。先づ案内を乞う。常の如し。シテへ旅の坊主で御座る。一夜の宿を貸して下され。アドへ易い事で御座るが。此の在所の入口に高札があるをお見やらなんだか。シテへいや何も見ませなんだ。アドへ此の所の大法で。往來の獨り旅人に宿を貸す事はならぬ。日の暮れぬうちにどれへなりともお行きやれ。シテへ御大法は御尤もて御座れども。出家の事で御座る。ひらに一夜を貸して下され。アドへならぬと云ふにくどい事をおしやる。シテへおゝいかう腹を立てる。何としたものであらうぞ。いや。方便を以て宿を借らうと存ずる。最前のお方御座るか。アドへ御坊の聲ぢやが。エイ御坊。宿を貸す事はならぬといふに。まだどれへもお行きやらぬか。シテへ私は出家の事で御座れば。野になりとも山になりとも臥せりませう。此の笠が一つ預けたう御座る。アドへ笠程の事は易い。どれになりとも置いて御座れ。シテへ師匠の譲りの笠で御座る。迚もの事に座敷の眞中に置いて下され。アドへ心得ました。さあ／＼。座敷のまん中に置かしました。シテへ忝う御座る。明日早々取りに參りませう。アドへあすは早々取りにお出やれ。シテへもうかう參る。アドへ何とお行きやるか。シテへなか／＼、アドへようおりやつた。シテへはあ。ト云うて笠きる。アドへ座敷に人影が見ゆる。誰ぢや知らぬ。エイ御坊。宿を貸す事はならぬと云ふに。なぜにそれにお居やる。シテへそなたに宿を借りは致さぬ。アドへそれ程座敷の眞中に居て。宿を借らぬとはどうした事ぢや。シテへ最前此の笠をそなたに預けたては御座らぬか。アドへ成程。笠は身共が預かつた。シテへすれば。今宵一夜この笠の下に何も置かせられまいに依つて。笠に宿を借つて御座る。アドへそれならば。笠より外へ出た所は何とおしやる。シテへ笠より外へ出た所があらば。切つてなりともはつゝてなりともおとりやれ。アドへそれならば是處が出た。トたゝく。シテへ出まい。アドへ此處が出た。ト右をたゝく。シテへ出まい。アドへ是處が出た。ト脊をたゝく。シテへ出まい。アド笑ふへ扨も／＼面白い。しつかい松茸の生えた樣な。大法を破つて宿を貸さう。なう／＼御坊。扨々そなたは面白い人ぢや。大法を破つて宿を貸さう。笠を取つてらくにお居やれ。シテへいやもこれがよう御座る。アドへそれは窮屈さうてわるい。平に笠を取らしめ。シテへ此の窮屈ながよう御座る。アドへこれはいかな事。大法を破つて宿を貸さうと云ふに。ひらに笠を取つてらくにお居やれ。シテへそれならば取つても苦しう御座らぬか。アドへなか／＼。苦しうない。早うお取りやれ。シテへやれ／＼嬉しや。有り樣は窮屈に御座つた。アドへさうで御座らうとも。先づそれにゆるりと御座れ。シテへこれへはお構ひなされまするな。アドへさて身共は寢酒を好いて食ぶるが。何と御坊にも一つ參らぬか。シテへ私は飲酒戒を保つて禁酒で御座る。アドへそれは殘り多い事ぢや。そ

れならば身共ばかり食べう。シテ〽そなたばかり參るか。ホヽと云うて。むまさうに參るの。アド〽むまい事で御座る。何と一つ參らぬか。シテ〽いかな〳〵。なりませぬ。アド〽御坊が參らば相手にせうものを。身共にも一つ食べう。シテ〽まだ參るか。アド〽なか〳〵。シテ〽過ぎませうぞや。アド〽何の過ぎるもので御座らう。ト云うて呑む。シテホヽと云ふ。シテ〽むまさうに參るの。アド〽呑めばのむ程むまい事で御座る。シテ〽其の盃をこゝへ貸して下され。アド〽心得ました。シテ〽そこ元にろくでうか和布は御座らぬか。アド〽成程ろくでうがある。進ぜう。さあ〳〵。ろくでうを進ぜう。シテ〽其の酒をこゝへついで下され。アド〽そなたは最前飲酒戒を保つて禁酒とはおしやらぬか。シテ〽尤もさ樣に申しては御座れども。此のろくでうか和布に浸して。さかしほと申して食ぶれば。苦しうない事で御座る。アド〽それは幸ひの事ぢや。さあ〳〵一つ參れ。シテ〽これはお酌慮外で御座る。アド〽苦しう御座らぬ。丁ど參れ。シテ〽オツト御座る。扨も〳〵是はよい御酒で御座る。アド〽御坊には酒を一つ參るか。シテ〽一つ食べまする。アド〽それはよい事ぢや。それならばも一つ參れ。シテ〽さ樣ならばも一つ食べませう。アド〽さあ〳〵參れ。シテ〽これは度々お酌慮外で御座る。アド〽苦しう御座らぬ。丁ど參れ。シテ〽オツト御座る。食ぶれば食ぶる程よい御酒で御座る。さて是を慮外ながらお前へ上げませう。アド〽戴きませう。シテ〽食べよごして御座る。アド〽苦しう御座らぬ。受けて。アド〽一つ請持ちました。御坊何ぞ肴をさせられい。シテ〽私は出家の事で御座るに依つて。何も肴は持ちませぬ。心經か阿彌陀經でも讀みませうか。アド〽心經や阿彌陀經が何の肴になるもので御座る。何ぞ御坊の立姿が見たう御座る。シテ〽それならば。悴の時分習ひました小舞を舞ひませう程に。地を謠うて下され。アド〽心得ました。シテ春雨の舞よし。アド〽よいや〳〵。シテ〽不調法を致して御座る。アド〽面白い事で御座つた。さりながら。今のは餘り短う御座る。もそつと長い舞を舞うて見せさせられい。シテ〽それならば地藏舞を舞ひませう。はやして下され。アド〽心得ました。シテ〽地藏舞を見まいな〳〵。アド〽地藏舞を見まいな〳〵。シテ〽地藏の住所は。からだせんに安養界。地獄餓鬼畜生。修羅人天。山都卒天。廿五有を廻つて。罪の深い衆生を。錫杖を追取つて。がいすくうてぼつたり。ついすくうてびつたり。昔釋迦大師の忉利天に登つて。御說法の砌りに。忝くも如來の。黃金の御手を差上げて。地藏坊がつむりを三度までさすつて。善哉なれや地藏坊。末代の衆生を。汝に預け置くなりと。仰せを受けて此の方。走り廻り候へど。誰やの人か憐みて。茶の一服もくれざるに。此のお座敷へ參りて。三度入りて十ばい。あいの物で十四はい。えん日に任せて廿四はい食べたれば。糀の花が目にあがり。左の方へよろ〳〵。右の方へよろ〳〵。よろ〳〵とよろめけば。慈悲の淚せきあへず。衣の袖を顏に當て。衣の袖を顏にあてゝ六道の地藏が醉ひ泣したを御らうぜ。ト三ツ拍子踏み。クワシ留めて入るなり。

千鳥（ちどり）

シテ　太郎冠者
アド　主人
小アド　酒屋

（入道具）

アド〽この邊りの者でござる。明日はこゝもとの神事でござる。それについて太郎冠者を

呼び出し。酒屋へ酒を取りにつかはさうと存ずる。先づ太郎冠者を呼び出し。申附けうと存ずる。（ト云うて呼出す常の如し。）汝呼び出す別の事でない。明日は是處もとの神事ではないか。シテ〽御意なさるゝ通り、明日は是處もとの神事でござる。アド〽それに就き。汝は大儀ながら酒屋へいて。酒を取つて來てくれい。シテ〽してそれはどの酒屋へ參りませう。アド〽ハテいつも行く酒屋へ行け。シテ〽あの仰せらるゝ事。いつも行く酒屋は。内々の酒手の算用が濟みませぬに依つて。なか〳〵酒をおこす事ではござらぬ。アド〽そちも其様にいうたれども。酒を取つて來たではないか。シテ〽先日は俄に御客はござる。酒をだせと仰せらるゝ。致し様はござらぬ。酒屋へ參つて色々の嘘を申して。漸々（やうやう）と盗む様にして。取つて參つてござる。アド〽また今度も其の様にして取つてこい。シテ〽物を心易さうに仰せらるゝ。うそもてゝらも一度や二度は人も合點致せども。最早さい〳〵の事でござるに依つて。酒屋がよう存じて。酒をおこす事ではござらぬ。アド〽それならば米をやらうぞ。シテ〽してそれはどのお米を遣されまする。アド〽頓て藏へ納むる米をやらうぞ。シテ〽あの

わづかばかりのお米を遣されましたらば。後（あと）からの御飯米にお事を闕かせらるゝでござらう。アド〽そちの様に。物の先を折る様に云うてはならぬ。思うても見よ。祭に酒がなうてはなるまいぞや。アド〽何れ御神事に禁酒でも濟みますまい。アド〽どうぞそちを頼む。よい様に云うて取つて來てくれい。シテ〽ならう成るまいは存じませねども。先づ參つて見ませうまで。アド〽暫くそれに待て。シテ〽心得ました。アド〽やい〳〵。之を持つて行け。シテ〽これはまた小さい樽なりともやらしやらいで。大きな樽でござるのう。アド〽客が大勢ぢやに依つて。まだこれでも心許ない。さて云ふまではなけれども。随分念の入れてよい酒を取つてこい。シテ〽せめてわるい酒なりとも。おこせばようござるが。アド〽急いでいて頓て戻れ。シテ〽あゝ。アド〽えい。シテ〽あゝ。さて迷惑な事を云附けられた。ちやと云うて參らずばなるまい。シカ〱。誠に。頼うだ人の様なみちれない情強（こは）は御座らぬ。酒のよしあしもかまはず。相手が有つてもなうても。夜ともなく晝ともなく。酒をお飲みあるに依つて。今酒代が重つて。此の様に迷惑をせらるゝ事ぢや。あゝ。

此の中も酒屋がいかう腹を立ててゐたが。けふはどの様なうそを云うてよからうぞ。酒屋へ行かうと思へば。幾せの物案じをする事ぢや。いや何かと云ふうちに早やこれぢや。先づ此の樽を見せてはなるまい。（ト云うて。板附へ持行く。それより案内こふ。アド出る。常の如し。）小アド〽えい私でござる。太郎冠者、何と思うて來た。シテ〽此の間は久しう御見舞も致しませぬが。お前にも御機嫌さうでお目出度う存じまする。小アド〽なる程身共も随分息災な。和御寮もまめさうで一段ぢや。シテ〽忝う存じまする。さて當年も此方の御酒がよう出來ましたの。小アド〽何れ當年も。身共が處の酒がよう出來て喜ぶ事ぢや。シテ〽何れ名譽（めいよう）な事でござる。御商賣物のよう出來ますは。お家繁昌の御瑞相ぢやと申しまする。小アド〽何れもその様に仰せられて悦ぶ事でおりやる。シテ〽さて當年此處もとの世の中は何とでござる。小アド〽大ていでおりやる。シテ〽すれば所にもよりまするか。私が在所は近年の世の中でござる。別して頼うだお方の田は畦を限つて穗に穗が咲いて、當年はざつと米持に成られました。小アド〽それは目出度い事ぢや。また身共も悦ぶは。内々の酒手の算用が濟まうと思うて此

の様な悦ばしい事はない。シテ〽先度も〳〵で申してゐられました。段々酒代が重なりましたに依つて。當暮にはすきと濟しませうず。また來年とる酒代も當年からやつて置かうなど〻申してゐられます。いらぬ事ながらお咄し申しまする。小アド〽それは悪い事を聞く様になうて悦ぶ事でおりやる。シテ〽さて今日は御使に參りました。小アド〽それは何と云うておこされた。シテ〽頼うだ者申しまする。明日はあの方の婚事でござる。お子様方をおつれなされて。早々からお出でなされと申越してござる。小アド〽それは行きたいものなれども。終にそちの頼うだ者とは近附きにならぬ。定めてそれは門違ひであらう。シテ〽終にお近附にならぬに依つて。此度を幸にとあつて私をおこされてござる。小アド〽其様な事ならば。なほ〳〵殘多い事なれども。あすは叶はぬ先約ぢやに依つてえ往かぬ。そちよい様に斷りを云うてくれい。シテ〽さ様ならば。お子様方ばかりなりとも遣されませ。小アド〽なる程。子供が行かうといへばやるであらう。シテ〽當年何やら面白い山が出るとやら申しまする。私がよい時分にお迎ひに參りませう。小アド〽いや〳〵。お迎ひに及ばぬ。子供が行かうときへいはば。此方から人をつけてやるであらう。シテ〽さて誰を遣されましても。御如才は御座りますまいが。明日は晴れがましい客を得まする。與殿のつつとよろしいをお詰めなされて下され。小アド〽何を。シテ〽酒を。小アド〽何ぢや。酒を。シテ〽なか〳〵。小アド〽イヤこゝな者が。先度も〳〵云うてやるに。そちは歸つて云はぬか。内々の酒手の算用が濟まぬに依つて。酒をやる事はならぬと云ふに。アヽそちは聞えぬ者ぢやぞよ。シテ〽なる程先日のお腹立の段は。歸つて頼うだ者に直に申して御座れば。御尤もにこそござれ。當暮にはすきと濟ましませうぞ。又その内上とあつて。今朝壹駄の物が參りませうが。小アド〽何が。シテ〽米が。小アド〽いや米はこんぞよ。シテ〽あのまだ來ませぬか。小アド〽なか〳〵。シテ〽はて合點の行かぬ。最早くる筈ぢやが。何をしてゐる事ぢや知らぬ。はあの牛に附けてやれと云はれたが。其の牛がまだ山から戻らぬものでがなござらう。小アド〽扨は米の來るはぢやうか。シテ〽誠とも〳〵。米も來ぬに。何と酒が取りに來らるゝものでござる。小アド〽米さへ來れば酒を詰めてやらいでならうか。詰めてやらう程に暫くそれに待て。シテ〽早う詰めて下され。小アド〽心得た。シテ〽先づこれ程までには云うたが。小アド〽さあ〳〵太郎冠者。酒を詰めたぞ。シテ〽おゝ是は御念の入つて樽のお掃除までが出來ました。小アド〽一つは酒の爲ぢやと思うて掃除を云附けた。シテ〽扨々綺麗になりました。さて明日はどうぞお出でなされて下され。小アド〽成程。子供が行かうと云はばやるであらう。シテ〽私がよい時分にお迎ひに參りませう。小アド〽いや〳〵迎ひには及ばぬ。行かうときへ云はば此方から人を附けてやるであらう。ヤイそこなやつ。シテ〽ヤア。小アド〽そりや何とする。シテ〽去にます。小アド〽何ぢや。去にます。シテ〽なか〳〵。小アド〽イヤこゝな者が。米も來ぬに。去にますと云ふ事があるものか。シテ〽こなた最前云うたを何と聞かせられた。米は追附け來まするわいの。小アド〽アヽこりや〳〵。米を見ぬ内は酒をやる事はならぬ。シテ〽扨々堅い事を云ふ人ぢや。見ず知らずではあるまいし米は追附け牛に附けて是處へ來るわいのう。小アド〽いや〳〵。なんぼうでも米を見ねば。酒をやる事はならぬ。シテ〽扨は米を見さつしや

ふれば。酒をおこさつしやる事はなりませぬか。小アドへ思ひもよらぬ事ぢや。シテへそれならば。米のくるまで何をして居ませうぞ。小アドへ待つて居よ。シテへあすは祭で忙しうござる。小アドへ忙しくば去んでこい。シテへこの遠い所な二踊り三踊り。何となるものぢや。小アドへやい。太郎冠者。シテへやあ。小アドへそちは常に來てさへ咄をするに。米のくるまで何ぞ咄をして待つてゐよ。シテへ何れ常に來てさへ咄をするに。米のくる迄何ぞ咄をして待つてゐませう。小アドへさあ〳〵。何なりとも咄して聞かせ シテへそれならば。何がよう御座らうぞ。小アドへ何がよからうぞ。シテへこなた尾張の津島祭を見さつしやれた事がござるか。小アドへ聞及うだれども。終に見た事はない。シテへ私も當年初めて見ましたが。之を咄して聞かせたらば。來年から萬事打捨て見物に行かうと仰せらるゝでござらう。小アドへそれは面白さうな事ぢや。それを急いで咄して聞かせ。シテへ先づ祭より前に濱邊を通りまするとゝ子供が大ぜい千鳥をふせまする。これが面白い事で御座る。小アドへそれは面白さうな。して見せぬか。シテへいや。これには相手が要りまする。小アドへして。それはむつかしい事か。シテへ別にむつかしい事ではござらぬ。濱千鳥の友呼ぶ聲はと仰せらるれば。私がちり〳〵やちり〳〵と云うて。千鳥をふせる事でござる。小アドへそれは心易い事ぢや。身共が相手にならう程に。早うして見せい。シテへまだ綱が要りまする。小アドへ身共が所に綱はないが。シテへあながち綱でなうても大事ござらぬ。何ぞ綱になりさうなものがあるか見せて下され。小アドへ心得た。何ぞ綱になる物があればよいが。綱になりさうな物は何であらうぞ。ヤイそこなやつ。シテへやあ。小アドへそりや何とする。シテへこれが綱にならうぢやまで。小アドへそれが綱になるかやい。シテへこれが綱になるではなけれども。此方さへ綱ぢやと思はしやればよいに依つて。綱に用ひようかと申す事でござる。小アドへなる程身共は綱ぢやと思ふ程に。早うして見せい。シテへそれならば。さあ〳〵。囃さつしやれ〳〵。小アドへ心得た。濱千鳥の友呼ぶ聲は。シテへちり〳〵やちり〳〵。ちり〳〵やちり〳〵と。ちり飛んだり。小アドへ濱千鳥の友呼ぶ聲は。シテへエイ。ちりちりやちり〳〵。ちり〳〵やちり〳〵。小アドへやい〳〵そこなやつ。シテへやあ。小アドへそりや何とする。シテへこれが千鳥を伏せる所でござる。小アドへあゝ。これは餘り面白うないわいやい。シテへもそつと面白い筈ぢやが。オヽそれ〳〵。綱に手がなさぢや。小アドへ手があれば面白いか。シテへ手があれば格別面白い。さあ〳〵囃さつしやれ。小アドへ心得た。濱千鳥の友呼ぶ聲は。シテへちり〳〵やちり〳〵。ちり〳〵やちりちりと。ちりとんだり。小アドへ濱千鳥の友呼ぶ聲は。シテへちり〳〵やちり〳〵。ちり〳〵やちり〳〵。ちり〳〵〳〵。小アドへヤイそこなやつ。シテへやあ。小アドへそりや何とする。シテへこれが千鳥を伏せた所で御座る。小アドへあゝ。またしても綱に手をかけるに依つて面白うもをかしい事もない。もう措け〳〵。シテへこのあとが面白けれど。こなたの氣が短うて見さつしやらねば。しよう事が御座らぬ。小アドへその面白い所ばかりして見せい。シテへそれならば。流鏑馬のていをして見せませう。小アドへそれはどの様な事ぢや。シテへ先づ壹町に三所の的を立て。兒が花笠をきて馬に乗つて。かの的をはつし〳〵と射て通る。これ

が面白い事でござる。小アドへそれは面白からう。それなして見せい。シテへ是も此方からお馬が參る／＼と申せば。こなたは所の侍衆に成つて。馬場のけ／＼と云うて。馬場もとの人を拂ふ事でござる。小アドへそれはなほ心易い。身共が相手にならう。早うして見せい。シテへそれならば。さあ。御馬が參る／＼。小アドへ馬場のけ／＼。シテへ御馬が參る／＼。小アドへ馬場のけ／＼。シテへお馬が參る。小アドへ何とする。シテへこりや道にあつて邪魔になりまする。のけておきませう。小アドへどうなりともせい。シテへさあ。お馬が參る／＼。小アドへ馬場のけ／＼。シテへ御馬が參る。小アドへ何とする。シテへこりやよう詰めて御座るか。小アドへおゝ。よう詰まつてある。シテへどうやらどぶ／＼する樣な。小アドへはてよう詰まつてあると云ふに。シテへあゝ。いかう流鏑馬がしにくい。オヽそれ／＼。的がないぞや。小アドへ的がいるか。シテへ流鏑馬に的がなうて何となるものぢや。小アドへ身共が所に的はないぞや。シテへアヽそれ／＼。之を的にせう。小アドへ是が的に成るかいの。シテへ之なかうしてこちらを見ずに。馬場末なうつかりと見てゐさつしやれ。小アドへ心得た。シテへさあ。御馬が參る／＼。小アドへ馬場のけ／＼。シテへ御馬が參る／＼。小アドへ馬場のけ／＼。シテへ御馬が參る。小アドへ何とする。シテへあゝ。あぶなやの／＼。今の時に矢を放せば。こなたの目をほつしりと射貫く所であつた。扨も／＼危い事であつた。小アドへでも。面白さうにあつたに依つて見た。シテへそちが面白うてもこちが面白うない。此方なるまい：・おかしつやれ／＼。小アドへあゝ。こりや／＼。其の樣に氣短う云はずとも。もそつと此の後なして見せい。シテへても。こちらを見さつしやれては。流鏑馬がなりませぬ。小アドへでも面白い時見ねば堪忍がならぬ。シテへそれならば。面白い時は當りと云うて。左右なしませう程に。それまではこちらを見ずに。馬場先なうつかりと見てゐさつしやれ。小アドへやい。太郎冠者。シテへやあ。小アドへこの米は遲い事ぢやなあ。シテへそれ／＼その米の所へ氣が附くに依つて面白うない。米は追附け半に附けて來るわいのう。小アドへ來るかよ。シテへ御馬が參る／＼。小アドへ馬場のけ／＼。シテへ御馬が參る／＼。小アドへ馬場のけ／＼。シテへ當りとなあ。小アドへこ

りや何とする。シテ〽御馬が參る〳〵。小アド〽やい〳〵。やいそこなやつ。シテ〽やあ。小アド〽そりや何とする。シテ〽是か。小アド〽おんでもない事。シテ〽御馬が參る〳〵。小アド〽南無三寶。またしてやられた。あの横着者。やるまいぞ〳〵。

茶瞽座頭（ちやかさざとう）　鷺流

シテ　總檢校
アド　檢校
アド　勾當
アド　見手
アド　菊市
（入道具）

見手〽これに此邊りの者で御座る。今日は座頭共が總檢校の方で妙音講が御座る程に。立越え見物致さうと存ずる。誠に。座頭共が寄合ひ。平家の小歌のと申して慰むげに御座る。參つて樣子を見ようと存ずる。いや參る程に早や總檢校の居宅はこれぢや。先づ是處に居て見物致さうと存ずる。（ト座着居る。）シテ〽これは此の處に住居致す總檢校で御座る。今日は妙音講で何れも仲間衆が見えらるゝ程に。菊市を呼出し。掃除の事など申附けうと存ずる。菊市居るか。菊市〽はあ お前に。シテ〽汝を呼出すは別の事でもない。最早何れも御座る時分ぢや程に。露地へ水など打たせて掃除を申附けい。菊市〽畏まつて御座る。シテ〽又皆見えたならば此方へ知らせい。菊市〽畏まつて御座る。（シテ。菊市共に座着。）檢校一〽これは此の邊りに住居致す何檢校で御座る。今日は總檢校殿に妙音講が御座るによつて。參らうと存じて罷出た。扨誰殿も往かれたか知らぬ。誘うて見うと存ずる。早やこれさうな。物もう。案内もう。何檢校で御座るが。誰殿は内に御座るか。檢校二〽いや何檢校殿か。ようこそ出させられた。これは妙音講へいで御座るか。檢校一〽なか〳〵。唯今參るが。此方には行かせられぬか。檢校二〽されば何れもこれへ來て。唯今參らうと存じて居る處で御座る。御同道致さう。檢校一〽それならば。いざ御座れ。檢校二〽先づ御座れ。檢校三〽とかく先次第に召され。檢校一〽お斷りおぢや程に某から參らう。さあ〳〵。何れも御座れ〳〵。檢校一同〽心得て御座る。檢校一〽最早何れも寄つて居られませう。檢校二〽今日の事で御座る程に。定めて如才は御座るまい。檢校一〽早やこれさうな。檢校二〽なか〳〵。これさうに御座る。檢校一〽ものもう。案内もう。菊市〽表に物もうとある。案内はたそ。何誰（どなた）で御座る。檢校一〽なに檢校。檢校二〽なに檢校。（ト順次名乘る。）一同〽參つたと云やれ。菊市〽はあ。（ト云ひつゝ案じ。揚手たつき。）お出での通りを申しませう。暫く御待ち遊ばされませい。一同〽おゝ心得た。菊市〽いかにまうし。何檢校樣何檢校樣方。御同道でお出でゝ御座る。シテ〽此方へ通らせられいと云へ。菊市〽畏まつて御座る。（檢校へ向ひ。）かうお通りなされいと申しまする。（檢校一同心得たと云うて通る。）檢校一〽はあ。何檢校。檢校二〽何檢校。檢校一同〽御禮申上げまする。シテ〽これは何れもようこそ出させられたよ。檢校一〽先づ以て今日は目出度う存じまする。シテ〽その通りで御座る。（いづれもお下に御座れ。心得まして御座る。などと何かと挨拶あるうちに。）勾當〽さあ〳〵。何れも御座れ。（勾當出る。但し三人一所にて。）餘程時刻もおそなはりました程に。ちと急かしませ。勾當一同〽心得ました。勾當一〽いや何かといふうちにこれで御座る。（ト參り着き。前の檢校の通りに案内あり。菊市出て取次ぎ。總檢校へいふ言葉の如し。）勾當一〽何れも樣へ。何勾當。勾當二〽何勾當。勾當三〽何勾當。三人〽御禮申し上げまする。シテ〽目出度う御座る。某も嬉しう御座る。某の頭を受取りまし

てから。仲間は次第に繁昌致いて。これ程嬉しい事は御座らぬ。　檢校一へ仰せらるゝ通り目出度い事で御座る。さて久しう總檢校樣の平家を承りませぬ程に。ちと講じなされてお聞かせなされて下されい。　皆々へこれは一段とよう御座りませう。御苦勞ながらお聞かせなされませい。　シテへその樣に仰せらるゝ程に。ちと講じませうか。　皆々へそれは忝う御座る。聽聞仕りませう。　シテ語へ抑も一の谷の合戰破れしかば。我も〳〵と高名せんとかけ廻る程に。きびすを斬られて逃ぐるもあり。おとがひをはつられて抱ゆるもあり。入り亂れたる合戰なれば。かとがひを取つてきびすにつけ。きびすを取つておとがひにつくる程に。生うずる事とてきびすに髭はえ。おとがひに胼が四つ五つ。ほかり〳〵ときれてけり。　ト語り終つて笑ふ。　皆々へ扨々承りごとで御座る。　シテへ何と御座つたぞ。　皆々へいやどうも詞にも及ばれた義では御座りませぬ。　シテへさうも御座るまい。　ト立ち。檢校に向けて。　さて何殿にても音曲が承りたう御座る。　檢校一へ實と此方へ御所望申しまして辭退もなりますまい。申しませう。　ト平家山川よりにて小歌上の山にても謡ふ。　シテへやんややんや。さても〳〵聞き事なことで御座る。　皆々へさ樣で御座りまする。　シテへさてまうし、唯今は何が世間にはやりまするの。　檢校一へ唯今は色々の遊山の中にも。殊の外茶の湯がはやることで御座る。　シテへいかさま茶の湯はよい慰みで御座らうが。よの〳〵我等などは。眼が不自由に御座れば。さやうの慰みもなりませぬ。いやさりながら。或方から[illegible]を少しばかり貰うて御座るが。大人數で御座れば。中々ことごとくは得行き屆くまいが。何とこれを馳走に嗅ぎ茶に致いて廻しませうが。これは何と御座らう。　皆々へこれは一段とよう御座りませう。　シテへやい〳〵菊市。　菊市へはあ。　シテへ其の茶をたてゝ來い。　菊市へ心得まして御座る。　ト云ひ。橋懸へゆき。正面向き。茶碗を出し一。茶を立つる。　某はつひに斯樣のお茶などたてた事が御座らぬが。何とあらうも存ぜぬ。　此の詞の内に見所の見手立出て。　見手へいやこれは嗅ぎ茶を拵へさうな。幸ひ爰に胡椒の粉が御座る。これを入れてむせさしませう。　ト懷中より。紙袋取出し。茶碗の中へ胡椒入るゝてい。菊市茶をたてゝ持出て。　菊市へハアまうし。お茶で御座る。　シテへ先づあなたへ進ぜい。　菊市へ提まへて御座る。　シテへなう〳〵何れも。それから聞かせられい。　菊市へさあ〳〵お聞きなされませい。　皆々へ心得ました。　さて皆茶碗預き。かいでむせる。ハクサメ〳〵〳〵と。一同ことごとくむせる。せきばらひし。クッサメ大分しこむせびながら。　檢校勾當へまうし總檢校殿。　シテへやあア。　一同むせび〳〵。　皆々へ此方は茶ぢやと云うて。胡椒をかゞさつしやれたの。　シテへ菊市〳〵。　菊市へはあ。何事で御座る。　シテへ己れは憎い奴の。此樣な麁相な事をようしなつた。唯は置くまいぞ。　ト云うて。杖にて一なぐる。　皆々へなう。何ぼう菊市に仰せても聞く事ではないぞ。　皆ハクサメ〳〵とむせびながら。杖にこかち合ひ入る。

茶壺（ちやつぼ）

シテ　盜人
アド　田舍者
小アド　扱人
（入道具）

アド茶壺を負ひ。小謡うたひ。酒に醉うて出る。　アドへ笑ふ。あゝ醉うた〳〵。いやと言ふものを大盃で三つ。　笑ふ。　これはとう醉うた。なか〳〵これでは行かれまい。ちと爰に寢て行かう。えい〳〵やつとな。　ト云うて寢る。　シテへ洛中に心の直ぐにない者で御座る。今日も上下の街道へ參つて。仕合はせを致さうと存ずる。誠に。此のうちは手に執るやうに存ずる事も。思はぬ妨があつて。

不仕合せに御座る。何とぞ仕合せを仕度いものぢやが。これは如何な事。あれに何者やら正體もなう臥つてゐる。ちと彼奴に携はつて見う。やい／＼。若い者。爰は街道ぢや。起きて行け／＼。エヽ熟柿臭やの／＼。したゝか酒に醉うてゐる。其の上何やら好さそうな物を脊負うてゐる。あれを此方へてうぎ致さうと存ずる。やい／＼若い者。起きて行け。これは如何な事。あれ程醉うてゐれど。片連尺はきつと手に掛けてゐる。何としたものであらうぞ。致し樣が御座る。やい／＼若い者。爰は街道ぢや。起きて行け。若い者。あゝ起きて行かいでなア。ト云うて。片連尺をかけてシテも寢る。アド〽むゝさて／＼よう寢た事かな。これは如何な事。やい其處な奴／＼。シテ〽扨も／＼よう寢た事かな。アド〽これは身共のぢや。シテ〽是は身共のぢや。アド〽あゝ出あへ／＼。小アド〽あゝこりや／＼。これは何事ぢや。アド〽これは私ので御座る。シテ〽これは私ので御座る。小アド〽これ一品に主の二人あらう樣がない。理非を聞いて渡さう程に。先づ身共に預けい。アド〽それならばお前に預けませう。あの橫着者に遣つて下さるな。小アド〽心得た。シテ〽既にしてやりませうとした。

小アド〽これは何とする。シテ〽これは私ので御座る。小アド〽成る程。汝がのであらうなれど。理非を聞いて渡さう程に。先づ身に預け。シテ〽それならばお前に預けまする。あの橫着者に遣つて下さるな。小アド〽心得た。やい／＼。これは何事ぢや。アド〽先づお前は誰方(どなた)で御座る。小アド〽所の目代ぢや。アド〽目代殿ならば。屹度お禮を申上げまする。小アド〽いや／＼禮には及ばぬ。先づ何事ぢや。アド〽先づあれは葉茶壺で御座る。私は中國の者で御座る。賴うだ人が茶好で。每年栂尾へ茶を詰めに遣られまする。當年もまんまと茶を詰めまして歸るさに。存じた所が御座つたに依つて。先へ立寄つて御座れば。したゝか御酒を強ひられまして。爰を路次とも存ぜず。臥せつてゐましたれば。いつの間にやらあの橫着者が參つて。私が掛けてゐる片連尺へ手を入れて。我が物ぢやと申しまする。あの橫着者は屹度仰付けられませ。小アド〽すれば汝がのに極つたか。アド〽成程。私がので御座る。小アド〽先づあの者の口を聞かう。アド〽お聞き下さりませ。小アド〽心得た。やい／＼。先づ是は何事ぢや。これよりシテアドの通り。少しも違ひなし。小アド〽さては汝がのに極つたか。シテ

〽成程。私がので御座る。小アド〽はて同じ樣な事ぢや。やい／＼。まこと汝がのと極つたらば。入所えん日記を知つてゐるか。アド〽そばで詰めさしましたれば。能う存じて居まする。あいつは存じますまい。お尋ねなされませ。小アド〽心得た。やい／＼。まこと汝がのに極つたならば。入所えん日記を知つてゐるか。シテ〽そばで詰めさしましたれば。能う存じてゐまする。あれは存じますまい。小アド〽心得た。先づあれから言へと仰せられい。アド〽迚もの事に小拍子にかゝつて申しませう。小アド〽一段とよからう。アド〽我が物故に骨を折る。／＼。心の中ぞをかしき。小アド〽をかしき。アド〽さ候へばこそ／＼。俺が主殿は中國一の法師にて。ひの茶を立てん事なし。五十貫の一族の寄合に。本の茶を定てんと。くりを持ち。多くの足を使うて兵庫の津にも着いたり。兵庫を立つて二日に栂尾にも着きしかば。峯の坊。谷の坊。ことに名譽しけるは。赤井の坊のほかぜを十斤ばかり買取り。兵庫を指して下れば。昆陽野の宿の遊女が袖をぢつと控へて。今樣朗詠枝折萩を謳うて抑へて酒を。強ひたり酒に。醉うて寢たるを日本

一の横風のあの古博奕打が。來て我が物と申すを判斷なして。たび給へ所の檢斷殿樣。小アド〽一段と出來した。さあ〳〵。汝も急いて言へ。シテ〽沚もの事に左右小拍子にかゝつて申しませう。小アド〽一段とよからう。ト云うて。これよりシテアドの通り眞似する。小アド〽一段と出來した。此度は或る仔細がある。兩人連舞にせい。アド〽私は舞ひませうが。彼の者が舞ふか御尋れなされませ。小アド〽心得た。やい〳〵。此度は或る仔細がある。兩人連舞にせい。シテ〽私は舞ひませうが。彼の者が舞ふか御尋れなされませ。小アド〽いや。あれは舞ふといふ。シテ〽それならば。私も舞ひませう。小アド〽先づこれへ出よ シテ〽畏まつて御座る。小アド〽さあ〳〵。汝もこれへ出よ。アド〽畏まつて御座る。小アド〽さてそつとても違うた所があらば。曲事に云付けるぞ。二人〽畏まつて御座る。アド〽やい。己れ見事に舞ふと思ひ居るか。シテ〽己れ見事に舞ふと思ひ居るか。アド〽己れは横着者ぢやぞよ。シテ〽アドの通り云ふ。アド〽己れを何とせう。シテ〽アドに同じ。小アド〽あゝこりや〳〵。互に論は無益。急いで舞へ。二人〽畏まつて御座る。ト云うて。前の通りアド舞ふ。シテ眞似する心持にて。少し後より舞ふ。此の所兩仕樣あるべし。小アド〽一段と出來した。再人共つゝとこれへ寄れ。二人〽畏まつて御座る。小アド〽さて最前から兩人の舞を見るに。少しも違うた事がない。總じて昔から論ずるものは中から取れと云ふ事がある。この葉茶壺は身共がして退く。アド〽あゝそれは身共がのぢや。こちへ戻して下され。あの横着者。遣るまいぞ〳〵。シテ〽同じく云ふ。小アド〽これが欲しいか。なるまいぞ〳〵。ト云うて。小アドは茶壺を持入る。兩人とも追駈け入るなり。

【つ】

通圓（つうゑん）

シテ　通圓の靈
ワキ　僧
アヒ　所の者
（入道具）

次第ワキ〽ほろりとしたる往來の。〳〵。茶かはりのなきぞ悲しき。詞 これは諸國一見の僧にて候。われ未だ宇治平等院に參らず候程に。此度思ひ立ち平等院に參らばやと存候。道行 大水の先に流るゝ橡殼も。〳〵。身を捨てゝこそ浮かむなれ。我も身を捨て浮かまんと。やう〳〵急ぎ行く程に宇治橋の橋の橋柱の擬寶珠のもとに着きにけり。ワキ〽急ぎ候程に。宇治平等院に着きて候。またこれなる茶屋を見れば。坊主もなく茶湯を手向けられて候。謂れのなきことは候まじ所の人に尋ればやと思ひ候。所の人の渡り候か。間〽所の者とお尋ねは。誰にて渡り候ぞ。ワキ〽これなる茶屋を見れば。茶坊主もなく茶湯を手向けられて候。定めて謂れのなきことは候まじ。御存じに於ては御物語り候へ。間〽さん候古へ此の所に通圓と申す茶坊主の候が。此の宇治橋供養の時。餘り大茶をたてゝ終に立て死にせられて候。所の者勞はしく存じ。命日には茶湯を手向け弔ひ申し候。卽ち今日は正命日に候間。お僧も逆緣ながら弔うて御通り候へ。ワキ〽懇に御物語祝着申して候。さあらば立寄り弔うて通らうずるにて候。間〽重ねて御用とあらば仰せられ候へ。ワキ〽頼みませう。間〽心得ました。ワキ〽さては通圓が跡なるかや。いざ御跡弔はんと。思ひよるべの茶屋のうち。〳〵。旋も古き此の床に。破衣を片敷きて。夢の契をまたうよ。〳〵。一聲シテ〽大場たて呑ませ容人胸に染む。世を宇治川の水波みて。あらこぶ戀しや。お茶方の。おはれ果敢なき湯の

中に。地へ灑子のつゐの音にも。シテへ煮ゆる茶の湯は面白や。ワキへ不思議やな僧などろむ枕の上を見れば。茶碗と杓子を持ち。さも近々と見え給ふは。いかなる人にてましますぞ。シテへこれは此の宇治橋供養の時。茶を立て死せし通圓なり。ワキへさては通圓にてましますかや。最期の有樣語り給へ。跡をば弔うて參らすべし。シテへさらば最期の有樣語り申さん。跡を弔うて賜はり候へ。ワキへ心得申し候。シテへ扨も宇治橋の供養今をなかばと見えし所に。部屋者と思しくて。いざ通圓が茶を呑み乾さんと。名乘りも敢へず三百人。押し／＼と口わきをひろげ茶を呑まんと。群れ居る旅人に大茶を立てんと。茶杓を追取りひくゝども。茶々とうち入れて。浮きぬ沈みぬ立掛けたり。シテへ通圓下部を下知して曰く。地へ水の逆卷く所をば。砂ありと知るべし。弱き者には柄杓を持たせ。強きに水を擔はせよ。流れん者には茶茶を持たせ。互に力を合はすべしと。ただ一人の下知に從つて茶はおりの大甕に行く／＼。一時も怺らず立掛け／＼し。穢土を離れて[illegible]最期とたて掛けたり。さる程に入亂れ。我も／＼と呑む程に。シテへ通圓が茶の[illegible]る。地へ茶碗ひしやく打折れば。シテへこれ迄と思ひて。地へこれ迄と思ひて。平等院の椽の下。これなる砂の上に。團扇を打敷き衣ぬぎ捨て座をくみて。茶筅を持ちながら。さすが名を得し通圓が。カケリ シテへ埋み火の。燃えたつこともなかりしに。地へ湯のなき時は。泡も立てられず。地へ跡弔ひ給へ御聖。假初ながらこれとても。茶生の緣の草に今。團扇の砂の草の蔭に。ちりぢりに隠れ失せにけり／＼。

筑紫奧（つくしのおく）

シテ　丹波の百姓
アド　筑紫奧の百姓
小アド　奏者
（入道具）

アイへ筑紫の奧のお百姓で御座る。毎年御年貢として大晦日堺に持つて上り。元日に上頭へ上ぐる唐物で御座る。當年も相變らず持つて上らうと存ずる。シカ／＼。殊に。トモシカ／＼。百姓物同斷。シテへ丹波

の國のお百姓で御座る。毎年御嘉例として大晦日境に持つて上り。元日に上頭へ柑類を捧ぐる。當年も持つて上らうと存ずる。ト云うて。シカ〴〵。天下納りを云ふ。アド言葉を掛ける。佐渡狐の通り。先づ當年も持つて上るまでおりやる。シテ〽して荷物は何處に有る。アド〽はや先へ、二百駄ばかり上しておりやる。シテ〽扨々夥しい事ぢや。ト云うて。つとを後へかくす。腰へさす。アド〽扨わごりよはどれからどれへ行かします。シテ〽身共は丹波の國のお百姓。ト云うて。柑類を捧ぐる。只今持つて登ると云ふ。アド〽扨その荷物は見えぬがどれに有る。シテ〽二百駄ばかり馬につけて先へ上した。アド〽先づは幸ひの人に言葉を掛けた。何と同道致さう。ト云うて。同道する。都へ着く。奏者出る。それより上げる。兩人一所に申上ぐる。それより論ずる。餅酒の通りなり。シテ〽そりや召すは。ハア〳〵。小アド〽筑紫と丹波とて海川山を隔てたに、同じ日の同じ時に持つて參る事。殊の外御感に思召さるゝさり乍ら。御年貢の數が多い。汝等お白洲へ廻つて直に申上げい。アド〽畏まつて御座る。シテ〽是はおわずらひにおかせられたらよう御座らう。小アド〽汝は何と聞いた。シテ〽御年貢の數が多う御座る程に。下さるゝと承つて御座る。小アド〽いやさうではない。汝は何と聞いた。アド〽御年貢の數が多い。お白洲へ廻つて申上げいと承つて御座る。小アド〽其通りぢや。急いで申上げい。アド〽畏まつて御座る。シテ〽わごりよは見事申上げるか。アド〽また申上げいでか。シテ〽よい覺えおかのう。アド〽筑紫奥より參る物。參る物とて參る物、是等は皆唐物、錦襴緞子純金唐錦香箱沈香したんきりん樟腦、豹の皮虎の皮、麝香久しき薬物な。かん馬にかけ貢ふせて。この御館へぞ參りける。小アド〽一段と申上げた。サア〳〵汝も申上げい。シテ〽私は物覺えが無う御座る。も一度見てから申しませう。小アド〽とも角もせい。シテ立つて。つとをして。シテ〽とても物の事に拍子にかゝつて申しませう。小アド〽急いで申上げい。シテ〽丹波の國より上る物、上る物とて上る物、是等は皆柑類、ゆりこかうじ橘ありの實柘榴けんの實いちいがしい柴の實。扨は栗の枝折。野老なんども參りたるとの野老なども參つた。小アド〽一段と申上げた。兩國のお百姓皆くの通り。ハア〳〵やい〳〵時のお笑草に仰せ出だされたを。一段と申上げたとあつて。殊の外お喜びなさるゝ。それにつき萬雜公事を御赦免なさるゝ。二人〽有難う存じます。ト云ふ。二人共笑ふ。心が云うて。小アド〽ヤイ〳〵お前近い。何を聲高に申す。ハア〳〵。さればこそ餘りに汝等が大きな聲を出して笑うたに依つて、百姓共は田を何程作る。一反について一笑づつ笑へとのお事ぢや。急いで笑ひませい。二人〽畏まつて御座る。ト云うて。餘り汝等が大きな聲して笑ふを論ずる。奏者叱る。アド〽畏まつて御座る。ト云うて。二聲笑ふ。小アド〽扨は田を二反作るか。アド〽左様で御座る。小アド〽サア〳〵汝も笑へ。シテ〽笑ひ序にそなた笑うてたもれ。アド〽わごりよが田を何程作るやら知つてこそ。シテ〽それは身共が言ふ。口ついてぢや。笑うてたもれ。小アド〽是は如何な事。汝笑へいの。シテ〽それならば。何ぞ面白い事を思ひ出して笑ひませう。小アド〽どうなりともして笑へ。シテ暫く思案して。一聲半笑ふ。但し笑ひ様有り。小アド〽それは何ぢや。シテ〽私は田を一反きた中作りまする。小アド〽扨は半分笑うたは。きた中の所か。シテ〽左様で御座る。小アド〽扨々汝は律氣によう笑うた。前世下された事はなけれども、お流れを下さるゝ。是へ寄つて戴きませい。シテ〽それは有難う存じまする。小アド〽引達へて三獻づつ飲め。汝等は冥加に叶うた者ぢや。扨此上はお暇を下さるゝ。暇乞次第に下りませい。シテ〽然らばお暇申しませう。小アド〽行くか。よう來た。二人〽ハア〳〵。ト云うて。シテ〽何とよい首尾ではなかつ

たか。アドへ思ふ儘の首尾で有つた。シテへさて何と思はします。最前笑へと仰せられたはお上からでは有るまい。お奏者のお心入で有ると思ふ。アドへされば其樣な事でも有らうか。シテへいざ戻つて。お奏者にも笑はせまいか。アドへ其樣な慮外な事がなるものか。シテへ身共にまかして置かしめ。申上げまする。小アドへ汝等はまだ行かぬか。シテへ成程歸りまするが。最前私共ばかり笑ひまして。お奏者のお笑ひなされぬは何とやら心懸りに御座る。お奏者にも少しお笑ひなされて下されれ。小アドへ汝等はお流れを戴いて機嫌よう笑ふ。身共は今朝からひえ板を暖め居て。なか〳〵笑ふ機嫌はないやい。シテへさう仰せられずとも。ちとお笑ひなされて下され。小アドへ是は何とする。アドへちとお笑ひなされて下され。（ト云うて。二人よりこそぐる心持あり。）小アドへ先づまて〳〵。それならば何事も三神相應と云ふ。目出たう三人一度にドッと笑はう。つゝとよれ。二人へ畏まつて御座る。小アドへさあ笑へ。シテへ先づ御笑ひなされませい。小アドへ先づ。二人へ先づ〳〵〳〵。（二人笑うて。留めて入るなり。奏者先に入る。）

筒竹筒（つゝさゝえ）

シテ　はとの神
アド　大和國の酒屋
小アド　河内國の酒屋
（入道具）

アドへ大和の國に酒を商賣致す者で御座る。某八幡宮を信仰申してより。次第に繁昌致す。それ故毎年御神事には。筒に神酒（みき）を入れて捧ぐる。當年も相變らず參詣致さうと存ずる。シカ〳〵。誠に。毎年とは申しながら。當年は別して思ふまゝに酒を造りおほせて。此の樣な嬉しい事は御座らぬ。偏にこれも八幡宮の御蔭で御座る。これまで參つたれば殊の外草臥れた。連れを待ちながら暫く休らうて參らう。小アドへ河内國に住居致す酒屋で御座る。毎年八幡宮の御神事には。竹筒に入れて神酒を持つて參る。當年も相變らず參らうと存ずる。シカ〳〵。誠に。八幡宮の內證には相叶うて御座るやら。年々繁昌致すによつて。彌々有難う存ずる事で御座る。アドへこれへ一段の人が見えた。なう〳〵。これ〳〵。小アドへこなたの事で御座るか。アドへ成る程こなたのことで御座る。これはどれからどれへ往かします。小アドへ身共は八幡宮の御神事に參る者で御座る。アドへ幸ひの人に詞をかけた。某も御神事に參詣致す。何と同道致さうか。小アドへ一人（ひとり）で連ほしう存じた。成程御供致さう。アドへそれならば行かしめ。小アドへそなたが先ぢや。先へゆかしめ。（せりふ常の如し。アド先へ行く。）アドへふと詞をかけたに。早速同心めされて。此の樣な嬉しい事はおりない。小アドへ袖の振り合はせも他生の緣と申すが。此の樣な事であらう。アドへさてそなた唯參るか。願があるか。小アドへ身共は河内國に酒を商賣する者でおりやるが。八幡宮を信仰申してより。次第に商も繁昌するに依つて。毎年御神事には神酒を竹筒に容れて持つて參る。唯今も其の通りぢや。アドへ扨々これには似た樣な事ぢや。某は大和の國に酒を商賣して居る者ぢやが。八幡宮の御蔭て。次第に富貴に成るによつて。御禮かた〳〵毎年御神事に。筒に入れて神酒を捧ぐる事で御座る。小アドへいづれこれは言合はせた樣な事ぢや。アドへさりながら。其の筒をささえとおしやるは合點がゆかぬ。小アドへこれはささえとこそ云へ。筒とは申さぬ。アドへいや筒とこそ云へ。ささえ

とおしやるは不審な。　小アド〽これはさゝえと申す。　アド〽いや筒と申す。あら不思議や。　小アド〽いや俄に異香（いきやう）薫じ。　唯ならぬ體ぢや。　アド〽先づこれへよつて御座れ。　小アド〽心得ました。　シテ〽抑もこれは八幡宮に仕へ申すはとの神とはわが事なり。　アド〽これへ御出でなされたはどなたで御座る。　シテ〽これは八幡宮の末社はとの神なるが。汝等年月お山を信仰して歩みを運ぶ。當年も參詣する所に。兩人論をしてお山に遲なはる。急ぎ連れて參れとの神勅を請け。これまで出現してあるぞとよ。　アド〽扨々あり難う存じまする。　小アド〽先づこれへ御來臨なされませ。（小アド葛桶出し。腰をかけさせる。）　シテ〽さて汝等は最前から何を論ずる事ぢや。　ア〽其の事で御座る。私は大和の國の者で御座る。毎年御神事には筒に容れて神酒を捧げまする。又あの者は。河内の國に酒を商賣致しまするが。これは例年さゝえに神酒を容れて捧ぐると申す。此の筒ささえの論を致す事で御座る。シテ〽さては筒竹筒の論をするか。　アド〽さ樣で御座る。　シテ〽汝等は愚かな事を言ふ者ぢや。筒と言ふもささえと言ふも。同じ事ぢや。爰に筒竹筒と言ふ物語がある。語つて聞かせう。　語古へ都の西山崎と申す所に。貧しき夫婦の者あり。常に松尾の明神を信仰しけるに。行年八月朔日に。庭に見事なるから竹のありしを。尺八寸に切り。其の筒に酒を容れて。松尾の大明神へ神酒を捧ぐる事。誠に信心深く。其の夜の御靈夢に。汝ささえに容れて神酒を捧ぐる。其の信心疑ひなし。此の後酒屋をして渡世せよ。子々孫々まで繁昌に守るべしと有りしかば。告にまかせて酒を作る。次第〱に富貴の身となる。今の世に至るまで。松の尾の大明神へ八月朔日に神酒を捧ぐる事。その例を引いてなり。惣じてささえとは。竹の筒と書くなれば。筒と言ふもささえと言ふも。同じ竹の筒にてあるぞとよ。必らず論ずる事はない。さう心得い。　アド〽さ樣の事も存ぜいで論を致して御座る。此の後は爭ふ事は御座りませぬ。　シテ〽最前から何かと言うたれば口が乾く。先づ持參の神酒を捧げい。　アド〽畏まつて御座るが。先づお山へ上げたう御座る。お山より先へは如何で御座る。　シテ〽尤もなれど。神勅を請けて出現するからは。八幡宮の御名代ぢや。苦しうない。氣遣ひせずとも急いであげい。　アド〽畏まつて御座る。是は筒の神酒で御座る。　小アド〽是は竹筒の神酒で御座る。　シテ〽それ日本大小の神祇。別してははとの神がたばる。　アド〽申上げまする。日本大小の神祇と仰せらるゝは御尤もで御座るが。別して松の尾の大明神と改めさせられたは。いか樣の義で御座る。　シテ〽不審尤もぢや。最前の物語を何と聞いた。松の尾の大明神は酒の守護神ぢやに依つて。初穂を少し參らせて。あとははとの神が思ふまゝにたぶる事ぢや。　アド〽これは御尤もで御座る。　シテ〽さて斯かる目出度き折なれば。ただ歸るも如何なれば。一曲かなでて。其の後汝等を山へ連れて行かう。さう心得。　二人〽畏まつて御座る。　シテ〽やら萬代をかけ筒さゝえ（三段の舞。末社の通り。太鼓打上。）〽やら〱目出度や目出度やな。むかしが今にいたるまで。筒もささえも同じ名の。八億四千七珍萬寶箱崎の古も。皆此の山にをさまる法（のり）の。皆此の山にをさまるのりの鳩の峯こそ久しけれ。

苞山伏（つとやまぶし）

シテ　山伏
アド　山人

小アド　盗　人

アド〽此の所の山人で御座る。今日は奥山へ参り。薪を拵へて参らうと存ずる。シカ〳〵。誠に。我等如きの様な浅ましい境界は御座らぬ。朝に霧を拂うて罷出で。夕に星を戴いて罷歸る。とかく片時も油斷のならぬ事ぢや。さりながら。今朝は餘り夜深に出たれば殊の外眠たい。暫く是處にまどろうで行かう。シテ山伏出立右の如し。シテ〽いや此の中の長旅で殊の外草臥れた。ちと此の處に寝て行かう。小アド〽急の使に山一つあなたへ参る。先づ急いで参らう。シカ〳〵。誠に。主命と申すものは浅ましいもので御座る。夜ともなく晝ともなく。か様にありかねばならぬ事で御座る。これは如何な事。山人さうな。正體もなう寝て居る。何やら枕元に苞がある。ハアあれは中食さうな。折節ひもじうなつた。其の上まだ道々の道も往かねばならぬ。これは幸ひぢや。そと盗んで食はう。ト云うて。さし足して取り食ひ様仕様あるべし。其のうち山人寝返りする。驚き隠る。仕分け傳。寝返りであつた。扨々よい肝を潰した。扨も〳〵うまい事ぢや。ト云うて。其のうち山人起きる。驚く。アド〽やれ〳〵よう寝た事かな。さらば中食をして山へ行かう。ト云うて。苞を尋ねる。これは如何な事。今朝出る時は此の棒の先に。苞と鎌と結附けて置いたが。鎌はあれども苞がない。合點のゆかぬ事ぢや。いや是處に何者やら寝て居る。起こして尋ねう。なう〳〵。ちと起きて下され。小アド〽寝た事かな〳〵。今起こしたはそなたか。アド〽なる程身共ぢや。お主は

身共が中食を食ひは召されぬか。小アド〽何ぢや。中食を食うた。アド〽なか〳〵。小アド〽いやこゝな者が。身共は人の中食など盗んで食ふ様な者ではない。必らず聊爾なおしやるな。アド〽でも此の山中にそなたより外に人がない。しかくこなたが疑はしい。小アド〽いよ〳〵片手打な事をおしやる。あれに山伏が寝て居る。あれでも人はないか。アド〽誠に山伏が寝て居る。さりながら。山伏といふ者は。人の中食など盗んで食ふ者ではない。小アド〽いや〳〵合點がゆかぬ。何やら枕元に苞があるぞや。アド〽どれ〳〵。誠にあれは身共が苞ぢや。扨は山伏が食うたものであらう。小アド〽早う起こさつしやれ。アド〽心得た。なう〳〵。早う起きさつしやれ。シテ〽寝た事かな〳〵。今起こしたは汝等か。アド〽なる程身共ぢや。和御寮は山伏に似合はぬ。人の中食をよう盗んで食うたな。シテ〽何ぢや。中食

を盗んで食うた。アド〽なか／＼。シテ〽いやこゝな者が。山伏といふ者は。人の中食を盗んで食ふ様な者ではない。必らず聊爾を云ふな。小アド〽あのしら／＼しい顔わいの。お食やつた證據には。枕元に苞がある。シテ〽己れは何者なれば山伏に難題をいふぞ。小アド〽身共この邊を通る者ぢや。殊の外草臥れたに依つて。暫く此の處に寢て居たれば。こゝな山人が中食が見えぬと云うて。身共を起こした。見ればそなたの枕元に苞がある。此の上は遁れはあるまい。ありやうに云はしめ。アド〽いか程陳じたりとも陳じさせまいぞ。シテ〽扨は汝も寢て居たか。小アド〽なる程身共も寢て居た。シテ〽すれば此の疑は三人にある　先づ山人が食うて。身共等が食うたといふも知れず。又汝が食うたもしれず。某を疑ふも尤もぢや。年月の行法もその様な時の行ぢや。一祈り祈つて飯を食うた者を祈出して見せう。アド〽あの祈らせられたらば。飯を盗んで食うた者が知れまするか。シテ〽恐らく飯を食うた者の五體をすくませ。立居のならぬ様にして見せう。小アド〽笑ふ。山伏といふ者は。ものゝけの憑いたをこそ祈れ。飯食うた者を祈る山伏は終に聞いた事がない。シテ〽いかに云ふとも祈らうぞ。我が年月の行德も。かゝる奇特を見せんため。不動明王の索にかけ。いら高の珠數のつぶ緒に入れたるを。さらり／＼と押揉んで。一祈りこそ祈つたれ。ぼろおん／＼。（ト云うて。二人祈る。）小アド〽あの様な者に構はぬがよい。（ト云うて。橋懸りの方へ行く。山伏追ひかけ祈る。口傳。）小アド〽あゝ御許されませ／＼。シテ〽行力の達した山伏は。まつこの通りぢや。アド〽扨々貴い御山伏を疑ひました。眞平御許されませ。シテ〽何と疑は晴れたか。アド〽此の上は私の所へお出で下され。一飯を上げませう。シテ〽それは過分な。なる程行くであらう。小アド〽あゝまうし／＼。面目も御座らぬ。此の様な事ならば飯を盗んで食ふまいものを。（ト云うて泣く。）シテ〽何と思ひしつたか。小アド〽最早ものを申すも苦しう御座る。どうぞお慈悲にこゝ一祈りなされて。元の様にお祈りなされて下され。シテ〽何れ盗人が知れた上は。人を助くるも出家の役ぢや。こゝ一祈りして元の様にしてやらうぞ。小アド〽それは有難う存じまする。アド〽あゝまうし／＼。先づお待ちなされませ。あの様な者は重ねての見せしめで御座る。此の棒で打殺してのけませう。シテ〽こりや／＼。聊爾をするな。ちやつと逃げ／＼。ぼろおん／＼／＼。アド〽おれは打殺してやらう。小アド〽ちやつと留めて下され。アド〽そこをのかつしやれ。（ト云うて。留めては祈り。シテ入るなり。小アド逃げ様工夫あり。三人ともとくと思合ひ。入るべし。）

釣狐（つりぎつね）

シテ　白藏主（狐）
アド　獵師

（入道具）

アド先に出て。笛座に居る。次第打出す。シテ鏡の間にて祕事あり。化物足なり。シテ次第

〽名殘の後の古狐。／＼。こんくわいの涙なるらん。（次第地を取る事なし。）詞これは此の邊りに隠れもない百とせに餘る古狐で御座る。爰に或る者の候が。いつぞの程にか狐を一つ釣り初めて。それより面白う思うて。釣るほどに／＼某が部類眷屬を殘らず釣り取つて。（祕事あり。）今また身共をねらふといへども。そつとも油斷をせぬに依つて。さ様の時節に參り逢うた事も御座らぬ。（祕事あり。）又かれが伯父坊主に白藏主というてあるが。これが申す事は。何事によらず承引致すに依つて。けふは彼の白藏主

に化けて參り。意見なして釣なとまらせうと思うて。仕方あり。總ニ祕事。　先づこれ程までに化けて御座る。急ぎ彼の者の私宅へ參らばやと存じ候。道行住みなれし。住み古塚を立ち出でて。いゝ〳〵。足に任せて行く程に。〳〵。獵師の許に着きにけり。仕方あり。急ぐ程に。彼の者の私宅に着いた。いづれ物にはとりえが御座る。彼の獵師が犬を飼うて御座らば。か樣に心安う參る事もなるまいに。犬を飼はぬに依つて。仕方あり。犬のなく聲がする。仕方あり。總ニ祕事。いや〳〵此邊りではありそむない。先づ案内を乞はう。仕方あり。物もう案内もう。アド幕に立ちながら口傳。アド〳〵表に案内がある。案内とは誰そ。エイ白藏主樣。殊にお前ならば案内なしに通りはなされいで。殊に暮に及うで何と思召してのお出でゞ御座る。此處シテに祕事あり。シテ〳〵おゝ其の事〳〵。けふは思ふ仔細あつて案内を乞うてすは。アド〳〵それはいかやうの御事で御座る。シテ〳〵聞けばそなたは狐を釣るとの。アド〳〵これは思ひも寄らぬ事を仰せられまする。私はつひに狐を釣つた事は御座りませぬ。シテ〳〵いや隱さしますな。正面へひらく。アドもひらく。寺へ來る人毎に。これの甥の殿こそ狐を釣らるれ。あれが目に見えぬか。なぜに意見をせぬぞと仰せらるゝ。アドの方に向く。アド

もシテの方に。隱さずとも有りやうにおしやれ。アド〳〵扨はお聞きなされたが誠で御座るか。シテ〳〵おゝ聞いておりやるとも。アド〳〵御存じの上は隱しませうやうは御座らぬ。正面へひらく。ふと一つ釣りまして。それより面白う存じて。シテの方へ向き。二つ三つ四つ。五つばかりも釣りませうか。シテ〳〵それ〳〵お見やれ。人の仰せらるゝに少しも僞りはない。してまた狐を取つて何におしやる。アド〳〵別に何に致すと申す事も御座らぬ。先づ皮を剝いで。正面へ。シテの向へ。引敷に致す。シテ〳〵ホイ。シテ仕方あり。アド〳〵身は料理して食べまする。シテ〳〵フン。アドの方へ。アド〳〵骨は黑燒にして。膏藥練りに賣りまする。シテうつむく。シテ此の處祕事あり。シテ〳〵聞くさへ身が震はるゝ。顏あげる。あの狐といふ物は。つゝと執心の恐ろしい物ぢや。必ず〳〵お釣りある事は無用でおりやる。アド〳〵さ樣の事とも存ぜいで釣りました。唯今からは釣る思ひとまりませう。シテ〳〵何ぢや釣る思ひとまらう。アド〳〵さ樣で御座る。シテ〳〵それならば。正面へ拔き。爰に狐の執心の恐ろしい昔物語がある。之を語つて　アドの方へ。聽かせうか。但し釣るをとまるまいならば要らぬものか。アド〳〵何がさて。向後正面へひらく。釣るとまりませう程

に。シテの方へ。お物語が承りたう御座る。シテ〳〵はる〳〵來たれば草臥れた。まづ其の床机をくれさしめ。アド〳〵畏まつて御座る。アド〳〵お床机で御座る。あたまをさげる。アドの床机を出しかけ。シテかゝる。其に祕事あり。シテ〳〵語らうほどによう聽かしめ。アド〳〵畏まつて御座る。手をつき。あたま下げる。シテ語りの支度をとる。シテ語〳〵抑も狐と申すは神にておはします。天竺にては八しほの宮。唐土にては如月の宮。我が朝にては稻荷五社の大明神と申す。アド應答ひ辭儀する。シテ正面へ直る。アドも直る。皆これ狐なり。アド〳〵はあア。シテ〳〵爰に玉藻の前とて女御一人のおはします。かの女容色美麗にして。四隅八方より見れど更に裏のなき女なり。總じて玉には裏表のなきものなればとて。玉藻の前とは附けられたり。アドの方向く。アド應答ふ。正面へ直る。アドも直る。まつた化生のまへと申すは何ぞとなれば。一とせ帝に御談合あつて後御管絃のありし時。永祚の大風吹き來つて。禁中の燈火一燈も殘らずきえぬ。其の時玉藻の前が身より。金色の光を出だし。玉殿を照らす。帝叡覽ありて後。玉藻の前は人間になし。化生にてあるやとて。化生の前とぞ召されける。アドの方向く。アド應答ふ。正面へ直る。アドも直る。其の後程なく帝御惱とならせ給ひしかば。安部の泰成まゐり。一(いつ)とく六がい二木(ぎ)三じやう。

はつなんはろくがいと置散らし。占ひ申しけろは。これ皆玉藻の前が仕業なり。それをいかにと申すに。玉藻の前は根本狐なるが。既に大唐にては幽王の后褒姒となつて。七帝（みかど）まで取り奉り。今また日本に渡り。此の君の御命を取り奉らんとする。かゝる一大事の御事なれば。御祈禱なくては叶ふまじいとて。貴僧高僧を請じ。色々御祈禱をなさるれども更に其驗（しるし）なし。四壇をついて五壇を飾り。薬師の法を行ふべしと有りし時。大内にたまり兼ね。此の處仕方あり。 下野の國那須野の原に落ちて行く。この當りにてシテを見る。 國内通化の物なれば。おろそかにしては叶ふまじい。犬は狐の相を得たる物なれば。犬追物といふ事を以て。御退治あるべしとて。三浦の介上總の介。兩介に仰付けらるゝ。兩人はお請を頭を少しさげる。 申し。同じく直る。 家の子若黨たちを引具し。那須野の原に下着して。百日の犬追物とぞ聞こえける。アドの方向く。アド應答ふ。正面に直る。アドも直る。 百日の犬滿じければ。尾頭七尋にあまる狐一つ出でたりしを。一の矢は三浦の助。二の矢は上總の介。ひようどつきと射る。仕方あり。 得たりやおゝと飛んでおり。劍を拔いて彼を害し。狐を取つて君に捧げければ。君の御惱も忽ち御平癒あり。國土治まり太平の御代になるぞとよ。されども狐の執心は殘つて大石となり。人を取る事數知らず。地を走るけだもの。仕方あり。秘事。 空をかくる翼までも。仕方あり。秘事。 地に落つ。仕方あり。 かゝる なほる。 殺生をする石なればとて。殺生石と名づく。爰に玄翁と云へる僧あり。かの石に向つて偈す。汝元來殺生石。問ふ石靈。性いづれの處より來り。いづれの處にか去ると。柱杖を以て三ッつ打つ。仕方あり。 打たれて此の石割れしより此の方。猶も狐の執心は殘つて人を取るぞとよ。かゝる執心の恐ろしい物なれば。けふよりしては釣をはつたとおとまりあれかしと思ひすは。仕方あり。 アドへ扨も扨も恐ろしいお物語を承つて御座る。唯今まではさ樣の事も存じませず。唯うかうかと狐を釣りまして御座る。このお物語を承つて發起致して御座る。此の後は釣りをふつ／＼と思ひとまりませう程に。御心安うおぼしめしませ。うつむき手つく。 シテへ何ぢや釣を思止まらう。 アドへさ樣で御座る。 シテへそれならば狐を釣る 正面直り杖直す。 あれは物わこわこ。 わなとやら 仕方あり。 いふ物があるげな。それを アドの方むく。 も捨てさしめ。 アドへそれはお歸りなされた後で其の儘捨てませう。 シテへいや。といへば 仕方あり。 その釣る道具を見てはまた釣りたい心も出るものぢやげな。迚も思止まらうならば。愚僧が見

る前でお捨てあれ。アドへ畏まつて御座る。仕方あり。秘事。アドへこれで御座る。仕方あり。秘事。シテへなまぐさい〳〵。出家律師の鼻の先へ。其の様ななまぐさいものをさしよするといふ事があるものか。早うお捨ちや。アドへはあ。シテへ早う捨てさしめ。アドへ畏まつて御座る。シテアト見に仕方あり。アドへ捨てまして御座る。シテへ何とお捨ちやつたか。アドへさ様で御座る。シテへあれ〳〵と。嬉しや〳〵。愚僧がいふ事を承引めされて満足した。ちと奥へ通つて子供にも會ひたけれども。けふは日が悪い。重ねて日を改めて來て會はう。アドへそれは兎も角もで御座る。シテへそなたもちと寺へお出でやれ。シテ床机をはなるる。後見床机を取る。アドも仕舞ひながら立つ。寺へお出でやつたというて。別に振舞ふ物もない。昆布に山椒を巻いてよい茶を申さう。アドへそれは忝う存じまする。シテへ愚僧が寺なれば。別に振舞ふものもない。昆布に山椒。アドへはあ。シテへ茶ばかり申さう。仕方あり。アドへようお出でなされました。アド笛座につく。仕方あり。シテへ愚僧がことなれば。仕方あり。別に振舞ふ物もない。昆布に山椒茶ばかり〳〵〳〵。仕方あり。口傳。なう〳〵。嬉しや〳〵。まんまと云うて釣りを思ひとまらせた。此の後はいづく仕方あり。

何方へ仕方あり。參つても。正面へ直る。そつとも心にかゝる事もない。此様な心面白い時は。小歌節で古塚へ戻らう。小歌へ此里に住めばこそ浮名もたてのいのうやれ。わが古塚へしやなら〳〵と。仕方あり。なう〳〵。恐ろしや〳〵。わなを捨てたといふほどに。遠くへも捨てたかとも思へば。愚僧が歸る道の眞中に捨てて置いた。わなを見る。扨も〳〵。あの獵師といふ者は。疑ひのしんの深いものぢやなあ。仕方あり。終にあのわなといふものを見た事はないに。けふは幸ひぢや。立ち寄つてわなの様子を見てこう。仕方あり。わなをいらふ。やいおのれ。その黒い小ざいなりをして。某が部類眷屬をよう釣り取つたなあ〳〵。わなのいらひ方仕方あり。香をかぐ仕方あり。あゝ若いものが大勢わなにかゝつたこそ道理なれ。上々の若鼠を油揚にして置いた。なに之を喰はるといふ事が仕方あり。あるものか。飛びかゝつて一口に喰はう。わなのそばへ行く。いや〳〵。目の前に若い者が大勢わなにかゝつたを見ながら。今また某が罠にかゝるでは有るまい。要らぬものぢや。古塚へ戻らう。シテ柱まで戻る。[illegible]上る。名乗座へ。わなを見る。仕方あり。あの餌ばかりむしつて食ふ事を知らいでわなにかゝる。餌ばかりむしつて食ふに別の事は有るまい。餌ばかりむしつて喰

はう。仕方あり。なう〳〵。恐ろしや〳〵。既に罠にかゝらうとした。いや〳〵とかく要らぬものぢや。此の様な時は道をかへて古塚へ戻らう。橋掛りの方へ。いらぬものぢや。思ひ切つて戻らう。シテ柱にて仕方あり。いらぬものぢや。古塚へ戻らう。三の松まで行き。あと色々仕方あり。名乗座にて。よく〳〵思へば。おれは部類眷屬のためにはかたきぢや。おのれ敵討に飛びかゝつてわなのそばへ。たつた一口に。とは思へども。身に青みどりを來てゐれば。身が重うてどうも喰はれぬ。エヽ喰ひたいなア。仕方あり。〳〵。とまる。やい。〳〵己れ部類眷屬の仕方あり。敵討に。この青みどりをとつて姿見る。來て。たつた今取つて服するほどに。構へてそこな去り居るな。杖にて打つ。〳〵。打つ。エイ〳〵〳〵。打つ。中入。仕方あり。

シテ中入りし。幕へ入る。案内をこう。アド立つ。案内の仕方。其の外總て口傳。アド後見舞臺に入つて立つ。

アドへ最前伯父の白藏主のお出でなされて。某が狐を釣る事をお聞きなされ。いつにない御意見に與つて。罠まで捨てゝ御座る。さりながら。つひに暮に及うで參られた事もなし。言葉のはしに少し合點の行かぬ事が御座つた程に。わなを捨てかけと申すものに致して置いた。先づあれへ參り。罠の樣子を見うと存ずる。誠に。不思議な事で御座る。あの樣に

ものたくどう云ふやうな人では御座らぬ。其の上踊らるゝ時見送つて御座れば。其のまゝ姿を見失うて御座る。とかくわなの様子を見たらば。安堵致すであらう。わあ〳〵。これはいかな事。わながせゝりさがしてある。これはなか〳〵人間のしたものではない。狐がせゝつたものぢやが。あゝ扨は最前の白藏主は。身共が日頃ねらふ古狐に極まつた。扨も〳〵憎いやつかな。身共が合點の行かぬ事ぢやと思うた事ぢや。これは口惜しい。何とせうぞ。イヤ〳〵か様に餌については。また參るもいぢや。さらば罠をとつくりと張りすまして置いて。かの白藏主殿を釣つてのけう。ト云うて。ワナを仕かける。色々あるべし。總じて狐といふ物は。通を得たものぢやに依つて。いつ何になつて來て。化かさうも知れぬ事ぢやが。さてあの様にはよう化けた事で御座る。其のまゝの白藏主であつた。誰に見せたりとも。そでないといふ者はあるまい。云うても〳〵殘り多い事を致した。最前きやつを狐ぢやと存じたらば。罠までには及ぶまい。手どらまへにしてのけうものを。殘り多い。口惜しい事をいたした。さりながら。罠の加減をとつくりと仕すまして。釣りおほせでは置くまい。最前合點の參らぬ事が御座つたに依つて。捕へて吟味をせうかと存じたれども。若し誠の白藏主様ならば。後難(こうなん)もいかゞぢやと思うて了簡をいたした。云うても〳〵。此の様な腹の立つ事は御座らぬ。これ〳〵。大方これでよからう。さていつもあの道から此の道へ參るに依つて。これでよい。先づ某は此の松蔭に隠れて居て。白藏主殿を待たうと存ずる。シテ出る。出方にも。出て後にも。色々仕方あり。アド肩をぬぐ所。きまりあり。總て口傳。シテ終に罠にかゝる。アドへそりやかゝつた。よう來なつた。おのれ最前身共をようだましなつた。おのれそれがよいかこれがよいか。追ひ竹にて打たんとす。シテ手を合はして拜む。ワナを外す。アドこける。シテ逃げる。皆祕事口傳。アドへまたわなをはづし居つた。どれへ失せなつたぞ。シテ橋懸りに一二聲なく。アドへされはこそあれへ行きなる。誰ぞ捕へてくれい。やるまいぞ〳〵。

釣針(つりばり)

シテ　太郎冠者
アド　主人
女　御夢想の妻
（入道具）

アドへこの邊りの者で御座る。某未だ定まる妻が御座らぬ。西の宮の夷三郎殿は御利生あらたに御座る。參詣致して申妻を致さうと存ずる。太郎冠者を呼出し。申附ける事がある。太郎冠者あるか。出る。常の如し。汝呼出す別の事でない。そちが知る通り未だ定まる妻がない。又西の宮の夷三郎殿は御利生あらたなと云ふに依つて。申し妻をせうと思ふが。何とあらう。シテへ何れ左様の事でなりともして。早う奥様をまうけさせられたらばよう御座りませう。アドへ身共もさう思ふ事ぢや。さりながら。此の様な事を廣う沙汰するは如何ぢや。汝一人供をせい。シテへ畏まつて御座る。アドへ追附け行かう。さあ〳〵來い。シカ〳〵。さて何と思ふぞ。世間の世話にも。あるはいやなり。思ふはならずと云ふが。何とぞ似合はしい妻を授けて下さるればよいが。シテへ信心に御祈誓をなされたらば。御利生の無いと申す事は御座るまい。さて私も何時(いつ)が何時まで獨り身でも居られませぬ。何卒私も申し妻が致したう御座る　アドへ成る程尤もぢや。汝も祈誓を申せ。シテへそれは有難う存じまする　アドへ何かと云ふうちに參り着いた。シテへ誠にお參り着きなされて御座る。アドへ先づお前へ向はう。シテへ一段とよう御座り

ませう。鰐口叩く方よし。アドへ唯今參る事餘の儀で御座らぬ。某未だ定まる妻が御座らぬ。何卒似合はしい妻をお授けなされて下され。夷三郎殿〳〵。シテへ私も似合はしい妻を授けて下され。蛭子の明神〳〵。アドへ今宵はこれに籠らう。汝もそれにまどろめ。シテへ畏まつて御座る。アドへはあ〳〵。あら有難や。暫く睡眠の中にあらたな御靈夢を蒙つた。扨も〳〵忝い事ぢや。アドへやい〳〵太郎冠者。あらたな御夢想を蒙つた。西門に釣針を置く。其の針を以て妻を釣れとある事ぢや。何と有難い事ではないか。シテへ扨々それはあらたな事で御座る。アドへ告に任せて追附け西門へ行かう。さあ〳〵。來い〳〵。シテへ畏まつて御座る。アドへ何と思ふぞ。神佛の事をあだおろそかに存ぜう事ではない。此の樣な事ならば。とうにも參らうものを。油斷で有つたなあ。シテへいか樣ちと御油斷で御座りました。アドへ何かと云ふうちに西門ぢや。其の邊りに釣針が有るか尋ねてみよ。シテへ畏まつて御座る。何處もとにある事ぢや知らぬ。さればこそ。こゝに有る。まうし〳〵御座りました。アドへ有るか〳〵。シテへ先づ御頂戴なされませ。アドへさて忝い事ぢや。

追附け下向せう。さあ〳〵來い〳〵。シテへはあ。アドへさて何と思ふ。其の針を以て某が妻を釣りおほせた後は。其の針は家の重寶にして置かうと思ふ。シテへ成程。お寶物になされて恥かしうないお道具で御座る。アドへ何かと云ふうちに私宅ぢや。さあ〳〵急いで釣つてくれい。シテへこれはお前の奧樣で御座る。御自身お釣りなされませ。アドへそれが恥かしうて何と釣らるゝものぢや。そちを頼む程に名代に釣つてくれい。シテへ扨は御名代に私が釣りませうか。アドへなか〳〵。早う釣つて見やれ。シテへ畏まつて御座る。釣ろよ〳〵。奧樣を釣ろよ〳〵。イヤこれはみめのよいを釣りませうか。但しおほみめなを釣りませうか。アドへこゝな者が言ふ事は。大みめなが何の役に立つものぢや。よいが上にもよいを釣つてくれい。シテへ私もさ樣には存じましたれども。お前のお心を引いてみましたので御座る。それならばみめのよいを釣りませう。アドへ早う釣つてくれい。シテへ畏まつて御座る。釣ろよ〳〵。みめのよいを釣ろよ〳〵。シテへお年はいくつばかりに致しませう。アドへさればいくつばかりがよからうぞ。シテへ四十ばかりは何とで御座る。アドへそれは餘り年行

ぢや。もそつと年若なを釣つてくれい。シテへさ樣ならば十四五は何とで御座る。アドへそれはまた餘り年若な。シテへいかさま。餘り年の參らぬは物事しどけなうて惡う御座る。さ樣ならば十七八は何とで御座らう。アドへこれは一段とよからう。急いで釣つてくれい。シテへ畏まつて御座る。いやつ釣ろよ〳〵。奧樣を釣ろよ。十七八を釣ろよ。みめのよいを釣ろよ〳〵。一人出る。笑ふ。まうし〳〵かゝりました〳〵。アドへ何ぢや。かゝつたか〳〵。シテへ扨々めでたい事ぢや。先づかう御通りなされませ。ト云うて一〇脇座に連れて行く。これにお腰を掛けられませ。さてお召使も無うては御不自由に御座らう。お腰元も釣りませうか。アドへこれは一段とよからう。とてもの事に四五人も釣れ。シテへ畏まつて御座る。また釣ろよ〳〵。腰元を釣ろよ。四五人を釣ろよ。大勢出る。また大勢かゝりました。アドへ誠に。大勢かゝつた。シテへ扨も〳〵奇特な事かな。さあ〳〵。何れもつゝと通らしませ。さあ〳〵お通りやれ。扨まうし。最前も申上げまする通り。斯樣の目出度い釣りついでは御座らぬ。私が妻も釣りたう御座るが。幸ひ腰元の大勢の中で見取りに致したう御座るが。何と御座りませう。アドへそれは我儘な事なれども。そちが釣つた事ぢや

によつて、ともかくもせい。シテ〽それは有難う存じまする。さ樣ならば見取りに致しませう。いやなう。某も未だ定まる妻がないに依つて。お主達のうちで見取りにする。緣の有る者を身共が妻にする程に。さう心得さしめ。皆々うなづく。笑ふ。シテ〽これは嬉しい事かな、さらば見取りに致さう。見樣色々。仕方口傳。シテ〽いや見取りに致さうと申しましたなれど。よいのが御座りませぬ。やはり釣つてみたう御座る。アド〽扨々勝手な事ばかり云ふ者ぢや。氣に入らずば是非に及ばぬ。許す程に早う釣れ。シテ〽それは有難う存じまする。さ樣ならば釣りませう。笑ふ。私が妻ぢやと存ずれば。何とやら此の針が重い樣に御座る。アド〽それは定めて。よい妻を儲けうと云ふ事であらう。シテ〽これはどうやら恥かしう御座る。アド〽何の恥かしい事が有らう。隨分と信をとつて釣つたがよい。シテ〽思ひ切つて釣りませう。アド〽早う釣れ。シテ〽釣るよ／＼。俺が妻を釣るよ。みめのよいを釣らうよ。／＼／＼と仕方色々口傳。かゝりました／＼。アド〽かゝつたか／＼。シテ〽扨々有難い事で御座る。アド〽でかいた／＼。シテ〽先づこれに居さしめ。アド〽これへ通せ。シテ〽それは

餘り慮外で御座る。アド〽苦しうない。平に通せ。シテ〽それならばこれへ來さしませ。ト云うて。目附柱へ連れて行く。扨々これは目出度い事で御座る。則ち今日は最上吉日で御座る。其の上善は急げで御座る。奥へお出でなされて。御祝儀なお了ひなされたらばよう御座りませう。アド〽それならば身共は奥へ行く程に。何事も汝よい樣に計らへ。シテ〽畏まつて御座る。さあ／＼奥樣。奥へお出でなされませ。え。お恥かしいは御尤もで御座りまする。さあさあ。和御寮たちも奥へお行きあれ。何なりとも御用きかしめ。必ず奥樣の側を離れまいぞ。さあ／＼。お行きやれ。笑ふ。扨も／＼嬉しい事かな。先づ言葉かけう。笑ふ。物を言はうと思へども。恥かしうて物が言はれぬ。誰ぞ引合はせて貰ひたいものぢや。いや／＼。此の樣な事では埒が明かぬ。思ひ切つて申さう。なう／＼。そなたと身共は夷三郎殿のお引合はせぢやに依つて。五百八十年萬々年も連添ひませうぞや。女うなづく。笑ふ。さて對面を致さう。其の衣をとらしめ。女頭振る。いや尤もぢや。それは定めて恥かしいと云ふ事であらう。ありやうは身共とても同じ事ぢやさりながら。何時までも其の衣を被いて居てもす

まぬ。さあ／＼。お取りやれ。かぶり振る。これは如何な事。我等如きの妻が其の樣な事ではならぬ。早うお取りやれ。はて氣の毒な。それならば身共が取つて進ぜう。いやぢやと言うても何時までかづいて居るものぢや。ト云うて。衣とる。あれは何ぢや。奥がつた者ぢや。女〽まうし／＼。何處へ行かしやる。シテ〽どれへも行きはせぬ。これはまた夷三郎殿も胴慾な。あれが何となるものぢや。女〽そなたと妾は五百八十年萬々年も連添ひませう。シテ〽己れが樣な奴は斯うして置いたがよい。ト打ちこかし。長者になると云うても。あれが何となるものぢや。女〽なう何處へ行かしやる。シテ〽宥してくれ。人が笑ふわいやい。ト逃げて入る。追込み入るなり。

【て】

天狗の婿　鷺流

シテ　大天狗
アド　聟
アド　立衆
アド　嫁
アド　供

シテ〽これは此の山に年經て住む大天狗でおゝ今日は最上吉日で愛宕山より花嫁を迎へ候。やい〳〵居るかやい。常の太郎冠者のやうにして出る。シテ〽約束の刻限なれば。追附け飛輿あらうずるぞ。用意して待ち候へ。ヒイよろ〳〵。鷲の鳴聲の眞似なり。立衆〽ヒイ引く。ヒイ〳〵。シテ常座の前に腰かけて居る。立衆は案内の。次に立衆と。面々に大小の前まで居並ぶ。立衆は案内の時出で。向合ふ。末に太鼓の前に居る。嫁頭にて出る。一セイ〽親に似る。娘の顔の尖ることそ。花嫁御前の。思ひなれ。道行。愛宕山。樒が原を立出でゝ。〳〵。心も[illegible]行く道の。[illegible]天狗かず〳〵に。伴ひくれば聟殿の。杉の門にも着きにけり。立衆頭〽ヒヨウロロ〳〵。案内を乞ふ心。聟方の立衆〽ヒイ〳〵ヒ。これより一同廻り。聟と嫁方と。盃事などあり。慰みとして。相撲となる。聟立衆〽何がよう御座らうぞ。嫁方の立衆〽常々稚い比より。兵法の相撲の礫打合などが好きで御座る。聟〽さやうの事がよう御座らう。聟方の立衆〽相撲と仰せらるゝ。さらば御馳走に出てとらしませ。立衆頭行司にて相撲とる。嫁悦ぶてい。さてシテ此の様子を目出度う謠に作つて謠はう。汝も謠へといふ。シテ〽花嫁御前の御好みには。地〽花嫁御前の御好みには。火風土風喧嘩口頭あたまをはり。組んづ轉んづいさかひすれば。心も清く面白ければ。夫婦もともに舞ひ遊び。〳〵。作ふ事こそ嬉しけれ。文句に合はせ廻り。シテは中。聟と嫁は兩方に居て。シテ留める。シテばかり先に出て シテ〽ヒイヨロ〳〵ヒイ。[illegible]

【と】

野老（ところ）

シテ　野老の精
ワキ　僧
アヒ　處の者
（入道具）

次第ワキ〽我が古寺にすみ衣。〳〵。捨つるや名残なるらん。是は奥丹波に住居する僧にて候。我いまだ都を見ず候程に。此度思ひ立ち都に上らばやと存じ候。道行 夜を籠めて出づるや旅の家獨り。〳〵。誰とむるとは知られども。關々越えて程もなく。山の麓に着きにけり。詞急ぎ候ほどに。野瀬の郡に着きて候。あら不思議や。これに由ありげなる卒塔婆を立てられて候。謂れのなきことは候まじ。所の人に尋ねばやと思ひ候。所の人の候か。間〽所の人とお尋ねは。誰にて渡り候ぞ。ワキ〽これに立てられたる卒塔婆は。様ありげに見えて候。謂れのなきことは候まじ。御存じ候はゞ御物語り候へ。間〽さん候こぞの春の頃。山人が大きなる野老を掘出し候な。在所の面々これを料理して賞翫申して候。また或る人の申すは。餘り大きなる野老にて候程に。執心のなきことはあるまじと申して候へば。案の如く夜な〳〵かの執心出で申すほどに。所の面々卒塔婆を立て弔ひ申して候。御僧も[illegible]ながら弔うて御通り候へ。ワキ〽懇ろに御物語り祝着申して候。さらば立寄り弔うて通らうずるにて候。間〽重ねて御用もあらば仰せられい。ワキ〽頼みませう。間〽心得ました。ワキ〽さては去年の春の頃。身掘りたる野老の昔語かや。有為轉變の土を離れ。[illegible]刺つて今生苦しきところなまる。極樂世界菓子盆の臺に坐すと書かれたり。あら傷はしの候。草木國土悉皆成佛道。一セイシテ〽なうあら有難の御事やな。妄執深き婆娑の名を殘な。ワキ〽不思議やな人家も見ゆるまで野中に。化したる姿の現れたるは。如何なる者ぞ何者ぞ。シテ〽これは去年の春の頃。山人に掘起され。身を徒らになしゝ者の。所を聞くも恨めしや。御弔ひの有難さに。これまで現れ參りたり。ワキ〽さては野老の精なるかや。最期の有様語りなば。後をば弔うて得さすべし。シテ〽あら思ひ出でたり其の昔。最期の有様語るべしと。カケリ。シテ

へ抑も。同へ山深く住みし所な。鋤鍬持つて掘起されて。三途の川にて振り濯がれて。地獄の釜に投入れられて。くら／＼と煮ゆるところな。御慈悲深き釋尊に救ひ上げられ。たま／＼苦患の隙がなと思へば。庖丁小刀おつ取りのべて。髭をむしられ皮をたぐられ。盛られし茶の子の數々。惡事せんにいを得るといへども。箸にむせんで苦を受くる。罪人のたゝき牛蒡に呵責がよりて。おこし米の澁柿は咽に詰まりて。物もいはれず。串柿は御身の甘面くはう／＼なんどとて。十王も賞翫あれば。藥が樣なる苦きところは。緣高のすみをあなたへころり。こなたへころり。ころり轉んで苦を受くる。されども助かる便もありて。放參勤の茶の子になしてそれ故に。地獄を離れて今は早や。地獄を離れて今は早や。よき所にこそ。しやがまりたれ。

鈍根草

シテ　太郎冠者
アド　主人

アドへ此邊りの者で御座る。某正五九月には鞍馬へ參る。今月は九月なり。殊に寅の日で御座るに依つて。參詣致さうと存ずる。呼出す。如何。汝呼出す別の事でない。何と今日は寅の日ではないか。シテへ誠に今日は寅の日で御座る。アドへ何時もの通り鞍馬へ參らうと思ふが。何とあらう。シテへ御意もなくば。申上げうと存じて御座る。一段とよう御座りませう。シテへ畏アドへそれならば道具を持てと言へ。シテへ畏まつて御座る。ヤイ／＼。頼うだ御方が鞍馬へ御參詣なさるゝ。道具を持てと仰せらるゝ。ジヤア。其由申上げう。申上げまする。道具とは何の事ぢやと申しまする。アドへ身共が内にありながら道具を知らぬか。弓なりとも。槍なりとも持てと云へ。シテへ畏まつて御座る。御内にあり乍ら道具を知らぬか。弓なりとも。槍なりとも持てと仰せらるゝ。これも尤もぢや。申上げまする。アドへ何事ぢや。シテへ弓は御座れども。矢が御座らぬ。槍は人の外を持つて通るは見ましたが。御内ではつひに見ぬと申しまする。アドへシイ。汝は物を聲高に云ふ者ぢや。天下治り目出度い御代に。長道具はいらぬ物ぢや。汝一人供をせい。シテへ畏まつて御座る。アドへ誠に。相變らず參詣すると云ふは目出度い事ぢやなあ。シテへ御意なさるゝ通り。御供の我々ごとき迄。足手息災で參詣致すは。偏に多聞天のお蔭で御座る。アドへそれよ／＼。何かと云ふ内に參り着いた。シテへ誠に御參り着きなされて御座る。アドへ先づお前へ向はう。じやぐわん／＼。シテはうたず。アドへいつも宿坊へよる。さあ／＼行かう。來い／＼。シテへ畏まつて御座る。アドへいつも寄る事ぢや程に。定めゝ待つて居られうぞ。シテへ仰せらるゝ通り。定めてお待ちなされて御座りませう。アドへ何かと云ふ内にこれぢや。某は直ぐに奧座敷へ通る。某が來た通りを。勝手へ案内を申せ。シテへ畏まつて御座る。口傳。申し／＼。いつもの通り頼うだ人が參詣致されまして。既に奧に通られまして御座る。ハア／＼。畏まつて御座る。申上げまする。お出での通りを申して御座れば。ようこそお參りなされました。それへ參つてお目に懸りたう御座れども。内客を得まして御座る。これな肴にいへされて。御酒を一つ上りませとの御事で御座る。アドへそれは何ぢや。シテへすしで御座る。アドへシイ。寺にすしがあるものか。シテへイヤ茗荷のすしで御座る。アドへそれは鈍根草と云うて。それを食へばうつけになる。あら返せ。シテへ折角出ました物を。返されば致

されますまい。アド〽それならばそこへ捨てて了へ。シテ〽捨てると申すも勿體ない事で御座る。お前參らずば。私ばかり食べませう。アド〽おのれはたゞさへうつけぢや程に。それを食うたらば。いよ〳〵うつけにならうぞ。シテ食ふ。いろ〳〵あるべし。シテ〽うつけになつても苦しう御座らぬ。扨々うまい事かな。ちとたりませぬか。アド〽いかな〳〵。そちが食ふを見てさへうつかりとする。シテ〽皆食べました。アド〽あの向ふに青々と見ゆるは何ぢや。シテ〽あれは蓼で御座る。アド〽いて取つて來い。シテ〽畏まつて御座る。正面に出で。取り。扇にのせ。アド〽誠に穂蓼ぢや。そちもちと食はぬか。シテ〽イヤ其樣な辛い物はいやで御座る。アド〽これは利根草と云うて。これを食へば利根になるになあ。ト食うて。辛し〳〵。これは皆は食はれぬ。ト捨てる。シテ〽さうも御座りますまい。アド〽さて追付け下向せう。よろしう禮を云へ。シテ〽畏まつて御座る。頼うだ者申しまする。いかい御馳走に預りまして忝うこそ御座れ。重ねて參つて。お目にかゝつてお禮を申さうと申されまする。ハア〳〵。禮を申して御座る。アド〽サア下向せう。ト立つ。小さ刀忘れる。シテ拾ふ。シテ〽一段の物がある。先づ拾はう。アド〽扨いつもとは云ひ乍ら大參りであつた。シテ〽御意の通り大參りで御座つた。扨やう〳〵暮に及びました。お腰の廻りにお氣を付けられませい。アド〽成程心得た。これはいかな事。身共が刀がない。シテ〽何となされました。アド〽イヤ宿坊の床の脇にぬいておいた。取つて來い。シテ〽大參りで御座つた程に。參つたりとも御座るまい。アド〽妥なものが云ふ事は。主のある物を誰が取るものぢや。早ういて取つて來い。シテ〽それについて。お前は最前鈍根草の事を仰せられたが。仔細を御存じで御座らぬさうな。語つて聞かせませう。アド〽イヤ聞きたうない。早ういて刀を取つて來い。シテ〽イヤ先づお聞きなされ。語　昔釋迦佛の御弟子に。周利槃特と申して。愚智無智にして。いかにも鈍なる御方の候ひしが。我名をさへ覺え給はず。札に書付け竹の先にゆひ付け。これをかたげて歩き。御名はと問へば。かの札を差出し見せ給ふ。かほど鈍なる御方にて候なり。然ればかの茗荷は。槃特の廟所より生ひ出でたる草なるに依つて。鈍根草と名づく。茗荷とは名を荷ふと書いたるも此の謂れなり。又阿難と申す御弟子は。釋迦四十餘年の御説法を。一字も殘さず覺え給ふ程の利根第一なる御方なりしが。かの蓼は阿難の塚より生じたる草なるに依つて。利根草とこれを名付く。かほど利根第一なる阿難も悟道し給ふ。又鈍なる槃特も猶以て悟道發明めさるゝ。何れも至る所に同じ事なり。お前は利根草をきこしめしたれども。刀をお忘れなさるゝ。私に鈍根草を食べましたれども。これも至る所は皆同じ事では御座るまいか。アド〽云はれぬ事を云はずとも。早ういて取つて來い。シテ〽それについて。私は物を拾ひよしました。ト刀を見せる。アド〽それは身共が刀ぢや。こちへ返せ。シテ〽拾ひましたに依つて。返す事はなりませぬ。ト　アド〽返せ〳〵。シテ〽なりませぬ〳〵。ト先へ入る。アド後より追込み入る。

東西離

シテ　住持
アド　所の者
小アド　同
（入道具）

アド〽この邊りの者で御座る。今日は志す

日で御座る。寺の御坊を申し入れ。齋を進上致さうと存ずる。シカ〳〵。誠に。昨日にも人を遣す筈なれども。何かと取込うで失念致した。俄の事でお隙入と御座らうか。心もとなう存ずる。何かと申すうち是ぢや。まづ案内を乞はう。（ト云うて。樂屋へ案内を乞ふ。）シテへ表に早朝から案内がある。小僧共は出ぬか。案内とは誰そ。アドへ私で御座る。シテへエイこゝな。早朝から何と思召してお出でて御座る。アドへ今日は志す日で御座る。俄の事で御座れども。お齋を進じたう御座る。御出でなされて下されたらば忝う御座る。シテへやれ〳〵忝うこそ御座れ。幸ひ今朝は差合も御座らぬ。成程參りませう。アドへさりながら。お齋は隨分結構に拵へましたれども。お布施迄は得致しませぬ。左樣に御心組なされて下され。シテへ扨々そなたは律義なお人ぢや。齋を下さるゝがお志ぢや。左樣な事には少しも御心遣ひをなされぬがよう御座る。アドへ左樣に思召せば忝う御座る。私はお暇申しまする。追付けお出でなされて下されませ。シテへなる程追附け參りませう。（暇乞あつて。アド笛座に居る。）シテへなう〳〵嬉しや。今朝は麁菜の齋をたべうと存じたに。結構な齋を振舞うと云はるゝ。まづ身拵へをして。追附け參らうと存ずる。（ト云うて。中入する。）小アドへ此の邊りの者で御座る。今日は先祖の遠忌に當つて御座る。寺の御坊をようで參つて。勤めをして貰はうと存ずる。シカ〳〵。誠に。格別の法事で御座る。何とぞ齋を致したう存ずれども。人を持たぬに依つて得こしらへを致さぬさりながら。お布施は少し用意致して御座る。お隙入がなければよう御座るが。何かと云ふうちに是ぢや。（ト云うて。案内を乞ふ。）シテへまた案内がある。さて今日は早くから人の來る日ぢや。案内とは誰そ。小アドへ私で御座る。シテへエイこゝな。よう御座つたれ。まづかう通らせられい。小アドへ畏まつて御座る。シテへこれは早うから何と思召してお出でて御座る。小アドへ今日は先祖の遠忌で御座る。近頃御苦勞ながら。お出でなされてお勤をなされて下されうならば。忝う存じまする。シテへ成程參りませう。小アドへそれに就いて。お斷り申す事が御座る。御存じの通り人を持ちませぬに依つて。えお齋を進じませぬ。鳥目十疋お布施を用意して御座る。左樣にお心組なされて下され。シテへやれやれ御念の入つた事で御座る。勤めを致すは出家の役で御座る。左樣の事はお氣遣ひなさるゝな。小アドへまづ以て忝う御座る。迚もの事に。何とぞ追附けお出でなされて下され。シテへ成程追附け參りませう。小アドへ然らばもうかう參りませう。（暇乞常の如し。小アド太鼓座に居る。）シテへこれはいかな事。貧僧の重齋とは此の事ぢや。何某殿は。齋の料理は隨分結構にこしらへたれども。布施迄はえ致しませぬと云はるゝ。又誰は。布施は鳥目十疋用意したれども。齋はえ拵へぬと云はるゝ。さてこれはどちらへ行かうぞ。少しなりとも愚僧がために宜しい方へ行きたいものぢやが。うしやうえじきぢうと聞く時は。食に依つて住す。か樣にある時は。齋が肝要なり。何が數々のさいを取調へて。結構なお齋をたぶるならば。布施の事も思はれまい。これは齋の方へ參らう。又こゝにあるたんどは。是まんぎやうのせうもん。これに依つて親疎を殘さずと聞く時は。布施が肝要ぢや。たとへどのやうな結構なお齋をたぶればとて。布施を取らいでは何の役にも立たぬ。いやこれは布施の方へ參らう。イヤ但し一時の榮華に千とせの命を延ぶると云ふ時は。齋の方へ參らう。アヽこゝに大事の思案がある。らたいふはとうはゑんと聞く時は。はだかにて安からず。その上麻の衣紙

の衾まうけがたうして。永く生死の望すゝなし。かやうなる時に布施は十疋。十疋の布施持つた眞中より押切つて。五十文はしゆなにあてがうて。鹽味噌薪を求めさせんず。殘る五十文にては。紙を買うてふすまを作り。達磨かづきにうつかぶり。座禪工夫をするならば。などか道にはいたるまじきぞ。ハアさうぢや。萬事打捨て。思ひ切つて布施の方へ參らう。シカ〳〵。此の思案が最前きまれば。今迄はかゝらぬに。よしない事に迷うておそなはつた。これぢや。ト云うて。案内を乞ふ。出るも常の如し。小アドヘエイ御坊樣。何としてお出でゝ御座る。シテヘ最前お約束で御座つたに依つて。勤行に參つて御座る。小アドヘなに今で御座るか。是はいかな事。それは今朝の事でこそ御座れ。今來るといふことがあるもので御座るか。シテヘちど遲う御座るか。小アドヘ遲いの早いの段では御座らぬ。ものには時分のあるものぢや。とつとゝ歸らつしやれ。シテヘよう御座る。遲いものを無理に早いとも云ひますまい。さてかの約束のものは。小アドヘ約束のものとは。シテヘお布施は。小アドヘさても〳〵興のさめた事を云ふ人ぢや。なう出家といふ者は。朝疾うから來て經陀羅尼をもよみ。又

我等如きの者に。有難い事など云うて聞かせてこそ。出家とも云はれうぞ。布施をも進ぜうが。何ぞや今時分に來て。そのつれな事をおしやる。ちと嗜まつしやい。シテヘやあらそなたは我儘な事を云ふ。來てくれいと云うて呼びに來て。少し遲いとて又歸れと云ふやうな事があるものか。有難い事が聞きたくば。說いて聞かせう。愚僧も來かゝつて唯は往なれぬ。先づお布施を出さしめ。小アドヘこゝな坊主に云はせておけば方途がない。そなたのやうな人に誰が布施をやらう。足許の明い内にとつとゝお行きあれ。ト云うてつきやる。シテヘこれはいかな事。扨も〳〵氣の短い人ぢや。齋非時に呼ぶではなし。少し遲いと云うて大事ない事ぢや。先祖の跡を弔ふに。あのやうに腹を立て。何の役に立つものぢや。あの人ばかり檀那ではあるまいし。鳥目十疋など貰はぬと云うて何と思ふものぢや。よい〳〵。その爲に兩方を約束して置いた。さらばこれからすぐにお齋の方へ參らう。シカ〳〵。エイ此の樣な事と知つたらば。最前すぐに何某殿へ行けばよかつたに。悔やしい事を致した。さぞ〳〵待兼ねてゐられう。是ぢや。ト云うて。案内を乞ふ。常の如し。シテヘ愚僧で御座る。アドヘエイ御坊樣。

扨々今朝はかた〴〵の御約束で御座つたに。お出でなされぬは。もし御氣分でもわろう御座つたかと存じて。殊の外案じてをりました。何としてお出でなされませなんだ。シテヘ忝う御座る。寺役も御座り。かれこれで今になりました。いざ通りませう。アドヘ唯今は内客を得ましたが。何ぞ御用でばし御座るか。シテヘいや別の用では御座らぬ。今朝のお齋を下されうと仰せられたに就いて參つて御座る。アドヘあのそれが今で御座るか。シテヘなか〳〵。アドヘこれはいかな事。それは今朝の事でこそ御座れ。今來ると云ふ事があるもので御座るか。シテヘ遲う御座るか。アドヘ遲いの早いのと云ふ事があるもので御座るか。今は何時ぢやと思はつしやる。シテヘこれの齋はいつも遲いに依つて。早う參つたらば。せはしからうと思うて。加減をして來たが。結句遲過ぎたかの。アドヘいかにさうあればとて。最早非時の時分も過ぎました。早ういなつしやれ。シテヘそなたもはやまつた人ぢや。出家も來ぬに齋をしまふと云ふ事があるもので御座るか。アドヘまだそのつれを云はつしやる。人にはせつかく待たせて置いて。有明つて來て。あまつさへ口賢い事を云はつ

しやる。來る事がならずば。ならぬと朝云はせられたがよい。追附け日が暮れまする。早う歸らせられい。シテ〽よう御座る。こゝで齋をたべぬと云うて。たべずにも居ませぬ。寺へ戻つてたべませう。アド〽内でも外でも今迄齋を待つてゐるもので御座るか。足許の明い内にとつとゝ歸らせられい。シテ〽やあらそなたはせはしい。愚僧がぢつと勘忍して居れば。早ういね〱と。振舞ひもせぬ齋をせうと云うて。我が内へ呼寄せて。何と身共が歸るまいと云うたらば。おぬしは何ととめさる。アド〽こゝな坊主にものを云はせて置けば。方途もない事を云ふ。あやまつて歸らずば。目にものを見するぞよ。シテ〽そりや誰が。アド〽身共が。シテ〽目にものを見すると云うて。深しい事もあるまいぞいやい。アド〽構へて悔やむなよ。シテ〽悔やむなと云うて何とする。アド〽推參なやつの。これでも行かぬか〱。ト云うて。引廻し。うちこかし。打擲する心。アド〽扨も〱憎いやつかな。ト云うて。座につく。シテ〽やい〱。出家をこのやうにして。おのれ佛罰が當たらうぞ。扨も〱腹の立つ事ぢや。いかに出家ぢやと云うて。おのれに負けて居ようか。踏込んで存分な云はうか。いやア、檀那の道理〱。

愚僧が僻事。それ人は六道に迷ふと申すが。愚僧は四道をかまへて候。それをいかにと申すに。先づ齋へ行かうか。布施がよからうかと。迷うた所が畜生道。又檀那には齋をこしらへて。早う來いかしすやう〱今や遲しと待つ所へ。行かぬが餓鬼道。齋をも布施をも思ひわけぬが人道。檀那にも腹を立たせ。愚僧も腹を立て。立つ立たさせつしたる所が修羅道。忍辱二體の衣を着。罪障懺悔の袈裟をかけ。十力の珠數を手にまとひ。口には佛號を唱ふると云ふとも。成佛得脫えせずして。無間の底にたんぶりと落ちようずる事の淺ましさは候。ト云うて泣く。アヽ南無阿彌陀佛〱。この樣な事ならば。齋へなりとも布施へなりとも。早う行けばよかつたものを。南無三寶。しないたり。ト樂屋へ入る。

飛越

シテ　新發意
アド　所の者

アド〽此の邊りの者で御座る。今日はさる方へお茶の湯に參る。さりながら。某は茶の湯はつうと不調法に御座る。又爰に心安うする新發意が御座る。賴うで參り。身共が恥を隱して貰はうと存ずる。シカ〱。誠に。内に御座ればよう御座るが。内にさへ居られたらば。某の申す事ぢやに依つて。定めて來てくるゝで御座らう。何かといふうちこれぢや。ト云うて。案内乞ふ。出る。常の如し。アド〽今日はさる方へ茶の湯に參る。お知りやる通り。身共は茶の湯は不調法なに依つて。そなたを同道して。某が恥を隱して貰はうと思うて參つた。何と來ておくりやるか。シテ〽幸ひ今日は隙で居りまするに依つて。隨分參りませうが。何と私が參つても苦しうない所で御座るか。アド〽いや先からも念が入つて。心易い衆一兩人同道して來る樣にとの事ぢや。どうぞ來ておくりやれ。シテ〽其の樣な事ならば參りませう。アド〽それは近頃過分な。さあ〱おりやれ。シテ〽心得ました。アド〽さて身共もちと茶の湯が稽古致したいが。むつかしいものでおりやるか。シテ〽なか〱。むつかしいもので御座る。あの湯のたぎりまするに色々の名が御座る。先づきう〱車輪遠浪不音と申す事が御座るが。御存じで御座るか。アド〽其の樣な事は曾て存ぜぬ。シテ〽先づきう〱とは。蚯蚓の鳴く樣に湯がたぎりまする。しやせいとは。車

の輪の様に湯がころり〳〵と湯がたぎりますする。遠浪とは遠い浪の様にさあ〳〵と聞こえまする。ふいんとは。しすまする事を申しまする。先づ此の様な事から御稽古なされたがよう御座る。アド〽扨々むつかしいものでおりやる。此の後はせつ〳〵參らう程に。ちと指南をしておくりやれ。シテ〽成程。此の後はせつ〳〵御出でなされませい。御指南致しませう。アド〽それは過分な。シテ〽はあ。是は大きな川へ出ました。アド〽扨々和御寮は物を仰山に云ふ人ぢや。これは飛越えぢや。さあ〳〵飛ばしめ。シテ〽此の川が何と飛ばるゝもので御座る。アド〽これ程の所が飛ばれぬといふ事があるものか。身共は飛ぶぞ。ト云うて。アド脇座へ飛ぶ。シテ〽ほう。こなたは早や飛ばせられたか。アド〽飛ばいでならうか。早うお飛びやれ。シテ〽何とこなたが心易う飛ばせられた所を見ては。飛べさうな物で御座る。それならば飛んで見ませうぞ。アド〽早うお飛びやれ。ト云ふ。飛びかねる。色々心持。口傳。シテ〽どうも飛べませぬ。アド〽扨々臆病な人ぢや。思ひ切つてお飛びやれ。シテ〽それならば。あれから走りかゝつて勢ひに飛びに飛んで見ませう。ト云うて。橋懸りより走り飛ぶ心持あるべし。アド〽一段とよからう。アド咳拂する。シテ〽今すぐに飛ぶ所であつたに。こなたが咳拂をせられたに依つてえ飛びませなんだ。アド〽今のはふと申した。氣にかけずともお飛びやれ。シテ〽この目と申す物が臆病な物で。あの水の青い所を見ては。恐ろしうてどうも飛ばれませぬ。今度は目をふさいで飛びませう。アド〽それがよからう。シテ〽先づ目をきつと塞いで。さあ飛びまするぞや。ト云うて。走り飛ぶ所を。アド〽おゝあぶない〳〵。シテ〽あれ〳〵。飛ばうとすれば何のかのと云うておどさせらるゝ。私が參らうと云うたではなく。こなたが來てくれいと仰せられたに依つて參つた。身共は早や去にまするぞ。アド〽あゝこれ〳〵。せつかく是處まで來て去ぬると云ふ事があるものか。シテ〽こなたはまた飛ばつしやつたか。アド〽また飛んだと云ふ事があるものか。これは女童でも飛ぶ飛越えぢや。さあ〳〵早うお飛びやれ。シテ〽私はどうもえい飛びませぬ。アド〽扨々氣の毒な事ぢや。さきへも遲うなる。何としたものであらう。いやそなたと身共と手を引合せ飛ばうか。シテ〽何れこなたの身の輕いと。私が身の重いと。手を引合せて飛んだらば。飛ばれさうなもので御座る。アド〽どれ〳〵。それならば手をおこさしめ。シテ〽心得ました。アド〽扨さあ〳〵と三つ聲をかけて。三つ目の聲で飛ばう。シテ〽よう御座らう。アド〽よいか。シテ〽よう御座る。ト云うて。二人手を引合ひ。さあさあさあ三つ云うて飛ぶ。その時シテはまる。アド向ふへ飛び。笑ふ。シテ〽なう〳〵。なうそこな人。アド〽何事ぢや。シテ〽ヤアラこなたは聞こえぬ人ぢや。身共が川へはまつたがそれ程をかしいか。アド〽をかしいかをかしうないか。其儘のぬれ鼠ぢや。ト云うてまた笑ふ。シテ〽なう〳〵。なうそこな人。アド〽何ぢや。シテ〽總じて人の身の上にをかしい事がなうて叶はぬ。こなたの身の上にもまた。是よりもをかしい事が有る程に。其の樣に笑ふものではおりない。アド〽いやも身共が身の上には。この濡鼠ほどをかしい事はない。ト云うて笑ふ。これより相撲の事。習事の通り。詞仕樣同意。少しも違はず。アド相撲を取らうと云うて追廻はす。シテ逃げるを。追込んで入るなり。色々口傳。

丼礑（ごぶかつちり）

シテ　勾當

アド　菊市

小アド　道行人

（入道具）

シテ〽勾當で御座る。漸うりやうも近づいて御座る。いつもの通り都へ上らうと存ずる。菊市あるか。（呼出す。常の如し。）そちを呼出すは別の事ではない。りやうも近々になつた。都へ上る。供をせい。アド〽それは有難う存じまする。シテ〽先づさゝえの用意をせい。アド〽畏まつて御座る。さゝえの用意を致して御座る。アド〽追附け行かう。さあ〳〵。來い〳〵。アド〽畏まつて御座る。シテ〽何と思ふ。りやうの積塔（しやくたふ）のと云うて。國々の座頭共が夥しう上るに依つて。晴れがましい事ぢやなア。アド〽御意なさるゝ通り。諸國よりお上りなさるゝに依つて。なか〳〵晴れがましい事で御座る。シテ〽さてそちも此度は官をしてとらせうぞ。アド〽それは忝う存じまする。シテ〽それについて。日頃教へた平家を覺えてゐるか。アド〽いや。それは皆忘れました。シテ〽これはいかなこと。それを忘るゝといふ事があるものか。アド〽隨分と存じますれど。かれこれ致して覺え兼ねまする。シテ〽いや。それは不嗜なに依つてぢや。慰みがてら。またそちが稽古の爲。道すがら一句語つて聞かせう。アド〽それは有難う存じまする。どうぞ御聞かせなされて下され。シテ〽追附け語らう。よう聞け。アド〽畏まつて御座る。シテ〽語抑も一の谷の合戰破れしかば。源平互に入亂れ。向ふ者の頤（おとがひ）を切らるゝ者もあり。過ぐる者の踵（きびす）を切らるゝ者あり。忙がはしき時の事なれば。踵を取つて頤に附け。頤を取つて踵に附けたれば。生（は）ようず事とて。踵に髭がむつくり〳〵と生えたりけり。冬にもなれば。切れうず事とて。頤におかどりがほつかり〳〵と切れたりけり。アド〽えいや〳〵。扨も〳〵面白いことで御座る。シテ〽總じて平家といふものは音（おん）が大事ぢや。アド〽なか〳〵申されさうな事では御座らぬ。シテ〽官をして平家を語らいでは埒が明かぬ。隨分精を出して覺えい。アド〽畏まつて御座る。シテ〽さて最前から何やらどう〳〵と鳴る音がするは。松風か但し川の瀨かいなア。アド〽何れ川の瀨い樣に御座る。シテ〽わあ〳〵。これは川ぢや。（ト云ふうち。二人ともに水に一足を濡らす態。）アド〽誠に川で御座る。シテ〽橋もないは。人通りがあらば渡り瀨が尋ね度いものぢや。アド〽どうやらいかう深さうに御座る。シテ〽先づ飛礫を打つて見う。（トいうて飛礫を打つ。）アド〽飛礫を打つて知れまするか。シテ〽どんぶり。これはいかう深い。もそつと上へ行かう。上が淺ければよいが。さらばまた飛礫を打つて見う。（ト云うて。また打つ。）シテ〽かつちり。（笑うて。）これは淺い。アド〽誠に淺さうに御座る。シテ〽さあ〳〵負ひ越せ。アド〽誰を。シテ〽身共を。アド〽これは迷惑で御座る。私一人さへ何と致さうと存じて居りまする。お前を何として負ひ越されませう。シテ〽やあら憎い奴の。己れを連るゝは此の樣な時の爲ぢや。急いで負ひ越せ。アド〽これは恐ろしい事ぢや。あの樣に仰せらるれば是非に及ばぬ。さあ〳〵負はれさせられい。（シカ〳〵云ふうち。小アド出る。）小アド〽川向（かはむかひ）へ用事あつて參る。先づ急いで參らう。これはいかなこと。座頭が川を渡る。いや致し樣がある。（ト云うて。小アド負はる。）（アドシカ〳〵云うて。負ひ越す。小アド隱し笑ひする。シテ呼ぶ。）シテ〽菊市、身拵へがよくば負ひ越せい。菊市〳〵。アド〽やあまた戻らせられたか。シテ〽何を吐かし居る。是は己ればかり渡り居つたか。早う負ひ越せ。アド〽最前素直に負ひ越さぬといふ腹立であらう。これは餘り胴慾な事ぢや。シテ〽最前から負ひ越せといふに。己れ一人渡るといふことがあるものか。アド〽危ない。ぢつと負はれさせられい。（ト云うて負ふ。川を渡る。）小アド〽笑止な。あれは陷（はま）らうが。シテ〽危ない。靜に渡れ。アド〽いかう危なう御座る。シテ

へ何とする。アドへ石が滑る／＼。無南三寶。ト云うて。二人ながらこける。川へ陷りて。飛び上る。小アド笑ふ。シテへ己れ素直に負ひ越さぬに依つて。此の樣な事ぢや。アドへ何をいはつしやる。二度三度させらるゝに依つてぢや。シテへまだ吐かし居る。扨も／＼寒いことかな。トいうて。二人とも水に濡れたる態。アドへこれは寒い事ぢや。シテへイヤ最前の竹筒(さゝえ)はあるか。アドへなるほど御座る。シテへせめてそれなりとも飲まう。早う出せ。アドへ畏まつて御座る。ト云うて。腰の瓢簞を出し。酒を注ぐ。シテ扇にて受ける。小アドへいや酒を飲むさうな。トいうて。扇をひろげて注ぐを。眞中より受けて飲む。シテへ是は無いぞや。アドへ慥かに注ぎました。シテへ脇の方へ注いださうな。きつと注げ。また小アド受けて飲み。悅ぶ。シテ飲んで。シテへまた無いぞよ。アドへ今のほど注ぎました。脇へ零れたもので御座らう。シテへ零れもせぬさうな。そちは合點の行かぬ者ぢや。しつかりと持つて注いでくれい。アドへお前の無い／＼と仰せらるゝは合點の行かぬ。シテへ一つ飲まねばならぬ。早う注げ。アドへ注ぎまするぞや。どぶ／＼。びしよ／＼。アドへわあ／＼。皆になつた。シテへ飲まぬうちから皆になつたか。アドへ身共も一つ飲まうと思うたに。シテへやいそこな奴。こりやまた無い。アドへ何ぢやまた無い。シテへさては最前から注ぐ／＼と云うて。こりや己れが飲むな。アドへはアさては最前

から無い／＼と云うて。飲み隠しをさつしやろか。シテへ勾當ともあらう者が。その樣な事をするものか。トいふ時。小アドシテに鼻竹箆を當てる。アドにも當てる。小アドいろ／＼する。シテへあいた／＼。これは身共が鼻を彈くか。アドへ竹筒を仕舞うて居まする。あいた／＼。これは身共が鼻を彈かしやるか。シテへ身共はそれを指もさゝぬ。あいた／＼。こりや身共が耳を引くか。アドへ竹筒を仕舞うて居りまする。あいた／＼。こりや身共が耳を引かつしやる。シテへあいた／＼。アドシテの通り。こりや身共を打擲するか。シテへあいた／＼。アドへあいた／＼。このところ二人腹を立て。立つて組合ふ。小アドいろ／＼して後。笑うて悅ぶ。シテへ菊市。先づ待て／＼。目明きが居るやら。いかう笑ふ聲がする。アドへ誠に笑ひまする。シテへ杖をおこせ。ぬかるな。アドへ畏まつて御座る。二人へえいとう／＼。小アドへこゝぢや／＼。トいうて。手を叩き。舞臺を連れて廻る。小アドは先きへ逃げて入る。菊市杖にてシテを叩き入る。シテへこりや身共ぢや。アドへ己れは憎い奴の。トいうて。シテを叩き入る。シテ叩かれ入るなり。尤もアドシテを追ひ込むなり。

吃り

シテ　夫
アド　扱人
女　妻

（入道具）

シテ逃げて出る。女棒を持ち追うて出る。扱人出る。鎌腹同斷。中へ入り分ける。女脇座の方にて。

アド〽これは何ぢや。女〽聞いて下され。わ男が世帯のことは構はず。朝寢ばかりして居て。山へ行けといへども。何の彼のというて行きませぬ。思うても御らうじませ。山へ行かいで何で渡世がなるもので御座る。退かしやれ。アド〽先づ待て〳〵。女〽乾度云付けてやらう。アド〽やい太郎。これは先づ何事ぢや。シテ〽よい所へ來て下された。アド〽よい所といふ事があるか。又しても〳〵見苦しい。女に恥らかされて。なぜに山へ行かぬぞ。なにシテ〽山へ行くまいでは御座らねども。彼奴が我儘ばかり吐して。内の事は己れ獨りの樣にわゝしう申しまする。そのうへ喰ふ物もして呉れぬに依つて。山へ行く樣が御座らぬ。女〽やい其處な奴。シテ〽何ぢや。女〽己れ今朝喰うた物を忘れ居つたか。シテ〽どこに喰はせ居つた。己れはな。朝臥をして。有明つて起きて。大茶を飲うて人事を吐かし居るではないか。女〽やい己れこそ朝臥をして有明つて起きて。隣邊りへ往て。鍋釜の下さへ燃ゆれば。無理に意地がつて。何ぞ喰はねば戻らぬ樣にし居る。己れそれは誰が恥ぢやぞいやい〳〵。シテ〽あれ〳〵。あれを聞いて下され。身共が物を一ついへば。十も二十も云うて。口を開かせませぬ。あいつにほうど呆れ果てた。暇を遣る程に出て行けというて下され。アド〽心得た。やい〳〵。暇をやる程に出て行けといふは。女〽入らしい。何ぞいへば暇を遣るの。去るのと威しまする。あの樣な男は。鼓を蹴ても五人や十人は蹶出しまする。此の足で直ぐに親里へ行きませう。それならば妾が嫁入をした時に。持つて來た十二單衣を戻せというて下され。アド〽やい〳〵。それならば十二單衣を戻せといふは。シテ〽何ぢや〳〵十二單衣。アド〽なか〳〵。シテ〽十二單衣といふ名を知つたが可笑しう御座る。アド〽さては無いことか。シテ〽無いことで御座る。恥がかゝせたう御座れども。何を申しても吃りで。口がもとォらぬに依つて。口惜しう御座る。トいうて。口をかきむしりて泣く。アド〽あゝこりや〳〵。さて〳〵短氣をするな。その樣に氣をせかずとも。心を鎭めて言譯をせい。シテ〽それならば。謠の樣に節をつけて申しませう。聞き居れというて下され。アド〽心得た。なう〳〵。何やら言譯をせうといふ程にお聞きあれ。女〽いふ事があらば。早う吐かし居れというて下され。アド〽さあ〳〵言譯をせい。シテ〽心得ました。カヽル こゝに不思議の男一人あり。その名をあん太郎と申す。卽ち下等が事なり。かれ一人の妻を持つ。女口強なるに依つて離別す。彼が去られしとの重寶に着ても來ざりし衣裳の類。來ると人に誣説する。我は素より吃りにて。言葉の沙汰の叶はねば。拍子にかゝり。小謠ぶしに委細の事を申すなり。珍らしかりし御沙汰かな。それ空事や僞り。和女郎の嫁入の小袖の數はなに〳〵。練や朽葉織物。青織筋やき練貫。彼等是等を集めて十二色で縫うたるかた物は唯一つ。裏綿帽子の小袖や。女〽えい腹立ちや〳〵。シテ〽ちやと留めて下され。女〽これは誰ぞへ遣り居つたさうに御座る。それならば。月ばた日ばたを返せというて下され。アド〽心得

た。月ばた日ばたを戻せといふは。シテへこれもない事で御座る。序に恥をかゝせませう。アドへ一段とよから。シテへそれ空事や和女郎の。いゝ能には朝寝午睡夕まどひ。たま〳〵起きて物綛い等うみだてはすれども。麻桛などを取集め。酒屋の方へ取遣り。一年に一度立つ。河内の國に聞えたる。近江堂の市場に。布一尺も賣られば。着ることとまして候はず。なか〳〵人の聞えに物ないひそ和女。女へえい腹立ちや〳〵。これもどれへぞ遣り居つたさうに御座る。せめて十二の手道具なりとも戻せというて下され。シテへ膝に乘つて樣々の事を吐かし居る。これも無い事で御座る。アドへさてはこれも無い事か。シテへ云うて恥かゝせたう御座れども。動もすればあの棒で打擲を致しまする。あの棒を取つて下され。アドへ心得た。なう〳〵。これも言譯をせうといふ。その棒を身共に預けさしめ。女へいや〳〵。この棒を離すことはなりませぬ。アドへはてさて。先づ身共に預け。ト云うて。引たくる。アドへさあ〳〵。棒を取つた程に。心靜に言譯をせい。シテへ心得ました。それ空事や僞り。〳〵。和女郎の嫁入の。つゞらの數はなに〳〵。綾紫に織物。狐の鳴くか紺切。褐や淺黃やはりの木染や柿染。彼等是等を集めて。十二色で縫うたる小包たゞ一つ。中に入れたる物とては。扇で折つたゝう紙はいはなんどかい入れ。土器色の紅皿のはたのくわつと缺けたに。紅をそつと移いておかゞれ鏡たゞ一つ。中にとうと納めて。市立の賣物か。おがせ人の小立か。小腋にきつと手挾んで地白の帷子の。肩のくわつと裂けたを。阿彌陀笠に被ないで霜月師走の〳〵。暇の風に吹かれて。寒さは寒し。あちへひらりしやらり。こちへひらりしやらりと。ここえはてた有樣。なか〳〵人の聞くに物ないひそ和女。ト云うて。突倒し。シテは逼げて入るなり。女へなう〳〵腹立ちや〳〵。ト云うて。追込める。アド後よりとりさへ入るなり。

鈍太郎

シテ　鈍太郎

アド　妻

小アド　上京の女

（入道具）

シテへ都方に住居致す鈍太郎と申す者で御座る。某三年以前はからず西國へ下つて御座ろ。殊の外仕合はせを致して御座る。此の度都へ上らうと存ずる。シカ〳〵。誠に。上方を出る時分は妻子が方へも度々音信を致さうと存じたに。何かと致して一度の音信も得致さなんだ。さぞ姦しう云ふで御座らう。さりながら。また仕合はせを致した事を聞いたらば悦ぶかとも存ずる　何かと云ふうちに都へ着いた。誠に。故郷忘じ難しと申すが。三年も他國致したれば。我が内ながらも疎々しい。その上身共が所はもそつと下ぢや。下へ參らう。誠に。昨日は今日の昔と申すが。月日のたつは早いもので御座る。これ〳〵是處ぢや。なう〳〵。西國から鈍太郎が上つた　是處をあけてくれさしめ。アドへ鈍太郎殿は三年以前西國へ下らせられて。それより便宜の音信も御座らぬ。鈍太郎殿では御座るまい。シテへ成程。おしやる所は尤もぢやさりながら。仕合せをして上つた。何事も内へ這入つて咄さう。早う是處をあけてたもれ。アドへよし誠に鈍太郎殿にもせよ。三年の留守を待兼ねて。今は棒つかひを男に持つた。邊りへ寄つて怪我を召さるな。シテへ何ぢや棒つかひを男に持つた。アドへおゝさて持つた。シテへやあら憎いやつの。身共と云ふ夫を持ちながら。外

に男を持つたとはいはせぬ。早う是處をあけぬか〳〵。アドへなう腹立ちや。是の棒つかひはどれに居さします。あのわ男を棒で打殺して下され。なう腹立ちや〳〵。シテへこれはいかな事。男を持つたが誠さうな。扨も〳〵憎い事かな。何とせうぞ。よい〳〵。この様な事もあらうと思うて。兼ねて上京に心よしを拵へて置いた。先づ急いで上京へ參らう。常々きやつが面が見たむない〳〵と思うたれども。かな法師が母ぢやと思うて。了簡をして置いた。ざつとよい病晴れをしたと云ふものぢや。何かと云ふうちにこれぢや。なう〳〵。西國から鈍太郎が上つた。是處をあけておくりやれ。小アドへ鈍太郎殿は三年以前に西國へ下らせられて。それから便宜の音信も御座らぬ。鈍太郎殿では御座るまい。シテへ恨の段は尤もぢや。何事も内へ這入つて言譯をせう程に。先づ此の戸を開けておくりやれ。小アドへよし誠の鈍太郎殿にもせよ。三年の留守を待ち兼ねて。今は長刀つかひを男に持つた。あたりへ寄つて怪我を召されな。シテへ弓矢八幡身共へも斷りなしに。外に男を持つたとは云はせぬ。己れ此の戸をあければ踏み破つて這入るが。あけぬか〳〵。小アドへなう腹立ちや〳〵。これの長刀つかひはどれに居さします。あのわ男を長刀に乘せて下され。なう腹立ちや〳〵。シテへ南無三寶。これも男を持ち居つたがぢやうさうな。貞女兩夫に見えずと云ふに。おのれ等は畜生ぢやなあ。所詮この戸を踏み破つて。内へ這入つて。かのわ男と討ち果さうか。いや〳〵。あの様な者と討ち果すは。畢竟犬死も同然ぢや。其の上憎い者は生けて見よと云ふ譬がある。これを菩提の種として。元結を切り。がくやに這入つて後世を願はう。さりながら。今など斯様の姿にならうとは。思ひも寄らぬ事ぢや。ト云うて泣き。扇にて髮のわげをはじく。南無三寶。しないたり。ト云うて中入。アドへ夜前鈍太郎殿と云うてお出でなされたを。又邊りの若い衆がなぶらせらるゝと思うて。荒々と申して歸して御座る。今朝承れば。誠の鈍太郎殿で御座つたげな。悔しい事を致した。定めて上京に御座らうに依つて尋ねに行かうと思ひまする。小アドへ昨夕鈍太郎殿と云うてお出でなされたを。又邊りの若い衆がなぶらせらるゝと思うて。荒々と申して歸して御座る。今朝承れば。誠の鈍太郎殿で御座つたげなに。殘り多い事を致した。下京に御座らう程に。尋ねに行かうと思ひまする。アドへ上京に御座ればよいが。小アドへ下京に御座ればよいが。アドへエイお前は上京のでは御座らぬか。小アドへさう仰せらるゝは。鈍太郎殿のかみ様では御座らぬか。アドへさ様で御座る。小アドへなんとお前へ鈍太郎殿は見えませなんだか。アドへ成程。夕べ鈍太郎殿と云うてお出でなされたを。また邊りの若い衆がなぶらせらるゝと存じて。荒々と申して歸して御座る。今朝承れば誠の鈍太郎殿で御座つたげな。殘り多い事をしました。定めてこなたに御座らうと存じて。唯今尋ねに行く所で御座る。小アドへ成程夜前鈍太郎殿と仰せられてお出でなされたを。また邊りの若い衆がなぶらせらるゝと存じて。荒々と申して歸して御座る。今朝承れば誠の鈍太郎殿で御座つたげなに。殘り多い事を致した。扨はお前にでも御座らぬか。アドへまた今朝承れば。鈍太郎は元結を切つて。がくやに入らせられたと申すが。聞かせられぬか。小アドへ成程。風の吹く様に聞いて御座る。アドへすれば誠で御座る。それならば。定めて此の邊を通らせられぬと申す事は御座るまい。兩人心を合せてとめませうか。小アドへこれは一段とよう御座らう。アドへそれならば先

づこれへ寄つて御座れ。小アドへ心得ました。シテ樂屋より念佛申して出る。一の松に止り。シテへあゝさて昨日までは我等如きの體を見ては。あれは世を捨て人か。または世に捨てられた人かと思うたに。今は我が身の上に思ひ當つた。ト泣き。念佛申して出る。アドへあれ〳〵。鈍太郎殿が見えました。とめませう。小アドへ早うとめさせられい。アドへなう〳〵。鈍太郎殿。これは先づ何として淺ましいなりで御座る。早う戻つて下され。シテへ貴(たつと)い樂屋の前へ。なまめいた女の何者ぢや。アドへ何者と云ふ事があるもので御座るか。妾はかな法師が母で御座る〳〵。シテへやい。かな法師が母は三年の留守を待ち兼ねて。今は棒つかひな男に持つた。邊りへ寄つて怪我なおしやるな。なむあみだト云うて行く。アドへさあ〳〵。そなた止めて下され。小アドへ心得ました。あゝこれ〳〵。鈍太郎殿。これは先づ何とした淺ましい姿で御座る。早う戻つて下され。シテへそなたはどうやら見た樣な人ぢや。小アドへ見た樣なと云ふ事があるもので御座るか。妾で御座るわいのう〳〵。シテへなうそなたの樣にみめかたち麗しう生れついた人は。三年の留守を待ち兼ねて。今は長刀つかひな男に持つたがよいものぢや。ト云うて。踊念佛申して向うへ出る。小アドへ早う止めて下され。アドへこれ〳〵。兩人心を合せて止めに來ました程に。堪忍なして戻つて下され。シテへこゝは聞き所ぢや。兩人心を合せて止めに來たと云ふか。二人へなか〳〵。シテへそれならば戻るまいものでもないが。今までの樣に上京にばかり居るの。下京にばかり居るのと。互ひの詮索が姦しい。向後(きやうこう)戻るならば。日を極めて戻らう。アドへどうなりともしませう。早う戻つて下され。シテへ例へば三十日の日を廿五日はそなた。殘る五日はそちが所へ行かうぞ。アドへ何ぢや。妾が所へ五日來う。シテへなか〳〵。アドへえゝ腹立ちや〳〵。妾はかな法師が母ではないか。其の樣な片手打な事はせぬものぢやわいやい〳〵。シテへ何ぢや。片手打ぢや。アドへおゝさて片手打ぢや。シテへ片手打なら。南無阿彌陀。ト踊念佛申す。アドへとゞめて下され。小アドへ先づ待たせられい。それは餘り片手打に御座る。どうぞ半分〳〵にして戻つて下され。シテへ何ぢや。半分〳〵にして戻つてくれいか。小アドへなか〳〵。シテへ和御寮のおせあるに一つとして無理はない。それならば。半分〳〵にして戻つてやらうぞ。アドへ上十五日妾が方へ來て下され。シテへは

あ同じ事を上十五日と限つたは。ウフ。この月ならば下の十五日は一日不足と云ふ事か。まだ戻りもせぬ先から。大小の詮索に何事ぢや。其の様な心入れならばいかな〳〵。ト踊念佛申す。アド〽どうなりともしませう程に。とかく戻つて下され。シテ〽どうなりともするか。二人〽どうなりともしませう。シテ〽それならば。上十五日はそなた。下の十五日は汝が所へいてやらうぞ。アド〽どうなりともして早う戻つて下され。シテ〽互ひに得心めされて満足した。近所への外聞でもあり。兩人の手車に乗つて行きたい。手車を拵へておくりやれ。二人〽心得ました。アド〽これへ出させられい。シテ〽さてこれは誰が手車と云うて囃してたもれ。二人〽心得ました。シテ〽これは誰が手車〳〵。二人〽鈍太郎が手車〳〵。シテ〽わるい〳〵。そのがの字が耳に觸つて惡い。身共は終にどんな文字の附いた事がない。迚もの事に鈍太郎殿の手車と云うて。囃してたもれ。二人〽心得ました。シテ〽これは誰か手車〳〵。二人〽鈍太郎殿の手車。鈍太郎どんの手車。これより囃物。上京下京の心持専一なり。仕様あり。口傳。手車かき込む。但し追込む仕様もあり。當代は先づかき込むばかりなり。

【な】

長光（ながみつ）

シテ　盗人
アド　田舎人
小アド　目代

アド〽坂東方の者で御座る。某未だ上方を見物致さぬ。此度都へ上り。此處彼處を見物致さうと存ずる。また此の太刀は上方へ届けてくれと。國元より預つて御座る。それ故自身持つて參る。先づ急いで參らう。シカ〳〵。これより若い時の[illegible]ない[illegible]石に同じ。シテ〽、常中に心の直ぐに無い者で御座る。磁石に同じ。但し子供の玩具茶の湯の翔いふ時。シテいろ〳〵心持あり。太刀の鐺を引張る。アド氣が附く。アド〽合點のゆかぬ奴ぢや。店を換へて見物致さう。シテ〽目の鞘の外れた奴ぢや。アド〽これは武具ぢや。シテ〽店を換へた。アド〽具足。兜。鎧。長刀。太刀。刀。さて〳〵見事なことぢや。此の店は馬具ぢや。鞍。鐙。轡。手綱。馬洗。尻がひ。障泥切付。トいふうちに。アドの持つてゐる太刀を。シテ脇へ括るなり。アド氣附く。アド〽やい〳〵。これは身共が太刀を何とする。シテ〽これは身共のぢや。アド〽やあ出合へ〳〵。小アド〽これは何事ぢや。アド〽この太刀は私ので御座る。シテ〽いや。これは私の太刀で御座る。小アド〽これ一色に主の二人あらうやうがない。理否を訊いて渡さうぞ。身共に預け。アド〽それならばお前に預けまする。小アド〽なる程。身共が預かつた。シテ〽さて〳〵。既にしてやられうとした。小アド〽これは何とする。シテ〽これは私ので御座る。小アド〽なる程。汝が物であらう。理否を訊いて渡さう。先づ身共に預け。シテ〽それならばあの横着者に遣つて下さるな。小アド〽心得た。やい〳〵。是は先づどうした事ぢや。アド〽お前は何誰で御座る。小アド〽所の目代ぢや。アド〽目代殿ならば屹度お禮申しまする。小アド〽禮には及ばぬ。様子をいへ。アド〽私は坂東方の者で御座る。此度初めて上方へ上りまする。またあの太刀は人の預り物で御座る。當所の市が賑々しう御座つたに依つて。見物致いてゐましたれば。いつの間にやら彼奴が參つて。私の持つて居りまする太刀をりんと剝ぎまして。我が物ぢやと申す。あの様な者は屹度仰付けられませ。小アド〽先づあの者の口を聞かう。アド〽お聞きなされませ。小アド〽心得た。先づこれは

何事ぢや。シテ〇アドのいふうちつさし足し一〇立聞き〇アドの通りいふ。 シテ〽私は主人の使に參る者で御座る、餘り市が賑々しう御座つたに依つて。ふと立寄つて見物致してゐましたれば。いつの間にやらあの横着者が參つて。私が佩いてゐる太刀の後間(あとま)へ手を入れまして。我が物ぢやと申しまする。正しい御代には屹度仰付けられて下され。 小アド〽扨は汝が太刀に極つたか。 シテ〽なるほど私ので御座る。 小アド〽同じ樣な事をいふ。やい／＼。あの太刀の國作りを覺えてゐるか。 アド〽なる程存じてゐまする。あれは備前物で御座る。備前にとつて古作には長光で御座る。長(なが)は長の字。光(みつ)はかうした光るといふ字で御座る。シテ立聞きして一〇アドの通りいふ。 小アド〽地肌、燒刃の樣子はどうぢや。 アド〽先づひん拔いて一尺ばかり直(すぐ)燒で御座る。それより先は小亂(こみだれ)で御座る。物に譬へて申さば。霜月師走薄氷の上へ薄雪のぱつとかゝつたやうな。それは／＼見事な物で御座る。シテ同じ事をいふ。 小アド〽さてさて。兩人同じ樣にいふは合點のゆかぬ事ぢや。やい／＼。とかく汝がいふ通りにいうて理否が判らぬ。 アド〽彼奴が知らう樣が御座らぬが。いや私は田舍者で物を聲高に申すに依つて。彼奴が聞き取つて同じ樣に申すで御座らう。此度はあの太刀の寸を、ひそかに囁いて申しませう。 小アド〽これは尤もぢや。ひそかに言うて聞かせ。 アド〽畏まつて御座る。ト云うて。耳に口を寄せ。囁きいふ。シテ立聞きすれども。聞えかねる心持あり。 小アド〽やい／＼。その太刀の寸は何程ぢや。 シテ〽先づあれから云へと仰せられい。 小アド〽いや。あれはいうた。 シテ〽何と申しました。 小アド〽何といふとも。そちが覺えた通りいへ。 シテ〽先づあれは備前物で御座る。 小アド〽そのことではない。寸をいへ。 シテ〽長光で御座る。シテそれよりいろいろうろうろたへ出す。 小アド〽大方知れた。 アド〽なる程樣子が知れました。 寸をいへ。トいうて一〇二人兩方に分かつて手を持ちてせく〇。 シテ〽目代殿も兎角あの者に贔屓をなさるゝ。所詮あの太刀一振損にすればよう御座る。身共は歸る。 二人〽憎い奴の。盗人が極つた。いざ剝いでやらう。トいうて。羽織を脱がし。突倒して。兩人して追込むなり。

泣尼(なきあま)

シテ　僧
アド　施主
尼
（入道具）

アド〽是はこの邊りの者で御座る。某親の追善の爲。一間四面の堂を建立致して御座る。田舍の事で堂は思ふ儘に出來て御座れども。似合はしい御出家が御座らぬ。此度都へ上り御出家を賴うで參らうと存ずる。シャ／＼。まづ急いで參らう。誠に田舍と申すものは不自由なもので御座る。堂は思ふ儘出來て御座れども。何を申しても御出家が御座らぬ。何卒似合はしき御出家をお賴み申せばようござる。何かと云ふ内に都へ著いた。則ち是にお寺がある。まづ案内を乞はう。物も。案内もう。 シテ〽表に案内があるが。小僧共は出ぬか。案内とはたそ。 アド〽御免なされませう。 シテ〽是は見知らぬお人ぢやが。どれから御座つた。 アド〽私はさる田舍の者で御座る。お寺を見掛けまして。ちとお賴み申す事があつて參りました。 シテ〽それならば。まづ斯う通らしやれ。 アド〽畏まつて御座る。 シテ〽さて寺を見掛けてお賴みなされたいとは。如何やうの事で御座る。 アド〽別の事では御座らぬ。私親の追善の爲。一間四面の堂を建立致して御座る。この堂供養又は追善の爲。一座の法談をも執行ひたう存じますれども。田舍の事で御座れば。似合は

しい御出家が御座らぬ。何卒お下りなされて。一座の法談をも執行うて下されうならば。忝う存じまする。シテへ何と仰せらるゝ。たとへば。さる田舍のお人ぢやが。親の追善の爲。一間四面の堂を建立なされて。その堂供養また追善の爲。一座の法談をも執行うて貰ひたいとあつて。此寺を見掛けて來たと仰せらるゝか。アドへ成程さやうで御座る。シテへ扨も／＼御氣の毒千萬な事で御座る。誰あつて親の跡を麁末に存ずる者はなけれども。こなたの身からは。はや光がさすやうに御座る。アドへ是は結構な御挨拶で御座る。シテへそれこそ出家の望む所なれ。早速參つて一座の法談をも執行ひたいものなれども。叶はぬ隙入りが御座るによつて。得參りますまい。アドへお前をと申す事では御座らぬ。お弟子なりともお下りなされて下されい。シテへ弟子共も御座れども。しかつべしいは學問に上し。新發意等を遣しては。法事がどうも心許なう御座る。とかくなりますまい。アドへそれならば是非に及びませぬ。又外の寺へ參りませう。シテへ外の寺に近附が御座るか。アドへ是は御意とも覺えませぬ。外のお寺に近附が御座れば。それへ參りますれども。近附が御座らぬによつて。こなたをお頼み申す事で御座る。シテへ是は身共があやまつた。さりながら。爰に物とした事が御座る。此方が御不案内で御座つたらば。定めてむさとした出家をがな雇はせられう。愚僧が心當りもあるによつて。雇うて見て進ぜうが。但し要らぬものか。アドへそれは忝う御座る。それならばどうぞお雇ひなされて下され。シテへそれならば雇うてみて進ぜう。さりながら。爰に物とした事がある。愚僧が參るか。弟子共を遣せば。その構ひがないが。此人を雇ふといふに就いての事ぢやが。物は御用意か。アドへ物とは何で御座る。シテへハテそれ物いの。アドへエヽ。お布施の事で御座るか。シテ笑ふ。シテへまづさやうなもので御座る。アドへこれは田舍の事で御座れば。多しい事は御座らねども。鳥目千疋用意致して御座る。シテへヤア／＼。鳥目千疋用意で御座るか。アドへなか／＼。シテへそれはいつかどのお布施で御座る。それならば雇うて見て進ぜう程に。暫くそれに待たつしやれ。アドへそれは御苦勞に存じまする。追付けお歸りなされませ。シテへ追付け戻りませう。アド笛座に入り。下に居る。シテへこれは如何な事。鳥目千疋用意したと云はるゝ。なに是を行かぬといふ事があるものか。愚僧が參らうさりながら。愚僧が談義は。殊勝氣はなうて眠がさすと。何れも仰せらるゝ。又爰に泣尼と申して。涙脆い尼が御座る。いつも談義の節は。かの尼を雇うて參り。斯う座近う置いて貰へば。その尼が泣くにつれて。少しは殊勝なとおしやるお方がある。出家を雇ふと云ふは嘘。かの泣尼を雇うて。愚僧が參らうと存ずる。まづ急いで尼の方へ參らう。シカ／＼。誠に。尼が内に居ればようござるが。内にさへ居たらば。身共が申す事ぢやによつて。大方來て呉るゝでござらう。イヤ何かと云ふうちに是ぢや。まづ案内を乞はう。物も。案内も。尼内に居さしますか。おりやるか。尼へエイ／＼。表に聞馴れた聲で案内がある。案内とはたそ。シテへ愚僧でおりやる。尼へエイお長老樣。ようお出でなされました。シテへ此中は談義もせぬによつて。雇ひにもおこさなんだ。わごりよもまめさうで一段の事ぢや。尼へ妾も隨分まめに御座る。お長老樣にも御機嫌さうで。おめでたう御座る。シテへさて今日來るは別の事でもない。さる田舍の人ぢやが。親の追善の爲。一間四面の堂を建立め

されて。その堂供養または追善の爲。一座のほだんなも執行うて貰ひたいと云うて。愚僧を雇ひに見えた。又いつも通り　高座近う置いて。泣いて貰はうと思うて雇ひに來たが。何と來て哭るゝ事がならうか。尼へ何と仰せらるゝ。例へば。さる田舍のお人ぢやが。親の追善の爲に。二間四面の堂を建立なされて。その堂供養または追善の爲。一座の法談をも執行うて貰ひたいとあつて。お長老樣を雇ひに見えたと仰せらるゝか。シテへ成程その通りぢや。アドへ扨も〳〵。田舍にも其樣な志の深い殊勝な人が御座りまするか。（ト云うて泣く。）シテへはや泣出した。何と來て哭るゝ事がならうか。尼へ參りたらは御座れども。此中はお針が忙しう御座るによつて。得參りますまい。シテへそれは氣の毒ぢや。わごりよを雇ふと云うて。全く骨を盜まうではない。先からは何程くれられうも知らねども。わごりよにも鳥目十疋お布施をやらうが。何と來てお哭りやるまいか。尼へヤア〳〵。妾にも鳥目十疋お布施を下されう。シテへなか〳〵。尼へそれはまあ大分のお布施で御座ります。（ト云うて泣く。シテ笑ふ。）シテへ扨も〳〵泣きにくい所をよう泣く尼かな。何と來てお哭りやるまいか。

尼へお針方が忙しう御座れども。お長老樣の事ぢや程に參りませう。シテへそれは過分な。さあ〳〵おりやれ。尼へ心得ました。シテへ今日はわごりよが來てお哭りやつて　此樣な悦ばしい事はない。尼へお針の方が忙しう御座れども。お長老樣の事ぢやによつて。參りまする。シテへさて云ふ迄はないが。またいつもの樣に談義のつがひ〳〵で。よう泣いてたもれ。尼へあゝそれは氣遣ひあそばすな。シテへ身共は田舍人と同道で行かう程に。わごりよは後から見え隱れにおりやれ。尼へ心得ました。シテへ田舍人御座るか。アドへお長老樣お歸りなされたさうな。お歸りなされましたか。シテへ只今戻りました。アドへ御苦勞に存じまする。シテへさて都は廣い事ぢやによつて。どの樣な出家もあらうと思召さうが。これぞと存ずるは。先約があるのなんのと云うて。そなたへ遣しさうな出家は一人も御座らぬ。アドへ一人も御座りませぬか。シテへなか〳〵。アドへお前のおいでなされてさへそれで御座る　私が不案内で參りましたらば。むさとした御出家をがなお雇ひ申すで御座らう。それならば是非に及びませぬ。此上は在所へ歸りまして。成合ひに法事を執行ひ

ませう。シテへされば其處の事で御座る。最前から如何にしてもそなたの心に感じ入つて。先約の方へ御斷りを云うて弟子を遣し。そなたへは身共が參る分に極めたがお厭か。アドへお前がお出でなされて下さりまするか。シテへなか〳〵。アドへそれは近頃忝う御座る。それならばどうぞお出でなされて下されませ。シテへそれならば。身拵へをなして參りませう。そなたは庫裡へ御座つて。茶でも參りませ。アドへ忝う存じまする。シテへヤイ〳〵。旅の人に茶でもおませいよ。アドへ扨も〳〵悦ばしい事かな。身共が不案内で參つたらば。むさとした御出家をがなお雇ひ申すであらうに。重疊のお寺へ參つて。殊にお長老樣のお出でなされて下さるゝ。まづ以て某が家の覺え。國許への外聞。此樣な忝い事は御座らぬ。是と申すも佛のお引合せで御座らう。（ト云ふ時。シテ咳拂ひして出る。）アドへ是はお拵へが出來ましたか。シテへ私が參れば。留守の事を申付けたり。何かと隙を入つて。お待遠に御座らう。アドへいやさやうにも御座らぬ。いざおいでなされませ。シテへ案内者のため。そなた先へ御座れ。アドへそれならばお先へ參りませう。シテへ一段とよう御座らう。アド

〽さあ〳〵お出でなされませ。シテ〽心得ました。ト云ふ時。尼を呼び。二人まはる。アド〽誠に。此度はお前のお出でなされて下されて。此樣な悦ばしい事は御座らぬ。シテ〽愚僧もかた〴〵の先約で御座れども。如何にしてもそなたの御心底を感じ入つて參る事で御座る。アド〽何かと申す內に是で御座る。シテ〽是で御座るか。アド〽則ち此度建立の堂も是で御座る。シテ〽信は莊嚴より起ると申すは。結構な莊嚴で御座る。アド〽是は結構な御挨拶で御座る。シテ〽聽衆も群集致した。いざ法談を始めませう。アド〽御苦勞に存じまする。シテ〽今日こんちの志は。二親菩提の爲一堂を建立し。一家一香を手向け給ふ。これ皆親に孝ある故なり。アド〽ハア。シテ〽されば世に四恩あり。第一には天地の恩。第二には國王の恩。第三には衆生の恩。第四には父母の恩。是を四恩と申す。中にも重きは父母の恩。それを如何にと云ふに。骨は父の恩。肉身は母の恩。爰を以て父母報恩經にも說き置かれ。旣に御母摩耶夫人孝養のため忉利天に登り。安居の御法を說き給ふ。又ていらんは母におくれ。その貌を木像に作り。存生の如く物を云ひ。朝夕孝を盡しけるに。他人是を見て。餘りの

事と憎み。かの木像の胸に針を刺しければ。その針の跡より血の流るゝ事瀧の水の落つるが如し。此內より尼そろ〳〵眠る。シテ見付け。色々心持あり。シ また郭巨は。老いたる母を持ち一人の子を持つ。此子に扶持するならば。親こそともになるべし。たゞみどり子を埋まんと野邊に行て。打つたる鍬の下よりも。黃金の釜を掘出し富貴の身となりぬ。尼眠る。シテ咳拂ひして起す。シテ〽又伯兪が母に打たれし杖に泣く淚。まつたう杖の痛きにあらず。日頃打ちし杖よりも。弱りたるを見て泣く淚なり。段々尼強く眠る。シテ心持色々。口傳。シ また爰に泣かいで叶はぬ物語がある。魯國のさいかうといふ者は。父におくれ。その嘆きやむ事なく。喪に入つて泣く事三年となりぬ。其後笑ふと雖も。齒を現す事なし。かのさいかうといふ者は。唯の淚をも泣かずして。血の淚を流し。三年までさへ泣いたるぞや。前に同じく起す心持色々あるべし。惣じて人間の無常を觀ずるに。春の花を見ては悟とし。秋の月を見ては眠をさます。斯かる說法の場において。若し一人なりとも。眠のきざす輩は大惡人。金言は耳に入り難しと佛も說き置かれた。強く咳拂ひ。色々あるべし。泣け〳〵あまの事ぢや。所詮下手の長談義は無用の事とある。其上此間は諸事お肝煎りで。施主の

お草臥れも御座らう。此上は唯回向を致さう。唯かれを聞き是を見るに。孝行に外れたる事あるまじ。今日の說法これ迄なり。願以此功德普及於一切我等與衆生皆倶成佛道ト云うて。りんを持ち回向する。尼驚き目を覺し。拜み。太鼓座へゆく。シテも立つなり。アド〽是はおしまひなされましたか。シテ〽只今しまひました。アド〽是は御苦勞に存じまする。シテ〽お取込みで御座らうに。御念の入つたおあしらひ。殊に上茶でゆるりとおとゝを喰へました。アド〽內容に取紛れまして。何のお構ひも申しませなんだ。シテ〽扨。もう斯う參りませう。アド〽はやお出でなされまするか。シテ〽何も御用も御座らぬか。アド〽何も用事は御座りませぬ。シテ〽何方へ上したいと云ふ樣なものも御座らぬか。アド〽お布施は先達て上しまして御座る。シテ〽その事では御座らぬ。もう斯う參りまする。アド〽お出でなさるか。シテ〽なか〳〵。アド〽ようおいでなされました。シテ〽ハア。シテ〽扨も〳〵匆怪な者を連れ來て。愚僧に世話をやかせなつた事かな。尼〽申し〳〵お長老樣。シテ〽何事ぢや。尼〽いつ〳〵とは申し乍ら。今日の御說法の樣な有難い御殊勝な事は御座りませぬ。ト云うて泣く。シテ〽何ぢや。有難かつた。尼

へハア。シテへ有難かつたやら。忝かつたやら。そこへ座につくとたつた一寢入にして。何の有難い事があるものぢや。尼へ約束の物は。シテへ約束の物とは。尼へお布施は。シテへ布施を。尼へなか〳〵。シテへ泣いたらばやらうとこそ云へ。泣きもせぬ布施がやらるゝものか。尼へさては布施をおこすまいと云ふ事か。シテへ何いやうにやるものぢや。尼へなう〳〵腹立ちや〳〵。この年寄つた者をはる〴〵連れて來て。お布施をおこさずば。袈裟なりと剝いで取るぞ。シテへこれは何とした事。尼へいや〳〵。袈裟なりと剝いで取るぞ。シテへ是は人が笑ふわいやい。ほえうおのれはほえいで。愚僧をほやしをる。おのれが樣なやつは斯うしておいたがよい。尼へなう腹立ちや〳〵〳〵。（ト云うて シテを追込みいるなり。）

長刀會釋（なぎなたあしらひ）（長刀應答）

シテ　太郎冠者
アド　主人
立頭　客
立衆二　客
その他立衆大勢

（入道具）

アドへこの邊りの者で御座る。此春思ひ立つて參宮を致さうと存ずる。さり乍ら。近所の若い衆が常にさへせつ〳〵呻に見ゆる。殊に唯今は庭の櫻が盛ぢやに依つて。各御出でゞあらう。太郎冠者に留守の儀を申付けう。（ト云うて此時出す。出るも常の如し。）思ひ立つて參宮をする。留守をせい。汝も供につれて參らせたけれども。花の時分ぢやによつて何れもがお出でゞあらう。それ故そちを殘しおく。とても身共が内にゐる樣には得あひしらふまい。せめて長刀應答になりとしておけ。シテへ其段はお心安う思召して。目出たう頓てお下向なされませ。アドへ心得た。隨分留守を大事にせい。頓て戻らうぞ。シテへ頓てお歸りなされませ。（アド樂屋へ中入する。）シテへ誠に。某もけふは拔けうかとあすは拔けて參らうかと思うて居ても。此時節もなかつた。人が參宮する時は一入羨ましい。此度などは別して殘り多いさりながら。又お留守も一大事ぢや。身共は留守も仕兼ねまいと見込まれた所が過分なこ。惣じて昔から大事の留守は鑓長刀でするも申すが。今思ひ當つた。いつもの樣に若い衆が御座つたりとも。長刀應答にしておけと申付けられた。是は尤もぢや。盜人が陰から聞いても。いやあそこには亭主が留守なれども。太郎冠者がこは者ぢや。知音の衆さへ長刀應答にするといへば。中々盜人も得はいるまい。是につけても賴うだ人は分別の深い人で御座る。いよ〳〵留守を乾度守らうと存ずる。客へ此邊りの者で御座る。懇意に致す人の方によい庭を持たれて御座る。花が盛ぢやと申す程に。參つて見物致さうと存ずる。シカ〳〵。誠に。山林の花見は打ちひらいて面白し。又庭の花は亭主の心を思ひやられて。結句たのしみが增す事で御座る。何かといふ内に是ぢや。（ト云うて案内乞ふ。出るも常の如し。）客一へ御亭主は内に御座るか。シテへ物詣を致されて留守で御座る。客一へ苦しうなくば通つて見物せうか。シテへ幸ひ庭の花が盛りで御座る。お通りなされて御見物なされませ。客一へ身共も花が望みで參れども。留守を聞いて力を落した。それならば通つて見うか。シテへ御遠慮なされずとも。ゆるりと御見物なされませ。客一へ扨も〳〵見事〳〵。いつもとは云ひ乍ら殊の外見事ぢや。一入花の位が上つた。先づ庭の掃除が綺麗なによつて。（ト云ふ内。後よりは長刀にて會釋仕樣あるべし。）客一へヤレあぶない。是は何事をする。シテへ賴うだ者が申付けまし

た。客一〽先づ待て。心得ぬ事なれども怪我のない内に先づ歸らう。（ト云うて入る。シテ笑ふ。）シテ〽扨も〳〵埒のあいたものかな。内に御座つたらば茶よ酒よと云うて埒があくまい。長刀を見せたれば早速歸られた。此後どれが見えたりとも。此通りにあしらはうと存ずる。客二〽此邊りの者で御座る。近所の庭に花が御座る。最早盛ぢやと申す。知音で御座る。見舞がてら參らうと存ずる。シカ〳〵。何れ亭主がまめな人で。常々木をそだつる事を好かるゝによつて。いつも花の時分は見事な。何かと云ふ内に是ぢや。（ト云うて案内乞ふ。出るも常の如し。）客二〽花が盛であらうと思うて見物に參つたが。亭主は内にか。シテ〽四五日は他國致されて御座る。客二〽それは淋しからう。留守の内花見の客があらうが。何とめさる。シテ〽それは私に委細申付けておかれました。先づ斷う御通りなされて御覽なされませ。客二〽それならば通らう。扨も〳〵當年も殊の外花がよう咲いた。咲きも殘らず散りも始めぬと云ふが今の事ぢや。（ト云うてほめてゐる内。長刀を持出。初めの通り應答ふ。）客二〽先づ待て〳〵。是は何とする。シテ〽賴うだ人の云付で御座る。客二〽合點のゆかぬ事なれども。足許のあかい内に先づ歸らう。（ト云うて入る。シテ笑ふ。）

シテ〽是は氣味のよい事ぢや。賴うだ人の内に御座る時も。會釋は此通りがよささうな物ぢや。さりながら。花見の客が大勢見えたらば會釋ふ（あしらふ）にかゝつて居ずばなるまい。（ト云うて下にゐる。初の客に大勢立衆つき出る。）立頭〽何れも御座るか。誰方の花が盛で見物に參つたれば。太郎冠者が狂氣致して。長刀を閃かして人を追ひまする。立二〽私も參つたれば。長刀で追ひました。立豐〽いづれも花見の體で先へはいらつしやれ。長刀を持つて出る所を。大勢寄つて長刀を取りませう。立二〽是は一段とよう御座らう。立頭〽必ずぬからせらるな。立衆〽心得ました。立頭〽先づ若い衆。案内を乞うて内へはいらつしやれ。（立衆案内乞ふ。初の二人は忍んで居る。シテ出る。常の如し。）客〽身共ぢや。シテ〽ようこそお出でなされ。いざお通りなされませ。客〽お庭の花が盛ぢやと聞いて。皆云合せて見物に來た。シテ〽唯今が最中で御座る。直に庭へ通らせられて。ゆるりと御覽なされませ。客〽心得た。さあ〳〵通らせられい。扨も〳〵見事で御座る。シテ〽是は大勢ぢや。早速應答はう。（ト云うて。長刀を振りまはす。）立衆〽そりや長刀よ。（ト云ふ時。初めの客二人も飛出して。大勢にて長刀をとり。打倒し。）立頭〽是さへとれば心安い。さあさあ御座れ〳〵。（ト云うて。各入るなり。）シテ〽やい〳〵。其長刀を戻しておくれやれ。重ねて客人を應答ふ馳走がない。やるまいぞ〳〵。（ト云うて。追込み入るなり。）

茄子（なすび）

鷺流

シテ　小僧
アド　同
アド　師僧

師僧〽當寺の住持で御座る。小僧共を呼出だいて申附くる事が御座る。やい〳〵。居るかやい。シテ〽召すは。アド〽心得た。二人〽お前に。師〽早かつた。皆呼ぶは別の事でもない。身は用があつて山越えて行くが。二三日は逗留する。其のうちよう留守をさしませ。二人〽畏まつて御座る。師〽さてまた尋ぬる事がある。あの某が祕藏する茄子（なすび）を。何者か盗むと見えて。毎日見る毎に。四つ五つ程は必らず足らぬが。何とした事ぢや。シテ〽それは定めて狐かなどが來て。取るもので御座りませう。師〽いや〳〵。その樣なものがした體ではないが。あの畑へ人のむさと來る所でもなし。汝等は取りはせぬか。ありやうに云へ。二人の内〽存じもよらぬ事。何が私などが取りませうぞ。師〽知らぬが定か。シテ

へ何が妄語を申しませう。如何な佛祖をかけて誓言で申上げまする。つひに足踏みをした事も御座りませぬ。アドへ扨も思ひ切つた誓文を立つるは。師へいや人の事を云はずと。汝も誓文を立てい。アドへ私もあの畑へ。指でもさいたらば。如何な佛菩薩の御罰を蒙りませう。手をつけた事も御座りませぬ。師へそれならばよい。よう留守をせい。やがて戻らうぞ。二人へゆる／＼とお氣遣ひなう御座りませい。（ト師僧は入る。二人見送りつ眞中へ出る。）シテへなう何と思はします。あのやうな斉い人はあるまいぞ。アドへ和御寮が云ふ通り。少々取つても段々あとから出來るものを。何かとおしやる。慾の深い事ぢやまでい。（シテ見廻して。）シテへさて人はないが。和御寮は眞實取らぬが定か。アドへ愛なものは。あれ程師匠の前で誓文を立てゝいふに。むさとした事を問ふ人ぢや。シテへいや誓文は某も立てたが。又懺悔には罪も滅するといふ。思ふ事を云はずば罪ぢや。某も誓文を立てたが。心持があつて立てた。其の心持を懺悔に話さうが。和御寮も云はうか。アドへいづれそちが云へば。身もちと下心がある故に。強う云ひ切つたが。和御寮が云うたらば。身も云うて聞かせう。先づ云はしませ。シテへそれならば云はう。あの畑へつひに一足も踏み込んだ事はないが。垣越に手を入れた事はあるよ。アドへ身もその樣な事。つひに手はつけぬが。草を刈る時鎌に掛けて見たは度々の事ぢや。（ト二人共に笑ふ。）シテへさらば身が思ふは。一兩日はお歸りやるまい程に。いざ又ちとしてやつて。肴にして飮むまいか。（トいろいろ詞あり）（兩人にて畑へ來る。）シテへ畑へ來たは。さても／＼。まだいかい事なつてあるは。（ト垣越しに見る體なり。）アドへあそこにも。（ト手を出す。）シテへそりや手が出る。（ト叩く。）アドへあそこにも。こゝにも。（トうしろ手して。顏にて云ふ。シテ覺えず先へ出る。アド叩き。）アドへ足が出るは。（ト暫く見て居る。）アドへ思ひついた。仕樣がある。（トシテを負うて。垣の内へ入る。よろづ手にする事はシテにさせ。負うて廻り取らする。さてそれを肴として。酒盛。小舞。小謠などあり。）師へ用を悉くしまうて御座る。急いで歸りませう。いやこれは殊の外賑かな。これは如何な事。扨々憎いやつの。やい／＼。おのれ等は何事をする。（常の如く追込にて止。）

名取川（なとりがは）

シテ　僧

アド　何某

（入道具）

シテ次第へ戒壇踏んで受戒して。／＼。我が古寺に歸らん。これは遙か遠國の坊主で御座る。某が國の習ひで。戒壇の地を踏まぬ者は。出家の樣に申さぬに依つて。此度比叡山に登り。戒壇の地を踏み。受戒まで致して歸るさに。さるお寺へ立寄つて御座れば。大兒と小兒が手習をなされて御座つたに依つて。やがてお側へ參り。御免なりませう。私は遙か遠國の坊主で御座る。此度始めて登つて御座る。さりながら。まだ定まる名が御座らぬ。何卒名をお附けなされて下されうならば有難う御座ると。申して御座れば。何と思召してやら希代坊とお附け下された。先づ以て忝う御座る。さりながら。私は物覺えが惡う御座る。とてもの事に張替の名をお附けなされて下されいと。申して御座れば。兩人どつと笑はせられて。不正坊とお附けなされて下された。これでも忘れませうと申して御座れば。御念が入つて。大兒のお手で衣の袖に希代坊。小兒の御手蹟で不正坊と。あり／＼と書附けて下された。此の樣な嬉しい事は御座らぬ。先づ急いで本國へ歸らう。シカ／＼。誠に。年月の念願で御座つたに。此度願成就致して御座る。此の樣な嬉しい事は御座らぬ。國許へ歸

つて御座らば。さぞ一門共が喜ぶで御座らう。わあ。愚僧が名を忘れた。あれは物坊。き坊。それ〳〵。希代坊であつた物を。既に忘れうとした。さて張替への名は物坊。何とやらであつた。これはどうも思ひ出されぬ。書附を見ずばなるまい。あれ〳〵。不正坊であつた物を。え思ひ出さなんだ。爰に氣の毒な事が有る。國許へ歸つて。何れもが。そちが名は何と言ふぞとお尋ねの時。衣の袖を見て。希代坊で御座るの。不正坊で候のとは言はれまい。其の上我が名程の事を覺えぬと言ふは口惜しい事ぢや。これはどうぞ覺えた様の有りさうなものぢやが。イヤひたすら道すがら申して參らう。先づ希代坊。さて張替への名は不正坊。希代坊。不正坊。希代坊。いや〳〵。此の様に言うて居たらば。行きとほりの者が。あの坊主は氣ばし違うたかなどと言ふで御座らう。どうぞ耳に立たぬ様に言ひたいものぢやが。いや謠の様に節を附けて申さう。謠 希代坊に不正坊。不正坊に希代坊。希代不正希代坊。笑ふ。 誠に謠になつた。是は面白い事ぢや。此度は拍子に掛かつて舞ひ節に申さう。希代坊と申すは不正坊の御事なり。希代不正希代坊。不正坊とぞ申しける。笑ふ。 これは何にも言はれる。此度は踊り節で申さう。希代坊に不正坊に希代坊。希代坊に不正坊に

希代坊不正坊。此のしやつきしやく〳〵。しやつき〳〵〳〵しや。笑ふ。 扨も〳〵面白い事ぢや。さりながら。此様に言うて居ては道ばかが行かぬ。某に似合うた様に勤行節に申して參らう。ト言うて一ぺん廻る。希代坊不正坊。經の様に言ふ。 わあ。これに大きな川が有る。是は上りにも有つた川か知らぬ。折節上が降つたと見えて。水が濁つて有る。人通りが有らば渡り瀬が尋ねたいものぢやが。折節人通りも無し。是非に及ばぬ。身拵へなして渡らうと存ずる。扨これは何處もとを渡つてよからうぞ。いや是處を渡らう。ト言うて。川を渡る體。 これはいかう深い。あゝ石が滑る ト言うて。川へはまる體。直ぐに上る。袖をしぼり。 其のまゝの濡れ鼠ぢや。扨も〳〵。渡りつけぬ川を聊爾に渡らうものではない。既に流れうとした。あまの命を拾うたと言ふものぢや。さて身共は何やら落した様にも有り。又忘れた様にも有るが。何も落しはせぬか。先づ笠あり珠數あり。何も落しはせぬが。えい愚僧が名を忘れた。あれは物坊。たつた今まで覺えて居たが。いや最前の様に拍子にかゝつて思ひ出さう。

物坊と申すは何とやら坊の御事なりで有つたが。これはどうも思ひ出されぬ。よい〳〵。その爲の書附ぢや。書附を見う。南無三寳。身共が名を流した。やれ〳〵。折角遙々上つて附けて貰うたに。これは先づ何としたものであらう。いやまだ遠くへは行くまい。最前の所へ行て掬はう。扨も〳〵苦々しい事をした事かな。これ〳〵。是處で有つたものを。謡流ははてじ水の面。〳〵。そこなるおれをすくはう。われはまた。戀をする身に有られども。同へ浮名を流す。腹立ちや。シテへ川は樣々多けれど。同へ伊勢の國にては。天照大神のすみ給ふ。御裳濯川も有りやな。熊野なる音無川の瀬々には。權現御影をうつし給へり。光源氏の古へ。八十瀨の川と詠めゆく鈴鹿川な打渡り。近江路にかゝれば。いく瀨渡るもやすの川。墨俣あぢか杭瀨川。そばは淵なる片瀨川。思ふ人によそへて。大熊川も戀しや。つらきにつけて悔しきは。あい染川なりけり。墨染の衣川。衣の袖をひたして。岸陰の柳の。眞菰の下を。押しまはし〳〵て見れば雑魚ばかり。我が名はさらになかりけり。〳〵。扨も〳〵夥しい雑魚かな。これも雑魚ぢや。アドへ名取の何某で御座る。川向へ用事あつて參る。先づそろり〳〵と參らう。誠に。これは如何な事。なう〳〵御坊。シテへ何で御座る。アドへ此の所は殺生禁斷の所ぢや。なぜに殺生を召さる。シテへいや殺生は致さぬ。一寸物を落して御座る。アドへこれ〳〵。それ程殺生をしながら。殺生せぬとは。御坊は妄語をおしやるか。シテへ如何な〳〵。妄語など申す樣な坊主では御座らぬ。先づ此川の名は何と申す。アドへこれは名取川と申す。シテへなに名取川。アドへなか〳〵。シテへ向うの在所は。アドへ名取の在所。シテへ方々の御名字は。アドへいつ名も無い者で御座る。シテへ御人體と見えて御座る。隱さずとも有りのまゝに仰せられい。アドへそれならば申さう。有り樣は名取の何某で御座る。シテへほい扨はきやつめがしゝやり居つた。扨々憎い事かな。何卒してこちへ取返さうと存ずる。なう〳〵。私は遙か遠國の坊主で御座る。此度は上方へ上つて附けて貰うた名で御座る。今の名をこちへ戻して下され。アドへこれは如何な事。そなたの名が何と言ふやら。身共が知らう樣が無い。シテへでも最前この川の名を問へば名取川。向うの在所は名取の在所。方々は名取の何某とはおしやらぬか。アドへ何某ぢやに依つて何某と申した。シテへすれば此方がとらいで。誰が盜るものぢや。早う戻して下され。アドへ扨も〳〵希代な事を言ふ人ぢや。シテへ何ぢや希代。希代〳〵。笑ふ。その希代坊と言ふが私の名で御座る。アドへ希代坊と言ふが和御寮の名か。シテへ迚もの事に。張替への名も下されたらば。忝う存じまする。アドへ弓にこそ張替へと言うてあれ。名に張替へは珍しうおりやる。シテへ一つ下さるるも。二つ下さるるも同じ事で御座る。出家の事ぢや。慈悲になりませう。下され。アドへ最前はふと言合うてそなたの仕合せ。張替への名は身共は知らぬ。シテへ何ぢや。知らぬ。アドへなか〳〵。シテへとつたぞ。アドへこれは何とする。シテへ如何に名取の何某ぢやと言うて。その名を言はねばどつちへもやらぬぞ。アドへそれは誠か。常の如くつめる。アドへ扨も〳〵不祥な所へ出かかつた。シテへ何ぢや不正。不正〳〵。笑ふ。不正坊と言ふが張替への名で御座る。アドへ何ぢや。不正坊と言ふがそなたの張替への名か。シテへおゝそれ續よ名取殿。謡希代坊に不正坊。不正坊に希代坊二つの名をば取返し。本國さして歸りけり。

繩綯（なはなひ）

シテ　太郎冠者
アド　主人
小アド　何某
（入道具）

アド〽この邊りの者で御座る。某誰殿と申合はせ。手慰みを致して御座れば。金銀は申すに及ばず。一人ある太郎冠者まで打込うで御座る。約束で御座るに依つて。遣さうと存ずる。さりながら。此の事を申して遣したらば。定めて拗ねて働くまいに依つて。斯様に狀に致して御座る。呼出だし。又持つて遣さうと存ずる。（ト云うて。呼出す。常の如し。）汝呼出す別の事でない。そちは大儀ながら。此の狀を何某殿の方へ持つて行け。シテ〽畏まつて御座れども。これはまた毎もの樣に御寄合なされて。御手慰みをなされうとの御狀では御座らぬか。アド〽いや〳〵そのやうな事ではない。ちと外の用を申して遣す程に。持つて行け。シテ〽是は。毎度申上げる事で御座る。これをなさぬと申して。外にお慰みも多い事で御座る。あらぬお手慰みをなさるゝとあつて。世間の取沙汰も惡う御座る。慮外ながら御無用になされたらばよう御座りませう。アド〽己れが何を知つて。その事ではないといふに。持つてうせう。シテ〽はあ。アド〽急いで行け。シテ〽はあ。アド〽えい。シテ〽アさても〳〵苦々しい事かな。こりやまた十が十ながら毎もの樣に寄合うて。博奕を打たうといふ狀には極まつた。それないへば。己れが何を知つてといふて齒を出さるゝ。是非に及ばぬ。行かずはなるまい。シカ〳〵。いやまた世間の人は。五度に三度はお勝ちやるといふ事もあるが。こちの頼うだ人に限つて。終に一度もお勝ちやつたといふことがない。負けても〳〵。何が面白うてやら。博奕が打ち度いぢやまで。正眞の下手の横好きといふは。頼うだ人の事ぢや。何かといふうちに是ぢや。先づ案内を乞はう。（常の如し。）小アド〽えい太郎冠者。そちを今朝から待つて居た。シテ〽頼うだ者から狀をおこしまして御座る。小アド〽狀には及ばぬに。なるほど合點ぢや。さあ〳〵かう通れ。シテ〽御用も御座らずば。かう參りませう。小アド〽そちは何も樣子を知らぬか。シテ〽いや何の樣子も存じませぬ。小アド〽知らずは云うて聞かせう。そちが頼うだ者と例の一勝負したれば。金銀は申すに及ばず。汝までも打勝つた。向後は是の者ぢや程に。さう心得。シテ〽それは合點の參らぬ事で御座る。それならばそれと。宿元でおしやりさうなもので御座るが。これへ參るまで何の沙汰も御座らぬ。小アド〽何しに僞りをいふものぢや。そちも物を書く。これへ寄つて此の狀を見よ。シテ〽どれ〳〵。なに〳〵。鳥目の代りに太郎冠者を遣し候。小アド〽何と。シテ〽こりや定ぢや。まことかう有らうと思うて。前びろから色々と意見をすれども。お聞きやらぬに依つて。此の樣に成り下つたことぢや。小アド〽成る程そちがいふ所は尤もなれども。何れに奉公をするも同じこと。隨分と精を出して勤めて呉れい。シテ〽オウ〳〵。おりや何處に奉公をするも同じ事ぢやが。此の樣子ならば。一人あるかみ樣も打込まつしやれずはよう御座るが。小アド〽先づかう通れ。シテ〽扨も〳〵笑止千萬なことぢや。小アド〽さて初めて來た所に。ただ居るは惡いものぢや。山一つあなたへ使に行け。シテ〽なりますまい。小アド〽なぜに。シテ〽持病に脚氣があつて。山坂は一町もなりませぬ。小アド〽それならば裏に垣を結ふ程に。繩を綯へ。シテ

へ何ぢや。繩を綯へ。小アドへなか／＼。シテへこれ誰殿。俺も今まで隨分卑しい奉公はしましたれども、終に繩など綯うた事は御座らぬわいのう。小アドへいや己れは憎い奴の。つつと精な者ぢやとおしやつたに依つて。大分の鳥目の代りに取つた。己れその樣に拗ねて働かずば、鳥目で屹度算用さするぞよ。シテへでも扱、ならぬことはならぬと云はいでなりませうか。小アドへまだ吐かし居る。すつ込うでゐよ。シテへいや熱氣にも冷えにもたゝぬ事かな。小アドへさて／＼憎い奴て御座る シカ／＼。先づ急いで參らう。隨分精な者ぢやとおしやつたに依つて、大分の鳥目の代りに取つた。あの樣に拗ねて働かぬ奴は。鳥目で屹度算用致させうと存ずる。何かといふうちこれぢや。（下云うて。案内乞ふ常の如し。）アドへ唯今太郎冠者を遣しましたが。小アドへ成る程太郎冠者は參りました。あれはずつと精な者ぢやと仰せられたに依つて。大分の鳥目の代りに取つたでは御座らぬか。アドへ成る程。其通りで御座る。小アドへそれに。山一つあなたへ使に行けと申せば。持病に脚氣があつて。山坂は一町もならぬと云ひまする。又裏に垣を結ふ程に。繩を綯へと申せば。繩など綯うた事はないと申して。なか／＼拗ねて働きませぬ。あの樣な者は何の役に立つ者で御座る。鳥目で屹度算用させられたがよう御座る。アドへそれは合點の參らぬ事で御座る。彼奴はつつと精な者で。殊に繩など綯ふことは得物で御座るが。それは物で御座らう。此の事を申して遣しませなんだに依つて、定めて拗ねて働かぬもので御座らう。どうぞだまして歸させられい。某が使うてお目に懸けませう。又こなたも役を慕うて來て。使ふを見て。氣に入つたらば使はせられい。また氣に入らずば、鳥目で屹度算用致しませう。小アドへこれに尤もで御座る。それならばだまして歸しませう程に。使うて見さつしやれ。アドへ早う戻させられい。小アドへ心得ました。シカ／＼。またあの人がおしやるは尤もで御座る。兎に角に憎いは太郎冠者めで御座る。太郎冠者／＼。やい太郎冠者。シテへや。小アドへ面白もない事がある。シテへ何が面目ないぞ。小アドへ今またそちが賴うだ者と。例の一勝負したれば。此度は金銀はいふに及ばず。汝まで打返された。大儀ながら。去んでくれずばなるまい。シテへそれは先づ定で御座るか。小アドへ誠とも／＼。何の嘘をいふもいぢや。シテへそれはお笑止な事で御座る。私は何時までも御奉公を致さうと存じて御座るに。さて／＼お名殘り多いことで御座る。小アドへいや／＼勝負の習ぢや。そつとも苦しうない。早う去ね／＼。シテへまたあの邊のおりやらされたらば、お寄りやされて、お茶でも上つて下され。小アドへ成る程寄るであらう。シテへもうかう參りまする。小アドへよう來た／＼。シテへはあ。笑ふ。なう／＼。うるさや／＼。あの人に何時まで使はれうと思うて。幾世の物案じをした。先づ急いで歸つて。賴うだ人へは此の存分を云はいで置くまい。まうし／＼。賴うだお方御座りまするか。常の如し。アドへ戻つたか。シテへ戻つたか。こなたは／＼。俺を騙して能うやらつしやれたの。アドへ此度は何事も身共が惡かつた。了簡をしてくれい。シテへ了簡をするのせんのでは御座らぬ。はてこれ／＼の譯ぢやに依つて行て呉れいと仰せらるゝに。何の否と申しませう。主の爲に命を捨つるは内の者の役では御座らぬか。それに何處にか騙してやるといふ樣な。不得心な事があるもので御座るか。これはさうと。今度は不思議に勝たつしやれたげなの。アドへされば今度は不思議に

勝つて。奥に大分身だけ錢がある。大儀ながら。さし繩を綯うて呉れずば成るまい。シテへおゝ繩を綯ふ事は俺が得物ぢや。その藁を取つて御座れ。アドへ心得た。シテへまた此方の勝たつしやるといふ事もあるよなう。アドへこりや／＼。これか。シテへこれ／＼。幸ひこゝに綯ひさしがある。さらばこれを綯ひませう。アドへ早う綯うてくれい。シテへさていふ迄はないが。これに懲りて。以來ふつ／＼博奕ほど心のさもしいなる物は御座らぬぞいの。さて何から咄しませうぞ。かゝら申さうやら。世間の世話にも。人には添うて見よ。馬には乘つて見よ。といふ譬が御座る。あの誰殿といふ人は。あの樣な人ではないかと思うたら。あれは思ひの外な人で御座る。先づ終に人をお使やつたことが無さゝうに御座る。私があれへ參つて。まだろくに腰を掛けるや掛けぬに。どうでも使はぬが損ぢやがな思はれましたか。山一つあなたへ使に行け。よう參りませうぞ。持病に脚氣があつて。山坂は一町もならぬ。といふたれば。また何やらに思案をして。今度は裏に垣を結ふ程に。繩を綯へとおしやりまする。ここで俺もむつけりと腹が立ちまして。いやこれ誰殿。俺も今まで隨分卑しい奉公はしましたれども。終に繩など綯うだ事は御座らぬというたれば。いかう腹をお立ちやりましての。アドへさうでおらう。シテへ己れは憎い奴の。つつと精な者ぢやとおしやつたに依つて。大分の鳥目の代りに取つた。その樣に拗れて働かずば。鳥目で屹度算用させるとやら云うて。鳴りわめいてお出やりましたが。氣味のよい事は。是處へ來て皆お負けやりました。ト云うて笑ふ。これ。こゝをちと持つて下され。アドへ心得た。ト云うて。シテの後へ行き。繩の先を持つ。暫くあつて。小アドしいと點頭き代る。シテへさて私も表迄はせつ／＼お使に參りますれども。内へ通つたは今日が初めてで御座る。あの只殿がお出やりまして。内の者がどう云うたい。女共がかう云うたのとおしやりまするに依つて。さもたらしいお内儀で御座るかと存じましたが。先づ世間に惡女といふは多いことぢやが。あれは惡女の中の惡女で御座る。先づ色こそ黑けれ。まつたゞ墨で塗つた樣な顏ぢや。額はひよいと出て。目は團栗目なり。兩の頰は。握拳をつき出した樣に。ぷうと脹れてある。それに因果と鼻が低いに依つて。あるやら無いやら知れてこそ。笑ふ。まだ氣の昇る病でもあるかして。頭のぐるりは禿げて。頭頂に霜枯れの薄を見る樣な髮が。しよぎ／＼と。十筋ばかりも生えてあるに。油をころりとつけて。笄わげぢや。笑ふ。物腰といへば。塔の鳩のうめく樣な物腰なり。あれは何やらに能う似ましたが。オヽそれ／＼。繪に描いた夜叉ぢや。夜叉ぢや／＼。笑ふ。蓼喰ふ蟲も好き／＼とは申せども。あの樣なお内儀に能う連添うてはお居やる事ぢや。その癖仲がよいやら大勢の子供ぢや。十二三を頭として七八人。いや／＼十人も御座らう。ありやどうでも毎年お生みやるさうな。それが父親になりとも似ればされどもぢや。見るも／＼お内儀の夜叉殿に似て。頭が禿げて鈍栗目ぢや。笑ふ。何が常々お内儀の育て樣があいだてないに依つて。一人が湯を飲まうといへば。俺も飲まう。是處へも汲んでくせ。姦しさに汲んで飲ますれば。それをまた素直にも飲み居ることか。今のは熱うて舌を燒いた。いや溫うて噎せたのと。樣々の事を吐かし居る。腹の立つ矢先に。まだ三つばかりでもあらう。乳まさりが馴染もないに。私の傍へちよろ／＼と走つて來て。十郎冠者。抱かれう／＼と申しまする。私は五月蠅うてなりませねども。かの夜叉殿がぢつと見てお居やるに

依つて。さながらいやともいはれず。ほ。いたいけなお子ぢや。ちやつと御座れ。というたれば。誠かと思うて。膝の上へ上るといなや。惡いことをせまい事か。先づ耳の穴へ指を捩ぢ込むか。髪をむしる。樣々の惡戯をしまする。私もむつけりと腹が立ちましたに依つて。裏の人遠い所へ連れて行て。太股をふつゝりと抓つたれば。泣くまいことが。突貫く樣な聲をして。あいた〳〵。〳〵〳〵。笑ふ。吠ゆると思召せ。何處でお聞きやつたやら。かの夜叉殿がばた〳〵と走つて來て。やいそこな奴。私は吃驚致しました。祕藏の悴を何故ぼやいたというて。ぢつとお睨みやつた顏を見ましたれば。オヽ恐ろしや。角が生えさうに御座つた。私も申し樣は御座らず。唯今までは御機嫌もよう御座れども。何としてやらおむつかりますと云うたれば。泣かせぬ樣に守をしをれと云うて。お這入りやつた後姿を見ましたれば。沙汰はないこと。ふご衆ぢや。笑ふ。家鴨のありく樣に。えたら〳〵。笑ふ。あれは興がつた御内儀で御座る。さて今度はとつくりと這入らせ濟まして置いて。握拳を以て。かの悴が頭をくわん。トいひかけて。手を上げる。顔見合せる。仕樣口傳。小アドへやいそこな奴。シテへはお出でなされませ。小アドへ何ぢや。身共が女共は夜叉ぢや。シテへそれは何誰のお内儀のことで御座る。小アドへその上祕藏の悴を能う打擲しをつたな。シテへそれは人違ひで御座る。小アドへまだ其のつれを吐かし居る。トいうて。常の如く。追込め入るなり。

鍋八撥(なべやつばち)

シテ　鍋賣
アド　目代
小アド　羯鼓賣
（入道具）

アドへ此の所の目代で御座る。當所御富貴に就いて市數多御座れども。重ねて新市をお立てなさるゝ。何者にはよるまい。早々參つて一の店に附いた者は市司を仰付けられ。剩へ萬雜公事を御赦免なされうとのお事ぢや。先づ此由を高札に打たうと存ずる。トいうて。シテ柱に高札打つなり。小アドへこの邊りに羯鼓を商賣致す者で御座る。當所御富貴について重ねて新市をお立てなされ。何者には依るまい。早々參り一の店についた者は市司を仰付けられ。萬雜公事を御赦免なされうとの御高札で御座る。身共も一の店につき度う存じて。夜を籠めて罷り出た。先づ急いで參らう。シカ〳〵。誠に。目出度い御代には市に市が重なると申すが。此の事で御座る。某も一の店について御座らば。子々孫々まで榮華に暮さうと存ずる。斯樣の末頼もしい事は御座らぬ。何かというちにこれぢや。さても〳〵夥しい事かな。一の店は上さうな。何と誰もなければよいが。心許ない事ぢや。さればこそ。身共が隨分早う參つた奇特には何者も居らぬ。なう〳〵嬉しや。先づ一の店には附いたものぢや。シイ〳〵。そこ許へ。羯鼓の御用ならば此方へ仰せられい。まだ夜深な。さらば少し睡まう。シテへこの邊りにわさ鍋を商賣致す者で御座る。當所御富貴に就いて市數多御座れども。重ねて新市をお立てなされ。何者には依るまい。一の店にさへ附いて御座らば市司を仰付けられ。その上萬雜公事を御赦免なされうとの御高札の由で御座る。まだ夜深には御座れども。一の店に附かうと存じて罷り出た。先づ急いで參らう。シカ〳〵。誠に。今こそ斯樣の卑しい商賣を致せ。一の店にさへ附いて御座らば。行く〳〵は金襴緞子どん金などを商ひ。富貴の身とならうと存ずれば。此樣な悦ばしい事は

御座らぬ。やあ。何かといふうちに市場ぢや。さても〳〵夥しい事かな。あれからずつとあれまでぢや。一の店はもそつと上さうな。上へ參らう。シカ〳〵。いうても〳〵。斯樣の目出度い御代に生れ合ふが仕合せで御座る。これはいかなこと。隨分身共が精出して早う來たと思へば。早や何者やら來て臥つて居る。彼奴は定めて一昨日邊りから來たものであらう。身共も夜を籠めて參つて。彼奴より後に下がるも口惜しい事ぢや。何としよう。いや致し樣がある。トいうて○さし足して行き。鍋を小アドの前に置く。しいしい。その許へ。わさ鍋の御用ならばこなたへ仰せられい。や。まだ夜深な。身共も睡まう。小アドへさても〳〵寢たことかな。やい此處な者。己れは何者ぢや。シテへはあ。私は此の邊りにわさ鍋を商賣致す者で御座る。お前はどなたで御座る。小アドへ身共を知らぬか。シテへいや存じませぬ。小アドへ某は羯鼓を商賣する者ぢや。シテへ牛に食はれた。所の目代殿かと思うてよい肝を潰した。お主が羯鼓を商賣にすれば。身共はわさ鍋を商賣するが。それが構ふことか。小アドへよし何を商賣せうと儘よ。そこを退けといふことぢや。シテへ退き度くば己れ退かうまでよ。小アドへさう言ふは退くまいといふ事か。シテへまた何

の樣に退かう。小アドへ退かずは目に物を見するぞよ。シテへそちが目に物を見するというて。深しい事もあるまいぞいやい。シテへそりや誰が。小アドへ身共が。小アドへ構へて悔むなよ。シテへ何の樣に悔まう。小アドへ己れは惡い奴の。ト云うて○棒にて追ひ廻す。シテへやれ出合へ〳〵。アドへこれは何事を論ずる。小アドへ此の所御富貴について。重ねて新市をお立てなさるゝ。何者には依るまい。早々參り一の店に附いた者は市司を仰付けられ。萬雜公事を御赦免なされうとの御事では御座らぬか。御覽なさるゝ通り。羯鼓を商賣致すに依つて。何とぞ一の店に附かうと存じて。夜を籠めて參りましたれば。何者も居りませぬに依つて。まんまと一の店を領して。餘り夜深に御座つたに依つて。暫く臥せつて居りましたれば。いつの間にやら彼奴が參つて。私の鼻の先きに居りますに依つて。退けと申せば。退くまいと申すに依つて。それを申上つての事で御座る。あの樣な者は屹度仰付けられて下されませ。アドへすれば。其方が早う來たちやもので。小アドへ成る程。私が早う參りました。アドへ先づあの者の口を聞かう。やい〳〵。これは何事を論ずる。シテへお前はどなたで御座る。アドへ所の目代ぢや。シテへ先づ御禮を申しま

する。アドへ禮には及ばぬ。何事を論ずる。シテへ私は此の邊りにわさ鍋を商賣致す者で御座る。當所御富貴について市數多御座れども。重ねて新市をお立てなさるゝ。何者には依るまい。とかく一の店にさへ附いて御座らば市司を仰付けられ。萬雜公事を御赦免なされうとの御高札では御座らぬか。私も一の店に附き度う存じて。隨分夜を籠めて參つて。思ひの儘に一の店を領しまして。まだ夜深に御座つたに依つて。睡うて居りましたれば。いつの間にやらあいつが參つて。後にうするのみならず。先きに居る私に退けと申す。退くまいと申せば。あの棒で此の鍋を破らうと致す。斯樣の正しい御代にあの樣な横着者はずつと市末へ仰付けられませ。アドへすれば汝が早う來たか。シテへ成る程。私が早う參りましたとも。アドへはて同じ樣なことぢや。やい〳〵。あれが早う來たといふぞよ。小アドへよし前後の差別はさし置かれませ。先づ此の目出度い市始に。あの賤しいわさ鍋などが一の店に附かうものでは御座らぬ。また此の羯鼓は器用な物で。稚兒若衆のお翫(もてあそ)びにもなりまするが。あのわさ鍋もその樣な事があるか。お尋ねなされませ。アドへ心得た。今のを聞いたか。シテへ成る程承りました。尤も彼奴(きやつ)が申す通り。羯鼓は器用な物で。稚兒若衆のお翫びにもなりませう。また此の鍋を賤しい物の樣に思召さうに御座れども。先づ此の鍋で供御を調味致して。上々へも獻上申し。下々へも下されての上では。お翫びも入りませう。供御を獻上申さずば。いかな稚兒若衆も頭で繩を追はつしやれ。羯鼓も八撥もしつぼろはも入りますまい。アドへこれも尤もぢや。今のを聞いたか。小アドへとかく彼奴はあの樣な賤しい事ならでは得申すまい。この羯鼓は目出度い物で御座るに依つて。物と申す詩に載つて御座る。アドへ何といふ詩にあるぞ。小アドへ羯鼓音深うして鳥驚かずと申す時は。この羯鼓程目出度い物は御座るまい。アドへこれは聞き事ぢや。やい〳〵。あの羯鼓は目出度い詩があるが。その鍋にも其の樣なことがあるか。シテへあの羯鼓に詩があれば。この鍋には歌が御座る。アドへ何といふ歌がある。シテへ高き屋に。上りて見れば煙立つ民の竈は賑ひにけりと申す時は。此の鍋に上越す目出度い物は御座りますまい。アドへこれも正しい事ぢや。これでは埒が明かぬ。身共が思ふは。此の上は勝負にしたらばよからう。小アドへそれならば。幸ひ棒を持つて居りまする。私は棒を振りませうが。彼奴も振るかお尋ねなされませ。アドへ心得た。やい〳〵。とかくこれでは埒が明かぬに依つて。何なりとも勝負にせいといへば。あれは棒を振るといふが。そちも振るか。シテへおれさへ振りまするならば。私も振らいでなりませうか。先づ彼奴から振れと仰せられませ。アドへさあ〳〵。先づ汝から振れといふは。小アドへ畏まつて御座る。（ト云うてつゝやあと聲掛けると。笛吹き出す。棒を振るなり。）アドへ一段と振つた。さあ〳〵汝も振れ。シテへあの棒を借つてお貸しなされませ。アドへその棒を貸せといふは。小アドへ銘々の物で振れと仰せられい。アドへ銘々の物で振れといふは。シテへ私は棒が御座りませぬ。アドへ振らねば負けぢやぞよ。シテへどうぞ此の鍋を振つて見ませう。（ト云うて振る。拍子諸事前に同じ事。振り樣心持有るべし。）アドへ振りにくい物を一段と振つた。シテへやう〳〵と振りました。アドへこれでも埒が明かぬ。何ぞもう一勝負せい。小アドへそれならば。今度は羯鼓を打ちませう。彼奴も打つかお尋ねなされませ。アドへ心得た。これで埒が明かぬに依つて。もう一勝負といへば。あれは羯鼓を打たうと

いふが。そちも打つか。シテへあれが打たまするならば。私も打たいてなりませうか。これもあれから打てと仰せられい。アドへこれも汝から打てといふげ。小アドへ畏まつて御座る。ト云うてかゝる。やあと聲をかけると。羯鼓笛吹き出す。拍子踏んで出て。また踏んで戻り。三つ飛んで。三つ戻り。拍子トコと二つあり。一遍廻つて打込み。撥分けて。走りこきして。順逆に廻り。左右へぐわつして。羯鼓打ち。順に小廻りして。左右して。留めるなり。アドへ一段と打つた。さあ〳〵汝も打て。シテへあの羯鼓を貸せというて下され。アドへ羯鼓を貸せといふは。小アドへ最前から何の詮議で御座る。羯鼓と鍋との詮議では御座らぬか。銘々の物で打てと仰せられい。アドへとかく銘々の物で打てといふは。シテへそもやそも。此の鍋は打たれは致しますまい。アドへこれも打たねば負けぢやぞよ。シテへ是非に及ばませぬ。どうぞ打つて見ませう。ト云うて。鍋をつける。小アドへまうし〳〵。最前から何を貸せ彼を貸せと申せども。貸しませぬ。心無い者と存じませう。撥があるまい。これを貸すと仰せられて下され。アドへ心得た。揃へがよくば是へ出よ。あれがいふは。最前から何を貸せ彼を貸せといへども貸さぬ。定めて心ない者と思ふであらう。撥があるまい。撥を貸すといふは。シテへこれはいかなこと。扨は彼奴が心が直つたさうな。

これは一禮を申しませう。アドへ一段とよからう。シテへ唯今はお撥過分におりやる。小アドへ禮までもおりない。アドへ急いで打て。シテへ畏まつて御座る。ト云うて打つ。諸事羯鼓の通り違はず。小アドを左へぐわつして撥捨てる。小アドへさうもおりやるまい。シテへ扨も〳〵恐ろしや。彼奴が心が直つて貸したかと存ずれば。あのあらけない撥で。此の鍋を既に打ち割らうと致した。存ずる仔細が御座る。此の上は相打ちにせうと仰せられて下され。アドへ心得た。重ねては相打ちにせうといふ。これへ出よ。小アドへ畏まつて御座る。アドへさて兩人のうちそつとなりとも違うた方を曲事に云附ける。さう心得。二人へ畏まつて御座る。ト云うて。小アドよりかゝる。笛吹き出す。舞ひ樣初の通り。但しシテいろ〳〵仕樣あり。眞似をする心持。煎物の切に同じ事。仕樣仕舞。拍子あつて。小廻りして。打込み。順逆に廻り。左右へぐわつして。ぐわつして。さて小アド羯鼓を打ち。はしりこきして入違ふ。ぐわつして。羯鼓打つ。また走りこきして入違ふ。小アド水車がへりをして入るなり。シテいろ〳〵ありて危なさうに二遍かへり。三度目に鍋を割る。但し割れたらば。數が多くなつた。目出度いと留むるなり。割れずば。心の堅い鍋ぢやと留むるなり。

腥物（なまぐさもの）

シテ　太郎冠者
アド　主人
小アド　すつぱ

（入道具）

アドへこの邊りの者で御座る。昨日はこゝもとの神事で御座つた。それにつき太郎冠者を呼出し。申付ける事が有る。呼出す。常の如し。昨日はこゝもとの神事ではなかつたか。シテへ御意なさるゝ通り。昨日はこゝもとの神事で御座りました。アドへそれについて伯父者人の方から太刀を借つた。又明日はあの方の神事ぢやに依つて返さねばならぬ。大儀ながら持つて行て呉れい。シテへ畏まつて御座る。アドへ暫くそれに待て。シテへハア。アドへこりや〳〵。あの道はつゝと不用心なに依つて此の樣に藁苞にして置いた。若しいたづら者が出て。それは何ぢやと云うて問はゞ。腥物ぢやといへ。シテへ畏まつて御座る。アドへ必らず〳〵。金作りの太刀ぢやなどといふな。シテへ心得ました。アドへ急いで行て頓て戻れ。常の如くつめる。シテへこれは火急な事を仰付けられた。先づ急いで參らう。シカ〳〵。誠に。こちの賴うだ人は分別者で御座る。之を誰が見たりとも。金作りの太刀ぢやとは思ふまい。定めて腥物ぢやと思ふて御座らう。小アドへ急ぎの使に參る者で御座る。先づ急いで參らう。誠に。主命といふものは。夜ともなく晝ともな

く歩く事で御座る。（ト云うて。行當り。がつきめト云うて。太刀を抜いて。急いで苞をかくす。）シテへあゝ宥して下され／＼。小アドへ憎い奴の。この廣い街道を。殊に暮に及んで人に行當る。己れはいたづら者であらう。シテへイヤいたづら者では御座らぬ。命を助けて下され。小アドへまだ吐かしをる。その後(うしろ)に隠したは何ぢや。シテへ何も隠しはしませぬ。小アドへいや／＼。何やら隠した。シテへ扨々目の早い人ぢや。これか。小アドへそれは何ぢや。シテへこれは金作りの太刀ではない。腥物ぢや。小アドへ何にもせよ。それをこちへおこせ。シテへヤアラそなたは某を最前いたづら者ぢやとは言はぬか。人の物をたゞおこせと言ふそなたがいたづら者ぢや。小アドへ推參な奴ぢや。おこさずは一討ちにせうぞ。シテへア、やるわいやい／＼。そりや。（ト苞を出す。ト云うて切拂ふ。）どりや　小アドへまた戻りにも此所を通るが。訴へてゐたらば一討ちにするぞ。シテへ如何な／＼。訴へて居る事ではない。小アドへまだ其處に居るか。シテへ宥して下され。（追廻し。シテ後見座へ隠れるなり。）小アドへ一段の仕合せぢや。先づ急いで參らう。（ト云うて。樂屋へ入る。）シテへなう／＼恐ろしや。先づ急いで歸らう。誠に。あの太刀を遣(や)つたればこそ命を助かれ。あの太刀を遣らずば。今時分は眞二つになつてゐるであらう。やあ／＼。賴うだ御方御座りまするか。アドへイヤ太郎冠者が戻つたさうな。（常の如し）エイ太郎冠者。シテへハア。アドへやれ／＼、早かつた。シテへ早い筈で御座る。アドへそれはどうした事ぢや。シテへ恐ろしい目に逢ひました。アドへ先づ何とした。シテへこの町續を出離れまして。松原へかゝりまするといたづら者が出まして。それをこちへおこせ。と申しましたに依つて。遣りました。アドへこれは如何な事。それぢやに依つて腥物ぢやといへと云付けてやるに。定めて金作りの太刀ぢやと云うたものであらう。シテへイヤ左樣には申しませねど。何にもせよおこせと申したに依つて遣りました。アドへさて／＼虛(うつ)けた奴ぢや。それならばなぜその時此方の太刀を抜いて斬らなんだ。シテへもどかしさうに仰せらるゝ。あの太刀を遣つたればこそ。私が無事で戻りましたれ。あの太刀を遣らずば。今時分は眞二つになつて居りませう。畢竟太刀一振で太郎冠者一人をお拾ひなされたといふもので御座る。アドへまだそのつれを吐かし居る。さて／＼苦々しい事かな。あれは伯父者人の重代ぢや。汝が命にも換ゆる物ではない。これは先づ何としたものであらう。シテへイヤまうし。いたづら者が申すは。また戻りにも此所を通る。訴へて居たらば一討にすると申した。お前と私と參つて彼の者を捕へませうか。アドへせめて左樣なりともせずばなるまい。さて彼の者の面を見識つて居るか。シテへ成る程よう存じて居りまする。それは、憎々しい面で御座つた。アドへそれならば。さあ／＼。來い／＼。シテへハア。アドへさて云うても／＼汝が金作りの太刀ぢやというたものであらう。シテへ如何な／＼。左樣には申しませねども。何にもせよおこせと申したに依つて遣りました。アドへ何と此の邊りであつたか。シテへ成る程。爰で御座りました。アドへそれならば左右へ目を配つて油斷するな。シテへ畏まつて御座る。（ト云うて。兩人下に居る。）小アドへなう／＼嬉しや。今よう見れば金作りの太刀ぢや。さて／＼仕合せを致した。先づ急いで歸らう。これは結構な拵へぢや。シテへまうし彼奴で御座る。あれへ參りました。アドへ早う捕へい。シテへ私は恐ろしう御座る。お前捕へさつしやれ。アドへさて／＼埒の明かぬ奴ぢや。とつたぞ。小アドへこれは何とする。アドへ何といふ事がある

ものか。シテ〽捕へさつしやつたか。アド〽捕へた〳〵。シテ〽屹度捕へて御座れ。アド〽太郎冠者。太刀を取れ〳〵。シテ〽それをこちへおこせ。アド〽ひたくれ〳〵。シテ〽それをこちへおこし居れ。小アド〽爰を離さつしやれ。アド〽離してよいものか。己れよう身共の太刀を取つたな。シテ〽やい。最前身共をよう斬らうとし居つたな。己れそれがよいかこれがよいか。アド〽何をしをる。シテ〽鼻竹箆を當てまする。アド〽其の様な事をせずとも。繩を持つて來い。シテ〽繩か。心得ました。小アド〽身共は知らぬ。それは人違ぢや。そこ離して呉れ。アド〽何の離さうぞ。シテ〽己れ待ち居れ。今の間に思ひ知らせう。さても〳〵脛のまめな奴ぢや。ちつと捕へて居さつしやれ。アド〽何をして居る。早う綯へ。シテ〽綯ひました。サア爰へ足を入れ居れ。さて〳〵脛のまめな奴ぢや。アド〽其の様な事をせずと。後から懸け〳〵。シテ〽後からか。心得ました。サア懸けました。アド〽よいか。シテ〽よう御座る。アド〽離すぞよ。シテ〽離さつしやれ。アド〽それぢや離した。シテ〽己れは憎い奴の。アド〽身共ぢやわいやい。シテ〽頼うだ人か。アド〽いたづら者はどれへ行く。シテ〽あれへ參りまする。小アド〽なう〳〵嬉しや〳〵。シテ〽ちやと捕へさつしやれ。アド〽あの横着者どちへ行く。ト云うて。追込み入るなり。

成上り（なりあがり）

シテ　太郎冠者
アド　主人
小アド　すつぱ
（入道具）

アド〽此邊りの者で御座る。今日は初寅で御座る。鞍馬へ參らうと存ずる。先づ太郎冠者を呼出し申付ける事がある。呼出す。如常。何と今日は初寅ではないか。シテ〽誠に今日は初寅で御座る。アド〽いつもの通り鞍馬へ參らう。先づ其太刀を持て。シテ〽畏まつて御座る。お太刀持ちました。アド〽追付け行かう。さあ〳〵來い〳〵。シテ〽ハア。アド〽何と思ふぞ。例年相續らず參詣するは。目出度い事ではないか。シテ〽御意なさるゝ通り。お供の我等ごとき迄も。足手息災で詣でまするは。偏に多聞天のお蔭で御座る。アド〽それよ〳〵。何かと云ふ内に鞍馬へ參り着いた。

シテ〽誠にお參り着きなされて御座る。アド〽先づお前へ向はう。シテ〽一段とよう御座りませう。鰐口を打つ。アド〽扨今夜は此處に籠る。汝もそれてまどろめ。シテ〽畏まつて御座る。ト云うてねる。小アド〽洛中に心の直にない者であらう。罷り出て仕合せを致さうと存ずる。シカ〳〵。誠に。此間は打續いて不仕合せに御座る。今日は何とぞ一かどの仕合せを致したいものぢや。何かと云ふ内にお前ぢや。夥しい參詣ぢや。ト云うて。見付け。さし足して。あれに何者やら正體もなう臥せて居る。太刀を持つて居る程に。此方へ調戯致さうと存ずる。ト云うて。太鼓座より青竹持出す。仕方口傳。一段の仕合せぢや。今宵は此邊に居て仕合せを致さうと存ずる。アド〽よう寝た事かな。是は東が白うだ。ヤイ太郎冠者〳〵。東が白うだ。目をさませ。シテ〽ハア〳〵。アド拜む。シテ眠たがる。アド〽さあ〳〵下向せう。來い〳〵。何と毎年とは云ひながら。大籠りではなかつたか。シテ〽イヤ私は草臥れまして。たつた一寝入に致して。何がどう御座つたも覺えませぬ。アド〽是はまだとくと夜が明けぬ。腰の廻りに要心をせい。シテ〽畏まつて御座る。ト云うて。太刀を見付け。驚き後へ隱す心の仕様あるべし。シテ〽こ

れはまだ夜の明けるには間が御座る。路次すがら面白いお咄を致しませう。アド〽何なりとも咄して聞かせい。シテ〽世間に成上りと申す事が御座る。御存じで御座るか。アド〽それは位の低い者が、官に進む目出度い事か。シテ〽先づ其様な事で御座る。別して山の芋が鰻になる。さて蛙が田螺になる。燕が飛魚になると申す。アド〽扨々こびた物になるなあ。シテ〽まだ嫁が姑になると申す。アド〽それは次第至りと云うて。別に珍らしからぬ事ぢや。シテ〽ても一生嫁であらうより。姑になれば成上りでは御座らぬか。アド〽何れそれもさうぢや。シテ〽熊野の別當のくちなはは太刀と申す事が御座る。御存じで御座るか。アド〽イヤ知らぬ。シテ〽ある時別當殿。御狩のため山中に入らせられた。何かとして太刀を取忘れさせられたに。餘の者の目にはくちなはと見えましたが。御内の衆が取りに參つたれば。もとの太刀であつたと申しまする。アド〽扨々奇特な事ぢやなあ。シテ〽それについて。頼うだ御方のお太刀もどうやら成上りさうに御座る。アド〽いや／＼。身共が太刀は重代の業よしぢやに依つて。成上らうより。矢張り元の太刀がよい。シテ〽でもはや成上りまして。物になりました。アド〽何になつた。シテ〽此様な青竹になりました。アド〽これはいかな事。何時の間にそのやうになつた。シテ〽正體もなう臥せつて居まする内に。此様になつたさうに御座る。アド〽扨も／＼うつけたやつかな。それは疑ひもないいたづら者が來て。掏り替へて失せをつたものであらう。何としたものであらう。いや／＼。まだ夜もほの／＼と明けて。しかとは人顔も見えぬ。いたづら者ならば。此太刀ばかりではあるまい。外の參詣も目がけて。此邊を徘徊するであらう。先づこの木蔭に隠れて居て。若し似た太刀をなりとも持つて行く者があらば。捕へて吟味せう。そちも油斷をせぬ様にせい。シテ〽畏まつて御座る。小アド〽扨も／＼。夜が明けて見れば。見事な太刀ぢや。これは黄金作りぢや。此様な仕合せは御座らぬ。此様な時はもそつと仕合せを致したいものぢやが。シテ〽あれへ太刀を持つて參りまする。アド〽それ捕へ。シテ〽私は恐ろしう御座る。お前お出でなされませ。アド〽さて／＼埒の明かぬやつぢや。とつたぞ。小アド〽是は何とさつしやる。アド〽何とはおのれ。身共が太刀をよう掏替へをつたな。

シテ〽捕へさつしやれたか。アド〽捕へた／＼。シテ〽屹度捕へて居さつしやれ。アド〽心得た。シテ〽やい　己れは憎いやつの。よう太刀を取りをつたな。アド〽太刀を取れ／＼。シテ〽その太刀をこちへおこせ。アド〽ひつたくれ／＼。シテ〽心得ました。シテ〽こちへおこしをれ。ぢつと捕へて居さつしやれ。おのれ。それがよいかこれがよいか。アド〽何をし居る。シテ〽鼻しつぺいをあてまする。アド〽其様な事をせずと。繩を持つて來い。シテ〽繩か。心得ました。小アド〽身共は知らぬ。それは人違ひぢや。そこを放してくれ。アド〽何の放さうぞ。シテ〽おのれ待ちをれ。今の間に思ひ知らせう。扨も／＼すねのまめなやつぢや。ぢつと捕へて居さつしやれ。アド〽何をして居る。早う綯へ。シテ〽綯ひました。サアこゝへ足を入れをれ。扨々すねのまめなやつぢや。アド〽其様な事をせずと。後から懸け／＼。シテ〽後からか。心得ました。さあ掛けました。アド〽よいか。シテ〽よう御座る。アド〽放すぞよ。シテ〽放さつしやれ。アド〽そりや放した。シテ〽おのれは憎いやつの。アド〽身共ぢやわいやい。シテ〽頼うだ人か。アド〽いたづら者はどれへ行く。シテ

〽あれへ參りまする。小アド〽なう〳〵うれしや〳〵。シテ〽ちやつと捕へさつしやれ。アド〽あの橫着者。どちへゆく。ト云うて。追込み入るなり。

業平餠（なりひらもち）

シテ　業平
アド　餠屋
太刀持
傘持
立衆
女　餠屋の娘
（入道具）

アド〽これは此の餠屋の亭主で御座る。今日も行通りの人に餠を商はうと存ずる。シテ〽朝臣在原の業平とは我が事なり。われ和歌の道に交はるといへども。未だ住吉玉津島の明神に參らず候。此度思立ち住吉玉津島の明神に參らうと存ずる。やい〳〵誰そ居るかやい。太刀持〽はあ。シテ〽なるか。太刀持〽はあ。常の如し。シテ〽われ和歌の道に交はるといへども。住吉玉津島の明神に參らぬ。此度參詣する程に供の用意をせい。太刀持〽畏まつて御座る。なう〳〵何れも。賴うだ御方が玉津島の明神へ御參詣なさるゝ。御供の用意はよいか。立衆〽御供の用意よう御座る。シテ〽それならば追附け行かう。さあ〳〵。來い〳〵。太刀持〽はあ。立衆〽心得ました。太刀持〽さあ〳〵。何れもおりやれ。シテ〽さて何と思ふ。かう往く道すがら浦々の名所舊蹟を眺め。よい慰みぢやな。太刀持〽さ樣で御座る。シテ〽汝等身が內に久しう居る者ぢや。腰折の一首も浮かまぬかいやい。太刀持〽私はえゝ浮かみませぬ。シテ〽汝等は何とぢや。立衆〽私共もえゝ浮かみませぬ。シテ〽何えゝ浮かまぬ。傘持〽笑ふ。私が一首浮かみました。シテ〽やれ〳〵やさしや。して何と浮かうだ。傘持〽かうも御座りませうか。シテ〽何と。傘持〽ほの〴〵と。シテ吟ず。傘持〽明石の浦の朝霧に。島隱れゆく舟をしぞ思ふ。シテ〽やい〳〵。やいそこなやつ。傘持〽はあ。シテ〽おのれそれは石打つ童までも知つて居る柿本の人丸ぢやわいやい。傘持〽はあ。古歌で御座りまするか。シテ〽おんでもない事。傘持〽はて古歌ぢやよな。皆々〽古歌ぢやよな。笑ふ。シテ〽いやこれに休息所と見えて庵がしつらうてある。これにて休息する程にさう心得。汝等も勝手次第に休息せい。太刀持〽畏まつて御座る。さあ〳〵何れもおりやれ。立衆〽心得ました。ト云うて床几に腰をかけさせて。立衆皆々入る。傘持一人殘る。アド〽上つ方と見えて某が店へ御腰をかけさせられた。さらば餠を商はうと存ずる。ト云うて三寶を持出る。申上げまする。此の家の亭主で御座る。旅と申すものは。高いも低いも御不自由なもので御座る。此の餠は此の所の名物で。奇麗に御座る程に。召上られて下され。シテ〽何と云ふぞ。其の餠は誰が所望してもくるゝか。アド〽おあしさへお出しなされましたれば。どなたでも上げまする。シテ〽それは心安い事ぢや。そりや出したは。アド〽其の事では御座りませぬ。料足の事で御座る。シテ〽一本出すも二本出すも同じ事ぢや。そりや出したは。アド〽上つ方で御座るに依つて御存じないは御尤もで御座る。此の餠の代りを下されいと申す事で御座る。シテ〽さては鳥目の事か。アド〽さ樣で御座る。シテ〽其の樣なさもしい物は持たぬ。その代りに歌をようでとらせうか。アド〽餠の代りに歌とは。どうした事で御座る。シテ〽爰に餠の目出度い物語がある。物語つて聞かせう程に。よう聽け。アド〽畏まつて御座る。シテ〽一とせ天下干魃して。雨

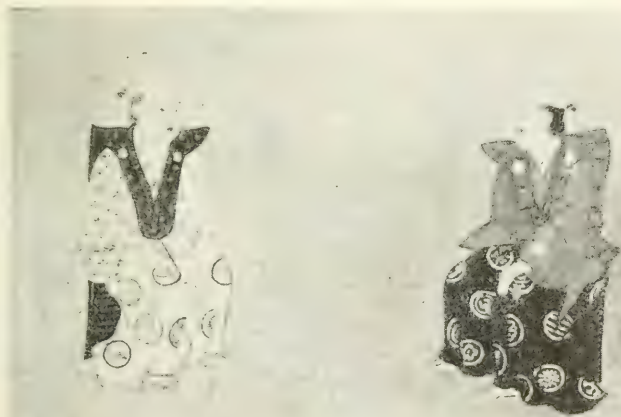
一滴も降らず。民百姓農業の種を失ひ。五穀の費えを悲しみ。後には飢え死なん事を歎く。帝この由聞召され。貴僧高僧に仰せて。御祈禱あれども其の驗なし。爰に小野の夏實が娘に小野の小町と申して。隱れなき歌人のありしを召し。雨乞の歌を仰附けらるゝ。小町は勅諚を蒙り。神泉苑の池の邊りに於て。ことわりや。日のもとなれば照りもせめ。さりとてはまた天が下かはと。か様に詠ずる和歌の徳。龍神も感應の餘り。俄に雨車軸を流し。田畑沾ひ。五穀成就し。民安全目出度ければ。小町へ餅を褒美に下さるゝ。されば餅をかちんと云ふも此の謂れなり。何ぼう餅は感徳の備はりたるものにてあるぞとよ。アドへ代々餅を商賣に致せども。さ様の御物語を初めて承りまして御座る。さりながら。とかく代りがなければ。餅を上げます事はなりませぬ。シテへさてはどうあつても代りがなければ餅をくるゝ事はならぬか。アドへさ様で御座る。シテへむゝ道理〳〵。店なる餅のうまげさよ〳〵。價をもちもせぬ故に。人の指ざしそらべ餅。恥をかきもちかなしみの。涙は雨や醒ヶ井餅。漢のしろ餅寒の餅。ふるは雪餅氷餅。彌勒の出世にあは餅のくりこの餅とくりごとを。云うてはよもやよもや餅。尾餅ついて裝束の身も業平もいらばこそ。おらひもじと溜息を。つく〳〵ながめおはします。ドアへこれは如何な事。代りのないがちやうさうな。申し〳〵。お前はどなたで御座る。シテへ身共を知らぬか。アドへいゝや存じませぬ。シテへ身共は朝臣在原の業平にてあるぞとよ。アドへ扨は承及びました業平様で御座るか。隱れもない色好様と承つて御座る。私娘を一人持ちまして御座る。何卒上つ方へ奉公に遣したう御座れども。其の緣も御座らぬ。何卒御連れなされて。宮仕へを御させなされて下されうならば。有難う存じまする。シテへ何ぢや。娘を持つたといふか。アドへさ様で御座る。シテへやれ〳〵耳寄りの事ぢや。女の事なれば此の業平が。埒を明けぬといふ事はない。其の娘はどれに居るぞ。アドへ追附け連れて參りませう。シテへ早う連れて來い。此の隙に餅を食はう。ト云うて。餅を食ふ。アドの聲聞いて。急いで食うて。喉につめる。仕様あり。アドへなう〳〵。さる上つ方の御出でなされて。そなたの事を申上げたれば。連れて御歸りなされ。宮仕へなさせてやらうとの事ぢや。嬉しいと思はしめ。これはあぶない事かな。ト云うて。背中をたゝき。世話する。シテへなう〳〵。恥かしや〳〵。あまりうまさうにあつたに依つて。案内なしに一つ二つ食うた。眞平ゆるしてくれい。アドへ其の儀は少しも苦しう御座らぬ。とかく娘が事を賴上げまする。シテへして其の娘はどれに居る。アドへそれに居りまする。シテへあれやうは此の業平も獨り身ぢや。容儀もよささうな。あれな身共にくれぬか。アドへ先づ娘を御覽なされて。其の上の事になされて下され。シテへいやもそれは見るに及ばぬ。とかく呉れさしめ。アドへそれは有難う存じまする。此の上は御不憫を加へられて下されい。シテへ其の段は氣遣ひするな。アドへさ様ならば御門出を祝ひませう。シテへこりや〳〵。何も馳走がましい事は無用ぢや。餅屋入る。シテへこれはなか〳〵姿も優しい體に見ゆる。これ〳〵。そなたはとゝに貰うて置いたが。嬉しいか。女うなづく。笑ふ。それならば對面をせう。其の衣をとらしめ。いやと云ふ。此の類同じ事。やい〳〵。誰もないか。太刀持。沓持〳〵。隨身。傘持。どれへいた。一人も居ぬ。こりや〳〵〳〵。ちよつと來い〳〵。傘持あくびして。目をこすり〳〵。傘持へはあ。シテを見て。びつくりして。傘取りに入る。シテへあゝこりや〳〵。苦しうない。何と目は覺めたか。傘持へ大方覺めました。シテへそ

ちは律義に勤むるに依つて。似合はしい妻を肝煎つてとらせう。傘持〽それは有難う存じまする。未だ定まる妻も御座らぬ。兼々の望て御座る。どうぞ願ひまする。シテ〽それならば。あれへいて見て來い。傘持〽お前のお世話ならば見るには及びませぬ。シテ〽いや〳〵。念の爲ぢや。一寸見て來い。傘持〽さ様ならば一寸見て參りませう。傘持見て。そつとのき。傘持〽私ははつたと失念致した事が御座る。内々うす約束を致した方が御座る。あれは御斷りを申しまする。シテ〽最前そちは。未だ定まる妻がないと云うたではないか。傘持〽それを忘れまして御座る。早速印まで遣して御座る。シテ〽其の方は斷りを云うてあれにせい。女〽まうし〳〵業平様。私はこなたがいとしう御座る。此の類何れも同じ事。

鳴子（なるこ）

シテ　太郎冠者
アド　主人
小アド　次郎冠者
（入道具）

アド〽この邊りの者で御座る。當年は十分の世の中で諸國共に悦ぶ事で御座る。毎も稻に實の入る時分は村鳥があらす。兩人の者を呼出し。山田へ村鳥をおひに遣さうと存ずる。ト云うて。呼出す。但しわけて呼出すもあり。常の如し。汝等を呼出すは別の事でない。何と當年は諸國とも豐年ぢやと云うて悦ぶ事ではないか。シテ〽御意なさるゝ通り。當年は世並がよう御座る。別して頼うだお方の田は。あぜを限つて穗に穗が咲いて。此の様な目出度い事は。なお次郎冠者。小アド〽おゝ〳〵。二人〽御座りませぬ。アド〽それに就いて。毎も稻に實の入る時分は村鳥が渡る。餘所の田にも村鳥を追ふ音がする。汝等けふは山田へ村鳥を追ひに往てくれい。シテ〽畏まつては御座れども。鳥を追ふ程の事は女童でも濟む事で御座る。私共は肩に棒を置きまするか。俵物を脊負ふか。私共でなければならぬ事を仰附けられませ。なお次郎冠者。小アド〽何れ田ばかり作らせらるゝでは御座らず。畑も大分持たせられて御座るに依つて。私共は畑へ參つて地をおこしませう。アド〽尤もなれども。山田へは猪猿などが出るに依つて。なか〳〵女童は置かれぬ。とかく汝等いてくれい。シテ〽左様ならば兩人の内壹人參りませう。アド〽いや〳〵。壹人では咄の相手もなうて淋しからう。兎角兩人共ゆけ。シテ〽それならば畏まつて御座る。アド〽それに待て。ト云うて。鳴子を持つて出る。こりや〳〵。此の鳴子をやらう程に。左右の稻木へ結附けて。油斷せぬ様に鳥を追うてくれい。シテ〽其の段はそつともお氣遣ひなされまするな。アド〽さてあたりに稻を苅つて入れて置かうと思うて。庵を拵へて置いた。折々はそれへはいつて休息をせい。二人〽畏まつて御座る。アド〽急いで行け。つめる。しらけ。常の如し。シテ〽やい〳〵次郎冠者。何と變つた事を云付けられた。小アド〽何れ身共等には似合はぬ用を云附けられた。シテ〽追付け往かう。さあ〳〵來い〳〵。小アド〽心得た。シカ〳〵。シテ〽頼うだお方は仕合せな人ぢや。近年不作と云ふ事がない。殊に當年は十分に出來たに依つて。夥しう米持にならるゝ。小アド〽これと云ふも日頃こち衆が精を出す故ぢや。シテ〽何かと云ふうちに山田ぢや。小アド〽誠に山田ぢや。シテ〽扨も〳〵。稻によう實が入つたではないか。小アド〽皆傾いた。最早苅つてよからう。シテ〽頼うだ人がきのふ暦を出して見て。四五日の内に田苅るよしといふ日が有るとおしやつた。油斷は有るまいぞ。小アド〽さうであらう。シテ〽

やい〳〵次郎冠者。たくましい庵を立てられたではないか。小アド〽何れ夥しい庵を立てられた。田を苅つて此の庵へ入れて置いたらば。稲木に掛けて置くと違うてよう干るであらう。小アド〽何れ雨露を凌いでよう干るであらう。シテ〽先づ急いで鳴子を附けう。小アド〽一段とよからう。シテ〽身共はこれへ附けう。そなたはあの稲木へ附けさしませ。小アド〽心得た。（ト云うて。ワキ柱と見付柱とへつける。）シテ〽いか樣この樣によう出來た田を。村鳥に荒さるゝは勿體ない事ぢや。小アド〽あれ〳〵。餘所の田にも鳥を追ふやら。鳴子の音がする。シテ〽いや〳〵。人を得使はぬ者は手がまはらぬぞいやい。小アド〽なる程。それ故に鳥を追うて居る田は少々ならでは見えぬ。シテ〽ありや〳〵。鳥が渡るは。小アド〽追へ〳〵。（ほう〳〵と云うて。鳴子を引き笑ふ。）シテ〽いか樣愚かなものぢや。兩人の聲と鳴子の音におぢて。皆餘所の田へおりた。小アド〽皆森より下へおりたさうな。シテ〽朝から晩まで鳥が渡りつゞけはせまい。先づ庵へ這入つて休まう。小アド〽それもよからう。シテ〽庵の柱に鳴子の繩を留めて置かしめ。小アド〽心得た。（アド橋掛へ立つ。）アド〽兩人の者を。山田へ村鳥を追ひに遣して御座る。退屈するで御座らう。樽を持參して。酒を呑ませうと存ずる。小アド〽あのしげみ

から眞黑になつて村鳥が來るは。シテ〽あれはこちへは來はせまいか。小アド〽あれは森を越すさうな。シテ〽ありや〳〵。後へ戻るは。小アド〽追へ〳〵。（二人ほう〳〵と云うて追ふなり。）アド〽鳥を追ふやら鳴子の音が聞ゆる。やい〳〵。太郎冠者次郎冠者。シテ〽エイ賴うだお方。これは何としてお出でなされました。アド〽退屈せうと思うて。樽を持つて見舞に來た。シテ〽それは有難う存じまする。アド〽何と鳥が渡るか。シテ〽夥しう渡りまして。少しも油斷はなりませぬ。アド〽近頃大儀ぢや。身共は歸る程に。此の酒を折々のうで。渡り鳥の渡りしまふまで追うて。暮に及うでから戻れ。二人〽畏まつて御座る。アド〽最早行くぞ。シテ〽御苦勞に存じまする。（アド樂屋へ入るなり。）シテ〽やい〳〵次郎冠者。何と結構なお方ではないか。小アド〽何から何までお氣の附かせらるゝお方ぢや。シテ〽夜も晝も寢ずに鳥を追へと仰せられても。主命なれば是非がないに。あのお慈悲深いお主を惡う思うたらば罰が當たらう。小アド〽必らず冥加に

盡きるであらう。シテ〽さて飲みたいではなけれども。賴うだ人の志ぢや。壹つ飲まうか。小アド〽一段とよからう。シテ〽さて盃をお出しあれ。小アド〽心得た。さあ〳〵。盃を取つて來た。シテ〽そなたからといひたけれども。身共から始めう。小アド〽一段とよからう。シテ〽注いでくれさしめ。小アド〽心得た。シテ〽扨も〳〵よい酒ぢや。そなたへ差さう。小アド〽戴かう。シテ〽身共が注いでやらう。小アド〽これは慮外でおりやる。シテ〽何とよい酒であらうが。小アド〽これは念を入れられたやら。よい酒ぢや。シテ〽其の通りぢや。小アド〽そなたへ戻さう。シテ〽どれ〳〵。これへくれさしめ。小アド〽ちと謡はうの。シテ〽一段とよからう。ト云うて。小謡あるべし。爰にて二人共小舞する事もあり。云合はせ次第にすべし。シテ〽またそなたへ差さう。小アド〽戴かうとも。また小謡あり。小アド〽飲めば飲む程よい酒ぢや。またそなたへ差さう。シテ〽戴かう。小アド〽そりや〳〵。鳥が渡るは。シテ〽誠に。此の田へおりる。二人〽追へ〳〵。ト云うて。追ふなり。シテ〽扨々油斷をした。小アド〽其の通りぢや。シテ〽此の鳴子繩を兩人の腰に附けて置くまいか。小アド〽それがよからう。ト云うて。腰に附ける。仕方ばかりなり。シテ〽さあ〳〵附けてたもれ。小アド〽心得た。シテ〽これは面白うなつた。何と兩人連舞にせうか。小アド〽一段とよからう。シテ〽引く〳〵〳〵とて。二人〽鳴子はひかで。あの人の殿引く。神の前には見しめ繩引く。佛の前には。善の綱引く。橋の下をば登り船引く。あやうき所を。おりて駒引く我等は是處にて鳴子引く。二人笑ふ。シテ〽扨々面白い事ぢや。小アド〽其の通りぢや。シテ〽またそなたへ差さうぞ。小アド〽どれ戴かう。小謡あり。シテ〽また和御寮へ戻さう。身共は餘程過ぎた。小アド〽何の過ぎるものぢや。獻のわるい。是非とももう壹つお飲みあれ。シテ〽それならば輕う注いでおくりやれ。小アド〽丁度飲め〳〵。シテ〽おゝある〳〵。扨も飲んだり。夥しう飲うだ。小アド〽身共もよい機嫌になつた。シテ〽なか〳〵是では。鳥が渡るやら渡らぬやら知れぬ。小アド〽其の通りぢや。シテ〽身共が思ふは。鳥を追ふ鳴子を引いて。小拍子にかかつて謡はうと思ふが。何とであらう。小アド〽これはなほ面白からう。シテ〽それならば盃もお取りあれ。小アド〽心得た。シテ〽さあ〳〵。謡へ〳〵。小アド〽心得た〳〵。シテ〽うへの山から。二人〽鳥が來るやらう。上花が散り候。いざさらば鳴子をかけて。ホウ〳〵。花の鳥追ふ。みめがよいとて人はひけど。神のみしめか琴か琵琶か茶臼か。船か車か子の日か鳴子か。明け方の雲かさてまた。小歌大物が浦のおみ候か。しや主の候もの。山田作れば庵寢する。ぬるれば夢を見る。さむれば鹿の音を聞く。小歌寢にくの枕や。寢にくの庵の枕や。麥つく里の名にも。おはで浮名の名船川。唐音の杵の音も何れとも思はぬ。みちの國の竹熊の。松の葉や。衣の關や壺の石ぶみ。外の濱風更行く月に嘯く浦船は魚取る。網を引くは鳥取る。鷹野に犬引く。何よりも〳〵。契の名殘は有明の。別れ催す東雲の。山しらむ横雲は引くぞ恨みなりける。いざ引く物を謡はんや。いざ引く物をうたはん。春の御田には苗代水引く。秋の御田には鳴子引く。名所は都に聞えたる安達が原の。しらま弓も今この御田に止どめた。淺香の沼には勝見草しのぶの里には文字摺石。思ふ人に。引かで見せばや姉葉の松の一枚。鹽釜の浦に。雲晴れて。誰も月を松島や。平和泉は面白や。いとゞ暮行く秋の夜の。月出づるまで隙なきを。いざ差置きて休まん。〳〵。二人とも鳴子繩を解きもて。入つて寢るなり。アド〽最早日が暮れて餘程間があるに。兩人とも

踊らぬ。心許ない。山田へ參つて連れて踊らうと存ずる。合點の行かぬ事ぢや。今まで鳥が渡らう樣もないが。若し狐狸に化かされはせぬか。何をして居る事ぢや。これはいかな事。月夜影に見れば。兩人とも田の中に正體もなう寢て居る。太郎冠者。次郎冠者。エヽ熟柿臭やの〳〵。酒に醉うて日の暮れたも知らぬ。やい〳〵。やいそこなやつ。小アド〽やい太郎冠者。鳥が渡るは。ト云うて。起きて。主を見て。驚き逃ぐる。アド〽何をぬかし居る。シテは樽。小アドは盃にてほう〳〵と云うて追ふ。主を見て驚く。アド〽身共ぢやわいやい。シテ〽エイ賴うだお方で御座るか。御ゆるされませ〳〵。ト云うて。二人とも逃げて入る。主追入るなり。

鳴子(なるこ)遣子(やるこ)

シテ　茶屋
アド　參詣人
小アド　同
（入道具）

アド〽此邊りの者で御座る。今日は寅の日で御座る。鞍馬へ參らうと存ずる。又此處に心易う致す人が御座る。何時も同道致す。誘うて參らうと存ずる。シカ〳〵。誠に。寅の日で御座る程に。心待ちをして居られうと存ずる。一人では淋しい。何卒同道致したいものぢやが。何かと申す内に是ぢや。ト云うて案内を乞ふ。如常。今日は寅の日で御座る。鞍馬へ參らうと存じて。誘ひに參りました。小アド〽扨々ようこそ出させられたれ。私は只今その許へ誘ひに參らうと存じた。成程お供申さう。アド〽それならばさあ〳〵御座れ。小アド〽心得ました。アド〽誠に。毎度此樣に鞍馬へ參詣致すは。多聞天の御內證に相叶うたと存ずる。小アド〽仰せの通り。足手息災で兩人共に參詣致すは。偏へに毘沙門天の加護と存ずる。アド〽あれ〳〵。山田に村鳥を追ふやら。鳴子を引きまする。小アド〽何がどうぢやと仰せらるゝ。アド〽山田に村鳥を追ふやら。鳴子を引きまする。小アド〽鳴子〳〵。扨々わけもない事を仰せらるゝ。あれは遣子で御座る。アド〽人が聞いたら笑ひませう。聲高に仰せらるゝな。小アド〽何で人が笑ひまする。アド〽あれは鳴子でこそあれ。遣子とは申しませぬ。小アド〽そなたはぐわら〳〵鳴るに依つて。鳴子と覺えて御座るさうな。御存じなくば覺えておかせられませい。あれは遣子で御座る。アド〽まだ情の強(こは)い事を云はせらるゝ。こればかりは賭祿(かけろく)になりとも致さう。あれは鳴子で御座る。小アド〽身共ぢやと云うて賭祿に仕兼ねは致すまい。遣子で御座る。アド〽しかと賭祿にさつしやるか。小アド〽氏の神を誓言に入れて。一腰賭けに致さう。アド〽某も多聞天を誓に立てゝ。一腰賭けに致さう。小アド〽扨この批判は誰にさせう。アド〽誰がよう御座らう。小アド〽イヤみぞろ池の地藏の前の茶屋は物知りぢや。あれにわけて貰はう。小アド〽これはよからう。アド〽さあ〳〵御座れ。シカ〳〵。誠に。存じよらぬ事で一腰を貰ふ樣なものぢや。小アド〽いや〳〵。それはあちらこちらでおりやる。身共が仕合せになるであらう。アド〽頓て知れる事で御座る。何かと云ふ内に是ぢや。小アド〽誠に是ぢや。アド〽茶屋。內においやるか。シテ〽これは〳〵。又御參詣で御座るか。アド〽中々參詣致しておりやる。シテ〽先づ腰かけて茶を參れ。アド〽茶の段ではない。兩人賭祿を致した。そなたに批判を賴む。わけておくりやれ。シテ〽何を賭祿にさせられた。アド〽山田にかけて村鳥を追ふ物を。鳴子ぢやと云ふ。遣子ぢやと云ふ。これを一腰賭けに致した。早う批判をしておくれあれ。シテ〽これは大事のか

けなされた。身共も急には思ひ出されぬ。確かな證據を思ひ出して批判を致さう。先づ御兩人共に一腰を出して。某に預けさせられい。二人〽心得た。ト云うて。小さ刀を抜きて出す。シテ〽これはそなたの腰の物か。アド〽身共が使用ぢや。シテ〽扨々結構な腰の物ぢや。古身と見えて輕い物ぢや。アド〽重代でおりやる。シテ〽さう見えて御座る。これはお前のさし前か。小アド〽身共が所持でおりやる。シテ〽扨も扨も結構な拵へで御座る。定めて切れ物で御座らう。小アド〽およそ手覺えのある切れ物でおりやる。シテ〽先づ茶を熱うして進ぜう。ト云うて。團扇にて釜の下を煽いでいする。小アド〽なう〳〵茶屋。ちよとお來やれ。シテ〽何で御座る。小アド〽何とあれは鳴子か遣子か。シテ〽そなたは何ぢやと思はつしやる。小アド〽身共は遣子ぢやと思うて。遣子と云うた。シテ〽これはいかな事。あれは鳴子と云ふ物ぢや。小アド〽南無三寶。大事の腰の物を只取られた。シテ〽今悔うで何の役に立つ。あたら腰の物を只取られると云ふものぢや。ノ小アド〽なう。そなたの茶釜は殊の外小さうて見とむない。大きい頁い釜を一つおませうか。シテ〽それは過分に御座る。どうぞ貰はかして下され。小アド〽どうぞ身共が勝になる樣に批判をしておくれやれ。シテ〽眞實茶釜を下さるゝか。小アド〽何の相違があらう。屹度茶釜をやらう。身共を勝たせてたもれ。シテ〽心安う思はつしやれ。どうぞそなたを勝たせてやらう。默つて出て居さつしやれ。扨々むつかしい事を論ぜさせらるゝ。鳴子遣子。ト云うて。茶の下を煽いでゐる。アド〽茶屋。ちよつとお來やれ。シテ〽何で御座る。アド〽あれは鳴子か遣子か。シテ〽そなたは何ぢやと覺えて居させらるゝ。アド〽身共は鳴子ぢやと覺えて居るが。それでよいか。シテ〽これはいかな事。そなたはぐわら〳〵鳴るに依つて。鳴子と云ふと思はせらるゝであらう。あれは遣子と云ふが本名ぢやぞや。アド〽南無三寶。相傳の腰の物を只取られた。シテ〽見れば結構な腰の物を。むさとした賭禄をして只取られさせられた。アド〽何と茶屋。薪はいらぬか。シテ〽毎日〳〵茶の下に使ふ薪は夥しういりまする。アド〽幸ひ上々の薪を持合せた。一駄合力せう。シテ〽それは近頃忝う御座る。必ず忘れさせられな。アド〽忘れはせまいが。今のかけろくの批判をよろしう賴むぞや。シテ〽それを身共がぬからうか。氣遣ひせずともあれへ出て御座れ。小アド〽さあ〳〵茶屋。早う批判をおしやれいの。シテ〽昔物語思ひ出した。語らう程によう聞かせられい。昔鳥羽の院の御時。佐藤兵衞則清といつし人。つら〳〵世間の有樣をおもんみるゝ。風の前の燈火ふゆうのあしたに見えて。夕なまたざる有樣。人間もつて同じ事なり。浮世は何ともなきもの〳〵と思ひ。元結切り。諸國を修行ありし。其時の名を西行法師と云へり。かの西行ある山里を通り給ひしに。面々の爭ひ給ふ物の山田にかゝりたるを見て。面白き物なればとて。かの繩をおつ取つて。引いては放し〳〵ては引き。一首の歌を詠み給ふ。アド〽そり暖の男が。山田に掛けし鳴子繩。シテ〽先づ待たしめ。次がある。小アド〽南無三寶。やゝ勝つたは。小アド〽次があらうとも。アド〽次はあるまいが。シテ〽暖の男が。山田に掛けし鳴子繩。引いて放せば遣子なりけり。小アド〽そりや勝つたぞ。シテ〽先づ待たしめ。小アド〽最早次はあるまいが。アド〽まだあらう〳〵。シテ〽又ある言の葉に。橋なうて。雲の上にはあがるとも。治定と思ふあらがひなしそと。斯樣に詠まれし言葉もあり。何れも二說に詠まれたり。總じて。木登り川渡り。男のいはぬものは。あらがひ一大事なり。

此刀は畠々のなり。兩人に參らせたくは候へども。昔から今に至る迄、論ずる物は中から取れと云へば。此刀は茶屋が賜はりす。ト云うて。取つて逃げて入るなり。二人へあの横著者よ。やるまいぞ／＼。ト云うて。追込み入るなり。

【に】

二九十八

シテ　男
アド　女
（入道具）

シテへ此の邊りの者で御座る。某未だ定まる妻が無い。又清水の觀世音は靈驗あらたなと承つて御座る。今日は參詣致し。申し妻を致さうと存ずる。シカ／＼。誠に。世間の世話にもなるはいやなり。思ふは成らずと申すが。觀世音のお蔭を以て。似合はしい妻を授けて下さればよう御座るが。いや何かと言ふ内に參り着いた。先づお前へ向はう。じやぐわん／＼。私唯今參詣致す事別の儀では御座らぬ。未だ定まる妻が御座らぬ。あはれ觀世音の御利生を以て。似合はしい妻を授けて下されい。南無觀世音／＼。今宵はこれに籠らうと存ずる。はあ／＼。あら有難しや。暫く睡眠のうちに。あらたな御靈夢を蒙つた。扨も／＼有難い事かな。西門の一の階に立つたを。汝が妻に定めよとのお事ぢや。先づ急いで西門へ參らう。シカ／＼。斯様の事を存じて御座れば。とうにも參らうものを。今まで延引致して殘り多い。參る程に西門ぢや。さて御夢想のお妻はどれに御座る事ぢや知らぬまで。ト言うて尋ねる。アド一の松へ出て居る。シテ見附け笑ふ。さればこそ。あれに女中が衣を被いて立つて居らるゝ。先づ詞を掛けう。ト言うて。恥しき體。仕様有るべし。口傳。これは恥しうてなか／＼物の言はるゝ事ではない。誰そ人でも通らば。頼うで尋ねて貰ひたいものぢや。いや／＼。男の心は太うても太かれと言ふ。思切つて尋ねて見う。まうし／＼。お前は御夢想のお方で御座るか。アド頷く。シテ笑ふ。なう／＼嬉しや／＼。御夢想のお方と言へば。ム、／＼／＼。ト言うて笑ふ。扨も／＼喜ばしい事ぢや。さりながら。主の有る人ぢやも知れぬ。尋ねて見う。これは念の爲で御座る。お前は若し主の有る御方では御座らぬか。乙へ夫ぞ無き。我が身一つの唐衣。袖を片敷き獨り寢ぞする。シテへこれはいかな事。歌を詠まれた。主の有るお方では御座らぬかと言うたれば。夫ぞ無き。我が身一つの唐衣。袖を片敷き獨り寢ぞする。これは疑ひも無い獨り身ぢや。まうし／＼。それならばお迎へを出しませうが。お所はどこで御座る。乙へ我が宿は。春の日ながら見こし路の。風のあたらぬ里と訪ふべし。シテへこれはいかな事。又歌を詠まれた。お迎へを出しませうが。お所はどこで御座ると言うたれば。我が宿は。春の日ながら見こし路の。風のあたらぬ里と訪ふべし。先づ春の日は春日、見こし路は北、風のあたらぬ里はどこであらうぞ、總じて室には風の當たらぬものぢや。扨は糀屋の娘であらう。いや／＼その様な人でもあるまい。今思ひ出した。室町に春日町と言うて有る。大方その事であらう。總じて。人に歌を詠み掛けられて返歌をせねば。口無い蟲に生るゝと聞いた。さらば身共も今の返歌を致さう。春日なる。里とは聞けど室町の。角よりしては幾つなるらん。乙へあゝ二九。ト言うてついと樂屋へは入る。シテへあゝまうし／＼。これ／＼。これはいかな事。ついと行かれた。扨々氣の短い人かな。但し身共が返歌が氣に障つたか。別に憎い筈は無いが。春日なる。里とは聞けど室町の。角よりしては幾つなるら

んと言うたれば。あゝ二九。二九〳〵。ムヽこれは九々の算用を以て。二九十八軒目といふ事であらう。先づ急いで室町春日町へ參らう。シカ〳〵。誠に。歌ばかり達者かと思へば。算勘にまで達して居らるゝ。觀世音のお引合せぢやに依つて。大抵の人ではない筈なれども。先づ我等如きの妻に算勘の達したはいち重寶ぢや。いや何かと言ふうちに室町春日町ぢや。ト言ふうち。アド切戸より出て。脇座に居る。先づ角から一軒二軒五軒八軒。とひ〳〵言うて。見付けて笑ふ。十七軒十八軒。さればこそ。あれにつゝくりとして居らるゝ。まうし〳〵。アド頷く お前は最前のお方で御座るか。シテ〽ムヽ。笑ふ。それならば追附けお迎へを進ぜませうが。馬に乗らせらるゝか。但し乗物に乗らせらるゝか。アドかぶり振る。シテ〽いやぢや。それならば身共が手を引きませうか。アド頷く。シテ〽ムヽ。笑ふ。馬の乗物のとおしやつても。仕様事が無いに。某身代相應に手を引かれて行かうとおしやる。それならば手を引きませう。さあ〳〵御座れ。シカ〳〵。誠に。そなたと身共は觀世音の御夢想の妻ぢやに依つて。五百八十年萬々年も連れ添ひませう。さて唯今までは獨り身で。縫ひ針の世話に難儀致した。これから萬事渡世の事に氣を附けてくれさしめ。いや何かと言ふうちに私宅ぢや。先づかう通らしめ。さて對面を致さう。その衣(きぬ)をお取りやれ。いやと言ふ。さてシカ〳〵色々ありて。無理に被衣を取りて。びつくりする。アドまうし〳〵で追ひ込め入るなり。

雜聟(にはとりむこ)

シテ　聟
アド　舅
小アド　太郎冠者
教人
（入道具）

アド〽この邊りの者でござる。今日は最上吉日なれば。聟がわする筈ぢや。先づ太郎冠者を呼び出し。申附くる事がござる。ト云うて呼出す。出るも。常の如し。汝呼出す別の事ではない。けふは最上吉日ぢやに依つて。聟が見える筈ぢや。兼ねて云附けておいた物は用意したか。シテ〽成る程用意致してござる。アド〽聟殿が見えたらば。此方へ知らせ。小アド〽畏まつてござる。ト云うて。つめて。下に居る。シテ〽舅に可愛がらるゝ花聟でござる。今日は最上吉日なれば。聟入を致さうと存ずる。それ故方々で借り調へて。やう〳〵これ程までに出で立つてござる。さりながら。この聟入と申すものは。いかう辭儀作法のむつかしいものと承つてござる。又爰に誰殿と申して。日頃お目を下さるゝお方がござる。これはせつ〳〵聟入をなされて。御巧者にござる。今日はそれへ參つて。聟入の辭儀作法を習うて。直に聟入を致さうと存ずる。シカ〳〵。誠に。内にござればよいが。内にさへござつたならば。身共が申す事ぢやに依つて。定めて教へて下さるゝでござらう。いや何かといふうちに是ぢや。先づ案内を乞はう。ト云うて。案内乞ふ。出るも。常の如し。シテ〽私でござる。教人〽エイこゝな。これは奇麗な出立でおりやる。シテ〽なんとようござるか。教人〽和御寮がこれへ來はじまつてから。つひに見ぬ出立でおりやる。シテ〽これはよいお目利でござる。何を隠しませう。今日は聟入を致しまする。教人〽何ぢや。聟入なする。シテ〽なか〳〵。教人〽それは目出度い事ぢや。其の様な事をとうにも存じたならば。人を以てなりとも申さうものを。曾て存ぜなんだ。シテ〽御存じない筈でござる。今日唯今の事でござる。教人〽何なりとも用があらばおしやれ。シテ〽早速御無心がござる。教人〽何でおりやる。シテ〽あの聟入と申すものは。いかう辭

儀作法のむつかしいものと承つてござる。私は終に聟入を致した事がござらぬ、お前はせつ／＼聟入をなされて、萬事御功者にござらう。どうぞ聟入の辭儀作法を敎へて下され。敎人〽わごりよは人聞き悪い。身共がいつ其の様に聟入をせつ／＼した事がある。シテ〽でも路次でお目にかゝつて。どれへお出でなさるゝと申せば。舅の方へ／＼とは仰せられぬか。敎人〽それは舅の方へ時折節の見舞でこそあれ。聟入と云ふものは。一代に一度ならではせぬものでおりやる。シテ〽扨は聟入と申すものは。一代に一度ならではせぬものでござるか。敎人〽なか／＼。シテ〽すれば私は不調法な事を申しました。舅殿の方へお出でなさるゝ度毎に。聟入と存じてござる。敎人〽お知りやられねば尤もぢや。して聟入の辭儀作法が習ひたいか。シテ〽どうぞ敎へて下され。敎人〽其の様な事はそらでは覺えぬ。物のはしに書いて置いた。見てやらう。暫くそれにお待ちやれ。シテ〽畏まつてござる。敎人〽これはいかな事。世にはうつけた者がござる。聟入の辭儀作法を知らいで習ひに參つた。各のお笑草に賜つて歸さうと存ずる。なう／＼おいやるか。シテ〽是に居ります。敎人〽見ておりやるが。大昔中昔當世様というて。聟入の辭儀作法が三通りある。何れが習ひたい。シテ〽大昔と申すは餘り古うござる。中昔と申すもはや昔でござる。何事も當世様／＼と申す程に。當世様の聟入を敎へて下され。敎人〽和御寮は。聟入をすれば分別までがあおつた。當世様の聟入は。雞聟というてある。之を敎へてやらう。何とそなたは雞を飼うた事があるか。シテ〽忰の時分に雞を飼ひました。敎人〽それならば幸の事ぢや。とかく舅の方へいて。雞の鳴く眞似や。蹴合ふ眞似をすればすむ事ぢや。シテ〽それでようござるか。敎人〽なか／＼。シテ〽扨々それは心安い事でござる。敎人〽是處に雞のとさかに似た烏帽子がある。之を貸してやらう。シテ〽それは忝うござる。敎人〽さあ／＼。ついでに着せてやらう。これへ寄らしめ。シテ〽畏まつてござる。（ト云うて○太皷座にて烏帽子をとり○大臣烏帽子を前折に着せかへる。）シカ／＼あり。敎人〽それでようおりやる。シテ〽忝うこそござれ。舅殿の方には引出物があると申す。貰うて參つたらば。お裾分けを致しませう。敎人〽必ずそれを待つ事でおりやる。シテ〽もうかう參る。（ト云うて。常の如く暇乞する。）シテ〽なう／＼。嬉しや／＼。先づ急いで參らう。シカ／＼。誠に。あいの人の様な物知りはない。いつ何時何を申して參つても。終に知らぬと仰せられた事がない。何かと云ふうちにこれぢや。（ト云うて。雞のなくまねをする。）小アド〽表がいかう噪がしい。何事ぢや知らぬ。まうしお前はどなたでござる。シテ〽汝はこれの者か。小アド〽成る程これの太郎冠者でござる。シテ〽聟が來たとおしやれ。小アド〽畏まつてござる。聟殿のお出でて御座る。アド〽人はいくたりお連れなされた。小アド〽唯お身すがらでござる。アド〽それは定めて先ばしりであらう。あれへいて云はうは。お前は定めて先走りでござらう。聟殿はどれまでお出でなされた。舅が迎ひに出うと云へ。小アド〽畏まつてござる。お前は定めて先走りでござらう。聟殿はどれまでお出でなされた。舅が迎ひに出うと申しまする。シテ〽先走りにも後走りにも。正身のま聟ただ一人ぢやとおしやれ。小アド〽畏まつてござる。申し上げまする。アド〽何事ぢや。小アド〽先走りにも後走りにも。正身のま聟ただ一人ぢやと仰せられまする。アド〽それならばかうお通りなされいと云へ。小アド〽畏まつてござる。かうお通りなされませ。シテ〽心得た。（ト云うて。シテ柱の前に出て。）シテ〽聟は舅の家

ヽヽヽにゆき。〳〵お座敷迄はれきヽヽヽヽヽなりとて。ヽヽヽヽヽヽヽヽかゝりのもとにぞ立つたりける。〳〵。囀ひろげ くう〳〵〳〵と云うて。雞のなくまねする。 アド〽やい〳〵太郎冠者。あれは何事ぢやいな。 小アド〽何れ興がつた事でござる。 アド〽聟殿はつゝと律義ぢやと聞いた。定めて誰ぞなぶつておこしたものであらう。惣じて聟の恥は舅の恥。舅の恥は聟の恥といふ。身共もあの様にあしらはずば。歸つて物知らずぢやといはれう。某もあの様にあしらはう程に。下々の者に笑ふなといへ。 小アド〽畏まつてござる。 アド〽汝も笑ふな。先づ是へよつて身拵へなせい。 ト云うて。笛座にて侍烏帽子をとり。大臣烏帽子を前折に着て。脇柱の方へ出て。 アド上〽舅は之を見るよりも。〳〵。聟のしつけに劣らじと。廣椽よりも飛〳〵でおり。羽たゝきをしてこそ立つたりけれ。 ト云うて。くう〳〵と。雞のまねをして鳴く。それより兩人二度入違うて蹴合ふ眞似を二遍する。 シテ〽是處は所もかゝりなれば。仕様あり。 二人〽柳櫻を追ひ廻し。松はもとより常盤なれば。紅葉にまがふとつさか蹴られて叶はじと。 アド〽舅は内に入りければ。 シテ〽聟は聟入仕済まして。勝鬨つくつて歸りける。 こつかやつこうと云うて。留めて入るなり。

若市（にやくいち）

シテ　僧
アド　若市（尼）
小アド　重喜
立衆　尼
（入道具）

アド〽六條の道場の門前に住居致す若市と申す尼でござる。里へ用事あつて參る。先づそろ〳〵と參らう。シカ〳〵。誠に。女程淺ましい者はござらぬ。かやうに姿を變へて居れども。とかく里元の親達から。何事も世話を受くる事でござる。 シテ〽六條の道場の住持でござる。用事あつて出京致した。急いで歸らうと存ずる。 アド〽お上人様。今お歸りでござるか。 シテ〽若市。そちは暮に及うでどれへ行く。 アド〽ちと用事の事があつて親里へ參りまする。 シテ〽いや此の中せつせつ里へ行くと云うて出て寮に居ぬ。愚僧はえ云附けぬかと。門前の衆が陰で噂めさるゝ。若い尼が何としてその様に寮を明くるぞ。 アド〽それは何れもの執成しが惡うござる。私はその様にせつ〳〵出た事はござりませぬ。シテ〽總じて。女と云ふ者はいたづらな者ぢや。其如く剃髪し。三衣着してゐれば。殊勝には見ゆれども。せつ〳〵の里入り。定めて自墮落な事であらう。アド〽なう〳〵。恐ろしや〳〵。勿體ない。私の身に少しも曇はござらぬ。人聞惡い事を云うて下さるな。 シテ〽その手に持つて居るは何ぢや。 アド〽これは花でござる。 シテ〽花を隱さう様はないが。扨は此中花壇の花を何者やら切つたが。これはそちが取るな。 アド〽扨も〳〵恐い事を仰せらるゝ。これは檀那衆に花好きがござる程に。それへ進ぜうと思うて。餘所から貰うて來ました。その様な大膽な事する様な尼ではござらぬ。 シテ〽いやそれは慥かに見知りがある。愚僧が花壇の花ぢや。おのれ常に何ぞ云へば。けん〳〵と賢人立てを云ふが。この様な事をすると云ふ事があるものか。 アド〽扨も〳〵無理な事を仰せらるゝ。その様に無理な事を仰せられたらば。お前の兼ねて仰せられた事を。人中で云ひまするぞや。 シテ〽推參な奴ぢや。住持に向つて過言をぬかすか。 アド〽折角貰うて來た花を。胴慾な。何とさせらるゝ。 シテ〽まだぬかすか〳〵。 アド〽いかに門前に居る尼ぢやと云うて。その様にはせぬものぢや。 シテ〽おのれまだ口をあくか

〳〵。アド〽なう腹立ちや〳〵。この樣にせられて堪忍がなるものか。今に思ひ知らせうぞ。なう腹立ちや〳〵。中入。小アド〽やあ〳〵。それは誠か。これは一大事が出來た。まうし〳〵。お上人樣〳〵。シテ〽これは慌しい。何事ぢや。小アド〽お前は若市を打擲なされたか。シテ〽されば愚僧が花壇の花を盜んだに依つて。それを咎めたれば過言をぬかし居つた。それ故打擲しておりやる。小アド〽その樣な事ではござるまい。殊の外腹を立て。門前の尼共を大勢語らうてこれへ押寄せまする。御用心なされい。シテ〽あれらづれが何程の事があらう。その儘置かしめ。小アド〽いや〳〵。長道具を持つて。なか〳〵夥しい事でござる。とかく御用心なされい。シテ〽それは誠か。小アド〽早や追附けこれへ參る。私も防ぎませう。先づ身拵へなされい。シテ〽それならば賴むぞ。尼一せい〽聲々に。日中鬨を作りつゝ。鉦をならし鬨を打つて。上人の御坊へ押寄せたる。シテ〽その時上人表の櫓に上り。寄手の勢を見渡せば。尼方の勢は三百人。同〽思ひ〳〵の出立ちに。心々の打物拔き持ち。佛前の庭まで亂れ入る。シテ〽お前の勢は是を見て。同〽〳〵。重喜阿彌覺屋上人。我も〳〵と懸り給へば。アド〽若市は小槍を拔いて。同〽〳〵。昔の阿間(あま)の了願にも劣るまじと。是處や彼處を拔き廻れば。さしもに猛き御坊達も。窘き捲られてぞ逃げたりける。〳〵。シテ〽上人腹を据ゑかねて。同〽〳〵。手棒を振上げかゝり給へば。アド〽若市は是を見て。同〽物々しと云ふ儘に。上人とむずと組んで。二振り三振り振るとぞ見えしが。上人を振り轉ばかし。取つて押へて剃刀拔いて。帽子(もうす)ながさとかき落し。さし上げて歸り給へば。殘りの尼衆は悅うで。いつく〳〵と踊り連れて。〳〵。我が寮々にぞ歸りける。

仁王(にわう)

シテ　仁王
アド　何某
小アド　同上
立衆　同上
（入道具）

シテ〽この邊りに住居する博奕打で御座る。何がもむ程に〳〵。鹿の角の繩になる程もうで御座れば。さん〳〵もみ損うて。金銀は申すに及ばず。家財まで打込うで。はらりしやんとなつて。後(あと)へも先へも參らぬ。剩さへ此の處の住居もなりにくうなつて御座るに依つて。見えぬ國へなりとも參らうと存ずる。又爰に殊の外お懇ろまで思召して下さるお方が御座る。せめてお暇乞を致して。直ぐにどれへなりとも參らうと存ずる。シカ〳〵。誠にあのお方の御意見をなされたは度々の事ぢやに依つて。最早や止まらうと思うても。勝つは面白し。負くれば取返さう〳〵と思うて。うか〳〵として居るうちに。ほうと斯樣な體に成つて御座る。何かと言ふうちに是ぢや。ト言うて。案内乞ふ。出るさ。常の如し。アド〽これは旅立ちの體と見えたが。どれへお行きやる。シテ〽面目も無い事が御座る。アド〽それは何でおりやる。シテ〽常々御意見なさるゝを聞かいで。又かの勝負を致して御座れば。さんざん不仕合はせで。金銀は申すに及ばず。家財まで打込うで。もはや手と身とに成つて御座る。致さう樣も御座らぬに依つて。此の足で見えぬ國へなりとも參らうと存じまして。唯今までの御恩受けましたお禮かた〴〵。お暇乞の爲參りまして御座る。アド〽扨も〳〵。笑止千萬の事かな。常々意見を致すはそこの事ぢや。何と合

點が參つたか。シテへ後悔先きに立たずと言ふが。此の事で御座る。度々の御意見殊にさい〳〵の御合力。御禮の申し樣も御座らぬ。こなたへ參るも面目無う御座れども。何かの御禮かた〴〵參つて御座る。最早やお暇申しまする。アドへ先づ待たしめ。何とも見捨てて去るも氣の毒な。して行く先に當てが有るか。シテへいや知るべくも御座らねども。差當つて致し樣が御座らぬ。アドへ何とぞ仕樣が有りさうなものぢやが。此のうちは。あそこへは神が飛ばせられたの。是處へは佛が降らせられたのなどと言ふ程に。どうぞ和御寮を佛に作つて。どこへぞ飛ばせられたと言うて。參詣を有らせて。その散物を取らする樣にせうと思ふ。シテへこれは格別の御分別で御座る。どうぞならう事なれば宜しう頼み上げまする。アドへ何に拵へうぞ。今思ひ出した。上野（うへの）へ仁王が降らせられたと言うて。參詣をあらせうぞ。シテへ仁王と仰せらるゝは。樓門の脇に有る大きな佛の事で御座るか。アドへなか〳〵。シテへ私がその仁王に成られませうか。アドへ何卒取り繕うて見よう。シテへさりながら。仁王に成つて居たりとも。誰も知つて參る者が御座るまい。アドへそれはよい仕樣がある。そちを仁王に作つておいて。さて知音に觸らせて。身共も同道して參詣して。一腰を掛けて。今生後生を祈つたならば。外の衆も散錢さんまいと積むであらう。シテへこれは重ね〴〵の御思案で御座る。何分お前を頼み上げまする。アドへ先づ拵へてやらう。これへ寄らしめ。ト言うて。笛座にて肩衣を取り。側次を着せて。面白き頭巾着せる。或は色鉢巻にて手首を括る。紅入りの唐人裝束の上を着せて。もめこたるもよし。色々有り。アドへさて言ふまでにないが。これに懲りてふつ〳〵手慰みを止めさしめ。シテへいやもこれに懲りぬ者は御座りませぬ。アドへ身共が色々に意見のすれども。御聞きやらぬに依つて。此の樣な事ぢや。ト言うて。身拵へのうち色々仕方あるべし。アドへそれ〳〵よいぞ。シテへよう御座るか。アドへこれへお出やれ。シテへこれは變つたなりに成りました。何とよう御座ろか。アドへこれはその儘の仁王でおりやる。さあ〳〵おりやれ。シテへ心得ました。シカ〳〵。アドへさて最前も言ふ通り。此の後博奕はふつと思ひ止まらしめ。シテへ何がさてこれに懲りぬと申す事は御座りませぬ。何とぞ此度仁王を仕おほせまして。それを元手に致し。何なりとも商ひを致しませう。アドへ何かと言ふうちにこれぢや。さあ〳〵これへ寄らしめ。シテへ畏まつて御座る。アドへさて眼をきつと見開いて。いかにも異形におしやれ。シテへかうで御座るか。アドへおゝさうぢや〳〵。さてあうんけこんと言うて。

口を開いたもあり。又塞いだもあり。參詣の時は必ず〳〵笑ふ事はならず。又目遣ひなどに氣を附けさしめ。シテへその段はそつとも御氣遣ひのなされますな。アドへ身共はこれから知音の衆へ觸れ知らせて。追附け同道して參らうぞ。シテへそれは忝う存じまする。アドへなう〳〵御座るか。立衆へこれに居まする。アドへ珍らしい事が御座る。上野へ仁王が降らせられたと申すが。聞かせられたか。立衆へ曾て存じませぬ。アドへ殊の外利生があつて。何を申しても叶ふと申す。いざ參詣致しませうか。立衆へ一段とよう御座りませう。アドへさあ〳〵御座れ。立衆へ心得ました。アドへ何と思召す。此の中はあなたこなたに神が飛ばせられたの。佛が降らせられたのと申して。何と奇特な事では御座らぬか。立衆へ仰せらるゝ通り。今の世に奇特な事で御座る。アドへ別しなか〳〵來世とは申されませぬ。て。上野の仁王はあらたなと申す事で御座る。立衆へ誠にこれにされば こそこれに御座る。アドへいざ拜をさせられい。ト言うて各々下に居て拜むなり。アドへ扨々御殊勝な事かな。ト言うて小さ刀をシテの手に掛ける。頭を掛ける。その皆々色々物を致し。頭を掛ける。小さ刀掛ける人も有り。アドへ追附け下向致しませう。立へ一段とよう御座らう。アドへ某はちと寄らいで叶はぬ所が御座る。自由ながら寄つて參らう。何れも先へいて下され。立へそれならばお先へ參りませう。アド各歸るを見送り。シテアドの袖を引いて。シテへ扨々お蔭で夥しい散錢その外色々の物を受納致しました。先づお前のお腰の物はお返し申しませう。アドへさてその體ならば。聞傳へて段々參詣あらう。シテへ然らば此の類はお前へお預け申しまして。私は後から歸りませう。アドへ成る程。これは身共がよい樣にして置かう程に。隨分仕おほせて後から戻らしめ。シテへ畏まつて御座る。ト言うて。色々の物を受取り入るなり。又シテ仁王に成るなり。小アドへ此の邊りの者で御座る。承れば上野へ仁王が降らせられて。何事も申し事が叶ふと申す。某も參つて願を掛けうと存ずる。シカ〳〵。誠に。末世と申すは唯今の事かと存ずれば。又斯樣の奇特が御座る。さればなか〳〵物を張意地に申さう事ではない。即ちこれぢや。さてかの仁王はどれに御座る事ぢや。さればこそこれに御座る。ト言うて。草鞋を掛ける。拜むなり。扨も〳〵有難い事かな。名作と見えて御殊勝な。その儘生きて御座る樣な。さて某は折節頭を痛める。斯樣なお佛にはとかく御緣を結ぶがよい。あなたの御ぐしを撫でゝ。某が身へ移さう。ト言うて。つむりを撫でて。身しめろ。こそばがる顔付き。色々とあるなり。小アドへ思ひなしか心がはつきりとした。とかく佛體を撫でゝ。某が身へ移さう。ト言うて。大きにこそばがり。動くを見て。小アドへはあ。これはどうやら樣子が變つた。ちと探つて見う。ト言うて。くつ〳〵〳〵。ハツくつ〳〵と言うて。大きに探るを。シテ堪へ兼ねて。大きに笑ふ。小アド賣僧者と言うて。追込め入るなり。

【ぬ】

蛻（ぬけがら）

シテ　太郎冠者
アド　主人
（入道具）

アドへこの邊りの者で御座る。此のうち方々の御參會は夥しい事で御座る。それに就いて明日は各を申請くる。先づ太郎冠者を呼出し申付ける事が御座る。呼出す。常の如し。明日は各を申請くる。変元の肴では馳走に成らぬ。汝は和泉の堺へいつて。肴を求めて來い。シテへ畏まつて御座りまするが。私は御內證に御用も御座らう。アドへ次郎冠者を遣されませ。次郎冠者にも相應の用を云付ける。其の上不調

法な者を遣しては心許ない。とかく汝行け。シテ〽それならば畏まつて御座る。アド〽頓て戻れ。うける。常の如し。シテ〽異な事の。いつもお使に行く度毎に。酒を一つづゝ下さるゝ。今日は何の御沙汰がない。一度など食べぬ分は苦しうないが。重ねての例になる。氣をつけてたべて參らう。申し御座りまするか。アド〽太郎冠者の聲ぢやが。エイまだ行かぬか。シテ〽參りまするが。肴は新しいのを求めて參りませうか。但し古いを求めて參りませうか。アド〽妥な者がいふことは。古い肴が何の役に立つ。新しい上にも新しいを求めて來い。シテ〽私も左樣に存じますれども。何程肴が新しいと申しても。御酒が惡うては其のかひが御座らぬ。御酒の處へお氣を付けられませ。アド〽成る程心得た。それに就いてちと用がある。それに待て。シテ〽何ぞ御用が御座りますか。アド〽なか／＼。シテ〽畏まつて御座る。アド〽扨も／＼。下々に惡う癖をつけうものでは御座らぬ。いつも使に遣る毎に。酒を一つ宛飲ませて遣す。今日ははたと失念致いたれば。氣を付けに歸つた。これは飲ませずばなるまい。やい／＼。太郎冠者。シテ〽それは何で御座ります。

アド〽いつも使にやる度毎に酒を一つ飲ませて遣す。今日は失念した。一つ飲うで行け。シテ〽御用があると仰せられたは。この御酒のことで御座るか。アド〽なか／＼。シテ〽私は何の御用で御座るとこそ存じましたれば。いつも下さるゝ御酒を今日一度食べぬと申して。それが何で御座る。其の上御酒が食べたければ。お臺所で下されまする。アド〽こりや／＼。いつも飲まするに。今日に限つて飲ませねば。何とやら氣にかゝる。是非とも一つ飲うで行け。シテ〽それならばたつた一つ食べませう。アド〽先づ下に居よ。シテ〽御念の入つたことで御座る。アド〽さあ／＼。飲め／＼。シテ〽これはまた例の大盃が出ました。アド〽そちは小さいが嫌ひぢやに依つて。大きいを出した。シテ〽何れこれで一つ食べたらば。惡うは御座りますまい。アド〽身共が慰みに注がう。シテ〽これは御酌慮外で御座る。アド〽ちやうど飲め。シテ〽御座りまする／＼。これはちやうどお注ぎになりました。飲む。常の如し。アド〽何とあつた。シテ〽たゞ冷いやりとばかり致いて。何も覺えませぬ。アド〽も一つ飲うで味を覺え。シテ〽それはお

約束とは違ひますれども。いか樣も一つ下されませう。アド〽さあ／＼。飲め／＼。シテ〽度々お酌。慮外で御座る。アド〽苦しうない。ちやうど飲め。飲む。常の如し。シテ〽いま覺えました。アド〽何とぢや。シテ〽これは並ならぬ結構な御酒で御座る。これはどの御酒で御座る。アド〽そちに振舞うて惜しうない。寢酒に食ぶる遠來ぢや。シテ〽なに御遠來。アド〽なか／＼。シテ〽さればこそ。私が並ならぬ御酒と存じたことで御座る。さて此の御酒を下されて申すでは御座らぬが。いつぞは申上げう／＼と存じて御座る。お前のことをいかう世間で褒めまする。アド〽何というて褒める。シテ〽先づ第一お慈悲が深いに依つて。下々までも細かにお氣を附かせらるゝ。あのお心入れでは。追付け御立身をなされうと申して。いかう人が褒めまする。アド〽惡い事を聞かう樣に無うて。悅ばしいことぢや。シテ〽また私も人が羨みまする。そちがやうな果報な者はあるまい。結構なお主に使はるゝに依つて。いつお使に出る顏を見ても。機嫌のよささうな色のよい貌ぢやと申しまする。そこで私も。おゝ／＼結構なお主に使はるゝに依つて。いつお使に出るというて。太郎冠者

往たか戻つたか。一つ飲めなど仰せらるゝ。これて機嫌の惡からう筈がない。あのお主をあだに思うたらば罰が當らうと申しますれば。あやかり者ぢやと申しまする。アドへまだ飲むか。シテへ喉が惡う御座る。アドへ過ぎはせぬか　シテへ何のこの結構な御酒を二つや三つ下されたと申して。過ぎる事では御座らぬ。アドへ酒は惜しまぬが。過ぎぬ程飲め。シテへさりながら。此度はちと輕う注がせられい。アドへとても飲むならば丁ど飲め。シテへちと休んで下されませう。さていつぞは申さう〱と存じましたが。お前をいかう人が褒めまする。アドへそれは最前聞いた。シテへ聞かしやれたか。アドへなか〱。シテへ誰に。アドへ汝に聞いた。シテへところで私をいかう人が羨みまする。そちがやうな果報者はあるまい。結構なお主に使はるゝ。あの御慈悲深いお主を思う惡うたらば。罰が當らうと申すに依つて。それは皆達の仰せあるがくどい。何しに惡う思うぞ。よいが上にもよかれかしと願ふことぢやと申しまする。さあ取らつしやれ。アドへもう飲まぬか。シテへもう嫌ぢや。アドへ取るぞよ。シテへはて取つたがよい。くどい人ぢや。笑ふ。よいが上にもよかれかしと願ふことぢや。笑ふ。アドへ太郎冠者〱。やい〱。シテへヤア。アドへ行かぬかいやい。シテへ何處へ。アドへ和泉の堺へ。シテへそりや知つて居りまする。アドへ頓て戻れ。醉うて笑ふ。仕樣口傳。シテへ結構なお主ぢや。氣を付けに戻つたれば。大盃で三つ。いかう面白い。ちと謠はう。小謠うたふ。ヤア。見知らぬお方が手をついて。此方へのお辭儀ならばお手を上げられい。それは近頃迷惑に存ずる。平にお手を上げられい。そなた誰ぢや。人かと思うたれば石佛ぢや。笑ふ。石佛が人に見えては行かれまい。ちと爰に寢て行かう。エイ〱。と寢る。アドへ太郎冠者を和泉の堺へ遣して御座る。殊のほか酒に醉うて參つた。路次の程も心もとない。後を慕うて參らうと存ずる。シカ〱。まことに。酒を飲ませれば氣をつけに戻る。飲ませば醉ふ。このやうな氣の毒は御座らぬ。行當る。さればこそ正體も無う醉伏して居る。ヤイ〱。太郎冠者〱。扨も〱苦々しいことかな。何卒これに懲りて。以來ふつ〱酒を飲まぬやうにしたいものぢやが。いや致しやうが御座る。ト云うて。面きせる。先づ歸つて樣子を見うと存ずる。シテ目をさます。シテへあゝ寢たことかな〱。誰そ湯か茶か一つ吳れいよ。これはいかなこと。これは身共が部屋かと思へば野原ぢや。何として爰に寢てゐたぞ。それ〱。賴うだお方の使に和泉の堺へ行く筈ぢや。最前酒に醉うて此處に寢てゐたさうな。賴うだお方が御開きになつたらば。よいとは仰せられまい。先づ急いで參らう。ハア。枕下りに寢た加減か。どうやら顏が面張れたやうな。水がな欲しや。冷いやりと手水が使ひたいものぢや。さうぢや。此のあなたに淸水がある。あれへ行て手水を使はう。扨も〱正體も無う寢たことかな。これ〱爰ぢや。ト水を見て驚く。いかう恐ろしや。淸水に鬼がゐる。ハッチヤ恐物。急いで賴うだお方へ申上げう。いや〱。只さへ身共を日頃臆病者ぢやと仰せらるゝ。篤と見屆けいでは申されまい。今のは慥に鬼であつたが。但しむさとしたものが鬼に見えたかも知らぬ。も一度とくと見定めう。さりながら。氣味の惡い見物ぢや。ト云うて水鏡見る所。色々仕樣口傳。泣く。淸水に鬼が居るかと思うたれば。これは身共が鬼になつたさうな。あれ〱〱。ト泣く。口傳あり。さても〱。終に人を惡かれと思うたこともなかつたに。何とした因果でこのやうな面になつたことぢや。泣く。此の面で餘所外へ參つたりとも。人が寄せ附け

はせまい。まだお馴染ちや程に。頼うだお方へお詫を申さう。シカ〳〵。いうても〳〵。如何なる因果で此樣な恐ろしい面には成つたことぢやぞ。これといふも皆酒故ぢや。かやうの事ならば。飲まねばよかつたものを。まうし〳〵。頼うだお方御座りまするか。アド〵太郎冠者が戻つたさうな。シテ〵御座りまするか。御座るか。アド〵太郎冠者か〳〵。シテ〵御座りまするか。アド〵エイ太郎冠者。なう恐ろしや。鬼が來た。あちへ行け〳〵。アド〵まうし〳〵。鬼では御座りませぬ。聲でなりとも聞き知らせられて下され。太郎冠者で御座る。アド〵誠に。聲は太郎冠者ぢやが。何としてそのやうな恐ろしい面に成つたぞ。シテ〵さればのことで御座る。最前の御酒にたべ醉ひまして。路次とも存ぜず臥つて居りましたれば。何時の間にやら此の樣な恐ろしい面になつて御座る。アド〵さて〳〵それは不憫なことぢや。さりながら。身が內に人が生き乍ら鬼になつたといへば。世間の外聞もよろしうない。身がうちには叶はぬ。出て行け〳〵。シテ〵御尤もには存じまするが。とてもこの面で餘所外へ參りましたりとも。人が寄せ附けは致しますまい。唯今までの御奉公はなりませずとも。どうぞ御門の番なりともおさせなされて下され。アド〵いや妄な者が。身が門へは人の出入がある。鬼が番をするといはゞ人の出入もあるまい。此の內には叶はぬ。出て行け〳〵。シテ〵それならば。お臺所のお釜の火なりともおたかせ下されませ。アド〵身が臺所へは女童も出るものぢや。其のやうな面で何と火が焚かせられう。とかく出て行け〳〵。シテ〵左樣ならば。何卒お醫者衆に仰附けられて。一療治おさせなされて下さりませ。アド〵いよ〳〵むさとした事を言ふ。醫者は人間の病をこそ治せ。鬼の療治をするといふことは。終に聞いたことがない。とかく此の內には叶はぬ。出て失せう。まだそこに居るか〳〵。なう〳〵恐ろしや〳〵。シテ〵まうし〳〵。（ト泣く。）お馴染の頼うだお方でさへあの樣に仰せらるゝ。まして餘所外へ參つても寄せ附けはせまい。是非に及ばぬ。最前鬼になつた所へ往て。草に食附いて。腐り死なりともせう。いうても〳〵。何とした淺間しいことぢや。これ〳〵爰ぢや。爰は身共が爲に何とした因果な所ぢや。（口傳。）まうし。頼うだお方御座りまするか。アド〵何事ぢや〳〵。シテ〵物を見せませう。ちやつと御座れ。アド〵何事ぢや。シテ〵これに鬼の蛻が御座る。アド〵何の蛻。あの益體もない。しさり居れ。（常の如くつめて。留めて入る。）

塗師平六

シテ　塗師平六
女　妻
アド　師匠

アド〵これは都方に住居する塗師で御座る。某塗師細工一通りは何によらず隨分致せども。何と致いてやら。細工が隙で御座るによつて。渡世に迷惑致す。又越前の一條と申す所に。平六と申して某の弟子が御座る。是はさのみ細工も上手では御座らねども。殊の外繁昌致す。もし隙ならば何時なりとも下れ。細工を分けてさせうとかね〳〵申越して御座る。此度越前へ下り。平六の世話にならうと存ずる。シカ〳〵。誠に。人は運で御座る。平六は塗師一通り細工は未熟に御座れども。所に塗師がないによつて仕合せを致す。又某は塗師一通りは誰おそろしいとも思はねども。斯樣の體で御座る。イヤ何かと申す內に越前の一條へ着いた。幸ひ是に塗師がある。是で尋ねて見う

と存ずる。（案内常の如し。）近頃卒爾ながら。もし塗師の平六と申すは爰元では御座らぬか。女へ成程。塗師の平六は是で御座るが。お前はどれからおいでゝ御座る。アドへイヤ某は上方の者で。則ち平六が爲には塗師の師匠で御座る。かれ〳〵平六より、上方の細工が隙ならば何時でも下れ。細工を分けて致さうと懇に申越されました。此節は手透きになりましたによつて。平六の世話にならうと存じて下つて御座る。女へやれ〳〵。それはようこそおいでなされました。成程かれて承り及うで御座る。まづ斯うお通りなされい。それにゆるりと御座りませ。アドへ心得ました。（アド脇座。女脇へのきて。）女へなう〳〵氣の毒な事かな。あの人は平六殿のお師匠で。隠れもない塗師の上手と聞いた。平六は細工もしかと致されども。所に塗師がないによつて繁昌致す。あの人が此所に足をとめられたらば。平六に細工のあつらへては御座るまい。是はとかく僞つて都へ歸さうと存ずる。何とお草臥れなされませう。アドへいやさやうにも御座らぬ。平六殿はどれに居られまする。早う會ひたう御座る。女へされば。平六は常々お前の事を申してばかり居られましたが。思ひ出せば悲しう御座る。

アドへア、これ〳〵お内儀。こなたは異な言葉の端で落涙めさるゝが。どうした事でおりやる。女へされば の事で御座る。平六は去年の秋お死にやりました。アドへヤア〳〵何とおしやる。平六は去年の秋お死にやつたとおしやるか。女へ秋の露と消えられまして御座る。アドへ扨々それは氣の毒で御座る。扨二人の中に子はないか。女へいや。子も御座らぬ。アドへそなたも笑止なが。某も力を落しました。あゝこの様な難儀な事は御座らぬ。シテへやい〳〵女共。色漆が足らぬ。女共はどれに居るぞ。女共〳〵。エイお師匠様。アドへエイ平六。シテへ扨々おなつかしや。（女驚き。シテを引立て橋掛りへゆく。）シテへ是は何とする。女へ後先も見ずにとば〳〵と出るといふ事があるもので御座るか。シテへ汝は知るまい。あれはかれ〳〵噺をした上方のお師匠様ぢや。やれやれおなつかしや。（女とめて。）女へア、まづ待たせられい。シテへ何と待てとは。女へ是には段々様子が御座る。成程最前都のお師匠ぢやと云うて見えました。あの人は隠れもない塗師の上手と聞きました。又こなたは細工はさのみ上手では御座られども。所に塗師がないによつて繁昌させらるゝ。あのお師匠が此所に

足をとめられたらば。こなたに細工のあつらへてはあるまいと思うて。平六は去年の秋お死にやつたと云うて騙しておいたに。あそこへ出るといふ事があるもので御座るか。シテへ何ぢや。平六は去年の秋死んだ。女へ中々。シテへイヤこゝな者が。是程息才で居るものを。死んだと云ふ様ないま〳〵しい事があるものか。其上まだ墨刷毛の傳授もせねばならぬ。扨々おなつかしや〳〵。女へア、まづ待たせられい。シテへ何と待てとは。女へそれならば妾に暇を下され。シテへそれはどうした事ぢや。女へハテ最前平六は去年の秋お死にやつたと云うた處へ。そなたがお出やつて。妾がなんとお師匠へ顔があはさるゝもので御座る。是非出て會はせらるゝならば暇を下され。シテへいづれ是は尤もぢや。ひさ〳〵連添うた其方に暇をやるも氣の毒。また某を頼みに思うて遙々見えた人を會はずに歸すも氣の毒。是はまづ何としたものであらうぞ。女へイヤそれはよい仕様が御座る。シテへ何とするぞ。女へ最前平六はお死にやつたと云うたによつて。今のは平六が幽靈ぢやと云ひませう程に。こなたは幽靈の様に取繕うて出させられい。シテへ身共は終に幽靈になつた事

がない。女へこゝな人が。誰あつて幽靈になつた者が御座らうぞ。時の間を合はす爲ぢや。どうなりとも取繕うて出させられい。シテへそれならば聞いた事もあるによつて。取繕うて出う程に。其處の首尼を賴むぞ。女へ心得ました。早う出させられい。シテへ心得た／＼。中入する。女泣く／＼出る。アドへこれ／＼お内儀事にこそ。あれ程息災で居る平六を死んだといふ事があるもので御座るか。女へお前の事な申してばかり居られましたに。此樣な殘り多い事は御座らぬ。アドへあれ／＼まだおしやる。たつた今平六は是へ出られたでは御座らぬか。女へやれ／＼どれへ出られました。アドへ今此處へちらりと見えたは平六では御座らぬか。女へ扨も／＼。妾は夢になりとも見たいと思ひまするに。扨はお前をなつかしう思うて。平六が幽靈がな出たもので御座らう。アドへ扨はお死にやつたが誠で御座るか。女へ何しに僞りな申しませうぞ。アドへ扨も／＼。某は運も知れた。折角賴みに思ふ平六はお死にやる 此樣な迷惑な事は御座らぬ。このシカ／＼の内女は鉦鼓を持出て。女へ申し／＼。是は平六が朝夕手慣れた鉦鼓で御座る。持佛堂へ御出でなされて。平六が跡を弔うて下され。アドへ扨は是も形見になりましたか。逆さまな回向なれども。佛前へ參つて平六が跡を弔ひませう。女へ心得ました。アドへ旅人は。鉦鼓をならし女房と。鉦鼓をならし女房と。念佛まうし平六が。なき跡いざや弔はん。／＼。シテ一聲へあら有難の御弔ひやな。／＼。アドへ不思議やな平六が姿の。影の如くに現れたるは。イロ念佛の功力なるかや有難や。シテへ是は平六が幽靈なるが。御弔ひの有難さに。是迄現れ來りたり。アドへ扨は平六が幽靈なるかや。都にて見し時よりも。衰へ果つる無慘さよ。シテへ昔は花漆。今は年長け蠟色の。アドへ漆のばちもあたりたる。職の有樣懺悔せよ。シテへいで／＼さらば語つて聞かせ申さんと。地へ恥かしながら餓鬼道の。恥かしながら餓鬼道の。ぬしとなつて。青漆の如くなる淵に臨んで。漆漉に水を入れて飮まんとすれば。程なく火焰と燃えたつて。身は燒け漆となりたるぞや。／＼。シテへまた或時は布にまかれ。同へ捻木をいれてひた捻ぢに。捻ぢつめられば。あら心うるし刷毛の。化けそこなはゞ如何ならんと。風呂の小陰に入りにけり。塗籠他行といふ事も。／＼。此世よりこそ始まりたれ。

塗附

シテ 塗師
アド 大名
小アド 同

（入道具）

アドへこの邊りの者で御座る。いつもとは申しながら。當年の樣な目出度い年の暮は御座らぬ。いつも嘉例でお館たちへ歲暮の御禮に參る。爰に每年同道致す人が御座る。誘うて同道致さうと存ずる。シカ／＼。誠に。去年斯樣に罷り出た事な。昨日の樣に存じて御座れば。早や一年になつた。月日の立つは間の無い事で御座る。何かと言ふうちにこれぢや。ト言うて案内乞ふ。出る。常の如し。アドへ先づ以て目出度い年の暮で御座る。小アドへ仰せらるゝ通りで御座る。アドへ扨いつもの通り。お館たちへ御禮に參らうと存じて。御誘ひに參つた。小アドへ成る程お供申しませう。アドへそれならばさあ／＼御座れ。小アドへ心得ました。アドへ唯今も路次で獨り言に申して御座る。そなたと同道したを。間の無い樣に存ずれども。早や一年立ちました。

小アドへ光陰矢の如しと申すが、月日の立つには手間が入りませぬ。アドへさて何とお仕舞ひなされたか。小アドへ仕舞うたやら仕舞はぬやら、譯も無い事で御座る。そなたお仕舞ひなされたか。アドへいかな〳〵。烏帽子さへ塗直す隙もない程取込うで、しまふ段では御座らぬ。小アドへ誠に。そなたの烏帽子はいかう剝げて御座る。アドへ何といかう見苦しう御座るか。小アドへ餘程剝げましたさりながら、身共も烏帽子を塗り直さうと存じて、え塗り直せませなんだ。アドへ誠に、そなたの烏帽子も殊の外損じて御座る。小アドへ春になつたらば。言合はせて塗り直しませう。ト言うて居るうち。シテ出る。シテへ塗り物早漆塗直し。早塗師。然も上手です。アドへこれへ塗師が參る。この烏帽子を春塗直す為に近附きになりませう。小アドへ一段とよう御座らう。アドへなう〳〵。これ〳〵。シテへ私の事で御座るか。アドへ成る程そなたの事ぢやが。唯今塗物師の様に呼ばはつてお通りやるが、和御寮は塗(ぬり)師か。シテへなか〳〵。私は塗師で御座る。何なりとも御用が御座らば。仰附けられませ。アドへいや言葉を掛くるは別の事でない。お見やる通り、兩人の烏帽子が殊の外損じた、春にもなつたらば。塗直して貰ひ度いに依つて、近附きにならうと思うて、詞を掛けた。シテへそれは心易い事でこそ御座れ、春と仰せられうより。正月早々に召す様に、年内に塗り直させられたらよう御座らう。小アドへいや年内と申すは今日ばかりぢやぞや。シテへさればこそ唯今申す通り。早漆と申すは私の家ならでは御座らぬ。唯今塗つて。其のまゝ役に立つ事で御座る。アドへそれは重寶な事ぢや。それならば急に塗つて貰ひ度い。和御寮の宿を聞いて置いて、持たせてやらう。シテへいや宿へ遣さるゝに及びませぬ。即ち是處で塗つて進ぜませう。小アドへ是處で塗つても、其のまゝ役に立つか。シテへ全くそれが早漆の名譽で御座る。即ち是處で塗り直させらるゝと。早速お間に合ひまする。アドへこれはいか様名譽で御座る。何と是處で塗り直させませうか。小アドへいか様これはお舘たちへ。綺麗な烏帽子を着して參つたらば。よう御座らう。アドへそれならば、是處で塗直してたもれ。シテへ畏まつて御座る。先づ御兩所様共にお下に御座りませ。二人へ心得た。シテ塗道具を取出し。面白くシカ〳〵言ふ。アドへ何れこれは重寶な事ぢや。こち衆は方々にお舘たちの懇意がある程に。塗師細工を肝煎つてやらう。シテへそれは近頃忝う御座る。向後頼上げまする。小アドへその紙袋は何ぢや。シテへこれは砥の粉で御座る。お烏帽子が殊の外どか禿げが致したに依つて、地錆と申す事を致さねばなりませぬ。アドへ又それは何でおりやる。シテへこれは石漆(せしめうるし)で御座る。アドへさて烏帽子を脱いでやらうか。シテへいかな〳〵、お脱ぎなさるゝには及びませぬ。召しながら其のまゝで塗り直しまする。アドへそれは上手な事ぢや。シテへさらば地さびを致しませう。ト言うて一つ宛を持ちて地さびをする心持あり。シテへ地錆を致しませねば。漆がむらになりまする。アドへ扨々かひ〳〵しいなりぢや。その漆は何といふ漆ぞ。シテへこれは吉野で御座る。アドへそれは何に使ふぞ。シテへこれは上塗りに使ひまする。小アドへ色々の漆が入るものぢやなう。シテへそれ〳〵に使ひまするに依つて。むつかしう御座る。ト言うて一つまた塗る心。アドへ身共は漆に負くる。何とぞ顔へ着かぬ様に頼むぞ。シテへ着けてくれいと仰せられても。そつとも着ける事では御座らぬ。必ずお氣遣ひなされまするな。アドへ扨も〳〵。そなたの烏帽子は早や新しうなりました。小アドへそなたも美しう

なりました。シテへ先づ塗り仕舞ひました。さて風呂へ入れまする。かう御寄りなされませ。アドへ風呂とは何とする事ぢや。シテへ風呂と申す物に入れませねば。烏帽子が乾きませぬ。斯様の所では旅風呂と申す物が御座る。先づこれへお出でなされませ。ト言うて。舞臺の眞中へ兩人を寄せて。紙風呂を着せる。二人の烏帽子の中より黒き絲を通して。それを引出し。兩方をきつと結付ける。其ののちに塗師道具をかたづける。アドへいかうこれは窮窟なものぢや。シテへもそつと御堪忍なされませ。其のうちに漆が乾きまする。ト言うて。息をしかけて見る。小アドへまた見てたもれ。シテへせはしう仰せらるゝ。大方よう御座る。乾き切りました。風呂を取りませう。ト言うて。風呂を取る。二人引合うて。アドへこれは烏帽子が離れぬ。シテへどれ〳〵。離して進ぜませう。ト言うて兩方より引く。二人共あいた〳〵と言ふ。シテへ早う干る様にと存じて。しめしをきつう掛けたに依つて。ひついたものさうに御座る。ト言うて。棒を眞中へ入れて。こぢ離せども。離れぬ心なり。アドへやい〳〵。これは何とする。早う離してくれねば。お館たちへの禮も遲なはる。どうぞ思案はないかいやい。シテへかう取着いては離れぬと見えた。幸ひ松囃子も近附きました。拍子に掛かつて離して見ませう。各も囃させられい。アドへ烏帽子さへ離るゝ事ならば囃さう程に。どうぞ精を出して離してたもれ。シテへそれならば方々も信心なして囃させられい。二人へ心得た〳〵と。シテへ日本一の早漆が。烏帽子は塗りに塗つたれど。離すやうな知らいで。囃子物で離いた。げにもさあり。やよがりもさうよの〳〵。二人へいかにや〳〵塗師殿。お正月は近付く。お館たちの御禮に。烏帽子が無うて叶はぬ。早う離し給へや。これより段々繰返し囃す。後の留に二人こける。シテは烏帽子を棒にかたげて留むるなり。

【ね】

寝音曲（ねおんぎょく）

シテ　太郎冠者
アド　主人
（入道具）

アドへ此邊りの者で御座る。夜前太郎冠者の部屋の傍を通つて御座れば。高聲に謠の聲が致して御座る。呼出し様子を尋ねうと存ずる。ト云うて。呼出す。出づるも常の如し。汝呼出す別の事でない。昨夜汝はどれへいた。シテへされば其の事で御座る。夜前は友達どもが方へ夜咄に參りまして。それ故お迎ひにも次郎冠者をあげまして御座る。アドへ成程迎ひには次郎冠者が來た。謠をうたふ聲がした。あれは汝であつたか。シテへそれは私では御座りませぬ。たそ餘の者の聲とお聞違へなされたもので御座りませう。アドへいや〳〵。幼少より召使ふ汝が聲を。餘の者の聲と聞き違ふ事ではない。ありやうに云へ。シテへ何がお耳に入りましたぞ。それは物で御座る。アドへ物とは。シテへ唯今も申す通り。夜前は友達共の方へ夜咄に參りまして。したゝか御酒にたべ醉ひまして。歸つて女共が膝を枕に致して。わけもない事を一ふし二ふし謠ひました。これがお耳に入つたもので御座らう。アドへ成程それであらう。なか〳〵面白い事であつた。ちと身共に謠うて聞かせ。シテへいかな〳〵。私共の謠は。お聞きなさるゝ様な謠では御座りませぬ。アドへいや〳〵。殊の外面白い事であつた程に。是非とも謠うて聞かせ。シテへそのた御酒にでも醉ひまして。その醉ひまぎれにならば謠はれまする。なか〳〵素面では謠はれる事では御座りませぬ。アドへ扨は酒を飲まねば謠はれぬか。シテへまづ其様なもので御座る。アドへそれならば酒を取つて來て飲ませ

う程に　暫くそれに待て。シテへいや申し。御酒がたべたければ。私がお臺所へ參つて下されます。アドへいや。暫くそれに待て。シテへ申し〳〵。是は如何な事　迷惑の事を云出された。此度謠うたらば。今から節々謠ふであらう。何としたものであらう。イヤ思ひ出した。謠ひ様が御座る。（アド葛桶の蓋を。ひろげて持ち出る。）肩　アドへさあ〳〵太郎冠者。酒をとつて來た。シテへ是は御自身御苦勞な。御酒がたべたければ。お臺所へ參りまするに。アドへいや〳〵。謠が所望ぢやによつて自身持つて來た。さあ〳〵。一つ飲うで謠うて聞かせ。シテへ是は例の大盃が出ました。アドへ飲うせうと思うて。大盃を取つて來た。シテへ是で一つ下されたらば。惡うは御座りますまい。アドへさあ〳〵飲め〳〵。シテへ是はお酌慮外で御座る。アドへ苦しうない。（ト云うて。つぐ。シテうけてのむ。）シテへ扨も扨も結構な御酒で御座る。どの御酒で御座る。アドへそちに酒の吟味は賴まぬ。早う謠うて聞かせ。シテへ成程。追付け謠ひまする。さやうならばも一つ下されませう。アドへ何程なりとも飲うで謠うて聞かせ。シテへ是は毎度慮外に御座る。アドへ苦しうない。（ト云うて。シテ又うけて。笑ひなどして飲むなり。）シテへ扨も〳〵。たぶればたぶる程よい御酒で御座る。何とお前もちと上りませぬか。アドへ身共はそちが知る通り下戸ぢや。さあ〳〵早う謠うて聞かせ。シテへ是はまたせはしない事で御座る。それならばも一つ下されませう。アドへまだ飲むか。シテへ獻が惡う御座る。アドへ過ぎようぞよ。シテへ過ぎる程飲まねば謠はれませぬ。アドへそれならばも一つ飲うで。必ず謠へ。シテへちと輕う御つぎなされませ。アドへとても飲むならば。一度飲め。（ト云うて。又つぐ。シテこしますく〳〵と云うて。悦び笑ふ。）シテへ扨も〳〵。たぶればたぶる程結構な御酒で御座る。アドへヤイ太郎冠者。シテへヤア。アドへ早う謠はぬかいやい。シテへ扨々せはしう仰せらるゝ。その様にせはしう仰せられては。謠はるゝ事では御座らぬ。さやうならばも一つ下されませう。アドへイヤ愛な者が。いつ迄その様に飲むものぢや。最早酒を取るぞ。（ト云うて。盃をひつたくり。持ちて入るなり。）シテへ申し〳〵。これは又お氣の短い事で御座る。アドへさあ〳〵酒を飲ませた程に。早う謠うて聞かせ。シテへ扨御酒は下されましたが。私の謠にはまだ惡い癖が御座りまして。子持が膝を枕にして。寢て謠ひますれば聲が出まする。起きてゐては聲が出ませぬ。アドへ是はいかな事。酒を飲まねば謠はれぬと云ふによつて。酒を飲ますれば。又その様な事を云ふ。そちが女共を呼びにはやられまいし。その様な事を云はずとも。早う謠うて聞かせ。シテへさやうならば。物と致しませう。アドへ何とする。シテへ近日夫婦づれでおがりまして。その節謠ひませう。まづ今日は御ゆるされませ。アドへ是はいかな事。それ迄何と待たるゝものぢや。それならば。身共が膝を貸さう程に。寢て謠へ。シテへ御勿體ない。御主人の膝を枕にして。何と謠はるゝもので御座る。アドへいや。身共ぢやと思はず。そちが女共ぢやと思うて寢て謠へ。シテへあのお前をや。アドへなかなか。シテへお前のやうなこはいお顔を。何と女共ぢやと思はるゝもので御座る。アドへ是はいかな事。身共も云掛かつた事ぢやによつて。是非とも聞かねばならぬ。早う謠うて聞かせ。シテへさやうならば。近頃慮外ながら。お前を私が女共ぢやと存じて。寢て謠ひませうか。アドへその通りぢや。シテへさやうならば御ゆるされませ。アドへ苦しうない。是へ寄れ。（主のそばへより。膝を枕にして。）シテへアヽ醉うたり〳〵。厭と云ふものを大盃で三つ。女共ちと謠うて聞かせうか。ヤイ女共。ちと謠はうか。

こりや女共。ト云うて。主の顔を撫でる。主驚きて逃げる。 アド〽アヽこりや何とする。 シテ〽餘りお騒ぎなされまするな。只今のは私が女ぢやと存じて。ちとざれついた所で御座る。 アド〽扨々氣味の悪い事ぢやな。 シテ〽斯様に致されば聲が出ませぬ。 アド〽是非に及ばぬ。是へ寄つて謡うて聞かせ。 シテ〽さやうならば御ゆるされませ。 アド〽ゆるす〳〵。 シテ〽御ゆるされませ〳〵。ト云うて。又主の膝を枕にして。何にても小謡少しうたふ。 アド〽よいや〳〵。 シテ〽不調法を仕りました。アド〽扨々面白い事であつた。 シテ〽何のその様に御座りませう。 アド〽その體ならば。何と起きてゐて謡はれさうなものぢやなあ。 シテ〽されば。合點の參らぬ事で御座る。 アド〽此度はちと起きてゐて謡うてみよ。 シテ〽いや。起きてゐては一句が出ませぬ。 アド〽その上謡といふものは。行儀に起きてゐて謡ふものぢや。まづ此度は起きてゐて謡うてみよ。 シテ〽起きてゐては皆て聲が出ませぬが。 アド〽出いでも苦しうない程に。是非とも起きてゐて謡うてみよ。 シテ〽是非ともで御座るか。 アド〽なか〳〵。 シテ起きて謡ふ。聲の出ぬ所シカ〳〵。色々仕様あるべし。口傳。 シテ〽どうも出ませぬ。 アド〽出ぬか。 シテ〽さやうで御座る。 アド〽それならば。今度は立つてゐて謡うてみよ。 シテ〽是はいかな事。坐つてゐてさへ出ぬ聲が。何と立つてゐて出るもので御座る。 アド〽いや〳〵。立つてゐたれば。また出まいものでもない。是非とも立つてゐて謡うてみよ。 シテ〽其上御主人の前で。立ちはだかつて謡を謡ふといふ事は。つひに聞きました事が御座りませぬ。 アド〽それは苦しうない。早う謡うてみよ。 シテ〽御所望の事ぢやによつて。謡ひは謡ひませうが。皆て聲が出ませぬぞや。 アド〽出いでも苦しうない。 シテ〽これは父迷惑な事ぢや。ト云うて。また立つて謡ふ。聲の出ぬ所。色々工夫あるべし。 シテ〽あいた〳〵。 アド〽何とした〳〵。 シテ〽聲は出いで。病が出さうに御座る。 アド〽扨々合點のゆかぬ事ぢや。それならば。また身共が膝を貸さう程に。寢て謡へ。 シテ〽いやも寢ましてならば。何程でも謡ひませう。 アド〽最前のは餘り短い。今度はもそつと長い事を謡うて聞かせ。 シテ〽畏まつて御座る。ト云うて。又主の膝に寢る。謡玉の段よし。謡ふ内に。主そつと起してみる。聲出でず。下せば謡ふ。段々上げたり下したりする内に。取違へて。上げる時聲出し。下ると聲出ず。又。切の所になり。立つて舞ふ。主は脇座の方へのくなり。 アド〽やいそこなやつ。 シテ〽ヤア。 アド〽おのれ。その聲はどこから出た。 シテ〽アヽ違ひました。 アド〽あの横著者。やるまいぞ〳〵。ト云うて。追込み入るなり。又。苦しうない。もそつと謡へ。ト云うて入るもあり。

禰宜山伏（ねぎやまぶし）

シテ　山伏
アド　禰宜
小アド　茶屋
大黒

（入道具）

アド〽伊勢の御師で御座る。毎年都へ上り旦那廻りを致す。當年も上らうと存ずる。誠に。神明の御蔭で御座る。あだおろそかに存ぜう事では御座らぬ。天照太神宮の御神德によつて。いづ方へ參つても皆御崇敬なさるゝ事ぢや。イヤ是は茶屋殿。出さつしやれたか。 小アド〽是は父お上りか。 アド〽當年も亦上りまする。 小アド〽扨々御苦勞で御座る。まづ腰を掛けて休まつしやれ。 アド〽心得ました。ト云うて腰を掛ける。葛桶をアドシカ〳〵の内後見出しおく。 小アド〽さあ〳〵茶を一つ參れ。 アド〽どれ〳〵。扨々よい茶で。丁度飲み加減で御座つた。 小アド〽も一つ參らぬか。 アド〽いや。まづたべますまい。 小アド〽それならば仕舞ひませう。シテ次第にて出る。大峯かけを謡ふ。山伏の名宣りなどシカ〳〵。此類山伏事いづれも同音。少しも變る事なし。 シテ〽今

朝露のまゝなれば、咽が乾く。湯なりとも茶なりとも飲みたいものぢやが、やい茶屋。茶呉れい。小アドへ參りませ。（ト云うて汲んで出す。シテ飲みて熱き心持。）シテへ是は熱い。小アドへぬるうして進ぜう。これ／＼。シテへぬるやの／＼。是はぬるうて飲まれぬ。おのれは街道の茶屋をする程のやつが。茶の熱いぬるいを知りたらぬか。アドへハテよい加減進ぜさせられい。（シテ禰宜を見付くる。退けと云ふ事を顔にて二度程してみせる。同じ樣に顔つきして。合點せずして。立寄りアドを引立つる。茶屋シイ／＼と云うて。後へかくす。シテ腰をかけて。）シテへ茶屋。茶呉れい。小アドへ心得ました。（ト云うて一つ汲んで出す。シテ飲む。）シテへも脹ぢや。（ト云うて立つ。）小アドへそれならば仕舞ひませう。シテへ咽の乾きがやんだ。アドへ扨も／＼世には嚴な人があるもので御座る。（ト云うて。アドまた腰をかける。）小アドへ街道に居ればあの樣な者は度々御座る。シテへおのれは憎いやつの。身共がまだ姿を立去りもせぬに高腰を掛けをる。その過怠に晩の泊り迄この肩箱を持たせてゆかう。アドへなう茶屋殿／＼。小アドへまづ待たせられい。これは何事で御座る。シテへ最前から某が前とも憚らず高腰を掛けをる。その過怠に晩の泊り迄この肩箱を持たせてゆく。小アドへお持ちやる作法ならば持たせませう。まづ肩箱を私に預けさせられい。シテへどうあらうとも。早う持てと云へ。（小アド肩箱を預り。後見座に置き。）小アドへこれ／＼禰宜殿。そなたはあの樣な山伏に出會はせらるれば。肩箱を持たつしやる作法で御座るか。アドへいかな／＼。强力づれの肩箱を持つ作法はないと云うて下され。小アドへ心得ました。持つ作法はないと仰せありまする。シテへ扨々憎いやつぢや。惣じて山伏と云ふ者は。大峯山へ分入り。天下の御祈禱をもするによつて。いかなる貴人高人も下馬なさるゝ。何ぞやあのぬるい禰宜めが。某が前で高腰を掛けなるによつての事ぢや。そちが分では埒があくまい。身共が持たせう。小アドへまづ待たせられい。身共が其通り申しませう。何と今のを聞かせられたか。アドへ是で聞きましたが。我儘な事を仰せありまする。私どもゝ毎度神前に於いて。天下の御祈禱を致すによつて。貴人高人の上座をも塞ぎまする。すれば別に押しも押されもする事ではないと云うて下され。小アドへ押しも押されもする事ではないと仰せありまする。シテへ扨々憎いやつぢや。そちもよう聞け。山伏といふ者は。野に臥し山に臥し。岩木を枕とし。難行苦行捨身の行ひをするによつて。その奇特には。目の前を飛ぶ鳥をも祈り落す程の行力ぢやが。あのぬるい禰宜めにも。其樣な事がなるかと云うて尋ねて來い。小アドへ今のを聞かれたか。アドへ扨も／＼。無理な事を云ふ人で御座る。目の前を飛ぶ鳥をも祈り落すとやら云うて恩にきせおりまするが。それは山伏の役で御座る。又私どもゝ神前に於いては樣々の奇瑞も御座れども。それを云へば喧嘩かの樣になつて惡う御座る。とかく私は裏道から去なせて下され。小アドへいや待たせられい。戻しては結句濟みますまい。とかく是は何ぞ勝負になされたら良う御座らう。アドへ勝負とは何をする事で御座る。小アドへ某名作の大黑天を守りました。是を雙方へ祈らせて。行力の達したへ影向なさるゝ。その影向なされた方を勝に致しませう。アドへいかな／＼。あの山伏は不斷祈り祈禱にかゝつて居られまする。是はなりますまい。小アドへ氣遣ひをさせらるゝな。神は正直の頭に宿ると御座る。如何にしても最前からあの山伏の仰せある事は無理で御座る。大方そなたの勝になりませう。身共次第にして。是非とも勝負にさせられい。アドへそれならば祈つてもみませうか。小アドへそなたの勝たせられたならば。その御幣を

あの山伏に持たせませう。萬一負けさせられたらば。御大儀ながらあの肩箱を持たせられずばなりますまい。アド〽此上はどうなりとも茶屋殿を頼みまする。よい様にして下され。小アド〽心得ました。シテ〽何と持たすか。小アド〽兎角どうも埒があきませぬによつて。これは何ぞ勝負になされずば濟みますまい。シテ〽あのぬるい禰宜と勝負。をかしい。小アド〽でも埒があきませぬ。シテ〽して勝負には何をするぞ。小アド〽私名作の大黒を守りました。是を雙方へ祈らせまして。行力の達した方へは御影向なさるゝ。その御影向なされた方を勝に致しませう。シテ〽イヤ愛なやつが。惣じて山伏は物の怪のついたをこそ祈れ。大黒を祈つた事はない。小アド〽そなたは最前目の前を飛ぶ鳥も祈り落す程の行力ぢやと仰せあつたではないか。是を祈らせられずば其方の負になるぞや。シテ〽身共が負になるといふか。是非に及ばぬ。それならば祈らうが。あの禰宜も祈らうといふか。小アド〽成程祈らうとおしやりまする。則ちこなたが勝たせられたらば。その肩箱をあの禰宜殿に持たせませう。シテ〽そりやおんでもない事。小アド〽又負けさせられたらば。不承ながらあの御幣を持たせられずばなりますまい。シテ〽それは其時の仕儀によらう。まづその大黒を連れて來い。小アド〽心得ました。ト云うて。楽屋へ入る。其内にアドそつと逃げうとする。シテそりを打ちきめつける。二度程する。二人とも仕様あるべし。小アド大黒をつれて出で。葛桶に腰掛けさせる。小アド〽扨大黒天を守りました。祈らせられい。アド〽それへお祈りなされませぬか。シテ〽祈りならう。小アド〽まづ祈らせられい。アド〽心得ました。謹上三供再拜〳〵。敬白。それ天照おほん神と申すは。我朝の宗廟として諸神これを敬ひ給ふ。唯今の大黒天も神明の加護疑ひなくば我等が方へ影向ならせ給へと。丹誠無二に祈るものなり。謹上三供再拜〳〵〳〵。ト拍子にのりて云ふ。大黒うつる。小アド〽知れました〳〵。アド〽さらば持たせませう。小アド〽持たさせられい。シテ〽何の持たせう。まだ身共が祈りもせぬものを。アド〽お祈りなされませ。それ山伏を云ふ。小アドへの應答もあり。此類山伏狂言何れも同じ事。ボロヲン〳〵と云うて祈る。大黒身をかへてゐる。シテ所々大黒の袖を引く。大黒杖にてシテを打つ。小アド〽知れました〳〵。早う持たさつしやれ。アド〽持たせませう。シテ〽何の持たせう。最前から茶屋めも。あのぬるい禰宜めが贔負をしをる。此上は相祈りにせう。アド〽いや相祈りには及びませぬ。シテ〽祈るまいか。小アド〽ハテ祈らつしやれ。アド〽心得ました。いよ〳〵神明の加護疑ひなくば。我等が方へ影向ならせ給へと。丹誠無二に祈るものなり。謹上三供再拜〳〵。また初めの通り祈る。大黒うつる。シテ〽いかに悪心大黒なりとも。烏の印を結びかけ。三つお山に頼みをかけ。いろはにほへとんと祈るなら。などかちりぬるをわかなれ。ト云ふ所。印を結び祈る。橋の下の菖蒲を云ふ。大黒は禰宜の拍子に合せてうつる。シテ大黒の袖を引く。大黒杖にて打つ。小アド〽禰宜殿。その御幣を持たさつしやれ。アド〽心得ました。持たせませう。シテ祈り〳〵逃げる。大黒杖にて追込み入る。シテゆるせ〳〵と云うて逃入る。アド小アド後よりシテを追込み入るなり。

【は】

庖丁聟(はうちやうむこ)

シテ　聟
アド　舅
小アド　太郎冠者
教人
女
(入道具)

アド〽この邊りの者で御座る。今日は最上吉日なれば。聟がわする筈で御座る。それに

就き。太郎冠者を呼出し申し付ける事がある。太郎冠者あるか。（出るも常の如し。）アド〽れんなう早かつた。汝呼す出す別の事でない。今日は最上吉日ぢやに依つて聟が見ゆる。云付けた物は用意したか。　小アド〽成程悉く用意致して御座る。　アド〽見えたらば。此方へ知らせ。　小アド〽畏まつて御座る（つめる。常の如し。）　シテ〽舅に可愛がらるゝ花聟で御座る。今日は最上吉日で御座るに依つて。聟入を致さうと存じて。方々で借り調へて。やう／＼と是程迄には出立つて御座る。又あの聟入と申すものは。殊の外式作法のむつかしいものと承つて御座る。爰に誰殿と申して。物事御巧者なお方が御座る。是へ参つて。聟入の式作法を習うて参らうと存ずる。先づ急いで参らう。誠に。内に御座ればよいが。内にさへ御座つたならば。身共が申す事ぢやに依つて。定めて教へて下さるゝで御座らう。何かと云ふ内に是ぢや。先づ案内を乞はう。（ト云うて。案内乞ふ常の如し。）　ヲシヘ〽エイ爰な。先づは綺麗な出立ちでおりやる。　シテ〽何とよう御座りますか。　ヲシヘ〽わごりよ是へ来始つてから。終に見ぬ綺麗な出立ちでおりやる。　シテ〽よいお目利で御座る。何を隠しませう。私は今日聟入を致しまする。

ヲシヘ〽何ぢや。聟入をする。　シテ〽なか／＼。　ヲシヘ〽それはめでたい事ぢや。　其様な事と知つたらば。人を以てなりとも申さうものを。曾て存ぜなんだ。　シテ〽御存じない筈で御座る。今日唯今の事で御座る。　ヲシヘ〽何なりとも用があらばおしやれ。　シテ〽早速御無心申しませう。　ヲシヘ〽何でおりやる。　シテ〽あの聟入と申すものは。式作法のむつかしいものと承つて御座る。お前には簡々聟入をなされて御巧者に御座らう。教へて下され。　ヲシヘ〽わごりよは人聞き悪い事をおしやる。　身共が何時その様に簡々聟入をした事がある。　シテ〽でも路次でお目にかゝつて。どれへお出でなさるゝと申せば。舅の方へ／＼行くとは仰せられぬか。　ヲシヘ〽それは舅の方へ時折々の見舞でこそあれ。聟入と云ふものは。一代に一度ならではせぬ物でおりやる。　シテ〽扨は聟入と申すものは。一代に一度ならではせぬもので御座るか。　ヲシヘ〽なか／＼。　シテ〽すれば私は麁相を申して御座る。舅殿の方へお出でなさるゝ度毎を。聟へと存じて御座る。　ヲシヘ〽お知りやらねば尤もぢや。さて聟入の式作法が習ひたいか。　シテ〽どうぞ教へて下され。　ヲシヘ〽その様な事は空では覚え

ぬ。物の端に書いておいた。見せておませう程に。暫くそれにお待ちあれ。　シテ〽畏まつて御座る。　ヲシヘ〽これはいかな事。世にはうつけた者がある。聟入の式作法を存ぜいで習ひに参つて御座る。各の御笑ひ草に。散々なぶつて返さうと存ずる。（ト云うて。書を取りに入るなり。）　なう／＼おいやるか。　シテ〽これに居まする。　ヲシヘ〽さて見ておりやるが。　大昔。中昔。當世様と云うて。聟入の式作法が三通りある。何れが習ひたいぞ。　シテ〽大昔と申すは餘り古う御座る。また中昔と申すもはや昔で御座る。何事も當世様／＼と申す程に。當世様の聟入を教へて下され。　ヲシヘ〽わごりよは聟入をすれば。分別迄が上つておりやる。當世様の聟入は中にも心易い。教へてやらう。　シテ〽それは忝う御座る。　ヲシヘ〽わごりよは物を書くか。　シテ〽私は不調法に御座る。　ヲシヘ〽お内儀は書けるか。　シテ〽是も書くと申す程の事は御座らねども。雀の踊足やみゝずのぬたくつた様な事は書きまする。　ヲシヘ〽それならばざつと済んだ。是はかな事ぢやに依つて随分よめる。　則ち其内に聟入の式作法が書いてある。それを読うで貰はしめ。　シテ〽扨はこの内に。聟入の式作法が書いて御座るか。

ヲシヘ〽さうさへおしやれば。物知りぢやと云うて褒める事ぢや。シテ〽忝うこそ御座れ。あの方へ參つたらば。引出物が數多御座らう。取つて歸つてお裾分を申しませう。ヲシヘ〽必ずそれを待つ事でおりやる。シテ〽もうかう參る。ヲシヘ〽何とお行きあるか。シテ〽なか〳〵。ヲシヘ〽ようおりやつた。シテ〽ハア。シテ〽なう〳〵嬉しや〳〵。ざつと埒があいた。先づ急いで歸らう。誠に。あの人の樣な物知りは御座らぬ。いつ何時何を申して參つても。それは知らぬと仰せられた事がない。今日はあの人のお蔭で。ざつと聟入を仕濟ましたといふものぢや。何かと云ふ内に戾つた。なう〳〵。これのう居さしますかおいやるか。女〽今めかしや〳〵。わらはを呼ばせらるゝは何事で御座る。シテ〽何事と云ふ事があるものか。今日は最上吉日ぢやに依つて聟入をする。わごりよは身拵へがよいか。女〽成程わらはゝ拵へがよう御座る。シテ〽それに就いて。そなたは是が讀めるか。女〽どれ〳〵。是はかな事ぢやに依つて。隨分と讀めまする。シテ〽則ち聟入の式作法が其内に書いてある。あれへいて讀うでたもれ。女〽心得ました。シテ〽追付け行かう。さあ〳〵お行きあれ。女〽さて今日は。定めてあの方には待兼ねて居らるゝで御座らう。シテ〽身共は初めて行く事なれば。まどもかきも目ばかりぎろ〳〵してあらうと思へば。いかう恥かしい。女〽何のよそ外へ行くではなし。何の恥かしい事が御座らう。シテ〽して程は遠いか。女〽何かと云ふ内に是で御座る。シテ〽それならば身共は袴を着。出う程に。わごりよは直ぐに通らしめ。女〽心得ました。シテ〽さて身共は。この袴と云ふ物を終に着た事がない。先づ出して見よう。扨も〳〵是は長い物ぢや。是は先づどうして着る物ぢや知らぬ。此樣な事ならば。とくと習うて來ればよかつた物を。ト云うて色々仕方口傳。女〽太郎冠者來たは。小アド〽ようお出でなされました。女〽とゝ樣、來ました。アド〽おごう。ようおりやつた。さて聟殿は。女〽表に袴を着て居られまする。アド〽袴に及ばぬ。太郎冠者。聟殿に。お袴には及びませぬ。かうお通りなされいと云へ。小アド〽畏まつて御座る。申し〳〵。お前は聟殿で御座るか。シテ〽先づその樣な者ぢや。小アド〽お袴には及びませぬ。かうお通りなされいと申しまする。シテ〽追付け參らうとおしやれ。小アド〽畏まつて御座る。追付け參らうと仰せられまする。アド〽是は何をなして居らるゝ。ヤイ〳〵。早うお出でなされいと云へ。小アド〽畏まつて御座る。申し。早うお出でなされいと申しまする。以前の通り。都合三度。シテ袴を着て出る。アド〽初對面で御座る。シテ〽不案内に御座る。シテ〽早々參る筈を。何かとおそなはつて御座る。アド〽聟殿は豫てお暇(ひま)なしと承つて御座る。ようこそ御座つたれ。太郎冠者。盃を出せ。小アド〽畏まつて御座る。お盃持ちました。アド〽それへ參らぬか。シテ〽先づ參つて下され。アド〽それならば。これから食べて進ぜう。シテ〽それがよう御座らう。アド〽太郎冠者。つげ。小アド〽畏まつて御座る。アド〽チツトある。是を聟殿に進じませう。シテ〽頂きませう。アド〽たべよごして御座る。シテ〽苦しう御座らぬ。太郎冠者。ついで呉れい。小アド〽畏まつて御座る。シテ〽辛(から)し〳〵。茨を蓮茂木にした樣な酒ぢや。アド〽からいが惡くば。甘いを進ぜませうか。シテ〽私はこのからいがよう御座る。アド〽聟殿は一つ參るか。シテ〽一つ食べまする。アド〽それはよい事ぢや。も一つ參れ。シテ〽それならばも一つ下されませう。又ついで呉れい。小アド〽畏まつて御座る。丁どおがりませ。

うけて呑む。　シテ〽たぶればたぶる程よい御酒で御座る。是を慮外ながら舅殿へ上げませう。アド〽頂きませう。舅呑んで。　アド〽おごうへさゝう。　女〽頂きませう。　アド〽わごりよも一つお飲みあれ。女うける。　シテ〽さて舅殿。おごうのわせました當座は。うひ〳〵しいで御座つたが。只今は馴染が重なりまして。私を叱つてばかり居られまする。　アド〽惡い事があらば。遠慮なう仰せられて下され。　シテ〽いかな〳〵。惡い事はそつとも御座らぬ。先づ第一夫婦仲がよう御座る。　アド〽それは何より喜ばしい事で御座る。　シテ〽夫婦仲のよい證據が御座る。おごうは此中しきりに青梅を好きまする。女しいと云うて。　女〽其樣な事は云はぬ物で御座る。舅笑ふ。　アド〽聟殿はさゝくな人ぢや。　女〽是をとゝ樣へ上げませう。　アド〽身共が頂かう。扨も一つ參らぬか。　シテ〽最早食べますまい。　アド〽それならば仕舞ひませう。　シテ〽それがよう御座らう。　アド〽太郎冠者。盃を取れ。云附けた物を是へ出せ。　小アド〽畏まつて御座る。アド〽聟殿それを一手(ひとて)遊ばせ。　シテ〽是を私に切れて御座るか。　アド〽なか〳〵。　シテ〽私は不調法に御座る。御免されませ。　アド〽ならせられぬと云ふ事は

御座るまい。それは此所の式作法で御座る。どうでも苦しう御座らぬ。是非とも一手遊ばせ。　シテ〽扨は今日の式作法で御座るか。アド〽なか〳〵。シテ〽それならば。ちとくつろいで參りませう。アド〽兎も角もさせられい。シテ〽おごう〳〵。ちよつとおりやれ。　女〽何で御座る。　シテ〽爰が肝心の所ぢや。最前のを讀うでおくりやれ。　女〽心得ました。何々。角力の書の事。一つ扇子をぬいて下に置くべし。シテ〽何ぢや。扇子を下に置けか。女〽なか〳〵。　シテ〽扇を下に置いたは。　女〽刀もぬいて下に置くべし。　シテ〽そりや〳〵。刀もぬいて下に置くべし。　女〽袴も取るべし。シテ〽なに。袴を取れ。　女〽なか〳〵。　シテ〽やれ〳〵嬉しや〳〵。最前から窮屈でならなんだ。此樣な事ならばもそつと早く讀んで貰へばよかつた物を。それ〳〵袴もぬいだ。　女〽小袖もぬぐべし。　シテ〽やア小袖もぬげか。　女〽その通りで御座る。　シテ〽是をぬげばみたむない。是はちと斟酌ぢや。　女〽でも書に書いて御座る。　シテ〽是非に及ばぬ。小袖もぬいだぞ。　女〽相手をようで角力を取るべし。シテ〽何ぢや。角力を取れか。　角力は身共が得物ぢや。ヤ一番取らう。アド笑ふ。　アド〽あれ

は何の眞似ぢやいなあ。　小アド〽されば何で御座りませうぞ。　アド〽聟殿は律義(りちぎ)ぢやと聞いたし。誰そなぶつておこしたものであらう。身共もあの樣にあしらはずば。却つて物知らずぢやと云うて笑はれう。身共もあの樣にあしらうて踊さう程に。下々の者に笑ふなと云へ。　小アド〽畏まつて御座る。　アド〽汝も笑ふな。是へ寄つて身拵へをせい。小アド〽畏まつて御座る。　アド〽太郎冠者。行事をせい。手合三度。とゞ違へ組付く。　女〽是はいかな事。喧嘩になつた。これ〳〵。料簡のさせられ〳〵。　シテ〽身共が足を取ると云ふ事があるものか。舅の足を取れ〳〵。　女〽心得ました。料簡のさせられ。　アド〽こりや〳〵。身共が足を取ると内へは寄せぬぞよ。聟の足を取れ〳〵。　女〽先づ料簡させられいの〳〵。シテ〽ヤイ身共が足を取ると去るぞよ。　女〽と云うて何としませう。　シテ〽舅の足を取れ。　女〽心得ました。シテ〽女共。小股を取れ〳〵。　おでつ參つたの。　女〽なういとしい人。ちやつと御座れ。シテ〽心得た〳〵。アド〽ヤイ〳〵。夫婦して此樣にしをつた。來年から祭にはよばぬぞよ。

萩大名（はぎだいみやう）

シテ　大名
アド　太郎冠者
小アド　茶屋
（入道具）

シテ〽遙か遠國の大名。永々在京いたす所。訴訟悉く相叶ひ。安堵の御教書頂戴し。あまつさへ御暇までを下され。近日本國へ罷下る。此の由を申聞かせ悦ばせうと存ずる。（ト言うて呼出す。）（又太郎冠者出る。大名狂言同斷。）シテ〽念なう早かつた。汝呼出す別の事でない。（永々在京の事を言ふ。）アド〽内々斯様な儀を待ちえましたに。斯程お目出度い事は御座らぬ。シテ〽目出度いなあ。アド〽さ様で御座る。シテ〽さて在京中氣を詰めたに依つて。ざつと一遊參して立たうと思ふが何と有らう。アド〽御意も無くば申上げうと存じて御座る。一段とよう御座りませう。シテ〽それならばどれへいたものであらう。アド〽さればどれがよう御座りませうぞ。シテ〽アド〽どれがよからうなあ。シテ〽どれこれと仰せられうより。東山邊は何とで御座らう。シテ〽東山にとつても何處がよからう。アド〽別して清水の觀世音へ、お參りなされいて叶はぬ事が御座る。シテ〽それは又どうした事ぢや。アド〽御在京中事ゆゑ無うお勤めなさるゝ様にと存じて。私が清水の觀世音へ日參を致しまして御座る。シテ〽其の様な事なら。御禮かた〳〵參らうわいやい。アド〽幸ひ坂に存じた茶屋が御座る。これによい庭を持ちました。折節萩の花が盛りで御座る。之をもお目に掛けませう。シテ〽それは猶よい慰みであらう。アド〽さり乍ら。何れもあれへお腰を掛けられますれば。萩の花につけて御當座をなさるゝ。あはれ頼うだお方にも御當座がなりませうか。シテ〽なに當座。アド〽なか〳〵。シテ〽當座〳〵。當座とは何の事ぢや。アド〽歌をお詠みなさるゝ事で御座る。シテ〽其の様なむつかしい事ならば。清水ばかりへ參らうわいやい。アド〽どうぞお目に懸け度いもので御座るが。何と教へたらばなりませうか。シテ〽いか樣。習うてならぬと言ふ事はあるまい。アド〽此の中邊りの若い衆が。あれへいて詠まうとあつて。歌の下讀を召されたを承つて御座る。之をお前に教へませうぞ。シテ〽してそれはむつかしい事か。アド〽別にむつかしい事でも御座らぬ。七重八重。九重とこそ思ひしに。十重咲き出づる萩の花かな。と申す事で御座る。シテ〽してそれは誰が言ふ事ぢや。アド〽誰が言ふもので御座る。お前が仰せらるゝ事で御座る。シテ〽あの身共の一人（ひとり）してや。アド〽なか〳〵。シテ〽あゝ長やの〳〵。其の様ななま長い事が。五年や三年で何と覺えらるゝものぢや。アド〽はて氣の毒な事で御座る。何と物によそへたらば成りませうか。シテ〽何れよそへ物に依つて成らうか。アド〽例へば扇の骨が拾本御座る。七重八重と申す時は。七本と八本とお目に懸けませう。シテ〽出來た。アド〽九重で九本。シテ〽したり。アド〽十重咲きでばらり。（シテ笑ふ。）シテ〽扨々汝は才覺な者ぢや。それでならぬと言ふ事はあるまいが。まだ何やら有つたぞよ。アド〽いや。も何も御座らぬ。シテ〽いや〳〵。まだ何やら有つた。アド〽エイそれは。萩の花かなと申すばかりの事で御座る。シテ〽それ〳〵、それがどうも覺えられぬ。アド〽アノこれ程の事が成りませぬか。シテ〽思ひもよらぬ事ぢや。アド〽お前もよつぽど物覺えが惡う御座るなう。シテ〽どうぞそれも何ぞよそへ物は有るまいか。アド〽いや常々私をお叱りなさるゝ時。アノすればはぎ

ばかり伸び居つてと仰せらるゝ。慮外ながら。其の時私の面ゝ膳をお目に懸けませうぞ。シテ〽覺へたり〳〵。如何に身共が物覺えが悪いと言うて、それで覺えぬと言ふ事は有るまい。アド〽それならばざつと濟みました。シテ〽追附け行かう。さあ〳〵。來い〳〵。アド〽はあ。シテ〽さて今日は汝が蔭でよい庭を見物すると言ふものぢや。アド〽イヤまたあの様な庭を御覧なさるれば、お國許へのよいお土産で御座る。シテ〽何れ國許へよい土産ぢやなあ。アド〽さ様で御座る。シテ〽して程は遠いか。アド〽何かと申すうちにこれで御座る。お出での由を申しませう。暫くそれにお待ちなされませ。シテ〽心得た。アド〽ものもう。案内もう。小アド〽いや表に案内が有る。案内とは誰ぞ。アド〽私で御座る。小アド〽えい太郎冠者殿。これはまた御参詣で御座るか。アド〽今日は頼うだ者を同道致して御座る。こなたの庭を見度いと申さるゝ程に。どうぞ見せて下されい。小アド〽易い事では御座れども。今日はいかう不掃除に御座るに依つて。なりますまい。アド〽其の段はそつとも苦しう御座らぬ。はる〳〵参られて御座る。どうぞ見せて下され。小アド〽それならば。かう御通りなされと仰せられい。アド〽心得ました。かうお通りなされと申しまする。シテ〽心得た。して亭主は内に居るか。アド〽成る程内に居りまする。即ちこれが亭主で御座る。シテ〽これが亭主か。アド〽さ様で御座る。シテ〽亭主不案内におりやる。小アド〽見苦しい所へお腰をまげられて。有難う存じまする。シテ〽常々太郎冠者が参つて。雑作になると申す。過分におりやる。小アド〽これは結構な御挨拶で御座る。シテ〽太郎冠者床机をくれい。アド〽畏まつて御座る。お床机。シテ〽太郎冠者。汝が常々ぬかす庭はこれか。アド〽これで御座る。シテ〽よい庭ぢやなあ。アド〽よい庭で御座る。シテ〽亭主。物好きようおりやる。小アド〽何と御座りませうぞ。シテ〽この前の白いは砂か。小アド〽砂で御座る。シテ〽これはどれから参つた。小アド〽備後砂で御座る。シテ〽なに豊後砂。アド〽しい。備後砂名物。シテ〽備後砂名物。あゝ白い砂ぢやなあ。アド〽綺麗な砂で御座る。シテ〽さながら道明寺干飯を見る様な。アド〽しい。亭主が聞きます。シテ〽亭主。あの石は海石か山石か。小アド〽山石で御座る。シテ〽身も山石と見ておりやる。小アド〽よいお目利で御座る。シテ〽太郎冠者。よい石ぢやなあ。アド〽よい石で御座る。シテ〽あの握拳程ひよいと出た所が面白いなあ。アド〽何れ面白う御座る。シテ〽あれを打ちかいて火打石にしたらばよからう。アド〽しい。亭主が聞きます。シテ〽向うの木は梅か。小アド〽梅で御座る。シテ〽花は白か赤か。小アド〽白梅で御座る。シテ〽何ぢや。白なんぢや。アド〽白梅とは白い梅の事なり。シテ〽白梅とは白いむめの事なり。こりや誰も知つた事ぢやなあ。アド〽さ様で御座る。シテ〽あれ〳〵。あの枝のつと出でついと立ちのいた所が面白いなあ。アド〽面白う御座る。シテ〽あれを物にしよ。アド〽何となされまする。シテ〽引切つて茶臼の引木にしよう。アド〽しい。亭主が聞きまする。小アド〽なう〳〵太郎冠者殿。御用ならば差上げませうと仰せられて下され。アド〽あれはおざれ事で御座る。シテ〽なう〳〵亭主。これはざれ言。引木にしようと言ふとも。お切りやるなと言ふ事ぢや。小アド〽いかな〳〵。切る事では御座らぬ。シテ〽やい太郎冠者。アド〽はあ。シテ〽あの向うにぱつと赤いは何ぢや。アド〽あれが萩で御座る。シテ〽あれが萩か。アド

へさ樣で御座る。シテへあゝ見事ぢやのう。小アドへ宮城野で御座る。シテへ何ぢや。土産にせい。アドへしい。宮城野の萩名物。あゝ赤い花ぢや。あの赤い花がこの白い砂の上へぱつと散つた所が。さながら赤飯を見る樣な。アドへしい。さもしい事を言はぬもので御座る。小アドへ太郎冠者殿。何れもこれへお腰を掛けらるれば。萩の花に就いて御當座をなさるゝ。あはれ頼うだお方にも。御當座をなされて下されうならば。有難う御座ると。仰せられて下され。アドへ心得ました。申上げまする。シテへ何事ぢや。アドへ今のをお聞きなされましたか。シテへ何な。アドへ當座。シテへなに當座〳〵。アドへ歌々。シテへえい當座とは歌の事か。アドへさ樣で御座る。シテへ身も歌は好きぢや。詠まう。小アドへそれは有難う存じまする。シテへ太郎冠者。詠まうなあ。アドへお詠みなされませ。シテへ詠まう〳〵。先づものと致さう。小アドへ何とで御座る。シテへ七本八本。アドへしい。小アドへ七本八本。アドへ七重八重。シテへ亭主今のは違ひました。小アドへ何と違ひました。シテへ七重八重でおりやる。小アド

へこれは五つ文字が面白う御座る。シテへ九本。小アドへ九本。アドへしい。九重とこそ思ひしにて御座る。シテへ亭主また違ひました。九重とこそ思ひしにておりやる。小アドへこれは面白う御座る。シテへ段々と面白うなる。へはらりと參らう。小アドへはらりと參らう。笑ふ。アドへしい。十重咲き出づるで御座るわいなう。あの樣な人には恥與へたがよう御座る。シテへはて面目も無い。また違ひました。小アドへはてよう違ひますのう。シテへ十重咲き出づるで御座る。へ小アドへ先づ吟じて見ませう。シテへどうなりとも召され。小アドへ七重八重。九重とこそ思ひしに。十重咲き出づる。これは面白う御座る。シテへ何と面白いか。小アドへ面白う御座る。シテへさらば。小アドへあゝまうし〳〵。今の歌の後を仰せられずに。どれへお出でなさるゝ。シテへ今の歌の後は太郎冠者がどれへやらいた。小アドへあゝこれ〳〵。今の歌の後に何の太郎冠者がいるもので御座る。さあ〳〵早う仰せられい。シテへ今の歌の後は七重八重。小アドへさればこそ七重八重。九重とこそ思ひしに。シテへそれ〳〵。小アドへ十重咲き出づる。シテへはてよい覺えなう。小アドへさ。其

後を仰せられと申す事で御座る。シテへむゝ此の後か。小アドへなか〳〵。シテへもうようおりやるわいなう。小アドへあゝまうし〳〵。よいと仰せられては。字が足りませぬわいなう。シテへ何ぢや。字が足らぬか。小アドへなか〳〵。シテへ字が足らずばよい仕樣が有る。小アドへ何となさるゝ。シテへ十重咲き出づる〳〵〳〵。と足る程言うて置かしめ。小アドへそれでは字が短う御座るわいなう。シテへ短くば。なほよい仕樣が有る。小アドへ何となさるゝ。シテへ十重咲き出づる引く と。足る程引かうまでよ。小アドへ言語道斷。こゝな者が某をなぶると見えた。此の歌の後を言はねば。どつちへもやらぬぞ。シテへ何ぢや。此の歌の後を言はねばどつちへもやらぬ。小アドへなか〳〵。シテへそれは誠か。小アドへ誠ぢや。シテへ眞實か。小アドへおんでもない事。シテへいや今思ひ出した。小アドへ何と。シテへ物と。小アドへ何と。シテへ十重咲き出づる。小アドへ十重咲き出づる。シテへ太郎冠者が向ふずれ。小アドへあのやくたいもない。とつとゝお行きやれ。シテへ面目もおりない。ト言うて。留め入るなり。

博奕十王

シテ　博奕打
アド　閻魔大王
立衆　鬼
（入道具）

アド立衆次第へ地獄の主閻魔王。/\。遷寥にいざや出でうよ。アドへこれは地獄の主閻魔大王とは我が事なり。今は娑婆の人間が賢うなつて。八宗九宗に法を分け。禪宗ぢやと云うては極樂へぞろり。淨土宗ぢやと云うては極樂へぞろり。ぞろり/\とぞろめくに依つて。地獄の飢饉以ての外ぢや。さるに依つて此度。閻魔大王獄卒共を召連れ。自身六道の辻に出で。罪人も來たらば責落し。取つて服せばやと存じ候。道行住馴れし。地獄の里を立出でて。同へ/\。足に委せて行く程に。/\。六道の辻に着きにけり。アドへ急ぐ程に六道の辻に着いた。獄卒共をるか。罪人が來たらば責落せ。必ず油斷するな。ト云付ける。常の如し。アド小鬼皆々脇座へ行く。後見葛桶を出す。アド腰かける。小鬼金札鏡を前に立てる。次第シテへ人の眼をくらまかす。/\。罪人の果ぞかなしき。詞これは娑婆にかくれもない。博奕打の上手で御座る。壽命の程も定まりぬるか。無常の風にさそはれ。唯今冥途に赴き候。道行住馴れし。娑婆の名殘を振り捨てて。/\。足に任せて行く程に。六つの道にも着きにけり。詞これに道があまたある。どれへ參つてよからうぞ。まづそろり/\と參らう。前鬼へ俄に人臭うなつた。後鬼へどれ。しきりに人臭うなつた。前へさればこそ罪人ぢや。急いで責落さう。後へ一段とよからう。前へいかに罪人。二人へ急げとこそ。ト云うて。二人鬼せめ有り。シテ是處彼處逃げる。シテへそのやうになさるゝものでは御座らぬ。最早宥させられい。前へさて汝は何者ぢや。シテへ私は娑婆にかくれもない博奕打で御座る。前へそれこそ重い罪人ぢや。急いで閻魔大王の御前へ出さう。後へ一段とよからう。前へいかに罪人。後へ急げとこそ、ト責有りつせめ落すつた王の前に出すなり。アドへやい/\。この罪人は何者ぢや。前へ娑婆にかくれもない博奕打で御座る。アドへどれ/\。誠に淨玻璃の鏡に映つた。扨々おのれは極重惡人ぢや。則ち鐵札の表を讀うで聞かせう。よう聞け。まづそちは人をだまし。金銀米錢を取り。まだその上に家財を取り。剩さへ人の着てゐる衣類をはぎ取つた事などは。度々の事ぢや。この罪科は重い事ぢやが。何として免かれうと思ふか。シテへいや/\それは私ばかりでは御座らぬ。時の勝負に依つて。私の勝つ時もあり。又相手も勝ち。互ひに相對を以て取りやりを致す。則ち娑婆の遊び事で御座れば。全く科にならう事では御座らぬ。アドへさては汝ばかり博奕を打つではない。外にも博奕を打つ者があるか。シテへなか/\。娑婆に於て正月。或は月待ち日待ちなどゝ申すには。老いたるも若きも高いも低いも。皆寄り集つて。博奕を致して遊ぶ事で御座る。アドへそれでは聞いた程の科ではない。何と博奕はいかう面白いか。シテへ終になされました事は御座りませぬか。アドへいやも見た事も咄を聞いた事もない。シテへ博奕の勝負程面白いものは御座りませぬ。アドへ何と博奕を打つて見せぬか。シテへ相手さへ御座らば。致してお目にかけませう。アドへ何と一人ではならぬか。シテへ一人では勝負が知れませぬ。アドへやい/\鬼ども。博奕を知つたか。皆へいづれも存じませぬ。アドへ身共もかつて知らぬに依つて氣の毒ぢや。シテへ別の事も無い事で御座る。教へましたらば。早速覺えさせられさうなもので御座る。アドへどうぞ教へてくれい。シテへま

づこれを御覽なされませ。アドへそれは何ぢや。シテへこれは骰と申すもので御座る。則ち一から二三四五六まで御座る。これは私が打ち出しまする。譬へば一となりとも。六となりとも仰せられて。その目が出ましたれば。おまへの勝になりまする。アドへ大方覺えた。さて勝負の樣子はどうぢや。シテへ私が勝つて御座らば。何なりとも此方へあたひを貰ひませう。又お前が勝たせられたらば。何なりともあたひをお取りなさるゝ事で御座る。アドへいや〳〵。身共は何もあたひは要らぬ。某が勝つたらば。おのれを取つて服するぞ。シテへそれはともかくもで御座る。なされまするならば。お相手になりませう。アドへやい〳〵鬼ども。博奕を打つ程に。出て見物せい。小鬼へ畏まつて御座る。シテへさて目は何になされまするぞ。アドへ目は一にせう。シテへ賭物をお出しなされませい。アドへ後で何なりともやらう。まづ打て。シテへそれならば打ちませう。（ト云うて。骰を打つ。小鬼左右よりきばりて居る。此の所十王いろ〳〵の心掛けあり。打出す。皆力をおとす。）シテへこれは私の勝で御座る。も一度なされまするか。アドへまたするとも。シテへ賭物は何で御座る。アドへ度々せはしい事ぢや。この玉の冠をかけう。シテへ目は何で御座る。アドへやはり一ぢや。シテへさあ打ちまする。（ト云うて打つ。又勝つ。）シテへ此度は五が出ましたに依つて。私の勝で御座る。（それより金札。鏡。裝束迄かける。目を問ふ。やはり一と云ふ。小鬼シカ〳〵云ふには。算用と云ふもあるべし。十王も。シカ〳〵。色々仕樣あるべし。口傳。）鐵棒鬼へまづ待て。身共がこの鐵杖をかける。さあ打て。シテへ目は何で御座る。鐵へ目は三ぢや。アドへまづ待て〳〵。これまで一々と云へども出ぬ。最早一の出る時分ぢや。一にせい。鐵へいや〳〵。此度は三になされい。アドへこりや〳〵。手を合はせてながむ程に。一にしてくれい。（また負ける。前に同じ。）アドへさあ〳〵。も一度打て。賭物は後で何なりともほしい物をやらう。シテへそれならば。必ず後で取りまするぞや。（ト云うて。また打つ。負ける。段々前に同じ。）アドへこれは一番そへにしてくれ。シテへそれならば極樂へ導きを召され。アドへ導きをせうが。あまり見苦しい體ぢや。衣裳をしばらく貸してくれぬか。シテへまづ導きを召されい。極樂へいたらばあの方から持たせておこさう。アドへ近年地獄飢饉に就いて六道の辻へ出たに。また博奕に打負けて。扨も〳〵。不仕合はせのつゞく事ぢや。アドへ十王鬼は博奕に。同へ十王鬼は博奕に。黄金の札鬼の鐵杖。悉く打込む外に。借物あまたおひにけり。おひにけらしなその替へに。淨土へこそは道やりすれ。これや博奕の幸ひに。これや博奕の幸ひにひかれて。淨土へとてこそ。參りけれ。

伯陽

シテ　勾當
アド　伯陽
小アド　何某

（入道具）

アドへ伯陽と申す座頭で御座る。漸う涼も近日になつて御座る。都へ上らうと存ずる。これに又愛にお目を下さるゝお方が御座る。これに琵琶を御所持で御座る。今日は參つて琵琶を借りて參らうと存ずる。シカ〳〵。我等如きは琵琶のいる事は御座らねども。少し聞くかた〳〵嗜みに持つて參らうと存ずる。何かと言ふうちにこれぢや。（ト言うて。案内乞ふ。出るも。常の如し。）漸う涼もちか〳〵になりまして御座る。私も都へ上らうと存じまする。それに就いてお前には琵琶を御所持で御座る。此の度持つて上りたう御座る程に。お貸しなされて下されたらば。忝う存じまする。小アドへ如何にも易い事ぢ

や。成る程貸してやらう。アドへ扱々それは忝う存じまする。小アドへ久しう見えなんだ。今日は奥へ通つて。少し話して行け。アドへ畏まつて御座る。それならば今日は遊うで參りませう。小アドへさあ／＼。かう通れ。シテへこの邊りに住居いたす勾當で御座る。漸う涼もちか／＼になつて御座る。ちか／＼都へ上らうと存ずる。それに就いて。某の琵琶は轉手が損れまして。金具屋へ直しに遣した。また爰に心易う致す方が御座る。今日參つてかの琵琶を借りて參らうと存ずる。誠に。内に御座つて琵琶を貸して下さるればよいが。常に餘り他出せぬ人ぢや。大方内に居られうと存ずる。これぢや。ト言うて。案内乞ふ。出づるも。常の如し。漸う涼も近づきましたに依つて。都へ上ります。それに就いて私の琵琶は。轉手が損れて金具屋へ直しに遣しました。又こなたにはよい琵琶を御所持で御座る。何とぞお貸しなされて下されませ。小アドへ易い事では御座るが。最前伯陽が參つて琵琶を貸せいと申したに依つて。貸しまして御座る。シテへ何と伯陽が琵琶を借りに來たと仰せらるゝか。小アドへなか／＼。シテへいや伯陽づれが琵琶のいる事は御座るまい。とかく私にお貸しなされい。小アドへそれならば。幸ひ伯陽が是に居まする。お會ひなされて御相對をなされ。シテへ伯陽がこれに居りますか。會ひませう程に。これへ出よと仰せられて下され。小アドへ心得ました。やい／＼伯陽。勾當の御坊のお出でなされた。アドへこれはいかな事。ト言うて。アド瞻をつぶし下へ入れ違ふ。シテへやい／＼伯陽。そちは琵琶を借りに來たげな。別に琵琶のいる事はあるまい。某が借る程にさう心得。アドへこれは迷惑で御座る。私もいりますればこそ借りに參つて御座る。とかく私におこしなされて下されませ。シテへやいそこなやつ。扱々おのれは憎いやつの。身共が借らうと言はば。たとへおのれがいらうとまゝ。共々に借つてもくれうやつが。推參千萬な。否でも應でも某が借るぞ。アドへそれはお前。仰せられ度い儘と申すもので御座る。シテへまたぬかし居る。不座な云附けた。小アドへ先づ待たせられい。一方は勾當の御坊。一方は伯陽。されども伯陽は先きで御座る。これは勝負になされて。勝負に勝たせられた方へ琵琶を貸しませう。シテへ伯陽づれと勝負はをかしう御座る。小アドへそれでは埒が

あきませぬ。シテ〽それならば歌を詠みませう。あれも詠むか聞いて下され。小アド〽心得ました。これでは埒があかぬに依つて。何ぞ勝負にと言へば。勾當の御坊は歌を詠まうとおしやるが。そちも歌を詠むか。アド〽いかな／＼。あの衆は歌の連歌のと言ふ事に。不斷かゝつておいやります。私はつひに歌を詠うだ事が御座らぬ。小アド〽それではそちが負けになるぞよ。アド〽是非に及ばぬ。詠みませう。先づ御坊からお詠みあれと仰せられませ。小アド〽心得た。先づこなたから詠まつしやれと申す。シテ〽かうも御座らうか。庭中に。齒缺(はかけ)の足駄ぬぎ捨てゝ。はくやう無くは谷へほうかせ。アド〽某を足駄に喩へられて堪忍ならぬ。小アド〽それは何をするぞ。身共が居るに依つて聊爾させぬ。そちも何なりとも詠めいやい。アド〽それならば詠みませう。振舞ひの。座敷に人の寄せざれば。犬勾當は門に佇む。シテ〽言語道斷。身共を寄生に喩へ居る。打殺してのけう。小アド〽先づ待たせられい。こなたの詠まつしやれたに依つて。あれも詠み返しを致したさうに御座る。さりながら。身共が申附けませう。やい／＼。これでも埒があかぬ。もう一勝負せい。

アド〽それならば。相撲を取りませうと言うて下され。小アド〽心得た。何ぞもう一勝負せいと申せば。伯陽は相撲を取らうと申す。シテ〽いや餘の事ならば何なりとも致さうが。相撲は終に取つた事が御座らぬ。なりますまい。小アド〽相撲をいやと仰せられば。こなたの負けで御座るぞや。シテ〽扨々氣の毒な事で御座る。さりながら。あれにはよもや負けまいと存ずる。これへ出よと仰せられい。小アド〽さあ／＼。これへ出よ。身共が行司をせう。ト言うて行司する。二人やあ／＼と言うて。さがし合ふ。色々仕様あるべし。シテ〽伯陽逃げな。アド〽勾當にはお逃げなさるさうな。御卑怯で御座る。小アド〽先づ待たせられい。互に目が見えぬによつて尤もで御座る。今度は身共が手を組合はせてやりませう程に。兩人共にこれへ出さつしやれ。伯陽もこれへ出よ。ト言うて。兩人の手を取り。おこつと言ふ所を。二人して小アドを打ちこかして。二人入る。二人とも杖を尋ねて。持つて入る。小アド〽やい／＼。身共を此の様にした程に。兩人共に琵琶を貸さぬぞ。二人〽相撲に勝つた程に。琵琶は借るぞ／＼。ト言うて入るなり

馬口勞(はくらう)

シテ　馬口勞

アド　十王

アド次第にて出る。名乗り道行朝比奈の通り。六道の辻に着いて。笛上の座に下に居る。

次第シテ〽人をたらさぬ馬口勞の。／＼。冥途の道の徒然さよ。詞これは娑婆に隱れもない馬口勞で御座る。壽命の程も定りぬるか。無常の風に誘はれて。唯今冥途へ赴き候。道行住馴れし。娑婆の名殘をふり捨てゝ。／＼。足よわ／＼と行く程に。六つの道にも着きにけり。詞程なう六道の辻とかやに着いた。この處で迷ふと聞いた。迷はぬやうにそろ／＼と參らう。アド〽人臭い／＼。定めて罪人が來たものであらう。さればこそ。罪人ぢや。取つて噉まう／＼。ト云うて。追廻す。シテ恐がる。ワキ座へ行き。シテ〽御宥されませ／＼。アド〽やい。己れは娑婆で何者であつた。シテ〽私は馬口勞で御座る。アド〽さてこそ己れは大惡人ぢや。鞭て服する程に。さう心得。シテ〽いや惡人では御座らぬ。極樂へ遣つて下されませ。アド〽まだ其のつれをぬかし居る。身共が能う知つてゐる。己れこそ大惡人なれ。先づ老馬の齒をもいで。若馬と見せて人を誑かし。或はまた筋をたつて血を取り。燒鐵をあてつ打つ叩いつする。この科なか／＼夥しいことでは

ないか。シテ〽いや。それは皆。馬の養生にこそ致せ。これが科になりさうなことでは御座らぬ。アド〽やい。養生といふものは。病があらば藥を飮ませ。痛むところは撫でつ擦(さす)りつするこそ養生なれ。歯をもいだり血を搾るが養生か〳〵。ト云うて杖にて叩く。アド〽さて〳〵憎い奴の。ただ一口に取つて嚙まうと思へども。その儘に服するは惜しいことぢや。地獄へ責落し。苦しみを見せて。其の後で服せう。さて己れを劍の山に上さうか。但しまた舌を拔かうか。臼へ入れてはたかうか。釜でひようか。何としたものであらうぞ。とかくいふうちに時刻うつる。いかに罪人。地獄遠きにあらず。極樂遙かなれ。急げとこそ。責あり。一段過ぎて。急げ〳〵といふ。シテよろ〳〵行くを。鬼それよ〳〵と云うて。竹馬に乘り。橋がかりへ行き。こちへ〳〵と云うて招く。シテ舞臺先へ行く。鬼追詰めてたゝく。アド〽思ひ知つたか〳〵。シテ〽あゝ御宥されませ〳〵。アド〽やい。最前から何やらぐわら〳〵と鳴る物を持つてゐる。それは何ぢや。シテ〽これは轡で御座る。アド〽轡とは何のことぢや。シテ〽轡と申して。これを馬に食ませますれば。何程口の恐(こは)い馬でも疳の強い馬でも。乘り鎮めまする馬具で御座る。アド〽すれば。その轡をかけたらば。乘りつけぬ者が乘つても落ちぬか。シテ〽いや少しも氣遣ひなことは御座らぬ。馬をぎつくりともさせませぬ。アド〽それは重寶なことぢや。身共もちと馬を稽古し度い。何と教へて呉れい。シテ〽お前は馬を御稽古なされて。何になされます。アド〽されば。毎日〳〵死出の山劍の山へ登るに。殊のほか辛勞な。そのほか三途の川などに大水の出た時分などは。馬上で行き度い。それ故馬を稽古せうといふことぢや。シテ〽これは御尤もで御座る。成る程敎へませうが。先づ初めの間はお前馬におなりなされて。轡手綱の樣子。鞍鐙の加減をも能う覺えなさらねばならぬことで御座る。アド〽尤もな事ぢや。成る程馬にならうが。誰が乘ることぢや。シテ〽私が乘りまする。アド〽さて〳〵推參千萬な。身共に乘つたらば。暫時も乘せて置くまい。跳落してやらう。シテ〽いかな〳〵。此の轡をかけましてからは。ぎくりともさせませぬ。アド〽それならば。さあ〳〵乘つて見よ。シテ〽然らば轡をかけませう。先づこれへお出でなされませ。アド〽心得た。シテ〽先づこれをお脫ぎなされませ。ト云うて。笛座へ連れて行き。鬼面折り取り。轡を格子へつなぎつける シテ〽さて〳〵不思議な所でお目にかゝりました。先づお前は何と申すお方で御座る。アド〽身共は地獄のあるじ閻魔大王ぢや。シテ〽娑婆で承りました閻魔大王は。玉の冠を召され。石の帶をなし。金銀を鏤め。邊りも耀く御樣子と承りましたが。お前の御姿は左樣にも御座らぬ。アド〽さて〳〵面目もないことぢや。成る程そちがいふ通りの筈なれども。今は娑婆の人間が賢うなつて。後生を願うて。極樂へばかり行くに依つて。地獄の飢饉以ての外ぢや。さるに依つて。玉の冠も石の帶も皆紛失した。漸う斯樣の姿で。自身六道の辻へ出て罪人を責むることぢや。シテ〽扨々それは御苦勞をなされまする。さらば轡をかけまして御座る。アド〽よくば乘れ。シテ〽さらば乘りませう。アド嘶き跳落さんとする。シテ〽どう〳〵。これは地と申す事か乘りまする。轡手綱の加減をお覺えなされませ。アド〽これはいかう窮屈な物ぢや。シテ〽はい〳〵。ト云うて。舞臺一遍廻る。鬼イヒンなどいふ心あるべし。シテ〽いで〳〵さらば鬼に乘り。同〽祕術を現し見せ申さんと昔も今もなきことなれば。むちや手綱こし鐙の大事は爰ぞ。跳馬たつ馬こむ時の大事を殘さず乘らんと思ひ。つと手綱を引きつめ鐙を強く。鞭を振上げ先きの苛責の不念を散ぜんとしたゝかにこそは打つたりけれ。ト云うて叩く。アド〽あいた

〳〵。先づ待て〳〵。これは曾て面白うない物ぢや。措け〳〵。シテへ最前身共を様々責めたがよいか。これがよいか。ト云うて叩く。アドへ先づ待て〳〵。馬の稽古を止めにせう。早う下りて呉れい。シテへそれならば極樂へ導きをせい。アドへかつに乗つて色々の事をいふ。己れが行きたい所へ行かう迄よ。シテへ扨は導きをせまいか。ト叩く。アドへあいた〳〵。さて〳〵閻魔當りの強い奴ぢや。是非に及ばぬ。教へてやらう。先づ左に見ゆるが極樂。右に見ゆるが地獄ぢや。同じくはどうぞ右の方へ行て呉れい。シテへ唯今左に見ゆるこそ。同へ唯今左に見ゆるこそ。淨土の道なれ爰をば行過ぎ地獄へ行きては叶ふまじと。左の手綱を強く引詰め。右の手綱を素寛げて。小耳の間を丁々と打ちければ。ただ一馬場に淨土へ驅入り。鬼をもたらす馬口勞の手だて。恐れぬ閻魔はなかりけれ。（入道共）

八句連歌

シテ　何某
アド　何某

シテへこの邊りの者で御座る。某誰殿と申す御方に少々金子を借用致して御座る。久々になれども未だ返辨を致さぬ。以前は連歌の友で御座つた故か。此の事に於ては終に一度の御使にも與らぬ。さりながら。餘り延引致すに依つて。今日は參り。せめて詞の御斷りなりとも申して歸らうと存ずる。シカ〳〵。家貧にしては親知少く。身賤しうしては故人疎しと申すが。身上ならねば何方へも無沙汰を致す事で御座る。イヤ何かと云ふうちにこれぢや。先づ案内を乞はう。如常。アドへ表に案内がある。あれは慥に何某の聲ぢやが。又何ぞ無心に參つたものであらう。會うてはなるまい。留守を使はうと存ずる。案内とは誰そ。シテへ私で御座る。誰殿は御内に御座りまするか。アドへ留守で御座る。シテへさう仰せらるゝはどなたで御座る。アドへ隣の者が留守を預かつて居まする。シテへさ様ならば。御歸りなされたらば仰せられて下され。何で御座る。餘り久しく御見舞も申上げませぬに依つて。今日は御見舞申して御座れども。御留守で御座るに依つて歸りまする。又そのうちに參つて御目にかゝらうと。仰せられて下され。アドへ心得ました。シテへ必ず頼みまする。アドへ合點で御座る。さればこそ誰であつた。會うたらばよいものか。シテへこれはいかな事。せつかく思ひ思うて參つたに。御留守で御目に懸からぬ。又そのうち參つて御目にかゝらう。ハア〳〵咲いたり〳〵。こりやお坪の内の花が眞最中ぢや。咲きも殘らず散りも始めずといふが此の事で御座る。以前身上ともかうも致した時分は。この花のもとに召寄せられて。御酒などをたべ。連歌などを致した事もあるが。今は身上ならねば。此の花がいつ咲くやら。いつ散るやらも存ぜぬ。これは何とぞありさうなものぢやが。イヤ思出した。お好きぢや程に。申置いて歸らう。まうし〳〵。最前の御方御座りまするか。アドへこれはいかな事。また參つたさうな。これに居まする。シテへ只今歸るさに。お坪の内の花を見ましたらば。餘り見事に咲いて御座つたに依つて。昔を思出しまして。花盛り。御免あれかし松の風と致して御座る。お歸りなされたらば。此の通り仰せられて下され。アドへ心得ました。シテへ必らず頼みまする。アドへア丶。シテへア丶お内に御座つたらば。さぞ悦ばせらるゝであらうに。お留守で殘り多い事ぢや。花盛り。御免あれかし松の風。わが何ながら出來たかと存ずる。アドへこれはいかな事。何

ぞ無心に参つたと存ずれば。何やら口ずさみを申す。呼返し會うてつかはさうと存ずる。ヤイ誰々。シテ〽ホウこれはお歸りなされましたか。アド〽今戻つておりやる。シテ〽よい所でお目に懸かりました。アド〽サア〳〵つッと御通りやれ。シテ〽心得ました。さて此の間は久しく御見舞も申上げませぬが。御機嫌さうでお目出度う存じまする。アド〽なるほど。身共も隨分息災な。そなたもまめさうで一段でおりやる。シテ〽忝う御座る。アド〽さて只今は何やら云置かれたさうな。何であつた。シテ〽イヤお聞きなさるゝ様な事では御座りませぬ。アド〽イヤ〳〵何やら面白さうな事であつた程に。云ひ聞かしませ。シテ〽ハアさ様ならば申してもみませう。唯今歸るさにお坪の内の花が。餘り見事に咲いて御座つたに依つて。昔を思出しまして。花盛り。御免あれかし松の風と致して御座る。これがな御耳に入りましたものでがな御座りませう。アド〽オヽそれであつた。久しく聞かぬうちいから連歌が上つておりやる。シテ〽其の様に仰せられずとも。惡い所はお直しなされて下され。アド〽いかな〳〵。惡い所と云うてはそつともない。花盛り。御免あれかし松の風。ハアそれならばちと云うてもみようか。シテ〽どこで御座る。アド〽某は。この御免あれかしが耳に障つて惡い。之な何とかお直しやるまいか。シテ〽なるほど。御尤もに存じまするが。私はまた此の御免あれかしで持つた句かと存じまするに依つて。ならう事ならば。御免あれかし〳〵。笑ふ。御免あれかしとも申度う存じまする。アド〽それならば是非に及ばぬ。身共が聯なせう。シテ〽これはお出かしなさるゝ事で御座りませう。お何なんと。アド〽櫻になせや雨の浮雲。シテ〽したり。天神も照覽あれ。扨も〳〵面白い事で御座る。アド〽アヽこれ〳〵。其の様に云はずとも稽古の事ぢや。惡い所ばしあらば。遠慮なう云うておくりやれ。シテ〽いかな〳〵。此の句に於いて。そつとも惡い所は御座りませぬ。櫻になせや。ハアさ様ならばちと申上げてもみませうか。アド〽どこでおりやる。シテ〽私は此のなせやが耳に障つて惡う御座る。これはなさじなどとはなりますまいか。アド〽なる程尤もでおりやる。さりながら。身共はまた此のなせやで持つた句かと存ずるに依つて。ならう事ならば。なせやなせ〳〵などと云ひ度うおりやる。

シテ〽それならば是非に及びませぬ。私が第三を致しませう。アド〽一段とようからう。シテ〽幾度も。アド吟ず。シテ〽霞にわびん月の暮。アド〽またわるい。シテ〽どこで御座る。アド〽其のわびんがわるい。シテ〽さ様ならばわびぬに致しませう。アド〽早速直つた。四句目を致さう。シテ〽一段とよう御座りませう。アド〽戀せめかくる入相の鐘。シテ〽アヽせはしなや〳〵。鷄も。アド吟ず。シテ〽せめて別れは延べて鳴け。アド〽はて延べずとも鳴かせたいものな。シテ〽折々は延べたもよいもので御座る。アド〽人目もらさぬ戀の關守。シテ〽名の立つに。アド吟ず。シテ〽使なつげそ忍びづま。アド〽お立ちやれ。シテ〽ハア。アド〽やあら聞えぬ人ぢや。少々金子の出入りもあれども。おほしい事でないと思うて。一度使なやつた事もないに。いつ身共が其の様に名の立つ程使をつけた事がある。シテ〽これは迷惑で御座る。前句が戀の御句で御座つたに依つて。總じて戀路の使は。目なまめに申しては如何と存じまして。名の立つに。使な告げそ忍び妻と致して御座る。それが御耳に障りさうな事では御座りませぬ。アド〽さてはつげそでおりやるか。シテ〽さ様で御座る。

アドへすれば假名の誤り。暫くそれにお待ちやれ。シテへ心得ました。アドへこれはいかな事。段々詫何を致す。おほしい事ではないに依つて。免してつかはさうと存ずる。ト云うて。奉書取りに行く。アドへなう最前から七句かと存ずる。目出度う八句に致さう。シテへ一段とよう御座りませう。アドへ此度はそなたの悦ぶ句ぢや。シテへそれは何で御座る。アドへ餘り慕へば文をどらする。シテへこれはどれへぞ持つて參る御狀で御座りまするか。アドへイヤそれはそなたの召された借狀ぢや。けふの連歌が餘りよう出來たに依つて。褒美にそなたへ遣す。シテへあの之を私へ下されまするか。アドへ中々。シテへ先づ以て有難う存じまする。さりながら。此の儀も段々延引致して御座る。近日は御返辨申しませう程に。先づそれまではお預け申しまする。アドへイヤ〳〵それはいらぬ辭儀ぢや。取つて置かしめ。シテへこれはどうぞ御斟酌を申しませう。アドへはてさていらぬ辭儀ぢや。取つて置かしめ。シテへ幾重にも御斟酌申しませう。アドへさてはいやでおりやるか。シテへいやでは御座りませぬ。アドへそれならば取つて置かしめ。シテへさ樣ならば頂いて置きませう。アドへそれがよからう。シテへやさしの人の心やな。いつなれぬ花の姿の色あらはれて此の殿の。借り物を免さるゝ。類ひなの人の心や。目出度うすみました。アドへようおりやつた。シテへハア。ト云うて。シテより先へ入るなり。

鉢叩（はちたゝき）

シテ　鉢叩僧
立衆頭
立衆
（入道具）

シテへ斯樣に候者は。都に住居する鉢叩にて候。我等の傍輩同道にて。北野へ參詣申さうずる。何れもこれへ參り候程に。暫く待たばやと存じ候。立頭へ治まれる。立衆へ治まれる。都の春の鉢叩。叩きつれたる一節を。茶せ〳〵召せと囃さん。此の茶せん召せと囃さん。シテへやれ〳〵。お主達は拍子物で出られたよ。立頭へ其の事でおりやる。目出度き折なれば。何方も賑々しいがけなりさに。囃子物で出ておりやる。シテへ尤もにて候。北野へ參らう。さあ〳〵來さしませ。立衆へ心得た。シテへ何と思はしむ。我等が宗體の樣な變つた法義はない。髮を剃らねば出家にもあらず。衣を着ねば俗世にもなし。茶せんを賣つて渡世とし。手に一つの此の瓢をさゝげ。口に無常の偈を唱へ。善く人を勸むるに因つて。さながら大俗にも交はらぬ有難い宗旨ではおりないか。立頭へさりながら。此の間は茶せんは賣らず。何れも衣は着ふるばし。肩裾のわかちもないではないか。シテへ此の樣に打揃うて參詣致す程に。定めて御利生があらうと存ずる。何かと云ふうちに北野ぢや。先づ御前へ向はう。立頭へ一段とよからう。ト云うて。正面に下に居て。皆々扇を擴げて拜む。シテへさて天神の末社瓢の神は。我等が宗旨の氏神なれば。ふくべの神の前で勤を致さう。立衆へ心得た。ト云うて。各太鼓座の方へ廻り。くつろぎ。直に舞臺の眞中にならぶ。皆かう來さしめ。シテへ釋迦はさり。立衆へ彌勒は未だ世に出でず。彌陀の悲願を賴まずば。などか佛果に至らざるらん。シテへ極樂を。立衆へいづくの程と思ひしに。松葉立てたるまつんじよが家。シテへ地獄とて。立衆へ遠きにあらず目の前の。憂き苦しみを見るにつけても。シテへ世を樂に。立衆へ暮らす手立を尋ねしに。すまずにこらず出ずも入らずも。シテへ長からん。立衆へさゝげの花は短くて。シテへ奥山に。立衆へ猿

が三疋集りて。見猿きかざる物ないは猿。シテへ何事も。立衆へ皆僞りの世の中に。死するばかりぞ誠なりける。シテへあれを見よ。立衆へ鳥部の山に立つ煙。立ちつゞけても立たぬ日もなし。シテへあだし野の。立衆へ露ははかなきたとへなり。露にも劣る人の命ぞ。シテへ思へば浮世は。立衆へ夢の世ぞかし。櫻花はこれ皆春の花。名利の心をとゞむべし。佛法あれば世法あり。煩惱あれば菩提あり。柳は綠花は紅の色々なれば。急いで淨土を願ふべし。なようだ〳〵南無阿彌だんぶや。たまうだはらみつはつばいほう。ト云ふ一同皆々脇座の木より笛座の方まで並び下に居る。一セイへ抑もこれは當社天神の末社。瓢の神とは我が事なり。同へ斯程目出度き影向に。〳〵。あふこそ我も嬉しけれ。萬の事も願ひの儘に。樂しみ樂ふる此君の。枝を鳴らさぬ松の風。ふくべの神は神託を傳へ。これまでなりとて歸らせ給ふな。其の時人々袖にすがり。瓢箪しばしとゞまり給へと。ひきとめければまた立歸り。なほ行末を守らんと。なほ行末を守らんとて。本の社に入りにけり。

花争（はなあらそひ）

シテ　太郎冠者
アド　主人

アドへこの邊りの者で御座る。毎年とは申しながら。當年の樣なめでたい春は御座らぬ。それにつき。やう〳〵山々の花も盛ぢやと申す。花見に參らうと存ずる。まづ太郎冠者を呼出し申付くる事が御座る。太郎冠者あるか。シテへハア。アドへ居たか。シテへお前に。アドへ念なう早かつた。汝を呼出す別の事でない。毎年とは申しながら。當年のやうな長閑な春はあるまいなあ。シテへ御意なさるゝ通り。當年のやうな長閑な春は御座るまい。アドへそれに就いて。やう〳〵山々の花も盛ぢやと聞いた。花見に行かうと思ふが何とであらう。シテへこれは珍しからぬ事を仰せらるゝ。それ程鼻が見たくば。山へ行かずとも。これ。私の鼻を御覽なされませ。アドへ扨々むさとした事を云ふ。それはおのれが聞きやうが惡い。鼻の事ではない。山々の花も盛ぢやと聞いたによつて。花見に行かうといふ事ぢや。シテへ扨は櫻見の事で御座るか。アドへオゝさて花見の事ぢや。シテへ櫻ならば櫻ですむ事を。花見と仰せらるゝによつてのことで御座る。アドへおのれは又花見と云はいで。櫻見といふ事があるものか。シテへ惣じて昔からの歌にも。櫻とこそ御座れ。花とは御座らぬ。アドへ云はれん汝が歌ぜんさくなれど。古歌にあらば聞きたうおりやる。シテへ畏まつて御座る。櫻散る。木の下風は寒からで。空に知られぬ雪ぞ降りける。なんと櫻では御座らぬか。アドへ花ではないか。シテへいかな〳〵。櫻で御座る。アドへすれば。此方にも花と詠まれた古歌あり。ようで聞かせう。シテへ承りませう。アドへ行暮れて。木の下陰を宿とせば。花や今宵の主ならまし。なんと花ではないか。シテへ自然お前には一首など御座らうが。此方にはまだ御座る。アドへあらば云へ。シテへ山櫻。霞のまよりほのかにも。見てし人こそ戀しかりけれ。アドへ此方にもまだある。シテへ承りませう。アドへ花の色は。うつりにけりな徒らに。わがみよに經るながめせしまに。シテへそれにお待ちなされませ。アドへ心得た。シテへこれは如何な事。頼うだ人と假初に問答致して。はつたとつまつた。イヤ致し樣が御座る。申し〳〵。私の方には

櫻と作られた謠が御座る。謠うて聞かせませう。アドへ汝が方にあらば。此方にもある。シテへ畏まつて御座る。櫻かざしの袖ふれて花（ト云うて○口をふさぐ。）アドへヤイヤイ太郎冠者。その謠の後を云へ。シテへこの謠に後は御座らぬ。アドへいや後がある。シテへあつても私は存じませぬ。アドへその謠の後は。もの。シテへ何と。アドへものと。シテへ何と。アドへ花見車くるゝより。月の花よまたうよ。シテへ扨はお前には御存じで御座るか。アドへよしない事を云出して。花見にさへやりをらなんだ。あのやくたいもないやつ。しさりをれ。シテへハア。アドへエヽ。シテへハア。（ト云うて。つめて。とめる。）

花子

シテ　何某
アド　太郎冠者
小アド　女
（入道具）

シテへ洛外に住居致す者で御座る。某一年東へ下るとて。美濃國野上と云ふ所に泊り。花子と申す女に假初に酌を取らせて御座れば。女心のはかなさは。某を尋ねて上り。北白川に宿をとり。度々文を呉るれども。れいの山の神が薄知りに知つて。つけてまはすによつて。度々の返事もならず。たゞ一度ならでは返事も致さぬ。また今夜參らずば。はやお目にかゝるまい。如何なる淵川へ身を投げてとある文を呉れて御座る。是非に及ばぬ。山の神をたばかり。花子の方へ參らうと存ずる。（ト云うて。橋掛りの方へ向ひ。）なう〱これの人。居さしますか。居りやるか。女へ今めかしやなう〱。妾を呼ばせらるゝは何事で御座る。シテへちと談合したい事がある。まづ斯う通らしませ。女へそれは心許なう御座る。何事で御座るぞ。シテへ別の事でもないが。某は此中打續いて夢見が悪い。それに就いて。後生ほど大事のものはないと思ふ事ぢや。女へ扨も〱。愚かな事を仰せらるゝ。あふも夢。あはぬも夢。夢の浮世で御座るもの。そつとも心にかけさせらるゝな。シテへ尤も夢は儚いものなれども。また人間の身のはかない事は。朝の露にも喩へられた。斯かる消え易い身を持ちながら。われ人油斷をする。今日よりしては。後生の道に入らうと思ふ。女へそれは兎も角もで御座る。シテへいや。後生を願ふと云うて。唯は願はれぬ。女へ何ぞむつかしい事で御座るか。シテへ廻國をせねばならぬ。女へ廻國とは何の事で御座る。シテへ廻國と云ふは。我家を出でゝ。國々の寺々を巡る事でおりやる。女へそれは定めて暇の入る事で御座らう。シテへ諸國を修行する事ぢやによつて。凡そ十二三年も掛らうか。女へなう〱きやうこつや〱。こなたの一日の留守をさへ待兼ぬる妾が。十二三年といふ留守が何となるもので御座る。シテへいや仕樣によつて。三年程で果つるやうもおりやる。女へ三年の事はおかせられい。片時もなりませぬ。云うても下されな。シテへそれは悪い合點ぢや。既に一人成佛すれば。七世の孫迄も悉く成佛するといふ時は。そなたの爲。かつは子供の爲ではおりないか。女へそれ程に覺召さば。内での行をあそばせ。シテへ内での行が。何がなるものでおりやる。女へハテ。腕香なりとも頭香なりともたかせられい。シテへ勿體ない。大俗の身として。腕香頭香がたかるゝものでおりやるか。女へと仰せられても。外へと云うては片時もなりませぬ。云うても下されな。シテへ扨も〱氣の毒な。折角思ひ立つた事を承引めされぬ。イヤ思ひ出した。それなら

だ一日一夜、暇をお呉りやれ。女〽十二三年も掛らうと仰せらるゝに。一日一夜とはどうした事で御座る。シテ〽されば内での行とおしやるによつての事ぢや。持佛堂に閉籠つて。衾をかぶり。座禪くうじて悟道する事があるによつて。一日一夜の暇をお呉りやれと云ふ事ぢや。女〽あれもならぬ。これもならぬと申すも如何で御座る。一日一夜の事ならば。どうなりとも遊ばせ。シテ〽何ぢや。どうなりともせい。女〽なか／＼。シテ〽思ふ様にはなけれども。得心の召されて滿足した。まづ一禮を申す。女〽なう／＼。きやうこつや／＼。女に向うて手を合はすといふ事があるものか。まづ立たせられい／＼。夜も更けましたらば。妾が酒の燗をしてお見舞申しませう。シテ〽いかな／＼。座禪の場で女の聲を聞いても。その行が空しくなる。必ず／＼お見舞やる事はなりませぬぞや。女〽見舞ふ事はなりませぬか。シテ〽思ひも寄らぬ事でおりやる。女〽それならば見舞ひますまい。シテ〽明日は早々お目にかゝるは扨。女〽明日は早々お目にかゝりませう。二人〽さらば／＼。ト云うて。入れかはり。シテ〽なう／＼。女〽なんで御座る。シテ〽くりさう／＼にして。座禪得法なり難しといふ。必ず／＼お見まやる事は堅うなりませぬぞや。女〽見舞ふ事では御座らぬ。そつとも心に懸けさせられな。シテ〽滿足致いた。二人〽さらば／＼。ト云うて。女は太鼓座へ入る。シテとくとして正面へ出る。シテ〽なう／＼嬉しや／＼。まんまと云うて山の神をたばかつた。まづ急いで花子の方へ參らうか。いや／＼爰に大事の思案がある。總じて女の夫をたばかるは。夫より勝るとある。その上きやつはくりの早いをなごぢやによつて。萬一物陰から見て。座禪の體がなうてはならぬ。なんとしたものであらう。イヤ思ひ出した。やい／＼。太郎冠者あるかやい。太郎〽ハア。シテ〽なるか／＼。太郎〽ハア。シテ〽居たかやい。太郎〽お前に。シテ〽まづ立て／＼。太郎〽これは殊の外の御機嫌で御座る。シテ〽機嫌のよいこそ道理なれ。山の神をたばかり。花子の方へ行くわかやい。太郎〽それは何と仰せられたらば。あのわゝしい神樣の御合點なされて御座る。シテ〽されば其事ぢや。持佛堂に閉籠つて衾をかぶり。座禪工夫して悟道する事があると云うて。一日一夜の暇を取つたが。何とてかしたではないか。太郎〽これはおでかしなされました。シテ〽それに就いて。そちにちと頼みたいことがある。太郎〽それは何事で御座る。シテ〽な見舞ふぞとは云うたれども。くりの早い女ぢやによつて。萬一陰から見て。座禪の體がなうてはならぬ。汝は大儀ながら身共に代つて。今宵一夜座禪のしてゐて呉れい。太郎〽畏まつては御座れども。若し此事が後日に知れましたらば。唯は置かせられますまい。是は御免されませ。シテ〽それは氣遣ひするな。見舞ふ事ではなけれども。念の爲ぢや。ひらに座禪のしてゐて呉れい。太郎〽これはどう御座らうとも御免されませ。シテ〽何ぢや。どうあらうともゆるせ。太郎〽なか／＼。シテ〽扨はおのれは。女共の云ふ事はこはいによつて聞かうず。身が云ふ事は聞くまいといふ事か。太郎〽いやさやうでは御座らぬ。シテ〽まだぬかし居る。此中の使もおのれではなかつたか。憎しいやつには故事を引いて聞かせう。君は臣を使ふに恩を以て主とし。臣は君に仕うまつるに。命を惜しまざるを以て忠臣とすと云へり。何ぞやおのれが樣なやつは。いゝくに打つて捨て申す。太郎〽まづお待ちなされませ。シテ〽何と待てとは。太郎〽畏まつて御座る。シテ〽いやお畏まりやるまいものを。太郎〽畏まつて御座る。

シテへ畏まつた。太郎へハア。シテ笑ふ。シテへざれ事ぢや/\。太郎へおざれ事で御座るか。シテへかう云ふも。頼まう者のなさの事ぢや。大儀ながら座禪をして呉れい。太郎へ一日なお斷りを申して御座れども。此上は畏まつて御座る。シテへまづ斯う通れ。太郎へ畏まつて御座る。ト云うて。太郎冠者ワキ座へゆく。シテ葛桶座禪衾持ち出づ。シテへまづ是に腰を掛け。太郎へ畏まつて御座る。シテへ窮屈にはあらうけれども。この衣(きぬ)をかづいて居て呉れい。太郎へ心得ました。シテへ扱いふ迄はなけれども。萬一山の神が來て。その衣をとれと云はうとも。必ずとるなよ。太郎へとる事では御座らぬ。シテへ明日(あす)は戻つて會はうぞ。太郎へ明日は早々お歸りなされませ。シテへ頼むぞ/\。あら嬉しや。まづ急いで花子の方へ參らう。ト云うて。中入。口傳あり。女へな見舞ふぞとは仰せられたれども。餘り心許なう御座る。物陰からそと見うと思ひまする。なう/\窮屈や/\。妾が見てはどうも堪忍がならぬ。申し/\。妾で御座る。な見舞ふぞとは仰せられたれども。餘り心許なう御座るによつて。そと物陰から見ましたが。それは窮屈さうな事ぢや。まづその衣(きぬ)を取らせられい。女へいやと云ふ事があるもので御座るか。命があつての座禪で御座る。とかく衣を取らせられい。それならば妾が取りませう。ト云うて。衣を取る。女へヤア。おのれは太郎冠者ではないか。太郎へハア。女へハア腹立ちや/\。これのうは何處(どこ)へやりをつた/\。太郎へどれへお出でなされたとも存じませぬ。女へおのれが知らいで誰が知るものぢや。ぬかしをれいやい/\。太郎へ先づ待たせられい/\。女へなんと待てとは。太郎へ花子様へ。女へ花子様。エイ腹立ちや/\。おのれ迄が一つになつて。花子様めとぬかせいやい/\。太郎へあいた/\。先づ待たせられ。女へ何と待てとは。太郎へまつかうあらうと存じて。色々お詫事を申して御座れども。座禪をせぬに於いては。御成敗なされうとあるお事で御座るによつて。是非に及びませず座禪を致して居りました。女へ何と云ふぞ。こちはいやと云うたれども。座禪をせぬに於いては。わ男が切らうと云うたによつて。それが恐ろしさに此樣にしてゐたと云ふか。太郎へさやうで御座る。女へすれば汝に咎はないわいやい。太郎へ私に咎は御座りませぬ。女へやい聞いて呉れ。妾には座禪をするの。工夫をするのと云うて。

花子めが方へいたと思へば。身が燃えて腹が立つわいやい。太郎へこれは御尤もに存じます。女へそちに頼む事がある。聞いて吳れうか。太郎へそれは何で御座る。女へ今汝のして居たやうに。妾を取繕うて吳れ。太郎へ畏まつては御座れども。此事が知れましたらば。私は唯は置かせられますまい。是は御ゆるされませ。女へそれはそつとも氣遣ひするな。汝は妾が親里へやつておいて。わ男には指もさゝす事ではない。太郎へそれならば畏まつて御座る。まづ斯う御通りなされませ。まづ是へお腰を掛けられませう。さて御窮屈には御座りませうけれども。この衣をかづいて御座りませ。女へ云うても／＼。妾をだまして花子めが方へいたと思へば。身が燃えて腹が立つわいやい。太郎へ是は御尤もに存じまする。女へ汝は身共が云ふ事をよう聞いて吳るゝけな者ぢや。美しい切で守り袋や巾着を縫うて取らせう。太郎へそれは忝う存じまする。女へその外何なりとも用があらば云へ。叶へてやらう。太郎へそれは猶以て有難う御座る。女へどこも見えぬやうにしておいて吳れい。太郎へ畏まつて御座る ◎云うて。太郎冠者は座につく。中入後口傳。シテへ更けゆく鐘わかれの鳥も。ひとりぬる夜は。さはらぬものを。小歌柳の糸の亂れ心。いつ。いつ忘りよぞ。寢亂れ髮の面影。あゝ扨かの人の面影を。小歌いつの春か見初め思ひ初めて忘られん。花の宴や花の宴やらう。小歌寺々の鐘つくやつめは憎いの戀ひ／＼て。稀にあふ夜は日の出る迄も。によとすれば。まだ夜深きに。かう／＼。かう／＼／＼と撞くに又寢られぬ。南無三寶。太郎冠者に座禪のさせておいて。はつたと忘れた。先づ急いで歸らう。ト云うて。太鼓座へ入つて。太刀を置く。やい／＼。太郎冠者いま戻つた。さぞ待兼ねたであらう。窮屈にあらう。先づ心許ないが山の神は來なんだか。何ぢや來なんだ。やれ／＼嬉しや。それのみ案じたに。來なんだと聞いて安堵した。さて汝が事を花子のいかうおほめやつた。あの太郎冠者の樣な心の優しい者は御座るまい。花中のおゝぜつは花ならずしてかんばし。人はけんに仕へよ。賤しきにまじるべからずと申すが。さすが此方の使はせらるゝ程あつて。棲外れ迄がやさしいとあつて。いかうおほめやつた。嬉しいと思へ。さて今宵の樣子を。誰あつて語つて聞かせう者もない。そと語つて聞かせたけれど。如何にしても面では恥しい。窮屈にはあらうけれども。暫くその衣をかづいて居て聞いて吳れうか。やれ／＼嬉しや。それならば追付け話して聞かせう。先づあれへ行て表に佇み。内の樣子を聞いてあれば。花子の聲でな。たそがれ時もはや過ぎぬ。來ませぬ待にうかるゝは。たれ中ごとか夕顏の。露程も人は怨みそ。我を怨みよと諷はれた。此の心は。たとへば。某は人の中ごとで來ぬが。されども其身を怨むるとある言の葉ぢや。そこで妻戸を開けうとしたらば。松風は訪るゝ。燈火暗うして。物の淋しき折節に。君が來たらうにや。この木男を君と仰せられてな。そこで妻戸をほと／＼と敲いたれば。ほと／＼とたゝいた水鷄にさへも。身はやつすと諷はれた。此心は。水鷄といふ鳥が來て妻戸を敲く。それさへ身共かと思うて。心が浮かるゝとある言の葉ぢや。そこで今度は堪へかねて。ぐわた／＼と敲いたれば。誰そ／＼と仰しやつた。やあら聞えぬ。誰そと云はれう筈はないと思うて。雨のふる夜に。たが濡れてかうするに。たそよと咎むるは。人二人待つ身かの。と云うたれば。足音がした／＼として。妻戸がさりゝとあいた。誰ぞと思うて見たれば。花子であつたと思へ。物をも云はず走りかゝつて。腰の帶にひた／＼／＼

と取附いたれば。細い腰に細帯したものゝかいはなさいきうさしますな。しげない戯れはせぬものぢや。とはおしやつたれども。久々で逢うた事なれば。先づ此方へと云うて。この茂くもしい松の木のやうな手を。楓の嫩葉のやうなきやしやな手で引かせられて。奥の間へ連れて行て。怨みから申さうか。積る物語から致さうかとある。われに怨みは御座るまいがと云うたれば。今度のぼつて進じた文の数は。濱の眞砂はいさ知らず。讀み盡されぬ程進じて御座れども。唯一度ならでは御返事は御座らぬ。その文をそなたに添ふと思うて。明暮肌を離さぬと云うて。かの文を持ちながら。身は蛤。ふみ見る度に。ぬるゝ袖かな／＼。怨みはこれ迄。いざ酒を參れとて酒肴を出された。仲直りに一つ飲うで下されと云うたれば。其儘飲うでお差しやつた。そこで身共も半分程うけたれば。ひとつこしめせたぶ／＼たぶ／＼と。よるのと／＼お伽にや。身が參る／＼とおしやつたによつて。此度はちやうどうけて。いざ此上をちと參つて下されと云うたれば。につことお笑やつた。その顔の美しさ。綺にもかゝれた事ではあるまい。そこで身共も。何ぞ謡ひたうはあり。謡ふ事はなし。花子の顔を見れば見る程美しいによつて。ふと山の神の事を思ひ出して。物と謡うた。よその女郎みてわが妻みれば。／＼。み山の奥のこけ猿めが。雨にしよぼ濡れて。ついつくばうだにさも似た。と謡うたれば。まだ女共の面が人の樣なかと思うて。さうも御座るまいものを。惡口を仰せらるゝとおしやつた。差いつ差されつする内に。夜がほつて更けたによつて。暫くまどろうだれば。鳥がこか／＼と云うた。はや夜が明くるさうなと云うたれば。音もせでおよれ／＼。鳥は月に。なきそろぞ。とおしやつたによつて。又とろとろとまどろうだれば。今度は東が白うだと見えて障子にうつる。南無三寶。最早歸らずばなるまいと思うて。寢亂れ髪を。おし撫でて。今かへりそろの。構へて。心變るな。と云うたれば。其時花子のむつくと起きて。夫の身にさへ變らぬに。まして女の身としての。思ひは增すとも心變るまい。ト云うて泣く。忝い事ではないかいやい。さり乍ら。愛は戻る所ぢやと思うて。名殘の袖を振切りて。／＼。さて去なうずよの。吹上の眞砂の數。あら名殘惜しやの。遙々と送りきて。／＼。俤の立つ方を。かへり見たれば。月細く殘りたりや名殘惜しやの。ト云うて泣く。誠に。思ふに別れ。思はぬに添ふと云ふは某が事ぢや。もそつと話したう思うたれど。もし此事が後日に知れたれば。そち迄迷惑すると思うて。戻りにくい所を戻つた。話はこれ迄。さあ／＼その衣をとれ。何ぢや。厭ぢや。由ない長物語をしたによつて。腹を立てゝの事か。尤もなれども。今にも山の神が來れば惡い。早う衣をとれ。是はいかな事。いつ迄そのやうにしてゐるものぢや。先づこの衣をとれ。ト云うて。衣をとり。肝を潰す。女〽やいそこなやつ。おゝ結構な座禪の／＼。どこへいた／＼。シテ〽物へいた。女〽物とは。シテ〽筑紫の五百羅漢へ參つた。女〽えゝ腹立ちや／＼。一日一夜に筑紫へ參らるゝものか。ぬかしならぬか／＼。シテ〽今のは違うた。女〽何とぢや。シテ〽若い衆に誘はれて連歌の座敷へいた。女〽まだそのつれをぬかしをる。おのれ。摑みつかうか喰ひつかうか。シテ〽誰もないか。とりさへて吳れ。女〽あの横着者。やるまいぞ／＼。ト云うて。追込み入るなり。

鼻取角力（はなとりずまふ）

シテ　大名
アド　太郎冠者
小アド　坂東方の者
（入道具）

シテ〽隠れもない大名。斯様に過は申せども。召使ふ者は唯一人。一人では使ひ足らぬによつて。新参の者を抱へうと存ずる。ト云うて。呼出す。三べん。此類大名狂言同斷。此のうちの様に方々をすれば。其方一人では使ひ足らぬによつて。新参の者を數多抱へうと思ふが何とあらう。アド〽御意もなくば申上げうと存じて御座る。一段とよう御座りませう。シテ〽それならば何程抱へうぞ。アド〽されば何程がよう御座りませうぞ。シテ〽何程がよからうぞ。アド〽それはお前の御分別次第で御座る。シテ〽なに。分別。アド〽ハア。シテ〽分別〳〵。分別といふは身が儘といふ事か。アド〽さやうで御座る。シテ〽大名のせか〳〵置かうより。一度にどつと八千人抱へう。アド〽是は夥しい人數で御座る。まづは八千人と申す人の置所が御座るまい。シテ〽それこそあの廣い野山へばら〳〵と放しておけ。アド〽是はむさとした事を仰せらるゝ。人が野山で育つものでは御座らぬ。もそつとお減しなされませ。シテ〽それならば。くわつと減して二百人抱へう。アド〽減りごとは減りましたが。これでもまだ御堪忍が續きますまい。シテ〽なに。堪忍。アド〽ハア。シテ〽堪忍。ハア堪忍とは物喰み物の事か。アド〽さやうで御座る。シテ〽それはあの澤山な水を飲ませておけ。アド〽いよ〳〵むさとした事を仰せらるゝ。人が水ばかりで育つものでは御座らぬ。是はもそつとお減しなされませ。シテ〽何ぢや。まだ減せ。アド〽ハア。シテ〽それならば。くわつと減して二人抱へう。アド〽あの二人で御座るか。シテ〽汝共に二人といふ事ぢや。アド〽すれば召抱へさせらるゝ者は唯一人で御座るか。シテ〽成程その通りぢや。アド〽是は一段とよう御座りませう。シテ〽汝は大儀ながら上下の街道へ行て。一人も二人からと藝のある利根さうな者を見すかして抱へて來い。アド〽畏まつて御座る。つめる。三べん。此類同斷。アド〽火急な事を仰付けられた。さりながら。物毎わつさりと仰せらるゝによつて奉公が致しよい。まづ急いで参らう。シカ〳〵。誠に。唯今迄は某一人で辛勞を致した。新参の者を抱へて御座らば。身共は樂を致さうと存ずる。いや何かといふ内に上下の街道ぢや。まづ此所に休らうて。似合はしい者でも通らば。言葉を掛けうと存ずる。小アド〽是は坂東方の者で御座る。某國元の奉公致し盡して御座る。此度都へ上り。此處彼處を見物致し。似合はしい所もあらば足を止めうと存ずる。シカ〳〵。若い時旅を致さねば。老いての物語がないと申すによつて。ふと思ひ立つた事で御座る。アド〽是へ一段の者が参つた。言葉を掛けう。なう〳〵これ〳〵。小アド〽此方の事で御座るか。アド〽成程わごりよの事ぢや。わごりよはどれからどれへお行きやる。小アド〽奉公の望みあつて上方へ上る者で御座る。アド〽それならば抱へうものを。小アド〽あの其方がや。アド〽いや身共ではない。某が頼うだ御方はさるお大名ぢや。此度新参の者を抱へさせらるゝによつて。肝を煎つて出してやらうかといふ事ぢや。小アド〽それは忝う御座る。どうぞ肝を煎つて出して下され。アド〽何と今でもおりやらうか。小アド〽何時でも参りませう。アド〽それならば。さあ〳〵おりやれ。小アド〽心得ました。

アドヘ扨ふと言葉をかけたに早速同心召され。此様な悦ばしい事はおりやらぬ。小アドヘ袖の振合せも他生の緣と申すが此事で御座る。小アドヘ扨そなたの國は何處でおりやる。小アドヘ坂東方の者で御座る。アドヘ何も藝はないか。小アドヘ是ばし藝で御座らうか。弓鞠庖丁碁双六馬の伏せ起し。やつと參つたを致しまする。アドヘ扨々色々の事を覺えて居さします。シカ〳〵。其通りを賴うだお方へ申上げたらば。嘸御滿足なさるゝであらう。小アドヘ斯う參るからは。こなたを寄親殿と賴みまする。萬事引廻して下され。アドヘ其段はそつとも氣遣ひをしやるな。小アドヘじて。程は遠う御座るか。アドヘ何かと云ふ内に是ぢや。そなたを同道した通り申上げう。暫くそれにお待ちやれ。小アドヘ心得ました。アドヘ申し。賴うだお方御座りまするか。シテヘエイ太郎冠者。アドヘハア。シテヘ戻つたか。アドヘ只今歸りました。シテヘやれ〳〵骨折や。して新參の者を抱へて來たか。アドヘ成程抱へて參りました。シテヘどれにおいた。アドヘ御門前に待たせて置きました。シテヘオヽそれ大名と云はうものを。アドヘ成程お大名と申して御座る。シテヘなに。云うた。アドヘハア。

シテヘそれはでかいた。惣じて初めある事は終り迄あるといふ。きやつが聞く樣に過を云はう程に。汝は大勢に答へ。アドヘ畏まつて御座る。シテヘやい〳〵。たそ居るかやい。アドヘハア。アドヘハア。シテヘ床几を與れい。アドヘ御床几。葛桶出し。腰かけさせる。シテヘ何と今のは聞かうか。アドヘ御大音で御座りましたによつて承りませう。シテヘあれへ行て云はうは。今身が廣間へ出た。大名の事ぢやによつて。お目が參つたらば早速奉公が濟まうず。又お目が參らずば。五日も十日も逗留であらうなどと。汝が分として深がらせ。アドヘ畏まつて御座る。シテヘ新參の者を是へ出せ。アドヘ心得ました。何と今のお聲をお聞きあつたか。小アドヘ成程承つて御座る。お大名と見えて大きなお聲で御座る。アドヘ此邊りでのお大名でおりやる。小アドヘさやうに見えて御座る。アドヘさて今廣間へ出させられた。お大名の事なれば。お目が參つたらば早速奉公が濟まうず。又お目が參らずば。五日も十日も逗留であらう程に。さう心得さしませ。小アドヘ何がさて奉公の習ひで御座る。そつとも苦しう御座らぬ。アドヘまづあれへお出やれ。小アドヘ心得ました。シテヘやい〳〵。

たそ居るかやい。アドうける。シテヘ此中奥から上つた五十匹の馬を。引出して湯洗ひさせい。矢の根なりとも磨かれいと云へ。アドうける。シテヘ又若黨達に只居られうより。アドうける。シテヘ今日はよい天氣ぢやなあ。アドヘよい天氣で御座る。シテヘ碁がよからう。アドヘハア。シテヘ若い衆が鞠を召されう。かゝりの掃除をして水を打てと云へ。アドうける。エイとつめる。アドヘ新參の者。シテヘきやつか。アドヘきやつで御座る。シテヘ扨々利根さうな者ぢやなあ。アドヘさやうで御座る。シテヘきやつが國は何處ぢや。アドヘ坂東方の者ぢやと申しまする。シテヘ坂東方と聞けば奥床しい。何も藝はないか。アドヘ其儀も路次で尋ねて御座れば。弓鞠庖丁碁双六馬の伏せ起し。やつと參つたを致すと申しまする。シテヘそれはきやつ一人して。アドヘさやうで御座る。シテヘ扨々萬能に達した者ぢやがさりながら。身が内にいらぬ藝がある。アドヘ何れも御調法かと存じまする。シテヘハテ馬もないに。馬の伏せ起し何の役に立たぬ。せめて猫の伏せ起し。ト云うて笑ふ。アドヘシイ〳〵。聞えまする。シテヘ馬の伏せ起し一ち重寶ぢやなあ。アドヘ一ち御重寶で御座る。シテヘ中にも得た藝は何ぢや。問う

て來い。アドへ畏まつて御座る。中にも得た藝は何ぢやと仰せらるゝ。小アドへ角力を得てると仰せられい。アドへ心得た。相撲を得て取ると申しまする。シテへいよ／＼身に生れ合うたやつぢや。身共が相撲を好けば。きやつも角力を好くと云ふか。アドへさやうで御座る。シテへ相撲を見う程に。是へ出て取れと云へ。アドへ畏まつて御座る。角力を見うと仰せらるゝ。あれへ出て取れと仰せらるゝ。小アドへ相手をお出しなされいと仰せられい。アドへ心得た。相手をお出しなされいと申しまする。シテへ一人とれと云へ。アドへいやまへ一人では勝負が知れますまい。シテへいかさま一人では勝負が知れまいなあ。アドへさやうで御座る。シテへ誰と取らせたものであらうぞ。アドへ誰がよう御座りませうぞ。シテへ風呂を焚く道全と取らせう。アドへあれは年が寄りまして。得取りますまい。シテへいかさま年が寄つて。膝が流れて得取るまいなあ。誰彼と云はうより汝取れ。アドへ私は終に角力を取つた事は御座りませぬ。シテへそれならば是もなるまい。角力は見たし相手はなし。是非に及ばぬ身共が取らう。アドへあのお前お取りなされまするか。シテへあれへいて云はうは。角力の者數多抱へたれども。今日は方々へ遣して一人も宿に居ぬ。さうあれば。手合せを見ん爲身共が取らうが。相手になるか

と云うて問うて來い。アドへ畏まつて御座る。角力の者數多抱へさせられたれども。今日は方々へ遣されて一人も宿に居らぬ。手合せを見ん爲頼うだお方が取らうと仰せらるゝ。相手になるかと仰せらるゝ。小アドへ相手にはかまひませぬ。どなたとなりとも取らうと仰せられい。アド悉く云ふ。シテへすれば。きやつが角力のたけも知れたわいやい。アドへハア。シテへハテ身に勝つて誰が扶持をせう。負くれば猶の事。云ひかゝつた事ぢや取らずばなるまい。身拵へをして出よと云へ。アドへ畏まつて御座る。シテへ汝も是へ寄つて身拵へをさせい。アドへ心得ました。身拵へをしてあれへお出やれ。小アドへ畏まつて御座る。ト云うて太鼓座へゆき。肩衣をとる。腰帯は其儘おく。シテ笛座にて素襖熨斗目ぬく。太郎冠者手傳ふなり。シテへ拵へがよくば出よと云へ。アドへ心得ました。身拵へがよくば出さしませ。小アドへ心得ました。ト云うて出て居る。シテへ太郎冠者。行

事をせい。アド扇を揚げて行司する。相撲二人手合せする。小アド鼻をつかむやうにする。シテ目をまはす。アド取付き。 アド〽これは何となされました。シテ〽誰ぢや〳〵。アド〽太郎冠者で御座る。シテ〽扨も〳〵早い相撲かな。やつと手合せをするといなや。きやつが腕を身共が鼻の先へ突付け。ばち〳〵とすると思うたれば。目がくら〳〵とした。おれへ行て云はうは。相撲の手は數多知つたが。今のは何といふ手ぢやと云うて問うて來い。アド〽畏まつて御座る。相撲の手は數多御存じぢやが。今のは何と云ふ手ぢやと仰せらるゝ。小アド〽惣じて角力の手は四十八手とは申せども。くだけば八十八手にも取りまする。今のは坂東方にはやる鼻取角力。弱い鼻は根から引拔きまする。強い鼻は捻ぢゆがめまする。天晴れ賴うだお方の鼻は強いお鼻ぢやと仰せられい。アド〽心得た。相撲の手は四十八手とは申せども。くだけば八十八手にも取りまする。今のは坂東方にはやる鼻取角力。弱い鼻は根から引拔きまする。強い鼻は捻ぢゆがめまする。天晴れ賴うだお方の鼻は。強いお鼻ぢやと申しまする。シテ〽扨も〳〵恐ろしい事かな。何と身共が鼻がゆがみもせぬか。見て呉れい。アド〽いやゆがみも致しませぬ。シテ〽別狀はないか。

アド〽隨分御無事に御座る。シテ〽扨々あぶない事かな。扨これはどうぞ鼻の要害をしたいものぢやが。イヤ思ひ出した。是へ寄つて要害をさせい。アド〽畏まつて御座る。ト云うて。土器をかけさせる。袖を鼻に覆うて出る。シテ〽また是へ出よと云へ。アド〽畏まつて御座る。も一番取らうと仰せらるゝ。おれへ出さしめ。小アド〽心得ました。シテ〽又行事をせい。アド〽畏まつて御座る。アド行司する。二人手合せする。シテやあ〳〵と兩手にて張つて勝つ。笑ふ。シテ〽おてつ參つたの。勝つたぞ〳〵。アド〽おでかしなされました。小アド〽申し〳〵。太郎冠者〳〵。アド〽何事でおりやる。小アド〽角力の手は數多覺えておりまする。唯今の樣に拳を以て張らせらるゝは。何と申す手で御座ると云うてお尋ねなされて下され。アド〽心得た。申上げまする。角力の手は數多覺えておりまするが。唯今の樣に拳を以て張らせらるゝは。何と申す手ぢやと申しまする。シテ〽知るまい〳〵。惣じて角力の手は四十八手とは云へども。くだけば百手二百手にも取る。今のは上方にはやる張角力。こつつもはつつも取りたいやうに取れと云へ。なるまいといへ〳〵。アド〽畏まつて御座る。角力の手は四十八手とはいへども。くだけば百手二百手にも取る。

今のは上方にはやる張角力。こつつもはつつも取りたいやうに取れと仰せらるゝ。小アド〽それならば。も一番取らうと申上げて下され。アド〽心得た。も一番取りませうと申しまする。シテ〽きやつは定ごうがあをつと見えた。今度取つたらば。空へは雲の原迄打上げう。地へは三尺打込まう。さうあらばきやつが命があるまい。國許へ云置きたい事もあらば云置け。屆けてとらせうと云へ。アド〽畏まつて御座る。シテ〽こりや〳〵。同じくばおけと云へ〳〵。アド〽畏まつて御座る。今のをお聞きあつたか。小アド〽成程承つて御座る。國許を出るからは其の覺悟で御座る。賴うだお方のお手にかゝつて死にますれば本望で御座る。是非共も一番取らうと申上げて下され。アド〽心得た。どうあつても一番取らうと申しまする。シテ〽憤りの強い奴ぢや。是非に及ばぬ是へ出よと云へ。アド〽畏まつて御座る。あれへお出やれ。小アド〽心得ました。アド〽また行事を仕りませう。シテ〽一段とよからう。アド行司する。手合せ二度。飛びちがひ。シテより張つてゆく所を引外し。腕を取り引廻し。小股を取りこかす。小アド〽おてつ。參つたの。勝つたぞ〳〵。ト云うて小アド入る。シテ起上り。シテ〽鼻の要害何の役に立たぬ。ト云うて。鼻の土器を取り捨てる。

なやつ。アドヘハア。シテヘおのれはそれに何なしてゐる。アドヘ私は太郎冠者で御座る。シテヘ取つたぞ。アドヘ是は何となされまする。イヽヤ／＼とこかし。シテヘおてゝ。參つたゝ。勝つたぞ／＼。ト云うて入るなり。

花盗人

シテ　花盗人
アド　何某
（入道具）

アドヘこの邊りの者で御座る。いつもとは申しながら。當年の花は別して見事に御座るに依つて、花見なども多いと申す。又夜前何者やら某の花を折取つて歸つたと申す。參つて樣子を見うと存ずる。これはいかな事。花を散々に荒しをつた。扨も／＼憎い事かな。何と致さうぞ。又參らぬと云ふ事はあるまい。今宵は此處に自身番を致し。かの盗人を捕へうと存ずる。シテヘこの邊りの者で御座る。毎年とは申しながら。當年の樣な長閑な春は御座らぬ。又あたり近い所の庭に見事な櫻が御座る。唯今盛りで御座る。夜前忍うで一枝手折り。さる上つ方へ進上申して御座れば。殊の外御滿足なされて。扨々見事な花ぢや。これはそちが庭前にあるかと仰せられたに依つて。ただ何心もなう。はあと申したれば。是非とも今一枝くるゝ樣にとのお事ぢや。又今宵も參り。一枝折つて歸らうと存ずる。誠に。木の枝を折る程の事なれども。主のある物を盗むと思へば。扨々心遣ひな事で。首尾よう仕おほせたいものぢやが。いや何かと云ふうちにこれぢや。はゝあ。咲いたり／＼。これはまた夜前よりは格別見事ぢや。咲きも殘らず散りも始めぬとは此の事ぢや。此の樣に心よう咲いたものを。むざ／＼と折るといふは。心ない事なれどもさりながら。かた／＼のお約束であつた程に。思ひ切つて一枝折らう。扨あたりに人は居ぬか。誰も居ぬやら人音もせぬ。扨これはどれがよからうぞ。此の枝にせうか。いや／＼。此の枝に致さうか。いや是處によい枝がある。アドヘ捕へたぞ。シテヘこれは何となさるゝ。アドヘ何ととは。秘藏の花をよう荒したな。生けては歸さぬ覺悟せい。シテヘ成る程御尤もで御座る。この邊りを通りましたれば。あまり見事に咲いて御座つたに依つて。ふと出來心で一枝手折りました。まつぴら御宥されて下され。アドヘいよ／＼憎い事を云ふ。おのれ昨夜も花を折つたは。定めておのれであらう。シテヘいや私は今宵が初めてゞ御座る。アドヘたとへ初めてにもせよ。この如く禁制の札を立て置くものを。折るといふ事があるものか。シテヘ成る程その高札を見ぬでも御座らぬ。何を隱しませう。お前の花が餘りに見事な程に。一枝進上致さうと。かた／＼約束を致した方が御座るに依つて。是非に及ばず參つて御座る。全く盗人では御座らぬ。まつぴら御免されて下され。アドヘなほ以て不届きな事を云ふ。人の物をあてにして。約束をすると云ふ事があるものか。おのれは花ばかりではあるまい。定めて盗賊であらう。早速成敗するやつなれども。暫くも面をさらしたがよい。さうして居をろ。シテヘまうし／＼。あやまりました。泣く。扨も／＼是非にも及ばぬ事ぢや。木の枝を折る分は盗みではあるまいと思うたが。重ね／＼の不覺悟故。繩目の恥を蒙り。又黑づらを見知られた。某が終には一命をも果すであらう。誠に神佛の御慈悲にも見離されたと思へば。扨も／＼口惜しい事ぢや。泣く。あゝ愚かや／＼。よしない事に落涙した。ゑんが跡を埋んで花の暮を惜しむ。祚國まさに身を

捨て後の春を待たず。此の心は幡州唐土に祚國と云つし者。花ゆゑ心を空にして。峨々たる谷に落ちて身を空しくなる。されば唯今の某も。花故に斬られん事何とも思はず。あら侘ぶまじや。あら侘び候まじ。アドへこれはいかな事。花盗人が何やら獨り言を申す。きやつはどうでも心ある者と見えた。あれへ參り。いよ／＼心を引いて見うと存ずる。なう／＼。そなたはやさしい獨り言をおしやるさりながら。物をよう思案してお見やれ。總じて花と云ふ物は。雨露の惠を受け。風を含んで綻ぶ。されども盛りの時分は。その雨風をさへ恨むではないか。春風は。花のあたりをよぎて吹け。心づからやうつらふと見ん。など詠み置かれた。その優しい花をむざ／＼と折取ると云ふ樣な。不得心な事があるものか。シテへ成る程仰せらるゝ通りで御座る。さりながら。惜しませらるゝにも。また折り取るにも情が御座る。花は春だにあらば今年には限らず。明年もまた明々年も咲くもので御座る。其の上花に名殘が惜しくば。折取つても苦しかるまい古歌が御座る。アドへして其の古歌は何と。シテへ見てのみや。人に語らん櫻花。手毎に折りて家づとにせんと。承つて御座る。アドへそなたは面白い人ぢや。總じて歌には鬼神も納受あると云ふ。この花に就いて歌を一首お詠みやれ。お詠みあつたれば科を免し。命を助けうぞ。シテへそれは誠で御座るか。アドへ和歌三神も照覽あれ。何の僞りを云はう。シテへ扨々それは有難い事で御座る。それならば。何卒一首詠うでみませう。アドへ一段とよからう。シテへかうも御座りませうか。アドへ何と。シテへ此の春は。アド吟。シテへ花のもとにて繩つきぬ。烏帽子櫻と人や云ふらん。アドへしたり。天神も照覽あれ。扨も／＼面白い事ぢや。どれ／＼。繩を解いてやらう。シテへこれは忝う存じまする。アドへさぞ手が痛みつらう。シテへいや左樣にも御座らぬ。直ぐにお暇申しませう。アドへこれ／＼。暫くながらも窮屈なめなさした。氣晴しに酒を一つ振舞はう。先づ下にお居やれ。シテへ命をお助けなさるゝさへで御座る。これは無用になされて下され。アドへひらに下にお居やれ。シテへ畏まつて御座る。アドへさあ／＼。一つ飲ましめ。シテへこれは御自身有難う存じまする。お酌慮外で御座る。アドへ苦しうない。丁度お飲みやれ シテへ扨も／＼結構な御酒で御座る。アドへそなたは一つなるか。シテへ一つ下されまする。アドへ氣に入つたらばも一つ參れ。シテへそれならばも一つ下されませう。度々慮外で御座る。アドへ酒が一つなつてよい事ぢや。シテへ食ぶれば食ぶる程よい御酒で御座る。さてこれを慮外ながらお前へ上げませうか。アドへどれ／＼戴かう。シテへ食べよごして御座る。アドへ苦しうない。さてまたそなたへささう。シテへ頂きませう。アドへちと謠はう。小謠。シテへまた之を上げませう。アドへ頂かう。さて一つ受持つた。何ぞ肴に一さし舞はしめ。シテへ私は不調法に御座る。御免されませ。アドへならぬと云ふ事はあるまい。是非とも舞はしめ。シテへさ樣ならば。忰の時分習ひました小舞を舞ひませう程に。慮外ながら地を謡うて下され。アドへ心得た。シテ舞ふ。アドへよいや／＼。シテへ不調法を致して御座る。アドへ扨も一つ參らぬか。シテへもう食べますまい。アドへそれならば仕舞はう。シテへそれがよう御座りませう。アドへ扨々面白い人に近附きになつた。此の後は度々お出やれ。心易うするであらう。シテへ今日は存じよらぬ御馳走に與りました。此の後はせいぜい參りませう程に。お目をかけられて下され。

アド〽心易う致すであらう。シテ〽さて何時までも名殘は同じ事で御座る。お暇申しませう。アド〽どれ〳〵。それならば土産を進ぜう。シテ〽何を下されまするぞ。アド〽之を進ぜう。シテ〽これは見事な花で御座る。正眞の盗人におひと申すが此の事で御座る。アド〽痛み入つた挨拶でおりやる。シテ〽いざ一ふし諷うてお暇申しませう。アド〽一段とよからう。シテ〽月の光花の影。何か今宵の思出ならん。さりながらあはれ一枝を。花の袖に手折りて。月をも共に詠めばやの。望は殘れり。此の春の望殘れり。最早お暇申しまする。アド〽ようおりやつた。シテ〽はあ。

花折（はなをり）

シテ　新發意
アド　住持
立衆　下京の者
（入道具）

アド〽此の寺の住持で御座る。今日は用事あつて出京致す。此の節は庭の花も盛りで御座る。新發意に留守の儀を申附けうと存ずる。ト云うて呼出す。けふは出京致す。よう留守を召されい。シテ〽畏まつて御座る。アド〽此の節は庭の花も盛りぢやに依つて、定めて花見の衆が見ゆるであらう。當年は存ずる仔細あつて花見禁制ぢや程に、斷りをいうて、必ず花をお見せあるな。シテ〽禁制と仰せられますれば。一人も見せますまい程に。そつともお氣遣ひなされまするな。アド〽愚僧は迚も夕方でなくば戻るまいぞ。シテ〽お留守の儀はお心安う思召して。ゆるりとお出でなされませ。アド〽心得た。ト云うて。中入する。シテ〽これはいかな事。當年は何と思召してか花見禁制と仰せらるゝ。先づ露地の戸をしめて置かう。さら〳〵〳〵。ト云うて。扇をひろげ。戸をしめる心にて。笛座へ行き。下に居るなり。立頭〽下京邊の者で御座る。いつもの春より當年は長閑に御座る。此の中は山々の花が盛りぢやと申す。けふは若い衆を同道致し。西山の花を見物に參らうと存ずる。なう〳〵。何れも御座るか。立衆〽これに居りまする。立頭〽兼ねて西山の花見をお約束申した。愈々今日參りませう。立衆〽何れも其の用意で。はや皆揃ひました。立頭〽それならば竹筒は何と致さう。立衆〽それは申附けて先へ遣しました。立頭〽それはでかさせられた。いざ參らう。さあ〳〵御座れ。立衆〽心得ました。立頭〽シカ〳〵。毎年とは申しながら、當年の樣な面白い春は御座らぬ。立頭〽所々の花が最中ぢやと申す程に、いつも參る寺の花も盛りで御座らう。立衆〽大方最中で御座らう。立頭〽何かと申すうちにこれぢや。先づ案内を乞ひませう。ト云うて。案内乞ふ。出るも。常の如し。立頭〽下京邊の者で御座る。花見に參つた。お見せなされて下されい。シテ〽當年は何と存ぜられてか、花見禁制と申附けられた。なりませぬ。立頭〽御尤もでは御座れども。私共は例年參りまする者で。格別の者で御座る。どうぞ見せて下され。シテ〽殊にけふは住持も留守で御座る。かた〳〵以てなりませぬ。立頭〽それならば。暫く見まして早速出ませう程に。そなたの心得でどうぞ見せさせられい。シテ〽ならぬといふに。くどい事を云ふ人ぢや。立頭〽なう〳〵。何れも當年は禁制ぢやと申しまする。立衆〽いや〳〵。是から花が見えまするぞや。立頭〽誠に。これからもよう見えまする。立衆〽今を盛りで御座る。立頭〽當年はいつ〳〵よりも見事に咲きました。いざ竹筒を開かせられい。ト云うて。酒盛する。互に脇に立ち。小謡などあり。立衆〽これは一段とよう御座らう。シテ〽これはいかな事。いかう噪かしい事ぢや。ト云うて。扇

をひろげて。垣より見る心なり。扨も飲むは〳〵。身共もちと飲みたいものぢやが。致し様がある。なうなう。何れも〳〵。ちよつと御座れ。立頭へ何とやら申さるゝ。參つて聞きませう。何事で御座る。シテへ花見禁制と申すに。なぜに噪がしい花見をさつしやる。立頭へ内へ這入つて見るではなし。是處から見るに何かと云はせらるゝ事は御座るまい。シテへでも花はこちの花ぢやに依つて。外からでも見る事はならぬ。立頭へそちの花を外からも見せる事がならずば。外から見えぬ様にして置くか。但し根から掘つて取入れて置かさせられい。シテへ其の様に強氣におしやるな。花を好いて見る人といふは。心のやさしい者ならではない事ぢや。いかにしてもただおりやるもおとなげない。花にみきを上げさしめ。立頭へこれは珍らしい事を承つた。成程御酒を上げませうが。花にも口が御座るか。シテへ輕漾激して影居を動かすといふ時は。花に口があるまいものでもないに依つて。みきを上げさせられいといふ事ぢや。立頭へこれは面白う御座る。何れも〳〵相談せう程に。暫く待つて下され。なう〳〵。花に御酒を上げいと云はれまする。酒を飲ませ。だまして庭へ這入りませう。立衆へ一段とよう御座らう。立頭へお新發意。さあ〳〵みきを上げませう。シテへどれ〳〵。

迚もの事に。一銚子も二銚子も上げさせられい。扇にて垣ごしにやる心。シテ受けて飲むなり。シテへさあ〳〵注がせられい。立頭へおみきは何程でも上げませうが。何卒身共一人庭へ入れて。見せて下されぬか。シテへそなた一人か。立頭へどうぞ見せて下され。シテへそなたばかりそつと這入らつしやれ。構へて大勢はならぬぞ。ト云うて扇にて戸をあける。其のうちに。立頭招く。立衆皆々内に入る。シテへこれは〳〵。理不盡な。大勢はならぬといふに。立頭へ扨も〳〵側ではどうもいはれぬ。見事で御座る。シテへ何と面白いか〳〵。立頭へお新發意。是處でどうぞ一献飲ませて下さらぬか。シテへ此の上はどうなりともさせられい。立頭へそれならば。お前も是處へ出させられい。シテへありやうは外で諷はせらるゝを聞いて。内に居らるゝものでは御座らぬ。立衆へこれは御尤もで御座る。立頭へいづれも酌に立たせられい。立衆へ心得ました。ト云うて代り〳〵酌に立つ。シテへちと諷はせられい。立頭へ諷うでも大事御座らぬか。シテへ堅い事ないはずとも。ちと舞はつしやれ。立頭へ若い衆。舞はつしやれ。立衆のうち。小舞。シテへ此度は。賑々と連舞がよう御座らう。

謡ひつ。舞ひつ。立頭へお新發意も一さし舞はつしやれい。シテへ舞ひませう。地を謡うて下されい。シテ二番ほど小舞まふ。立衆へ今のは短う御座つた。長い事を舞はせられい。シテ舞ふ。二番の内一番は道明寺の切。シテそろ／＼酔ひてよろ／＼酔に立ち酔ひ寢る。立頭へさあ／＼日が暮れた。最早歸りませう。立衆へ一段とよう御座らう。立頭へ、ふう／＼お新發意。最早歸りまするぞ／＼。シテへいやも酒は厭ちや。立頭へ酒では御座らぬ。最早御暇申しまする。シテへなに歸らつしやる。それならば土産を進ぜう。ト云うて。花を折り皆々立衆へ一枝づゝやる。立衆入ト また寢て居る。アドへ唯今歸つて御座る。定めて新發意が淋しがつて居よう。これはいかな事。なぜにやら露地の戸があいてある。花もいから散つてある。それに大勢の足跡が有る。南無三寶。花を夥しう折りをつた。新發意／＼。正體もなう是處に寢て居る。こりや／＼。新發意／＼。扨も熟柿くさい。これは夥しう酒に醉ひ臥して居る。やいこゝな者／＼。シテへどりや／＼。土産を遣らう。ほしくば何程でもやらう。ト云うて。花を折る所を。アドへヤイそこな奴。己れは憎い奴の。ト云うて追込み入るなり。

蛤（はまぐり）　鷺流

シテ　蛤の精
アド　旅僧
アド　アヒ

アド次第へ我は佛と思へども。／＼。人は何とか思ふらん。これは都方より出でたる僧にて候。我いまだ東國を見ず候程に。此の度思ひ立ち東國行脚と志し候。道行へ尋ね逢ふ。坂の鳥居や明らけき。／＼。神の宮居を拜みつゝ。關の清水のいさぎよき。粟津の原も打過ぎて。勢田の長橋打渡り。婀娜水口に唱ふなる關の地藏をふしながみ。流れつきせぬ泉川。日を重ねつゝ行く程に。これぞ名に負ふ伊勢の國。桑名の濱に着きにけり。／＼。詞やう／＼急ぎ候程に。勢州桑名の濱に着きて候。暫く休らうて參らう。シテへなう／＼御僧に申すべき事の候。アドへこなたの事にて候か。何事にて候ぞ。シテへ唯今お足に踏み給ふ貝は。何と申す貝にて候ぞ。アドへ御尋ね候程によく／＼見れば。や。これはうるはしき蛤にて候。シテへさればとよ佛も土中の蟲類。あだに踏まじと杖に音ある謂はれもあり。さりながら。お足におりし結縁に。わらはが事も思ひ出で。かまへてよく／＼御弔ひあれと。地へくりかへし申しつゝ。跡弔ひてたび給へと。いひ捨てゝその儘。波の底に沈みけり立つ波の底に沈みけり。アドへ扨も／＼不思議なる事で御座る。先づ所の人に申して宿をとり。心靜かに佛事を執り行はばやと存ずる。所の人の御座るか。間へ所の者と承るは。誰にて御座るぞ。アドへ愚僧で御座る。當濱初めて一見致いて御座るところに。其の樣人に變りたる女性の來り。これなる蛤の殼に身の事を思ひ出で。弔ひ給へといひ捨てゝ。其のまゝ波に入ると見えて見失うて候間。あまり不審に存ずる。斯樣の不思議が當濱に折々御座るか。委細承りたさに呼び出し申して御座る。間へこれは近頃奇特なる事を承り候ものかな。つひに當濱にてもさやうの事聞きも及ばず候。こざかしき申し事には候へども。蛤の精かりに現れ出でたると存ずる間。暫く御逗留なされ。かの跡御弔ひあつて。お通りあれかしと存ずる。アドへ扨は蛤の亡靈かりに現れ。我に詞をかはしけるぞや。いざや跡とひ申すべし。三界以て佛界

なり。草木國土有情非情。皆共成佛道と聞くからに。就中生ある蛤貝。この妙典にあうからば。一生涯を敷はん事。待謡へなに疑ひのあるべきと。思ひの玉の數々に。ハヽ。身はあだ波の寄邊なき。法に心のひく方や。今宵は是處に旅居して。かの跡いざや弔はん。ハヽ。後シテ一セイへ定めある。誓ひの網にもれけるが。かたちばかりに罪は沈まず。アドへ不思議やな波の面に浮み來る者を見れば。女のかたちと見ゆれども。其の樣化したるかほばせは。如何さま先にきこえたる。其の蛤の亡靈なるか。シテへ我れ蛤の幽靈なるが。御弔ひの有難さに。重ねて現れ出でて候。アドへ扨は蛤の幽靈かや。最後の有樣懺悔せよ。跡をとうて得さすべし。シテへさあらば最期の有樣語り申すべし。跡をとうて賜はり候へ。さても我れこの浦に住馴れし蛤の簾貝なるが。過ぎし年の事なるに。汐干に見えぬ沖の石の。清き所に流れ上り。人に見えんと嬉しくも。さも快く泡吹きしに。それとは知らで海人だとは。岩のあたりに近づきて。わらはが姿を見るよりも。げに大きなる蛤と。

のおれもやらで引上げられ。アドへ五戒のうちの殺生戒。シテへ口には云へど。アドへ無心の人。シテへただ打ち破れと聲々に。地へ云ひもあへぬに口割られ。さもはしたなく身は出でて。漁師の口に入りぬれば。殼はけうとき海に入る。シテへさなきだに簾貝の浮む瀨も無き憂き身なり。せめて大内の貴人の前に。竝び居る貝合の身ともならず。貝ばりの身ともならで沈むつらさ。それのみか蛤の。多き數々上る時。夏の虫の飛んで火に入る燒蛤の。炭に炙られて。焦熱大焦熱の。火盆地獄もこれならん。紅蓮大紅蓮の。軒の氷の柱も取られ。終に此の身もかゝる苦しみ。誓の網に洩れけるを。他生の緣ある御僧の御法。其のかひありて佛果を得ん事。何疑ひのあるべきと。願ひの如く身は出でゝ。安く樂しむ國に入る。跡はいつしかそこはかと。なき貝殼とぞなりにける。貝がらとこそはなりにけれ。

腹不立（はらたてず）

シテ　僧
アド　施主
小アド　施主

アドへ此の邊りの者で御座る。一在所として一間四面の堂を建立致いて御座る。堂は思ふ儘に出來ては御座れども。堂守が御座らぬ。爰に身共が樣な施主が御座る。呼出し相談を致さうと存ずる。まうし／＼御座るか。小アドへこれに居りまする。アドへ内々の堂守の事も。兎角似合はしい御出家が御座らぬ。今日は上下の街道へ參り。似合はしい御出家も通らば。同道致いて參らうと存ずるが。何とで御座らう。小アドへ其の樣なことでなくば調ひますまい。アドへそれならば追附け參らう。さあ／＼御座れ／＼。小アドへ心得ました。アドへ何と思召す。田舍と申すは物每に不自由なことで御座る。堂は思ふ儘に出來て御座れども。堂守が極まらいで氣の毒で御座る。小アドへいや。今日街道に參つたらば。定めて似合はしい御出家が御座らう。アドへ何かと申す

うちに。上下の街道で御座る。先づこれへ寄つて御座れ。小アド〽心得ました。シテ〽一所不住と信で御座る。其近い頃まで俗で御座つたれども。浮世を見限つて斯様の體に成つて御座るさりながら。俄坊主の事なれば。經陀羅尼は存ぜず。詣れ一飯の斎けてが御座らぬ。それ故諸國を修行致す。これより上方へ上り。此所彼處をも見物致し。似合はしい草堂なりとも求め。足をも留めうと存ずる。誠に。出家ほど心安い者は御座らぬ。衣一重珠數一連あれば。どれからどれへ參らうと儘で御座る。アド〽これは一段の御出家が見えました。言葉をかけませう。小アド〽一段とよう御座りませう。アド〽あゝまうし／＼。シテ〽こなたの事で御座るか。アド〽成程お前のことで御座る。これはどれからどれへ御通りなされまする。シテ〽愚僧は風に木の葉の散るが如くで御座る。アド〽これは面白い御返答で御座る。これは心が御座るか。シテ〽別に心と申す事も御座らぬ。總じて木の葉と申すものは。風が誘へば何方へも散りまする。愚僧も散つたる如く。誘はるゝ方へ參るに依つて。風に木の葉の散る如くと申すことで御座る。アド〽なんと止めたらば止まらつしやるか。シテ〽それは唯今申す通りで御座る。アド〽詞を掛けますも。別の事では御座らぬ。私共一在所として一間四面の堂を建立致いて御座る。堂は思ふ儘に出來て御座れども。いまだ堂守が御座らぬ。どうぞお出でなされて下されうならば忝う御座る。シテ〽それこそ出家の望むところなれ。なる程參りませう。アド〽さて／＼それは忝う御座る。何も御望みは御座りませぬか。シテ〽別に深い望も御座らぬ。冬紙子常に衣一重下さればよう御座る。アド〽それは心安いことで御座る。何と今でもお出でなされませうか。シテ〽何時でも參りませう。アド〽それならば。いざお出でなされませ。シテ〽案内者の爲め先へ御座れ。アド〽左様ならば。お先へ參りませう。お間を隔てゝ參りませう。小アド〽一段とよう御座らう。アド〽ふと詞を掛けましたに。早速御同心なされて。此の様な悦ばしいことは御座らぬ。シテ〽これと申すも佛の御引合せで御座らう。小アド〽さてお坊様には。定めてお手をなされませう。シテ〽書くと申す程のことは御座らぬが。雀の蹈足の様なことか。蚯蚓のぬたくつた様なことは致しまする。アド〽斯様に申すも別のことでは御座らぬ。私共には悴を持つて御座る。これに手習を致させ度さにお頼み申すことで御座る。シテ〽子供衆に教へまする程のことは。心安いことで御座る。小アド〽さてお坊様は若し經を御讀みなされまするか。シテ〽先づお待ちなされませ。凡そ大般若經六百巻。華嚴。阿含。方等。法華。涅槃。その外一切經は大分そらんじて居りまする。愚僧が不執心な故教へられませなんだか。但し師匠が存ぜられませいで習ひませなんだか。若し經と申す經は覺えませぬ。アド〽それはあの者の申し様が惡う御座る。若し經では御座らぬ。若しお經をお讀みなされまするかと。申すことで御座る。シテ〽それは唯今申す通りで御座る。アド〽さて／＼一かどの御修行で御座る。ト云ふ内。シテ口の内にてうなる。アド〽お坊様。まうしお坊様。シテ〽やあ。アド〽お前は何を仰せられまする。シテ〽これは物で御座る。幼少から不斷稱名を唱へまする。それが口癖になつてをりますれば此の様に申すことで御座る。アド〽さて／＼それは御殊勝なことで御座る。小アド〽その通りで

御座る。アド〽いや御坊様のお名は何と申しまする。シテ〽名で御座るか。アド〽はあ。シテ〽何となりとも呼ばせられい。答へませう。アド〽唯今までのお名は何と申しまする。承りたう御座る。シテ〽暫くそれに待たせられい。アド〽心得ました。異な事に詰られました。小アド〽左様で御座る。シテ〽これはいかなこと。身共は未だ名がない。何とせうぞ。致し様が御座る。まうし〳〵。愚僧が名を云へで御座るか。アド〽承り度う御座る。シテ〽それならば申さう。愚僧が名は不立腹の正直坊と申す。アド〽これは長いお名で御座る。これには何ぞ仔細が御座るか。シテ〽なる程。仔細が御座る。師匠の申されまするは。そちは正直な者ぢや。人の物とては楊枝一本違へた事もなし。其の上腹を立てた事がないとあつて。不立腹の正直坊と附けられて御座る。アド〽これは御尤もで御座る。暫くそれに御待ちなされませ。シテ〽心得ました。アド〽なう〳〵。小アド〽何で御座る。アド〽今のを聞かせられたか。小アド〽なる程。承りました。アド〽人の物とては楊枝一本違へたことはないと仰せありまする。これはかうもありさうな事で御座るさりながら。人間に生れて腹の立たぬといふ事はない筈で御座る。小アド〽いかさま合點のゆかぬ事で御座る。アド〽いざ名を覺えぬ體にして。腹を立てさせて見ませうか。小アド〽一段とよう御座りませう。アド〽構へて拔からせらるゝな。小アド〽心得ました。アド〽お坊様。お前の名は何とやら仰せられましたな。シテ〽不立腹の正直坊と申す。ただ腹を立てぬ正直な者ぢやと思うて下され。アド〽心得ました。小アド〽なう〳〵御坊。そなたの名は薑(はじかみ)の生薑坊か。シテ〽やあら妄な人は。生薑坊といふことがあるものか。不立腹の正直坊ぢや。小アド〽それちと腹が立つたさうな。シテ〽笑ふ いや腹は立ちませぬ。アド〽御坊。シテ〽やあ〳〵。アド〽こなたの名は張損ひの障子骨ぢやな。シテ〽やあ出家の名に障子骨といふことがあるものか。不立腹の正直坊ぢや。アド〽そりや腹が立つさうな。シテ〽笑ふいや腹は立ちませぬ。小アド〽やい坊主。シテ〽なんぢや。小アド〽そちの名は腹焦げの焦熱坊か。シテ〽えゝ苦々しい。正直坊ぢやわいやい。小アド〽そりや腹が立つは。シテ〽笑ふ腹が立ちませぬ。アド〽やい坊主。シテ〽なんぢや。アド〽おのれの名は腹ふくれの正月坊か。シテ〽えゝ物覺えの惡い。正直坊ぢや。アド〽そりや腹を立てるは。シテ〽いや〳〵腹は立てぬ。これより二人互に引く。そりや腹を立てる〳〵ト云うて。シテ笑ふ。色々仕様あるべし。シテ〽先づ待て〳〵。何ぼうどの様におしやつても腹は立てねども。兩人して其様におしやれば。身が燃えて業が沸くわいやい。ト云うて。振放すなり。アド〽さればこそ賣僧坊主ぢや。ちやつと捉へさせられい。シテ〽宥して下され〳〵。ト。シテは逃げて入る。二人〽あの横着者。やるまいぞ〳〵。追込むなり。

張蛸(はりだこ)

シテ　主人
アド　太郎冠者
小アド　張蛸賣
(入道具)

シテ〽大果報の者。シテ名乘る。アド呼出す。都へ張蛸を買ひにやる。云ひつくる所まで。末廣がりに少しも違はず。シテ〽さて好みがある。隨分皮の厚い。いぼのよう揃うた。中へ木を曲げ入れたを求めて來い。アド〽畏まつてござる。シカ〳〵云うて。都へつき。張蛸を呼ばはる。小アド出て色々ある。張蛸を見せうと云ふまで。末廣がりの通り。小アド〽田舍者をまんまとだましてはござれ

ども。何た張蛸ぢやと云うて賣つてやらう物がない。是庭に古い太鼓がある。面白なかしう申して。賣つてやらうと存ずる。なう〳〵お居やるか。アド〽これに居りまする。小アド〽これ〳〵。アド〽これが張蛸でござるか。小アド〽いや其の聞違ひぢや。張蛸ではない。張太鼓でおりやる。アド〽扨は太鼓でござるか。小アド〽なか〳〵。アド〽さて好みがござる。先づ皮の厚い。さていぼの揃うた。中へ木を曲げ入れたを求めて來いと云附けられました。小アド〽それは御巧者な事ぢや。悉くお好みに合はせてやらう。則ち皮の厚いと云ふは此の皮の事。薄い皮はあれども太鼓の音が悪い。隨分厚い皮ぢやに依つて。此の音を聞かしませ。ト云うて太鼓を打つ。何とよい音であらうが。いぼをお見やれ。よう揃うてある。太鼓の胴は木を曲げたものぢやが。よい細工ではないか。アド〽成程。好みにはよう合ひましたさりながら。節(せつ)なさせられて一段逹を呼ばせらるゝに。張太鼓に何の役に立つものでござる。小アド〽不審尤もぢや。お振舞をなさるゝに。料理ばかりの御馳走でもすまず。お客の慰みに此の太鼓をお出しなされて。面白う囃して踊らせらるゝ。この爲に。お求めなされれば

叶はぬ事でござる。アド〽是は尤もでござる。求めませうが。代物は何程でござる。小アド〽萬疋でおりやる。アド〽それは餘りに高直にござる。もそつと負けて下され。小アド〽張太鼓に限つて負はない。いやならば措(お)かしめ。アド〽それとても求めませう。則ち代物に三條の大黒屋で渡しませう。小アド〽成ろ程大黒屋存じた。あれで請取るであらう。ト[illegible]乞して。アドシカ〳〵云うて廻り。主を呼出す。張蛸を求めて來たと云うて。見せる所まで。詞がゝりに同じ。詞への事つ揃ふもの、事。[illegible]は前に同じ。シテ〽こちに都へ上つて。子供の土産に太鼓を求めて來たさうな。先づ其の張蛸を見せい。アド〽成ろ程御尤もでござる。これはお前もお覺え違ひさうにござる。張蛸ではござらぬ。張太鼓でござる。則ちお好みも悉く合ひましてござる。先づ皮の厚いと申すは此の皮の事でござる。薄い皮では音が出ませぬ。ト云うて太鼓を打つ。何とよい音でござりませうが。廻りのいぼもよう揃うてござる。中へ木を曲げ入れて上々の張太鼓を吟味致して求めて參りました。シテ〽何ぢや。張蛸ではない。張太鼓ぢや。アド〽太鼓の事ぢやと申してござる。アド〽扨も〳〵。うつけた奴かな。知らずばなぜに篤と問うて行かぬ。張蛸と云ふは根本魚類の事ぢや。おのれせちの料理

に此の太鼓を使うて食はるゝものか。アド〽扨は料理にお使ひなさるゝ魚類でござるか。シテ〽おんでもない事。アド〽でも都の者が張蛸ではない。張太鼓ぢやと申したに依つて。求めて參つた。シテ〽まだぬかしをる。己れその年になるまで。魚類の蛸と[illegible]になる太鼓との差別を知らぬか。アド〽お前も魚類ならば魚類と。初めから仰せられたがようござる。シテ〽推參な奴の。身が內には叶ふまい。出て行け。アド〽はあ。シテ〽まだ其處に居るか。アド〽あゝ。シテ〽まだそこにをるか〳〵。扨々憎い奴かな。アド〽これはいかなこと。以ての外の御機嫌ぢや。都の者が張蛸ではない。張太鼓ぢやと申した時は。實にもと存じたが。今賴うだお方の仰せらるゝを聞けば。都のすつぱが過分の値(あたひ)を取らう爲に。口重寶を以て身共をぬき居つた。これは何としたものであらう。いや流石都の者ぢや。ぬかば唯もぬかいで。機嫌の直る囃子物を教へてくれた。何とやら云ふ事であつたが。張太鼓と申すは。中へ木を曲げ入れ。兩に皮をあてさせ。廻りにいぼのあるをこそ。張太鼓と申すよ。げにもさあり。やよがりもさうよの。かうであつた。さらば拍子で御機嫌を直

ませう。（ト云うて　これより太鼓ばかりに少しも違はず。太鼓大小拍子ものあしらふ。シテ移る。色々あつて。シヤギリにて。二人とめて入るなり。）

【ひ】

引敷聟（ひきしきむこ）

シテ　聟
アド　舅
小アド　太郎冠者
同　何某
（入道具）

アドへこの邊りの者で御座る。（これより シテ出て名乗るまで。懐中聟に同じ。）シテへ舅に可愛がらるゝ花聟で御座る。今日は最上吉日で御座るに依つて。聟入を致さうと存ずる。さりながら。某は素袍袴を持たぬに依つて。さるお方へ御無心申して御座れば。素袍の上ばかり貸されて御座る。又爰に御目を下さるゝお方が御座る。これへ參つて袴を借り。直に聟入を致さうと存ずる。シカ／＼。誠に。我等體の身の上で。素袍袴の入用は常に御座らぬに依つて。所持致さぬ筈なれども。斯樣の事を存じては。たとへ麁相には御座らうとも。せめて一具は用意致し度いもので御座る。何かと云ふうちにこれぢや。（ト云うて 案内乞ふ。常の如し。）何某へこれは繕つた出立ちでおりやるが。どれへおゆきやるか。シテへ今日は最上吉日で御座るに依つて。聟入を致しまする。何某へやれ／＼。それは目出度い事ぢや。とうにも存じたらば。人を以てなりとも申さうものを。嘗て存ぜなんだ。シテへ御存じない筈で御座る。今日唯今の事で御座る。シテへ早速御無心申しませう。何某へ何なりとも用があらばおしやれ。何某へ何なりとも遠慮なしにおしやれ。シテへ一つに外聞もあるものぢや。鎗なりとも。長刀なりとも。お持たしやれ。貸さうぞ。シテへ其の樣な物では御座らぬ。御覧なさるゝ通り。素袍の上みは着ましたれども。袴が御座らぬ。袴を一下りお貸しなされて下され。何某へ易い事ぢや。貸しておませう。暫くそれにお待ちあれ。シテへ畏まつて御座る。何某へやい／＼。その袴を一下り出しておこせ。ぢやあ。なう／＼。その通りを云附けたれば。折惡しう人にも出して遣す。其の外染直し洗濯などに遣して。一具も無いと云ふに。シテへそれは氣の毒で御座る。近頃申兼ねまして御座れども。お前のお召しなされて御座るのを。お貸しなされて下され。何へ何が扨そなたの事ぢや。惜しみはせぬが。どうも貸されぬ。シテへ扨々氣の毒で御座る。それならば。今日は聟入をえ致さぬと申すもので御座る。何へ袴故に聟入の日を延ばすと云ふは笑止ぢや。今一度吟味をせう。やい／＼。あこなう／＼。何程尋ねても袴はないが。素袍の上ばかり一つあると云ふが。これはなるまいか。シテへ最早上みは御覧の通り着て居りまする。何へいや思出した事がある。先づそれにお待ちあれ。（ト云うて。笛座より素袍の上み持出す。）何へ此の袖へ兩の足を入れさしめ。後は何卒取繕うて置かうぞ。シテへそれならば。宜しい樣にお取繕ひなされて下され。何へ是へよらしめ。（ト云うて。上ばかり二つ着せる。後をむさと挾むなり。）シテへこれはまんまと袴の樣に御座る。お蔭で忝う御座る。最早參りませう。（ト云うて。暇乞して行く後を見て云ふなり。）何へなう／＼。先づ御待ちあれ。後から見ればむさとした物ぢや。仕樣がある程に待たしめ。（ト云うて。引敷を取出し。）何へこちへ寄らしめ。シテへ心得ました。（引敷を後へあてるなり。）シテへこれでは後がようなりました。何へなか／＼。後のむさとした所が見えぬ。扨あの方で出立ちを不審するならば。聟

野から直ぐに參つたとおしやれ。扨それを取れと云はうとも、必ずお取りあるな。 シテへ近頃忝う御座る。首尾よう仕舞ひまして。早速御禮に參りませう。 何へいや禮に及ぶ事ではおりない。（暇乞常の如し。） シテへなう／＼。嬉しや／＼。ざつと埒があいた。先づ急いで參らう。シカ／＼。誠に、分別は身上につるゝものぢやと申すが、有徳なに依つて物事不自由にはなく。何を申して參つても。埒のあかぬと申す事がない。何かと申すうちにこれぢや。（ト云うて案内乞ふ。出る。常の如し。） シテへ聟が來たとおしやれい（これより臺詞ありて。盃出して。二度飲むまで。懷中聟と同じ。） シテへ食ぶればたぶる程よい御酒で御座る。 アドへさて最前から見ますれば、引敷をなされて御座る。窮屈に見えまする、先づその引敷を取らせられい。シテへいや鷹野から直ぐに。野掛の裝束で御座る。 アドへ御尤もなれども。引敷で御座る、取らせられい。 シテへいや此のまゝ置かせられい。（ト云ふを。無理に太郎冠者に取らす。太郎冠者寄つて無理に取る。シテ迷惑がる。） アドへさて其の盃をこれへ下されい。 シテへ慮外ながら進じませう。 アドへさて一つ受持つて御座る。一さし舞はせられい。 シテへ久しう舞ひませぬ。御ゆるされませ。 アドへ親儀で御座る。御苦勞ながら一さし舞はせられい。

シテへそれならば舞ひませう。アドへ一段とよう御座らう。 シテへ目出度かりける時とかや。（一段舞ふ。座答笛ばかりなり。） アドへとてもの事に左右へ廻つて。面白う舞はせられい。 シテへ舞ひたうは御座れども、今日はさす神があつて、どうも左右へは廻られませぬ。 アドへ舞にさす神は御座るまい、是非とも舞はせられい。 シテへこれは迷惑で御座る。さ樣ならば舞ひませう。悦びに。又悦びを重ねけり。（又一段舞ふ。舞のうちに。あれ／＼と云うて脇見させて。其のうちに小廻りして留むる。） アドへこれは短い舞で御座る。なぜに左右へ廻つて長々と舞はせられぬ。シテへ唯今のは左右へ廻りまして御座る。アドへそれならば、目出度う相舞に致しませう。シテへそれは迷惑で御座る。 アドへひらに立たせられい。 アドへ祝ふ心は。 二人へ萬歳樂。（三段の舞。舞ふうちに後を見附けるなり。） アドへまうし／＼。これは何で御座る。（ト云うて。後を持つ。） シテへなう／＼。恥かしや／＼。 アドへ苦しう御座らぬ。氣にかけさせらるゝな。（ト云うて入る。シテは跡から先へ入るなり。）

比丘貞（びくさだ）

シテ　尼
アド　親
小アド　子
（入道具）

アドへこれは此の邊りの者で御座る。某忰を一人持つて御座る。今日（こんにった）は最上吉日で御座るに依つて。お領樣へ連れて參り。烏帽子を着せて貰はうと存ずる。先づかの法師を呼出し。此の由を申附けようと存ずる。（ト云うて呼出す。常の如し。） 汝呼出す別の事でもない。そなたも漸う成人したに依つて。今日は御領樣へ連れていて。烏帽子を着せて貰はうと思ふが。何とあらうぞ。子へそれはともかくもで御座る。 アドへそれならば。さゝえの用意を召され。子へ畏まつて御座る。さゝえの用意致して御座る。アドへ追附け行かう。さあ／＼おりやれ。 子へ心得ました。 シカ／＼。 アドへさてあのお領樣は。御壽命といひ御富貴と云ひ、何不足のないお方ぢや程に。あやかるやうに召され。 子へ畏まつて御座る。 アドへさて烏帽子を着せて貰うてからは、諸事氣を附けねばならぬ程に、隨分おとなしうならしませ 子へ畏まつて御座る。 アドへ何かといふうちにこれぢや、先づ案内を乞はう。そなたはそれに控へて居さしめ。子へ心得ました。 アドへものもう。案内もう。お領樣御内に御座りますか、 シテへ表に案内

がある。案内とは誰ぞ。アドヘ私で御座る。シテヘえい誰、ようおりやつたのう。オヽようおりやつたのう。先づかう通らしませ。アドヘ畏まつて御座る。シテヘやれ〳〵珍らしや〳〵。此のうちも此のうちで。この誰はちと見舞つても呉れられさうなものぢやに。お領を見限つてわせぬかと思うて。いかう恨んだ。アドヘ成る程。お恨みの段は御尤もに存じまする。何かと渡世に隙を得ませいで。御無沙汰を仕りました。シテヘ渡世に隙がないとあれば。尤もでおりやる。して今日は何と思つておりやつた。アドヘ今日はかな法師がお見舞申して御座る。シテヘやあ〳〵。かな法師が見舞うたとおしやるか。アドヘさ様で御座る。シテヘどれ何處に居るぞ。アドヘ御門前に待たせて置きました。シテヘあの小さい者を。外に一人置くといふ事があるものか。早うこちへ呼ばしめ。アドヘ畏まつて御座る。シテヘ早うお呼びや。アドヘはあ。さあ〳〵。あれへ、お出やれ。子ヘ心得ました。アドヘはあ。かな法師で御座る。シテヘやあ〳〵。これがかな法師か。アドヘさ様で御座る。シテヘオヽよう來たなあ〳〵。久しう見ぬまに大きな者に

なつたなあ。餘所で見たらば見違ふわいのう。アドヘこれは今日かな法師がお見舞申した印で御座る。シテヘあれが見舞うて呉るゝこそ嬉しけれ。何のもたせに及ぶ事ぞ。さて〳〵大きな者になつたなあ。今もかな法師といふか。アドヘされば其の事で御座る。あれも段々成人致して御座るに依つて。いつがいつまでかな法師と申すも如何で御座る。今日は最上吉日でも御座る。お領様に烏帽子を着せて貰ひませうと存じて。參つて御座る。シテヘつがもない事をいふ人ぢや。烏帽子着の冠とのといふは。皆殿たちのなさるゝ事でこそあれ。お領は其の様な事は知り候はぬ。アドヘ御尤もには存じますれども。かな法師がお領様につけて貰ひたいと申す願ひで御座る。どうぞおつけなされて下されい。シテヘやあ〳〵。何とおしやる。あの子がこのお領につけて貰ひたいといふ願ひぢやとおしやるか。アドヘさ様で御座る。シテヘやれ〳〵。馴染とてよう云うたなあ〳〵。いか様このお領の様な壽命といひ富貴と云ひ。何不足のない者はない。あやかる様につけて見ようかいのう。アドヘそれは忝う存じまする。シテヘ何も望はないか。アドヘ別に望も御座りませぬ。代々太郎

と申す字を附けまする。シテヘ誠に。そなたの小さい時も。何太郎とやら云うたぞや。アドヘよいお覺えて御座りまする。シテヘ太郎々々。いか程案じたりとも別の事もおりない。このお領が居る所をさいて。お庵〳〵と仰せらるゝ。お庵の庵の字をかたどつて。安太郎と附けうかいの。アドヘこれはよい名で御座る。やい〳〵。そちが名を向後安太郎とお附けなさるゝ。御禮を申さしめ。子ヘ有難う存じまする。シテヘ何と氣に入つたかの。アドヘ氣に入りましたさうに御座る。シテヘ誰が氣に入らいでも。あの子が氣にさへ入れば嬉しい。さて此の様な時は。皆殿たちからは。太刀の刀のと云うて。お引があるものさうな。このお領は其の様な物は持たぬ。今の祝ひにめゝ五十石ませうぞ。アドヘそれは有難う存じまする。これ〳〵。今の祝にお米五十石下されました。お禮を申さしめ。子ヘ忝う存じまする。シテヘあれがおとなしうなつて。見事獨り禮を云ふは。アドヘ迚もの事に。字をも下されうならば。忝う存じまする。シテヘ安太郎が事ぢや。物持さへしたらば。何が惜しからう。お領は地と云うては一反も持たぬわいのう。アドヘその字の事では御座りませぬ。名乘字

の事で御座りまする。シテ〽なに名乘字を。アド〽中々。シテ〽今いさへ濟うと附けた。それはまた殿たちを頼ましめ。アド〽名をお附けなされたたの事で御座る。どうぞ名乘もお附けなされて下されませ。アド〽其の樣におしやれば。いやとも云はれず。これも附けても見ようか。アド〽どうぞ願上げまする。シテ〽これは聞いた事もある。家に傳はる通り字とやらいふ事があるげなが。其の樣な事もないか。アド〽なるほど。これも代々貞と申す字を附けまする。シテ〽貞々。いか程案じても別の事もあるまい。何れもこのお領をさいて比丘尼〳〵と仰せらるゝ。比丘尼の比丘をかたどつて。比丘貞と附けうかいのう。アド〽これは忝う存じまする。これ〳〵。そなたの名乘を比丘貞とお附けなさるゝ。御禮を申さしめ。子〽これは忝う存じまする。シテ〽これも氣に入つたやら禮を云ふは。アド〽さ樣で御座りまする。シテ〽今の祝は。おあし百貫ませうぞ。アド〽忝う御座れども。さいぜんのお米が夥しう御座るに依つて。これはちと御斟酌を申しませう。シテ〽いやこれはとゝが預つて置いて。あの子が大きうなつてい元手にして。太う長う榮ゆる樣にめさるよ。

アド〽これは有難う存じまする。アド〽こりや〳〵。今の祝に烏目百貫下された。御禮を申さしめ。子〽これは重ね〳〵有難う存じまする。シテ〽おゝ目出度いのう。祝うて。持たせのさゝえを開かしめ。アド〽畏まつて御座る。シテ〽やい安太郎よ。今からとゝのおしやる事をよう聞いて。手習を精を出して。孝行にめさよ。子〽畏まつて御座る。アド〽さゝえを開きまして御座る。シテ〽これはとゝのあいだてない。大きな盃をお出しやつたの。アド〽一つ召上がられて下され。シテ〽目出度うお領が始めよう。アド〽これがよう御座りませう。シテ〽おゝ御座る〳〵。おゝよい九獻やの〳〵。念が入つたやらいしい酒でおりやる。アド〽何と御座りまするぞ。シテ〽そなたと云ひたけれどもけふの祝ぢや。安太郎へさしませう。アド〽それは忝う存じまする。お盃ぢや戴かしめ。子〽畏まつて御座る。シテ〽はあ。あの子も一つ飲むか。アド〽一つ下されますさうに御座る。シテ〽瓜の蔓に茄子はならぬ。とゝの子ぢやもの。飲まいでは。アド〽さて是は慮外ながら。お前へ上げたいと申しまする。シテ〽おゝこちへ呉れさしめ。アド酌する。小謠あるべし。「御子孫も」にし。同音ありたるがよきなり。シテ〽謠といふものは。

殿たちの好かせらるゝ程あつて。誠やみな目出度いものぢやのう。アド〽さ樣で御座る。シテ〽さてあの子は。小さい時は舞うたが。今も舞ふか。アド〽唯今も少し舞ひまする。シテ〽目出度う一さし舞へとおしやれ。アド〽畏まつて御座る。御所望ぢや程に。一さしおまやれ。子〽畏まつて御座る。ト云うて小舞。シテ〽おゝ上手やの〳〵。とゝの精が出ると見えて。いかう安太郎の舞が上がつた。アド〽いやさ樣にも御座りませぬ。シテ〽さて之をそなたへさしませう。アド〽戴きませう。シテ〽なう〳〵安太郎。とゝに酌をしておませ。子〽畏まつて御座る。アド〽さて一つ受持ちました。お領樣へ、ちとお願が御座ります。シテ何ぢやの。アド〽久しうお立姿を拜見仕りませぬ。一さしお舞ひなされて下されうならば。忝う存じませう。シテ〽何ぢや。このお領に舞を舞へとおしやるか。アド〽さ樣で御座る。シテ〽悲しや〳〵。このお領がいつ舞を舞うた事があるぞいのう。アド〽いつぞやで御座りました。拜見仕りましたを覺えてなりまする。シテ〽おゝそれは久しい事であらうに。覺えのよい人ぢや。いか樣今日は目出度い折柄ぢや。昔を思ひ出して。舞うて見ようか

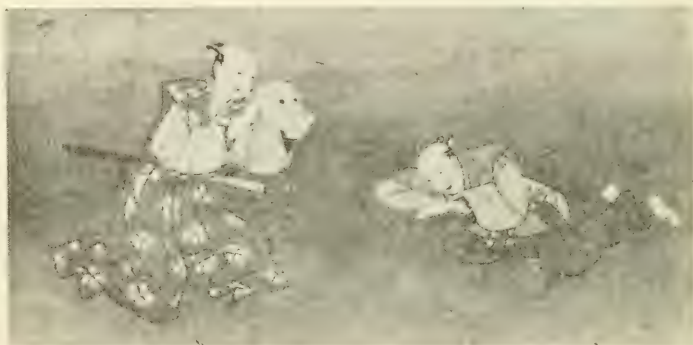
いのう。アドへそれは忝う存じまする。シテへ地を謡うてくれさしめ。（鎌倉の安郎を舞ふ。）アドへよいや／＼。シテへ恥かしや／＼。このお領が舞まうたと。必ず人におしやるなや。アドへいかな／＼。申す事では御座りませぬ。シテへ安太郎も人に云ふなよ。子へ畏まつて御座る。シテへアドへさても少しをかしい事で御座る。シテへ何のをかしい事があるぞいのう。アドへさて憚りながら之をお前へ上げませう。シテへこれへくれさしめ。（小謡あるべし。）シテへ謡といふものは。何程聞いても聞きあきぬ賑やかなものぢやのう。アドへさ様で御座る。シテへさてまた之を安太郎へさしませう。アドへそれは忝う存じまする。シテへも一つ飲めとおしやれ。アドへ畏まつて御座る。またお盃を戴かしめ。子へ畏まつて御座る。アドへさて安太郎も一つ受持つて御座ある。さい前のは餘り短う御座る。もそつと長い事をも一さしお舞ひなされて下されうならば。忝う存じまする。シテへやあ／＼。まだ舞を舞へとおしやるか。アドへはあ。シテへあこぎやの／＼。今のさへ漸う舞うた。もう宥してくれさしめ。アドへ御尤もでは御座れども。愛にものとした事が御座る。さい前私が盃の上でお舞ひ下されて。安太郎が盃の上でお舞ひ下されいでは。子心にも何とか存じませう。近頃御苦勞ながら。も一さしお舞ひなされて下されたらば。忝う存じまする。シテへ誰とした事は。人が否とも應とも云はれぬ様に。上手に物をいふ人ぢや。いか様けふは目出度いなりからで。さゝにも醉うた程に。けふの祝を長々と舞入りにせう。地を謡うてくれさしめ。アドへ畏まつて御座る。シテへやら／＼珍らしや／＼。地へ昔が今に至るまで。比丘尼の烏帽子をとる事は。これぞ初めの祝言なる。シテへさりながら方丈。同へさりながら方丈。寺も庵もおあしもめいも。つくはと持ちたれば。始終の旦那に頼み頼まるゝ。唯今の引出物。シテへめい五十石。同へおあし百貫比丘尼にとらせ。これ迄なりとて方丈は。／＼。眠藏にくすと這入りけり。

簸屑（ひくづ）

シテ　太郎冠者
アド　主人
小アド　次郎冠者
（入道具）

アドへ宇治の里に住居する者で御座る。何かと申すうちに宇治橋の供養も近々になつて御座る。それに就き太郎冠者を呼出し。申しつける事が御座る（ト云うて呼出す。出るさま常の如し。）汝呼び出す別の事でない。何と宇治橋の供養も近々になつたではないか。シテへ御意なさるゝ通り。宇治橋の供養も近々になりました。アドへ定めて大勢の道者であらう。シテへ何れ夥しい道者で御座らう。アドへまた當年は先祖の遠忌に當つたに依つて。志の爲に接待をせうと思ふが。何とであらう。シテへ御意も無くば申上げうと存じて御座る。一段とよう御座りませう。アドへ身共が思ふは。畢竟喉の渇きさへやめばよいに依つて。煎茶よりは薄茶にして出さうと思ふが。何とあらう。シテへこれはなほよう御座りませうが。してその茶にはどれをお使ひなされます。アドへそれも思案をして置いた。茶時に簸屑を大分のけて置いた。あれを使はうと思ふ。シテへこれは御尤もに存じまする。アドへ則ち汝に云附くる。大儀ながら引いてくれい。シテへ畏まつては御座れども。私は御内證に御用も御座らう程に。次郎冠者へ仰附けられませ。アドへいやこゝな者が。今朝も今朝で山一つあなたへ使にゆけと云へば。持病に脚氣があると云うた

に依つて。次郎冠者を遣した。これは今日ばかりで濟む事ではない。次郎冠者にも云附くる。今日は汝ひけ。シテ〽それならば。畏まつて御座る。アド〽暫くそれに待て。シテ〽心得ました。アド〽やい〳〵。これは極の中をよりぬいた簸屑ぢや。隨分と念を入れて引いて置け。シテ〽畏まつて御座る。アド〽臼もあれに出させて置いた。又身共は用事あつて山一つあなたへ參る。留守のうち油斷なう引いて置け。シテ〽其の段なそつともお氣遣ひなされまするな。アド〽頓て戻らう。シテ〽頓てお歸りなされませ。アド〽心得た。ト云うて入れ違ひ。中入するなり。シテ〽出られた。扨も〳〵迷惑な事を云附けられた。さりながら。引かずばなるまい。臼も出させて置いたと云はるゝ。どれにある事ぢや知らぬ。さればこそこれにある。さらば是處で茶を引かう。ト云うて。脇座の前へ茶臼を直し茶を取る。扨も〳〵色の惡い茶ぢや。ト云うて一つかいで見る。さりながら。極のゆかり程あつて匂ひはよい。先づ臼へ移さう。あゝ頼うだ人はしんまくな人ぢや。餘所には。茶時に引き屑が溜れば。川へ流しつ火にくべつ召さるに。大事に掛けて殘して置かるゝは。何の爲ぞと思へば。此の樣なあてのある事ぢや。扨も〳〵しんまくな人ぢや。ト云うて一つ摘を臼へかけ。さらば茶を引かう。さて此度宇治橋の供養がなくば。道者もあるまい。道者がなくば。接待もせられまい。接待がなくば。此の樣に茶を引く事もあるまいに。あゝうたての橋の供養ぢや。ト云うて。茶を引き〳〵ねむるなり。これはいかな事。早や眠氣がさす。身共は此の茶を引くと馬に乘るとは。後からゆふらるゝ樣になつて。其の儘ねむたうなる。ト云うてねむる。色々仕樣あれ。小アド〽急ぎの使に山一つあなたへ參つた。先づ急いで歸らう。えい太郎冠者。やい太郎冠者。シテ〽おゝ次郎冠者。小アド〽今戻つた。シテ〽おゝ大儀〳〵。小アド〽はあ。汝は茶を引くが。客でもあるか。シテ〽いや。客はない。小アド〽先づは色の惡い茶ぢやなあ。シテ〽色の惡いこそ道理。引き屑ぢやものを。小アド〽して引き屑を引いて何にするぞ。シテ〽されば。先づ此度宇治橋の供養に就いて。大勢の道者であらう。又當年は頼うだ人の先祖の遠忌にとやらに當られて。志の爲に接待をすると云うて。此の樣に茶を引かさるゝ。汝も覺悟せい。大分引かねばならぬぞいやい。小アド〽あゝそれはもつけな事が始まつたなあ。シテ〽いやもうるさい事が始まつた。ト云うてねむる。小アド〽これはいかな事。太郎冠者。やい太郎冠者。シテ〽何事ぢや。小アド〽そちはいかう眠るが。ねむたいか。シテ〽されば今も一人(ひとり)言うて居るが。身共はこの茶を引くと馬に乘るとは。後からゆらるゝ樣になつて。其のまゝねむたうなる。ト云うてねむる。小アド〽これはいかな事。太郎冠者〳〵。やい太郎冠者。シテ〽何事ぢやぞいやい。小アド〽そちはいかうねむたいさうな。月の曇る樣に咄をして聞かせうか。シテ〽それはよからう。咄して聞かせ。小アド〽此のうち月の夜に。河原に角力のあつたを知つて居るか。シテ〽成る程知つてゐる。小アド〽身共は川向うへお使にいたが。立寄つて見物して居たれば。東の方から小男が出て。西の方を取りほした。最早あの角力につゞく角力はあるまいと。座中評判であつた。そこで身共もこらへ兼ねて。裸になつて出て。かの小男とやつと手合はせをすると否や。身共が小がひなをみぢと執へた。ぢつと執へさして置いて引きはづし。大地へづでんどうと打ちつけたが。何と手柄をしたであらうが。ト云うて居るうち。強くねむる。小アド〽これはいかな事。太郎冠者〳〵。シテ〽何事ぢや。小アド〽今の咄は面白かつたか。シテ〽何の咄を。小アド〽はて角力の咄。シテ〽いや何も聞かぬ。小アド〽こ

れはいかな事。人に咄なさせて置いて。眠るといふ事があるものか。シテへその人に咄なさせて置いて。聞き〳〵ねむるはよいものぢや。ト云うて。强くねむる。小アドへ詞の下から眠り居る。太郎冠者〳〵。やい太郎冠者。シテへあゝかしましい。何事ぢやぞいやい。ト云うて。臼を早く引く。小アドへあゝこりや〳〵。其の樣に引いたらば茶が荒からうぞよ。シテへはて荒くば大事か。小アドへそちはいかうねむたいさうな。身共は此の中に舞な稽古す引き屑ぢやわいやい。小アドへそちはいかうる。目の覺める樣に舞うて見せうか。シテへ何ぢや舞を舞ふ。小アドへなか〳〵。シテへこれはよからう。舞うて見せい。小アドへそれならば。地を謠うてくれい。シテへ心得た。ト云うて。小アド七つ子を舞ふ。シテねむり〳〵謠ひ後にはねむりこける。小アドへ扨々不調法なした。これはいかな事。やい〳〵太郎冠者。ゆすつても抱へても目な覺さぬ。人に舞な舞はせて置いて。たつた一寢入りにしなつた。扨も〳〵腹の立つ事ぢや。何としたものであらう。ト云うて。武悪の面を持出る。さし足をして側へより。着せる。これでよい〳〵。先づ樣子を見ようと存ずる。シテへむゝ扨も〳〵。よう寢た事かな〳〵。たつた一寢入りにした。これはいかな事。こりや茶が何程も引いてない。頼うだお方がお歸りなされたらば。よいとは仰せられまい。急いで茶を引か

う。ハア杖下りに寢たかげんか。どうやら顔がおもばれた樣な。水がなほしや。ひいやりと手水が使ひたいものぢや。アドへ唯今歸つて御座る。さぞ太郎冠者が待つて居るで御座らう。やい〳〵。太郎冠者〳〵。歸つたぞ〳〵。シテへこりや頼うだお方が御歸りなされた。お歸りなされましたか。アドへなう恐ろしや〳〵。鬼が來た。あつちへ行け〳〵〳〵。シテへ申し。鬼はどれに居まする。アドへおのれが鬼ぢや。シテへ私は太郎冠者で御座る。アドへ何の太郎冠者であらう。出合へ〳〵。次郎冠者は居らぬか。小アドへこれに居ります。アドへ鬼が來た〳〵。小アドへどれに居りまする。アドへそれに居る。小アドへなう恐ろしや。あちへ行け〳〵〳〵。シテへ申し〳〵。聲でなりとも聞き知つて下され。私は太郎冠者で御座る。アドへ何れ聲は太郎冠者ぢやが。でも面が鬼ぢやなあ。小アドへさ樣で御座る。シテへ扨々合點の行かぬ事ぢや。次郎冠者。傍輩の誼みに水鏡をみせてくれい。小アドへ何と致しませう。アドへ見せてやれ。小アドへ畏まつて御座る。ト云うて。太鼓座より。鞨子をひろげ持つて出る。アドへやい〳〵。あまり傍へは無用ぢや。小アドへ畏まつて御座る。そりや。シテへどりや。ト云うて。傍へ寄る。見て驚く。兩手出す。色々仕樣口傳。シテへ終に人をわるかれと思うた事もないに。何とした因果で此

の様な淺ましい面になつた事ぢや。（ト云うて泣く。）アト〻扨々不思議な事ぢやなあ。小アド〻さ様で御座る。アド〻やい〳〵、何として其の様な恐ろしい面になつたぞ。シテ〻されば其の事で御座る。今朝茶な引けと仰せられたに依つて、精な出して引いて居りましたが。餘りねむたう御座つたに依つて。とろ〳〵とまどろみましたれば、何時の間にやら此の様な恐ろしい面になりました。（ト云うて泣く。）アド〻扨々それは不憫な事ぢやさりながら。身が内に人が生きながら鬼になつたと云へば。世間の外聞もいかがぢや。身が内には叶はぬ。さあ〳〵出て行け〳〵。シテ〻成る程御尤もに存じまする。さりながら。この面な致して餘所外へ參りたいとも。人が寄せつけは致しますまい。唯今までの御奉公は叶ひませずとも。せめて御門の番なりともおさせ下されませ。（ト云うて泣く。）アド〻これはいかな事。身が門に鬼が番すると云はゞ。人の出入があるまい。身が内には叶はぬ。次郎冠者追出せ。小アド〻畏まつて御座る。さあ〳〵。出てお行きやれ。シテ〻さ様ならば。御臺所のお釜の火なりとも。おたかせなされて下されませ。アド〻扨々むさとした事を云ひ出す。臺所へは女童もするに依つて。其の様な恐ろしい面で。何と火がたかさるゝものぢや。身が内には叶はぬ。出て行け〳〵。シテ〻まうし〳〵。さ様ならばお醫者衆に御附けられて。一療治おさせなされて下されませ。アド〻まだ其のつれなぬかしなる。醫者は人の病こそ直せ。鬼の療治なするとて云ふ事は。終に聞いた事がない。とかく身が内には叶はぬ。次郎冠者。早う追出せと云ふに。小アド〻成る程私が追出しませう。さりながら、お前がこれに御座つて。お怪我でもあれば惡う御座る。お前は奥へお出でなされませ。アド〻それならば、身共は奥へ行く程に。早う追出せ。小アド〻畏まつて御座る。アド〻なう恐ろしや〳〵。（ト云うて入る。シテ泣く。）シテ〻まうし〳〵。（ト云うて泣く。）小アド〻さあ〳〵鬼殿。最早叶はぬ。出てお行きやれ。シテ〻そちまでがその様に云うてくるゝか。犬も朋輩、鷹も朋輩と云ふ程に。よい様に執成しな云うてくれい。小アド〻身共もなんぼうの傍輩も持つたが、鬼な傍輩に持つた事がない。御内には叶はぬ。さあ〳〵。出てお行きやれ〳〵。（ト云うて引き出す。）シテ〻こりや〳〵。それならば。汝が所へ連れていて。かくまうてくれい。（ト云うて。取付くをおちこかす。面落つる。シテ面を見て肝を潰す。仕方口傳。）シテ〻やい〳〵、次郎冠者〳〵。小アド〻何事ぢや。シテ〻一寸來い。小アド〻何事ぢや。シテ〻これは何ぢや。小アド〻これか。シテ〻なか〳〵。小アド〻ヤイうつけ。シテ〻何とうつけとは。小アド〻餘り汝がよう寢てゐたに依つて。鬼の面な着せて置いた。シテ〻扨はおのれが仕業ぢやな。小アド〻あのうつけ者よ。シテ〻扨々憎い奴の。よう身共なだましおつた。おのれな何とせう、やるまいぞ〳〵。（ト云うて。追込みいるなり。）

髭矢倉（ひげやぐら）

シテ　夫
アド　妻
小アド　早打
女立衆

（入道具）

シテ〻下京邊に住居致す者で御座る。此度禁中に於いて大嘗會な執行はせらるゝに就いて。犀の鉾は大髭が役なれば。洛中洛外は申すに及ばず。隣國迄御詮議なさるれども。某が髭程な者が御座らぬによつて。則ち身共へ犀の鉾の役な仰付けられた。外聞と申し。斯様の有難い仕合せはない。まづ女共な呼出し

萬事談合致さうと存ずる。これの人。居さしますかおりやるか。女へ今めかしや／＼。妾を呼ばせらるゝは何事で御座る。シテへちと相談する事がある。まづ斯うお出やれ。女へそれは心許ない。まづ何事で御座る。シテへ其方(こなた)を呼出す事は別の儀でない。今度禁中において大嘗會を執行はせらるゝに就いて。扉の鉾は大髭の後なれば。洛中洛外は申すに及ばず。近國迄御詮議なさるれども。某が髭程ながないによつて。此度の役を某に仰付けさせらるゝ筈ぢや。忝い事ではないか。女へ扱々それはめでたい事ぢやのう。シテへ扱それに就いて装束が入る程に。その用意を召され。女へその装束は禁中様から出る事では御座らぬか。シテへいかな／＼。今度役儀を仰付けらるゝさへ大切な事ぢや。装束などは存じも寄らぬ事ぢや。女へ扱々きやうこつな事を仰せらるゝ。朝夕の煙さへ立てかぬるなりで。何と装束の用意がなるものぞ。是は變改させられい。シテへ心易さうに一旦お請け申した事が。何と變改がなるものぢや。其上斯様の役儀を。願うたと云うて勤めらるゝものではない。是を勤むれば名を擧げる事ぢや。すれば人間の出世といふものぢや。其上装束は如何やうともならう。そなたはまづ此の髭の掃除をめされい。女へなう／＼うたてや。その髭が朝夕見たむなうてなりませぬ。其上その髭があるによつて。何かとかしましい。一向髭を剃らしめ。シテへ扱々憎いやつの。この髭があればこそ此度の役儀も仰付けさせられる。洛中洛外は申すに及ばず。隣國近在迄も隠れのない此の髭を剃れといふ事があるものか。さあ／＼早う掃除をせい。女へまだくどい事をおしやる。おぬしは身代はならいでも。その髭ばかり重寶めさるゝぢやまで。シテへおゝ扱。人は一代名は末代。徳をとらうより名をとれといふ事を知らぬか。女へあの人らかしい口わいの。その見たむない髭をいかう自慢に思はるゝさうな。何の益にもならぬむさ／＼とした大髭ぢやと云うて世間からも笑ふ。兎角此度を幸ひに拔くか剃るか召され。シテへ扱々物を云はせば方量(はうりやう)もない事を云ふ。この朝夕重寶して育つる髭を。拔けの剃れのとぬかす。おのれが大事に

する髪を。拔けの剃れのと云うたらば嬉しからうか。女へあのおしやる事は。惣じて女は髪かたちと云うて。是は無うて叶はぬものぢや。そなたの髭はみたむないと世間からも笑ふ。まづ第一人がむさいといふ事をおしやらぬわいの。シテへやい。世間に身共がやうな大髭がも一人とあるか見よ。女へされぱこそ。そのむさい見たむないものぢやによつて。外にはないわいの。シテへ男に口をあかせぬやつぢや。ト云うて。扇にてさんぐ～たゝく。女へなう腹立ちや～。妾も親を持つてゐる。いかに女房ぢやと云うて。此樣にしたものではおりないぞ。シテへまだぬかすか。ト云うて。蹴付けて。たゝき。笛座へ入る。女へなう腹立ちや～。おのれ今に思ひ知らせうぞ。ト云うて。中入する。小アドへやあ～。それは誠か。扨々苦々しい事ぢや。なう～。爰な人。今おぬしは內儀を打擲めされたか。シテへ中々。あまり惡口をぬかしたによつて。やましておりやる。小アドへそれを腹立して。あたりの女房共を語らひ。そなたの髭を是非拔かうと云うて。鑓長刀樣々の長道具大きな毛拔を持つて。爰へ押寄せて來るぞや。シテへ何の來たと云うて別の事も御座るまい。小アドへいや～大勢で押寄せて來る。ひらに用心めされ。シテへ扨は誠に押寄せるか。小アドへ中々。まづ此樣な生ぬるい事ではなるまい。是へ寄らしめ。トくつろぎ。矢倉かけ。太刀を持ち。襷をかける。シテへきうたいの髭のまはりの要害には。方八町に堀を掘り。せとひげ迄も拵へて。寄する敵を待ちかけたり。一聲 女へ二世迄と。契りし甲斐も荒磯に。寄せて打取れ浦の波。エイ～オウ。シテへきうたいの髭のまはりの要害には。矢倉垣楯あげたるぞや。掛かれや掛かれ女子ども。女へあらものゝ～しやれ男よ。同へ～。多勢にひとりが叶ふべきか。あら面憎や～。シテへたとへ女は多くとも。同へたとへ女は大磯の虎の尾をば踏むとも。龍の髭をばよも拔かじ。女へ互ひの問答無益なり。同へ髭をむしりて呉れんとて。切先を揃へてかゝりけり。シテへ爰は遁れぬ所なり。同へ～とて。城の扉を押開き。口の內より切つて出で。橫さま切り縱さま切りに切立てられ。さすが女の悲しさは。こらへずばつとぞ逃げにける。～。シテ笑ふ。女へ此時女房腹を立て。同へ～。ただ垣楯を引破れとて。熊手ない鎌打立て～。えいや～と引いたりけり。シテへすは～此髭拔けさうなは。同へすは～此髭拔けかゝるとて。爰や彼處を防げども。多勢に無勢叶はずして。垣楯矢倉をひき落されて。大勢ぱつと寄り。さばかり慢ずる大髭を。大きな毛拔で挾まれて。～。根ながらぐつとぞ拔きにける。

毘沙門連歌（びしやもんれんが）

シテ　毘沙門
アド　參詣人
小アド　同上

（入道具）

アドへこの邊りの者でござる。いつもとは申しながら。當年の樣な目出度い年はござらぬ。さて今日は初寅でござる。いつも鞍馬へ參詣致す。又爰に每年同道致す人がござる。之を誘うて參らうと存ずる。シカ～。誠に。舊冬は何か心が忙しうござつたが。春になつてござれば。何方もゆたかになつてござる。何かと云ふうちこれぢや。ト云うて。案內を乞ふ。出るも。常の如し。アドへ今日は初寅でござる。いつも同道致すに依つて誘ひに參つたが。參らせられぬか。小アドへようこそ出させられたな。私も心待ちを致してござる。追附けお供致しませう。アドへそれならば。さあ～ござれ。小アドへ心得

ました。アド〽何と思召す。相續らず參詣致すは。偏に多門天のお蔭でござる。小アド〽仰せの通り疋予息災で參詣致すは。目出度い事でござる。アド〽何かと云ふうちに鞍馬山でござる。小アド〽誠に參り着いてござる。アド〽いざ拜を致さう。二人じやぐわん〳〵鰐口をうつ。小アド〽一段とようござらう。アド〽家内安全。富貴萬福。息災延命に。守り給へ〳〵。アド〽さていつも宿坊へよりますれども。今日は殊のほか日も晩じてござる。最早直ぐにこれで通夜を致さう。小アド〽それならばまどろみませう。ケド〽一段とようござらう。ト云うて○二人まどろむ。アド〽あら有難や。多門天の御福を下された。扨々忝い事かな。ト云うて○扇ひろげて拜む心。其のうち。小アド〽最前からわつぱと仰せらるゝは何事でござる。アド〽されば有難い事がござつた。八十餘りの老僧が。香の衣に香の袈裟。皆水晶の珠數をつまぐり。鳩の杖にすがらせられ。汝年月歩みを運ぶ事。神妙に思召す。それ故此度御福を下さるゝとあつて。則ち福ありのみを下されてござる。小アド〽暫くそれに待たせられい。アド〽心得ました。小アド〽合點の參らぬ事ぢや。每年同じ樣に參詣致すに依つて。身共も御福を下されさうな事ぢやが。致し樣がござ

ろ。まうし〳〵。某も目出度い事がござる。

アド〽何事でござる。小アド〽樣子は大方似た樣な事でござる。夜半の頃でもござらうか。八十餘りの老僧が出させられて。某信心に歩を運ぶに依つて。福ありのみを下さるゝ。則ち其方に預け置かせらるゝ。道で受取れとの御夢想ぢや。その御福をこれへ下され。アド〽いやそなたの御福ならば。直ぐに渡されませう。これは身共へ下されたのぢやに依つて。進ずる事はなりませぬ。小アド〽でも御夢想でござる。是非とも渡させられい。アド〽それならば。御福を下された御禮かたがた。連歌の秀句を致さう。そなた脇をさせられい。その脇の品に依つて。御福を渡しませう。小アド〽これは尤もでござる。先づ發句をさせられい。テド〽かうもござらうか。小アド〽何と。アド〽毘沙門の。福ありのみと聞くからに。小アド〽くらまぎれよりむかでくひけり。アド〽これは殊の外出來ました。あら不思議や。何とやら氣色が變つた。小アド〽誠に。唯ならぬ氣色でござる。アド〽先づこれへよつてござれ。小アド〽心得ました。シテ一聲〽毘沙門の。光を放つてところから。くらまぎれより歩み出でけり。アド〽これへお出でなされたはどなたでござる。シテ〽扨々汝等は愚かな事を云ふ。年月信心する毘沙門天。これま

で出現してあるぞとよ。アドへこれまで御來臨。有難う存じまする。先づかうお通りなされませ。ト云うて。アド葛桶を出し。腰をかけさせる。シテへさて多門天これまで出る事。餘の儀でない。最前福を與へたれば。互に論ずるに依つて。理非をわけうと思うて。これまで出現したぞいやい。アドへこれはいよ／＼有難う存じまする。シテへ總じて急に樂しうなるは惡い。薄紙を重ぬる樣に。そろり／＼と榮ゆるがよい。先づそのありのみをこれへおこせ。アドへ互に論じますに依つて。取り替へさせられうとの御事でござるか。シテへいや／＼。それはその樣な事ではない。片身恨みのない樣に。らんばの鉾にて二つに割つてとらせう程に。こちへおこせと云ふ事ぢや。アドへ畏まつてござる。ト云うて。扇を開き持ちて。切る心なり。シテへすつかり／＼。ト云うて。割る心をする。さて二人にやる體をする。二人扇を擴げて。受けて戴くなり。シテへさて最前から吟ずる聲がしたは何事ぢや。アドへそれは御福を下された其の御禮に。連歌を仕つてござる。シテへそれは奇特な事ぢや。イロ さて唯今の連歌はいかに。アドへ毘沙門の。福ありのみと聞くからに。小アドへくらまぎれよりむかで食ひけり。シテへ毘沙門連歌の面白さに。舞働一段。太鼓打上。毘沙門連歌の面白さに。惡魔降伏災難を打ち拂ふ。鉾を汝に取らせけり。小アドへあら／＼けなりや／＼な。我にも福をたび給へ。シテへ望む所も尤もなり。／＼とて。忍辱の鎧に甲を添へてかれに取らせ。これ迄なりとて毘沙門天は。これ迄なりとて毘沙門天は。此の所にこそ納まりけれ。

引括（ひつくゝり）

シテ　夫
アド　妻
（入道具）

シテへこの邊りの者で御座る。某五六年以前妻を持つて御座る。殊の外わゝしい女で御座る。餘程連れ添うては御座れども。ほうど飽き果てて御座る。離別致さうと存ずるさりながら。なか／＼大抵の女ではないに依つて。むさと申出されぬ。今日は面白なかしう申して。親里へ歸さうと存ずる。なう／＼これの人。居さしますか。居りやるか。アドへ妾を呼ばせらるゝは何事で御座るぞ。シテへちと相談し度い事がある。先づかう通つておくりやれ。アドへそれは心もとない事で御座る。先づ何事で御座る。シテへそなた呼び出すは別の儀でない。誠にお主と連れ添うて。五六年にもなるが。近頃夫婦の中で恥しい事なれども。近年不仕合はせが打續いて思ふ樣にならぬ。それ故人などもえ使はぬ。しつけも召されぬそなたに手痛い事をさせて。辛勞な體を見る。此の樣な氣の毒な事はおりやらぬ。アドへこれは今めかしい事を仰せらるゝ。そなたの外樣（そとさま）をもえ勤めさせられず。しほ／＼させらるゝこそお笑止に思ひますれ。内の事に骨を折るは女の役で御座る。必ず苦に思はせられな。シテへ扨々神妙な心入でこそあれ。その樣におしやるを聞いては。なほ身共が胸を裂く程苦しい。如何に心ようおしやると云うても。人は冥加と言ふものが大事ぢや。その上外の誹りもあるものぢや。向後は朝夕の仕拵へも隨分樂に致さうず。先づ當分休息のため。そなたはちと親里へ行かしめ。アドへ何を譯もない事を仰せらるゝ。妾はどれ程辛勞しても苦しう御座らぬ。氣遣ひなさせらるゝな。シテへ愈々過分な志でこそあれ。されども身があつての事ぢや。その樣に世話を召されて。若し病氣でもあれば。結句身共がためにならぬ。とかく先づ暫く休みに行か

しめ。アドへまだ仰せらるゝ。一日や二日休んで來たと言うて。さまでの事も御座らぬ。シテへそれならば。十日なりとも二十日なりとも。休みに行かしめ。その間骨を折るが。則ち身共が身の懲らしめでおりやる。アドへあの言はせらるゝ事は。妾が片時内に居いでも埒が明かぬでは御座らぬか。其の上十日廿日と云うても。日の經つは僅の間で。又後の辛勞は同じ事ぢや。とかく内に居るがましで御座る。シテへ十日や廿日は日の經つに間がなくば。三年五年乃至十年なりとも。休んで居たがよい。アドへ何ぢや。十年なりとも休んでこいとおしやるか。シテへおゝ扨。年月にかまひはない。何程なりとも氣に入つた程。休んで來さしめ。アドへ扨は妾を飽いて暇(ひま)をくれうと云ふ事ぢやな。シテへいや／＼。暇をやらうではない。唯そなたに樂をさせたいばかりの事ぢや。アドへえゝ腹立ちや／＼。妾は己れに執心を殘すでは無いが。そなたの樣な男は鍍を蹴出しても。五人や十人は蹴出せども。どうぞ人にも笑はれぬ樣にと思うて。肩を裾へ結んで世話をするに。妾をうつけにして其の樣な事を云ふ。少しも厭ひはせぬ程に。おのしも。箸に目鼻を附けても男ぢや。男らしう暇(いとま)を出せいやい。シテへ暇(いとま)をやらうとは云はねども。望みならば。とめたりとも了簡も有るまい。是非に及ばぬ。これまでの緣でこそ有らう。思切つて暇をやる。出てお行きやれ。アドへくどうぬかし居るに及ばぬ。何なりとも暇の印をおこせ。シテへ暇をやるからは惜しみはせぬ。何でも欲しい物を取つて行かしめ。アドへ心得た。ト云うて。袋を取りに入る。アドへ妾が欲しい物を取つて。是に入れて行くは。シテへ扨も／＼。人に勝れて邪見な女なれども。さすが女ぢやに依つて愚かな所が有る。其の袋の内へ何程の物が這入るものぢや。それでよくば。勝手次第に何程なりとも入れて行け。ト云うて笑ふ。アドへ必らずあとでならぬと云ふなよ。シテへ其の袋に一杯で足らずば。二杯なりも三杯なりとも。取つて行け。アドへ妾が欲しい物はものぢや。シテへ何ぢや。アドへそこにあるは。シテへ何處にある。アドへ妾が欲しい物はこれぢやわいやい。シテへこれはならぬ。ゆるしてくれい。宥せ／＼。ト引つぱられて。入るなり。

人馬(ひとうま)

シテ　大名
アド　太郎冠者
小アド　坂東方の者
（入道具）

シテへ隱れもない大名。是より今參に同斷。シテ名乘り過ぎて。アドを呼出し。上下の街道へ行く。シカ／＼ありて。座につくと。小アド坂東方の名のり。シカ／＼云うて廻る。アド見附け詞をかけ。抱へて戻る。藝を問ふ事なし。國は問ふなり。秀句の事もなし。たゞ一遍廻はりて著き。シテを呼出して。さて色々有つて。目に二つかうて見るまで。別條なし。大名狂言の類同斷。シテへさてきやつが國は何處ぢや。アドへ坂東方ぢやと申しまする。シテへ坂東方と聞けば奥床しい。何ぞ藝が有るか問うて來い。アドへ畏まつて御座る。なう／＼。何ぞ藝が有るかと仰せらるゝ。小アドへいや何も藝は御座らぬ。アドへ曾て無いか。小アドへいや藝が御座れば。國元で似合ひの奉公を致せども。藝能が御座らぬに依つて。はる／＼これまで上つて御座る。アドへ其の通りを申上げう。曾て藝は無いと申しまする。シテへ扨々それは苦々しい事ぢや。たま／＼一人抱へるに無藝な者では役に立たぬ。よい樣に言うていなせ。アドへ畏まつて御座る。さりながら。はる／＼これ迄連

れて參つて御座る。暫くなりとも御内に置かせられて。樣子を御覽なされませ。アドへても一向に無藝なと云ふ者は何の役に立たぬ。とかくいなせい。アドへお詞を返しまするは如何で御座れども。また召使はれまするうちに、何ぞ藝も出來ませう程に。どうぞ御了簡なされて。暫くなりとも召使はれますまいか。シテへ扨々聞きわけも無い事を云ふ。とかくいなせい。アドへ畏まつて御座る。扨々氣の毒な事ぢや。折角同道したれども。賴うだ人が無藝な者はいなせいと仰せらるゝ。笑止な事なれどもいんでおくりやれ。小アドへこれは迷惑で御座る。折角はる〴〵參つて。今更歸ると申すは氣の毒に御座る。御奉公の隙々には。何なりとも覺えませう程に。どうぞこなた取合を云うて。こなたに出る樣にして下されい。アドへ身共もそなたより氣の毒に思うて。色々と申上げたれども。とかくお聞きなされぬ。ふしやうながら戻らしめ。小アドへそれならば是非に及びませぬ。追附け歸りませう。アドへ扨々これは殘り多い事ぢや。何とまた少しでも藝になりさうな事はないか。小アドへ何も御座らぬが。若しかやうの事も藝になりませうか。アドへ何ぞあるか。小アドへ人を

馬にする事を覺えて居まする。アドへこれは名譽な事を覺えて居さします。先づ申上げて見よ。それに待たしめ。小アドへ心得ました。アドへ新參の者が。藝は有ると申しまする。シテへ何ぞ覺えて居るか。アドへ人を馬にする事を覺えて居ると申しまする。シテへそれが誠ならば一段の藝ぢや。早う是へ出て。人を馬にして見せといへ。アドへ畏まつて御座る。なう〳〵。急いで人を馬にして見せと仰せらるゝ。小アドへ馬になす人をお出しなされと仰せられい。アドへ心得た。馬になす人をお出しなされいと申しまする。シテへされば誰を馬にせうぞ。風呂をたく道金にせうか。アドへいやあれは殊の外年よりまして。馬になりましたと申して。御用に立ちますまい。シテへいづれ老馬で役に立つまいなあ。誰れ彼れと云はうより。汝なれ。アドへこれは御意とも覺えませぬ。あの鳥類や畜類が。生を變へて。何とぞ人間になりたいと願ひまする。たま〳〵私も人間に生まれまして。生きながら畜生になると申すは。餘りな事で御座る。これは御ゆるされて下されませ。シテへいやこゝな奴が。主の爲には命も捨てねばならぬ。とかく馬になれ。アドへ品によつて。お主の爲

ならば一命は差上げませうが。馬になるお請けはえ申しませぬ。シテへ憎いやつの。しかと馬にならぬか。小アドへ先づ御待ちなされませ。（ト云うて。一の松より走りよりてとめるなり。）シテへ何と待てとは。小アドへ先づお請けを申せ。アドへでも馬になつてよいものか。シテへのけ〳〵。討つて捨つる。小アドへ身共は惡い事は云はぬ。お手打にならうより平にお請けを召され。アドへそれならば。シテへいやお畏まりあるまいものを。小アドへお請けを申させまする。先づ次へお立ちあれ。シテへ急いで馬にせい。小アドへ畏まつて御座る。アドへ扨も〳〵。そなたがむさとした事を申立てゝ。身共一人の迷惑になつた。小アドへでもあの御氣色で。御手打にならうより。先づお請けを申したがよい。アドへさてそなたはさい〳〵馬におしやつたか。小アドへいや。習うては置いたが。終に馬になして見た事が無い。アドへ其方に敎へた人は。度々人を馬になしたか。小アドへそれも噂ぎりで。慥に見た事はない。アドへ先づ安堵したさりながら。もし馬になつたらば。定めて厩に繋がれてばかり居よう。又蒭なども澤山に食はせてたもれ。又折々は話に來ておくりやれ。小アドへ成る程合點ぢや。さて

またそなたにも頼む事がある。先づ當分お氣に入る樣に。そなたも嘶きなどしたり。馬の足かきなどする樣にしてたもれ。アドヘそれはぬかる事ではない。貳つどりには馬にならぬ樣にしてたもれ。シテヘやい〳〵。早う馬になさぬかいやい。小アドヘ畏まつて御座る。ト云うて。轡をかけ。手綱をつけ。索いて出て。小アドヘいで〳〵藥をかはんとて。〳〵。先づ山桃の粉なかへば。すは〳〵面より馬になる。シテヘどう〳〵〳〵。アド嘶く氣する。シテ嬉しがる。シテヘなつた〳〵。癇の強い馬ぢや。先づいなゝく聲がよいが。形が馬にならぬ。小アドヘ姿こそこれで御座れ。夜中はすきと馬になつておりまする。シテヘ扨も〳〵不思議な事ぢや。若し聞附けて知音の衆から藥を貰ひに來たとも。某に斷りなしにかまへてやるな。小アドヘ畏まつて御座る。シテヘ定めて役に立たぬ家來大勢持つた衆は。此の藥を欲しがられう。はて人で置かうより。馬なれば何になりとも使はるゝと云ふものぢや。必ず〳〵沙汰をするな。さて當分の褒美に。重代なれどもこの腰の物をそちに取らするぞ。小アドヘこれは有難う存じまする。シテヘさあ〳〵。形を早う馬になして見せい。小アドヘ總じて。馬には惡い癖の着き易いもので御座る。一いきに馬になして御座らば。草臥れて癖がつけば惡う御座る。其の上大方馬になりました程に。先づ休ませまして。また明日か明後日かに正眞の馬になしませう。シテヘそれが何と待たるゝものぢや。とかく今早う馬になして見せい。小アドヘとくと馬にはなつて居りますれども。俄馬でござるに依つて。取放したらば跳ね廻つて。お座敷の戸障子もたまりますまい。先づ御厩へ連れて參つて。繫いで置きませう。シテヘいや。それはよい仕樣がある。形が皆馬になりおほせども。跳ね廻らぬ樣に。今から某が乘つて。きつと乘り鎭めて居よう程に。そつとも氣遣ひするな。小アドヘでもひよつと怪我でもなされますれば。悔いましても歸らぬ事で御座る。平に御無用になされませ。シテヘいやいや。どの樣な惡馬でも。身共が乘つて乘り鎭めぬと云ふ事がない。さらば乘るぞ。小アドヘ召しますか。シテヘどう〳〵〳〵。シテヘ人を馬になす藥を。なほ〳〵かへや多くかへ。シテヘ陣皮干姜ほうの皮。桂心人參とりかへば。むなおいふく病皆失せて。〳〵。つひに馬にはならざりけり。シテヘどう〳〵〳〵。小アドヘなる筈これは姿がまだ人ぢやぞよ。では御座れども。此の者に限つて藥が利きませぬやら。まだ馬にはなりませぬ。シテヘやい太郎冠者。そちが心持はどの樣な。アドヘありやうは。私の爲には何時までも馬にならぬがよう御座る。シテヘ憎い奴の。身共をだまし居つた。あちへ失せ〳〵。トたゝく。アドヘなう〳〵。嬉しや〳〵。一の松へ行く。シテヘやいやい。馬にならぬからは最前の刀をこちへ返せ。小アドヘお大名の一度下された物を。取返さうといふ事があるもので御座るか。シテヘまだそのつれをぬかしをる。こちへ返しをらぬか。ト云うて。上へほる。小アドヘでも貰ひましたに依つて。返す事はなりませぬ。アドヘこれはおぬしの云ふが尤もぢや。一の松より走り出て云ふ。シテヘおのれまで一つになつて身共をだましをつた。おのれは憎いやつの。ト云うて。太郎冠者をたゝく。逃げると二人一しよに追込む。

樋の酒

シテ　太郎冠者
アド　主人
小アド　次郎冠者
入道具)

アドヘこの邊りの者で御座る。用事あつて

山一つあなたへ參る。兩人の者を呼出し。申附ける事が御座る。（ト云うて二人呼出す。二人出る。常の如し。）汝等呼出す別の事でない。用事あつて山一つあなたへ行く程に。よう留守をせい。シテへ畏まつて御座れども。兩人の中一人は。なお次郎冠者。小アドへおゝ。二人へお供に參りませう。アドへいや／＼。今日は供はいらぬ。則ち太郎冠者には米藏を預ける。又次郎冠者には酒藏を預ける。兩人とも藏を離れずによう番をせい。シテへ其の段はそつとも御氣遣ひなされますな。アドへ頓て戻らう。二人へ頓て御歸りなされませ。アドへ心得た。シテへ出られた。小アドへお出やつた。シテへさて何と思ふ。頼うだ人の餘所へお出でなさるゝ時。身共がお供に行けば。汝がお留守をする。又そちがお供に行けば　身共がお留守をするに。兩人ともお留守をすると云ふは。珍らしい事ではないか。小アドへ何れ今日は珍らしい事ぢや。シテへされども藏の番を云附けられた。兩人とも藏の内を離るゝ事がならねば。一所に咄さう樣がない。小アドへいや。それこそ窓から互に覗きあうて咄さう。シテへこれは一段とよからう。おつゝけ藏の内へ行くぞ。小アドへ某も土藏の内へ這入るぞ。

（ト云うて。二人とも藏の戸をぐわら／＼と明けて這入る。）シテへ扨も久しう見ぬ間に。米がしたゝか詰つた。小アドへこれはいつ這入つてもよい香ぢや。シテへやい／＼次郎冠者。小アドへ何事ぢや。シテへそちは酒藏を預つてけなりい事ぢや。小アドへいかさま米と云ふ物は寶の第一ぢやが。さりながら急な役には立たぬものぢや。酒は何時飲まうとまゝなものぢや。シテへけなりや／＼。さりながら。米もこれ程澤山にある内を。少々取つたと云うても知れまいに依つて。宿にいらばのけてやらうぞ。小アドへそれは誠か。シテへおゝ扨。誠ぢや。小アドへそれは過分な。必らず頼む程に忘るなよ。シテへ心得た。小アドへまた後に會はう。シテへ頓て會はうぞ。小アドへこれはいかう淋しい。一杯飲まう。どの酒がよからうぞ。此の澁紙でおほひのしたのにせう。むり／＼／＼。よい香ぢや。さらば一つ飲まう。（ト云うて。扇をひろげ飲む。）扨もよい酒ぢや。シテへこれはいかう淋しうなつた。次郎冠者は何をして居る事ぢや。これはいかな事。やい／＼。早や飲むか。小アドへ太郎冠者けなりいか。シテへ身共に見せて置いて心強い。よう飲むは。小アドへ飲みたくば此處へ來い。シテへどうも預つた藏が明けられぬ。小アドへどうぞ飲ませたいが。思出した事がある。是處に樋がある。之な窓から其の米藏の窓へ渡し。こちらから酒を注がう程に。お主はそれで飲め。シテへこれは尤もぢや。それならば早う注いでくれい。小アドへ心得た。樋の口をお主が口へ差しつけて居よ。さらば注ぐぞ。シテへ合點ぢや／＼。小アドへそりや。注ぐぞ／＼。シテへあゝいきたはしい。靜かに注いでくれい。扨も／＼。むまい事ぢや。小アドへ何と身共が分別を見て置け。シテへ重々の事を思出したなあ。小アドへもそつと飲むか。シテへいかにしても窮屈な。頼うだ人の歸らるゝまでは。まだ餘程間があらう。一向藏へ行て飲まう。小アドへこれはよからう。こちへ來い。樋もしまふぞ。シテへしまへ／＼。扨も／＼久々で酒藏へ這入つたが。夥しう酒を作り込うで置かれたなあ。小アドへ何と夥しい事か。シテへさらばそなたにも汲んで飲ませう。小アドへ飲ませておくりやれ。シテへさあ／＼。飲め／＼。小アドへあゝ。扨々むまい事ぢや。ちと謡はうか。シテへ一段とよからう。（小謡あり。）シテへざつと酒盛りになつた。小アドへ其の通りぢや。シテへさて一つ受持つた。肴にひとさし御舞ひやれ。小アド

へそれならば舞ふ程に。地を謡つておくりやれ。シテへ心得た。小アド舞あり。シテへよいやよいや。小アドへ不調法なした。シテ小謡。酌に立つ。小アドへさて汝も一さしお舞ひやれ。シテへ身共も舞はうか。小アドへ早うお舞ひやれ。シテへ地を謡うておくりやれ。シテ舞ふ。小アドへよいや〳〵。シテへさてしたゝか飲んだが。小アドへ壺や樽の酒が少しも減らぬなあ。小アドへ減りもせうなれども。とかく澤山にあらうぢやに據つて。減らぬ様な。シテへ頼うだ人が有徳なに依つて。正眞の泉と云ふは此の事ぢや。小アドへいかさま。いやましに湧き出る酒ぢや。シテへいざこの體を舞ふ程に。謡はしめ。小アドへ心得た。シテへよもつきじ。よもつきじ。同へ藥の水も泉なれば。汲めども〳〵いやましに出づる菊水の。飲めば甘露もかくやらんと。心も晴れやかに。飛び立つばかり有明の。夜晝となき樂しみの。榮華にも榮耀にもげに此上やあるべき。アドへ唯今歸つて御座る。定めて兩人の者が待ち兼ねて居ようと存ずる。これはいかな事。米藏の中に人が居ぬ。さればこそ酒藏に酒盛をして居る。扨々憎い奴かな。やい〳〵。戻つたぞ〳〵。二人へそりやお歸りなされた。シテへどれ〳〵。此の間にも一つ飲まう。アドへやい〳〵。やいそこな奴。シテへあゝ御許されませ〳〵。アドへ憎い奴の。シテへあゝ先づ御待ちなされませ。アドへ何と待てとは。シテへ泉の壺で御座るに依つて。飲めども盡きる事では御座らぬ。アドへまだそのつれをぬかしをる。あの横着者。やるまいぞ〳〵。ト云うて追込み入る。

絹粥（ひめのり）　鷺流

シテ　大名
アド　太郎冠者

シテへこれへ罷り出たるは皆人の御存じの者で御座る。某永々在京致す所に。訴訟悉く安堵し。其の上新知までも拜領致いて御座る。先づ召使ふ者を呼出いて悦ばせうと存ずる。太郎冠者あるかやい。アドへはあ。シテへ居るか。アドへお前に。シテへ早かつた。汝呼出す別の事ではない。永々在京してあれば。訴訟悉く安堵し。其の上新知までもくわつと拜領したは。目出度い事ではないか。アドへ御意なさるゝ通り。御訴訟の叶ふのみならず。新知までを御拜領なされ。かやうの目出度い事は御座りますまい。シテへ又汝が一しほ悦ぶ事があるは。アドへそれは如何様な事で御座りまする。シテへ追附け下れとあつて。お暇まで下された。アドへそれはいよ〳〵重々のお仕合せで御座りまする。シテへさぞ國元でも皆悦ばうぞ。アドへなか〳〵。お悦びなれませうとも。シテへさて追附け下らうが。明日は元日ぢやが。是處元に居る事ぢや。所で出仕をしたらばよからうか。お暇を下されたによつて。何としたらばよからうぞ。アドへなか〳〵。明日は御出仕なされてお下りなされたらば。又よう御座りませう。シテへ身もさう思ふが。今まで逗留せうと思はなんだによつて。その用意を云附けなんだ。何としたものであらうぞ。アドへいやそれは唯今まで御逗留で御座るによつて。定めて御出仕なされぬ事は御座るまいと存じて。小袖上下を私の用意致して置きまして御座る。シテへさて明日の事ぢやが。その小袖上下は出來てあるか。アドへなか〳〵。お小袖は早とう出來ましたが。お上下は出來ては御座るが。まだ町に御座りまする。シテへとは何とした事ぢや。アドへいや昨日も參つて急げと申して御座れば。少し足らぬ物があつて出來しませぬ。今

日中には出來しておこしませうと。申して御座る。シテへ足らぬ物があるとは何が足らぬぞ。アドへ何とやら申して御座るが。昨日は殊の外用が多う。買物に何かと心せはしうて。失念致して御座る。シテへ忘れた。紺屋で足らぬといふは。籡絹張りではないか。アドへいやそれでも御座りませぬ。シテへ氣の毒な。別の事はなうても。聞かずには氣味がわるい。總じて事多い時は取り紛れ。忘れまい事も失念するものぢや。其の様な時は書附くるか。間が無くは何ぞによそへて覺ゆると。むさと忘るゝものではないが。汝は才覺のないものぢや。アドへいや御意なさるゝ通り。私もよそへて置きましたが。よそへ物は覺えてなりまするが。口元へ出かゝつてゐるやうで思ひ出しませぬ。シテへ何によそへた。アドへいつも徒然に讀ませらるゝ物の本にある人の名に御座りまする。シテへそれならば。常々讀む所ならでは覺えまい。それは覺えて居る程に。宙でよんで聞かせう。床几を持つて來い。アドへ畏まつて御座る。シテへ床几／＼。語。いで其の頃は壽永二年の事なるに。平家は時節の思ひをなし。津の國生田の森に陣を取る。前は海。後ろは險しき鵯越。左は須磨。右手は明石よな。海には兵船數萬艘を浮べ。陸には赤旗いくらも／＼立てならべ。天地に翻る有様は。さながら錦を張つたるが如くなり。このやうな所ではないか。アドへいや張つてだに御座るならば。請け取つて參りませうが。まだ張りは致しませぬ。シテへぢやア扨はどこであらうぞ。さる程に追手の大將軍蒲の御曹司範頼。後陣に控へて。敵に息をつがせそ。攻めよかけよと。下知し給へば。武藏相模の若者共。喚き叫んで攻入るは。天帝修羅の戰も。かくやと思ひ夥し。かゝりける所に梶原平三景時が二男。平次景高一陣に進んで駈入る。大將これを御覽じて。誤ちすな勢を待ちて寄すべしと宣へば。景高きつと見返りて。武士の。取り傳へたる梓弓。引きては人のかへるものかは。と云ひ捨てゝ。城中にきつて入れば。我も我もとくつばみを並べ。白旗指し入れ攻め入る有様は。ただ白鷺の羽をならべたる如くなり。梶原平三景時は。五百餘騎にて亂れ入り。一時ばかり戰うて。さつと引いて出でたるに。嫡子の源太は見えず。扨は取り籠められて討たれたるか。景季討たせて叶はじと。又城中に攻め入れば。源太は未だ討たれずして。三十騎ばかりに取りこめられ。甲をも打落され。大童になつて戰ひたるを見て。前車の覆るを見ては。後車の戒めとす。一所に引けや一所にかゝれやと。親子相具して木戸口へぞ出たりける。扨こそ梶原が生田の森の二度の駈とはこれなり。かやうの所ではなきか。アド答へる。爰にまた赤地の錦の直垂に。黑糸威の鎧着て。白鴾毛の馬に乘り。渚に沿うて落ち給ふを。武藏の國の住人岡部の六彌太忠澄。よき敵と追つ駈け。馬の上にてむづと組み。兩馬が間にどうど落ち。すでにかうよと見えし所へ。郎等は落合ひて。遂に討取り奉り。御死骸を見てあれば。一卷の卷物あり。旅宿の花といふ題にて。行き暮れて。木の下蔭を宿とせば。花や今宵のあるじならまし。忠度と書かれたり。アドへその忠度が足りませぬと申して御座る。シテへ何と忠度が足らぬ。汝が詞で合點した。それは紺屋で使ふ絹粥の事であらう。アドへいよ／＼それで御座りまする。シテへ某が内にあらうずる者が。忠度絹粥の差別も知り居らず。大事の主殿に大骨を折らせ。大汗を流させ居つた。前代未聞の曲事。屹度せつかんをせうずれども。目出度い折なれば。此の度は宥す。以後を嗜め。えい。アドへはあ。

【ふ】

武悪

シテ　太郎冠者
アド　主人
小アド　武悪
（入道具）

アド〽誰そ居るか／＼。誰も居らぬかいやい。シテ〽何ぢや。召すといふか。召しますか。アド〽召しますかア。汝はどれにゐた。シテ〽お次に居りました。アド〽次に居た者が。最前から聲の嗄るほど呼ぶに。聞えぬといふことがあるものか。して次には誰もないか。シテ〽いや誰も御座りませぬ。アド〽密かにいひ附ける事がある。ずつとこれへ寄れ。シテ〽畏まつて御座る。アド〽内々不奉公者の武悪めがこと。色々と思案をすれども。とかく生けて置く奴でない。成敗する程にさう心得。シテ〽成る程。御腹立の段は御尤もで御座る。去りながら。彼奴が病氣も段々宜しう御座るに依つて。近日には御奉公にも出ようなどと。私方まで内々申越して御座る。先づ此度は御宥されて下されうならば。私までも有難う存じまする。アド〽結構な取做しでおりやる。己れがいふまでもない。年久しう召使ふ者のことぢやに依つて。身共も隨分了簡をすれども。最早堪忍袋が切れた。卽ち討手には汝を云附くる程に。急いで武悪を討つて來い。シテ〽お詞を返しまするは恐れ多う御座れども。武悪と私とは。幼少の時より。跡懷もぬる樣に致した者の事で御座る。私が内證で意見を致しませう程に。どうぞ御宥されませ。アド〽さては己れは不奉公者の武悪とは一味せうず。身がいふ事は聞くまいぢやのう。シテ〽いや左樣では御座らぬ。アド〽まだぬかしをる。己れ行かうか行くまいか。素直にいへ。ト云うてとゞめる。アド刀に手をかける。常の如し。アド〽さう無うては叶はぬ。急いで武悪を討つて來い。シテ〽一旦お斷りを申して御座れども。此の上は畏まつて御座る。アド〽さて其の方にも手覺の物があらうずれども。これは身共が重代の業よしぢや。これを持つて行て。首尾よう武悪を討つて來い。シテ〽其段はそつとも御氣遣ひなされますな。アド〽急いで行て頓て戻れ。つめること常の如し。シテ〽さて／＼迷惑な事を云附けられた。というて行かずばなるまい。シカ／＼。身共がまつかうあらうと思うて。色々と意見をすれども。聞かぬに依つて。此の樣に成り下つた事ぢや。さてあの武悪は並々の奴でないに依つて。すは參るぞ。かゝるといへば。なか／＼身共等が手に及ぶ者でない。とかくだますに手なしぢや。騙討に致さう。いや何かといふうちこれぢや。先づ此の太刀を見せてはなるまい。物もう。案内もう。武悪うちに居さしますか。おりやるか。トいうて。太刀を後へ隠し。案内乞ふ。常の如し。武〽表に聞き馴れた聲で案内がある。案内とは誰そ。シテ〽身共でおりやる。武〽えい太郎冠者。そなたならば案内なしに通りは召されいで。よそ／＼しい。何事でおりやる。シテ〽此の間は久しう見舞はぬが。そなたの病氣も段々よささうで一段でおりやる。武〽成程。身共の病氣も段々よいに依つて。近日は御奉公にも出うと思ふが。心許ない。御前の首尾は何とでおりやる。シテ〽それはそつとも氣遣ひをしやるな。身共が御前近う居るに依つて。よい樣に申上げて置いた。武〽やれ／＼。嬉しや／＼。これとても和御寮が御側近う居る故のことぢや。して今日は何と思うておりやつた。シテ〽今日來るは。そなたに法進をする事があつて來た。武〽それは心許

ない。何事でおりやる。シテへいや／＼。別に心許ない事もない。頼うだお方が俄に客を得させらるゝ、肴に事を闕かせらるゝ。またそなたは川魚を取ることを得てゐるに依つて。何ぞ一色か二色とり上げて。これは武悪が差上げまするなどゝ。それをしほにお目見えなさゝうと思うて知らせに來た。武へやれ／＼。それは能うこそ知らせておくりやつた。成る程川魚を取ることを得てゐるに依つて。隨分取つて上げうさりながら。引込うでゐるうちに殺生をするなどゝ。却つてお叱りはあるまいか。シテへ何しに。そなたの惡い事はいはぬ。早う取つて上げさしめ。武へそれならば取つて上げう程に。暫くそれにお待ちあれ。シテへあゝ。先づ待て／＼。武へなんと待てとは。シテへそなたの川魚を取ることを終に見ぬ。某も行かうぞ。武へ和御寮も來るか。シテへなか／＼。武へそれは一段ぢや。さあ／＼おりやれ。シテへ心得た。武へ何と一つ飲うで行かぬか。シテへそれは遲からぬ事ぢや。さあ／＼お行きやれ。武へ心得た。さて身共も引込うで居るうちに。生洲の樣なことをして置いた。これに魚が夥しう居る事ぢや。シテへそれは定めて夥しう居るであらう。武

へいや何かと云ふうちにこれぢや。シテへあの此の小さい所に魚がをるか。武へをるとも／＼。あれ／＼。あれはみな鮒ぢや程にの。シテへ誠に夥しうをる。さてそなたは何も道具を持たぬが。どうして取るぞ。武へ不審尤もぢや。あの隅から此の隅へ押草といふことをして取れば。無造作に取るゝことぢや。シテへいかさま無造作に取るゝであらう。武へさてそなたも這入つて追うてくれい。シテへ身共も這入つて。追うてやりたけれども。今にも御前から召せば。濡足では上られぬ。上から辟をかけてやらうぞ。武へこれは尤もぢや。それならば上から辟をかけておくりやれ。身共は這入るぞ。シテへ這入れ／＼。武へ心得た。（ト云うて飛込む。武惡兩手を叩き追ふ。シテ肩衣脱ぎ。）シテへがつきめ。やらぬぞ。武へ戯れ事をするな。魚が怖づるわいやい。シテへ戯れ事ではない。眞實ぢや。武へ何ぢや。眞實ぢや。シテへこりやお太刀ぢやが見忘れたか。武へ誠にお太刀ぢや。さては眞實討手に向うたか。シテ　くどいことを云ふ。たつた一討。武へあゝ先づ待て／＼。シテへなんと待てとは。武へさて／＼汝は聞えぬ者ぢや。一旦お腹立ちで仰附けられても。たつてお詫びをしてくれう汝が。討手に

向ふといふことがあるものか。シテへやい、それを身共がぬからうか。色々とお詫を申上げたれども。討手に向はぬに於いては。身共ともに御成敗なされうとのお事ぢや。背に腹は代へられず討手に向うた。最早や遁れぬ。覺悟せい。武へあゝ先づ待て／＼。シテへ何と待てとは。武へいふ／＼聞えぬ者ぢや。それほど極つた事ならば。なぜ宿元では云うてくれぬ。宿元で云うてくれたならば。妻子にも暇乞をして。尋常に腹掻切つて死なうずるものを。何ぞや此樣な處まで連れて來て。欺討にせうといふ事があるものか。シテへそれも身共がぬからうか。宿元でいうたならば。妻子に名殘を惜しみ。未練の態もあらうかと思うて。是處まで騙して連れて來た。とかういへば命を惜しむに當る。とても遁れぬ。覺悟せい。武へ先づ待て／＼。シテへ何と待てとは。おくれたか。武へいやおくれはせぬ。全く命を惜しむではないさりながら。そちと身共は幼少の時から。跡懷もぬる樣にしたものなり。その上この邊りでは武惡／＼と黑面を見知られたものを。何ぞや此の樣な川中へ追込うで。蛙を踏潰した樣にせうと思ふそちが心入れが。さても／＼胴慾ものぢやのう。

ト云うて泣く。シテへやい。武惡程の者が最期に及うで未練な。吹ゆるといふ事があるものか。尋常に討たれいでなア。武へあゝさうぢや。此の上は賴うだお方に恨はない。怨はそちに殘つた。さアこれへ寄つて切りたい所から切つてくれいやい。ト云うて泣く。シテへその樣にいへば。太刀の打附け所を忘れたわいやい。武へ人に物を思はさずとも。早う切つてくれいやい。シテへ身共が先づかうあらうと思うて。色々お詫びを申上げたれども。討手に向はぬに於ては。身共ともに御成敗なされうとの事故。是非なう討手に向うたれども。今そちが體を見ては。最早や切られぬ。命を助くる。そこを立て。武へ何ぢや。命を助くる。シテへなか／＼。ト云うて詰める。シテへこりや／＼。太刀も鞘へ納めるぞ。武へやれ／＼嬉しや。命の親と奉る。シテへあゝこりや／＼。禮どころではない。そちは見えぬ國へ行てくれずばなるまい。武へそれを身共がぬからうか。此の足で直ぐに見えぬ國へ行くてあらうさりながら。見えぬ國へ行たならば。後で妻子が迷惑するであらう。そちよい樣に賴むぞ。シテへそれはそつとも氣遣ひするな。さりながら。何處に居ようとも文の便りはせいよ。武へ命があらば廻り合はうぞ。シテへ先づそれまでは。さらば。武へさらば。二人へさらば／＼。ト云うて。泣いて別れる。武惡は太鼓座にゐる。シテ笛座にて肩をきる。シテへこれはいかなこと。武惡は早やとつと行た。餘り不憫さに命は助けたが。あゝ安大事をした。今の時助くるではなかつたものを。是非に及ばぬ。賴うだお方へは討つたと申上げずばなるまい。シカ／＼。誠に。これにつけてもさせまじいは宮仕ぢや。あなたがよければこなたが惡し。こなたがよければあなたが惡し。中に立つて此の樣な迷惑なことは御座らぬ。いや何かといふうち戻つた。ト云うて。呼出す。常の如し。アドへ何と武惡を討つたか。シテへ討ちました。アドへ何ぢや。討つた。シテへはあ。アドへやれ／＼。嬉しや／＼。武惡の程の者なれども。此頃討ちたい／＼と思うたれども。心にかゝつて惡かつたに。討つたと聞いて安堵したわいやい。シテへこれは御尤もで御座る。アドへさて汝を遣つた後でいかう案じてゐた。シテへそれは何をお案じなされました。アドへ武惡は並々の奴でない。すは參るぞ。かゝるぞと云うて。なか／＼聊爾には討たれまい。若し仕損じて返討にでも遭うたならば。外分もよろしうない。今一兩人も人を附けてやればよかつたものをと思うて。いかう案じたわいやい。シテへこれは御尤もで御座りまする。アドへさて最期は何とであつた。シテへよう御座りました。アドへしてそれはどの樣な最後であつた。シテへ先づあれへ參つて。御意で討ちに來た。覺悟せいと申して御座れば。先づかうあらうと存じたと申して。西に向つて念佛十遍ばかり申す處を。何が御太刀で御座る。水も溜らず。首をてうど打落して御座る。アドへ何ぢや首をてうど打落した。シテへ左樣で御座る。アドへそれは思ひの外よい最期であつたなア。シテへはあ。アドへその樣なことならば。もそつと生けて置いたらば役に立たうものを。早まつたことをしたなア。シテへ何れ御殘念をなされました。アドへ最期がよかつたと聞けば。不憫に思ふ。今日は東山邊へ出て。武惡が後を弔うてとらせう。シテへそれは悦びませう。アドへさあ／＼。來い／＼。シテへ畏まつて御座る。アドへさて何とその太刀はよう切れたか。シテへ流石お太刀で御座る。まつたゞ水の中へ打込む樣に御座りました。アドへさうであらう。あれは親ぢや人が重代の業よしぢやというて。御祕藏なされたわいやい。ト云うて。シカ／＼のうち。武惡橋掛へ立ち。舞臺にて行當る。

よく云合すべし。　武へなう〳〵嬉しや。此度命を助けたは。太郎冠者が蔭とはいひながら。日頃清水の觀世音を信仰する故ぢや。見えぬ國へ行たならば。また參ることもなるまい。お禮かたがた參らうと存ずる。　ト云うて行當る。武惡は一の松まで逃げて隱るゝ。アド見附くる。シテ中へ入り。かくすなり。皆心持色々。仕樣あるべし。よく〳〵云合はすべし。　シテへ何で御座ります。　アドへ何で御座りまする。己れ今のは武惡ではないか。　シテへいや。武惡は私が手に掛けて討つて御座る。　アドへ己れ、討ちもせいで討つたと僞らば。末孫を絕やすぞ。　シテへこれは御意とも覺えませぬ。討ちもせいで討つたと僞らうやうが御座らぬ。武惡は私が手に掛けて討ちまして御座る。　アドへ何れ事にこそ依れ。討ちもせいで討つたと僞らうやうはないが。でも今のは武惡であつた。退け。見て來う。　シテへ先づ御待ちなされませ。　アドへ何と待てとは。　シテへ私をお連れなさるゝは。斯樣の時の爲めでは御座らぬか。私が見て參りませう。　アドへ急いで見て來い。　シテへ畏まつて御座る。やいこゝなうろたへ者。何として是處へ出をつたぞいやい。　武へ天に網が被さつた。一旦命を助かつたは。そちが蔭とはいひながら。日頃清水の觀世音を信仰する故ぢや。見えぬ國へ行たらば。また參ることもなるまいと思うて。お禮かたがた參るところに。思ひも寄らぬ。賴うだお方のお目に懸かつた。此の上は賴うだお方にもそちにも恨はない。これへ寄つて首を討つて。賴うだお方へお目に懸けてくれい。　シテへまだそのつれを云ふ。一旦武惡は討ちましたと申上げて。今またこれは武惡が首で御座ると。何と申上げらるゝものぢや。その樣な事はないはずとも。何ぞよい思案はないかいやい。　武へ身共は途方に暮れて。よい思案も出ぬわいやい。　シテへ何と此處は鳥邊野ではないか。　武へまことに鳥邊野ぢや。それが何とした。　シテへ身共が思ふには。武惡はお主の命を背いた者で御座れば。唯今のは武惡が幽靈で御座るなどゝ申上げう程に。汝は幽靈の樣に取り繕うておりやれ。　武へ身共は終に幽靈になつた事はない。　シテへいやこゝな奴が。誰あつて幽靈に成つたことがあらう。聞いたこともあるに依つて、取り繕うてお出やれ。　武へそれならば。取り繕うて出よう程に。そこの首尾を賴むぞ。　シテへ早う出よ〳〵。　武へ心得た〳〵。中入する。　シテへ何がお目に懸かつた知らぬ。　アドへ何と見て來たか。　シテへ成る程。見て參りましたが。あの高みへ登りますれば。五町三町は手の下に見えまする。武惡がことはさて置きまして。似た者も居りませぬ。　アドへ何ぢや。似た者も居らぬ。　シテへ左樣で御座る。　アドへはて合點の行かぬ。慥に今のは武惡で

あつたが。シテ〽まうし／＼。是處は鳥邊野では御座りませぬか。アド〽成る程。是處は鳥邊野ぢや。それが何とした。シテ〽私が存じまするは。武惡はお主の命を背いた者のことて御座れば。浮みもやりませいで。唯今のは武惡が幽靈かと存じまする。アド〽何が何と。シテ〽いや幽靈と存じまする。アド〽何ぢや幽靈。シテ〽はあ。アド〽あゝそちは氣味の惡い事を云ひ出した。いざ來い。戻らう。シテ〽それが好う御座りませう。アド〽今日に限つたことではなし。また近日出て弔うてやらう。シテ〽それが好う御座りませう。アド〽幽靈と聞いたらば。どうやら身毛もとからぞう／＼と摑み立てるやうな。武〽あゝ苦しう御座る。アド〽そりや／＼。何やら出たは／＼。シテ〽まことに何やら出ました。アド〽それへ出たは何者ぢやというて尋ねい。シテ〽畏まつて御座る。やい／＼。それへ出たは何者ぢや。武〽武惡が幽靈で御座る。シテ〽申上げまする。武惡が幽靈ぢやと申しまする。アド〽まことに武惡が幽靈ぢやといふ。シテ〽左樣で御座りまする。アド〽さては最前幻の樣に見えたは彼奴(きやつ)かいなア。シテ〽何れ彼奴でがな御座りませう。アド〽あれへ行て云はうには。武惡は汝に云附けて成敗させたが。何として是處へは出たと云うて問へ。シテ〽畏まつて御座る。やい／＼。武惡は最前太郎冠者に仰附けられて御成敗なされたが。何として是處へ來たと仰せらるゝ。武〽お主の命を背いた者で御座れば。浮みもやりませいで。魂は冥土におりながら。魄は此世に止まりて。あゝ苦しう御座る。シテ〽申上げまする。アド〽聞いた／＼。シテ〽お聞きなされましたか。アド〽主の命を背いた者は皆あの通りぢや。汝も隨分奉公を大事にかけい。シテ〽畏まつて御座る。アド〽さて武惡にちと尋ねたいことがある程に。もそつとこちへ寄れと言へ。シテ〽畏まつて御座る。（ト云うて。アドの通りをいふ。）武〽あゝ苦しう御座る。アド〽あゝそれでよい／＼。シテ〽餘り側(そば)へは無用ぢや。アド〽やい武惡。此の世では地獄極樂が有るともいひ。無いともいふが。有るが誠か。無いが誠か。武〽地獄も御座る。アド〽むゝ。武〽極樂も御座る。アド〽やい／＼太郎冠者。地獄極樂はあるといやい。シテ〽左樣に申しまする。アド〽すれば後生が大事ぢやなア。シテ〽左樣で御座る。アド〽さて此の世から過ぎさせられたお方も多いが。どれへぞお目に懸かつたか。武〽悉くお目に懸つて御座る。中にも大殿樣にお目に懸つて御座る。アド〽何ぢや。親ぢや人にお目に懸つた。武〽あゝ。アド〽やれ／＼。お懐しや／＼。それは先づどの樣な所に御座なされたぞいやい。武〽地獄でもなし。アド〽むゝ。武〽極樂でもなし。アド〽はあ。武〽唯むさとした所に御座る。アド〽これはさうも有りさうな事ぢや。親ぢや人は此の世に御座なさるゝ時から。さのみ善をもなされず。またさして惡をもなされなんだに依つて。これはかうも有りさうな事ぢやなア。シテ〽左樣で御座る。武〽大殿樣から御言傳が御座る。アド〽やれ／＼。おしたらしや／＼。それは何と仰せ越されたぞいやい。武〽あの方には盜人がはやりまして。お太刀にお事を闕かせらるゝ。お目に懸かつたらば取つて來いと。仰せられて御座る。アド〽やい太郎冠者。盜人は此の世ばかりかと思へば。あの世にもはやるといやい。シテ〽左樣に申しまする。アド〽油斷のならぬ事ぢやなア。シテ〽左樣で御座る。アド〽幸ひ汝に持たせて置いた太刀を。慥に屆けませいというて遣れ。シテ〽畏まつて御座る。やい／＼。是を慥に屆けませい。武〽まだ御座る。アド〽何ぢや

〳〵。武へ夜に三度。日に三度。閻魔王への御出仕に。小さ刀にお事を關かせられて御座る。お目に懸かつたらば。これも取つて來いと。仰せられて御座る。アドへいかい御苦勞をなさるゝ事ぢやなア。シテへ左様で御座る。アドへさりながら。これは親ぢや人のお譲りやつた物を皆お取返しやるといふものぢや。さりながら。また此様な好い便りはあるまい。憺に屆けいというて。これも遣れ。シテへ畏まつて御座る。憺に屆けませい。武へまだ御座る。アドへ何ぢや。まだ有る。武へあの方は謠がはやりまして。扇にお事をかゝせられて御座る。これも取つて來いと。仰せられて御座る。アドへやい〳〵。親ぢや人の謠がまだ止まぬといやい。シテへ左様に申しまする。アドへいかいお好きであつたなア。シテへ左様で御座る。アドへさりながら。此の世に御座なされた時は。鋼（はがね）を鳴らしたお侍であつたに依つて。扇の五本や十本に事は關がせられなんだに。冥土とて物の不自由な。一本の扇に事を關かせらるゝ。ト云うて泣く。宿元で御座らばどの様な扇なりとも取揃へて進じませうに。途中で武惡に逢ひましたに依つて。持ち古びましたれども。これを進じまするというて遣れ。シテへ畏まつて御座る。アドへもうよい加減にいねといへ。シテへ心得ました。やい〳〵。これも憺に屆けませい。もう好い加減にいねと仰せらるゝ。武へまだ御座る。アドへ何ぢや〳〵。武へ此方は請らせられて御窮屈に御座らう。あの方は廣々とお屋敷取りなをされて御座る。お目に懸つたらば。お供せいと仰せられて御座る。アドへそれは親ぢや人の御無分別といふものぢや。身共が此の世に居てこそ。五十年忌の百年忌のというて。とひ弔ひもすれ。それへ參つては誰あつて後を弔ふ者が御座らぬ。其上以前とは違ひまして。隣屋敷を買ひ求めまして。唯今では廣々と致して居ります。そのお屋敷はどれへなりともお譲りなされませ。また私も參る時分には參らうと言うて。汝も早ういねいやい。武へそれは御卑怯で御座る。アドへぢやというて。能う思うても見よ。これが何と行かるゝものぢや。武へ是非お供せいと仰せられて御座る。アドへそちが後も弔うてやるわいやい。武へそれは御卑怯で御座る。アドへあゝ免してくれい〳〵。武へ是非お供せいと仰せられて御座る。ト云うて追込み入る。シテも逃げて入るなり。

吹取（ふきとり）

シテ　男
アド　何某
乙

（入道具）

シテへ此邊りの者で御座る。某未だ定まる妻が御座らぬに依つて。清水の觀世音へこもり。申し妻を致して御座れば。滿ずる曉の御靈夢に。名月の夜五條の橋へ出て笛を吹け。其笛の音につれて女が出る程に。吹取にして妻に定めよとのお事ぢや。さり乍ら。身共は終に笛を吹いた事が御座らぬ。又こゝに常々お目を下さるゝ有德のお方が御座る。是は笛をようなさるゝ程に。幸ひ今晩は名月なれば。誰殿を賴うで同道致し。五條の橋で笛を吹いて貰はうと存ずる。シカ〳〵。何と内に御座ればよいが。あまり外へ出ぬ人で御座る。大方在宿で御座らうと存ずる。何かと云ふ内に是ぢや。先づ案内を乞はう。ト云うて。常の如し。唯今參る事別の儀で御座らぬ。御存じの通り未だ定まる妻が御座らぬに依つて。清水の觀世音へ籠つて申し妻を致して御座れば。夜半の頃八

十餘りの老僧が。鳩の杖にすがらせられて。汝今迄妻をまうけぬ事不憫に思召し。此度似合はしい妻を授けてとらす。則ち名月の夜五條の橋へ出て笛を吹け。その笛の音につれて女が出るであらう。それを吹取にして。妻と定めよとのお事で御座る。アド〽扨々それは目出度い事ぢや。これと云ふもそなたの信心の深い故ぢや。シテ〽扨それに就いて御無心が御座る。私は笛を得吹きませぬ。お前はよう笛をなされまする。近頃御苦勞ながら。五條の橋へお出でなされて。笛をお吹きなされて下されたらば。忝う存じませう。アド〽行てやりたいものぢやが。今宵はどうやら心がすぐれぬ。許してお晃りやれ。シテ〽御尤もでは御座れども。是は私が一世一代の事で御座る。御恩に請けませう。何卒お出でなされて下され。アド〽それならば笛を借してやらう程に。そなたの口へあてゝ吹く體をして居さしめ。シテ〽いや笛の音につれて出るゝと御座れば。吹く體致した分ではなりますまい。アド〽いか樣。笛の音が善惡ともに聞えいではなるまい。殊更これは一代に一度の事ぢや。是非に及ばぬ。參らう。シテ〽それは近頃忝う存じまする。アド〽暫くお待ちあれ。笛を才覺致さう。シテ〽是は御苦勞に存じまする。アド笛懷中し出る。アド〽追付け參らう。お行きやらぬか。シテ〽何が扨お出でなされませ。アド〽それならば先へ參らう。さあ／＼來さしませ。シテ〽畏まつて御座る。アド〽誠に。是は言うても／＼不思議の御靈夢であつたのう。シテ〽お前の樣に御家内大勢御座る所はお構ひも御座らぬが。私の樣な獨り身は留守居が御座りませねば。萬事不自由に御座りまする。アド〽何かと云ふ内に五條の橋で御座る。アド〽あれ／＼。いま月の出端ぢや。何と好い月ではないか。シテ〽何れよい月で御座る。アド〽あの松にかゝつた月。水に影のうつる所。見事ではないか。シテ〽申し。御苦勞ながら。お笛をなされて下され。アド〽今迄そなたは獨り身で暮したでないか。先づようおりやる。水へうつる月を橋の上から見た所。どうも言はれぬ面白い事ぢや。シテ〽申し。月は今宵に限らず何時御覽なされうと儘で御座る。先づお笛をなされて下されませ。アド〽扨も扨も。そなたはいかうせくの。シテ〽せくでは御座りませぬが。觀世音の思召しませうは。扨も／＼早う笛を吹かいでぬかつた男ぢや。但し餘り妻が持ちたうもないか。などとお氣を繕へられまいものでも御座らぬ。まあ一寸お笛をなされて下されませ。アド〽いや佛は御慈悲が深いに依つて。其樣な意地の惡い事はないものぢや。とかく氣をおせきやるな。シテ〽でも物はよい頃が御座る。最前から何かと申す内に。月も餘程あがらせられた。夜の更けませぬ内にお笛をなされて下され。アド〽せはしうおしやる。此樣な好い月を五條の橋で見ると云ふ事はならぬ。もそつと眺めて居たけれども。餘り急しうおしやる。先づ調べて見う。シテ〽何のお調べなさるゝに及びませぬ。アド笛を出し。少し調べる。シテ〽にやお止めなされましたか。アド〽久しう吹かぬに依つて調べて見たが。中々音が出ぬ。シテ〽いやよう鳴りました。さあ／＼。續けてお吹きなされて下されい。それより吹く。女出る。口傳。シテ〽申し／＼。あれへ女中が見えまする。あれで御座らうか。アド〽どれ／＼。成程あれであらう。シテ〽お笛は矢張りなされて下されませ。アド〽心得た。また吹く。正面へ出る。シテ〽あら有難や觀世音菩薩／＼。又お止めなされましたか。アド〽あの月をお見やれ。何とも言はれぬ面白い事ぢや。シテ〽これは如何な事。こゝが肝心の所ぢや。さあ／＼早うお笛を。アド〽心得た／＼。

また吹く。シテへ南無觀世音菩薩〳〵。もはやお笛をお止めなされて下されい。アドへモよいか。シテへ何とあれで御座りませうか。アドへ若し人違ひではないか。早う尋ねて見さしめ。シテへ畏まつて御座る。女に向ひ。ヒエと言うて笑ふ。シテへこれは恥しうて物が言ひ憎う御座る。近頃慮外ながら。お前お尋ねなされて下され。アドへこれは迷惑ぢや。さり乍ら。とても頼まれて來た事ぢや程に。尋ねてやらう。申し〳〵。唯今笛の音につれて出させられたはお前で。御夢想のお方で御座るか。女頷く。シテ笑ふ。シテへ御苦勞に存じまする。忝う御座る。御夢想のお方かと仰せられたれば。ウヽ。二人笑ふ。シテへ先づこちへ通しませう。アドへそれがよからう。シテへさあ〳〵。かう通らせられい。女。アドの側へ行く。アドへこれ〳〵。身共では御座らぬ。そちへ寄らせられい。シテへ笛をふかされたに依つて。お前の側へこられたもので御座らう。有り樣は。あのお方は雇うて參りました。なア。アドへ成程身共は雇はれて參つた。シテへ主は身共ぢや。さう心得さしめ。女頭振り。アドの側へ行く。アドへいや。私は笛を吹くために雇はれて參つた。お前の連合は其處に居らるゝ。此處を放させられい。シテへ惡い合點ぢや。連合は身共ぢや。こちへ寄らしめ。ト言へども。アドにしなだれる。アドへ是は迷惑ぢや。放さつしやれ。ト云ふ内。イロ〳〵の中に小袖とる。二人肝つぶす。女へみづからが殿御はどれぢや。アドへなう〳〵誰。先づ以て今日は目出度い。某は歸る程に。そなたは後から夫婦づれで戻らしめ。シテへ先づお待ちなされませ。最前からいかうお前を慕はれまする。お前の方へあの人をお連れなされませ。アドへお知りやる通り。身共は妻もある者ぢやに依つて。此方に入用は御座らぬ。シテへお前の御身上で。お召使ひの五人や三人は有つても苦しうない事で御座る。ひらにお連れなされませ。女へ申し〳〵。シテへ何ぢや。女へ妾が殿御はお前にしませう。アドへそれ〳〵。ざつと埒が明いた。シテへそなたのお連合は笛を吹いた人ぢや。女へこなたと妾は五百八十年萬々年も連添ひませう。此類何れも同じ事。女をこかし入る。どれへ行かつしやる。と追込み入るなり。

福の神

シテ　福の神
アド　參詣人
小アド　參詣人

アドへ此邊りの者で御座る。（入道具）何かと申す内に年の暮になつて御座る。いつも嘉例で出雲の大社へ年を取りに參る。則ち當年も參らうと存ずる。また此處に毎年同道致して參る人が御座る。是へ誘うて直に參らう。シカ〳〵。誠に。毎年〳〵相變らず年を取りに參ると申す事は。目出度い事で御座る。いつも同道致す事ぢや程に。定めて待兼ねて居られうと存ずる。何かと云ふ内に是ぢや。ト云うて。案内乞ふ。出る。如件。アドへ何かと申す内に。年の暮になつたでは御座らぬか。小アドへ誠に。近い春になりました。アドへ扨いつもの通り。大社へ年を取りに參らうでは御座らぬか。小アドへ定めてお出でなされうと存じて。心待ちを致して御座る。アドへそれならば。いざお出でなされませ。小アドへ先づこなたから御座れ。アドへそれならばお先へ參りませう。さあ〳〵お出でなされませ。小アドへ心得ました。アドへ唯今も獨言に申して御座る。毎年〳〵相變らず年籠り致すと申すは。目出度い事で御座る。小アドへ仰せらるゝ通り。足手息災で參詣致すと申すは。目出度い事で御座る。アドへ何かと申す内に是で御座る。いざ

拜を致しませう。小アドへ一段とよう御座らう。ト云うて。二人共扇披げ。拜む。アドへ扨。いつも福の神のお前で年を取りまする。いざ參りませう。さあ〳〵お出でなされ。小アドへ心得ました。アドへさて去年參詣致したを。月日の經つは早いもので御座る。小アドへ仰せらるゝ通り。光陰矢の如して御座る。アドへ何かと申す内に。福の神のお前で御座る。いざ拜を致しませう。ト云うて。又二人共扇披げ。をがむ。アドへさて。此方には豆を御用意なされて御座るか。小ドアへ成程。用意致して御座る。アドへそれならば囃しませう。小アドへ心得ました。アドへ福は内。〳〵。小アドへ福は内。是より二人共。福は内〳〵とばかり云うて。正面より樂屋の内を目がけ。福は内〳〵と云うて打ち。シテ内より笑うて出で。いろ〳〵仕様有り。心得口傳。アドへ是へ賑々とお出でなされたは何方で御座る。シテへ汝などが年月あゆみを運ぶ福の神。是に出現してあるぞよ。アドへハア有難う存じまする。小アドへ先づかう御來臨なされませ。ト云うて。葛桶を出し。腰をかけさせる。シテへやい〳〵。汝は年々この福の神を信仰して歩みを運ぶ。何の爲に歩みを運ぶ。アドへ私共富貴になりたさに歩みを運びまする。シテへ汝も左樣か。小アドへ左樣で御座る。

シテへ富貴になるには。持たいで叶はぬ物があるぞ。持つたか。アドへそれは何で御座る。シテへ元手がなければならぬ。アドへ元手と仰せらるゝは。金銀米錢の事でがな御座らう。それが御座れば。福の神へお願ひは申しませぬ。御座らぬに依つて。歩みを運ぶ事で御座る。シテへ扨々汝は愚かな事を言ふ。元手と云ふは其樣な事ではない。たとへば仁義禮智信の五常を守り。上を敬ひ下を憐れみ。心を正直正路に持つ。是を元手を持つたと云ふ程に。さう心得。アドへ畏まつて御座る。シテへ最前から何かと云うたれば口が乾く。急いで御酒を上げい。アドへ畏まつて御座る。御酒を上げさせられい。小アドへ畏まつて御座る。御酒で御座る。シテへ日本大小の神祇。別しては松尾の大明神〳〵。その後はこの福の神が食ばる。アドへちと申上げたい事が御座る。シテへ何事ぢや。アドへ日本大小の神祇は御尤もで御座る。松尾の大明神と改めさせられたは。どうした事で御座る。シテへ汝はこざかしい事を言ふ者ぢや。松尾の明神は酒神ぢやに依つて。初穂を參らせねば機嫌が悪いに依つて。初穂を參らせて。其後を福の神がたばる事ぢや。小アドへ是は御尤もで御座る。シテへ扨いよいよ富貴になりたいか。アドへ左樣で御座る。シテへそれならば。富貴になる樣に言はう程に。

さう心得。アドへ畏まつて御座る。シテへ汝もさう心得。小アドへハア。シテへいで／＼このついでに。地へいで／＼このついでに。樂しうなるやう語りて聞かせん。朝起きとうして慈悲あるべし。女夫の中にて腹立つべからず。人の來るをもいとふまじ。我等が樣なる福天には。いかにもおふくな結構して。さて中酒には古酒を。いやと云ふ程盛るならば。／＼。／＼。樂しうなさではかなふまじ。ト云ふ謠につけて。正面へ出て笑ひ。留めて入るなり。

瓢の神

シテ　鉢叩
アド　瓢の神
立衆頭
立衆
（入道具）

シテへこの寺内に太郎と申す鉢叩で御座る。誠に。某の宗旨の樣な變つた流儀は御座らぬ。先づ元祖空也上人の流を汲んで。念佛三昧の勤とは申せども。髮を剃らねば出家にもあらず。又衣を着れば俗でもなし。ただ茶せんを賣つて渡世として。いつ此の瓢をさゝげ。口に無常の偈を唱へ。普く衆生を勸むれば。さながら大俗にも交はらぬ。さりながら。此の中は打續いて茶せんは賣れず。ただ一重ある衣は着古ばし。肩裾のわかちもなく。ばらりさんとなつて御座る。今改めて拵へうではなし。修行を致さうやうもないに因つて。進退行きつまつて。後へも先へも參らぬ。此の上は是非に及ばぬ。多年勤めた宗旨を振捨て。都へ奉公に上らうと存ずる。又松尾の大明神は。我が宗體の守護神で御座るに因つて。お禮かたぐ御暇乞のため。參詣致さうと存ずる。シカ／＼。誠に。多年の宗旨を振捨て。奉公に上ると申すは。口惜し事で御座れども。何と申しても進退がならねば是非に及ばぬ。さりながら。世の常の出家ならば。早速奉公に出る事もなるまいに。か樣に衣を着ぬ時は。其の儘俗人で御座るに因つて。何時どの樣な奉公を致さうと儘な事で御座る。何かと云ふうち參り着いた。先づ御前へ向はう。じやぐわん／＼。私唯今參る事餘の儀で御座らぬ。身上罷りならぬに因つて。代々の宗旨を捨て。都へ奉公に上りまする。願はくば神力を以て身の行末を守らせ給へ。南無松尾大明神。／＼。今宵は此の所に通夜を致さうと存ずる。ト云うて。通夜をする。末社へいや是は。松尾の末社瓢の神とは我が事なり。爰に太郎と申す鉢叩き。我が身の幸ひなき事を恨み。多年の宗旨を振捨て。都へ奉公に上る事。忝くも大明神餘り不憫に思召し。此の事を申聞かせばやと存じ候。シカ／＼。誠に。空也上人と松尾の大明神とは。樣子あつて。仰せ合はされた仔細これあるに因つて。今に守護なさるゝ事で御座る。さてかの太郎はどれに居る事ぢや。さればこそ是に居る。やい／＼。太郎／＼。これは正體もなう臥せつて居る。頓て示現をおろさうと存ずる。いかに太郎慥に聞け。汝たま／＼人身を請け。有難くも元祖のゆいていにつらなり。此度輪廻を免れう者が。僅かの露命のため。多年の宗旨を振りすて都へ奉公に上る事。忝くも大明神餘り不憫に思召し。此の瓢衣を下さるゝ間。急ぎ此の衣を着て瓢を持ち。彌々信心堅固に修行致さば。なほ／＼宗旨繁昌にお守りあらうずるとの御事なり。構へて其の分心得候へ／＼。シテへはあ／＼。あら有難や。暫くすいめんのうちにあらたなる御靈夢を蒙つた。扨も／＼忝い事かな。誠に御神託の如く。わづかの身命を送らんため。代々の宗

旨を振捨て都へ奉公に上るといふは。先づ元祖空也上人の御心を背き。其の上來世を取外づすと云ふものぢや。此の上は寺へ戻り。彌々信心堅固に修行致さうと存ずる。さて其の實夢に瓢衣を下さるゝと有つたが。どれに有る事ぢや。さればこゝこれにある。扨も／＼。これは結構な瓢衣ぢや。先づ急いで此の衣を着うと存ずる。（ト云うて。出居で衣を着る。）立頭へなう／＼。何れも御座るか。立衆へこれに居りまする。立頭へ聞けば太郎が身上ならぬに因つて。多年の宗旨を振捨て都へ奉公に上ると云うて。お暇乞かた〴〵松尾の大明神へ參り。通夜をして居る由。宗旨の外聞も宜しうないに因つて。何れも同道致してあれへ參り。意見をして太郎を連れて戻りますまいか。立衆へこれは一段とよう御座らう。立頭へ追附け參らう。さあ／＼。御座れ／＼。立衆へ心得ました。立頭へいか樣太郎が申すも無理では御座らぬ。我々が宗旨に檀那と云うてはなし。わづかの茶せんを賣つて渡世致せば。面々貧しい境涯で御座る。立衆へ其の通りで御座る。立頭へどうぞ首尾よう太郎を連れて戻りたいもので御座る。立衆へいや何れもが意見致したらば。聞かぬと云ふ事は御座るまい。シテへなうなう。嬉しや／＼。これはまんまと昔の鉢叩になつた。先づ急いで寺へ歸らう。頭へいやあれへ太郎が參りまする。衆へ早う詞をかけさせられい。頭へなう／＼太郎。衆へ太郎。シテへこれは何れも打揃うて。どれへお行きある。頭へどれへと云ふ事があるものか。そなたが代々の宗旨を振捨て。都へ奉公に上ると聞いたに因つて。留めにきた。立衆へ何れも云合せて留めに來た。立頭へさあ／＼。早う歸らしめ。シテへやれ／＼。身共を人と思召して。何れも留めに來てくれられた段。近比忝い。扨それに就いて有難い事がある。立頭へそれは何事ぢや。シテへ先づ此の瓢衣を見ておくりやれ。立頭へこれは見なれぬ瓢衣ぢや。なう何れも。立衆へ誠に。是は結構な瓢衣ぢや。立頭へそれには定めて樣子があらう。シテへなるほど仔細が有る。夜前お暇乞かた〴〵通夜をして居たれば。忝くも末社瓢の神が枕がみに立たせられて。汝たま／＼人身を受け。有難くも元祖のゆいていにつらなり。此度輪廻を免れう者が。わづかの露命のため。多年の宗旨を振捨て。都へ奉公に上る事。忝くも大明神餘り不憫に思召し。此の瓢衣を下さるゝ間。彌々信心堅固に修行致さば。なほ／＼宗旨繁昌にお守りなされうとの御事であつた。其の儘夢はさめて。見れば。此の瓢衣があつたが。何とありがたい事ではないか。立頭へ扨々それは有難い事ぢや。とかく此の上は寺へ戻つて。これ迄の通りに信心堅固に修行めされ。シテへ身共もさう思ふ。さりながら。かゝる有難き神託を受けて。ただ戻るも如何ぢや。お禮かた〴〵。神前で同音に踊念佛を執行したいが。何とあらうぞ。衆へこれは一段とよからう。シテへそれならば何れも身拵へをめされ。衆へ心得た。（シテより皆々後見座へ行く。立衆衣の肩とり。鉦鼓を掛くる。立衆各茶せん下に置く。但し茶せんをかたげたもよし。）シテへ身拵へがよくばあれへお出やれ。立衆へ心得た。立頭へさてそなたが發起ぢや。導師を召されい。シテへ心得た。（ト云うて。瓢簞三ツ打ち。拍子をとるなり。）シテへよき光ぞと影頼む。よき光ぞと頼む茶の。きよ佛のきよひよん。同へ見ず立つふれきよひよんな伊豆の里きよにむつの國有るきよひよんのうふくべにおふつきて折々風の吹く時は。ひよひよらひよん〳〵四王寺の鐘のさむきさにありてつてふを打ちならし三界を家と走りめぐる鉢叩はせん／＼肩に掛けて後生を願はゞなどか佛にならざらんきよひよんのうお都へお上りあらうずるならば。瓢をなりとも置いてゆけふ

くべをなりとも置いてゆけ。（鉦打切。）シテ〽それやじよろ／＼と安き間の事なるに。生國はやじよろてつろてんつてんとたゝかうずるは。瓢なうてはおしやうし。シテ〽よしやただ寢ても覺めても忘るなんよ。ただ一念の念佛なりけり。思へば浮世は夢の世ぞかし。榮花はこれ皆春の花。名利の心をとゞむべし。佛法あれば世法あり。煩惱あれば菩提あり。柳は綠花は紅の色々なれば。急いで淨土を願ふべし。なまうだ／＼／＼／＼。南無阿彌陀佛。神の惠の深ければ。輪廻の迷ひ振捨てゝ。元の寺にぞ歸りける。これぞ偏に我が賴む。元祖空也の御誓ひ。法の力ぞ有難き。／＼。

（拍子にてシテより段々に入るなり。）

梟山伏（ふくろやまぶし）

シテ　山伏
アド　兄
小アド　弟
（入道具）

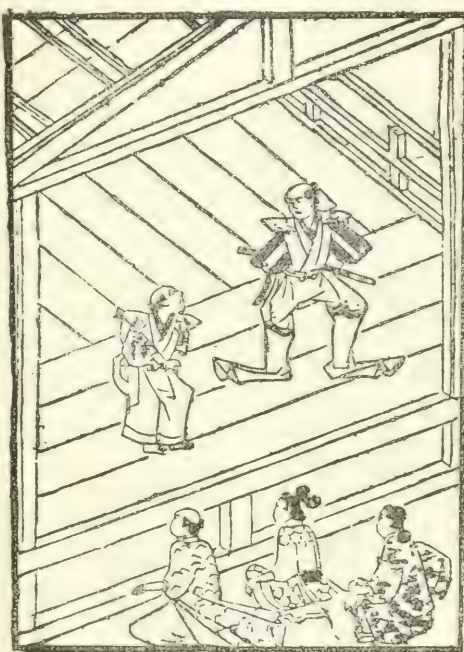
アド〽此邊りの者で御座る。某弟を一人持つて御座る。此の内山から歸つて。何とやら物の怪のついた樣に御座る。色々と致せども兎角その驗（しるし）が御座らぬ。又此に貴いお山伏が御座る。是をお賴み申し一加持して貰はうと存ずる。先づ急いで參らう。シカ／＼。誠に内に御座ればよいが。内にさへ御座つたらば。某が申す事ぢやに依つて。定めてお出でなされて下さるゝで御座らう。何かと云ふ内に是ぢや。先づ案内を乞はう。（常の如く案内乞ふ。）シテ〽九識の窓の前。十乘の床のほとりに。瑜伽（ゆが）の法水（ほうすい）をたゝへ。三密の月を澄ます所に。案内申さんとは誰ぞ。アド〽私で御座る。シテ〽足許から鳥の立つ樣に。そなたならば案内なしに直に通りは召されいで。何としてお出でやつた。アド〽唯今參るは別の事では御座らぬ。私の弟を御存じで御座るか。シテ〽そなたの弟は太郎。それが何とした。アド〽此の内山から歸りまして。何とやら物の怪のついた樣に御座つて迷惑致しまする。何卒お出でなされて。一加持なされて下されうならば。忝う存じまする。テシ〽此の内は別行の仔細あつて。何方へも罷出でねども。わごりよの事ぢや。行てやらうぞ。アド〽それは忝う存じまする。いざお出でなされませ。シテ〽案内者の爲。そなたゆかしめ。アド〽左樣ならばお先へ參りませう。さあ／＼お出でなされませ。シテ〽心得た。アド〽さて今日はお前のお出でなされて下され、此樣な有難い事は御座りませぬ。シテ〽何と藥でも用ひたか。アド〽成程藥も大分用ひましたれども。少しもその驗（しるし）が御座りませぬ。シテ〽それは氣の毒ぢや。さり乍ら。身共がいたらば樣子が知れるであらう。アド〽それは有難う存じまする。何かと申す内に是で御座る。先づ斯うお通りなされませ。シテ〽心得たさて病人はどれに居るぞ。アド〽追付け連れて參りませう。シテ〽早う連れて來い。アド〽畏まつて御座る。（ト云うて。樂屋へ入る。一の松へ出て。）アド〽ヤイ太郎。貴いお山伏がお出でなされて。一加持なされて下さるゝ程に。心をはつきりとお持ちやれ。太郎／＼。（正體もない體ぢや。）病人を連れて參りました。シテ〽太郎／＼。是は曾て人見知りはないさうな。アド〽曾て人見知りは御座りませぬ。シテ〽脈を見よう。アド〽是は珍らしいお脈で御座る。シテ〽汝は奇特に氣がついた。總じて。人間の脈は左右の手でとる。また斯樣に物の怪のついたは。頭（づ）脈と云うて。頭に脈が有るに依つて。それ故うかがうた事ぢや。アド〽御尤もに存じまする。して樣體は何とで御座りまする。シテ〽以ての外の邪氣ぢや。さり乍ら。一祈りしたらば

快氣なするであらう。アド〽それは有難う存じまする。シテ〽それ山伏といつぱ山伏なり。何と聞えた事か。アド〽聞いた事さうに御座る。シテ〽兜巾といつぱ。布切一尺ばかり眞黑に染め。むさと襞を取つて。頭にチヨンと頂く故の兜巾なり。何と殊勝な事か。アド〽殊勝さうな事で御座る。シテ〽いら高の珠數では無うて。唯むさとした木の切を繋ぎ集め。いら高の珠數と名付けつゝ。明王の索にかけて祈るならば。などか奇特のなかるべき。ぼろん／＼／＼。小アド〽ほゝ。シテ〽ハテ異な音を出した。アド〽變つた音を出しました。シテ〽山での様子は何とてあつた。アド〽友達共の申しまするは。梟の巣をおろしたとやら申しまする。シテ〽皆まで言ふな。それは梟の憑いたのぢや。梟の憑いたには。鳥の印を結んでかくれば其儘落ちる。鳥の印を結んで落してやらう。アド〽それは有難う存じまする。印結び。シテ〽いかに悪心深き梟なりとも。鳥の印の結んでかけ。いろはにほへとんと祈るならば。などかちりぬるをわかなれ。ぼろん／＼。小アドホヽと云ふ内。兄苦しみ。ホヽと云ふ。シテ〽是は如何な事。また兄へもついた。如何にあちらこちらつきまとふ梟なりとも。重ねて三つのお山に頼みをかけて祈るならば。などか奇特のなかるべき。ぼうろん／＼。ト祈る中。いろ／＼口傳あり。後にシテにもうつる。仕様口傳。

富士松

シテ　太郎冠者
アド　主人

アド〽此邊りの者で御座る。某一人召使ふ下人が身に暇も乞はず。何方へやら參つて御座る。承れば夜前歸つたとは申せども。未だ身に目見を致さぬ。今日は彼奴が私宅に立越え。たばかり出し。きつと折檻の加へうと存ずる。シカ／＼。誠に。憎い奴で御座る。身に一言の斷りを申して御座らば。如何程なりとも暇をとらせうものを。だしぬいた段な言語同斷憎い仕合せで御座る。何かと申すうち早や彼奴が私宅は是ぢや。身共が聲を聞いたらば。定めて留守を使ふであらう。作り聲をして呼出さうと存ずる。ものも。案内も。シテ〽やら奇特や。夜前身共の歸つたを。早やどなたやら御存じあつて。表に案内が有る。案内とは誰そ。アド〽ものも。ト引く。シテ〽何方で御座る。アド〽しさりをれ。シテ〽ハア。アド〽俄の慇懃迷惑致す。ちとお手を上げられい。シテ〽是は何とも迷惑に存じまする。アド〽さて此度誰に暇を乞うて何方へ行た。シテ〽されば其事で御座る。御暇の儀を申上げうと存じて御座れども。一人召使はせらるゝ下人の事で御座るに依つて。申したりとも。やはか下さるまいと存じて。忍うて富士詣を致して御座る。アド〽やら珍らしや。一人召使ふ下人が富士詣をすれば。主に暇を乞はぬが法ですか。シテ〽ハア。アド〽エイ。シテ〽ハア。アド〽ゑあら憎い奴の。きつと折檻の加へうと思うて參れども。富士詣をしたと云へば。權現への畏れもある。此度は許す。そこを立て。シテ〽それは誠で御座るか。アド〽弓矢八幡たすくるぞ。シテ〽やら心安や。アド〽何と今の間窮屈にあつたか。シテ〽何時もの御機嫌とは違ひまして。すは御手打にも相成らうかと存じて。身の毛をつめて居りました。アド〽さうであらう。身もいつもとは腹が立つた。以來をたしなめ。シテ〽畏まつて御座る。アド〽富士詣をしたと云ふが。夥しい參詣であつたか。シテ〽なか／＼。夥しい參詣で御座る。峯から谷へ。谷から峯へ。おしも分けられた事では御座らぬ。アド〽權現の御事ぢ

や。さうなうては叶はぬ。そちは富士松を取つて來たと云ふは誠か。シテ〽いや何も取つては參りませぬ。アド〽いや嘘を言はぬ御方が仰せられた。隱さずとも言へ。シテ〽さてはお聞きなされたが定で御座るか。アド〽なか／＼。シテ〽成程取つては參りましたが。あれは人の預り松で御座る。アド〽その預り松を見る事はならぬか。シテ〽お目に掛けまする分は苦しう御座らぬ。かう御通りなされませ。アド〽心得た。シテ正面へ出て扇を擴げて出てサラ／＼と云うしろ向くる心なり。シテ〽この松で御座る。アド〽この松か。シテ〽左樣で御座る。アド〽よい松やな。シテ〽つうとこつきのよい松で御座る。アド〽この松を貰ふ事はならぬか。シテ〽最前も申す通り。人の預り松で御座るに依つて。進ずる事はなりませぬ。アド〽成程。預り松と云うたな。シテ〽左樣で御座る。アド〽何ぞ打ち物にはせぬか。シテ〽物に依つて致しましよか。アド〽物に依つてしよう。シテ〽ハア。アド〽暫くそれに待て。シテ〽畏まつて御座る。アド〽大方あれが口もしれた。何と換へたものであらうな。シテ〽何とお換へなされてよう御座りませうぞ。アド〽イヤ秘藏の鷹と換へよう。シテ〽これは結構なお換へ物では御座れども。先の人が鷹を使ふ樣な人では御座らぬ。これはなりますまい。アド〽黒の馬と換へよう。シテ〽これも結構なお換へ物では御座れども。先の人が馬に乘る樣な人では御座らぬ。これもなりますまい。アド〽イヤこゝな者が。最前から何と換へようかと。換へようと言へど。あれもならぬ。これもならぬと言ふ。身共は歸らう。シテ〽アヽ先づお待ちなされませ。アド〽何と待てとは。シテ〽富士の神酒が御座る。上りませぬか。アド〽それならば急いで出せ。シテ〽畏まつて御座る。ト云うて。橋がかりへ立つて。ヤイ／＼頼うだ御方が御酒を上らうと仰せらるゝ。急いで出せ。なんぢや。無い。無いと云うては濟むまい。身共が給なりとも持つていて取つて來い。エイ。念なう早かつた。ト云うて。盃を請ける。富士の神酒で御座る。アド〽どれ／＼。居ながら富士の神酒を飲めば。禪定の心地がする。シテ〽左樣で御座る。アド〽この内そちは附合ひをするげな。この盃の上で。一句持つて參らう。つけたら松をとるまいし。つければ松を取る程に。さう心得。シテ〽それはこはもので御座る。アド〽こはものとも手に持つて參らう。手に持てる。シテ〽手に持てる。アド〽かはらけ色の古あはせ。シテ〽おかんを加へて參りませう。アド〽どうなりと

もせい。シテ〵ヤイ〳〵。物を鼻高に言ふな。最前の袷の事を早や御句になされた。以來をたしなめ。エイ。おかんを加へて參りました。アド〵最前の跡はつかぬか。シテ〵何とやら仰せられましたな。アド〵手に持てる。シテ吟ず。アド〵かはらけ色の古あはせ。シテ〵かうも御座りませうか。アド〵何と。シテ〵酒ごとにあるつぎめなりけり。アド吟ず。アド〵いかう出來た。シテ〵さうも御座らぬ。アド〵今日は山王の縁日ぢや。參らう程にさう心得へ。シテ私もお供致しませうか。アド〵又供をせえでならうか。路すがら附合をする。附けたら松をとらまいし。附けねば松を取る程に。さう心得。シテ〵それは又こは物で御座る。アド〵こは物ともに持つて參らう。跡なる物よ暫しとゞまれ。シテ〵ハア。アド〵太郎冠者。附くかよ。附けねば松をとらぞ。太郎冠者〳〵。ヤイそこな奴。シテ〵ヤア。アド〵そちはそれに何をして居る。シテ〵あとなる者よ暫しとゞまれと仰せられたによつて。これに暫しとゞまつて居まする。アド〵あれは句ぢやわいやい。シテ〵ハア。さては御句で御座るか。アド〵なか〳〵。シテ〵句ならば句と仰せられいで。とうにも附けましよものを。

アド〵急いで附けえ。シテ〵かうも御座りませうか アド〵何と。シテ〵二人とも。アド〵二人とも。シテ〵渡れば沈む浮橋を。あとなる者よ暫し止まれ。アド〵何は出來たが。吟ずる事はおけ。シテ〵畏まつて御座る。アド〵山吹の。シテ〵山吹の。アド〵花摺り衣ぬしは誰そ。シテ〵問へず答へずくちなしにして。アド〵ろくしよ塗りし佛とぞ見る。シテ〵蓮の葉の。アド〵蓮の葉の。シテ〵青きが上の青蛙。アド〵飛ぶ白鷺は雪にまがへり。シテ〵年寄の。アド〵年寄の。シテ〵白髪にまがふ綿帽子。飛ぶ白鷺は雪にまがへり。アド〵その吟ずる事はおけと云ふに。シテ〵畏まつて御座る。アド〵黒き物こそ三つならびけり。シテ〵何が三つならうだぢやまで。アド〵何が三つならばうと。句は身共が儘ぢや。シテ〵かうも御座りませうか。アド〵何と。シテ〵中は子か。アド〵中は子か。シテ〵雨のはたなる親烏。黒き物こそ三つならびけり。アド〵句は出來たが。その仕方はおけ。シテ〵畏まつて御座る。アド〵上もかた〳〵下もかた〳〵。シテ〵うつぼ木の。アド〵うつぼ木の。シテ〵木末たゝくけらつゝき。上もかた〳〵下もかた〳〵。アド〵その仕方はおけと云ふに。シテ〵ハア。

アド〵下もかた〳〵上もかた〳〵。シテ〵これは最前の御句で御座る。アド〵最前のは上もかた〳〵下もかた〳〵。是はまた下もかた〳〵上もかた〳〵ぢや。シテ〵ハア。さては最前のをひつくりかやした樣なもので御座るな。アド〵ひつくりかやしよと。もうどりうたせうと。句は身共が儘ぢや。急いで附け。シテ〵かうも御座りませうか。アド〵何と。シテ〵三日月の。アド〵三日月の。シテ〵水にうつらう影見れば。下もかた〳〵上もかた〳〵。アド〵その下はおけと云ふに。シテ〵ハア。アド〵この樣な者には。難句を以て參らうと存ずる。シテ〵それは又こはもので御座る。アド〵奥山に。シテ〵奥山に。アド〵舟漕ぐ音の聞ゆるは。シテ〵四方の木の實やうみ渡るらん。アド〵西の海。シテ〵西の海。アド〵千尋の底に鹿鳴きて。シテ〵ちと申上げたい事が御座る。アド〵何事ぢや。シテ〵最前の奥山の舟を西の海で漕がせまして。西の海の鹿を奥山で鳴かせましたれば。よい御句で御座らう。アド〵山の上で舟を漕がせうと。海の底で鹿を鳴かせうと。句は身共が儘ぢや。急いで附け。シテ〵斯うも御座りませうか。アド〵何と。シテ〵鹿子斑にうつは白浪。アド吟ず。

アドへいかう出來た。シテへさうも御座らぬ。アドへ何かと言ふ内に山王へ著いた。シテへ誠に御參り著きなされました。アドへこれの前の鳥居で。一句持つて參らうと存ずる。シテへ一段とよう御座りましよ。アドへ山王の。シテへ山王の。アドへ前の鳥居に丹を塗りて。シテへ赤きは猿のつらぞをかしき。アドへしさり居れえ。シテへハア。アドへ憎い奴の。身共が飲まうとも言はぬ酒を。富士の神酒ぢやなどと言うて飲ませておいて。いろみ上戸の顔の赤いが。それ程をかしいか。シテへ是は迷惑で御座る。最前から五色な御句になさるゝに依つて。隨分附けて御座る。猿は山王の使者で御座れば。御猿殿と御顔の赤いことをこそ申せ。まあたく御前の御面の儀では御座らぬ。アドへ物を惜體に言ふ。つうとこちへ寄れ。シテへ是はあて何をなさるゝか。アドへむかうの人ごみすいきへ行き著かぬ先に。一句持つて參らうと存ずる。シテへ一段とよう御座らう。アドへはつと云ふ。シテへはつと云ふ。アドへはつと云ふ。シテへはつと云ふ。アドへ蹲にもおのれ怖ぢよかし。シテへ螻蛄腹立つれば。アドへ螻蛄腹立つれば。シテへ鶺噐ぶ。アドへ何でもない奴。しさりをれ。シテへハア。アドへエイ。シテへハア。ト云うて。止め入るなり。

附子

シテ　太郎冠者
アド　主人
小アド　次郎冠者
（入道共）

アドへこの邊りの者で御座る。今日は用事有つて山一つあなたへ參る。兩人の者を呼出し。申附けうと存ずる。ト言うて。太郎冠者を呼出す。又次郎冠者を呼出すも。常の如し。兩人共呼出す別の事でない。今日は用事有つて山一つあなたへ行く。よう留守をせい。シテへ畏まつては御座れども。兩人のうち一人はなあ次郎冠者。小アドへおゝ。二人へお供に參りませう。アドへ今日はさる子細有つて。兩人共供には連れぬ。さう心得。シテへ畏まつて御座る。アドへ暫くそれに待て。シテへはあ。アドへさて此のあなたに附子が有る。さう心得。シテへ左樣ならば兩人共。二人へお供に參りませう。アドへそちは何と聞いた。シテへ此のあなたに留守が有るとは仰せられぬか。アドへいやさうではない。附子と言うて大の毒が有る。あの方から吹く風に當りても。滅却する程の大毒ぢや。さう心得。小アドへ早速不審が御座る。それ程の大毒を。お前には何とてお持て扱ひなされまする。アドへそれは苦しうない呪文が有る。シテへそれは御尤もで御座る。ト言うて。暇乞常の如し。シテへ出られた。小アドへお出やつた。シテへ先づ下に居い。小アドへ心得た。シテへさて何と思ふぞ。何時もそちがお供に行けば。身共が留守をする。身共がお供に行けば。そちが留守をする。兩人共お留守をすると言ふは。珍らしい事ではないか。小アドへ何れためし少い事ぢや。シテへ今日はゆるりと咄さうぞ。小アドへそりや。シテへ何とした。小アドへ附子の方から風が吹いた。シテへそちは良い所へ氣が附いた。身共はうつかりとしてゐた。小アドへそちは油斷な者ぢやぞよ。シテへあの樣な物の側に居るが惡い。つゝとのいて咄さう。小アドへそれが良からう。シテへ先づ下に居い。小アドへ心得た。シテへ扨そちは。あの附子と言ふ物を見た事が有るか。小アドへ身共は終に見た事はない。シテへ身共も終に見ぬ。今日は幸ひお留守ぢや。そと見うか。小アドへあの大毒を。見うなどと言ふ事が有るものか。シテへでも是に氣の毒が有る。何れもが。や

い太郎冠者。そちの内に附子と言ふ物が有るが。どの樣な物ぢや。とお尋ねの時。お家に有りながら存ぜぬとは言はれまい。今日は幸ひお留守ぢや。そと見う。小アド〽ぢやと言うて。あの大毒な見うといふ事が有るものか。シテ〽それには良い仕樣が有る。小アド〽何とする。シテ〽あの方から吹く風にさへ當られば良いに依て。此方からも精を出して煽いで。その隙に一寸行て見て來う。シテ〽さう言はずとも煽いでくれ。小アド〽身共は同心でないぞよ。シテ〽さう言はずとも煽いでくれ。小アド〽煽ぐは煽がうが。氣味の惡い事ぢやぞよ。シテ〽煽げ／＼。小アド〽煽ぐぞ／＼。シテ〽煽げ／＼。小アド〽煽ぐぞ／＼。シテ〽そりや。小アド〽何とした。シテ〽先づ紐は解いた。そち行て蓋を取つて來い。小アド〽身共はあの樣な側へ行く事は嫌ぢや。シテ〽それならばまた身共が行く程に。煽いでくれ。小アド〽また行くか。煽げ／＼。煽ぐぞ／＼。舞臺ありく間。仕樣樣々あり。ロ傳。シテ〽そりや。小アド〽何とした。シテ〽先づ蓋を取つたは。生物ならば取つても出ようが。生物で無いやら。取つても出ぬは。小アド〽いや／＼。わざをする物は必ず默ると言ふ。油斷をするな。シテ〽ついでに見て來う。煽げ／＼。煽ぐぞ／＼。同前。シテ〽そりや。小アド〽何とした。シテ〽見たぞ／＼。何かは知らぬが。黒い物がどんみりと固まり合うた。先づはむまさうな物ぢや。小アド〽あの大毒をむまさうなと言ふ事が有るものか。シテ〽身共はあの附子を食うて見うと思ふが。何とであらう。小アド〽そちは氣が違ひはせぬか。シテ〽氣も違はぬが。附子にりようじられたやら。食ひたうなつた。行て食うて來う。小アド〽先づ待て／＼。シテ〽何と待てとは。小アド〽身共が居るからは。放す事ではないぞ。シテ〽さう言はずとも放してくれい。小アド〽ならぬぞ／＼。シテ〽放せ／＼。小アド〽ならぬぞ／＼。シテ〽名殘の袖を振切りて。附子のそばへぞ歩みゆく。ハア。小アド〽さればこそ滅却しをつた。やい。太郎冠者／＼。シテ〽誰ぢや。小アド〽次郎冠者ぢや。シテ〽砂糖ぢや。小アド〽何ぢや。シテ〽砂糖ぢや。小アド〽誠に砂糖ぢや。シテ〽先づ食うて見よ。あゝむまい事ぢや。之を食はすまいと思うて。附子ぢやの毒ぢやのとおしやつた。小アド〽誠に。之を食はすまいと思

うて。附子ぢやの毒ぢやのとおしやつた。シテ
へあゝむまい事ぢや。こりや口の放さるゝ事
ではない。小アドへそちばかり食はずとも。
身共にも食はせてくれ。シテへあゝ等分にせ
い／＼と 食い様様々有るべし。口伝。 シテへほ。皆食うた。
小アドへ身共も皆食うた。シテへほ。良い事な
めされた。小アドへ何と。シテへ身共ばかりに
食はせて置けば良い事な。汝が食うたに依つ
て皆になつた。身共は知らぬ。そちが良い様に
申上げい。小アドへいや／＼こゝな者が。身
共が措けと言ふものか。無理にと言うて紐
を解き。食ひ始めたは汝ではないか。身共は
知らぬ。そちよい様に申上げい。シテへあゝ
こりや／＼。これはざれ言ぢや。小アドへし
て言譯は何とする。シテへあのお掛物を破れ。
小アドへあのお掛物を破れば。言譯になるか。
シテへ成る程言譯になる。早や破れ。小アド
へ心得た。ざらり／＼。シテへほ。よい事を
召された。小アドへ何と。シテへあの附子はた
かが砂糖ぢやに依つて。今仰附けられても。
何程でも調ふ。又あのお掛物は牧溪(もつけい)和尚の墨
繪の觀音ぢやと言うて。御秘藏なさるゝ。お
掛物をあの樣に破つて。身共は知らぬ。其方(そなた)
良い様に申上げい。小アドへいやこゝな者が。

あれを破れば言譯になると言ふに依つて破つ
た。身共は知らぬ。そちが良い様に申上げい。
シテへあゝこりや／＼。これもざれ言ぢや。
小アドへさてざれ言な果さぬものぢや。して言
譯は何とする。シテへあの大天目を打割れ。
小アドへ又身共に割らして。迷惑させうぢや
な。シテへ此度は身共も手傳はう。小アドへそれ
ならば心得た。シテへさあ／＼。持て／＼。小
アドへ心得た。シテへ良いか。小アドへ良いぞ。
シテへぐわらり。小アドへちん數が多(お)うなつ
た。シテへ微塵になつた。小アドへして言譯は
何とする。シテへお歸りなされたれば泣け。
小アドへ泣いてゐれば言譯になるか。シテへ其
の後は身共に任せて置け。アドへ唯今戻つて
御座る。兩人共定めて待兼ねて居るで御座ら
う。戻つたぞ／＼。シテへそりやお歸りなさ
れた。泣け／＼。ト言うて泣く。 アドへ兩人共遠か
に落涙の體ぢや。先づ何とした。シテへ次郎
冠者申上げい。小アドへ太郎冠者申上げい。
アドへ先づ心もとない。何事ぢや。シテへされ
ばの事で御座る。大事のお留守ぢやに依つて。
眠るまいと存じて。次郎冠者と相撲を取つて
御座れば。次郎冠者は手取りなり。私の小股
を取つてこかさうと致したを。こけまいと存

じて。あのお掛物に取附きましたれば。あの
樣に破れました。ト言うて泣く。 アドへ祕藏の掛物
を破りをつた。小アドへかへつさまに。大天目
の上へほうど投げられましたれば。あの樣に
微塵になりました。ト言うて泣く。 アドへ大事の大
天目まで打割り居つた。己等生けて置く奴で
ない。シテへ數々お道具は損ひまする。とて
も生けては置かせられまい。附子なりとも喰
うて死なうと存じて。皆食べましたれども。な
ア次郎冠者。小アドへおゝ。二人へまだ死にま
せぬ。ト言うて泣く。 アドへ附子まで食ひ居つた。己
れら滅却し居らうぞ。シテへ一口食へど死な
れもせず。小アドへ二口食へどまだ死なず。
シテへ三口四口。小アドへ五口六口。二人へ十
口餘り皆に成る迄食うたれども。死なれぬい
のち目出度さよ。ふんばうかしらかたいの
ちや。アドへがつきめ／＼。小アドへあゝ御許
されませ／＼と ト言うて入る。常の如し。 シテへこれはい
かな事。身共一人になつた。何としたもので
あらう。アドへやいそこな奴。シテへあゝ御許
されませ／＼。ト言うて。追込め入るなり。

文相撲

シテ　大名
アド　太郎冠者
小アド　坂東方の者

（入道具）

シテ＼隠れもない大名。かやうに過は申せども。召使ふ者はただ一人。一人では使ひ足らぬに依つて。新參の者を大勢抱へうと存ずる。（大名呼出し。常の如し。） シテ＼汝を呼び出すは別の事でない。身も此の程の様に方々をすれば。その一人では使ひ足らぬに依つて。新參の者を大勢抱へうと存ずるが。何とてあらう。アド＼御意もなくば申上げうと存じて御座る。一段とよう御座りませう。シテ＼それならば。何人程抱へうぞ。アド＼それはお前の御分別次第で御座る。シテ＼なに分別次第。アド＼なか／＼。シテ＼分別次第といふは。身が儘といふ事か。アド＼左様で御座る。シテ＼それならば。せか／＼置かうよりは。一度にどつと八千人抱へう。アド＼これは夥しい人数で御座る。先づ八千人と申す人の置き所が御座りますまい。シテ＼それこそあの廣い野山にばら／＼と放いて置けいやい。アド＼これはむさとした事を仰せらるゝ。人が野山で育つものでは御座らぬ。これはもそつと御減しなされませ。シテ＼何ぢや減せといふか。アド＼左様で御座る。シテ＼それならばくわつと減して。二百人抱へう。アド＼減る事は減りましたが。それではまだ御堪忍が續きますまい。シテ＼なに堪忍。アド＼なか／＼。シテ＼堪忍。堪忍といふは物はみ物の事か。アド＼左様で御座る。シテ＼それこそ此の澤山な水を飲ませて置け。アド＼彌々むさとした事を仰せらるゝ。人が水ばかりで育つものでは御座らぬ。これはもそつとお減しなされませ。シテ＼何ぢや。まだ減せ。アド＼なか／＼。シテ＼それならば。くわつと減して二人抱へうか。アド＼ア、二人な。シテ＼汝ともに。アド＼すれば。召抱へさせらるゝ者は唯一人で御座るか。シテ＼其通りぢや。アド＼これは一段とよう御座りましよ。シテ＼汝は大儀ながら上下の街道へ往て。一人も一人からとて。藝のある利根さうな者を見すかして抱へて來い。アド＼其の段ならそつともお氣遣ひなされまするな。シテ＼何と行かうか。アド＼何がさて參りませう。シテ＼急いで往て頓て戻れ。アド＼ハア。シテ＼エイ。アド＼ハア。シテ＼エイ。アド＼ハア。これは如何な事。火急な事を仰付けられた。ぢやというて。行かずばなるまい。先づ急いで參らう。シカ／＼。誠に。唯今までは某一人で辛勞に御座つたれども。此度新參の者を抱へさせられたらば。大方の事は彼奴に云附けて。身共はちと樂を致さうと存ずる。何かといふうちに上下の街道へ來た。先づ此の所に暫く休らうて。似合はしい者も通らば。詞をかけて同道致さうと存ずる。（ト云うて。脇座へ行き待つなり。） 小アド＼これは坂東方に住居する者で御座る。奉公の望みあつて。上方へ上らうと存ずる。シカ／＼。若い時旅を致さねば。老いての物語がないと申すに依つて。ふと思ひ立つた事で御座る。アド＼いやあれへ一段の者が參つた。詞をかけう。なう／＼これ／＼。小アド＼此方の事で御座るか。アド＼成程和御寮の事ぢや。和御寮はどれからどれへお行きやる。小アド＼奉公の望みあつて。上方へ上る者で御座る。アド＼すれば抱へうものを。小アド＼おの其方がや。アド＼いや／＼身共ではない。身共が頼うだお方はさるお大名ぢや。此度新參の者を抱へさせらるゝに依つて。肝を煎つて奉公をさしてやらうといふ事ぢや。小アド

へどうぞ肝を煎つて。奉公をさして下され。アドへそれならば。今からでもおりやるか。小アドへ何時なりとも参りませう。アドへさあ〳〵おりやれ。小アドへ心得ました。アドへさてふと詞をかけたに。早速同心をしやつて。此の様な悦ばしい事はない。小アドへ袖の振合はせも他生の縁とやら申すが。これも深い縁でかな御座らう。アドへさて和御寮の國は何處ぢや。小アドへ坂東方で御座る。アドへ坂東方と聞けば奥ゆかしい。して何ぞ藝があるか。小アドへ藝と申しては御座らねども。弓鞠庖丁碁双六。馬の臥せ起しやつと参つたを致しまする。アドへあの和御寮一人してか。小アドへなか〳〵。アドへさて〳〵萬能に達した人ぢや。其の由を頼うだ人に申上げたらば。御満足なさるゝであらう。小アドへ此の上は其方を寄親殿と頼みまする。萬事宜しう引廻して下されい。アドへ其の段はそつとも氣遣ひなしやるな。小アドへして程は遠う御座るか。アドへいや何かといふうちに早や是ぢや。和御寮を同道した由を申上げう程に。暫くそれにお待ちあれ。小アドへ心得ました。ト云うて。戻つたを云ふ。大名出づる。シテへやれ〳〵骨折や。して新参の者を抱へて来たか。アドへ成る程抱へて参つて御座る。シテへ何處に置いた。アドへ御門前に待たせて置きました。シテへそれ大名といはうものを。アドへ成程お大名と申して御座る。シテへなに云うた。アドへハア。シテへそれは出来いた。總じて。初めあることは終り迄あるといふ事ぢや。彼奴が聞く様に過

を云はう程に。汝は大勢に答へ。アドへ畏まつて御座る。シテへやい〳〵。誰そ居るかやい。アドへハア。シテへ床几をくれい。アドへハア。シテへ床几〳〵。アドへハお床几。シテへ何と聞えたであらうか。アドへ御大音で御座つたに依つて。總て承りましたで御座らう。シテへあれへ往て云はうは。いま身が廣間へ出た。大名の事なれば。お目が参つたらば。早速奉公もすまうず。又お目が参らずば。五日も十日も逗留であらうなどと云うて。汝が分として深がらせ。新参の者をこれへ呼べ。アドへ畏まつて御座る。なう〳〵おいやるか。小アドへ是に居ます。アドへ今のお聲をお聞きあつたか。小アドへ成る程承つて御座る。お大名と見えて。大きなお聲で御座る。アドへこの邊りでの大名ぢや。さて今廣間へ出させられた。お大名の事なれば。お目が参つたらば早速奉公も濟まうず。又お目が参らずは。五日も十日も逗留であらう程に。さう心得さしめ。小アドへ何がさて奉公の習で御座る。そつとも苦しう御座らぬ。アドへ先づあれへお出やれ。

小アド〽心得ました。シテ〽やい〳〵。誰ぞ居るかやい。アド〽ハア。シテ〽此のうち奧から上つた五十疋の馬を。引出して湯洗ひさせ。アド〽ハア。シテ〽又若黨達に。唯居られうより。矢の根を磨かれいといへ。アド〽ハア。シテ〽今日はよい天氣ぢやな。アド〽よい天氣で御座る。シテ〽碁がよからう。アド〽ハア。シテ〽若い衆が鞠を召さるゝ。かゝりの掃除をして水を打てといへ。アド〽ハア。シテ〽エイ。アド〽ハア。新參の者。ト云うて。大名みる。小アド立つ。シテ〽彼奴か。アド〽左樣で御座る。シテ〽先づ利根さうな奴ぢや。アド〽左樣で御座る。シテ〽身共を見てついと立つたは出來したな。アド〽出來しました。シテ〽きやつが國は何處ぢや。アド〽坂東方と申します。シテ〽坂東方と聞けば奧ゆかしい。して何ぞ藝があるか。アド〽其儀も路次で尋ねて御座れば。弓鞠庖丁碁双六。馬の伏せ起しやつと參つたを致すと申しまする。シテ〽あの彼奴一人してか。アド〽左樣で御座る。シテ〽さて〳〵萬能に達した奴ぢやが。身が内に入らぬ藝がある。アド〽何れも御重寶かと存じまする。シテ〽はて馬も持たぬに馬の伏せ起し。何の役に立つものぢや。猫の伏せ起し。シイと云うて。アド

ト大名に目くばせする。シテ〽馬の伏せ起し。いち重寶ぢやな。アド〽御重寶で御座る。シテ〽中にも得た藝は。何ぢやというて尋ねて來い。アド〽畏まつて御座る。いやなう〳〵。中にも得た藝は何ぢやと御尋ねなさるゝ。小アド〽相撲を得て取ると仰せられて下され。アド〽心得た。相撲を得て取ると申します。シテ〽何ぢや相撲を取るといふか。アド〽左樣で御座る。シテ〽彌々身に生れ合うた奴ぢや。身共が相撲を好けば。きやつも相撲を好くといふか。アド〽左樣で御座る。シテ〽相撲を見る程に。あれへ出て取れといへ。アド〽畏まつて御座る。相撲を見る程に。あれへ出て取れと仰せらるる。小アド〽相手をお出しなされいと仰せられて下され。アド〽相手をお出しなされいと申しまする。シテ〽相手には及ばぬ。一人取れといへ。アド〽一人では勝負が知れますまい。シテ〽何れ勝負が知れまいなア。アド〽左樣で御座る。シテ〽誰と取らせたものであらう。アド〽誰がよう御座らうぞ。シテ〽誰彼といはうより汝取れ。アド〽私は終に相撲を取つた事は御座らぬ。シテ〽なに相撲を取つた事がない。アド〽左樣で御座る。シテ〽それならば。風呂をたく道金と取らせうか。アド〽

あれは年寄りまして。得取りますまい。シテ〽何れ膝が流れて。得取るまいなア。アド〽左樣で御座る。シテ〽相撲は見たし相手はなし。何としたものであらうぞ。いや言掛つた事ぢや。身が取らう。アド〽あのお前がお取りなされますか。シテ〽あれへ往て云はうは。相撲の者數多抱へさせられたれども。今日は方々へ使に遣して。一人も宿に居らぬ。さうあれば。手合せを見んため身共が取るが。相手になるかと云うて尋ねて來い。アド〽畏まつて御座る。ト云うて。シテの通りを云ふ。小アド〽相手には構ひませぬ。どなたなりとも取らうと仰せられて下され。アド〽心得た。ト云うて。小アドの通り云ふ。シテ〽あの身共とも取らうといふか。アド〽左樣で御座る。シテ〽ハテ身共に勝つて誰が扶持するものぢや。負くればなほの事。言掛つた事ぢや。身共が取らう。拵へをして是へ出よといへ。アド〽畏まつて御座る。シテ〽汝も是へ寄つて身拵へをさせ。アド〽畏まつて御座る。なう〳〵拵へをしてあれへお出やれ。ト云うて。シテの後へまはり。拵へをする。シテ〽身拵へがよくば。あれへ出よといへ。アド〽畏まつて御座る。シテの通り云ふ。小アド〽心得ました。シテ〽太郎冠者行司をせい。アド〽畏まつて御座る。ト云うて中へはひり。

左右を見て。おゝつと云うてとるなり。二人へイヤア。ト云うて。小アドまたきする。シテ目をまはす。アドかけつける。氣が附く。アドへ何となされました。シテへ誰ぢや。アドへ太郎冠者で御座る。シテへおなに太郎冠者ぢや。アドへ左樣で御座る。シテへ早い手をしなつた。やつと手合はせをすると否や。身共が鼻の先をパチ／＼とすると思うたれば。目がぐら／＼とした。今の手は何といふ手ぢやというて。尋ねて來い。小アドへ畏まつて御座る。ト云うて。シテの通りいふ。シテへ相撲の手は四十八手とは申せども。くだけば八十八手にも取りまする。唯今のは坂東方ではやる目隱しといふ手ぢやと仰せられて下され。アドへ心得た。小アドの通り云ふ。シテへなに目隱し。聞きなれぬ手ぢやなア。アドへ左樣で御座る。シテへそれいつぞや伯父ぢや人から相撲の本を下された。奥の違棚にある。取つて來い。アドへ畏まつて御座る。ト云うて。取りに行く。これて御座るか。シテへこれ／＼。常は入らぬが。此の樣な時は。書いた物は重寶ぢやなア。アドへ御重寶で御座る。シテへ何々相撲の　ト引く。やい太郎冠者。これは何ぢや。アドへさて何と申す事で御座らうぞ。シテへ汝も讀めぬか。アドへ讀めませぬ。シテへあゝ眞で書いてあるに依つて讀めぬなア。アドへ四角い字は讀めませぬ。シテへ相撲の。ト引いて。書といふ樣な事かいなア。アドへ定めて其の樣な事で御座りませう。シテへ先づ書の事と。一つ目隱し。ちやう／＼と打つべし。こりやある手ぢや。アドへ御座りまする。シテへ彼奴は初手を食はしなつた。アドへ早い事を致しました。シテへ其の時顏を引くべし。今の時顏を引けば。身共が勝になるのであつた。アドへ殘り多い事で御座る。シテへ殘念なした。右を取つて左へ廻し。左へ取つて右へ廻し。所を引つぱづしさまに上る手。ずでいどう。もう一番取らうといへ。アドへ畏まつて御座る。もう一番取らうと仰せらるゝ。小アドへ心得ました。シテへ太郎冠者行司をせい。アドへ畏まつて御座る。行司する。二人へイヤア／＼。ト云うて。またきしに行くうち。握りこぶしではる。尤も相撲三度飛違ひ。シテへおてつ參つたの。勝つたぞ／＼。アドへお出來しなされました／＼。小アドへ太郎冠者どの／＼。アドへ何事ぢや。小アドへ相撲の手は數多存じて居りまするが。今の樣にこぶしを以て張らせらるゝは。何といふ手ぢや。お尋ね下され。アドへ心得た。小アドの通り云ふ。シテへ不審尤もぢや。相撲の手は四十八手とは申せども。くだけば百手二百手にも取る。今のは上方で流行る張り相撲。こつつもはつつも取りたい樣に取れといへ。アドへ畏まつて御座る。シテへなるまいと云へ／＼。アドへハア。今のを聞かせられたか。小アドへ成る程承りました。もう一番取らうと仰せられて下され。アドへ心得た。ト小アドの通り云ふ。シテへ何ぢや。また取らうといふか。アドへ左樣で御座る。シテへ彼奴は定業があをつと見えた。今度取つたらば。空は雲の腹まで打上げうず。地へは三尺打込まうず。すれば彼奴が命が有るまい。國許へ言ひ置く事があらば言へ。届けて取らせうといへ。アドへハア。シテへ同じくはよしにせいといへ。アドへ畏まつて御座る。今のをお聞きやつたか。小アドへ成る程承りました。國許を出るからは。其の覺悟で御座る。あはれ賴うだ御方のお手にかゝつて死すれば本望で御座る。是非ともう一番取らうと仰せられて下され。アドへ心得た。小アドの通り云ふ。シテへ何ぢや。まだ取らうと云ふか。アドへなか／＼。シテへあゝ彼奴は憤りの強い奴ぢや。これ言懸かつた事ぢや。取らずばなるまい。これへ出よといへ。アドへ畏まつて御座る。又あれへお出やれ。小アドへ心得ました。アドへ又私が行司を致しませう。シテへ又汝行司をせい。

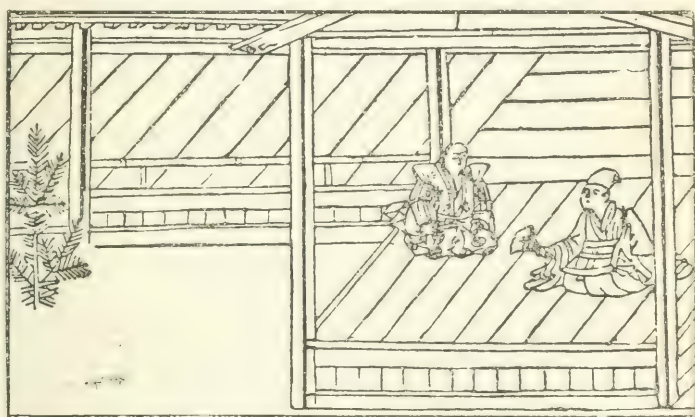
ト云うて。行司する。相撲三役目。シテ拳にて張りに行く。小アド左の手を持ち。引廻し。小股をとり。轉がさんとする時。シテ先づ待て／＼と云うて。腰より相撲の書を取出し。何々相撲のト云ふ時。小アドおてつ參つたト云うて。シテを打こがし。勝つたぞ／＼と云うて入るなり。

シテへ相撲の書何の役に立たぬ。やいそこな奴。アドへハア。シテへ己れはそこに何をしてゐる。アドへ私は太郎冠者で御座る。シテへ取つたぞ。アドへこれは何となさる。イヤア／＼ト云うて。小アドに同じ。シテへ勝つたぞ／＼。ト云うて入るなり。アド後より入るなり。

布施無經（ふせないきやう）

シテ　住持
アド　施主
（入道具）

シテへ當庵の住持で御座る。毎月定まつてゝるお檀那へ、御祈祷に參る。今日も參らうと存ずる。シカ／＼。誠に。世には信心なお方が御座る。毎月定まつて不退轉の御祈祷をなさるゝに依つて。其身のお事は申すに及ばず。御一門までも。次第／＼に御繁昌なさるゝ事で御座る。何かと云ふうちにこれぢや。ト云うて。案内を乞ふ。出るも。常の如し。アドへえい御坊樣。これは御苦勞に存じまする。シテへ毎月の事で御座るに依つて、お使御座なうても參らうに。殊に夜前は御自身のお出で。返すがへす忝う御座る。アドへわざと參つたでは御座らぬ。御近所まで用事が御座つて。序でながらで御座る。シテへいかな／＼、左樣では御座るまい。そなたの樣な御叮嚀なお方は無いぢやまで。いざ通りませうか。アドへつつとお通りなされませ。シテへ心得ました。扨も／＼綺麗な事かな。いつ參つて見ましても。これの掃除の樣な綺麗な事は御座らぬ。總じて俗家の諺にも。綺麗な所を見ては。寺の樣なとおしやりまするが。これはなか／＼寺恥しいお掃除で御座る。アドへ隨分とは存じますれども。人を持ちませぬに依つて。不掃除に御座る。シテへそれはそなたの御卑下で御座る。いざ御祈祷を始めませう。アドへ御苦勞ながらお始めなされて下され。シテ扇をひろげ。置き。珠數すり。經を下に置き。シテへ妙法蓮華經。ト讀みさし。シテへ此の間はお客があるとあつて。花を取りに遣された。折節庭前に何が咲きましたに依つて。一枝進じましたが。お役に立ちましたか。アドへ誠に。先日は内客を得まして。お寺へ花を御無心申して御座れば。珍しい花を下されて。ざつと客をもてなして御座る。また經をよむ。シテへいや此の中はお内儀が參らせられてのう。アドへ誠に。此の間は女共が參詣致しまして。歸つて悦うで居りました。シテへいかな／＼。寺のざうさとある段はそつとも御座らいで。結句お持たせを寺中へひろめましたれば。小僧共が悦びました。アドへ是は結構な御挨拶で御座る。また經を讀む。シテへこれ／＼。毎月の事で御座るに依つて。さ樣に御聽聞なうても苦しう御座らぬ。御用もあらば勝手へ御座れ。アドへ左樣ならばちと内客を得ました程に。自由ながら勝手へ參じまする。うなづき／＼經を讀み。さて囘向し。咳拂。アドへいや御坊樣がお仕舞ひなされたさうな。お仕舞ひなされましたか。シテへ漸うと仕舞ひました。アドへ是は御苦勞に存じまする。シテへ毎月の事で御座るに。別して今朝はてう菜でお齋をゆるりと下されました。アドへ内客に取紛れまして。何のお構ひも申しませなんだ。シテへさて。もかう參りませう。アドへ早やお出でなされまするか。シテへはてお齋は下さるゝ。お茶迄も下されて。別に御用も御座るまいに依つて。かう參らうかと申す事で御座る。アドへようお出でなされました。シテへはお異な事の。いつもお齋の後で鳥目十疋のお布施を

せらるゝ。けふは何の沙汰が無い。但し内客に取紛れて忘れられたか。こし當月一度など取らぬ分は苦しうないが。此の樣な事は重ねての例になりたがる。氣を附けて取つて歸らう。申しお檀那御座りまするか。アドへ御坊樣のお聲ぢや。えい御坊樣。何としてお歸りなされました。シテへ今朝これへ參つてお斷り申さいで叶はぬ事が御座つたに。はたと忘れまして。それを申しに歸りました。アドへそれは何事で御座る。シテへ先づ夜前は御自身のお出で。天晴れ今朝は未明から參らうと。宵からきつとたく〳〵で居りました所で。俄に寺中に寄合が御座つて。夜更くるまで居りましたれば。今朝は臥せり過ぐいて御座る。この臥せり過ぐいた段を。參つてお斷りを申さうと存じて。はたと忘れましたに依つて。申しに歸りました。アドへ扨々それは御念の入つた事で御座る。いや今朝はいつもよりはお早かつたかと存じまする。シテへいかな〳〵。どこにか出家があの樣に朝臥せりなするなどと。思召す所もお恥かしい。愚僧はこのお斷りに歸りました。もかう參りまする。アドへようお出でなされました。シテへさらば。是でもまだ氣が附かぬさうな。何としたものであらう。イヤ教化して取らう。お檀那御座りまするか。アドへ御坊樣の聲ぢや。えい御坊樣。

またお歸りなされましたか。シテへ今度はこなた事を思出して戻りました。アドへそれは何で御座る。シテへ先づ愚僧が檀那方多い中に。こなたの樣な御信心なお方は無いぢやまで。いつぞは參つて一句の教化をも申して聞けうと存ずれども。其の折も御座らぬ。今日はまた庵室へ歸つてさのみ用事も無いに依つて。若しお望みならば一句申して聞けませうか。但しおいやか。アドへそれは忝う御座る。椽々の望で御座る。どうぞお聞かせなされて下され。シテへなにお聞きなされう。アドへはあ。シテへサヽさうで御座らうとも。そなたの樣な御信心なお方はないぢやまで。それならば立ちながら申さう。受に物とした事が御座る。身命財を擲つて傳法せんと欲せば。供佛施僧捨身を專らとせよ。雲となり雨となり。不晴々々の時。今朝物云はず別離の上。と云ふ事があるが。御存じで御座るか。アドへいつ存じませぬ。シテへサ之をあら〳〵講釋致すに。先づ身命財。しんは身。命はいのち。財は寶。此の三つを擲つて傳法せんと欲せばとは。此の法をよく傳へんと欲せばと云ふ事。供佛は佛を供養し。堂を建立する等の事。施僧とは。我等如きの貧僧に物を施すを施僧と申

し。捨身とは。身を捨つると書く。身を捨つると云うて。あながち海河山へ身を捨つるでは無い。法の爲に身を捨つるを捨身と申す。雲となり雨となるとは。定まり定まらざる事。不晴々の時。いやこれ。これが肝心の所ぢや。よう聞かつしやれ。アドへはあ。シテへ先づふせいとは晴れやらざる時。とかく晴れやらぬ時ぢやまで。アドへはあ。シテへ今朝とは今のあした。別離とは別れ離るゝ。例へばそなたと愚僧が斯様に申し談ずれども。庵室へ歸れば。早やこゝは別離では御座らぬか。アドへ左様で御座る。シテへサこゝを昔の戀の歌に。逢ふ時は。語り盡すと思へども。別れになれば殘る言の葉。などゝ詠み置かれた。あの人に逢うたらば。これを云はうものを。語らうものを。やらうものを。おませうものをと思へども。時に依つて失念せいで叶はぬ事があるに依つて。よう思案をなされて。あるべい物はやり。とるべい物はとつて取つたがよう御座る。アドへ左様で御座る。シテへ左様で御座るとはそなた合點が行きましたか。アドへ成る程合點致して御座る。シテへ何れそなたはなかなかのお人でないに依つて。これ程の事の合點の行かぬと云ふ事はあるまいが。

さりながら物はよう思案をして見たがよい。あの人があの様に云はるゝは。俺は何も忘れた事は無いかと。よう思案をなされた時。さればこそ是を忘れた。是は最前やる筈であつた物を。今は出し後れになつてやられまい。來月ふされてなりともやらうと思召す事か。こなたの身の上にあるまい事でないぞや。アドへありさうな事で御座る。シテへあらう事の。アドへはあ。シテへサゝそれでも大事ないが。また相手の氣にもなつて見たがよい。これはいつも呉れらるゝに。けふに限つて呉れられぬは。但し今から呉れまいと云ふ事か。とやあるかくやあらんと。無量の罪を作ります。すれば自他の爲に益がないに依つて。よう思案をなされて。思ひ出しさへなされたらば。前も後も顧みず。さらりとはれやつて。事の埒を明けさつしやれと云ふ事ぢや。アドへ左様で御座る。シテへあゝ氣の毒な。左様で御座る〳〵と。こなたに合點が行きましたか。アドへ成る程合點致しました。シテへいや〳〵。まだ合點のいた顔でない。先づ人間は慾に離れたがよい。慾ほど淺ましいものは御座らぬ。慾がなければ苦がない。苦がない所を寂光淨土と佛も説き置かれた。アドへ左様で御座る。

シテへはて氣の毒な。左様で御座る〳〵と。これはつい合點の行く事ぢやが。アドへ成る程合點致して御座る。シテへ合點が行きましたか。アドへ左様で御座る。シテへはて合點がいた〳〵と云はつしやれば。愚僧ぢやと云うて何としませう。此の様な事は何時迄云うても盡きる事では御座らぬ。今日の教化はこれまで。殘る所は庵室でなりとも申して聞けませう。愚僧はもかう行きまする。アドへまうしお坊様。ちと御酒でも上りませぬか。シテへ何ぢやの酒を飲め。アドへはあ。シテへこれ誰殿。愚僧が酒を飲まぬ事は。そなたよう知つてゐるでないか。その飲まぬ酒の所へ氣を附けうよりは。不晴(ぶせい)の時を思ひ出さつしやれ。アドへ畏まつて御座る。シテへもかう行きます。アドへようお出でなされました。シテへいや合點がいた〳〵と。何が合點がいた。箸を持つてくゝむる様に云へども。合點召されぬ。あの人はあの様な文盲な人では無かつたが。但し今からくれまいと云ふ事かぢや迄。あゝ淺ましきかなや。うけがひぬればこんり致すうけがはざれば長く生死に落つる。何ぞやあの人のくるゝ布施もつは十疋。十疋の布施物を眞中より押切つて。大海へさらり〳〵とま

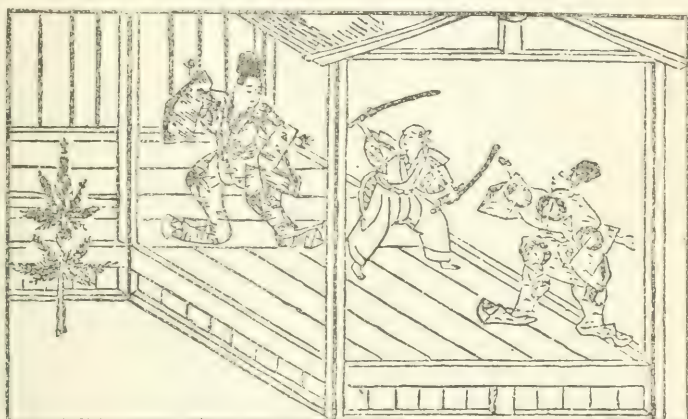
いたと思うて、有もかくも無もなうして歸らうずるものを。よしない事にほだされて、最前から二度三度戻つた事の腹立ちさよ。よし此の上は幾ら呼び戻すとも。戻りはせまいし。又呼ぶ謂もないが。氣の毒な事ぢや。いつも十疋の布施物を。あなたへ入ればこなたが輕し。こなたへ入ればあなたが輕し。互ひの輕重を讓り合はせて戻つてこそ心面白けれ。今日は何ぞや。雨の袖は蟬の羽の樣な。これは何とぞ取り樣のありさうな事ぢやが。いやさうぢや。方便を以て取らう。それ〳〵。何が文盲な人に經釋を引いて、云うて聞かすに依つて。合點召されぬ筈ぢや。よもやこれで合點の行かぬ事はあるまい。ト云うて。袈裟懷中する。はて異な事の。たつた今まであつたが。どれへいた事ぢや。アドヘ座敷に人音がする。誰ぢや知らぬまで。えい御坊樣まだお歸りなされませぬか。シテヘちと物が見えませぬ。アドヘ何で御座りまするぞ。シテヘ愚僧は今朝これへ參つた時。袈裟を掛けて居ました。アドヘ成る程お袈裟が御座りました。シテヘそれを今路次で見ますれば。御座らぬに依つて。若し御座敷に取落として參つたかと存じて。見に戻りました。アドヘそれは御座敷を掃除致いた者が存じて居ませう。やい〳〵。御坊樣のお袈裟は知らぬか。シテヘこれ〳〵、扨〳〵そなたは物を聲高に云ふ人ぢや。どこにお出家お袈裟を落したなどと。人が聞いて外聞も宜しうない。隱れもない古い何色の袈裟で御座る。それについて鼠と云ふは。惡い事をしまする。烏目ならば十疋ばかり。あなたこなた通る程穴を喰ひあけました。それを小僧共に申附けて。ふせ縫ひに縫はせて置きました。無うても苦しう御座らぬ。あつたらば見て置いて下されい。愚僧はかう行きまする。アドヘまうし御坊樣。シテヘやあ。アドヘ暫く〳〵お待ちなされい〳〵と云ふに。シテヘ何ぞ御用が御座るか。アドヘちと用事が御座る。暫くお待ちなされて下され。シテヘ心得ました。アドヘこれはいかな事。最前からあの御出家が二度三度歸らるゝを何事ぢやと存じたれば。いつもお齋の後で烏目十疋のお布施を致す。今日は內客に取紛れて。はたと失念致したれば。氣を附けに戻らるゝと見えた。これはやらずはなるまい。シテ立聞きして居る。シテヘ漸うと氣が附いたさうな。シテ獨言を小聲にす。アドヘまうし御坊樣。御坊樣。まうし御坊樣。シテヘやあ。アドヘ面目もない事が御座る。シテヘ何が面目ないぞ。アドヘいつもお齋の後で烏目十疋のお布施を致す。今日は內客に取紛れてはたと失念致して御座る。これはいつもの御布施で御座る。シテヘ何がどうぢやと云はつしやる。アドヘいやお布施な。シテヘ何ぢやお布施な。アドヘはあ。シテヘはお最前御用がありましたと仰せられたは。このお布施の事で御座るか。アドヘ左樣で御座る。シアヘ扨も〳〵輕忽千萬な。私はまた何の御用ぢやとこそ存じたれ。毎月下さるゝに。今日に限つて下されぬと云うて。それが何で御座る。その樣な賤いお心入れならば以來師檀の契約離るならば。いかな〳〵。思ひもよらぬ事で御座る。アドヘまうし〳〵。毎月上げまするに。當月に限つて上げませいでは。何とやら心にかゝつて惡う御座る。これはどうぞお請けなされて下され。シテヘ愛に物とした事が御座る。こなたに限つてさうは思召すまいが。最前からあの坊主は二度戻つたは。若しこの布施ばし取りに戻つたかなどと。思召す段もお恥かしい。又折も御座らう。先づ今日はお暇申しませう。アドヘまうし〳〵。何しに左樣に存じませう。これはどうぞお取りなされて下されませ。シテヘそれならば物としませう。アドヘ何とて御座る。

シテ〽先づ今日は預けて置きまして、来月ふされてなりとも申請けませう。先づ今日はお暇申しませう。アド〽それならば慮外ながら懐へ入れませう。シテ〽いや。それならば手へ下され。アド〽まうし／＼御坊様。これはお前のお袈裟では御座りませぬか。シテ〽どれ／＼。誠にこれは愚僧が袈裟で御座る。これに就いて目出度い事を思ひ出しました。アド〽それは何で御座る。シテ〽総じて御富貴のお家には、無い物も出ると申すが、お布施が出ましたれば、袈裟までが出ました。アド〽ふうお出でなされました。シテ〽南無妙法蓮華経。（ト六う一〇 留め 二八ろたい〇）

二人大名（ふたりだいみやう）

シテ　大名
アド　大名
小アド　道行人
（入道具）

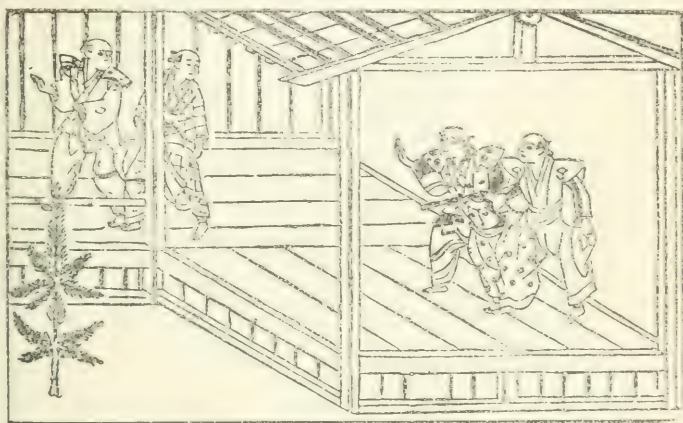
シテ〽隠れもない大名。今日は野遊びに参らうと存ずる。久安に心易う致す人が御座る。兼て約束で御座る。誘引致さうと存ずる。シカ／＼。何と在宿致さるればよいが。常に外に餘り出ぬ人で御座る。大方在宿であらうと存ずる。是ぢや。（ト六う一案内乞ふ お請る〇 如常〇）今日は野遊びに参らうと存じまするが、兼ての御契約故誘ひに参りました。何とおいでなされうか。アド〽幸ひ隙で居まする。成程お供申しませう。シテ〽それならば。さあ／＼御座れ。アド〽心得ました。シテ〽今日は内の者共を方々へ遣して。自身太刀を持つて参る事で御座る。アド〽それならば最前仰せられいで。身共が家来に持たせませうものを。シテ〽いや苦しう御座らぬ。暫う参る内に似合はしい者も通らば、持たせませう。アド〽何れ邊で参るで御座らう。シテ〽何かと申す内に野に出ました。アド〽誠に野で御座る。シテ〽何と思召す。春野の景色は青々として面白う御座る。アド〽仰せの通り、はや気がはれまして、面白う御座る。シテ〽暫く此所に休らうて参りませう。アド〽一段とよう御座らう。小アド〽急の使に参る者で御座る。シカ／＼。真に主命なれば是非に及ばぬ事なれども、毎日／＼方々をありく事で御座る。何卒奉公をやめて、楽な事がしたいものぢや。シテ〽一段の者が参る。此者に持たせて参らう。これ／＼。小アド〽此方の事で御座るか。シテ〽是はどれからどれへお行きやるぞ。小アド〽山一つあなたへ参る者で御座る。シテ〽それならば。此の野外れ迄同道致さう。小アド〽いや各様は御仁體で御座る。お連には似合ひませぬ。殊に主人の使に急いで参る者で御座る。お先へ参りませう。シテ〽これ／＼と連には似合うたもあり。また似合はぬもあるものぢや。暫くの内連になつてたもれ。小アド〽それならばお供仕りませう。シテ〽それは過分な。何とお行きやるまいか。小アド〽何が扨おいでなされませ。シテ〽さあ／＼おいでなされい。アド〽心得ました。シテ〽ふと言葉を掛けたに早速同心めされて満足致す事ぢや。小アド〽お斷りを申せども、是非と仰せらるゝによつて、お供致す事で御座る。シテ〽扨そなたへちと無心がある。聞いておくれやるまいか。小アド〽私に似合ひました御用ならば、承りませう。シテ〽成程似合うた事ぢや。聞いておくれやれ。小アド〽さやうならば承りませう。シテ〽無心を云はうと云へば、聞いて呉れうとあつて満足致す。まづ一禮を申す。小アド〽是は御用も承らぬ先に御禮と御座つて迷惑致す。さあ御用を仰付けられませ。シテ〽無心といへば別儀でない。お見やる通り自

自太刀を持つた。此の太刀を持つて貰ひたいと云ふ事ぢや。 小アドへ畏まつては御座れども、さうの結構なお太刀はつひに見ました事も御座らず。さりながら持ち様も存じませぬ。是は御許されませ。 シテへ結構なと申せば迷惑致す。麁相な太刀ぢや程に持つてお呉れやれ。 小アドへどう御座りませうとも御ゆるされませ。 シテへ扨は諸侯に一禮まで云はせておいて。しかと持たぬか。ト云うて一〇太刀に手をかくる。アドとめる。 小アドへ先づお待ちなされませ。 シテへ何と待てとは。 小アドへ成程持ちませう。 シテへいやお持ちやるまいものを。 小アドへいや。持ちませう。 アドへ持たうと申しまする。 シテへ是はざれ事ぢや。氣に掛けずとも持つてお呉れやれ。 小アドへお前のおざれ事にはいおざれ事で御座る。 シテへ迚もの事に右に持つてお呉れやれ。 小アドへお太刀は左に持たぬもので御座るか。 シテへいや／＼、自身の太刀は左に持つ。主の太刀は右に持つものぢや。右に持つてお呉れやれ。 小アドへ私はお前の内の者では御座らぬ。 シテへ内の者ではなけれども。頼む上からぢや。持つてお呉れやれ。 小アドへそれならば畏まつて御座る。是でよう御座るか。 シテへ一段と持ちぶりが上つておりやるよ。 小アドへ此上は路次でお近附にお會ひなされまいものでも御座らぬ。私を内の者の様に呼ばせられい。答へませう。 シテへそれは近頃過分な。いざ稽古の爲ちと呼うでみませう。 アドへよう御座らう。 シテへ身共等が使ふ者を太郎冠者といふ。太郎冠者と云うて呼ばう。答へてお呉れ。 小アドへ畏まつて御座る。 シテへそなたも呼ばせられい。 アドへ心得ました。 シテへやい／＼太郎冠者。 小アドうける。 二人へ來るか／＼。 アドへ引ついて來い／＼。 二人笑ふ。 小アドへ扨々憎い事かな。きやつらをちとおじさう。ト云うて一〇肩ぬぐ。 シテへ扨々幸ひの者に出會ひました。 アドへよい者を連れさせられた。 小アドへがつきめ。やらぬ。ト云うて〇太刀を抜いて追ふ。 シテへハテざれ事をするな。 小アドへざれ事ではない。身共も似合ふ主を持つた者ぢやに、最前からなぶつたがよいか／＼。是がよいか、二人共に切下げてやらう。 シテへアヽ先づ待て／＼。 アドへ太刀を持たせずともおかれいで。私持ちませう。 シテへ何れ持つて貰ふによつてぢや、こちへおこさしめ。 小アドへ何のおこせとは、兩人共に差いてゐる腰の物をこちへおこせ。 シテへ侍の一腰を放す事はならぬ。 小アドへおこさずば一討にするぞ。 アドへやらせられい。 シテへ是は迷惑ぢや。ニイりや。ト云うて〇刀の柄の方を持つて出す〇 小アドへ柄の

方を取直しておこせ。シテへやり様が氣に入らずばおかう迄よ。小アドへおこさぬか。シテへやるわいやい〳〵。ト云うて。小さ刀ぬきて渡す。小アドへ汝もおこせ。アドへやらうと思うて。最前から拵へておいた。小アドへさうもおりやるまい。兩人ともに。着てゐる小袖上下をぬいでおこせ。シテへこれでは見苦しい。是はゆるしてくれい。アドへ命さへ助くる事ならば。脱いでやらせられい。シテへそなたが心易う云はつしやるによつて。勝つにのつてあの様な事を云ひまする。アドへても切らうと云ひますると。小アドへおこさぬか〳〵。二人へやる〳〵。ト云うて。二人とも素襖熨斗目ぬきてやる。小アドへ扨々をかしい體ぢや。其儘犬のつくばうたやうな。シテへ愛なやつは。諸侯を畜生にするか。兩人それへ出て。犬の喰ひやう眞似をして見せい。シテへ召されずば爲に惡からう。アドへハテするわいやい〳〵。さあ〳〵出させられい。シテへ是は迷惑な事ぢや。犬の喰ひやう眞似をしたらば。太刀を返すか。小アドへ先づして見せい。二人へさあ〳〵返せ〳〵。犬の喰合ふ眞似をする。小アドへ何の返せ。汝等が着てゐる烏帽子は鶏のとさかに似た。鶏の蹴合ふ眞似をせい。シテへ鶏の眞似をしたらば。皆戻すか。小アドへ先づせい。二人扇をひらいて。鶏の蹴合ふ眞似をする。小アド笑ふ。二人へ返せ〳〵。小アドへまだある。今度は京の町にはやるおきやがり小法師の眞似をせい。シテへ仕様を知らぬ。教へて呉れい。小アドへ云うて聞かせう。京に〳〵はやる。おきやがり小法師。殿だに見れば〳〵。つい轉ぶ。合點か。合點ぢや。合點〳〵〳〵ぢやと。浮きに浮いて面白うして見せい。シテへむつかしい事ぢや。覺えさせられたか。アドへ先づしてみませう。二人繰返し踊る。仕様あり。小アド笑ふ。三べん程ありて。小アドへ先づ待て。最前から色々の事をすれども。返す事はならぬ。ト云うて。迯げて入る。二人へ横着者。やるまいぞ〳〵。ト云うて。追込み入るなり。

二人袴（ふたりばかま）

シテ　聟
アド　舅
小アド　太郎冠者
親
（入道具）

アドへこの邊りの者で御座る。今日は最上吉日なれば。聟がわする筈ぢや。太郎冠者を呼出し申付くる事がある。常の如し。今日は最上吉日なれば聟が見ゆる筈ぢや。云付けた物は用意したか。小アドへ成程悉く用意致して御座る。アドへ見えたらば此方に知らせ。小アドへ畏まつて御座る。常の如くつめる。シテへ舅に可愛がらるゝ花聟で御座る。今日は最上吉日なれば。聟入を致さうと存じて。方々で才覺して。先づ是程迄には出立つて御座る。先づ親共を呼出し相談せねばならぬ事がある。申し父様。オヤへ兒の聲ぢや。エイ何事でおりやる。シテへ今日は最上吉日で。いよ〳〵と申して。舅殿から人が參りましたに依つて。追付け參りまする。オヤへ誠に今日は最上吉日ぢや。先づ以て目出たうこそあれ。是は綺麗な出立ちでおりやる。シテへ何とよう御座るか。オヤへいつかど男を見直しておりやる。シテへ扨初めて行く事で御座るに依つて。いかう參りにくう御座る。オヤへ又むさとした事をおしやる。よそ外ではなし。舅の方へ聟入するが何の恥しい事がある。シテへ道でも人が指差しをせうかと思うて。いかう恥しう御座る。オヤへそれならば。身共が舅の表まで送つてやらう。シテへそれは忝う御座る。道の間送つて下されい。オヤへいざ行かしめ。シカ〳〵。シテへよそ外ではなしと

仰せらるれども。初めて行く事ぢやに依つて。聟殿の内は。然も頃も目ばかりぎろ〳〵とせうと思へば。殊の外恥しう御座る。オヤへわけもない事をおしやる。片輪には生み付けてはおかず。何方へ出したと云うて。おぢ恐るゝ事にない。のし切つて挨拶なされ。シテへ何かと云ふ内に是で御座る。オヤへ先づ袴を着さしめ。シテへ私は終に袴を着た事が御座らぬ。オヤへ誠に。そなたには未だ袴を着せた事がない。手傳うて着せてやらう。袴の着やうも覺えておかしめ。先づお出しやれ。シテへ是は長い物で御座る。オヤへ是は長袴と云うて。此の樣な祝儀の時に着る物でおりやる。ト云うて二つの袴に一つ手傳うて着せる。オヤへさて身共は行くぞ。シテへ迚もの事に。もそつと待つて下されい。オヤへ何も用はあるまいが。シテへ便りなうて惡う御座る程に。暫く居て下されい。オヤへ氣の弱い人ぢや。先づ案内をさしめ。シテ案内を乞ふ。出るも常の如し。シテへ汝は是の者か。小アドへ成程是の太郎冠者で御座る。シテへ聟が參つたとおしやれ。小アドへその由申しませう。暫くお待ちなされませ。シテへ心得た。小アドへ聟殿のお出でゝ御座る。アドへかうお通りなされと云へ。小アドへ畏まつて御座る。かう御通りなされませ。シテへ心得た。不案内に御座る。アドへ初對面で御座る。シテへ早々參る

筈な。何かと遲なはつて御座る。アドへ聟殿にはでお暇なしと承つて御座るに。今日のお出で忝う御座る。太郎冠者。御供の衆があらう。勝手へ通せ。小アドへお供の衆は見えませぬが。表には親御樣が御座りまする。シテへいや。親共では御座らぬ。あれは雇うて參つた者で御座る。アドへそちは見知つて居るか。小アドへ成程よう存じて居りまする。アドへ早うこちへ通しませい。小アドへ畏まつて御座る。シテへこれ〳〵。さりとてはあれは親共では御座らぬ。雇うて參つた者で御座る。小アドへいや私がよう存じて居りまする。シテへ先づお待ちやれ。私が呼うで參りませう。アドへ早う通しまさせられい。シテへ申し。氣の毒な事が御座る。オヤへ何事ぢや。シテへお前な太郎冠者が見知つて居ると申して。是非通らせられいとの事で御座る。出させられずばなりますまい。オヤへ是は迷惑ぢや。それぢやに依つて。最前歸らうと云ふに。そなたが何の彼のとおしやるに依つてぢや。シテへでも見知つて居れば。せう事が御座らぬ。アドへ太郎冠者。親御樣に早うお通りなされと云へ。小アドへ畏まつて御座る。親御樣に。あれへお通りなされと申しまする。オヤへ私

はこれへ参る者では御座らぬ。小アドへ私がよう存じて居りまする。ひらにお通りなされませ。シテへあの様に申しまする。オヤへそれならば。追付け出ませうとおしやれ。小アドへ畏まつて御座る。是へお出でなされまする。オヤへどれ。其袴をこちへおこさしめ。シテへ心得ました。オヤへ最前の様に着せてたもれ。とシカ〳〵云うて。袴着せる。オヤへそれならば出て來う。シテへ出させられい。オヤへ不案内に御座る。アドへやれ〳〵。ようこそお出でなされたれ。最前から何故に通らせられぬ。オヤへいや今日は。御近邊へちと用事があつて參つて御座れば。御門前でふと悴に逢ひまして。一つ二つ申す内に。太郎冠者が見付けられて御座る。改めて參らうと存じて。それ故お辭儀を致した事で御座る。アドへ此方へも改めて申入れる筈で御座るに。何かと延引致した。太郎冠者。聟殿が立たせられた。急いで呼びませい。小アドへ畏まつて御座る。オヤへイヤこれ太郎冠者。悴は宿許から用事を申越して。それを訓へて居りまする。私が呼うで參りませう。アドへ太郎冠者を遣されませ。オヤへさあそなたにお出やれとおしやる。シテへ私で御座るか。オヤへ是を着てお出やれ。シテへ是は忙しい事で御座る。ト云うて。又袴を着る。着せて。オヤへ身共はもう歸つたとなりともおしやれ。シテへ心得ました。アドへ最前からどれへお出でなされた。シテへ宿からちと用を申して參つて。それを談じて居りました。アドへ是はいかな事。親御樣は又どれへやらお出でなされた。シテへ親共はもう歸りました。アドへ是はいかな事。太郎冠者。呼びまして來い。小アドへ畏まつて御座る。シテへこれ〳〵太郎冠者。先づ待つて呉れ。私がようで參りませう。アドへ太郎冠者を遣されませ。シテへいや私がようで參りませう。申し〳〵。又お前に出よとおしやりまする。オヤへ又か。何故に歸つたとおしやらぬ。この内に。その袴をおこさしめ。アドへやい太郎冠者。表へいて。御兩人一緒に揃うてお出なされいと云へ。小アドへ畏まつて御座る。御兩人一緒にお揃ひなされて。お出なされと申されまする。シテへ兩人一緒か。何としませう。オヤへ先づ心得たとおしやれ。小アドへ畏まつて御座る。是へお出なされまする。シテへ是は迷惑な事ぢや。何と致しませう。オヤへ袴をも一つ持つて呉ればよい。シテへ是さへやう〳〵と借つて參りました。オヤへイヤよい仕樣があるぞ。シテへ何とで御座る。オヤへ是へよつて手傳ひを召され。シテへこれはよい御分別で御座る。ト云うて。袴仕樣。口傳。アドへ太郎冠者。早うお出なされいと云へ。小アドへ畏まつて御座る。申し〳〵。早うお出なされいと申しまする。シテへそれへ參らうとおしやれ。小アドへ畏まつて御座る。それへ參らうと仰せられまする。アドへ心得た。是は暇の入る事ぢや。太郎冠者。早うお出でなされいと云へ。前の如く。以上三度呼びに行く。心持あり。オヤへさあ〳〵。これを前へあてゝ。隨分後を見られぬ樣にさしませ。シテへ心得ました。オヤへお出やれ。ト云うて出る。色々あり。シカ〳〵あるなり。アドへ御兩人共に。どれへお出でなされた。オヤへ今日は初めて參つた事なれば。お屋敷の様子お式臺の懸り。拜見致して御座る。綺麗なお住居で御座る。アドへ人を持ちませぬに依つて。不掃除に御座る。オヤへいや〳〵綺麗な御住居で御座る。アドへ太郎冠者。先づ盃を出せ。小アドへ畏まつて御座る。お盃持ちました。アドへ扨それへ參らぬか。シテへ何がさて參つて下され。アドへ食べて進ぜう。太郎冠者つげ。小アドへ畏まつて御座る。アドへ是を聟殿へさしませう。持つて行け。シテへ戴きませう。アドへ目出たう御座る。シテへからし〳〵。茨な逆茂木にした樣な酒

ちや。アド〽辛うて悪くば。甘いを進じませう。シテ〽このからいがよう御座る。アド〽も一つ参れ。シテ〽も一つ食べませう。アド〽聟殿は酒がなつてよい事で御座る。オヤ〽忰は一つ下されまする。シテ〽食ふれば食ふる程よい御酒で御座る。さて慮外ながら。舅殿へ上げませう。アド〽是へ下され。シテ〽食べよごしで御座る。アド〽苦しう御座らぬ。シテ〽幾久しう目出たう御座る。アド〽扨これを親御様へ進じませう。オヤ〽頂きませう。身共は御酒は不調法な。アド〽あがりませぬか。シテ〽いや親共は一つ食べられまする。オヤ〽身共が何時いうだ。シテ〽こなた内で呑むでないか。（親叱つて。笑ふ。）オヤ〽あれは物で御座る。夜寒の時分は。寝酒を一つ下されます。それな見まして。あの様に申すさうに御座る。さり乍ら。いつは食べずとも。今日は目出たい折柄で御座る。一つ下されませう。アド〽それは忝う御座る。太郎冠者丁どつげ。オヤ〽ある／＼。シテ〽やつと参つたの。（親叱る。）シテ〽舅殿。おごうのわせました當座は。うひ／＼しい體で御座つたが。今は馴染がつきまして。私を叱つてばかり居られまする。アド〽お氣に入らぬ事が御座らば。御叱りなされて下されい。オヤ〽いかな／＼。私共へ孝行にして呉くれられまする。先づ第一夫婦仲がよさうで悦びまする。アド〽それは何より悦ばしい事で御座る。シテ〽イヤ夫婦仲のよい證據が御座る。おごうは此中しきりに青梅を好いて食べられまする。（オヤ叱つて。）オヤ〽年が参らぬに依つて。すわ／＼と物を申して氣の毒で御座る。扨これは慮外乍ら進じませう。アド〽頂きませう。オヤ〽食べよごしで御座る。アド〽目出たう御座る。さて一つ請持ちました。聟殿。目出たう肴に一さし舞はせられい。シテ〽私は舞は不調法に御座る。御ゆるされませ。アド〽いや／＼。ならんと申す事は御座らぬ。是非とも舞にせられい。シテ〽何と致しませう。オヤ〽あのやうに仰せらるゝ事ぢやに依つて。氣をつけてお舞やれ。シテ〽それならば舞ひませう。（ト云うて一つ謡する舞を舞ふ。）シテ〽目出たう御座る。アド〽これは短い舞で御座る。左右へ廻つて長々と舞はせられい。シテ〽今日はちとさす舞があつて。左右へ廻りにくう御座る。アド〽舞にさす舞と云ふ事があるもので御座るか。是非とも左右へ廻つて。長々と舞はせられい。シテ〽何としませう。オヤ〽ハテあの様に仰せらるゝ事ぢや程に。それ左右へ廻つてお舞やれ。シテ〽それならば舞ひまする。アド〽早う舞はせられい。（またれ／＼と云うて留めにありや／＼と云ふ一。小廻りして留むる。）シテ〽目出たう御座る。アド〽何故に左右へ廻らせられぬ。シテ〽左右へ廻りました。オヤ〽今のは。左右へ廻りましたは。私が證據人で御座る。アド〽いや見ませなんだ。然らば何事も三神相座と申す。三人連舞に致さう。御兩所共に立たせられい。オヤ〽私は不調法に御座る。アド〽ハテひらに立たせられい。（ト云うて。セッ子舞ふ。二人共立つ。）アド〽これ／＼。申し／＼。御兩所共に袴の後が御座らぬ。二人〽なう恥かしや／＼。（二人共に袴を押へて入る。）アド〽これ／＼。苦しう御座らぬ／＼。（ト云うて。留めて入るなり。）

佛師（ぶつし）

シテ　都の者
アド　田舎者
（入道具）

アド〽この邊りの者で御座る。某一在所として一間四面の堂を建立致して御座る。堂は思ふ儘に出來て御座れども。佛師が御座らぬ。田舍のことで御座るに依つて。佛師が御座らぬ。此度都へ上り。佛を求めて参らうと存ずる。シカ／＼。誠に。

田舍と申すものは不自由なもので御座る。堂は思ふ儘に出來て御座れども。佛師が無いに依つて佛を求めう樣が御座らぬ。わあ〳〵。都近くと見えて賑かな。されぱこそ都ぢや。また田舍の家作りとは違うて。軒と軒とを伸よさゝうにひつしりと建て竝べた。これはいかなこと。身共ははたと失念したことがある。佛師は何處もとにあるもいぢややら。どの樣な人ぢやも存ぜぬ。篤と問うて來ればよかつたものを。遙々の所を尋ねには戻られまい。何としたものであらう。やあ〳〵。笑ふ。流石は都ぢや。賣買ふ物も呼ばはれば。事が調ふと見えた。さらば身共も呼ばはつて參らう。しい〳〵。そこもとに佛師はないか。佛買はう佛買ひます。佛師は御座らぬか。シテへ洛中に心の直ぐにない者で御座る。あれに田舍者と見えて、何やらわつぱと申す。ちと彼奴にたらさはつて見うと存ずる。なう〳〵。これ〳〵。アドへ此方のことで御座るか。シテへいかにもそなたのことぢや。そなたはこの廣い街道を。何をわつぱとおしやる。アドへ田舍者のことで御座れば。わつぱの法度も存ぜいで申した。眞平御免なれ。シテへいや〳〵。わつぱが法度を咎むるではない。何をおしやる。事に依つたらば叶へておませうといふことぢや。アドへそれに忝う御座る。私に佛が欲しさに佛師を尋ねまする。シテへしてその佛匠を知つておいやるか。アドへこれはまた都人とも覺えぬ事を仰せらるゝ。存じてあれば。此の樣に呼ばはつては歩きませぬ。知らぬに依つて呼ばはつて歩くことで御座る。シテへこれは身共が謬つた。すればそなたは仕合せ者ぢや。アドへ仕合せと申して。かう見えた通りの者で御座る。シテへいや〳〵、其の樣に袖褄についての仕合せではない。身共にお逢ひやつたが仕合せといふことぢや。アドへ、それは又どうしたことで御座る。シテへ洛中に人多しといへども。そなたの尋ぬる身共は眞佛師でおりやる。アドへなう恐ろしや。ずつとそちへ退いて下され。シテへ何とおしやつた。アドへ私は生れつき蝮は嫌ひで御座る。シテへそれはそなたの聞き樣が惡い。蝮ではない。眞佛師といふことでおりやる。アドへ扨は佛匠殿で御座るか。シテへなか〳〵。アドへ佛師ならば佛師でよいことを。眞佛師とはどうした事で御座る。シテへ不審尤もぢや。むかし運慶湛慶安阿彌とて。佛師の流が三通りある。運慶も絶え。湛慶も絶ゆる。今は安阿彌の流は身共ばかりぢやに依つて。眞佛師といふことで御座る。アドへ謂れを聞けば尤もで御座る。佛が欲しう御座る程に。見せて下され。シテへいや〳〵。佛に限つて出來合はない。好ましめ。何なりとも作つてやらう。アドへ田舍者のことで御座れば。好む術を存じませぬ。よからう佛を作つて下され。シテへそれならば。何を作つてやらうぞ。アドへ何がよう御座らう。シテへ仁王を作つてやらう。アドへ仁王と仰せらるゝは。寺方の御門前に立つて御座る御佛のことで御座るか。シテへ成る程。その佛のことぢや。アドへあれは餘り異形で惡う御座る。もそつと餘の佛を作つて下され。シテへそれならば。天の邪鬼を作つてやらうか。アドへ天の邪鬼と仰せらるゝは。踏まへられて御座る御佛のことで御座るか。シテへそなたは田舍者ぢやとおしやるが。いかう功者な。いかにも其の佛のことでおりやる。アドへあれは餘り窮屈さうで御座る。私の好みまするは。姿形柔和にして。現當二世を守らせらるゝ御佛が。作つて欲しう御座る。シテへそれならば。毘沙門天の妹に吉祥天女といふてある。これは姿形柔和にして。現當二世を守らせらるゝ御佛ぢや。これを作つて

か。アド〽成る程拜みました。シテ〽氣に入りましたか。アド〽合點の往かぬことが御座る。御腰の邊りへ手をさいて見たれば。いかう暖かに御座る。あれはどうしたことで御座る。シテ〽さて〳〵そなたは麁相な人ぢや。膠の乾ぬうちは暖かなものぢや。また大俗の身として。佛に手をさすといふことがあるものでおりやるか。アド〽其の上御印相も氣に入りませぬ。直らうことならば直して下され。シテ〽膠の乾ぬうちはいかやうにも直る。直してやらう程に。そちへ廻らつしやれ。アド〽心得ました。膠の乾ぬうちは如何樣にも直るとおしやる。どの樣に直つてあることぢや。直ることは直つたが。あれは物欲しさうで惡い。直して貰はう。佛師殿〳〵。シテ〽やあやあ。アド〽あれは物欲しさうで惡う御座る。直して下され。シテ〽直してやらう程に。そちへ廻らつしやれ。アド〽心得ました。快い佛師殿ぢや。此度はどの樣に直つてあるぞ。これはいかなこと。手のうちを揉みぬくやうな。これは直して貰はう。佛師殿〳〵。シテ〽やあ〳〵。アド〽あれは手の内を揉みぬかうといふやうで惡う御座る。その上最前から物がちら〳〵致す。ならうことなら此方と同道して。爰が惡い。彼處（かしこ）が惡いというて。直して欲しう御座る。シテ〽尤もさうしたいものなれども。佛師の作法で。願人の側では直さぬ法でおりやる。氣に入らずば幾度でも直してやらう。アド〽それならば。早う直して下され。シテ〽そちへ廻らつしやれ。是より何れもいふこと前に同じ。但し後は物を打碎く仕方。縛られたる仕方。此の間アド腹立ちまはる仕方同斷。あとシテうろたへ。面を横に被てゐる。アド同じこと廻る。見て驚く。アド〽ふう。佛師ぢや。シテ〽佛ぢや。アド〽佛師ぢや。シテ〽佛ぢや。アド〽よう身共を騙しをつた。シテ〽あゝ宥して呉れい〳〵。

船渡聟

シテ　聟
アド　舅
女

（入道具）

アド〽矢橋の浦の船頭で御座る。今朝一番船を渡いて御座る。又戻りをのせて歸らうと存ずる。シテ〽都邊土の者で御座る。某矢橋に舅を持つて御座る。今日は吉日で御座るによつて。聟入を致さうと存ずる。先づ急いで參らう。シカ〳〵。誠に。とうにも參る筈で御座つたな。何かとおそなはつて御座る。又舅かた酒好きと承つたに依つて。此の樣に樽肴を用意致いて御座る。何かと云ふうちに大津松本ぢや。舟に乘り度いものぢやが。幸ひあれに舟がある。ホイ船頭。舟に乘らうやい。アド〽何ぢや。舟に乘らう。それを今朝から待つてゐた。どれ〳〵。舟をよせて乘せうぞ。エイ〳〵。さあ着いた。お乘りやれ。シテ〽心得た。ト云うて。舟のわきをふまへて。ぐれつく心持なり。シテ〽あゝ船頭。舟がかへる。アド〽あゝそなたは近江舟に乘つたことはないか。シテ〽今が初でおりやる。アド〽ぐれつく舟ぢや。構へて靜かにお乘りやれ。シテ〽これはこぼれ物ぢや。ろくな所に置いて下され。アド〽心得た。これはよいものをお持ちやつたのう。さあ〳〵ろくな所に置いた。シテ〽船をぢつと留めて居ておくりやれ。アド〽心得た。シテ〽やつとな。ト云うて乘る。アド〽さいぜんの麁相と違うて。いかう乘りぶりが上つておりやる。シテ〽さうもおりない。アド〽さらば舟を出すぞ。シテ〽一段とよからう。アド〽エイ〳〵。さてわごりよはどれからどれへお往きやる。シテ〽都邊土の者ぢやが。矢橋へ用事あつて參ることでおりやる。アド〽都邊土とおしやる程に。そ

の前な物は京酒であらういの。シテへまゝよい推し〳〵。京酒でおりやるとも。アドへ一つ飲みたいなあ。シテへ一つ飲ませたいなあ。アドへ何ぢや一つ飲ませたい。シテへなかなか。アドへさて〳〵と心よい人を乗せ合せた。それならば。近頃言ひ兼ねたが。一つお振舞なさらぬか。シテへはてざれごとをおしやるな。アドへいやざれ事ではない。眞實でおりやる。シテへ何ぢや。眞實ぢや。アドへなか〳〵。シテへさて〳〵。おきとしたことをおしやる。此の様に念を入れ、封のして有るものを。飲ませと云ふ事があるものか。アドへさればいの。言ひかねたと云ふはそこの事ぢや。けふは嵐は強し寒うはあり。手がこゞえて櫓が押しにくい。又その澤山なうちな一つなど振舞うたと云うて。苦しうもあるまい。シテへ成る程。澤山なうちぢやに依って。一杯振舞ふぶんは苦しうないが。あとがたぶつく。アドへそれはよい仕様がある。シテへ何とする。アドへたぶつかぬ様に。飲うだあとへ水を入れて置いたがよい。シテへいよ〳〵むさとした事をおしやる。ならぬわいの。アドへならぬか。シテへなか〳〵。アドへならぬものを無理に飲まうでもない。京酒と聞いたに依つての事ぢや。飲むことがならずは。匂ひなりとも嗅がせてたもれ。シテへ何ぢや。匂ひなりとも嗅がせ。アドへなか〳〵。シテへさて〳〵。そなたもよつぽどの好きぢやの。アドへ随分と好きでおりやる。シテへ匂ひほどの事は心易い。これへ寄つて嗅がしめ。アドへどれ〳〵。さても〳〵。むまい匂ひがする。匂ひを嗅がぬうちはさほどにもなかつたが。匂ひを嗅いだれば。蟲がとりのぼせて。どうも堪忍がならぬ。此の上には呑でも應でも一つおふるまへ。シテへ何ぢや。呑でも應でも飲ませ。アドへなか〳〵。シテへくどい事をおしやる。ならぬわいのう。アドへいかいこしゝな者が。ならさならぬでよい事を。ならぬ飲むまいものを。シテへ又なんのやうに飲ませう。アドへおのれ。おれが其の酒を飲ませぬと云うて。何と思ふものかの。シテへあゝ船頭。舟がかへる。アドへ舟をかへさうと。酒を飲ませうと。わごりよの心次第ぢや。シテへどうなりともせう程に。先づ舟を留めておくりやれ。アドへどうもするか。シテへどうもする程に。早う留めてくれさしめ。アドへ舟を留むるは心易い。そりや〳〵。ころり留まつた。シテへ扨は飲まればおかぬか。アドへおかぬと云ふことがあるものか。若い者。機嫌を直して一つおふるまや。シテへ盃があるまい。アドへ盃はないが。こゝにあか取りがある。シテへそれはむさからう。アドへむさくはこれ。水が清めぢや。シテへ必ず一つでおりやるぞ。アドへ堅いことを言はずとも。まづお注ぎやれ。（ト云うて一献く。○又は一献を内の舊口にする所を飲みかけとめるなり。）シテへ何とぢや。アドへ一献酒は飲まぬものぢや。シテへはて一献でも大事ないことを。アドへまあ〳〵。も一つおつぎやれ。シテへそれならば。どぶどぶ〳〵。アドへある〳〵。（ト云うて一口呑む。内○樽の口する。）シテへはや口をしたか。シテへまた口をせいでならうか。アドへわごりよにも差さうものを。シドへいかな〳〵。戴きたうおりない。アドへと云ふも。も一つ飲みたさの事ぢや。も一つおふるまやれ。シテへ一献の筈を二献まで飲ませて。最早言分はあるまい。アドへ言分のあるのないのではない。舟の中では。我れ人祝ふ事ぢや。今のは二献で數がわるい。も一献のませて。どうぞ献を合はさせてたもれ。シテへさて〳〵。くどいことをおしやる。この上はふつつりとならぬ。アドへ何ぢや。ふつつりとならぬか。シテへおんでもないこと。アドへ身どももふつつりとならぬ。（ト云うて。棹を捨てて下）

（に乗る）シテへこりや〳〵船頭、舟が流るゝ〳〵。アドへ舟を流さうと酒を飲ませうと。おぬし次第ぢや。シテへどうなりともせう。早う舟を留めておくりやれ〳〵。アドへどうなりするか。舟を留めるは易い事ぢや。そりや〳〵。そりや留まつたは。シテへいかに船中ぢやと云うて、其の様にはなぶらぬものぢや。アドへなぶると思へば腹が立つ。これ若い者、機嫌を直しても一つおふるまや。シテへ是非に及ばぬ。さあ〳〵お飲みやれ（ト云うて。酒をつぐ。酒呑む内樽をふつて。）シテへこれはいかう殘り少なになつた。アドへアヽうまし〳〵。ようおふるまやつた。これで身共もたんのうした。これほどにはあるまいが。このあなたによい酒がある。つめてお往きやれ。シテへせめてさうなりともせずばなるまい。アドへ其の代りに。隨分精を出して舟を押さうぞ。シテへ早うつけておくりやれ。アドへエイ〳〵、えいや〳〵。舟が着く〳〵。シテへ誠につくは。アドへさあ着いた。上らしめ（ト云うて。シテ上る。）な。アドへ又戻りにも。身共が舟に乘せうぞや。シテへいかな〳〵。わごりよの舟に乘りたうおりない（アドは太鼓座へ入る。）シテへなう〳〵もつけな舟に乘り合うて、舅へ、志の酒を皆にした。何かと云ふうちに天橋ぢや。則ち舅のあたりは此の邊りと聞いた。先づ案内を乞はう。（ト云うて。案内乞ふ。女出る。常の如く笛座より。）シテへ都邊土の者で御座る。若い者は此の邊りでは御座らぬか。女へ都へんどと仰せらるゝは。若し聟殿では御座らぬか。シテへ先づ其の様な者で御座る。女へやれ〳〵。ようこそ御座つたれ。先づかう通らつしやれ。シテへこれは今日參つた印で御座る。女へ御座るこそ嬉しけれ。なんのこれに及びませう。先づかう通らしやれ。シテへ畏まつて御座る。（ト云うて入違ふ。女樽を後見に渡し出す。）女へやれ〳〵。ようこそ御座つたれ。シテへさて舅殿にはお宿に御座りまするか。女へこれは在所に謠講があつて參られて御座る。呼うて參りませう。シテへどうぞお目にかゝりたう御座る。女へ暫くそれに待たせられい。最早歸られさうなものぢやが。何をして居らるゝ事ぢや。さればこそあれにつゝくりとしてゐらるゝ。なう〳〵なう。そこな人。アドへかしましい。何ぢやぞいやい。女へ時々は內へも戻つたがよう御座る。アドへ何を云ふぞいやい。けふは仕合せがよいに依つて、も一かへりせうと思うて。待つて居るわいやい。女へまだ其のつれをおしやる。內には客がある。アドへ客とは。女へ聟がわせた。アドへどこの。女へ京の。アドへいつ。女へ今。アドへ今ア。女へさあ〳〵。早う戻らつしやれ。アドへはて。來るなら來ると云ひたいものを。壁に馬を乘りかけたやうな。（ト云うて。聟を見附けて。肝を潰し。橋懸へ逃げる。後よりついて出で。）女へ何と召された。アドへ京の聟とはあれか。女へなか〳〵。アドへ京の聟はずつとよい男と聞いた。あれはさん〳〵醜男ぢや。あの様な者を聟にすることはならぬ。と〳〵と去なせ。女へこれはいかなこと。あのよい男がどこに難があるものぢや。其の上遙々見えた人を。何と去なさるゝものぢや。さあ〳〵戻らつしやれ。アドへ先づ待て〳〵。女へ何と待てとは。アドへこれには大分様子のあることぢや。女へ様子とは。アドへあの聟は。若し樽肴を持つては來なんだか。女へなるほど持つてわせた。アドへ身共が舟に乘せての。女へしてなんと。アドへ何がけふは嵐は強し。寒うはあり。舟を流しつかぶらかしつして。酒を飲うだれば。今面目なうて。どうも會はれぬ。そちよいやうに云うて。去なしてくれい。女へエヽ。畜生やの〳〵。其の酒を飲むと云ふことがあるものか。と云うても、會はせねばならぬ。さあ〳〵戻らつ

しつれ。アドへ先づ待て〳〵。今云ふ譯ぢや
に依つて。どうも面目ない。わごりよを頼む。
とかくよいやうに云うて去なしてくれい。女
へそれならば。様を變へて出でさせられい。
アドへ今更さまの變へやうもない。女へ常々
そなたの髭が。見たむないと思うて居る。
其の髭を剃つてお出でやれ。アドへ何ぢや。
髭を剃れ。女へなか〳〵。アドへいやこゝな
者が。西國方の大名衆も。矢橋の浦の大髭が
舟と云うて。おれが舟ならでは召さぬやうに
なさるゝほど〳〵であるに。聟に會はぬと云うて。
此の大事の髭を剃ることはならぬ。女へぢや
と云うても。剃られねばならぬ。これへ寄らつ
しやれ。（ト云ふ。無理に髭を剃つてやる。）アドへこれは何と
するぞいやい。はこれは剃つたか。女へ剃り
ました。アドへ何と見知りはせまいか。女へ殊
の外相好が變りました。見知りもしますまい。
アドへそれならば。出よう程に。そこの首尾
を頼むぞ。女へ心得ました。これのうが戻ら
れました。シテへ舅殿お歸りなされましたか。
アドへ聟殿で御座るか。シテへ不案内に御座
る。アドへ初對面で御座る。シテへ早々參る
筈な。何かとおそなはつて御座る。アドへ聟
殿は兼ねてお隙なしと承つて御座るに。よう
こそ來て下された。女へこれは今日のお持た
せで御座る。アドへ御座るこそ嬉しけれ。何
のこれに及びませう。女共盃を出せ。女へ心
得ました。アドへやれ〳〵。ようこそ御座つ
た。女へお盃もちました。アドへ何と。それ
に參らぬか。シテへ先づ參つて下され。アド
へそれならば。これから始めませう。こりや
おれは酒を吞まぬぞ。シテへ舅殿には御酒を
上りませぬか。アドへ私は不調法で御座る。
女へこれのうはたべられませぬ。アドへさて
これを聟殿へさしませう。シテへ頂きませう。
アドへたべよごして御座る。シテへ苦しう御座
らぬ。アドへさあ〳〵參れ。シテへ是はお酌
慮外で御座る。女へ丁度參れ。シテへさてさ
て。これはよい御酒で御座る。アドへ聟殿は
一つ參るか。シテへ一つ下されまする。アド
へそれはよい事ぢや。も一つ參れ。シテへそ
れならば。も一つたべませう。これは度々お
酌慮外で御座る。女へ苦しう御座らぬ。アド
へ聟殿は酒がなつてよい事ぢやなあ。女へさ
やうで御座る。アドへ身共もどうぞ。あの樣
に飲みたいものぢや。シテへたぶればたぶる
程。よい御酒で御座る。これを慮外ながら舅
殿へ上げませう。アドへ頂きませう。シテへた
べよごして御座る。アドへ幾久しう目出度う
御座る。こりや。飲まぬを知つて注ぐ程に。
シテへ舅殿には曾て上りませぬか。女へかつ
てたべられませぬ。アドへ私は酒の匂ひを嗅
ぎましても。そのまゝ醉ひまする。シテへ一
つあがると承りましたが。女へかつてたべら
れませぬ。アドへ何とも一つ參らぬか。
シテへいや。もたべますまい。アドへそれなら
ば女共。とつておけ。女へ心得ました。シテ
へさて舅殿には。最前から何やら窮屈さうに
なされて御座る。どうした事で御座る。アドへ
不審尤もで御座る。ふだん濱邊に住まひます
れば。口ひゞが切れまして。風が當ればしみ
まするに依つて。かやうに致して居る事で御
座る。シテへ御尤もには存じまするが。重ね
てお顔を見知るためで御座る。どうぞお取り
なされて下され。アドへやはりこのまゝおい
て下され。女へあの様に言はせらるゝ程に。
取らつしやれ。アドへおのれが何をしつて。
すつこうでをれ。（女大小の前に礙る。）シテへそれなら
ば。私が取りませう。アドへこのまゝおいて
下され。（と云ふ。無理に袖をのける。）シテへこれはいかなこ
と。あれは最前の船頭ぢや。いかにやい〳〵
舅殿。何しに髭を剃つたぞ。アドへ南無三寶。

あらはれた。今はなかつゝむべき。矢橋の舟をかぶらかいて。飲を存うだ者なり。シテ〽いや〳〵。それは苦しからず。とにもかくにも舅殿へ參らせんがためなり。アド〽志は嬉しけれども。面目もなう存ずる。シテ〽さらば暇申さん。アド〽あら名殘り惜しや。シテ〽こなたも名殘り惜しけれど。あの日を御らうぜ。アド〽山の端にかゝつた。二人〽めいいいいい〳〵ざらり。二人〽さらり〳〵と梅はほろりとおつるとも。まりは枝にとまつたとまついいいいいた〳〵。とまり〳〵とまつた。トツトツトイヤ。ト二人留めて。男より入る。

舟ふな

シテ　太郎冠者
アド　主人

アド〽この邊りの者で御座る。この間は何方へも遊山に參らぬ。今日はどれへぞ遊山に出ようと存ずる。先づ太郎冠者を呼出し申付くる事がある。太郎冠者あるか。シテ〽ハア。アド〽居たか。シテ〽お前に。アド〽念なう早かつた。汝呼出す別の事でない。このうちは何方へも遊山に出ぬ。今日はどれへぞ遊山に出ようと思ふが。何とあらうぞ。シテ〽御意もなくば申上げうと存じて御座る。一段とよう御座りませう。アド〽それならば。どれへいたものであらう。シテ〽されば。どれがよう御座りませうぞ。アド〽どれがよからうぞ。シテ〽どれこれと仰せられうより。西の宮へお參りなされた事が御座るか。アド〽聞及うだれども終に參らぬ。參らう程に。汝供をせい。シテ〽畏まつて御座る。アド〽追付け行かう。さあ〳〵來い〳〵。シテ〽ハア。アド〽扨あの西の宮はよい景な所か。シテ〽なか〳〵。浦山をかけまして。つゝとよい景な所で御座る。アド〽浦山をかけたらば。よい景であらう。ヘアこれは大きな川へ出た。シテ〽お前にはこの川を御存じ御座らぬか。アド〽イヤ知らぬ。シテ〽これは神崎の渡と申して。隱れもない川で御座る。アド〽神崎の渡と云ふは此の川の事か。シテ〽左樣で御座る。アド〽聞及うだより大きな川ぢやなあ。アテ〽つゝと大河で御座る。アド〽何とこの川をかち渡りにはならぬか。シテ〽いかな〳〵。かち渡りになる樣な川では御座らぬ。アド〽それならば。物があらうか。シテ〽何れ召す物は御座りませう。アド〽イヤあれに物が見ゆる。急いで呼べ。シテ〽畏まつて御座る。ホウイふなやい〳〵。アド〽ヤイ太郎冠者。シテ〽ヤア。アド〽そちは何を呼ぶ。シテ〽あのふなを呼びまする。テド〽あれは舟と云ふ物ぢや。舟と云うて呼べ。シテ〽お前には御存じ御座らぬ。私次第になされませ。ホウイふなやい〳〵。アド〽ヤイ太郎冠者。シテ〽ヤア。アド〽一度ならず二度ならず。ふなと云うては何時迄呼うでも來はすまい。兎角舟と云うて呼べ。シテ〽爰にちかい讐が御座る。向ふの岸と此方の岸を何と申す。アド〽それはもの。舟つきよ。シテ〽いやこれもふなつきとこそ申せ。ふねつきとは申さぬ。アド〽よしそれはふなつきにもせよ。あれは舟と云ふ物ぢや。舟と云うて呼べ。シテ〽まだ情のこはい事を仰せらるゝ。總じて昔からの歌にも。ふなとこそ御座れ。舟とは御座らぬ。アド〽いはれぬ汝が歌穿鑿なれども。古歌にあらば聞きたうおりやる。シテ〽畏まつて御座る。ふな競ふ。堀江の川の水際に。きゐつゝ鳴くは都鳥かも。何とふなでは御座らぬか。アド〽舟ではないかよ。シテ〽いかな〳〵ふなで御座る。アド〽此方には舟とよまれた歌がある。詠うで聞かせう。シテ〽承りませう。アド〽ほの〴〵と。明石の

浦の朝霧に。島隱れ行く舟をしぞ思ふ。何と舟ではないか。シテへ自然お前には歌一首などは御座らうが。此方にはまだ御座る。アドへあらば云へ。シテへ畏まつて御座る。ふな出して。あとは何時しか遠ざかる。須磨の上野に秋風ぞ吹く。アドへこなたにもまだある。シテへ承りませう。（ほのぼのとの歌を聞えぬ樣に云ふ。）シテへそれは最前の歌で御座る。アドへ最前のは柿の木の人麿の歌。是は僧正遍照の歌ぢやが。何と殊勝な歌ではないか。シテへそれはともあれ。此方にはまだ御座る。アドへあらば云へ。シテへ畏まつて御座る。シテへふな人も。誰を戀ふとかあふ島の。浦かなしげに聲ぞ聞ゆる。アドへ此方にもまだある。シテへ承りませう。（ほのぼのとを早口に云ふ。）シテへこれも最前の歌で御座る。アドへこれは又小野小町の歌ぢやが。何と細々ときやしやな歌ではないか。シテへけにもはれにも歌一首とはお前の事で御座る。私の前では苦しう御座らぬ。他所で仰せられたらば。さぞ恥をおかきなされませう。アドへいはれぬ汝が歌穿鑿はいらぬ物ぢや。爰に舟と作られた謠がある。うたうて聞かせう。シテへ承りませう。アドへ迚もの事に仕方で謠はう。シテへ一段とよう御座りませう。アドへ山田矢ばせの渡し舟の。夜は通ふ人なくとも。月のさそはゞ自ら。舟も漕がれて出づらん。（ふなと云）（う一〇口を塞ぐ。）シテへ一段の事を申さるゝ。此後て一句持つて參らうと存ずる。申し〳〵。其謠の後を仰せられい。アドへいや。この謠に後はない。シテへいや後が御座る。アドへあつても身共は知らぬ。シテへ其謠の後は物と。アドへ何と。シテへ物と。アドへ何と。シテへふな人も漕がれ出づらん。アドへ時々は主にも負けて居よ。シテへハア。アドへエイ。シテへハア。（ト云うて留めて入るなり。）

文荷（ふみにない）

シテ　太郎冠者
アド　主人
小アド　次郎冠者
（入道具）

アドへこれは此の邊りの者で御座る。このうち東山に於いて。せん光殿と申す少人と參會を致いて御座れば。今宵も參る樣にと文を呉れられて御座る。卽ち行かうと存じて。返事を認めておいた。兩人の者を呼出し。申付けることが御座る。太郎冠者あるか。（呼出す。常の如し。）

小アドへ次郎冠者お前に。アドへ汝等呼出すは別のことでない。このうちのことは次郎冠者は知るまい。なア太郎冠者。シテへあの仰せらるゝことは。次郎冠者のことはさて置きまして。このことを世間で。なア次郎冠者。小アドへオヽ。二人へ隱れが御座りませぬ。アドへ包むとすれど隱れがないとは。油斷のならぬことぢやなア。アドへまた今宵も參る樣にとあつて。文を呉れられた。卽ち行かうと思うて。返事を認めて置いた。大儀ながら持つて往て呉れい。シテへ畏まつては御座れども。この事をかみ樣がお聞きなされて。殊のほかお叱りなされて御座る。これは御許されませ。アドへそれは女共の了見が惡い。女の方へ遣る文ではなし。少人の方へ遣る文ぢや程に持つて行け。シテへ少人のことはさて置きまして。總じて戀路の使をしたらば。乾度曲事ぢやと堅う仰せられて御座る。どうぞ御許されませ。アドへそれならば次郎冠者持つて行け。小アドへ私はお所を存じませぬ。アドへ何れ宿を知らいではなるまい。とかく太郎冠者持つて行け。シテへこれはどう御座らうとも。御許されませ。アドへ扨は女共のいふことは恐いに依つて聞か

うず。身がいふことは聞くまいぢやなア。シテへいや。左様では御座りませぬ。アドへまだぬかし居る。己れ行かうか行くまいか。眞直ぐに言へ。シテへ先づお待ちなされませ。アドへ何と待てとは。つめる常の如し。アドへなに。畏まつた。シテへはあ。アド笑ふ。アドへこれはざれ事ぢや。氣にかけずとも持つて行て呉れい。シテへ一旦お斷り申して御座れども。此の上は畏まつて御座る。アドへさて一人で濟むことなれども。重ねて宿を知る爲に。次郎冠者も行け。アド小へ畏まつて御座る。アドへ扨はこのお使は兩人に仰付けられまするか。アドへその通りぢや。シテへ畏まつて御座る。アドへ急いで行て。頓て戻れ。常の如くつめる。二人へ笑ふ。シテへ何と興がつたことではないか。小アドへ何れ興の醒め果てたやうなことぢや。シテへさりながら。行かずばなるまい。さあ／＼來い來い。小アドへ心得た。シテへ何と思ふぞ。世間に妻を持つといふは。子を儲け家相續の爲でこそあれ。賴うだ人の樣な少人狂ひは何の役に立たぬものぢやなア。小アドへ何れ文盲ななりで。少人狂ひは置いて貰ひ度い。笑ふ。シテへさあ持て。小アドへ何ぢや持て。シテへなか／＼。小アドへ身共はお所を知る爲にこそ參れ。文を持てとは仰せられぬ。シテへでも此のお使は兩人に仰付けられたではないか。是非ともお持ちやれ。小アドへそれならば代り／＼に持たう。シテへはて堅いことをいはずとも。先づお持ちやれ。小アドへ心得た。さあ／＼來い／＼。シテへ心得た。小アドへさて賴うだ人のやうな無口ななりで。少人にお逢ひやつての挨拶が聞き度いなア。シテへそれは定めて疊の塵がなむしつて居らるゝことであらう。小アドへその樣な事であらうぞいやい。笑ふ。小アドへさあ持て。シテへはや持たすか。小アドへはやといふことがあるものか。餘程持つた程にお持ちやれ。シテへ心得た。さあ／＼來い／＼。小アドへ心得た。シテへ何と此の文ほど持ち重りのする文はないなア。小アドへその重いは物であらう。シテへ物とは。小アドへ今宵逢ひに行くが嬉しさに。中へ錢がな包み込うで置かれた物であらう。シテへさあ持て。小アドへはや持たすか。シテへはやといふ事があるものか。餘程持つた。お持ちやれ。小アドへいや。此の樣にあちらこちらしてゐては道ばかゞ行かぬ。何とぞ持ち樣のありさうなものぢや。シテへいづれ持ち樣のありさうなものぢや。小アドへよい仕樣がある。シテへ何とする。小アドへこの竹に結びつけて中荷うて行かう。シテへこれはよい分別ぢや。小アドへかうして行けば。互に片身怨みがなうてよいではないか。シテへ其の通りぢや。小アドへさあ／＼。荷へ／＼。シテへ心得た。小アドへ何と思ふぞ。昔から文を荷ふといふは。珍らしい事ではないか。シテへ何れ例(ためし)少いことぢや。ヨウ。これはいかう重うなつた。小アドへ別に重い筈はないが。シテへいや／＼。頻りに重うなつた。あれ／＼重いこそ道理。こちへ寄するに依つてぢや。小アドへ寄せはせれども。獨り寄ればせうことがない。シテへとかく眞中に置けいやい。小アドへ心得た。さてこの文をただ荷ふも如何ぢや。此の體を謠に作つて諷はうと思ふが。何と思ふ。シテへ一段とよからう。小アドへ和御寮も諷へ。シテへ心得た。シテへいしめじが腹立ちや。二人へよしなき戀をすが莚。肩に持てども持たれもせず。苦しや獨寢の。わが手枕の。えい。肩かへる。肩かへて。持てども持たれず。そも文は何の重荷ぞ。へたる。シテへ扨も／＼重い文ぢやなア。小アドへその通りぢや。シテへ餘り不思議な。そと中を明けて見う。小アドへ此の樣に念を入れ

て封のしてあるものを。明けて見うといふことがあるものか。シテへまた元の様にして置けばよいではないか。小アドへ身共は餘り同心にないぞよ。シテへさういはずとも。身共に委せて置けいやい〳〵此の上書を見よう。小アドへ何と書いてある。シテへせんもじ參る。身より。二人笑ふ。シテへこれは女の子へ遣るやうに書かれた。小アドへそれも誰ぞに習はれたものであらう。シテへさらば中を明けて見う。小アドへあゝ止しにせいでな。シテへさても〳〵戀しや〳〵。笑ふ。重いこそ道理。小石澤山に書込うでおかれた。小アドへどれ〳〵見せい。さあ〳〵お見やれ。小アドへおなつかしさは富士の山にて候。笑ふ。重いこそ道理こよせきもない文の中へ。富士の山を書込うでおかれた。シテへどれ〳〵見せい。小アドへさあ〳〵お見やれ。シテへ先づは拙い手ぢや。悉皆雀の踊足を見る様な。小アドへどれどれ見せい。シテへさあ〳〵お見やれ。小アドへいかさま蚯蚓のぬたくつた様な事が書いてある。シテへどれ〳〵見せい。小アドへさあ〳〵お見やれ。シテへ誠に墨の濃い所もあり。また薄い所もある。この様な手でよう文を書かうと思はれた事ぢや。小アドへどれ〳〵見せい。

シテへ先づ待て。アドへはて先づ見せいといふに。トいうて。文を引合ひ引裂く。シテへこれはよい事を召された。小アドへ何と。シテへ身共ばかりに見せて置けばよいに。無理に引くに依つてこの様に破れた。身共は知らぬ。そちよい様に申上げい。小アドへいや此處な者が。身共は措けといふものを。無理に封を切つて見初めたはそちではないか。身共は知らぬ。そちよい様に申上げい。シテへこりや〳〵。これは兩人の科は逃れまいぞ。小アドへ何れ兩人の科は逃れまい。シテへ何としたものであらう。小アドへ身共が思ふには。合口を以て詫をして貰はうと思ふ。シテへいかな〳〵。その様なことを聞く人ではない。小アドへそれならば何とする。シテへ身共は奔らうと思ふ。小アドへ何ぢや奔らう。シテへなか〳〵。小アドへこれはよからう。シテへアこれ〳〵。何處へ行く。小アドへはて奔れといふに依つて奔る。シテへいかに奔ればとてこの文を持つては奔れまい。捨てゝ奔らう。小アドへこれは一段とよからう。シテへ唯捨てゝも如何ぢや。小謠節で捨てう。汝も謳へ。小アドへ心得た。シテへ志賀の浦を通るとて。二人へ文落いた。濱松の。風の便りに。〳〵〳〵〳〵。ト云うて。二人扇を擴げ。風の便りにを謳ひ〳〵。文を煽つて嬉しがりて。謳ひ喜び。笑ふ。色々仕様。アド小謠の中に橋懸に立つ。アドへ兩人の者を使に遣して御座る。殊の外遅いによつて。迎ひに參らうと存ずる。これはいかな事。文を散々に破り居つた。えい〳〵。ト云うて。二人を追込む。二人うろたへる。二人へお返事で御座る。ト云うて。破れた文を渡す。アド兩人逃るを追込み入る。シテは後に追込み入る也。

文山賊(ふみやまだち)

シテ　山賊

アド　山賊

（入道具）

アドへやるまいぞ〳〵。シテへやれ〳〵。何とやつたか。アドへオゝやつた〳〵。シテへやつたとは何をやつたぞ。アドへきやつを逃がいてやつた。シテへ是はいかな事。そちは山賊の合言葉を知らぬか。やれ〳〵といふは。彼の者の愛をやれといふ事ぢや。アドへ其様な事とも知らず。餘りきしらうやれ〳〵と云うたによつて。知音近付でもあるかと思うて。にがいてやつた。シテへ惣じてそちは卑怯者ぢや。アドへ卑怯者とは。シテへそれ先度も駈出しの山伏が通つた程に。やれ〳〵と云うたれども。去なせたではないか。アドへやい山伏といふ者は。貝をふけば友が集るによつ

て。大勢になつて仕損じてはと思うて去なせたが何とした。シテ〽それ〳〵それが卑怯でないか。アド〽いや其様にいふな。惣じてそちと云合せて終に立身した事がない。向後は弓矢八幡申し通ぜぬぞ。ト云うて。弓矢を打付け捨てる。シテ〽弓矢八幡と云うて弓矢を捨てたは。身共への面打か。アド〽面打なら面打であらうまでよ。シテ〽身共もそちと云合せて終に利を得た事がない。向後あたご白山申し通ぜぬ。ト云うて。鑓を捨てる。アド〽あたご白山と云うて其の鑓を捨てたは。身共へ最前の返禮か。シテ〽返禮なら返禮であらう迄よ。アド〽憎いやつぢや。ト云うて。兩人脇差に手をかけ組合ふ。アド〽待て〳〵。こちらは茨畔(いはらぐろ)ぢや。シテ〽それならばもそつとこちへよれ。ト云うて。また組合ひ押かける。シテ〽待て〳〵。こちらは崖ぢや。アド〽崖ならこちへ寄れ。シテ〽何とこの様にけなげに死ぬるを。人が見たらば嘸ほめるであらう。アド〽人に見せたい事ぢや。シテ〽さりながら。今日は人通りもない。大勢見物があつてこそ死に甲斐もあれ この様に見物のない所で死ぬるは犬死に同前ぢや。書置をして死なうと思ふが何とあらう。アド〽是は一段とよからうがさりながら。かう取組んだ手の放し様がない。シテ〽何とせうぞ。

アド〽いや思ひ出した。さあ〳〵と三つ聲をかけて。三つ目の聲で放さう。アド〽是は一段とよからう。ト云うて。サア〳〵と三つ聲をかけて。手を放し。脇へ飛び。二人とも片膝立て。反を打つ。アド〽又この手が放されぬ。シテ〽これもさあ〳〵と三つ目の聲で放さう。サア〳〵ト三つかけて。二人ともくつろぐ。シテ〽アヽゆるりとした。アド〽其通りぢや。シテ〽扨そなたは硯紙の用意があるか。アド〽いや曾て用意はない。シテ〽身共は仕合せをした時。事わけをせうと思うて。矢立を用意した。アド〽それはよい嗜みぢや。シテ〽書かう程に文言を好ましめ。アド〽何と書かうぞ。一筆啓上せしめ候と書かう。シテ〽其様なかたい事が書かるゝものか。アド〽それならば一ふで申し参らせ候とお書きやれ。シテ〽さて〳〵むさとした事を云ふ。身共に任せて置かしめ。ト云うて。扇にて書く仕方する。アド〽扨も早書きぢや。いかう手が上つたやらぴん〳〵はれる。シテ〽書いた程に讀まう。きかしめ。扨も〳〵唯かりそめに家を出て。山賊を仕損じ。人の物をも得とらずして。結句どし〳〵口論し。引くなよ我ものがさじと。刀の柄に手をかくる。アド〽ぬかる事ではないぞ。ト云うて。飛退き。反うつ。シテもアドの様にして。シテ〽是は何とする。アド〽刀の柄に手をかくると云ふ程に。ぬかりはせぬぞ。

シテ〽是は文章ぢや。アド〽それならそれと云はいで。よい肝を潰した。シテ〽さて是からくどきに書いた。是に寄つて讀ましめ。刀の柄に手をかくる。二人〽構へて〳〵あたりの人々に。けなげに死にたると。語り傳へて給ふべしと。書流したる水莖の跡にとゞまる女房や。娘子共のほえん事。思ひやられてあはれなり。ト云うて泣く。シテ〽この様な事とは知らず。妻子が待兼ねてゐるであらう。アド〽誠にいつも戻る時分ぢやと思うて待つてゐるであらう。シテ〽殊に當月は伊勢講の當番ぢや。是過ぎてから死にたいものぢや。アド〽身共も夜咄しにゆく契約をしておいた。ならう事なら是過ぎてから死にたい物ぢや。シテ〽是は畢竟人の知つた事ではなし。そなたと身共が了簡すればすむ事ぢやが。どうぞ思案はないかいやい。アド〽身共もあまり死にたうはない程に。堪忍をせぬかい。シテ〽それならば仲を直らう。アド〽それは誠か。シテ〽なか〳〵。アド〽なう〳〵。あまの命を拾うた。シテ〽此様な時は。いざどつと和歌を上げて去なう。アド〽一段とよからう。シテ〽思へば無用の死になりと。二人〽〳〵。ふたりの者は仲直り。

さるにても。かしこなあやまちしつらうと。手に手をとりてわが宿に。犬死せでぞ歸りける。〳〵。シテ〽なうそなたと。アド〽そなたと。シテ〽五百八十年。アド〽七巡り。シテ〽それこそ目出度けれ。こちへわたい。アド〽心得た〳〵。ト云うて○とめて入る。

文蔵（ぶんざう）

シテ　主人
アド　太郎冠者
（入道具）

シテ〽この邊りの者で御座る。某一人召使ふ太郎冠者が身に暇も乞はず。何方へやら參つて御座る。聞けば夜前歸つたと申せども。まだ目見えな致さぬ。今日は彼奴が私宅へ立越えう。ただかり出し。屹度折檻の加へうと存ずる。先づ急いで參らう。シカ〳〵。誠に。憎い奴で御座る。身に一言の斷りを申して御座らば。いか程なりとも暇をとらせうものを。出し拔いて參つた段。言語道斷憎い仕合せで御座る。何かといふうちに彼奴が私宅は早や是ぢや。某が聲と聞き知つたらば。留守を使ふで御座らう。作り聲をして呼び出さうと存ずる。物もう。案内もう。アド〽やら奇持や。夜前罷り歸つたな早やどなたやら御存じあつて。表に案内がある。案内とは誰そ。シテ〽物もう。アド〽どなたで御座る。シテ〽しさり居れ。アド〽はア。シテ〽俄かの餘勤迷惑致す。ちとお手な上げられい。シテ〽これは何とも迷惑に存じまする。シテ〽己れは此のうち誰に暇な乞うて何方へ往た。アド〽されぱのことで御座る。お暇の儀な申上げうと存じてには御座れども。一人召使はるゝ下人のことで御座れば。申したりともやはか下されまいと存じて。忍うで京内詣を致いて御座る。シテ〽やら珍しや。一人召使ふ下人が京内詣なすればとて。主に暇な乞はぬが法ですか。アド〽ハア。シテ〽エイ。アド〽ハア。シテ〽憎い奴の。屹度折檻の致さうと思うて是迄は來たれども。京内詣なしたといへば。都の事も懷しい。此度は宥す。そこを立て。アド〽それは誠で御座るか。シテ〽弓矢八幡助くるぞ。アド〽やら心安や。シテ〽何と今の間は窮屈にあつたか。アド〽いつもの御氣色とは違ひまして。すはお手打にもあひまするかと存じて。身の毛をつめて居りました。シテ〽さうであらう。身もいつもより腹が立つた。以來を屹度たしなめ。アド〽畏まつて御座る。シテ〽さて汝は京内詣なしたといふが。何と都は賑かなことか。アド〽なか〳〵。東山の御遊山。西山の花見などと申して。推しも分けられたことでは御座らぬ。シテ〽何がさて〳〵。花の都ぢやもの。さう無うては叶はぬ。さて何も變つた事もなかつたか。アド〽別に變つたも御座らぬが。私は東福寺の伯父御樣へ御見舞申して御座る。シテ〽何ぢや伯父ぢや人の方へ寄つた。アド〽左樣で御座る。シテ〽これはいかなことその樣なことゝ知つたらば。言傳なりともせうものを。アド〽それは私がさし心得て申して御座る。シド〽何ぢや言うた。アド〽ハア。シテ〽それは出來いた。さてあの伯父御は變つた人で。人を一人見かくると。何なりとも珍らしい物を振舞ふ人ぢやが。何も喰うては來なんだか。アド〽成る程。珍らしい物を喰べて參りました。シテ〽さうであらう。して何を喰うた。アド〽物で御座る。シテ〽何であつた。アド〽何やらで御座りました。シテ〽忘れたか。アド〽忘れました。シテ〽朝であつたか晝であつたか。アド〽朝で御座つた。シテ〽朝ならば昆布に山椒をまいて。梅干でよい茶を吞うだか。アド〽いや。左樣のものでは御座りませぬ。シテ〽それならば點心の

類ではなかつたか。アドへ點心の類て御座りました。シテへ點心の類ならば。饂飩か温麥熱麥。どうじゆ麥。但し饅頭ではなかつたか。アドへいや左様な物では御座らぬ。シテへそれならばかんの類か。アドへ先づそれも仰せられて御らうじませ。シテへかんにとつては。砂糖か羊羹。アドへいや。シテへきよかん。アドへいや。シテへうんぜんかん。もんぜんかん。シテへ大寒小寒ばし喰らうてあるか。アドへいや。シテへしさり居れ。アドへはあ。シテへさて己れは憎い奴の。常の物覺が惡いに依つて。覺えにくい事は物によそへてなりとも覺えいといひつけて置くに。まして己れが喰うた物を忘るゝといふことがあるものか。アドへその物によそへてと仰せらるゝに就いて。思ひ出して御座る。シテへまた思ひ出さいでならうか。アドへ常々お前の好いてお讀みなさるゝ物の本の中にある物を下されて御座る。シテへ身共が常々好いて讀むは。源平盛衰記。中にも石橋山の合戦の所を好いて讀むが。若し其の内にある物を喰うたか。アドへその合戦の所を下されて御座る。シテへ何ぢや。合戦の所を喰うた。アドへ左様で御座る。シテへさて手ひどいところを喰うたなア。アドへはあ。シテへ總じて身共は惡い癖で。人に物を問ひかゝつて問ひおほせれば氣掛りな。語らう程に床几を出しい。アドへ畏まつて御座る。お床几。腰かける。シテへ違棚に盛衰記の書いたものがあらう。取つて來い。アドへはあ。シテへこりや〳〵。この中は節々讀めば。半巻ばかりは空でも覺えて居る。語らう程に。それならばそれと答へい。アドへ畏まつて御座る。シテ語へ抑も石橋山の合戦は。治承四年八月十七日　兵衛佐頼朝は。北條蛭ヶ小島を打立ち給ふ。御勢三百餘騎には過ぎざりけり。爰に土肥の杉山は。要害よき所とて。城郭を構へ給ふ。また平家の侍に。大庭三郎といつし者。三千餘騎を三手に作り。石橋小早川に押寄せ陣をとる。源氏の方には三百餘騎。平家の方には三千餘騎。三千餘騎と三百餘騎を合すれば十分が一分なれども。君の御運の目出度き故。人の心が一つに揃うて。火花を散らし合戦したる所をばし喰うてあるか。アドへいや。そこでは御座らぬ。シテへさりとはいへども。晝の間は合戦互角なり。夜軍になりて相手組を定め給ふ。源氏の方には岡崎の惡四郎が嫡子。眞田の與市義貞をたつて出す。與市が其の日の装束には。肌には皆白折つて一重ね。精好の大口に。副將軍を賜はれば。赤地の錦の直垂を。初めてこそは着たり

けれ。楊梅桃李の左右の小手。白檀磨きの脛當に緋威の大鎧。同じ色の五枚錣の兜に。鍬形うつてぞ被たりける。二尺三寸の鮫鞘巻の刀をさし。黄金作の太刀を鷗様に結んで下げ。二十四さいたる染羽の矢。頭高に取つて着け。滋籐の弓の眞中握り。馬は名を得し白蘆毛なる馬に乗り。木戸を開かせ。閑々と打つて出る。頃は八月二十日餘り。まだ宵は闇にて。敵の近づくとも目にはさやかに見えねども。荻の上葉を吹く風の。そよとばかりに訪れて。秋の夜の片割れ月の片々も。落ちてぞ水の底にこそ。澄めといふ此の歌の心を以て。土肥の杉山の高嶺を出でし月影に。鍬形のひらり〳〵とひらめくにぞ。眞田なりとぞ知られける。といふ所をばし喰うてあるか。アドへいや。そこでも御座らぬ。シテへ何ぢや。爰でもない。アドへはあ。シテへまた平家の方には眞田一人討たんとて。坂東に聞ゆる兵を三騎えつて出す。一人は大庭が舍弟に俣野。二人は長尾の新五新六なり。俣野がその日の装束には。皆白折つて一重ね。精好の大口に。褐の鎧直垂の。四つの括りを雁字と締め。黒草威の大鎧。同じ色の五枚兜に。高角折つてぞ着たりける。一尺八寸の黄金作の刀をさし。

大中黒の征矢を。鶴の如くに取つてつけ。塗籠の胴の弓の眞中握り。馬は日暮しといふ馬に。豹の皮の貼鞍。虎の皮の切附。熊の皮の障泥をさし。我が身輕げにゆらりと乗り。五尺三寸をするりと抜き。眞向にかざし。揉みに揉うでぞ驅け合ひける。されども眞田は俣野ばかりに目をかけて。物合近くなりしかば。二討ち三討ち討つぞと見えし。寄れ組まんと鎧の袖をひつ違へ。馬の上にてむんずと組み。兩馬の間にどうと落つる。所は難儀の惡所なれば。下よりもえいと跳ればころりと轉び。えいやと跳ぬればころりと轉び。譬へば板屋の霰たばちるが如く。ころり〳〵と轉ぶ程に。落着く所は俣野が上になりしかども。されども眞田は力勝りの武者なれば。下よりもえいやといつて跳返し。俣野を取つて抑へ。兜をかなぐり捨て。亂髪を掴んであげ。首をかけども〳〵かゝれず。不思議さよと思ひ雲隙に刀を見てあれば。鮫鞘巻の鞘つまり。繰形もげて鞘ながらあり。口に咬へて抜くべきを。若氣の致すところにや。冠の板に押しあてゝ。丁々と打ちければ。抜けはせずして此の刀。目釘よりほつきと折れ。波打際にさつと入る。大いに呆れて居たりしところに。長尾の新五

新六下り合ひ。見れば武者二騎組んでおり。上が俣野か下が俣野か。名乗れ〳〵と問ひければ。下よりも我こそ俣野ぞ。下り合ひ給へといふ聲に。上なる眞田が首を討つて。下なる俣野をとつて引立て。鎧の塵を打拂ひ〳〵。三人目と目をきつと見合せ。につこと笑うて立つたる隙に。遙の空を見れば老武者の。一騎尾花蘆毛の馬に乗り。白綾威の腹巻に。白柄の長刀かい込うで。荻薄を掻き分け〳〵。なう眞田殿。與市殿と呼うで通る。新五新六驅け合ひ。おことは誰ぞと尋ぬれば。眞田の與市が乳母親に文三と答ふる。アドへあゝまうし。その文三を下されて御座る。シテへ何ぢや文三を喰うた。アドへ左様で御座る。シテへ文三といふは人の名ぞ。なか〳〵歯に當てらるゝ物ではないぞ。扨は汝が云ふは。忝くも釋尊出山の御時。靈鷲山にて師走八日にきこし召された溫糟粥のことであらう。アドへ成る程。その溫糟粥のことで御座る。シテへそれは溫精。これは文三。溫糟文三の類も知らいで。主によい骨を折らせた。しさり居れ。アドへはあ。常の如く叱り。留めて入るなり。

【ほ】

棒縛（ぼつしばり）

シテ　太郎冠者
アド　主人
小アド　次郎冠者
（入道具）

アドへこの邊りの者で御座る。某留守になれば。兩人の者が酒を盜んで飲むと申す。今日きつと思案致して御座る。先づ次郎冠者を呼出し申付ける事が御座る。（ト言うて次郎冠者呼ぶ。出るも常の如し。）汝呼出す別の事でない。太郎冠者が不奉公するに依つて。縛つて置かうと思ふが何とであらう。小アドへいか樣な事かは存じませぬが。私が内證できつと意見の加へませう程に。此度は御許されませ。アドへいや／＼氣遣ひをするな。暫く縛つて置かうと思ふ。小アドへさ樣なれば兎も角もで御座る。アドへ扨きやつはつうと心得た者ぢやに依つて。聊爾には縛られまい。何としたものであらう。小アドへいやきやつは此のうち棒を稽古致しまする。其中に斯樣に致す手が御座る。そこなお前と私と致して棒縛に會はせませうか。アドへ是は一段とよからう。それならば此繩を汝に渡して置かう。小アドへ畏まつて御座る。アドへ太郎冠者を是へ呼べ。小アドへ心得ました。太郎冠者召すは。シテへ何ぢや。召すと言ふか。小アドへ早うお出やれ。シテへ心得た。太郎冠者お前に。アドへさて汝呼出す別の事でない。聞けばそちは棒を稽古すると言ふ。ちと使うて見せぬか。シテへ是は思ひもよらぬ事を承りまする。私は終に棒など稽古した事は御座りませぬ。小アドへアヽこれ／＼隱さしますな。あなたにはよう御存じぢや。シテへ扨は汝が申上げたか。アドへいや／＼。次郎冠者は言はねども。身共がよう知つて居る。シテへ御存じの上は。隱しませう樣は御座らぬ。有り樣は嗜みの爲。一手二手習ひました。追付け使うてお目に掛けませう。アドへ早う使へ。シテへ畏まつて御座る。小アドへ早う使はしめ。シテへ心得た。（言うて棒取りには入る。）シテへそれ棒の手は樣々ありと雖も。私が習ひましたは斯樣に致す手が御座る。向うから打つて參るを跳ね上げまする。引く手も御座れば突く手も御座る。引く所をば掛入に致して。いや／＼／＼。アドへ出來た。シテへさて夜道などを通りまするには。擔げるか提げるかが大抵で御座る。私の習ひましたに。闇の夜に後から。斯樣に致すに早い理が御座る。打つて參るを。と。一先づ是で一くわは脫れまする。さて左から打つて參るを。いや。アドへ是は何とする。シテへ何と寄られますまいが。アドへいかな／＼寄れぬ。シテへ又右から打つて參るを。いや。小アドへ是は何とする。シテへ何と寄られまいが。小アドへいかな／＼寄れぬ。シテへ左右から進んで參るを。いや／＼。（ト言うて居る内。アドしいと言ふ。）二人へ捕つたぞ。シテへ是は何となされます。アドへ何とするとは覺えがあらう。シテへいや覺えは御座りませぬ。アドへ次郎冠者。きつと縛れ。小アドへ畏まつて御座る。アドへさうして居よう。（小アド笑ふ。）小アドへよいなりな。とても縛らるゝなれば。かう縛られたがよい。（ト言うて後へ手を廻はす。アド括る。）アドへ捕つたぞ。小アドへ是は何となされます。シテへきつとお縛りなされませ。アドへ何とするとは覺えがあらう。小アドへいや覺えは御座らぬ。アドへさうしてゐよう。シテへ申し／＼。兩人斯樣にお縛りなさるゝは。どうした事で御座る。アドへ不審尤もぢや。いつも身共が留守になれば。兩人共酒を盜んで飲

むと聞いた。今日も用事あつて山一つあなたへ行く。追付け戻つて解いてとらせうぞ。シテ〽もし是では御留守がなりませぬ。アド〽追付け戻つて解いてとらせう。小アド〽もし。シテ〽申し。ト言うて。アド中入。樂屋の方へ兩人見送り。シテ〽出られた。小アド〽お出やつた。シテ〽常々そちが酒を盗んで飲むに依つて。此樣にお縛りなされた。小アド〽何を言ふ。そちが常々酒を盗んで飲むに依つて。科も無い身共迄此樣にお縛りなされた。シテ〽と言うて身から出た錆ぢや。仕樣事が無い。小アド〽何れ仕樣事が無い。シテ〽何と此樣に縛られて居ても。酒が飲みたいではないか。小アド〽何れ飲みたい事ぢや。シテ〽飲む事こそならね。酒藏へいて匂ひなりとも嗅がうか。小アド〽一段とよからう。シテ〽それならば。さあ〳〵來い〳〵。小アド〽心得た。シテ〽さて身共等が酒を飲む事を。誰が申上げて御存じぢや知らぬ。小アド〽されば誰が申上げたてあらうぞ。シテ〽定めて意地の惡い者が申上げたであらう。小アド〽大方左樣な事であらう。シテ〽いや何かと言ふ内に酒藏ぢや。小アド〽誠に酒藏ぢや。シテ〽先づ戸を明けよう。小アド〽明かうかの。シテ〽先づ明けて見よう。ト言うて。左右へ棒の先で明けて見る。びんざい。ト引く。ぐわら〳〵〳〵〳〵。明いた〳〵。ト言うて。這入る當なり。這入れ〳〵。小アド〽心得た〳〵。シテ〽是は夥しい酒ぢや。小アド〽誠に夥しい酒ぢや。シテ〽さて是はどれにしたものであらう。小アド〽あの澁紙でおひのしたのがよからう。シテ〽それならば先づ蓋を取つて見よう。小アド〽取れよかの。シテ〽先づ取つて見よう。ト言うて。紐を解く心なり。シテ〽ムリ〳〵〳〵。ト言うて蓋を明ける。さあ〳〵明いた〳〵。小アド〽誠に明いた。シテ〽さあ〳〵是へ寄つて嗅げ。小アド〽心得た。ト言うて。はたへ寄つて嗅ぐ。シテ〽よい匂ひぢや。小アド〽何れよい匂ひぢや。シテ〽匂ひを嗅がぬ内は此樣にもなかつたが。匂ひを嗅いだれば。蟲が取りのぼせて。どうも堪忍がならぬ。小アド〽何れ堪忍がならぬ。シテ〽何とか飲み樣の有りさうなものぢやが。小アド〽何れ何とか飲み樣のありさうなものぢや。シテ〽よい仕樣がある。是で汲むは。小アド〽汲めよかの。シテ〽先づ汲んで見よう。ト言うて汲む。シテ〽さて是は汝からと言ひたけれども。身共から飲まう。小アド〽お飲みあれ。ト言うて飲む。シテ〽飲めぬは。小アド〽飲めぬか。それならば身共に飲ませておくりやれ。シテ〽汝が飲むか。小アド〽中々。シテ〽それ

ならば。さあ〳〵お飲みあれ。小アド〽静かに〳〵。シテ〽こぼすな〳〵。ト言うて飲む。小アド〽扨々よい酒ぢや。シテ〽何とよい酒か。小アド〽中々。シテ〽ま一つ汲んで見よう。小アド〽汲んでお見やれ。シテ〽ま一つ飲んで見よう。ト言うて飲む。仕様色々。シテ〽どうも飲まれぬ。小アド〽まだ身共に飲ませておくりやれ。ト言うて。前の通り。シテ飲ます。シテ〽どうぞ身共も一つ飲みたいものぢや。小アド〽わごりよにも飲ませたいものぢやが。ト言うて。次郎冠者後向く。シテ見付けて。シテ〽よい仕様がある。次郎冠者そちら向け。小アド〽かうか。シテ〽是れ持つておくりやれ。小アド〽心得た。是はよいしかうぢや。シテ〽扨々よい酒ぢや。小アド〽よい酒であらうが。シテ〽もう一つ飲む程に。持つておくりやれ。小アド〽幾度でも持つてやらう。シテ〽さあさあ持つておくりやれ。小アド〽心得た〳〵。シテ〽隨分靜かにしておくりやれ。小アド〽こぼすな〳〵。ト言うて飲む。シテ〽扨々よい酒ぢや。ちと謠はうか。小アド〽一段とよからう。シテざゞんざを謠ふ。笑ふ。シテ〽一段の酒盛になつた。小アド〽その通りぢや。シテ〽さあ〳〵。次郎冠者。一差しお舞やれ。小アド〽此樣に縛られて。何と舞が舞はるゝものぢや。シテ〽それが面白い程にお舞やれ。小アド〽それならば舞はう程に。地を謠うておくりやれ。シテ〽心得た。小アド七つ子を舞ふ。シテ〽よいや〳〵。小アド小謠。小アド〽さあ〳〵。此度はそなたお舞やれ。シテ〽身共は此樣に取りひろげた體で。許しておくりやれ。小アド〽許せといふ事があるものか。ひらにお舞やれ。シテ〽それならば舞はう程に。地を謠うておくりやれ。小アド〽心得た。シテ曉の明星を舞ふ。小アド〽よいや〳〵。シテ兵を謠ふ。アド〽漸う只今戻つて御座る。定めて兩人の者が待兼ねて居るで御座らう。是はいかな事。あの樣に縛つて置いても酒を飲むは。扨々憎いやつぢや。シテ〽やい〳〵次郎冠者。此樣に縛られて居ても酒を飲むは。兵ではないか。小アド〽何れ兵ぢや。シテ〽やい次郎冠者。頼うだ人は。此樣に縛つて置いても。酒を飲むか〳〵と思はるゝやら。その執心が此盃に映るは。小アド〽何を譯も無い事を言ふ。其樣な事があるものか。シテ〽是へ寄つて見よ。小アド〽どれ〳〵。何もないぞよ。シテ〽たつた今迄あつたが。それ〳〵。出たは〳〵。シテ〽扨々憎さうな顔ぢやなあ。小アド〽誠に。憎々さうな顔ぢや。シテ〽何とこの體を謠に作つて謠はうか。小アド〽一段とよからう。シテ〽汝も謠へ。小アド〽心得た。シテ〽嬉しや愛に酒あり。小アド〽主は一人。シテ〽影は二人。二人〽みつしほの夜の盃に主を載せて。主とも思はぬ内の者かな。アド〽がつきめ〳〵。小アド〽御許されませ〳〵。シテ〽是は身共一人になつた。アド〽ヤイそこなやつ。シテ〽やあ。アド〽是は何とする。シテ〽やあ。アド〽己れは憎いやつの。シテ〽御許されませ〳〵。アド〽あの橫著者。やるまいぞ〳〵。ト言うて。追込み入る也。

北條種（ほうでうのたね）

シテ　甥
アド　伯父
（入道具）

シテ〽この邊りの者でござる。山一つあなたに伯父を持つてござる。度々行き見舞を致すに。嘘の咄を上手に申さるゝ。癖とは申し乍ら。戯事に度々騙されると存ずれば腹が立つ。何卒此方より嘘の咄を二つ三つ拵へて參つて。伯父に云ひ勝つて參らうと存ずる。シカ〳〵。何れ名譽な人でござる。度々の事ぢやに依つて。同じ樣な事を云はれさうなもの

な。つひに似た咄も致されぬさり乍ら。身共も隨分珍らしい咄を作つたに依つて。今日ばかりは負とは存ぜぬ。何かと云ふ内にこれぢや。ト云うて。案内を乞ふ。常の如し。アドへ扨々このうちは久しく見えなんだ。何としてわせなんだ。シテへ私も此の間は富士詣を致して。それ故參りませなんだ。アドへ扨々それは奇特でこそあれ。道中は賑かな事か。シテへ中々。賑かでござる。さて承及うだよりは大山でござる。アドへ三國一の名山ぢやと云ふ程に。さうなうては叶はぬ。さて何も變つた事はないか。シテへ別に珍しい事もござらぬが。甲斐の國に懸りまして。富士の裾野に泊りまして御座るが。大勢の道者でござつて。色々咄を致すに。屈竟の若者が寄り合ひまして。富士の山に紙袋を着せうと申してござる。その時皆申すは。あの山に何と紙袋が着せられうぞと申してござれば。成程着せて見せうと申して。先づ大勢の若者が。兩の手足。口。この五つ所に竹篦を持つて。そつくひを練る程に／＼。山の如く練りためて。伊豆駿河中の紙取り寄せて。紙袋を拵へて着せると存じたらば。さはなうて。富士の裾野から紙にそくひを付けて。ひたつぎにつぎ登り。見てゐる間に。大山に紙袋を着せてござる。何と珍らしい事を致したではござらぬか。アドへその樣な事もあるまいとは云はれぬ。去年某用事あつて江州へ下つた時。近江一ヶ國の若い者が寄集つて。湖を茶にたてゝ呑干したを見ておりやる。シテへ又嘘を仰せらるゝ。何とあの湖水が呑みほさるゝものでござる。アドへ先づお聞きあれ。いざ湖を茶にたてゝ呑干さうとて。五畿内より茶の善悪を構はず大分取寄せて。近江中の者共が。我も／＼と引く程に。刹那が内に三上山程茶をためて。扨かの湖の中へどうと入れ。柄長さ三拾間ばかりもあらうくは筅を大分拵へて。大力の若い者が大勢海のぐるりを取巻いて。かのくは筅で立てまはいて。泡をふつと吹き除けて。つうとは呑み。／＼。終に湖を呑みほした。その時の泡のかたまりが。粟津が原と云うて今に殘つてある。シテへ扨々嘘を仰せらるゝ。あれは木曾義仲の軍物語にも出てある粟津が原でござる。アドへその脇に新粟津が原と云うて。去年から出來ておりやる。シテへそれは嘘でござる。アドへ嘘と思はゞ。今からでも見ておりやれ。シテへそれならば是非に及ばぬ。私はこの以前西國の方へ參つた時。播磨の印南野に寢てゐて。淡路島の草を食うた牛を見ました。あの海川山を隔てゝ。淡路島の草を食ふと申す。何と大きな牛ではござらぬか。アドへそれもあるまいとは云はれぬ。某が關東へ下つた時。三里四方の太鼓を見た。シテへ扨々きようがる事を仰せらるゝ。尤も太鼓の胴は。木を曲げてなりとも。木を繼ぎ合せてなりともしませう。三里四方ある太鼓に張る皮がござるまい。アドへいやあるまいと云はれまい。最前そなたのおしやつた播磨印南野に寢てゐて。淡路島の草を食うた牛の皮であつたも知つてこそ。シテへ南無三寶。又ゆはされた。何を隱しませう。そなたが餘り嘘の咄な上手にして。身共を嬲らせらるゝが無念さに。今日は私も勝たうと存じて。嘘の咄を二つ三つ種を拵へて參りましたれども。中々そなたの口には勝たれませぬ。何としてその樣に嘘の咄を上手になさるゝ。アドへその樣な事では中々身共に勝つ事はならぬ。餘所の人には云はれども。わごりよの事ぢやに依つて。云うて聞かせう。これには物とした事がある。シテへそれは何でござる。アドへ北條の種と云つて嘘の種がある。望みならば一粒やらうか。シテへどうぞ一粒下され。アドへ暫くそれにお待ちやれ。

シテ〽心得ました。アド〽これはいかな事。世にはうつけた者がある。嘘の種を呉れいと申す。さ〳〵歸つて歸さうと存ずる。なうなう。北條の種をおませう。シテ〽これへ下され。アド〽庭に埋んでおいた。掘つて取つて行かしめ。シテ〽心得ました。アド〽則ちこの飛石の際にあると思ふ。シテ〽こゝでござるか。アド〽そこを掘らしめ。シテ〽こゝにはござらぬ。（ト云うて。扇の尻にて掘る體する。）アド〽もそつと深う掘らしめ。シテ〽ござりませぬ。アド〽イヤ思ひ出した。この松の木蔭を掘らしめ。シテ〽心得ました。（ト云うて又掘る。）アド〽ある〳〵。シテ〽ござりませぬ。アド〽もそつと深う掘らしめ。シテ〽なんぼ掘つてもござらぬ。アド〽ヤイうつけ者。その無いのを北條の種と云ふ。シテ〽扨はこれも嘘か。アド〽以ての外の嘘ぢや。（ト云うて。笑ひ入るなり。）シテ〽如何に伯父ぢやと云うて。餘りな事ぢや。やるまいぞ〳〵。（ト云うて跡を追ひ込む。常の如し。）

骨皮（ほねかは）

シテ　新發意
アド　庵主
小アド　所の者
（入道具）

アド〽當庵の住持で御座る。某久しく此の寺に住居致して御座るに依つて。新發意に此の寺を讓らうと存ずる。（ト云うて。呼出す。常の如し。）愚僧も此の寺に久しく住居して殊の外辛勞な。幸ひ今日（こんにち）は吉日でもあり。此の寺をそなたへ讓らうと思ふが。何とあらう。シテ〽それはまだ遲からぬ事で御座る。アド〽さう云ふは定めて遲いといふ事であらう。とうにも讓らうと思つたれども。かれこれ延引したさりながら。見事この寺をふまへようと思はしますか。シテ〽なか〳〵。風が吹きましたらば。屋根の棟に上つて。ぢつとふまへて居ませう。アド〽さても〳〵。むさとした事をおしやる。此の寺をふまへると云ふは。まづ朝起きをせねばならず。佛前の掃き掃除。佛に香花を立て。第一檀那應答を大事にかければならぬ。これをよう寺をふまへると云ふ程に。さう心得さしめ。シテ〽畏まつて御座る。アド〽愚僧も隱居すると云うて。よそ外へ行くでもない。此の奥に引込うで居る。何なりとも用があらばおしやれ。シテ〽心得ました。アド〽必ず〳〵檀那應答を大事に召され。（シテうける。アト脇座に居る。）

シテ〽なう〳〵。嬉しや〳〵。老僧も隱居せられて。向後この寺の住持になつた。隨分念を入れてあしらはうと存ずる。小アド〽此邊りの者で御座る。山一つあなたへ參る。俄に雨が降りさうになつて來た。お寺へ參つて傘を借（か）つて參らうと存ずる。何かと云ふうちこれぢや。（ト云うて。案内を乞ふ。出るも常の如し。）シテ〽エイこゝな。そなたに悦ばす事がある。小アド〽それは何で御座る。シテ〽老僧も隱居せられて。今日から私が此の寺の住持に成つて御座る。小アド〽それは目出度いことで御座る。さやうの事を存じたらば。人を以てなりとも申さうに。かつて存じませなんだ。シテ〽御存じない筈で御座る。今日唯今の事で御座る。小アド〽さて唯今參ること別の事で御座らぬ。山一つあなたへ參る。俄に雨が降りさうに御座る。傘を貸して下され。シテ〽やすい事で御座る。貸しませう程に。暫くそれに待たせられい。小アド〽心得ました。シテ〽これをさいて御座れ。小アド〽これは結構な傘で御座る。もそつと麁相なを借して下され。シテ〽老僧の祕藏の傘なれども。貸しまする。（ト云うて。暇乞する。常の如し。）小アド〽忝う御座る。もうかう參る。シテ〽檀

邪あしらひな大事にかけと仰せられた。申して悦ばせう。まうし御座りますか。アドへ何事でおりやる。シテへ唯今誰殿が見えまして。傘な貸してくれいと仰せありましたに依つて。傘貸しました。アドへそれはどの傘なお貸しやつた。シテへ此のうち張替へましたな貸しました。アドへこれはいかなこと。出家がたつた一本嗜みに取つて置いた傘な。貸すと云ふことがあるものか。シテへでも檀那あしらひな大事にせいと仰せられたに依つて貸しました。アドへされば貸すまいと云ふことはならぬ。此の様な事には言様がある。例へば。此のうち老僧がさいて出られましたれば。折節嵐が吹きまして。骨は骨。紙は紙と吹き破つて御座るな。眞中なみぢと結へて。天井へ打上げて置きました。此度の御役にはえ立ちませぬと云うて貸さぬものでおりやる。シテへ畏まつて御座る。アドへさう心得さしめ。シテへこれはいかな事。賞められうと思うたれば。思の外の事ぢや。重ねてはぬかる事では御座らぬ。馬カリへ此の邊りの者で御座る。用事あつて山一つあなたへ參る。殊の外辛勞な。お寺へ參つて。馬な借つて乘つて參らうと存ずる。ト云うて案内。馬カリへ用向きがあつて遠方へ參る。殊の外辛勞に御座る。どうぞ馬なお貸しなされて下され。シテへ易い事で御座れども。此のうち老僧がさいて參られましたれば。折節嵐が吹きまして。骨は骨。皮は皮と吹破つて御座るに依つて。眞中なみぢと結へ。天井へ打上げて置きました。此度の御役には立たいで殘り多う御座る。馬カリへ私の申しまするは馬で御座る。シテへなるほど馬の事で御座る。馬カリへあの馬がや。シテへなかなか。馬カリへそれならば是非に及びませぬ。もうかう參りませう。シテへもう御座るか。ト云うて暇乞する。常の如し。シテへこれは定めて氣に入るであらう。申して悦ばせうと存ずる。御座るか。アドへ何事ぢや。シテへ唯今誰殿が見えまして。馬な貸してくれいと仰せられて御座るに依つて。お前の仰せられた通りな云うて貸しませなんだ。アドへ愚僧は何も馬のことは云はぬが。先づ何とおしやつた。シテへ此のうち老僧がさいて參りましたれば。折節嵐が吹きまして。骨は骨。皮は皮と。吹破つて御座るに依つて。眞中なみぢと結へ。天井へ上げて置きました。御役に立たいで殘り多いと申して貸しませなんだ。アドへそれは馬の事にか。シテへなか〳〵。アドへこれはいかなこと。愚僧が云ふは傘の事ぢや。どこにか馬なさいて行くと云ふことがあるものか。馬ならば馬で言ひ様がある。此のうち青草荷な附けて御座れば。駄狂ひな致して腰が拔けましたに依つて。庭の奥へつないで置きました。御役に立たいで殘り多い事で御座るなどと云うて。貸さぬものでおりやる。シテへ畏まつて御座る。アドへまた違うた。重ねては合點ぢや。齋へ此の邊りの者で御座る。明日は志す日で御座る。お寺へ參つてお齋の事な約束して參らうと存ずる。ト云うて案内。シテへこなたに悦ばす事がある。トキへそれは何で御座る。シテへ老僧が隱居せられたに依つて。今日から私が此の寺の住持で御座る。トキへそれは目出度い事で御座る。存じませいで御悦びも申しませなんだ。シテへイヤ御存じない筈で御座る。トキへさて唯今參ること別の儀で御座らぬ。明日は志す日に當つて御座る。お齋な上げませう程に。老僧様にもお前にも。お參りなされて下され。シテへ私が參りませうが。老僧はえ參られますまい。トキへなんぞ御隙入りでも御座りまするか。シテへ別に隙入りも御座らぬが。此のうち青草荷な附けて御座れば。駄狂ひな致されて。腰

が抜けまして。厩の隅につないで置きました。あの通りならばえ参りまするまい。シテへなか／＼。齋へそれは老僧様で御座るか。シテへなか／＼。齋へこれはいかなこと。それならばお前ばかりお参りなされて下され。シテへなるほど。私ばかり参りませう。齋へさて唯今のことを。私の前では苦しう御座らぬが。必ず他言な御無用で御座る。シテへいかな／＼。他言致す事では御座らぬ。ト云うて。暇乞常の如し。シテへいかなりとも。これは氣に入るで御座らう。申して悦ばせう。まうし御座りまするか。アドへ何と召された。シテへ唯今誰殿が見えまして。明日は志す日で御座るに依つて。お前にも私にも。參つて呉れと申されて御座る。アドへなる程。幸ひ隙入もない。行かうぞ。シテへいやお前にはなるまいと申して御座る。アドへそれはまたどうした事ぢや。シテへはて此のうち青草荷を附けて御座れば。駄狂ひを致して。厩の隅につないで置きましたれば。あの體（てい）ならばえ參られますまいと申して御座る。アドへそれは愚僧か。シテへなか／＼。アドへあのこの坊主がや。シテへおんでもない事。アドへさて／＼憎い奴の。出家が駄狂ひをすると云ふことがあるものか。シテへ餘りないと云ふ事でもあるまい。仰山に云ふ人ぢや。アドへない事ではあるまいとは人聞き悪い。愚僧がいつ其の様な事がある。シテへ云うたらば。恥であらう。アドへ恥になることは持たぬ。あらばいへ。シテへさらば申さう。いつぞや門前のいちやが齋米を持つて來た時。いやと云ふものを無理に眠藏（めんざう）へ連れていて。知らぬかと思うて。ト云うて笑ふ。アドへやい／＼。あれはつうと信心な者で。十念を授かりたいと云うたに依つて。授けてやつたのぢやが。それが何とした。シテへなんぼうの十念も聞いたが。ひと時もふた時も。塔の鳩の呻く様な十念は聞いた事がない。ト云うて笑ふ。アドへこゝな奴にもの言はせば方途がない事を云ふ。おのれの様な奴はかうして置いたがよい。ト云うて。引廻し。打ちこかし。打擲して。追込むなり。

盆山（ぼんさん）

シテ　盗人
アド　主人
（入道具）

シテへこの邊りの者で御座る。此のうち世間に盆山のはやるは夥しい事で御座る。爰に何某殿と申す方に。盆山を數多持たれたによつて。是を一つ所望致せども。何かと云うて呉れられぬ。餘り欲しう御座る程に。今晩忍び入つて。案内なしに貰うて歸らうと存ずる。先づ斯様の事は宵からつけたがよいと申す。先づ急いで參らう。シカ／＼。誠に。吝い人で御座る。常に心安う致す其上たくさんにある盆山を。一つなど呉れられたとあつて苦しうない事を。何かと云うて惜しまるゝ。參る程に是ぢや。是は勝手を直されたか。表からなか／＼はいられさうな様子ではないが。何とせうぞ。いや是は裏へ廻つて見よう。シカ／＼。さりながら。裏も此様に締りがあれば這入られまいが。何とあるぞ。さればこそ表に似ぬ裏ぢや。この葭垣を越せば。あなたは坪の内ぢや。さらば葭垣を破らう。斯様の時の爲と存じて鋸を用意致した。ずか／＼。めり／＼／＼。ト云うて。耳をふさぎ。飛去り臥す。扨も／＼鳴つた事かな。今のめり／＼に驚いて身共が耳をふさいだ。某が耳をふさいだと云うて人が聞くまい事は。兎角しつけぬ事はうろたゆるもので御座る。何と人は聞かなんだか。人音もせぬ。先づ葭垣をくゞらう。是さへ越せば心安い。さて盆山はどれにあるぞ。ハヽア是にある。扨も／＼

斯う手にとつて見れば見事な盆山ぢや。爰にもある。なんと是にせうか。あれにせうか。アド〽夜中に人音がする。是は坪の内ぢや。やあ盗人さうな。裏へも表へも人をまはせ。盗人がはいつた。やるまいぞ〳〵。ト云うて。扇をぬぎ。太刀をぬいて。シテ〽わア聞付けたさうな。逃げずばなるまい。アド〽がつきめ。やらぬぞ。シテ〽南無三寶。ト云うて。扇をかざし。ワキ座に下に居る。アド〽是はいかな事。あの大きななりをして盆山の陰へ隠れたと云うて見えまい事は。よう見ればあれは誰ぢやが。何として盗人にはいつたぞ。豫て盆山を一つ所望致したが。それをやらぬによつて。盆山を盗みに參つたかぢやまで。それなれば外の盗人とは違うて愚かな者ぢや。さん〴〵になぶつて歸さうと存ずる。最前から盆山の影へ隠れた者を人かと思へば。あれは人でないぞ。シテ〽先づ人でないと云ふは。アド〽あれは犬ぢや。此のうち花壇を荒すはきやつであらう。シテ〽犬ぢやと云ふ。犬には見えまい事ぢやが。アド〽犬ならば人音を聞いておどしさうな物ぢやが。シテ〽いや犬の眞似をし。逃げて出ようと存ずる。びよう〳〵。アド〽啼いたは〳〵。ト云うて笑ふ。さて〳〵上手に眞似をする。もそつとなぶらう。犬かと思うたれば猿ぢや。山へは遠し。何とて猿が來た事ぢや。シテ〽猿ぢやといふ。猿には見えまい事ぢやが。アド〽疑ひない猿ぢや。猿ならば身ぜせりをして啼かう事ぢやが。シテ〽是も啼いて悦ばせう。身ぜせりをして。キヤ〳〵と云ふ。アド〽啼いたは〳〵。ト云うて笑ふ。扨々上手に眞似をする。何とぞ眞似を仕兼ねる事を云ひたいものぢやが。いや思ひ出した。最前から何と云うたは目違ひぢや。今よう見れば鯛ぢや。シテ〽今度は鯛ぢやと云ふ。アド〽海には遠し。鯛が何として來たぞ。シー〽どこが鯛に見えるぢやまで。アド〽鯛ならば鰭立てさうなものぢやが。シテ〽まづ鰭を立てる體を致さう。アド〽あれあれ鰭を立てた。鰭が立てゝからは必ずなくものぢや。啼かうぞよ。シテ〽わア鯛の啼き樣終にしらぬ。何とせうぞ。アド〽啼かずば鐵砲を持つて來い。打殺してのけうぞ。シテ〽是はなかずばなるまい。たい〳〵〳〵。ト云うて。飛んで入るなり。アド〽あの盗人よ。やるまいぞ〳〵。ト云うて追込み入るなり。

【ま】

枕物狂（まくらものぐるひ）

シテ　祖父
アド　孫
小アド　孫
乙　刑部三郎の娘
（入道具）

アド〽この邊りの者で御座る。某百年に餘る祖父御を持つて御座る。承れば此のうち戀をなさるゝと申す事で御座る。爰に某の樣な孫が御座る。これを呼出し相談を致さうと存ずる。なう御座るか。小アド〽是に居ます る。アド〽何と祖父御の事を聞かせられたか。小アド〽成程承りました。氣の毒な事で御座る。アド〽これは外聞もよろしうない事で御座る。其上孝行になりませうによつて。今日は參つて樣子を聞いて。なりさうな事ならばどうぞ叶へて進じたう御座るが。何と思召す。小アド〽成程是は一段とよう御座らう。アド〽それならばさあ〳〵御座れ。シカ〳〵。何れ年にこそよりませう。今あの祖父御の戀をなさるゝと申すは。思ひも寄らぬ事で御座る。小アド〽御意の通りで御座るさり乍ら。老の慰

みても御座る。どうぞ叶へて進じたいもので御座る。アドへ何かと云ふうちに是て御座る。先づ案内を乞ひませう。ものも。祖父御様御内に御座りますか。孫共がお見舞ひ申しまして御座るぞや。さがりは。打上げ。シテへ枕物にや狂ふらん。同へぬるもねられず起きられず。躪りや枕さへ後より戀のせめくれば。やすからざりし身の狂亂は新枕なりけり。シテへはりや筐のはり枕。同へはり筐のはり枕のぬしぞ戀しかりける。乙御前ぞ戀しかりける。シテへ逢ふ夜は君が手枕。同へ來ぬ夜は己が袖枕。枕あまりに床ひろし。シテへよれ枕。同へこちよれ枕まくらさへ我を疎むか。アドへ孫共がお見舞申して御座るぞや。シテへ何ぢや孫共。ホイ。ト云うて。太鼓座へ行き。扇を著る。枕をとつて懐中して。扇持ち出る。アドへ何と現ない體では御座らぬか。小アドへその通りで御座る。シテへえいえい孫共が見舞うたと云ふか。やれやれ珍しやよう來たなあ。先づ斯う通れ。此中もこの祖父は孫共には見限らるゝ。聞けば大名衆に人數多かゝへさせらるゝと聞いた程に。この祖父も鐵砲の者になりとも出うと思うてすは。此内小アド床几を出して。シテを腰掛けさせる。アドへお怨みの段は御尤もに存じます。何かと渡世に隙を得させいで御無沙汰致して御座る。シテへ其様な事とは知らず。祖父を見限つて來ぬかと思うていかう怨みた。さて今日は何と思うて來たぞ。アドへ只今參るは別の事でも御座らぬ。承れば祖父御様は戀をなさるゝと申す。誠で御座るか。シテへ何ぢや鯉を呉れう。やれやれ孝行な孫共や。さりながら。祖父は年寄つて齒が惡い。鯉を呉るゝとも魚頭中打はそなた達喰うて。身どころばかり呉れさしめ。アドへ成程鯉も上げませうず。承ればお前には戀をなさるゝと申すが。誠で御座るか。シテへ何ぢや。この祖父が戀をする。やれやれきようがる事を云ふ。戀の繼、墓のと云ふは。十九二十になる者の事。この祖父は目は惡し。腰は痛し。鯉やら鮒やら知り候はぬ。アドへなぜにお隱しなされまする。老の慰みでも御座ればあるまい事も御座らぬ。お包みなされずとも。ありやうに仰せられい。シテへ何程云ふとも。この祖父は其様な覺えもなけれども。爰に戀の恐ろし昔物語がある。語つて聞かせう。二人へ畏まつて御座る。シテへ扨も京極の御息所北野詣の御時。御輿の内よりも。御手ばかり少し出されしを。志賀寺の上人一目御覽じて御心うつり。しづ

心なき戀となり給ふ。同宿の人々。是は如何なる御事ぞや。斯樣の事は世にある習ひにて候程に。など御文を參らせられぬぞとありければ。其時上人の御歌に。初春の。初子の今日の玉箒。手に取るからにゆらぐ玉の緒と。ひとゆらめかしゆらめかされしに。御息所は御返歌に。極樂の。玉の臺の蓮葉に。我を誘へゆらぐ玉の緒と。又一ゆらめかしゆらめかされければ。上人これを御覽じて。戀の心さめ。いよ／＼貴き身となり給ふ。又柿の木の紀僧正は。染殿の后を戀ひ かれ。加茂の御手洗川に身を投げて。青き鬼となり給ふ。祖父もこの戀叶はずば。如何なる井戸の中へも身を投げて。青き鬼とは得ならずとも。青き蛙ともならばやと思ひ切つて候。戀と云へば仇にや人の思はん。胸に煙のたゝぬ間もなし。戀や戀。われ中空になすな戀。戀風が來ては袂にかいもつれて。なう袖の重さよ。戀風は重いものかの。南無阿彌陀佛／＼。アドへはや色に出させられて御座る。ならう事ならば。叶へて進じませう程に。此上は眞直ぐに仰せられい。シテへ恥しや。はや色に出たと云ふか。アドへさやうで御座る。シテへ此上は包まうやうもない。ありやうに云うて聞かせう。それ先月の地藏講は。上の刑部三郎ではなかつたか。アドへ成程刑部三郎で御座ります。シテへ三郎が娘にいちやと云うてあるな。アドへそのいちやで御座るか。シテへいやも云ふは。そのいちやが妹に乙と云うてある。アドへその乙の事で御座るか。シテへその乙が。この祖父はちと遲ういたれば。やれ祖父御は何とて遲なはらせ給ふぞ。早々おいでなされて。地藏の法號なも唱へさせられいでと云うて。につと笑うた顏を見たれば。うがひ茶碗程な靨が七八十ばかりも見えた程に。あら美しやと思うて。行き違ひ樣に乙が居所をふつゝりとつめつたれば。其時乙が物と云うた。アドへ何と。シテへ推參な祖父めや。同へ推參な祖父めや。極めて色は黑うて。口は歪みて目はくさり。老いぼれたるか祖父とて。シテへ鏡にてもうてかし。同へ紅皿にてもうたずして。この枕追取つて。祖父が額を丁どうつ。うたれて目は枕となりぬれど。たゞ戀しきは乙ごぜと。泪指してぞ泣き居たる。シテへ捨てゝもおかれず。同へとれば面影に立ちまさり。起臥しわかで枕より。後より戀のせめくれば。せん方枕に伏沈む事ぞ悲しき。ト云ふ内に。アド樂屋へ入り。乙をつれて出る。二人へいかにや如何に祖父御よ。是こそおことの尋ぬる乙ごぜよ。よく／＼寄りて見給へとよ。シテへどれどこに。したり／＼。怨めしやとくにもおいであるならば。斯樣に老の恥をば曝さじものな。あら面憎とは思へども。同へたま／＼逢へば乙ごぜが。實にもさあり。やよ。がりもさうよの。シテへなういとしい人。こちへわたい。乙へ心得ました。

孫聟

シテ　祖父
アド　舅
小アド　太郎冠者
ムコ

（入道具）

アドへ此邊りの者で御座る。今日は吉日なれば。聟がわする筈で御座る。先づ太郎冠者を呼出し申付くる事が御座る。ト云うて呼出す。常の如し。今日は吉日なれば聟がわする。兼ねて云付けた通り用意したか。小アドへ成程悉く用意致して御座る。アドへ扨それに就いて。又いつもの樣に祖父御が出させられて。物毎に差出させられうが。何としたものであらう。小アド

へされば何とがよう御座りませう、イヤ私の存じまするは。友達衆の方へ頼うで還し。あちらから呼ばせまして。その留守の間に御祝儀な御仕舞ひなされたらば。何とで御座りませう。アドへ是は一段とよからう。汝よい様にはからへ。小アドへ畏まつて御座る。常の如くつめる。シテへやあ〳〵何と云ふぞ。今日は最上吉日なれば。孫の聟がわするげな。それにこの祖父を嫌うて。友達方へ人をやつて。あちらから呼ばせ。その留守の間に祝儀な仕舞ふと云ふげな。其様な不心得な事があるものか。扨々憎いやつぢや。やい〳〵。太郎冠者〳〵。小アドへ是に居りまする。シテへ聞けば今日は孫の聟がわする。それにこの祖父を嫌うて。友達衆の方へ人をやつて。あちらから呼ばせ、その留守の間に祝儀な仕舞ふと云ふげな。其様な事があるかおのれ。小アドへいや私は存じませぬ。シテへ何ぢや。存じませぬ。おのれが知らいで誰が知るものぢや。小アドへまうし。あぶなう御座ります。シテへ己れは憎いやつの。アドへ先づお待ちなされませ。まづ是は何で御座る。シテへがそなたもそなたぢや。今日は孫の聟がわするげな。それにこの祖父を嫌うて。友達の方へ人をやつてあち

らから呼ばせ。その留守の間に祝儀な仕舞ふとおしやるげな。その様な不心得な事があるものでおりやるか。アドへ私は其様な事は曾て存じませぬ。シテへ先づ物はよく思案のしておみやれ。此様なめでたい時には。内に年寄がなければ。外から雇うてなりとも座敷へ直したがる。それに。内にある祖父を嫌ふといふ事があるものか。アドへ是は迷惑で御座る。何しにお前を嫌ひませうぞ。お年寄られて御苦労にこそ存じますれ。嫌ふでは御座りませぬ。シテへそれならば。おれを嫌ふではないか。アドへなか〳〵。嫌ふでは御座りませぬ。シテへそれならば太郎冠者が仕業ぢや。ちとお叱りや。アドへ畏まつて御座る。シテへさて今日はいよ〳〵聟がわするか。アドへ成程見ゆる筈で御座る。シテへこの祖父も座敷へ出うか。アドへ御苦労ながら。お出ましなされて下され。シテへそれならば。爰に待つて居よう。アドへ申し〳〵。シテへヤア。アドへまだ早う御座ります。シテへ何ぢや。まだ早いか。アドへさやうで御座る。シテへそれならば。奥の隠居へいて待つて居よう程に。よい加減にお知らしや。アドへ畏まつて御座る。シテへやい〳〵太郎冠者。よい時分に知らせよ。小アドへ畏まりました。シテへあの今日は孫の聟がわするか。アドへ成程見えまする。シテへおれも座敷へ出うか。アドへ御苦労ながら、お出ましなされて下されませ。シテへよい時分に知らしや。アドへ畏まつて御座る。シテへいよ〳〵今日は孫の聟が見ゆるの。アドへ成程見えまする。シテへこの祖父も座敷へ出うか。アドへ御苦労ながら御出ましなされて下されい。シテへよい時分に知らせてたもれ。アドへ畏まつて御座る。シテへやい〳〵太郎冠者。よい時分に知らせよ。小アドへ畏まつて御座る。シテへ扨も〳〵世話なやかしなる事かな。南無阿彌陀佛〳〵。ト云うて。中入する。考へ勤むべし。アドへ何と氣の毒な事ではないか。小アドへ氣の毒な事で御座る。アドへ隨分ひそかに仕舞ひ。若し聞付けて出させられたらば。よい様にはからへ。小アドへ畏まつて御座る。常の如くつめる。ムコへ舅に可愛がらるゝ花聟で御座る。今日は最上吉日で御座るによつて。聟入を致さうと存ずる。シカ〳〵。誠に。とうにも參る筈を。何かと致して遲なはつて。今日參つたらばさぞ悦ばるゝで御座らう。何かといふに是ぢや。ト云うて案内乞ふ。常の如し。ムコへ汝はこれの者か。小アドへこれの太郎冠者で御座る。ト云うて。常の如し。アドへ聟殿は雜

て御隙なしと承つて御座る。今日の御出で忝う御座る。此内祖父出るなり。シテへやあ／＼何と云ふぞ。はや聟がわせたと云ふか。太郎冠者／＼。どれに居る。小アドへ是に居ますする。テテへはや聟がわせたげな。祖父も座敷へ出うか。小アドへまだ早う御座りまする。シテへまだ早いか。それならば此處に待つてゐよう程に。よい時分に知らせ。小アドへ畏まつて御座る。ムコへ扨こなたにはめでたい祖父御様が御座ると承りましたが。どれに御座りまする。アドへ是は年が寄りまして。隠居家へ引込うで居られまする。ムコへどうぞお目に掛りたう御座る。アドへお會ひなされて下さるゝならば。呼びに遣しませう。太郎冠者。祖父御様に聟殿がお會ひなされたいと仰せらるゝ。御出でなされと云うて呼びまして來い。小アドへ畏まつて御座る。祖父御様に聟殿が御會ひなされたいと仰せられまする。御出でなされませ。シテへそれ見をれな。それぢやによつて。最前からおれが御敷へ出うと云ふものな。まだ早いの遅いのと。おのれが何を知つて。聟殿はこう儀者ぢやによつて。あちらからお呼びあるわい。それにおのれが小ざし出た。やい／＼太郎冠者。聟殿はどこに居らるゝ。小アドへそれに御座りまする。シテへ是か。小アドへさやうで御座る。シテへ是ぢやなあ。小アドへハア。シテへそなたは聟殿か。よう御座つた。なう／＼。今日はそなたが御座ると聞いて。嬉しうて／＼。今朝から長う短うなつて待つてゐました。ムコへそれは有難う存じまする。シテへやれ／＼よう御座つた。兄。よい聟殿ぢやのう。アドへよい聟殿で御座りまする。テテへわごりよも嬉しからう。アドへハア。シテへおこうは仕合せ者ぢや。アドへさやうで御座る。シテへハア。是はまだ盃が出ぬさうな。アドへさやうで御座る。太郎冠者。盃を出せ。シテへヤイ／＼太郎冠者。盃を出せ。小アドへ畏まつて御座る。シテへこなた聟殿か。よう御座つたのう／＼。小アドへお盃持ちました。シテへどれ／＼是はめでたい。この祖父が始めう。アドへよう御座りませう。シテへ聟殿。この盃はめでたくこの祖父が始めてこなたへ差しませう。ムコへそれは忝う存じまする。シテへ太郎冠者。うか／＼せずとも酌をせい。うけて飲む。さらば聟殿へ進ぜう。ムコへ頂きませう。シテへ幾久しうめでたう御座る。太郎冠者。注げ／＼。聟うけて。一つ飲む所を。シテへこれ／＼聟殿。そなた酒一つ参るか。ムコへ一つたべまする。シテへそれはよい事ぢや。も一つ参れ。ムコへさやうならばも一つ下されませう。太郎冠者。又ついで呉れい。又つぐ。飲む。シテへ聟殿。今日はそなたが見ゆるといふ事を聞いて。この祖父は今朝から長う短うなつて待つてゐました。斯う内輪になるからは何も遠慮にない。今から隠居へ直ぐに御座れ。酒飲うで遊びませう。ムコへそれは有難う存じまする。シテ聟のそばへ寄り。くどう云ふ。袖を引き。聟氣の毒がりて。目はじきする。ムコへさて是は慮外ながら祖父御様へ上げませう。シテへどれ／＼。頂きませう。ムコへたべよごして御座る。シテへ太郎冠者つげ。小アドへ畏まつて御座る。シテへ是を兄へ差しませう。アドへ頂きませう。シテへ一つお飲みやれ。聟うける内。シテへ聟殿。そなた酒一つ参るか。ムコへ一つ下されまする。シテへそれはよい事ぢや。男は酒を飲まいで役に立たぬ。祖父も酒か好きぢや。今から酒飲うで遊びませう。ムコへそれは忝う御座る。アド前の如くシテの袖を引く。アドへ是を聟殿へ進じませう。ムコへ頂きませう。アドへ太郎冠者。持つてゆけ。小アドへ畏まつて御座る。シテへ何をうか／＼しをるぞい。ムコ又うける。シテ酌をやらうと云ふなり。シテへ兄。アドへよう御座りませう。シテへこ

れ〳〵聟殿。肴な進ぜう。是はこの祖父が若い時手覺えのあるものぢや。今日の祝儀にそなたへ讓りませう。ムコ〽是は有難う存じまする。シテ〽よい公儀ぶりぢやのう。聟殿。こなた酒がなるか。ムコ〽一つ下されまする。シテ〽よい事ぢやのう。祖父も酒好きぢや。今から隱居家へ御座れ。酒飮うで遊びませう。（又袖を引く。）ムコ〽さて此盃は何と致しませう。シテ〽こちへ下され。アド〽いや。私がまだ結びが濟みませぬ。シテ〽まだ結ばぬか。それならばやらしやれ。ムコ〽慮外ながら上げませう。アド〽是へ下され。ムコ〽たべようごして御座る。アド〽苦しう御座らぬ。ムコ〽幾久しう目出度う御座る。シテ〽よい公儀ぶりの聟殿ぢや。そなたも酒一つ參るか。ムコ〽一つ下されまする。シテ〽おれも酒好きぢや。斯う內輪になるからは何も遠慮はない。今から直ぐに隱居へ御座れ酒飮うで遊びませう。（又袖を引く。）アド〽隨分おごうを可愛がつて下され。シテ〽是へたもれ。〽是をお前へ上げませう。シテ〽是へたもれ。太郎冠者。何をうか〳〵して居をる。ムコ〽何事もかごとも親子の契約する上は。唯ひらに御免候へ。シテ〽さうぢやとも〳〵。アド〽も一つ參れ聟殿。ムコ〽も一つ參れ舅殿。

シテ〽もういやか。太郎冠者とれ〳〵。アド ムコ〽三々九度も重なれば。後は酒興の餘りにや。聟も舅も諸共に。相舞まうてぞ入りにける。（二人舞とめ。早く入るなり。）シテ〽聟も祖父も諸共に〳〵。相舞まうてぞ入りにける。（ト舞ひとめる。）ヤホイ。又どれへやら行きをつた。扨も〳〵世話をやかせをるかな。エイ〳〵。（トとめて入るなり。）

松囃子（まつはやし）

シテ　萬歲太郎
アド　兄
小アド　弟

（入道具）

小アド〽此の邊りの者で御座る。何時もとは申しながら。當年の樣な目出度いお正月は御座らぬ。それにつけて。每年嘉例で萬歲太郎と申す者が祝儀な舞ひに參る。當年は未だ舞ひに參らぬ。爰に某の兄が御座る。若しこれへ參つたか尋ねて參らうと存ずる。シカ〳〵。數年方々ぢやに依つて忘れた事も御座らう。數年參る事なれば。よもや忘れう筈は御座らぬ。あれへ參らば樣子が知れようと存ずる。參る程にこれぢや。（ト云うて。案內乞ふ。常の如し。）小アド〽每年太郎が松囃子の祝儀な勤めに參る。當年はまだ參りませぬが。お前へは參りましたか。アド〽いや此方にも待兼ねて居るが。未だ參らぬ。小アド〽扨々合點の參らぬ事かな。よもや忘れさうな事では御座らぬ。アド〽いや〳〵。定めて追附け參らう程に。和御寮も暫くこれに待たしめ。小アド〽それならばこれに待ちませう。アド〽さあ〳〵。これへ通らしめ。小アド〽心得た。シテ〽萬歲太郎と申す舞々で御座る。每年の春の始めの御祝儀に。あなたこなたへお壽な舞納めて參る。又爰に誰々と申して御兄弟の御方が御座る。數年松囃子の御祝儀に參る。さるに依つて年の暮には。御兩所より米一石づつ。年取物な持たせて下さるゝ。當年は何の沙汰がない。定めて取込うで忘れさせられたと存ずる。と申して每年參る事なれば。松囃子の祝儀に參らぬも如何で御座る。今日はさあらぬ體で參らうと存ずる。シカ〳〵。合點の行かぬ事で御座る。每度下さるゝ物な。御兄弟言ひ合した樣に沙汰がないに依つて。何卒樣子も有る事か。心もとなう御座る。今日參つたらば樣子が知れようと存ずる。（ト云うて。案內乞ふ。アド出る。常の如し。）アド〽太郎。和御寮な待ち兼ねて居た。シテ〽お馴染とて

お取込の中も御忘れなされず。思召し出さるる所は一入有難う存じまする。さて御舎弟様にも御別條なう御越年で御座りますか。アド〽成る程無事で、これもそなたが遅いと言うて待ち兼ねて、是へ來て居る。なう〳〵。太郎が參つた。小アド〽これは太郎お出でやつた。シテ〽先づ御目出度う御座る。小アド〽其の通りでおりやる。さて當年に何として遲かつた。シテ〽いやそれは何時もの條をお忘れなされたで御座らう。私が來まするは毎もの通りで御座る。先づ物はよう思出して御覽なさるゝがよう御座る。アド〽それはともかくも。さあ〳〵祝儀を始めてたもれ。シテ〽畏まつて御座る。さらば始めませう。シテかゝる新玉の年の始めの門開き。目出度やな〳〵。松竹飾りしめを張り。あなたの門といざ知らず。こなたの内もいざ知らず。しやつきしや〳〵しやつき〳〵〳〵じや。はあ目出度う舞納めて御座る。アド〽なう〳〵太郎。これは毎もの舞ひ様とは違うて、餘り目出度うないぞや。シテ〽いや。少しも違ひは致しませぬ。アド〽いや〳〵。此方にはよう覺えて居るが。如何にも違ふぞや。シテ〽お前は物覺えが宜しう御座らぬ。思出して御覽なされませ。アド〽何ぞ外に此方に忘れた事が有るか。シテ〽申しませう。アド〽何でおりやる。シテ〽毎も歳暮にはお人を下されまする。舊冬は忘れさせられたさうな。アド〽誠に。取込うで人をやらなんだ事も有らう。シテ〽いや。お人の參らぬ許りは苦しう御座らぬ。毎ものあれ、笑ふ。お暇申しませう。アド〽これ〳〵。誠に毎年年取物をつかはすをはたと忘れた。追附け持たせてやらう。舞直してたもれ。シテ〽何とやらきつとしい樣に思召されませう。それとも幾久しう相續らぬが。目出度いで御座る、追附け舞ひ直しませう。かゝる。いや榮えた〳〵。あなたの門はよ。榮えた、榮えたは榮えたれど。こなたの門はいざ知らず。太郎もそつと榮えた。しやつき〳〵しやつきじや。さらばお暇申しませう。アド〽これ〳〵ちと用が有る。もそつと待つておくりやれ。シテ〽畏まつて御座る。アド〽なう〳〵。和御寮は太郎が方へ。舊冬年取物をやらつしやれたか。小アド〽しかと覺えませぬ。アド〽よう思出して見さしめ。小アド〽されば。遣しました。シテ〽いや〳〵參りませぬ。笑ふ。最早お暇申しませう。小アド〽これは失念致した。扨々不調法な事を致した。追附け持たせてやらう程に、某が御祝儀も一所に。目出度うも一度舞ひ直してたもれ。シテ〽畏まつて御座る。それならばも一度舞ひ直しませう。ト云うて。太鼓座へくつろぐ。アド〽なう〳〵。太郎が遅う參つた樣子が知れました。小アド〽皆此方の不念で御座る。アド〽両人言合はした樣に忘れると云ふは。面目ない事で御座る。シテ〽さらば始めませう。目出度やな〳〵。松竹飾りしめを張り。あなたの門も榮えた。こなたの門も榮えた。地謠拍子いやましに榮えたりやさうよの。シテ〽新玉の年の始めの門開き。笛吹き出す。一段舞ひ。左右し止める。太鼓打出し。打上げ聞きて。シテ〽やら〳〵目出度やな。諫鼓苔深く鳥驚かぬ御代なれや。弓は袋に劔は箱に。納りて納りて、長久の家こそ目出度けれ。

松脂（まつやに）

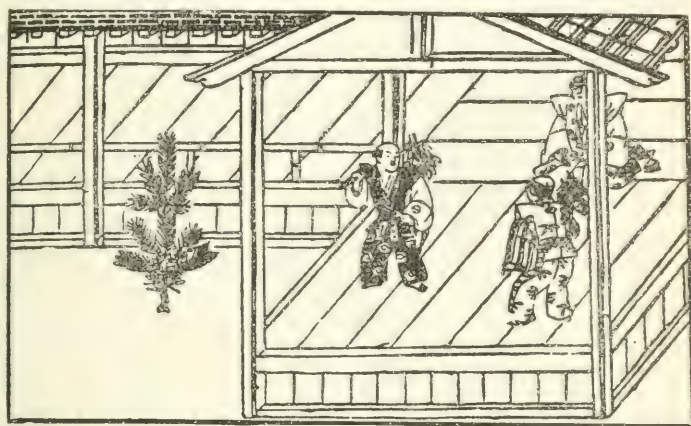
シテ　松脂の精
アド　主人
小アド　太郎冠者
立衆　所の者
（入道具）

アド〽大果報の者。天下治まり目出度い御代なれば、當年の樣な目出度い事の重なつた

お正月は御座らぬ。さて今日は嘉例で松囃子を致す。漸う時分もよう御座る程に。太郎冠者を呼出し。客を呼びに遣さうと存ずる。常の如し。立衆へ今日は目出度う御座る。アドへおて來う御座る。何れも下に御座れ。立衆へ心得ました。皆々下にゐる。立衆へさて當年は何というて囃させらるゝ。アドへ私の存じまするは。總じて松ほど目出度い物は御座らぬに依つて。松を囃子に致さうと存ずる。立衆へこれは一段とよう御座らう。アドへ先づかう通らせられい。立衆へ心得ました。トいうて。脇座へ通り。それより同音に囃す。シテ内より拍子にうつり出る。橋がかり内にていろ／＼面白うあり。アドへこれへ出させられたは如何なるものぞ。シテへこれは此の邊りに住む松脂の精なるが。唯今の拍子物に。松脂やにや小松脂にやと囃されたれば。扨は某を召さるゝと存じ。その上目出度い折柄なれば。仙人も山より出で。聖人も出世するといふ心に依つて。かた／＼罷出でて候。アドへこれ迄のお出で。近頃目出度う存ずる。先づ太郎冠者。座敷へ通しませい。ト云うて。葛桶を出し。座敷へ通す。腰をかける。アドへさて松脂の目出度き子細威徳を語らせられい。シテへさらば松脂の威徳を語つて聞かせう。語それ松脂の目出度き子細と云つぱ。日本に於てその數多しと雖も。唐土でいしと云つし者の母。夢中に子の日の松を含み。胎内に宿ると見て男子を儲くる。此の子器用第一なること其の國に並びなし。されば十八歳にして三公になる。これみな某が謀なり。また陰陽和歌の道にては。住吉の四所の松。高砂に尾上の松。かれこれに至るまで。千年の齢を經るといふも。我等の走り廻り恵を與ふる故なり。いやそれ迄も有るまじ。一張の弓にて天下を治めしこと。此の松脂を弦にひいてこそ。異國の夷をも亡し給へ。なんぼう目出度いことにて候はぬか。アドへ扨々目出度い事ぢや。各なんと思召すぞ。此の目出度い松脂を。何と藥煉(くすね)に練りますまいか。立衆へ一段とよう御座らう。アドへみな若い衆の申さるゝは。かゝる目出度い松脂の精の御出であるこそ幸なれ。頓てくすねに練り度いと申さるゝ。さう心得さしませ。シテへそれは近頃迷惑にこそあれ。ただ御免あれ。アドへいや／＼。斯様の時節はまた御座るまい。是非とも練る程にさう心得さしませ。シテへ扨はお練りなうては叶ふまいか。アドへなか／＼。シテへ然らばくすねは加減が大事ぢや。その上弓の弦に引いて。魔變化生の者までも障礙をなさぬ練り様があ る。とてものことに某の手づから練り納め。なほ此の所目出度い樣に練り納めするが何とあらう。アドへそれはなほ／＼目出度い事で御座る。急いで練つて賜はり候へ。シテへいで／＼さらば練らんとて。同へ／＼。くすね皮を大きに拵へ。この松脂を取入れて。如何にもればくあやかれとて。練りつれてこそ歸りけれ。家を治むる弓の弦。／＼に。引くためしは久しき松脂かな。

松楪(まつゆづりは)

シテ　丹波の百姓
アド　津の國の百姓
小アド　奏者
（入道具）

アドへこれは津の國のお百姓で御座る。毎年御嘉例にて上頭へ楪を捧ぐる。當年も相變らず。持つて上らうと存ずる。シカ／＼。誠に。毎年相變らず御年貢を捧ぐるは。目出度い事で御座る。いやこれ迄來ればト云うて。下に居る。シテへ丹波の國のお百姓で御座る。毎年御嘉例として上頭へ子の日の松を進上致す。當年も相變らず持つて上らうと存ずる。シカ／＼。誠に。戸ざ

さぬ御代と申すは今この時で御座る。天下治まり四海太平の御代なれば。上々の事は申すに及ばず。下々までも存ずる儘。目出度い折柄で御座る。ト云うて居るうち。アド立つて詞をかける。百姓狂言何れも同断。アドへ身共は津の國のお百姓でおりやる。毎年御嘉例として上頭へ樸を捧ぐる。當年も相變らず持つて上る事でおりやる。シテへ扨々似た樣な事ぢや。身共は丹波の國のお百姓でおりやる。毎年御嘉例として子の日の松を上頭に御年貢に差上ぐる。當年も持つて上る事ぢや。ト云うて。それより同道。都に着くまで。餅酒の通り。アドへ何かと云ふうちに都ぢや。則ち身共が上ぐる御館は早や是ぢや。ト云うて。シテ身共が上ぐる御館はまた上を云ふ。それより奏者出で。歌の事云ふまで。餅酒の通り。歌の事は。兩國の百姓して一首詠めと云ふ。シテへこれはむつかしい事を仰附けられた。アドへさてそなたは上の句を詠むか。下の句を詠むか。シテへ少しなりとも短いのを身共に詠ませてたもれ。アドへそれならば。そなた下の句を詠ましめ。シテへ心得た。アドへ斯うもあらうか。シテへはや出たか。アドへ先づ申上げて見う。小アドへ何と。アドへ鶴龜の。齡を君の讓り得て。シテへ松諸共に千代萬代も。小アドへ一段とでかいた。兩國のお百姓。かくの通り。はあ／＼。御用が有る。暫くそれに待ちませい。二人へ畏まつて御座る。アドへ何事ぢや。心もとない。シテへ二(ふた)通りならば。早うお暇を申請けたいなあ。小アドへやい／＼。時のお笑ひ草に仰出されたを。一段と出來したとあつて。御感に思召さるゝ。依つて汝が頭立やうにお悦びなされて。この烏帽子を下さるゝ。急いでこの烏帽子を着て。お白洲へ出ませいとのお事ぢや。急いで出ませい。二人へ畏まつて御座る。シテへこれは有難う存じまする。追附け烏帽子を着て參りませう。何と／＼。これは存じの外のよい首尾ではないか。アドへ思ひの外の事ぢや。シテへさてそなたは烏帽子の着やうを知つて居るか。アドへ曾て知らぬ。シテへ身共は何時ぞや所の祭に庄屋殿の着られたを見て。大方覺えて居る。着せてやらう。アドへそれならば着せてたもれ。シテへこれへよらしめ。アドへこれはむつかしさうな。シテへつゝとむつかしいものぢや。アドへ窮屈な物ぢや。シテへ先づ出て見さしめ。アドへ津の國のお百姓。烏帽子を着ました。小アドへ前世下された事は無けれども。お流れを下さるゝ。頂戴せい。アドへ有難う存じまする。アドへ冥加に叶ひまして。有難う存じまする。小アドへ丹波の國のお百姓も出よと云へ。アドへ畏まつて御座る。なう／＼。お流れを下さるゝ。そ

なたも出よと仰せらるゝ。お出やれ。アドへ心得た。シテへその烏帽子を某に着せてたもれ。アドへ心得た。シテへゆがまぬ樣に賴むぞ。アドへ心得た。シテ出る。アドの通り。セリフ云うて。三獻飮む。初の通りなり。小アドへ兩人一所に申渡す事がある。一所に同道して唯今出ませい。シテへ畏まつて御座る。兩人一所に仰せ渡さるゝ事がある。出よと仰せらるゝ。出さしめ。アドへ心得た。シテへ兩人一所に出まして御座る。小アドへ津の國のお百姓。なぜに烏帽子を着ぬ。アドへ私着まするか。小アドへ頭のあかぬ樣にして出よ。アドへ畏まつて御座る。その烏帽子を着せてたもれ。シテへ心得た。ト云うて。アドに烏帽子を着せる。アドへ津の國のお百姓。烏帽子を着まして御座る。小アドへ丹波の國のお百姓。また其方も頭があく。烏帽子を着て出よ。シテへこれは忙しい事ぢや。また身共に着せてたもれ。丹波烏帽子着て出る。小アドへまた其方が頭があく。とかく兩人共に頭を黑めて。一所に出ませい。シテへ御意では御座れども。烏帽子は一つで御座る。兩人一所にはどうも出られませぬ。小アドへ仰出された事なれば。違背はならぬ。思案して何卒兩人頭を黑めて出ませい。二人へ畏まつて御座る。シテへこれはむつかしい。何としたものであらう。アドへ何とか。シテへいや思ひ出した。これへ寄らしめ。ト云うて。兩人三方に戴せて頂き出る。小アドへこれは面白う烏帽子を着た。此の上はお暇を下さるゝ。其の體で御前を賑々と罷立ちにせい。二人へ畏まつて御座る。シテへ囃せや/\松樑の。盡きせぬ御代の。幾ひさに。三段の舞常の通り。シテは右手ばかりにて舞ひ。アドは左手ばかりにて舞ふ。扇の取り樣。仕樣あるべし。二人へやら/\目出度や/\な。國富み民も豐かに住める。折からなれば。貢を備ふる千歲の門松。さてまた次第に御子孫も繁昌し御藏も御寶も樑の。ハヽ。榮ふる御代こそ目出度けれ。

鞠座頭（まりざとう）

シテ　勾當
アド　菊市
小アド　道行人
立衆　勾當
（入道具）

シテへ勾當で御座る。今日は妙音講の當に當つた。何れもへ人を遣はさうと存ずる。菊市あるか。呼出す。常の如し。今日は妙音講の當に當つた。汝は何れもへいて。もはやお出でなされいと云うていて來い。アドへ畏まつて御座る。ト云うて。杖を太鼓座よりついて。名乘座にて。アドへ今日は妙音講をお勤めなさるゝ。定めて各お出でなされたらば。御遊山であらう。先づどなたへ參らう。誰殿が近い。あれへ參らう。ト云うて。樂屋へ案内を乞ふ。出るも常の如し。最早時分もよう御座る。お出でなされと申越して御座る。立へ何れもお出でなされうと有つて。是にお揃ひぢや。追付け同道して行かうぞ。アドへそれならば。御銘々へは參りませぬ。追付けお出でなされませ。立へ心得た。アドへ申上げまする。ト云うて。申上げる。常の如し。但し立頭立衆呼出す。何れも出る。立頭案内を乞ふ。菊市杖を受取る。シテへさて何と思召す。相變らず妙音講を勤めまするは。偏に辨財天のお蔭と存じまする。立へ御意の通りで御座る。此の上は何卒辨財天のお蔭で。皆仕合はせを致し。出世を願ひまする。シテへさて今日はゆる/\と遊びませう。菊市。先づお慰みに盃を持つて來い。アドへ畏まつて御座る。御盃持ちました。シテへ先づ亭主役にこれから始めませう。ト云うて。うけて飮む。立衆へさす。立頭飮むうち謠うたふ。挨拶常の如し。へ盃を次へ廻しませう。立衆へ戴きませう。ト云うて飮む。シテへさて誰殿へ菊市が兼てお願ひが御座る。立へ何事で御座る。シテへ近頃御苦勞ながら。そなたの平

家を聴聞致したいと申しまする。一句語つてお聞かせなされませ。　立へこのお歴々の中で。私へ御所望は迷惑で御座る。これはお許されませ。　シテへいや〳〵。これは稽古の爲で御座る。是非とも御所望申しませう。　立へそれならば。不調法ながら一句申しませう。アドへこれは有難う存じまする。　立頭平家を語る。立衆ほめる。　シテへ菊市聞いたか。平家といふものは。あのおんが大事ぢや。　アドへ左様さうに御座る。　衆へさて盃を次に廻しませう。　此の間シテより小盃うたひ出す。　立へ盃を先づそれに置かせられい　何と御亭主一さしお舞ひなさらぬか。　シテへ成る程舞ひませう。皆謡うて下され。　ト云ひ。立つて舞有り　立衆ほめる。立頭よりささんを差出す。　シテへ私の存じまするは。御酒は先づいれまして。また後程料理の上で進ぜませう。　立へそれがよう御座りませう。シテへ菊市盃をとれ。アドへ畏まつて御座る。シテへさて今日は何をして遊びませうぞ。　何れもお物好きな仰せられい。　立へ私はあの碁といふものは。脇から聞いて居れば。パチ〳〵鳴つて面白さうなもので御座る。どうぞあれをして見たう御座る。　シテへいや〳〵。碁といふものは石数も多し。なか〳〵盲目ばかりでは。白黒がわかりますまい。これはなりますまい。衆へ将棋は何と御座らうぞ。シテへ将棋は駒に印(しるし)をつけてさす衆が仲間にもあるさうなが。盲目ばかりの寄合ひには。見物の慰みが何も御座らぬ。これもなりますまい。　衆へ双六はきほひのあつて面白さうなものぢや。双六になされい。　シテへこれはなほなりますまい。　衆へなぜで御座る。　シテへ素人衆のお打ちあるを聞きますれば。今のは目が出たの。いや目が引きこうだのとおしやります。なか〳〵私共の連中には差合ひで御座る。　立へいか様これは興がつた差合ひで御座る。　ト云うて。皆々一度に笑ふ。　シテへ私の存ずるは。あの鞠といふものは面白さうなものぢや。蹴て見度う御座る。立へこれは蹴るは蹴りませうが。落ちる所が知れますまい。　シテへそれはよい仕様が御座る。鞠に小さい鈴を付けて。その鳴る所を聞いて蹴りませう。　立へこれは御才覺で御座る。　シテへ菊市。鞠の用意をせい。　アドへ畏まつて御座る。　シテへさあ〳〵何れもたたせられい。　小アドへ急の使に山一つあなたへ參る者で御座る。　此内が賑々しい。何事ぢやぞ。　座頭共が大勢寄つて鞠を蹴つてゐる。ちとなぶつて見う。　此の中に。皆々立つて鞠を蹴る。シテより謡ひ出し。鈴の音を聞きて。皆々ハリ〳〵ト云うて蹴る。小アド鞠を持ちてありき。角にて鈴を振りならす。一度に走りより。けづまづき行きあたり。けつまづきこけける。小アド可笑しがり笑ふうち。シテ聞きつける。　シテへやい〳〵菊市。目あきがゐてなぶるさうな。杖をおこせ。　アドへ心得ました。　ト云うて。杖を銘々に渡す。　シテへ皆油断させらるゝな。　えいとう〳〵。　ト云うて。杖にて追ふ。小アド其のうち小股とり打擲して。笑うて入るなり。立衆同志打して入るなり。菊市はシテをさん〴〵に杖にて打つて。追込み入るなり。

【み】

箕被(みかづき)

シテ　夫
アド　妻
（入道具）

シテへ此邊りの者で御座る。明日は某が宅で連歌の會を致す。女共を呼出し。萬事談合致さう。　ト云うて。呼出す。お常の如し。　シテへそなたを呼出すは別の事でない。此中發句を出かした。聞いてたもれ。春。今日こそは。花咲かぬ松も小鹽山。夏。涼しさを。袖に迎ふる草もがな。秋。山鳥も。靡せん月の高根かな。冬。薄雪の下行く松の嵐かな。何と面白いか。　アドへそれは結構な事で御座る。　アドへ身共が連歌を出かしたに。そなたは餘り嬉しうないか。　アド

〽何の別に嬉しい事が御座らう。シテ〽これに就いて。明日は連歌の會があるぞや。アド〽どこに御座る。シテ〽最前の發句が出來た。その發句拔きの爲に。各々身共が方へおいてぢや。アド〽なう〳〵うるさや〳〵。朝夕の煙も立て兼ぬる身で。連歌をさせらるゝさへうるさう御座る。人を呼うで何を振舞ふものぢや。兎角斷りを云うてやめさせられい。シテ〽最早一順に再々廻文まで廻つて。今更變改もならぬ。イヤ餘り苦に召されな。發句が出來たによつて。料理は麁相にしておかしめ。アド〽麁相にも結構にも。内に何があつて振舞ふものぞ。とかく勝手不如意な身分で。その連歌の事をやめさせられい。シテ〽さもしい事を云ふ。餘の者が云はゞ。實にもと思ふが。おぬしが親も斯くの如く連歌好きではないか。その娘として。身共に連歌をなしそならば。そなたの親にも連歌をやめされそとおしやれ。アド〽それとはいかう違うた事で御座る。シテ〽何が違うた。アド〽妾がとゝ樣は。勝手ともかうもなさるゝによつて。連歌をし會をなされても。つひとも大事御座らぬ。シテ〽まだ卑しい事を云ふ。此道を嗜むに貧福がいるものか。是非ならずば。家財なりとも。或ひは其方の單衣(ひとへ)なりとも。賣代(うりしろ)なして勤めたがよい。アド〽其樣な愚かな事を仰せらるゝ。妾が嫁入をして來て此方。朝夕の事さへ不自由なによつて。妾が身のまはりはとうに賣代なして。最早何も御座らぬ。シテ〽そなたはいつぞやの會の時も。其樣におしやつたれども。料理も相應に出來たではないか。アド〽さればこそ。いつぞやも是非會をせねばならぬと仰せらるゝ。内には何もなし。親里へ鹽味噌薪までも賴うでやつて。やう〳〵と調へました。シテ〽これはよい事を聞いた。また此度も賴うでやつてお吳りやれ。アド〽いかに親ぢやと云うて。其樣に再々無心云うてやらるゝもので御座るか。シテ〽いや餘の事を無心は云はぬ。連歌の會の入用ぢやと云うたらば。其方の親は連歌好きぢや程に。悅うで何もかもおこさるゝで御座らう。アド〽こち衆の勝手のならぬこそ常に苦にして居らるれ。連歌の會を何の悅ばるゝもので御座る。とかく連歌をやめさせられい。やめさせらるゝ事がならずば。妾に暇を下され。シテ〽女と云ふものは。當座の事ばかり氣が付いて。後の事を思はぬ。爰に昔物語がある。語つて聞かせう。聞かしめ。語 唐の朱買臣といふ者は。初めは殊の外貧しうて。薪を賣つて世を渡られた。されども學問に心を寄せ。商ひの事は疎かにして。道すがら書物を讀うだり。詩をうたうてばかり居られたによつて。朱買臣が妻が腹を立て。朝夕の煙も立てかぬる身で。その詩をうたふ事を先づおやめあれと云うて。其身が身共に意見する如く云うて叱つた。朱買臣の云ひ分には。今こそ貧なりとも。此道を絕えず勤めてさへ居たらば。富貴になるまいものでもないと云うて。いよ〳〵詩をうたふ事が募つた。女房はほ〳〵腹を立て。そなたの樣な人は。飢死をこそ召されうずれ。その心得で何と富貴におなりやらう。所詮暇をお吳りやれと云うて。終に離別致した。案の如く。その後朱買臣は漢の帝に召出されて。會稽の太守になられた。錦の袂を會稽山に飜すといふは此事ぢや。兎角わがすき好む一藝を怠らず勤めてさへ居れば。立身せいで叶はぬ事ぢや。その上簡齋が詩にも。句を得るは官を得るにまされりと云うて。名句をした悅びは官位に登るよりもまさつたと思ひ。我朝の賴實は。住吉の明神に祈誓をかけて。五年の命に換へて秀歌を一首詠まれたゝ云ふ。富貴でも。命に換へて嗜むは此道ぢや。

惣じて連歌といふものは。心の月を種として。妄執の雲を打拂ひ。一座の間餘念をやめて。友を助けて人を惜しと思はぬ所を。得脫の種ぢやとあれば。未來の爲にもならうは此道ではないか。アドへそれは唐土の聖人とやら唐人とやらはさうでも御座らうが。そなたの貧しい體(なり)で。連歌をとまる事がならずば。是非とも暇を呉れさしめ。シテへすればそれ程迄も思詰めたか。アドへなか〳〵。シテへ是非に及ばぬ。今更連歌をとまる事はならず。それならば暇をやるぞ。アドへ暇のしるしを下され。シテへそれに及ぶ事ではあるまい。アドへいや〳〵。妾も外へ行くまいものでも御座らぬ。座を結んでなりとも暇のしるしを下され。シテへ餘りよそへ〳〵と云うて恩に着せたりとも。その顏で外へ行くとも格別の事もあるまい。アドへそれにはお構やつそ。兎角しるしを下され。シテへ何をがなやらうぞ。アドへいか程お見やつたりとも。最早内には何も御座るまい。シテへ何れ是は内がいかう淋しうなつた。イヤよい物がある。これ〳〵。これは其方の朝夕手馴れた箕ぢや。暇のしるしに是をやらう。アドへなう恥しや〳〵。此様な物が何と持つて行かるゝもので御座ろ。シテへ持たせてやらうにも人はなし。大儀ながら手に提げてなりともお行きやれ。アドへ手には提げられまい。かづいてなりとも去(い)にませう。シテへそれはどうなりとも召され。さて是は飽きも飽かれもした事ではない。相對の上暇(ひま)をやる事なれば。また此邊を通らるゝならば。寄つて茶でも飲んで行かしめ。アドへさらば參りませう。〔ト云うて。箕を被きて。行く。〕シテへハゝア。あの箕を被いた所は。珍しい面白いものぢや。是は何卒ありさうなものぢやが。イヤ思出した。なう〳〵。アドへいや戻りはしますまい。シテへ去なせまいてはない。親の所へ言傳がある　アド　何で御座ろ。シテへわごりよが行く後姿を見て發句をした。みかづきの。出づるも惜しき名殘かな。そなたの親も連歌好きぢや。此通りを云うてたもれ。アドへ心得ました。〔シテ吟じ喜び。下に居るなり。〕アドへ惣じて人に歌を詠みかけられて返歌をせねば。口ない蟲に生るゝと申す。此脇をせずに戻つたらば。我子の樣にもないと云うて叱らせられう。立戻つて脇を致さう。なう〳〵御座るか。シテへ珍しい聲ぢやが。エイ。何とアドへ今の脇をせうとしてお歸りやつたぞ。

思うて戻りました。シテへあの見事そなたが勝をめさるか。アドへかうも御座らうか。シテへ何と。アドへ秋の形見にくれてゆく空。シテへ扨も出來た。天神も照覧あれ。扨も／＼面白い事かな。アドへもう斯う參りませう。シテへあゝ先づお待ちあれ。扨も／＼今迄は連歌をする術も知らず。唯不束に某が連歌をとめるとばかり思うた。今勝をめされたを聞いては。後世の事を大事に思うて意見めされたであらう。近頃面目ない。此上は連歌をなしそならばせまい。何事もそなたのおしやる通りにせう。機嫌を直して元の樣に添うて呉れさしめ。アドへいや。暇のしるしを取つた程に。戻りはしますまい。シテへそれは曲がない。元の女房に仲人なしと云ふ。是非とも斯う通らしめ。アドへそれならば。今迄の通りに添ひませうぞ。シテへ嬉しや／＼。此上は五百八十年萬々年。祝うて盃をせう。それに待たしめ。アドへ心得ました。ト云うて。飲んでさす。シテ頂きて相應の挨拶あり。シテ飲んで。又アドにさして結ぶなり。シテへ深き契は頼もしや／＼。アドへ姿がなさめませう。シテへめでたく舞ひをさめう。その箕を貸してお呉りやれ。アドへ心得ました。シテへ濱の眞砂は讀み盡し盡すとも。此道は盡きせめや。唯もておそき名にし負ふ。難波のうらみうち祓きて。ありし契にかへりあふ縁こそ嬉しかりけれ。シテへ心得た／＼。アドへいとしい人こちへわたい。ト云うて。シテより先へ入るなり。

水掛聟

シテ　聟
アド　舅
小アド　女
（入道具）

シテへこれは此の邊りに住居する百姓で御座る。いつもとは申しながら。當年は別して世の中がよいに依つて。我れ人喜ぶ事で御座る。今日も田へ見舞はうと存ずる。シカ／＼。扨々百姓程忙しい者は御座らぬ。毎日／＼田を見舞はねばならぬさりながら。青田の時分に精を出して置けば。秋入りがよいによつて。晝夜のわかちも無う骨を折る事で御座る。何かと言ふうちに田ぢや。何れ今年はよう出來た。田の勢が格別ぢや。これはいかな事。田にすきと水が無い。昨日までなん／＼と有つた水が無い。不思議な事ぢや。さればこそ。井手をせき留めて。隣の田へ水を溜める。扨々憎い事かな。隣りの田は舅の田ぢやに依つて。舅が此の樣な事は召されまい。定めて内の若い者がしたてあらう。これでは田が枯るゝ。油斷のならぬ事ぢや。ト云うて。畦を切り落とす體なり。シテへ先づこれでよい。今時分は方々へ水を欲しがるに依つて。此の樣な事ぢや。此處に附いても居りたけれども。また山の手の田が心もとない。先づあれへ參つて。後程見舞はうと存ずる。ト言うて。中入りする。アドへ此の邊りの百姓で御座る。當年は十分の世で御座るに依つて。いつもより一入に忙しい。先づ田を見舞はうと存ずる。シカ／＼。今年はけしからぬ作りがよう御座るによつて。何方にも一段と喜ぶ事で御座るさりながら。此の中は照りが強いに依つて。水が大切な。參る程にこれぢや。扨も／＼。どの田も／＼よう出來た。これに雨さへ降れば。何も案ずる事は無い。これはいかな事。某が田に水がすきと無い。隣の聟の田には水がなん／＼と有る。合點のゆかぬ事ぢや。道理こそ井手が切落してある。よもや聟が此の樣な事はせまい。定めて内外の者がしたであらう。此の分では田が枯るゝ。ト言うて。畦を附ける仕樣。アドへおゝ水がなん／＼と出來た。見て居るうちに田の勢が格別ぢや。これ

は中々油断のなる事ではない。今日はこれに自身番を致さうと存ずる。シテへたう〳〵忙しや。漸うと山の手な見舞うて御座る。また下の田が心もとない。見舞はうと存ずる。えい舅殿出させられたか。アドへおゝ聟殿お出でやつたか。シテへ此の中は忙しさに御見舞も申しませぬ。皆息災に御座るか。アドへ隨分變る事もない。そなたの方にも皆無事でおりやるか。シテへ皆息災で御座る。アドへ何と當年は近年の世の中ではないか。シテへ何れ今年は世なみがようて。此の樣な嬉しい事は御座らぬ。アドへさて此の頃はよやうがつた長い照りではないか。シテへされば久しう雨が降らいで。氣の毒で御座る。アドへさりながら。雲にしるが出來たに依つて。近いうちに雨であらう。シテへいつぞやから此の樣な氣色なれども。ねぢ直り〳〵して。降る事では御座らぬ。アドへいや此の中雨乞ひの相談が有つたげなが。何と極まつた。シテへ誠に。寄合ひの時分は見えませなんだが。何として出させられなんだ。アドへちと用事が有つて出なんだが。何と極まつた。シテへ其の事で御座る。先づ地下中寄合ひましての評議には。年寄衆は踊りにしようとおしやりまする。又

若い者どもは相撲がよからうなどと。口々まち〳〵で御座つた所へ。庄屋殿が進み出てお

申し有るは。相撲と言ふものは。第一はすはなものなり。相撲の果ては喧嘩に成るものぢや。また踊りと言ふものは。第一神をいさめて。又は祈禱にも成らう。かた〴〵踊りがよからうとあつて。花笠を拵へて。我も〳〵踊らうと言うて。夥しい拵へで御座る。アドへ成る程それはよからう。慥か此の以前も踊りであつたれば。雨を下されたかと思ふ。シテへいか樣そなたはよい覺えて御座る。此の以前も踊りであつたれば。其の儘雨を下されて御座る。アドへ吉例と言ひ。踊りがよからう。してそなたも踊るか。シテへ踊らずばなるまいと思うて。少々拵へをしまする。アドへ身共もそつと若くば踊らうに。殘り惜しい事ぢや。シテへいやなう〳〵。此の畦はこなたが附けさつしやるか。アドへなか〳〵。身共が附ける。シテへやあこなたは聞えぬ人ぢや。聟舅の間に言ふもいかゞなれども。聟子と言うて。聟は子では御座らぬか。その聟の田に水が無くば。あら笑止やと言うて。共々に水を入れてくれう。そなたが身共が方へ來る水を止めると言ふ事が有るもので御座るか。アドへいやおぬしはをかしい事を言ふものぢや。總じて舅は親ではないか。その親の田に水が無くば。あら笑止やと言うて。手傳うて

水を入れてこそ。聟のかひもある。身共が田の水を取らうと言ふが本意ではあるまいぞ。シテ〽扨々こなたは我儘な事をおしやる。これがそなたの田から湧いて出る水ではなし。上から來る水が下へ取るは、天下の作法では御座らぬか。アド〽よし上から來る水な。下へ取るが天下の作法にもせよ。身共は大事の御年貢を取らねばならぬに依つて。田を枯らす事はならぬわいやい。シテ〽こなたばかり御年貢を取るか。身共も大事の御上米を納めねばならぬに依つて。田を枯らす事はなりませぬ。アド〽やい世間に水の澤山に有る時は。末々まで行き渡れども。渇水の時は。其の様に思ふまゝに渡らぬわいやい。シテ〽思ふまゝにならぬ水な。こなたばかり思ふまゝにさす事はならぬわいなう。アド〽扨々汝は人に口をあかせい様に言ふ。其の様な事を言はゞ。地頭殿へ申し上げて。迷惑させうぞ。シテ〽なう上(かみ)は清粋なに依つて。其の様な無理な事は言はれまいぞ。アド〽とかく身共は田を枯らす事はならぬに依つて。畔を附けねばならぬ。シテ〽人に合點もさせずに。此の畔を附けさす事はならぬ。アド〽いや〳〵附けねばならぬ。シテ〽いや〳〵附けさす事はならぬ。（ト言うて。畔を附ける。シテは切り落すなり。アドロにとばしる掛かりたる仕方あるなり。）アド〽こりや身共に水を掛けたな。シテ〽無理をおしやるに依つて。掛かりもせうぞいなう。アド〽いや己れは憎いやつの。掛けてよくば。そりや。掛けてやらうぞ〳〵。シテ〽なう〳〵そこな人。アド〽何ぢや。シテ〽身共は怪我に掛けたらば。こなたはわざと掛けさつしやるか。アド〽わざと掛けたらば何ぢや。シテ〽掛けてよくば。そりや。掛けうぞ。アド〽身共も掛けてやらうぞ。（ト言うて。左に掛け。アドを追ひ廻し。水を掛ける。シテ笑うて居る所へ。アド泥をすくひ。シテの顔へ掛くるなり。）アド〽己れに負けて居るものか。シテ〽あゝこれは何とする。アド〽あの顔を見よ。（ト言うて。笑ひ居る。シテまた泥をすくひて。）シテ〽おのれに負けうか。（ト言うてアドの顔へ塗る。）アド〽あゝ何とし居る。己れこれがよいか。シテ〽これがよいか。（ト言うて。更に水を掛け合ひこ。後に二人とも組合うて。いや〳〵と言うて居る。女泣いて出る。）女〽やあ〳〵何と言ふ。とゝ父様とこちの人と水諍(いさか)ひをさせらるゝと言ふか。誰ぞ取りさへて下されい。なう〳〵。あゝ了簡なさせられいなう〳〵。（ト言うて。シテの足を取るなり。）シテ〽やい〳〵。身共が足を取らずとも。舅の足を取れ〳〵。女〽心得ました。なう〳〵。了簡をさせられいなう〳〵。アド〽こりや〳〵。親の足を取ると言ふ事があるものか。聟の足を取れ〳〵。女〽心得ました。これ〳〵。堪へさせられいなう〳〵。シテ〽やい〳〵。身共が足を取ると去るぞよ〳〵。女〽ちやと言うて何としませう。シテ〽舅の足を取れ〳〵。女〽心得ました。シテ〽己れが様なやつはかうして置いたがよい。（ト言うて。二人してアドを打ちこかす。）女〽なういとしい人。ちやと御座れ。シテ〽心得た。アド〽やい〳〵。やいそこなやつ。夫婦して此の様にし居つたに依つて。來年から祭には呼ばぬぞよ。（ト言うて。留めて入るなり。）

水汲(みづくみ)

シテ　新發意
アド　女
（入道具）

女〽妾はこの邊りの者でござる。野中の清水へ參り。濯ぎ物を致さうと思ひまする。シカ〳〵。誠に。女業には縫針と申すが。夏冬汚れぬ物を人にも着せたり。我が身にも着ようと思へば。暇もない事でござる。何かと云ふうちに清水ぢや。先づ水を汲み上げて。そろり〳〵と濯ぎ物を致さう。（ト云うて。脇座につくばうて居るなり。）

シテ〽此の寺の新發意でござる。今夜寺に客

來がある。茶の水を野中へ參り。清水を汲んで來いと云附けられた。先づ急いで參らう。先づシカ〳〵。總じて水と申すも樣々ござる。名所なれど柳の水。醒ヶ井の水などと申して。名所なれども。取分け野中の清水は。せい〳〵と潔い水でござる。何かと申すうちこれぢや。はあ。あれに門前のいちやが濯ぎ物をしに來たと見えて。あそこに居る。彼奴には日頃菜がちと無心書き懸けて置いたれども。未だ返事をせぬ。幸ひの所に來た。是非とも今日は返事を聞かうと存ずる。ト云うて。そつとさし足にて行き。女の目に兩手を當てる。女へなう〳〵。こりや誰ぢや〳〵。シテ小歌へ水を掬べば月も手に宿る。花を折れば香衣に移る習の候ものを。引くに引かれぬは。あら憎やの。女へえいお新發意か。いつの間にござつた。シテへそなたが是處へ來たと云ふ事を聞いて。後を追うて來たが。お主は何しに來た。女へ濯ぎ物をしに來ました。人が見れば惡い。もう歸らしやれ。シテへいや身共もたゞは來ぬ。用があつて來た。女へ何の用でござつた。シテへ今宵寺に客來がある。茶の水を汲みに來た。幸ひそなたを頼む程に。一杯汲んでくれさしめ。女へ妾に水を汲ませて。そなた寺に戻らせらるゝか。シテへいや是處に待つて居る。女へその隙があらば。そなた汲ませられい。シテへいや水と云ふ物は物にあやかる。お主のやうな心の浮いた優しい人が汲まば。水も輕うて。お茶の風味が一入よいものぢや。とかく汲んでくれさしめ。女へその樣におしやれば。汲んで進ぜう。シテへそれは過分なさりながら。迚もの事に上を汲めば塵や木の葉がある。下を汲めば砂がある。中程を汲んでたもれ。女へそれ程の事を知らいでよいものか。シテへ知つたればこそ頼め。知らぬ者を頼まうか。いやなういちや。和御寮の小歌を久しく聞かぬ。水の爲にもならう。小歌を一節謡うて。面白う水を汲んでたもれ。女へ謡はうと謡ふまいと。妾がまゝでござる。シテへそれは知れた事ぢや。ちとお謡ひやれ。女小歌へ身は濱松寝ほれてほれて。驅れぞする。待つ夜は來もせで。待たぬ夜は來て。濡れてしよぼ濡れて露に。葛桶の蓋とり。扇にて水を汲み入れる。桶の蓋これより要らず。女小歌のうち橋懸りへ退き。扇をかざして見るところ。口傳なり。シテへ身は在京。妻持ちながら二人。獨り寝ぞする。女へ地主の櫻は。散るか散らぬか。見たか水汲。散るやろ散らぬやろ。嵐こそ知れ。シテへ舟行けば岸移る。涙川の瀬枕。雲早ければ月運ぶ。うはの空の心や。上の空かやいや何ともな。この小歌のうち。色々ありて。戀慕の心なり。そろ〳〵よりて女の手をとる。女へ小松かき分け。清水汲みにこそ來に來たれ。今に限らうか先づはなせ。ト云うて。振切りつき倒す。シテへさて潮の干る時は。女へ行き連れて汲まうよ。シテへさて潮の滿つ時は。女へ軒端に待ちて汲まうよ。シテへ汀の浪のよるの潮月影ながら汲まうよ。女へつれなく命ながらへて。シテへ秋の木の實落ちぶれてや。二人へいつまで汲むべきぞ味氣なやな。ト云うて。女桶をいたゞく。シテ兩手を擴げてせく。シテへこれは胴慾な。もそつとこゝに遊ばしめ。女へいや〳〵。お寺まで水は持つていて進ぜう。こなたはこゝに遊ばしめ。シテへとかく戻しはせぬぞ。女へ何をさせらるゝ。退かせられい。シテへそれはつれない。女へお茶の水が遲くなり候。ト云うて。袖を控へてとむる。シテへ先づ放さしめ。先づ放せ。なんぼうこしやれたお新發意やの。ト云うて。桶の水を新發意へかけ。逃げありくを追廻し。ざんぶりとかける心なり。女へなう恥かしや〳〵。ト云うて。女は入る。シテへなう悲しや。一絞りになつた。これは悉皆濡れ鼠ぢや。くさめ〳〵。ト云うて。袖を絞り。鼻に手をあてゝ這入るなり。

【む】

胸突（むねつき）

シテ　男
アド　何某
（入道具）

アド〽此の邊りの者で御座る。誰と申す者に金子を取替へて御座るが。久々になれども未だ返辨致さぬ。此のうちも人を遣せば。ななさぬのみならず。色々惡口をいひ。却つて使の者を打擲いたいたと申す。今日は自身參つて屹度算用致させうと存ずる。シカ〳〵。誠に。憎いことで御座る。一々いふ所を申すならば。また了簡致すまいものでも御座らぬ。彼奴が仕方が言語道斷。腹の立つことで御座る。これぢや。（ト云うて。案内乞ふ。）シテ〽表に案内がある。あれは慥に誰殿の聲ぢや。また内々の事でわせたものであらう。留守を使うて歸さう。（扇かざして下に居る。）案内とは誰そ。アド〽苦しうない者ぢや。誰は内にか。シテ〽留守で御座る。アド〽さういふは誰そ。シテ〽隣の者が留守を預つて居ります。アド〽歸られたらばいうて下され。誰でおりやる。ちと用があつて來たれども。留守で歸る。逢うて言ふことがある。あの方へお出でやれというてたもれ。シテ〽心得ました。アド〽今のは慥に誰が聲ぢやが。留守を使うたさうな。彼奴は裏戸を拵へてすかすと申す。裏へ廻つて見うと存ずる。シテ〽案の如く誰殿であつた。あの人は小戻りをする人ぢや。裏道からすかさうと存ずる。（ト廻り。仕手二人行當る。）アド〽エイ誰。シテ〽エイ誰殿。これは嬉し悲しい所でお目に掛かりました。アド〽いや妥な者が。人に逢うて挨拶もあらう。嬉し悲しいとはどうしたことでおりやる。シテ〽されば。只今はお出で下されたげなに。お目に掛りませいで悲しう存じました。今嬉しうお目に掛りましたに依つて。嬉し悲しいと申す事で御座る。アド〽久しう逢はぬうちに口が上つておりやる。シテ〽これは迷惑で御座ります。アド〽さて内々の事は何と召さる。シテ〽成る程。段々延引仕りまして。氣の毒に存じまするさりながら。色々才覺致いて大方調ひました。今暫くお待ちなされて下されませい。アド〽そなたの今少しの暫くのとおしやるも聞き飽いた。その上このうちも人をおこせば。なさぬのみならず。色々惡口をいひ。却つて使の者を打擲召されたげな。これは先づどうした事でおりやる。シテ〽これは思ひも寄らぬ事を仰せらるゝ。何しに私が左樣の事を致しませう。總じて災は下より起ると申すが。皆下々のいひなして御座る。アド〽それはともあれ。今日は身共が所へ來て算用召され。シテ〽畏まつては御座れども。今日はちと先約を致した程に。一兩日の内に參りませう。アド〽先約とおしやるも定めて遊山事であらう。とかく今日は身共が所へお出やれ。シテ〽それならば。先約の方を斷り申して。後から參りませう。お前は先へお出でなされませ。アド〽まだそのつれをおしやる。さあ〳〵おりやれ。（ト云うて。胸倉をとる。）シテ〽やあらこなたは道かいもとで人も見るものぢや。理不盡千萬な。某が參るまいと申すにこそ。先約の方へ斷りをいうて。後から參らうといふに。聞わけもない。若しまた行くまいというたら。何と召さる。アド〽何といふとも連れて行かいで置かうか。シテ〽さあ。行くまいが。何とさつしやる。アド〽引きづつて行くは。シテ〽身の皮なりとも剝いでおとりやれ。アド〽推參な事をいふ。（ト云うて。突倒す。シテこれより胸を痛がる仕方あり。）シテ〽あいた〳〵。アド〽これは

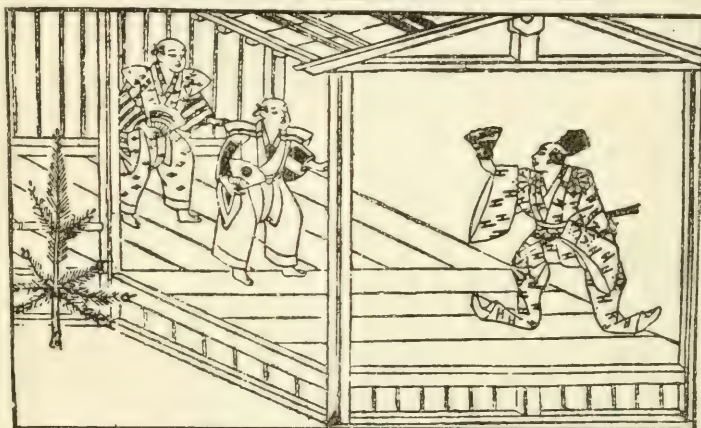
何とした。シテ〽何としたといふことがあるもいかゞ世間に借錢を負うた者も。負はせた者も多からうに。僅かの借錢に肋骨(こつぼね)を三枚まで突折られた。あゝ息がはづむ。あいた〳〵。相手は誰ぢや。仇をとつて呉れい〳〵。アド〽强うは當らぬやうに思うたが。氣の毒な事ぢや。是非に及ばぬ。利の分を宥してやらう。先づ聲を立てておくりやるな。シテ〽そなたは物を心易さうに言はしやるが。人の命が利の分で買はるゝものか。これでは命があるまい。アゝまた目が舞ふ。あいた〳〵。出合へ〳〵。アド〽やれそのやうに言うてくるゝな。それならば元利ともに宥さう。とかく聲をお立ちやるな。シテ〽元利ともに宥さう。アド〽なか〳〵。シテ〽あゝ諸病は氣より生ずるといふが。元利ともに宥すと仰せらるゝに依つて。少し痛みが和ぎました。アド〽先づそれは嬉しい事ぢや。シテ〽とてものことに私の書いて進ぜた借狀も戻して下され。アド〽某が宥すといふ上は。氣遣ひな事はない。心安う思はしめ。シテ〽それは左樣で御座れども。私が持病に借狀ほどの癪滯(しやくたい)がさしつかへて御座るが。左の脇腹から右の鳩尾へさし込めば。必ず命を取らいでは置くまい。わあ目が廻ふ。あいた〳〵〳〵。アド〽これは如何なこと。氣の弱い人ぢや。今日は算用せうと思うて借狀も持つて來た。和御寮に遣る程にお見やれ。シテ〽どれ〳〵。これは身共が書いてやつたのかや。アド〽なか〳〵。シテ〽誠に左樣で御座る。この判の所を破つて置きませう。アド〽どうなりとも召され。シテ〽忝う御座る。これは何と致いた。最早往んで下され。アド〽こなたの立姿を見て行きたい。立つてお見やれ。シテ〽いや別の事は御座るまい。平に歸らつしやれ。アド〽是非とも立つてお見やれ。シテ〽それならば手を取つて下され。アド〽どれ〳〵。シテ〽あゝこれ〳〵。そのやうに强うせずとも。靜にして下され。アド〽それならば靜にお立ちやれ。シテ〽靜に〳〵。(ト云うて。立つて笑ふ。)なう身共は何處も痛うはなけれども。之をなさう爲ばかりぢや。さらり〳〵目出度う濟みました。アド〽あの橫着者。遣るまいぞ〳〵。(ト云うて追込み入るなり。)

【め】

目近米骨(めちかこめほね)

シテ　大名
アド　太郎冠者
小アド　次郎冠者
同　目近賣
(入道具)

シテ〽大果報の者。(名乘末廣がりの通り。せちに嘉例で上座に御座る衆へ目近米骨を進ずる。兩人の者を呼出す。常の通り。段々あつて。二人都へ上つて來いと云ふまで。此の類の狂言。何れも同意なり。二人太郎冠者は目近。次郎冠者は米骨を求めに來い。)〽畏まつてござる。(常の如く云付ける。二人シカシカ云うて廻り。都につき。アド目近買はうと云ひ。小アド米骨買はうと云ふ。賣手出る。色々あるべし。末廣がりに同じ。畢竟一人に云ふ事を二人で云ふ。)アド〽さてそなたは目近米骨をよう知つて居るか。小アド〽いや身共は曾て知らぬが。そなたは知つて居るか。アド〽いや某も曾て知らぬ。小アド〽これはいかな事。そなたが心易うお請け申した程に。定めてよう知つて居ようと思うて。お請け申して來た。アド〽いやまた身共はそなたを賴みにして來たが。これまた何としたものであらう。小アド〽遙々の所を問ひには戻られまい。何としたものであらうぞ。アド〽やあ〳〵。(笑ふ。)これ〳〵。さすが都ぢや。(これよりまたこの類の呼ばはる。心の直でない者出る。狂言同意。だん〳〵あつて。目近米骨ぢやと云ふ。)賣手〽田舍者をまんまと欺してはござれども。何を目近米骨ぢやと云うて。

賣つてやらう物がない。こゝに古い扇が數多ある。面白うなかしう申して。値を大分取つて。賣つてやらうと存ずる。なう〳〵。米骨を買はうと云ふはどれぢや。小アド〽私でござる。賣手〽これ〳〵。小アド〽これが米骨でござるか。賣手〽なか〳〵。小アド〽これを米骨と云ふ子細はどうした事でござる。賣手〽これには殊の子細がある。先づ唐と日本の潮境にちくらが沖と云ふ所がある。此の沖にはゆる米は一粒蒔けば萬倍になり。萬倍蒔けば萬々倍になる。その目出度い米を此の扇の骨に籠めたに依つて。米骨でおりやる。小アド〽謂れを聞けば尤もでござる。アド〽さあさあ。目近を早う見せて下され。賣手〽心得ました。ト云うて。賣手扇を鼻の先へつきつける。アド〽これは何とさつしやる。賣手〽イヤ餘りお騷ぎあるな。これも同じく目出度い米を扇の骨に籠めて。斯樣に目近う寄せるに依つて。目近と申す。アド〽すればちくらが沖の米を扇の骨に籠めて。目近う寄せるに依つて。目近でござるか。賣手〽成る程その通りぢや。アド〽尤もでこそあれ。さて代物は何程でござる。賣手〽何れも萬疋でおりやる。アド〽扨々高直な物でござる。もそつとまけて下され。これよりせりふ色々。三條の大黒屋を云うて。恭をする事を云ひ。囃し物教へる。暇乞あつて。シカ〳〵云うて戻り。主を呼出す迄。末廣がりに同じ。

シテ〽何と目近米骨を求めて來たか。アド〽成る程求めて參りました。シテ〽急いで見せい。アド〽先づ米骨からお目に懸けませう。小アド〽心得た。シテ〽早うお目にかけさしめ。ト云うて。太鼓座より持つて出て見せる。シテ〽汝は都へ登つて祇園へ參詣したと見えて。お供米を請けて來たさうな。先づ米骨を見せい。小アド〽これが米骨でござる。シテ〽何ぢや。これが米骨ぢや。小アド〽成る程。段々子細を承つてござる。先づ唐と日本の潮境に。ちくらが沖と申す所がござる。此の沖に生ゆる米は。一粒蒔けば萬倍になり。萬倍蒔けば萬々倍になると申す。その目出度い米を此の扇の骨に籠めたに依つて米骨ぢやと申しまするが。何と尤もな事ではござりませぬか。シテ〽扨々うつけた奴かな。知らずばなぜにとくと聞いてゆかぬ。米骨と云ふは。常の扇の骨が十本あれば。三本も五本も骨を込めて。骨の數の多いをこそ込骨と云へ。其の上何れの米ぢやと云うて。一粒蒔いて萬倍にならぬ米があるものか。小アド〽でも都の者がこれを米骨ぢやと申すに依つて。求めて參りました。シテ〽まだぬかし居る。扇の骨の數の事ぢや。小アド〽それならそれと仰せられたがようござる。シテ〽推參な奴ぢや。あちへうせう。まだそこに居るか

〳〵。アドへ先づお待ちなされませ。これはお腹の立ちまするは御尤もでござる。あいつが常々物知りだてを致すに依つての事でござる。私の求めて參つた目近をお目にかけて。御機嫌を直しませう。シテへ早う見せい。アドへ提まつてござる。ト云うて。大鼓座より持つて出て。主の顔へつきつける。シテへこれは何とする。アドへいや餘りお騒ぎなされまするな。同じくちくらが沖の米を扇の骨に籠めまして。斯様に目近う寄せて。進上致すに依つて。目近でござる。シテへ南無三寳。彼奴もぬかれて來居つた。扨も〳〵苦々しい事かな。利根さうに次郎冠者が事を何かと云ふに依つて。誠の目近を求めて來たかと思へば。次郎冠者に劣らぬうつけ者ぢや。心を鎭めてよう聞け。目近扇と云ふは。常の要より近う打つたをこそ目近と云へ。何ぞや其の古扇を人の目のはたへ寄せればとて。目近であらう事は。アドへでも都の者がまさしうこれを目近ぢやと申したに依つて。求めて參りました。シテへまだぬかし居る。目近と云ふは要の事ぢや。アドへ要なら要と初めから仰せられたがようござる。シテへ推參千萬な。己れも身が内に置くことはならぬ。出て行け。まだそこに居るか〳〵。扨も〳〵腹の立つ事かな。小アドへやと參つたの。アドへ以ての外な事ではないか。小アドへ兩人共にしたゝかぬかれた。アドへ都の者が辯口を云うた時は。それぢやと思うたが。頼うだ人に叱られば。後へも先へもゆかぬ事ぢや。が。これは先づ何としたものであらう。小アドへ身共は途方に暮れてゐる。そちよい様にしてたもれ。アドへいや流石都者ぢや。ぬかば唯もぬかいで。先づかうあらうと思うてか。機嫌を直す囃子物を教へたを覺えてゐるか。小アドへ誠に。何とやら云ふ事であつたが。アドへ千石の米骨。小アドへ萬石の米骨。アドへ目近に持つて參りたり。二人へこれ〳〵御覽候へ。げにもさあり。やよがりもさうよの。アドへかうであつた。小アドへ成る程その通りぢや。アドへ追附け囃して。御機嫌を直さう。小アドへ一段とよからう。アドへ囃せ〳〵。ト云うて。囃子物にかゝる。大小太鼓あしらうて移る所。末廣がりに同じ。シテへ兩人の者が都でぬかれて來て。某が機嫌を直さうと思うて。囃子物を致す。こりや出ずばなるまい。シテへいかにや〳〵。太郎冠者も次郎冠者もよく聞け。ぬかれたは腹が立てど。囃子物が面白い。千石の米をも。萬石の米をも。藏にどうと納めて。先づ内へつゝと入つて。餚の鮨を頬張つて。諸白を飲めかし。千石の米骨と囃しかゝる。シテ移り。シテへとかくの事はいろまい。内へ入つて。餅食へ。げにもさありと。囃しかゝる。しやぎり。三人走りこきにて留る。麻生の通りとめるなり。

【も】

餅酒（もちざけ）

シテ　越前の百姓
アド　加賀の百姓
小アド　お奏者

アドへ是は加賀の國のお百姓で御座る。毎年大晦日さかひに持つて上り。元朝に上頭（うへさま）へ、捧ぐる實相坊の菊酒で御座る。去年は木の目峠の大雪にさゝへられ。當年迄延引致したれども。今持つて上る事で御座る。シカ〳〵。誠に去年上る御年貢を。當年迄延引致したに依つて。御前の首尾が何と御座らうぞ。心許なう御座る。イヤ是迄參りたれば。いかう草臥れた。暫く此所に休らうて。似合はしい人もあらば同道致して參らうと存ずる。シテへ是は越前の國のお百姓で御座る。毎年大晦日さかひに持つて上り。元朝上頭へ捧ぐる圓鏡で

御座る。去年は木の目峠の大雪にさゝへられ。當年迄延引致したれども。今持つて上る事で御座る。シカ〳〵。誠に。去年上る御年貢な。當年迄延引致すによつて。御前の首尾が何と御座らうぞ。心許なう御座る。アド〽是へ一段の人が見えた。言葉を掛けう。なう〳〵。これ〳〵。シテ〽此方の事で御座るか。アド〽成程其方の事ぢや。是はどれからどれへおゆきやる。シテ〽身共は用を前にあてゝ後(あと)から先へ行く者で御座る。アド〽誰あつて用を後にあてゝ先から後へ行く者はない。眞實どれからどれへお行きやる。シテ〽先づわごりよはどれからどれへお行きやる。アド〽身共は加賀の國のお百姓でおりやる。毎年大晦日ざかひに持つて上り。元朝に上頭へ捧ぐる寶相坊の菊酒でおりやる。去年は木の目峠の大雪にさゝへられ。當年迄延引致したれども。今持つて上る事でおりやる。シテ〽それは同じ様な事ぢや。すれば身共は隣りの者ぢや。アド〽隣りでは見ぬ人ぢやぞや。シテ〽越前の國のお百姓でおりやる。アド〽さては國隣りと云ふ事か。シテ〽中々。アド〽してなんと。シテ〽毎年大晦日境に持つて上り。元朝上頭へ捧ぐる圓鏡でおりやる。去年は木の目峠の大雪にさゝへられ。當年迄延引致したれども。今持つて上る事でおりやる。アド〽言葉をかけたも別の事でない。何と同道召されまいか。シテ〽幸ひ一人で連(つれ)ほしう存じた。成程同道致さう。アド〽それならばいざお行きやれ。シテ〽何がさて其方が前ぢや。まづお行きやれ。アド〽先とおしやる程に身共から參らう。シテ〽一段とよからう。アド〽さあ〳〵おりやれ。シテ〽心得た。アド〽ふと言葉をかけたに。早速同心召されて。此様な喜ばしい事はない。シテ〽牛は牛連(づれ)馬は馬連と云ふが。其方も百姓身共も百姓。此様な似たよい連はあるまい。アド〽あはれ御館(みたち)も一つ所であれかし。シテ〽よし御館は違うたりとも。最前の所迄はとくと同道致さうぞ。アド〽いや何かと云ふ内に都へ着いた。シテ〽誠に。都ぢや。アド〽則ち身共が上げる御館はこれでおりやる。シテ〽わごりよの上げる御館は是か。アド〽中々。シテ〽身共が上げる御館はまだづつと上でおりやる。アド〽其様な事を存じたらば。路次でお茶なりとも申さうものを。シテ〽それは互ひでおりやる。又戻りにも待合せて。最前の所迄はきつと同道致さう。アド〽必ずその筈でおりやる。シテ〽もう斯う參る。アド〽何とおゆきやるか。シテ〽中々。二人〽さらば〳〵。シテ〽と云うたれども。身共が上げる御館もそれでおりやる。アド〽ハテざれ言を云ふ人ぢや。してわごりよは時のお奏者で上げるか。但し引付(ひきつけ)があるか。シテ〽身共は時のお奏者で上げる。アド〽身共は引付がある。身共から上げう程に。暫くそれにお待ちやれ。シテ〽心得た。小アド〽今日のお奏者で御座る。ト云うて○二人詔へ着くと云ふ前に出る事。アド〽物も。案内も。小アド〽何者ぢや。アド〽ハア是は加賀の國のお百姓で御座る。毎年上頭へ御年貢として大晦日境に持つて上り。元朝に捧ぐる寶相坊の菊酒で御座る。去年は木の目峠の大雪にさゝへられ。當年迄延引致しては御座れども。今持つて上つて御座る。御前の首尾を宜しう頼上げます。小アド〽御藏の前へ納めませ。アド〽畏まつて御座る。小アド〽ヤイ〳〵百姓は汝一人か。アド〽いやまだ表に越前の國のお百姓がおります。小アド〽上頭へは一緒に申上げう。是へ出よと云へ。アド〽畏まつて御座る。シテ〽何と上げさしましたか。アド〽わごりよの事を申上げたれば。上頭は一緒に仰上げうとのお事ぢや。急いで上げさしませ。シテ〽してお奏者はどれに御座つた。

アド〽つゝと奥に御座る。シテ〽心得た。百姓の臆めたは惡い。のしきつて參らう。物も。物も。案内も。ワアこの邊りではありそむない。物も。賴みませう。小アド〽何者ぢや。シテ〽ハア越前の國のお百姓で御座る。毎年大晦日境に持つて上り、元朝上頭へ捧ぐる圓鏡で御座る。去年は木の目峠の大雪にさゝへられ。當年迄延引致したれども。今持つて上つて御座る。御前の首尾を宜しう賴上げます。小アド〽御藏の前へ納めませ。シテ〽畏まつて御座る。アド〽何と上げさしましたか。シテ〽アヽわごりよはお奏者は奥に御座るとおしやつたが。口に御座つてよい肝を潰した。アド〽身共が上げた時は奥に御座つたが。口へ出させられたものであらう。シテ〽何を云ふぞいやい。口に御座つた。アド〽いや奥に御座つた。ト云うて○二人せりあふ。小アド〽兩國のお百姓斯くの通り。ハア。やい／＼。シテ〽そりや召すは。二人〽ハア。小アド〽兩國のお百姓に。去年上ぐる御年貢を當年迄延引致したとあつて曲事に思召すさり乍ら。折節お歌の御會のみぎりなれば。兩國のお百姓に御年貢によそへて歌を一首づゝ詠めとのお事ぢや。急いで詠ませ。アド〽畏まつて御座る。シテ〽是はおわずらひにおかせられたらばよう御座らう。小アド〽汝は何と聞いた。シテ〽折節お歌の御會のみぎりなれば。兩國のお百姓に御年貢を下されうと承つて御座る。小アド〽いや／＼さうではない。汝は何と聞いた。アド〽折節お歌の御會のみぎりなれば。兩國のお百姓に御年貢によそへて歌を一首づつ詠めと承つて御座る。小アド〽成程その通りぢや。急いで詠め。二人〽畏まつて御座る。シテ〽歌とは何の事ぢや。アド〽まづ案じておみやれ。シテ〽案ずれば出るか。アド〽中々。シテ〽案ずれば出るよの。アド〽斯うもあらうか。シテ〽はや出たか。アド〽まづ申上げてみよう。小アド〽なんと。アド〽吞み臥せる。小アド吟ず。醉ひのまぎれに年一つ。打越酒の二年醉ひかな。小アド〽一段と出かした。さあ／＼汝も詠め。シテ〽歌と申すものはあの樣なもので御座るか。小アド〽成程その通りぢや。シテ〽斯うも御座りませうか。小アド〽何と。シテ〽飲み臥せる。小アド吟ず。醉ひのまぎれに年一つ。打越酒の。小アド〽やい／＼。それはあの者の詠うだ歌ぢや。汝が御年貢によそへて詠め。シテ〽でも歌と云ふものは。あの樣なものぢやと仰せられたによつて詠みました。アド〽あゝこれ／＼。わごりよの御年貢によそへてお詠みやれ。シテ〽身共が御年貢によそへて詠まねばならぬか。アド〽成程その通りぢや。シテ〽ハテむつかしいものぢやなア。それならば斯うも御座りませうか。小アド〽何と。シテ〽年の内に。餅は搗きけり一年を。去年とや喰はん今年とや喰はん。小アド〽一段と出かした。兩國のお百姓斯くの通り。ハア。やい／＼。時のお笑ひ草に仰出されたを。一段と出かしたとあつて御感に思召す。さうあらば萬雜公事を御赦免なさるゝ。二人〽それは有難う存じまする。小アド〽喜べ／＼。二人〽ハア。ト云うて笑ふ。アド〽心がくわつとした。シテ〽心がはれりとした。ト云うて笑ふ。小アド〽やい／＼。御前近いに何を聲高に申す。ハア。さればこそ申さぬ事か。あまり汝等が大きな聲をして笑ふによつて。百姓の腹中は賢さうな。今度は大きな歌をも一首づゝ詠めとの御事ぢや。急いで詠みませ。二人〽畏まつて御座る。アド〽アヽあまりわごりよが大きな聲をして笑ふによつてぢや。シテ〽何を云ふぞいやい。わごりよが大きな聲をするによつてぢや。ト云うて○せり合ふ。小アド〽こりや／＼。互ひに論は無益ぢや。急いで詠め。二人〽畏まつて御座

ろ。アドへ斯うも御座りませうか。小アドへ何と。アドへ盃は。小アド吟ず。空と土との間のもの。富士をつきずの法にこそ飲め。シテへ大空に。小アド吟ず。はゞかる程の餅もがな。いけらう一期かぶり喰はん。小アドへ一段と出かした。兩國のお百姓かくの通り。ハア。やい／＼。前世下された事はなけれども。お流れを下さるゝ。是へ寄つて頂戴せい。二人へそれは有難う存じまする。小アドへさあ／＼飲め／＼。二人へ有難う存じまする。小アドへ汝等は冥加に叶うたものぢや。二人へ私共は冥加に叶うたもので御座る。小アドへひつちがへて三獻づゝ飲みませ。二人へ猶以て有難う存じまする。小アドへ扨此上はお暇を下さるゝ。洛中を賑々と舞ひ立ちにせい。二人へ畏まつて御座る アドへ松の榮や梅つぼの。柳の酒こそすぐれたれ。シテへ年々に。つき重ねたる舞の袖。二人へかへす袂や。ねすらん。二人へやらんめでたや／＼な。抑も酒は百藥の長として。壽命を延ぶ。其上酒に十の德あり。旅行に慈悲あり。寒氣に衣あり。水山に便りあり。扨又餅は萬民にもちゐられ。白金黄金所領もち。白金黄金所領の上に。なほ國もちこそ。めでたけれ。

貰聟

シテ　聟
アド　女
小アド　舅

女聟先へ出る。女着座。聟その次。シテ内より酒に醉ひ。謠「都なれや」謠うて出る。笑ふ。

シテへ面白い／＼。醉うたり／＼。いやと云ふものを大盃で三つ。それ人間の樂しみは。春は花秋は月。俺はただ酒ぢや。笑ふ。さりながら。どうやらちら／＼する。何かとて戻つた。まだ見たむない女共の面を見ずばなるまい。女共／＼。アドへこれのうが戻らせられたさうな。戻らせられたか。シテへ戻らせられたか。和御寮はどなたに居たぞ。アドへどれに居ませう。内に居ました。シテへ内に居た者が。最前から聲の嗄るゝ程呼ぶに。聞えぬと云ふ事があるものか。アドへまたさゝが過ぎたさうな。先づ内へ入らせられい。シテへ總じて身共が表から入れば裏から出る。裏から戻れば表から出る。アヽ合點のゆかぬ人ぢや。アドへまたさゝに醉うて。無理な事を云はせらるゝ。早う入つて休ませられい。シテへ酒呑まう。アドへそれ程さゝに醉うて居て。まだ呑まうと云ふ事があるものでござるか。シテへ聞きとむない。推參千萬な。おれが酒を呑まうと云へば。なんのかのと云うて呑ませぬ。おのれにはうど倦き果てた。ひまをやる。出て行け。アドへまたしてもひまをやるの去るのと。妾ぢやと云うて。出て行きかれもしますまい。シテへおゝさてとつとゝ出て行け。アドへそれならば暇の印を下され。シテへひまをやるが印ぢや。アドへいや／＼。女と云ふ者はまたどこへ行くまいものでもござらぬ。塵をむすんでなりとも印を下され。シテへそれは心安い事ぢや。どれ／＼。そりややるぞ。アドへえゝ腹立ちや。これは喩へてこそあれ。何なりとも。しつかりとした印をおこし居れ／＼。シテへ何ぢや。しつかりとした印をおこせ。アドへおゝさて。シテへ和御寮も惡うはほれぬの。ひまをやるからは何か惜しからうぞ。これをやるぞ。アドへさては眞實暇を下さるか。シテへくどい事を吐す。まだ其處に居るか／＼。アドへあゝ許して下され。シテへさうもおりやるまい。笑ふ。日頃見たむないい／＼と思うたれども。かな法師が母ぢやと思うて。了簡をして置いた。今日はざつとよい病晴れをしたと云ふものぢや。この樣な面

白い時。またどれへぞいで飲うで來う。ト云うて。さゝんざ謡ひつゝ樂屋へ入る。アド〽またわ男がさゝに醉うて。妾に暇をくれてござる。是非に及ばぬ。親里へいなうと思ひます。シカ〳〵。誠に。これまでさゝに醉うて。去るの戻すのと云ふは度々の事でござれども。かな法師が不憫さに。了簡致してござれども。最早堪忍袋が切れてござる。親里へ歸らうと思ひます。さりながら。妾が歸る分は苦しうないが。後でかな法師が尋ねうと思へば。それが悲しうござる。ト泣き〳〵。まうし父様ござるか。小アド〽いやおごうの聲ぢやが。えいおごう。女泣く。小アド〽あゝこれ〳〵。落涙の體ぢやが。何とおしやつた。アド〽またわ男がさゝに醉うて。暇をくれてござる。小アド〽またか。アド〽あゝ。小アド〽さても〳〵苦々しい事かな。またしても〳〵。醉狂をして。去るの戻すのと。世間の外聞も悪い。また和御寮もわごりよぢや。これまでさゝに醉うて。去るの戻すのと云ふは。度々の事ぢやに。それを誠にして戻ると云ふ事があるものか。アド〽いや今度は眞實暇をくれたと見えて。暇の印にこの一腰をくれました。小アド〽何ぢや。暇の印にその一腰をおこした。アド〽あゝ。小アド〽ほい。こりやよつぽどの事ぢやさりながら。身共も酒を一つ飲むが。酒の上では何事も覺えぬものぢや。その上夫の七度去るまでは。家を出ぬ物ぢや程に。先づ了簡をしてお歸りやれ。アド〽おの仰せらるゝ事は。佛の顔も三度撫づれば腹が立つと申すが。これが五度や七度の事ではござらず。餘り度々でござるに依つて。妾はいぬる事はいやでござる。小アド〽それは尤もなれども。今朝醒めて見れば。又その様なものでもない程に。了簡を召され。アド〽扨は妾を内へは寄せまいと云ふ事でござるか。小アド〽いや寄せまいではなけれども。先づ了簡してお歸りやれと云ふ事ぢや。アド〽ようござる。女ぢやと云うて。刄物が身に立たぬでもござるまい。よし刄物が身に立たずば。淵川へ身を投げてなりとも死にませう。小アド〽あゝこれ〳〵。さてはそれ程までに思ひ詰めたか。アド〽たとへ親子の久離を切ると云うても。いぬる事はいやでござる。小アド〽よい〳〵。それならば戻しはせまい。さりながら。また毎もの様に近所の衆を頼うで。詫言におこすであらう。お主をこれに置いて。その斷りを聞かぬも。何とやら大人氣ない。これへは來ぬ分にして置かう程に。和御寮は奥へ引込うでおいやれ。アド〽心得ました。小アド〽必ず〳〵端近くへお出やるな。シテ〽しないたり〳〵。今朝眼を醒して女共を尋ぬれば。近所の衆が大笑ひをして。又例の酒に醉うて。女共にひまをやつたと申さるゝ。あれが片時居いでは。身體がどうもならぬ。その上かな法師が尋ねて。何共難儀を致す。と申して邊りの衆を頼んで。詫事をして貰はうも。餘り度々の事故面目ない。是非に及ばぬ。今日は某が密かに參つて。舅の膝をだいてなりとも。おごうを貰うて歸らうと存ずる。シカ〳〵。誠に。佛の戒めにも。飲酒を破れば。邪淫妄語も共に破るゝと申すが。酒ほど心を狂はすものはござらぬ。又女共も合點が悪い。某が酒に醉うて。ひまをやるの去るのと云ふは。再々の事ぢやに。それを誠にしていぬると云ふ事があるものか。さりながら。餘り再々の事ぢやに依つて。腹を立つるも尤もぢや。參る程にこれぢや。いかさま足の裏に疵を持つた者は。筵原をえ歩かぬと申すが。常に心易う參る内なれども。今日程この敷居を高う覺ゆる事はござらぬ。先づ案内を乞はずばなるまい。ト云うて。常の如し。小アド〽エイこれはようお出でやつた。シテ〽この間はお見舞も申しま

せぬか。御機嫌さうで目出度う存じます。小アドへそなたもまめさうで一段でおりやる。シテへさて何時ぞは申さう／＼と存じましたが。お前の事を世間でいかう人が賞めまする。小アドへそれは何と云うて。シテへ何れお前の様な御果報なお方はない。先づ第一御息災で。寺道場へもお参りなさるゝに依つて。何事も御了簡深う下々までも細かにお氣が附かせらるゝ。お慈悲深い結構な方ぢやと申して。いかう人が賞めまする。私も悪い事を承る様にはござらず。悦ばしう存じまする。小アドへそれはなか／＼でおりやる。シテへさて私も御酒をふつゝりとまりました。小アドへなぜに。シテへお目を下さるゝお方が。そちは常は随分正直に生れ附いたが。酒を飲むと云ふまい事を云ひ。心に思はぬ夫婦いさかひなどを。とかく酒をとまつたらよからうとおしやりまするに依つて。尤もな事ぢやと存じて。ふつゝり御酒をとまりました。小アドへいやお知りやる通り。身共も一つ飲むが。一つなどは苦しうないものぢやが。シテへされぱの事でござる。一つなど食べまする分は苦しうござらねども。一つ食ぶると申せば人も強ひまする。一盃(はい)飲み足らず。二盃数悪し。三盃四盃と申すうち。つい大御酒になりまする。兎角飲まぬにしくはないと存じて。ふつゝりとやめました。小アドへむゝ誰やらであつた。昨夕とやらも酒が過ぎたとやら。又過ぎさうなとやら。聞いておりやる。シテへそれは物でござる。友達共が申しまするは。そちは酒をとまる／＼と云うて。何時とまるやら。境(さかひ)が知れぬ。とてもとまるならば。境飲みをしてとまれと申したに依つて。夜前はその境飲みに下されてござる。今日からはふつゝりと思ひとまりましてござる。小アドへこれ／＼。それは酒をお飲みやらうとも。又お飲みやるまいとも。そなたの勝手に召されたがよい。さらば。ト云うて立つ所シテとめる。シテへまうし／＼。小アドへやあ。シテへお髭に塵がござりまする。小アドへ過分におりやる。また苦しうおりやらぬとも。シテへいや先づお待ちなされて下され。小アドへ何でおりやる。シテへおごうはこれへ参りませぬか。小アドへいや是處へは來ぬが。何とぞしましたか。シテへ御酒はふつゝりとまりまする程に。おごうをお戻しなされて下され。小アドへこれ／＼。酒は勝手に召されたがよい。娘は是處へは参らぬ。それは心もとない。どれへいたの。シテへこれへ参らいでどれへ参りませうぞ。唯今までは私の不調法でござる。どうぞお返しなされて下され。小アドへはて酒はお飲みやらうとも。お飲みあるまいとも。そなたの勝手に召され。おごうはこれへは参らぬ程に。外を吟味おしやれ。シテへそれはお情なうござる。あの人が片時もゐられませいでは。世帯の事がどうもなりませぬ。その上かな法師が尋ねましても。どうもなりませぬ。アドへおゝかな法師が尋ねませうとも。女橋懸りにて云ふ。舅叱る心持。シテ聞き付け見る。悉く口傳あり。シテへ今のはおごうが聲ではござりませぬか。小アドへあれは隣のお内儀でおりやる。シテへ何しに年久しう連れ添ひまする女共の聲を聞き違へませうぞ。御酒は思ひとまりますからは。どうぞ御了簡をなされて下され。女舅の左へ廻り。了簡させられと云ひ。袖を引く。何れも仕方口傳。小アドへはてさてこゝな人は聞き分けのない。娘は是處へは來ぬ。外を尋ねさしませ。シテへお腹立ちの段は重々御尤もでござる。これからは無理な事も申しますまい。萬事嗜みまして。おごうのおしやる通りに致しませう。幾重にも御了簡をなされて。どうぞお返しなされて下され。小アドへおごうはおしやる通りに是處へは來ぬわいの。シテへ最前も申す通り。かな法師

がほえてどうもなりませぬ。（トいろ／＼云ふ間に向うへ出て。顔見合す。）シテ＼おごう是處に居るか。アド＼こちの人。こゝに居まする。早う戻つておくりやれ。シテ＼かな法師が尋ねて迷惑する。アド＼さうでござらうとも。（舅女を引き戻し。）小アド＼やいそこな人でなし奴。それぢやに依つて了簡をしていねと云ふに。たとへ親子の久離を切ると云うても。いぬる事はいやぢやとぬかしたでないか。端近くへ出居るなと云ふに。出をる。すつかうて居よ。シテ＼なう舅殿。小アド＼何ぢや。シテ＼こなたはきこえぬ人ぢや。あれ程こゝに居るものを。來ぬなどゝ云ふ事があるものか。小アド＼やいそこな奴。おのれもおのれぢやぞよ。またしても／＼。醉狂をして。去るの戻すのと。世間の外聞も惡い。この上はおごうがいなうと云うても。身共が歸さぬ。さう心得。シテ＼いよ／＼きこえぬ事をおしやる。たとへおごうが。とも／＼意見をして歸しさうなこなたが。どこにか夫婦相對の上戻らうと云ふに。それを歸すまいと云ふ事があるものか。あの様な人には構はずとも。さあ／＼お歸りやれ。小アド＼いや／＼。（ト云うて。女を引寄せる。）なんぼうでもいなす事はならぬ。（互に仕様あり。口傳。）シテ＼あゝむつかしい。女共小股をとれ。アド＼心得ました。（ト舅をこかし。）アド＼なういとしい人。ちやとござれ。シテ＼心得た／＼。小アド＼やい／＼。夫婦してこの様にし居つたに依つて。來年から祭には呼ばぬぞよ。（ト云うて。とめて入るなり。但し追込とあれども。とめるがよし。）

【や】

痩松

シテ　山賊
アド　女
（入道具）

シテ＼丹波の國に住居致す心の直ぐにない者で御座る。此のうちは殊の外不仕合せな。今日は痩松へ參つて仕合せを致さうと存ずる。シカ／＼。誠に。この肥松痩松と申すは。我等ごとき山賊の合言葉で。仕合はせのよいを肥松と申し。又不仕合せな時を痩松と申す。それを今は聞き知つて。在名のやうになつて御座るに依つて。殊の外人遠うなつて往來が淋しうて。我等如きの迷惑で御座る。何かと申すうちにこれぢや。先づ此の谷間へかゞうでゐて。仕合せを致さうと存ずる。アド＼此の邊りの者で御座る。今日は親里から呼びに參りましたに依つて。行かうと思ひまする。シカ／＼。誠に。朝早うと思ひましたれども。何やかや拵へが出來かねて遲うなつた。最早暮に及うで御座る。此の道は淋しい道で恐ろしう御座る。シテ＼これへ一段の者が參つた。やい／＼。やいそこな者。アド＼何で御座る。（ト云うて。袋を後へかくす。）シテ＼この人遠い所を暮に及うで。殊に女の一人で通るは徒ら者であらう。アド＼いかな／＼。徒ら者では御座らぬ。親里から呼びに參りましたに依つて　夫に暇を貰うてしばらく參りまする。シテ＼おのれに夫のあるないと云ふ吟味はせぬ。先づおのれはどこの者ぢや。アド＼頓て此の邊りの者で御座る。シテ＼いや此の邊りでは終に見た事がない。アド＼女の事で御座る。常に餘り外へ出ませぬ程に。見知らつしやれぬ事も御座らう。シテ＼その隱したは何ぢや。アド＼これは妾が親里へ行くに依つて。當分入用の物で御座る。シテ＼それをこちへおこせ。アド＼やあらそなたは最前妾を徒ら者ぢやとおしやつたが。人の物を唯おこせと云ふは。そなたが徒ら者ぢや。シテ＼口の過ぎた女ぢや。おのれおこさずば此の長刀にのせてくれうぞ

／＼。ト云うて。長刀を振廻す。女袋を捨て逃げる。シテ〽まだ其處になるか／＼／＼。ト云うて。幕の際まで追ふ。さて戻りて。袋見て笑ふ。女あせる。シテ〽斯様の時を肥松と申す。扨々よい仕合はせぢや。先づ中に何がある。あけて見う。ト云うて。あけて見て一色出す。シテ〽こりやよい帶ぢや。この帶を娘にやらう。アド〽なう／＼。腹立ちや／＼。妾が大事の帶をして娘にやらうと云ひ居る。シテ〽結構な小袖がある。此の中不仕合せで女共が不機嫌な。之をやつて機嫌を直さう。鏡がある。扨もよい鏡ぢや。よう見える。何れ某を人がこはがる筈ぢや。我が身ながらも氣味の惡い顔ぢや。これは紅猪口か。外は皆役に立たぬ物ぢや。ト云うて居るうち。女さし足して。長刀をとりて。アド〽やいそこな奴。最前からよう妾をおどしたな。おのれこの長刀で切るぞよ／＼。シテ〽やれ／＼あぶない。女の大膽な。長刀を持つて何と召さる。どれ／＼。こちへおこさしめ。アド〽何のおこせ。切るぞよ／＼。シテ〽いや最前はそなたを見違へて麁相をした。今よう見れば。それ／＼近附きぢや。アド〽いや／＼近附きではない。シテ〽はておぬしは物でないか。扨も／＼久しう逢はなんだ。息災で一段ぢや。どれ／＼。その長刀をこちへおこさしめ。アド〽何のおこせ。あいーれ／＼しい面はいの。そばへ寄つたら二つにしてやらう。その取つた物を皆返せ。シテ〽それは聞えぬ。一旦くれて置いて取返すと云ふ事があるものか。アド〽おのれ誰がやつた。返さずば斬るぞよ／＼。シテ〽あゝやる／＼。シテ返ししなに。帶懐へ入れる。アド〽やい。その懐に入れたは何ぢや。シテ〽何も入れはせぬ。アド〽いや／＼。見た／＼。おこせ。シテ〽目の早い女ぢや。これ一色はくれい。娘にやりたいわいやい。アド〽ならぬ／＼。帶もおこせ。斬るぞよ／＼。シテ〽そりや。やつた／＼。アド〽その脇差もこちへおこせ。シテ〽女の腰の物を取つて何にする。アド〽夫にやる。シテ〽その様にわが夫のひいきばかりせぬものぢや。アド〽おこさぬか／＼。シテ〽あゝやる／＼。アド〽羽織もおこせ。シテ〽わが物を取返したれば。それでよいは。アド〽いや／＼。取らねばならぬ。おこせ／＼。斬るぞよ／＼。シテ〽氣の短い女ぢや。脱いでやらう。アド〽頭巾もとれ。重れて面を見知る爲ぢや。シテ〽恥

かしけれども。また斬らうと云ふであらう程に。とらうまでよ。アド〽おのれが面をよう見れば。盗みをせいで叶はぬ面ぢや。あの徒らな面はいやい。（ト云うて入るを。）シテ〽こりや〳〵。（ト云うて。後より長刀の柄を引く。）その長刀は俺のぢや。くれい。（ト云うて。長刀にて追うて戻る。シテ脇座へ逃げる。女入るなり。）アド〽まだそのつれを云ふか。シテ〽あの女山賊め。やるまいぞ〳〵。（ト云うて。追込み入るなり。）

八幡前（やはたのまへ）

シテ　聟
アド　舅
小アド　太郎冠者
教へ手

（入道具）

アド〽八幡山下の者で御座る。某美人の一人娘を持つて御座る。何者によらず。一藝達した者を聟に取らうと存ずる。先づ此由を高札に打たう。（ト云うて。呼出す。出る。常の如し。）アド〽高札の表について聟殿が見えたらば。藝の様子を尋ねて。此方へ知らせ。（常の如くつめる。うける。同断。）シテ〽是はこの邊りの者で御座る。邊り近い八幡の里に有徳人があつて。美人の一人娘を持たれて御座る。何者にはよるまい。一藝達した者を聟に取らうと。高札を打たれて御座る。某は何も藝は御座らねども。爰に誰殿と申してお目を下さるゝお方が御座る。これへ參つて。何ぞ一藝習うて。直ぐに聟入を致さうと存ずる。シカ〳〵。誠に。内に御座ればよいが。内にさへ御座つたれば。身共が申す事ぢやに依つて。何なりとも教へて下さるゝであらう。イヤ何かと云ふ内に是ぢや。（ト云うて案内乞ふ。出るも常の如し。）ヨシへ〽エイ愛な人。先づは綺麗な出立ちでおりやる。シテ〽何とよう御座りますか。ヨシへ〽わごりよがこれへ來始まつてから終に見ぬ程綺麗な出立ちでおりやる。シテ〽よい御目利で御座る。私は今日聟入を致しまする。ヨシへ〽何ぢや。聟入をする。シテ〽なか〳〵。ヨシへ〽それはめでたい事ぢや。其樣な事をとうにも存じたれば。人を以てなりとも申さうものを。曾て存ぜなんだ。シテ〽御存じない筈で御座る。今日只今の事で御座る。ヨシへ〽何なりとも用があらばおしやれ。シテ〽早速御無心申しませう。ヨシへ〽何で御座る。シテ〽定めて聞きも及ばせられう。邊り近い八幡の里に有徳人があつて。美人の一人娘を持たれて御座る。何者にはよるまい。一藝達した者を聟に取らうと高札を打たれて御座る。私は何も藝は御座らぬ。お前へ參つて何ぞ一藝習うて。直ぐに聟入を致さうと存じて參つて御座る。ヨシへ〽扨々そなたはむさとした事をおしやる。藝と云ふものは。今習うて今の役には立たぬ物でおりやる。シテ〽ハア。扨は藝と云ふものは。今習うて今の役に立たぬもので御座るか。ヨシへ〽なか〳〵。シテ〽すれば私は麁相な事を致しました。ヨシへ〽何とおしやつた。シテ〽お前へ參つたれば。何なりとも教へて下されうと存じて。はや高札を引きました。ヨシへ〽是はいかな事。その高札を引くといふ事があるものでおりやるか。シテ〽是非に及びませぬ。往て立て返して參りませう。ヨシへ〽アヽ先づお待ちあれ。そなたが高札を引く時。大勢見物はなかつたか。シテ〽成程大勢見物が御座つて。あの若い者こそ一藝あらうと申して。いかう羨みました。ヨシへ〽それ〳〵お見やれ。其樣な所へ今更何と高札が立て返しに行かるゝものであらう。シテ〽でもせう事が御座らぬ。ヨシへ〽又わごりよも何ぞ覺えた藝は無いか。シテ〽何も御

座らぬ。ヲシヘ〽何と鼓はならぬか。シテ〽鼓と仰せらるゝは後先に皮をあてゝ。緒(を)を千鳥がけに掛けて。ヲシヘ〽それ〳〵。シテ〽ぽん〳〵と叩くもので御座るか。ヲシヘ〽いかな〳〵。その叩くばかりで埒の明く事ではない。鐵砲はならぬか。シテ〽傍(そば)で聞いてさへ。吃驚致しまする。ヲシヘ〽それならば弓もなるまいし。シテ〽いや弓はなりませう。ヲシヘ〽ハア射た事があるか。シテ〽悴の時分濱弓を射た事が御座る。これはなりませう。ヲシェ〽いかな〳〵。その濱弓位で埒の明く事ではないけれども。分別を以て上々の射手にしておませうぞ。シテ〽それは忝う御座る。ヲシヘ〽先づあれへお行きやつたらば。藝の様子を尋ぬるであらう。弓を射る眞似をして見せたがよい。おてまいが見ましたう御座る。四半が丸物さげ針などをなさるゝかと云うたらば。其様な物は大方拳の極つたものぢや。迚もの事に浮島翔(かけ)鳥を仰せられいとおしやれ。邊り近い放生川へ同道していて。矢坪をさゝせて射たりとも。よもや中りはせまい。シテ〽傍(そば)へも參りますまい。ヲシヘ〽其時人が笑ふ。シテ〽笑ひませうとも。ヲシヘ〽餘りなお笑やつそ。一首浮ぶとおしやれ。シテ〽それは何の事で御座る。ヲシヘ〽歌を詠まうと云ふ事ぢや。シテ〽ハア。ヲシヘ〽いかばかり。神も嬉しく思すらん。八幡の前に鳥井立つたり。とおしやれ。それに心がある。此の八幡に造營があつて鳥井がたつ。今そなたがあれへいて鳥を射ると。鳥井の立つたを寄せ合せて。鳥井立つたりとは。何と面白うはないか。シテ〽何れ面白さうな事で御座る。ヲシヘ〽さうさへおしやれば。弓は下手なれども。歌よみぢやと云うて。ざつと聟入が濟む事でおりやる。シテ〽して今のは誰が申す事で御座る。ヲシヘ〽誰がと云ふ事であらう。わごりよのおしやる事ぢや。シテ〽あの私一人して。ヲシヘ〽おんでもない事。シテ〽その様ななま長い事が。五年や三年で覺えらるゝ事では御座らぬ。ヲシヘ〽あの是程の事が覺えられぬか。シテ〽思ひよらぬ事で御座る。ヲシヘ〽そなたもよつぽど物覺えが悪いのう。それならば何としたものであらうぞ。イヤそなたが鳥を射ると云うたらば。定めて大勢見物があらうに依つて。身共もその見物の中へ紛れて居て。歌の頭字をちよつ〳〵と云はうが。それではなるまいか。シテ〽如何に私が物覺えが悪いと申して。それでならぬと申す事は御座りますまい。ヲシヘ〽それならばざつと濟んだ。弓もあるまい。貸してやらうぞ。シテ〽それは忝う御座る。ヲシヘ〽さあ〳〵。シテ〽ハア。ヲシヘ〽ア、これ〳〵。弓もその様に使うたものではない。持ち様がある。先づ下においやれ。シテ〽心得ました。(ト云うて下にゐる。左に弓をとり。右に矢を持たせる。)ヲシヘ〽それ〳〵。それでよい。シテ〽これはどうやらいんぎりとなりました。ヲシヘ〽それで天晴の射手と見ゆる。シテ〽忝う御座る。お前も番への抜けぬ様にお出でなされて下されい。ヲシヘ〽成程つがへのぬけぬ様に行くであらう。(常の如く暇乞するなり。)シテ〽なう〳〵嬉しや〳〵。先づ急いで參らう。シカ〳〵。誠に。あの人の様な物知りは御座らぬ。いつ何時何を尋ねに參つても。それならぬとおしやつた事がない。あの人の蔭でざつと聟入をし濟したと云ふものぢや。何かと云ふ内に是ぢや。(ト云うて。案内乞ふ。出るも常の如し。)シテ〽高札の表について。聟が參つたとおしやれ。小アド〽高札の表には。何ぞ一藝ある方と打ちましたが。何ぞ藝が御座るか。シテ〽藝の。小アド〽なか〳〵。(ト云ふ時。弓の先を太郎冠者にさしつくる。)小アド〽ハア弓をなされまするか。シテ〽天晴の射手ぢやとおしやれ。小アト〽其由申しませう。暫くそれに

お待ちなされませ。シテ〽心得た。小アド〽申上げまする。アド〽何事ぢや。小アド〽高札の表について聟殿のお出でて御座る。アド〽藝の様子を尋ねたか。小アド〽成程尋ねて御座れば。弓をなさるゝと見えて。弓のほこ先を私の鼻の先へ寄せられて御座る。アド〽すれば弓をなさるゝと見えた。あれへいて云はうは。お手まいが見ましたう御座る。四半が丸物さげ針などをなさるゝかと云うて。尋ねて來い。小アド〽畏まつて御座る。ト云うて。アドの通りを云ふ。シテ〽其様なものは大方筝の極つたものぢや。迚もの事に浮鳥か翔鳥を仰付けられいとおしやれ。小アド〽畏まつて御座る。ト云うて。シテの通りを云ふ。アド〽すれば天晴の射手と見ゆる。小アド〽左様で御座る。アド〽それならば。邊り近い放生川に浮鳥が數多なりまする。これへ同道致さうが。お出でなされうかと云うて尋ねて來い。小アド〽畏まつて御座る。ト云うて。アドの通りを云ふ。シテ〽いづく迄もお供致さうとおしやれ。小アド〽心得ました。ト云うて。シテの通り云ふ。アド〽それならば斯うお通りなされと云へ。小アド〽畏まつて御座る、ト云うて。アドの通り。シテ〽心得た。不案内に御座る。アド〽初對面で御座る。邊り近い放生川へお供致さうと申せば。お出でなさるゝとあつて祝著に存ずる。シテ〽いづく迄もお供致しませう。アド〽いざござれ。シテ〽心得ました。

アド〽總じてこの放生川と申すは。殺生禁斷の所で御座れども。某はさる仔細あつて。苦しうない事で御座る。シテ〽それは重疊の事で御座る。アド〽イヤ何かと云ふ内に放生川で御座る。シテ〽誠に放生川で御座る。アド〽何と夥しい浮鳥では御座らぬか。シテ〽いか様夥しい浮鳥で御座る。アド〽さあ〳〵。あの内を一ト手遊ばせ。シテ〽いや。あの内を射ましたらば。定めてまぐれ中りぢやなどと仰せられう。迚もの事に矢坪をおさしなされませ。アド〽心得ました。ヤイ〳〵太郎冠者。天晴の射手と見ゆる。小アド〽左様で御座る。アド〽それならば。あの三ツつれてゐる中にも。進んだをなされと云へ。小アド〽畏まつて御座る。ト云うて。アドの通りを云ふ。シテ〽何ぢや。あの三ツつれて行く中にも進んだをせいか。小アド〽左様で御座る。シテ〽追付け致さうとおしやれ。小アド〽畏まつて御座る。ト云うて。シテの通りを云ふ。ヲシへ〽最早よい時分で御座る。參らうと存ずる。シテ〽最早誰殿には見えさうな者ぢやが。ト云うて。舞臺より探す心。ヲシへ人は一の松へ立ち。互ひに見附くる。先づ弓矢を下におけと云ふ心を敎へる。シテうろ〳〵とする。ヲシへ人あせる。扇を弓矢にかたどつて敎へる。是より色々仕様あり。口傳。ヲシエ〽弓矢を下に置け〳〵と云ふ事ぢや。肩を脱げ〳〵。アド

〽ヤイ太郎冠者。早うなされと云へ。 小アド〽畏まつて御座る。 ト云うて。アドの通りを云ふ。 シテ〽追付け致さうとおしやれ。 小アド〽心得ました。 又シテの通りアドに云ふ。 ヲシヘ〽左の肩ぢや〳〵。弓矢をとれ〳〵と云ふ事ぢや。 アド〽ヤイ〳〵太郎冠者。早うなされと云へ。 ト云うて。アドの通りを云ふ。シテ追付け致さうと云ふ。 ヲシヘ〽矢をつがへ〳〵。ア、それはあちらこちらぢや。取直せ〳〵。 アド〽これは遅い事ぢや。鳥がたちまする。早うなされいと云へ。小アド〽畏まつて御座る。 ト云うてアドの通り又シテへ云ふ。 シテ〽さらば仕らう。 アド〽一段とよう御座らう。 ト云ふ。矢を放す。アド。小アド笑ふ。教手シイ〳〵と呼ぶ。 ヲシヘ〽餘りなお笑やつそ。一首浮うだ。 シテ〽餘りお笑やつそ。石が浮うだ。 アド。小アド笑ふ。 ヲシヘ〽一首浮うだ。 シテ〽これ〳〵今のは違ひました。一首浮うだで御座る。 アド〽是は歌を詠まうと云ふ事さうな。 ヲシヘ手。シイ〳〵と呼んで云ふ。 ヲシヘ〽いかばかり。 シテ〽いかめかしい。 又二人笑ふ。 ヲシヘ〽いかばかりぢやわいやい。 シテ〽なう〳〵今のも違ひました。いかばかりで御座る。 アド〽先づ五ツ文字が面白う御座る。 ヲシヘ〽神も嬉しくおぼすらん。 シテ〽神けに御座る。 二人笑ふ。又シテ呼ぶ。 ヲシヘ〽神も嬉しくおぼすらんぢや。 シテ〽今のも違ひました。アド〽何と違ひました。 シテ〽神も嬉しくおぼすらんで御座る。 アド〽これはいかう面白う御座る。 又呼ぶなり。 ヲシヘ〽八幡の前に。 シテ〽やはちが親の。 二人笑ふ。又呼ぶ。 ヲシヘ〽八幡の前にぢやわいやい。 シテ〽扨々面目もない。 又違ひました。 アド〽はてよう違ひまするのう。 シテ〽八幡の前にて御座る。 アド〽先づ吟じて見ませう。 シテ〽どうなりともなされい。ヲシヘ〽あの様な者には恥を與へるがよい。 アド〽いかばかり。神も嬉しくおぼすらん。八幡の前に。これは面白う御座る。 此の内シテ橋かゝりへ行く。ヲシヘ手居ぬ故。シテうろ〳〵する。 シテ〽何と面白いか。 アド〽なか〳〵。 シテ〽さらば。 アド〽ア、これ〳〵。今の歌の後も云はずに。どれいお出でなさるゝ。 シテ〽今の歌の後は。誰殿がどれいやら往かれた。 アド〽ア、申し〳〵。今の歌の後に誰殿はいりませぬ。早う仰せられい。 シテ〽今の歌の後はいかばかり。 アド〽さればこそ。いかばかり神も嬉しくおぼすらん。シテ〽それ〳〵。 アド〽八幡の前に。シテ〽はてよい覚えの。アド〽その後を仰せられと申す事で御座る。 シテ〽その後か。 アド〽なか〳〵。 シテ〽もうようおりやるわいのう。 アド〽ア、これ〳〵。よいと云はせられては字が足りませぬわいのう。シテ〽字が足らずば。よい仕様が御座る。 アド〽何となさるゝ。 シド〽八幡の前に〳〵と。足る程云うて置いたがよい。 アド〽それでは字が短う御座るわいのう。 シテ〽短くば猶よい仕様がある。 アド〽何と召さるゝ。 シテ〽八幡の前に。 ト引いて。 と。足る程引かう迄よ。 アド〽言語道斷。変な者が某をなぶると見えた。この歌の後を云はずば。どつちへもやらんぞ。 シテ〽何ぢや。この歌の後を云はねばどつちへもやらんか。 アド〽なか〳〵。 シテ〽それは誠か。 つめる。常の如し。 シテ〽ア、今思出した。物と。 常の如くつめる。 シテ〽八幡の前に。 アド〽八幡の前に。 シテ〽どぶ亀を射たてた。 アド〽あのやくたいもない。 とつとゝおいきやれ。 シテ〽面目もおりない。

八尾（やを）

シテ　鬼
アド　亡者
（入道具）

次第アド〽罪を作らぬ罪人を。〳〵。誰かはよつてせかうよ。 詞〽これは河内の國八尾の在所の者で御座る。無常の風に誘はれ唯今冥

途に赴き候。道行シカ〳〵。住馴れし。八尾の在所を立出でゝ。〳〵。足に任せて行く程に。〳〵。六つの道にも着きにけり。これは早や六道の辻に着いた。暫く休らひ迷はぬ道へ參らうと存ずる。シテ次第馬口勞の通りなり。道行同斷。シテ急く程に六道の辻に着いたト云ふ アド〽先づ此の道を參らう。シテ〽いかう人臭い〳〵。頻りに人臭うなつた。さればこそ。一段の罪人が居る。一責め責めて取つて服(ぶく)せう。いかに罪人。地獄遠きにあらず。極樂遙かなり。急げとこそ。責あり。馬口勞の如く。アド恐れて方々へ逃げる。橋掛りへも行く。シテ竹馬に乘る所もあり。鬼そばへ寄る。アド文を差し出す仕樣あり。シテ〽最前から鼻の先へちら〳〵差寄する。何ぢや。アド〽お文で御座る。シテ〽どれからの文ぢや。アド〽八尾の地藏のお文で御座る。シテ〽扨も〳〵苦々しいことかな。またしてもあの地藏からの文にほうど困つた。さりながら。見ずは成るまい。先づ床几を持つて來い。アド〽畏まつて御座る。お床几。シテ〽どれ〳〵。其の文をおこせい。此の地藏から文をつけられて何程損をすることやら知れぬ。定めて外の事ではあるまい。何ぢや。閻もじ參る地より。笑ふ。まだ昔を忘れぬ文の上書ぢや。汝は知るまいが。八尾の地藏の若い時はずつと見態(みざま)がよかつた。某とはちと契約の事があつて。懇意にした。それ故今に於いて度々文通はせらるゝ。先づ開いて見う。アド〽さてお前はどなたで御座る。シテ〽忝くも地獄の主閻魔大王ぢや。アド〽八尾の地藏の仰せられたは。閻魔大王は玉の冠を召され。石の帶もなされ。金銀を鏤め。邊りも耀く御樣子と仰せられて御座る。お前のお裝(すがた)は左樣にも御座らぬ。シテ〽不審尤もぢや。成る程。某古へは玉の冠。石の帶をし。金銀を鏤め。邊りも耀く體であつたれども。今は娑婆の人間が賢うなつて。八宗九宗に法を分け。後生を願うて極樂へばかり行く。たま〳〵地獄へ來る者があれば。其方(そち)がやうに。知邊を以て文玉章を貰うて來る。いつぞの程から地獄の飢饉以ての外ぢや。さるに依つて。玉の冠も石の帶も紛失して。今はこの樣に自身六道の辻へ出ることぢや。アド〽これは御尤もで御座る。シテ〽先づ文を見う。そちもこれへ寄つて讀め。アド〽畏まつて御座る。シテ〽抑も。同〽南檀部州河內國。八尾の地藏の爲には旦那。その名を又五郎と。申すにや〳〵。人の爲には此の罪人は。小舅なり。シテ〽そちは又五郎が爲には小舅とあるは。又五郎が妻はそちが妹ぢやな。アド〽成る程左樣で御座る。シテ〽そちが妹ならば。又五郎が妻の容儀も大方知れた。アド〽私とは違うて。殊のほか美貌で御座る。シテ〽小舅なり。同〽我を信じて月詣佛供を供へて足手を運べば。我がため一の旦那なり。然るべくは閻魔法王この罪人を。九品の淨土へ遣りてたべ。それを背かば地獄の釜も蹶割るべしと。かうけはつたる罪人かな〳〵。シテ突落し。アド腰掛ける。同〽此上は。力なしとて罪人の手を取つて。閻魔王の案內者にて。九品の淨土に送り屆け。暇申して罪人また立ち歸り。罪人あら名殘惜しの罪人やとて。鬼は地獄に歸りけり。

【ゆ】

雪打(ゆきうち)

（入道具）

シテ　祖父
アド　子
小アド　百姓
同　女

アド〽此の邊りの者で御座る。何時もとは申しながら。當年の樣な大雪は御座らぬ。園

の樹木が心もとない。見舞はうと存ずる。シテ〳〵。誠に。斯様に雪の降つた後は。世なみがよいと申す。來年は田も實入りがよう出來うと存じて悦ばしい。さればこそ。夥しう降り積つた。餘程枝を折らいた。ト云うて。雪を拂ふ。また〳〵雪が降る。扨も冷たい事かな。と云うて見ては居られまい。先づ此の雪を脇へ除けう。小アド〽扨も降りつゞく事かな。園の樹木が心もとない。先づ急いで見舞はう。冬になれば此の雪にかゝつて。何程骨を折るやら知れぬ。扨々こなたは早う出さしましたよ。アド〽何と〳〵。打續いて雪が降る事ではないか。小アド〽毎日〳〵雪の世話に困り果てまする。アド〽今年は初雪からよう降る。末が思ひやられまする。小アド〽なう〳〵。此の雪はそなたが掃いておこしたか。アド〽なか〳〵某で御座る。小アド〽やあらそなたは合點の悪い者ぢや。身共の屋敷へなぜ此の様に雪を掃いておこいた。アド〽お主が屋敷に雪があ　て悪しくは。せんぐりに隣へ掃さやらしめ。小アド〽扨々年もゆかぬなりで我儘を言ふ。そちは雪に就いての大法を知らぬか。薄雪なれば銘々の屋敷の隅へ掃きやる　又斯様の大雪なれば。雪轉ばかしをして。面々の屋敷に置く。此の様にひたと掃きやらば。後は山の様になつて。何ともならぬに依つて。昔から當國に作法がある。とかく國法の通りにめされ。アド〽いや大法の國法のと云ふは。大抵の雪の事。これ程大雪は近年にも珍らしい。之を雪轉ばかしにして居たらば。其の上へは降り〳〵。果つる様はおりやるまい。シテ出る。天道拜する所なし。口傳。シテ〽扨も〳〵。降つたり〳〵。夥しい雪かな。いやそちは早う出たなあ。アド〽これは何と思召して御出でなされた。シテ〽愚僧は初雪を見やうと思うて出た。いやそなたも雪を掃きに出たか。小アド〽老僧様はよい所へお出でなされた。あの者が私の屋敷へ。この様に雪を大分掃いておこすに依つて。なぜ掃いておこすと申せば。色々我儘を申しまする。それを申合いて居る所で御座る。お前聞き分けさせられて下され。シテ〽心得た。やい〳〵。なぜに雪を隣へ掃きやつたぞ。アド〽されば。雪は銘々の所から拵へて出す物では御座らず。空から段々降り積る事で御座る。我が屋敷に雪があつて迷惑ならば。またせんぐりに掃きやれと申す事で御座る。シテ〽成る程。これは尤もぢや。いやこれは聞えた事ぢや。次第〳〵に。せんぐりに掃いてやらしめ。小アド〽扨は長老様にも。雪に就いての國法を御存じないと見えて御座る。餘國とは違うて。雪國で御座るに依つて。今年ばかり降るでは御座らぬ。年々の雪に。先づ薄雪なれば。銘々の屋敷に掃きよせて置きまする。斯様の大雪にせんぐりに掃きやつては。後には山の様になつて何ともなりませぬに依つて。雪轉ばかしをして面々の屋敷に置きまする。斯様の事は御存じ御座らぬか。シテ〽尤も大法もあらうが。あれはいかう年若な者ぢや。こなたは地下でも口を利くでないか。あれと詮議して言ひ勝つたと云うて。さのみ手柄でもあるまい。大方にして了簡をして置かしめ。小アド〽お前は人に教化もなさるゝ御方ぢやが。扨は私が年の行かぬ者を相手にして。無理を云ふと思召すか。シテ〽さのみ無理をおしやると云ふでもないが。道理ぢやと云うて。餘り褒めもせまいと思ふ事ぢや。小アド〽とかく何故なれば此の雪故ぢや。此の雪を元へ押戻したがよい。アド〽やい〳〵。また此方へ雪を戻すか。折角掃きよせた雪を戻す手間で。末へ送つたがよいではないか。小アド〽送つてよくばそち送れ。アド〽其の様に強う氣をしたりとも。負けはせま

い。此の内○色々シカ〳〵云ふべし○礫を打ち追ふ仕方○口傳○ シテ〽やい〳〵〳〵。二人ながらこら〳〵いやい〳〵〳〵と口傳○ 女〽何ぢや。こちの息子を雪打をする。なう〳〵悲しや。誰もないか。とりさへて下されいの〳〵〳〵わあ。長老様。お前はあれを見て御座るか。シテ〽身共も取扱うたれども承引せぬ。女〽なう〳〵。お前と婆が中の事は。在所中に誰知らぬ者は御座らぬわいの。シテ〽すれば皆人がよう知つて居るか。女〽なまぬるい。この様な事ではなるまい。こちへ御座れ。此の内仕方口傳。色々あるべし。シテ〽なう〳〵。いとしい者こちへ來い〳〵〳〵。小アド〽やい〳〵〳〵。親子三人して此の様にし居つた。頓て寺を追出さうぞ。やるまいぞ〳〵。ト追込み入るなり。

弓矢（ゆみや）

シテ　太郎
アド　天神講の當屋
小アド　太郎冠者
立衆　天神講の者
（入道具）

アド〽此の邊りの者で御座る。今晩は天神講の當を勤むる。それに就き　太郎冠者を呼出し申附ける事が御座る。ト云うて○呼出す○常の如し○ 今晩は天神講を勤むる。何れもお出でなされたらば知らせい。小アド〽畏まつて御座る。常の如くつめる○ 立衆〽なう〳〵。何れも御座るか。立衆〽これに居まする。立衆〽今晩は何某殿方で天神講を勤められまする。追附け參りませう。立衆〽一段とよう御座らう。立衆〽さあ〳〵御座れ。立衆〽太郎殿は見えませぬぞや。立衆〽私から誘ひましたれば。また例の弓矢を帶して。どれへやら參られたと申す事で御座るに依つて。先へ參りませう。立衆〽これは御尤もで御座る。立衆〽何かと申すうちに是ぢや。物もう。案内もう。小アド〽表に案内がある。案内とは誰ぞ。立衆〽身共等が來た通りない〳〵。小アド〽其の由申しませう。暫くそれにお待ちなされませ。立衆〽心得た。小アド〽申上げまする。アド〽何事ぢや。小アド〽何れものお出でで御座る。アド〽かうお通りなされいといへ。小アド〽畏まつて御座る。かうお通りなされませ。立衆〽心得た。お當お目出度う御座る。アド〽よう御出でなされました。先づかうお通りなされい。立衆〽心得ました。座に二○へ着る○ アト〽さあ〳〵下に御座れ。これは何れも打揃うてようお出でなされました。立衆〽先づ以て今日はお當日目出度う御座る。アド〽添う御座る。これに太郎殿が見えませぬ。立衆〽誘うて御座れば。また例のごとく弓矢を帶して。どれへやら參られたと申すこと故。何れも先きへ參りました。アド〽あの太郎殿は　毎日〳〵弓矢を帶して。どれへ參らるゝことで御座るぞ。立衆〽されば　どれへ參られまするぞ。終に雀を一疋射られたと申す事を、聞いたことが御座らぬ。立衆〽何時弓の稽古致されたも知つた者が御座らぬ。立衆〽人が名を問へば、弓矢太郎ぢやなどとおしやるげに御座る。アド〽また私の承りましたは。太郎殿の臆病者で御座るが　人に臆病といはれまい爲に。あの様に異行に弓矢を帶して、徘徊致さるゝと承りました。立衆〽大方定めて左樣の事で御座らう。アド〽定めて今宵參らるゝで御座らう。何ぞ恐ろしい咄を致して。威して見ますまいか。立衆〽これは一段とよう御座らう。アド〽それならば、何ぞ恐ろしい咄を思ひ出して置かせられい。立衆〽心得ました。シテ〽此の邊りに住居致す弓矢太郎と申す者で御座る。今晩は何某方で天神講を勤むる。今日も野邊へ狙ひ物に參り、宿元へ歸つて裝束を改めて居たらば。遲なは

らうに依つて。此の儘參らうと存ずる。いや何かといふうちに是ぢや。先づ案内を乞はう。常の如し。　身共が來た通りをいへ。小アド〽其の由申しませう。暫くそれにお待ちなされませ。シテ〽心得た。小アド〽申上げまする。太郎殿のお出でで御座る。アド〽かうお通りなされいといへ。小アド〽畏まつて御座る。かうお通りなされませ。シテ〽心得た。アド〽これは太郎殿。御苦勞に存じまする。シテ〽お當。目出度う御座る。アド〽これはゆゝしいお出立ちで御座る。シテ〽今日も野邊へ狙ひ物に參り。宿元へ歸つて裝束を改めて居たれば、遲なはらうと存じ。此の儘參つて御座る。アド〽近頃忝う御座る。ちとお寛ぎなされい。シテ〽それならば寛いで參りませう。アド〽それがよう御座らう。なう／＼。何れも太郎が見えました。立衆〽その通りで御座る。アド〽必ずぬからせられな。立衆〽心得ました。シテ〽太郎冠者。弓矢を預けう。小アド〽畏まつて御座る。シテ〽これは何れも早う出させられた。立衆〽太郎殿。誘ひましたれども。弓矢を帶していづれへやらお出でなされたと申すこと故。お先きへ參りました。シテ〽忝う御座る。今日も野邊へ狙ひ物に出まして。宿元へ歸り裝束を改めて居ましたらば。遲なはるであらうと存じ。此の儘參つた事で御座る。立衆〽それは御苦勞で御座る。アド〽太郎殿には。毎日／＼弓矢を帶してどれへやらお出でなさるゝ由。よいお慰みで御座らう。シテ〽いかな／＼。私の殺生は自分の慰みでは御座らぬ。田畑を荒す鳥獸を射て落し。または狼藉者を矢先に懸け。婦人老少の歎きを救はん爲。かやうに弓矢を帶して徘徊致すことで御座る。各〽これは御尤もで御座る。シテ〽これ聞かつしやれ。今日もあの山端(はな)を通りましたれば。猪が麥作を荒して居りましたに依つて。例の弓矢をよつぴいて猪の前髓を射ましたれば。大きな奴がころりと仆れました。立衆〽それはお手柄で御座つた。アド〽これ太郎殿。あの山端へも猪が出まするか。シテ〽おう／＼。猪には限らぬ。狼狸狐。何でも出まする。アド〽こなたは狐が出ても射さつしやるか。シテ〽おう／＼。狐が出ても射まする。アド〽狐はよしになされたがよう御座る。シテ〽なぜに。アド〽あれは執心の恐ろしいものぢや。狐ばかりは。なう何れも。立衆〽それ／＼。各〽よしになされたがよう御座らう。シテ〽あれぢやと申して四つ足で御座る、私は見附け次第に射て落しまする。アド〽餘の物は格別。狐ばかりはよしになされい。爰に狐の執心の恐ろしい昔物語がある。語つて聞かせませう。何れもよう聞かせられい。立衆〽心得ました。アド〽太郎殿もよう聞かしやれ。シテ〽心得ました。アド〽昔鳥羽の院の御時。玉藻の前といふ上わらはがあつた。シテ〽これ／＼。其の上童とは何の事ぢや。アド〽お上に使はせらるゝ女中の事ぢや。シテ〽それが何とした。アド〽それが根本狐であつたとの。シテ〽ムヽン。アド〽ある時。御内に御歌合せありて後。御管弦(くわんげん)のありし時。永祚の大風吹き立つて。禁中の燈火一燈も殘らず消えた。其の時。玉藻の前が身より光を出し。お庭の眞砂の數まで明かに見えた。其の後那須野の原へ落ちて行くな。武士に仰附けられて御退治なされた。されども狐の執念が殘つて人を取ると申す。かゝる執心の恐ろしい物なれば。狐ばかりは。なう何れも。立衆〽それ／＼。各〽よしになされたがよう御座らう。シテ〽何をいはつしやるやら。それは昔物語で。成る程。昔の狐は其の樣なもあつたさうなが。今時の狐に其の樣なは一疋も居らぬ。とかく私は見附け次第射て落しまする。アド

ないか。狐といふものは通を得たものぢやに依つて、いつ何時何に化けて居まいものでも御座らぬ。あう替つて居るうちにも、狐が化けて居まいものでも御座らぬ。立衆〵合點が行きませぬ。シテ〵わけもないことないはつしやる今宵の座敷は亭主が何ぬしして。誰々／＼。狐らしいものは一人も御座らぬ。アド〵昔も、火を消したれば、狐の正體を現したと申す。いざ火を消して見ませう。立衆〵よう御座らう。アド〵さあ／＼消たつしやれ。立衆〵心得ました。シテ〵ア、先づお待ちやれ／＼。アド〵何と、待てとは。シテ〵さて／＼。和御寮達は無分別な事をいふ。先づよう思うてお見やれ。總じて月の光は何程隈なうても。日の光には劣つたものぢや。其の上に夜は火を明うして遊んでこそ面白けれ。何處にか火を消して遊ばうといふ様な無分別なことがあるものか。其の上今宵の座敷はいかう暗い。もそつと火をあかうして遊んだらよからう。アド〵いかな様、太郎殿の仰せらるゝ通り。いかう座敷が暗う御座る。立衆〵いかう暗う御座る。アド〵其の上、太郎殿の後は光るやうに御座る。日仁。シテ〵おりや座を替へう。アド〵やはりそれに御座れ。シテ〵いや／＼、ちと座を替へう。これは面白うない噺ぢや。もそつと何ぞ面白い噺をして遊ば度いものではないか。立衆〵その光るについて思ひ出して御座る。シテ〵まだ何ぞ有るか。立衆〵某はこのうち宿願の仔細あつて、天神の森へ丑の時詣を致いて御座るが。まだ丑の刻には早う御座つたに依つて、老松の蔭に休らうで居りましたれば、何やら上がごそ／＼と致すに依つて、仰のいて見ましたれば、なう恐ろしや。シテ〵何とした。立衆〵鬼が出ました。シテ〵何ぢや鬼が出た。立衆〵その丈一丈ばかり。シテ〵ホイ。立衆〵目は明星の如く光り耀き、口は耳せゝ迄切れて六尺ばかりもあらう、毛の生えた腕をぬと出しました。（シテハウと云うて目を廻す。皆笑ふ。）アド〵目を廻しました。立衆〵其の通りで御座る。笑ふ。アド〵氣を附けませう。各〵太郎／＼。（一同に氣をつける。）各〵あの顏を見さつしやれ。（皆笑ふ。）シテ〵和御寮達は何を笑ふ。アド〵今そなたが目を廻したがをかしい。シテ〵身共が何時目を廻した。アド〵いま鬼の噺を聞いて。目を廻したではないか。シテ〵今の鬼の噺か。アド〵なか／＼。シテ〵それは物ぢや。アド〵物とは。シテ〵餘り面白がつて聞いてゐるうちに。ふら／＼と睡氣がさいて、つい一寢入にした。各〵あの口を開かつしやれ。笑ふ。シテ〵これ何某。こなたは卑怯者ぢや。立衆〵何が卑怯ぢや。シテ〵なぜその時身共に知らせなんだ。身共に知らせたらば、何の弓矢をまつぴいて、鬼の胴腹を射貫かうものを。殘り惜しい事をした。各〵まだあの空腕立を聞かつしやれ。笑ふ。アド〵これ太郎殿。こなたは鬼は恐ろしうないか。シテ〵何の恐ろしからう。アド〵それならば、今から天神の森へ往ておりやれ。シテ〵往たらば何とする。アド〵褒美として鳥目百貫やらう。シテ〵何といふぞ。今から天神の森へ往たらば、褒美として鳥目百貫呉れう。アド〵なか／＼。シテ〵これは面白い。往て來う。アド〵先づお待ちあれ。ただ往ては證據がない。此の扇をやらう程に。之を天神の森の老松の一の枝に懸けておりやつたらば。褒美の百貫をやらう。また得かいて來ずば。一生譜代にして召使はうぞ。シテ〵何とおしやる。此の扇を松の木の一の枝に懸けて來たらば。褒美の百貫を呉れうず。また懸けて來ずば。一生譜代に召使はうとおしやるか。アド〵其の通りぢや。シテ〵なう／＼何れも。此の扇を天神の森の松の木の一の枝に懸けて來たらば。褒美

の百貫を取るぞや。立衆へいかにも遣らう。シテへ其の時いゝとおしやるな。立衆へ合點ぢやノ\。シテへあら嬉しや。先づ急いで天神の森へ參らう。ト中入。笑ふ。アドへ太郎が參りました。立衆へ何れ參りました。アドへ見事行きませうか。立衆へ合點が參りませぬ。アドへ爰に物とした事が御座る。彼奴は繰の早い者で、異人を雇うて遣るまいものでも御座らぬ。其の時鬼の形が無うてはなりますまい。爰に風流の面が御座る。之を着て某が鬼になつて參い。太郎が參つたか參らぬかを見屆けませうか。立衆へこれは御尤もで御座る。アドへ幸ひ路次に存じた茶屋が御座る。これへ寄つて身拵へを致しませう。おのノ\も後から見え隱れに來て下され。立衆へ心得ました。アドへさあノ\御座れ。太郎冠者も見え隱れに來い。小アドへ畏まつて御座る。アドへ何とこれは變つたことが瞎樣になりました。立衆へ其の通りで御座る。アドへ何と太郎は行きませうか。立衆へ行たらば定めて目を廻しませう。アドへ御座れノ\。皆中入する。シテへこれは蓬萊の島の鬼で御座る。毎夜天神の森へ出て丑の刻詣りする者を取つて服する。今宵も參らうと存ずる。シカノ\。この丑の刻詣でといふは。女の嫉妬。人を咀ふ願。皆いたづら者のなす業で御座る。其の樣な者は悉く取つて服する事で御座る。何かと云ふうちに天神の森ぢや。さてもノ\暗い夜かな。雨が近いと見えて。星が一つもない。正眞のやみといふはこのことぢや。其の上まだ丑の刻には早さうな。暫く此の木蔭に休らうて居よう。アドへ是は蓬萊の島の鬼で御座る。毎夜天神の森へ出て丑の刻詣をする者を取つて服する。今夜も參らうと存ずる。シカノ\。この丑の刻詣といふは。女の嫉妬。人を咀ふの願。皆いたづら者のなす業で御座るに依つて。其の樣な者はみな取つて服することで御座る。何かといふうちに森ぢや。さてもノ\暗い夜かな。丑の刻には早さうな。老松の蔭に休らうてゐよう。シテへはて異なことの。俄に人音がする。アドへ人音がする。シテへ合點の行かぬ事ぢや。アドへ合點の行かぬ事ぢや。シテへこだまか。アドへ但し參詣の者か。シテへ頻りに近う聞ゆる。ト行當り。目をまはす。シテへなうノ\恐ろしや。最前誰方で天神の森に鬼が居るか居ぬかを見て來い。往たらば褒美として烏目百貫呉れうと申した。歸つて女どもに咄したれば。何の天神の森に鬼が居るものぢや。それはこなたが臆病なに依つて。何れも威せらるゝのぢや。早う往て褒美の百貫を取れと申した。さりながら。餘り恐ろしかつたに依つて。鬼の面を被て行たれば。咄に違はぬ鬼が出た。その丈一丈ばかり。目は明星の如く光り耀き。口は耳せゝ迄切れて六尺ばかりもあらう。毛の生えた腕をぬツと突出した。慾も得も命には換へられぬ。先づ急いで歸らう。やあ。又あれから大勢松明をともして來る。見附けられてはなるまい。暫く隱れて居ようと存ずる。立衆へさあノ\。何れも御座れノ\。扨もノ\暗い夜で御座る。立衆へ誠に暗い夜で御座る。立衆へ何と太郎は參りませうかの。立衆へ合點が行きませぬ。立衆へ參つたらば目を廻しませう。立衆へヨウ。爰に何者やら倒れて居りまする。立衆へこれは當屋では御座らぬか。立衆へ目を廻したさうな。立衆へ先づ面を取らせられい。立衆へ氣を付けませう。皆へ何某殿ノ\。氣をはつたりと持たつしやれ。アドへこれは何れもよう來て下された。立衆へ先づ何とした事で御座る。アドへ最前參ると。咄に違はぬ鬼が出ました。立衆へなに鬼が出た。アドへその丈一丈ばかり。目は明星の如く光り耀き。目は

耳せゝ迄切れて六尺ばかりもあらう。その生えた顫ひぬと突出しました。愛へ、どのやうにうち倒れたやら覺えませぬ。立衆へそれは合點の行かぬ事で御座る。夜前のに太郎を起(おこ)さんがための嘲で御座る。して太郎に參りましたか。アドへ來たやら來ぬやら。覺えは御座らぬ。シテへ取つて噛まう〱。立衆へなう恐ろしや〱。鬼が出た〱。ト逃ぐる。追込み入るなり。

【よ】

横座(よこざ)

シテ　牛主
アド　何某
牛　（入道具）

アドへ此邊りの者でござる。此中牛を一疋拾うた。あなたの在所に。牛の目利をする人がある。今日連れて參り。見て貰はうと存ずる。シカ〱。誠に。身共は前方から。牛を一疋飼うて持つてゐるが。樣子に依つて。此牛を身共が使うて。初めの牛は人に貰はさうと存ずる。々々青葉を見てねぶるよ。暫く休まう。此所で草を食はせう。シテへ此邊りの者でござる。美しい牛を持つてござるが。此間暮に失うてござる。方々、尋ぬれどもないに依つて。占(うら)方に算をおかせたれば。これより西の在所にあらうと申す程に。尋ねて參らう。シカ〱。誠に。某が牛は。則ち身共の所で産まれて子飼でござるに依つて。替生ながら馴染が深うて。別して氣の毒に存ずる事ぢや。アドへさあ〱最早行かうぞ。シテへエイ。わごりよはどれへお行きやる。アドへ扨々。此中は久しうおりやる。身共はそなたへ行かうと思ふが。よい所で逢うた。シテへそれは何の用があつて。アドへイヤ牛の目利を頼みに行く。シテへ此牛か。アドへ中々。此牛でおりやる。シテ綱を取り。脇へのき。牛を見て肝をつぶし。シテへなう〱。此牛はどうしてそなたの手に入つたぞ。アドへイヤ。賣りに來たに依つて求めておいた。シテへそれは誰(た)そ知つた者が賣りに來たか。アドへイヤ。いづくともなう賣りに來た。シテへそれならば。値を餘程お出しやつたか。アドへしつかりと出しておりやる。シテへ誠にお出しやつたがぢやうならば。笑止な事は損をめされう。アドへ牛が惡いか。シテへ牛の善惡はともかくも。此牛には主がある。盗んできて。そなたに賣つた物ぢや。アドへ値を出して買うた物なれば。主は身共でおりやる。シテへイヤ〱。盗んで來て賣る物を。とくと先の吟味もせいでお買やるは過ぢや。アドへさて此牛の主は。そなたが知つて居るか。シテへ知つたも知らぬも。これはもと身共が牛ぢや。アドへさうおしやるには證據があるか。シテへ中々。慥かな證據がある。此牛の母親牛を飼うておいた其の時分。某は在所に地藏講があつて出てゐたれば。留守から人を越して。やれ牛の子こそ生れたれと知らせた程に。其儘歸つて見たれば。それは〱美しい子であつた。則ち此牛の子であつた。軈て鹽灰を打ち土器などをねぶらせて。座敷の横座においたれば。皆若い衆が來て。あの牛は畜類なれども果報な牛ぢや。座敷の横座に直(なほ)つた。則ちあの牛の名を横座とつけよと仰せらるゝ。それを云ひ習うて。今に此牛を横座と申す。アドへその横座と名をつけたばかりでは證據になるまい。シテへ不審尤もぢや。横座と云うて呼べば。鳴いて返事をする。アドへそれは奇特な事ぢや。さらば呼うて見さしませ。鳴いたれば牛を返さう。鳴かずば。牛の事は申すに及ばず。そなたを詰

代に召使はう　アド〽身共は在所でさのみ人恐ろしいとも思はぬ筋目のある者ぢや。お主が譜代には手が餘らう。アド〽いかにおしやるとも。譜代に致さずばおくまい。シテ〽是非に及ばぬ。それならば追附け呼ばう。アド〽構へて一聲でおりやる。シテ〽イヤ〳〵。三百聲ばかり呼ばう。アド〽それ程呼ぶ内には。鳴かぬと云ふ事があるものか。シテ〽それならば百聲呼ばう。アド〽いかな〳〵。思ひもよらぬ事ぢや。シテ〽然らば五十聲にしてたもれ。アド〽それ程におしやる。二聲呼ばせてやらう。シテ〽それならば丁度十聲呼ばう。アド〽それはあこぎぢや。ならぬ〳〵。シテ〽是非に及ばぬ。五聲呼ばう。アド〽扱々くどい事を云ふ人ぢや。其樣におしやる。三聲迄は呼ばせう。其上はふつゝりとならぬ。シテ〽それならば一聲添はなるまいか。アド〽添もならぬ。厭ならばおかしめ。シテ〽それならば呼ぶぞ。横座よ。アド〽おつと一聲。ま二聲ぢや。シテ〽横座よ。アド〽おつと二聲。シテ〽久しう某が聲を聞かぬに依つて。聞き忘れたさうな。せんみやうを含めて。も一聲呼ばう。其縄をお渡しやれ。アド〽どうなりともして。も一聲呼ばしめ。シテ〽昔文德天皇に王子の一人ござつしに。御名をば惟喬惟仁と申す。帝崩御の後。惟喬こそ嫡々にてましませば。御代を御持ちあるべきに。惟仁御代をお持ちあるべきとの御事なり。公卿大臣左右に分つて。こはいかに〳〵。水は逆樣に流るゝものか。嫡々にてましませば。惟喬こそ御代をお持ちあるに。惟仁の御位に卽き給はん事。思ひもよらぬ御沙汰とある。されども。御勝負あつて御代を定むるべきとなり。勝負は何ぞとありしかば。十番の相撲。十番の競ひにてありし。斯程大事の御勝負に。御祈禱なくては叶ふまじいとて。惟喬の御祈禱人には。柿の木の紀僧正。惟仁の御祈禱人には。比叡山の慧亮和尚にてぞありし。其時慧亮は。大内の眞言院にて護摩を修せらるゝ。また紀僧正は東寺に壇を構へ。肝膽を碎き祈り給へば。並びなき貴僧にてましませば。十番の角力に。續けて四番勝ち給ふ。其時惟仁の公卿より。慧亮へ御使を立てられ。十番の角力に續けて四番負け給ふとありしかば。その時慧亮は。五大尊のとつて引き立て申し。東方に降三世明王。南方に軍荼利夜叉明王。西方に大威德明王。北方に金剛夜叉明王。中央に大日大聖不動明王と。獨鈷をもつてなづきを碎き。腦を取つて護摩に焚かせ給へば。その行法もや積りけん。西方に大威德明王の召されし水牛が。山響け〳〵と三度までほえ。殘り六番の角力に勝ち給ひ。惟仁の御代に定まるとなり。されば古人の言葉にも。慧亮なづきを碎けば。次帝位にそなはるとは。此時よりの言葉ぞかし。かの三聲までほえし牛は。繪にかける牛なり。繪にかける牛だにも。人の心を憐れみて三聲までほえしに。況んや己れは生きたる皮は剝がれぬが。今一聲にてほえざりければ。主をも持たぬ某に。初めて主を持たすと云ひ。又勝負に負くれば口惜しゝと云ひ。とにかくに今一聲がせいめ一じんにてあるぞとよ。心があらばほえてくれい横座よ。ト云ふ時。牛ほうとなくなり。シテ〽ヤレないたは〳〵。何とお見やれ。身共が牛ぢや。引いて參るぞ。アド〽ヤイ〳〵。其牛はやらうが。沓は此方でかけた。其沓は置いて行け〳〵。シテ〽ならぬぞ〳〵。サセイホウセイと云うて入るなり。追込にはあらず。

米市（よねいち）

シテ　太郎
アド　何某

小アド　處の若者
立　衆　處の若者
（入道具）

シテ〽此邊りの者で御座る。何かと申す内に年の暮になつて御座る。某渡世に隙がないによつて。いつ正月になるをも存ぜぬ。又お目をかけらるゝお方より。嘉例で歳暮のお禮に參れば。お米をもろ俵宛下さるゝ。當年も參り。お米を申請けて年をとらうと存ずる。シカ〱。誠に。某は萬事不調法な者で御座れども。ひさ〱律儀に出入するとあつて。毎年〱夥しい年取物を下さるゝ。いや〱貧苦は致すとも。とかく心を直にもつて。恙なう月日を送らうと存ずる。是だや。（ト云うて案内乞ふ。出るも常の如し。）シテ〽先づ歳暮のお禮申上げまする。アド〽忙はしい時分にようこそ見えたれ。先づめでたい年の暮ぢや。シテ〽定めてようお仕舞ひなされて。はや正月のお拵へ。かれこれお取込で御座らうと存じまする。アド〽此方はとくに仕舞うたが。そちもはや仕舞うたか。シテ〽いやもなか〱え仕舞ひませぬ。アド〽それならば早う歸つて。仕舞うて。春ゆる〱と來たがよい。シテ〽いや歸つてもどうも仕舞はれませぬ。アド〽それはなぜに。シテ〽いつも嘉例でさる方から年取物にお米を下されまする。それが參つたやら參らぬやら何やらわけは御座りませぬ。アド〽誠にそれについて此方からもいつも年の暮には米壹石づゝ遣す。それはいたか。シテ〽それもまださうに御座る。アド〽是はいかな事。取込うで忘れたものであらう。云付けてやらう。やいやい。太郎が方へいつも歳暮の祝儀に米を遣すが。なぜにやらぬ。早うやれ。ジヤア。是は氣の毒な事かな。云付けたれども忘れて。はつ藏をしめたと云ふ。春には早うやらう。シテ〽下さるゝ物をとかう申すは如何で御座るが。御存じの通りの私で御座る。それが御座らねば差當つて年を得越せませぬ。お蔭で妻子にも正月を致させまする。どうぞ下されたらば忝う存じまする。アド〽それは笑止な事ぢや。も一度聞いて見う。やい〱。藏を仕舞うたらば少々でも大事ないが。外へ出てあるはないか。いかゞ、先づそれなりと遣さう。吟味したれば。半石の又半石あるといふが。それでもやらうといふは。シテ〽まだその半石でも苦しう御座らぬ。下されませ。アド〽それにお待ちやれ。（笛壺より俵をとり出る。）これ〱是をとつてゆかしめ。シテ〽是は御自身勿體ない事で御座る。アド〽殘りは三ヶ日過ぎたらば。早速此方から持たせてやらう。シテ〽忝うこそ御座れ。春はいよ〱賴み上げまする。アド〽それはそつとも氣遣ひするな。さてどうしてもつてゆくぞ。シテ〽下されたらば。擔うて參らうと存じて。棒をもつて參りました。（ト云うて俵を棒にかけ一つ片荷する心をする。）是にかけて參りませう。アド〽それはいかう持ちにくさうな。シテ〽も壹つさきにあれば丁度よう御座る。アド〽それはよい仕樣がある。是へよらしめ。幸ひ此縋を連尺にして負はせてやらう。（ト云うて。後に負はするなり。）シテ〽是でよう御座りまする。追付け參りませう。何も御用は御座らぬか。アド〽別に用もない。春は早ま來さしめ。ようおりやつた。（シテ暇乞して[illegible]）シテ〽異な事ぢや。いつも奧樣から女共が方へお古着を壹つ宛下さるゝ。是も忘れさせられてか沙汰がない。とらぬが損ぢや。是は氣を付けう。まうし御座りまするか。アド〽太郎が聲ぢやが。何として戻つたぞ。シテ〽奧樣へ女どもがお言づてを申したを。はたと忘れましたによつて。申しに歸りました。アド〽それは何と云ふ言づてぢや。シテ〽女共が申しまする。ちとお見舞申上げまして。お針のお

手傳ひを致す筈で御座れども。子供にせがまれまして心ばかりになりまする。近いお正月で嘸々お忙はしう御座りませう。おまへには結構なお小袖を召しまして。福々と春にお移り遊ばしませう。私共はせめてその澤山なお小袖のお古着なりとも壹つ御座りますれば。寒い目も致しませぬ。春はお禮に上りまして申上げませうと。懇に申上げませいと申付けまして御座る。アドへ成程其通りを云はうず。それについて用もあらう。それに待たしめ。シテへ畏まつて御座る。アドへ是はいかな事。いつも女共から年の暮に。太郎が妻へ古着を壹つ宛遣す。是も忘れたか未だ遣さぬ様にみゆる。申付けてやらせうと存ずる。これ／＼。今の口上の通り云うたれば。懇な言づてぢやと云うて殊の外悦ぶ。さて是は着古びたれども。いつも嘉例で年の暮に遣すによつてこちにことづてる。めでたう春をはうと云うて畏れいと云ふは。シテへ是は結構なお小袖で御座る。私づれの女共に此様な物は似合ひますまい。お斟酌申しませう。アドへいや／＼。祝ふ心ばかりぢやと云ふ程に。持つてゆけ。シテへ有難う存じまする。然らば頂いて歸つて女共に悦ばせませう。さて是は似合はぬ持ち

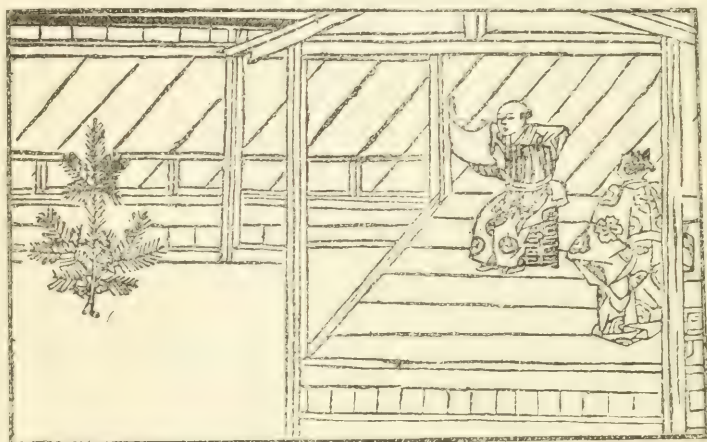
物で御座る。ト云うて。棒の先にかけていろ／＼する。アドへ其様にしては持つてはゆかれまい。是もよい持ち様がある。是へ來さしめ。ト云うて。小袖を壺折なりに後の俵へかけさせる。シテへ是は格別よい御分別て。目立ちませいでよう御座る。扨いつぞは申上げうと存じましたが。お前の事を陰で人がほめまする。アドへ何と云うてほめる。シテへ御繁昌なさるゝこゝ道理なれ。第一お慈悲が深いによつて。下々迄こまかにお氣がつきさるゝ。猶々御子様迄御長久に御座らうと申して。殊の外ほめまする。アドへそちが取合であらう。シテへ唯何事も春申上げませう。ト云うて暇乞。常の通り。アドへこれ／＼。まづお待ちやれ。後から見れば。人を負うた様な。時分柄ぢや。人が咎めたらば。俵藤太のお娘御米市御寮人のお里歸りぢやと云へ。シテへ是は出來ました。もし人が咎めましたらば左様に申しませう。ト云うて。暇乞。シテへなう／＼嬉しや。ざつと年はとつたものぢや。シカ／＼。誠に。あなたの御恩を悪う思うたらば罰が當らう。わが物ぢやと云うて斯様に心易うはならぬ。よそには年の暮を仕舞ひかねてとやかう世話を致すに。年とり物は下さるゝ。結構なおしきせ迄下されて。此様に有難い事は御座らぬ。小アドへ何れも御座る

か。いつもの通りおやかた達へのお禮に參らう。さあ／＼御座れ。立衆へ心得ました。小アドへイヤあれへ人を負うて參るが。歴々と見えました。立衆へいや歴々ならば供がありさうなもので御座る。小アドへまづ言葉をかけて見ませう。シテへ一段とよう御座らう。小アドへなう／＼。シテへ身共が事か。小アドへ成程そなたの事ぢや。その後に負ひまして御座るは。何人で御座るか。シテへ問うて何の用がある。小アドへ存ずる仔細があつて尋ぬる。先づおしやれ。シテへこれは俵藤太のお娘御米市御寮人のお里歸りぢや。小アドへ暫く待つてくれさしめ。シテへ何も用はあるまい。小アドへちと用がある。暫くまたしめ。今のを聞かせられたか。立衆へ成程承つて御座る。小アドへ是は聞及うだ美人で御座る。いざ／＼お盃いたゞきますまいか。立衆へ一段とよう御座らう。小アドへなう／＼。若い衆が申さるゝ。御寮人の事は承及うで御座る。お盃が頂きたいと申さるゝ。どうぞ取りもつて下されい。シテへ扨々粗忽千萬な。この道かいもとで。其様な輕々しい事が何となるものぢや。思ひも寄らぬ事ぢや。小アドへいや。若い者共の申しかゝつた事で御座る。善悪お

盃を頂かねばならぬと申す。ひらにそなたの取りもつて下されい。シテ〽いや／＼、聊爾な事を云ふ衆ぢや。時も時折も折、けふは年の暮ぢやと云うて、何方も／＼取込うでゐる。殊に此様な辻かいをして、其様な事が何となる物ぢや。ならぬ／＼。小アド〽ならぬと云ふさうに御座る。立衆〽なう／＼。ならずば直に參つて、むたいにお盃を致すぞ。小アド〽あい道理ぢや。どうぞそなたの心入て頼みまする。シテ〽それならば是非に及ばぬ。先づひそかに伺うて見うさりながら、殊の外物はむつかしがりなさるゝ。つとそちへよつてお居やれ。小アド〽心得た。ちと日が和ぎました。（シテワキ前に使をおろし。見えぬ様に仕付あり。色々六ケ敷顔なり。）シテ〽申上げまする。あれに若い者共が居りまする。御寮人の事を承り及びまして。お盃を頂きたいと申しまする。（耳をそばへ寄せて問返す心をして。橋掛りの方を見て仕様あり。）シテ〽なう／＼。埒が明いた。小アド〽埒があいたか。シテ〽ならぬに埒があいた。小アド〽それはどうした事ぢや。シテ〽御寮人の仰せらるゝは。扨も／＼こはい事を云ふ。先づお歸りなされて。身共を叱らせとゝ様のかゝ様に仰せられうとあつておむつかる。あの體ではなるまい。小アド〽そなたは最前からなりさうにおしやつて。今その様にお云やつては、若い衆が一分が立たぬ。爰はそなたの取合でなりさうな事ぢや。今一度伺うてくれい。シテ〽くどい事を云ふ人ぢや。むつかる程いやぢやと仰せらるゝ上に。何と言葉が返さるゝものぢや。とかく思ひ切らしめ。小アド〽されば頼みから頼むといふはこゝの事ぢや。此上はいやでも應でもお盃を頂かねばならぬ。さう心得さしめ。シテ〽愛な者は。云はせておけば勝つにのると見えた。此上は御寮人がお盃をさせうと仰せられても、いかな／＼。身共が留めゝさへ、もさせぬ程に。足許の明(あか)い内にとつ／＼とおのきやれ。小アド〽推參な事を云ふ。其様な事を云うたらば目に物を見するぞよ。シテ〽それは誰が。小アド〽身共が。シテ〽をかしい事を云ふ。そちが目に物を見すると云うて。深しい事はおりやるまいぞ。小アド〽構へて悔やむなよ。シテ〽何の様に悔やまう。小アド〽扨々にくいやつの。若い衆。押寄せませう。必ずぬからせらるゝな。立衆〽心得ました。（ト云うて一同各得物を持ち。竹杖を持ち。押寄せる。）シテ〽何とお聞きなされましたか。エヽいや少しもお氣遣ひなされますな。私が居りまするからは。黒鐵(くろがね)の楯で御座る。ワア押寄せてくる。（ト云うて。シテ太刀を持ち。棒をふりて追散らす。）立衆〽えいとう／＼。シテ〽えいつ／＼。えい／＼おう。（ト云うて笑ふ。使の前へゆき。仕様あるべし。六ケ敷顔なし。）小アド〽扨々つよいやつで御座る。立衆〽恐ろしいやつで御座る。小アド〽今度は何れも構はずと引はなせられい。身共は後へ廻つて。御寮人を奪ひ取りませう。立衆〽一段とよう御座らう。えいとう／＼。（ト云うて押寄せる。シテ太刀かざして有るべし。）シテ〽ても、先此やつばらめ。シテ〽えいとう／＼／＼。（ト云うて。又棒にてあひしらふ。其内小アド後へ廻り使を見付けて。）小アド〽なう／＼若い衆。此様な物で御座る。立衆〽よしないものにだまされた。皆戻りませう。（ト云うて。皆々は入る。）立衆シテ〽これ／＼。盃をせぬかいやい。小アド〽それが何と盃がなるものぢや。シテ〽望みならばつれてゆけ。（ト云うて。使をこかしてやる。）小アド〽盃かならばおのれしなれ。（ト云うて一つ使をこかし、小アド投げてはいる。）シテ〽いかな者をせいでな。（笑ふ。）さうもおりやるまい。是に身共が大事の年取物ぢや。（ト云うて。使をかたげて入るなり。）

鎧腹巻(よろひはらまき)

シテ　太郎冠者
アド　主人
小アド　賣手

アドへこの邊りの者で御座る。このうち方々の御道具競べは夥しい事で御座る。それに就いて近日鎧腹巻を競べさせられうとの御事ぢや。先づ太郎冠者を呼出し申付けうと存ずる。ト云うて呼出す。出るも常の如し。このうち方々の御道具競べは夥しいことではないか。シテへ仰せらるゝ通り。事長じた事で御座る。アドへそれに就いて。近日鎧腹巻を競べさせられうとの御事ぢや。身が内に鎧腹巻はない。汝は大儀ながら都へ上つて鎧腹巻を求めて來い。シテへ畏まつて御座る。アドへ總じて鎧には胄頬當などゝいうて小道具がある。又ざつくと着て威すものもあるげな。失念せずとも念を入れて求めて來い。シテへ其の段はそつともお氣遣なされまするな。常の如くつめる。シテへ火急な事を仰付けられた。先づ急いで參らう。と云うて。シカ〳〵。都へ着く。それより町ははる。ばつぱ出で色々科白あり。此の事同前。シテへやあ〳〵。すれば此方が鎧腹巻屋の御亭主で御座るか。小アドへ中々。シテへすれば。私は仕合せ者で御座る。鎧腹巻が欲しう御座る程に、見せて下され。小アドへ見せう程に。それに御待ちあれ。シテへ心得ました。小アドへこれはいかなこと。田舎者をまんまと騙しては御座れども。何をそれぢやと申して賣つてやらう物がない。幸ひ是屋に鎧腹巻のことを書き集めた反故が御座る。これを騙して賣つてやらうと存ずる。なう〳〵お居やるか。シテへこれに居りまする。小アドへこれ〳〵。鎧腹巻をお見やれ。シテへさて〳〵こびた物で御座る。胄頬當脛當というて。色々道具が揃うてある樣におしやりましたが。此の分でござらう御座るか。小アドへどれ〳〵、お好みにも悉く合せてやらう。先づこれなかうすれば胄。またかうすれば頬當。或ひは脛當にせうとも儘ぢや。外に道具があるではない。シテへざつくと着て威すものがあるとおしやりました。小アドへそなたの賴うだ御方は御巧者と見えた。それにお待ちあれ。シテへ心得ました。小アド太鼓座に行き葛桶を持出る。小アドへこれ〳〵。このうちにある。これはむさとあくる物ではない。各御參會の時にあけさしませ。中にざつくと着て威す物がある。さて何とその書いたものが讀めるか。シテへこれは假名で書いてあるに依つて。讀めまする。小アドへそれは一段ぢや。これを讀めば鎧腹巻の仔細が詳しくある。さて末になほこれ口傳ありといふは、則ち胄頬當脛當の事ぢや。さう心得さしませ。シテ

へ段々聞けば尤もで御座る。さて代物は何程で御座る。小アドへ萬疋でおりやる。シテへそれは餘り高う御座る。もそつと負けて下され。小アドへいや／＼。鎧腹卷に限つて負けはない。いやならば措かしめ。シテへそれとても求めませう。則ち代物は三條の大黑屋で渡しませう。小アドへなる程。大黑屋。存じた。あれで請取るであらう。シテへもうかう參る。小アドへ何とお行きあるか。シテへ中々。二人へさらば／＼。シテへなう／＼嬉しや／＼。ざつと埒が明いた。先づ急いで歸らう。シカ／＼。誠に。暇が入らうかと存じたれば。重疊の者に出逢うて。此樣な悅ばしい事は御座らぬ。此の由を頼うだ御方へ申上げたれば。さぞ御滿足なさるるであらう。いや何かと申すうちに戻つた。先づこれを爰に置いて。申し頼うだお方御座りますか。（ト云うて呼出す。出るも常の如し。）アドへ何と鎧腹卷を求めて來たか。シテへ成程求めて參つて御座る。アドへそれは出來した。急いで見せい。シテへ畏まつて御座る。（ト云うて。葛桶取りて出る）シテへこの書いた物を御覽なされませ。アドへこれは誰ぞ手習をする爲に手本を求めて來たか。此樣な物は入らぬ。鎧腹卷を見せい。シテへ御存じなければ御尤もで御座る。追付け存細かに申上げませう程に。お聞きなされませ。（ト云うて。かの葛桶にシテ腰をかける。）アドへやいそこな奴。身共が前で高腰を掛け居るは何事ぢや。シテへ御尤もで御座れども。これは鎧への恐れで御座る。御免なされませ。アドへそれならば讀め。腰を掛けてゐるに依つて。身共が何と下にゐらるゝものぢや。シテへ私へと思召すに依てゞ御座る。鎧への恐れで御座る。先づ下に御座れ。アドへ扨々むつかしい事ぢやなア。シテへ語初春のよき緋威の着長(きせなが)は。皆小櫻威なりけり。さてまた夏は卯の花や。垣根の水にあらひ川。秋になりての其の色は。いつも軍(いくさ)に勝色の。紅葉に擬(まが)ふ錦川。冬は雪氣の空晴れて。冑の星も宵の座も。皆華やかに威毛(おどしげ)の。思ふ敵(かたき)を打糸の。我が名を高く揚卷(あげまき)や。後を敵に見せざれば。これぞ嘉例の御鎧。さて家路に歸りつゝ。大筒酒がひ据ゑ竝べ。一家一族内の人。諷ひ酒盛舞ひ遊び。さて武具(もののぐ)は唐櫃や。劍は箱に收むれば。弓は袋を出さずして。國は豐かに民榮え。治まる御代とぞ成りにけり。祕すべし／＼。なほこれ口傳あり。アドへやい／＼。その口傳ありとは何事ぢや。シテへ畏まつて御座る。（ト云うて。アドの顔手足を紙にて撫でるなり。）アドへこれは何とする。シテへ餘りお騷ぎなされまするな。斯樣に所々へ當るに依つて。冑頰當脛當。外に道具は無いと申しまする。アドへ扨ざつくと着て威す物は。シテへ中々。それも御座る。追付けお目に懸けませう。（ト云うて。葛桶の蓋を取つて。肝を潰し。蓋をする。）シテへはつちや恐物(こはもの)。さてもさても。凄じい物で御座る。アドへさて／＼そちは臆病な者ぢや。その内にある程の物に深しい事があらうか。早う見せい。シテへいや御覽(らう)じますな。それは／＼恐ろしい物で御座る。アドへ何を吐かし居る。早う見せい。シテへそれならば出して見せませう。（ト云うて。こはさうに出す仕樣あるべし）シテへ取つ（主は見せ／＼ト云うて。荒しう云ふ。その樣に仰せらるゝなト云うて。面を被て。）て噛まう／＼。（ト云うて。アドを追廻す。一遍廻るなり。）アドへこれは何とする。シテへ斯樣に致すが。ざつくと着て威す物ぢやと申しまする。アドへあの縊體(やくたい)もない奴。しさり居れ。（ト云うて。常の如く。留めて入るなり。）

【ら】

老武者(らうむしや)

シテ　祖父
稚兒
三位

アド　宿屋の主
若立衆
祖父立衆

（入道具）

二人次第へ人目を忍ぶ旅なれば。〳〵。まだ夜の内に出でうよ。三位へ是は曾我が里に住居する者でござる。又是に御座候は。さるお方の御子息にて候が。鎌倉を御覧ありたき由仰せ候程に。我等お供申し。唯今鎌倉へと急ぎ候。道行住馴れし曾我の里をば立出でて。足に任せて行く程に。鎌倉山につきもせで。そばなる宿に著きにけり。急ぎ候程に。是ははや相模の國藤澤の宿に著きて候。此所に宿を借らうと存ずる。先づかうお出でなされい。橋掛へ行く。三位案内乞ふ。宿出る。三位へ旅の者でござる。少人を一人お供申した。宿を借して下されい。アドへ易い事でござる。かう御通りなされませ。三位へ忍びの御下向ぢや。奥の間を借して下され。アドへ成程。つつと奥の間へお通りなされませ。三位へさあ斯う通らせられい。立頭へこの邊りの者でござる。此所の宿に少人のお著きと申す。殊の外美しい少人ぢやと申す。皆若い衆を同道致して參り。一目見うと存ずる。何れもござるか。立衆へ是に居まする。頭へ聞けば。誰が方へ器量のよい少人が落かせられと聞いたが。何れも聞かつしやれぬか。衆へ成る程。殊の外美しいお若い衆がおつきぢやと申す。頭へいざ參つて。せめてお盃をも戴きませう。衆へ是は一段とようござらう。頭へさあ〳〵ござれ。衆へ心得ました。頭へイヤ何かと云ふ内に是ぢや。先づ案内を乞ひませう。衆へ一段とようござらう。案内乞ふ。宿出る常の如し。頭へ聞けば是へ少人がお著きぢやが。殊の外美しいお若衆ぢやと聞いたに依つて。若い衆を同道して來た。そとお盃をさしてたもれ。アドへ殊の外のお忍びぢやに依つて。何とあらうぞ。先づお供の三位殿迄ひそかに尋ねう。暫くまたしめ。頭へ心得た。アドへ三位殿〳〵。三位へ何で御座る。アドへ近所の若い衆が二三人見えました。少人のお盃を戴きたいと申しまするが。なりますまいか。三位へいや〳〵。忍びぢやに依つてならぬ事ぢや。アドへどうぞお前の心入でなりますまいか。三位へいや〳〵。いかう人目を忍ばせらるゝ、なるまいとおしやれ。アドへ心得ました。ならぬと仰せらるゝ。頭へ折角參つて殘念な。イヤそれならば亭主の知らぬふりで。たゞ押掛けて參らう。アドへそれは兎も角も召され。頭へおめんなりませう。私共はこの近所の者でござる。是へお著きと承つて。お見舞申してござる。三位へ是は見知らぬ人ぢや。何としてお出やつた。頭へいや。卒爾に思召さうけれども。別して聊爾な者ではござらぬ。お淋しうござらうと存じて。お伽に參つてござる。アドへわごりよ達は身共へも知らせずに。座敷へ出ると云ふ事があるものか。頭へそなた迄その様におしやるが。ちとお取合せを申上げさしめ。アドへいや私のよう存じた衆でござる。なか〳〵聊爾はござらぬ。お心安う思召しませ。お慰みに酒を出しませう。ト云うて。葛桶のふた持出る。三位へ何れ旅宿で物淋しうござつた。各々お出で故に。中々賑々しうなりました。さらば少し御酒を參つて。あの若い衆へおさしなされませ。兒へいや。酒はいやぢや。饅頭ならくはう。三位へ又さもしい事を仰せらるゝ。先づ此笠もとらせられい。兒へそれなら。おとゝ飲まう。ト云うて。笠をぬぎ。酒をうけて飲み。舌を出して盃の中をねぶる。三位袖を引いて叱る。三位へさあ〳〵。少人のさゝれまする。頭へこれはお盃有難い。一つたべませう。アドへちと謠ひませう。小謠。兒へとんぼ〳〵。てふ

〳〵と申せ〳〵。 ト云うて。立ちて踊る。仕樣あり。三位[illegible]扇を前へ置く。
三位へ一つ受持ちました。 少人のお立ち姿が見ましたうござる。三位へちと舞はせられい。
兒へおれは舞はいやぢや。相撲とらうか。 三位へ扨々むさとした事を仰せらるゝ。名代に私が舞ひませう。 ト云うて三位舞ふ。其内に兒は手ぞぶりいろ〳〵仕樣あるべし。
皆々扨々面白い事でござる ト云うてうたふ。酒もりする。
シテへなう〳〵珍らしや〳〵。 この宿に美しい少人のお著きなされて。謠ひつ舞ひつ召さるゝと云ふが。老の樂しみに祖父もいてお盃をせう。亭主〳〵。 アドへイヤ祖父御。何として出きせられた シテへ何としてゝとは 是の内へは少人が著かせられて。賑々しい事は在所中に隱れがない。祖父も來いと云うて人をおこしたりとも。稗にはなるまいに。よう隱いたなあ。 アドへいや。殊の外のお忍びぢやに依つて。身共の儘にならぬ。 シテへ奥へいて。老の思ひ出にお盃を戴かう。 アドへいや。今若い衆が大勢來て居らるゝに依つて。なりませぬ。 シテへいよ〳〵合點のゆかぬ事を云ふ。年寄つた者はならいで。若い衆には苦しうないとは。なんとした事ぢや。 アドへ先づ唯今に歸らつしやれい。後で呼びに進ぜう。
シテへ推參な。身共は所で極老のものなれば。終に寄合參會にも。後に出たためしはない。
アドへそれとは違うた事でござる。 シテへいや。どうでも出ねばならぬ。 頭へなう〳〵祖父御。是は見苦しい。人に御意見もなさるゝ程のこなたではないか。事にこそよれ。少人とお盃をせりやうてせうと云ふ事があるものでござるか。早う歸らつしやれい。 シテへおぬし達までそのつれを云ふか。何の年寄つたというて。少人の盃を戴くまいものであらうか。 アドへ扨も憎い人ぢや。この座敷へ年寄はならぬ。皆揃はつしやるな。 シテへいや亭主。かまふなとはなぜ人えらみをする。 アドへくどい事を云ふ人ぢや。この座敷へ年寄はならぬ。皆奥へはいらつしやれ。 頭へ祖父御。とつ〳〵とお歸りやれ。ハテさて。戸より外へお出やれ ト云うて。戸より外へつき出す。戸をさして皆々奥へ入る心なり。 シテへ是は戸をさいたか。ヤレ腹立ちや〳〵。愛をあけぬか。よい〳〵。この祖父に恥を與へた。おのれ今の間に思ひ知らせうぞ。 ト云うて中入する
アドへ何とそれは誠か。 なう〳〵何れも。唯今祖父を返したといふ腹立ちに。大勢年寄衆をかたらひ。長道具を持つて押寄すると申す。ちと用心をなされい。 衆へ心得ました。 兒へおりやここにはい。 ト云うて泣く。 三位へこはい事にそつともない。氣遣ひなさるな。 アドへ三位殿。少人を連れまして奥へござれ。 三位へ心得ました ト云うて。三位兒を引立て入る。杖をついて待ちてゐる。
シテ一聲へ老武者の。[illegible]に[illegible]の弓を強げ。 翁さびたる體長刀を。[illegible]ついてぞ押寄せたる。 立頭へ若衆の勢は是を見て。 若同へ若衆の勢は是を見て。昔はしらず當代は。にやくぞくずきこそ一手はとれ。いかに勢が諍ふとも。 さしたる事はあらじものをと。一度にどつとぞ笑ひける。 同〳〵。 ト云うて皆々笑ふ シテへ年寄共は是を聞き。 同へ年寄共は是を聞き。 鎌坂の入道六十三。 齋藤別當實盛も六十に餘つて討死する。 その上老武者の。くうたる所が[illegible]になるぞと。 シテへ或ひは七十。 同へ或ひは。 シテへ八十 同へいづれも劣らぬ老武者共。切先を揃へて掛かりける。 三位へ若衆の内より下知をなし 同へ〳〵。 皆々是は卑方達なり。構へて〳〵あやまちすなと。走りより抱き付けば。思ひの外なるにやくぞくずきし。思ひの外なるにやくぞくずきして。わが家々にぞ歸りける。
ト云うて。兒を手車にのせて人共かいて[illegible]。今は手車にのせず。兒是のつめたいに。[illegible]云うて。立ち[illegible]して入るなり。

楽阿彌

シテ　楽阿彌の靈
ワキ　旅僧
アヒ　所の者
（入道具）

ワキ次第へろさいに出づる門わきに。／＼。犬の伏せるぞ悲しき。たかしきとも。詞これは行脚の僧にて候。我れ未だ伊勢大神宮へ參らず候程に。此度思ひ立ち伊勢大神宮へ參らばやと思ひ候。道行旅衣。なほ萎れ行く往來の。／＼。ふすまの無きぞ悲しき。やう／＼急ぎ行く程に。名にのみ聞きし伊勢の國べつほうに早く着きにけり。詞急ぎ候程に。べつほうの松原に着きて候。又これなる松を見れば。尺八を切りあまた掛けられて候。如何さま謂れの無き事は候まじ。所の人に尋ねばやと存じ候。所の人の渡り候か。問へ所の者とお尋ねは。誰にて渡り候ぞ。ワキへこれなる松を見れば。尺八をあまた掛けられて候。謂れの無き事は候まじ。語つて御聞かせ候へ。問へさん候古へ此の所に楽阿彌と申して。尺八吹きの御座候が。生死の習とは申しながら。終に尺八を吹き死せられて候程に。所の者いたはしく存じ。土中につきこめ申して候。心ある人は尺八を掛け御弔ひなされ候。御僧も逆縁ながら弔うて御通り候へ。ワキへ懇に御物語り祝着申して候。さあらば立寄り弔うて通らうずるにて候。問へ重ねて御用もあらば仰せられい。ワキへ頼みませう。問へ心得ました。ワキへ扨は楽阿彌陀佛の跡なるかや。いざや御あと弔はんと。我も持ちたる尺八を懐よりも取出だし。この尺八を吹きしむる。／＼。フヮ。一せいシテへ尺八の。あら面白の音色かな。おぬしを見れば。そうでうぎりなり。ワキへ不思議やな音取る枕の上を見れば。大尺八小尺八四箇半箇両箇をさし。我等が吹くを面白がるは。如何なる人にてましますぞ。シテへこれは古へ尺八を吹死せし。楽阿彌と云へる者なるが。御尺八のおもしろさに。これまで現れ出でて候。ワキへこれは不思議の御事かな。昔語りの楽阿彌陀佛に。詞を交すは不審なり。シテへ何をか不審し給ふらん。あの宇治のらうあんじゆの尺八のじよにも。手づから剛頭截断してより後。尺八寸の内古今に通ず。吹き起す無常心の一曲。三千里外に知音の迎すと作られたり。ワキへ實に／＼これは面白や。昔語りの楽阿彌陀佛に。詞なかはずも尺八故。古今に通ずる故よなう。シテへなか／＼の事我もまた。坂東方の人になれ申すも尺八故。ワキへ知音になるとも。シテへ尺八ゆゑ。ワキへあら。シテへ面白や。同へ面白けれど尺八の。我が吹けばかしましとて。三千里の外知音はへだつまじ。先づ我れはさしおくなり御尺八を吹き給へ。ワキへ同じくはつれ尺八。シテへいや／＼それは楽阿彌が御尺八をよごすなりと。二人へ云ふ聲の下よりも。大尺八を取出だし。二人へトラフラフリトラフラフリロフ。シテへあら昔戀しや。暇申して歸るなり。ワキへあらいたはしの御事や最後を語りおはしませ。シテへいで／＼さらば語らん。カケリ打上。地へいで／＼さらば語らん。本より楽阿彌は。しゆつなるつらさしにて。かしこの旅人是處の茶や。あそこの門へさしよせ、きげんも知らず尺八を吹きならして。楽阿彌に代り壹錢尺八吹きには何にもくれねば。腹立ちや／＼と。あそこ是處にて悪口すれば。尺八吹きぬはづなしなり。ぶつしやうなり。あてよやとて杓ためのほつ伏せに押しふせられて。シテへ縋だめ桂だめに。地へおふつ踏んづわだ／＼引なげつ。その古への尺八竹の

今に冥途の苦患となるを。[illegible]給へや御僧よ。かほども輪廻の妄執は。此年までもすきのさからぬうば竹の。節しさは。我ながらうつ面憎やとかき消すやうにぞ失せにける。

【れ】

連歌十徳（れんがじつとく）

シテ　男
アド　何某
小アド　僧
女　妻
（入道具）

アドへ此の邊りの者で御座る。それがし親の追善のため連歌師を抱へうと存ずる。存生の時殊のほか連歌を好かれて御座るに依つて。連歌十徳相傳の出家ならば。當分十貫を遣はし。愈々相傳の儀正しい者ならば。永々扶持を致さうと存ずる。先づこの由を高札に打たう。常の如し。女へなう〳〵。腹立ちや〳〵。トいうて。追出す。シテへ先づ待て〳〵。これは何とする。女へ己れ此の棒で打殺すは。シテへ己れは心易さうに。又しても〳〵。棒を以て打殺すの叩殺すのといふか。男に向うて何の咎があればその様にぬかし居る。女へ人聞きもよい。己れは見事男ぢやといふ事を知つて居るか。シテへ知らうと知るまいと。身共は女ではなし。男ぢやが何とした。女へまだその様な事を吐かし居る。よう合點して見よ。己れが心に覺えがあらう。シテへ何も覺えはない。女へ忘れまい事を忘れたな。まことに妾が嫁入をして來た時は。四季の着類數々。十二の手道具。月ばた日ばたまで持つて來たぞよ。シテへそれがこれへ出る事か。女へまづ後を聞き居れ。いつその程から邊りのいたづら者と寄合ひ。手慰みをし居るに依つて。人柄も惡う成る程に。止めいというて人を頼み。合口を以て色々と意見をすれども。聞き居らいで。今は田山家財。妾が一せき殘らず打込うで。ばらりさんと成つて。朝夕の煙さへ絶え〳〵になつたでないか。それでも根性も直らいで。うか〳〵朝寢をして。有明つて起きて。隣り邊りへ行て。鍋釜の下さへ燃ゆれば。無理にゐしかつて居て。何ぞ喰はれば戻らぬ様にし居る。己れはそれで恥ではないか〳〵。とかく生けて置くに依つてぢや。最早打殺してしまふ程にさう心得。シテへなる程尤もぢやさりながら。俺を殺してそちは何とする。女へ己れを殺して後で妾も自害をするは。シテへさてはそちも生きては居ぬか。女へ何の存へて居るものぢや。シテへそれなれば。とても死ぬる命ぢや程に。先づ俺を殺さずとも。そちばかり先きへ死んでくれい。女へえゝ腹立ちや〳〵。まだその連れをぬかし居る。とかく打殺して後で妾に仕様がある。そこへ出よ〳〵。シテへ先づ待て〳〵。何事も身共が惡かつた。そなたのがみな理ぢや。この上は心を取直して。身上の事も人と談合して一稼せう程に。先づ此の度は了簡してくれい。女へいつもその様にいうても。又うか〳〵して居るではないか。シテへ此の度ばかりは眞實ぢや。此の足で直ぐに談合に行くは。女へそれならば。今直ぐに談合して來い。さなくば内へ寄せぬぞ。シテへ氣遣ひするな。立身をして見せう。シテへうろたへて居ずとも早う行き居らう。腹立ちや〳〵。女内へ入る。シテへこれはいかなこと。あの體ならば定めて内へは寄せぬであらう。何としたものであらう。寺の長老は思案の深い人ぢや。先づあれへ參つて相談を致して見う。何れ女共が申すも道理ぢや。何事も身共が惡い。とかく此の上は寺の長老

の指圖次第にして、心を直さうと存ずる。參る程にこれぢや。（トかう一〇案内乞ふ。常の如し。）唯今參ること別の義でも御座らぬ。とかく身上不如意で。後へも先へも參りませぬ。誰あつて相談をしてくるゝ人も御座らぬ。偏にお慈悲と思召して。御思案をなされて下されたらば。忝う存じまする。小アド〽和御寮もちとお嗜みやれ。いつぞやからせつ〳〵その樣なことを云うてお出でやるに依つて。笑止に思うて。或る時は少々の鳥目を合力したり。米なども遣した事もあれども。又しても〳〵。身上がならぬとおしやれば。身共も存ぜぬ程に。さう心得さしめ。シテ〽御尤もで御座れども。最早お前ならでは賴み申すお方が御座らぬ。どうぞ御思案なされて下されませ。小アド〽さても〳〵笑止な事かな。何と細工などを仕覺えた事はないか。シテ〽總じて細工事別して不調法に御座る。小アド〽氣の毒な事かな。何と連歌はならぬか。シテ〽案ずるうち睡が出まして。一向得致しませぬ。小アド〽連歌がならずとも。出家なれば思寄つた事もあるが。シテ〽それはどうした事で御座る。小アド〽されば邊り近い所に有德人があつて。親の追善のため連歌師を抱へらるゝ。連歌十德相傳の出家ならば。當分十貫の施物を出して。その上で相傳の儀正しくば。永々扶持をせうと高札を上げられた。そなたが坊主なれば。たとひ連歌はせずとも。身共が思案の仕樣もあれども。俗ぢやに依つてどうもならぬ。シテ〽いや十貫といふ布施を貰ふ事なれば。坊主なりとも成りませう。小アド〽それならば。爰に古い十德がある。これをそなたに遣らう程に。この十德を着して行て。連歌十德相傳の出家ぢやとおしやれ。早速十貫の施物が出よう。押戴き廻向などをして。さて相傳の事を尋ねらるゝならば。和御寮は口調法な人ぢやに依つて。何なりとも辯舌に任せていうて見て。仕おほせさへすれば。永々扶持を得る。若し不首尾なれば。云ひ拔けて戻つたがよい。何れの道にも十貫の布施を取りおほせる樣にするがよい。さてこれは何とあらう。シテ〽扨々よい事を承りました。何と申しても覺えた事はなし。商を致さうにも資本（もとで）はなし。また其の樣な嘘をいうて。當座の間に合すことは私の得物で御座る。これから參りませう。御苦勞ながら頭を剃らせられて下され。小アド〽いや剃髮の儀は先づお歸りやつて。一門衆とも御内儀とも談合して。其の上の事に召され。シテ〽それは御心安く思召しませ。身上不如意に就いて。女どももまた一門中にも豫て談合して。髮を剃ることはさて置き。耳鼻を殺（そ）いでなりとも露命をつなぐ樣にと。相談を極めて置きました。お氣遣ひなう早々お剃りなされて下され。小アド〽その樣に相談も極つた事ならば。成るほど剃つてやらうさりながら。人並に勝れてわゝしい御内儀なり。自然分別が變るまいものでもない。も一度とくと相談召され。シテ〽いやもう今朝も談合致したれば。お寺へ參つて。御坊樣を賴み申して。早う坊主になれと申してせがみまする。是非ともお剃りなされて下され。小アド〽その樣に念の入つた事ならば剃つてやらう。こちへ寄らしめ。（笛座へ行く。）シテ〽御苦勞に存じまする。小アド〽剃りよい頭（つむり）ぢや。シテ〽扨々御手の輕いことかな。小アド〽それ〳〵よいぞ。シテ〽早やよう御座るか。小アド〽殊のほかよう似合うた。シテ〽これは忝う御座る。連歌十德ぢやと申して。繕うて申しませう。小アド〽隨分仕合はせを召され。シテ〽お蔭でよい資本（もとで）に取附きまする。布施を貰ひましたらば。お裾分を致しませう。小アド〽それには及ばぬ。行ておりやれ。（暇乞ふ。常の如し。）シテ〽なう〳〵

嬉しや。先づ急いで參らう。シカ〳〵。まことに、天道人を殺さずと申すが、此の事で御座る。天晴れ日謝法を以て手柄を致いて歸らう。いやこれに高札がある。こゝであらう。先づ此の高札を某が引いて懷中致さう。（案内常の如し。）
シテへ高札の表に就いて參つたもので御座る。
アドへ高札には連歌十德相傳の御出家と記して御座るが。左樣で御座るか。
シテへ恐らく日本に於て相傳致したは。愚僧一人で御座らう。
アドへようこそ出させられた。先づおう通りなされませ。
シテへ心得ました。（アド高札の高持出して前に置く。）
シテへこれに御茶を下さるゝやら。菓子に昆布が出ました。
アドへいやお茶の菓子では御座らぬ。則ち是が高札の表に記しました十卷の昆布で御座る。さて連歌十德の儀、片端仰せられい。
シテへ扨は高札に十貫とあるは。昆布十卷の事で御座るか。
アドへなか〳〵。其の通りで御座る。
シテへ昆布なら昆布と書いて置いたがよいに。大事の相傳を昆布づれで何となるものぢや。いや往にませう。
アドへ先づ待たせられい。すれば鳥目十貫ぢやと心得させられたか。
シテへどこにか布施に昆布を出すといふ事があるものか。
アドへ成るほど鳥目でも進じませう。
シテへいや〳〵。その樣な紛れがはしい事はいやで御座る。とかく往にませう。
アドへそれはお情なう御座る。これへお出でなされて御相傳のほどを承らねば。歸すことには成りませぬ。（ト引き止める。）
シテへこれ〳〵。その樣にさつしやると。大事の連歌十德が破れまする。
アドへなに。是が連歌十德ぢや。
シテへ外に代りのない連歌十德。損うては成りませぬ。
アドへやい。そこな賣僧坊主。
シテへ賣僧とは。
アドへ連歌十德とは、此の道の大事に、連歌に十の德ありといふ秘事を傳授して、宗匠をもせらるゝ出家をこそ尋ね。何ぞやその古い破衣が連歌十德であらう事は。
シテへ扨は十の德といふ事か。
アドへおんでもないこと。
シテへ南無三寶、鳥目かと思へば昆布の事なり。衣の如く羽織の如く。如く〳〵を二つ合せて連歌十德かと思へば十の德なり。此の樣に違うては。
アドへあまだ何ほど違はうも知れますまい。の賣僧坊主。足許の明いうちにとつと行かしめ。
シテへ面目もおりない。（ト留めて入る。但し追込にも可なり。）

連歌盗人（れんがぬすびと）

シテ　連歌師
アド　連歌師
小アド　何某
（入道具）

シテへ此邊りの者で御座る。某初心講を結んで、近日連歌の當に當つては御座れども。身上不如意に御座つて。この當を勤めう手段が御座らぬ。又此處に誰と申して相當が御座る。今日は參り相談を致さうと存ずる。シカ〳〵。誠に。内に居らるれば良いが。外へ出ぬ人ぢやに依つて。定めて内に居らるるで御座らう。何かと言ふ内に是ぢや。先づ案内をこふ。（常の如し。）只今參るは別の事でも御座らぬ。何と内々の當も近付いたでは御座らぬか。
アドへ仰せらるゝ通り。當は近付きまする。何となる事ぢやとばかり存じて居りまする。
シテへ定めて此方には何ぞ御用意をなされたで御座らう。
アドへ當て用意致さねでは御座らぬが。いる物ぢやと存じて。杉の葉や南天の葉を用意致して御座る。
シテへ何れ是はなうて叶はぬ物で御座る。して其外に何で御座る。
アドへ先づ此分で御座る。
シテへ其分で御座るか。
アドへ中々。（シテ笑ふ。）
シテへ此度の當が。杉の葉や南天の葉では勤まりますまい。
アドへ扨そなたには何ぞ御用意をなされたか。

シテ〽私も曾て用意致さぬでも御座らぬ。どうて要る物ぢやと存じて。杉楊子を廿本許り削つて置きました。アド〽是もなうて叶はぬ物で御座るが。して其外は何で御座る。シテ〽いや先づ此分で御座る。アド〽其分で御座るか。シテ〽中々。アド笑ふ。アド〽某がの笑はせらるるに依つて。何ぞ一かどの御用意でもあるかと存じて御座れば。此度の當は杉楊子廿本位では勤まりますまい。シテ〽さればそれに就き。ちと御相談申したい事も御座れども。此處は餘り端近で御座る。苦しうなくば奥へ通りませうか。アド〽苦しう御座らぬ。つッとお通りなされ。シテ〽心得ました。アド〽先づ下に御座れ。シテ〽はあ。アド〽さて御相談なされたいとは如何様の事で御座る。シテ〽別の事でも御座らぬが。此事を申出して御承引なれば良う御座るが。若し御承引ない時は異なもので御座る。アド〽何が扨此度の當さへ勤むる事ならば。承引致さいでなりませうか。シテ〽それならば申さう。是も相當で御座る。この誰殿と申すは。此の邊りでの有徳人では御座らぬか。アド〽仰せらるゝ通り。此の邊りでの手前者で御座る。シテ〽今宵ひそかに忍入つて。案内無しに何なりとも。道具を一色二色借りて參り。それを代なして。申しますまい〳〵。アド〽皆迄仰せられな。其様な事で無くば。此度の當は勤まりますまい。シテ〽扨は御同心で御座るか。アド〽成程同心致さいでなりませうか。シテ〽やれ〳〵嬉しや。此事を申出して。御承引なればよけれども。若し御同心無い時は異なものぢやと存じて御座る。此様な事は宵からつけたが良いと申す。いざ參りませうか。アド〽一段と良う御座らう。シテ〽それならば先づ此方からお出でなされ。アド〽案内者の爲。先づ此方から御座れ。シテ〽案内者とは迷惑で御座る。二人笑ふ。シテ〽さあ〳〵御座れ。アド〽心得ました。シテ〽何と思召す。身上ならねば。おられぬ思案が出る事で御座る。アド〽さりながら。又身上とも斷つも致したらば。元々へ返辨致しませうはさて。シテ〽それはさうで御座る。何かと言ふ内に。早や是で御座る。アド〽眞に是で御座る。シテ〽此中作事をせられたと聞きましたが。中々嚴しい態で御座る。アド〽是では入られますまい。シテ〽裏へ廻つて見ませう。アド〽一段と良う御座らう。シテ〽何と裏も此態ならば氣の毒で御座る。アド〽裏はまだ半造作とやら聞きました。シテ〽これ〳〵。表に似合はぬ裏で御座る。此の葭垣を破れば。あなたは坪の内ぢや。さらば葭垣を破りませう。アド〽一段と良う御座らう。シテ〽扨此方には何ぞ御用意が御座るか。アド〽いや何も用意は御座らぬ。シテ〽私は斯様の時の爲ぢやと存じて。鋸を用意致して御座る。アド〽それは良いたしなみで御座る。二人笑ふ。シテ〽いざ葭垣を破りませう。アド〽一段と良う御座らう。シテ〽ずか〳〵〳〵〳〵。ト云ふて○仕方口傳○シイ〳〵ト呼ぶ○兩人手をかけ○二人〽めり〳〵〳〵。兩人耳に手を掛け○こける○兩名を呼び合ひ○行き當る○全て口傳○シテ〽何と鳴つた事ではないか。アド〽夥しう鳴つた事ぢや。シテ〽某は今のめり〳〵に驚いて。ちやと耳を塞いだ。アド〽某も耳をちやと塞いだ。シテ〽何れしつけぬ事とて。うろたゆるものぢや。身共等が耳を塞いだというて。人が聞くまい事は。笑うて○口を抑へ○シテ〽何と誰も聞付けはせぬか。アド〽いや〳〵。聞付けもせぬやら人音もせぬ。シテ〽いざ葭垣をくぐらう。先づ是さへ越せば心安い。アド〽其通りぢや。シテ〽これ〳〵。此の戸を開くればはや座敷ぢや。さらば戸を開けよう。ゴロ〳〵〳〵。火がとぼつてある。アド〽誠に。火がともしてある。シテ〽亭主が念者ぢやに依つて。有明がなと

ぼして置かれたものであらう。アドへ身共は見付けられうはしか。胸がどく〳〵とする。シテへ氣の弱い事を言はずとも。身共について御座れ。アドへ餘り奥へは無用でおりやる。シテへされはこそ有明であつた。アドへ其通りぢや。シテへこれは宵に客が有つたと見えて。道具が取散してある。アテへ誠に道具が取散してある。シテへ幸ひ是に手燭が有る。ちと見物致さう。アドへ一段と良からう。シテへ是は茶の湯の道具ぢや。アドへいか樣。茶の湯の道具ぢや。シテへ風呂釜。アドへ風呂釜。シテへ茶碗茶入れ。アドへ水こぼし。シテへふくさ羽箒。シテへ何と見事な道具ではないか。アドへいか樣結構な道具でおりやる。シテへこれ一色あれば。此度の當が樂々と勤まる事ぢや。アドへ寶の山と言ふは此事であらう。シテへ其通りぢや。硯文臺床か。アドへ眞に床ぢや。シテへ懐紙。アドへ何とあるぞ。シテへ水に見て。アドへ水に見て。シテへ月の上なる木の葉哉。扨も〳〵面白い事ぢや。アドへ是は亭主の家固めの時出來た發句かと思ふ。シテへ扨々そなたは良い覺えぢや。成程其樣な事であつた。何と是に添へ發句をしようと思ふが。なんとであらう。アドへ扨々そなたはゆるりとした事をおしやる。其樣な事をせずとも。何なりとも一色二色取つてすかさうではあるまいか。シテへ先づ待たせられい。今宵是へ忍入つたも。この連歌故の事でないか。アドへそれもさうか。シテへ先づ下にお居やれ。アドへ心得た。シテへさあ〳〵案じて見さつしやれ。シテへ心得ました。アドへ何とで御座らうぞ。アドへされば。何とで御座らうぞ。シテへいや斯うも御座らうか。シテへはや出ましたか。シテへ先づ申して見ませう。アドへ何とで御座る。シテへ梢散り。アドへ梢散り。シテへ露はれやせん下紅葉。アドへ一段と出來ましたが。是はちと差合ひが御座る。シテへ發句に差合ひは無いもので御座るが。アドへ尤も發句に差合は御座らぬが。今宵の座敷に。露はれやせんが耳に障つて惡う御座る。シテへそれならば。露はれやせぬに致さう。アドへ早速直つた。某が脇を致さう。シテへ良う御座らう。アドへ時雨の音を盗む松風。シテへ又惡い。アドへ何處で御座る。シテへこの盗むが耳に障つて惡う御座る。アドへ尤もなれども。今宵是へ忍入つて。まだ楊子一本盗みは致さぬ。苦しう御座るまい。シテへそれもさうで御座る。いざ吟じて見ませう。アドへ一段と良う御座らう。ト云うて兩人吟ずる内。小アドへやあ〳〵。何と言ふぞ。盗人が入つた。盗人が入つたぞ。裏へも表へも人を廻せ。此處は身共が防ぐぞ。松明を出せ〳〵。やるまいぞ〳〵。ト云ふ内。二人逃げ出る心なり。シテへそりや聞付けた。アドへ身共は斯うであらうと思うた。小アドへがつきめ。やらぬぞ。シテへ申し〳〵。聊爾かなされますな。盗人では御座らぬ。小アドへ夜中に人の内へ這入つて。盗人で無いとは。シテへ餘りお座敷が綺麗なと承つてなあ。アドへオヽ。二人へ見物に參りました。小アドへ何の見物。アドへいや今のは。あの者の申す樣が惡う御座る。有樣はなあ。シテへなう。二人へどうに迷ひまして御座る。小アドへまだそのつれをぬかしをる。シテへ御許されませ〳〵。小アドへさて最前から聞いて居れば。何やら吟ずる聲がした何で有つた。シテへいやそれはお聞きなされる樣な事では御座りませぬ。小アドへいや〳〵何やら面白さうな事で有つた。急いで言へ。シテへわごりよ言うておくりやれ。アドへハテわごりよおしやれ。二人せり合ふ。小アドへぬかし居らぬか。シテへ申します〳〵。お床の懐紙に。水に見て。月の上なる木の葉哉。と

御座つたに依つて。慮外ながら添へ發句を致
して御座る。小アドへしてそれは何とした。
シテへコレわごりよ言うておくりやれ。アド
へハテわごりよの句ぢや。おぬしおしやれ。
せり合ふ。小アドへ早う言はぬか。シテへ申します
〳〵。梢散り。露はれやせぬ下紅葉。と致し
て御座れば。此處な小盜人が腸を致して御座
る。小アドへそれは何とした。アドへこれ。口
ついでに言うておくりやれ。シテへハテわご
りよの句ぢや。わごりよおしやれ。せり合ふ。
小アドへ早うぬかしならぬか。アドへ申します
〳〵。時雨の音を盜む松風。とは致して御座
れども。まだ楊枝一本盜みは致しませぬ。
小アドへ盜みする程のやつなれども。小賢しい
者共ぢや。某が第三なせう程に。四句目を附
けい。附けたらば命を助くる。附ければ命を
取る程に。さう心得。シテへ是はお出來なさ
るゝて御座らう。小アドへかうもあらうか。
シテへお句ばやし何と。小アドへ闇の頃。吟ず。
小アドへ月を憐れと忍び來て。シテへしたり。
天神も照覽あれ。扨も〳〵面白い。ト云ひ〳〵出る。
小アドへさあ〳〵附けならぬか。シテへさあ。
わごりよお附けやれ。又せり合ふ。小アドへ早う附
けぬか。シテへかうも御座りませうか。小アド
へ何と シテへ覺むべき夢ぞ。吟ず。シテへ許
せ鐘の音。小アドへ扨も〳〵面白い事ぢや。
此上は命を助くる。もと入つた所から出て行
け。シテへ有難う存じまする。さりながら。
其様になされて御座つては。何とやら窮屈に
御座る。ちとお寛ぎなされて下され。小アドへ
是は尤もぢや。さうあらば。太刀も鞘に收む
るぞ。シテへそれは有難う存じまする。小アド
へさあ〳〵早う出て行け。シテへさあ。わご
りよからお行きやれ。アドへ先づそなたから
お行きやれ。トせり合ふ。小アドへ早う行きならぬ
か。シテへ參りまする〳〵。御許されませ
〳〵。ト云うて。顔を隠し行く所を。小アドへ誰。又アドも其通り。
小アドへ誰。二人へ面目も御座らぬ。小アドへ是
は先づ何とした事でおりやる。シテへ私は參
るまいと申して御座れば。あの者が何やら頁
い事が有ると申して御座るに依つて參りまし
た。アドへそれはあちらこちらで御座る。私
は參るまいと申して御座れども。參れば何や
ら頁い事が有ると申して。アレ鍋迄用意致し
て御座る。シテへシイ〳〵。其様な事は云は
ぬものぢや。小アドへ互ひに論は無用。是に
は仔細が有らう。早うおしやれ。シテへされ
ばの事で御座る。内々の當は近付きまする。
兩人共に身上貧しう御座るに依つて。この當
を勤むる手段が御座らぬ。それ故今宵ひそか
に忍入つて。案内なしに道具を一色二色借り
て參り。それを代なして此度の當を勤めうと
存じて。はからず參つてなあ。アドへおゝ。
二人へ面目も御座らぬ。小アドへ其様な事なら
ば。前廣におしやつたらば。どうなりともな
らうものを。先づ互ひに怪我が無うて目出度
い。夜寒にもあり。酒を一つ振舞はう程に。
先づ下に居さしめ。シテへ命をお助けなさる
るさへで御座る。御無用になされませ。小アド
へひまは取るまい。先づ下に居さしめ。二人へ
申し〳〵。シテへ何と騙しはせぬかの。アドへ
二つ取りならば。往にたいものぢや。シテへ其
通りぢや。小アドへさあ〳〵お飲みやれ。二人へ
是は忝う存じまする。云うて受ける。小アドへ引違へ
て三獻宛お飲みやれ。シテへ猶以て忝う御座
る。アドへお蔭で胴の震ひが止みました。
小アドへさて誰へ申す。何がなとは思へども。
最早下々も寢鎮まつてゐる。是は持ち古びた
れどもそなたへ贈る程に。是を代なして。此
度の當を勤むる様におしやれ。シテへ是を私
へ下されまするか。小アドへ中々。シテへ先づ
以て有難うは存じまするが。命をお助けなさ

るゝさへで御座る。是は御斟酌申しまする。小アドへそれは要らぬ辭儀ぢや。取つて置かしめ。シテへいや。どう御座らうとも、御辭儀を申しませう。小アドへはて扱ひらに取つて置かしめ。シテへ幾重にもお斷り申上げまする。アドへなう／＼。あなたから下さるゝ物を、御辭儀を申すは結句慮外ぢや。戴いておかしめ。シテへ左様ならば戴いて置きませう。小アドへそれが良からう。さて誰へ申す。只今も申す通りの事ぢや。是は差し古びたれどもこなたに遣る程に。是を代なして。此度の當を勤めさしませ。アドへ是を私へ下されまするか。小アドへ其通りぢや。アドへ先づ以て有難う存じまするが。只今誰へ下された御太刀で。此度の當は樂々と勤まりまする、是は斟酌申しませう、小アドへそれは要らぬ辭儀ぢや、シテの通り三度目に。シテへこれ／＼。あなたは大やけ殿ぢや、戴いて置かしめ、アドへ左様ならば戴いて置きませう、小アドへそれが良からう。さて鬮人へ申す。身共も連歌が好きぢや。此後は節々お出でやれ。さりながら。今宵の樣に裏からは無用。表から案内を乞うて御出でやれ。シテへ忝う御座る。私共が參りませずば。外に參る者も御座るまい。背戸も門もなあ。

アドへおゝ。二人へ開け放して置かせられませ。小アドへ近頃過分おやりやる。さて身共も是に居ようなれども。結句窮屈にあらう。勝手へ行く程に。ゆるりと休息して行かしめ。二人へ有難う存じまする。シテへ何と是は夢の樣な事ぢや。アドへ夢の覺め果てた樣な事ぢや。シテへ是と言ふも。日頃こち衆が連歌に好く故の事ぢや。アドへ其通りぢや。シテへ此樣な時は。いざどつと和歌を上げて行かう。アドへ一段と良からう。シテへわごりよ謠はしめ。アドへ心得た。シテへげにや和歌の其の道。鬼神迄も納受とは。かゝる事をや申すらん。シテへ實に世の常の習ひには。二人へ／＼。盜人などらへては。切るこそ法と聞く物を。この盜人はさはなくて。連歌にすけるやさしさに。呼入れてげんぞうし。酒一つ飲ませて。シテへ太刀、アドへかたな、二人へたびにけり。是かや事のたとへには。ぬすびとにおひと言ふ事は。かゝる事をや申すらん。／＼。シテへなう。そなたと。アドへそなたと。シテへ五百八十年。アドへ七廻り。シテへそれこそ目出度けれ。ちやつとおりやれ。アドへ心得た／＼。

連雀(れんじやく)

シテ　絹布賣
アド　目代
女　かちん賣
（入道具）

アドへこの所の目代で御座る、ト云うて。鍋八撥の通りなり。

女へ此邊りにかちんを賣る者で御座る。此所御富貴に就いて。市數多御座れども。重ねて新市をお立てなさるゝ。何者には寄るまい。早々參り。一の店を飾つた者は。市司を仰付けられ。萬雜公事を御許さるゝとのお事ぢや、夜深には御座れども。妾は參つて一の店につかうと思ひまする。シカ／＼。誠に、此樣な目出度い世の中は御座らぬ。何卒一の店について。市司を下されて御座らば、ゆく／＼はよろしい商賣をも致さうと思ひまする。なう／＼嬉しや。隨分夜をこめて參つたれば。まだ何者も居ぬ。先づ店を飾らう。シイ／＼。そこもとへ。今日の一の店は妾がついて御座る。かちんの御用あらばこなたへ仰せられ。イヤまだ夜深な。暫くまどろまうと思ひます。シテへ此邊りに絹布を商賣致す者で御座る。當所御富

貴に就いて。市數多御座れども。重ねて新市をお立てなさるゝ。何物にはよるまい。早々參つて一の店に付いた者は。市司を仰付けられ。萬雜公事を御赦免なされうとの御高札で御座る。まだ夜深には御座れども。一の店につかうと存じて罷出た。先づ急いで參らう。シカ〳〵。誠に。この連雀と申す者は重寶な物で御座る。この絹布等をあらけない棒で荷うても不都合に御座る。斯樣に連雀に致し負うて參れば。どれからどれへ參らうと儘で御座る。何かと云ふうちに市場ぢや。扨も〳〵夥しい事かな。あれからづゝとあれ迄ぢや。一の店はもそつと上さうな。上へ參らう。誠に斯樣い目出度い御代に生れ合ふが仕合せで御座る。是は如何な事。隨分夜をこめて參つたと存ずれば。はやあれに女が臥つて居る。どうでも彼奴は一昨日邊りからうせ居つた者であらう。某も隨分精を出して參つて。あれより後に下るも口惜しい事ぢや。何としたものであらう。ヤア思ひ出した。ト云うて箱をおろし。女の床机を後へ寄せて。箱を出して置く。シイ〳〵。そこもとへ。今日の一の店は某がついて御座る。絹布の御用ならば此方へ仰付けられい。や。まだ夜深な。暫くまどろまう。女へ扨々久しう寢た事かな。これは如何な事。なうそこな人〳〵。シテ起きて。あくび等して。シテへ何ぢや。女へそなたは誰なれば人の店先に居る。あちへ行かしめ。シテへこゝな女は我儘な事を云ふ。ありやがつてうせるのみならず。人の店先でわつぱと云ふは何者ぢや。女へおぬしこそありやがつて來て。人の店をふさげずともおのきやれ。シテへ退きたくばおのれ退かう迄よ。女へ扨は退くまいか。シテへ何のやうに退かうぞ。女へエイ腹立ちや〳〵。妾を女ぢやと思うて侮るか。退ゝ居らぬか〳〵。ト云うて取り付きひつたつる。シテへ推參な奴ぢや。ト云うて。摑み合ふ。アドへ先づ待て〳〵。是は何事ぢや。女へお前は誰方で御座ります。アドへ所の目代ぢや。女へ目代樣ならばお禮を申しまする。アドへ禮には及ばぬ。何事ぢや。女へ先づ聞かせられて下され。妾は此邊りにかちんを商ふ者で御座る。此度新市をお立てなさるゝについて。何卒一の店につかうと存じて。夜をこめて來て。まんまと一の店に飾りまして。餘り夜深に御座つた程に。まどろうで居りましたれば。何時の間にやらあの男が參りまして。妾が店先に臥つて居りまするに依つて。退けと申せば。退かぬのみならず。女ぢやと思うてさん〴〵に打擲致します。お叱りなされて下されませ。アドへ扨は汝が早う來たか。女へなか〳〵。妾が早う參りました。アドへ先づあの者の口を聞かう。ヤイ〳〵。汝は何者なれば。遲う來てあれが前に居るぞ。シテへ先づお前は誰方で御座る。アドへ所の目代ぢや。シテへ目代樣ならばきつとお禮を申上げまする。アドへ禮には及ばぬ。何を論ずるぞ。シテへ私は此邊りに絹布を商賣致す者で御座る。當所御富貴に付いて。市數多御座れども。重ねて新市をお立てなされ。何者にはよるまい。早々參つて一の店についた者は。市司を仰付けられ。萬雜公事を御赦免なされうとのお事では御座らぬか。アドへ其通りぢや。シテへ私も何卒一の店につかうと存じ。隨分夜をこめて參つて。まんまと一の店につきまして。まだ夜深に御座つたに依つて。暫くまどろうで居りましたれば。何時の間にやらあの女めが。ありあがつて參るのみならず。先に居る私に退けと申す。退くまいと申せば。私につかみ付きまする。あの樣な横着者は。つゝと市末へ仰付けられませ。アドへ扨は其方が早う來たか。シテへなか〳〵。私が早う參りましたとも。アドへ同じ樣な事を言ふ。ヤイ〳〵。あれが早う來たと言ふぞよ。女へ扨々憎い奴

で御座る。女ぢやと思うて。侮つて其様な事を申しまする。先づ後先の事はともかくも。このかちんと申す物は目出度い物で。年の初めより年の暮まで。四季折々のお祝ひ物には。上々様は申すに及ばず。下々迄も。このかちんこそお祝ひなさるれ。あの古いきれ／＼の端(はし)で。何がお祝ひになりませう。あの様な者は市末へ仰付けられませ。アドへ是は尤もぢや。今のを聞いたか。シテへなか／＼。承りました。成程あの餅と申す物は目出度い物で御座る。さり乍ら。この絹布を以て。上々様も下々も。四季折々の衣替へを遊ばされて。其上では餅をもお祝ひなされませうが、冬裸で御座なされたらば。寒うてお節句もお正月もいりますまい。惣じて衣食とこそ申せ、食衣とは申しませぬ。あの様なさもしい食物の類は。つつと市末へ仰付けられませ。アドへ是も尤もぢや。今のを聞いたか。女へ成程承りました。あいつがあの箱の内のきれぎれで。何と衣替へがなりませう。シテへヤイそこな女。おのれが其桶にある餅の分で。上々は申すに及ばず。下々迄なんと祝はるゝものぢや。女へ内にはいか程も有るわい。シテへおれも内にはいか程も呉服物があるは。女へいや／＼。内にも有りはせまい。シテへなんの持たいで。アドへヤイ／＼。其様に言うては埒が明かぬ。先づ待て。女へ申し。このかちんは目出度い歌が御座る。アドへ何と云ふ歌ぢや。女へ千代までも。かげを並べて相見んと。祝ふ鏡のもちひざらめや。と申す時は。これ程目出度い物は御座りますまい。アドへ是は聞き事ぢや。ヤイ／＼。あの餅は目出度い歌がある。絹布にも其様な事が有るか。シテへなか／＼。絹布にこそ目出度い詩歌が様々御座る。中にも唐土の書に。堯舜四海に衣裳多くして　天下平かなりと聞く時は。この絹布程目出度い物は御座るまい。アドへこれでも埒が明かぬ、何ぞ勝負をしたらばよからう。シテへ男と女と勝負は。何も御座りますまい。アドへ尤もなれども。勝負にせねば理非が判らぬ。シテへそれならば。川渡りか木登りを致しませう。アドへ心得た。今のを聞いたか。女へ成程承つて御座る。川渡りの木登りのと云ふ事はなりますまい。下に居て一寸の勝負ならば致しませう。アドへ何がよからう。女へ臑押しを致しませう。アドへ男と臑押しをするか。女へ妾は夫の代りに方々を歩きまする。臑は達者に御座る。致しませう。アドへ其通り言はう。勝負に臑押しをせうと云ふ。シテへ扨も／＼不敵な奴かな。男と臑押しをせうと云ふ様な。根生の恐ろしい事が御座りませうか。成程致しませう。アドへサア／＼兩人共これへ寄れ。シテへおのれは不敵(ふてき)な奴ぢや。ト云うて。仕様有り。口傳。女へあいた／＼。シテへ勝つたぞ／＼。女へイヤ／＼負けは致されども。あの大きな足で。妾がはた迄踏込みまするに依つて立ちました。尋常に勝負をせいと仰せられて下され。アドへヤイ／＼。何故(なぜ)にしだらくな事をする。シテへイヤ。今のは餘り强う勝ち過ぎまして。足が餘つたので御座る。なか／＼踏込みは致しませぬ。アドへヤイ／＼。何ぞも一つ勝負せい。女へそれならば角力を取りませう。アドへあの男と角力は取れまい。女へいや。あいつが力の程も知れました、是非共取らうと仰せられて下され。アドへヤイ／＼。も一つ勝負と言へば。あれは角力を取らうと云ふは。シテへ扨々いたぶらな女かな。男と相撲を取らうと云ふ様な事が有るもので御座るか。不憫には御座れども。彼奴(きやつ)が心入れが憎う御座る。思ふさま取つて投げませう。身拵へをして出よと仰せられい。アドへサア／＼汝も拵へをせい。女へ畏

まつて御座る。ト云うて。太鼓座にて。羽織とる。女は懐中より。たすき出し掛ける。

アド〽兩人共に是へ出よ。二人〽心得ました。

アド〽身共が行司をせう。二人〽一段とよう御座らう。常の如く。飛び違ふ。アド行司する。女シテの手を取り。一二遍引廻し。シテを打ちこかす。

シテ〽ヤイ〳〵。相撲は一番では勝負が知れぬ。も一番取らうぞ。ト云うて追込み入るなり。○外に昔のかた。取り様有り。○日傳。女シテを打ちこかし。○上へ乗りて。○身を振ひて入る。○シテ起きて。鼻をつまみて。○なう〳〵くさい事かなト云うて入る。○但し當代にても用ゐるなり。○其時は。○シテをこかし。振ふ時。女。○覺えたか〳〵ト云うて振ふなり。

【ろ】

六地藏（ろくぢざう）

シテ　すつぱ
アド　田舍者
小アド　すつぱ
ツレ　同
（入道具）

アド〽此の邊りの者で御座る。此の所老若心を合はせて今生後生の爲。六地藏を建立致して御座る。堂は思ふ儘に出來て御座る。此度都へ上り。六體地藏を安置致さうと存ずる。先づ急いで參らう。シカ〳〵。誠に。田舍と申すものは不自由なもので御座る。堂は思ふ儘に出來て御座れども。佛師が御座らぬに依つて。佛を買ふ手だてが御座らぬ。わア〳〵。都近くと見えていかう賑やかな。されぱこそ都ぢや。また田舍の家作りとは違うて。軒と〳〵を仲よささうにぴつしりと建て並べた。扨も〳〵綺麗な事かな。イヤ。身共ははたと失念した事が有る。佛師はどこ許に居らるゝものやら。又どの様な人やらも存ぜぬ。とくと問うて來ればよかつたものを。はる〴〵の所間ひにも戻られまい。何としたものであらうぞ。ヤヤヤ。笑ふ。さすが都ぢや。賣り買ひ物も呼ばはれば事が調ふと見えた。さらば身共も此の邊りから呼ばはつて參らう。しい〳〵。そこ許に佛師は御座らぬか。何ぢやない。佛買うに佛師は御座らぬか。佛買ひす。佛師はないか。シテ〽洛中に心の直ぐにない者で御座る。あれに田舍者と見えて。何やらわつぱと申す。ちときやつにたづさはつて見うと存ずる。なう〳〵これ〳〵。アド〽此方の事で御座るか。シテ〽なる程。そなたの事ぢや。この廣い街道を。何をわつぱとおしやる。アド〽田舍者の事で御座れば。わつぱが法度なも存ぜいで申した。まつぴら御免あれ。シテ〽イヤ〳〵。わつぱが法度を咎めるではない。何をおしやるぞ。事に依つたらば叶へておませうと云ふ事ぢや。アド〽それは忝う御座る。シテ〽私は佛がほしさに佛師を尋ねまする。シテ〽して其の佛師を見知つておいやるか。アド〽これはまた都人とも覺えぬ事を仰せらるゝ。存じてゐれば。尋ぬるには及びませぬ。知らぬに依つて。呼ばはつてありく事で御座る。シテ〽これは身共があやまつた。すればそなたは仕合せ者ぢや。アド〽仕合せと申して。かう見えた邊りの者で御座る。シテ〽其の様に袖褄についての仕合せではない。身共にお逢やつたが仕合せと云ふ事ぢや。アド〽こなたに逢うたが仕合せとは。どうした事で御座る。シテ〽洛中に人多しとはいへども。そなたの尋ぬる身共は眞佛師でおりやる。アド〽なう恐ろしや。つつとそつちへのいて下され。シテ〽何とおしやつた。アド〽私は生れ附いて蝮は嫌ひで御座る。シテ〽それはそなたの聞き様が惡い。蝮ではないま佛師と云ふ事ぢや。アド〽扨は佛師殿で御座るか。シテ〽なか〳〵。アド〽佛師なら佛師で濟む事を。眞佛師とはどうした事で御座る。シテ〽不審尤もぢや。昔運慶湛慶安阿彌と云うて。佛師の流れが三通りある。うんけいも絶え。たん慶もたゆる。

今は安阿彌の流れ。身共一人ぢやに依つて。直佛師と云ふ事ぢや。アド〽謂れを聞けば尤もで御座る。佛がほしう御座る。見せて下され。シテ〽佛に限つて出來合はない。何なりとも好ましめ。作つてやらう。アド〽一在所として六地藏堂を建立致して御座る。則ち六體地藏を安置申したう御座る。シテ〽これは大願をおこされた。何の志願に依つて六地藏を安置めさるゝ。アド〽功德が深いと承つて。老若心を合せて存立つて御座る。シテ〽功德の深い子細をお知りあつたか。アド〽慥な事は存ぜねども。あらまし承及びました。先づ一體は妙非地藏とて。錫杖を持つて無間の苦を救ひ給ふ。一體は鉾を持つて修羅道の苦患を助け給ふ。又一體は珠數を持つて畜生道の苦を救ひ。又一體は無二地藏とて。寶珠を持つて餓鬼道の苦しみを救ひ。又一體は手を合せ。天道の苦患を助け。又一體は衣を持つて。人道萬事の苦を救ひ給ふとやら。か樣に承りました。シテ〽扨々奇特によう覺えさしました。むつかしい佛なれども作つてやらう。さておたけは何程にせうぞ。アド〽これは佛師殿次第で御座る。シテ〽身共次第ならば五丈ばかり。アド〽それは餘り大きう御座る。もそつとちひさう作つて下され。シテ〽ちひさうならば一寸八分。アド〽五丈ばかりと仰せらるゝに依つて。ちひさうといへば一寸八分。それにはわづかお手の內にも御座らせらるゝ。此度建立の堂は。三間四面で御座る。それ相應に作つて下され。シテ〽三間四面でおりやるか。アド〽左樣で御座る。シテ〽それならば身共が脊ころあひは何とぢや。アド〽どれ〳〵。さすが佛師殿で御座る。こなたのせころ合ひが恰度よう御座る。シテ〽それならば身共がせころあひに作つてやらう。アド〽さていつ頃出來ますする。シテ〽されば。三年三月九十日もかゝらうか。アド〽それはいかうひまが入りまする。もそつと早う作つて下され。シテ〽急ぎならばあすの今時分。アド〽これはいかな事。三年みつき九十日と仰せらるゝに依つて。もそつと急いでといへば。あすの今じぶん。それはまたどうした事で御座る。シテ〽不審尤もぢや。最前も云ふ通り。安阿彌の流れ身共一人ぢやに依つて。弟子あまた持つてゐる。みぐしはみぐし。お手はお手と。それ〳〵に云附けて。作りたてゝ持つて寄るを。身共が膠加減をとくと仕濟まいて置いて。片はしからひた〳〵と着けて廻るに依つて。あすの今時分。又身共が一細工にすれば。三年三つき九十日もかゝらうかと云ふ事ぢや。アド〽謂れを聞けば道理至極致いた。願はくばこなたの一細工がほしう御座れども。田舍者の事で御座れば。其の樣に逗留もなりますまい。どうぞ御弟子衆に仰附けられて。明日の今時分迄に作つて置いて下され。シテ〽成る程。あすの今時分作つて置かうぞ。アド〽さて代物は何程で御座る。シテ〽萬疋でおりやる。アド〽それは餘り高直に御座る。もそつとまけて下され。シテ〽佛に限つてまけはない。いやならばよしにめされ。アド〽それとても求めませう。代物は三條の大黑屋で渡しませう。シテ〽成る程大黑屋。存じた。あれで受取るであらう。アド〽して佛はどこで渡さつしやる。シテ〽あの向うに見ゆるは。因幡藥師の御堂ぢや。あのうしろ堂に作つて置かう。又身共も其の邊りに居よう程に。用があらばおしやれ。アド〽それならばあすの今時分に參りませう。シテ〽成る程あすの今時分取りにお出やれ。アド〽もかう參る。シテ〽何とおゆきあるか。アド〽なか〳〵。二人〽さらば〳〵。シテ〽田舍者をまんまとだましては御座れども。何な佛ぢやと申して賣つてやらう物もな

い。其の上生れ附いて終に楊杖を一本削つた事も御座らぬ。又身共が春ころあひと申したも思案あつての事で御座る。爰にいたづら者の同類が御座る。呼出して相談を致さう。やい〳〵。皆の者居るか〳〵。小アド三人へ何事ぢや〳〵。シテへちと相談する事がある。先づから通れ。小アドへそれは何事ぢや。シテへ別の事でもない。田舍者が六地藏を求めたいと云ふに依つて。きやつにたつさはつて。則ち身共が佛師ぢやと云うて。先づ佛は請取つて置いた。明日出來させて。因幡堂の内で渡さうと云うて極めたが。よい仕合せではないか。小アドへこれはでかいた。さてその地藏は何とする。シテへ身共が思ふは。とかくこち衆が地藏に眞似て。代物さへ取つたらば。ちり〳〵に。立退かう。ツレへこれはよからうが。六體地藏を三人ではすまぬが。何とする。ニツレへ何れ今三人あればよいが。シテへいや〳〵。仲間の者共を大勢集めては。せつかく骨折つても。金銀の配分は少なうなる。物とせう。先づ三體をがませて。殘り三體はと云うたらば。面白をかしう云うて。所を替へて拜ませう。小アドへこれはよい分別ぢや。さて御印相は何とせうと思ふ。シテへそれに就いて幸ひの事がある。最前田舍者に何故六地藏を安置するぞと問うたれば。六地藏の功德深い事を委しう咄した。それをあらまし覺えて置いた。とかく先づ珠數を持つのが一體。錫杖を持つが一體。衣を持つが一體。手を合はせて居るの。寶珠を持つの。鉢を持つの。都合六通りを二度に分けて。三體づつ拜まさうと思ふ事ぢや。小アドへ扨々六ケ敷い事をよう覺えさしました。ツレへ二度に分けて三體づゝがよからう。シテへやう〳〵時分もよい。揃へう。先づ〳〵ちへ寄らしめ。三人へ心得た。シテへ何とよい元手に取着いたではないか。（なとシカ〳〵云うてこしらへる。錫杖寶珠珠數もて面をさけ出る。但し道具シテ持ち出る。）シテへさあ〳〵何れも出よ。各へこれは變つたなりぢや。何とする。シテへ先づ汝は面をきて。之を持つてかうしてゐよ。（段々シテ教ふる。）シテへ云ふ迄はないが。必らず見附けられぬ様にして。笑ふ事はならぬぞ。各へ心得た。アドへ漸う佛師と約束の時分ぢや。參らう。則ち此の御堂の後に置くとおしやつたが。さればこそこれにある。扨も〳〵殊勝に出來させられた。拜む。何れ佛師と云ふ者は上手な事で御座る。一日一夜に此の様に作り立てると云ふ事があるものか。イヤ。これは三體ならではない。六體地藏の約束ぢやに。合點の行かぬ事ぢや。佛師も此の邊りに居るとおしやつた。様子があらう。呼出して尋ねて見う。なう〳〵佛師殿御座るか。シテへ是にゐまする。アドへさて早う出來ました。シテへ何と拜ませられたか。アドへ成る程拜みました。シテへ氣に入りましたか。アドへ三體はよう出來させられたが。殘りの三體が御座らぬが。何とで御座る。シテへされば存じの外大きい佛ぢやに依つて。處がせばうて一所に置かれぬ。窮屈に思召せば願人に罰があたる。それ故殘り三體は鐘樓堂の脇に置いた。あれへいて拜ましめ。アドへそれならば追付け參りませう。（シテさあ〳〵行け〳〵ト三人を世話してやり。道具もたす。）アドへ扨も〳〵様子を聞いて安堵した。殘り三體は何とあるぞ。（トシカ〳〵云ひ見合はせ廻る。）シテへ田舍人おりやつたか。さあ〳〵拜ましめ。アドへどれ〳〵。これは殊勝な事かな。悉く御印相も宜しい。これから本堂へ參つて。最前の三體を拜まう。シテへ又本堂か。シイ〳〵。サア〳〵。又本堂ぢや。アドへ扨も〳〵。様子を見る程佛師と云ふ者は上手な者ぢや。一日一夜に六體地藏が出來させられた。シテへおゝ田舍人拜まつしやれ。アドへいやこれは鐘樓堂の三體の方よ

りはよう出來させられた。シテへ何とぢや〳〵。アドへこれからは兩方一度に見較べう。シテへ又か。（ト云うてあせる。立衆うろたへる。）シテへ早う行け〳〵。アドへ扨〳〵〳〵、此の様な喜ばしい事はない。やあ是は最前の御印相とは變つた。シテへいや何も變りはせぬ。アドへいや〳〵違うた。も一度本堂へ行かう。シテへ幾度でも同じ事ぢや。アドへ合點の行かぬ。何やら物がちら〳〵とする様な。ツア是は佛師ぢや。シテへ佛ぢや。アドへおのれ身共をだましたなつた。只おかうと思ふか。各へゆるしてくれい。アドへあの横着者。やるまいぞ〳〵。（ト云うて追込み入るなり。シテ氣をもみあせる事。ツレうろたえる様仕様あり。考へ勤むべし。總て口傳。）

六人僧（ろくにんそう）

シテ　佛詣人
アド　同
小アド　同
女三人　その妻
（入道具）

シテへ此邊りの者で御座る。某渡世一大事と存ずるに依つて。諸國佛詣の大願を起して御座る。外に同行が二人御座るが。兼ねて今日出立の約束を致した。誘ひ合して直に旅立を致さうと存ずる。シカ〳〵。誠に此世は僅かの事で御座る。長い來世を安樂に致さうと存ずるに依つて、思ひ立つた事で御座る。參る程に是ぢや。（案内を乞ふ。常の如し。）私で御座る。アドへエイ誰殿、是はいかう早う御座つた。シテへお揃へがよう御座らば、同行致して。誰殿へ誘ひに參りませう。アドへいや、最前から是へ來て、待つて居られまする。シテへそれは一段で御座る、呼ばせられい。アドへ心得ました。なう〳〵御座るか。小アドへ是に居まする。アドへ誰殿が見えました。小アドへ早見えましたか。アドへなか〳〵。小アドへ是はお出でゞ御座るか。シテへ嘸お待遠に御座らう。小アドへ左様にも御座らぬ。シテへおつゝけ參らう。サア〳〵御座れ。二人へ心得ました。シカ〳〵。シテへさて何と思召す。只今も獨り言に申して御座るが、現世は暫しの事で御座る。未來往生極樂の爲に。斯様に諸國を巡ると申すは。有難い事では御座らぬか。アドへなか〳〵。三人の者共は。一蓮托生疑ひない事で御座る。小アドへいづれ三人共に。ひとへに佛意に相叶うたと申すもので御座る。シテへ此上は。かりそめに怒る心などは持たぬがよう御座る。アドへ兎角それは凡夫で御座る。斯う參る道すがら、心安だてにざれ事などを申すまいものでも御座らぬ、互ひに心にかけぬがよう御座る。小アドへとかく何事も堪忍をして、腹を立てぬがよう御座る。シテへいか様、是は尤もで御座る。さり乍ら。誰殿の言はせらるゝ通り。凡夫の事で御座れば、何程たしなうだりとも。ざれ事を言ふまいものでも御座らぬ。たとへどの様な事を言ふとも。腹を立てまいと云ふ誓ひを立てませうか。アドへ是は一段とよう御座らう。某も誓ひを立てませう。小アドへ成程。誓ひませう。シテへそれならば、若し腹を立てたらば、忽ち口が閉ぢついて啞になる法もあれ。腹は立てますまい。アドへ某は若し腹を立てたれば、目が潰れて盲目になる法もあれ。腹は立てますまい。小アドへ身共は腹を立てたれば。腰が拔けて一生立居のならぬ法もあれ。腹は立てますまい。シテへ扨々有難い事で御座る。サア〳〵御座れ〳〵。二人へ心得ました。シテへ兎にかくに三人の者共は。彌陀弘誓の舟に打乘つて。苦の海を離れ。彼岸（かのきし）に至らん事は今の間で御座る。アドへ仰せの如く。唯頼もしいは佛の本願で御座る。小アドへ結構な身

の上になりました。シテ〽さて今朝から餘程の道で御座ろ。この辻堂で少し休みませうか。アド〽よう御座らう。休ませられい。小アド〽いざ休みませう。シテ〽朝早う出た故か。殊の外眠たうなりました。ちと横になりませうか。アド〽いづれ日限を定めて。いつの何日に行かねばならぬと云ふ旅では無し。身共も横になりませう。小アド〽是はよう御座らう。シテ〽扨も〳〵樂やの〳〵。心がゆるりとなりました。アド〽胸に一物御座らぬに依つて。横になりましたれば。眠たう御座らぬ。小アド〽けつく目が覺めました。アド〽誰殿は物を言はれぬが。寢入られたか。誰殿〳〵。小アド〽いか樣是はよう寢入られたさうな。誰殿〳〵。其樣にゆるりとしてはならぬ。起させられい〳〵。アド〽起しませう。誰殿〳〵。小アド〽目が覺めませぬか。アド〽暫しの中にきつう寢入り込うだものぢや。誰殿〳〵。いかな〳〵。搖つても抱へても目が明きませぬ。小アド〽紙縒りをして鼻の穴に入れて。くさめをさせて目を覺させませう。アド〽いや。待たせられい。物とせう。鬢の髮、剃落して坊主にせう。小アド〽これは興がつた事をおしやる。其の樣な事をしたらば。目を覺してよいとは言ふまい。アド〽いや。その爲に最前腹を立てまいと云ふ誓ひを立てゝ置いた。物のためしに少々剃つて見よう。小アド〽いや。身共は餘り同心にないぞや。アド〽サア〳〵手傳うてたもれ。小アド〽是はこはざれ事ぢやぞや。アド〽氣の弱い事を言はずとも手傳はしめ。小アド〽あまりむごい事ぢや。アド〽先づ片鬢は剃つた。どうぞ寢返りをさせれば。下の方が剃られぬ。小アド〽いや。耳の穴へ水を入れたらば。寢返りをするであらう。いざ水を入れてみさしませ。アド〽是は面白い事をおしやる。まづ水を取つて來て入れう。ト云うて。仕方あり。アド〽是は一段の首尾ぢや。とくと頭巾を着せる。サアサア。こちらの方も剃りませう。アド〽まんまと剃つた。此上は彼奴が目のあくまで寢て居よう。小アド〽よう御座らう。シテ〽扨も〳〵よう寢た事かな。兩人の衆もよう寢て居らるゝ。晩の泊りまでは餘程の道ぢや。起して道を急がう。なう〳〵二人の衆、起きさしめ。これ〳〵。よう寢る衆ぢや。アド〽扨も〳〵よう寢た事かな。たつた一寢入りにした。小アド〽身共も今まで寢て居ました。アド〽わア。そなた何時の間に法體した。シテ〽それは何の事ぢや。小アド〽是は如何な事。先づ頭へ手を上げておみやれ。シテ〽わア。是は何時の間に誰がした。アド〽誰がした。小アド〽誰がした。シテ〽いや。そなた衆の顏付きが合點がゆかぬ。扨はそなた衆がおしやつたの。アド〽是は迷惑ぢや。身共は曾て知らぬ。小アド〽某もたつた一寢入りにして。夢にも知らぬ。シテ〽そなた衆が知らいで誰が知るものぢや。此樣な胴慾な事をすると云ふ事があるものか。アド〽よし身共等がしたにもせよ。何事も腹を立てまいと云ふ誓ひをお立ちやつたらば。堪忍を召され。シテ〽如何に誓ひを立てたと云うて。事にも寄つたものぢや。何と是が堪忍がなる物ぢや。最早生きても死んでもぢや。了簡致さぬ。アド〽腹を立てまいと云ふ誓ひを立てたをお忘れやつたか。小アド〽恐ろしい誓ひをお忘れやつたか。シテ〽誠に。是には困つた。成程腹を立てまいと云ふ誓ひをしたによつて腹は立てまい。さり乍ら。此樣な姿では何とやらきやく心な。身共はひと先づ故郷へ戻らう。そなた衆は勝手に佛詣して來さしめ。アド〽氣の毒にはあれど。後生の道に遠慮はない。身共等は行く程に。隨分息災で居さしめ。殘り多いがこれで別るゝぞ。三人〽かう行くぞ。

へさらば〳〵。アドへサア〳〵御座れ。高野山へはもそつとぢや。道を急がしめ。小アドへ心得ました。（ト云うて中入する。）シテへ何程誓ひを立てたと云うて。此様な胴慾な事があるものか。是ばかりは堪忍ならぬ。在所へ戻つて致し様が御座る。シヤ〳〵。誠に胴慾な事をしをつた。さり乍ら、今に思ひ知らせてやらうぞ。首尾ようしおほせたいものぢやが。何かと云ふ内に在所ぢや。則ち誰が留守へ案内を乞はう。（如常。女出る。）女へ表に聞馴れた聲で案内がある。案内とは誰そ。シテへ身共でおりやる。女へ是は如何な事。そなたは何として様を變へて戻られた。シテへ存じもよらぬ事で戻つた。さて誰の内儀に急に會ひたい事がある。呼びにやつて下され。女へ幸ひ姿を見舞ひに此方へ參つて居られまする。シテへそれならば。これへお出やる様に言うて下され。女へ心得ました。なう〳〵誰殿のかみ様。是へ出させられい。二女へ何事で御座る。女へ變つた人が見えました。先づ出させられい。二女へわア。そなたは何として様を變へて戻らせられた。シテへ今更そなたに會うて仔細を言ふも面目ないが。言はねばすまず。言はう程に。必ず心をはつたりとして聞いてたもれ。女へどうやら心許ない様子ぢや。先づ様子を

仰せられい。シテへ先づ此度三人言合せ修行の旅に赴く所に、高野の道に紀の川と云ふ大川がある。三人手と手を取合うて渡つた。身共は俄に胸騒ぎがして、渡り兼ねて後へ戻つた内に、俄に瀬が増つて水が高うなり、二人の衆は渡りかねたが。水は速し石は滑る。足が立たいで一間ばかりは泳いでみたが。なんなく轉〳〵て瓜などを流す様に。ころり〳〵と浮きぬ沈みぬ終に姿が見えぬ様になつた。某も同行に別れ。生きては居られぬ。共に川へ飛込まうとしたれども。いや〳〵こゝは大事の思案所ぢや、この様子をそなた衆に。せめて身共ならで知らす者もない。某ともに相果てたらば。わごりよ達の一生迷ひにもならうと思うて。面目もない命を長へて。此在所へ戻つた事でおりやる。女へ是は興のさめた事を聞きました。旅立の時が生別れになりました。（ト泣く。）二女へ扨も〳〵。これはいとしい事を聞きました。旅立の暇乞が一生の別になりました。シテへ尤もぢや〳〵。お泣きやれ〳〵。（仕方あるべし。）女へ最早身も世もあられぬ事ぢや。この興の淵へ身を投げて死なれた人に追付きませう。二女へ姿も長へる心は御座らぬ。そなたと共に手を引合うて死にませう。一女へいざ御座れ。二女へ心得ました。シテ

へ先づお待ちやれ。扨も／＼そなた衆はうろたへた事を言ふ。そなた衆が今死んで。二人の後は誰あつて弔ふ者がありますまい。此上は二人とも尼になつて。夫の菩提を弔はうとは思はしませぬか。女へ是はそなたの言はせらるゝ通り。こち衆が身を投げたと云うて。あの衆が歸る事も御座るまい。妾は尼になりませう。二女へ妾も一緒に尼になりませう。シテへオヽよい合點ぢや。某は佛の形になつて居る者ぢや。某が兩人の髮を下してやらう。これへ寄らしめ。大鼓座にて花の帽子着る。奇特に思ひ立たれて。殊勝にこそあれ。兩人の鬢の髮を。これより高野山へ納めて進ぜう。やがて歸る迄息災で居さしませ。女へ御苦勞で御座る。シテへ心得ました。女へ頓て戻らせられい。二女へ心得ました。サア／＼御座れ／＼。中入する。シテへざつとすんだ。これではまだ腹がいぬ。まだ致し樣がある。二人の後を慕うて參らう。シカ／＼。大方高野山に逗留して。やう／＼麓へ下る時分ぢや。何卒逢ひたいものぢやが。アドへサア／＼御座れ／＼。噂に聞いたよりは。高野山は結構な所で御座る。小アドへ誠に有難い御山で御座る。シテへヱイこゝな。よい所で逢うた。アドへそなたはどれへ行くぞ。シテへそなた衆に別れて在所へ戻つたれば。與かつた事があつた程に。迎ひがてら日數をかぞへて登山した。おつつけ語つて聞かせう。アドへ心許ない事ぢや。早う語らしめ。シテへ先づ此度そなた衆の身共が佛詣すると云ふは嘘で。三人共に心よしを拵へておいて。それを連れて上方へ參り。晝夜遊山して。三人の女房はおきざりに出合うたと。誰言ふともなく讒言をした者がある。第一某が妻は。腹を立てゝ夜を日について上方へ尋ねにと行つたげな。又わごりよ達のお内儀は。兎角此世では思ふ儘にならぬ。自害をして。蛇身となつて取殺さうと云うて。狂ひ死に。兩人差しちがへてお死にやつた。アドへ此處な者が。身共等に坊主にせられた意趣返しに。その樣な事を言うても。騙さるゝ事ではないなあ。小アドへオヽその樣な事を言うても。驚く事ではないぞ。シテへ疑ふは尤もぢや。先づ斯うあらうと思うて。その證據のため。兩人の鬢の髮を取つて來た。是を見て疑ひを晴らさしめ。アドへどれ／＼。誠にこの赤い所のまじつたは。身共が女共の髮ぢや。小アドへいか樣。この縮んだ所は某が女共の髮ぢや。是は不憫な事ぢや。泣く。アドへさぞ某を恨んで居よう。果敢ない浮世とは云ひ乍ら。正眞の夢の世と云ふは此事ぢや。ト泣く。シテへ悔むは斷りなれども。よう思案を召され。某が女共は此世に居る事ぢやに依つて。尋ね出し。此姿を見せて委細を話して聞かせば。ざつとすむが。そなた衆の内儀は死んだに依つて。蛇身となつて仇をなせいでは置くまい。其樣に迷ふ所が不憫な。兩人共出家して。二人の女の後を弔うてやらしめ。アドへ何れこれは後世の道に入らうと思うて出た事ぢや。則ち是を菩提の種として佛道に入らう。小アドへ身共とてもその通りぢや。共に出家致さう。シテへそれならば。いよ／＼三人同行にならう。二人へ心得た。此間またシカ／＼色々云ふ。シテへサア／＼お出やれ。兩人共によう似合うた。アドへ扨この髮は夫婦ともに高野山へ納めうと思ふが何とあらう。小アドへ是は一段とよからう。シテへ先づお待ちやれ。身共が思ふは。先づ在所へ戻つて。めい／＼のお頼みやる寺へ行て内儀の墓所へ一所に葬つたらばよからう。アドへこれは尤もぢや。その通りに致さう。小アドへいか樣。それがよからう。シテへサア

〳〵おりやれ。二人へ心得た。シテへ誠に。兩人の衆は。妻に別れて力落しなれども。これは偏に佛の御催促ぢやと思はしめ。アドへ何れなんとしても煩惱は止み難い。愚智の凡夫ぢやに依つて。斯樣の事であらう。小アドへさうさへ思へば。いよ〳〵御本願が有難うおりやる。女へ今日もまた寺へ參つて。法事を致しませう。二女へ一段とよう御座らう。女へサア〳〵御座れ〳〵。二女へ心得ました。シテへイヤ兩人の衆。どれへお行きやる。アドへヤア。そなた衆は生きて居るか。女二人へそなた衆は生きて居させらるゝか。アドへこゝな奴は。よう騙したなあ。小アドへ是は大抵の事ではない。何とせうぞ。女へ憎うはあれども。そなた衆の顏を見て。悅びまする。アドへ四人の者に肝を潰させをつた。おのれ唯置かうと思ひをるか。シテへやつと參つたの。笑ふ。こりや〳〵。腹を立てまいと云ふ恐ろしい誓ひを立てたではないか。アドへそれは事によつたものぢや。シテへ罰が恐ろしうなくば存分にせい。アドへこれ〳〵。そなた衆。誰が所へ行て。女房を連れて來い。小アドへ何とさつしやる。アドへ腹いせに彼奴を尼にする。シテへ身共は誓ひを立てたに依つて。どの樣な事をしても腹は立てぬ。アドへ早う行け〳〵。女二人へ心得ました。三尼へなう〳〵。まづ待たせられい〳〵。皆へ是はどうぢや。三尼へ最前から樣子を聞きました。妾はとても後生の道に入らうと思うて。此姿になりました。堪忍をさせられい。シテへ先づこゝを放しませ。是はひとへに佛の御方便ぢや。此上は三人の尼は勝手に修行召され。こち衆三人はいよ〳〵同行になつて。是より直ちに西國四國阪東八ヶ國を巡つて。靈場を拜まうと思ふが何とあらう。アド二人へこれは一段とよからう。シテへはやこれ迄ぞ。お暇申す。女三人へあら名殘多しや。シテへこなたも名殘惜しけれど。あの日を御覽ぜ。五人へ山の端にかゝつた。シテへ西方に落日くれなゐ。六人へ我等を助けたび給へと。唯一念に南無阿彌陀佛。唯一念に南無阿彌陀佛。念佛申して別れけり。

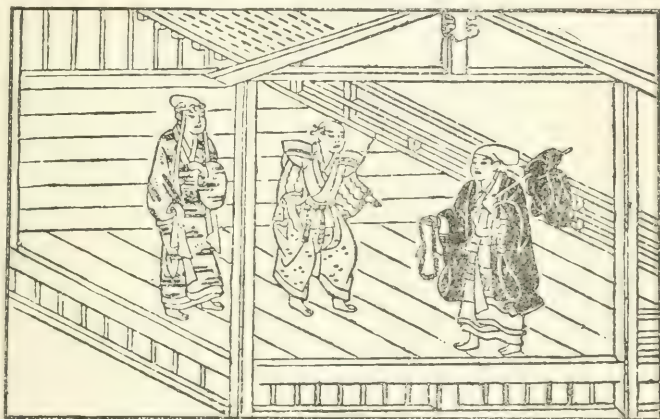
呂蓮

シテ　僧
アド　茶屋
小アド　妻

（入道具）

シテへ諸國修行一所不住の坊主で御座る。是より東國を巡らうと存ずる。シカ〳〵。誠に出家程心安い者は御座らぬ。衣一重。珠數一連あれば。どれからどれへ參らうと儘で御座る。是迄參つたれば日が暮れさうになつた。宿を借らうと存ずる。幸ひ是に家がある。まづ案内を乞はう。物申。旅の坊主で御座る。一夜の宿を借して下されい。アドへ此所の大法で。往來の獨り旅人に宿を借す事はなりませねども。御出家の事で御座る。斯うお通りなされませ。シテへそれは忝う御座る。それならば通りませう。アドへそれにゆるりと御座れ。シテへこれへはお構ひなされな。アドへやい〳〵。旅の御出家を一人お宿申した。一飯を拵へい。嘸お草臥れなされたで御座らう。シテへいや。さやうにも御座らぬ。アドへさて是はどれからどれへお通りで御座る。シテへ諸國修行の坊主で御座る。此中迄西國を巡つて御座る。又これより東國を巡る事で御座る。アドへそれは毎日〳〵御苦勞な事で御座る。シテへいやも毎日の事で御座るによつて。さのみ苦勞なとも思ひませぬ。アドへ御出家の境涯は定めて

心安い事で御座りませう。シテへオヽ出家の境涯程心安いものは御座らぬ。まづ第一妻子がない。妻子がなければ家もなし。家がなければ故郷もなし。唯三界を住家として諸國を修行する事で御座る。アドへ扨々それは結構なことで御座る。序ながらお尋ね申しまする。あの後生と申す事は。あるとも無いとも申す。あるが定で御座るか。無いが誠で御座るか。シテへ如何に俗ぢやと申して。餘りな事をおしやる。後生がなうてなりませうか。まづ人間の身の儚い事は。朝開暮落と云うて朝顔の花にも譬へられた。朝顔といふものは。朝には色麗しう咲けども。夕には萎みまする。人間もまつその如く。今日あつて明日ない命。それは／＼儚いものぢやによつて。随分後生を大事にかけたがよう御座る。アドへすれば地獄極樂と申すも。あるが誠で御座るか。シテへまだそのつれな事をおしやる。地獄極樂が無うて何となりませう。まづ地獄の眞相をあら／＼申さば。無間えうちん劍の山血の池。嘘を云うた者は舌を抜かれ。臼ではたかれ箕でひられ。暫時も安からぬ事ぢや。又極樂の有難さは生死がない。生死とは。生れ死するが無いぢやまで。廿五の菩薩の音樂を聞き。百味の飲食は滿ち／＼て。暑いといふ事もなく。寒いといふ事もなし。それは／＼有難い所ぢや。その有難い所へ行きたさに。此様に出家になつて諸國を修行することで御座る。アドへ扨々有難い思召しを承りました。唯今迄は左様の事とも存ぜず。唯うか／＼と暮して御座る。今の思召しを承つて。私も發起致して御座る。この上はどうぞ頭をお剃りなされ。お弟子になされ。諸國を連れてお巡りなされて下され。シテへ何ぢや。坊主にならう。アドへ中々。シテへやれ／＼奇特な志でこそあれさり乍ら。出家になつて願ふ後生も。又俗で願ふ後生も違ふ事はない。矢張り其儘願はつしやれ。アドへ此儘願ひましては。渡世の事に心がひかれて後生が願はれませぬ。どうぞお剃りなされて下されい。シテへそれならば剃つて進ぜうが。見ればお内儀もあるさうな。又一門中ともとくと相談を召され。其上で剃つて進ぜう。アドへいや女共とも一門中共とも。はや相談は濟んで御座る。シテへはや相談は濟んで御座るか。アドへさやうで御座る。シテへそれならば剃つて進ぜうが。又ひよつとお内儀の心が變るまいものでもない。こりやも一度相談を召されい。アドへさりとてはお氣遣ひなされまするな。此中も此中で女共が申しまするは。こなたは坊主になると云うて何時坊主になるのぢや。はやう坊主になれ。と申してせがみまする。どうぞお剃りなされて下され。シテへそれ程に極つた事ならば。剃つて進ぜう。幸ひ是に剃刀も持合せて居る。愚僧は是で剃刀をあはさう。そなた頭を揉まつしやれ。アドへ畏まつて御座る。此間口傳。シテへ扨々奇特な事ぢや。イヤ又ありやうは。俗で願ふ後生と。出家になつて願ふ後生は格別で御座る。アドへさうで御座らうとも。シテへ頭は揉めましたか。アドへ大分揉めました。シテへ剃刀もあひました。さて慙愧といふ事を授くる。合掌させられい。アドへ斯うで御座りまするか。シテへオヽさうぢや／＼。南無歸依佛。アドうける。シテへ南無歸依法。アドうける。シテへ南無歸依僧。アドうける。シテへ扨々剃りよい頭で御座る。アドへお手の輕い事で御座る。シテへさあ剃れました。ト云うて。前へ廻り。頭巾着せる。口傳。幸ひ爰に愚僧がかけ替への衣が御座る。是を此方へ譲りませう。アドへそれは忝う御座る。シテへ迚もの事に着せて進ぜう。衣を着さつしやれたらば。今々の出家の様には御座らぬ。アドへ何

とよう似合ひましたか。シテへ中々。よう似合ひました。アドへ忝う御座る。迚もの事に名をおつけなされて下され。シテへ何ぢや。名をつけて呉れい。アドへハア。シテへそれは又外の出家をなりとも頼まつしやれ。アドへお弟子になりまするからは。どうぞお前おつけなされて下されませ。シテへ今迄の名は何と云うた。アドへ只今迄の名は。柿木のしふ四郎左衛門と申しまする。シテへ四郎左衛門はよい名ぢや。矢張り其名にしておかしめ。アドへ出家の名に四郎左衛門は如何で御座る。どうぞおつけなされて下され。シテへ暫くそれにお待ちやれ。アドへ心得ました。シテへ是はいかな事。愚僧は終に人の名をつけた事がない。何としたものであらうぞ。倅の時分に習うたいろは字の手本がある、此中でつけて見ようと存ずる。是非とも愚僧に名がつけてほしいぢやまで。アドへどうぞおつけなされて下され。シテへ何も望みは御座らぬか。アドへ別に望みは御座らぬが。代々蓮と申す字をつけまする。シテへ蜂の巣か。アドへいやはちすと申す蓮の字で御座る。シテへ蓮の字はよい字ぢや。蓮の時は。（仕方口傳）ものとつけう。い蓮坊。アドへ是は餘りよろしう御座らぬ。シテへ氣に入りませぬか。アドへハア。

シテへそれならば。蓮坊。アドへ是もよう御座らぬ。シテへよい名がある。ほ蓮坊。アドへ出家の名にほ蓮坊と申すは。唱へが悪う御座る。其上どうやら短う御座る。もそつと長い名をおつけなされて下され。シテへ長い名が望みか。アドへさやうで御座る。シテへ長い名の時はよい名がある。アドへよい名が御座りまするか。シテへちりぬれん坊。アドへちりぬれん坊。是はあまり長う御座る。もそつと短い名をおつけなされて下され。シテへはて。長ければ長いとおしやる。短ければ短いとおしやる。よたれん坊。アドへ是も氣に入りませぬ。シテへあゝ氣の毒な。い蓮坊は氣に入らず。呂蓮坊も氣に入るまい。アドへ申し。その呂蓮坊はよい名で御座る。シテへ是が氣に入つたか。アドへ成程氣に入りました。シテへやれ〳〵嬉しや。やう〳〵とつけました。アドへ忝う御座る。此後は呂蓮〳〵と仰せられて。諸國をつれてお巡りなされて下され。シテへ成程。呂蓮〳〵と云うて諸國をつれて巡りませうぞ。小アドへやう〳〵お飯が出來て御座る。これの人はどれに御座る。こちの人はどこに御座るぞ。アドへやい〳〵女共。爰に居るわいやい。小アドへヤア此方は坊主になつたか。アドへ後生程大事のものは

ないと思うて坊主になつたが。何とよう似合うたか。小アドへエヽ腹立ちや。何のよう似合うたといふ事があるものか。妾(わらは)へも知らせずに何故(なぜ)坊主になり居つた〳〵。アドへ扨々そちは女ぢやによつて合點が惡い。身共が出家すれば其方迄もうかむ事ぢや。小アドへ何のうかむといふ事があるものか。元の樣に毛を生やし居れ。アドへありやうは。身共はあまり剃りたうもなかつたれども。坊主になれば何やらよい事があるとおしやつたによつて剃つて貰うた。いふ事があらばあれへ行(い)ておしやれ。小アドへ扨はあいつが勸めて剃り居つたか。アドへ中々。小アドへさうで御座らう。やい。愛な坊主。ようこちの人をあの樣にしをつたなあ。元の樣に毛を生やして返せ〳〵。シテへまづお待ちやれ。小アドへ何と。待てとは。シテへまツからあらうと思うて。お内儀とも一門中とも相談召され。其上で剃つてやらうと云うたれば。はや相談は濟んであるとおしやつたによつて剃つてやつた。云ふ事があらば。あれへいておしやれ。小アドへ扨はあいつがなりたうてなつたか。シテへおゝさて。なりたうてなつたのぢや。小アドへヽヽ。さうで御座らうとも。どうでもおのれがなりたうてなつたげな。元の樣に毛を生やせ〳〵なれいやい。アドへさりとては身共は剃りたうはなかつたれども。つかまへて居て剃ればせう事がない。シテへやい。そこなやつ。そちは今の間に心が變つたか。淺ましいやつぢや。アドへ兎角身共は知らぬ。云ふ事があらばあれへいて云へ。小アドへどうでもおのれが剃り居つたげな。元の樣に毛を生やせ。シテへ何をしをるぞいやい。アドへやいやい。やいそこなやつ。シテへ何ぢや。アドへ身共が女共に手をかけて何とする。シテへ手はかけねども。しがみつくによつて。のけといふ事ぢや。アドへ女ども。小股をとれ。小アドへ心得ました。アドへおぬしの樣な人は斯うして置いたがよい。小アドへなういとしい人。ちやつと御座れ。アドへ心得た〳〵。シテへ扨も〳〵胴慾な目にあはせをつた。この樣な事を思うては。一期人の頭(あたま)を剃らうものではない。南無三寶。しないたり。ト云うて留めて入るなり。

【わ】

若菜(わかな)

シテ　かい阿彌
アト　大名
小アド　立衆頭(女)
同　立衆(女)
(入道具)

アドへ大果報の者で御座る。いつもとは申しながら。當年の樣なのどかな春は御座らぬ。今日は童坊のかい阿彌を召連れ。野邊へ小鳥を狙ひに出でうと存ずる。ト云うて。呼出す。常の如し。アドへ今日は野遊びに出でうと思ふが。どこへ行かうな。シテへ八瀬大原(をはら)の邊りへお出でなされたらばよう御座りませう。アドへそれならば汝一人供をせい。又下部の者共は。竹筒(ささえ)を持つて。後から見え隱れに供をせいと言へ。シテへ畏まつて御座る。やい〳〵。今日は賴うだお方が野遊びに出でうと仰せらるゝ。下部の衆は竹筒の用意をして。見え隱れにお供さしませ。申附けて御座る。アドへ小鳥を狙ふ刺竿を持て。シテへ畏まつて御座る。大鼓座より持つて出る。アドへさあ〳〵來い。シカ〳〵。誠に。童坊も多い中に。汝は譜代の者ぢやに依つて。いつも心安う供を言附くる。隨分奉公を大事に掛けい。髮を生やして歷々の侍に取立てうぞ。シテへ結構な御意を受けまして。有難う

存じまする。アド〽何かと言ふうちに野へ出た。シテ〽さ様で御座る。アド〽誠に明けて間もなけれども。春の景色のどかな事ぢやなあ。シテ〽いづれ山々の雪も大方消えました。やがて青々となるで御座らう。アド〽こりや〳〵。此の梅は早や咲いた。シテ〽誠に。早く咲きました。アド〽心静かに眺めう。床几おくれい。シテ〽畏まつて御座る。お床几。アド〽扨も〳〵見事ぢやなあ。シテ〽梅の匂ひ。とかう申された事では御座らぬ。やあ花に目が有る。アド〽目とは何の事ぢや。シテ〽目かと存じましたれば。鶯で御座る。物を仰せられな。私刺いてお目に掛けませう。アド〽そちは得刺すまい。鳥を刺す拵。心持有り。シテ〽扨も早い鳥かな。もう一足の事で逃がいた。やあ何やら女が謡うて参りまする。アド〽どれ〳〵。シテ〽あれを御覧なされませ。アド〽扨々面白い事ぢや。先づ是へ寄つて居よ。シテ〽畏まつて御座る。下に居る。囃にて打上。女立衆〽春毎に。同〽春毎に。君を祝ひて若菜摘む。我が衣手に降る雪を。拂はじ拂はで。其のまゝに受くる袖の雪。運び重ね雪山を千代に降れと作らん。雪山を千代と作らん。渡り拍子。一返り打上。立頭〽菜を摘まば。同〽菜を摘まば。澤に根芹や峯に虎杖鹿のたちかくし。尾花の霜夜は寒からで。名残り顔なる秋の夜の。虫の音もいと寂し歩ばし寝まし給ふな。ト云ふうち。立つ二三居ながら。シテげ。見廻す。さこなふ。シテ〽まうし〳〵。女が大勢参つて小歌節で若菜を摘みまする。アド〽誠に、これは面白い事ぢや。シテ〽大勢打揃うて手毎に花を持つて居ります。あの者共を此所へ、呼寄せて、相手にして酒盛を致したらば。面白う御座りませう。アド〽それならばいて呼うで来い。シテ〽畏まつて御座る。ト云ふ一二言立衆に行き心持あるべし。シテ〽なう〳〵。和御寮たちは此の邊りへ何しに出て何を召さるゝ。これよりあしらひ有。立頭〽旅人の。同〽道妨げに摘む物は。生田の小原の若菜なり。シテ〽何を御聞い給ふ。シテ〽扨々やさしや。若菜を摘みに出られた。又慰いておりやるは何ぞ。女〽木がらし、大原木召され候へ。大原静原芹生の里。朧の清水に影は八瀬の里人知られぬ梅の匂ふや〳〵、此の里の春風に。花ぞさき散る花までも雪はこぼれて春寒し大原木召されよ大原木召され候へ。シテ〽成る程大原木も申し請けうず。頼うだお方が野遊びに御出でなされて。此の邊りに御座る。近頃わりない事なれども。お相手に参つて酒一つ飲うでおくりやれ。立頭〽皆の衆お聞きやつたか。立衆〽恥かしや〳〵。こち衆はいやで御座る。立頭〽殿たちの側は恥かしう御座る。宥して下され。シテ〽袖の振合はせも他生の縁と言ふ。此の人遠い野邊でそなた衆にお目に掛かつたは、此の世ならぬ縁であらう。平に来ておくりやれ。立衆〽いや〳〵恥かしう御座る。いざ歸らう。ト云ふ一留ト行く。シテ留になる。口傳。シテ〽それは聞かない。ト云ふ一留ある。シカ〳〵取着く。無理に座敷へ押入れる。さあ〳〵。かう通らしませ。やう〳〵と連れて参りました。アド〽扨々和御寮たちはようこそおりやつたれ。かい阿彌急いで酒を勧め。シテ〽畏まつて御座る。ト云ふ一二言若菜へ酌する。女〽妾お酌に立つて。殿様へ上げませう。アド〽扨はれたが面白かつた。一節謡はしませ。立衆之内〽それならば謡ひませう。小歌幾度も摘め生田の若菜君は千代を摘むべし。アド〽よいや〳〵。かい阿彌も舞へ〳〵。シテ小舞舞ふ。代り〳〵酌に立つ。小舞有り。立衆とかく舞ふ。アド〽かい阿彌もう一番舞へ。舞有り。其後に。立衆〽有明の月をば何と待たうよ〳〵。シテ〽まうし〳〵、唯今の謡は。聞所が御座る。酒興の餘り座敷が長うてとひと言ふ事さうに御座る。最早お暇な遣されませ。アド〽ともかくも計らへ。シテ〽畏まつて御座る。イロいつまでとても有明

のノ〳〵。つれなく人に思はれん人さらば暇申さん。立衆へあら名殘り多しや。シテへこなたも名殘り惜しけれどもさしけたばり候。立衆へ今のお樽の情をばいつの世にかわすれん。シテへなう〳〵さても和御寮たちに離れがたや堪へがたや。立衆へ行くも行かれず。シャへ戻られず。立衆へゆらりさらりと波の上の酒盛はうこ草を肴にて。いざや酒を飲まうよ。ほうこの幼な心を猶しも我等忘られてかいともどち惜しき友どち。シャギリにて留むる。アドより立つて入るなり。

若和布（わかめ）

シテ　新發意
アド　住持
小アド　若和布賣
同　女

（入道具）

アドへ丹波の國能勢の都當寺の住持で御座る。此の寺ひさ〳〵大破に及んで御座るを。檀那衆の助力を以て思ふまゝに建立致した。それについて、肝煎られた衆中を申入れ振舞はうと存ずる。先づ新發意を呼出し、申聞くる事がある。常の如し。そちが知る通り年月の大望であつたに、思ふ儘に建立した、何とめでたい事ではないか。シテへ御意なさるゝ通り。本堂は申すに及ばず庫裏方丈まで、結構に御建立なされて。此の樣な喜ばしい事は御座らぬ。アドへさて近日檀那衆をざつと振舞はうと思ふが。此の山から出る物とては馳走にならぬ。酒の肴に海から出る物を使ひたいが。何がよからう。シテへ海から出る肴に。寺で使ふ樣な物は何も御座るまい。アドへそちは魚類ばかり海から出ると思ふか。一切の苔類は皆海から出る物ぢや。それについて。酒の肴によい若和布を求めて來い。シテへ畏まつて御座るが、私は若和布と云ふ物は存じませぬ。アドへ知らいでも大事ない。都に澤山ある物ぢや。さりながら。それも伊勢若和布でなければならぬ。古ければ色がわるい。新しい色のよい鹽のほろりとこぼれたを求めて來い。シテへ畏まつて御座る。アドへ頓て戻れ。常の如くつめる。シテへ火急な事を仰付けられた。先づ急いで都へ上らう。シカ〳〵。誠に。某はいまだ都を見物致さぬ、此度を幸ひに是處彼處見物致さうと存ずる。わあ〳〵。都近くと見えていかう賑やかになつた。さればこそ都ぢや。田舍の家作りとは違うて。軒とを仲よささうにひつしりと建て竝べた。いや身共ははつたと失念した事がある、若和布と云ふ物はどこ許に有るやら。又どの樣な物やらも存ぜぬ。とくと問うて來ればよかつたものを。遙々の所を問ひにも戻られず。何としたものであらうぞ。やあ〳〵。笑ふ。さすが都ぢや。賣買ふ物も呼ばはれば事が調ふと見えた。さらば身共も此の邊りから呼ばはつて參らう。しい〳〵。そこもとに若和布は御座らぬか。何ぢやない。わかめ買はう。若和布買ひす。小アドへ洛中に心の直ぐにない者で御座る。あれに田舍者と見えて。何やらわつぱと申す。ちときやつにたづさはつて見うと存ずる。なう〳〵。これ〳〵。シテへ身共が事で御座るか。小アドへ成る程そなたの事ぢや。此の廣い街道を。何をわつぱとおしやる。シテへ田舍者で御座ればわつぱの法度も存ぜいで申した。眞びら御免あれ。小アドへいや〳〵。わつぱが法度を咎むるではない。何をおしやるぞ。事によつたらば叶へておませうと云ふ事ぢや。シテへそれは忝う御座る。何を隱しませう。私は若和布がほしさに呼ばはつて歩きまする。小アドへして其の若和布を知つておいやるか。シテへこれはまた都人

とも覺えぬ事を仰せらるゝ。存じて居れば此の樣に尋ぬるには及びませぬ。知らぬに依つて呼ばはつて歩く事で御座る。小アド〽これは身共が誤つた。すればそなたは仕合はせ者ぢや。シテ〽仕合はせと申してから見えた通りの者で御座る。小アド〽いや〳〵。其の樣に襤褸についての仕合はせではない。身共にお逢やつたが仕合はせと云ふ事ぢや。シテ〽それはまた何うした事で御座る。小アド〽洛中に人多しといへども。そなたの尋ぬる若和布屋の亭主は身共でおりやる シテ〽やあ〳〵。こなたが若和布屋の御亭主で御座るか。小アド〽なか〳〵。シテ〽すれば私は仕合はせ者で御座る。若和布がほしう御座る。見せて下され。小アド〽成る程見せう程に。暫くそれにお待ちやれ。シテ〽心得ました。小アド〽田舎者をまんまとだましては御座れども。何を若和布ぢやと申して賣つてやらう物がない。爰にいたづらな女を買取つて御座る。之を若和布ぢやと云うて。賣つてやらうと存ずる。なう〳〵居さしますか。女〽妾を呼ばせらるゝは何の御用で御座る。小アド〽別の事でもない。お知りやる通り。某も段々不仕合はせなに依つて。そなたを若和布ぢやと云うて。さる田舎者をだまして賣つてやるほどに。何事も某が爲ぢやと思うて。いておくりやれ。女〽田舎へ行く事はいやで御座れども。お前の爲になる事ならば參りませう。小アド〽それは近頃滿足したさりながら。末では一句そなたの爲になる事もあらう。さもなくばよい時分に迎ひに行きませうぞ。女〽それは忝う御座る。必らず迎ひに來て下されい。小アド〽先づかうお通りやれ。最前の人居さしますか。シテ〽これに居まする。小アド〽さあさあ。若和布を見さしめ。シテ〽どれ〳〵。見せて下され。小アド〽いやこれが若和布でおりやる。シテ〽これは存じも寄りませぬ。師匠のおしやるは。振舞の時酒の肴にすると云はれましたが。此の人が肴になりまするか。小アド〽いや昔から名付でなければ若和布は使はせられぬ。口へ食ふばかりが肴ではない。此のわかめに酌を取らすれば。御酒も一入すゝむに依つて。直ぐにそれが肴になる事でおりやる シテ〽それでも伊勢若和布でなければ。役に立たぬと云はれました。小アド〽いよ〳〵そなたのお師匠は物知りで萬事御功者なお方と見えた。惣じて京男に伊勢女と云うて。伊勢は女の名物でおりやる。此の女は伊勢生まれで。正直の伊勢若和布と云ふは此の事でおりやる。シテ〽扨はおぬしは伊勢生まれの人か。女〽なか〳〵。伊勢生まれで御座る。シテ〽これは合ひました。さりながら。古うなれば色が惡うて鹽がない。新しい鹽のぼろりとこぼれた樣な。色のよい若和布を買うて來いと云はれました。小アド〽それも好みに合はせてやらう。先づ古いと云ふは年寄の事。年がよれば顔の色も惡うなつて。鹽もなうなるものぢや。此の若和布は年若なに依つて。お見やる通り顔は櫻色。あれ〳〵目許に鹽のこぼるゝ樣な。しならしいよい若和布であらうが。シテ〽何れこれは好みに悉く合ひました。求めませう。代物は何程で御座る。小アド〽萬疋でおりやる。シテ〽それは高直な物で御座る。もそつとまけて下され。小アド〽わかめに限つてまけはない。いやならばおかしめ。シテ〽それとても求めませう。則ち代物は三條の大黒屋で渡しませう。小アド〽成る程。大黒屋存じた。あれで請取るであらう。シテ〽もうかう參る。小アド〽何とお往きあるか。シテ〽なか〳〵。二人〽さらば〳〵。シテ〽さらば同道せう。さあ〳〵おりやれ。シカシカ。誠に。不思議の緣で同道する。あの方

へいたらば萬事心易う喘すであらう。さう心得さしめ。女へかう參るからは。そなたを寄親殿と賴みまする。引廻して下され。シテへそれは氣遣ひめさるな。女へ縫針の御用は。妾が聞きませう。シテへそれは嬉しう御座る。何かと云ふうちにこれぢや。和御寮のわせた通りいはう。暫く待たしめ。ト云うて。呼出す。アドへ何と若和布を求めて來たか。シテへ都にまたとない上若和布を求めて參りました。お目に懸けませう。アドへ早う見せい。シテへ畏まつて御座る。さあ〱。あれへお出やれ。ト云うて。後へ隱し連れて出る。アドへ女中が見えるが。あれは誰ぢや。シテへ何とよい若和布で御座りませうが。アドへおのれは何をぬかし居る。酒の肴にする若和布を買うて來いと云ふに。何と聞いたぞ。シテへ惣じて昔から名僧でなければ若和布は使はされぬ。とかくお前を物知りぢやと申して。都の者が褒めました。アドへ呆れもせぬ事を云ふ。若和布と云ふ物は酒の肴にして。口に喰ふ物ぢやわいやい。シテへいや口に喰ふ物ばかりが肴ではない。あの女に酌を取らすれば。御酒も一入すゝむに依つて。それが直ぐに肴になると申して御座る。アドへ扨は都でぬかれてうせ居つた。苦々しい事かな。やいうつけ。愚僧が念を入れて伊勢若和布と云うてやつたに。あの樣な女を連れて來るとはどうした事ぢや。シテへお好みも悉く合ひました。惣じて京男に伊勢女と申して。伊勢は女の名物で御座る。此の女は伊勢生まれて。正眞の伊勢若めで御座る。アドへまだそのつれなぬかし居る。口に喰ふ物なればこそ。古いはわるい。新しい味のよい鹽のほろりとこぼれた樣なを求めて來いと云うたに。それも忘れたか。シテへそれを忘れてよいもので御座るか。先つ古いと申すは年寄の事。新しいと云ふは年若な事。年が寄れば顏の色もわろうなり。鹽もないものぢや。此の若めはまだ年若にはあり。顏は櫻色。目許に鹽のほろりとこぼれた樣な。しならしい若めで御座る。お前はよう知つて御座りませう。アドへ言語道斷。憎い奴ぢや。若和布といふも海苔の類で。海から出る物ぢやに都でぬかれてうせ居つた。此の寺内へ女を引込うだなどと。檀那衆の耳に入つては。愚僧も先づ此の寺をひらかねばならぬ。おのれは己れとも思ふが。はる〲來居つた女めがいたづら者ぢや。女へなう〱。妾がいたづらをしたを見さつしやつたか。シテへこりやわかめのおしやるが尤もぢや。アドへ何の尤もと云ふ事があるものか。兩人共に寺内に置く事はならぬ。出てうせう。まだ其處に居るか〱。ト云うて。追ふ。橋懸りへ退く。シテへ扨も〱以ての外な事ぢや。女へあれは短氣な御坊樣で御座る。シテへはる〲とわせた。大儀ながらお聞きやる通りの事ぢや。都へ歸つてたもれ。女へ成る程妾は何うなりともしませうが。さてお前は何とさせらるゝ。シテへ身共は外へ行く所はない。わびことをして此の寺に居ればならぬ。女へあの樣な短氣な人の側に居ようより。俗になつて一かせぎせうとは思はつしやれぬか。シテへありやうは身共も兼ねて其の樣な志もあれども。いかにしても悴の時分から出家して。今さら俗になると云ふも。勿體ない事でおりやる。女へかたい事を仰せらるゝ。此の短い浮世に。うか〱と坊主になつて居ようより。思案をさせられい。シテへいづれ此の世はわづかの間ぢや。もし俗になつたらば。こなたと夫婦になるぞや。女へ五百八十年も連添ひませう。シテへそれならばさうもせうか。女へ隨分仲ようして一かせぎしませう。シテへ庫裏へいて酒を取つて來う。本堂へいて待つて居さしめ。女へ心得ました。

シテへさあ／＼酒を取つて來た。夫婦の盃をせう。さて此の樣な時は飲うでさすものぢや。一つ飲うてさゝしめ。女へそれならば食べて進ぜう。ト云うて。飲うでさす。常の如し。こなたへ進じませう。シテへどれ／＼。戴きませう。幾久しう目出度う御座る。女へ其の通りで御座る。シテへさて結ばう。ト云うて。此所にてざゝんざを謠ふ。又は好きにても。女へ一つ受持ちました。一さし舞はせられい。ト云うて。小舞。女地謠うてくれと云ふ。常の如し。其のうちに。シテへ目出度う舞はう。アドへ本堂のあたりが騷がしい。何事ぢや知らぬ。やい／＼。やいそこなやつ。ト云うて。常の如く追ひまはす。女は先へ追込む。シテ其のうち酒を飲む。ト居る。やいそこなやつ。シテへあゝ御宥されませ。アドへけがらはしい。本堂で酒盛りをし居つて。たゞ置かうと思ふか。シテへ御宥されませい／＼。ト追込め入るなり。

【ゐ】

井杭（ゐぐひ）

シテ　井杭
アド　何某
小アド　算置き

（入道具）

シテへ此の邊りに住居致す井杭と申す者で御座る。爰に御目を下さるゝお方が御座る。これへ參れば井杭よう來たとあつて。御懇に仰せらるれども。參る度毎に頭をはらせらるゝ。之をうるさう存じて。清水の觀世音へ籠つて御座れば。何かは存ぜす。此の樣な頭巾を下されて御座る。これは定めて頭をはらせらるゝ時着よとの事でがな御座らう。參つて樣子を見うと存ずる。シカ／＼。誠に。世には變つた人も有るもので御座る。參れば頭をはらせらるゝ。うるさう存じて參らねば。身代の爲にならず。此の樣な迷惑なことは御座らぬ。いや何かと言ふうちにこれぢや。ト言うて。案内を乞ふ。出る。常の如し。アドへえい井杭。此の間は久しう來なんだが。何として來なんだぞいやい。シテへはあ此の間は田舍へ參りまして。それ故御見舞も申しませなんだ。アドへその樣な事とは知らず。若し人の忠言で來ぬかと思うて。いかう案じた。ト言うて。頭を叩く時。頭巾着る。アドへこれはいかな事。井杭がどれへやらいた。井杭／＼。今まで是處に居たが。ト言うて。尋ねる心。いろ／＼業しつけて押し搖る等。色々あるべし。口傳。シテへこれはいかな事。之を着れば見えぬさうな。扨々不思議な事ぢや。餘り尋ねらるゝ。出うと存ずる。まうし／＼。これに居ります。アドへえい井杭。汝はどれへいた。シテへ表に人が會はうと申したに依つて。會ひに參りました。アドへいかに人が會はうと言へばとて。たま／＼來て會ひに行くといふ事が有るものか。汝をそれに置くに依つてぢや。かう通れ。シテへいやこれがよう御座る。アドへはてさてかう通れといふに。シテへ畏まつて御座る。アドへさて汝は田舍へいたと言ふが。何も變つた事も無かつたか。シテへ別に變つた事も御座りませぬが。私にこびた異名を附けました。アドへそれは何と附けた。シテへ破れ障子と附けました。アドへなに破れ障子。シテへはあ。アドへこれは變つた名を附けた。してそれには何ぞ仔細が有るか。シテへ私の存じまするは。こなたへ參れば餘りはらせらるゝに依つて。それ故附けたもので御座りませう。アドへこれはいかな事。それは皆たちの惡口といふものぢや。何しに憎うてはらうぞ。皆かはいさの餘りぢや。ト言うて。扇ひろげて叩く時。頭巾を着る。アドへこれはいかな事。また井杭がどれへやらいた。井杭／＼。シテへとかく之を着れば見えぬさうな。小アドへうらや算占の御用／＼。しかも上手で

す。アドへこれへ占や算が見えた。呼うて尋ねう。シテへ占や算を呼ばるゝさうな。ちと見物致さう。アドへなう〳〵。これ〳〵。小アドへ此方の事で御座るか。アドへいかにもそなたの事ぢや。ちと尋ねたい事が有る程に。先づかう通つておくりやれ。小アドへ畏まつて御座る。はあこれはお前にお屋敷で御座るか。アドへ成る程身共が屋敷でおりやる。小アドへ先づは子々孫々萬々年もお榮えなされう。目出度いお家造りで御座る。アドへ餘の者が言はば。その様にも思ふまいが。和御寮たちがおしやれば。身共喜ぶ事でおりやる。シテへ早や追從をぬかしをる。小アドへ私共はむさとは申しません。四神相應の地などと申して。皆見所あつて申す事で御座る。アドへさうであらうとも。先づ下にお居やれ。小アドへ心得ました。扨お尋ねなされたいとはいか様の事で御座る。アドへうせ物でおりやる。小アドへしてそれはいつの事で御座るか。アドへ今日唯今の事でおりやる。小アドへ今日は何月何日。最早何刻でも御座らうか。アドへおゝその時分であらう。小アドへ先づ手占を置いて見ませう。アドへどうなりとも召され。小アドへたんちゆうけんろきんなん。はアこれは生類で御座るぞや。アドへ扨々そなたはいかい上手ぢや。なる程生類でおりやる。シテ

へいかい上手ぢや。疑も無い生類です。小アドへ生類で御座りませうが。アドへなか〳〵。小アドへお詞あまえて申すでは御座らねども。私の算がよう合ふとあつて。有名は仰せられいで。おりやう〳〵と仰せらるゝ事で御座る。アドへさうであらうとも。いかい上手でおりやる。とてもの事に居り所なさいておくりやれ。小アドへそれは一算置かずばなりますまい。（ト言うて○算袋より算木を出し○木を出す。）アドへどうなりともしておくりやれ。小アドへさて私も御門前は節々通りますれども。御用が御座らねば。御見舞申した事も御座らぬ。此の後節々お見舞申し上げませう程に。お目を懸けられて下され。アドへ成る程。此の後は節々お出でやれ。心易う致さうぞ。小アドへさてお前のお年はおいくつで御座る。アドへ身共が年はいくつでおりやる。小アドへおいくつならば何の年。御一代の守り本尊は何菩薩。月の何日を御信心なされませ。アドへ成る程信心するであらう。小アドへ即ちお前のお卦胎はこれに當ります。當年からは何事も思召すまゝにお叶ひなされう。目出度いお卦胎で御座る。アドへそれは喜ばしい事でおりやる。小アドへさらば一つ算を置きませう。アドへ一段とよからう。

小アドヘ金性水々性木々性火々性土々性金。先づは算の表の順に雙調致して目出度う御座る。さりながら。こゝに金こく〳〵もくとくと致して。ちと知れにくい所が御座れども。又こなたに水性木と語らうた所が御座れば。追付け知れませう程に。お心安う思召しませ。アドヘそれは喜ばしい事でおりやる。小アドヘ一遊魂二絶命。三過客四大醫。五禍德六遊年。七生家〳〵。はアこれは御座敷を離れたものでは御座らぬ。アドヘいや〳〵。座敷に居て見えぬ様な者ではないぞや。小アドヘして失せ物は何で御座る。アドヘ人でおりやる。小アドヘやあ人で御座るか。アドヘなか〳〵。小アドヘこれはいかな事。此の鏡の面の様な。どこにと隠れもないお座敷に。人が居て見えまい様は御座らぬ。即ち算の表には。お前の左の方の座に着いて居ると御座る。アドヘお見やる通り。身共が左の方には何も無けれども。最前からちと合點の往かぬ事が有る。算の表に就いて探して見う。小アドヘ探して御らうじませ。アドヘ心得た。非杭〳〵。小アドヘ居りまするか。アドヘいや居らぬわいの。小アドヘ居る筈で御座るが。さ様ならば。もう一つ算を置きませう。アドヘどうなりとも召され。小アドヘ一德六がいの水。二き七曜の火。三しよう八難四絶九厄。五き十の土。あゝ知れぬこそ道理。これは座を變へました。アドヘ何ぢや座を變へた。小アドヘ今度は私の右の方の座に着いて居ると御座る。これも算の表に就いて探して御らうじませ。アドヘ心得た。非杭〳〵。小アドヘ居りまするか。アドヘいや居らぬ。小アドヘ合點の往かぬ。居る筈で御座るが。いや致し様が御座る。（ト言うて算木二三本はふる。）アドヘこれは珍しい算でおりやる。小アドヘお前には御奇特にお氣が附きました。これは天狗の投算と申して。私の家ならで他の家に置かん算で御座る。之を引きならして知れぬと申す事は御座らぬ。追附け知れませう。お心安う思召させませ。アドヘそれは喜ばしい事でおりやる。小アドヘ火水出れば堤の弱り。大風吹かば古家にたゝる。なに聞こえた事の。アドヘ聞こえた事でおりやる。小アドヘ犬地を走れば猿木へ登る。鼠桁を走れば猫きつと見たり。かん申れん。かんは北。中はなか。連はつらなる〳〵。（考へて。正面へ立つて。しいと言うて。アドを呼ぶ。アド立つて行くと。シテ同じく立つて。眞中に立つ。）アドヘ何でおりやる。小アドヘ此の者は佛力神力に叶うた者と見えまして。また座を變へました。アドヘ何ぢや。また座を變へたか。小アドヘ今度はお前と私との間に。兩方をさへと見張つて居ると御座る。唯はとらへられますまい。だましてとらへませう程に。ぬからせらるゝな。アドヘ心得た。小アドヘはて合點の往かぬ。居る筈で御座るが。アドヘ何れ居りさうなものでおりやる。小アドヘ合點の往かぬ事で御座る。（此のシカ〳〵のうち。戻りて二人とも座に着く。シテもうなづき。元の座に戻る。二人鼻見合はせ。しいと言うて。）二人ヘ非杭〳〵〳〵。シテヘ扱々いかい上手ぢや。これでは嗅ぎ出さるゝであらう。致し様が御座る。（ト言うて。算木殘らず取る。木をばら〳〵にひろげ置く。）小アドヘ居りまするか。アドヘいや居らぬ。小アドヘ合點の往かぬ。居る筈で御座るが。アドヘあゝそなたは最前からいかい上手の様におしやつたが。一さい算が合はぬぞや。小アドヘ總じて失せ物待ち人と申して。算置きの病に致すさりながら。今日の様に物がちら〳〵として。算が置きにくい事は御座らぬ。はアこなたにはお暇なに依つて。我等如きを召寄せられて。なぶらせらるゝさうな。大事の家の書き物を取亂し。その上置添へて置いた算木まで。取隱さつしやる。これで知れう様が御座らぬ。早う算木を出さつしやれ。アドヘいやこゝなやつが。最前から算の合はぬの

みならず。諸侍に難題を言掛くる。身共はそれへ指もさゝぬ。 小アドへ指もさゝぬと言うて。此の内にこなたと身共より外に誰が有るもので御座る。さあ／＼。算木を早く出さつしやれ。 ト言ふうちに。アドの頭の上より算木一本出す。 アドへこれか。 小アドへこれかと言ふ事があるものか。一時に出さつしやれ。 ト言ふうち。また一本を小アドの頭の上より出す。 アドへそれ／＼。また出たは。 小アドへはて此の様にせずとも。一時に出さつしやれ。 算木をアドへ打つ附ける。 アドへあいた／＼。 こりや身共に算木を投げ附くるか。 小アドへ足らぬ算木を投附けてよいものか。 また小アドに投附くる。 小アドへあいた／＼。 こりや身共に算木を投附けさつしやるか。 アドへ身共はそれへ指もさゝぬ。 ト言ふうち。二人の眞中へ算木をばら／＼と殘らず出すなり。 アドへそりや出たは／＼。 小アドへ六十一本。數のきまつた物を。此の様にするといふ事があるものか。 これよりシテ兩人の鼻を彈き。耳を引く。色々なぶる。後に叩く。シテ笑ふ。仕方色々。口傳。 シテへ扨も／＼面白い事かな。 小アドへ今までは一時の旦那ぢやと思うて。了簡なして居た。最早や堪忍がならぬ。 アドへ算置きの分として諸侍に難題を言ひ掛くる。最早や堪忍ならぬ。 ト言うて。兩人刀の柄に手を掛け。胸ぐらをとり。やあ／＼と言うて。押合ふ時。 シテへこれはいかな事。喧嘩に成つた。これは出ずばなるまい。あゝまうし／＼。先づお待ちなされい。 アドへ何と待てとは。 シテへお尋ねの非杭はこれに居ります。 アドへ失せ物はあれでおりやる。 小アドへちやつと捕へさせられい。 ト言うて。二人追込め入るなり。

【惡】

餌刺十王（ゑさしじふわう）　鷺流

シテ　鳥刺
アド　閻魔大王
（入道具）

次第アドへ地獄のあるじ閻魔王。／＼。囉斎に、いざや出でうよ。 地取へいでうよ。 シテへ出でうよ。 詞是は地獄のあるじ閻魔大王なるが。今は人間が賢うなつて。八宗九宗に分ち。淨土宗ぢやと云うては極樂へ、づらり。或は天台宗の禪宗のと云うて。づらり／＼とづらめくによつて。地獄の飢饉以ての外なり。さあるによつてこの閻魔王も。地獄に何とも堪忍がなりにくい程に。六道の辻に出で。是處彼處と迷はうずる罪人もあらば。取つて服致さばやと存じ候。 道行。住み馴れし。地獄の里を立ち出でて。／＼。足に任せて行く程に。六道の辻に着きにけり。 詞急ぐ間これは早や六道の辻に着いた。先づこゝに居て。よささうな罪人が來たらば。責め落いて服いたさう。 地取あり。 次第シテへ餌刺に出づる心地して。／＼。極樂にいざや參らん。 シテ詞へこれは名を得たる鳥刺で御座るが。無常の風に誘はれ。只今冥途へ赴き候。 道行へ我が宿を。竿さすやうにさし出でて。／＼。急ぐとすれど綱島の。あとに心は留まりて。冥途の道の悲しさは。六道の辻に着きにけり。 詞やう／＼參る程に。聞及うた六道の辻へ着いて御座る。これはどちへ往てよからう。冥途不案内ぢや所で心元ない。 道行すむと。アド人くさい／＼とかぎ廻ること朝比奈などとおなじ。うろ／＼とするを見て。シテはアドの鼻の先へ竿をつき出す。 アドへ何ぢや。鼻の先さへ差出すは。 シテへこれは鳥を刺す刺竿と申すもので御座る。 アド問返して後。 アドへ扨々おのれは娑婆で殺生したさへあるに。冥途まで其の道具を持つてくるといふ様な事があるものぢやか。たつた今責落いて。諸鳥を殺したやうに。今また汝をぶくせうずる。 責める常の如し。追廻し。それよ／＼とかゝる時。竿を出す。 アドへあゝ氣味のわるい事をする奴ぢや。それ程鳥が刺したくば。業力の鳥を刺してくれい。この閻魔王を始め十王へ殘らず

振舞はするぞ。シテへなか〳〵。刺して上げませうが。それならば某を極樂へ通させられませい。アドへそれは先づ振舞うた上での事ぢや。急いで刺してくれい。シテへ畏まつて御座る。地へいで〳〵お鷹の餌を刺さんとて。いで〳〵お鷹の餌を刺さんとて。天氣も晴るゝ百舌鳥の高鳴吉き日〳〵と祝ひ〳〵。お竿ぬつぶしをねばこずあい。取々生袋腰簑の上に取附けて。先づ初春の駒鳥は鶲毛なれや黒鶫鳩に鴝は鷹の好むと聞くものを。さて其の外の小鳥には。山雀目鵲四十雀。桑鳥猿雀鳥鶴鶉。おいに入るかや尉の鶲。眉を作るかみこ鵐鳥。化粧したる鶯雉鳥鴨鶺燕。かくうつくしき色鳥の。竿馴れぬこそ刺しよけれと。閻魔の顔をしつくと刺す。シテへいざ〳〵犬をつけんとて。地へいざ〳〵犬をつけんとて。腰に附けたる餌袋を取り出だし。閻魔の前にぞ投げたりける。アドへ閻魔は騙すを知らずして。地へ閻魔は騙すを知らずして。餌袋を愛しければ。餌刺はこれを悦びて。犬かけ筒を取出だし。閻魔の首に打ちかくれば。驚き騒ぎて行かじとするを引立つれば。足弱車の力もつきて。よろめくを先へおつ立てゝ鳥刺は。浄土をさしてぞ急ぎける。

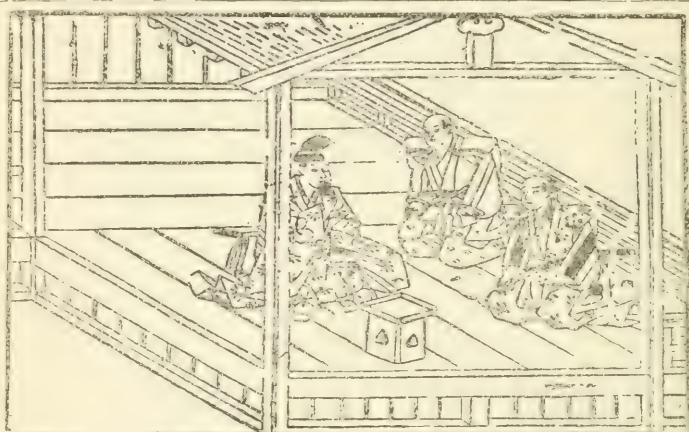
【を】

岡太夫

シテ　聟
アド　舅
小アド　太郎冠者
同　女

（入道具）

アドへ此の邊りの者で御座る。（これより太郎冠者を呼出し云附けて下に居るまで。引聟に同じ。）シテへ舅に可愛がらるゝ花聟で御座る。今日は最上吉日なれば。聟入を致さうと存じて。あそこや是處で借り調へ。先づこれ程までに出立つて御座る。先づ急いで參らう。シカ〳〵。誠に。早く參る筈を何かと延引致した。定めて舅の方には待ち兼ねて居られうさりながら。參つたらば悦ばれうとも存ずる。いや何かと云ふうちにこれぢや。（案内は常の如し。これより盃事あり。盃引くまで。惣田舎に同じ。）アドへ太郎冠者盃を取れ。さて最前云附けた物をこれへ出せ。小アドへ畏まつて御座る。（盃とれ。三寶持出し。シテの前に置くうち。）シテへまうし舅殿。おごうのわせました當座は。いかうひ〳〵しい體で御座つたが。唯今は馴染が重なりまして。私を叱つてばかり居られまする。アドへ惡い事があらば遠慮なう仰せられて下され。さてそれは蕨餅で御座る。此の所の吉例で。目出度い事のある折からは。此の蕨餅を出しまする。お嫌ひかも存ぜれども。一つ參つて下され。シテへ何と云ふ物ぢやと仰せらるゝ。アドへ蕨餅で御座る。シテへ先づはうまさうな物で御座る。御祝儀と御座る程に。一つ食べませう。（ト云うて。食ふ心あるべし。）シテへ扨も〳〵。やは〳〵としてうまい物で御座る。も一つ食べませう。アドへお氣に入つたら如何程も參れ。シテへ扨は私の思ふまゝに食ふる事で御座るか。アドへ何も御馳走は申さず。參つて下さるれば滿足致す。（シテまた二つ程食ふ。上たすべし。さてシカ〳〵ある。栗餅の心持なり。尋ねる事專一なり。）シテへ何とやら申す物で御座る。アドへ蕨餅と申す。シテへ此の樣なうまいものは終に食べた事が御座らぬ。アドへ扨は終に參らぬか。シテへいかな〳〵。今日が初めてで御座る。（また二つ程食ふうち三寶の角々を叩いて。手へ受けて食ふ。）シテへこりや皆食べまして御座る。アドへこれはよう參りました。シテへ逆もの事にもそつと食べたう御座る。アドへ太郎冠者。もそつと進じませい。小アドへいやもう御座りませぬ。アドへこれはいか

た事なにもべつと用意せなんだ。シテへいやお氣遣ひなされな。苦しう御座らぬ。總じて私は昔からないものを無理に食べる事は嫌ひで御座る。アドへこれは娘が料理の仕樣をよう覺えて居ます。お歸りなされたらば云附けて參れ。シテへ扨はおごうが覺えて居りますか。アドへなか／＼。シテへ何とやら申します。アドへ蕨餅と申す。若し忘れさせられたらば。岡太夫とも申す。シテへそれはどうした事で御座る。アドへ昔延喜の帝。とある御狩の時。民百姓この蕨餅を供御に供へて御座れば。扨々面白い物ぢやつと勅諚あつて。其の時岡太夫と官位を下された。それより岡太夫とも申す。シテへ前のは何とやら申すと仰せられた。アドへ蕨餅。シテへ今の替名は。アドへ岡太夫。シテへはてむつかしい名で。覺えにくう御座る。アドへそれも御失念ならば。おごうが常々好いて讀む朗詠の詩のうちにある物ぢやと仰せられ。シテへこれは覺えよう御座る。扨々今日は忝うこそ御座れ。もかう參る。アドへよう御座つた。シテへはあ。なう／＼。嬉しや／＼。ざつと聟入をしすました。先づ急いで歸らう。シカ／＼。誠に。此の中から心に懸かつたに。首尾よう濟んで此の樣な

嬉しい事は御座るまい。今日の先は心許なう御座つたが。身共が分に過ぎた舅を持つて。

別して仕合はせで御座る。居とまる。これはいかな事。又物を忘れた。何とやらへ。それ／＼蕨餅。さてまた此の物を昔さるお方のどこやらへ御出でなされた時。何とやら云ふ事に就いて。物とも云ふとおしやつたが。また忘れた。此の樣に物覺えがなうては氣の毒ぢや。それ／＼。おごうが料理の仕樣をよう覺えて居るとおしやつた。早く歸つて申附けう。シカ／＼。總じてあれは物覺えがよいに依つて。たとへ身共が忘れたりとも。定めてよう知つて居よう。何かと云ふうち戻つた。なう／＼。これの人居さしますか。今戻つておりやる。女へ何ぢや。これのが戻らせられたと云ふか。これはいかう早う御座つた。先づかう通らせられ。さてあの方の首尾はよう御座つたか。シテへ成る程首尾はよかつたが。聟入と云ふものは。仕つけいではなりそむないものぢや。なか／＼恥かしうて。物の云はれさうな事ではなかつたれども。臆したと云はれては。口惜しいと思うて。おめず憚からず。心一ぱい首尾よう勤めて。今戻つておりやる。女へなう／＼。それは出かさせられた。定めてとゝ樣やかゝ樣の御悦びで御座らう。シテへ舅殿は殊の外の御機嫌で。樣々御馳走であつた。

それに就いて、和御寮の知つて居る物を御振舞ひなされた。なか〳〵むまいものでえこらへぬ。さあ〳〵。料理をしてお振舞ひやれ。女へこれはいかな事。今まで馳走になつて居た。何がきこしめしたいぞ。シテへいや〳〵。どうあつても勘忍がならぬ。早々料理を召され。女へして先づそれは何で御座つた。シテへはて和御寮のよう知つて居る物ぢや。女へさうばかりでは合點が行きませぬ。シテへでも舅殿のおしやるは。之を參りたくば。おごうが料理を知つて居るとおしやつた。女へそれでも名を聞かねば。何の事やら知れませぬ。シテへはて氣の毒な。名を覺えて居れば。おぬしを頼む事はない。何とやら云ふ物であつたが。それ〳〵。ろうかの内に有る物ぢやとおしやつた。女へろうかの内にあるものは何で御座らうぞ。シテへいやそなたが好いて讀むろうかの内とやらおしやつた。女へ朗詠の詩のうちと云ふ事であらう。シテへそれ〳〵。朗詠の詩を食はう。早う料理を召され。女へ朗詠の詩は食はるゝものではない。朗詠と云ふ本の中にある詩の事であらう。さらば朗詠の詩を二つ三つ言はう程に。それならばそれとおしやれ。先づ鷄既に鳴いて忠臣旦を待つと云ふ時は。とさか海苔を參つたか。シテへいや其の様な物ではおりない。女へ池の氷の東頭は風度つて解け、窓の梅の北面は雪封じて寒し。斯様にある時は。朝茶の菓子に梅干でもあらう。シテへ其の様な酸い物を。誰が所望するものぢや。女へそれならば何であらうぞ。氣霽れては風新柳の髮を梳り。氷消えては波舊苔の鬚を洗ふで思ひ出した。ところで御座らぬか。シテへ其の様な苦がい物が誰が食ふぞ。唯えこらへぬむまい物であつた。女へ花の色は蒸せる栗の如し、俗呼ばつて女郎とすとある時は。栗の飯ばしきこしめしたか。シテへ栗の飯がむまい物であらう事は。女へそれならば妾は知りませぬ。シテへ扨々氣の短い事を云ふ。否でも應でも思ひ出すまで云うておみやれ。女へ林間に酒を暖めて紅葉を燒く。紅葉鮒を肴で古酒ばし食うたか。シテへこゝなやつは。箸に目鼻をつけても。男は男ぢやに。女の口から食うたかとは。どうした事ぢや。女へおぬしの様な物覺えの悪い。口に食うた物さへ忘るゝ様な人に。何と云うたら大事か。シテへ推參な事を云ふ。男に使ふ詞を知らぬか。たつた一打にする。（ト云うて。扇をさし。そりを打つて。追廻はす。女。悲しや出合へ〳〵と云うて。逃ぐるを追ひつめ。左の手にて。女を捕へ。舞臺の眞中に引据する。よく〳〵云合はすべし。）女へ先づ待たつしやれ〳〵。シテへ何と待てとは。女へこれで思出した。紫塵の懶き蕨人手を握る。碧玉の寒き朝錐袋を脱すと云ふうちには御座らぬか。シテへ先づお待ちあれ、なる程今のうちにあつた。女へ何の御座らうぞいの。シテへ慥かにあつた。も一度云はしめ。女へもう妾には川は御座るまい。シテへそれは胴慾ぢや、最前の様に荒々と云うたは。身共が不調法ぢや。了簡をして云うて聞かさしめ。女へそれ程に仰せらるゝ程に。云うて聞かしませう、紫塵の懶き蕨。シテへえゝそれ〳〵。其の蕨餅の事いの。女へ蕨餅で御座るか。シテへそれを忘れて。よい骨を折らせた。なういとしい人こちへおりやれ。女へ心得ました。（ト云うて一つ留むるなり。）

叔母ケ酒

シテ　甥
アド　叔母
（入道具）

シテへ此の邊りの者で御座る。某叔母に酒屋を持つて御座る。せつ〳〵行き見舞を致せども。吝い人で。目の前に澤山な酒を。終に

一度も振舞はれぬ。今日は參り一つ飲うで歸らうと存ずる。先づ急いで參らう。誠に。甥と申しては某一人で御座るに。終に一つも飲まされぬさりながら。今日はきつと思案致したに依つて。一つ食べずば歸るまいと存ずる。何かと云ふうちにこれぢや。ようし叔母御御座りまするか。アドへ表に誰の聲がする。えいようおりやつた。シテへ此の中は久しうお見舞も申しませぬ。御息災さうで目出度う御座る。アドへ妾も隨分息災な。そなたもまめさうで一段でおりやる。シテへ忝う御座る。さて當年もお前の御酒がよう出來ましたとの。アドへ成る程當年も酒がよう出來て。悦ぶ事でおりやる。シテへ何れ名譽な事で御座る。終に此方の御酒の惡う出來たと云ふ事を聞いた事が御座らぬ。總じて御商賣物のよう出來るは。お家御繁昌の御瑞相ぢやと申しまする。アドへ皆その樣に仰せられて。妾も嬉しうおりやる。シテへお前の御繁昌について。私ないから羨みまする。アドへそれは何と云うて羨む。シテへそちが樣な果報な者はあるまい。叔母に酒屋を持つて居るに依つて。行き見舞ふ度毎に。よい酒を飲むであらう。と申して。殊の外羨みまする。御存じの通り。私は終にお前でお酒を下さるゝ事は御座られども。一つはお前の御外聞ぢやと存じて。それは皆たちのおせあるまでもない。叔母に酒屋を持つてゐるに依つて。行き見舞の度毎に。よい酒を飲み。又身共が所にある酒も。皆叔母の所からくれらるゝ酒ぢやと申せば。あやかり者ぢやと申しまする。又中には意地の惡い者が御座つて。扨々誰と云ふ者は。物を取りつくらうて云ふ者ぢや。あの吝い叔母が。何の樣に酒を振舞ふものぢや。飲うだが誠ならば。さあ誓言を立てぃと申す。私も此の誓言にはほうど困つて御座る。御酒は食べたうは御座らぬが。誓言の爲で御座る。一つ下されませう。アドへそれは振舞ひたうはあれども。今日はまだ賣初めをせぬに依つて。飲ます事はならぬ。シテへ賣初めがまだで御座るか。アドへなか／＼。シテへそれならば是非に及びませぬ。いや此方の祭も近うきました。毎もの通りお子樣方をお連れなされて。早々からお出でなされて下されい。アドへ成る程子供を連れて早々から行くであらう。シテへ祭と申すものは。高いもひきいもめでたいもので御座る。さてそれに就きまして。在所にも祭酒が大分入りまするが。ちと肝を煎つて賣つて進じませうか。アドへそれは嬉しい事ぢや。どうぞ肝を煎つて賣つてたもれ。シテへ此の中も在所の者共と寄り合ひまして。私の申しまするは。お知りある通り。叔母は酒屋ぢや。祭酒が要るならばちと取つてたもれと申して御座れば。おゝ／＼。何處で取るも同じ事ぢやさりながら。何程ひいきに思うても。酒が惡うては取られぬ。叔母の所へ往たらば。善いか惡いか聞き酒に。一つ飲んで來いと申して御座る。今日は御酒は食べたう御座られども。聞き酒の爲に一つ下されい。アドへ振舞ひたいものなれども。最前も云ふ通り。賣初めがまだぢやに依つて。飲ます事はならぬ。シテへこれは賣初めにはかまひませぬ。私が下されて良いとさへ申せば。夥しう賣れる事で御座る。すればそれが早や賣初になるでは御座らぬか。アドへいや飲うで見るに及ばぬ。隨分よいと云うて賣つてたもれ。シテへ飲みもせぬ酒を。よいと云はるゝもので御座るか。アドへでも賣初をせぬ中は振舞ふ事はならぬ。シテへすれば酒を賣らしやらねば。飲む事はなりませぬか。アドへおゝさて。賣初がまだぢやに依つてならぬ。シテへよう御座る。私はもうかう行きまする。アドへお行きやるか。

ようおりやつた。シテへあゝ扨も〳〵邪見な人かな。今の漢に云うても飲ませうともせられぬ。昔の上今朝給元な出る時。是非とも一つ食べずば歸るまいと存じたれば。蟲が取りのぼしてどうも堪忍がならぬ。何としたものであらうぞ。いや思出した。まうし奴様ご御座りまするか。アドへ誰の聲ぢや。えいそなたはまだお歸りあらぬか。シテへお前に參つて申さいで叶はぬ事をはたと忘れまして。それを申しに歸りました。アドへそれは何事でおりやる。シテへ先づ此の邊りに鬼は出ませぬか。アドへなう〳〵。恐ろしや〳〵。鬼が出てよいものか。シテへいや私の邊りは七ツさがりますれば。いかめの鬼が出まして。片端から人を取つて食べまする。ちと御用心なされませい。アドへ扨々こはい事ぢや。ようし知らせておくりやつた。店も早う仕舞うて用心をするであらう。シテへ私は之を申しに歸りました。もうかう參りまする。アドへお行きあるか。シテへはあ。アドへようおりやつた。シテへはあ。笑ふ。扨も〳〵。世間にすぐれて邪見な人なれども。流石女ぢや。鬼と云うたれば恐ろしからう。かう申すも思案あつての事ぢや。是處に風流の面が御座る。之を着て身共が鬼になつて。彼様な嚇して酒

を飲まうと存ずる。（上下へ一二左右を）シテへものもう。酒買なさせう。アドへ表に酒買がある。誰も出ぬか。ざら〳〵〳〵。シテへとつて喰まう〳〵。アドへなう恐ろしや鬼が來た。宥して下され。御ゆるされませ〳〵。シテへやい。扨々おのれは憎い奴ぢや。おのれが手に誰と云ふ者があらうが。アドへ成る程御座ります。シテへあれはつつと心の優しい者で。そちが事を大切に思うて。度々行き見舞をするに。目の前に澤山な酒を。終に一つ飲ませうともせぬげな。其の上きやつは一つ飲む者の事なれば。夏ならば冷。冬ならばはつたりと燗の仕ますして。彼が飲まうと云ふ程飲ませうか。又飲ませないならば。取つてかまう。アドへ成る程飲ませませう。命をお助けなされて下され。シテへ何ぢや。飲ませう。アドへはあ。シテへすれば己れが心も直つたやうな。命の儀は助けるぞ。アドへそれは有難う存じまする。シテへさて遙々來たれば徒然な。酒なりとも飲まうが。どの酒がよい。アドへあの濾紙で蔽ひのしたがよう御座る。シテへそれからもねかさるゝ事ぢや。濾紙で蔽ひ。大方此の事であらう。先づ蓋を取らう。むり〳〵。扨も〳〵よい匂ひぢや。さらば一つ飲まう。口倹。やいそこな奴。總じて鬼の酒を飲むを

見ぬものぢや。構へて見居るな。アド〽見る事では御座りませぬ。シテ〽見たらば取つてかむぞ。アド〽いや見る事では御座りませぬ。シテ〽扨も〳〵よい酒ぢや。これはも一つ飲まう。見るな。お見やるとて取つてかむぞ。これはどうぞもそつと飲み様のありさうなものぢや。アド〽見る事では御座りませぬ。シテ〽そりや見たは〳〵。アド〽見る事では御座りませぬ。シテ〽見るとがり〳〵ぢやぞ。これはいかうだるい。もそつと樂(らく)に飲みたいものぢや。そりや見たは〳〵。アド〽見る事では御座りませぬ。シテ〽今のは見たさうな。アド〽いかな〳〵。見る事では御座らぬ。シテ〽見ぬか。アド〽はあ。シテ〽見ぬ所で飲めたものぢや。そりや見たは〳〵。（追々に云う二度る。）アド〽あゝ見は致しませぬ。なう〳〵恐ろしや。舅の誰が申した通り。妾が所へ鬼が來た。誰ぞ居ぬか。あの鬼をいなしてくれい。はあ。いかうさゝに醉うたと見えて。い靜かな。蓋からちと見う。なう〳〵。何立ちやれ〳〵。誠に鬼かと思うたれば。あれは舅の誰ぢや。鬼の面を着て。妾をだまして酒を飲み居つた。扨も〳〵憎い事かな。やいそこな者〳〵。シテ〽お見やつたらば取つてかむぞ。アド〽おのれは舅の誰ではないか。シテ〽これは不調法で御座る。御免されませ〳〵。（退入。）

折紙聟（をりがみむこ）

シテ　聟
アド　舅
小アド　太郎冠者
女　妻
（入道具）

アド〽此邊りの者で御座る。今日は最上吉日ぢやに依つて聟がわする。先づ太郎冠者を呼び出し申付くる事が御座る。（ト云うて呼出す。出るも常の如し。）今日は吉日ぢやに依つて聟がわする筈ぢや。用意はよいか。小アド〽成程。御付けられた通り用意致して御座る。アド〽定めておごうも同道するであらう。おごうは直に奧へ通るであらう。聟殿は此方より迎ひに出さうず。供の者へはそれ〳〵に馳走をせい。見えたらば此方へ申せ。小アド〽畏まつて御座る。シテ〽舅にかはいがらるゝ花聟で御座る。今日は吉日なれば。聟入を致さうと存じて。此處かしこで借り調へて。是迄出立つて御座る。先づ女共を呼出し。同道致して參らうと存ずる。なう〳〵是の人。居さしますか。おりやるか。女〽何ぢや。わらはを呼ばせらるゝ。わらはを呼ばせらるゝは何事でござる。シテ〽何事と云ふ事があるものか。けふは思ひ思うての聟入でおりやる。女〽誠に。是はきれいに出立ちさせられたよ。シテ〽何とようおりやるか。女〽よう御座るとも。則ちあの方からも。いよ〳〵待つと云うて。最前人が來ました。シテ〽これならば急いで行かう。いざ行かしめ。女〽さあ〳〵御座れ。シカ〳〵。誠に。けふはふたり共に參つたらば。とゝ樣やかゝ樣は云ふに及ばず。内の者共迄悦ぶで御座らう。シテ〽身共は初めて行くに依つて。窓も垣も皆目ばかりぎろ〳〵してあらうと思へば。いかう恥しいわいの。女〽何がさて花聟ぢやと云うて。皆陰からのぞくで御座らう。シテ〽さて舅殿は何ぞ拵へらるゝか。女〽おゝ扨。初めての事ぢや。どうぞ御馳走を申したいと云うて。結構な料理を拵へらるゝと聞いて御座る。シテ〽それはさうも有らうが。外は何も拵へられぬか。女〽お引の事で御座るか。シテ〽先づ其樣なものぢや。女〽委しうは知りませぬが。黄金(こがね)作りの刀に。おあしなども進ぜうと云うて拵へらるゝと。あの方の者が

參つて咄しました。シテへそれは屹度した心遣ひぢや。さて。何とそれは何處で出る事ぢや。女へ定めて盃の上で出ませう。シテへそれならば。一つも二つも。酒をたべ過ごさずばなるまい。女へとゝ樣も。シカ〳〵。酒がすきぢや程に。お前の參つたらば悦ばせらるゝで御座らう。シテへ某は不案内な。内の者共への心付けは。わごりよの取りなしてよい樣にめされい。女へそれは氣遣ひなされな。何かと云ふ内に是でござる。妾は奥へ通りませう。シテへ心得た。女へとゝ樣來ました。アドへおごう。ようおりやつた。女へけふは目出度う御座る。アドへ其通りぢや。さて聟殿は。女へ表まで參られて御座る。アドへそれならば迎ひ出う。女へそれは結句迷惑がられませう。太郎冠者を遣されませ。アドへさうもせうか。太郎冠者。聟殿が表に御座る。迎ひにゆけ。小アドへ畏まつて御座る。かうお通りなされませ。シテへそちは是の者か。小アドへ是の太郎冠者で御座る。シテへ初對面ぢや。かう參らうか。小アドへつゝとお通りなされませ。シテへ不案内に御座る。アドへ今日は目出度う御座る。シテへ早々參る筈を何かと延引して御座る。アドへ聟殿はお暇(ひま)なしと承つて御座る。先づ以て今日のお出で忝う御座る。太郎冠者盃を出せ。小アドへ畏まつて御座る。アドへ何とそれへ參らぬか。シテへ何がさて取上げさせられい。アドへこれならば。たべて進じませう。ト云うて。うけて。呑みてさす。シテいたゞきのむ。セリフ此類聟狂言何れも同斷。一つ呑んで。茨をさかもぎを云うて。又うけて。半分呑んで下に置きて。シテへ大盃で御座る。靜かにたべませう。アドへ聟殿は御酒を一つ參つて。よい事で御座る。シテへかたの如くすきで御座る。ト云うて。橋掛りへ女を呼び出し。シテへ何とかの物は出ぬか。女へハテ出ませうぞいの。シテへ最早出さうなものぢやが。ト云うて。初めの座につく。アドへ聟殿。參つて是へ下され。シテへ追付け進じませう。呑んでさす。アドいたゞきのむ。シテなか〳〵。此度常の如し。アドへおごう。差さう。女へ頂きませう。アドへ目出たう一つ飲ましめ。シテ立つて。また橋がかりへ女をよびたてゝ。シテへ是は近い事ぢや。定めて忘れられたであらう。氣を付けさしませ。女へなう〳〵恥知らずや。いかに親子ぢやと云うて。其樣な心あたてな事が云はるゝものか。シテへいや〳〵大事ない事ぢや。先づとりえい物は。まづ取つたがよい。アドへ兩人共おもてへ出られた。呼うで來い。小アドへ畏まつて御座る。御兩人共にあれへお出でなされいと申されまする。女へ追付け行かう。さあ〳〵あれへお出でなされい。小アドへ是へお出でなされまする。シテへ云うても大事ない事ぢやに。アドへ兩人共にどれへお行きあつたぞ。女へいや内から用を申して參りました。それ故表へ參りました。さて是なお前へ上げませう。アドへ是へ與れさしませ。女へ目出度う御座る。アドへそなたも嬉しからう。シテへさて是は種々御馳走で。色々のお肴が出まする。此上はまだ何が出ようも知れませぬ。アドへいや。お心やすだてに何も御馳走は申しませぬ。何とも一つ參らぬか。シテへいかうたべましたが。此上にたべたらば。又何ぞ出まいものでも御座らぬ。も一つたべませう。アドへ扨々それは忝う御座る。それへ進じませう。太郎冠者丁どつげ。シテへ是は夥しいたべ樣ぢや。いや申し。私は惣じて悴の自分から物覺えが惡うて迷惑に御座る。御酒の上ではいよ〳〵の事で御座る。或は人に是を語らうものやらう物など存ずる事も。酒の上ではすきと皆忘れまする。舅殿も御酒を一つあがります。又お年も一つ宛御座らせらるゝ。殊に御酒の上では。とくとよう御思案をなされて。やる物はやり。出すべき物は早う出して。埒をあけさせられたがよう

御座る。アドヘさうで御座るとも。女氣の毒がりて。目くばせなどする。シテヘとかく物はよう御思案をなされたがよう御座る。あの人があの様に云はるゝ。おれは何も忘れた事はないかと。屹度思案をなされた時。さればこそ是を忘れた。最前やる筈であつた物を。今は出しおくれになつた。出されまい。また折も有らう迄よと思召す様な事が。今私やお前の身の上にもあるまい事で御座らぬ。アドヘ是はあるまい事で御座らぬ。シテヘ有らう事の。アドヘ左様で御座る。シテヘそれでも大事御座らぬか。又相手の氣にもなつて見たがよう御座る。是は最前出されさうな物ぢやに。何としてお出しあらぬぞ。若し忘れられたか。但し又くれまいとある事か。とやあるかくや有るかと。無量の罪を作りまする。すれば自他の爲に益がないに依つて。別して酒などを上りました上では。猶々よう思案をなされて。やるべい物はやり。出すべき物は出し。思ひ出しさへなされたらば。前も後も後も先も顧ず。さらりと早う出して。埒を明けさせられたがよう御座る。アドヘ扨も／＼聟殿は物毎に發明で。頼母しい事で御座る。女ヘ酒を一つ參ると物を云過されて。汗を致しまする。最早盃を取らせられい。シテヘおぬしが何を知つて。まだ御肴でも。其外何が出うも知れぬ。そばからせはしう云はずとも。引込うで居さしませ。女ヘとかくとゝ樣酒をとらせられい。アドヘ何れさしたる御馳走もない。聟殿もよう御酒を參つた程に。それならば取りもせうか。シテヘさては最早外に出る物は御座らぬか。アドヘ太郎冠者。何ぞ出さぬか。小アドヘいや何れも皆不調法な御肴で御座る。まづ御酒をお取りなされませ。シテヘそれならばそれと云うたがよい。何も出ぬにいつ迄待つて居る物ぢや。さあ／＼お取りやれ。アドヘどれ／＼。私納めませう。シテヘいやむつかしい。誰でも同じ事ぢや。太郎冠者。納めておかしめ。小アドヘ畏まつて御座る。アドヘ聟殿はいかい持あきぢや。シテヘも往にませう。アドヘ早や歸らつしやるか。シテヘハテ御酒をたべた上に。別に出る物も御座るまいに依つて。歸らうと申す事で御座る。アドヘやれ／＼。今日はようこそお出でなされたれ。また近日申入れませう。シテヘ御勝手になされませ。ト云うて立つ。怒心持あり。直に太鼓座へ行き。瓶を持ち。シテ柱のそばへ行き。いとまの狀をかく心なり。女ヘわらはも歸りませう。アドヘなうおこう。今日の引出物に。聟殿へ刀一腰。鳥目百貫進ぜうと思うて。目録まで調へておいたが。細工人から刀がまだ出來て來ぬ。刀の出來次第。鳥目も添へて後から遣さう。先づ折紙ばかりそなたへ渡す。わごりよ歸つて。聟殿へよい樣に云うてたもれ。女ヘ扨々忝う御座る。こちの人に委しう申しませう。もうかう參ります。アドヘようおりやつた。女ヘなう／＼。そなたは道かいもとで何を書いて御座る。シテヘ何を書かうと構うての樣は。女ヘ是はいかう機嫌が惡う御座る。何とさせられた。シテヘまんまと騙された所が無念な。女ヘ誰ぞそなたを騙した者が御座るか。シテヘおのれも同じ事ぢや。口では。刀も鳥目でも。何程でも出る物ぢや。女ヘ何をむさとした事を云はつしやる。さあ／＼早う戻らつしやれ。シテヘどこへ。女ヘ内へいにまする。シテヘ内とは。女ヘハテそなたの内へ一所に戻りまする。シテヘ見事戻らうと思ふか。女ヘ又戻らいでは。シテヘ扨も／＼。をかしい事を云ひ出した。いにたくば是を持つてゆけ。女ヘ是は何の事で御座る。ト云うて。狀をあけて見て。女ヘやあ。妾に暇をおくりやるか。シテヘおんでもない事。女ヘ妾に何の科が有つて。暇をお呉れあるぞ。シテヘ嘘ないふ親も親。娘も娘。其樣

な女に連添ふ事はならぬ。早う出てゆけ。女〻さて〳〵そなたは卑怯な人ぢや。とても出て行く身ぢやに依つて。云ふもいらぬ事なれど。とゝ様の仰せらるゝは。今日のおひきに。黄金作りの刀一腰。おあし百貫。出さうと思うて拵へたが。細工屋が刀の拵へを出さぬに依つて。出來次第に後から持たせてやらうず。先づ此の折紙ばかりやる程に。内へ歸つて渡せと云うて。ひそかに妾へ渡されたが其の様な事も知らず氣の短いといふが。笑止千萬な人ぢや。　シテ〻それは誠か。　女〻嘘で御座る。シテ〻先づ其の折紙を見せさしめ。　女〻なりませぬ。　シテ〻それに心强い言ひ様はそなたの心をひいて見たのぢや。どれ〳〵おこさしめ。ト云うて。せり合ひ。むりにとる。　これは夥しい引出物ぢや。舅殿は氣の張つた人ぢや。初めそなたが嫁入りして來る時から。諸事心安うくといふ約束ではないか。此様な事を召さるゝは結句迷惑ぢや。女〻まざ〳〵しいあの顏わいの。シテ〻いやまづそなたも惡い。此様な事をせうとおしやらば。ざつとなされいと云うて止めたがよい。　女〻恥しうなうて。あの様な事がよう云はるゝ事ぢや。シテ〻いざ戻らう。さあ〳〵來さしめ。　女〻どこへ。　シテ〻ハテ内へ。　女〻暇の状を呉れておいて。連れていなうと思はつしやるかいの。シテ〻最前のはざれ事ぢや。　女〻書いた物が證據ぢや。妾は此後中の男を持たうと儘で御座る。シテ〻近頃あやまつたに堪忍してその書いた物をこちへたもれ。　女〻知りませぬ。　シテ〻それは胴慾ぢや。身が常々の心入を知らぬ者の様な事をおしやる。手を合せて詫ぶる。こらへてたもれ。　女〻それならば。重ねて是に懲りさせられいや。シテ〻わごぜ女房よ。思ふ中のいさかひは。今に始めぬ事ぞかし。よしゆるせ女房よ。よしゆるせ女房と。手をすり申を直りつる。よく〳〵思へば此の折紙は。よく〳〵思へば此の折紙は。むすぶの神にこそおはしますなう。いとしい人。こちへおりやれ。　女〻心得ました。ト云うて。とめて。シテよりへるなり。

【補遺】

竹生嶋詣（ちくぶしままうで）

シテ　太郎冠者
アド　主人

アド〻此邊りの者で御座る。（是より富士詣の處を竹生嶋詣と。富士權現の處を天女と云ふ）　アド〻さて何も珍らしい事はなかつたか。　シテ〻別に珍らしい事も御座らなんだが。私は只今まで雀と烏は別の鳥かと存じて御座れど。あれは親子で御座る。アド〻さう云ふに何ぞ仔細があるか。　シテ〻成程仔細が御座る。參りまする道に。大きな榎が御座る。其榎に烏がとまつて居りました。又片枝には雀がとまつて居りました。かの雀が烏の側へ參つて。ちゝ〳〵と申して御座れば。烏が雀をきつと見まして。子カア〳〵と申して御座る。あれは疑ひもない親子で御座る。アド〻これはいかな事。むさとした事を云ふ。それは銘々の囀りやうでこそあれ。自然同じ木にとまり合うて。鳴き合せたと云うて。それが親子であらうやうは。其様な事ではない。何ぞ外に變つた事はなかつたかと云ふ事ぢや。　シテ〻まだ珍らしい事が御座つた。　アド〻それは何であつた。　シテ〻神前の傍（かたはら）に大きな芝が御座る。其芝にこびたものが集つて居りました。アド〻何が集つて居た。シテ〻先づ辰。ト吟じて。　シテ〻戌。同。　シテ〻猿。同。　シテ〻蛙（かへる）。同　シテ〻くちなは。　アド〻したり。　シテ〻このもの共が集つて居りました。　アド〻早

述不審がある。總じて昔から。仲の悪いものは戌と猿との様に云ふが。其様な體もなかつたか。シテへいかな〳〵。仲の悪い體はそつとも御座らいで。何ぞ物を談合する體と見えて御座る。このもの共が立ち様に。秀句な云うて立ちましたが。是が聞き事で御座る。アドへ何と云ふぞ。そのもの共が立ち様に秀句な云うて立つたと云ふか。シテへ左様で御座る。アドへそれは面白からう。して汝はそれな覺えて居るか。シテへ中々。覺えて參りました。アドへそれならばちと話して聞かせ。シテへ畏まつて御座る。先づ辰が申しまするは。何れもは是に御座れ。某は少用御座るに依つて。このお座敷をたつてです。と申して御座る。アドへ辰の秀句に。たつてです〳〵。ト云うて笑ふ。辰の秀句に。たつてすはでかしたなあ。シテへでかしまして御座る。アドへさて其の次は何であつた。シテへ戌が申しまするには。何れもは是に御座れ。私は夜啼に參るに依つて。このお座敷をいぬるです。と申して御座る。主吟じて笑ふ。アドへ戌の秀句にいぬるですもでかしたなあ。シテへ左様で御座る。アドへさて其の次は何ぢや。シテへ猿が申しまするは。某は内へ客を得ました程に。このお座敷をさるですと申して御座る。笑ふ。アドへきやつには人間半分智慧を持つたと云ふ程に。秀句の事は云ひかねもせまいが。猿が所の内客は誰であらうぞ。シテへそれがしれ者で御座る。アドへ其の次は何であつた。シテへ蛙(かいる)が申しまする。何れもお立ちなされたに依つて。某もこのお座敷をかへるです。と申して御座る。笑ふ。アドへきやつが小さいなりをして。大きい者に負けじ劣らじと。目をしよぼ〳〵としてかへる〳〵。笑ふ。かへるですはでかし居つたなあ。シテへでかしました。アドへさて其の次は何であつた。シテへもう御座らぬ。アドへまだ何やらあつたぞよ。シテへいやもう御座らぬ。アドへそれ〳〵。くちなはの秀句がある。シテへ誠にくちなはの秀句が御座る。アドへくちなはは何と云うた。シテへ暫くそれにお待ちなされませ。アドへ心得た。定めてくちなはの秀句はなま長い事で御座らう。シテへこれはいかな事。人の話を承つてふと申して御座れば。くちなはの秀句にはつたとつまつた。何としたものであらう。アドへヤイ〳〵太郎冠者。くちなはは何と云うた。シテへくちなははでかしました。アドへさうであらう。何と云うた。シテへ先づくるり〳〵と輪になつて。アドへ輪になつて。シテへ鎌首をもつたて。アド吟ずる。シテへこのお座敷をたつてです。と申して御座る。主大きに笑ふ。アドへくちなはの秀句に。たつ。イヤ是は辰の秀句ぢや。シテへかへるでは御座らぬか。アドへかへるは蛙の秀句。くちなはは何と云うた。シテへ今思ひ出しました。くちなははでかしました。アドへさうであらう。何と云うたぞ。シテへ先づくるり〳〵と輪になつて。アド吟ず。シテへ鎌首をもつたて〳〵。石藏の中へぬら〳〵です。と申して御座る。アドへあのやくたいもない。しさり居れ。シテへハア。アドへエイ。シテへハア。ト云うて留めるなり。

法師母(ほふしがはゝ)

シテ　夫
アド　妻

（入道具）

シテへ都なれや東山是もまた東の果てしないの人の心やア、醉うたり。いやと言ふものを大盃で云つ。笑ふ。面白い。總じて人間の樂しみは。春は花秋は月。おりの唯酒ぢや。笑ふ。イヤ何かと言ふ内に戻つた。アヽまた見たむない女共の面を見ずばなるまい。女共〳〵。女へ是のうが戻らせられたさうな。

エイ戻らせられたか。シテへ何ぢや戻らせられたか。お主はどれに居た。女へどれに居ませう。内に居ました。シテへ内に居た者が、最前から聲の嗄るゝ程呼ぶに聞えぬと言ふ事があるものか。總じてわごりよは合點のゆかぬ人ぢや。いつも身共が表から戻れば裏から出る。アヽ合點のゆかぬ人ぢや。女へ又さゝに醉うて譯もない事を言はせらるゝ。早う這入つて休ませられい。シテへ酒を飲まう。女へこれはいかな事。それ程さゝに醉うて居て。又飲まうと言ふ事があるもので御座るか。早う這入つて休ませられい。シテへ聞きたむない。おれが酒を飲まうと言へば何のかのと言うて飲ませぬ。已れにほうど厭き果てた。暇を遣る程に出て行け。女へまたしても／＼。暇を遣るの去るのとおしやる。妾ぢやと言うて行き兼ねもしますまい。シテへおゝ扨とつとゝ出て行け。女へそれならば暇の印を下されい。シテへ暇を遣るが印ぢや。女へいや／＼。女と言ふ者は。又どれへ行くまいものでも御座らぬ。塵を結んでなりとも暇の印を下されい。シテへ何ぢや。塵を結んでなりとも暇の印をくれいか。女へおゝ扨。シテへそれは易い事ぢや。それ／＼。それやつた。女へエイ腹立ちや／＼。是は喩へでこそあれ。何なりともしつかりとした印をおこしなれいやい／＼。シテへ何ぢや。しつかりした印をおこせ。女へ中々。シテへアヽわごりよも惡うはほれんの。暇を遣るからは何が惜しからう。是を遣るぞ。女へ扨は眞實暇を下さるゝか。シテへくどい事をぬかしなる。まだそこに居なるか／＼。女へアヽ許して下されい／＼。シテへさうもおりやるまいものを。笑ふ。常々きやつが面が見たむない／＼と思うたれども。かな法師が母ぢやと思うて了簡なして置いた。今日はざつとよい胸晴れなしたと言ふものぢや。此の樣な面白い時は。もそつとどれへぞいて酒を飲うで來う。ト言うて小舞を謡ひ入るなり。女へ扨々正體もない事かな。今こそあのやうに言へども。妾が居ずば後で何ともなるまいに。暇をくれた程に親里へいなうと思ひまする。シカ／＼。誠に。妾もあの男に厭き果てゝ御座るに依つて。暇をくれたは幸ひの事で御座る。さりながら後でかな法師が尋ねうと存じて。それが不憫に御座る。ト言うて泣く。シテへ一聲物に狂ふも五臓故。酒の仕業と覺えたり。それ春の脈は。弓に弦掛くるが如く狂ふ身の咲亂れたる花共の。もの言ふ事は無けれども。輕樣激して影居を動かせば。花の物言ふは道理なり。シテへなう／＼。其處許へ二十ばかりの女の物思ひ顔では行かぬか。アヽこれ／＼。其處許へ色よなど戴いた女は行かぬか。カヽルなにそなたへも行かぬとや。いつかまた法師が母にあひ竹の。地へ漢に喚ぶばかりなり。シテへ法師が母が能には。地へ法師が母が能に。先づ春は花折り。扨また夏は田を植ゑ。秋はいなばに行き歸り。冬にもなりぬれば。せどの窓の明りにて。むしろ布を織りつゝ。素袍袴や十德布子の裏帽子なせば。誰が折つてくれうぞ。法師が母ぞ戀しき。女へ法師が母は唯一人。漢そ道の何邊にて。親の許にぞ歸りける。シテへ面なましの御事や。あれは妻にてましますか。さりとては歸り合ひ。狂氣なやめてたび給へ。女へ眉目の惡さは生れ付き。一度去りたる仲なれば。何しに歸りあふべきぞ。シテへ眉目の惡さとは。地へ眉目の惡さとは。唯醉狂の餘りなり。誠は眉目もよいものを。女へそれは誠か。シテへ中々に。地へ中々に／＼。いふ人の眉目のよういは。田中權之守のまゝ娘婿になりたや。シテへ南無三寶。なういとしい人。ちやとわたしめ。女へ心得ました。ト言うて二人入るなり。

番外曲

岩太郎（いはたらう）

大藏流

シテ　渡守岩太郎
アド　小太郎
（入道具）

シテ〽これは神崎の渡守で御座る。某も元は勢州鈴鹿山に於て。岩太郎と申す名を得たる盗人で御座るが。ある仔細あつて。拾ヶ年以前に此の處へ忍び落ち。かやうの渡世を致しまする。又今日も渡し場へ出て。往來の者を乗せ。よからう者ならやぎ致さうと存ずる。アド〽罷り出でたる者は。勢州鈴鹿山に住居し。岩太郎と申す人に仕へし。小太郎と申す者で御座る。頼みたる岩太郎殿は。十ヶ年以前にさる仔細あつて。鈴鹿山を忍び出て。行衞も知れずなられて御座る。久々行衞を尋ぬる所。此の程承れば。津の國の邊りに御座る由承つて御座る。某は幼時で御顔も委しく覺えませぬ。さりながら。私の親は年寄つて。御尋ね申す事も成りませぬに依つて。某御尋ね申し。御供致いて參る樣に申し附かつて御座る程に。唯今より津の國へ參りまする。先づそろり〳〵と參らう。さてまた此の樽は親の手作りに致された酒で御座るが。岩太郎様が兼ねて御酒がお好きで御座るに依つて。御目にかゝり。上げてくれいと申しまする程に。土産に提げて參ることで御座る。いや何かと申すうち渡し場へ出た。渡守は何方に居らるゝか知らぬが。いやつうとあれに見ゆる。いそいで呼ばう。ほおい〳〵。シテ〽いや乗人があると見ゆる。急いで船を寄せよう。ほおい〳〵。アド〽船頭殿御苦勞に御座る。シテ〽さあ〳〵。船をさしてゐる。早う御乗りやれ。アド〽心得ました。やつとな。シテ〽おゝあぶない〳〵。こなたは船に乗つたことが無いと見ゆる。アド〽此の様な船にはつひに乗つたことが御座らぬ。シテ〽さう見えた。さて船を出すが。何も用はおりないか。アド〽何も用は御座らぬ。出して下され。シテ〽心得た。えゝい〳〵。扨そなたは何やらよい物をお持ちやつたの。アド〽これはさる方への進上物で御座る。シテ〽進上物とあらば結構な酒であらうの。アド〽左様にも御座りませぬ。シテ〽えゝい〳〵。さて今日は嵐が強うて寒い日ではおりないか。アド〽仰せらるゝ通り寒い日で御座る。シテ〽えゝい〳〵。扨ちとこなたに無心が御座るは。アド〽それは如何様なことで御座る。シテ〽別の事でもおりない。そなたの前にある樽を一つ振舞うておくりやれ。アド〽是はいかな事。外々へ進上に持つて行く物を。振舞うて能いものでおりやるか。シテ〽近頃尤もではあれども。今日は殊の外の嵐で。手が顫へて櫓が押されぬ。唯一つ振舞うておくりやれ。アド〽やあ。こゝな人は聞き分けの惡しい。進上に持つて行く酒ぢやと云ふに。どうあつてもなりませぬ。シテ〽さてはこれ程に云うても。ならぬぢやまで。アド〽くどい事をおしやる。ならぬと云ふに。シテ〽それならば能い。呑むまい。笑ふ。とは云ふものゝ。二つとは云ひますまい。唯一つ振舞うておくりやれ。アド〽扨々聞き分けの無い人ぢや。どうあつてもならぬと云ふに。シテ〽よい〳〵。最早呑むまい。身共も今朝から此の渡し場へ出て居て。手が凍えて櫓が押されぬ。此の上は船が流れうとまゝよ。知らぬぞ〳〵。アド〽あゝ恐ろしや〳〵。流るゝは〳〵。留めて下され〳〵。振舞ひまする〳〵。シテ〽何ぢや振舞ふ。アド〽なか〳〵。シテ〽それはまことか。アド〽まことで御座る。シテ〽眞實か。アド〽ひとすぢで御座る。

シテ〽それならば。留めてやらう。やつとな。そりや留まつたぞ。アド〽其のまゝ留まりました。シテ〽さあ〳〵。一つ振舞うておくりやれ。アド〽心得ました。さりながら。唯一つで御座るぞや。シテ〽何がさて一つでおりやる。アド〽いきまするぞや。そりや〳〵。シテ〽おゝ丁度ある。アド〽最早口をしまひまする。シテ〽さて物でおりやる。ありやうは今朝から吞みたい〳〵と思ふ所へ吞んだれば。ひいやりとばかりして風味が知れぬ。今一つおくりやれ。風味を覺えよう。アド〽最前より一つの約束で。最早口をしまうて御座る程に。ゆるして下され。シテ〽一つ振舞ふも二つ振舞ふも同じ事ぢや。三つとは申すまい。ひらに今一つ振舞うておくりやれ。アド〽それならば是非に及びませぬ。最早これきりで御座るぞや。シテ〽何が扨これきりでおりやる。アド〽また注ぎまするぞ。そりや〳〵〳〵。シテ〽おゝ丁度おりやる。アド〽今度こそ口をしまひまする。シテ〽扨も〳〵。是はむまい酒ぢや。身共も酒を好んで吞めども。これ程むまい酒は今迄吞うだ事がない。扨そなたはどれからどれへ行くとおしやつたの。アド〽私は勢州鈴鹿山の者で御座るが。十ケ年以前に鈴鹿山をひらいた御方が御座るが。此の程承れば。津の國に御座る由承り。かやうに尋ねて參ることで御座る。シテ〽それは知れにくい尋ねものぢや。いや〳〵それに就きちと思ひあたる事がある。今一つ振舞うたならば。それを教へておまさう。アド〽やあ〳〵。思ひ當る事がある。シテ〽なか〳〵。アド〽それは悦ばしい事で御座る。今一つ振舞ひまする程に。何卒教へて下され。シテ〽それならば。また注いでおくりやれ。アド〽つぎまするぞ。そりや〳〵。そりや〳〵。シテ〽おゝ丁度おりやる。アド〽さあ〳〵。早う教へて下され。シテ〽別の事でもおりないが。此の先に田邊の明神と云うてあるが。此の神主樣に會うて頼めば。其のまゝ其の樣な事は知れる事でおりやる。アド〽それは能い事を教へて下さつて忝う御座る。急いで參り頼みませう。其の道はいづれへ參りまする。シテ〽其の明神へは。渡しなたり。向うへ三里ほど松原を行き。左へひしたなると宮造りがある。其の神主に逢うて頼ましめ。アド〽近頃忝う御座る。斯樣に承る上は。少しも早う參りたう御座る。船を出して下され。シテ〽何かさて。お蔭で手が暖まつた。船を急ぎませう。えいゝ〳〵。えいゝ〳〵。よせよせよ。磯際の。粟津に早く着きにけり。船が着いた。上らしめ。アド〽心得ました。えい〳〵やつとな。船賃忝う御座る。かう參りまする。シテ〽はつ御座るか。アド〽さらば〳〵。シテ〽よう御座つた。アド〽はあア。さても〳〵。馳走な事は致すまいものぢや。唯今の者は某を尋ねありく小太郎と申す者で御座る。すでに名乘らうと存じて御座るが。此の體を見らるゝも如何と存じ。知らぬ體にもてないて置いて御座る。これより神主の體に取り拵へ。田邊の明神へ參り。今の酒は申すに及ばず。賽物などもちやぎ致さうと存ずる。シテ〽なう〳〵嬉しや。先づ身拵へを致さう。船頭がよい事を教へくれて御座る。急いで田邊の明神へ參り。尋ねて見うと存ずる。扨も〳〵。不思議な事もあればあるもので御座る。あれへ參り。神主殿に會うて承つたならば。知れぬと申すことは御座るまい。其の上。旅はなさけ。人は心と申すが。今の樣に教へてくるゝ人が無ければ。我等ごときの樣な者は。とこほうりもなう尋ねてあらう。いや。何かと申すうち松原へ出た。これを眞直ぐに急いで參らう。扨も〳〵。長い松原ぢ

や。船頭の云はれた通り。最早三里も參つたが。すなはち左へたなる道がある。これを左へひじたなれば。はあ。これに祠がある。急いで神主殿を尋ねて見よう。いや神主殿御座るか。御座りまするか。シテへ誰でおりやる。アドへ私で御座る。シテへ何かは知らぬが。そなたは人を尋ねて歩く人ぢやの。アドへさて〳〵。不思議によう當る。いかにも其の通りで御座る。さて其の尋ぬる人は息災で御座るか。何卒みて下されい。シテへどれ〳〵。みておまさう。たんちやうけんひきんなんば、〳〵。いやこれ〳〵。尋ね人はいかにも息災にして。おつつけそなたに逢ふとある。アドへそれは悦ばしい事で御座る。さてそれは何れへ參れば逢はれまする。居所方角を指して下されい。シテへこれはむつかしい事をおしやる。さりながら。これも祈念のすれば。ざつと知れる事ぢやが。夥しい賽物がいるが。上げさしますか。アドへ知れさへ致しまするならば。如何やうにも致しませう。幸ひ唯今持ち合せました。これを進じまする。何卒御祈念なされて下され。シテへいや〳〵。日本國中の神々呼び出し。祈念をするに依つて。供物を夥しう上げねばならぬ。此の様なことではならぬ事ぢや。アドへさりながら。外に持ち合せも御座らず。何卒これで御祈念なされて下されい。シテへそれ程おしやるに依つて。祈念して進じたいものぢやが。これには神酒がいる。いや見れば樽を持つて居る。それを上げさしめ。アドへいや〳〵。尋ぬる人に會うて進ずる酒で御座る。是はなりますまい。シテへこれは如何な事。ただ供へさへすれば。後は戻いておます。是へ出さしめ。アドへそれならば。必らず後は戻いて下されい。シテへ心得た〳〵。そなたも是へ寄つておりやれ。アドへ心得ました。シテへ抑も天照御神と申すは。伊弉諾伊弉册の尊。天の岩倉の苔莚にて。男女の語らひをなし。茲に一女三男をまうけ給ふ。一女とは天照大神。山田が原に神留まりましまして。白きを人間と定め。黒きを牛馬と定め。一切の衆生を濟度せんがため。内宮が十末社。外宮が十末社。合せて百二十末社の御神。中にも荒神と祝はれ給ふは。雨の宮風の宮。北には拜宮。鏡の御社。淺間ヶ嶽には福一萬。虛空藏。天の岩の岩戸は大日如來。惣じて日本國中の大小の神祇を請動し奉る。唯今の田邊大明神。すみやかに引き合はさせ給ふべし。謹上再拜〳〵。アドへ近頃忝う御座る。さて何とて御座る。シテへ先づ以つて悦ばしめ。此の程かの者當社へ日參するによつて。此の處に待合はせ居たならば。逢はるゝであらうとの御示驗でおりやる。アドへそれは悦ばしい事で御座る。何卒この處へ置いて下されい。シテへ易い事。ゆるりと話してお行きやれ。アドへ有難う御座るシテへ何と此の處は淋しいではおりないか。ちと持ち合はいた神酒を開いては何とあらう。アドへあれは尋ぬる方へ進ずる酒で御座る。ゆるして下され。シテへあゝらこゝな人はむさとした事を云ふものぢや。ようものを思うておみやれ。神へ神酒を上げ。祈念致せばこそ。尋ぬる人に逢ふ縁もあると云ふものぢや。そなたの様な人をこゝもとへ置くことはならぬ。早う戻らしめ。さあ〳〵。早う行かしめ〳〵。アドへ先づ待つて下されい。とにかく御目にさへ懸くれば。申し分は如何やうにもなる事で御座る。是非に及ばぬ。一つ振舞ひまする。何卒この處へ置いて下されい。シテへおゝよい合點ぢや。さあ〳〵。それならば一つ注いでおくりやれ。アドへそりや〳〵。シテへおゝ丁度おりやる。アドへ丁度御座りまする。シテへさてもむまい事ぢ

や。ちやちとすき腹へ呑うだれば。一しほむまいことぢや。其の上酒を好んで呑めども。これ程の酒は呑うだ事はない。渡し場近くでつめさしましたが。アドへありやうは。是は手造りで御座る。シテへおゝ手造り。アドへなか／＼。シテへ手造り／＼。それお見やれ。常の酒とは違ふと思うた。手造りなれば。今一つおくりやれ。アドへ何が扨。また酌を致しませう。そりや／＼。どぶ／＼／＼。シテへおゝ丁度おりやる。扨も／＼。呑めば呑むほどむまい酒ぢや。とてものことに今一つ注いでおくりやれ。アドへ數よう三ごん參れ。そりや注ぎまする。シテへさい／＼慮外におりやる。アドへどぶ／＼／＼。シテへおゝ丁度おりやる。人によつて。朝は嫌ひぢや。晩はのぼせるなどと云ふが。身共は朝でも晩でも。是さへ見れば機嫌におりやる。アドへ呑み口は其の通りで御座る。シテへ又たべまする。アドへゆるりと參れ。シテへえへん／＼。アドへ何となされました／＼。シテへすき腹へ大盃の三つ目を。つうかけ／＼呑うだれば。ちとむせておりやる。ゆるりと居て呑まう。そなたもろくにおりやれ。アドへ私にはかまはせらるゝな。シテへ惣じて酒も打ちくつろいで呑めば。一入むまい事ぢや。アドへさうで御座らうとも。シテへおゝむまや／＼。さてそなたは參らぬか。アドへ私も常はたべまするが。今日は下されますまい。シテへ常に呑む口を持つて。呑まぬと云ふ事があるものか。身共がついでおまさう。アドへそれならば一つ戴きませう。シテへきこしめせや／＼。壽命久しかるべき。アドへやんや／＼／＼。お蔭で草臥れを忘れて御座る。シテへ身共もよい機嫌になつておりやる。アドへまたこなたへたげませう。アドへ心得ました。盃も浮み出でて。友に逢ふぞ嬉しき此の友に逢ふぞ嬉しき。シテへやんや／＼／＼。またそなたへさしませう。アドへ戴きませう。まあちと呑みぶりが惡しうならせられた。いかう醉うたと見える。シテへなう／＼こゝな人。五つや七つの酒に醉ふ身共ではおりない。さあ／＼呑ましめ。アドへまた戴きませう。シテへさゞんざ濱松の音はさゞんざ。アドへやんや／＼。シテへとてもの事に一さし舞はうか。アドへ面白うは御座りませうが。ちと醉はせられたやうで御座る。あぶなう御座るぞや。シテへいか程呑んでも醉ふことでは無い。どれ／＼舞うてみせう。所々御參りあつて。とう下向召され。科なばいちやが貢ひ參らしよう。アドへやいおのれ。最前の船頭ではないか。シテへゑおらむさとした船頭に。此の樣な髭があるものか。アドへそれ見よ。おのれが髭は下に落ちてあるぞ。ようも／＼身共をたらいたな。何としてくれう。シテへ先づ待て。ありやうは。そちの尋ぬる岩太郎は身共ぢや。アドへまだそのつれを云ひをる。ただ置くことではないぞ。何としてくれうぞ。シテへ許してくれい／＼。アドへ最前の寶物を返せ。あのすつぱ。捕へてくれい。やるまいぞ／＼。

浦島（うらしま）　大藏流

シテ　祖父
二郎　孫
龜の精　（入道具）

シテへこれは此の所に住居致す宿老で御座る。此の間は引きつゞき天氣も惡しう御座つたが。今日は珍らしう良い天氣になつて御座るによつて。三人の孫共を同道致し。濱邊に參り海上の晴れた氣色を眺め。心を慰めうと

存ずる、イヤなう〳〵孫達おりやるか。居さしますか。二郎へいや祖父御の呼ばせらるゝさうな。いやア太郎殿三郎殿は御座らぬか。じやあ。いやもし呼ばせられて御座るか。シテへいかにも呼うでおりやる。此の間は天氣が惡しうて何方へも出ねば。心が屈して惡しい。今日は天氣も良いによつて。そなた達を同道して濱邊に行き。海上の晴れた景色を眺め。心を慰めうと思うて。呼び出しておりやる。二郎へそれは一段とよう御座りませう。私も今日は天氣もよう御座るによつて。釣を垂れうと存じ。拵へを致いた所で御座る。いかにも御供致しませう。シテへそれならば。其の由太郎三郎へも云うでおくりやれ。二郎へ只今私の承つて御座れば。二人共早朝より渡世に出たと申しまする。シテへやあ〳〵渡世に出た。二郎へなか〳〵。シテへやれ〳〵。渡世に出たと聞けば祖父も悦ぶことぢや。それならばそなたを同道して行かう。さあ〳〵おりやれ〳〵。二郎へ參りまする〳〵。シテへさて今迄そなたが釣をたれた話も聞かぬが。いつも釣らしますか。二郎へ只今まで致いた事の御座らぬ。此の間友達共に誘はれ參つて御座るが。殊の外面白いもので御座る程に。それよ

り度々參りまする。シテへそれ〳〵。隨分樂しみなものでおりやるは。イヤ何かと云ふうちに濱邊へ來たは。二郎へ誠に濱邊へ參つて御座る。シテへ扨も〳〵。打ち開いてうらゝかな良い景色ぢや。身共は此の所にゆるりと居て慰まう。そなたは其のあたりで釣を始めさしめ。二郎へ畏まつて御座る。シテへ扨も〳〵よい天氣かな。風も無く雲も見えず。あゝうらゝかなよい天氣で御座る。さて〳〵これは心がせい〳〵と致す。二郎へどれ〳〵。其の儀で御座らば。私は此の邊りで釣を始めませう。何卒よいものを釣り上げて祖父御に御目にかけたいもので御座るが。やあ。何やら引くは〳〵。これは夥しう引く。何やら大きなものが懸かつたと見える。シテへ何と懸かるかの。二郎へいやあ〳〵。大きな物が懸かつたと見えまして。殊の外强う引きまするは。シテへさて〳〵それは樂しみあり。早う引き上げておみやれ。二郎へ心得ました。扨も〳〵重いは〳〵。やつとな。これは何ぢや。扨も〳〵これは珍らしいものが懸かつた。笠なうつむけた樣なもので。手やら足やら四つ御座る。これは不思議なものぢや。いやあ〳〵。これは何で御座る。シテへどれ〳〵。これへ見せさしめ。

二郎へとくと見て下されい。シテへどれ〳〵。どの樣なものぢや。さて〳〵これは珍らしいものが懸かつた。これは龜と云ふもので。つうと目出度いもので御座る。二郎へやあ〳〵。噺に聞き及うだ龜と申すはこれで御座るか。シテへなか〳〵。二郎へそれはよいものが懸かつて御座る。何れも〳〵此の由申し。晩の酒の肴に致しませう。シテへいや〳〵。龜は齡を持ち目出度いものなれば。命を助け放してやらしめ。二郎へこれは如何な事。一たん漁夫の釣上げた魚を放せば。其の日は魚が懸からぬと申しまする。なか〳〵放す事はなりませぬ。シテへいや〳〵。其の龜については恐ろしい物語がある。語つて聞かさう。よく聞きやれ。二郎へ心得ました。シテへ昔天笠に提婆といふ者のありしが。何にてもあれ物の命を十萬取るべしと誓を立て。殺生をする程に〳〵。九萬九千九百九十九の命をとり。今一つとなつて。彼方此方を尋ねしに。一つの龜を見付け。やがて害せんとせしに。提婆が親これを見付け。龜は齡を持ち目出度いものなれば。放いてやれよとありけれども。提婆はなか〳〵合點せず。既にかうよと見えし所に。不思議なるかな。忽ち大地は裂け。直に提婆は

此の間に沈む程に。元より親の慈悲なれば。髮を握り引立てしに。髮は手元に殘りしも。提婆は無間へ沈みしとなり。なんぼう恐ろしい物語ではおりないか。二郎へさて〳〵恐ろしい御物語で御座る。シテへ身共が思ふは。それほど性あるものなれば。よく〳〵宿命を含めて放してやつたならば。祖父の腰の痛むも癒ゆるであらうによつて。其の龜を祖父に呉れさしめ。二郎へ何がさて。さやうの御物語を初めて承つて御座る。此の上は此方へ上げまするによつて。早う放してやらせられい。シテへオヽよい合點ぢや。これへ呉れさしめ。二郎へ心得ました。シテへやい己れは仕合せもいぢや。既に命を取らるゝ所を我が放して取らする。其の代りに祖父が年寄つて腰の痛むを直いて呉れい。やつとな。はあア。ト引く。悦ぶは〳〵。二郎へそれ〳〵。殊の外勇ましう沖の方へ參りまする。シテへあれ〳〵。つう引くと沖へ行くは。二郎へ其の通りで御座る。シテへや。浪間に這入つてしまうた。二郎へ仰せの如く浪間に這入つて御座る。シテへ最前から長物語に日も晩した。いざ戻らう。二郎へよう御座りませう。シテへさあ〳〵おりやれ〳〵。二郎へ參りまする〳〵。龜の精。イロにて呼掛く。

龜へなう〳〵浦島殿に申すべき事の候。シテへ不思議や沖の方よりも。我が名を呼ぶは誰やらん。龜へこれは年經し龜なるが。命助かる報恩に。御身の壽命萬年の、齡を籠めし此の箱を。與へん爲に來りたり。神變奇特見給へや。同へ與へし箱の蓋取らば。血氣盛んの身とならん。此の時は萬年の。齡延あらましと。磯邊に箱を置くとみて。浪間に隱れ失せにけり。立つ浪に紛れ失せにけり。二郎へさて〳〵不思議な事にては御座らぬか。シテへ誠にこれは思ひもよらぬ事ぢや。二郎へ何にもせよ。箱の蓋を取つてみさせられい。シテへなうぶつきようやの〳〵。何程不思議な箱ぢやと云うて。此の祖父が若うなつてよいものでおりやるか。二郎へいや〳〵。神變奇特のない事は御座りませぬ。是非とも蓋を取つて見させられい。シテへそれ程におしやるならば。取つて見よう。是へ持つて來てお呉りやれ。二郎へいで〳〵さらば奇特を見んと。磯邊の箱を祖父の前に差し出せば。シテへ餘りのことの不思議さに。立寄り蓋を取りあぐれば。同へ汐煙ぱつと立つよと見えしが。髮のあたり髭のまはりがぞゞめきて。元の白髮は白浪の。若き男となりにけり。さてこそ壽命萬年の齡ひたがひなしと。渚に向ひ禮拜しつゝ。さてかの箱をおし戴きて。孫もろともに喜び勇み。孫もろともに喜びて。我が家をさしてぞ急ぎける。

右流左止（うるさし）

シテ　鹽飽の藤造
女　茶屋の女
（入道具）

女へ妾は此邊りの者で御座る。今日も旅人に茶を商はうと思ひまする。ト前垂の上に座す。葭垣の茶前に出す。シテへこれは西國方に隱れもない鹽飽（しあく）の藤造と申す者で御座る。某幼少より風雅の道にすいて。さま〳〵心懸けて御座るが。悴も年頃に成つて御座るに依つて。一跡を讓り。姫共もそれ〳〵縁に附けて。何れも繁昌致すに依つて。最早心にかゝる事も御座らぬ。此の上は諸國を廻り。名所舊跡をも見物致さうと存ずる。先づそろり〳〵と參らう。誠に。幼少よりすきの道とて。古い物語なども自づと覺え。それゆゑ人にも用ひらるゝは。偏に風雅の徳で御座る。此の上名所舊跡をも尋ねて。

彌々風雅に榮えうと存ずれば。此の樣な樂しみは御座らぬ。イヤこれは風景の能い所へ來た。ハア。あれ〳〵。帆かけ船などが走るは。またこちらへもくるは。濱邊の松の景色。扨も〳〵面白い景色ぢや。とても〳〵の事に磯の樣子を見物致さう。是は先づ何と言ふ所ぢやや知らぬ。尋ねたい物ぢやが。ハハア。磯打浪の樣體。扨々面白い事かな。貝などが有りさうなものぢやが。ト色々の工夫シカ〳〵あるべし。如何さま磯が荒いに依つて。干潟もなければ。貝などもないと見えた。茶でも飲うで休み。ちと景色を眺めたいものぢやが。幸ひ爰に茶屋がある。是で沐まう。女へなう〳〵。茶をまゐらぬか。シテへ幸ひ咽が渇きまする。一つ下されい。

女へ先づゆるりと休ませられい。シカ〳〵。下に居る。シテへさて〳〵是は何と言ふ所で御座る。女へ是は播州明石の浦で御座る。シテへ扨は明石の浦で御座るか。女へ中々。シテへ聞き及うだ所で御座る。並々の風景でないと思ひました。女へサア〳〵。茶を參れ。シテへ是へ下されい。シカ〳〵。茶を出して呑む。女へも一つ參らぬか。シテへも一つ下されい。シカ〳〵。呑む。扨あの嶋は何と言ふ嶋で御座る。女へあれは淡路島で御座る。シテへ誠に聞及うだ。月落ちかゝると詠み置かれた島で御座るか。女へこちらの島が笛が鳴で御座る。今日は天氣がよう御座るに依つて。アレ〳〵。遙に住吉も見えまする。シテへ扨も〳〵。聞き及うだより見事な風景で御座る。女へサア〳〵參れ。ト茶を立て出す。シカ〳〵。呑む。シテへさて見れば此方は若い人ぢや。獨り御座るか。御亭主は留守で御座るか。女へ妾は年寄つた母が一人御座る。これを大切にして。兩人暮らしまする。シテへすれば御亭主も御座らぬか。女へ中々。シテへ扨々それは氣の毒な人ぢや。さりながら。いつ迄も若うては居ぬものぢやほどに。夫を持つて世を立て。親にも孝行を盡しませ。女へなう〳〵。いや〳〵。夫を持てなどとは思ひもよらぬ事で御座る。なううるさやの〳〵。シテへこれ〳〵此方は異な事を言ふ。その右流左止と言ふ詞を。知つて仰せあつたか。知らいで仰せあつたか。女へ何をも存ぜず申しました。シテへ知らぬと仰せあれば語つて聞かせう。女へそれは忝う御座る。[illegible] 女へさて〳〵その樣な事とも知らいで。麁相な事を申しました。さりながら。うるさしと言ふことは。草紙にも歌にも御座らぬか。シテへいかな〳〵。ない事でおりやる。女へ伊勢物語にも御座らぬか。シテへ扨々こなたは小ざかしい事を言ふ。伊勢物語と言ふは。人皇五十一代。平城天皇の皇子。阿保親王の御子。在原の中將業平。好色人にすぐれ。榮花身に餘りたるを書集め。伊勢物語と號したる物語にて候間。中々其のうちにも曾て候まじ。ない事でおりやる。女へ扨々其方は片意地に云はせらるゝ。伊勢物語の中には。歌にも御座るぞや。シテへそれは何と言ふ歌に有る。女へ武藏あぶみ。さすがにかけてたのむには。語るもつらしとふもうるさし。と御座れば。さのみ言はぬ言葉でもないかと思ひますれども。妾は天神を信仰致すに依つて。此後は。成程この詞は嗜みませう。シテへ扨も〳〵こなたはやさしい人かな。すれば歌の道に委しい人と見えた。女とあなどつていらぬ物識りだてを言うて。近頃恥しう御座る。某は西國方に隱れもない鹽竈の藤造と言ふ者で御座るが。幼少より風雅の道を好み。此度諸國へ名所舊跡を見物致さうと思うて罷出たが。これより都へ上り。歸りに立寄りませう程に。此方の弟子にして。歌道をも教へて下されい。

女へなう恥しい事を云はせらるゝ。さりながら。妾もすきの道で御座れば。承つた事ど

もはゝお話し申しませうぞ。シテへそれは忝う御座る。それならば もうかう參りませう。

女へなう〳〵。天神へ上げた神酒のしたりが御座る。一つ參つて御座らぬか。シテへそれは忝う御座る。それならば一つたべませうか。女へそれに待たしませ。シテへ心得ました 扨も〳〵。不思議な事で明石の茶屋で酒を呑うで。風景を見る事ぢや。女へさあ〳〵一つ上りませ。シテへ是へ下され。女へ妾がお酌。ト言ふ。シテへ慮外。ト言ふ。常の如し。さらば是なこなたへ進じませう。女へ妾はさゝはたべませぬ。まだ御座る程に。も一つ參れ。シテへも一つたべませう。シカ〳〵。女酌する。やれ〳〵。嬉しい事ぢや。もう納めさしませ。女へさうあらば納めませうか。シテへ身共が酌を致さう。一つ參れ。女へ妾はたべませぬ。シテへさう言はずとも一つ參れ。ト無理に注ぐ。女へ是は〳〵。丁度になりました。シテへどれ〳〵。肴を致さう。女へ一段とよう御座りませう。宇治の晒舞ふ。女へよいや〳〵。シカ〳〵。シテへ扨また旅も長う御座る。最早かう參りませう。

女へあら名殘多しや。シテへ此方も名殘なしけれど。あの日を御らうじ。女へ山の端にかゝつた。めい〳〵さらり〳〵と。梅はほろりと落つるとも。まはりは枝にとまつた。とまり〳〵とまつた。トヽヽイヤア。

右流左止語

忝くも延喜の帝の閣下に。時平の大臣菅丞相大納言殿。この三人帝の御前へ參り給ふ。其時時平の大臣は先き。菅丞相は其の次ぎ。大納言はあとに立ち給ふ。菅丞相は世になく御せいひきく御座ありたると申す。後と先とは高うして。中ひきく候間。時平大臣立戻つて大納言と目と目を見合ひ。中の低きを鼓とたとへ。助鼓と仰せられ。どつと御笑ひなられし所に。菅丞相は世に超え利根第一の御方なれば。助鼓とは鼓の事。鼓は中の低き所なおつとつて。兩面を打つと云うて。から〳〵と笑ひ給へば。御兩人は左右の眼に角を立て。兩面を打つとは。あとゝ先との面を打つかとて。大きに怒り給ふ。それより菅丞相は御歸りあり。御兩人は帝に參り給ひ。菅丞相の御事を樣々に數をつられ。無き事をそらし給ふ。帝は何となく右流左止と綸言ある。此の詞を心得給はず。文字にうつし御覽じければ。うるさしのうはこれ右。るは流す。さは左。しは止むなり。其頃菅丞相は右の大臣とやらんなれば。菅丞相を流しとどめよとて。流し申されければ。遠流の身となりて。苦惱に耐へかねて。高き山にあがり。天に向ひ。梵天帝釋に歸洛の本意を御祈誓候所に。天より卷物ふり降り。南無天滿大自在天神と御官なされ給ひ。鳴る雷となつて都に上り。讒奏の御方を平らげ。樣々の祟りまし〳〵て。今都の主北野の天滿大自在天神と祝はれ給ふなり。菅丞相も右流左止の一言にて。憂き事に遭はせられて候ぞ。かまへて〳〵。是より以後。うるさしと言ふ事仰せ候な。

鬼丸（おにまる）

シテ　鬼丸
アド　僧
小アド　祖父（鬼丸の親）

僧次第へ行方定めぬ旅なれや。行方定めぬ旅なれや。身のはて何と成るらん。是は西國がたの者で御座る。此度思ひ立ち東國修業致さうと存ずる。廻る。誠に。出家程心安いものはない。衣一くわん珠數一れんさへ持てば。何方へ參らうと儘な事ぢや。イヤ何かと云ふうち勢州鈴鹿山に着いた。是は日が暮るゝ。何と

ぞ宿が借りたいものぢや。是に家居がある。先づ案内を乞はう。（樂屋より祖父出る。常の如し。）僧へ旅の出家で御座る。一夜の宿を貸して下され。祖父へ成る程易い事で御座る。先づかう通らせられい。僧へそれは忝う御座る。（ト云ひ。脇座へ行き。笈錫杖脇に置く。祖父は常座中に居る。）祖父へさて此方はどれからどれへ御座る。僧へ愚僧は西國がたのもので御座る。此度思立ち東國修行致すことで御座る。祖父へ扨々それは御殊勝な事で御座る。僧へ是に持佛堂が御座る。御本尊はどなたで御座るぞ。祖父へ某は常々清水の觀音を信仰致す。則ち本尊は觀世音で御座る。僧へ近頃結構な御志で御座る。觀世音を信仰させらるれば。三惡道を逃れ。臨終正念に守らせらるゝ。其外様々の奇瑞の有ることで御座る。いよ／＼信仰させられ。祖父へ私も昔へはさる者で御座つたが。仔細あつて此處に引込うで居まする。鬼丸と申して一人の悴が御座る。何かと渡世をして養うてくれます。僧へ扨々御子息は奇特で御座る。祖父へ御草臥れで御座らう。（祖父大小の前に居る。僧は笈をはづし寢る。）シテへ是は鈴鹿山に住居する。鬼丸といふ者で御座る。某親を一人持つたが。養ふ手立てが無いに依つて。街道へ出て強盗をして渡世いたす。夜前某が

宿へ旅の御坊が泊られたと聞いた。道に待つて居て剝ぎ取らうと存ずる。（ト云うて太鼓座へ入る。僧起きる。）シカ／＼常の如し。僧へ夜の明けぬうちに立ちたいものぢや。さりながら。夜の明けぬうち立つたらば。亭主が止むるであらう。何としたものであらうぞ。とにかく亭主に隱れて立たう。（ト云うて。笈を負ひ。隱れて立つ。シテ後より詞をかける。）シテへやい／＼。そこな者。僧へ何とぢや。シテへ汝が着てゐる物を此方へおくせ。僧へ扨は汝は盗賊ぢやな。シテへまだそのつれな事を云ふ。己れおくさずば此の長刀にのするが。おくさぬか。僧へ長刀に乘せらるればとて。少しも厭ふことはない。さりながら。是がほしくはやらう。（笈衣をやる。眞中にて渡す。シテ柱へ持行き置く。シカ／＼。）汝もよう物を聞け。人の物を取らずとも。世渡りは有らうに。あさましい盗賊をすると云ふことがあらうか。佛も殺生偸盗邪婬と戒めさせられて。此の三つは身より出す罪ぢや。中にも偸盗は別して戒め置かせられたことぢや。今よりはふつ／＼お止りやれ。シテへ尤もなれども。親を養ふ孝行の道なれば。少しも苦しうない。僧へさう思へども。此の事を止まらぬに於ては。此の世にては長く天命に盡き。愛染明王にも見離され。死しては汝が惡心故。親を

も共に無間地獄へ墮罪する。シテへなに。親も共に地獄へ墮ちると云はせらるゝか。僧へ或る時は獄卒共。鞭をふり上げ劔の山へ追ひのぼす。登らんとすれば下れといふ。下らんとする時は。怒れる聲を出だし。急げ／＼と追立つる。これ皆地獄にあらずや。己れが罪己れを責むる。登れば劔身を貫く。泣かんとすれど涙出ず。猛火眼を焦す。叫ばんとすれど聲出でず。鐵丸咽をふさぐが如し。其時は如何程くやみ。口に佛號を唱ふといへども。其のかひなし。永く親子共に浮むこと有るべからず。何と恐ろしいことではないか。シテへ扨々恐ろしい事を承りました。すれば今迄親孝行ぢやと思うて致した事は皆惡で。親へも通じ。二人共に地獄へ墮つることで御座るか。シカ／＼。扨も／＼悲しいことで御座る。（泣く。）僧へこれ／＼。それ程に思はしまさば。爰に有難い文が有る。鈴鹿山盗者鬼丸といふことぞ。（切戸より祖父入る。）シテへ何と云はるゝ。鈴鹿山盗者鬼丸で御座るか。扨も／＼恐ろしいことぢや。（泣く。）今の御出家が見えぬ。まだ何方にも行かるゝ間は無いが。合點のゆかぬ事ぢや。さりながら。有難い文を教へて下された。鈴鹿山盗者鬼丸。（何遍も云ふ。）祖父へ夜前御宿を借した御

出家が見えぬ。其上鬼丸が踊り狂ふ様の外道い、見て参らう。されぼこそ此邊に居る。汝は山賊の棟梁か。其の上汝が持てる物は。夜前の御出家の笈頭か。現に何として親を養ふと云へば。強盗をするか。扨々憎い奴ぢや。何としたものであらうぞ。シテへ何を隠しませう。今迄親を養ふ孝行の爲ぢやと存じて。色々の悪逆を致いた。夜前宿を貸させられた御出家を剝取つて御座るが。色々の教化をなして恐ろしい事を申されました。其の上有難い文を授けられて御座る。シテへ。鈴鹿山盗者鬼丸といふまで御座る。泣く。祖父へ鈴鹿山盗者鬼丸。鈴鹿山盗者鬼丸。扨々己れは物を書かれに從つておぢや。鈴鹿山盗者鬼丸といふは。鈴鹿山の盗人は鬼丸と云ふことぢや。シテへ扨は其様な事で御座るか。泣く。祖父へいよ/\憎い奴ぢや。嘗の人を剝取るさへあるに。出家を剝取ると云ふ様な事があるものか。己れが様な奴は。此の長刀で身共が手に懸けてくれう。祖父長刀を取り。近ひ寄る。シテへあゝ御許されませ。祖父へ扨々憎い奴め。シテへあぶない御座る。御許されませ。/\。祖中入後。装束を替へ出家になる。あへ消えすな/\。是は汝が信仰する清水の観音なるが。鬼丸悪を翻し。佛道に引入れうと思ひ。かりに出家となり。教化しければ善心となる。惡に強ければ善にも強い。忽ち鬼丸が悪を翻す事。返す/\も神妙なり。なほ行末を守り護らんと。地へ誠に妙なる御聲なあげし。善哉/\と感じ給へば。鬼丸ともに。大地にひれ伏し合掌すれば。金色の光は虚空に輝ち。紫雲棚引き異香薫じ。忽ち御影は西の空に。忽ち御影は西の空に。あがらせ給ふぞ有難けれ。

鬼が宿　大藏流

シテ　太郎
女

シテへこれは此の邊りに聞えたる太郎と申す者で御座る。某いつぞや片ほとりなる安達原と申す所に住居致す女に。ふと心易くなつて御座るが。いかにも心の凛々しい女で御座つて。某が申す事をとやかく申して。一つも用ひませぬ程に。其後はふつつりと音信も致さねども。何とやら残り惜しうも存ずるに依つて。今一度参り。此度折檻を加へて見うと存ずる。漸う時分もよう御座るに依つて。先づそろり/\と参らう。いつも此の道の物淋しさ。譬へん様もおりない。梟松桂に鳴き。狐蘭菊に棲むといふも。實にか様の所でがな御座らう。イヤ何かと申す內。これは参り着いた。アヽ此の脊戸に這ひ掛かりたる蔦紅葉の。たそがれ時にほのめきたるは。いと心ありげな。これ/\。昔源氏の君とやら。忍びありきの時。五條あたりのあばら家にて。おのれと夕顔の這ひかゝりたるを御覧じ。惟光を召され。あの花折りて参らせよとのたまひしに。惟光立寄り乞ひければ。みめよき上﨟の出で立たせられて。白き扇のつまいたうこがしたるに。此の花を折りて参らせたるが。優にやさしく。源氏の御心にとまりしとや。總じてきらびやかなる宮殿などに。花ひ立つたる上﨟の立ち振舞うたは。さしも有るべき事なれど。かく荒れたる田舍屋に。みめかたちあろうたき女の住ひわびたるは。いとはしたなく。哀もまさるもので御座る。イヤいはれざる獨言を申した。さらば門を叩かう。どん/\。明けてくれさしめ。女立つ。女へあの聲はたしか太郎が聲で御座る。さても/\うるさい事かな。ふと心易くは成つて御座れども。あのやうな男は。妾はいやでけふは何としてやいたもので御座らうぞ。イヤ致し様が御座

る。さん／＼になぶつてかへさうと思ひまする。シテ〽早う爰をあけさしめ。女〽さらば明けて進ぜませう。サラ／＼／＼。さらばこちへ入らしめ。シテ〽づッと通らうか。女〽づつと通らせられい。やれ／＼。懐しう御座つた。けふはどち風が吹いて來さしましたぞ。シテ〽身共もけふに參らうか。明日は來ようとは存じたれど。なりはひに遑なく。心より外に無沙汰を致いた。其上いつ參つても。身共が言ふ事と申せば。とやかくとおしやるに依つてナア。女〽是はいかな事。何しにそなたのおしやる事をいなと申しませう。是まで氣に觸つた事も御座つたならば。堪忍をして。末永く來て下されい。シテ〽ハヽ。わごりよが心が直つたれば。身共の心もはれ／＼と致いた。女〽妾も堪忍をして下されて。嬉しう御座るよ。扨かういふ時には。中直りの御酒でも出うと申す所で御座る。シテ〽近頃尤もの事ぢや。殊更夜さむにもあり。一つ出さしめ。女〽妾もとくより左樣存じたれど。侘住みの恥しさは。有合はせませぬ程に。御大儀ながら今より酒を取りに往て下されい。シテ〽いや爰な者が。此の闇の夜に。何と酒が取りに往かるゝものか。女〽此の原をつうと通り過ぐると。里ばなに酒屋が御座る。それ迄は程も近う御座る程に。ひらに取りに往て下されい。シテ〽いかにも其の酒屋までは。さのみ程も無いが。酒は呑みたし。是非に及ばぬ。いざ往かう。女〽それは忝う御座る。妾は其のうちにけはい化粧を致いて。待つて居りませう。早う歸らせられい。シテ〽さらば往て來るぞ。女〽まうし／＼。シテ〽何事ぢや。女〽此頃里人の噂には。此の原の黒塚より。夜な／＼いか目の鬼が出るとやら申す程に。能く／＼用心をして行かしめ。シテ〽や。何が出る。ともかく行懸かりては。行かねばならぬ。やがて戻るぞ。女〽早う戻らせられい。シテ〽心得た／＼。（シテ中入。）女〽まんまとたらいて御座る。さて鬼が出ると申したも。下心あつての事で御座る。太郎は臆病者で御座れば。爰に童の持て遊びの面が御座る。これを懸けて。再び參らぬ樣に。おどいて遣さうと思ひまする。（笛座にて面をかけ。襖きをかぶり。木座に入る。後シテ橋掛り葛桶を手に下げ。半醉にて出る。）シテ〽あゝ世には情深い人も有るもので御座る。やう／＼辿り／＼酒屋へ往たれば。亭主が申すには。夜も更けたり。殊に寒し。歸路の助けにと。引留められて。煖め酒をひらにしひられ。一つ二つと。丑三つの闇の夜の。鬼一口をも忘るばかりに成りにけり。情は人の爲ならず。（笑ふ。）誠に。よい心持に成つた。さぞ女共が待つてをるであらう。急ぎ戻らう。歸つたぞ／＼。女〽イエ戻らせられて御座るか。シテ〽これは何と思うてか。立派な出立ちでおりやる。女〽妾の事は扨おき。そなたにはまたことない機嫌で歸らせられた。何ぞ子細が御座るか。シテ〽是はつつと子細の有る事ぢや。追掛けて云うてきけよう。先づ此の樽を此邊りに置いて。口も切らう程に。盃を取つておりやれ。女〽心得ました。シテ〽ウヽ能い匂ひが致す。女〽さらば盃で御座る。シテ〽どれ／＼。是へおくりやれ。先づ身共より呑んでそなたへさゝう。女〽それが能う御座らう。シテ〽ウヽ是は思ふよりも味い酒ぢや。今一つ續けよう。女〽はやどこやらで呑うで歸られた程に。醉ひは召されまいがの。（シテ笑ふ。）シテ〽酒の醉はいでは。さらば盃をさゝう　女〽頂きませう。シテ〽身共が酌をしておまさう。女〽是は慮外で御座らう。シテ〽そりや／＼／＼。女〽だゝ丁度御座る。シテ〽なみ／＼とある。女〽これをそなたへ上げませう。シテ〽さらば今一つたべよう。扨も

〳〵。たぶれば、ふる程味い酒ぢや。また差さう。女〽頂きませう。シテ〽そりや〳〵〳〵。女〽また丁度御座る。シテ〽丁度ある。さて酒屋の亭主の情深い事を聞いておくりやれ。女〽何と致しましたぞ。シテ〽夜も更けたり。歸路も暗からんとて、大盃で一つ二つ三つ。笑ふ。あのやうな親切な和御寮にも逢ばかりあやからし度いものぢや。笑ふ。女〽これはいかな事。はや大きに醉はれたと見えて。やくたいもない事を云はるゝ。其の樣な事よりは何か一つ謠はしめ。シテ〽それならば謠はうか。女〽早う謠はしめ。シテ松虫の小謠。女〽ヤンヤ〳〵。一向賑かに成りました。シテ〽殊の外賑かになつた。女〽迚もに一さし舞はせられい。シテ〽心得た。小舞。セッ子。［…］いものぢやと殼きの内のぞき。驚き。橋掛りの方へ逃げる。口傳。はて合點の行かぬ。女共の顔が見えいで、御座れば。何か眞黑に見えたが。合點の行かぬ事ぢや。それ〳〵。思ひ當つたことが御座る。最前酒屋へ行く時。黑塚に鬼が出ると云うたが。氣味わる〳〵、道々横筋より摑み立つる樣であつたが。其時のこはい〳〵と思ふ心より。ふと眞黑に恐ろしう見たものであらう。今一度見向け度いものぢやが。ちとこは物で御座る。女〽まうし〳〵。舞を舞ひさしてどこへ往かしめたぞ。殊に面白う成つた所で御座つた。早うあとを舞はせられい。シテ〽イヤ。つい人が逢ひに。參りは致さぬが。妻にちと用事があつて。吉野初瀨より舞ひ。またのぞき。うなづき。シテ〽能い肝を潰いた。女〽ヤンヤ〳〵。誠に面白う御座つた。さりながら。半ばでいづ方へやら行かれたに依つて、身に成らぬ樣で御座る。今度長い舞を一番舞うて見せさしめ。シテ〽何か足がぶらめいて。舞ひにくうはあれど。餘り面白う成つたに依つて。今一さし舞はうか。女〽早う舞はせられい。小舞。［…］小歌。口傳。いや迄かくて有るべき。ト殼ぎを取り。女飛上り。女〽いで喰はう。シテ〽南無三、つはい鬼であつたか。宥いてくれい。〳〵。女〽いで喰はう〳〵。シテ〽宥いてくれい。〳〵。

祖父傢

シテ　老僕
アド　主人
小アド　太郎冠者
小アド　次郎冠者
乙　主人の嫁
（入道具

アド〽此の内の者で御座る。某幼少の時より菊の花を寵愛致す。それ故毎年菊を育て［…］に致すことで御座る。それに就き。下部の者多い中に。年久しう召使ふ老人が御座る。菊の下葉を取らせ。花壇の掃除なども致させ。ふだん召使ふ者に。［…］奥にも共に出入り致させることで御座る。それに就き先づ身内の者共を呼び出し。尋ぬることがある。ヤイ〳〵。居るかやい。兩人出る。常の如し。アド〽汝等を呼び出すは別の事でもない。某人が事を何とか聞いたか。太郎〽イヤ何も承りませぬ。次郎〽何の沙汰かつて聞きませぬ。アド〽いや［…］聞かぬと云ふ事はあるまい。苦しうない程に云うて聞かせい。太郎〽［…］にあ。左樣に仰せらるゝに依つて、申し上げませう。定かなる事は存じませぬが。御庭の菊の下葉を取りに參つたうちに、何處樣かの御内を一目見奉り、しどろ心なき體となつたと承つて御座りまする。次郎〽太郎冠者が申し上げまする通り。うつゝない樣子に何れも見聞致しまする。アド〽成程。左樣に聞いた。彼奴は日頃正直者ぢや。それに就いて存ずる仔細がある。先づ老人を召連れて來い。太郎〽畏まつて御座る。アド〽先づ床几をくれい。次郎〽心得ました。ト床几［…］太郎〽［…］

〳〵。氣の毒な事ぢや。昔より及ばぬ戀と云ふ事ありとは申せども。祖父が戀は誠しからぬ。年にこそ寄れ。あの百年に及うで戀をするとは。世間への聞えも如何で御座る。先づ呼び出さう。なう〳〵。祖父ゐさしますか。シテ〽えい〳〵。菜を呼ぶは誰そ。太郎〽身共でおりやる。シテ〽えい。何としてお呼びやるぞ。太郎〽別の事でもない。今日は未だ御庭の塵をも掃めぬ。早う出よとのおことぢや。シテ〽何とお云やる。お庭の掃除を早う出てせよとのおことか。太郎〽なか〳〵。早うお出でやれ。シテ〽心得た。えい〳〵。太郎〽僕の老人召連れて參つて御座る。アド〽やい〳〵。しもべ。シテ〽ハヽア。下に居る。アド〽何として今日は遲なはつたぞ。扨これに就いて訊ぬる事がある。隱さずとありやうに云はうか。シテ〽これは今めかしい事を仰せられまする。お訊ねの事を何しに隱しませう。何なりとも仰せられませ。包まず申上げませう。アド〽然れば。汝は戀をすると云ふ事ぢやが。誠か。シテ〽此事を誰がお耳に入れて御座りまする。さら〳〵私が身に取つて覺えは御座りませぬ。アド〽いや〳〵。隱すなこにや色に顯れるぞとよ。シテ〽なに早や色に

あらはれたとや。アド〽おんでもないこと。シテ〽はあゝ。アド〽やい〳〵。昔今に至る迄。若いも老いたも。戀に上下はない。二つとも恥ぢること勿れ。苦しうない程に。心安う思へ。さりながら。唯今菜が前に於いて。勝負をさする。その勝負の樣子に依つて。今一度嫁をまみえさせうぞ。シテ〽それは忝い事で御座りまする。アド〽兩人の者。云附けて置いたものを出せ。二人〽畏まつて御座る。ト云うて。後見座より二人俵を重く持出る。二人〽えい〳〵。えい。ト云うて。アドの前。舞臺の眞中に置く。アド〽やい老人。此の俵を肩へ上げたらば。その儘嫁をまみえさそうず。又上がらずば。此の戀叶はぬと思ひあきらめたがよい。シテ〽これは存じの外な勝負事で御座る。百年に及ぶ老人が。此の俵が何と上がりませうぞ。外の事を仰附けられて下されませ。アド〽さればの事ぢや。つゞやはたちに成るものではなし。百年に餘る老人が。戀をするに依つて。これも成らぬ事なれども。僕ながらも年久しう使ふ者故。不憫に思うての上の事ぢや。急いで持て。太郎〽そちは果報者ぢや。追ひ出さるゝと云うても。是非が無いに。結構な思召しで。申しい身共等迄もお心を察しやられて。冥加に叶

ふ。有難い事ぢやと思ふ。太郎〽お言葉の繼らぬ内に。早う持つたらばよからう。シテ〽思召しは有難けれども。何とこれが上がらうぞ。持ちかぬる戀の俵。えいやあら〳〵。口傳。戀の戀。我れ中空になすな戀。戀風が來ては袂にかいもつれて。なう此の重さよなやあ えい〳〵。口傳あり。しめぢがはら立ちやよしなき戀をすがむしろ。肩に持てども持たれもせず。苦しや獨り寢の我が手枕の。えい〳〵〳〵。此處に口傳多く有り。肩かへて持てば持つ程かる〴〵と。嬉しや此の戀こそは叶うたよ。アド〽南無三寶。よもや上がらうとは思はなんだ。是非に及ばぬ事かな。やい〳〵。急いで乙を連れてこい。太郎〽畏まつて御座る。ト云うて。樂屋に入つて出で。アドより上において。床几に腰かけさせて。アド〽さて身共は奥へ行く程に。汝等よいやうに計らへ。ト云うて切戸へ入る。太郎〽其の段はちつともお氣遣ひ成されまするな。二人〽いかにや〳〵祖父よ。これこそそちが戀ひ申す乙ごぜ樣。よく〳〵寄りて見奉れ。シテ〽これは〳〵。雲のびんづら花の顏。天人も斯くやらん。怨めしや菊の下葉の此時に。御心得あるならば。斯樣に老の恥をばさらさじものを。あら面憎とは思へども。たゞ〳〵ならば乙ごぜよ。實にもさあり。や

いいいいいよがりもさうよい。いいいいい。乙〽これ祖父こちへわたいわたい。シテ〽心得ましたく〳〵。

孝心竹

シテ　太郎
アド　勅使
小アド　供人
祖父
祖母
地頭
太郎冠者
次郎冠者

（入道具）

シテ〽あゝ降つたる雪かな。扨々當年のやうに大雪はあるまい。さて某は百歳に及ぶ父母を持つて御座るが。筍を食べたいと好まるゝに依つて。野邊に出て。禁中樣のお籔の根を掘り。まんまと筍を掘つて御座る。急いで歸り。父母に與へうと存ずる。シカ〳〵。まことに。雪の中と申し。殊に寒の内なれば。心許なう存じたに。早速に掘出し。このやうな嬉しいことは御座らぬ。何かと申すうちに私宅ぢや。申し〳〵御座りまするか。唯今畑より、太郎が戻つて御座りまする。ト云うて幕へ向つて呼出す。但し樂屋へ向ひ呼出すもあり。老父〽えい〳〵。なに太郎が戻つたといふか。シテ〽なか〳〵。畑より戻りました。老父〽やれ〳〵。雪を夥しう負うたのう。老母〽定めて寒からう。先づ簑笠をとれいやい。シテ〽いや私は寒うも御座らぬ。お前方は御難儀で御座りませう。野邊に居ますうちにも案じました。さてお好みの筍を掘つて參りました。老父〽なに筍を取つて來た。シテ〽これ〳〵。御覽じませ。老父〽やれ〳〵見事な筍ぢや。此の中食べたうてならなんだに。嬉しい事ぢや。老母〽子ながらもそなたのやうな孝心な人はあるまい。シテ〽御機嫌のお顏を見まして。此樣な嬉しいことは御座りませぬ。トこのうちに樂屋より出で。橋懸りにて。地頭〽やい〳〵。急げ〳〵。異議に及ばず搦め取れ。太郎冠者〽畏まつて御座る。地頭〽何かと云ふうちに。太郎が宅は是ぢや。身共は案内を乞うて表へそびき出さう程に。取逃がさぬ樣に兩人働け。太郎冠者〽その段なお氣遣なされますな。地頭〽ぬかるな〳〵。太郎冠者〽畏まつて御座る。二人心得て居る。口傳。地頭〽物まう。案内もう。太郎うちにおりやるか。シテ〽某をお呼びやるは誰方で御座る。地頭〽身共ぢや。シテ〽エイ。地頭殿。トいふうちに。次郎冠者〽捕つたぞ。シテ〽これは何とする。太郎冠者〽捕つたぞ。シテ〽合點ぢや。二人〽エイ。捕つたぞ〳〵。地頭〽出來した〳〵。此所にて父母心得あり。シテ〽あら合點の行かぬ。無體に繩を掛くるは何事ぢや。老父〽これは〳〵地頭殿。太郎に何の科あれば搦めらるゝぞ。老母〽いかなわけで。繩目には懸け給ふぞ。地頭〽やい太郎。汝が日頃の心入れとは違ひ。大事の禁裏のお籔。某に預け置かせられ。番人を附置き。晝夜きびしく守護する處に。此の中の大雪にて寒さの餘り。番人小屋へ休みに這入るうち。お竹を掘出し賣代なす。尤も父母を育まう手段ではあらうけれども。盗み取ること言語道斷くせごとなり。お預りのお竹のことなれば。某申譯立ち難い。急ぎ判斷所へ引出し、乾度御詮議あらうずるとのお事ぢや。扨々大膽な事を仕出だしたのう。シテ〽これは存じも寄らぬ事かな。某こゝに住居申せば、禁中樣のお籔。地頭殿へお預けのことはよう存じて居まする。其のお竹を切出し賣代し。其の價を以て父母を育むやうな太郎では御座らぬ。地頭〽まだそのつれをいふ。とかく詮議は判斷所にてのことぢや。兩人の者引立て

い。三人へ畏まつて御座る。立て〱。 老父へ先づ待たせられ。 老母へ待せられい〱。 地頭へ何と待てとは。 老父へ扨はお歎な掘つた疑ひで御座るか。 地頭へおんでもないこと。大事のお竹を切出した。 老父へそれで埒があきました。 地頭へ埒があいたとは。何のことぢや。 老父へ不審尤もで御座る。竹な好うだはこの祖父夫婦で御座る。太郎に咎は御座らぬ。我々に繩をかけ。判斷所に引かせられい。引かせられい。 ト云うて。太郎の側へ行くなり。 老母へ太郎を助け。妾に繩を懸けさせられい。かけさせられい。 同じなり。 シテへ勿體ないことを仰せらるゝ。何しにこなた達に咎が御座らう早う引かせられい。ひかせられい。 トいふうちに。大名樂屋より出る。 二人へ早う立て〱。 アドへ急げ〱。 小アドへ畏まつて御座る。 アドへやい〱。所司。早まるまい〱 兩人の者待て〱。禁裏より御勅書。しされ〱。所司。しされ〱。下部共。しされ〱。 地頭へはゝあ。 三人肝を潰して。うろ〱してしさり。父母も伏しする。口傳。 小アドへハアお床几。 アドへ奥丹波に於て太郎と申す者。心正直にして百年に餘る父母を持つ。この者孝心なること隱れなし。剰へ此の雪のうちに老人筍を望む。太郎望に任せ與へんと野邊に出で。藪の根を

掘りければ。時ならぬ筍出でし山。禁裏に於てその隱れなし。これ孝心の志を天地に通じ。筍も出で申す。その上夫婦百年に餘り。壽命目出度き父母なれば。三人共に急ぎ參内致させよとのことぢや。 それより床几より下り。 則ち御名を雪原の竹平と下さる。御裝束も先づ召替へさせられい。御參内の上御官位も相極まりまする。それ御裝束。 小アドへハアヽ。 持出る。 シテへ地頭殿の仰せられまする通り。お藪の筍を掘りましたれば。覺悟致しました。只この儀召出されて下されませ。 アドへ勿體ない。左樣では御座りませぬ。早う御參内〱。 [illegible]に裝束きせる。 老父へさては時ならぬ筍を。太郎が掘出し。我等に與へましたこと。禁中樣に御聞き及うで。三人共に參内を致させよとのお事で御御りまするか。 アドへ其の通りぢや。先づ父母も御用意致されい。 老母へ扨も〱。それは嬉しい事で御座りまする。 兩人後見へ入り替へる。 地頭へやあら太郎が。 ト云うて。口に手をあてゝ。 竹を切出しなされたてはない。雪の中よりお竹のお子をお掘りお出しなされた。 太郎冠者へ太郎樣はお竹のお子をお掘りお出しなされたとや。 アドへやい〱。地頭。その筍を持て。 地頭へ畏まつて御座る。 シテへ是は窮屈な裝になりました。 アドへ隨分衣冠正しうお運びなされませ。 シテへ運びやうもむつかしいもので御座りまする。 アドへ申し〱。我等如きには物事云放しに遊ばされませ。 シテへそれが何となりませう。 アドへ大内裏に於てお呼びなさるゝお稽古のため。お呼びなされて見させられい。我等も答へて見ませう。 シテへそれならば呼うで見ませう。 アドへ一段とよう御座りませう。 ト云ひ。顔を見て笑ふ。 シテへどうも呼ばれませぬ。 アドへそつとも苦しう御座りませぬ。のし切つてお呼びなされませ。 シテへのし切つて呼びまするぞや。やい〱。 アドへハア。 シテへ居るか〱。 アドへハア。 シテへ御座りまするか。御ゆるされませ〱。 ト云うて笑ふ。口傳。 アドへこれは如何なこと。御官位にお進みなさるゝ御身分で。其の樣な御心弱いことではなりませぬ。其の上御參内も遲參になりまする。早うお呼びなされませ。 シテへおつゝけ呼うで見ませうか。あの鐵は何としませう。 アドへあの仰せらるゝことは。 鐵が何になりませう。唯今からはお慰みに。歌を詠うだり。詩を作りなさるゝことばかりで御座りまする。 シテへさて〱。それはむつかしい事で御座りまする。 此所に口傳あり。 アドへ時刻うつりて

太郎へこの順風も御吉兆で御座る。から／＼／＼／＼。まんまと上げまして御座る。シテへハアヽ。早いは／＼。太郎へ仰せらるゝ通り。飛ぶが如くで御座る。シテへヤイ。あの水中に鳥居がある。あれは何ぢや。太郎へ是が則ち大船津で御座る。シテへ何かと云ふ内に、はや大船津迄は來たか。太郎へさらば帆をおろしませう。から／＼／＼此の所は淺う御座る。まづ漕ぎませう。エヽイ／＼／＼／＼。舟が着きまするぞ。やつとな。一段と着きました。上らせられい。シテへ心得た。やつとな。太郎へやつとな。シテへまんまと鹿島へ來た。さて禰宜の宿は何方であらうぞ。太郎へ何方で御座りまするか。シテへまづ此の所で休らうて、人も通らば問うてみよう。太郎へそれがようで御座りませう。禰宜へ是は此所の禰宜で御座る。今日は正月十四日常陸帶の祭で御座るによつて罷出でた。先づ急いで參らう。シテへヤイ太郎冠者。あれへ人が見ゆる。尋ねてみよ。太郎へ心得ました。なうしゝ申し。禰宜へヤア／＼。こちの事で御座るか。何事で御座る。太郎へ如何にもそなたへ事で御座る。卒爾な申し事ながら、當所の禰宜殿の御宿を御存じで御座るか。禰宜へ尋ぬるその禰宜は某で御座るが、何ぞ御用はし御座るか。太郎へヤア／＼こなたが禰宜殿で御座るか。禰宜へなか／＼。太郎へそれは幸ひな。ちと待つて下されい。禰宜へ心得ました。シテへヤイ／＼。今の者は何と云ふぞ。太郎へさればの事で御座る。あの者が則ち禰宜ぢやと申しまする。シテへそれは一段の事ぢや。會ふ程につれて來い。太郎へ畏まつて御座る。イヤなうなう禰宜殿。某の頼うだ人の會はせらるゝとの仰せ事ぢや。あれへ出さしめ。禰宜へ畏まつて御座る。よい樣に引廻して下されい。太郎へ心得た。つうと出さしめ。禰宜へ心得ました。太郎へイヤ、それに出まして御座る。シテへなう／＼禰宜。禰宜へハアヽ。シテへ早速會うてお異れやつて。近頃満足致す。禰宜へ有難う御座りまする。シテへヤイ太郎冠者。ありやうに話して聞かせい。太郎へ畏まつて御座る。なう／＼禰宜殿。別の事でもない。頼うだ人一人のおごう樣を持たせられた處に、方々より御所望があつて。頼うだ人もおごう樣も、御好みの御方があれども、外々な斷り、好みの方へ遣されし、萬一損ねる時は如何で御座るによつて。常陸帶を受けさせられ。御治定あらうずるとて、遂々參られた事で御座る。禰宜へそれは一段の事で御座る。某は常陸帶を扱ふ禰宜で御座つて。今日はその御神事で御座れども、只今より參る所で御座る。シテへ何と云ふぞ。今より禰宜も行く處ぢやとか。それは幸ひな事ぢや。ヤイ。常々神を信心するによつて。神の御引合せであらうぞ。太郎へ誠によい所ひかうと存じまする。シテへいざ行かう程に。禰宜は先へ行けと云へ。太郎へ心得ました。そなた行けと仰せらるゝ。禰宜へイヤ／＼御供を致しませう。シテへイヤ／＼案内の爲。そちからおりやれ。禰宜へ畏まつて御座れども。御後よりも御案内が出來まする。シテへ太郎冠者。それならば身共から行かう。太郎へそれがようで御座りませう。シテへさあ／＼おりやれ／＼。禰宜へ參りまする。シテへさて聞及うだ常陸帶といふは。いつの頃より始まつた事ぢや。禰宜へこの常陸帶と申すは。むかし／＼大昔のその昔より起つた事で。私もとくとは存じませぬが。この常陸帶を持つて。緣を結び夫婦となりますれば。生涯仲睦しきに云ふも更なり。子々孫々末々迄も、その家繁昌致す事で御座る。シテへ扨々それはめでたい事ぢやな。太郎へさやうで

御座りまする。禰宜へ扨その後懐妊致したる時、是を腹帯に致しますれば。生れたる子もよく肥立ち。母もよく日立ちまするによつての常陸帯で御座る。シテへ扨々謂れも面白い。禰宜へイヤ何かと申す内に。はや是で御座りまする。シテへハア丶。さもこそあれ。神さびたけはひぢや。禰宜へ只今常陸帯を出しまする。先づ斯う通らせられい。シテへ心得た。この邊りに居ようか。太郎へそれがよう御座りまする。禰宜へイヤ申し。是が常陸帯で御座りまする。シテへハア丶。是が常陸帯を入れたる箱か。禰宜へさやうで御座りまする。シテへさて是は何としてよからうぞ。禰宜へ此の中に常陸帯が幾筋も御座る。その一つの帯の末へ。おごう様、御名を書かせられ。餘の帯の末へは。夫となり給ふ御方の御名を帯毎に書き給ひ。おごう様の御名を書き給ふ帯のはしならば。この箱の右へ出し。又せなとなり給ふ御方々の御名を書かせられたる帯のはしならば。箱の左へ出し置かせられれば、其時私が祈念を籠め結びまする。シテへそれならば。その通りしよう程に。ちと待つてお呉りやれ。禰宜へ心得ました。シテへヤイ太郎冠者。帯を是へ持て。太郎へ畏まつて御座る。シテへ向ひを持つてゐよ。太郎へ畏まつて御座る。シテへまんまと書いた。さあ〳〵。よい様にして呉れい。太郎へ心得ました。禰宜殿。御祈念を頼みまする。禰宜へこれならば御祈念の致しまする。高天原に神留まりまします八百萬の神達に。平らけく安らけく聞召し啓す。さあ〳〵蓋を取つて見させられい。シテへ心得た。何れへ結ばつたであらうぞ。太郎へどなた様で御座らうか。こはい物見たしとやら。樂しみくらして。早う見たう御座りまする。シテへいや〳〵。萬一思ふ方へ結ばらぬ時悪い。明ける事は無用にせい。太郎へ是はいかな事。こなた様にもお惑ひなされた。遂々これ迄お出でなされ。只今御縁の結ばれましたを。御覽なされぬといふがあるもので御座るか。早うあけてみさせられい。シテへいや〳〵。今少し思案の上であけてみよう。太郎へまだ迷はせらるゝさうな。それならば。私があけてみませう。シテへ先づ待て〳〵と云ふに。萬一好まぬ方へ結ばれた時は悪い。太郎へ是はいかな事。よう物を思うてみさせられい。御屋敷を出させられてより。雨もなく乾きもなく。此の地へ著せられたは、則ち常陸帯の祭日。禰宜迄丁度出らるゝと申すは。此上もない御吉兆では御座らぬか。禰宜殿、お悪い事は御座りますまい。禰宜へお悪い事は御座りますまい。シテへなに。御座りますまい。禰宜へなか〳〵。シテへますまい、ますまい〳〵（ト笑ふ。）まいがいやみぢや。禰宜へイヤ申し。既に我が國の歌にも。心だに。誠の道に叶ひなば。祈らずとても神や守らんと申す。西土の古語にも。鬼神は無ニ常享一享ニ于克誠一と申せば。此方に誠さへ御座れば。祈らずとても神は守り給ふ所に。私の御祈念の籠め結びましたによつて。なう太郎冠者殿、お悪い事は御座りますまい。シテへますまい〳〵〳〵（ト笑ふ。）そのまいがまだ心掛りぢや。御座りませぬと云うてお呉りやれ。太郎へその様に仰せられては。はても限りも御座らぬ。それならば。私のあけてみませう。シテへ先づ待て〳〵。萬一いやな方へ結ばれた時悪しいによつて。禰宜に云うて解いて貰はう。太郎へ是はいかな事。今更その様な事が申されませうぞ。それでは御大名の御領が立ちませぬ。その様に迷はせられず。私にお委せなされたがよう御座りまする。禰宜へ太郎冠者殿。早うあけてみさせられい。シテへ扨も〳〵苦々しい事ぢや。某はこちをむいて居よう。太郎へア、

しまつた〳〵。シテ〽何ぢや。しまつた。やい〳〵。太郎〽ハア、ト引く。シテ〽それぢやによつて。禰宜に解かせぬと云ふに。汝が強ひてあけた故ぢや。如何やうにしまつたぞ。太郎〽兼て此方樣にもおごう樣にもお好みなさるゝ御方へ。しつかりと締りました。シテ〽それは誠か。太郎〽誠で御座る。シテ〽眞實か。太郎〽一定で御座る。シテ〽一定〳〵。ト云うて笑ふ。それはめでたい。某も見て參らう。太郎〽それがよう御座りまする。シテ〽ハヽア。結ばれたり〳〵。しかもしつかりと結ばれた。禰宜〽千年萬年經つても。解ける事では御座りませぬ。シテ〽誠にめでたい。さらばこの帶を持つて急いで行かう。太郎〽それがよう御座りませう。シテ〽太郎冠者帶を持て。禰宜〽畏まつて御座る。太郎〽イヤ太郎冠者殿。この帶は至つて淸く。また御腹帶にもなる事で御座れば。むさと持つても如何で御座る。入れる物を才覺して進じませう。太郎〽それは忝う御座る。禰宜〽さあ〳〵。是へ入れて持つてお行きやれ。太郎〽それは忝う御座る。よいやうにして下され。禰宜〽心得た。太郎〽扨これは何といふ袋で御座る。禰宜〽是は宿直袋と云うて。古は御身柄の方には。御着服など入れて。殿上へ御出仕の時持たせられたによつて。殿居袋と申しまする。また上を縫ひませば。上さし袋とも申しまする。上代は大小袋板。是に品々入れ持たせます。婚禮には數十二用ふる道具なるが。中頃挾み竹と云ふを持たせましたが。箱の方雨露の愁がなくてよいと云うて。近頃は皆箱になつて御座るが。割竹に挾みたる名の殘りて。今も挾み箱と云ひまする。この殿居袋は。その挾み竹挾み箱の元で御座る。太郎〽是は初めて承つて御座る。禰宜〽さあ〳〵持つてお行きやれ。太郎〽何とやら古雅で面白う見えまする。シテ〽やい〳〵太郎冠者。支度がよくばいざ行かう。太郎〽一段とよう御座りまする。シテ〽なう〳〵禰宜殿。某はかう參る。禰宜〽最早行かせられまするか。シテ〽さらば〳〵。禰宜〽よう入らせられました。シテ〽太郎冠者。早う來い。太郎〽畏まつて御座る。さて是は何として持ちませうぞ。斯樣にして持ちませうか。シテ〽何とやらそれはをかしい。太郎〽それならば。是では何と御座りませう。シテ〽それも如何ぢや。矢張挾み箱の始まりの物なれば。擔いでは何とあらう。太郎〽畏まつて御座る。是でよう御座るか。シテ〽一段とよい。めでたい折柄なれば。共々に舞うて行かう。太郎〽一段とよう御座りませう。シテ〽是へ寄れ。太郎〽畏まつて御座る。シテ〽常陸帶〳〵。同〽緣の結びし常陸帶。みとのまぐはひも常陸帶初めとし。堅くしめぬる常陸帶〳〵。解くれば夢も結ぶ常陸帶。常陸帶〳〵。産める母も目立ち帶。生まるゝ赤子も肥立ち帶。常陸帶〳〵。シテ〽この君の御齡。太郎〽この姫の御齡。同〽末長く〳〵。千代も萬代も。幾度かめぐる常陸帶をうけ得て行末榮えなん。シテ〽めでたい〳〵。早う參らう。太郎〽それがよう御座りませう。シテ〽急げ〳〵。太郎〽參りまする〳〵。シテ〽こちへ來い〳〵。太郎〽心得ました〳〵。

狩大名（弓矢平太とも）

シテ　大名
アド　道行人（入道共）

大名〽この邊りに住居致す者で御座る。毎日野山へ出で。鳥けだものを捕り。又は往來の人を脅し慰みと致す。今日も野邊へ參らう

と存ずる。シテノ〳〵。誠に。世に殺生程心の面白いものは御座らぬ。今日も何卒鳥を射たいものでござる。イザ行かうと云ふ内に野ぢや。ハアヽ山々の木の葉も色づき。扨も〳〵綺麗な事ぢや。イヤあれへ雁が下りた。さらば射てくれう。ト云うて。矢をつぐ。 道行人へ急ぎの用事あつて。山一つあなたへ參る者で御座る。先づ急いで參らう。一の松にて名乘り舞臺へ入る。 大名へあゝこれ〳〵。先づお待ちやれ。 道行人へ何ぞ御用で御座るか。 大名へ今あれに居る雁を射る處ぢや。お待ちやれ。 道行人へイヤこなたは慰み。某は急ぎの用事あつて山一つあなたへ行かねばなりませぬ ト云うて行く處を。 大名へイヤ待てと云ふに。おのれは憎い奴ぢや。あれお見やれ。何のかのと云ふによつて。最早雁が立つた。その代りにおのれを此の矢で射殺してやらう。 道行人へヤアラ此方は無體な事を云ふ人ぢや。總じて世に恨みもあらうが。殺生せずとも。外に慰みもあらうに。其の上人を射殺すと云ふ事があるもので御座るか。 大名へいや身共が慰みをするを。そちが構うての樣は。 道行人へ成程尤もなれども。殺生は思ひとまらしめ。是に昔物語がある。語つて聞かしませう。よう聞かしめ。 語 昔。梁の君狩に出で給ひし時。雁一群あり。君弓にて是を射んとし給ふ時。道行人あり。君かれに暫く待てと云ひけれども。急ぐ道にてやありけん。聞かぬ顔にて行きたりしが。雁是に驚きて皆飛び去りぬ。君怒つて。引いたる弓にて道行人を射殺さんとす。其の時供に連れられたる公孫龍が付いて云ひけるは。昔宋の景公の時。ひさしく日照りして天下民飢に臨みぬ。占はせてみれば。人を殺して神を祭らば雨必ず降るべしと云ふ。其の時景公拜して。今雨を望む事全く餘の仔細なし。民を助けん爲なり。民の命を取つて民を助けん事。わが本意にあらず。われその代りにならんと云ひも敢へぬに。雨忽ち降つて。五穀成就しけると承る。君いま雁を以て人の命を斷たん事。ひとへに豺狼に異ならずと云ふ。梁の君は弓矢を差置きて。公孫龍と同じ車に乘つて曰く。昔人は狩に出でては獸をとり。われは狩に出て善言を得たりと。喜び給ひしと申す事も御座る程に。是非の心を捨て。今より善に立返り。この後は惡心は思ひ止まらしめ。 大名へハア過つたり〳〵。かた〴〵の物語を聞いて。善心にならぬと云ふ事があるものか。此の後は思ひ止まらう。 道行人へすれば某が物語を聞いて思ひ止まらしますか。此の樣な喜ばしい事は御座らぬ。 大名へ某が處は程近い。ちと休んで行きやれ。 道行人へ忝うは御座りまするが。急の用事ある者で御座る。最早御暇申しまする。 大名へ最早お行きやるか。 道行人へなか〳〵。 二人へさらば〳〵。 道行人へ先づ急いで參らう。ト云うて入る。 大名へハアヽ今の旅人の物語を聞いて感心致いた。我も善言を聞いて歸ると云ふは嬉しい事ぢや。イヤ是に就き思ひ出した事がある。昔吳唐童子を連れて。野に出でて狩する時。鹿の子一疋見付けたり。吳唐持つたる弓にて鹿の子を射てけり。鹿の母後を慕ひ來りて嘆き悲しむ。また其の母を射止めて。二つの鹿を持たせて歸りしに。道にてまた鹿を見付けたり。又これを射けるに。何とかしたりけん。矢飛び返りて吳唐が童子を射殺したり。其の時弓を捨てあわてて嘆きけり。其の時[illegible]子を愛するは人間畜生とても同じ事なりと呼ばはつて。その行き方を知らずと申す事もある。其の上今の物語と云ひ。この樣な事を思うては弓矢はいらぬ物ぢや。捨てゝ歸らう。ト云ひ弓矢を捨てゝ入る。

清水毘沙門　大藏流

シテ　清水毘沙門
アド　洛中の者
小アド　同

アド〽洛中に住居致す者で御座る。某鞍馬の多門天王を信仰致し。毎月參詣致すところに。夜前不思議の御靈夢を蒙つた。其の仔細は清水へ參詣申せ。御福を下されうとの御夢想で御座つた程に。今日は清水へ參らうと存ずる。それにつき。いつも同道して參る人が御座る。此の樣子を話して同道致さうと存ずる。先づ急いで參らう。誠に。何卒宿に居られればよいが。宿にさへ居られたらば。同道致さるゝで御座らう。何かと云ふうち早これぢや。案内を乞はう。常の如し。小アド〽私も參らうと存ずる折柄で御座る。アド〽してそれは先づ如何やうの事で御座る。小アド〽身共は夜前不思議の御靈夢を蒙つて御座る。アド〽それは不思議な事で御座る。某も夜前不思議のことが御座つて。これへ參つたが。先づそなたの御靈夢の樣體を話さつしやれ。小アド〽別なることでも御座らぬ。清水へ參れと福をあたへうとの御夢想で御座つた。アド〽扨は左樣で御座るか。身共も其の如くの御靈夢で御座る。所で則ち參詣致さうと存じ。誘ひに參りました。小アド〽扨は此方も左樣で御座つたか。有難い事で御座る。然らば同道致しませう。アド〽それならば。さあ〳〵御座れ。小アド〽先づ此方から御座れ。アド〽左樣ならば私から參りませう。さあ〳〵御座れ〳〵。小アド〽心得ました。アド〽さて云うても〳〵有難い事では御座らぬか。小アド〽なか〳〵。有難い事で御座る。アド〽又あれへ參つたらば。不思議が御座らう。小アド〽其の通りで御座る。アド〽何かと申すうち。是は早御前で御座る。さらば拜みませう。二人〽あら有難や。アド〽さて今宵は。是で通夜を致しませう。小アド〽よう御座りませう。シテ一聲〽抑もこれは衆生に福をあたへ國土を守る。毘沙門天とは我がことなり。同〽不思議の雲の内よりも。〳〵。鞍馬の大悲多門天は。黃金の鎧に同じ色の兜の緒しめ。御鉾を橫たへ百足に乘じて。現れ給ふぞ有難き。二人〽二人は是を見るよりも。頭を地につけ拜しつゝ。夢想の如く寶を我等にたび給へ。シテ〽其の時毘沙門進み出で。同〽其の時毘沙門進み出でて。數々多き寶の中に。福ありの寶に御鉾を添へて。二人に與へたび給へ。是迄なりとて毘沙門天は。道も鞍馬の奧深き。〳〵。深山をさしてぞ歸りける。シテ〽やあ。えい。やあ。いや。

蜘の糸

シテ　盜人
アド　主人
小アド　太郎冠者
（入道具）

アド〽これはこの邊りの者で御座る。今晩それがしの宅で連歌の會を致す。それに就き。太郎冠者を呼び出し。申付ける事が御座る。常の如し。アド〽今晩それがし宅で連歌の會を致す程に。裏の亭を掃除して。其の用意をせい。小アド〽畏まつて御座る。つめる常の如し。アド笛座につく。小アド〽せつ〳〵連歌の會で忙しいことで御座る。さらば其の用意を致さうと存ずる。ト云うて一座につく。シテ〽此の邊りに住居致す者で御座る。承ればさる方に。關の兼氏の太刀を買求められたと申す。かの太刀は。某が兼て望める品で御座る。さりながら。買求め

うにも身上不如意に御座るに依つて。求めうに手だてが御座らぬ。それ故今宵は密かに忍入つて。案内なしに取つて參らうと存ずる。シカ〳〵。誠に。人の物をたゞ取ると申すは。不得心な事で御座れども。身に取つて大切な品で御座る。イヤ何かと言ふうちに是ぢや。此の中普請をせられたと言ふが。これは中々きびしい體ぢや。是ではひられぬ。裏へ廻つて見う。シカ〳〵。又連歌と盗人は。夜がよいと申す事も御座る程に。思立つた事で御座る。ト言うて一の松橋掛りより。はゝあ。簾戸があいてある。さらばはひらう。さて是は幸ひの事ぢや。ト言うて眞中まで行き。驚き一の松まで逃げる。今點の行かぬことぢや。火がともしてある。なには兎もあれ。暫く是にて様子を見うと存ずる。ト言うて。暫くクツロギ。後立つて。シテ柱のそばにて様子を聞く。アド小アドも立つて。アド〽今宵は何れも早う歸らせられたではないか。小アド〽其の通りで御座る。アド〽茶でも吞うで。ゆる〳〵咄さうではあるまいか。小アド〽一段とよう御座りませう。アド〽是はいかな事。早や釜の蓋に蜘が巣を掛けた。今にもおくるな知らず。扨も〳〵はかない者ぢや。又人間とても同じ事ぢや。それに就き思ひ出した。朝に咲き誇りたる花も。夕には築の座となり。

水に宿れる月も。あるかありとて頼むべきかはなどと。それは〳〵はかない事ぢや。さりながら。かう巣を掛けた所は。何とぞありさうなものぢやなあ。小アド〽これは何とぞありさうなもので御座りまする。アド〽ハア、出來た〳〵。下の句が出來た。小アド〽何とで御座りまする。アド〽よるてにかゝるささがにの糸。小アド〽さても〳〵。面白い事で御座りまする。アド〽汝この上の句を附け。小アド〽私は不調法に御座ります。アド〽それならば出合にしよう。案じて御みやれ。小アド〽畏まつて御座る。アド〽よるてにかかるささがにの糸。小アド〽よるてにかかるささがにの糸、うつゝになり。吟じ〳〵案じて居る。シテこの内に思はずうつゝにて。二人の後に行き。下に居て。シテ〽小田卷の。ひろ來る事のならざれば。アド〽よるてにかゝるさゝがにの糸。さても〳〵。面白い事ぢや。小アド〽これと申すも下の句がよいに依つてゞ御座る。アド〽いや〳〵。上の句がよい故ぢや。小アド見附けて。小アド〽ヤア。こなたは誰ぢや。アド〽見馴れぬ人ぢやが。どれからわせた。シテ兩方を見。驚き逃げる。シテ〽ハテ御ゆるされませ〳〵。逃げる。アド〽アゝこれ〳〵。苦しうない。先づ御戻られ。是には何ぞ様子の有りさうな事ぢや。隱さず

と申しやれ。シテ〽左様ならば何を隱しませう。此時名乘座の向へ行き。下に居る。私も以前は殊の外連歌好きで御座りましたが。唯今は身上不如意に御座るに依つて。連歌をもえ致しませぬ。又今宵これへ參つたは。外でも御座らぬ。承れば關の兼氏の太刀を某頼うだ者の秘藏の品で御座るが。ふと紛失致し。それより方々を尋ぬるうち。是へ求めさせられたと承りましたが。求めようにも身上不如意に御座る故。致し方も御座らず。惡しき事とは知りながら。忍び入り案内なしに取つて參らうと存じて。ふと參りましたれば。連歌をなさるゝで御座つたに依つて。昔を思出し。我知らず是へ參り。上の句を申した事で御座りまする。眞平御許されて下され。アド〽さてはさうでおりやるか。何はともあれ。夜寒にもあり。酒一つふるまはう。シテ〽それは御無用で御座る。此の儘御歸しなされて下さりませ。アド〽いや〳〵苦しうない。先づゆるりと召され。太郎冠者盃を出せ。小アド〽畏まつて御座る。常の如く。アドより呑み。シテにさす。又アドに戻す。シテ舞ふ。又シテにさす。アド舞ふ。又アドへ戻す。アド〽も一つお飲みやらぬか。シテ〽もうたべますまい。アド〽それならば仕舞はう。シテ〽よう御座りませう。

アド〽太郎冠者盃をとれ。さて彼の品を持つて來い。小アド〽畏まつて御座る。ト云うて。太刀をアドに渡す。アド〽さて最前の物語と言ひ。また今宵の句が殊の外面白いに依つて。之を褒美にそなたへ進じよう。シテ〽あのこれを私へ下されます。アド〽中々。シテ〽先づ以て忝うは御座りよするが。命を助かり。御酒まで下されまして御座る。是は御斟酌申しませう。アド〽いや〳〵。それはいらぬじぎぢや。取つておかしめ。シテ〽左様ならば頂いて置きませう。アド〽それがよからう。扨この後はせつ〳〵御出やれ。さりながら。今宵のやうに裏からは無用。表から案内を乞うて御出やれ。シテ〽忝う御座る。私どもが參りませずば。誰も參る者も御座らぬ。せどもかどもあけ放しておかせられ。過分におりやる。さて長居はおそれあり。最早お暇申しませう。アド〽イヤ〳〵。今宵はゆる〳〵咄さう程に。もそつと遊ばしめ。シテ〽忝うは御座れども。最早御暇申しませう。ト言うて立つを袖もちてとめる。アド〽ハテもそつと遊ばしめ。袖ふりきつて。シテ〽名殘の袖をふりきりて。花子のあとを謠ふ。名殘おゝしやの。此時アド舞臺の眞中まで見送る。アド〽ようおりやつたし。シテ〽ハア。此時シテは橋掛り。アドは舞臺眞中にてとめる。

見物左衛門（けんぶつざゑもん）

是は此の邊りに住居致す。見物左衛門と申す者で御座る。毎年とは申しながら。當年の様な長閑な春は御座らぬ。扨それに就いて。地主（ぢしゆ）の花が盛りと承つて御座るに依つて。今日はぐつろ左衛門殿を同道致し。花見に參らうと存じて。竹筒の用意致いて御座る。先づ急いで參らう。誠に。内に御座ればよいが。餘り外へ出ぬ人で御座るに依つて。大方は内に御座らうと存ずる。何かと申す内に是ぢや。先づ案内を乞はう。物まう案内まう。ぐつろ左衛門殿内に御座るか。なに今日は花見にお行きやつた。やれ〳〵。殘り多い事かな。是非に及ばぬ。身共獨りなりとも參らう。誠に。ぐつろ左衛門殿を同道致せば。身共も殊の外慰みに成らうに。扨々殘り多い事ぢや。いや是ははや清水ぢや。はあ咲いたり咲いたり。是は眞最中（まつこいちう）ぢや。咲きも殘らず散りも始めずと云ふは此の事ぢや。あれ〳〵。あそこや此處に幕打廻し。酒宴を成しつ。はあ謠ふは謠ふは。扨も〳〵賑々しい事かな。先づ身共も竹筒を開かう。ドブ〳〵〳〵。さらば酒を呑まう。扨も〳〵むまい事ぢや。ちと謠はう。小謠。「また花の春」笑ふ。ざつと酒盛に成つた。やあ〳〵。福右衛門殿が舞を舞はるゝか。扨々見事に舞はるゝ。よいや〳〵。久しく見ませぬ内に。殊の外御仕上げなされた。是では呑まずは成るまい。酌をして。小謠「雲かと見えて」扨も〳〵。面白い事で御座る。何と御酌を致さうか。やあ身共に小歌を謠へとや。是は許して下され。是非ともで御座るか。それならば。一節謠ひませう。小歌。「地主の花」笑ふ。不調法を致いた。イヤちとあそこや此處を見物致さう。やあ〳〵。何と言ふぞ。西山の花も今が盛りと云ふか。幸ひの事ぢや、程遠くはあれども。直ぐに見に參らう。誠に。春宵一刻價千金と申すは。今の事で御座る。いづれへ參りたりとも。遊山の花見などと申して。我れ人心を慰むことで御座る。これは太秦太子の社。はあ。花も見事なり。扨も〳〵。夥しい事かな。それ草木多き中にも。花程人を慰む物は御座らぬ。先づ千本楊貴妃。又すだれかば櫻、御所櫻などと申して。種々に風情のあるもので御座る。是ははや嵐山ぢや。したり〳〵。嶺から麓まで。扨も〳〵。心よう咲いた。又竹筒を開かう。ドブ〳〵〳〵。先づ一つ呑まう。誠に。大和の吉

野の花を移させられて。御幸のあるも尤もで御座る。扨も〳〵面白い事ぢや。小謡。「[illegible]の花の都や」と謡ふ。やあ、向うにも謡ひつ舞ひつ、賑かな事かな。それ〳〵。扨々面白い事ぢや。某も一さし舞はう。小舞。笑ふ。是はよい樂しみぢや。あいたゝ〳〵。やい〳〵。礫を打つに何者ぢや。身共は洛中に隠れもない、見物左衛門と云ふ者を知らぬか。さうもおりやるまいものを。扨々痛い目に遭はせ居つた。あれ〳〵。あの橋を通る人は夥しいことぢや。はあ、あれに童などが水魚を釣る。おゝ釣つたり釣つたり。夥しう釣るは。後流しにさはらぬやうに。皆川岸へ寄られたよ。いやあれに大勢人立がある。何ぢや。上の方の船遊びか。樂をなして居らるゝか。扨々面白い事かな。鞨鼓笛琵琶しつりつ。打つは太鼓か。我劣らじと曲を盡さる。身共も樂を眞似して見う。ホウヒイドン。笑ふ。是はよい樂しみぢや。何々。柿の木の渡四郎左衛門殿が。是より御室北野平野の[illegible]見に同道致さうとや。忝う御座れども。今朝より地主の花を見まして。西山迄參つたれば。殊の外草臥れました。其上、日も暮れさうに御座る。今日はえ參りますまい。なに。是非とも。これは許して下されい。名殘の袖をふり切りて。名殘の袖をふり切りて。扨いならずよい[illegible]の[illegible]の數。あら名殘り惜しやの。はるばると送り來て。面影の立つ方を。かへり見たれば月細く。殘りたりや名殘り惜しやの。明日お目に懸かりませう。さらば〳〵。

三人僧（さんにんそう）

百姓
狩人
僧
百姓女
狩人女

（入道具）

百姓へ是は攝州住吉の里に住居致す百姓で御座る。今日も畑へ見舞はうと存ずる。シカ〳〵。まことに。百姓ほど忙しい者は御座るまい。毎日〳〵。田を見舞はねばならぬ。さりながら。苗田の時分に精を出せば。秋入がよいに依つて。晝夜の分ちも無う骨を折ることで御座る。いや何かと申すうちに田ぢや。何れ今年はよう出來た。是は大分に咲かしたに。當年は思ふ儘の世の中で。此の様な悦ばしい事はない。いや少し水を入れませう。今時は方々へ水を欲しがるに依つて。少しも油斷がならぬ。これ〳〵。これは如何なこと。水が入れたれば田の畔が格別違うた。少し休まう。獵人へ是はこの邊りに住む獵人で御座る。今日も山へ行き。大きな猪を一疋射留めて御座る。里へ下りもそつと仕合せを致さうと存ずる。これは精が出まする。百姓へまた今日も出られたの。仕合せは何とで御座る。獵人へ殊の外仕合せがよい。東の山端に大きい猪が一疋。作を荒して居たに依つて。弓矢をおつ取り。胴中を只一矢射留めた。百へさて〳〵それは手柄で御座る。いつも休んで居る。そなたもちと休んで御座れ。獵へいかさまちと休みませう。このうち[illegible]。僧へ諸國修行の坊主で御座る。此度思立ち住吉天王寺へ參詣致さうと存ずる。先づ急いで參らう。まことに。出家の境涯ほど心安いものは御座るまい。先づ妻子がなければ家もなし。家がなければ故郷もなし。たゞ三界を住家と致して。斯様の有難いことは御座らぬ。百へいやこれへ御出家の見えた。言葉を懸けて。どれからどれへ行かるゝか。尋ねませう。僧へ一段とよう御座らう。百へ申し〳〵。

猟へこれ〳〵。出へ愚僧のことで御座るか。百へ成程。こなたのことで御座る。これはどれからどれへ御座りまする。出へ唯今までは上方に居ました。此度天王寺へ参ることで御座る。猟へさて〳〵御殊勝なお志で御座る。序ながらお尋ね申しまする。なんと後生と申すことはあることで御座るか。また無いことで御座るか。出へむさとしたことをおしやる。後生なうて何となるもので御座る。百へすれば地獄極樂がある訳で御座るか。出へまだそのつれなことないはつしやる。地獄極樂こそ御座れ。先づ地獄の體をあら〳〵申さば。無間。えうちん。劒の山。血の池。嘘をいうた者は舌を拔かれ。目ではたかれ。箕でひられ。暫時も安からぬことぢや。また極樂の有難いは。先づ生死がない。生死とは生れ死するがないぢやまで。二十五の菩薩の音樂を聞き。百味の飲食が充ち滿ちて。暑いといふことも。寒いといふこともなく。それは〳〵。有難いことで御座る。その有難い所へ參りたさに。斯様に頭を圓め。諸國を修行して。後生を願ふことで御座る。必ず〳〵。うつかりと心得させられな。百へさて〳〵有難いお示しを承つて御座る。またお尋ねしまする。斯様の業を致せば。蛙その外。色々の虫などを。鋤鍬で思はず殺生を致す。これは科になりますまいか。出へされば。世間の無常を觀ずるに。風の前の燈火。芙蓉の朝。夕に咲いて。夕を待たざる有様。其の上。蛙と申すは。凡そ卵胎濕化の四生とて。生類の品々を法華經にも說き給へり。されば蛙は濕生の類とや申さん。或ひは水邊の草の上に子をへる。經緯めぐらすこと蠶の如し。魚の子の如くつながり。日を經て己れとかへり。蛙子となる。是を蝌蚪と申し。其の形圓にして尾あり。但し何物に似たり。初めて雷の聲を聞いて。則ち脫し。而うして足を生ず。陰陽師が曰く。大の月つもる時は。先づ前の雨足を生ず。小の月なれば後の雨足より生ずと說かれた。されば古へ。壹岐守何某とて。雲の上人あり。即ち此の住居の澤邊に於いて。蛙の鳴く聲を聞いて樂しみ。海士乙女の苦屋の一夜の契。後朝の袖の名殘を。また此の浦に立歸り。[illegible]ても面影ばかり殘り。濱の眞砂を踏み渡る。蛙の足跡を見れば。言の葉のあらはれたる。住吉の。海士の見るめも忘れねば。かりにぞ人にまた訪はれぬる。かの何某。蛙を愛せられたることを悅び。蛙の執心海士人と化して。一夜の契をなしたと申す。百へはあ。此の年月うかうかと暮して御座る。此上は何卒お前の御弟子になされて御座る。頭を剃つて下され。（この様子を聞き。猟人弓矢を打捨つるなり。）出へこれは何と召された。猟へ何と召されたとは。あの百姓が。我が營みにする田を作る鋤鍬の先に。思はず蟲蛙に當りてさへ。後世の障となる。ましてや業は此の年月。猟人の業とする。この罪は大抵の事ではあるまい。今日より弟子となされ。髪を剃つて諸國を連れて廻つて下され。出へさて〳〵。兩人ともに奇特な志で御座る。さりながら。遲くても遲からぬことぢや。先づ人々の宅へお歸りやつて。一門中または御内儀もあるであらう。篤と相談召され。其上で剃つてやらうぞ。百へ其段はお氣遣めされな。内々女共も相談致し置きました。猟へ御念の入つた事で御座る。斯様の世渡りをして露命を送りまするこ とを。一門ども。また女どもも。かれ〳〵うるさく存じて。頭を剃つて後生を願へ。後生を願へ。と朝夕せがみまする。どうあつても。早うお剃りなされて下されませ。出へさては前廣から御兩人とも。出家に成り度いお望で御座つたか。二人へ左様で御座る。今朝も女どもが申しま

するは。出家にならずは。門へ寄せ附けぬなどと申して。腹を立てまする。出へそれほどならば今剃つて進じませう。頭を揉まつしやれ。ト云うて。兩人とも羽織をとり。扇廣げて。頭を揉む。出へもはや兩人ともによう御座る。二人へよう御座りまするか。出へ是へ愚僧の懸替への衣が御座る。そなた達に讓りまする。二人へ是は有難う御座る。出へきてる／＼。よう似合ひました。百へこの衣を着ましたれば。出家らしう成りました。百姓女へこちの人は今朝田へ行かれた。殊の外遅う御座る。書飯を持つて參らうと存ずる。やあら此方は何として坊主に成つた。百へこりや／＼。出家になれば極樂へ行く。それ故に坊主になつた。止しにしようか。百女へなう／＼腹立ちや／＼。極樂へ行かいでも大事ない。何物が剃つたぞ。吐かし居れ。吐かし居れ。百へいやあの御出家に剃つて貰うた。あの出家に問はつしやれ。百女へ腹立ちや／＼。ト云うて一せがむ所。[illegible] 獵女へもはや歸られさうなものぢやが。これはいかなこと。出家が三人と。女一人と。何やら喧嘩をする。これは聞捨てにはなるまい。行懸かつた不祥ぢや。挨拶を致さうと思ひます。なう／＼。何事ぢやも存ぜぬが。女の役に了簡なされ。百女へまあ聞いて下され。了簡のするせぬといふことがあるもので御座るか。こちの人をあいつらが坊主になした。とかく兩人が相手ぢや。腹立ちや／＼。獵女へ初めて承つて驚きまする。さりながら。是も前世の約束と思召して。堪忍させられい。堪忍させられい。百女へいかな／＼。了見なりませぬ。出へあの女中は御發明な人ぢや。一旦出家に成つたれば。今更致しやうがない。百女へないといふことがあるものか。己れが坊主になしたか。いや。己れがなしたか。ト云ふ時。あとの女。我が夫を見る。肝を潰す。獵女へやあ。こちの人か。誰が髪を剃つた。もとの樣に毛を生やせ。毛を生やせ。獵へこりや／＼。そちは唯今發明者ぢやと褒められたではないか。そのやうな未練な事があるものか。女二人へとかく己れが本出家さうな。むごたらしいなぜ坊主にしをつた。早う毛を生やして返せ。毛を生やして返せ。ト二人とりつく。出家[illegible]する。出へ先づお聞きやれ。愚僧が先づかうあらうと存じて。一門中。また御内儀もあらば。相談を召されいと云うたれば。いや相談は濟んである。片時も早う剃つてくれいと。兩人ともおしやつたに依つて剃つた。百へやい身共が坊主に成り度いと頼みはせなんだ。獵へどこに身共が出家に成り度いと言うたぞ。無理に己れが摑まへて剃り居つたにはしよう事がない。百女へあれを聞かせられたか。獵女へあいつに食ひつかうか。いやとかくこの弓矢で射殺してくれう。出家へあゝ。許せいやい。許せいやい。百女へ出來ました／＼。この鍬で百姓割にしてくれう。二人へこれ／＼。兩人とも先づ待て。怪我があつては後日の邪魔ぢや。先づ待ていやい。先づ待ていやい。出へ宥してくれい。宥してくれい。

出家猟人

シテ
アド

出へ是は此の邊りに住居致す出家で御座る。用事あつて山一つ彼方へ參る。先づそろりそろりと參らう。シカ／＼。今朝は雨が降りさうにあつたに依つて。傘を用意致して御座る。降られればよう御座るが。獵人へ是は此の山下に住居致す獵人で御座る。また今日も狩に參らうと存ずる。先づそろり／＼と參らう。いや。あれからみとむない奴が參る。呼びとめ

てなぶらうと存ずる。いや。なう〱御坊。僧へ此方のことで御座るか。猟人へなか〱。僧へ何の用で御座る。猟人へ御坊はどれからどれへ御行きやる。僧へ愚僧は山一つあなたへ参る者で御座る。猟人へそれならば幸ひぢや。身共も山一つあなたへ参る。何と同道致さう。僧へお連れには似合ひませぬ。お先きへ参りませう。猟人へいや〱。連れには似合うたもあり。又似合はぬもあるものぢや。是非とも同道致さう。僧へ愚僧は急ぎますに依つて。お先きへ参ります。猟人へやい坊主。しかと同道せぬか。おのれ是でも同道せぬか。僧へあゝお供致しまする。猟人へ是はざれ事ぢや。さあ〱行かしめ。僧へ此方先きへ行かしめ。猟人へいや〱出家を後に置けぬ。さあ〱行かしめ。僧へ左様ならばお先きへ参りませう。さあ〱おいで成されませ。猟人へ心得た。さて御坊は御酒をまゐるか。僧へ少しまゐります。猟人へ定めて肴には。魚類をまゐるであらうのう。僧へいやこゝな。出家が魚類を喰うてよいものか。猟人へいや〱。此方の顔を見れば喰うた顔ぢや。隠さずとおしやれ。僧へはて知らぬと云ふに。猟人へおのれ云はずば云はせて見せう。是でも云はぬか。僧へあゝ喰うた〱。猟人へ何を喰うた。僧へ蛸を喰うた。猟人へなに。蛸を喰うた。僧へなか〱。猟人笑ふ 猟人へこりや女喰ひぢや。笑ふ 僧へほうりやうもない事を云ふ。猟人へ扨々面白い事ぢや。いや。なう御坊。御内儀はあるか。僧へなに御内儀。猟人へなか〱。僧へ其の様なものは知らぬ。猟人へ御内儀を知らぬ。それならば大黒はあるであらう。僧へいやそんな物が。其の様な汚らはしいものは持たぬ。猟人へなに持たぬといふことがあらう。おのれこれでも云はぬか。僧へあゝ持つた持つた。猟人へなに持つたか。僧へ以前は一寸持つたが。今はどれへやら行てしまうた。猟人へ何。どれへやら行てしまうた。笑ふ 扨々面白い御坊ぢや。身共を檀那に取らせられて下され。僧へ何がさて。お前様さへ持つてならしやれて下さるゝならば。私がためには一の檀那で御座る。猟人へ忝う御座る。此方なば檀那ぽんと頼むからは。此の世あの世までも頼みますぞ。僧へ何がさて。さうなうては叶はぬ事でおりやる。猟人へなう御坊、頼みたい事が御座る。僧へそれは何で御座る。猟人へ慮外ながら。此の弓をちと持つておくりやれ。僧へそれは終に持つたことが御座らぬ。猟人へ知らずば教へてやらう。かう持たしめ。僧へこりや衣が邪魔に成ります。猟人へ是非に及ばぬ。衣と一緒に持つておくりやれ。僧へかうで御座るか。猟人へようおぢやる。さあ〱行かしめ。僧へ心得ました。さて檀那とならしやつて下さりますからは。過去帳に書きまする程に。名は何と申します。猟人へ身共を知らぬか。左近三郎と云ふ猟人ぢや。僧へなに猟人ぢや。猟人へなか〱。僧へあゝ汚らはしい道具を持つた。ト云うて○弓矢を捨つる○ 猟人へやい。そこな奴。其の弓矢をなぜ捨てた。僧へ殺生をする道具をば此の尊い愚僧が持つ筈がない。猟人へやい坊主。殺生をしたりとも。世の營みなれば。苦しうあるまい。僧へすれば仔細を知らぬか。佛の戒にも。五戒と云うて。殺生偸盗邪淫妄語飲酒戒とて。殺生は一の戒でおりやるぞや。猟人へやい坊主。僧へ何事ぢや。猟人へおのれ頭は丸めても。物は知るまい。殺生をしても苦しうない文がある。僧へ殺生して苦しうない文があるものか。猟人へ知らずば云うて聞かさう。達磨大師の文に曰く。殺生な〱。刹那も殺生せざれば。其の身地

獄へ矢の如しと。説いて置かれた。おのれ宗體にありながら。これを知らぬと云ふことがあるものか。僧へいやそれは胸の内の殺生ぢや。業身苦上水泡不定五濁人天同者佛果と聞く時は。殺生なすれば咎になることではない。獵人へまだある〳〵。一心不生萬法に咎なし。咎無ければ法なし。法なければ佛も無しと云ふ時は。殺生しても苦しうあるまいがの。僧へ其の樣におしやつても。猪を射て。猪にならいで叶ふまい。獵人へ猪を射て猪にならば。坊主を射て出家にならう。僧へ其の樣に云うても。愚僧の胸の内には三寸の彌陀がある。獵人へ其の彌陀が見たい。胸を割つておみやれ。僧へ先づお聞きやれ。年毎に。咲くや吉野の山櫻。木を割りて見よ花のありかはと云ふ時は。割つても花はあるまいぞ。獵人へ如何にもある。僧へどれにある。獵人へ目の前にある。僧へ目の前〳〵。あゝ是か。獵人へなか〳〵。僧へこれは花ではない。鼻ではないか。獵人へそれは鼻か。僧へ是は鼻ぢや。獵人へ花。僧へ鼻。獵人へ花。僧へ鼻二人笑ふ 獵人へ近頃面白い坊ぢや。一つ申さう。かうおりやれ。僧へ忝けないが。先へ急ぐものぢや。是でお別れ申す。獵人へそれは名殘り惜しい。重ねてお目にかゝらう。二人へさらば〳〵。

善意

シテ　盗人
アド　何某
子

シテへこれはこの邊りに住居致す者で御座る。某親を一人持つて御座れども。身上貧しう御座るに依つて。親を養ふてだてが御座らぬ。何と致さうと存じて。晝夜辛苦致す事で御座る。又これに勝手自由になさるゝ御方が御座る。今夜は竊かに忍び入り。案内なしに何なりとも取つて歸り。それを賣しろなして親を養はうと存ずる。シカ〳〵。誠に。人の物をただ取ると申すは不心得な事で御座れども。とかく親を養ふ事がならぬに依つて。思はぬ思案がつる事で御座る。さりながら。勝手ともかうも致いたならば。元々に返辨致すは。さてイヤ何かと云ふ内にこれぢや。此のうち普請をせられたが。なか〳〵綺麗なことぢや。さて是迄は參つたが。これはなか〳〵恐ろしうて。這入らるゝ事ではない。よしに致さうか。このまゝ戻つては。親を養ふ事が出來ず。とかく思切つてはひらう。この垣を破れば早や坪の内ぢや。さらば垣を破らう。づか〳〵〳〵〳〵めり〳〵〳〵。驚く。なつたり〳〵。夥しうなつた。誰も聞きつけはせぬか。あゝ胴は震ふし。氣味の惡い事ぢや。アドへやあ〳〵盗人がはひつたと云ふか。裏へも表へも人を廻せ。是は身共が防ぐぞ。やるまいぞ〳〵。シテへさればこそ聞附けた。これはどれへ隱れうぞ。さて〳〵迷惑な事ぢや。アドへさればこそこれにゐる。打殺してやらう。シテへあゝ盗人では御座らぬ。ゆるさせられ〳〵。アドへおのれ夜中に人の内へ忍入つて。盗人でないとは。とかく打殺してのけう。追廻す。シテ逃ぐる。子へ先づ待たせられ。〳〵。樂屋より舞臺眞中にて止める。シテへまつたく盗人では御座らぬ。ありやうは親を一人持つて御座れども。身上貧しう御座つて。これを養ふ事が叶はぬに依つて。ふと出來心で這入りました。命ばかりは御助けなされて下され。アドへまだそのつれをぬかしをる。とかく打殺してのけう。子へ先づ待たせられ。〳〵。只今この人の申さるゝを承りますれば。親を持つたと仰せらるゝ。その上身上貧しいに依つて。親を養ふ事

が叶はぬに依つての事と申されまする。此のうち師匠の教にも。親には孝行。君臣の忠義に操を守る。夫婦別あり。長幼序。交はる友に信あり。之を守るを人と云ひ。守らず知らざるは。鳥獸にも劣ると申す事で御座る。まつたく親孝行の爲に致された事で御座る。昔し今にも致せ。私も親を養ひ兼ぬる節は。何と致しませう。それを思へば。悲しう御座る。泣く。此の上はどうぞ此の人の命をお助けなされて下され。泣く。此のあたり。口傳。アドヘハヽヽヽ我が子ながらも師匠の教を重んじ。五倫の道を守り。親孝行の志。我が胸中に通ず。それに就き。親を愛する者は人を惜まず。親を敬する者は人をあなどらず。孝を以て君に仕ふれば則ち忠。悌を以て長に仕ふれば則ち順なり。忠順失はずして以て其の上に仕ふるも皆孝行なりと云ふが。扨もヽヽ健氣な子ぢや。其の上こなたのなりを見るに。眞の盗人とも思はれぬ。此の上は命を助くる程に。隨分親を大事にさせられ。シテヘこれは忝う御座る。扨々御子息の御志感心致して御座る。我ら如きの者は恥しう御座る。それに就き。昔物語を思出しました。高祖群臣を御前にめされ。葡萄を賜はりし時。各之を食せり。其の中に叔達一人(ひとり)之を食せず。帝その故を問ひ給ひしかば。答へて。吾が母久しく病あつて口乾けり。葡萄を求むる事を得ず。今幸ひに之を賜はりし故。歸りて母に贈らんと云ひしかば。皆この孝心を感じ給ひし事も御座るが。とかく御子息は末頼もしい事で御座る。アドヘさて夜寒にも御座る。寢酒をたぶる程に。之を振舞ふ程に。先づ下に居やれ。シテヘ命をお助けなさるゝさへで御座る。これは御無用になされませ。アドヘ暫く待たせられ。やいかな法師。盃を取つて來い。子ヘ畏まつて御座る。アドヘ先づ下にお居やれ。シテヘそれは忝う御座る。アドヘやいヽヽ是へ注げ。子ヘ心得ました。アドヘ汝も一つお飲みやれ。シテヘ忝う御座る。さて結構な御酒で御座る。アドヘ氣に入つたらば。も一つお飲みやれ。シテヘ忝う御座る。おかげで闇の憂ひがやみました。子ヘちと謡ひませう。小謡。子ヶ謡ふ(シテ舞ふ)シテヘさて長居は恐れあり。最早お暇申しませう。アドヘそれならば土産を進ぜう。これは近頃さし古びたれども。こなたへ贈る。之を賣りしろなして。ともかうも召され。シテヘ重々忝うは御座れども。これは御斟酌申しませう。アドヘそれはいらぬじぎぢや。取つておいきやれ。シテヘ左樣ならば頂いておきませう。アドヘそれがよからう。

二人座頭(ふたりざとう) 大藏流

シテ 撿校
アド 勾當

アドヘこれは此の邊りに住居する勾當で御座る。今日は東山邊に平家の會があると申して。硎文が廻つて御座る。さりながら。私の琵琶はそこねて役に立ちませぬ。こゝに御心易う致す撿校が御座るが。よい琵琶を持たれて御座るに依つて。これを誘引して參り。此の琵琶を借らうと存じ罷り出た。先づそろりヽヽと參らう。いや誠に。未だお宿に御座ればよう御座るが。もしか行かせられた時は。參つた詮の無い事で御座る。いや參る程に是さうな。先づ案内を乞はう。ものも。案内もう。シテヘいや表にもの申すとある。案内とは誰そ。アドヘものもう。シテヘどなたで御座る。アドヘ私で御座る。シテヘエイ勾當の坊。此方なら案内に及ぼうか。なぜにかう通りはめされいで。アドヘ私も左樣には存じて御座るが。もし御客ばし御座らうかと存じ。それ故

案内を乞うて御座る。シテへそれは近頃念の入つた事で御座る。さて今日は何と思うて出させられて御座るぞ。アドへ唯今參るも別なる事では御座りませぬ。今日は東山邊に平家の會があると申して。廻文が廻つて御座るが。こなたには未だ廻りませぬか。シテへいかにも昨日廻つて御座るに依つて。唯今より參らうと存じ。こしらへを致いた所で御座る

アドへそれに就き參つて御座る。私の琵琶はそこねて役に立ちませぬ。何卒御供を致いて。琵琶を拜借を致さうと存じ。お誘引ながら願ひに參つて御座る。シテへ易い事。琵琶は弟子に持たせて。稽古のため今朝先きへ遣して御座る。それを貸して進ぜませう。幸ひ天氣も良う御座るによつて。こなたと同道致し。路次すがらゆるりと慰んで參りませう。アドへそれがよう御座りませう。シテへそれならば追付いて參りませう。さあ〳〵、御座れ〳〵。アドへ參りまする〳〵。シテへ今日は天氣も良う御座るによつて。東山は花も盛のこと故。さぞ賑やかな事で御座りませう。アドへ仰せらるゝ通り。賑やかなことで御座りませう。シテへさりながら。何れにも花を見て慰ませられうなれども。こなたや某は見る事はならず。嗅いでなりとも慰みませうぞ。アドへこれはいかな事。花は見るとは申せ。嗅ぐとは申しますまい。シテへいや〳〵。さうなおしやつそ。嗅ぐと云うて苦しうない古歌がおりやる。アドへそれは何と申しまする。シテへ此の春は。知るも知らぬも玉ほこの。行きかふ袖に花の香ぞする。と聞く時は。嗅ぐと云うて苦しうないではおりないか。アドへむゝ左樣仰せらるれば尤もで御座る。さりながら。是は古歌では御座るまい。定めて。只今此方がよいやうに詠ませられたもので御座らう。シテへやあらこゝなへんは。古歌にない事を云はうか。それはそなたが歌道にくらいと云ふものぢや。其の樣な事で撿挍になられまい。ちと歌道をも嗜ましめ。アドへこれは近頃聊爾を申して御座る。いや何かと申す内に。東山へ參つたと見えまして。殊の外賑やかになつて御座る。シテへそれ〳〵。此の邊りは別して花も盛りと見えて。良い香のする事でおりやる。アドへいや申し。程近と見えまして。手に取るやうに平家が聞えまする。シテへ誠によく聞ゆるは。アドへあれは誰で御座らうぞ。シテへされば誰であらうぞ。アドへ誰にもせよ。いかい下手で御座る。シテへいやなうなう。そなたは人の事を下手とおしやれども。そなたにはあれ程にはなれまいがの。アドへ私はあの樣な平家とくらぶる平家では御座らぬ。シテへそれ程自慢のめさるならば。此所で一節語つて聞かさしめ。アドへこれはいかな事。私の平家は語る座敷が定まつて居まする。このやうな處で語る平家では御座らぬ。シテへそれは身共も知つて居る。さりながら。日頃心易うする事ぢやに依つて。惡しい所になほいておまさう。先づ語らしめ。アドへそれ程に仰せらるゝ事ならば語りませう。惡しい所があらばなほいて下されい。シテへ心得た。（アド一谷平家語る。常の通り。その語りの内。）シテへこれは如何なこと。きやつはいつの間に稽古致いたやらことの外平家があがつて御座る。其の上某も今日一ノ谷を語らうと存じて御座るに。きやつが一ノ谷を語つては。某が語る物が御座らぬ。何と致さう。さん〳〵惡しう申して。思ひとまるやうに申さうと存ずる。（平家の濟む頃。これはにが〳〵しい。氣の毒やト云ふ。）あゝ、それ〳〵。それおみやれ。何といづれもの前で。其の樣な事でなるものか。其の上一ノ谷などと云ふものは。平家でつうとむつかしいものぢや。けふは一ノ谷は思ひとまらしめ。アドへいや申し〳〵。其の樣に

御せらるゝな。此方はこれ程にはなれまする。シテへやあらこゝな人は。撿校に向つて過言なおしやる。そなたの平家とくらぶる平家ではおりない。アドへそれならば。此方一節語つて聞かせて下されい。シテへこゝなものは。何と此の様な辻山道で語らるゝものか。アドへ御尤もでは御座れども。兎に角私の稽古の爲て御座る。何卒一節語つて聞かせて下されい。シテへいか様。上手な聞かれば下手が知れまい。語つて聞かせう。ようお聞きやれ。アドへそれは忝う御座る。シテへ抑も一ノ谷の合戦破れしかば。アドへいや申し。それは私の語つた平家で御座る。餘の平家を語らせられい。シテへやあこゝな人は。一つ平家でなくば。良い所やら悪しい所やら知れぬ。云はれぬ事を云はずと。先づお聞きやれと云ふに。アドへ心得ました。シテへ源平互ひに入り亂れ。向ふ者は踵を切られて逃ぐるもあり。アドへいや申し。向ふ者は踵を切られますまい。シテへむゝ。今そなたが一つ平家はならぬと云うたに依つて。それ故違へて語つた。アド笑ふ。アドへそれ見させられい。其の様な事でなるもので御座るか。以後撿校顔は止めておくりやれ。シテへやい／＼。やい何當。アドへやあ／＼引く。シテへやあとはおのれ憎い奴の。おのれ最前から撿校へ向つて過言ばかり云ふ。おのれ其のつれを云はば。爲に悪しからう。アドへ爲に悪しいと云うて。何となされまする。シテへ目に物を見せう。アド笑ふ。アドへ私は盲ぢやに。目に物を見せたりとも。怯ぢることではおりないぞ。シテへていとさう云ふか。アドへおんでもない事。シテへ憎い奴の。アドへ負ける事ではない。二人へやつとな／＼。杖を置く。組み合ふ。いやあ／＼。アドへやつとな。勝つたぞ。嬉しや／＼。シテへあいた／＼。やい／＼／＼。菜を此の様にして只おく事ではないぞ。あの横著ものを捕へて吳れい。やるまいぞ／＼／＼。

山立聟（やまだちむこ）　大藏流

シテ　舅
アド　聟
小アド　太郎冠者
小アド　嫁
（入道具）

舅へこれは此の邊りに住居致す者で御座る。明日は最上吉日で御座るに依つて。聟殿のわせられうとの事で御座る。掃除を申附けうと存ずる。先づ太郎冠者を呼出し。此の由申附けう。常の如し。明日は最上吉日ぢやに依つて。聟殿のわせられうとのお事ぢや。何と目出度い事では無いか。太郎冠者へ御意の通り御目出たいことで御座る。舅へそれに就き。兼て申し附けたる小袖上下を。都へ往て取つて來い。太へ畏まつては御座りまするが。最早七つ下りでも御座りますれば。峠も物騒で御座るに依つて。明日になされて下され。舅へ近比尤もにはあれど。あすは掃除等の用意のと言うて忙しいに依つて。是非とも往てくれ。太へ其儀で御座れば。畏まつて御座る。舅へ又その序に。酒肴をも念を入れて求めて來い。太へ心得ました。舅へ内も忙しい。早う戻れ。太へ畏まつて御座る。舅へエイ。太へハアヽ。扨も／＼。俄の御用を仰付けられた。急いで參らう。なう忙しや／＼。幕に入る。聟へ罷出づる者は。此の邊りに住居致す者で御座る。菜心ならずも明暮この峠へ出て山賊（やまだち）を致し。渡世と致して御座るが。いつ迄か様にあさましい業を致すも如何と存じ。山一つあなたの有德人より妻を迎へ。僅かの田畑を以て朝夕の煙を立てて居りまするが。舅

賊より再々聟入に來いと申されまするが。此の體でに參らう樣か御座らいで迷惑致す。それに就き。道ならぬ事では御座れども。今夜峠へ出で。一かせぎ致し。聟入を致さうと存じ。明日參らうと申遣して御座る。先づ急いで峠へ參らう。誠に。かやうなあさましい業を致いて。聟入を致すと申すも。本意には御座らぬが。とかく儘ならぬが浮世の習ひで御座る。イヤ何かと申す内に早や峠へ參つた。扨も〳〵。久しぶりで來たれば。廣々とした樣な。さらば此のあたりで往來を待たうと存ずる。（幕より出る。）太へなう忙しや〳〵。まんまと色々の物を求めて御座る。急いで戻らう。なう忙しや〳〵。オヽ暮るるは〳〵。早や日がずんぶりと暮れた。氣味の悪い事で御座る。何とぞ麓まで何事もなければよう御座るが。聟へヤイ。おのれは憎い奴の。此の長刀に懸けてくれう。太へアヽ悲しや〳〵。聟へおのれ逃げたりとものがさうか。太へアヽ悲しや。助けて下され〳〵。聟へヤイ〳〵。そこな奴。おのれは憎い奴の。七つ下つて。人も通らぬ此の山中へ一人來るは。定めて武邊立てであらう。此の長刀に懸けてくれう。太へかまへて武邊立てでは御座りませぬ。眞平命を助けて下されい。聟へ眞實命が助かりたいか。太へいかにも命が助かりたう御座る。聟へ命が助かりたくば。何やら荷物を持つて居る。それをおこせ。太へ是は頼うだ者の祝用で御座る。是がなうては明日の式が缺けまする。是は御免なされて下されい。聟へおのれ其のいれたやうておこさずば。此の長刀に懸けてくれう。太へ上げませう〳〵。眞平命ばかりを助けて下され。聟へ早うおこせ。太へつうとそちへのいて居て下され。聟へ心得た。早うおこせ。太へ畏まつて御座る。さらば取らせられい。聟へこちへおこせ〳〵。これは身共が物ぢや。まだ何やら有るでは無いか。太へ是は御酒お肴で御座る。こなたが取らせられても何の役にも立ちませぬ。是は宥いて下され。聟へなに酒肴ぢや。太へ中々。シテへそれこそ幸ひ。こちへおこせ。太へ是は宥いて下されい。聟へおのれ其のつれを言うておこさずば。此の長刀に懸けてくれう。太へアヽ上げまする〳〵。つうとそちへのいて居て下され。聟へ心得た。早うおこせ。太へさらば取らせられい。聟へこちへおこせ。太へアヽあぶない〳〵。聟へヤイ聞くが。太へ何事で御座る。聟へ身共に恥しい事ながら。生まれてより終に生きた物を切つた事がない。太へホヽ。聟へ己れを切り習ひに。どれから切らうぞ。太へ私は宥いて下されい。聟シテへそりや手が出た。太へ出はすまい。聟へ足が出るは。太へ出はすまい。聟へヤイ〳〵。己れ身ぐるみ剝ぐは山賊の法なれども。よう色々の物をおこいたに依つて。命ばかりは助けてやらう。人の來ぬまに早う失せい。早う失せい。太へ參りまする〳〵。聟へまだそれに居るか。此の長刀に懸けてくれう。太へアヽ悲しや。宥いて下されい〳〵。（ト幕に入る。）聟へ扨々こはい奴ぢや。とはいふものの。身共が恐ろしいかつた。ヤア月が上がらせられた。すれば夜が更けたと見ゆる。さらば獲物を見う。是は何ぢや。小袖上下で御座る。是に酒肴もあり。是は實代なすに及ばぬ。聟入りをせいと云はぬばかりの上々の獲物で御座る。急いで戻らう。定めて女共が待兼ねて居るで有らう。イヤなう〳〵。女共今戻つた。女へこれのうが戻らせられたさうな。イヤ申し〳〵。戻らせられて御座るか。聟へ今戻つた。女へいかう遲うなりまして御座る。聟へ何がさて。あすの用意に小袖上下の。

より酒肴まで。求めて來るに依つて。ちと手間がとれたものであらう。女ヘやれ〳〵。其の樣な取繕ひには及ばぬ事で御座る。こなたにはまだ髮も取上げずに居させらるる。聟ヘ何がさて髮も結はぬ。髭なら剃つて。髮を取上げておくりやれ。女ヘ何がさて。明日(あす)の用意を致しませう。こちへ御座れ〳〵。聟ヘ心得た〳〵。(幕に入る。幕内。)太ヘなう恐ろしや〳〵〳〵。何卒命を助けて下されい。恐ろしや〳〵。急いで戻り、此の由申上げう。イヤ申し〳〵。御座りまするか〳〵。太郎冠者が戻りました。舅ヘエイ太郎冠者が戻つたと見えて聲が致す。太郎冠者戻つたか〳〵。太ヘ御座りまするか〳〵。舅ヘエイ戻つたか。太ヘエイ賴うだ御方。後から誰も追うては參りませぬか。舅ヘ誰も追うては來ぬが何とした。太ヘ胸がだくついて。物が云はれませぬ。まづ胸のだくつきを鎭めて申上げませう。舅ヘそれがよからう。まづ何とした。太ヘまづ私が此所を出まする時分は。七つ下りで御座つたが。都へ上り。色々の物を求めて。戻りに山路に懸りますると。早や日がずんぶりと暮れました。舅ヘ定めてさうあらう。太ヘ氣味の惡い事ぢやと存じ。峠へ懸りまするると。例の山賊に出合ひましての。舅ヘホヽ。太ヘ大長刀を以て谷間へ追詰められ。小袖上下は申すに及ばず。酒肴まで取られて。剰へ命を取らうと申しまするに依つて。谷間をこけつ轉(まろ)びつ。やう〳〵これまで逃げて參つて御座るが。なんと恐ろしい目に遭うたことでは御座らぬか。舅ヘ扨々それはあぶない事で有つた。取られた物は是非もないが。怪我はせなんだか。太ヘ仕合せに怪我は致しませぬ。舅ヘそれは一段の事ぢや。早や夜も明くる。聟殿の見えらるゝであらうが。引出物は何としたものであらうぞ。太ヘさし懸かつた事で御座れば。斷りを云うて。後から送らせられい。舅ヘそれならば後から送らうが。酒肴は何としたものであらうぞ。太ヘそれこそさしかゝつた事で御座れば。地酒に鹽肴でもてなして置かせられい。舅ヘ氣の毒にはあれども。是非に及ばぬ。それならば地酒の用意をせい。太ヘ畏まつて御座る。舅ヘまた聟殿が見えられたならば。こなたへ申せ。太ヘ心得ました。舅ヘエヽイ。太ヘハアヽ。聟ヘ女共用意はよいか。女ヘ一段とよう御座る。こなたには早や立派に出立たせられて御座るの。聟ヘ何ときらびやかに見ゆるか。女ヘ殊の外きらびやかな事で御座る。聟ヘそれならば。とくと見てくれい。女ヘ畏まつて御座る。ハアヽ。前から見ても後から見ても。きらびやかな事で御座る。聟ヘ何と花聟と見えようか。(笑ふ。)是は如何な事。人を雇はうにも人はなし。酒肴は何として持つて行たもので有らうぞ。女ヘ通ひ馴れた山道で御座れば。誰見る者も御座りまするまい。兩人して持つて參らうでは御座らぬか。聟ヘ一段とよからう。是へお持ちやれ。女ヘ心得ました。則ち是で御座るか。聟ヘ一段とよい。身共は道も不案内ぢや。和御寮からおりやれ。女ヘ其儀で御座らば。私から參りませう。さあ〳〵。御座れ〳〵。聟ヘ參る〳〵。女ヘさて此方のお出で成されたならば。舅殿が定めて喜ばせらるゝで御座らう。聟ヘそれは一段の事ぢや。して程は遠いか。女ヘもそつとで御座る。急がせられい〳〵。聟ヘ心得た〳〵。女ヘイヤ何かと申すうちに。早や是で御座る。こなたの御出で成された由を申しませう。暫く是に待たせられい。聟ヘ心得た。能い時分に披露しておくりやれ。女ヘ心得ました。ものもう。太ヘ表に物もうとある。案内とは

どなたで御座る。 女へ是で御座る。 太へエイおごう様で御座るか。最前よりお待兼ねて御座る。かう通らせられい。 女へ通らう程に、この酒肴を披露してくれい。 太へ畏まつゝ御座る。 女へイヤ申し〳〵とゝ様。變らせらるゝこともなうて。目出度う御座る。 聟へ何がさて。變る事もおりない。先づかう通らしめ。 太へイヤ申し、是はお持たせで御座る。 舅へやれ〳〵念の入つた。聟殿に早う通らせられいと言へ。 太へ畏まつて御座る。イヤ申し〳〵。かう通らせられいと申しまする。 聟へ通らうか。 太へつうと通らせられい。 聟へ扨はこれの太郎冠者か。 太へ左様で御座る。 聟へけふは目出度いな。 太へハヽア。 聟へ不案内で御座る。 舅へ初對面で御座る。 聟へ早う參らうずるを。私の無音の段、眞平御免なされて下され。 舅へ内々待ちまする處、今日の御出で忝う御座る。 聟へハア。 舅へ唯今は御酒お肴を下されて。忝う御座る。 聟へ心ばかりで御座る。 シテへさて聟殿には。面目も無いことが御座る。 聟へとはまた如何樣な事で御座る。 舅へ有り樣は引出物を上げませうと存じ、小袖上下を都へあつらへて置き。酒肴をも夜前取りに遣しました處に。峠で山賊に出合ひまして、 聟へホヽ。 舅へ小袖上下は申すに及ばず、酒肴までも取られて御座る。さしかゝつた事で御座るに依つて。小袖上下は後より遣りまする。また地酒に鹽肴おもてなしで御座る。 聟へ私は苦しうは御座らぬが。怪我は致しませなんだか。 舅へ仕合せに怪我は致しませなんだ。 聟へそれは一段の事で御座つた。 舅へヤイ太郎冠者。お盃を出せ。 太へ畏まつて御座る。お盃で御座る。 舅へ聟殿へ、持つて行け。 太へ心得ました。お盃で御座る。 聟へ舅殿へ持つて行け。 太へ畏まつて御座る。 舅へそれならば今日の事で御座るに依つて、私が飲うで。目出度う此方へ上げませう。 聟へそれが能う御座りませう。 舅へ盃を是へ持て。 太へ畏まつて御座る。 舅へ一つ注げ。 太へ心得ました。 舅へオヽ丁度ある〳〵。 太へなみ〳〵と御座る。 舅へ之をこなたへ遣しませう。 聟へ頂きませう。 舅へ太郎冠者。この盃を聟殿へ持つて行け。 太へ心得ました。 聟へ是へ注げ。なみ〳〵とある。 太へ丁度御座る。 聟へお蔭で胸のだくめき。 笑ふ。 今一つ注げ。 太へ畏まつて御座る。 舅へ聟殿には一つ成ると見えまする。 聟へ私は酒は得物で御座る。丁度ある〳〵。 太へなみ〳〵と御座る。 舅へいか程も參れ。 聟へ數よう三獻たべませう。 舅へいか程も參れ。 聟へさて之をこなたへ進ぜませう。 舅へ頂きませう。太郎冠者一つ注げ。 太へ畏まつて御座る。 シテへ丁度ある〳〵。 太へなみ〳〵と御座る。 舅へ之をおごうへさしませう。 女へ頂きませう。 舅へ太郎冠者。酌をせい。 太へ心得ました。 聟へ女ども一つ飲め。人毎に朝は悪いの。貴はのぼせるのと申しまするが。私は酒さへ飲めば。心がせい〳〵と致しまする。アヽ醉うた〳〵。 女へ扨とゝ様へ上げませう。 舅へ是へ、おくりやれ。 さて聟殿。今一つ參らぬか。 聟へはて飲まいで。盃を是へもて。太郎冠者。酌をせい。 舅へ何事ぢや。 太へ聟殿の聲と山賊の聲が一つで御座る。 舅へ其樣なむさとした事が有るか。 太へさう仰せらるるならば。見させられい。御注文の上下で。何々の模様では御座りませぬか。 舅へ誠に何々の模様ぢや。それならば。散々に打擲してくれう。 太へ一段とよう御座りませう。 聟へ女共〳〵。一つ注げ。 女へ扨々むさとしたこの體は。何としたことで御座る。

肌を入れさせられい。　聟へおのれ何を知つて、一つ注げ／＼。舅殿はどれへ行かれた。舅殿／＼。　舅へ是になりまする。　聟へこなたはどれへ御座つた。　舅へ勝手に用の事が御座つて。参つて御座る。　聟へ客なとうで。勝手に行くといふ事があるものか。笑ふ。一つ諷はせられい。　太へおごう様。母様が召しまする。奥へ御座れ。　女へ心得た。行て参りまする。　聟へ行て来い／＼。太郎冠者。一つ注げ／＼。　舅へイヤ申し聟殿。其の御小袖は何れの織屋へ仰附けられた。また御上下は何れへあつらへさせられた。　聟へ是は峠で。謡とう下向召されとおなはいちやか頂ひませうよ。笑ふ。　舅へ謡どころでは御座らぬ。何れへあつらへさせられた。／＼　太へ申し御酒の銘は何と申しまする　お肴は何で御座る。　聟へおのれ迄が其様な事をいふか。お酒の銘はさけ。肴は魚ぢややい。　舅へおのれまだ其のつれを言ふか。聟ではなつて峠の山賊ぢや。散々に打擲してくれう。　聟へアヽき様な者では御座らぬ。宥いて下されい／＼。　舅へあの山賊聟を捕へてくれい。やるまいぞ／＼／＼。

呼聲（よびこゑ）

シテ　太郎冠者
アド　主人

アドへこれは此の邊りに住居致す者で御座る。某一人召使ふ下人が。此の間身が前へ出ぬ。今日はきやつが私宅へ罷り越し。呼出だし。屹度折檻を致さうと存ずる。誠に。憎いことで御座る。一應の斷りを申して御座らば。何程でも暇をくれませうものを。沙汰を致さぬと申すは言語道斷。腹の立つことで御座る。参る程に是ぢや。先ず案内を乞はう。ものもう。案内もう。　シテへやら奇特や。頼うだ人の聲で案内がある。此のうち罷出ぬに依つて折檻に見えたものであらう。留守を使はうと存ずる。　アドへものもう。　シテへどなたで御座る。　アドへ太郎冠者は居るか。　シテへいや留守で御座る。　アドへさうおしやるは誰そ。　シテへ隣の者が留守を預つて居りまする。　アドへ歸つたらばおしやつてたもれ。用事あつて参つた。追附け出よと云うてたもれ。　シテへ畏まつて御座る。アドへ頼むよ。　シテへハア。さればこそ。頼うだお方であつた。是に會らてよいものか。　アドへ扨々憎い奴かな。目の前に居て留守をつかひ居る。何としようぞ。いや彼奴は悴の時分より物事ういた奴ぢや。浮きに浮いて申せば。我を忘れて出居るで御座らう。小拍子にかゝつて呼び出いて見う。太郎冠者殿。太郎冠者殿。宿に御座るか。宿に御座るか。　シテへ是はいかな事。誰ぢや知らぬが。小拍子にかゝつて呼ぶ。是は出ずはなるまい。　アドへ太郎冠者殿。お宿に御座るか。シテへ宿に居申す。宿に居申す。　アドへ内に御座らば。お目にかゝらうぞ／＼。　シテへ何で御座るぞ。何で御座るぞ。　アドへ早う出よ。　シテへ是へ参つた／＼。　アドへ太郎冠者殿。　シテへ何で御座るぞ。　アドへ冠者殿／＼。シテへ何ぢや／＼。　アドへ冠者や／＼。　シテへ何ぞ／＼。　アドへ冠者。　シテへなに。　アドへ冠者。　シテへなに。　アドへやいそこな奴。留守を使ふのみならず。主の聲を聞き忘れたか。横着者すさり居れ。

饅頭（まんぢゆう）　大藏流

シテ　饅頭賣
アド　太刀持
（入道具）

シテ〽是は此の邊りの者で御座る。某まんぢうと申す菓子を商賣に致す。いつも街道へ參り。往來の人に商ふ事で御座る。今日も亦商ひに參らうと存ずる。先づそろり〳〵と參らう。誠に。唯今こそ斯様の淋しい商賣を致せども。仕合せを直してもあらば。金襴緞子綾錦。何を商ふとも身共の儘ぢや。何かと申す内街道へ來た。先づ店を飾り。誠に。賣物には花を飾れと申すによつて。小さいを下に致し。大きなを上へならべ。（葛桶のふた明けて出すなり。）一段とよい。扨も〳〵けふは賑々しい事ぢや。何卒仕合せを致したいものぢや。（大臣柱へ店を出し。笛頭へ座す。）アド〽これは遠國の者で御座る。永々在京致す所に。訴訟思ひの儘に叶ひ。御暇を下されて國元へ下る。今日は町表へ出て土産物を求めうと存ずる。先づ急いで參らう。國元にはさぞ待ちかねて居るで御座らう。仕合せのよいことを聞いたらば。さぞ悦ぶで御座らう。シテ〽いやこれへ一段の者が來た。急いで商はう。イヤなう〳〵。饅頭を買はつしやれぬか〳〵。アド〽さても〳〵夥しい事かな。何を買はうとも儘ぢや。シテ〽さあ〳〵出來たての饅頭を買はつしやれ。饅頭〳〵。アド〽是は何と申すもので御座る。シテ〽是は饅頭と云うて味い物ぢや。さあ〳〵買はつしやれ〳〵。アド〽なに。饅頭。シテ〽なか〳〵。アド〽饅頭とは仔細のあるものか。シテ〽いかにも仔細がある。昔多田の滿仲公この菓子を作り給ふ。さあるによつて此の名を饅頭と云ふ。至つて風味の良いものぢや。さあ〳〵買はつしやれ〳〵。アド〽何と味い物か。シテ〽味いとも〳〵。諺にも。味いものは饅頭のやうなと申す。味いものゝ司で御座る。先づ一つ喰うて見さしめ。アド〽いや〳〵身共は氣味が惡い。よしにせう。シテ〽これ〳〵。氣味の惡い様なものではない。つうと味いものぢや。先づ一つ喰うて見さしめ。アド〽いや〳〵。どうあつても不氣味さうな。よしにせう。シテ〽味なくば代りを取るまい程に。喰うて見さしめ。アド〽なに。味なくば代りをとるまい。シテ〽なか〳〵。アド〽それならば。一つ喰うて見よう。シテ〽おゝ喰うて見さしめ。味くば買はせられいや。アド〽おゝ。味くば買はう。シテ〽さあ〳〵喰うて見さしめ。アド〽いや〳〵。どうでも不氣味さうな。是はよしにせう。シテ〽さて〳〵味なくば代りを取るまいと云ふに。先づ一つ喰うて見さしめ。アド〽それならば一つ喰うてみよ。シテ〽何とぢや。アド〽あゝ是は不氣味なものぢや。よしにせう。シテ〽いやこれ〳〵。今のは仕損じであつた。此度はもう一つ是を喰うてお見やれ。アド〽いやも味ない。よしにせう。シテ〽はて扨。味なくば代りを取るまい程に。も一つ是を喰うてみさしめ。アド〽それならばも一つ喰はう。シテ〽むまくば必ず買はせられいや。アド〽おゝ。むまくば買はうぞ。あゝ是は味ない。よしにせう。シテ〽すれば。どうあつてもいやで御座るか。アド〽なか〳〵。シテ〽それならば是非に及ばぬ。代りを置いて行かしめ。アド〽なに。代り。シテ〽なか〳〵。アド〽いやこゝな者が。味なくば代りをとるまいと云うたによつて喰うた。身共は知らぬぞ。シテ〽おのれ。さう云うて代りを置かぬによつては。爲になるまいぞよ。アド〽何ぢや。爲になるまいと云うて何とする。シテ〽目にものを見するぞや。アド〽そりや誰が。シテ〽身共が。アド〽あのお主がや。シテ〽おんでもない事。アド〽深い事はあるまい。おけいやい〳〵。シテ〽おのれ。なまやはらかに云うて置くによつてぢや。おのれ。たゝき殺して與れう。（こぶし握りふり上げ打ちにかゝる。）アド〽おのれ。其のつれな云ふと關

切りにして呉れう。（太刀抜きかゝる。）シテ〽あゝあぶないわいやい〳〵。アド〽おのれ唐竹割にして呉れう。シテ〽あゝ。命は助け〳〵。アド〽何ぢや。命が惜しいか。シテ〽おゝ。惜しい〳〵。アド〽命が惜しくば助けてやらう。さて身共は恥かしい事ながら。つひに生きたものを切つたことがない。シテ〽はおん。アド〽切り習ひに。己れを眞二つにして呉れう。シテ〽あゝ。命は助け〳〵。アド〽なに。眞實命が惜しいか。シテ〽おゝ。惜しいとも〳〵。アド〽命が惜しくば頭が高い。シテ〽あゝ。下げる〳〵。アド〽手が出た。シテ〽引く引く。アド〽そちら。シテ〽引く〳〵。アド〽こちら。シテ〽引く〳〵。アド〽扨も〳〵面白い事ぢや。何として呉れうぞ。やい〳〵。命が惜しくば助けてやらうが。身共の踊る跡を見なるまいぞ。シテ〽見よと云うても見ることではない。アド〽お見やるまいぞ。シテ〽見ることではない。アド〽見まいぞ。（饅頭を袂へ入れると。シテ饅頭を入れるを見て。）シテ〽あゝ。それを何とする。アド〽ありや。見なつた。胴切りにして呉れう。シテ〽あゝ。見ることではない〳〵。アド〽見まいぞ。（ト云うて。袂ふところへ入れる。シテ見て。）シテ〽あゝこりや〳〵。それを何とする。アド〽又見なつた。眞二つにして呉れう。シテ〽あゝ命は助け〳〵。アド〽見るな〳〵。一段の出合ぢや。急いで立退かう。（入る。）シテ〽扨も〳〵恐ろしいことかな。既に切られうとした。其の上饅頭を皆とつて行きをつた。さて〳〵苦々しい事かな。今日は仕合せを致さうと存じたに。散々の不仕合せであつた。さりながら。あまの命を拾うたとにかく命あつての事ぢや。是非に及ばぬ。先づ宿へ歸らう。はゝあ流石田舎者ぢや。是に饅頭を一つ落して置きなつた。是は幸ひぢや。（ト袂へ入れ。とめる。又喰らうこととめるも。）是こそ某が明日の樂しみに致さう。

湊川詣（みなとがはまゐり）

シテ　主人
アド　太郎冠者

シテ〽これは此の邊りの者で御座る。今日は湊川神社の御祭典で御座るによつて。參詣致さうと存ずる。（如常。）今日は湊川の神社の祭典ではないか。アド〽御意なさるゝ通り。今日は御神事で御座りまする。シテ〽それに就き。參詣せうと思ふが。何とあらう。アド〽御意もなくば申上げうと存じて御座る。一段とよう御座りませう。シテ〽それならば追付け行かう。さあ〳〵來い〳〵。アド〽ハア。シテ〽さて何と思ふぞ。斯う行く道すがら。浦々の景色をながめ。よい慰みではないか。アド〽御意なさるゝ通り。よいお慰みで御座りまする。シテ〽又この樣に足手息災で參詣するといふは。忝い事ぢやなあ。アド〽御意の通り。忝い事で御座ります。シテ〽イヤ何かと云ふ内に參り著いた。アド〽誠にお參り著きなされました。シテ〽さらばお前へ向はう。アド〽よう御座りませう。シテ〽汝も拜なせい。アド〽畏まつて御座る。（拜む。）シテ〽さてこの邊りを見物致さうではあるまいか。アド〽それがよう御座りませう。シテ〽何と大參りではないか。アド〽夥しい參詣で御座ります。シテ〽さう無うては叶はぬ。當今の神社ぢやもの。又この碑は楠公の忠臣を惜しみ。光圀卿の建てられた碑ぢやが。何と見事ではないか。アド〽御意なさるゝ通り。見事なことで御座る。シテ〽またあの山の麓に。布引とて見事な瀧がある。その瀧の流を生田川と云ふは。アド〽生田の社は。どこもとで御座ります。シテ〽川の此方に森がある。それが生田の神

ぢや。その森の内に熊の祠と云うてある。アド〽當所は名所の多いことで御座りまする。シテ〽昔はこの邊は荒地であつたが。今は開化して神戸の濱と云ふ。何と賑やかになつた事ぢやなあ。アド〽なか〳〵。賑やかな事で御座ります。イヤ申し。あの向うに見えまするは。和田の岬で御座りまするか。シテ〽その通りぢや。アド〽又この邊りな顎の浦と申すには。何ぞ仔細が御座りまするか。シテ〽成程これに就き仔細がある。まだ日も高いによつて。慰みがてら語つて聞かさうぞ。アド〽それは有難う存じまする。シテ〽先づ下に居よ。（語りは淡川アヒ類の語に同じ事なれ。）五月廿五日初めて御祭典を行はれたが。何と忝い事ではないか。アド〽御意なさるゝ通り忝い事で御座る。世に忠孝ほど大事のものは御座りませぬ。シテ〽そちも精々尊な心掛け。悪なさぬ様にせい。アド〽畏まつて御座りまする。シテ〽さて日も餘程西に傾いたではないか。アド〽成程。日も山の端にかゝりました。シテ〽それならば追付け下向をせう。その用意をせい。アド〽はあ。シテ〽えい。アド〽はあ。

宮廻り（みやめぐり）

シテ　伊勢の御師
道者　六人ばかり
（入道具）

シテ〽これは伊勢太神宮に仕へ申す御師で御座る。誠に。天下治まり目出度き折柄なれば。國々在々より御參詣の貴賤は其の數を知らず。肩を雙べくびすをついで。夥しいお事で御座る。今日も是にあつて。參詣の人々を相待ち申さうと存ずる。（ト云ふて一〇笛座に居る。）道者次第〽結び〳〵し講の末とげて。〳〵參宮するぞ嬉しき。是は東國方に住居する者で御座る。何れも若の者申し合はせ。伊勢講を結び。其の願成就致し。只今參宮仕り候。道行〽住馴れし在所を出でて足輕に。〳〵道を逆に行く程に。辻大佛を打過ぎて。程なくこゝぞ五十鈴川。山田に早く着きにけり。シテ〽いつ是へ道者が大勢參られた。東國衆と見えた。某が日雇に致さう。なう〳〵これは奇特に御參詣なされた。某は太神宮に仕へ申す御師で御座る。案内申して兩宮共に宮廻りなさせませう。是へ御座れ。頭〽それは忝う御座る。初めて參宮致した者で御座る。宮廻りさせて下されい。シテ〽先づ是は伊勢山田外宮の入口。門ヘ五十鈴川で御座る。何れもお手水を使はせられい。（道者何れもお手水。うがひなどする仕方あり。）シテ〽さて段々八十末社は左右に立たせられて。御本社は是で御座る。信心に拜み成され。頭〽心得ました。（ト云うて一同正面に下に居て。頭揃いて拜む。）頭〽現在安樂壽命長久。息災延命に守らせ給へ。守らせ給へ。シテ〽是より天の岩戸へ上りまする。此方へ御座れ。此の左右は皆末社で御座る。若衆必ず〳〵粗末に思召すな。是が天の岩戸で御座る。日本國中より神酒を思ひ〳〵に捧げまするが。是へ流れ來り。乃ち之を飲うて見させられい。酒で御座る。（道者いづれもせト合ひ呑む。）頭〽誠に酒の匂ひが致しまする。二ノ道者〽奇特なことで御座る。シテ〽昔神代の御時。天照太神此の岩戸に閉籠らせられて御座れば。世界暗闇となつて。夜晝の分ちも御座らぬ所。八百萬の神たち。神樂を奏して舞ひ給へば。忽ち日月光り輝きて人の面も明らかに見えたと申す。何と有難い事では御座らぬか。さあ〳〵御座れ。扨これは相の山。あの比丘尼を慰みに見させられい。頭〽これは美しい女共で御座る。二ノ道者〽小さい小供が大勢居まする。シテ〽いや。錢

なおれらが顔へ當るやうに打附けて見させられい。あの三味線の撥や。綾織る道具で受けて。一錢も取落しませぬ。頭〽どれ〳〵。いづれも錢を打ちつける形。これは面白い。珍らしいことを見ました。二〽扨々御繁昌な賑々しいお事で御座る。シテ〽何かと申すうちに。これは宇治橋で御座る。シテ柱のそばを見て。頭〽よほど長い橋でござる。シテ〽これより內宮の入口で御座る。此方が內宮御本社で御座る。神は正直の頭に宿ると申す程に。謹んで拜ませられい。頭〽心得ました。各拜む。シテ〽是より四十末社雨の宮風の宮。月讀日讀。總じて日本國中の神々を御勸請申した。目出度い伊勢の御地で御座る。これより私宅へ寄らせられて休足なされ。明日は朝熊山二見の浦へ御同道申し。名所どもをお目に懸けませう。頭〽忝う御座るさりながら。目出度う直ぐに下向致したう御座る程に。御祓を戴きたう御座る。シテ〽近頃殘り多う御座れども。御勝手になされ。御祓をも上げませうず。此の所名物の土產ものを進上。頭〽それは忝う御座る。シテ終見送へ行て出る。シテ〽太夫はこれを見るよりも。〳〵。さらば土產を參らせんとて。御祓串にふのり椎茸。幾千代目出度くのし〳〵と。伊勢天目に若和布を添へて。末繁昌と祝ひ納め。末繁昌と祝ひ納めて。下向することこそ目出度けれ。

小原梅　大藏流

シテ　庵室の僧
アド　黑木賣の女
ツレ　女
三のツレ　女
（入道具）

シテ〽是は都の西大原野に庵室を守る者で御座る。今朝齋に出て只今戻りまする。先づそろり〳〵と參らう。いや誠に我等の庵室に隱れもない櫻が御座るが。殊の外名木とあつて。都の人々花の折節は貴賤群集致しまする。此の程は花も盛りで御座るによつて。木陰を清め。花を守りまする。いや何かと申すうち最早戻り着いた。扨も〳〵咲いたり〳〵。何れも御賞翫なさるゝは尤もぢや。先づ眠藏へ入つて心をすまさうと存ずる。アド〽是は北山邊の黑木賣で御座る。承れば西山の庵室の花が盛りぢやと申すによつて。今日は何れも同道致し。商賣ながら。花見に參らうと約束致して御座る。則ち天氣もよう御座るによつて。何れも呼び出し同道致さうと存ずる。イヤ申し。何れも是に居りまする。アド〽今日は天氣もよう御座るによつて。御約束の通り花見に參らうでは御座らぬか。ツレ〽妾も約束で御座るによつて。竹筒を用意致して參つて御座る。アド〽それは一段の事で御座る。それならばおつついて參りませう。さあ〳〵御座れ〳〵。ツレ〽參りまする〳〵。アド〽さて此方達も梅を持たせられて御座るの。ツレ〽なか〳〵。最早末にはなつて御座れども。都の兒達の殊の外花を御賞翫なされますによつて。進上致さうと存じて。折添へて參つて御座る。アド〽扨は何れも同じ心で御座る。妾とても其の心で持つて參つて御座る。いや何かと申す內早や是で御座る。先づ內へ這入つて見ませう。ツレ〽よう御座りませう。アド〽扨も〳〵。見事な事では御座らぬか。ツレ〽其の通り見事なことで御座る。只今が盛りで御座る。アド〽何にもせよ。先づゆるりと居て眺めませう。ツレ〽よう御座りませう。アド〽さあ〳〵これからなりと竹筒を開かせられい。此所。花折の通り。花見事小謠になる。シテ〽扨も〳〵賑やかな事かな。見

ればやさしや女の分として。竹箭な用意致し花見を致いて居る。羨ましい事かな。身共も一つ呑みたいものぢやが。それ〳〵思ひ出した。申しやうが御座る。いやこれ〳〵。そなた達は何方の者なれば。此の庵室の邊に斷りもなく這入つて花見をするぞ。アドへ妾はあたり近い在所の者で御座るが。御庭の花を話に承り及うで參つて御座る。初めに御斷り申さぬは妾達の不調法で御座る。何卒免して見せて下されい。シテへやさしや女の身として。花に心あつて態々見えたものを。ならぬと云ふ事はない。さり乍ら。其のやうに酒盛を召さるによつて。某も心をすます邪魔になる。此の上心もすまされぬによつて。某にも一つ振舞うておくりやれ。アドへ申し〳〵易い事で御座る。さあ〳〵お酌に立ちませう。一つ呑ませられい。シテへそれは添うおりやる。おゝ丁度ある。扨も〳〵念の入つたよい酒ぢや。其の上今朝ろさいに出て。ちとすき腹へ呑うだれば。一入むまい事でおりやる。アドへそれは一段の事で御座る。それならば今一度お酌に立ちませう。シテへ度々慮外におりやる。とてもの事に。鼓前の様にちと舞はしめ。アドへ心得ました。小謠。きこしめしをうたふ。シテへアンヤ〳〵〳〵是は身共もお蔭でよい花見をする。とてもの事に一つ受持つた。一さし舞はしめ、アドへお肴に舞ひませう。何れも謡うて下されい。ツレへ心得ました。小原木舞ふ。シテへアンヤ〳〵〳〵。アドへ面白うも御座らぬ。ツレへ今度は妾が御酌に立ちませう。シテへ又謡はしめ。小謠。今宵は花の下ふし。シテへアンヤ〳〵〳〵。又受持つた。そなたも一つ舞はしめ。ツレへそれならば。又何れも謡うて下されい。アドへ心得ました。ツレ柴垣を舞ふ。シテへアンヤ〳〵。三のツレへ今度は妾がお酌に立ちませう。シテへ又謡はしめ。小謠。呑。たのもしき。シテへアンヤ〳〵。又一つ舞はしめ。三のツレへ何れも謡うて下されい。十七八舞ふ。シテへアンヤ〳〵。此の度は身共が酌に立たう。アドへよう御座りませう。こなたも一つ謡はせられい。小謠。都なれば東山。何れもへアンヤ〳〵。さて此の度は何れも受持つて御座る。こなたも舞はせられい。シテへこの興がつたなりでなるものか。免いておくりやれ。アドへいや〳〵。順の舞で御座る。ひらに舞はせられい。シテへそれならば。何れも謡うておくりやれ。アドへ心得ました。あはれ一枝。舞ふ。アドへアンヤ〳〵。御骨折りに又立ちませう。小謠。ざゞんざを謡ふ。シテへアンヤ〳〵。殊の外酔うた。扨そなた達は何と思うて梅の花を持つて來たぞ。アドへされば〔の〕事で御座る。在所の梅で御座るが。都の兒達の御賞翫なされまするによつて。進上致さうと存じて折添へて參つて御座る。シテへ是は尤もぢや。さり乍ら。最早來になつて。此の梅の側へよつては見らるゝ事ではおりない。アドへ仰せらるゝ通り。櫻も見事には御座れども。盛りの時は。此の梅に及び附くことでは御座らぬ。ツレへそれ〳〵。梅は早春より咲く珍らしい花で御座る。アドへおゝそれ〳〵。既に花の兄と申すでは御座らぬか。なか〳〵梅に及ぶものは御座らぬ。シテへいやこゝなものは小賢しい事を云ふものぢや。知るまいと思うて其のつれを云ふか。よう聞け。梅は雪の内より花芽ぐみ。匂ひ含み。春早々に花開く。諸木に先立ち花開くによつて。それ故花の兄と何れの歌人の言葉にも賞めて置かれた。尤も櫻の少し遅く咲くとも。眺めは梅より優つて。櫻に越す花は無いぞ。こなた達が梅を折添へた所で。其の様な我儘を云ふ。此の庵室で。其の様な我儘を申すことではない。アドへ是は面白うなりました。こなたには櫻を自慢の召さるゝ。妾達は梅を持つて居まするに

よつて。梅に越す花は無いと思ひまする。此の上は妾達は此の梅について。梅の當座を詠みませう。又こなたは櫻の當座を詠ませられい。妾は負けて御座らば。梅は申すに及ばず。黒木まで皆こなたへ上げませう。又妾達の勝つたに於いては。櫻を手折つて戻りませう。シテへなに。當座。アドへなか〳〵。シテへ當座とは歌の事ぢやぞや。アドへなか〳〵。歌の事で御座る。シテ笑ふ。シテへいかに都近に居るとて。當座。笑ふ。いや其の歌と云ふものは。内裏上﨟のもてあそびでこそあれ。賤の女の分として。當座だてはおいて呉れい。アドへ其の樣に笑はせらるゝならば。妾から詠みませう。シテへ承りごとぢや。アドへ鶯の。シテへ鶯の。アドへ笠に縫ふてふ梅の花。シテへ梅の花。アドへ折りてかざさん老か來る宿。シテへこれに面白う出來たゝ。ツレへ妾も詠みませう。折りつれて。シテへ折りつれて。ツレへ袖こそ匂へ梅の花。シテへ〳〵。ツレへありとやこゝに鶯のなく。シテへそれも面白う出來た。三のツレへ今度は妾の番で御座る。三のツレ たうも御座らうか。シテへ早や出たか。三のツレへ君ならで。シテへ〳〵。三のツレへ誰にか見せん梅の花。シテへ〳〵。三のツレへ色をも香をも知る人ぞ知る。シテへさて〳〵。そなた達は見たと違うて歌人でおりやる。アドへさあ〳〵。こなたの番で御座る。急いで詠ませられい。シテへ身共はさゝに醉うたによつて。重ねてにしておくりやれ。アドへいや〳〵。其の樣な事はなりませぬ。早う詠ませられい。シテへちと蟲腹が痛む。免してくれい。アドへこれは如何なこと。よい〳〵詠ませられずば。お約束で御座るによつて。櫻を折りまする。シテへあゝ先づちと待つておくりやれ。皆へ心得ました。アドへいや申し〳〵。當座を詠まずば、何れも手早う櫻を折りませう。ツレへよう御座りませう。シテへこれはいかな事。いやしい賤の女と侮り。よしない事を致して迷惑致す。某も元は歌も詠み當座も出たが。此の程はろさいに出で久しう歌ぜんさくも致さねば。櫻の當座にはうどつまつた。詠まずば櫻を折るであらうが。何としたものであらうぞ。いや思ひ出した。よい歌が御座る。いやこれ〳〵。櫻といふ當座か。アドへなか〳〵。シテへ詠む程によく聞け。アドへ何とで御座る。シテへいにしへの。アドへ〳〵。シテへ奈良の都の八重櫻。アドへ八重櫻。シテへ今日九重に匂ひぬるかな。アドへいや〳〵。それは古歌で御座る。シテへさて〳〵そちは粗忽な事を云ふものぢや。たつた今此處で身共が詠うだ歌ぢや。アドへいや〳〵。それは伊勢と申す官女の詠うだ歌で御座る。シテへいや〳〵。伊勢の歌は。難波がた。短きあしのふしのまもでおりやる。アドへいや〳〵。それは伊勢の大輔と申す官女の詠うだ歌で御座る。さあ〳〵。妾達が勝手で御座る。何れも櫻を折らせられい〳〵。ツレへ心得ました。シテへいやこれ〳〵。それはそち達の覺え違ひと云ふものぢや。南無三寶。散々に折りなつた。あの狼藉者。とらへて呉れい。やるまいぞ。何れもへなう嬉しや。勝て御座る。早う御座れ〳〵。シテへやるまいぞ〳〵。

能閒篇

【あ】

阿漕

アヒ　里人

へこれは。この浦里に住居する者にて候。今日は用の仔細の候間。濱に罷出で用を達し申さばやと存ずる。や。是なるお僧は此の邊りにては云々。（此間ワキとセリフ頭に同じ。）語まづ。此所を阿漕が浦と申す仔細は。昔天照太神。この伊勢の國渡會の郡。五十鈴川の水上に御鎭座より此方。今に至る迄爰にて網をおろし。所の者魚を取り持ち。御供所に納めぬれば。それより御膳に調進なる御事にて御座候。誠に。神の御惠み。淺からざる御事にて候ひけるぞ。この贄に備はる魚は。忽ち魚類の身を轉じ。佛果に至る事は。疑ひもなき御事にて御座ありげに候。さる程に伊勢の國におき候ひても。殘りの浦々は浪風あらく候へば。殺生もなり難く候に。當浦の御事は。御神德深きにより。風波の障りもなく。何時とても鱗の多く集り申すによつて。漁りの蜑人。此の浦にて漁を望み申すと雖も。神慮への恐れをなし。是を堅く戒め。贄の網ならでは引く者も御座なく候所に。いにしへ此の浦里に阿漕と申して。伊勢男の蜑人の候ひしに。此の事を能く知りながら。前生よりなす所の因果にてもや候ひけん。夜な〳〵忍び出で。此の浦にて網を引き。浮世を渡り申すを。初めは人も知らざりけれども。餘り月毎に罷出で業にのぞみ申す程に。終には顯れ。所の面々寄り集り。かの阿漕を捕へ。言語道斷。かゝる重罪の輩は御座あるまい。それを如何にと申すに。世の常の殺生だに。十惡の第一と申すに。殊更これは。太神宮への恐れをもなさずして。斯樣に夜な〳〵のぞみて網を引き。世を渡らんと思ふ志。前代未聞ならびなき曲事なり。後の代の例に。此の者をば何とぞ荒けなくいましめんと。各是を談合しけるに。或人の申さるゝは。かの者に大きなる錘をかけ。兎角その罪を作りたる所の海に沈めて然るべきと申さるゝ。各實にもと是を同じ。頓て件の如く捕へ。則ち此浦の沖に沈め申されしが。其の身の罪業とは云ひながら。忽ち神罰を當りたるとの申し事にて候。されば此の浦を阿漕が浦と申すも。かの者の名によせて。阿漕が浦と名附けられ。かたの如くも名所にて御座ありげに候。爰を以て古の歌人も。伊勢の國。阿漕が浦に引く網も。度重なれば顯れぞする。又六帖の集歌に。逢ふ事も。阿漕が浦に引く網も。度重ならば顯れやせんと。何れの集歌に入りたる樣に承り及びて候。最前申す如く此の浦の謂れ。阿漕が果てたる仔細。委しくは存ぜず候へども。我等の承りたる通り大方御物語申して候が。扨お尋ねは如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。へ是は奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに。阿漕が幽靈。罪の深くうかみ兼ねたる所に。貴きお僧のこれ迄御出でを嬉しく思ひ。御法を受け申さんと。假に姿をまみえ申したると存じ候間。結縁のため有難き御經をも讀み給ひ。かの者をとひうかめ。其後太神宮へも御參りあれかしと存じ候。シカ〳〵。へ御逗留の間は御用もあらば承り候べし。シカ〳〵。へ心得申して候。

蘆苅

（ワキ呼出す。）へ里人のお尋ねは誰にて渡り候ぞ。シカ〳〵。へ其事にて候。草加の左衛門殿と申す人。いにしへは此所に御座ありたるとは申

せども。さる仔細あつて流浪の身とならせ給ひ。今は此所には御座なく候。シカ〳〵。〽心得申して候。シカ〳〵。〽是に候。シカ〳〵。〽尤も何にても御目に掛け申したく候へども。爰もと田舍の御事なれば。別に面白き事も御座なく候さりながら。毎日この濱の市に出て。蘆を賣る男の候が。一段と面白き者にて候間。是を呼出し御目にかけ申さうずるにて候。シカ〳〵。〽心得申して候。〽いかに蘆賣る男。都人の御入り候が。蘆召されんとの御事なれば。いつもの如く罷出で。蘆を參らせ候へ。其分心得候へ。太鼓にて太夫出來する。作り物とつてから出る。〽扨も〳〵目出度い事かな。斯樣に奇特なる御縁の深き事は。昔より承りたる事も御座なく候。まづあれへ參り。此事悦び申さばやと存ずる。〽いかに申上げ候。最前の者にて候が。不思議なる御縁の候ひて。斯樣に逢ひ參らせらるゝ事。我等如き迄も目出度く存ずる事にて候。シカ〳〵。〽只今互ひに會ひ參らせられ。御歌などを遊ばされ候事。賤しき我等迄も承り。この年月は只蘆賣男とばかり賤しめ申す事。左衛門殿の御心中の程。痛はしく存じ。又我等如きも今更面目なう存ずる事にて候。シカ〳〵。〽惣じて昔より。歌道を知れば諸道を知ると申す。夫婦妹背の媒も。皆歌より事起り。もとより神代の御事は。猶以て歌道の根元。鬼神迄も納受あるは。和歌の道より外には御座なかりしと承及びて候。誠や昔人の申すは。難波津の歌。淺香山の言葉は。歌の父母ともてなし崇め給ふなどと申すが。左樣にて御座候か。又先に左衛門殿とお尋れ候へども。此方には蘆賣男とばかり心得申せば。所の者にても知らぬは道理。是について古歌の思ひ出されて候。シカ〳〵。〽魚の名も。所によりて變りけり。難波の鯵は伊勢の蛤と承りて候。シカ〳〵。〽扨々斯樣の本歌をば。只今こそ承りて候へ。是と申すも都人に御目にかゝりたる故なり。兎に角に夫婦の御縁深くまし〳〵。再び逢ひ參らせられ。いにしへ今の御物語なさるゝ事。千秋萬歳めでたう存ずる事にて候。シカ〳〵。〽畏まつて候。いかに左衛門殿へ申し候。めでたき御事なれば烏帽子直垂を着し。急ぎ御出であらうずるにて候。

安宅（あたか）

アヒ　太刀持

アヒ　强力

ワキ供して太刀持出る。ワキシカ〳〵。太〽御前に候。ワキシカ〳〵。〽畏まつて候。皆々承り候へ。今日も山伏の御通りあらば此方へ申し候へ。其分心得候へ、〳〵。ト云うて。ワキの下に居る。太刀を右方前に置く。強力山伏の供して出る。笈をかたけ。笈と杖とを右の方に持ち。左にて持添へて出る。地次第につけて謠ふ。強〽いゝゝゝゝおれが衣はすゞかけの。いゝゝゝゝ破れて事や缺かざらん。道行過ぎる迄立つて居る。道行後。太鼓座へくつろぎ。笈を下し前に置く。シテ呼ぶ。出る時に。笈持つて出て。舞臺の先少し見付柱の所に置く。シテシカ〳〵。強〽誠に是は冥加恐ろしき御事にて候へども。兎も角も武藏殿御心次第にて候。シカ〳〵。強〽畏まつて候。シカ〳〵。強〽心得申して候 名のり座にて。關の樣體を見て參らうか。さりながら。山伏に限つて止むるならば。まづ此の兜巾はむつかしい。入らぬものぢや。ト云うて。兜巾をとつて懷中するなり。まづ急いで參らう。橋掛りにて。扨も〳〵夥しい事かな。櫛桓栅亂杭逆茂木をひいた。まづきびしい事かな。何やらあそこに。黒いものがいくつも竝べてあるが。何ぢや。や。何と云ふぞ。その黒いものは山伏のことぢや。はつちやこはもの。先づ急いで去なう。イヤさりながら。痛はしい事ぢや。一首弔うて參らう。山伏は。貝吹いてこそ逃げつらう。誰追ひかけてあびらうんけん〳〵。印を結ぶ。まづ急いで歸らう。シテ前にて。如何に申上

げ候。關の樣體を見申して候が。恐ろしい要害にて。櫓垣楯をあげ。下には亂杭逆茂木を隙なく打つて。誠に夥しい御事にて候。又あたりを見申して候へば。山伏の首を數多かけて候程に。痛はしく存じ。一首弔うて罷歸りて候。シカ〳〵。強へ山伏は。貝吹いてこそ逃げつらう。誰追ひかけてあびらうんけんと。斯樣に仕りて候。よろ〳〵と歩み給ふ御有樣ぞ痛はしき。といふ謠の所にて。太へ如何に申上げ候。山伏達の御通りにて候。まことの山伏をとめよとは候まじ。の時。ワキシカ〳〵。太へ中々の事。いや入らぬ事なおしやつそ。昨日も三人切つてのけたぞ。皆々御通り候へ。の謠すぎて。眞の山伏ぢや。皆々御通り候へ。判官の立つ所を見て。如何に申上げ候。あやしき强力が通り候。ト云うて太刀をワキに渡す。かた〳〵は何故に。と云ふ時。ワキに抱付く。此後は太鼓座に居る。ワキシカ〳〵。太へ御前に候。シカ〳〵。太へやう〳〵人やどり迄は御出であらうずるにて候。シカ〳〵。太へ畏まつて候。如何に申上げ候。未だあの山陰になみ居て御座候。シカ〳〵。太へ畏まつて候。橋掛りにて。如何に申し候。強へ誰にて渡り候ぞ。シカ〳〵。強へ其の由申さうずる間。暫く御待ち候へ。如何に申上げ候。最前聊爾なることを申されて候。さあれば一つ參らせうずるために。當國の名酒を持たせ。關守これ迄御出でにて候。

シテシカ〳〵。強へ畏まつて候。此方へ御通りあれと申され候。太へ心得申して候。此方へ御通りあれとの御事にて候。

安達原（黑塚）

アヒ　能力

脇の供して出る。中入すぎ作り物とつてから。へ扨も〳〵今夜の主の樣な。心のやさしい人は御座あるまい。行暮れて前後は見えず。お供の我等如きは申すに及ばず。先達も御迷惑なさるゝ所に。お宿を參らせ。其上夜寒なれば。上な山へ上り木を樵り。焚火をしてあて申さうずると申された。夜陰と申し女人と云ひ。昔より人は心世は情と申すが。斯かる奇特な心中は御座あるまい。この主を見て猶々尤もと存ずる。まづあれへ參り。此事お雜談申さばやと存ずる　如何に申上げ候。唯今獨言を申して御座る。この主のやうな。心のやさしい人は浮世には御座あるまい。それを如何にと申すに。お宿を申さるゝのみならず。焚火をしてあて申さうずるとて山へ參られた。今の時分女人の身にては。奇特なる志と存ずるが何と思召し候ぞ。ワキシカ〳〵。へ尤もで御座る。が。さり乍ら。爰に一つ不審な事が御座る。山へ參る者が立戻つて。構へてわが閨の内ばし御覽ぜられなと申した。何が人によりましよけれ。先達に向つて。其樣な事を申すもので御座るか。惣じて私は悴の時分より惡い癖が生まれついて。有無に人と逆ひたう御座る。例へば善惡頼む程に。人が來て見れいと申す所へは。參りともなう御座る。又隱しそばめて。寄せとむながる所へは無理に行きたう御座る。其の心に主の閨を見なと申したによつて見たう御座る。ちよと見て參りましよ。シカ〳〵。へいや。それは先達の御覽ぜらるゝこそ惡う御座れ。私は見まいと申す約束は仕らなんで御座る。シカ〳〵。へ畏まつて御座る。あゝいかう見たう御座る。仕舞いろ〳〵あり。又ワキとセリフあり。口傳。先づは夜ざとい人かな。なに是を見ぬと云ふ事があるものか。急いで見ましよ。ト云うて作り物の戶をあけ。其儘さし。こける。ハアと云うて仰向けにこけかへるなり。扨も〳〵恐ろしい事かな。此樣な事があるものか。是は唯事ではあるまい。まづ急いで申さう。見て御座る。シカ〳〵。へな見そとは仰せられて御座れども。かの者の閨を見て御座れば。扨も〳〵恐ろしい事が御座る。人の死骸が。手は手。足は足と。山の如くに屋根裏まで積み重ねて御座る。急い

で是處を立たせられたらばよう御座らう。シカ〳〵。〽まづ一目御覽ぜられい。シカ〳〵。〽其間に私は先へ參り。お宿を取り申さうずるにて候。（立つ）なう〳〵恐ろしや〳〵。（ト云うてこれへ入る。太夫等にこれへるなり。）

敦盛

アヒ　里人

〽これは。この邊りに住居する者にて候。今日は海邊に出で。心をも慰めばやと存ずる。や。是なるお僧は此の邊りにては見申したる事も御座ない。何方よりの御出でにて候ぞ。（此間セリフ顯政に同じ。）〽我等も此の邊りには住居申せども。敦盛の御最後委しくは存ぜず候さりながら。御出家のお尋ねあるを。一圓存ぜぬと申すも如何なれば。大方承りたる通り御物語申さうずるにて候。（語まづ。）この一の谷と申すは。平家の一門籠り給ひし所なるが。源氏六萬餘騎を二手に分けて。大手の大將には蒲の御曹司範頼。搦手には九郎義經大將軍にて。鵯越鐵拐峯を落されければ。一の谷の城郭も破れ。平家の軍兵多く討たれ。生殘りたるは何處とも知らず落ち給ふ。さる間敦盛と申すは。平家の公達中にも經盛の御子なりしが。御一門と同じく此の汀迄御出でなされ候へども。何とか候らん常に御祕藏ありし。笛を城の中に取落し御出でありしが。敦盛思召さるゝは。我この笛を惜しむにはあらず。源氏に是を取られ。敦盛こそあわてたると云はれん事無念に思召され。駒引返し城の中に駈入れ。かの笛を取り。又渚に着いて落ちさせ給ふ。其の間に御座船どもは遠ざかり。何ともなるべき樣もなかりしに。知盛の召されたる御船をめがけ。海の上一町ばかり駒かけ入れ。ただよひ給ふを。源氏の兵に武藏の國の住人熊谷の次郎直實。よき敵もがなと。東西をうかゞひわたる所に。敦盛を見付け參らせ。大將軍と見えさせ給ひて候。返し給へとよばはりかゝる。敦盛は聞召され。又渚にむいてあがらせらるゝを。熊谷は上げもたてず敦盛を取つて押へ。御首をとらんとし給ひけるが。內甲を見給ふに。世に美しき御顏なれば。いづくに刀を立つべきぞと思ひわづらひ。誰の御子にてわたらせ給ふぞと問ひける。唯とく切れとばかり仰せらるゝ。其時熊谷下郎に組伏せられ。無念に思召さるゝか。存ずる仔細の候間。御名乘りあれと重ねて申されければ。組むも切らるゝも前世の契。これは修理太夫經盛が末子。無官の太夫敦盛。生年十六歲になるぞと宣ひける。直實は大きに驚き淚を流し。此の君一人助け申し。味方の弱りにてもあらばこそ。助け申さんとて敦盛を抱きあげ。又馬に乘せ參らせられしが。土肥梶原を先として。熊谷こそ組みたる敵を助くるに。心變りと見えたりとて。五十騎ばかりにて追掛け申す。其時直實は。とても助かり給ふべき御命にもあらず。雜兵の手に掛け申さんよりはと思ひ。又馬より引下し終に御首を召されたると承りて候。哀れなる御事にて候ひけるぞ。さて御死骸を見給へば。御鎧の引合せに。件の横笛を指しおかせ給ふ。此の笛と申すは。經盛宋朝より漢竹を取寄せ。一節切り。天臺の座主明雲僧正を召され。七日加持し彫られたる笛なりしが。夜更くる儘に冴えければとて。笛の名をも冴枝と付けられし名竹なるが。敦盛は笛の上手なればとて。經盛より參らせられたると承り及びて候。されば彼の熊谷と申すは。心も剛にして情深き武士にて候ひけるぞ。其時の御事をのみ痛はしく思ひ給ひ。今は浮世を捨て髻切り。敦盛の御菩提を弔ひ給ふとは申せども。慥かなる御事なれば存せず候。まづ敦盛の御最後の樣體。我等の

承りたるは斯くの譯にて候が。扨お尋ねは如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。〽是は存じの外なる事を承り候ものかな。熊谷にて渡らせ給ふを存ぜず。聊爾なる事を申上げ迷惑仕り候。誠に斯樣の御志深き事を。いたらぬ我等迄も存じ合はするに。源氏の軍兵多き中に。前世の契深くましまし。後世をも弔はれ。修羅の苦患をのがれ。佛果に至り給はんとの御約束にて。熊谷の御手にかゝり給ひたると存じ候間。此の上はいよ〳〵有難き念佛を授け御申しあらば。重ねて敦盛の誠の姿を御覽ぜられうずるにて候。シカ〳〵。〽重ねて御用もあらば承り候べし。シカ〳〵。〽心得申して候。

同　語入りのセリフ

（語かにる事なし。）〽これは存じの外なる事を承り候ものかな。熊谷にて渡らせ給ふを存ぜず。聊爾なる事申上げ迷惑仕候。ワキシカ〳〵。〽近頃似合はぬ事にて候へども。熊谷殿にてましまさば。其の時の誠の樣をもそと語つて御聞かせ候はゞ。忝う存ずる事にて候。（ワキ語り。何ぼう哀れなる事にては候はぬか。）〽さて〳〵。唯今こそ誠の御物語を承り。我等如きまでも落涙仕候。某推量仕るに。源氏の軍兵多き中に。前世の契り深くましまし。後世をも弔はれ。修羅の苦患を遁れ。佛果に至り給はんとの御約束にて。熊谷の御手にかゝり給ひたると存じ候間。此の上は愈々有難き念佛を授け御申しあらば。重ねて敦盛の誠の姿を御覽ぜられうずるにて候。シカ〳〵。〽重ねて御用もあらば承り候べし。シカ〳〵。〽心得申して候。

淡路（あはぢ）　アヒ　里人

（ワキ呼出す。）〽所の者とお尋ねは。いか樣なる御事にて候ぞ。シカ〳〵。〽心得申して候。此の所の者にて候が。お尋ねあり度きとは。いか樣なる御事にて候ぞ。シカ〳〵。〽これは存じも寄らぬ事を承り候ものかな。我等も此の所には住居仕れども。さ樣の御事委しくは存ぜず候さりながら。初めて御參詣なされ御尋ねなさるゝを。曾て存ぜぬと申すもいかゞに御座候間。大方承及びたる通り。御物語申上げうずるにて候。（語先づ。）是なる小田を。皆人信心致され候事。餘なる儀にても御座なく候。これは當社の御神田なるに依つて。か樣に信心をなし。敬ひ申す事にて御座候。其の外萬物出生して。國土に種をおろし給ふ事。皆當社の御神徳深き故なれば。此の心を一切の衆生に知らしめんが爲に。必らず春にもなり候へば。御供殿を造る時。いくしと申して水口に五色の幣帛を立て。神を祭り。神拜をなし申す事にて御座候。これについても神祕樣々御座りあるとは申せども。委しき事は存ぜず候。こゝを以て御歌に。谷水を。せく水口にいくし立て。苗代小田の種蒔きにけりと。これは忝くも御神詠にてありげに候。又當社の目出度き仔細と申すは。先づ木火土金水と申して。天地に五行の神まします。此の五つの中。木火土集つて伊弉諾となり。金水集つて伊弉冊となり給ふ。其時二柱の尊（みこと）天の浮橋の上にして。共に計らひ仰せける樣は。此の下に國なからんやと宣ひて。天のとぼこを以て探し御覽じなさるゝに。此の鉾の滴る雫凝り固まつて。一の島となり申す。これおのころ島にて御座候。二神この島に天降り給ひ。男神は左へ廻り。女體の御神は右へ廻り給ひ。初めて夫婦交合（みとのまぐはひ）あり。先づ淡路の國を作り給ふ。又その次には大八洲（おほやしま）を作り。さて其の次に海を作り。山川草木に至る迄。悉く出生仕り候程に。伊弉諾伊弉冊の

尊は。此の上は此の國の主になるべき人を産み給はんとて。一女三男を御誕生なさるゝ。これ即ち日神月神。蛭子素盞嗚尊と申すは。伊勢の國度會の郡。五十鈴川の川上に地を占め給ひ。國家を守り給ふ日出度き御事にて御座候。又蛭子尊と申すは。攝州惠比須の宮と現れ給ふ。素盞嗚尊と申すは。出雲の國大社。杵築の宮と現れ給ひ。何れも末繁昌に榮え給ひ。目出度き御事なれば。はや斯樣に何事も思召す儘にて。神功すでにおへぬれば。御代御讓りなされ。夫婦一所に住み給はんとて。此の淡路の國に御宮造りあり。日の若宮樣の大明神と現じ給ひ。夫婦陰陽の道。千秋萬歲を保ち。天下泰平國土世界を守り給ふ事。これ皆當社の御神德深き故なる由承及びて候。最前申上ぐる如く。當社の御神祕。又は御供田の目出度き仔細。樣々御座ありとは申せども。先づ我等の承りたるは。かくの分にて御座候が。さてお尋ねはいか樣なる御事にて候ぞ。シカ〳〵。へこれは奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕る所。大臣殿この所へ御參詣を。當社明神は嬉しく思召され。假に民百姓と御身を現じ。顯れ給ひたると存じ候間。御上洛は御急ぎなれども。暫く此の所に御逗留なされ。信念をなし候はゞ。重ねて奇特の御座あらうずると存じ候。シカ〳〵。へ重ねて御用もあらば承り候べし。シカ〳〵。へ心得申して候。

此の間。金春流に限り。古來末社にてするとなり。然る時は。亂序にて出で。三段舞なり。

葵上（あふひのうへ）

アヒ　從者

大臣呼出す。へ御前に候。シカ〳〵。へ畏まつて候。扨も〳〵氣の毒な事かな。葵上の御物の怪。いよ〳〵以ての外に御座あるとの御事ぢや。まづ橫川へ參り。小聖を招じて參らうと存ずる。樂屋むいて。如何に此の內へ案內申し候。ワキ樂屋よりシカ〳〵に　へ御使に參じて候。葵の上の御物の怪。いよ〳〵以ての外に御座候間。急ぎ御出であり。加持あつて賜はり候へと。大臣より御使に參じて候。シカ〳〵。へ近頃めでたう候。さあらば我等はお先へ參らうずるにて候。大臣の前にて。小聖を招じて參り候。行者は加持に參らん。ト謠の時。切戸より入る。

海人（あま）

アヒ　浦の者

ワキ呼出す。へ當浦の者とお尋ねは誰にて渡り候ぞ。シカ〳〵。へ心得申して候。扨お尋ねありたきとは如何やうなる御事にて候ぞ。シカ〳〵。へ是は存じも寄らぬ事を承り候ものかな。我等も當浦に住居仕れども。左樣の御事委しく仔細は存ぜず候さりながら。初めて御下向にて御尋ねなさるゝを。何をも存ぜぬと申すも如何にて御座候間。某存じ候通り御物語申さうずるにて候。語まづ。日本奈良の都。大織冠の御息女淡海公の御妹に。后伯女と申して並びなき美人の渡らせ給ひ候が。唐土の高宗皇帝これを聞召され。色々仔細あつて。終に迎へとり給ひ。一の后に具はり給ひたると承り及びて候。さる程にかの后伯女。ある時思召されける樣は。南都興福寺は。氏の御寺にて御座候程に。末世末代の印の爲。何にてもあれ興福寺へ。寶を渡さばやと思召され。華原磬泗濱石。面向不背の珠と申して。三つの寶を我が朝奈良の都に送り給ふ。まづ華原磬と申すは。打鳴らしにて御座候。此鐘を一つ打てば。如何にも妙なる音の出で。聞く人感をなし。鳴りやむと云ふ事なし。扨この鐘を入れんと思ふ時は。貴き人の召されたる袈裟

なうちかくれば。其儘音の入る寶にて御座候。また泗濱石と申すは硯なるが。水なくして硯に向へば。思ひの儘に水の湧出る寶にて候。面向不背の玉と申すは。玉中に釋迦の像ましますにより。何方より見申しても。同じ面に拜まれさせ給ふにより。則ち其の名を面向不背の珠とは名付けられたるげに候。斯かる一大事の寶なれば。大方にして渡し給ふ事如何あるべきぞと。まづ船の上乘には。萬戸雲宗を相添へ渡海ありしに。華原磬泗濱石。二つの寶は京着仕れども。龍神かの面向不背の珠に望みをかけ。既に此の沖にて龍宮へ奪取り申して候。大織冠これを聞召し無念に思召され。當浦へ御下向あつて。賤しき海人乙女と契りを籠め給ふに。其時大織冠仰せられける様は。われ此の浦に下る事餘の儀にあらず。如何にもしてかの玉を潛かせん爲なるよし御物語なされしかば。かの海人申されけるは。この御子を世繼の御位に即け給へ。さあらば命を捨て玉を潛きあげんと申され候程に。大臣殿大きに悦び給ひ。海士人の心中を感じ思召され。必ず世繼の御位を。讓り給はうずると堅く御契約ありしかば。かの海士人は左右なう龍宮へわけ入り。玉を潛きあげ給ひしかども。如何なる事にや五體損じ。海士人は終に空しくなり申されて候。則ちあれに見えたる在所は。海士野の里と申して。かの蜑人の住みし在所にて御座候。また此方なる一つの島は。かの玉を潛きあげし時。初めて見そめ給ひたる島なるによつて。新珠島とも申傳へて候。最前申す如く。委しき仔細は存ぜず候へども。まづ我等の存じ候通り御物語申して候が。扨お尋ねは如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。〽扨々左様の御事をも存ぜず。聊爾なることを申上げ。何とも迷惑仕り候。シカ〳〵。〽畏まつて候。立つて。皆々承り候へ。かの蜑人の追善の爲。房崎の大臣殿當浦へ御下向なされ。管絃講を以て。御弔ひなされ候間。管絃の役者は一人も殘らず參られ候へ。また一七日の間は。浦々の殺生をもとゞまり。斯かる有難き御事を。何れも罷出で拜み申し候へ。其分心得候へ〳〵。後シテ舞臺に出ると狂言入る。

綾鼓（あやのつゞみ）

アヒ　供人

脇供して出る。ワキ呼出す。〽御前に候。ワキシカ〳〵。〽畏まつて候。いかに御庭掃きの老人。御用の事候間。急ぎ參れとの御事にて候間。早々罷出で候へ。老人これまで參りて候。身を投げ失せにけりといふ

謠過ぎて出る。〽何と申すぞ。御庭掃きの老人が。鼓の鳴らぬ事を歎き。桂の池に身を投げ。空しくなりたると申すか。扨も〳〵不憫なる事かな。この事存じたる者も御座あらうず。此の仔細と申すは。御庭掃きの老人。忝くも女御の御姿を。一目拜み參らせ。靜心なき戀となり申して候。誠に。及ばぬ戀といふ事ありとは申せども。彼の老人が心は。餘りにそら恐ろしき御事にて候。されば此の事聞召し上げられ。戀は上下を擇ばぬものなればとて。老人が心中を不憫に思召され。桂の池の桂の木に鼓をかけ。彼の老人に打たせ。皇后に此の鼓の聲の聞え申すならば。今一度女御の御姿をまみえ給うずるとの御事にて。乃ちくだんの鼓をかけて打たさせらるゝ。惣じて唯世の常の鼓にても。時により。空のけしきに依つて。若しまた鳴らぬ事もあると申すに。此の鼓は。綾の鼓にて候へば。鳴るべき仔細も御座なく。それを彼の老人存ずるは。鼓の聲とは申せども。老の耳に入らぬ事もやあると心得。我が耳に入るまでと思ひ。こゝを先途と打ち申せども。鼓の鳴らぬ事を歎き。其のま

ゝ桂の池に身を投げ。空しくなりたると申す。かゝる不憫なる事は御座あるまじく候。かれらしきの者と申しながら。唯そのまゝはいかゞに候間。急ぎ此の由申上げばやと存ずる。いかに申候。御庭掃きの老人が。鼓の鳴らぬ事を歎き。桂の池に身を投げ。空しくなり申して候。ワキシカ〳〵。〽中々。身を投げ空しくなり申して候。ワキシカ〳〵。〽尤もにて候。

嵐山(あらしやま)

アヒ　末社

〽斯様に候者は。大和國吉野山の鎭守。木守勝手の兩神に仕へ申す末社にて候。只今此所へ出る事餘の儀にあらず。嵯峨天皇に仕へ御申しなさるゝ臣下。勅使としてこの嵐山へ御出でにて候由。仔細は和州三吉野の花。天下に並びなき名木にて候へども。圓滿十里の外なれば。行幸あるべき様もなし。所詮この嵐山。吉野の櫻を移し御申しなされうずるとて。名に負ふ千本(ちもと)の櫻を植ゑ置かれて候。今の折柄花も盛りなれば。急ぎ見て參れとの宣旨により。勅使此所へ御出でなされて候。然れども誰あつて罷出で、この花の神木なる謂れ申すべき者もなきと思召し。木守勝手の兩神は。假に花守の姿と御身を現し。木蔭を清め給ひ。勅使に御對面あり。この花の謂れ委しく御物語なされて候。誠に珍しからぬ申し事にては候へども。吉野山と申すは。そのいにしへ天竺の五臺山より。此の國へ飛來りたる山にて候。されば金峯山と申して。正しく金の山にて御座候。其後藏王權現出現し給ひ。靈驗あらたなる御事。申すも中々愚かなる事にて候。然れば木守勝手明神も。藏王權現と一體分身同體異名の御事にて御座候。されば其山より移し植ゑられたる花にて候程に。この嵐山も吉野山と等しく。何れも守護ある御事にて候。や。是は兩山の仔細。我等如きもあれへ參り。かの稀人にお禮申さばやと存ずる。是は最前御目にかゝられたる木守勝手の兩神に仕へ申す末社にて候が。我等如きにも罷出で。何にても御慰みに一曲仕れとの御事により。是迄罷出でて候。何ぞ一曲仕らうずるか。但し仕るまいか。シカ〳〵。舞三段常の如し。謠も常の如し。但し一ヶ所のみ異る。〽是迄なりとて末社の神は。吉野山にぞ歸りける。

藍染川(あゐそめがは)

アヒ　女
アヒ　供人

ワキツレ左近尉。〽如何に誰か御入り候ぞ。狂言女〽誰にてあるぞや。左近尉にてあるよ。シカ〳〵。左近シカ〳〵。〽それは如何やうなる事ぞ。シカ〳〵。〽折節參らせたいと申すといふか。シカ〳〵。〽何と都より女の下りたが。其文を神主殿へ、神主殿は持佛堂に御入り候。妾(わらは)の上げ申さうずる間、此方へ渡し候へ。シカ〳〵。〽いや苦しうない事此方へ渡し候へ。左近〽畏まつて候。ト云うて。文を渡す。狂言女〽頓て御目にかけうずる間。それに暫く待ち候へ。ト云うて。文を持ちて橋掛りへゆき。あら心許なや。都より下りたる女房が。文を參らするは如何さま不審な。妾披いて見うずるにて候。ト云うて。文を披いて見るなり。さればこそ。如何やうな文ぞと思うてあれば。是は一年(ひとゝせ)神主殿御在京の時。御伽に參つた女房があつたと聞いたが。それが神主殿を尋ねて來り。此文を參らする。殊に梅千代とやら云ふ子迄つれて下つた。扨も〳〵。腹立ちや〳〵。面の憎い女かな。兎角この返事は妾が書いてやらうと存ずる。

ト云うて。橋掛りにて文を書く。仕舞口傳。　あらつれなや〳〵。ト讀うで文を巻く。紙を持ち一扇にて書くなり。　狂言女へ如何に左近洞。只今文を神主殿の御目にかけたれば。則ちお返事なさるゝ。確かに屆けさしませ。ト云うて文をやる。　左近へ畏まつて候。狂言女へさて女房は子はつれて來ぬか。シカ〳〵。へそれは何處に居るぞ。左近へ未だ某の所に御入り候。狂言女へ神主殿殊の外のお腹立ちや。それは仔細のあるものぢや程に。急いで女房も子も追出せ。この在所に置いたらば。左近尉の曲事であらうと仰せらるゝ。シカ〳〵。へ中々の事。そつとの間も置いたらば。そちの爲が惡からう。急ぎ歸り去なさしませ〳〵。ト云うて入る。神主方狂言は次の如し。神主(ワキ)シカ〳〵。　狂言男へ御前に候。ワキシカ〳〵。　狂言男へ畏まつて候。やい〳〵。神主殿の御歸りにてあるぞ。殺生禁斷の所にて網を引くか。皆々上れと申し候へ。　左近へ人の身を投げ申して候。狂言男へ何と人の身投げたると御申し候か。急ぎ御參りあつて其由御申し候へ。

【い】

碇潜(いかりかづき)

アヒ　船頭

へこれは此の浦に住居する者にて候。今日は濱へ罷り出で。旅人を相待ち。舟を渡さばやと存ずる。や。これなるお僧は。此の邊りにては見馴れ申さぬ旅人と見え給ひて候が。何方へ御出で候ぞ。舟に乘せ申さうずるにて候。シカ〳〵。へあら不思議や。此の所に於て某より外に船を渡す者は覺えず候。お僧は妄語を仰せらるゝと存じ候よ。シカ〳〵。へなか〳〵。此の浦里に住む者にて候。シカ〳〵。へ心得申して候。さてお尋ねあり度きとは。いかやうなる御事にて候ぞ。シカ〳〵。へこれは存じも寄らぬ事を承り候ものかな。我等も此の所には住居申せども。委しき事は存じも致さぬさりながら。都より初めて御下向あつてお尋ねあるを。一切存ぜぬと申すも如何なれば。大方承り及びたる通り御物語り申さうずるにて候。語先づ、讃岐の國志渡の合戰破れしかば。元曆二年三月下旬に。平家の御一門此の早鞆の浦に落ち給ふ。源氏の方には。數千艘の舟にて此の浦にとりかけ。責め戰ふ程に。平家の御運つき果てぬれば。こは叶はじとや思召されけん。まことに哀れなる御事にて御座候ひけるぞ。その時主上は御歳八歲にならせ給ひけるが。山鳩色の御衣を召され。鬢(びんづら)結はせ。邊りも輝く御形(かたち)なりしを。二位殿立ち寄り。仰せられける樣は。今この國と申すは。粟散邊土とてもの憂き所なり。これより西方に極樂淨土とて。目出度き國の御座候。我々供奉し彼の國に行幸なし奉らんと。泣く〳〵仰せられければ。幼(いとけな)かりし御身なれども。御淚ぐませ給ひけるを。二位殿立ち寄り目を塞ぎ。玉體を抱き。海に入り給ふ程に。平家の御一門。之を見給ひ。いつまで存ふべきぞ。我も〳〵と海に入り給ふ。中にも門脇の教盛。同じく經盛御兄弟は。手に手を取組み。海底に沈み給ふ。さる程に宗盛の君は。御樣體を御覽じて。御父子とも親子の御名殘を惜しみ給ひ。互に目と目を見合せ。あなたこなたと御座候に。伊勢の三郎に生捕られ。都に上り給ひたると承りて候。また能登守教經は。小船に召され。此處彼處走り廻り。數多の功名を盡し。此の上は大將と組んでぞあるべけれ。さもなき者の命を取りても何かせんと。義經の召されたる舟を目がけ。小舟を押寄せ。判官の御船に乘移り。打物拔いてかゝり給へば。義經は御覽じて。叶ふまじきと思召すか。遙か隔てたる味方の船に飛乘り。

御命を助かり給ふ、能登殿は力及はず、呆れて立ち給ふ所に。源氏の軍兵に阿波の太郎。同じく舍弟の小次郎。能登殿を目がけて切つてかゝる。敎經は御覽じて。童どもは何をするぞ。只今海に沈む身なり。あつたら刀にて汝等に疵つけんより。冥途の供にせんと。左右の手を差出し。兄弟の者の綿上摑むで引寄せ。兩の脇に押挾み。そのまゝ海中に入り給ふ。恐ろしき風情。なか／＼申すも愚かに御座ありたると承及びて候。また新中納言知盛は。乳人にてまします平内左衛門家長を近づけ。はやこれまでぞ。急ぎ追附き主上の御供あるべきとて。鎧二領兜二重召され。沖の碇を引きかけ。甲の上に打被き。家長と手に手を取組み。これも海に入り給ひたると承りて候。主上の御事は申すに及ばず。御一門の御最期。何れも哀れなる樣體。申すも愚かに御座ありたるげに候。最前申す如く。委しき事は存ぜず候へども。先づ大方御物語り申して候が。さてお尋ねは如何樣なる御事にて御座候ぞ。シカ／＼。ヘこれは奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに。御一門の御跡を御弔ひの爲。所緣のお僧の遙々御下向を。平家の公達うれしく思召され。中にも知盛の幽靈これまで顯れ給ひたると存じ候間。御上洛は御急ぎなれども。暫く此の所に御逗留候ひて。いよ／＼有難き御經をも御讀誦あらば。我等如きの者までも。別して有難く存ぜうずるにて候。シカ／＼。ヘ見苦しう候へども。御逗留の間は御宿參らせうずるにて候。シカ／＼。ヘ心得申して候。

一角仙人（いつかくせんにん）

アヒ　仙人

ヘか樣に候者は。天竺波羅那國に住む仙人にて候。唯今罷出る事餘の儀にあらず。此の國の傍に目出度き仙郷あり。此の仙郷に一角と云へる不思議の仙人住めり。是は鹿の胎内に宿り。出生したる仙人なり。其の仔細は。或る時とある仙人。女鹿男鹿の戯るゝを見て。婬慾の心あるにより。覺えず漏精の落ちけるを。女鹿この草を食して。一人の仙人を產む。形は人なれども。鹿の胎内に宿り。出生したる故に。額に一つの角生ひ出でたり。即ち一角仙人これなり。功積つて神通方便あらたなる事。數千とある仙人の中にも稀なり。さる程に。彼の一角仙人。或る時大雨降りて。彼の山路に出で。谷へ下りだるに。雨のあしたなれば。石巖も滑かにして滑りて。地に倒れけるに。其の時一角思ふ樣。我れ仙人の中にても、通力を得て一角と云はれし其の身が、滑りて倒れぬる事。言語道斷不思議の至りなり。されども誰を恨みん樣もなし。よく／＼物を案ずるに。龍王と云ふ者があればこそ。雨をも降らせ、雨があればこそ。我も滑りて倒れぬる。所詮龍王に此の思ひを知らせんと。内外八海の大龍小龍悉く捕へ。窟の内に封じ籠め候程に。それよりして終に降らず。草木の種もなくなりければ。萬民之を悲しみ。地に倒れ泣き叫ぶ。されば一天の君賢王にましませば。民の愁を聞召され憐れみ給ひ。一角仙人が通力を失ひ、龍神を窟より出だす可く。謀をめぐらし給ふに。人の心を取るは。酒に過ぎたる事なし。いかに一角が神通方便を得たりと云ふとも。これに耽り香に染まば。愛執の心は有るべし。さらば后を一人遣され。一角に近づけ。樣體を御覽ぜんとて。三千人の後宮のうち。扇陀夫人とて。容色殊に勝れたるを。官人供奉し。唯何となく山路に踏み迷ひたる旅人の體にて。此の山に來り給ふ。案の如く一角仙人。彼の后を見て心移り。弱々

となり申す所を。夫人は酌を取り酒をすゝめ。盃の數も積りぬれば。餘りの事に一角も共に舞樂を奏し。思ふ儘に通力をとられ。今は前後も知らず醉伏し候程に。龍神は悦び。はや窟を蹴破り。出で申すべくと催す。我等まで口惜しく候間。急ぎ參り一角に此の事知らせ申さばやと存ずる。さればこそ。正體もない體かな。いかに一角聞き給へ。先の女は唯人ならず。扇陀夫人と云へる宮女なり。此の君謀を以て。龍神を窟より出すべき爲ぞかし。あれ聞き給へ、はや窟を蹴破り罷出で候間。急ぎ夢を覺され候へ。其の分心得候へ〳〵。

此間は太夫中入り有る時に用ふ。

岩船（いはふね）

アヒ　鱗の精

〽か様に候者は。海中に住むで年久しき鱗の精にて候。只今罷り出ること餘の儀にあらず。我が君賢王ましますに依り。天下泰平國土豐かにして。何事につけても御心に叶はずといふことなし。五日（ごにち）に風落ち十日（とふにち）に雨降（くだ）る。堯舜の御代と申すも。いま此の時に相當りて候。されば若し此の間奇特の御瑞相あつて。攝州この津守の浦に。初めて濱の市を立て。高麗唐土（こまもろこし）の寶を買ひ取り給はんとの宣旨に依り。勅使これまで御下向なされて候。然れば斯樣に治る御代には。聖人も出生し、仙人も山より出づる例（ためし）あり。先づ一番に龍宮の都より天佐具賣（あまのさくめ）といふ龍神。銀盤に如意寶珠を据ゑて持參致し。勅使に達し參らせられ。君を崇め神を敬ひ申す。目出度き事どもなりと。御物語申上げられければ。勅使の御悦びは限なし。たとへば古へ唐土の合甫（がつぽ）より。名珠を帝に進獻するが如く、則ち彼の如意寶珠を、我が君に捧げ申されて候。さる程に、此の天佐具賣と申す龍神は。神代の昔、天神七代地神四代、火々出見尊（ほゝでみのみこと）蒼原海の都に到り給ふ時も。彼の龍神馳せ參じ、海路の御供仕る。それのみならず、天の鳥船に取乘り。度々この界へも出現したる例もあり、今また目出度き砌（みぎり）なれば。重ねて顯れ出て。如意寶珠を我が君に捧げ申す御事にて候。斯樣に下界の龍神までも出現し、御代を仰ぎ奉ること。偏に此の君政事（まつりごと）正しくまします。殊には國土萬民を憐れみ給ふ御志の深き故なり、此の樣體を勅使も御覽じて。御悦びは斜（なゝめ）ならず。急ぎ都に御上りあつて。奏聞ありたきと思召さるゝ。されども天佐具賣。龍宮の都より金銀珠玉を岩船に積み。此の津守の浦に引附け。我が君の調（みつぎ）に供へ申さうずるとて。罷歸られて候。かゝる目出度き折柄なれば。數ならぬ我等如きにも罷出で。かの勅使を一目拜見申さうずると存じ。これまで罷出た。何處もとに御座候ぞ。先づ急ぎ參らうと存ずる。シカ〳〵。〽此の上は急ぎ住家に歸らうとは存ずれども。かゝる泰平の御代にたま〳〵出でて。そのまゝ罷歸るも餘り殘り多う存ずる間。尤もをかしき事なれども。何卒一曲仕り罷歸らうと存ずる。

それぞ〽目出度かりける時とかや。三段舞。

やら〳〵目出度や目出度やな。かゝる目出度き折柄なれば。我等が樣なる鱗までも。顯れ出でゝ諷（うた）ひかなで。これ迄なりとて悦び勇みいさみて。また海中にぞ入りにける。

【う】

鵜飼（うかひ）

アヒ　里人

ワキ呼出す。〽所の者とお尋ねは如何樣なる御事にて候ぞ。シカ〳〵。〽尤もお宿參らせたくは

候へども。此所の大法にて往來の人にお宿を參らせず候間。急ぎいづ方へも御出であらうずるにて候。シカ〳〵。〽いや〳〵叶ふまじいにて候。あらいたはしや。なう〳〵お宿參らせう。シカ〳〵。〽あれに見えたる川崎の堂へ御出であり御泊り候へ。シカ〳〵。〽いや是は一在所として建てたる堂にて候。シカ〳〵。〽構へてあの堂には光り物があるぞや。シカ〳〵。〽さてもすれい坊主かな。中入過ぎ二〇〽夜前いづくとも知らぬ修行者の。一夜のお宿と承り候へども。大法なれば是非に及ばずお宿參らせず。川崎の堂を敎へ申して候。いたはしく存じ候間。あれに御入りあるか。見舞申さばやと存ずる。や。是なるは夜前のお僧にて候か。シカ〳〵。〽其の事にて候。いたはしく存じ候間お宿參らせたうは存じ候へども。大法なれば力及ばず。せめての事に御見舞申して候。シカ〳〵。〽是は存じも寄らぬ事を御尋ねなさるゝものかなさりながら。我等如きのよく存じたる事にて候間。其の時の有樣御物語申さうずるにて候。語まづ此の川をば伊澤川と申し候。さる程に昔より此の川三里の間堅く殺生禁斷の所にて網をもおろさず。まして鵜を使ふ事も御座なかりしに。只今お尋ねなさるゝ鵜使ひ。夜な〳〵罷出で人目を忍び鵜を使ひ申す。ある夕暮に在所の若き者共この川邊に出でて心を慰む所に。中にも小ざかしき者この川の面を見て申す樣は。何れも皆なにとか思ふ。あの水草を見よ。鵜使ひたる跡の見え申すと云ひければ。其時皆々立寄り心を付けて見るに。疑ひもなく鵜を使ひたる跡あり。斯樣に殺生禁斷の所にて。いかなる惡戯者の出でて鵜を使ふぞ。いざさらば何ともして此の者を捕へ。末世の爲に曲事に行うずると談合し。それより所の面々夜每に罷出で。此處彼處より狙ふ事をばそつとも知らず。また或夜人鎭つて後忍び出で。鵜を使ひ申す。何が若き者共がおり合ひ。手取り足取りかの者を捕へ。かゝる重罪の輩なれば。何と縛めうずるぞと申せば。かの鵜使ひ申す事には。此所を殺生禁斷の所とは夢にも存ぜず。今夜初めて罷出で鵜を使ひ申して候。以來は嗜み申さうずる間。此度は御許しあれと申す。おの〳〵是を聞いて。いよ〳〵憎い奴儕かな。それを如何にと申すに。今夜初めて鵜使ひたるとは僞り。其上此所殺生禁斷の事は。隣國迄もその隱れなきに。知らぬと云ふは猶以て曲事なり。扨この者をば何と縛めうずると申せば。急ぎ柴漬にして然るべしと申す。また知らぬ人の申す事には。如何樣なる事ぞと云ひければ。其事にて候。柴漬とは大きなる竹をかの者の背に切つて　扨二つに割つて。强い繩を以て簀に編うで。其上にかの科人を乘せ。くるりと卷いてしつかと堅め。大きなる石を錘に掛けて。此の川の中にも深い所へ沈めに入れる事にてあると申せば。是こそ尤もなれとて。我等を始め在所の者共。一人も殘らず頓て拵へ。件の如くに縛め申して候。斯樣に御物語申す內にかの者の最後の年月を考へ申すに。只今の樣には存ぜねども。はや三ケ年になり申すかと存じ候。まづ鵜使ひの果てたる仔細は斯くの通りにて候。扨お尋ねは如何樣なる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。〽是は奇特なる事を承り候ものかな。皆人申すは。かの鵜使ひは業因深くして。今に此所に執心を殘し姿をまみえ申すなどと承りて候が。お僧の御心中貴くましますにより。御法をも請け佛果に至らんと思ひ。是迄現れたるは不憫なる事と存じ候間。末は急ぎの道なれども。暫く此所に御逗留あつて。一石に一字をも遊ばされ。彼の者に授け給はば。何より以て有難き御事に御座あらうずると存じ候。シカ〳〵。〽さらば我等も是に

あつて。共に石をも拾ひ參らせさうずるにて候。シカ〳〵。〽心得申して候。

浮船

アヒ　里人

〽これはこの宇治の里に住居するものにて候。此の間は何方へも罷出でず候。今日は罷出で。心をも慰まばやと存ずる。や。是なるお僧は。この邊りにては見馴れ申さぬが。何方より御出でにて候ぞ。ワキシカ〳〵。〽中々この邊りの者にて候。シカ〳〵。〽心得申して候。扨お尋ねありたきとは如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。〽唯今申す如く。この邊りには住居申せども。左様の御物語など我等如きの存ずる仔細にては中々御座なく。されども遠國より初めて御上りあり。お尋ねあるな。曾て存ぜぬと申すも如何に候間。大方承りたる通り御物語申さうずるにて候。語まづ。この浮船と申すは。桐壺の帝第八の御子うばそくの宮の御息女にてわたらせ給ひたると承及びて候。然ればこの浮船に薫大將契りをこめ給ひ。この宇治の里に住ませ給ふが。又さる仔細あつて匂兵部卿の宮。忍び〳〵に通ひ給ひけるを。薫大將は終に此事を聞付け給ひ。一首の御歌に。浪越ゆる。頃とも知らで末の松。まつらんとのみ思ひけるかなと。斯樣に御歌を遊ばされ。それより後は御番を据ゑおかせ給ひ。薫は通ひ給ふ事もなくなり候程に。浮船は此事をのみ思ひに沈み給ひ。兎角御身を投げ空しくなり給はんと。思召さるゝ御心亂れにや。夜更人鎮まりて。川風はげしく物すさまじきに立出で給ひて。迷ひ行き給ふを。知ろしめされぬ男の誘ひ申すと思ひ。御心もまどひ給ふと。後には御物語ありたると承りて候。また其の頃横川に某の僧都とか申して。貴き人のわたり候が。八十年餘りの御母。又五十年ばかりになり給ふ御妹の御座ありけるが。深き願あつて。初瀬の觀世音に詣で給ひ。其の歸りにこの宇治の院に宿り給ひけるに。この院の後の森に。狐こたま樣のものゝ仕業にやありけん。浮船を捨置き參らせしを。僧都の御弟子木の下に白きものゝ見えけるを怪しめ。火を振上げ見參らせ候に。やんごとなき御有樣なれば。驚き騒ぎ。僧都の御母御前にこの由斯くと語り參らせければ。僧都は小野に御住ひあり。祈り給へば頓て御人心地になり給ひたると申す。其後は御硯に向はせ給ひ。何事をか思召し候やらん。そこはかとなく書付け給ひければ。手習の君と申したるも。この浮船の御事にて。御座ありけるとかや承及びて候。最前申す如く。委しき仔細は存ぜず。まづ我等の承りたる通り。大方御物語り申して候が。扨お尋ねは如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。〽是は奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに。お僧の御心中貴うまします故。又は古を懐しく思召され。浮船の幽靈是迄顯れ給ひけれども。小野にて弔はれんと思ひ。あれにて待たうずると仰せられたると存じ候間。とても御上りならば。急ぎ小野に御出であり。浮船の御跡を念比に御弔ひあれかしと存じ候。シカ〳〵。〽重ねて御下向ならば萬事御用を承り候べし。シカ〳〵。〽心得申して候。

雨月

アヒ　末社

亂序にて出ること

〽か樣に候者は。攝州住吉に仕へ申す末社にて候。唯今罷出ること更に餘の儀にあらず。忝くも御神託によりこれまで罷出でて候。先づ當社明神と申すは。その古へ異國

の夷をも平げ。天下一統に治め國土を守り。または陰陽和歌の道の本と觀はれ。目出度き神にて渡らせ給ふ。然るに愛に鳥羽院の北面に。佐藤兵衛則清といふ人あり。此の人は自ら世の中の無常を觀じ。髻切り。其の名を西行法師といはれ。殊には和歌の道に心を寄せ。春は花に誘引せられ。秋は月を友として。諸國を巡り。名所／＼道すがら。歌を詠吟して。世に隱れもなき歌人にて渡らせ給ふ。さる程に。彼の西行今度誓願を發し。和歌の守護神なれば。住吉に參らんと志を運び。昨日の暮ほどに當社に參詣し給ふを。明神は之を悦び給ひ。御神木の松の木の下に柴の庵を結び。老人夫婦と御身を現し。西行を待ち給ふ處に。それをば夢にも知らずして。漸う日の暮るゝ程に。西行法師は庵に立寄り。宿を借り給ふ。明神仰せらるゝことに。お宿は易き御事なれどもさりながら。老人夫婦の中に。雨月の爭あつて。庵の屋根が成就仕らず候。その仔細と申すは。姥は月を見うずる間。軒端の屋根を葺くまじいと申す。また翁は雨を聞かうずる間。軒端の屋根を葺かうと申す。此の爭に就いて歌の下の句の候。その句に曰く。賤が軒端を葺きぞ煩ふとなり。此の上の句を繼ぎ給はゞ。今夜のお宿を參らせうずると仰せらるゝ。西行これを聞いて。深く敷島の道に叶ひたる人なれば。其のまゝ浮かみぬるか。月は洩れ雨は溜れとにかくに。賤が軒端を葺きぞ煩ふと。斯樣に繼ぎ給ふ時。明神大きに驚き給ひ。さらばお宿を參らせうずるとあつて。則ち招じ入れ。種々にもてなし給ふ。されば此の雨月の爭といふ事。今これのみならず。既に居士の白樂天も。之を題とすといへり。廬山に住みし時。雨を聽いて心を澄まし。廬山雨夜草庵中と作られたり。また其の友元稹を憶ひて。三五夜中新月ノ色。二千里外古人心と作りしを。人々吟じて雨月の二句に何の優劣あるべきぞと。今の世までも之を云傳へたり。明神も餘りの嬉しさに。西行法師へ夜もすがら。歌の大事を御物語なされて候。早や夜も更けぬれば。先づ西行法師にもお休みあれ。我も老更眼を休めんとて。明神夫婦は本社に入り給ふ。西行法師夜も明け目覺めて見給へば。老人夫婦もましまさず候ほどに。さては和歌の奇特。神も納受ありたると。感涙を催し。松の木の下にて。一人夜を明かし給ふ。明神の仰せには。夜も明くるにより。今少し歌の極意を仰せ殘されて候ほどに。宮人に託し。仰せ渡されうずる間。某に參り。西行に此の由知らせ申せとの御神託により。これまで罷出でて候。先づ急ぎ參り。西行に此の事委しく申さばやと存じ候。シカ／＼なし。〽いかに西行。體に聞き給へ。これは住吉大明神に仕へ申す末社にて候。今夜のお宿に忝くも當社明神なり。西行法師の和歌の心を感じ給ひ。老人夫婦と御身を現じ。歌の大事をも御物語なされて候さりながら。夜も明くるにより。今少し歌の極意を仰せ殘されたる事あり。唯今宮人に託して。仰せ渡されうずるとの御事にて候間。いよ／＼信心を發し。必ずその時を御待ち候へ。構へて其の分心得られ候へ／＼。

右近（うこん）

アヒ　里人

ワキツレ呼出す。〽所の者とお尋ねは。如何やうなる御事にて候ぞ。シカ／＼。〽心得申して候。所の者とは如何やうなる御用にて御座候ぞ。ワキシカ／＼。〽中々。所の者にて候。シカ／＼。〽是は存じも寄らぬ事を承り候ものかな。我

等も此の所に住居仕れども。左様の御事委しくは存ぜず候さりながら。初めて都へ御上りなされお尋ねなさるゝを。曾て存ぜぬと申すも如何に候間、所に申傳へたる通り。大方御物語申さうずるにて候。シカ〳〵。〽まづ。此の所において、櫻葉の明神と申すは。當社天神の末社にて御座候が。めでたき由緒あまた御座ありげに候。それを如何にと申すに。神代の古より天照太神の末社と顯れ、伊勢の國にては櫻の宮と現じ給ひ。両末社にて忝くもれい神にてましませば。王位を守らんと帝都近く移り。此の所に宮居をなし君を守護し給ふ故に。伊勢の國にては櫻葉の明神と崇め。この葉文字一字につけても。別してめでたき神祕様々御座あるやうに承り及びて候。斯様の謂れにてもや候ひける。櫻を御神體とも御神木とも崇め申す御事にて御座候。誠や昔より申傳へたるは。いつも春にもなり候へば。伊勢國よりも天照太神この櫻葉の明神へ御影向あると申すが。それにつき奇特なる御事の御座候。惣じて花は時を違へず咲くものなれども。當社右近の櫻は。時を違へても天照太神御影向御座なき内は、花ほころぶ事も御座なく。御神幸あれば一夜の内に花開けぬると申す。さあるによつて。斯様に花の盛なれば。扨は太神宮この所に移りましますと心得。皆人渇仰仕る御事にて候。されば九重の内におき候ひても、花の名所その數多しと申せども。この馬場の並木の櫻。取分き世に勝れたれば。昔より何れの歌人も歌に讀まれたるとは申しながら。中にも在原の中將業平は、此の所にて女の花見車を御覽じて一首の詠歌に。見ずもあらず。見もせぬ人の戀しくは。あやなく今日やながめ暮さんと、是も所の名歌にて御座ありげに候。さる程に此の右近の馬場において、射禮の日と申す事。是は當社の御神拜にて候が。其の様體と申すは。まづ左近と右近の騎射を二手に分けて。五月三日は左近の荒手番ひ。同四日は右近の荒手番ひにて候。さて五日は左近の眞手番ひ。六日は右近の眞手番ひ。是について射禮の日と申す仔細は。御随身の褐の尻をひき折りて着給ふ故に。ひをりとは申しならはして候、されば兩日の荒手番ひの日も。隨身の姿は同じ事なれども。それはならはしなれば。ひをりのひとは申さず。眞手番ひの日をほんと用ゐる故に。是をひをりの日とは名付けられて候。爰もつて古き歌に。ながきても。花の袂にかほるなり。今日を眞弓のひをりなるらんと。是も五月の五日六日を詠まれたる歌にて御座ありげに候。最前申す如く當社の謂れ。又はひをりの日の仔細。まづ我等の承りたる通りは。大方斯くの如くにて候が。扨お尋ねは如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。〽扨々奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに、鹿島の神職初めて御社へ御參詣を、神慮に嬉しく思召され。櫻葉の明神は假に人間と姿をまみえ。現れ給ひたると存じ候間。たとひ御下向は御急ぎなれども。暫く此の所に御逗留なされ信心をなし給はゞ。重ねて奇特の御座あらうずるかと存じ候、シカ〳〵。〽重ねて御用もあらば承り候べし。シカ〳〵。〽心得申して候。

善知鳥（烏頭）

ワキ呼出す。〽外の濱在所の者とお尋ねは誰にて渡り候ぞ。シカ〳〵。〽さん候あれに見えたる高もがりの内にて候間、御出であらうずるにて候。シカ〳〵。〽重ねて御用もあらば承り候べし。シカ〳〵。〽心得申して候。奥にてワキとセリフありて語ありといふ。[illegible]師などの類なり。

采女

アヒ　里人

〽是はこの春日の里に住居する者にて候。今日は存ずる仔細の候間。明神へ參らばやと存ずる。や。是なるお僧は。この邊りにては見馴れ申さぬが。何方よりの御參詣にて候ぞ。シカ〳〵。〽中々この邊りの者にて候。シカ〳〵。〽心得申して候。扨お尋ねありたきとは。如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。〽是は存じも寄らぬ事を承り候ものかな。我等も此所には住居申せども。左樣の御事委しくは存ぜず候さりながら。初めて御參りあつて御尋ねあるを。何をも存ぜぬと申すも如何なれば。我等承りたる通り御物語申さうずるにて候。語まう。當社春日の明神と申すは。昔稱德天皇の御時。帝都を近く守らんと思召され。神護景雲二年正月上旬に。河內國平岡より。この三笠山に移らせ給ひたると承及びて候。其の折柄は木陰少しも御座なかりしを。我を祈らん者は木を植ゑて得させよ。何事につけても思ふ所望を。叶へ給はんとの御託宣なるにより。氏人より木を植ゑ參らせ。初めは一本二本の樣に御座ありしと思せども。御神力深くまします故。御覽なさるゝ如く今は斯樣に深山となり申して候。さる程にいにしへ天の帝の御時。一人の采女の御座ありしが。初めは叡慮に叶ひ給ひ。君の惠淺からずして。君邊を去り給はず。情內に籠り。言葉なども外に顯るゝ樣體。類少なく見えさせ給ひけれども。何とか思召されける。中頃すさみ參らせぬるを。女性の御身のはかなさは。下として。君に怨みを掛け參らせ。ある時宮中を忍び出で。この猿澤の池に身を投げ。空しくなり給ひて候。されども帝には左樣の御事をもしろしめされざりしに。ある人この邊を通るとて。是なる柳の枝に。美しき御衣の掛かりてありしを。如何なる事ぞと思ひ立寄り見れば。疑ふ所もなく。采女の召されたる御衣にて候程に。是は何故この柳に掛置かれたるぞと不審をなし。池のほとりに立越え。よく〳〵見給へば。案の如く采女の身を投げ給ひ。御死骸の浮み片寄りて御座ありし程に。驚き騷ぎ。急ぎこの由君に奏し申されければ。なんぼう有難き御事にて候ひけるぞ。今一度采女の姿を叡覽あらうずるとて。この猿澤に行幸あり。死骸をあげさせ叡覽ありしに。誠に宮中に仕へ給ふ時は。月をも花をも欺く程の御形なれども。柔和の姿を引替へ。かげの藻屑などを御顏にかけられ。さも憐れなる樣體を叡覽あつて。御涙を浮めさせ給ひ。忝くも帝の御製に。わぎもこが。ねくたれ髮を猿澤の。池の玉藻と見るぞ悲しきと。斯樣に御憐れみの御歌を遊ばされければ。供奉の人々は申すに及ばず。何れも是を見る人聞く人。袖を絞り給はぬは御座なかりしと承及びて候。最前申す如く。當社の謂れ。采女の御事委しくは存ぜず候へども。まづ我等承りたる通り。大方御物語申して候が。扨お尋ねは如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。〽是は奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに。お僧の御心中貴くましますにより。此度御法を受け佛果に至らんと思召され。采女の幽靈お僧にまみえ給ひたると存じ候間。申す迄はなけれども。この池の邊にて有難き法事をもなし給ひ。采女の御跡を念比に。御弔ひあれかしと存じ候。シカ〳〵。〽左樣に候はゞ御逗留の間は御用を承り候べし。シカ〳〵。〽心得申して候。

鵜祭（うのまつり）

アヒ　末社

（亂序にて出る。）ヘ斯樣に候者は。能州氣多の明神に仕へ申す末社にて候。只今罷出る事餘の儀にあらず。當社の御事は我が朝におき候ひても。竝びなき靈神にて御座候により。每年御神拜其數多しと申せども。中にも今月初午の御祭禮と申すは。別して有難き儀式にこれあるにより。帝此由聞召し上げられ。その爲に勅使是迄御下向なされて候。是と申すも。當社の御威光めでたき故。斯樣の事も御座あるげに候。然れば誰あつて罷出て。かの稀人に逢ひ參らせ。神秘申上ぐべき者も御座なきと思召され。當社の明神は。假に賤しき人間と現じ御出でなされ。初午の御神事の謂れ。大方御物語なされて候。誠に。申す迄は御座なけれども。今月今日の御祭禮を。鵜の祭と申して。奇特なる仔細と申すは。まづ當國において。ゐのおうと云ふ在所あり。此里に於いて正月朔日より何處ともなく荒鵜一つ來り。人にも恐れず見え候程に。扨はこの鵜が贄に供はりけるぞと心得。皆人疎かにも仕らず候所に。其年の積る十一月初午に。かの荒鵜我れと神前に飛び來り。贄に供はり申すによつて。扨こそ鵜の祭とは名附けられて候。斯かる神慮の奇特を以て。この鵜も贄にそなはりければ。鳥類の身を轉じ。佛果に至る事は疑ひもなき御事にて候。又當社と申すは。女體の神にておはしましけるが。大和の國三輪の明神と。一體分身にて。むかし神功皇后。新羅國を從へ給はんと。異國に赴き給ふ時。未だ諸勢も集らざるによつて。船の上にて祭り給へば。其時この氣多の明神さらば奇瑞を見せ給はんと。忽ち現れ出で給ひ。神功皇后に會ひ參らせられ。力を添へ給へば。それよりして多くの人數馳集り。思召す儘に三韓を亡ぼし。掌に天下を治め給ふ事も。是皆當社の御神德深き故にて候。さる程に古へこの御宮造りと申すは。人皇初めて十代の帝。崇神天皇の御時。大宮柱ふとしきたちて。氣多の明神と顯じ給ひ。日本に於いても。第三番の社壇にて候。それを如何にと申すに。西に蒼海漫々として。何處を限りとも知らず。北は青山峙り斷るが故に。龜鶴蓬萊山と名附けられ。かゝる風致は世にあるまじきとの御事にて候。又それのみならず當社に祈りをかけ給ふ人は。何事についても願ひの叶はずといふ事なし。一度御參詣の輩は。現世無比樂にして。後生清淨なる事は。疑ひもなき御事にて候。や。是は當社のめでたき仔細。まづ急ぎあれへ參り。かの稀人にお禮を申さばやと存ずる。シカ〳〵。ヘ是は當社明神に仕へ申す末社にて候。遙々の御參詣まづ以てめでたう存ずる。最前是へ罷出でられたるは。當社にて候が。舞樂を奏して御目にかけ申さうずるにて候間。その逗留に我等如きにも參り。お禮をも申上げよ。又は何にても一曲仕り。お慰めを申せとの御事により。是迄罷出でて御座るが。何と一曲仕らうずるか。仕るまいか。シカ〳〵。（舞謡とも常の如し。）

浦島（うらしま）

アヒ　末社

（亂序にて出る。但し龜蓬萊の作り物持ち出で三井寺鐘座に置く。それより名乘まで亂序打ちて居る。）ヘかく樣に候者は。丹後の國水の江浦島の明神に仕へ申す末社の神にて候。唯今罷出ること餘の儀にあらず。當社の御事は雙びなき靈神にて御座候により。君この事聞召し上げられ。勅使として稀人この浦へ御下向なされ。如何なる者か罷出で候へかし。神秘お尋ねあり度

きと思召さるゝを。明神は能く御存じあつて。かゝる大事の神秘を。在所者など罷り出で。あさまに申しては如何と思召し。賤しき老人と御身を現じ御出でなされ。此の神の目出度き仔細懇に御物語なされて候。寔に珍しからざる申し事には候へども。當社と申すは。むかし雄略天皇三十二年。秋七月の事なりしに。浦島太郎とて齢久しき釣人あり。此の浦に出で釣を垂れけるに。何となく大きなる龜を一つ釣針にかゝりて上ぐる。之を見れば頭には青き玉を戴き。甲には五色の紋を出だしたる龜にて候程に。如何様不審ならずと思ひ。其の儘この浦に放し給ひけるが。其の後いづくともなく美女一人來りて。彼の浦島を誘ひ行くほどに。程なく海の都に到り給ふ。その時かの美女宣ひけるは。我は此の海の娘なるが。五色の龜と化して海中にありし時。何とかして釣針に懸りたるを。其の儘命助け給ふ其の恩を報ぜんため。これまで誘ひ給ひたるとあつて。黄金の砂子瑠璃の砂。七寶莊嚴の宮殿に座して。乃ち夫婦の語らひをなし。色々樂しみ遊ばし給ひし處に。浦島太郎。龍宮に到りて七日と申すに。故郷の父母戀しく思ふ心あつて。仙女に暇を乞ひ給へば。安き間の御事。暇を參らせうずるとて。美しき玉手箱を授け。再び我が許へ歸らんと思ひ給はゞ。ゆめ／＼此の箱を開け給ふなと。堅く契約あり。人間にかへし給ふ。浦島は故郷に歸りて見れば。もと見し家居もなく。親しき者もなかりし程に。奇特の思ひをなし。所の者を近づけ。浦島が住家は此の處になきかと尋ね給へば。所の者答へて曰く。これは年久しき事を尋ね給ふものかな。浦島太郎がためには七百年以後に及ぶ孫のある由を申す。さては龍宮には此の世界の七百年ぞと心得。それよりして様々の奇特あつて。龍女のことを床しく思ひ。若し此の箱の内に見し世の事のあると思ひ。少し開き見給へば。箱の内より白雲常世の方へたなびくと思へば。黑かりし髮も俄に白くなり。あさましき姿となり給ふ。これは壽命めでたき藥を彼の箱に入れたる仙女の奇特を見せんがためなり。されば浦島も唯人ならねば。無病息災を守りの神と現れ。此の所に於いて浦島の明神と崇め奉り。また彼の龍女は毎日當社へ影向あり。藥を捧げ給ふ故に。此の神前に歩を運び給ふ人は。壽命長久なる事は疑ひもなき御事にて候。や。ごれは當社の目出度き仔細。先づあれへ參りお禮申さばやと存ずる。シカ／＼。へこれは當社の明神に仕へ申す末社にて候。遙々の御下向。先づ以て目出度う存ずる。最前罷り出で神秘申されたるは。忝くも當社明神にて候。然れば彼の龍女唯今これへ影向あり。不老不死の御藥を我が君に捧げ奉り。其の上音樂を奏して御目に懸け給うずる間。先づ我等如きの者も罷出で。稀人に御禮申し。また御慰みを申せとの御事にて候が。何と一曲仕らうずるか。仕るまいか。三段舞。切謠常の如し。

同　龜の間

アヒ　龜の精

語は末社の通りに少しも相違なく候。名宣と切謠左の通り。へか様に候者は。海中に住み萬年の齢をたもつ龜の精にて候。めでたかりける時とかや。三段舞。やら／＼めでたや／＼な。龜は萬年の齢を保つものなれば。我等が様なる類にまでも。思ひのまゝに長生きせんと。／＼悅び勇みて。また海中にぞ入りにける。

雲林院

アヒ　里人

へ是は　都紫野の邊りに住居する者にて候。毎年とは申しながら。當年は雲林院の花。いつの春よりも面白う今を盛りの由申し候間。罷出て花をも眺め。心をも慰まばやと存ずる。や。是に御入り候は此邊りにては見馴れ申さず。如何樣田舍より御上りの人と見え給ひて候。さて何方よりの御出でにて候ぞ。シカ〳〵。へなか〳〵此邊りの者にて候。シカ〳〵。へ心得申して候。へ扨お尋ねありたきときは如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。へ是は思ひも寄らぬ事を承り候ものかな。左樣の御事は上つ方にこそ糺だ給へ。都の住居とは申しながら。我等のやうなる賤しき者の存ずる仔細にては御座なく候。されども其方にも初めて御上りなされお尋ねあるを。何をも存ぜぬと申すも如何に候間。古き者むさと申傳へたる事の候を。かたはし御物語り申さうずるにて候。語まう　此の寺と申すは。都の内におき候ひても。紫野の雲林院と申す御寺にて御座候。是は古へ。在原の中將業平の御建立にて御座ありげに候。惣じて都廣しとは申せども、此所は雲の林と申して。取分き名所にて御座候ひける。御覽候へ北山の風景。西は船岡。何れも山々の花盛なれば。いつもとは申しながら、今の折柄一入眺め盡きせぬ御事にて御座候。さる程にかの業平と申すは、人皇五十一代平城天皇の御孫。阿保親王第五の御子にて渡らせ給ひ。御母は伊登内親王にて御座ありたると申す。誠に。申す迄は御座なけれども。業平の御事は人間にてはましまさず。忝くも極樂世界歌舞の菩薩の化現にて。一切凡夫迷ひの衆生を。助け給はんとの御誓願にて。殊には好色を好み給ふ事。是皆五障の罪深き女の塵に交り。是を助け給はうずるとの御方便にて。假に人界には生れさせ給ひたると承及びて候。又和歌の道の達者は。上代にも稀なると見え給ひける。それを如何にと申すに。古より歌人は數多ありとは申せども。既に古今集にも六人の歌人と選ばれ給ひ。歌のさまは心殘り。詞は足らず。しぼめる花の色なうして。匂ひ殘るが如くと譬へられ。かゝる奇特の歌人なれば。知らぬ吾妻の果て迄も御下向あり　道すがら名所〻〻の歌をよみ。或ひは又賤しき賤の女にも戯れ。爰かしこに心を留め給ふ事も。是皆女人を濟度あるべき爲ばかりにて御座ありたるげに候。又二條の后と申すは。清和天皇の御時。長良の卿の御息女にて、未だ皇后にも立たせ給はざる御時。業平は忍びて逢ひ參らせられ。かの后唯人にて東の五條とやらんにさむらひし時も。業平は通ひ給ひ物など送り。其の品々の御歌を詠みて參らせられ。互ひの御心淺からず御座ありたると申す。是は業平二條の后の御事。是に就いて伊勢物語と申す事は。其頃大和守藤原の繼景と申す人の娘に。いせと申して生年十三歳にして。未だいとけなかりしかども。七條の后に御宮仕へし給ひ。和歌の道人にすぐれ。心の花外に顯れ。言葉などやさしうさむらへば。后より何にても珍しき草子を書けと仰付けらるゝ。其外この伊勢物語を書きたるに依つて。則ち伊勢が筆作なればとて。草子の名を伊勢物語とは名付けられたると申し候。又一説には。業平自記の言葉なれどもさりながら。いせの家の集の端の詞に似たる所あるを以て。いせ物語とは申すとも。爰を色々に申傳へては候へども。委しき仔細は存じも致さぬ。されども古より何れの歌人も。この物語の作者を強ひて尋ぬべからず。言葉の花を聞いて只それとばかり。翫べとの教へにて御座あるなどと承りて候。この物語の初發に。昔男と書出されたる事。業平一生の内書かれたれば。遠きによらず近きによらず。昨日は

今日の昔なれば。時代をさだかに現さず。むかし男と書出だし。臨終の夕までを。覺束なう書かれたる所。取分き面白き御事どもにて御座あるやうに承りて候。この物語は初めを終りとし。終りを初めとして讀むにも盡きず。語るにも盡きず。奥深き物語なれば。今末の世に至る迄も。一入是を翫び給ふ。終にゆく道とはかねて聞きしかど。昨日今日とは思はざりしをと。これ業平の御辭世と申す人も御座候。此の歌は人間の徃なる無常の理を。一切衆生にあまねく知らしめんが爲。この物語の名殘には書かれたると申し候。一天四海に。其の名高き業平にて渡らせ給ひしかども。のがれ難きは生死の道。元慶四年五月下旬の頃。御年未だ六十年にも足り給はずして。終に卒去ならせ給ひたるげに候。又是なる櫻は。業平の植置かせ給ひたる花にて候が。毎年斯樣に色香妙に咲亂れ候程に。都人は申すに及ばず。遠國の人々も春にもなれば御上りあり。花を眺め心ある人は。當座をも詠み給ふ御事にて候。最前申す如く。業平の御事。伊勢物語に就いて色々仔細御座あるとは申せども。まづ我等の存じたるは。斯くの譯にて候か。扨お尋ねは。如何やうなる御事にて御座候ぞ。

シカ〳〵。〽扨も〳〵蘆屋の公光と申すは。隱れもなき御事にて候に。左樣の御事をも存ぜず。御所望なればとて。伊勢物語の事むさと申して迷惑仕りて候。シカ〳〵。〽されども斯かる奇特なる事は御座あるまい。只今御申しなさるゝ老人は。疑ふ所もなく。業平にて御座あらうずると存じ候。それを如何にと申すに。公光伊勢物語を手馴れ給ふ御志を。業平は悦び夢に見えさせ給ひ。此所にて伊勢物語の奥義を傳へ給はうずると思召し。花に戯れ。再び閻浮にまみえ給ひたると存じ候間。いよ〳〵此上は心中に御祈念あり。花の木陰にて一夜を明し給はゞ。猶も奇特の御座あらうずるにて候。シカ〳〵。〽御逗留の中また御見舞申さうずるにて候。シカ〳〵。〽心得申して候。

同　替の語

語〽先づ此の所をば。都北山雲林院と申候。又是なる櫻は。業平の植置き給ひたる櫻にて。隱れもなき名木にて候。元來花物云はぬ色なれども。又申すは。輕漾激影動レ脣なば。花の物云ふ事もあるかとの申し事にて候。されば。花は何れも同じ御事と申せども。取分き此の花を名木と申す仔細は。昔の歌人名匠の御賞翫なされ。色々面白き御歌どもあそばされ。花盛りには貴賤群集して眺め候故。名木と申習はし。今にかくの如く候。さて又業平の昔の御事は。昔伊勢物語に事盡きたる樣に候へば。申すに及ばぬ事なれども。業平と申すは。人皇五十一代。平城天皇の三番目の皇子。阿保親王の末の御子にて御座ありたると申す。御母は桓武天皇の皇女。伊登内親王と申したる御方にて渡り給へば。何れも王孫にて。易からぬ御方と承りて候。されば阿保親王の御子五人渡らせ給ふ。御名をば大江の音人。行平守平。仲平業平と申し奉りしが。業平には在原の姓を賜はつて候故。在五中將とも申したるげに候。初官には。左近將監にて御座ありしが。度々の除目叙爵に御官位をすゝまれ。極官の元慶元年正月十五日に。左近の權の中將に任ぜられたると申す。左右に候ひて。元慶四年庚子五月二十八日に。御年五十六にて卒し給ひたると申す。系圖には。業平は阿保親王の四男とも。五男とも書きて候へども。南都不退寺は業平の御寺にて候が。それに御影の御座あるが。業平は阿保親王の五男とある由承り候。一期の間色好みにておはしました

ると申す。さて伊勢物語と申すは。昔より說多く候。或は業平の自ら御身の事を書記されたると申す。其の故は。八十四段目には。身はいやしながらなどとありげに候。又百二段目に。歌は詠まざりけれどとも御座あると申す。其の外人の存ずるまじき事どもを書き顯して候へば。他人の書きたる物とは見え申さぬ由承りて候。又一說には。七條の后の女房に。伊勢と申す官女は。繼蔭が娘にて。彼の書きたるとも申す。其の仔細は。百十四段目に。仁和の帝芹川の行幸の御時。行平の中納言は鷹狩の役にて出で給ひしが。其の時の御歌に。翁さび。人なとがめそ狩衣。けふばかりとぞ田鶴も鳴きたると。詠み給ひしは。業平果て給ひて七ヶ年後の事にて候を。彼の物語に書き入れ候へば。自書とは申されざる由御沙汰にて候。且つ業平の一期の間。書置き給ひたる詠草は。又殘りたるを書き入れ。又世上に膾顯仕りたる事どもを取集めて。伊勢書記されたる物にて有らうずるとの御沙汰にて候。されば京極の中納言定家の卿も。此の一卷の名を。伊勢物語と號する上は。伊勢が筆作にてあるべしと。考へ定め置かれたると申す。只とにかくに其の由來を尋ぬるに及ばず。詞花言葉を翫べとの教へと承及びて候。

【え】

江口

アヒ　里人

ワキ〽急ぎ候程に。江口の里に着きて候。此所に於いて江口の君の舊蹟を尋ねばやと思ひ候。在所の人のわたり候か。アヒ〽里人のお尋ねは誰にてわたり候ぞ。ワキシカ〳〵。アヒ〽あれに見えたる一段高き所が。江口の長の御舊跡にて候間。御出であらうずるにて候。ワキ〽さらば立越え一見申さうずるにて候。アヒ〽重ねて御用もあらば承り候べし。ワキシカ〳〵。アヒ〽心得申して候。

（中入過ぎて。）アヒ〽最前都方のお僧の。江口の長の御舊蹟をお尋ねなさるゝを教へ申して候。奇特なる御心中にて候間。未だあれに御入りあらば參り。御物語申さばやと存ずる。や。最前のお僧の未だ此所に御座候よ。ワキ〽まだ此所に逗留申して候。又尋ね申したき事の候間。此方へ御入り候へ。アヒ〽心得申して候。扨それは如何やうなる御事にて候ぞ。ワキ〽思召し寄らざる申し事にて候へども。江口の君の流れを立て給ひたる仔細を存じの人にて候はゞ。いて御物語り候へ。アヒ〽我等も在所には住居申せども。江口の長の御事委しくは存ぜず候さり乍ら。最前よりも御目にかゝり。奇特なる御方と存じ候間。大方承りたる通り御物語申さうずるにて候。語まゞ。この江口の長と申すは。いにしへ播磨の國書寫の性空上人。正身の普賢菩薩を拜みたう思召され。坂中の文珠に一七日御參籠ありしに。ある夜の御靈夢に。誠の普賢菩薩が拜みたう思召さるゝ其の信心疑ひなし。さあらばこれより周防の國へ御下向あり。中のみたらし。室積の長を。見給へとある御夢想にまかせ。同行四五人召連れ。周防の國へ御下りなされ。室積の長のあたりに佇み。夜もすがらかの遊女を御覽なさるゝに。長は折節舟に召され。遊女數多つれ御船遊びのありしと申す。其時の謠に。小風みたらいの。川邊の水に風の訪れてと。謠はせ給へば。なみ居給へる遊女達。さゞら浪立つ。やれことんとゝ。謠はせ給ふ。上人是を御覽じて。淺ましきかなその敎へはさる事なれども。流れを立つ身を。上人の身として見る事よと思はせ給ひ。暫くとくしんて

開目則失と御覽ずれば。只遊女なり。又閉目則失として御覽なさるれば。長は則ち正身の普賢菩薩と顯れ給ひ。御供の遊女達は廿五の菩薩と現じ。召されたる船は白象となり。法性無漏の大海には。普賢かうじゆんの月の光。色ほがらかなり。上人扨は我が願ひ。成就してあるぞと思召され。書寫に歸らせ給ふ。今において播磨の國。書寫の性空上人と申して。隱れもなき御事にてあるげに候。又其後かの長は都へ御上りなされ。流れを立てうずると思召され御上洛ありしに。この江口の里何とやらん古里に似て。なつかしう思召さるゝとて。爰にて流れを立て給ふ。其の折節西行法師此所を御通りありしに。俄に雨強う降り候程に。遊女の許に立寄り。お宿を御所望ありければ。長仰せられる事に。我は流れを立つる身なれば。お宿は叶ふまじき由仰せらるゝ。其時西行の御歌に。世の中を。いとふ道こそ難からめ。假の宿りを惜しむ君かなと。遊ばされければ。長御返歌に。世をいとふ。人とし聞けば假の宿に。心とむなと思ふばかりぞと。斯樣に御返歌ありたると承りて候。最前申す如く。委しき事は存ぜず候へども。まづ我等の承りたる通り。御物語申して候が。扨お尋ねは。如何やうなる御事にて御座候ぞ。

ワキへ尋ね申す所に念比に承り祝着申して候。尋ね申す事餘の儀にあらず。最前この舊蹟に立寄り。いにしへ西行法師の御事を何となく口ずさみ候處に。いづくとも知らず女性一人來り。古の言葉を與床しく聞き候間。如何なる仔細によつて候と不審のなし申す處に。其後流れの女の御事を。身の上のやうに語りなし。江口の君の幽靈と名宣り。行き方知らず失せて候程に。不思議なる事と存じ。重ねて御身に尋ね申す事にて候。アヒへ是は奇特なる事を承り候ものかな。誠や昔人の申すは。月の隈なき夜などは。今も江口の君。此の川へ御出でなされ。御船遊びをなさるゝを。貴き人の目には見え給ふなどと承りては候へども。我等如きの者は。左樣の御事拜みたる事は御座なく候。是と申すもお僧御心中貴くましますにより。江口の君假に顯れ給ひ。御言葉を交させ給ひたると存じ候間。末は急ぎの御旅なれども。暫く此所に御逗留あらば。猶も奇特なる事を御覽ぜられうずると存じ候。ワキへ委しく承り候ものかな。我も左樣に存じ候間。此所に逗留致し。江口の君の跡を弔ひ。末は何方へ通り候べし。アヒへ御逗留の間は御用を承り候べし。ワキシカ〳〵。アヒへ心得申して候。

江島

アヒ　鵜の精

へか樣に候者は。相模國江島の天婦に仕へ申す鵜の島の精にて候。誠に申すに及ばぬ事なれども。我が朝は小國とは申せども神國にて。國々在々所々に。靈神あまた地を占め御座候故。色々樣々目出度き事の出來候中にも。當島の涌出し天女現れ給ふは。人皇三十代。欽明天皇御代始めて十三年。卯月十二日戌刻に至るまで。かうやなんかい湖水港の江に打上り。雲霞日に〳〵覆ひ。大雨頻りに降つて。天地震動すること十日に餘れり。其の後一つの島涌出する。即ち江島と號す。其の時雲上に天女現れ給ふ。辨財天にて御座候。さる間。武藏相模の間。藤澤の近くに深澤といふ湖あり。其の湖に五頭龍と云へる大蛇住んで。人を取ること限りなし。さあるに仍つて人々の悲しみの色止むことなし。天婦之を歎かはしく思召し。彼の龍に宣ひけるは。汝その惡心を飜し。此の國の守護神とならば。夫婦の語ら

ひなすべしと御申しあれば。彼の龍悦び。頓て夫婦の神となり。龍の口の明神と現れ給ふ。かゝる目出度き靈神にてまします故。一度御參詣候ても諸願成就致し。何事も思召すまゝに御座あるに依り。國々在々よりも。信心致し。參詣の人々貴賤群集仕り候。先づこれは當社の目出度き仔細かくの如し。さて唯今當今に仕へ御申しある臣下殿。江島の御樣體を御覧あつて。奏聞あれとの宣旨を蒙り給ひ。御參詣なられ候間。我等がやうなる者も罷り出で。何か一曲仕り慰め申さうと存じ。罷り出でゝ候が。臣下殿はどれに御座るぞ。さればこそ。是に御座る。さすが臣下殿ほどあつて。さても結構なる體かな。先づ御禮申さう。シカ〳〵。へ御禮申し候。これは當島に住む鵜の鳥の精にて候。唯今の御參詣近頃目出度う存じ候。さて我等これまで罷出でたる印に。何ぞ一曲致さうか。但し仕るまいか。やア。やれ〳〵嬉しや〳〵。一段の御機嫌に申上げた。とかうの返事はなうて。大臣殿の左の頬先がこつこりとした。頓て仕れとの御事にてあらう。いで一奏でかなで申し。また我等が身の上の事も申上げうと存ずる。目出度かりける時とかや。舞三段。へいでいで〳〵さらば鵜の德な語らん。地神四代火々出見命豐玉姫と契り給ひ。水際に御產屋を建て給ひ。我等が羽にて葺かせ給へばほどなく尊生まれさせ給ふ扨こニ鵜の羽葺き合はせずの尊と申すも此の羽の威德。または大川淵洞の奧までも。鯉鮒鯰かづき上げ掬ひ上げ。隙なく魚を食ふ時は。罪も報も忘れ果て。罪も報も忘れ果てゝ。皆膽にこそ成りにけれ。

箙（えびら）

アヒ　里人

へ是は生田の邊りに住居する者にて候。今日は長閑に候間罷出で。心をも慰まばやと存ずる。や。是なるお僧は。此邊りにては終に見馴れ申さぬが。何方より御出でにて候ぞ。ワキシカ〳〵。へ中々この邊りの者にて候。シカ〳〵。へ心得申し候。それは如何やうなる御事にて候ぞ。シカ〳〵。へ是は存じも寄らぬ事を承り候ものかな。我等も此邊りに住居申せども。左樣の御事委しくは存ぜず候さりながら。初めて御上りありお尋ねあるな。何をも存ぜぬと申すも如何なれば。大方承り及びたる通り。御物語申さうずるにて候。語る程に。平家は其頃度々の御合戰に打勝つて。都合十萬餘騎を引具し。一の谷に籠り給ふ。この生田の森と申すは。平家十萬餘騎の大手なりしが。源氏の方には梶原平三景時。同源太景季。手勢五百餘騎を以て。一の木戸を切つて落し。多くの高名にて景時は陣を引かるゝ。頃は二月上旬の事なれば。折節これなる梅色美しく咲亂れたりしを。源太は何とか思はれけん。この梅花を一枝手折り箙にさし。敵の中へ分入り。散々に合戰し給ふ。されば景時我子の源太見え給はねば不審に思ひ。源太は何處にあるぞと問はれける。敵の中に取籠められ給ひぬと云ふ。扨は討たれたるか。源太討たれぬる上は。景時生きて何かせんとて。二百餘騎を相具し。又平家の中へ駒駈入れ。是は相模國の住人。鎌倉の權五郎平景政が末葉。梶原平三景時と。名宣りもあへず切つてかゝり。思ひの儘に合戰し給ふ。其時源太は菊地の三郎高望と戰ひ。押竝べ馬の上にてむんずと組み。兩馬が間に落重なつて。高望が首を取り。太刀の先にさし貫いて。又馬に乘り出で給ふが。父景時に行逢ひ。親子一所になり。猶々分取高名其數を盡し。本陣に引かるゝ。愛を以て梶原が二度のかけとは申傳へて候。源太は

この梅の木の本にて。八幡大菩薩の御計らひぞと禮をなし。渇仰ありしより此方。名木と名附け。籬の梅とは申習はし候。又其後ある人の申さるゝは。籬に梅花をさし給ふ事。唐土我朝とても。名大將の志は誠に同じ御事にて候ひけるぞ。元の伯顔南朝の宋を平げ。二十萬騎の大將にて。至る所を悉く切平げ。北方へ歸る時。一物も取らずして。江南の梅只一枝折つて歸らるゝ。擔頭には帶びす。江南の物唯梅花の一兩枝をさしはさむと。斯樣にありしと申す。又軍の門出を祝ふ名詮には。一花開くれば天下の春。梅は諸花の魁け。菊はこれ百花の尻拂ひと申す時は。この心の縁を以て。籬に梅花をさし給ふと。源太の志皆人感じ給ひたると承り及びて候。最前申す如く委しき事は存ぜず候へども。まづ我等の承り及びたる通り。御物語申して候が。扨お尋ねは如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。へ是は奇特なる事を承り候ものかな。某推量申すに。今の世に至る迄も。源太はこの梅に執心を殘し給ふを。お僧遙々御上りあつて。この花を詠め給ふ事を。景季は草の蔭にて嬉しく思ひ給ひ。殊に貴き御方なれば。御弔ひも受け申されん爲。假に姿をみえ給ひたると存じ候間。末は急ぎの御旅なりとも。今夜はこの花の木蔭に御休みあらば。猶も奇特のあらうずるかと存じ候。シカ〳〵。へ若し御逗留もあらば。重ねて御宿參らせうずるにて候。シカ〳〵。へ心得申して候。

【お】

老松

アヒ　門前の者

ワキ呼出す。へ門前の者とお尋ねは。誰にて渡り候ぞ。シカ〳〵。へ心得申して候。シカ〳〵。へなか〳〵門前の者にて候。シカ〳〵。へ是は存じも寄らぬ事を承り候ものかな。此所には住居申せども。左樣の御事委しくは存せず候さりながら。初めて御參詣あつてお尋ねあるを。何をも存ぜぬと申すもあまりなれば。大方承りたる通り御物語申さうずるにて候。語まづ。飛梅と申すは是なる梅を申しならはし候。さる程に北野天神未だ菅丞相にて御座なされ候御時。さる仔細あつて此の安樂寺へ御下向なされけるが。都に御座の御間は樣々の御遊覽どもにて候ひしかども。此處もとの御事は田舍なれば萬事淋しく御座候程に。朝暮和歌の道にて御心を慰みあつて。月日を送らせ給ふが。ある御徒然の折節。東風吹かば匂ひおこせよ梅の花。主なしとて春な忘れそとある御詠歌ありければ。草木心なしとは申せども。心の候ひけるぞ。此の御詠歌により是なる梅都より夜の間に飛來り申し。奇特なる事なれば斜ならずに思召され。御寵愛となり頓て飛梅と名付け御申しなされたると承及びて候。また年々色うつくしく咲きまさり候程に。紅梅殿の神とも崇め御申しなさるゝ。又是なる松を老松と申候。是は人の壽命を守り給ふにより老松の神と崇め給ふ。まづ兩木の目出度き仔細は斯くの通り。菅丞相再び都に御歸洛あつて。何事も思召す儘に御座あらうずると思召され。あれに見えたる大山は天拜が嶽と申して名山なるが。あの山により給ひ七日七夜の間。梵天に向ひ御祈誓なされければ。奇特なる御事にて候ひけるぞ。天より卷物一つ降下り則ち披いて御覽なさるゝに。南無天神となし給ふ。されども此分にては思召す儘に御座なきとあつて重ねて祈り給へば。又卷物一つ降下りたる。是も披いて御覽なされければ。今度は南無天滿大自在天神となし

給ふ。今こそ願の儘なる事と思召され。其後都に御上りあつて何事も思召す儘に御座ある。北野南無天滿大自在天神と祀はれ給ひ。今の世に至る迄。國々よりも御信仰あり奇特あまたに御座あるげに候。さるによつて北野信仰の輩は。この宰府の社へも御參詣なうては叶はぬ御事にて候。最前申す如く委しき事は存ぜず候へども。まづ我等の承りたる通り御物語申して候が。扨お尋ねは如何樣なる御事にて御座候ぞ。シカ〲。〽是は奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに。梅津の何某殿はるばるの御參詣を。爾木の神は嬉しく思召され。是迄顯れ給ひ御詞を交させ給ひたるよと存じ候間。御上洛は御急ぎなれども。暫く此所に御逗留あつて御祈念も候はゞ。重ねて奇特なる事を御覽ぜられうずるかと存じ候。シカ〲。〽左樣に候はゞ御逗留の内は我等も御用を承り候べし。シカ〲。〽心得申し候。

落葉（おちば）

アヒ　里人

ワキ呼出す。〽所の者とお尋ねは。誰にてわたり候ぞ。ワキシカ〲。〽さん候あれこそ手習の君の御舊跡にて候間。立寄り御心靜かに御眺めあらうずるにて候。シカ〲。〽重ねて御用もあらば承り候べし。シカ〲。〽心得申して候。中入過ぎに立ち。〽最前諸國一見のお僧の。手習の君の御舊跡をお尋ね候を。敎へ申して候。奇特なる旅人にて候間。未だあれに御座候はゞ參り。御物語申さうずるにて候。やゝ是なるは最前の御僧にて候か。シカ〲。〽心得申して候。さてお尋ねあり度きとはいか樣なる御事にて候ぞ。シカ〲。〽これは思ひも寄らぬ事を承り候ものかな。左樣の御事は委しくは存ぜず候さりながら。最前より御目に懸かり。御用もあらば承らうずると申したるに依り。お尋ねあるを何をも存ぜぬと申すも如何に候間。古き者の申傳へたる通り。あら〳〵御物語申さうずるにて候。シカ〲。〽語先づ落葉の宮と申し奉るは。朱雀院女二の宮にて御座ありげに候。其頃柏木の右衞門の督と申す御方の御座候ひしに。朱雀院より落葉の宮を參らせられ。御契淺からず御座ありたると申す。同じく女三の宮は。光源氏へ參らせらるゝ。然ればこの柏木の右衞門の督。御心の仇なる故にや。ある時蹴鞠の庭にて。小簾の隙より女三の宮の御姿を一目見參らせられ。御心移り戀と成りたると承及びて候。其頃一條の御息所は。御物の怪にて惱み給ふ仔細にて。この小野に移り住ませ給ひ候が。定めなき世の習ひとて。柏木の右衞門の督果敢なくなり給ひて後。落葉の宮も此の所に渡り給ひ。御母御息所と一所に住み給ひ候に。夕霧の大將は。よりより此の所へまうで給ひたる由承りて候。山里の。哀れを添ふる夕霧は。立出でん空もなき心地してと。是は夕霧の大將の御歌にてありげに候。されば女二の宮を落葉の宮と申す仔細は。柏木の御歌に。もろかづら。落葉を何に拾ひけん。名はむつましきかざしなれども。と。斯樣に詠じ給ひてより後。落葉の宮とは申したるげに候。最前申す如く。此儀において。色々仔細御座ありとは申せども。先づ我等の承りたる通り。御物語申して候が。扨お尋ねは如何やうなる御事にて候ぞ。シカ〲。〽是は奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに。お僧の御心中貴くまします故。殊に女人は五障三從とて。罪深き者なれば。お僧の御弔ひをも受け給ひ。迷ひをも遁れ給はうずると思召し。落葉の宮の幽靈。假に姿をまみえ。いにしへを御物語な

されたると存じ候間。暫く此の所に御座候ひて。かの御跡を懇ろに御弔ひあらば。我等如きも有難く存ぜうずるにて候。シカ〳〵。へ御逗留も候はゞ。我等の御宿を申さうずるにて候。シカ〳〵。へ心得申して候。

同　惟喬の話

ワキ呼出すと。又かゝると。両様あり。落葉の宮とは申したるげに候。これよりつきて。また惟喬親王の皇居は。あれに見えた松の。少し小高き所が。文徳天皇第一の皇子。惟喬親王の皇居にて御座候。又是より東に當りて。杉むらの見えたる山は。都より雲の八重垣と詠め給ふ。横川の峯と申して。隠れもなき名所にて御座候。

大江山（おほえやま）

アヒ　能力
同　洗濯女

脇供して出る。道行過ぎて。脇呼出す。

能力へ御前に候。シカ〳〵。能力へ畏まつて候。これは大事の見物じや。殊の外山が深いと見えた。此の間シカ〳〵のうち。女赤い小袖を手に掛け。切戸より出る。シテ柱の先へ出て洗ふなり。狂言方より。女へさても〳〵迷惑なことかな。毎日このやうに血のついた物を洗うて恐ろしい事や。ト云うて。小袖洗ふ仕舞口傳。脇座より正面して。女見附くるなり。能力へやら奇特や。殊の外赤い水が流るゝ。血の様な水ぢや。ト云うて。女見附くる。心得あり。口傳。能力へうぬしは京の今出川の者ではないか。女へなか〳〵。今出川の者で御座る。能力へ糊屋のいちやではないか。女へなか〳〵。糊屋のいちやで御座る。こなたは見知りましたか。いつの間に山伏にならせられたぞ。能力へ近い頃山伏になつたが。そちの親たちがいかう尋ねて。此のいちやは何處へ行た事ぞと云うてあつたが。何として是處へは來たぞ。女へその事で御座る。妾は町の辻に遊んで居ましたれば。誰やらつかうて行くと思ひましたが。是處へ參りました。能力へそれは何とどの様な者ぢや。女へ聞きも及ばせられぬか。酒顛童子といふ鬼で御座るが。毎日人を取つて來ておまゐりやる所で。此の様に血の附いた物を妾が洗濯しまする。能力へ先づそちは今まで喰はれないで仕合はせぢや。さて上ぼり度うはないか。女へ上ぼつて親達に逢ひたうは御座れども。上ぼることがなりませぬ。能力へさうであらうず。それならば追附け語つて聞かせよう。頼うだ頼光を始めとして。兵共大勢是處へ來た。別なる事ではない。彼の童子を從へにわせた程に。そちが才覺で。童子に引合はする様にさしませ。お主を連れて上ぼらうぞ。女へそれは嬉しい事では御座れども。恐ろしい樣子で御座る程に。自由には成りますまい。能力へいやけなげなる者が大勢來た程に。手間は入るまい。女へそれならば何として能う御座らうぞ。能力へお主分別して見さしませ。女へ先づ宿を借らせられたらば能う御座らう。能力へそれは一段とよからう。女へ先づたばかつて童子を呼出しませう。能力へ尤もぢや。先づ急いで呼出しませ。女へいかに童子の御座るか。シテシカ〳〵。女へ山伏達の御入りあるが。一夜の御宿と仰せられ候。シテシカ〳〵。女へ心得申して候。女へ御座るか。能力へこれに候。女へ其の由申したれば。お宿參らせうずる間。中門の脇の樓までお出であれとの御事にて候。能力へ心得申して候。彼の童子の御宿を參らせうずる間。中門の脇の樓まで御出であれとの御事にて候。ト云うて。間狂言下に居る。シテ中入過ぎて。ワキ呼出す。橋懸りへ出る。ワキシカ〳〵。能力へ御前に候。ワキへ寝屋の鍵を預り候へ。能力へ畏まつて候。シカ〳〵。能力へ尤もにて候。ワキ皆寝屋へ入る。能力へいちやはあるか。女へこれに居まする。能力へ扨々好い首尾ではなかつたか。あ

れは能う寢らるゝか。女へあの如く酒に醉うてからは。正體もなうお寢やりまする。能力へ最早したものぢや。そちも殊の外仕合せぢや。先づ故鄕へいぬるといひ。其の上今度はお主の働きであつた程に。身共申上げて。一かど音物を下さるゝ樣にお執成申さう。女へそれは忝う御座るさりながら。それまでも御座るまい。とかく親たちに逢ひましよと思へば。何より嬉しい事で御座る。能力へさてそれに就いて談合がある。さて和御寮は今まで約束した事もないか。女へそれは何の事で御座る。能力へいやどれへも嫁入りする筈ではないか。女へ成るほど欲しいといふ人もあつたさうに御座れども。親たちがまだ年も行かぬ者ぢや。末の事にせうと云うて。約束も召されぬと聞きました。能力へさればそこの事ぢや。身共も獨り身ぢや。此の樣に心易う咄した上ぢや。京へ歸つて談合せまいか。女へなう恥かしや／＼。あの山伏で居て。妻を持つ者で御座るか。能力へちつとも苦しうない。山伏で嫌ならば。はて山伏を止める分の事ぢや。女へ先づ親たちと相談してからの事にしませう。能力へそれは聞えぬ事ぢや。此の度命を助けてやるも。身共のお蔭ではないか。女へそれはあちらこちらで御座る。妾が居合はせて。引合はせたでは御座らぬか。能力へ千も萬もない。俺がいふことを聞かずは。兵共に云うて。そち共に隨へさせう。女へそれならば。童子を起して。そなた共々服させう。能力へおゝそれは憫然ぢや。童子が目を覺してはどうもならぬ。先づ此のうちにそちを連れて退かう。足許の明いうちにこつちへ來さしませ。ト云うて。女をおうて入る。女へ心得ました。橋懸りにて云ひ／＼入るなり。能力へ必らず京へ上ぼると。そなたと身共は夫婦に成る程に。さう心得さしませ。

大社（おほやしろ）　末社の間

アヒ　末社

亂序にて出る。へこれは。出雲の國杵築の明神に仕へ申す末社にて候。唯今罷出ること餘の儀にあらず。當今に仕へ給ふ臣下。當社の御神事拜み給はんため。初めて御參詣にて候な。誰あつて罷出で。神秘を申すべき者も御座なしと思召され。當社明神は假に宮人の姿と御身を現じ御出でなされ。今月の御神事日出度き謂れ。大方御物語なされて候。誠に珍らしからざる事にて候へども。當社と申すは。凡そ三十八社を勸請の地にて御座候。むかし神代の御時。天照大神より。鹿島香取の明神を兩使として。大物主の命へ仰せらるゝ樣は。御孫の尊を葦原の中津國の主になし給はんとありければ。最も然るべう思召すとて。其の儘此の國を渡し給ふ。我れ初めて國を平げし時。此の廣矛を持ちて治めしなり。乃ち彼の矛を參らせらるゝ間。此の矛にてなほ／＼天下安全に治め給へとあれば。命は百不足の八十隈に隱れて住み給はんとありし時。天照大神御悅び限りなく。さらば大物主の命へ御殿を作り參らせられんと。神魂の命に仰附けられ。柱千尋のたく繩を以て。天降り繩張りして。柱は太高く板は厚く廣く。夥しく此の御社を造り參らせらるゝ。かるが故に大社とは世俗に申し習はしたる御事にて候。さる程に當社に於いて。年中に御祭禮の其の數多しとは申せども。先づ今月神在月の御神事と申す仔細は。日本は神國にて。國々在々に靈神あまた地を占め給ひ。息災延命を祈り給ふ。每年十月には。我が朝の神々。殘らず此の大社に御影向ある御事にて候。さあるに依つて。餘の國には十月を神無月と申すに。此の出雲の國に限

り神在月と申すも。此の謂れにて候。先づ住吉の明神は。九月晦日に此の所へ御影向なさるゝ。殘りの神々は。十月朔日寅の一天に御影向あり。誠に目出度き神秘に御座候。されば日本の神々社々へ御歸りは。今月末つ方の事なるに。あの向ひに見えたる山は。神上の山と申して神山にて御座候か。神の御歸りの時節。天竺より影向の神に早渡と申すか。あの山に上がり。榊の枝を振り給へば。それを御暇乞にて。神々は他方へ歸り給ふ。これを御祭禮の謂れにて候。されば當社へ御參詣あつて。此の神在月の御神事に逢はせ給ふ人は。二世の願に相叶ひ。自ら日本國中の神々へ歩みを運び給ひたるに等しきと申すも。此の謂れにて候。ヤ。これは此の神の目出度き仔細。先づあれへ參り。彼の稀人にお禮を申さばやと存ずる。シカ〳〵。ヘこれは當社明神に仕へ申す末社にて候。遙々御參詣先づ以て目出度う存ずる。然れば此度の御下向たまさかの御事なれば。我等如き末社にも罷出で。何にても一曲仕り。稀人を慰め申せとの御事により。これまで罷出でゝ御座るが。何と一曲仕らうずるが。何と御座あらうずるぞ。シカ〳〵。謡め舞ふ常の如し。

同　神樂の間

アヒ　神主
同　參詣人
同　神子

口明けに神主出る。ヘ斯樣に候者は。出雲國大社の神主にて候。誠に。申すに及ばぬ御事なれども。我が朝は神國にて。王位目出度き御國にて候。これと申すも國々所々に。靈神あまた地を占め御座ある故なり。中にも此の大社は。天下に隱れなき御神なれば。參り下向の人々は　貴賤群集仕る。今日も社參致し。神前を潔め申さうと存ずる。笛の前に居ると。參詣人出る。常の如し。參詣人ヘこれは此邊りに住居する者にて候。某存ずる仔細あつて。毎月大社へ參り候。當月は未だ社參仕らず候間。急ぎ參らばやと存ずる。さるほどに當十月は。他の國々にては神無月と申候。また此の國の大社は。神在月と申して。此處ばかり目出度く御座あるなどと承り及びて候へども。我等未だ存せず候。則ち當月は神在月にて候間。神主殿に尋ね申さばやと存ずる。や。獨言を申すうちに參り着きて候。あら有難や。目出度う神樂を參らせうずるにて候。や。神主殿御見えなく候間。

呼出し申さう。神主殿御座あるか。神主ヘ誰にて渡り候ぞ。參ヘ某にて候。神ヘよう參らせられた。そなた程の信心者は稀に候よ。參ヘ某も隨分信を取るやうに仕り候よ。神ヘ近頃にて候。さ樣の驗には。前々より有徳にならせられ。御子たちも繁昌にて目出度う候。參ヘさて神主殿に尋ね申し度き事の候。神ヘ何事にて候ぞ。參ヘ承り候へば。餘の國々には當月を神無月と申し候が。當大社には神在月と申し候仔細。語つて御聞かせ候へ。神ヘ御不審尤もにて候。大方謂れ語つて聞かせ申さうずるにて候。參ヘ頓て御物語り候へ。神ヘ惣じて。左樣のことも大社に就いての仔細にて候。其の故は。日本六十六ヶ國の神々。當月は此の大社へ集り給ひ。これにて愈々天下穩かに。目出度く御守り成さるべきと。懇ろに談合され。又は人間男女夫婦の間の縁をも定めなさるゝ事にて候。何ぼう目出度き仔細にて候ぞ。されば餘の國々には。當月神の御留主にて候故神無月と申し候。此の大社には。神々集り給ふにより。神在月と申し候。さる程に。日本の神々御社に御歸りなされ候は。當月末つ方にて候。また向ひに見えたる大山を神上山と申し候が。あの山へ天

笠より御影向なされ候隼人の明神御上りあつて。神々に御歸りあれと。榊の枝を以て他方へ返し給ふ。これに就いても目出度き神祕候へども。神の御事は委しく申さぬことにて候。先づ神在月と申す仔細。大方かくの如くにて御座候。參へ委しく御物語祝着申して候。誠に目出度き御事にて候。又いつもの如く御神樂を參らせて賜はり候へ。神へ心得申して候。さあらば市殿を呼出し申さう。先づかう御通り候へ。參へ心得申して候。神へいかに市殿。御神樂を參らせうと御申し候間、急いで御出で候へ。神子へ何と御神樂を參らせうと仰せらるゝか。神主へなかなかの事。急いで參らせられ候へ。神子へ心得申して候。常の如し へ遙かなる沖にも石のあるものを。蜑子の前の腰掛石。神樂三段舞。御神樂こそ目出度うおりやらしませ。命長う天そいて守らせ給へ、

【か】

項羽　アヒ　船頭

へ是は。この烏江の渡りの船頭にて候、今日は某の番に當つて候間。罷出で船を渡さばやと存ずる。や。是なる草刈達は。向ひへ越し給はゞ船に乘せ申さう。シカシカ。へ何と向ひより此方へお越しやつた。やれやれ奇特なる事を云ふ人ぢや。惣じて此の所の大法にて。人の番に某が出て船を渡す事もならず。まして某の番に餘人の渡す事もならぬが。其方は僞りをばしおしやるか。シカシカ。へ心得申して候。さて不審ありたきとは如何やうなる事にて候ぞ。シカシカ。へ是は思ひも寄らぬ事を承り候ものかな。我等も此の所の者とは申しながら、左樣の事委しくは存じも致されさり乍ら。尋ね給ふを曾て存ぜぬと申すも如何なれば。所に云傳へたる事の候間。大方存じた通り御物語申さうずるにて候。語まう、項羽高祖の戰ひと申すは。およそ七十餘度に及びて御座ありたるげに候。誠に、申すも愚かなれども。項羽の御事は。名大將にてわたらせ給ふにより、一度も不覺なる事は御座なく度々の合戰に打勝つて。御本望を遂し給ひたるとは申せども、御運の末の悲しさは。如何なる事にや。項羽の兵皆心變りして高祖につき奉り。あまつさへ項羽を散々に攻め奉れば、殘る勢も大方討たれ。詮方なき樣體にて御座ありたると申す。然れども垓下の軍迄は、騎從の武者八百餘人御座ありしかども。次第々々に打ちちらされ。この烏江にては漸く二十八騎にならせ給ひたると承りて候、御運つきぬれば奇特なる事にて候ひけるぞ。望雲騅と申して。一足に千里を馳くる名馬の御座ありしに。是も膝折れ一足も行かず。黄なる涙を流し嘶くばかりにて御座ありたると申す。又虞氏と申して寵愛の后のわたらせ給ひけるが。項羽の御有樣を御覽じて。如何なりゆき給ふべきと御泪にむせび。前後も知らず伏し給ふ。又項羽は虞氏の御嘆きの色を御覽じて。御痛はしく思召され。力山を抜き氣世を覆ひ時利あらず。騅行かずかず。虞。汝を如何せんと悲しみ給ふ。互ひの御心の末。哀れに見えさせ給ひたると承りて候。其時項羽は呂馬童を近付け。蜜に仰せられける樣は。此の上は力なし。急ぎ我が首取つて高祖に奉り。天下に其の名をあげよと仰せありけれども。何が左右なう參り。御首を賜はるべき事は思ひも寄らず。泪を流し御返事もなかりけるに。項羽は思召しきつたる御心中にて候ひけるぞ。我と我が首を掻切つて。終に失せさせ給ひたると申す。扨又虞氏は項羽の御別れ

な悲しみ。此の川に身を投げ空しくなり給ひて候を。昔人哀れに存じ。則ち御死骸を取上げ此の野邊の土中につき籠め申して候へば。其上より何となく草花一本生々仕り候。此の花世に越え美しく候程に。如何なる人も是を見て。この花をば何と申す花ぞと不審をなし申す。中にもこざかしき者の申しけるは。虞氏君の廟所より生ひ出でたる草なれば。是はたゞ美人草よと申す。是こそ尤もなれとて。それよりかの花を美人草と名付け何れも御賞翫なされ。この野邊の名草にて候。最前申す如く。項羽高祖の戰ひ。美人草の謂れ。委しくは存ぜねども。まづ大方承りたる通り。御物語申して候が。さて如何なる仔細により。思ひも寄らざる事をば尋ね給ひて候ぞ。シカ〳〵。へ是は奇特なる事を承り候ものかな。某推量致すに。今の折柄美人草も盛りなれば。古をなつかしく思召され。項羽の御亡心假に舟人となり。閻浮にまみえ給ひたると推量仕りて候間。我等の存ずるは。其方大俗の身なれども。僧にもあらず俗にもあらずと云ふ時は。暫く此の所にて。項羽の御跡を念比に弔ひ。其後家路に御歸りあれかしと存じ候。シカ〳〵。へ重ねて菜の船に乗せ申さうずるにて候。シカ〳〵。へ心得申して候。

高野物狂（かうやものぐるひ）

アヒ　供人

（慈眼視衆生謡くの邊謡打切の間に出る。）へこれは高師の四郎殿に仕へ申す者にて候。此の曉春滿殿いづくともなく失せ給ひて候。四郎殿は觀音堂に御座候間。急いで參り此の由を告げ知らせ申さう。（ト云ひて。後の背かけて）へされぱこそ看經なされて御座候。（讀むなりの語過ぎて。其のまゝ。）へ如何に申し候。今夜春滿殿いづくへやら失せ給ひて候。知らせ申さんため參りて候。シテシカ〳〵。へさん候後を見て候へば。此の御文の御座候間。持ちて參りて候。（ト云うて。文を渡す。）

春日龍神（かすがりゆうじん）　神職の間

アヒ　社人

へこれは春日大明神に仕へ申す社人にて候。今宵あらたかなる御告の御座候。其の仔細は。栂尾の明惠上人入唐渡天を思召し立ち。御暇乞のため御參詣候間。秀行を以て御留めなさるべし。入唐渡天も佛跡を拜まんとの御望なれば。三笠山に五天竺を寫し拜ませ賜うずる間。我等にも上人に逆ひ奉り。御留りあるやうに申せとの御靈夢を蒙りて候間。不審に存じ候ところ。承れば明惠御社參の由申す程に。御目に懸り。御夢相の通り物語り致し。御心底を承らうと存ずる。さればこそ。これに御座候。へ御禮申し候。先づ以て御參詣目出度う候。さてお上人へ申し度き事の候。ワキシカ〳〵。へ今宵大明神より御靈夢を蒙りて候。其の樣體は。お上人入唐渡天思召し立ち。御暇乞に御參詣候が。佛在世の時ならば。御見聞もあるべけれ。今の折から渡天は如何あるべきとの御事にて御座候。渡天なさるべしと思召すも。佛跡を拜まん御望なれば。三笠の山へ五天竺を寫し。摩耶の誕生迦耶の淨土。鷲峯の說法雙林の入滅まで。委しく拜ませ給ひ。御望を御叶へあり。渡天御留めなさるべきとの御告にて候。ワキシカ〳〵。へいかゞ思召し合はさるゝ事の御座候ぞ。へさては昔の通りにて候よ。時風秀行と申し鹿島より飛移り給ひしより以來。大明神に仕へ御申しあると承り候。さてまた春日の御木地を

尋ぬれば。六萬位の釋迦如來にて渡らせ給ふ。さあるに依つて。春日大明神のおはしませば。此の御山靈鷲山にて候間。御留り肝要に存じ候。さて春日四所と申すは。一の宮は武甕槌命にて渡らせ給ふ。常陸國にては鹿島大明神と顯れ給ふ。國土を守り給ふ。二の宮は齋主命。下總にては香取明神と現じ給ふ。三の宮は天ッ兒屋根命。即ち春日大明神と崇め奉り。下界の統領の御神にて。王位を守護し佛法を守り。貴賤男女の願を叶へ給ひ候。さてまた四の宮豐宮姫大神と申すは。忝くも天照大神にて渡らせ給ふ。なんぼう有難き御神にて候。さる間。春日大明神初め鹿島より。伊賀の國名張のおなうと申す所へ飛移り給ひ。それより河內國平岡の庄へ移らせ給ひ。其の後當國安部山へ御移りなされ候ひしが。人皇四十八代。稱德天皇の御宇。神護景雲第二。戊申の年十一月に。此の里へ移らせ給ひ。今に至るまで靈驗あらたかなる御事にて候。へ長物語仕り候うちに。五天竺窮り候やらん。四方の景色が變り候。能く〳〵御拜みなされ候へ。我等もこれにて拜み申さうずるにて候。へ心得申して候。觀世流。亂序無之故に。かくの如く社人の間にすえたなり。

同　末社の間

アヒ　末社

亂序に二出る。

へ是は。春日大明神に仕へ申す末社にて候。只今罷出づる事餘の儀にあらず。栂の尾の明惠上人宮社へ御參詣に就き。思ひ寄らざる事の候。今日御參りは更に餘の仔細にあらず。入唐渡天あるべき御暇乞の爲御參詣候を。明神はよく御存じあつて。明惠御座なくては。よろづ御淋しく御座あらうずると思召し。此度入唐渡天の事。御留めあれと。フシ秀行の神に仰付けられければ。則ち秀行は御神託を蒙り。假に宮人の姿となり。上人に會ひ參らせらるゝ。案の如く今日の御參詣こそ。入唐渡天あるべき御暇乞のためと承り候程に。其時秀行の神。是は存じも寄らぬ事を承り候ものかな。誠に明惠上人と。笠置解脫上人は。並びなき貴僧にてましますにより。當社明神も此の兩人をば。太郎次郎と御賴みなされ。譬へば兩眼左右の手の如く思召し。日本の御祈禱をば。此の兩人に委せ御申しなさるゝ。中にも明惠上人をば。別して貴み給ふ。其の仔細と申すは。笠置の解脫上人。當社へ御參詣ある時は。明神も御言葉を交し給へども。御對面は御座なく候。此の御對面なき謂は。解脫上人は。そと慢心の兆す所あるにより。斯樣の謂れにてありげに候。又明惠上人御社參の時は。當社にも取分け悦び給ひ。御對面にて御言葉を交し給ふ。かゝるが故に人間は申すに及ばず。あの鳥類畜類に至るまでも罷出で。上人を禮し奉る。斯程迄貴み給ふ明惠法師の御身として。朝な夕な當社を敬ひてこそ。神も納受あるべけれ。若し此上に日本を捨て。入唐渡天あるならば。上人の御身は必ず神慮に相背き給ひ。又斯う申す我等迄。神の御惠にも離れ申さうずる間。兎に角に御留まりあれと。懇ろに示し給へば。いや入唐渡天の御志も。更に餘の御望みにあらず。神跡を拜まん爲なるよし。重ねて承り候程に。いや〳〵それは。猶以て上人の御言葉とも覺えぬものかな。それを如何にも申すに。釋迦佛三十成道より。五十年の間世にまします時ならばさもあるべきが。佛はや入滅し給ひてより。其の世は既に二千五百餘年に及ぶと云ふ。まして末世の今の代に。フシ見佛もなし　フシ聞法もなし。今佛法流布の地。不思議の日本において。天臺山を拜まん

と思召す時は。比叡のお山へ御參りなされ。五臺山の御望みあるにおいては。吉野筑波へ御參りあり。金峯山の御望みあるにおいては。何忝くもこの春日のお山を拝し給はずして。とて左様には承るぞ。兎に角に神慮計り難し。只思召し御とゞまりあれと。くれ／＼仰せありければ。上人實にもとや思はれけん。まづ此度入唐渡天の事。思召し留まり給ひて候、斯様に千々に心を碎き給ふな。大明神は明惠法師の心中を哀れに思召して。今夜の内に三笠山に五天竺を移し。大聖釋尊正覺なり給ひてより後。鷲峯において。御說法の有様迄殘らずまの邊り、明惠上人に見せ給うずるとの御事なれば。此の春日の里人は一人も殘らず罷出で。信心を起し。斯様の有難き様體を拜み申し候へ。其の分心得候へ。

同　町積の間

アヒ　末社

〽是は和州春日大明神に仕へ申す。末社の神にて候。さる程に。只今是へ罷り出る事餘の儀にあらず。栂尾明惠上人。入唐渡天あるべきと思召し。御暇乞のため。當社へ御參詣なされ候な。秀行を以て御留めなさるゝ。其の仔細は。明惠上人と笠置の解脱上人。此の兩人は、大明神兩の御眼左右の手の如く思召すにより、片時の間も離れ御申しあるべき事な。いかゞと思召す程に。御内證御かなひあるさりながら。此の兩人の内にても。解脱上人は少し慢心御座あるにより。次郎と頼み。明惠上人は、御心正直にして、慈悲にましますにより。太郎と頼み。直に御詞をかはし給ひ、已に當社へ初參の折節は、奈良坂まで御迎ひに御出でなされ候へば、誠に心なき草木までも枝をたれ。鳥類畜類までも膝を折り羽を垂れて。拜し申す程貴き御方なり。明惠上人御座なくては。大明神いかゞと思召し。色々御留め給へども。只一筋に思召し立つべしとて。ある諸經を御覽ずるに。大唐長安城と。天竺摩掲陀國王舎城との間五萬里となり。先づ此の沙汰明かなりと云ふ事なり。斬く諸經の說もなきに就いて。之を御覽あれば。これ小里の町なり。大里三十六丁の町に積もれば。八千三百三十四里と二十四丁なり。小里ならば。一日に八里餘りに當るべし。小里の千里二十日。小里の萬里二百日。算ふれば五萬一千日の町なり。一年の日數。必らず三百六十日なれば。正月朔日に大唐安城を出で。第三年十月七日には、印度の佛生國に到り着くべし。されども嶮難さぶしき道なれば。さ様にはなるまじく、若し一日に七里程行かば。第四年二月二十日に王城に到るべし、算ふれば一千一百六十日の町なり。又一日五里の餘行かば。第五年むつき十日には、印度の佛生國へ到るべし、算ふれば一千六百三十日の町なり。これ夥しき陸地なりとて、又海路を尋ねて御覽ずれば、十萬里の波濤を經には見えたり。それも風破雑風も恐ろしきが。陸地も山谷嶮曲にして。惡鬼毒蛇を去りがたし。されば古への玄奘三藏、七度まで流沙河にて。しんじやうを奪はるゝとは申せども。終に行間は五萬里の陸地は長安城に着きて。王舎城に到り。大般若の妙油を出し、末世の寶となし給ふ。されば大唐と天竺の間には。五百の流沙七百の葱嶺、鐵門弱水とて。此の四つの難處あり。か様の惡所を明惠上人御越しあるべき事を。大明神痛はしく思召せども。上人片意地にあつて。末世迄も古の玄奘三藏の如くならまほしく思召して。印度の佛生國の靈慕の思ひに忍び難き心をゆるさんがため、内には

三密加持の方便を以て。かんゆしゆきやうの願望を祈り。外には遠近山川のきやう路を感じ。ちが心を悉し。佛跡を拜まんとの念願。大明神その志を哀れと思召し。渡天あり度きとの御事。佛跡を拜まん爲ならば。佛在世の時ならばこそ。御身盆もあるべけれとて。心なしと云ふとも。天臺山は比叡山。五臺山吉野筑波。卽ち春日の御山こそ靈鷲山なれ。山は動ざる形を現じ。釋迦樂地觀と現れ。古今に至りて神道を顯し。里にはへいあんの衢を見せ。人間長久の神道より。崇め奉る靡充てり。さて當社一の宮は武甕槌命。二の宮は齋主の命。三の宮は天ッ兒屋根の命にて。下界の神道の棟梁の御神にておはしますが。人皇四十八代。稱德天皇の御宇。神護景雲二年。十一月九日戊申。此の御山に宮居し給ひ。今に至るまで慈悲を守り。靈驗あらたにおはします御神なり。第四の宮はあいとの御姬。か様の有難き御神の御留めなさるゝ事。偏に上人の御手柄なり。上人渡天を御留りあるに於ては。大明神せんぎやう方便を以て。一夜のうちに。三笠山に五天竺を寫し。摩耶の誕生伽耶の淨土。鷲峯の說法雙林の入滅。靈鷲淨土のしうたんの體。五百人の御弟子八千人の眷屬。諸天善神聽衆の數々まで。佛在世の様體を拜ませ申さうずるとて。秀行を以て留め給ふ。漸う五天竺も寫り候やらん。山河も火地も震動仕る。か様の有難き事を。心を鎭めて御拜み候へ。其の分心得候へ〱。

合甫(かっぽ)

アヒ (前)漁父
(後)鱗の精(二人)

へ斯様に候者は。合甫の浦に住居する漁父にて候。今日は浦に罷出で。釣垂れ申さばやと存ずる。いや何かと申すうち早や浦へ罷り出た。さあらば先づ此處にて釣を致さう。ト云うて。正面へ釣針を投げて。これは魚が喰ふ。もそつと餘所にて釣致さう。ト云うて。針たぐり。また脇正面の方へ投げて。されば こそ魚が懸かつた。大いに針が重い。此處に仕打あるべし。さてもこれは終に見馴れぬ魚が懸かつた。先づこれは何といふ魚ぢや知らぬまで。先づ取りて歸り。古き人に見せ。商はうと存ずる。ワキ呼びかけて。シカ〱。へこれは某が釣り得た魚ぢやに依つて。持つて歸り古き人にも見せ。商はうと存ずる。ワキシカ〱。へいや漁(れふ)師の釣りたる物を。僧に與へたことはなく候。代り賜はらうずるならば參らせ申し候べし。ワキシカ〱。へ心得申して候。先づ急ぎ持つて歸らう。ト云うて樂屋へ這入る。中入過ぎ。亂序にて。シテへ斯様に候者は。合甫の水中に住む鱗の精にて候。唯今罷出ること餘の儀にあらず。目出度き事のあるに依り。これまで罷出た。アドへやれ〱。そなた何としてこれまでお出でやつた。シテへ此の度の目出度いことを知つたか。アドへいや何事も知られども。目出度いと云うた程に。これまで出たことておりやる。シテへ此様な事を知らぬといふ事があるものか。アドへさあらば語つて聞かせよ。シテへ先づ某どもが賴うだ明神は。何と思召してやら類少き美しき魚に化して。乃ち磯近く御遊びなされた。誠に此の明神ほどなる御方なれども。是非もない事ぢや。魚に御心をやつし給へば。はや魚氣にならせられてな。アドへこれは如何なこと。シテへ然るに此所にぎけいといふ人。類ひ稀なる正直人なれば。餘り美しき魚なりとて。不憫に思はれ放されたに依り。御命助かり。恙なく戻らせられたが。何と目出度いことてはないか。アドへやれ〱そ

れは危ない事であつたな。シテ〽其の恩に龍宮の寶珠をも見せ。壽命長恩の守護神に成らせらるゝとあつて。はや其の用意あることぢや。アド〽何れさうなうては叶はぬことぢや。是より謡までのセリフ。アドシテとも。常の如し。謡〽治まる波の浦曲の遊び。〳〵。三段舞。御神の悦び限りなければ。我等が樣なる鱗も現れ出でて諷ひ奏で。是迄なりとて鱗は。〳〵。合甫の水底に入りにけり。

葛城

アヒ　里人

〽是はこの山下に住居する者にて候。此間は怪しからぬ大雪にては候へども。存ずる仔細の候間。明神へ參らばやと存ずる。や。是なる客僧達は。斯程の大雪に少しも先へ御通りなくて。何とて此所には御座候ぞ。シカ〳〵。〽心得申して候。扨お尋ねありたきとは。如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。〽我等もこの邊りには住居仕れども。左樣の御事委しくは存じも致さぬさりながら。客僧達のお尋ねあるを。曾て存ぜぬと申すも如何に候間。我等の承り及びたる通り。御物語申さうずるにて候。語まづ〳〵この葛城山において。一言主の明神と申すは。女體の神にて渡らせ給ひ候。また岩橋の仔細と申すは。昔人皇四十二代。文武天皇の御宇にて御座ありたるげに候。ある時役の優婆塞思召すは。國々遠方より山伏達峯入りある事。誠に難行捨身の行ひなるに。是より大峯へ參り給ふ客僧達の。道の程をさりともといたはり給ひ。この葛城山の峯より吉野の鐘の御嶽の間に。岩橋を掛けて山伏達の通路となし給はんと思召され。所の守護神なれば。まづ葛城一言主の神に此事御相談ありしかば。明神聞召され。是は奇特なる事を思召し立ち給ふものかな。行者の思召す如く。難行の身にて大峰へ廻り給ふ事。誠に痛はしき御事なり。急ぎ岩橋を掛け給ひて尤も然るべう思召すとありければ。頓て御心一つにして。はやそれよりも數多の大石を運び。急ぎ岩橋を渡さんとありし時。葛城の明神行者に仰せられける樣は。この岩橋を夜々渡さんと仰せらるゝ。其の仔細と申すは。先に申す如く葛城の明神は。女體の神にて御座候が。如何なる御事にや御貌見苦しく渡らせ給ふより。其の身の御姿を人にまみえ給ふ事。あまり面はゆう思召され。夜な〳〵出でて渡さんと仰せられしかば。また行者は。いや〳〵斯かる大願を。夜は如何あるべきぞ。兎角晝の内に渡し給はうずるとあり。この夜晝の御問答の内に、又は夜が明け又は夜が明け。終に岩橋が成就仕らず。空しくなりたると承り及びて候。其時行者大きに怒りをなし。斯程迄思召し立ちたる岩橋を。渡しも果てざる事。これ皆明神の御心故なり。兎角葛城の明神にこの思ひを知らしめんと。索の縄をもつて。神の御身を縛め。岩戸の間に封じこめ給ひたるが。一言主の明神は。今に其縄も解けずして。御苦しみの離れやらざる樣に承り及びて候。されば世上に久米路の橋は。中絶えてなどと申傳へたるも。この仔細と承り及びて候。また古歌にも。葛城や。われやは久米の橋作り。あけゆく程は物をこそ思へと。斯樣に詠まれたるも此の謂れにて御座あるげに候。惣じて。神には五衰の苦しみ御座あるなどゝ申すが。殊に葛城の明神は行者の縛めによつて。取分き御苦しみ深からうずる樣に申傳へて候。最前申す如く。この儀においていろ〳〵仔細御座ありとは申せども。まづ我等の承りたる通り。御物語申して候

が。扨お尋ねは如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。〽是は奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに。先達の行法の程を別してたつと見給ひ。五衰三熱の苦しみを免れたう思召し。明神假に人間と現じ。御出でなされ御言葉をも交させ給ひたると推量仕り候。申す迄は御座なけれども。この上は有難き法味をなし給はゞ。重ねて奇特の御座あらうずると存じ候。シカ〳〵。〽左樣に候はゞ。御逗留の内は御見舞申さうずるにて候。シカ〳〵。〽心得申して候。

鐵輪（かなわ）

アヒ　神職

狂言口明に。〽是は貴船の明神に仕へ申す神職にて候。今夜不思議に御靈夢を蒙りて候。都より丑の時詣でする女あり。この女の望を叶へ給はうずる間。某に申せと慥に御託宣を蒙りて候間。急ぎ此事を申さばやと存ずる。や。是に御入り候よ。シテ出て後。〽如何に申し候。丑の時詣でし給ふは。其方の御事にて候か。祈り給ふ事を叶へ參らせうずるとの御事なり。然れば先づ鐵輪の三つ足に火をともし戴き。身には如何にも赤き丹を塗り。赤き衣を着て。怒る心を御持ちあれ。必ず望は思ひの儘にあらうずるとの。我等迄の御託宣にて候間。その御心得あらうずるにて候。シテシカ〳〵。〽いやしかと其方の御事にて候。あら恐ろしや。斯樣に申す内にはや面色かはり。物凄じくなりて候。ありや〳〵。角が生えた。なう恐ろしや〳〵。太夫道行過ぎ。橋掛りにて名宣るもあり。

兼平（かねひら）

アヒ　船頭

〽是は粟津の浦の船頭にて候。今日は某の番にて候間。船を渡さばやと存ずる。や。是なるお僧は。向ひへ越したく思召さば船に乘せ申さう。シカ〳〵。〽やら奇特や。此所の大法にて。人の番に某が船を渡す事もならず。又餘人の番に某が船を渡す事もならぬが。御出家は妄語を信ぜらるゝかと存じ候よ。シカ〳〵。〽扨それは如何樣なる御事にて候ぞ。シカ〳〵。〽これは存じも寄らぬ事を承り候ものかな。さやうなる御事委しくは存ぜず候さりながら。初めて御目にかゝり存ぜぬと申すも如何に候間。我等の承りたる通り。大方御物語申さうずるにて候。語まづ。木曾義仲の御事。又今井の四郎兼平の御最後と申すは。例へば木曾殿平家をば都を追拂ひ。西國の方へ追下し。せいしやうがいにまかせらるゝ間。東國より頼朝は木曾殿都にての狼藉を鎭めん爲。範頼義經を大將として。六萬餘騎を相添へたらせらるゝ。その聞え隱れなければ。木曾殿大きに驚き給ひ。まづ宇治勢田の橋を引いて。宇治の口へは仁科高梨勢田の治郎を先として遣さるゝ。また勢田は大手なればとて。今井四郎兼平をはせ向はせ。寄する敵を待ち給ふ。さる程に源氏六萬餘騎を二手に分けて勢田へは範頼。宇治へは義經を大將にて橋詰に陣を取り給ふ。頃は正月下旬の事なれば。山々の雪も消え。橋は引かるゝ越ゆべき樣もなかりし所に。佐々木の四郎高綱梶原源太景季。の人々を先として。駒を駈入れ川をやす〳〵と越しければ。宇治橋の口左右なう破れ。木曾殿の勢は木幡山伏見醍醐を指して落ちらるゝ。又勢田は稻毛の三郎重成が計として。田上供御の瀬を渡されければ。勢田の陣も破れ申し。木曾殿扨は叶ふまじきと思召され。今

一度兼平に逢ひ參らせたく思召し。勢田を指して御下りなさるゝ。又兼平も今一度木曾殿に御對面申したく思召し。都を指して御上り候か。御緣の深さ、渡らせ給ふにや。大津打出の濱にて逢ひ參らせられ。互の御悅びは限りなく。兼平其處にて卷いたる旗をあげ給へば。又三百餘騎ばかり集り申す。其時兼平仰せらるゝは。とても叶ふべき軍にあらず。此勢にて御最後の合戰あれとて又取つて返し戰ひ申されしに。御運の末の哀しさは。二百餘騎ばかりの勢も或は打たれ或は散々になり申せば。兼平仰せられける樣は。此上は御腹召され候へ是に射殘したる矢の八筋候。是にて防ぎ矢仕らんとて。其間に木曾殿を落し參らせ。かの矢にて敵を八騎迄射落し木曾殿の果て給ひたる由を聞召し。此上は敵を打つも其の甲斐なしとて。兼平も遂に自害ありたると承り候。兼平の御最後の樣體。まづ我等の承りたるは斯くの如くにて候。扨お尋ねは如何樣なる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。ヘ是は存じも寄らぬ事を承り候ものかな。某推量仕るに。木曾の山家より遙々御上りなされたるその御志を。兼平は嬉しく思召され。假に船頭とまみえ船をも渡し給ひたると存じ候間。御下向は急ぎなれども暫く此所に御逗留なされ。木曾殿兼平の御菩提を。念比に御弔ひあれかしと存じ候。シカ〳〵。ヘ御逗留の內は我等の御用も承り候べし。シカ〳〵。ヘ心得申して候。

加茂

アヒ　末社

ヘ斯樣に候者は。當社加茂明神に仕へ申す末社にて候。唯今罷出づること餘の儀にあらず。播磨國室の明神の神職の人。初めて此所へ御參詣の御事にて候。然れども誰あつて罷出で當社のめでたき謂れを。御物語申すべき者も御座なくと思召し。忝くも明神は假に里人の姿と御身を現じ御出でなされ。當社の謂れ念比に御物語なされて候。誠に珍しからざる申し事なれども。當社明神に於いては神祕さま〴〵御座ある御事にて候、それを如何にと申すに。昔この加茂の里に。秦の氏女と申して御座候ひしが。此の人は神を敬ひ。朝暮河邊に出でゝ。水を掬ひ神に手向け給ふ。或時水上より。白羽の矢一筋流れ來り。かの水桶の中にとどまり候を。たゞ何心もなく我家に取りて歸り。庵の軒に差し置き給へば。かの秦の氏女程なく懷姙の身となり給ひ、其月にもなり候へば。玉を延べたる如くなる男子を一人儲け給ふ。奇特なる事と思ひ給へども。美しき男の子の事なれば。悅ひに限りなくいつき傳き育てもてゆき給ふ程に。月日積つて此の子三歲と申しゝ時。友達語らひし。あなた此方步き申され候に。中にもまた心の媚びたる幼い者あつて。かの三歲の子に向ひ云ふやう。御身の父は誰人ぞ何處にましますぞと問ひければ。其時白羽の矢に指をさし敎ふる。其時白羽の矢則ち鳴る雷となつて天に上り給ふ。別雷の神と申すは是なり。然れば秦の氏女と申すも人間になし唯人ならねばとて。加茂三所の神所と祝ひ有難き仔細樣々御座ある御事にて候。かるが故に當社明神の御事は。我朝にても靈神なれば。王城の鎭守と祝はれ。御威光めでたき御事は。なか〳〵申すも愚かなる御事にて候。や。是は明神のめでたき謂れ。かの室の明神の神職初めての御參詣なれば。我等如きの末社にも罷出で。御禮申せとの御事により是迄罷出でた。急ぎ參り御禮申さばやと存ずる。ヘ是は當社明神の末社にて候。此度の御參詣先づもつて目出度う存ず

ろ。さあれば我等如きの末社にも罷出で。御禮を申し又何にても一曲仕り。お慰め申せとの御事により。是迄罷出でゝ御座るが。なにぞ一曲仕らうか。北後白髭同斷。

邯鄲

アヒ 盧仙翁

狂言口明。枕を持つて。 〽是は。邯鄲の里に住居する盧仙翁と申す者にて候。妾は邯鄲の枕と申して。奇特なる枕を持ちて候。是は一年とある旅人に。お宿を參らせて候が。この御方は仙の法とやらんを行ひたる御方にて候が。お宿を參らせたる報恩に。この枕を賜りて候。この枕を召され。一睡まどろみ給へば。こし方行末の事をしろしめさるゝ枕にて候間。左樣の御望みの方は。御方へ申し候へ。其分心得候へ〳〵。ト云ひ。枕を臺に直して。 〽皆々承り候へ。旅人のお着ならば。此方へ申し候へや。間座下に居る。シテシカ〳〵。〽案内とは誰にて渡り候ぞ。や。旅人のお著にて候。まづ斯う御通り候へ。床几を太夫にあてる。扨これは何國より何方へ御通りなさるゝ旅人にて候ぞ。シテシカ〳〵。〽扨それは何の爲羊飛山へ御出でなされ候ぞ。シカ〳〵。〽近頃奇特なる御事にて候。妾は邯鄲の枕と申して。奇特なる枕を持ちて候。この枕を召され一睡まどろみ。御望みの事をも。しろしめされかしと存ずる。シカ〳〵。〽あれなる大床にある枕にて候。其の間に粟の飯を拵へて參らせうずるにて候。ト云うて間座下に居る。花咲きけり面白や。の謡の時。立つて太夫枕許にて。〽あら久しとお休み候や。粟の飯が出來て候。とう〳〵おひるなれ候へや。

咸陽宮

アヒ 官人

〽これは秦の始皇帝に仕へ申す官人にて候。此の君賢王にましますに依り。吹く風枝を鳴らさず。民戸さゝぬ目出度き御代にて御座候。然りとは申せども。隣國より此の國を窺ふ仔細あり。燕の國の指圖。竝に樊奕が頭を取つて參内仕る者あるならば。勳功は望みたるべきとの御事にて。國境に高札を打ち申せとの御事にて候間。皆々その分心得候へ〳〵。口明にて太鼓座下に居る。ワキ案内乞ふ。シカ〳〵。 〽案内とは誰にて渡り候ぞ。シカ〳〵。〽何と承り候。燕の國の傍に荊軻秦舞陽と申す兩人にて候が。燕の國の指圖。樊奕が頭を持ちて。御參内ありたるとの御事にて候か。シカ〳〵。〽近頃目出度う候。其の由申上げう。暫くそれに御待ち候へ。いかに申上候。燕の國の傍に。荊軻秦舞陽と申す兩人の民にて候が。高札に任せ。燕の國の指圖竝に樊奕が頭を持ちて參内仕りたる由申し候。シカ〳〵。〽畏まつて候。最前の人の渡り候か。シカ〳〵。〽近頃目出度う候。頓て御參内あれとの御事にて候。〽また大法に候間。御劍を預かり申さうずるにて候。シカ〳〵。〽慥に預かり申し候。シカ〳〵。〽さん候これより三里登つて。また十八町廻れば。則ち内裏にて。玉殿の見え申し候間。急ぎ御參内あらうずるにて候。大臣より劍預り候へと申附くる事あり。太鼓座に居る。切戸より入る。

【き】

菊慈童

アヒ 官人

口明。〽これは魏の文帝に仕へ申す官人にて

候。此の君賢王にましますに依り。吹く風枝を鳴らさず民戸ざしをせず。誠に目出度き御代なれば。天人も天降り。仙人も山より出で。參内仕る中にも。彭祖と申す仙人。參内申す處に。汝は如何なる者ぞとお尋ねなされ候へば。彭祖答へて申すやう。我れはこれ周の穆王に仕へ奉りし慈童と申せし者なり。人の嫉みにより。故なきことに酈縣山へ流罪せられし者なるが。我れ七百歳を保ち申す。其の仔細は。穆王には二十一の駒に召され。天竺靈鷲山に到り給ひ。佛より直に普門品の二句の偈を授かり給ひ。毎日行じ給ひ候。此の二句の偈と申すは。壽命長穩に榮え給ひしなり。我等も古へ王意に叶ひし印に。君御形見の仔細あつて。毎日普門品の二句の偈を。菊の葉に書附け唱へ候へば。いつとなく七百歳を保ち候なり。其の菊の葉を。酈縣山の川へ捨てしに。其の菊水。南陽縣といふ處に流れ出るを服すれば。壽命を永く保つ由奏聞す。君も奇特に思召し。南陽縣へ行幸ありて。其の菊水を聞し召し。御壽命永く御保ちなさるるとの御事にて候。漸う南陽縣へ行幸なさるゝ程に。皆々殘らず供奉し給へ、との御事なり。其の分心得候へ〳〵。口明なしにも相濟む。

木曾（きそ）

アヒ　家來

〽か樣に候者は。今井の四郎兼平の御内に仕へ申す者にて候。さても此の程。木曾殿賴朝より御仰せを蒙り。其の勢五萬餘騎にて都へ御上り候間。先づ賴み奉りたる今井四郎殿。先陣を御沙汰候へとて。當山礪並山に御陣を召され候。今日木曾殿。何方をも御覽なされうずるとの御事にて候間。其分心得候へ〳〵。〽御前に候。〽誰と申しても覺明ならではあるまじく候間。覺明を呼出して御書かせあらうずるにて候。〽畏まつて候。いかに覺明。急ぎ御出で有り。願書を認め木曾殿へ參らせられ候へ。何とよい事を。覺明願書を認め候へ。

同

シカ〳〵。〽里人とお尋れは。誰にて渡り候ぞ。〽さん候正八幡を勸請申して候故。今は八幡とも申し。又在所を羽生と申すにより。羽生八幡とも申し候。〽御用の事御座候はゞ。重

れて參り候べし。〽心得申して候。

砧（きぬた）

アヒ　家來

シカ〳〵。〽夕霧を御下しあるべきこと御尤もに候。〽畏まつて候。夕霧樂屋より出で。〽いかに申し候。御召しに候間急いで御參り候へ。〽夕霧參られて候。〽何といふぞ。北の御方は空しく成り給ひたると申すか。それは誠か。さても〳〵。傷はしき御事かな。賴うだる御方永々在京にて候程に。待ち兼ねなされたること道理にて候。今日御下りなさるゝなど申して。一日々々相延び唯今御下り候。北の御方空しく成り給ふこと。さぞ御殘り多く思召さうずると存じ候。〽先づ此の由申し上げ候。北の御方空しく成り給ひたると申し候。シカ〳〵。〽なか〳〵のこと。

同

アヒ　家來

〽是は蘆屋の何某に仕へ申す者にて候。扨

も賴みたる御方。御訴訟の仔細にて。都へ御上りなされ。假初ながら三年に罷成り候間。餘り故郷の事御懷しく。御下りなされ度く思召せども。迚もの事に訴訟叶ひたる上にて。御下り有るべきとて。夕霧と申す女房を。先達て御下しなされ。今年の暮程には。必ず御下り有るべきとの御事にて候へば。此の御方御悦びにて御座候。誠に。三年まで御逗留の御事なれば。都の御事を思ひ忘るゝ隙もなければ。せめての御慰みにとて。里にて賤女の砧ふ砧を御打ちあつて。明かし暮させ給ひ候。夕霧も共に砧を打ち御心いさめ申され候。然る處に。また此の暮にも御下り有るまじき由申參り候へば。女性の御身のはかなさは。さては御心も變り。御下向なきと思召し。早や御心も空になり。うつゝなき事のみ仰せられ。終に空しく成り給ひて候。御心中の程痛はしく存じ候。尤も御內の者は申すに及ばず。聞く人每に落涙申さぬはなく候。さるに依つて。蘆屋殿も此の由を御覽じ。早々御下りあり。御歎きは限りなく候へども。歸らぬのみなれば是非に及ばせ給はず。せめては仵に御かけなされ。其後法華經にて御弔ひあるべきとの御事にて候。所の者共も御弔ひにあひ候へ。其分心得候へ／＼。さらば相觸れ申したる由申上げばやと存ずる。いかに申上げ候。仰附けらるゝ通り相觸れ申して候。

同

アヒ　家來

中入過ぎて。シテ柱の先にて云ふ。〽扨も／＼。痛はしき御事かな。誠に夫婦恩愛の仲。淺からざる御事なれば。北の御方待侘び給ふ御事。實に尤もと存ずる。我等も共に落涙仕り候。又賴み奉る蘆屋殿は。唯かりそめに御在京と仰せられ候程に。けふは御歸りか。翌日は御下りかと。待ち侘び給ふ所に。はや三年に成り申して候。又蘆屋殿も故鄕の御事心元なく思召し。夕霧と申す女を御下しあつて。當暮に御下りなさるべく候間。此の暮には必らず御目にかゝり給ふずると。終に仰せ越され候を。北の方御嬉しく思召され候。又淋しき徒然には。賤女の手馴れ申す砧を御打ちあつて。芦屋殿の御下向を待侘び給ふ所に。また此頃他鄕の人の噂には。當暮にも御歸りなき由を申す程に。北の方。これは聞こえぬ事と思召し。女の事なれば御疑ひあつて。さては都にて深き御馴染の出で來。妾事は餘所に吹く風と思召し。それより物に狂はせ給ひ。終に空しく成り給ひて候。いや由なき獨り言を申して候。先づ此の由蘆屋殿へ申さばやと存ずる。蘆屋殿幕より ト云うて。下

ト云ひ。樂屋に向いて。〽いかに蘆屋殿へ申し候。

出ると。〽北の御方空しく成り給ひて候。

に居る。太鼓座に引き。シテ出てからに入る。

祇王（ぎわう）

アヒ　家來

ワキと太刀持のワキツレと出る。其後より狂言方本幕にて出で。太鼓座に居る。中入過ぎてワキツレ呼出す。名告座にて。〽御前に候。シカ／＼。〽畏まつて候。〽扨も／＼。移れば變る世の習ひ。今めかしき申し事にて候へども。かの祇王御前と申すは。世に雙びなき御方にて御座候により。平相國淸盛公御寵愛甚しく。晝夜御前を立去らず。誰雙びなき御事なりしに。今度加賀國より佛御前と申す白拍子都に上り。淸盛公に仕へ申さんとて。便を求め。其由申入れさせ給へども。元來相國の御事は。祇王御前を御寵愛の御事なれば。彿御前を召出さるべき御沙

汰なく候程に。佛御前は是を聞召し。本意なく思ひ給ひ。此上は推して參り。何卒見參に入らんと思ひ詰め　佛御前は車に打乘り。西八條殿に參り。色々申上げさせ給ふを。清盛は此由を聞召され。召さゞりし所へ推して參る事。斯かる推參世に稀なり。たとへ神にてもあれ佛にてもあれ。祇王があらん限りは。中々御對面は叶ふまじき由仰出さるゝ。其時祇王は御前にありて申さるゝは。推參は遊女の習ひ。其上年も未だいとけなければ。よし舞は御覽なされずとも。せめて一度は御對面あれかしと。只管申上げさせ給ふ。清盛は聞召され。祇王の志を感じ給ひ。さあらば只一度御對面あるべしとて召されしに。佛御前を一目御覽じて。はや御心移り。祇王を疎み給ふ御氣色にて。兩人連舞を御所望にて候。然れば祇王の御心の中推し量り。我等如きのもの迄も。痛はしく存ずる事にて候。や。是は某が由なき獨言。まづ急いで只今の由申さばやと存ずる。（シテ柱の所へゆき。樂屋へむいて。）へ如何に此内へ申し候　瀬尾殿より仰出だされ候。祇王御前にも佛御前にも。舞の衣裳を御著けなされ候はゞ。急ぎ御出であるべしとの御事にて候。構へて其分心得られ候へや。（ト云うて。間座に居て。シテ及びツレの二人出で。舞臺へ入ると。其儘切戶より入るなり。）

金札

アヒ　末社

（亂序にて出る。）へ斯樣に候者は。伊勢大神宮に仕へ申す末社にて候。只今この處へ罷出る事餘の儀にあらず。我が君賢王にてましますにより。四海の風治まり。天下泰平の御代なれば。この伏見の里に大宮造りあるべしとの御事により。勅使是迄御出でなされて候を。天照大神思召さるゝは。誰やの者か罷出で。伏見の宮居のめでたき仔細。申上ぐべき者もなきと思召され。天津太玉の神に仰せありければ。則ち御出でなされ勅使に逢ひ參らせられ。御宮造りの品々。又伏見の里のめでたき謂れ。懇に御物語なされて候。誠に珍しからざる申し事にて候へども。昔神代の御時。伊弉諾伊弉册の尊。天の岩屋の苔莚に。二神伏して見出し給ふ國なるによつて。この秋津島を伏見とは名附け給ふに。取分けこの在所を日本の名を取つて。伏見と名附けられし事。仔細ありとは申しながら。別して類ひもなき御事にて候。かゝるめでたき所なるによつて。斯樣に大宮造りもあるげに候。又天津太玉の神と申すは。忝くも天照大神此國へ天御孫を降し給ふ時。二人の輔佐の臣を相添へ給ふ。この兩神は豐葦原の中津國を治め。大神宮の左右に御座す。めでたき御神にて御座候により。別しては王位を守り給ふ。さる程に只今爰に奇特の御座候。天より小さき金の札降り申すな。勅使御覽じけるに金色の文字あり。抑も我國は眞如發心の玉垣の内に住めりや。御裳濯川の流絶えず守らん爲に。伏見に住まんと誓をなすと。斯樣に讀上げ給ふ。この仔細と申すは。桓武天皇都を平安城に遷し給ひてより此方。幾久しく國土安全のみぎんなれば。天津太玉の神。猶も王城近くこの伏見の里に移り。金札の宮と現れ。朝廷を守らんとの御誓なるにより。小さき金の札をおつ取って虚空に上り給ふ。斯かる奇特の御座候も。是皆君の御惠み深き故にてあるげに候ぞや。是は大宮造りのめでたき仔細。まづあれへ參り。かの稀人に御禮を申さばやと存ずる。シカ〳〵。へ是は伊勢太神宮に仕へ申す末社にて候。まづ以て大宮造りの御沙汰めでたく存ずる。然れば金札の宮も重ねて姿を現じ申さうずる間。其間に我等如きにも罷出て。御慰みをも仕れ

との御事にて候が。何にても一曲仕らうか仕るまいか。（以下謠も舞も常の如し。）

【く】

國栖　アヒ　追手の者（二人）

（早鼓にて出る。肩拔ぎ。杖つきて。）シテヘやるまいぞ／＼。アドヘやるまいぞ／＼。シテヘ只今まで人影の見えた樣にあつたが。異な事ぢや。アドシカ／＼。ヘや。あれに祖父が居るを見たか。アドシカ／＼。ヘあれが知らぬ事はあるまい。いざ問はう。アドシカ／＼。ヘやい。そこな祖父にもの問はう。此所へ清見原の天皇はわせぬか。太夫シカ／＼。シテヘや。きやつは聾ぢやと見えて。アドシカ／＼。シテヘむさとした事を云ふ。此所へ清見原の天皇はわせぬかといふ事ぢやわいやい。（太夫ツレと謠あつて。）ヘ去なうと去ぬまいと。構うてのやうは。あゝ船うつ向けてあるが不審な。アドヘ誠に異な事がしてある。シテヘいざ探いて見う。アドヘさがせ／＼。シテヘ祖父。その船うつ向けたが不審な。さがいて見う。アドヘさがせ／＼。太夫シカ／＼。シテヘなんの干す船であらうとまゝ。探さいでは。太夫シカ／＼。シテヘはつちやこはもの。アドヘつよい奴ぢや。シテヘ皆おり合うて打留めたらなるまい。たゞ足許の明い時引かしませ。アドヘそれがよからう。シテヘこつちへ來い／＼。アドヘ心得た／＼。（太鼓にてすぐに入る。）

九世戸　アヒ　末社

（亂序にて出る。）ヘ斯樣に候者は。丹波國九世戸文珠に仕へ申す。門守の神にて候。誠に申すまでは御座なけれども。大聖文珠と申すは。天下に隱れなき文珠なり。其の仔細は。天神七代地神五代と申して。年久しき御事なるが。地神二代の御神。忍穗耳命この國へ天降り。末世の衆生濟度の爲め。天竺五台山大聖文珠を勸請あり。九世戸と名づけ給ふ。則ち九世戸と申すも。天神七代地神二代を以て名づけ給ひしとなり。されば菩薩の像體も大聖の御作りなり。されば此の所へ移し御申し候折節も。廣原海の宮に入り給ひ。下界を廣め。此の島に御上りある。其の時御渡りなされたる所を。獅子の渡と申して。今に隱れもなく御座候。されば橋立と申すは。龍宮の姫宮と御約束あり。此の橋立を御作りあるべきとの御事なるに。其の頃神代遠からぬ御事なれば。雲霧虚空に滿ちて。常闇の如くありし程に。神々集まり神火を點し。日夜に成就し奉れば。松ほど目出度きものはあるまじいとて。松を植ゑ置き給ふなり。又あれなる島を火置の島と申すも。其の時火を殘し置かれたる所なるに依り。火置の島と申すなり。猶も神代より廣原海の宮と隔もなく。龍神今に至つて龍燈を捧げ。松の枝に移し給ふ。其の時天人天の燈を。同じく松の枝に並べ。天地とも影向なさるゝ御事なり。さあるに依つて。上は有頂。下は下界の龍宮まで。隱れなき靈地にて候。斯樣のこと人間も能々存じ。國々在々所々より。信仰仕り。參り下向の人々夥しき事なり。忝くも當今に仕へ御申しなさるゝ臣下。唯今これまで御參詣にて候を。誰あつて此の所の樣體申上ぐべき者もあるまじいとて。採桑老人龍宮の姫宮。燈の御姿にて現れ。神代の御事委しく御物語なされ。松の木蔭に入り給ひ。重ねて奇特を御目にかけ成されうずるとの御事なり。其の間に我等も罷出

で。何にても一曲仕り。慰め申せとの御事によりこれまで出でて候。先づ急ぎ御禮を申さうと存ずる。〽これは當所文珠に仕へ申す門守の神にて候。先づ以て此處の御參詣目出度う存じ候。されば我等も罷出で御禮を申し。または御慰めをも仕れとの御事により。これまで罷出でゝ御座るが。何ぞ一曲仕らうずるか仕るまいか。シカ〳〵。舞謡常の如し。

熊坂

アヒ　里人

〽是は。赤坂の宿に住居する者にて候。今日は物淋しく候間。青野が原へ罷出で。心をも慰まばやと存ずる。や。是なるお僧は。此邊りにては見馴れ申さぬが。いづ方よりの御出でにて候ぞ。ワキシカ〳〵。〽中々此邊りの者にて候。シカ〳〵。〽心得申して候。〽扨お尋ねありたきとは。如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。〽是は存じも寄らぬ事を承り候ものかな。此邊りには左樣の者は御座なく候。爰に熊坂の長範と申して。惡逆をなし命を失ひし者御座候間。此の者の仔細御物語申さうずるにて候。語まづ。古へ熊坂の長範と申すは。生國は加賀の國のものにてありたるげに候。然ればかの熊坂の長範。盜みの最初と申すは。ある時伯父の馬を盜み取つて。他郷の市に出て是を賣り。兎角仕るに。少しもその仔細御座なかりしによつて。其時長範存ずる樣は。扨も盜み程面白きものは御座あるまじい。それを如何にと申すに。我が物は少しもいらずして。人の物にて思ひの儘に妻子をはごくみ。身命をも樂々と繼ぐ事。是程面白き事はなく候程に。兎角今よりは。盜迄に心をなし申さうずるとて。それより熊坂の長範と申して。隠れもなき盜人の上手にて御座ありたると承及びて候。其後諸國を修行して。天か下の盜人共を引具し此處彼處にて人の命をとり。或ひは山賊海賊をかけ。多くの惡事を致す事。その天罰と此所にてとゞめ申して候。其の仔細はいにしへ都において。三條の吉次信高と申して。隠れもなき金を商ふ者の候ひしが。年々數の寶を數多の高荷にして。奥州へ下り申す。然ればかの盜人共。國々在々に目付を置き候ひて。互ひに然るべき事を注進仕り候が。かの吉次奥州へ下り申す事を。此所へ注進致し候程に。熊坂をはじめ其外相殘る盜人共。七十餘人この青野が原に出合ひ。かの吉次が寶を奪取り申さうずると。都よりも告げいれ談合仕り候所に。運の盡くる所は。義朝の御子に。牛若殿と申して御座候ひしが。是は鞍馬の寺にて。兵法の祕術を傳はり給ひたるげに候。この牛若殿さる仔細あつて。吉次をたのみ御同心あつて。奥州へ御下りなされ候を。かの盜人共それをばいさゝか存ぜず。其夜にもなりしかば。夜半ばかりの折節。我も〳〵と込み入り申すを。牛若殿は小脇にかまへ。切つて出でられ給ふ程に。殘り少なく切殺し。或ひは重手薄手おひたるもあり。又此處彼處に逃去りたるもあり。誠に物の哀れなる事にて御座ありたるげに候。されども長範は。剛の者にて少し戰ひ申せども。何か牛若殿の事なれば。よきつがひを狙ひ。やす〳〵と長範をしとゞめ給ひたると承及びて候。最前申す如く。熊坂の果てたる仔細。委しくは存ぜず候へども。まづ大方我等の承及びたる通り。御物語申して候が。さて如何やうなる仔細により御尋ねにて候ぞ。シカ〳〵。〽是は奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに。お僧の御心中貴くましますにより。熊坂の幽靈これ迄顯れ出でたると存じ候。此の者は別して。業因も深から

うずると存じ候間。お僧も左様に思召さば。暫く此所に御逗留候ひて。かの者の跡御弔ひあれかしと存じ候。シカ〳〵。へ重ねて御用もあらば承り候べし。シカ〳〵。へ心得申して候。

鞍馬天狗（くらまてんぐ）

アヒ　天狗

乱序にて出る。　へこれは。鞍馬天狗に仕へ申す木の葉天狗にて候。何と某を木の葉天狗と申すぞなれば。山をも峯をも。風に木の葉の散る如く。自由自在に飛行する故に。木の葉天狗と申し候。さる程に。唯今罷出ること餘の儀にあらず。當坊に於て。東光坊の阿闍梨蓮仁の弟子に。善林坊覺寳と申して貴僧あり。また爰に牛若殿と申す御方。御父のため鞍馬の山に登り。彼の善林坊の庵室に御座候が。此の牛若殿と申すは。義朝の御子。常盤腹にては三男にて渡らせ給ふ。御登山あつて後。源氏の棟梁にてましませばとて。毘沙門の沙の字を一字預かり。御名を沙那王殿と名づけ申されて候。未だ若年に渡らせ給へども。學問にのみ心を染め。他事なきとは申せども。爰に一つの御望みあり。それを如何なる事ぞと申すに。あつばれ平家を切り平げ。源氏一統の世となし申さるべきと。晝夜朝暮に隙なく思召されるを。大天狗は此の志を感じ。兵法の秘術を傳へ。平家を討たせ申さんと存ぜられ。先づ沙那王殿に近附き申すべしと思はるゝ所に。折節當山にまします兒たち。沙那王殿にも御出でにて。花を眺め御酒宴の始まりしところ。大天狗は之を慕ひ参り。彼の御座敷まで伺候(しこう)申さるゝ。一山の稚並み居て。安藝守清盛が子供なんどを賞翫致し。沙那王殿には誰一人。目に懸け申す者もなく。剰へ他山の花を見んためか。沙那王殿一人捨て置き。平家の兒たちを連れて。皆々退出仕りて候程に。大天狗は之を見て。愈々御傷はしく思ひ。通力を以て沙那王殿を伴ひ。此の間に名所々々の花をも御目に懸け。慰め給ひて候。此の上は兵法の一大事を殘らず傳へ。平家を討たせ申さうずるとて。はや色々の奥儀を傳へ申上げられて候。また六日も。僧正が谷にて御口傳あるべき事の候間。然れば稽古のため。我等如きの小天狗にも罷出で。打太刀も仕れとの御事にて候程に。小天狗を呼出し申さばやと存ずる。セリフ。へ如何に大天狗聞召され候へ。唯今小天狗ども集まり。沙那王殿と色々様々に太刀を合はせ申せども。中々眷族の中に一人も成り申さず候。沙那王殿は早や僧正ヶ谷へ御出でなされ候間。大天狗も早々御出であれ。構へて其の分心得候へ〳〵。

同　能力の方

アヒ　能力

太夫名宣過ぎて出る。　へ斯様に候者は。鞍馬西谷僧正に仕へ申す能力にて候。當山の花今を盛りなれば。唯今お文を持ち。東谷へ迎ひに参る。小まはり楽屋向いて。へいかに急ぎ参らばやと存ずる。ワキ出る。へ西谷より御使に参じて候。これにお文の御座候。ト云うて。ワキに渡し。太鼓座に居る。いざ〳〵　花を詠めんといふ謡過ぎて出る。へさても〳〵。毎年とは申しながら。當年ほど面白う咲いた花は御座あるまい。へいかに申上げ候。毎年とは申しながら。當年ほど面白い花は御座あるまいと存ずるが。皆々には何と思召され候ぞ。ワキシカ〳〵。へ畏まつて候。小まはりして。へ爰に大きな炭頭がある。炭頭かと思うたれば山伏ぢや。言語道斷。似合はぬ者が來た。へいか

に申上げ候。此の御酒宴の座敷へ。いづくとも知らぬ山伏が參つた。狼藉者にて御座る。急ぎ追立て申さう。シカ〱。へいや〱。御意なれどもそれは苦しからぬ。たゞ追立て申さう。シカ〱。へやれ〱腹の立つことぢや。皆々花を眺めて。しみ〲と御酒宴なさるゝ所を。異な者が來て。御座敷を打ち醒まいた。さて〱苦々しいことかな。身共が儘ならば。これ〱を二十餘り戴かせうものを。

同　太刀打仕合の方

アヒ　天狗（二人）

へ參會仕るまじきとの申し事にて候。ト云ふうちに。小天狗出る。アドへさあ〱おりやれ。シテへいや何故そち衆は遲かつたぞ。某は早々出たに。拔かつた事ぢや。さて沙那王殿打太刀がならうか。アドへなか〱。仕附けて見せうと思ふは。シテへいや。そちは何時でも手柄立をいふが。アドへ何とも思はぬ。うぬし相手にならうか。シテへいざ稽古のためでもある。して見うぞ。ト云うて。竹の杖にて叩く。叩き樣口傳あり。シテへそれ見よ。其の樣な拔かつた事で打太刀がなるものか。アドへまた使うて下を拂うてある。シテへいやそれはいかうむさとした事ぢや。アドへ其の樣にいはゞ。とつとと去なうまでよ。ト云うて入るなり。シテへやい待て〱。いや歸つたか。あれなりとも置かうものを。某一人しては打太刀はなるまい。去りながら。これへ出た印に沙那王殿呼出さう。樂屋向いて。へいかに沙那王殿〱。ト呼び出すなり。

車僧

アヒ　天狗

亂序にて出る。へ斯樣に候者は。愛宕山太郎坊へ仕へ申す溝越え天狗にて候。只今罷出る事餘の儀にあらず。爰に車僧と申して貴き人の御座候。此の人いにしへは高位の人なれども。妻におくれ悲しみの餘り。髻切り遁世して。其の名を車僧と申す。されば此の人を車僧と申す仔細は。更に珍しき謂れにてもなく。車に好いて乘り給ふ故なり。なんぼう不思議なる事にて候ひけるぞ。この車を牛も引かず。まして人も引かぬに。拂子を一つふれば。山をも峯をも海川の隔てもなく。飛行自在に車に乘つて虛空を走る人なり。かゝる奇特の人體なれば。我慢の心暫くも止む事なし。然れば賴み奉る太郎坊は。此の人の增上慢なる氣のさす所を。是非佛法を妨げ。魔道に引入れうずると存ぜられ。眷屬の天狗を集め談合ありしに。まづ兎角太郎坊にすびき御覽じて然るべきとの御事なり。折節今日はかの車僧遊覽として。嵯峨野のほとりへ出られけるを。幸ひと思ひ。太郎坊には罷出て。かの車僧に向ひ。頓て歌悟則と云ふ物をもつてかけらるゝ。浮世をば。何とかめぐる車僧。まだ輪の中にありとこそ見れと。斯樣にかけられける。我等如きの存ずるは。定めて是は車の輪の事にてあらうずると存ずれば。中々左樣にてはなく。たとへば禪法の上において。本來面目の渡。たそのわ。柏樹萬法の話とて。一千七百則の古則あり。車僧は其の古則話頭の。わの內に。留まり給ふと云ひ給へば。さすが車僧も易からぬ人なれば。頓て答へて曰く。浮世をば。めぐらぬものを車僧。のりもうるべき輪かあらばこそと。斯樣に返答し給ふ。是も車の輪の事にてはなく。古則話頭の輪の內に。とゞまらぬと云ふ所を。車の輪によそへて答へ給ふ。たとへば過去現在未來。三世不可得とて。三世にとゞまらず。見性すれば悅びもなく。又憂ひもなし。空々寂々

に。留る者もなければ。慢心の心もなき所をもつて。のりも得るべき輪があらればこそと答へ給ふ。太郎坊是を聞いて。兎角こは者なりさりながら。斯程迄思ひ立つて我が道に引入れずば。無念なる事と思ひながら罷歸られて候。然れば。我等如き小天狗にも罷出で。車僧の目前にて。何事に就けても。をかしき事を申し仕り。かの人を笑はせよ。少しなりとも笑はされたにおいては。その散る心を便りにして。魔道へ引入れうずるとの御事にて候間。まづ是迄罷出でた。急ぎあれへ參り。車僧の樣體を見申さばやと存ずる。扨かの車僧はどこもとに居らるゝ事ぢやまで。さればこそあれにつゝくりとして居らるゝ。頓て言葉を掛けうと存ずる。なう／＼車僧／＼。是は如何な事。きやつはつんぼさうな。つんぼならば最前の樣に問答はせまい事ぢやが。何とぞしてちと笑はせて見よう。ト云うて傍へ行く。是よりノル。太鼓アシラヒ。順逆に廻る。口傳 へ車僧。車僧。車僧。車僧を笑はせう。車僧／＼。お笑ひやれ車僧。車僧の鼻の先を。鼠が子を負うてあなたへはちよろ／＼。此方へはちよろ／＼。ちよろ／＼やちよろ／＼。おわらや車僧。お笑や車僧。ト飛ぶ事三度。鹿の角を蜂が螫いた程にもない。何とせうぞ。惣じて人間の身は。こそぐる程なかしい事はないと申す。是からちとこそぐつて笑はせう。スノル。前の通り。車僧を笑はせう。こそぐらうぞ車僧。くつ／＼やくつ／＼。ばくつ／＼やくつ／＼。お笑やれ車僧。お笑やれ車僧。ばくつ／＼。ト云うて左手をあてる。ワキ扇にて打つ。へあいた／＼。扨々恐ろしい人かな。今の程いろ／＼の事を仕れども。終につともせぬ。あまつさへ拂子を以て某を打擲した。是も定めて禪法でがなあらう。兎角禪法は痛いものと見えた。中々某が分ではなるまい。急ぎ此の由太郎坊に申聞かせばやと存ずる。如何に小天狗共慥に聞け。某かの僧に向ひ。色々樣々に興を盡せども。少しも笑ふべき氣色も見えず。其上車僧の法力の強き事。中々千頭の牛の力も及ぶまじきと存じ候間。如何にも然るべき分別をめぐらし。急ぎ太郎坊に御出であれと申候へ。其分心得候へ／＼。

呉服

アヒ　里人

ワキ呼出す。へ里人とお尋ねは。誰にて渡り候ぞ。シカ／＼。へ心得申して候。シカ／＼。へ中々。此所の者にて候が。如何やうなる御用にて御座候ぞ。シカ／＼。へ是は存じも寄らぬ事を承り候ものかな。我等もこの浦里に住居仕れども。左樣の御事委しくは存じも致さず候さり乍ら。初めて御下向なされお尋ねあるを。何をも存ぜぬと申すも如何に候間。大方承り及びたる通り申上げうずるにて候。シカ／＼。へまづ。神功皇后新羅高麗百濟。三韓を切り隨へ給ひ。今の世に至る迄。異國日の本の隔もなく。天下一統に治りたるも斯くと承りて候。さる程に呉織穴織と申すは。呉の國の人にて候ひしが。人皇十六代應神天皇の御宇にて御座ありげに候。此の古賢王にましませば。國土治り民安全にして。四海の外迄も御心に叶はざる事は御座なかりしによつて。我が朝の事は申すに及ばず。高麗唐土迄も。靡き隨ふ折なれば。四季折々の御調物を我が君に供へ給ふ。然れども遠萬十里の道なれば。御衣の御調物に少しも渡絶ありては如何あるべきぞ。所詮雙びなき織姫を我が朝に渡し。此方にて御衣を織らせ我が君に供へ給はうずるとて。同應神天皇三十七年に。異國よりも此の國への勅使にて織姫を渡さるゝ。初めは和泉の國吹井の里に船を着け。あれにて御衣

を織り部へ供へ給ひけれども。猶も程遠きとあつて。其の後は此の里に來り。初めて山鳩色の御衣を織り。袞龍の紋を現し。帝に供へ奉り。叡慮斜ならず。今の世に至る迄も。山鳩色の御衣と申すも此の時よりと承り及びて候。また呉服と申す仔細は。かの織姫のこなたかなたへ糸を取渡す木を。くれはと申すにより。呉羽取る手によそへ。くれはと名付け給ふ。また今一人をあやはとりと申すは。色々美しき綾錦の紋をつけ。奇特なるたくみをなし申せばとて。綾羽取りと名付けられ。御服の文字を和げて。二人の名に現さるゝ事。誠に類少なき御事にて。御座あるなどゝ申傳へて候。さればこの在所を呉服の里と申す事も。二人の織姫住み給ふにより。呉服の里と申しならはし。かたの如くも名所にてあるげに候。これは上代の御事。今また末の代に至りても。奇特は御座候ひけるぞ。めでたき折柄には此の松原にあたつて。織物の音の聞え申すを承りたる人もあるなどゝは申せども。某などは慥しからず存じ候。最前申す如く。委しき仔細は存ぜず候。まづ我等の承り及びたるはこの如きわけにて御座候が。扨お尋れは如何やうなる御事にて候ぞ。シカ〳〵。ヘ是は奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに。大臣殿初めて當浦へ御下向と申し。殊に今また天下治りめでたき折なれば。二人の織姫は假に姿をまみえ給ひ。御言葉を交させ給ひたると存じ候間。御上洛は御急ぎなれども。此の所に御逗留なされ。重ねて奇特を御覽ぜられかしと存じ候。シカ〳〵。ヘ重ねて御用を承らうずるにて候。シカ〳〵。ヘ心得申して候。

同　末社の間

アヒ　末社

ヘ斯樣に候者は。攝州住吉大明神に仕へ申す末社の神にて候。誠に珍らしからざる申し事にて候へども。我が國は何ぼう目出度き國にて候。然るに應神天皇の御宇呉國より綾を織る女四人。我が朝へ渡られ候。其の名は則ち呉服綾服。綾女糸女と申し候。來朝の節は。和泉の國深井の里に着船あり。それにて御衣を織り。帝に捧げ給ひしが。其の後津の國呉服の里へ移り給ひ。則ち呉服に住み給ふにより。所の名に呼び。また綾服は丹州へ移り給ふと申す。これは昔の御事。さて唯今當今に仕へ御申しある臣下殿。住吉大明神へ御參詣ありしが。また西宮へも御參詣あるべきとて。浦傳ひに御出であり。呉服の里に御着きありし處に。古への二人の織姫御姿を現し。その上御衣を織り給ひし體にて。臣下殿に御詞をかはされ。目出度き仔細御物語ありしが。重ねて御奇特を見せ申さうと思召すとの御事にて候。此の事住吉大明神御存じあつて。その間御待遠に御座あらうずる程に。此の末社に參り。何ぞ一曲仕り御慰め申せとの御事ゆゑに。唯今呉服の里へ急ぎ候。誠に。斯樣の奇特は樣々御座あるも。君は堯舜の德に等しく。臣は周公孔子の如くにして。政道に少しも私ましまさぬ故なり。何ぼう目出度き御代にて候ぞや。獨り言申すうち。神道を得て呉服の里に着いた。彼の臣下殿はどれに御座るぞや。これに御座候。先づ御禮申さうと存ずる。ヘ御禮申し候。これは攝州住吉明神に仕へ申す末社の神にて候。誠に此の御代目出度ければ。最前いにしへの呉服綾服現れ出でて。御詞をかはされ。重ねて奇特を見せ賜はらうずるとの御事。其の間に我等如きの末社に參り。何にても一曲御慰め申せとの大明神の神勅にて。これまで參り候が。何ぞ一

曲仕らうか。常の如し。三段舞。切謡常の如し。

皇帝（くわうてい）

アヒ　官人

ロ明　〽これは。玄宗皇帝に仕へ申す官人にて候。吹く風枝を鳴さず。民とざしをせぬ。めでたき御代にて御座候。殊に賢王にて御座候により。何事につけても思召す儘の折柄にて御座候へどもさり乍ら。こゝに楊貴妃と申して双びなき御寵愛の后の御入り候が。以ての外風の心地にわたらせ給ひ候を。君御心許なく思召され。今日楊貴妃の御殿に御幸あつて。かの様體を叡覧あるべきとの御事にて候間。月卿雲客官人仕丁に至る迄。皆々其分心得候へ〳〵。

花月（くわげつ）

アヒ　門前の者

ワキ呼出す。〽門前の者とお尋ねは誰にて渡り候ぞ。シカ〳〵。〽此所において別に面白き事は御座なく候。爰に自然居士の御弟子に。花月と申して。一段と面白き御方の御座候間。是を呼出し引合せ申さうずるにて候。ワキシカ〳〵。〽さらば斯う御通り候へ。楽屋へむいて。〽如何に花月へ申し候。漸うろもの時分にて候間。急ぎ御出で候へや。シテ出て。天下に隠れもなき花月とは我を申す也。ト云ふ謡過ぎて。〽如何に花月へ申し候。我等の小歌を一ふし申さうずる間。花月も共に御諷ひあらうずるにて候。越し方より。あら不思議や。花に目がある。や。目かと思うたれば。鶯ぢや。やれ〳〵惜い事かな。如何に花月へ申し候。是なる花に鶯の來て散し申す。餘り惜い事にて候。幸ひ持たせられたお弓で。あの鶯を遊ばされ候へ。佛の戒め給ふ殺生戒を破るまじ。の謡の後にて〽尤も某誤り申して候。いつもの如く地主の曲舞を謡うて御心を慰まれ候へ。ト云うて大小の前に居る。曲舞過ぎて。別れし父御にて候か。ト云ふ時。〽扨々其方（そなた）は聊爾な事をおしやる。出家の子を持つといふことがあるものか。ワキシカ〳〵。〽尤もおしやればさうありさうな事ぢや。誠に瓜を二つに割つた様な顔ぢや。如何に花月へ申し候。斯かるめでたい事は御座あるまい。此の上は羯鼓打つて父御を御慰めあらうずるにて候。扨々斯様のめでたい事は御座あるまい。是と申すも當寺觀世音の御利生あらたかなる故。又恩愛の契浅からぬ故。かた〳〵以て當寺の御引合せと存ずる事にて候。ワキシカ〳〵。〽尤もにて候。如何に花月へ申し候。急ぎ御出であつて羯鼓を遊ばされ候へや。羯鼓のうち切戸より入る。

【け】

現在七面（げんざいしちめん）

アヒ　里人

〽桑原〳〵。扶け給へ。佛所護念の南無妙法蓮華經。除憂衰患の妙法蓮華經。諸天衞護の妙法蓮華經〳〵。さても〳〵凄じいことかな。今のさき何であつた。怪しからぬ鳴り様であつた。これは如何なこと。妙法蓮華經と唱ふろうちに晴天になつた。さても〳〵有難いことかな。先づ上人の御庵室へ見舞はうと存ずる。〽如何に申上げ候。今日の鳴神につき。妙法蓮華經の御利益眼前に御座候。御庵室を如何と案じ。これまで御見舞申上候。先づ何事も御座なく入悦申し候。シカ〳〵。〽これは思ひも寄らぬ事を承り候ものかな。七面の嶽と申すは。これより西に當り。春氣（はるき）川の水上にて候。此の所は神靈の地と申して。我等如きの者恐れをなし。參りたる事も御座な

きにより。委しき事は存ぜず候へども。古き人々の語り傳へしは。此の山は金輪際より涌出して。黄金の所成とかや。頭上には池あり。八功徳水を澄まし。五色の雲たなびき。誠に有難き靈地なる由承りて候。さるほどに。此の山大昔は四方四面は八方より道ありしを。鬼門の一方を閉ぢて。七口を開けたりし故に。七面と申す由承りて候。此の頭上の池水に。心を澄まし果せる主あり。此の主は天女にて御座候。此の天女の本地。色々樣々の誓ひ。有難き事ども御座ありし由承りて候へども。委しき事は存ぜず候。先づ七面の嶽の謂れは。あら〳〵御物語申上げて候が。何とてお尋ねなさるゝ不審に存じ候。シカ〳〵。

〽これは奇特なることを承り候ものかな。さては唯今の鳴神は。常々參詣せらるゝ女性の業にて候由。それに就き御女性のことは。山下の人々不審をなし。面々心を附け候へども。何方より參られ。何方へ歸られ候やらん。知れ申さず候と承つて候。某推量仕るに。疑を晴らし。まことの姿を顯し申されんとの御志にて御座あらうすると存じ候間。申すまでは御座なく候へども。いよ〳〵法華經を御讀誦なされ。眞の姿を御覽あれかしと存じ候。さあらば我等もこれにて御題目を唱へ。物蔭より姿を見うずるにて候。シカ〳〵。

〽心得申して候。

現在鵺(げんざいぬえ)

アヒ　家來

早鼓にて出る。

〽斯樣に候者は。源頼政に仕へ申す者にて候。唯今罷出ること餘の儀にあらず。我が君は賢王にましまして。殊には民百姓を憐れみ。情深き帝なるに依つて。人間は申すに及ばず。鳥類畜類に至るまで。御心に隨ふ折柄にて御座候處に。此の頃東三條の森の方より。化生の者が黑雲に乘りて來り。御殿の上に蔽へば。なか〳〵君の御惱頻りにおこらせらるゝ。一大事とあつて。貴僧高僧を請じて。色々御祈禱をなされけれども。少しも其の驗御座なく候ほどに。或る博士を召され。占はせられ候處に。これこそ恐ろしき化生の者の仕業なれ。武士に仰附けられ。此の變化の者を射させられ候はゞ。君の御惱は忽ち御平癒あるべき由申上ぐる。其の時公卿大臣殘らせ給はず御談合あり。源平兩家の兵のうち。何れには仰附けられんと。我も〳〵と詮じ御覽ずるに。源頼政に勝りたる人あるまじきとて。頓て頼政に仰附けらるゝ。頼政承つて申されけるは。さ樣の目に見えぬ化生の者仕りたることなし。さも仕るべき者に仰附けられて然るべしとて。辭退申されければ。その時勅使。頼政が申す所はさる事なれどもさりながら。勅意といひ。其の上弓矢の家にこそ。化生の者を從へたる例(ためし)こそ多けれとあつて。昔の例(たとへ)を引いて仰附けられたれば。頼うだ者も是非に及ばず。また且うは家の面目と思ひ。御請けを申された。扨また爰に一大事を申されて候。若し化生の者を射損うたらば。我が家へ歸るまいと申されたが。時の仕合はせであらうに。要らぬことを申された。かゝる一大事ぢや程に。先づ御供には遠江の國の住人猪の隼太。その外下々は申すに及ばず。御供をするであらうが。化生の者ならば根性が恐ろしい。所で先づこちが樣な弱い者に武者振りつくか。噛附くであらうと思へば。お供は斟酌ぢや。かういふうちに。某が御前に見えぬとなれば。取沙汰が惡い。先づ急いで歸らうかさりながら。また惡う出たらば。供に來いと云はれう。所でこれもまた同心ではないが。何とせうぞ。いや〳〵。先づ歸つ

て頼うだ人の目に見えぬ様に。片隅の人の後に屈んで居ようまでよ。シカ〳〵。〽供に行くは質直なやが。是は夜前な約束したが。大事なくばこれ過ぎてから行き度いものぢやが。やいおい何といふぞ。はい頼うだ人のお出掛けぢやここち衆はお供に連れよせられい。やれ〳〵口惜しや。此の度御供して一期の覺えを取らうと思うたものを。さて〳〵殘り多いことかな。さりながら。是非に及ばぬ皆來い。内の者は來れ。明日賴政殿歸宅の時分は。家來の人々は申すに及ばず。そのほか邊りの面々も。思ひ〳〵に路次まで御迎ひに參られ候へ。其の分心得候へ〳〵。

源氏供養

アヒ　里人

〽是は石山寺の在所の者にて候。今日は觀世音へ參らばやと存ずる。扨も今日はいつよりも大參りにて候よ。やゝ是に見馴れぬ御僧達の御座候。何方よりの御參詣にて候ぞ。ワキシカ〳〵。〽中々石山寺門前の者にて候。シカ〳〵。〽心得申し候。さてお尋ねなされ度きとはいか様なる御用にて御座候ぞ。シカ〳〵。〽是は存じもよらぬ事を御尋ねなさるゝ。左様の御事は上つ方にこそ御沙汰なされ。別してまた源氏の事は。有職大事の御事にて。中々我等如きの賤しき者。存ずる仔細は御座なく候さりながら。お僧初めて御目にかゝり。此の儘打過ぎ候もいかがに候間。筋なき事とに存じ候へども。憚りもなく御物語り申さうずるにて候。語　先づ紫式部と申すは。閑院の左大臣の御六男。良門五代の孫。容の越前守爲時の息女。上東門院の官女にて御座候。又上東門院と申すは。御堂の關白道長公の御嫡女にて。人皇六十六代。一條天皇の御后にて御座候。さて彼の紫式部の才智。和漢の人に越え。和歌道は申すに及ばず。諸用古家の書にも通達し。儒釋の道共にかけたる處もなく。況つ禪錄無門關。碧巖集。天台の三大部。一心三觀の血脈にも入り。誠に觀音の再誕にてましますと申す。又日本書紀。殊には有職も晴からねば。其頃世の人擧つて日本紀の局と申したるげに候。尤も初めは藤式部と申せしが。藤式部の名幽玄ならずを以て。花の色に所縁を得て。紫式部と改められたると申す。また源氏物語は。彼の式部の制作にて御座候。其の仔細は。村上天皇女中の宮に。大齋院選子内親王より。上東門院へ珍しき草紙や侍ると御所望あり。最早宇津保竹取住吉物語等は事ふりたり。珍しき草紙。式部あるやと仰附けられ候により。石山寺に參籠し。祈誓を掛け申さるゝ。頃は寛弘元年八月十五夜。月湖水に映り。御心の澄渡り。折節源氏物語の風情空に浮かみ候間。佛前にありし大般若の料紙を本尊に申請け。先づ須磨明石の兩卷を。著し御申しなさるゝ。仍つて須磨の卷に。今宵は八月十五夜なりけりと書きたると申候。右物語は。寛弘の初めより康和の末まで凡そ延喜帝朱雀村上御三代に。御翫び候ひて。寔に代盛に翫び申す事は。俊成定家卿の頃ほひの事にて御座あるげに候。されば此の物語の大意を尋ね申すに。先づ君臣父子。夫婦朋友の道をいさめ。莊子の寓言を寫し。文法は史記に基き。源氏六十帖は天台六十卷に表し。紙數三千帖は。一念三千の法門をたて。般若の四十七字を出さして三寶の法を備へ。世の盛衰有爲轉變の理を述べ。煩惱卽菩提。生死卽涅槃の四門を旨として。花鳥風月に情をまじゆる類。明らかなる事鏡に向ふが如しとあるげに候。最前申す如く。以下前の如し。ワキシカ〳〵。〽是は奇特なる事を承り候ものかな。扨は安居

院の法印にて渡り候か。最前より筋もなき御事申し迷惑仕り候。ここは紫式部亡心現れ。源氏物語の供養なされ度く思召し。これまで現れ給ひたる。以下常の如し。

金春金剛に此の間なし。觀世寶生。稀引所望の時。相勸む。先づ源氏供養に間はないと申すが。習なり。

絃上（けんじやう）

アヒ　龍の眷屬

亂序にて出る。〽これは。廣原海（わうみ）の都に於て。忝くも大龍王の眷屬にて候。唯今罷出ること餘の儀にあらず。近衞の御宇。宇治の大臣の御子。太政大臣師長公と申すは。琵琶の上手にて渡らせ給ひ候が。一とせ天下旱魃して。萬民の歎これに過ぎたる事なかりしを。彼の師長公神泉苑の池邊に於て。雨を御祈りのため琵琶の祕曲を遊ばされけるに。龍神この曲を感じ。晴天俄にかき曇り。大雨頻りに降り下り。草木綠の色をあらはし。萬國の悦び限りなし。それより此の君を雨の大臣と申し候。されば此の大臣師長公。今度思召し立ち入唐あり。なほも琵琶の大事を御尋ねあらうずると思召して。乃ち御下向なされ候が。先づ名所の月を御覽あるべきとて。此の須磨の浦まで御出でおり。暫し御逗留あるべきと思召し候を。忝くも村上天皇は。彼の師長公の御志を感じ思召され。賤しき海人（あま）夫婦と御身を現じ御出でなされ。お宿をも參らせられ。夜もすがら琵琶を御所望ありしに。師長公は妙なる一曲を彈じ給ふ。折節時雨の降り來り申す程に。主は板屋の屋根を苫にて葺き給へば。斯程に雨も漏らぬ板屋の屋根を。何とて苫にて葺くぞと不審なさるゝ。其の時祖父（おほぢ）は。その事にて候。唯今遊ばされし御琵琶の。調（しらべ）は黃鐘調なり。板屋の屋根を叩く。雨の音は盤涉調なり。そのために苫にて葺きたりとありしかば。師長公はまた重ねて御琵琶を調べ御覽ずるに。案の如く。雨の音と御調の一調子になり申す。師長公大きに驚き思召され。唯人ならず覺えたり。祖父も琵琶を仕らぬ事はあるまじ。急ぎ仕れとの御所望ありければ。賤しき身の琵琶を彈き申すこと有るべきぞ。思ひ寄らずとありしかども。おして御所望ありければ。力及ばず。畏まつて候とて。御琵琶を調べ。祕曲を遊されて候。師長公これを聞し召して。我れ本朝にて琵琶の奧儀を極めしかども。なほも大國を窺ひ見んと思ふ處に。かゝる妙なる四つの調。撥音肝に銘ずるぞや。これは如何なる事やらん。所詮渡唐を留（とま）まり。先づ歸洛あるべしと仰せられ候程に。その時祖父。今は何をか包み申すべき。これは絃上の主村上天皇。一人の姥は梨壺の女御なり。師長入唐の志を止め申されんため。これまで御出でにて候とて。御名を名告り捨て。夢現の如くに失せ給ひて候。此の村上天皇四つの緖の御調は。代々の古へより言語に絕えて稀なりと見えたり。また絃上と申す琵琶の仔細は。むかし仁明天皇の御宇。嘉祥三年に。掃部頭貞敏と申す人の御座ありしに。大唐にてれん承武と申す者。絃上獅子丸靑山といふ。此の三面の琵琶を貞敏に與へ。並に三曲を相傳して。我が朝に歸りしが。龍神この琵琶を惜しみ。獅子丸をば龍宮に奪取り。絃上靑山は京着して。君の御寶と成り申す。その時村上天皇應和の頃にてありげに候。八月十五夜涼風訪れ。月白く冴えて面白き折節。淸涼殿にして帝絃上を遊ばされけるに。いづくともなく月影に映り。怪しき者一人。叡慮間近く參り。御琵琶の唱歌をなさも氣高く申す程に。君は不審に思召され。汝は如何なる者ぞ。何方より來るぞと御尋ね候へば。我は大唐にてれん承武と申したる者な

り、掃部頭貞敏に。三面の琵琶を與へ。三曲を傳へし時。餘りに惜しみ。上玄石上の祕曲を一つ殘し申して候が。其の罪により魔界に沈み。苦しみ今に盡きず。願はくば今君に此の曲を授け奉り佛果に到らんと存じ。これまで參りたりと申上ぐる。村上の聖帝聞召し上げられ。さらば其の曲仕れと仰せられければ。御前に立てられたる青山をおつ取つて。てんしゆを撥ち。乃ち上玄石上の祕曲を授け奉る。かゝる奇瑞のある事も。これ皆君の御心深く通はせ給ひ。道のすぐれさせ給ふ謂れにて候。然れば村上天皇は。此の度師長公への御もてなしに。獅子丸にて祕曲を御所望あるべきと思召すに依り。諸龍神その用意候。〽何れも下界の龍神憚に來れ。天皇の御影は申すに及ばず。師長公の御姿をも。能く〳〵拜み候へ。其の分心得候へ〳〵。

源太夫

アヒ　末社

亂序にて出る。作り物の太鼓を持ち一。橋掛り一の松に一。脇正面向き下に居。片膝を立て。太鼓を下に置く。扇を抜きもち。常の如く亂序にて出で名宣る。

〽斯樣に候ものは。尾州熱田の明神に仕へ申す末社にて候。只今罷出る事餘の儀にあらず。當社の御事は雙びなき靈神にてましますにより。忝くも宣旨として當今に仕へ御申しなさるゝ臣下。此所へ御參詣にて候を。當社の御悦び限りもなく。誰あつて罷出で神祕申上ぐべき者も御座なきと思召され。源太夫夫婦の神。假に宮つ子の姿と現じ。かの稀人に會ひ參らせられ。この神のめでたき謂れ殘らず御物語なされて候。誠に珍しからざる申し事にては候へども。まづ當社においての。源太夫の神と申すは。昔神代の御時は。出雲の國に御座ありしが。其折柄なれば。素盞嗚尊ある時簸の川上において。啼哭する聲の聞えしを不審に思召され。行き到つて御覽候へば。年老いたる夫婦の中に。少女を抱きて泣きさけび候程に。尊仰せられけるは。汝は如何やうなる者ぞ。如何なる仔細あるぞと御尋ねありし所に。老人答へて申しけるは。我はこれ手摩乳脚摩乳と申す。夫婦の者にて候。是なる姫は稲田姫と申して。この老人夫婦が子にて候。爰に大蛇の生贄を供へ申す事あり。我々多くの娘を持ちたりしを。悉く大蛇に取られ。只一人殘りたる稲田姫を。今又贄に供へ申せば。親子の別を悲しみ。斯樣に歎き申すと申上ぐる。尊不憫に思召され。然らば其姫を我に與へよ。その難を遁れさせ給はうずると仰せられしかば。夫婦の者は悦び。易き間の御事姫を參らせうずると申す。其時尊さてその大蛇の樣體は何とあるぞと御尋ね候へば。其事にて候。かの大蛇の形と申すは。胴は一つなれども。頭は八つ御座候と語り參らする。尊之を聞召し。頓て謀を以て。まづ酒槽を八槽作らせ。この八槽の槽に毒の酒を湛へ。槽の上には高く棚をかき。その棚の上にかの姫を置き給へば。姫の姿はかの酒の中へ明かに差寫り見え候程に。やう〳〵時節と云ふ内に。大蛇之を見ていつもの如く。生贄を供へけるぞと心得。其儘立寄りかの酒をすつとは呑み。すつとは呑み。八槽の槽の酒を皆一度に呑みほす。呑む所は八つの頭なれども。納める胴は一つなれば。散々に醉臥しまろぶ所を。尊御覽じて十束の劍を振上げ。八つの頭をちやう〳〵と皆打落し尾切り給へば。刄少し白みけるが。村雲はつと立來り。尾の中より劍一つ出で申す。之を乃ち天の叢雲の御劍と名付け。當社においては八劍の宮と崇め申す御事にて候。それより生贄をとめ。尊は稲田姫と夫婦の語らひをなし。八雲

アヒ　家來

ワキ呼出す。中入過ぎて。立つて。〽御前に候。シカ〳〵。〽畏まつて候。〽さても〳〵。目出度い御事にて候ひけるぞ。今この君と申すは。人皇始まつて六十六代。忝くも一條の院と申し奉る。君賢王にてましますにより。一天四海の風鎭まつて。國富み民も豐かなれば。何事につけても。御心に叶はざるといふことなし。然れば此のほど不思議なる御靈夢の御告あり。三條の小鍛冶宗近に。御劍を打たせ御申しなさるゝならば。なほ以て天下安全に御座あらうずるとの御事なり。乃ち宣旨として。宗近に御劍を仰附けらるゝ。宗近承つて申上ぐるは。折節相槌仕る者なきとて辭退申されけれども。さりながら。天下の聞こえ家の面目。これに過ぎたる事あるまじきと存じ。頓て領掌仕る。惣じて御劍の目出度き仔細　異國本朝に其の數多しとは申せ。神代の昔御劍を以て天下を治め給ひしこと。これまた珍らしからず申すに及ばねども。先づ叢雲の劍と申すは。忝くも素盞嗚尊より。天照大神へ參らせられしが。その後東夷征伐の御時。天照太神よりまた日本武尊へ贈り給ふ。駿河國蘆原の郡に、敵の多く集り。尊の御命を取らんと謀を廻らし。此の野と申すは。鹿の數あまたある所なり。狩なさせて御遊あれと申上ぐる。尊は誠と思召され。御感甚しく頓て鹿を狩らせて御覽なさるゝに。賊徒は彼の枯野に火を掛け。尊の御命を取り奉らんとする。其のとき尊は彼の御劍を以て。草を拂はせ給へば。其の火の煙敵に靡きかゝり。忽ち燒き亡び。却つて尊は思召す儘に多くの夷を滅し給ふ。それより天下治り今に於て。草薙の御劍と申すも是にてあるげに候。や。これは御劍の目出度き仔細。先づ壇の飾その用意をなし申さばやと存ずる。トいうて入る。此の間またワキ呼出すもあり。

小袖曾我（こそでそが）

アヒ　侍女

母シカ〳〵。〽御前に候。母シカ〳〵。〽畏まつて候。たゞ祐成シカ〳〵とも。又團三郎シカ〳〵とも。〽案内とは誰にて渡り候ぞ、シカ〳〵。〽心得申して候。又あれにましますは時宗にてはなく候か。太夫シカ〳〵。〽大方殿の仰せには。祐成の御參りならば申せ。時宗の御參りならば。な申しそとかたく仰付けられて候。シカ〳〵。〽畏まつて候。如何に申し候。祐成の御參りにて候。母シカ〳〵。〽心得申して候。其の由申して候へば。此方へ御通りあれとの御事にて候。母シカ〳〵。〽御前に候。母シカ〳〵。〽畏まつて候。如何に祐成へ申し候。時宗の事を御申しあらば。祐成共に御勘當と仰出されて候。舞をめでたらす舞のかざし。といふ流すぎて。〽如何に祐成めでたき折なれば。時宗と連れて一さし御舞ひ候へ。舞の内切戸より入るなり。

胡蝶（こてふ）

アヒ　里人

この間に。初めにワキより呼出す事もあれば。中入後に狂言よりかゝる事もあり。ワキ呼出す。〽所の者とお尋ねは。誰にて渡り候ぞ。シカ〳〵。〽さん候此所は一條大宮と申して。所柄面白き古跡にて候間。心靜かに御一見あらうずるにて候。シカ〳〵。〽重ねて御用もあらば承り候べし。シカ〳〵。〽心得申して候。中入過ぎて。〽最前三吉野のお僧の所の名所をお尋ねにて候。寄特なる旅人にて候間。未だあれに御入りあるか參り。御物語申さうずるにて候。シカ〳〵。〽中々の事。シカ〳〵。〽心得申して候。扨お尋ねは如何やうなる御事にて候ぞ。是より常の如し。狂言よりかゝる場合は次の如し。中入過ぎて。〽是は。一條大宮の邊に住居仕る者にて候。此間は用の仔細あつて。何方へも罷出でず候間今日は罷出で。心をも慰

まばやと存ずる。やゝ是に御座候お僧は。此邊りにては見馴れ申さぬお僧にて候が。何方より御出でありて。此所には休らひ給ひ候ぞ。ワキシカ〳〵。ヘ中々此邊りの者にて候。シカ〳〵。ヘ心得申して候。扨お尋ねありたきとは。如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。ヘ是は存じも寄らぬ事を承り候ものかな。我等も此所の者とは申しながら。光源氏の御事などは。中々我等如きの存ぜうずる仔細はなく候。されども御尋ねあるを。何をも存ぜぬと申すも如何なれば。大方承り及びたる通り。御物語申さうずるにて候。語る程に。此の一條に於て大宮と申すは。古へ光源氏の住ませ給ひたる所なるが。誠に御物好きなる御事なれば。山などを築かせ諸木を植ゑ。色々石を拵へ。池など掘らせ。唐土船なまなど數多人々集り給ひ。詩歌管絃様々の御遊び。ありたる所とかや申傳へて候。また是なる橋の詰の梅は。年々色香美しく咲き亂れ。鶯などの宿り。誠に眺め盡きせぬ御事にて。御座ありたると承及びて候。又胡蝶は。春夏秋を送り。千草萬木に戯れなし申せども。梅の花は初春に咲くものなれば。此花に緣なき事を悲しみ。朝暮これを嘆き申すなどゝ承りて候。然ればこの梅いつの年より遅く折を待へて咲き申せば。胡蝶は喜び此の花に戯れ。朝暮花をなゝとし舞ひ遊びたると申す。是によつて今の世迄も。胡蝶の舞と申す事。是を學びたる御事にて御座あるげに候。されば此心を源氏の御歌に。淵に身を投げつべしやと思ひしに。花の邊りをさらで見よとはと。斯様に遊ばされたると承りて候。又ある歌に。花園の。胡蝶をさへや下草に。秋待つ蟲はうとくかるらん斯様にもあるげに候。其外この梅の花に胡蝶の舞ひ遊ぶ事は。様々の御歌に喩へられたりとは申せども。委しき事は存ぜず候。誠にいにしへは御輿車をならべ。何れも此花を眺め給ひたると承申せども。御覽なさるゝ如く。今は斯様に星霜つもり，物淋しく名のみばかり殘り申して候。最前申す如く。委しき事は存ぜず候へども。お尋ねにて候間あらまし承及びたる通り。御物語申して候が。扨お尋ねは如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。ヘ是は奇特なる事を承り候ものかな。お僧の御心中貴くましますにより。斯かる不思議なる事も御座ありたると存じ候間。我等の申すは如何なれども。この花の下にて。有難き御經をも御讀誦あらば。重ねて奇特の御座あらうずると存じ候。シカ〳〵。ヘ御逗留の中に御用もあらば承り候べし。シカ〳〵。ヘ心得申して候。

戀重荷（こひのおもに）

アヒ　召仕

ヘ何と山科の庄司が戀故空しくなりたると申すか。扨も〳〵。不憫なる事にて候ひけるぞ。此の山科の庄司と申す者は。內裏の御草花を預け置かれたる下仕にて候。此の者に就いて。近頃哀れなる事の御座候。昔よりも及ばぬ戀と云ふ事の有るとは申せども。此の庄司が戀は。けしからず恐ろしき御事にて御座候。其の仔細と申すは。彼の庄司。或る時御庭の菊の下葉を取るとて。御簾の隙より。忝くも女御の御姿を一と目見參らせ。靜心なき戀となり。明暮れ今ひと目憧れ申すを。いかなる者か此の事を申上げたる。君聞召し上げられ。戀と云ふ事は。人の高下によらぬ物なればとて。庄司が心中不憫に思召し。古へもさる例あつて。戀の重荷と云ふ物を作り。之を庄司に持たせ。庭にて千度の數を廻らせよ。其の重荷を持ち得たらば。今一度女御の御姿をまみえ給うずるとの事により。乃ち戀

の重荷を作り。御庭へ召出され。彼の重荷を持たせらるゝに。庄司は此の事を有難く思ひ。是非この重荷を持ち。今一度女御の御姿を拝み奉らんと思ひ。勢力を出だし持つとは雖も。老人と云ひ其身にも應ぜぬ重荷なれば。之を持ち得ず。かゝる時はいよ〳〵御姿を拝み奉る事はなるまじと思ひ。其の悲しさの餘り。なほ戀の思ひ深く成りけるか。又精根も盡果てけるにや。立ち處にてそのまゝ空しく成りたると申す。かやうの哀れなる事を。我等如きの承りたる事は御座なく候。かゝる賤しき者なれども。此の事をたゞ其の儘はいかがに候間。急ぎ此の由を申上げばやと存ずる。いかに申上候。山科の庄司が戀の重荷の擧がらぬ事を歎き。空しくなり申して候 シカ〳〵。〽空しく成り申して候。シカ〳〵。〽頓て御覧あらうずるにて候。

【さ】

西行櫻（さいぎやうざくら）

アヒ　寺男

ワキ供して出て。笛の上に居る。ワキ呼出す。〽御前に候。シカ〳〵。〽畏まつて候。皆々承り候へ。當年は何と思召され候やらん。花見禁制と仰せ出だされ候間。何れも其分相心得候へや。上掛り下掛りにて此一句あるなし。花見シカ〳〵。〽案内とは誰にて渡り候ぞ。シカ〳〵。〽尤も御目に掛け申したくは候へども。何と存ぜられ候やらん。當年は花見禁制と申付けられて候間。中々なり申すまじく候。花見シカ〳〵。〽さあらば機嫌を以て申さうずる間。それに御待ちあらうずるにて候。ト云うて笛の上に居る。ワキ〽名花實の折なるべし。あら面白や候。の邊りより立つて。〽如何に申上げ候。上京下京ともの人々にて候が。花見物の望みにてこれ迄參られて候。ワキシカ〳〵。〽禁制の由申して候へども。達々參られ。ひらに案を頼む由申され候間。扨かやうに申上げ候。ワキ〽柴の戸を開き内へ入れ候へ。狂〽畏まつて候。日本一の御機嫌に申し合せた。皆々此方へ御通り候へ。扇ひらき。さら〳〵〳〵。ト戸を明ける。仕舞。是より門座へゆきゐて。隱家の。ト云ふ謡時分切戸より入る。

草紙洗小町（さうしあらひこまち）

アヒ　供人

狂言太刀持。ワキの供して出る。ワキシカ〳〵。〽御前に候。シカ〳〵。〽尤もの御意にて候。頓て御出であらうずるにて候。シカ〳〵。〽中々承りて候。一段と面白き歌と存じ候。シカ〳〵。〽ものと承つて候。ワキ〽何と。狂言〽蒔かぬにも。何を種とて瓜蔓の。畑のうね〳〵。まろびありくらんと。斯様に承りて候。ワキシカ〳〵。〽是は尤もの御たくみにて候。さやうになされ候はゞ。明日の御歌合には必ず御勝ちあらうずると存じ候。シカ〳〵。〽尤もにて候。ト云うて下に居る。ワキ中入過ぎると立つて。〽扨も〳〵。明日帝にて歌の御會には。まづ紀貫之に河内の躬恒。壬生の忠岑。其他おの〳〵歌の上手の集りにて。中々晴れがましき御事にて御座候。中にも頼うだ黒主は。小町を相手に御定めなされ候が。この小町と申すは。女なれども世に越え歌人にて御座候故。頼うだ人もあぐみはてられ。兎角なるまじいと存ぜられ。小町の詠まれたる歌を。萬葉集の草紙に書寫し。古歌と訴へ。明日の歌合に。勝ち申さうとたくみ申され候。さりとては。天理も恐ろしく候へどもさり乍ら。頼うだ人の分別をもどく事も如何に御座候故。是非もなき御事にて候。さりとては小町の心中察し申し。御痛はしく存じ候。や。これは某の獨言。先々我等も罷歸り申さうずるにて候。ト云うて。間座に居て。切戸より入るがよし。

逆鉾

アヒ　里人

ワキ呼出す。　〽所の者とお尋ねは。誰にてわたり候ぞ。セリフ常の如し。　〽さる程に。此の御山を寶山と申す仔細は。伊弉諾尊伊弉册尊。天の浮橋の上にて。此の國土なからんやと。則ち御鉾を振り下し。海中を捜し給ふ。其の鉾の滴り凝り固まつて一つの島と成上る。蘆原の中つ國淡路島これなり。其の後かの鉾を此の山に納め給ひしより寶山と申し習はし候。さて彼の鉾の刄先八つあるげに候。其の故にや。當山の紅葉も葉先八つ御座候。則ち紅葉を神木と崇め申し候。誠に伊弉諾尊降誕ましまして。天地分ち明り候へといへども。未だ草木出生せず候。伊弉册尊顯はれ給ひて後萬物出生す。これ即ち陰陽の二神と申し奉る。然れば木火土の性は伊弉諾。金水の性は伊弉册と顯れ給ふと存ずる。最前申す如く。以下ワキとのセリフ常の如し。〽それは逆鉾の守護神にて御座あらうずると存じ候。御身清淨にましますにより。以下常の如し。

同　末社の間

アヒ　末社

亂序にて出る。　〽斯様に候者は。和州龍田の明神に仕へ申す。末社の神にて候。誠に。當社龍田の明神と申すは。則ち長戸邊命と申し奉る。これ風神なり。天の逆鉾を守護し給ひ。なほまた君を守り民を撫で。代々豊年なるは。偏に當社御恵深き故なり。抑も天の逆鉾と申すは。伊弉諾伊弉册尊天の浮橋にて。彼の鉾を振下げ青海原を捜し給ふ。其の雫の滴り固まつて一つの島となる。淡路と名附け。それより大八島の國を作り。紀の國日向伊勢志摩。並に四つの海岸を作り。目出度き國となり候も。此の御鉾の始にて候。また伊弉諾伊弉册の尊は。木火土金水五行神にてましまs。木火土の性伊弉諾となり給へども。萬物出來せず候故。金水伊弉册と現じ。陰陽を分けてより。萬物出生し。國土豊に民榮え。目出度き國となり申す。則ち當社は彼の御鉾の守護神なれば。隱れもなき靈神にて御座候間。當今奈良の帝に仕へ御申しある臣下殿。當社へ御參詣を。明神嬉しく思召し。假に御姿をまみえ。當社の目出度き仔細御物語あり。先づ神隱れなされ。重ねて御奇特を御見せ候間。先づ我等如きの末社までも罷出で。此の次常の如し。舞三段。切も常の如し。

鷺

アヒ　官人

〽これは延喜の聖代に仕へ申す官人にて候。さても君賢王にてましますに依り。吹く風枝を鳴らさず。民戸ざしをせぬ御代なり。四季折々の御遊び御座候。さて今日はしんやうい池のほとりへ御幸あつて。御遊覽あらずるとの御事にて候。皆々その分心得候へ〳〵。

櫻川

アヒ　供人

初同に出る。ワキヅレ呼出す。　〽御前に候。ワキシカ〳〵。〽畏まつて候。立つて樂屋に向いて。〽やい〳〵。女物狂ひが。いつもの如く美しき掬ひ網を持ち來り候べし。參り候はゞ。道を廣々と明けて置いて。此方へ通し候へ〳〵。ト云うて。シテ出ると。切戸より入る。次ワキツレ男の云ふセリフ

な。狂言相勤むるも。大方アシラヒなしに相濟む。

實盛（さねもり）

アヒ　里人

狂言口明。〽これは。この篠原の在所に住居する者にて候。さる程に遊行十六代。陀阿彌と申す御聖此所へ御着あつて。有難き念佛を御勧めなさるゝ。今日も皆々參られ候へ。其分心得候へ〳〵。中入過ぎて。〽なんぼう奇特なる事にて候ぞ。此の間講中の以後。上人高座の上にて獨言を仰せらるゝが。又今日も獨言のありたると申す。我等は御膝近う參る者なれば。此の事不審申せと各申され候。只今參らばやと存ずる。今日はおそなはり申して候。シカ〳〵。〽只今參る事餘の儀にても御座なく候。上人樣講中の稱名の後に。獨言を仰せらるゝとて皆人不審申し候。もし在所へ仰せられたき事も御座候はゞ。我等に參り承れと申すが。是は如何やうなる御事にて候ぞ。シカ〳〵。〽扨それは如何やうなる御事にて候て。シカ〳〵。〽獨言を仰せらるゝが不審なと申せば。それはお構ひなうて。實盛の最後を御不審なさるゝ。委しくは存じも致さず候へども。我等の承りたる通り。御物語申さうずるにて候。語まで。實盛と申すは。北國方にて御座ありしが。御領について源氏へ御參りあり。武藏國長井の庄を賜はつて。それより長井の齋藤別當實盛とは申したるげに候。さる間かの實盛は。平家宗盛へ御參りあり。源氏を防がんとて東國へ下り給ふが。駿河國蒲原にて。水鳥の羽音に駭き。一千餘騎を引分け都へ逃げ上り給ふ。實盛御一人にては御座なけれども。一期の恥辱と思召され。今度北國にては必ず討死あらうずるとて。色々御望みの事共を仰上げられければ。宗盛は聞召され。實盛の心中哀れに思召し。かつうは軍をすゝめんが爲。錦の直垂。石打の征矢を御免しありければ。頓て御免を蒙り。北國へ下り給ふ。さる程に平家の方には實盛を始め。高橋の判官長綱。武藏の三郎左衛門有國。越中の國倶利伽羅が峠に城廓を構へ。散々に戰ひ給へども。其處（そこ）にても叶はず。其後この篠原迄御陣を退かるゝ。實盛思召さるゝは。我れ年寄りて軍する事。定めて若武者共侮（あなど）り申すべし。如何にも花々しく出立ち。合戰なされうずると思召さるゝが。鬢髭の白きを深く厭ひ給ひ。兎角黑く染めうずると思召し。油煙の墨を濫墨（しぶ）にして。眞黑に染め。如何にも若く出立ち。ある日の合戰に打つて出で給ふ。源氏の方には。入善（にふぜん）の小太郎南條の次郎折合せ。散々に軍し。長綱も有國も討たれ。平家打負け散々になりたれども。實盛一人殘つて合戰し給ふを。信濃の國の住人。金刺の光盛折合ひて。實盛に言葉を掛くる。平家の軍兵數多打取つて。大方軍は散じたるに。華かなる武者一騎殘つて合戰するは。何方ぞと云ふ。實盛左樣に云ふは何者ぞ。志の武者と見えたり。寄れ組まんとて。馬上にてむんずと組んで落ちけるが。其時實盛は終に光盛に討たれ給ふ。さて御首を木曾殿御覽じて。如何なる者の首ぞと御尋ねありければ。是は實盛の首にてあらうずると申さるゝ。いや實盛ならば鬢髭も白くあらうずるが。黑く候程に實盛にてはあるまじいと申さるゝ。其時ある人進み出で申さるゝは。常々申しけるは。年寄りて軍するならば。鬢髭を墨にて染めうずると語りたると申上げらるゝ。さらばとあつて。篠原の池水にてすゝがせて御覽候へば。鬢髭も白くなり。正身の實盛にて御座ありたると申傳へて候。誠に弓取の志は斯樣にこそあるべきものなれ

ばとて。何れも感じ給ひたると申し候。最前申す如く。委しくは存ぜず候へども。まづ大方承りたる通り。御物語申して候が。扨お尋ねは如何やうなる御事にて候ぞ。シカ〳〵。へ近頃奇特なる事を承り候ものかな。實盛の果て給ひたるは。はや二百年には投耕あまるなど〻申すが。上人様御下向を有難く思ひ給ひ。毎日の御法事にこれ迄現れ給ひ。御法をも聽聞ありたると存じ候間。此上は池のほとりにて。臨時の踊念佛を以て。實盛の御菩提を御弔ひあれかしと存じ候。シカ〳〵。へさやうに御座候はゞ。在所へ其の通り相觸れ申さうずるにて候。シカ〳〵。へ心得申して候。皆承り候へ。此度篠原の池の堤にて。臨時の踊念佛を以て。實盛の御菩提を御弔ひなされ候間。皆々參り。斯様の有難き事を拜み申し候へ。其分心得候へ〳〵。シカ〳〵。へ相觸れ申して候。

佐保山

アヒ　里人

中入過ぎニ　へ是は。この春日の里に住居する者にて候。今日は長閑に候程に。佐保山に登り四方の景色をながめ。心をも慰まばやと存ずる。や。是に御座候は。如何さま上つ方と見えさせ給ひて候。如何なる仔細により此山には御座候ぞ。ワキシカ〳〵。へ中々山下の者にて御座候。シカ〳〵。へ心得申して候。扨お尋ねありたきとは如何やうなる御事にて候ぞ。シカ〳〵。へ是は存じも寄らぬ事を承り候ものかな。我等もこの山下には住居仕れども。さやうの御事委しくは存じも致さず候さりながら。都よりの御參詣とあり御尋ねなさるゝを。何をも存ぜぬと申すも如何に御座候間。大方承及びたる通り。御物語申さうずるにて候。シカ〳〵。へ語まづ。當社と申すは。昔常陸國鹿島よりこのお山に遷らせ給ふ。鹿島より。かせきに登りて春日野の。三笠の山の浮雲の宮と。是は忝くも大明神の御託宣なる由承及びて候。また當社と申すは四所明神にて渡らせ給ふ。第一には鹿島の明神香取の明神。天津兒屋根の明神之を四所明神と崇め奉り。神代の昔より國家を始め君を敬ひ。萬の政治を執り行ひ給ふめでたき御神なれば。皆人歩みを運び神拜をなし給ふ御事にて御座候。又佐保姫の明神と申すは。當社の末社とは申しながら。別して仔細御座あるげに候。春日の御事は申すに及ばず。佐保姫の明神は猶以て。春を司る御神にて渡らせ給ふ。さる程に霞の衣の仔細と申すは。御覽なさるゝ如くこの佐保山と申すは。人家遠からざりしに。奇特なる御事にて御座候ひけるぞ。邊りに仙郷あつて。時しもめでたき折柄には。かの仙郷より仙人出でて。衣を干し申さるゝ。この衣と申すは。裁目もなくまして縫目も御座なく。金色輝き異香薫じ。心言葉に述べ難く。妙なる衣にて御座ある由申傳へて候。之を霞の衣とは申すげに候。又一説には。この佐保山と申すは名山にて。前には三笠山を戴き。麓に佐保川の流れ清く。春の日の長閑なるに。この上に霞のかゝりたるは。さながら衣を干したるやうに見え申せば。いづれの歌人もこの心を詠じ給ひしより此方。霞の衣と褒め給ひたるなどゝ承及びて候。又伊勢とやらん申す歌人も此心を。裁縫はぬ。衣着し人もなきものを。なに山姫の布晒すらんと。斯様に詠じ給ひたるなどと申し候。惣じてこの佐保姫の明神は。由緒ある御事にて御座候ひけるぞ。春日へ御參詣の輩は。まづ佐保姫の御社へ御參詣なされ。それより春日へ御社參なさるゝ御事にて候。是についても神祕御座あ

るなどとは申せども。委しき事は存ぜず候。最前申す如く霞の衣の仔細。又佐保姫の御事に就き。色々様々仔細御座あるなどとは申せども。まづ我等如きの承りたるは。この分にて御座候が。さてお尋ねは如何やうなる御事にぞて候。シカ〳〵。へ是は存じの外なる事を承り候ものかな。藤原の俊家の卿にて御座候なも存ぜず。知らぬ神祕を申上げ。何とも迷惑仕りて候。シカ〳〵。へさりながら某推量仕るに。誰あつて此山に登り心をとむる人も御座なきに。俊家の卿は。此度山上なされ心静かに御座候事を佐保姫の明神は嬉しく思召され。假に人間とまみえ給ひ。霞の衣の謂れをも懇に御物語なされたると存じ候間。御上洛は御急ぎなれども。今夜は月と共に此山に御座候ひて。御祈念をなさるゝならば。重ねて奇特の御座あらうずるかと存じ候。シカ〳〵。へさあらば夜も明け又御見舞申さうずるにて候。シカ〳〵。へ心得申して候。

【し】

志賀（しが）

アヒ　里人

へ是は。この浦里に住居する者にて候。承り候へば。志賀の山櫻今を盛なるよし申し候間。罷出で花をも眺め。心をも慰めばやと存ずる。や。是に御座候は如何（いか）さま上つ方と見えさせ給ひ候が。斯様の所への御出では如何なる仔細にて候ぞ。不審に存ずる事にて候。シカ〳〵。へさればこそ初めより。唯人（ただびと）とは見え給はず。我等もこの志賀の浦里に住居仕れども。左様の御事委しくは存じも致されさりながら。この所名所なればこそ遙々上つ方の御下向なされ。畏しき我等にお尋ねなさるゝを。所に住みながら何をも存ぜぬと申すも如何（いかゞ）に候間。大方承り及びたる通り。御物語申上げうずるにて候。語まづ。江洲志賀の都と申すは。忝くも人皇十二代。景行天皇初めて都を立て給ひ。皇居となるめでたき所なれば。それより續いて成務天皇此所に御座ありしと承りて候。然れども其後は都も遷りぬるを。又人皇三十九代。天智天皇の御宇に都を立て給ひ。大宮造りあり。櫻を多く植置かせ。是を叡覽ありしに。眺め一入すぐれたればとて。それより此方志賀の花園とは名付けられたるげに候。かゝる面白き名所なれば。それより以後において代々の帝（みかど）。何れもこの花園には御幸（みゆき）ありたる樣に承及びて候。さる程に當山の花盛なる折柄にてもや候らん。大伴の黒主は。行幸をなし奉り。色々まうけなんとし給ひければ。樣々の御遊にて叡感なのめならず。はや還幸あるべきとの御事なりしかば。大伴の黒主は御名殘惜しくや思ひ給ひけん。今少しは留（とゞ）め申したきと。色々申上げさせ給ひけれども。思召しに叶はず。還幸あるべきに相定まりければ。大伴の黒主は一首の歌を詠じ差上げ給ふ。さゞら波。まなくも岸を洗ふめり。いさご清くば君とまれかしと。斯樣に遊ばされければ。君これを聞召し上げられ。此歌の心を感じ思召し。まして唯人ならねばとて。其後大伴の黒主を。志賀大明神に祀（いは）ひ御申しありたると承及びて候。爰を以て。歌の道にたづさはり給ふ人は。志賀の明神へ御參詣あり。祈り給へば自ら。歌道叶ひ給ふなどと申すも。此謂れにてあるげに候。古き都の跡なれども。御覽なさるゝ如く。昔に變らぬものは所の致景。花の色香なればとて。今末の代に至る迄。春にもなり候へば。心ある人は此の櫻を眺め。歌を讀み詩を作り。心を慰み古を思ひ給ふ。されば其後翁之の詩にも此心を。三稚之以後無二宮殿一遺

愛ン山櫻渡度之春と」斯様に作られたると承り及びて候。最前申す如く。志賀の花闘の詞も。大伴の黒主の御事委しくは存ぜず候へども。まづ所に申傳へたる通り御物語申して候が。さてお尋ねは如何様なる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。ヘ是は存じも寄らぬ事を承り候ものかな。某さつと推量仕るに。大臣殿當山の花を御覧ぜられんため此所への御下向は。一入稀なる御事なれば。明神も嬉しく思召され。假に山賤の姿と御身を現し。これ迄顕れ給ひたると存じ候間。御上洛は御急ぎなれども。暫く此所に御逗留なされ。御心静かに花をも御覧なさるゝならば。重ねて奇特の御座あらうずると存じ候。シカ〳〵。ヘ是に御座候間は切々御見舞申上げうずるにて候。シカ〳〵。ヘ心得申して候。

七騎落（しちきおち）

アヒ　船頭

櫂竿持ちてワキの供して出る。船に乗る。但し右の肩ぬいで出るなり。ワキ一聲ヘ弓張月の西の空。行衞定めぬ船路かな。二ノ句狂言ヘ立つ浪風の音迄も。関の聲かやおそろしや。ワキヘ汝は何事申すぞ。狂言ヘ浪の音を関の聲かと肝を潰して候。ワキヘあれに兵船一艘浮めたり。言葉をかけて見うずるにて候。狂言ヘもつともにて候。腰の刀に手を掛くる。ト云ふ時。狂言ヘあゝ是は如何な事。ト云うて端に逃をつく。太夫謠と色々あつて仕舞よりある時。狂言ヘ土肥殿〳〵。ざれ事も時によるものにて候。ト云うて入るなり。

自然居士（じねんこじ）

アヒ　門前の者

口明に。ヘこれは東山雲居寺の門前に住居する者にて候。是處に自然居士と申して貴き御方の御座候が。雲居寺造營の為に。一七日御説法なされ候。今日は結願にて候間。志の面々は皆々参られ候へ。其分心得候へ〳〵。樂屋へむいて。如何に居士へ申し候。聽衆も群集仕りて候間。急ぎ御出であらうずるにて候。太夫シカ〳〵。ヘ中々相觸れ申して候へば。聽衆も群集仕りて候間。急ぎ御説法あらうずるにて候。太夫を床几に腰掛けさする。子方の出るを見付けて。あらいたいけや此方へ渡り候へ。如何に居士へ申し候。何處とも知らぬ幼き人の諷誦をさゝげ申され候。太夫に渡す。小袖の置き様口傳あり。裏にて下掛りでは舞臺に居る。上掛りでは太鼓座に居る。やるまいぞ〳〵。ワキシカ〳〵。ヘ用があるともやるまいぞ。ト云うて。つか〳〵と行過ぎる位にして。氣味惡さうに引く。用があらば連れてゆかうまでよ。如何に申上げ候。只今諷誦を捧げ申され候幼き人を。何處とも知らぬ男の來り。引立て参る程に。やるまいと申して御座れば。大きな目に角を立て。用があると申す程に。用があらば連れてゆかう迄よと申してやつて御座る。太夫シカ〳〵。ヘいや某は何とも推量にあたはず候。太夫シカ〳〵。ヘ尤も御推量にて候。人商人にて候はゞ大津松本ならでは参るまい。某追付き申さう。太夫シカ〳〵。ヘ御意尤もにては候へども。今日結願に御座候に。御説法が無にならうずるにて候。觀世流の時は。口明ばかり云うて太鼓座に居る。太夫舞臺入りの時に床几に腰掛けさすばかりなり。太夫の謠の內子方出る。太夫通り連れ出て子方着し。小袖にかゝる太夫の謠のなかに下に行く。太夫シカ〳〵。ヘさん候是なる幼き人の諷誦を捧げ申され候。まづ御覧候へ。ト云うて文を渡し。太夫太鼓座に居る。ワキ橋掛りへ子方を連れてゆく。續いて狂言下に居る中より聲を掛けて立つ。ヘアゝやるまいぞ〳〵。此後本書通りにして。連れてゆかう迄よ。太夫より「何事にてある」と云ふ。ヘさん候只今諷誦捧げ申し候、ト云ふ。太夫より問ひかけると。此方より「如何に申上げ候」との違ひなり。

猩々（しやうじやう）

アヒ　供人

ワキシカ〳〵。ヘ案内とは誰にて渡り候ぞ。

シカ〲。〽參らうずると存候處に候間。御供申さうずるにて候。シカ〲。〽心得申候。先ヽ御座候へ。只今御尋ね祝着申候。御不審尤もにて候。早く參らうずると存じ候處に。去り難き用の事候ひて。遲なはり申候。今日は夥しき市人にて。殊の外賑々しく。我等もいつもの如く酒をたべ。慰みを申さうずるにて候にシカ〲。〽御尋ねなされ度きとは。何事にて候ぞ。是は思ひも寄らぬ事をお尋ね候ものかな。我等も終に見申たる事も候はねば。委しくは存ぜず候。さりながら。人々物語りめされたるを承りて候間。語つて聞かせ申さうずるにて候。語先づ猩々と申すは。面體人に違らず。白き耳承る如く。頭の髪長うして。明眼は猿の様にて。手足の爪鷲の如し。物云ふ事人間に等しく。其の上通力を得たる者と承及びて候。されば阮籍といふ人。封溪と云へる所にて。慥に見申されたると聞及びて候。惣じて猩々は。山谷の間に在つて。海川をも栖とし。酒を好み。一所集まり舞ひ遊び。壽命長く目出度き者にて候。若し人家に出入仕候へば。必らず其の主富貴の身と成ると承りて候。さて又猩々を捉らへ。鞭などにて打つて其の血を取り。毛氈を染め。猩々皮と號し。日本にても重寶致すと承り候。さりながら。猩々を取るは大儀なる事にて有るげに候。其の仔細はまた。里遠き山川の側に。酒甕に酒を湛へ。ひしやくを打置き申にて雜を拵へ。彼の材に結び附け。深く忍びて待ち候へば。猩々酒の香につき。現れ出づる。恨めしや我に此の酒を吞ませ。殺さんと謀る人の心のうたてさよ。構へて此の酒を吞み殺さるゝな。いざや歸らんと申すが。さすが畜類にて候ぞ。酒の香に心ひかれ。甕の側に立寄り。試みにとて少し飲む味に心をうつし。命を取らるゝを打忘れ。盃にうけて飲み。或はひしやくにて飲み。心の儘に飲む程に。後には醉出で。足元亂れ。彼の履をはき。戲れ遊び候を。人々走り寄り。生捕ると承りて候。されば古き文にも。猩々能言不離禽獸と記されたり。誠に賢き者と申せども。酒に心を取られ。命を捨つる事。あさましき事にては候はぬか。先づ我等の承りたるは。かくの如く御座候。何と思召し御尋ねなされ候ぞ。ワキシカ〲。〽其は氣の毒なる事を仰せ候。それは疑ふ所もなく。猩々にて御座あらうずると存じ候。最前申す如く。猩々出入仕候へば。必ず富貴榮花に成ると申し。彌々何事も目出度う御座あらうずると存じ候。是と申すも。父母に孝ある御心中。正直なる故と存じ候間。急ぎ酒を湛へ。彼の猩々を御待ちあれかしと存じ候。尤もにて某は罷歸り。重ねて參り酒をたべうずるにて候。

正尊（しやうさん）

アヒ　女

始て〇靈皆々出て〇某もついて出て〇太鼓座に下居る〇ワキ呼出す〇

〽御前に候。シカ〲〽心得申して候。扨も〲迷惑な事を仰付けられた。さりながら。武藏殿の御意ないつとも申されぬ。急ぎ參り見て參らうと思ひます。女シカ〲。誠に。委しい事は知られども。此度土佐坊。熊野の詣の由にて上り申されたを。何れものお疑ひなさるゝも尤もなことで御座る。其の上土佐坊の心を。各いろ〲と引いてみさせらるれども。曾て樣子が知れぬによつて。最前靜を二人迄なされ。樣體をとくと見て參れと仰付けられたが。餘程間もありけれども。今に戻らぬにより。いよ〲不審に思召され。また姿を見せに遣さるる。此の樣な氣味の惡い事は御座らぬ。何かと云ふ内に是ぢや。どうやらいから内が

がしいやうな。どうぞ此の塀へ上つて内の様子を見よ。橋掛りの高欄に上り。シテ柱の内を見て。驚き落ちる體。橋掛りにて。なう〳〵。恐ろしや〳〵。最前遣された禿を二人ながら切殺した。これはいかな事。扨も〳〵かはいや〳〵。今日是處で切られて死なうとは思ふまい。是につけても。孫子に傳へてもさせまいものは宮仕へぢや。今日は人の身の上。明日は我が身の上と申すが。行末の事が思はれて泪がこぼるゝ。扨また内の様子も只事ではない。夥しい事ぢや。早う戻つて此の様子を申上げうと思ひます。シカ〳〵。へ扨も〳〵。恐ろしや〳〵。さり乍ら。此の使に參つたによつて。妾が命はまづ恙ない。今一足さきの使に參つたならば。定めて妾も切らるゝであらう。扨も〳〵あまの命を拾うた事ぢや。如何に武藏殿へ申し候。只今土佐坊が宿所の體を見て候へば。最前遣された禿は二人ながら。土佐坊が門口に切殺して御座る。又内の様子を見て候へば。大幕を引き弓を張り矢を負ひ。皆物の具をして。今にも寄せ來る様子に見え申す。中々熊野詣の氣色は少しも御座なく候。急ぎ此の由御申上げあれかしと思ひ候。シカ〳〵。へ尤もにて候。切戸より入る。

大藏流は次の通りにする。へ何かと云ふ中に爰ぢや。なう〳〵白拍子にて候が。歌の望みは候はぬか。申し〳〵。歌の望みは御座ないか。清水の地主の櫻か。散るか散らぬの。散るも散らぬも嵐こそ知れ。ト云うて。樂屋を覗ひ見る體にて。なう〳〵。恐ろしや〳〵。以下本文通り。

同　替の間

アヒ　家來
同　召仕の女

へ案内とは誰にて候ぞ。へ其のことにて候。頼うだ人は道より散々の體にて候間。御出での事は申上ぐべきやうも御座なく候。へさあらば其の由申さうずるにて候。へいかに申上げ候。武藏殿御出であつて。御目にかゝり申さうずると仰せられ候。いや早や是へ御出でにて候。

君も寢所に入り給へば。皆々退出申しけりの謡過ぎて。中入　女へこれは静御前の御内に仕へ申す女にて候。妾唯今罷出ること餘の儀にあらず。後留の如し。

金剛流の時は。判官静供三人程出て。其後より狂言出る。武藏坊は引幕にて出る。尤も金春流も同斷。但しワキ辨慶一緒に出る。

石橋（しやつけう）

亂序にて出る。　アヒ　仙人

へか様に候者は。天竺の側に住む仙人にて候。我れ清涼山に望みあるにより。度々かの石の橋の下へ來たれども。未だ仙人の通力至らざるにより。石橋を渡る事ならず。今に望み叶はず候。其の仔細は。國土世界の内に。橋多き中にも石橋と申すは。人間の渡せる橋にてはなし。おのれと出現したる石の橋にて。其の長さ三十丈に餘り。幅は尺にも足らず。狭まり反つたる所な。物に譬ふれば。虹の吹いたる形にて。雲に聳えて見えたり。下は數千丈あつて。瀧壺までは深澤うして見えわかず。いか程ありとも知れ難し。水の深さは泥犂もしらず。上は瀧の絲雲より落つる如くにて。嵐に響き夥し。橋の上には苔むして。滑かなる所もあり。此の橋の本に望み渡らんとするに。目もくれ肝潰れ。足ふるひ渡るべき様もなし。誠に空をかくる翼までも。羽を休めかぬる程の險難なり。されども向ひは文殊の淨土にて。紫雲たなびき笙歌の聲きこえ。奇特あらたなれば。我も〳〵と望みをなせども。石橋を見ては渡らんと云ふ人もなし。されば、いかなる貴僧高僧も。此の橋に望みて月日を送り。難行苦行なし。

佛力にて渡り申すが。我が分として難行苦行も叶ふべからず。固より佛力を以て渡る事もなるまじく候程に。いか程清涼山へ望み有りても叶ふまじいと存ずる。さりながら。今の身にてこそならずとも。仙の法至るに於ては。清涼山に參るべき間。彌々仙家に入つて仙法を勵まうと存じ候。さてまた惣じて橋といふものゝ由來を尋ぬるに。天地開闢より此の方。森羅萬象惠を請け。貴賤國土に渡る，これ卽ち天の浮橋なりと云へり。何ぼう有難き事にて候。寔に橋の名所様々にして。水波の難を遁れ。萬民悦びをなすに依つて。尺にも足らぬ橋なりとも。渡せる人は佛の納受あり。此の世にては比びなき樂にほこり。來世は佛果に到ると申す。かるが故に橋を架くるは。人間の慈悲の中の第一と云へり。さればさゝやかなる橋にても。疎かに存じて渡らうずる事にてはなく候。や。そなたがどどめくは何れぢや。何と獅子の出ると云ふか。是はいかな事。是は何と致さうぞ。いや／＼。此の所に居たらば。獅子の勢に當つて。怪我をしては成るまい。命全うしてこそ。清涼山への望もあるべけれ。先づ急ぎ罷歸り。隨分仙の法を勵むで。此の石橋を渡り。多年の望を叶へうと存ずる。またこそ是處に來たらめと。勇みをなして。歸りけりいさみをなして歸りけり。觀世流に亂序なし。

同

仙人五人立。または
アド三人にても。

アヒ　仙人

シテへいざ／＼花を眺めん／＼。罷出でたる者は。天竺五臺山清涼山。大聖文珠に仕へ申す者にて候。唯今罷出る事餘の儀にあらず。此度日本より。大江の定基といふ人出家し。寂照法師と名づけ。唯今この所へ渡り給ひて候。それに就き。文珠より深き思召の御座候間。先づ何れもを呼出し。談合致さばやと存ずる。なう／＼何れも御座るか。四人へ何れも是に居ますする。シテへちと相談致す事がある。先づかう御座れ。ト云うて一の松までシテも同道にて來るなり。四人へ心得た。さて談合とは何事で御座る。シテへ別の事でない。語つて聞かせうよう聞かしめ。四人へ心得た。シテへ先づ此度日本より。大江定基と申す人出家し。寂照法師と名づけ。唯今この所へ來り給ひ。石橋を渡り。文珠の淨土を見物申さんとの御事なり。忝くも大聖文珠は。嶮しき山嶮の姿と御身を變へ。御出でなされ。寂照に出合ひ給へば。案の如く寂照申さるゝは。此の橋を渡り。文珠の淨土を見物申したき様申されければ。世に名を得し貴僧高僧たちも。難行苦行仕り給ひてこそ。此の橋を渡し給ふ。先づ御覽候へ。此の瀧波の雲より落ちて。數千丈の瀧壺までは霧深く。峨々たる巖の上に。僅かにかゝる石橋。神變佛力ならでは。誰人か此の橋を渡り候べき。又向うは文珠の淨土なれば。常に四種の花降りて。笙歌の聲斷えず。日前に奇特あらたなる由申されければ。寂照法師も之をもてあまされ。此の橋を渡る事思ひとゞまられた。アドへ是は尤もぢや。シテへ然れども大聖文珠は此の法師の心中を愍し給ひ。せめての御事に。獅子とらでんの舞樂をなして。見せ申さんとの御事ぢやが。何と奇特な事ではないか。四人へさて／＼それは奇特な事ぢや。シテへ我等如きに至るまで罷出で。かゝる舞樂は例少き事なれば。見物に罷出でよとの御事ぢやが。何と喜ばしい事ではないか。アドへこれは悦ばしい事ぢやなあ。シテへそれならばいざ參るまいか。四人へ一段とよからう。シテへさあ／＼。來さしめ。四人へ心得た。シテへさて何と思はします。か

様の事は此の年になるまで。終に聞いた事がござらぬ。これは定めて賑々しい事であらう。アドへおしやる通り。例少い事ぢやに依つて。賑々しい事であらう。二のアドへ殊に牡丹の花盛りなれば。一入見事であらう。シテへいや。何かといふうちに石橋のほとりへ来た。先づ花を見物せう程に。何れも下に居さしめ。四人へ心得た。シテへ何と思はします。獅子とらでんの舞楽もまだ時期も早いに依つて。竹筒を開いて酒宴を始めうではあるまいか。四人へこれは一段とよからう。シテへそれならば何れものうち酌に立たしめ。四人のうちへ心得た。これより酒盛りあつて。シテ小舞あり。アド小舞謡うて居るうちに。シテ立つて橋懸りを見て。シテへやあ〳〵。何と云ふぞ。はや獅子出るといふか。いや。なう〳〵。獅子が出るといふ。四人へ何ぢや。獅子が出る。シテへ中々。それに就き何と思はします。舞楽は見たうは思へども。何れも此の様に足も立たぬ程酔うて居て。若し獅子の勢にあたつて。怪我をすればわるい。命あつての物種ぢや。いざ和歌をあげて歸らう。四人へ一段とよからう。シテへまたこそ是處に來たらめと。勇みをなして歸りけり〳〵。

舎利（しやり）

アヒ　能力

ワキ道行過ぎて呼出す。へ案内とは誰にてわたり候ぞ。シカ〳〵。へ尤も當寺の御靈寶にてあり。聊爾には拜ませ申さず候へどもさりながら。御出家と申し。殊に其はお舎利を守るものにて候間。さあらば拜ませ申さうずるにて候。シカ〳〵。へ先づかう御通り候へ。脇下に居て印を結び聞く仕舞。へこれこそ天下に隠れもなき佛舎利にて候へ。心しづかに拜み給はうずるにて候。シテ中入する。其の儘驚いて。へ桑原〳〵。搖り直せ〳〵。扨も夥しう鳴つた事かな。今のは雷が落ちたか。但し又地震であつたか。したゝかに鳴つたことぢや。まづ舎利堂へ參らうと存ずる。爰に二舞臺へ出る。へこれはいかな事お舎利がない。や。これなるお僧は。先にお舎利を拜ませた人ぢや。扨お舎利をば何とめされたぞ。ワキシカ〳〵。へいや其方に拜ませてより後。終に誰にも拜ませぬ。知らぬとおしやるとも知らせいではおくまい。出家の妄語を云はずとも有り様におしやれ。ワキシカ〳〵。へ誠に天井が抜けてある。扨も〳〵奇特なる事かな。今度思ひ合はする事の候。先づ是につき昔の物語の候を追付け語つて聞かせ申さう。語昔釋迦佛御入滅の御時。人間は申すに及ばず。鳥獸畜類に至る迄。是を歎き悲しまざるといふ事なし。爰に足疾鬼といへる外道。是は同じく參り歎き悲しみ申すを。何れの御弟子達も御覧じて誠と心得。打解け給ふ所を。かの足疾鬼よく隙をねらひ　釋迦佛の舎利骨をひんもぎ虚空をさして上り申す。されば此の足疾鬼と申すは。一馳せに千里を歩む足はやき鬼なり。かるが故に其の名を足疾鬼と名付く。御弟子達集り給ひ。如何あるべきぞと御談合の所に。中にも又阿難と申す御弟子。進み出て仰せける様は。兎角韋駄天を追手にかけ申されて然るべきとの御事なり。此の韋駄天と申す佛は。鐘を三つ撞く内に。三千大千世界を渡り給ふ。まづ鐘を一つ撞いて寺を出で小千界を廻り。二つ撞いて中千界を廻り。三つ撞いて大千界を廻り。はや元の地に歸り給ふ。斯程はやき佛にて渡らせ給ふにより。頓て韋駄天を追手にかけ給へば。韋駄天追掛け片時にかの佛舎利を取返し。それより帝釋天に渡し給ひ。帝釋天より道璿律師に渡し。道璿律師より我が朝に來り。忝くも當寺の寶とな

し給ふ。されば昔の疾鬼が熱心。この寺に綫り望みをかけ。かの舍利を奪ひ取つて踏りたると推量仕りて候。其存ずるは。昔も今も佛力神力に變る事はあるまじく候間。佛前に參り祈念を致し。韋駄天を追手にかけ申さうずると存じ候が。さて其方は何と思召し候ぞ。ワキシカ〳〵。へ尤もにて候。斯樣に申す内にはや時刻も移り候間。さあらば急ぎ韋駄天に祈誓申さうずるにて候。方々も力を添へて給はり候へ。爰にて大小の前にて珠數を取出し。片膝を立て。へ如何に韋駄天憍に聞召されよ。昔の疾鬼が熱心此寺に來り。かの佛舍利を取りてゆく。實に古へ今とても。佛力神力に變る事あるべからず。フシ一心頂禮萬德圓滿釋迦如來。眞實信心疑ひなし。かの佛舍利を取返し。再び當寺の寶となし給へ。南無韋駄天。南無韋駄天。南無韋駄天。うつむき。すり切り。間に居。切戸より入る。珠數は懷中する。

春榮（しゆんえい）

アヒ　從者

ワキ呼出す。へ御前に候。シカ〳〵。へ畏まつて候。昔承り候へ。囚人のゆかりとて人來るとも。禁制の由申し候へ。其分心得候へ〳〵。小太郎シカ〳〵。へ案内とは誰にてわたり候ぞ。シカ〳〵。へ中々此家の內にて候が。如何やうなる御用にて候ぞ。シカ〳〵。へ尤も引合せ申したく候へども。囚人のゆかりに對面は堅く禁制にて候間。中々叶ひ申すまじく候。シカ〳〵。へさあらばそれに御待ち候へ。まづ其の由申して見うずるにて候。如何に申上げ候　春榮殿のゆかりの人にて候か。高橋殿に御對面ありたきとて。これ迄御出でにて候。シカ〳〵。へ禁制の由申して候へば。春榮殿の御事は別して御勞りにて候と存じ。まづ斯樣に申上げ候。シカ〳〵。へ畏まつて候。最前の人のわたり候か。小太郎シカ〳〵。へ其由申して候へば。禁制にては候へども。春榮殿の御事は。高橋も別して勞り申し候間。對面せうずる由申されて候。さり乍ら。大法にて候間。太刀刀を預り申さうずるにて候。シカ〳〵。へ尤もにて候。シカ〳〵。へ是に候。シカ〳〵。へ心得申して候。お腰の物を預り申して候。ワキシカ〳〵。へ畏まつて候。此方へ御通り候へ。ワキシカ〳〵。へ御前に候。シカ〳〵。へ畏まつて候。扨も扨も憐れなる事かな。御兄弟の御情淺からぬ故ぢや。此の上は春榮殿の御命は五百八拾年目出度からうと存ずる。

俊寛（しゆんくわん）

アヒ　船頭

ワキ呼出す。へ御前に候。シカ〳〵。へ畏まつて候。〽思ふ時しあは今こそ限なりけれ。ト云ふ謡の時。狂言船持ち二出で橋掛に置く。ワキ謡一聲〽船子やいとゞ勇むらん。二ノ句狂言〽人は勇めど我はまた。鬼界が島は恐ろしや。是こそ鬼界が島にて候へ。此所にて流人を御渡しあらうずるにて候。

俊成忠度（しゆんぜいたゞのり）

アヒ　家來

シカ〳〵。へ案內とは誰にて候ぞ。シカ〳〵。へ畏まつて候。へいかに申上候。岡部六彌太忠澄の參り申されて候。シカ〳〵。へ畏まつて候。へかう御通り候へ。

鍾馗（しようき）

アヒ　里人

へ斯樣に候は。この邊りに住居する者にて候。今日は隣鄕の市なれば罷出で。用の事な

も達し申さばやと存ずる、や。是なる人は何方より御出であつて。此の所には休らひ給ふぞ。我等の參道ならば。御供申さうずるにて候。シカ〲。へ中々。この邊りの者にて候。シカ〲。へ心得申して候。扨お尋ねありたきとは如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ〲。へ是は存じも寄らぬ事を承り候ものかな。左樣の御事。中々委しくは存じも致されさり乍ら。假初に參り合ひお尋ねあるを。曾て知らぬと申すも如何なれば。少しなりとも承り及びたる通り。御物語申さうずるにて候。語まづ。鐘馗の由來と申すは。およそ武德年中の事にあるげに候。其の折節は唐の高祖天下を切り從へ。隋の世の亂を鎭め。一統の御代となし給ひ。その年號を武德と云へり。天下初めて治り目出度くありしかば。國々より文德の才ある人。面々に我も〳〵と上り。及第せらるゝ。其中にも鐘馗と申すは。稚(いとけ)なき時よりも學問にのみ心を染め。他念もなく。或ひは又螢雪の窓に向ひ道を學び給ふにより。其の身の學問人にすぐれ。世上の聞え萬民うやまひ。類(たぐひ)少なき人にて御座ありたると申す。さる程にかの鐘馗常に思召すは。われ及第致し君に仕へて忠節を盡し。後代に其の名を殘さんと望みをなし。ある時上つて及第せらるゝ。定めて思ひの儘にあらうずると存ぜらるゝ所に。何とか候らん落第致し。その望みいたづらになりたると申す。餘の人ならばまづながらへて。春秋(はるあき)の來(きた)るを待ち。また及第に上るべきを。此人は無雙の才ありと思ひ給ふに時の運にやよりけん。志を遂げざりしかば無念に思ひ給ひ。再び我が路に歸り誰に面を向くべきぞ。命ありても其の甲斐なし。帝都を出る事あるまじきとて。恐ろしく怒りを思し。玉階にて我と頭を打碎き。身を空しうなし給ふ。鐘馗の心中察し申され。皆人の憐れみ是に過ぎたる事は御座なかりしと承りて候。則ち此事君に斯くと奏し給ひければ。帝聞召し上げられ。鐘馗の志類(たぐひ)少なく不憫に思召さるゝとて。御衣の袖を絞らせ給ひ。誠に有難き御事にて候ひけるぞ。かの死骸をば。都の内に納め置き藍袍を蒙り。鐘馗大臣に贈官せられたると申傳へて候。漸く年月を考ふれば。はや百餘年になるとは申せども。その魂魄今に殘つて。奇特をなし申すなどゝ承り及びて候。最前申す如く鐘馗の御事。委しくは存ぜねどもお尋ねにて候間。まづ我等の承りたる通り御物語申して候が。さて如何樣なる仔細により。思ひも寄らぬ事をば尋ね給ひて候ぞ。シカ〲。へさればこそ最前申す如く。鐘馗の御事には。奇特あまたあるやうに承りて候が。儀なる事をば只今こそ承りて候へ。殊に其方(そなた)は終南山より御出であつて參內し給ふ人なれば。古を懷しく思ひ。鐘馗の精魂假にまみえ。奏聞ありたき旨をも語り給ふと推量申して候。帝都の御上りは急ぎに候はんが。暫く此の所に休らひ給ひ。僧にあらず俗にあらずと申す時は。有難き一偈をも御讀誦あらば。重ねて奇特なる事あらうずるかと存じ候。シカ〲。へ何れも重ねて御目に掛かり。御物語申さうずるにて候。シカ〲。へ心得申して候。

白(しら)髭(ひげ)

アヒ　末社

へ斯樣に候者は。江州白髭の明神に仕へ申す末社にて候。只今罷り出づる事餘の儀にあらず。當今に仕へ御申しなさるゝ臣下。君御靈夢の御告あるにより。勅使として只今此所へ御參詣にて候。然れども誰あつて罷り出で。當社の目出度き仔細申上ぐべき者もなきと思

召し。明神はかりに賤しき漁夫と御身を現し。御出でなされ。勅使に逢ひ參らせられ。則ち當社の由來あら〳〵御物語なされて候。誠に珍しからざる申し事にては候へども。我朝と申すは神國にて。在々所々に靈神あまた地を占め給ふとは申せども。中にも當社と申すは。人壽六千歳の初めより此の湖水の邊に住み給ひ。此の湖水の七度迄。蘆原に成りたるを見給ひたる程の齡久しき御神にて渡らせ給ふ。然るに此度勅使の參詣なさるゝ事明神も嬉しく思召され。舞樂をなして慰め申されうず。殊に今宵は天燈龍燈神前に來現の時節なれば。是また勅使に拜み給へ。との御事にて候。それにつき我等如きの末社にも罷出で。かの稀人にお禮申し。又は何にてもお慰みに一曲仕れとの神託により。是迄罷出でた。まづあれへ參りお禮申さばやと存ずる。〽是は當社に仕へ申す末社にて候。此度の御參詣先づもつて目出度う存ずる。それにつき明神は舞樂を奏して慰め申されうずるとのお事にて候。其間に我等如きも罷出で。何にてもお慰みに一曲仕れとの御事により是迄罷出でゝ御座る。何ぞ一曲仕らうか。但し仕るまいか。言語道斷。日本一の御機嫌に申上げた。よからうと思召すやら。ほ先がにつこ〳〵とした。頓て一さし仕らう。フシ目出度かりける時とかや。三段舞。やら〳〵目出度や〳〵な。かゝる目出度き折からなれば。末社の神も顯れ出でゝ謠ひ奏で。是迄なりとて。末社の神は〳〵本の社に歸りけり。

同（勸進聖）

アヒ　神人

氣序にて出る。船棹持ちて出で。一の松に置き。扇を持ち出で。名宣る。

シテ〽斯樣に候者は。江州白鬚の明神に仕へ申す者にて候。さる程に明神の上葺の爲。諸國へ勸進を遣さるゝ中にも。この海上の勸進は某に申付けられて候。誠に。珍しからざる事なれども。白鬚の明神と申すは。天地開闢の昔より。御利生あらたなる御事なれば。此度一紙半錢によらず。奉加ある輩は。現世安穩に御守りあるべき事は疑ひなき御事で候。や。是は明神のめでたき仔細。先づ罷出で勸進を致さばやと存ずる。ト名宣り。一の松へ船を取りにゆき。持ち出で。ワキ座に居る。道者皆々出る。次第〽結びし講の末とげて〳〵。清水詣で急がん。立頭〽これは。北國方の者にて候。此度都へ上り。清水へ參詣申さばやと存じ候。道行〽住馴れし。わが故里を立出でゝ〳〵。海津の浦に着きにけり〳〵。足にまかせて行く程に〳〵。海津の浦に着きにけり。立頭〽急ぐ程に。海津の浦に着きて候。これより船に乘らうずるにて候。立衆〽尤もにて候。立頭〽幸ひ此所に存じの者の候間。船をかり申さう。先づ是に暫く御待ち候へ。立衆〽心得申して候。立頭〽此の内へ案内申し候。船頭〽誰にてわたり候ぞ。立頭〽我等にて候。清水講を結び候處に。願成就致し。此度講中同道にて都へ上り申し候。船を出して給はり候へ。船頭〽折節氣色もよく候間。頓て船を出し候べし。先づ斯う御通り候へ。立頭〽心得申して候。船頭樂屋へ入り。船持ちて出る。船頭〽皆々道者衆。船に召され候へ。皆々乘るなり。船頭〽さらば船を出し候べし。扨々今日は一段の氣色にて候。道者衆の仕合せにて候。立頭〽御申しの通り。足のはやき船にて滿足申し候。シテ〽これは道者船が見ゆる。さらば船をよせて勸進を致さう。立頭〽如何に船頭へ申し候。向ふより押して參る小舟は何船にて候ぞ。船頭〽あれは白鬚大明神の勸進舟にて候よ。シテ〽いや道者衆。これは御大儀にお上りで御座る。船頭殿。氣色がようて舟の足も早う御座り思召す儘ぢや。扨これは白

能大明神末社上葺の奉加に。國々へ勸進に參る。この海上は某の請取ぢや。さあ〳〵勸めに入らせられい。立頭〽勸めに入りたう御座れども。我々は皆貧者で候。此度觀音講を結んで。清水參詣の爲罷上る。何れも路銀の用意さへない。勸めには入り得ませぬぞ。シテ〽扨々御歷々にも似合はぬ事を仰せらるゝ。さりながら。大分と申せば御大儀にあらう。さあ〳〵少しづゝ入れさせられい。立頭〽いや。とかく大分にも少分にも持合せがない。外の舟を勸めさせられい。シテ〽これは御卑怯で御座る。惣じて神德には。七つの入替へと申せば。大儀は一度なれども。末代その惠みはある事ぢや。すれば各の爲になる事ぢや。さあ〳〵入れさせられい。立頭〽さりとては金錢を惜しみ僞を申すではない。とかく持合せがない。奉加につく事はなりませぬ。シテ〽さりとては必強い衆ぢや。一錢二錢なりとも入れさせられい。船頭〽これ〳〵お聖。最前から聞いて居れば。持合せがないと云ふ事さうな。あれ〳〵外にも舟が見ゆる。あの船へ行かしめ。シテ〽やあらおぬし聞えぬ者ぢや。そちもこの海上で渡世するでないか。明神の事ならばともに〳〵勸めて吳れう者が。外の舟へ行けと云ふ事があるものか。あの船に構はずとも。さあ〳〵入れさせられい。船頭〽これ〳〵。そなたは聞分けもない。道者衆が最前から色々と斷りをおしやるによつて。身共が挨拶をするに。まだ事くどうおしやる。なう〳〵道者衆。あの樣な者に構はせられな。シテ〽やい〳〵。道者衆が何とおしやらうとも。明神への御奉公に何卒と云ふ筈ぢや。とかく道者衆勸めに入らせられい。さもなくば爲になるまい。さあ〳〵入れさせられい。船頭〽やい〳〵。やいそこなやつ。おのれ出舟の邪魔をするか。此の上は道者衆が奉加につかうとおせあつても。身共が入れさせぬ。シテ〽おのれ。それは眞實云ふか。船頭〽何と嘘に云はうか。シテ〽憎い奴の。誠に云はゞ。たつた今日に物を見するぞへ。船頭〽それは誰が。シテ〽身共が。船頭〽目に物を見すると云うて深しい事もあるまい。シテ〽構へてくやむなよ。船頭〽何しにくやまうぞ。シテ〽悔やむな男。悔やむな道者。大嶺の雲を凌ぎ。大嶺の雲を凌ぎ年行の。功を積む事一食斷食立行居行。斯程尊き勸進聖に。などか驗のなかるべき。ほろおん〳〵南無水神〳〵。早笛になる。太鼓打上。一の松に一二。鯛〽不思議や沖の方よりも。同〽不思議や沖の方よりも。大鯛一獻現れ出でゝ。道者に向ひ。怒れる有樣。まのあたりなる奇特かな。鯛舞一段。打上る。鯛〽それ我が朝に。美物の數は多けれど。中に異なる。近江鯛の鱠の味こそ勝れたれ〳〵。同〽道者はこれを見るよりも。かゝる奇特に驚きて。重代の破れ小袖。十德帷子皆ぬぎ捨てゝ。勸進聖に與へければ。鯛は悅び踊りはねて。舟の綱を口にくはへて。ぱつくが間を片時が程に。堅田の浦に引着けて。それより都へ上せけり。かみ一人よりしも萬民。かみ一人よりしも萬民迄。鯛おる事こそめでたけれ。

代主（しろぬし）

アヒ　里人

ワキツレ呼出す。シカ〳〵。〽所の者とお尋ねは。誰にて渡り候ぞ。シカ〳〵。〽心得申して候。シカ〳〵。〽所の者にて候が。如何樣なる御用にて候ぞ。ワキシカ〳〵。〽これは存じも寄らぬ事を承り候ものかな。我等も此所には住居仕れども。左樣の御事委しくは存じも致さぬさりながら。初めて御下向ありお尋ねなさるゝな。曾て存ぜぬと申すも如何なれば。大方承及び

たる通り。御物語申さうずるにて候。語先づ此の葛城加茂の明神と申すは。則ち當國三輪の明神の御子にて。事代主と申し奉り。雙びなき靈神にて御座候。それを如何と申すに。むかし天照大神御孫の尊を。高天の原より天降りし給ひ。此の國の主になし給はんとありし時。障りをなす神あつて。樣々仔細御座ありけるを。此の神の御心直にして。明なれば。是非を辨へ給ふに依つて。尊天降り給ひ。天下泰平にして。國土安穩に。今この御代までも豐に治まり。目出度き御事にてありげに候。また神代の古へ。津の國三島といふ所に。溝杭といふ人あり。此の溝杭に。活玉依姫とて。容顔美麗なる娘一人ましましけるを。事代主は聞し召し及ばせ給ひ。忍び〳〵に通ひ給ふが。彼の姫の御目には代主と見えさせ給ひ。餘の人の目には。丈八尋ばかりなる。鰐の形と化して契をなし。年月を經るほどに。其の御志淺からず。程なく三人の御子を儲け給ふ。第一の御子をば加茂の大君と申し奉る。人皇始まつて官職高く上り給ふ。次に二人の御娘ましましける。姉の命は神武天皇の后に立ち給ふ。また其の次の御娘は。綏靖天皇の后に立ち給ひ。何れも皇子御誕生あり。目出度き御事なれば。此の神の御子孫は。何れも繁昌致すが故に。加茂氏三輪氏と申して。取分き目出度き御事にて候。さる程に此の葛城高間の山と申すは。胎金兩部の峰と名づけ。金剛山は三國に。雙びなき寶山なれば。事代主は。此の山に御宮作りして跡を垂れ給ふ。さるに依つて御威光もいやまさり。靈驗殊にあらたにして。一たび歩を運び給ふ御方は。富貴繁昌。子々孫々にまで安樂なる事は。疑ひもなき御事にて候。最前申す如く。當社の目出度き仔細。先づ承及びたる通り御物語申して候が。さてお尋ねは如何樣なる御事にて候ぞ。シカ〳〵。〽これは奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに。都の加茂より當社へ御參詣を。神慮に嬉しく思召され候へども。誰やの者か罷出で。神祕申上ぐべき者もなきと思召され。かりに宮仕の姿と御身を現じ御出でなされ。當社の目出度き仔細。御物語ありたると存じ候。此の上は暫く御逗留なされ。信心をなし給はゞ。なほも奇特のあらうずるかと存じ候。シカ〳〵。〽重ねて御用も御座候はゞ承り候べし。シカ〳〵。〽心得申して候。

【す】

須磨源氏

アヒ　里人

〽これは須磨の里に住居する者にて候。今日は長閑に候間。浦に出で四方の景を眺めばやと存ずる。や。これに見慣れぬ御方の御座候。何方より御出でにて候ぞ。〽なか〳〵此の邊の者にて候。〽心得申して候。扨お尋ねあり度きとは如何なる事にて御座候ぞ。〽これは存じも寄らぬ事を承り候ものかな。左樣の御事は我等如きの卑しき者の存じ候仔細にては御座なく候へどもさりながら。お尋ねあつて。曾て存ぜぬと申すも如何なれば。大方承りたる通り御物語申さうずるにて候。〽抑も光源氏と申すは。朱雀院の末の御子にて御座ありたると申候。十二歳の御時宣り召されたると承りて候。其の頃高麗國より相人の渡りしが。此君を見參らせ不思議の相ましますとて。御名を光君とつけ參らせ。二十五の御時朧月夜の内侍の守とやらんに御心を通はせ給ひしが。御科により此の須磨の浦に遷され給

ひたると申し候。思召し依らざる謫の御住居にて。御徒然(つれづれ)には琴を弾じ或は歌を遊ばされたると申し候。其の歌に。恋ひわびて。鳴く音にまがふ浦浪は。思ふ方より風や吹くらん。斯様に詠じ給ひたると承及びて候。まことに侘しく御暮しなされしが。其の頃天下に不思議の奇瑞様々ありければ。また都に召し還され。數々の官を經て太政大臣まで御昇りありたると承りて候。御一代榮華に御榮えなされ。まことに目出度く御座ありたると申す。總じて源氏の御事は。紫式部とやらんの源氏物語に委しく書きあらはし給ひたると申せども。我等如きの賤しき者は存ぜず候。最前申す如く。先づ我等の承及びたる通りは此の如くに御座候。〽これは奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに。疑ふところもなく。光源氏假に出現じ御詞を交し給ひたると存じ候間。此の所に暫く御座候ひて。重ねて奇特御覧あれかしと存じ候。〽御逗留の内は我等お宿を參り候べし。〽心得申して候。

墨染櫻(すみぞめざくら)　アヒ　里人

〽是は。深草の傍に住居する者にて候。今日は長閑に候程に罷出で。心をも慰めばやと存じ候。是は早や花盛りに候。立寄り眺めばやと存じ候。あら不思議や。是なる枝に短冊の附いて候。いかやうなる人の御掛け候ぞ。いや。これに見馴れ申さぬ御僧の御入り候が。いづ方より御出でなされ候ぞ。セリフ常の如し。〽語先づ。此の所を深草山深草野邊と申し候。さてまた此の櫻は。いつ頃より咲き初め候やらん。古人云傳へし事もなく候へども。仁明天皇ひたすら櫻にめで給ひ。春になり候へば。櫻狩とて此の所へ御幸あつて。御寵愛なされしかば。數多歌人も此の花題して御遊なされ候。然るに仁明天皇。嘉祥三年崩御ならせ給ふ間。此の深草山に葬り奉る。今の御陵(みさゝぎ)これにて御座候。其の頃數多の近臣御座候中に。良峯の少將宗貞卿とやらん帝の御別れを悲しみ。御出家ありたると承及びて候。誠に此の櫻は崩御の後は眺め來る人もなく。久々徒らに荒れ候へども。春を忘れ申して咲き候間。我等みさゝぎの櫻と申習はし候。まこと唯今は。此の後セリフ。常の如し。〽さては。舊院に仕へ御申しある御方にて候か。何をも存ぜず近頃迷惑仕り候。扨は疑ふ所もなく。櫻の精にて御座あらう。これよりセリフ。常の如し。

住吉詣(すみよしまうで)　アヒ　供人

ワキ呼出す。〽御前に候。シカ〳〵。〽畏まつて候。皆々承り候へ。都より光源氏當社へ御社參にて候間。社人の方々罷出で。道を作り。社内を潔め候へ。〽其の分心得候へ〳〵。ト觸廻る。またキツト呼出す。〽御前に候。〽畏まつて候。〽いかに申し候。源氏當社へ御社參なされ。御立願あつて祝詞を上げられうとの御事にて候。

【せ】

誓願寺(せいぐわんじ)　アヒ　門前の者

〽これは都誓願寺門前に住居するものにて候。爰に一遍上人と申して貴き上人の御座候が。この間當寺へ御着きなされ。結縁のために有難き御札を弘め御申しなさるゝ。是に就いて奇特なる事の御座候。昔より誓願寺と打ちたる額をのけ。聖人の御手跡にて六字の名號

を遊ばされ。御堂へうつし給ふと所の面々夢に見申して候。一人や二人ならば。さながら夢とも思ひ。誠しからず存ぜうずれども。あまねく是を見申して候。あまり奇特なる事にて候間。あれへ參り。此事聖人へ申上げばやと存ずる。この間は御見舞申上げず候。シカ〳〵。〽只今參る事餘の儀にても御座なく候。そと不審申上げたき事の御座候ひて只今參いて候。シカ〳〵。〽其事にて御座候。今夜所の面々奇特なる夢を見申して候。其の仔細は。昔より誓願寺と打ちたる額をのけ。聖人の御手跡にて。六字の名號を遊ばされ。御堂へ移し給ふとあらたなる夢を見申して候。されども一人や二人ならば。さながら夢とも思ひ。誠しからず存ぜうずれども。あまねく是を見申して候。あまり奇特なる事にて候が。もし御前へも何とぞ御告げばし御座候かと不審のため。是まで參じて候。シカ〳〵。〽我等も門前に住居申せども。左樣の御事委しくは存じも致さず候さりながら。お尋ねにて候程に。大方承りたる通り。御物語申さうずるにて候。語まづ。この御寺と申すは。昔人皇三十八代天智天皇の御願所にて御座ありげに候。其後桓武天皇の御時。奈良の都よりこの平安城に移し給ひ。今に絶えせず晝夜の別(わか)ちもなく。貴賤の群集仕る御事にて御座候。さる程に當寺の御本尊と申すは。ある時天智の帝。正身の彌陀如來の御相好を拜みたう思召され。大道に向ひ御祈誓ありしに。ある夜の御告にいづくともなく。二人美女來て。誠に正身の阿彌陀佛を拜みたう思召さば。爰に賢門子芥子國と云ふ。親子の佛師あり。この佛師に仰付けられ。阿彌陀を拜ませ給へと。あらたに示し給ふ。則ち御告げに任せ。急ぎかの佛師を召され仰付けられけるに。其時春日大明神人間と化して。夜な〳〵顯れかの佛師にまじはり。この御本尊を作り給ふ。さあるによつて。春日の御作と崇め申す御事にて御座ありげに候。又かの賢門子と申す佛師。是は猶以て人間にあらず。阿彌陀如來の化現にて御座ありたると申すが。當寺の御本尊を作り給はん爲。假に佛師と顯れ。是を作り給ふにより。正身の阿彌陀如來と申すは。この御本尊に限りたる御事にて御座あるよし承及びて候。また和泉式部と申し候は。上東門院に宮仕へし給ひしが。敷島の道にすぐれ。明暮歌をよみ人の心をいさめ。三十(みそぢ)あまり迄。後世の事をばさのみ思召し出されずしかども。一人の御娘の御座ありしを。先にたて給ひ。老少定まらぬ浮世とは申しながら。是を智識の教へとさとり。この誓願寺に柴の庵を結び。念佛三昧にして。終に誓願寺にて往生の素懐を遂げ給ひたると承及びて候。則ちあれに見えたるが。和泉式部の石塔にて御座候。最前申上ぐる如く。委しくは存ぜず候へども。まづ我等の承りたる通り。御物語り申して候が。扨これは何と思召しよりてお尋ねなされ候ぞ。シカ〳〵。〽さればこそ奇特なる事を承り候ものかな。所の面々夢に見申したるも。斯樣の謂れにてこそ候へ。誠や和泉式部は。歌舞の菩薩の化現にて御座ありたると申すが。御本尊より御使として。再び閻浮に顯れ。上人にまみえ。念比に仰せ渡されたると存じ候。かゝる有難き事は御座あるまじく候間。此上は急ぎ六字の名號を遊ばされ。御堂にうつし御申しなさるゝならば。皆人有難く存ぜうずるにて候。シカ〳〵。〽さあらば此の由都の中へ相觸れ申さうずるにて候。シカ〳〵。〽畏まつて候。〽皆々承り候へ。此度御本尊よりの御告げにより。昔より誓願寺と打ちたる額をのけ。上人の御手跡にて。六字の名號を遊ばされ。御堂へ移し御申しなさるゝ間。斯樣の

有難き様體な。皆々罷出て拜み申し候へ。其分心得候へ〳〵。（観世流のワキの時は夢の事云ふ事なし。）〽此度當寺へ御出であつて結縁のため有難き御礼を弘め御申しなさるゝ間、只今參らばやと存ずる。や。是に御座候は遊行上人にては御座なく候か。シカ〳〵。〽畏まつて候。扨お尋ねありたきとは如何やうなる御事にて候ぞ。ト云ふ。

西王母

アヒ　官人

（作り出て。太鼓に直ぐに云ふ。）〽斯様に候者は。周の穆王に仕へ申す官人にて候。此の君賢王にて御座候により。吹く風枝を鳴らさず。民戸ざしなさゞず。降る雨土塊を破らぬ。めでたい御代なれば。何事も思召す儘の折柄にて御座候。さる程に今日は清涼殿に御幸あつて。御遊あるべきとの御事なれば。月卿雲客官人仕丁に至る迄。皆々其分心得候へ〳〵。（ト云うて。太鼓下に居る。中入過ぎて。）扨も〳〵めでたき御事にて候ひけるぞ。只今參内申されたるは。如何なる人ぞと存じ候へば。西王母と申す仙人にて候。誠に天下治りめでたきみぎんには。聖人も出生し。仙人も山より出て出世すると申すは。今この時に相當りて候。さればかの王母は三千年に一度。花咲き實のなる桃花を我が君に捧げ申されて候。此の桃花についてめでたき謂れの候。それを如何にと申すに。まづ西王母は崑崙山に住む仙人なるが。兄弟の子を持たるゝ。兄をば金舎と名付け。弟をば金玉と申す。西王母常に存ぜらるゝは。何にてもあれ此の世において重寶なる物を求め。兄弟の子に與へ申さうずると思案をめぐらし。兎角金にまさる寶はあるまじきとて。許多金を集め。まづ兄の金舎に與へられければ。我等は仙人の子にて何につけても望みはなし。まして金銀などは少しもいらぬとて返し申さるゝ。其の時西王母はまた弟の金玉に與へ申されければ。現在の嫡々にだにも召されぬ金を我等賜はるべきか。其の上仙人の子と生れ。通力は思ひの儘なり。金に望みはなきとて是も返し申さるゝ。西王母存ぜらるゝは。日頃の志は徒事になりたりさり乍ら。兄弟の者の心中實にもと思ひ。それよりして宮殿樓閣に家を作り。二人の子に與へ。件の金を兄弟の者の中垣に埋み申されけるに。其の上より何となく桃の木一本生え出で申し。兄の金舎の方へさしたる枝には花咲き。弟の金玉の方へさしたる枝には實なり申す。是を則ち西王母の園の桃と申して。一つ服し申せば。三千年の齢を保つ桃なり。東方朔と云へる仙人は。この桃を三つ服し申されたるによつて。九千歳の齢を保つ。今この君の御威光めでたきにより。桃花桃實共に。一度に左右の枝に出生したる事、ためしなき御事にて候。然ればかの西王母は重ねて桃實を持つて。參内致し君に捧げ申さうずるとて罷歸られて候。我君この桃をきこし召されなば。萬々歳の齢を御保ちあるべき事は。疑ひもなき御事なり。斯かるめでたき桃實を。たゞは如何あるべきぞ。舞樂を奏して御請取りあるべきとの御事にて候間。其の役々は急ぎ御參り候へ。また此の度西王母の姿を見る人迄も。壽命長遠にあらうずる事は疑ひなし。如何にも庭上を清め。男女老少によらず罷出で。斯様のめでたき様體拜み申し候へ。其分心得候へ〳〵。（語つてすぐ本幕にて入る。）

昭君

アヒ　官人

（亂序にて出る）へか樣に候者は。王昭君に仕へ申したる者にて候。さても昭君を胡國へうつされし謂れ。漢の宮女の數三千人に餘りぬれば。其の顏貌を繪圖に寫させ。日每に之を御覽あつて。叡慮に入りたるを召出し給ふ。さるによつて宮女たち。我も／＼と繪師をたのみ賄賂をし給ふ故。繪師樣々に筆を盡くし。花の雜月の顏ばせ。何れを何れと分け難く。妙なる姿に書きなし申して候。中にも昭君は。自からこれ三千第一なれば。それを賴みにや思召しけん。繪師に賂もなかりしかば。あらぬ姿に書きなし申して候。さる程に。胡國の韓耶將は。年來都へ仇をなし。軍の止むまもなく候が。一年帝へ望み申すは。宮女を一人下されなば。和睦致すべき由申上ぐる。帝天下の亂を靜めんために。胡國の望みに從ひ給ふ。さらば宮女を擇めとあつて。彼の繪圖を開き御覽あるに。昭君の顏ばせ劣りしかば。胡國へ遣さるべきに極まりぬ。さて昭君は御暇乞のために。帝へ初めてまみえ給へば。容顏邊りを輝かし。雙ぶ方なき美人なれば。帝もはつと驚き給ふ。いかゞはせんと思召せども。綸言汗の如くにて。是非なく胡國へ遣さるゝ。さて彼の繪師の毛延壽は。昭君を申しく書きし科により。白晝に首を刎ねられて候。さる程に。昭君は歸りの路次に都を出で。せめての事の御慰みにや。車上にて琵琶を彈じ給ふが。四つの緒も朽つるばかりの御泪にて。泣く／＼胡國へ着き給へども。たゞ明暮に都を戀ひ。其の御思召しの餘りにや。終に空しくなり給ひて候を。甲斐なく土中に築き籠め申し。暫しが程は御墓をも淸め候ひしが。父母の歎き給はん事をと存じ。態とかくとも申さず候が。此の程承り候へば。昭君胡國へ赴き給ふ時。手づから柳を植ゑ置き給ひ。我れ胡國にて空しくならば。此の柳も枯れうずると仰せられしが。柳の片枝。枯色の白み渡りて見えて候を。父母あやしめ歎き給ひ。柳の下に日を暮され候。爰に思合はする事の候。惣じて胡國の草は白くして。綠の色は一葉もなく候に。昭君の塚の草は。都の草に異らず。靑々と生え申すに依つて。靑塚と名附け申して候。扨は昭君の靈魂あつて。胡國の草には都の色を現し。都の柳には胡國の色を見せらるゝと存じ候間。先づ父母の方へ弔ひ申し。柳の樣をも見うずると存ずる。へさればこそ。柳の片枝枯れて候。胡國にて昭君を慰め申さんために。折節は舞を舞ひし程に。今も追善のため一さし舞はうずるにて候。いくばくの迷意か琵琶によす。（第三段）思ひ出でたり昭君の。思ひ出でたり昭君の姿は柳の春風に。なびき從ふ胡國の君に。結ぶ契は淺みどり。絲もてつなぐ泪の玉まつりとて奏づる舞こそはかなけれ。

金春の能なり。間なしにもすむ。先づ昭君には間これなきを習とす。

善界（ぜがい）

アヒ　能力

へ是は天臺山。飯室の僧正に仕へ申す能力にて候。唯今罷出る事餘の儀にあらず。なんぼう奇特なる事こそ出來て候へ。それを如何にと申すに。大唐の天狗の首領是界坊。我國においては育王山靑龍寺般若臺に至る迄。慢心の輩を一人も殘らず。皆我が道に誘引せずといふ事なし。此の上は日本に渡り。此の土の佛法に妨げをなし申さうずると存じ。則ち思立ち我が朝に渡り。まづ愛宕山に立越え。太郎坊に案内を乞ひ申されければ。太郎坊罷出て對面せらるゝ所に。是界坊申さるゝ事には。此度日本に渡る事餘の儀にあらず。我が國においては。育王山靑龍寺。般若臺に至る

有難き様體な。皆々罷出で拜み申し候へ。其分心得候へ〳〵。（觀世流のワキの時は夢の事云ふ事なし。）〽此度當寺へ御出であつて結緣のため有難き御禮を弘め御申しなさるゝ間、只今參らばやと存ずる。や。是に御座候は遊行上人にては御座なく候か。シカ〳〵。〽畏まつて候。扨お尋ねありたきとは如何やうなる御事にて候ぞ。（ト云ふ。）

西王母　　アヒ　官人

（作物出て。本幕にて。直ぐに云ふ。）〽斯様に候者は。周の穆王に仕へ申す官人にて候。此の君賢王にて御座候により。吹く風枝を鳴さず。民戸ざしをさゝず。降る雨土塊を破らぬ。めでたい御代なれば。何事も思召す儘の折柄にて御座候。さる程に今日は清涼殿に御幸あつて。御遊あるべきとの御事なれば。月卿雲客官人仕丁に至る迄。皆々其分心得候へ〳〵。（ト云うて。太鼓下に居る。中入過ぎて。）扨も〳〵めでたき御事にて候ひけるぞ。只今參内申されたるは。如何なる人ぞと存じ候へば。西王母と申す仙人にて候。誠に天下治りめでたきみぎんには。聖人も出生し。仙人も山より出て出世すると申すは。今この時に相當りて候。されば〃かの王母は三千年に一度。花咲き實のなる桃花を我が君に捧げ申されて候。此の桃花についてめでたき謂れの候。それを如何にと申すに。まづ西王母は崑崙山に住む仙人なるが。兄弟の子を持たるゝ。兄をば金舍と名付け。弟をば金玉と申す。西王母常に存ぜらるゝは。何にてもあれ此の世において重寶なる物を求め。兄弟の子に與へ申さうずると思案をめぐらし。兎角金にまさる寶はあるまじきとて。許多金を集め。まづ兄の金舍に與へられければ。我等は仙人の子にて何につけても望みはなし。まして金銀などは少しもいらぬとて返し申さるゝ。其の時西王母はまた弟の金玉に與へ申されければ。現在の嬶々にだにも召されぬ金を我等賜はるべきか。其の上仙人の子と生れ。通力は思ひの儘なり。金に望みはなきとて是も返し申さるゝ。西王母存ぜらるゝは。日頃の志は徒事になりたりさり乍ら。兄弟の者の心中實にもと思ひ。それよりして宮殿樓閣に家を作り。二人の子に與へ。件の金を兄弟の者の中垣に埋み申されけるに。其の上より何となく桃の木一本生え出で申し。兄の金舍の方へさしたる枝には花咲き。弟の金玉の方へさしたる枝には實なり申す。是を則ち西王母の園の桃と申して。一つ服し申せば。三千年の齡を保つ桃なり。東方朔と云へる仙人は。この桃を三つ服し申されたるによつて。九千歳の齡を保つ。今この君の御威光めでたきにより。桃花桃實共に。一度に左右の枝に出生したる事。ためしなき御事にて候。然ればかの西王母は重ねて桃實を持つて。參内致し君に捧げ申さうずるとて罷歸られて候。我君この桃をきこし召されなば。萬々歳の齡を御保ちあるべき事は。疑ひもなき御事なり。斯かるめでたき桃實を。たゞは如何あるべきぞ。舞樂を奏して御請取りあるべきとの御事にて候間。其の役々は急ぎ御參り候へ。また此の度西王母の姿を見る人迄も。壽命長遠にあらずる事は疑ひなし。如何にも庭上を清め。男女老少によらず罷出で。斯様のめでたき様體拜み申し候へ。其分心得候へ〳〵。（語つて直ぐに本幕にて入る。）

昭君　　アヒ　官人

亂序にて出でし 〽か樣に候者は。王昭君に仕へ申したる者にて候。さても昭君を胡國へうつされし謂れ。漢の宮女の數三千人に餘りぬればゞ。其の顏貌を繪圖に寫させ。日每に之を御覽あつて。叡慮に入りたるを召出し給ふ。さるによつて宮女たち。我も／＼と繪師をたのみ。皆賂なし給ふ故。繪師樣々に筆を盡くし。花の顏月の顏ばせ。何れを何れと分け難く。中にも昭君は。自からこれ三千第一なれば。それを賴みにや思召しけん。繪師に賂もなかりしかば。あらぬ姿に書きなし申して候。さる程に。胡國の韓耶將は。年來都へ仇をなし。軍の止むまもなく候が。一年帝へ望み申すは。宮女を一人下されなば。和睦致すべき由申上ぐる。帝天下の亂を鎭めんために。胡國の望みに從ひ給ふ。さらば宮女を擇めとあつて。彼の繪圖を開き御覽あるに。昭君の顏ばせ劣りしかば。胡國へ遣さるべきに極まりぬ、さて昭君は御暇乞のために。帝へ初めてまみえ給へば。容顏譬りな姉かし。雙ぶ方なき美人なれば。帝もはつと驚き給ふ。いかゞはせんと思召せども。綸言汗の如くにて。是非なく胡國へ遣さるゝ。さて彼の繪師の毛延壽は。昭君を卑しく書きし科により。白晝に首を刎ねられて候。さる程に。昭君は歸りの路次に都を出で。せめての事の御慰みにや。車上にて琵琶を彈じ給ふが。四つの緖も朽つるばかりの御泪にて。泣く／＼胡國へ着き給へども。たゞ明暮に都を戀ひ。其の御思召しの餘りにや。終に空しくなり給ひて候を。甲斐なく土中に築き籠め申し、暫しが程は御墓をも淸め候ひしが。父母の歎き給はん事をと存じ。態とかくとも申さず候が、此の程承り候へば。昭君胡國へ赴き給ふ時。手づから柳を植ゑ置き給ひ。我れ胡國にて空しくならば。此の柳も枯れうずると仰せられしが、柳の片枝。枯色の白み渡りて見えて候を。父母あやしめ歎き給ひ。柳の下に日を暮され候。愛に思合はする事の候。惣じて胡國の草は白くして。綠の色は一葉もなく候に。昭君の塚の草は。都の草に異らず。青々と生え申すに依つて。青塚と名附け申して候。扨は昭君の靈魂あつて。胡國の草には都の色を現し。都の柳には胡國の色を見せらるゝと存じ候間。先づ父母の方へ弔ひ申し。柳の樣をも見うずると存ずる。〽さればこそ。柳の片枝枯れて候。胡國にて昭君を慰め申さんために。折節は舞を舞ひし程に。今も追善のため一さし舞はうずるにて候。いくばくの迷意か琵琶によす。樂三段 思ひ出でたり昭君の。思ひ出でたり昭君の姿は柳の春風に、なびき從ふ胡國の君に。結ぶ契は淺みどり。絲もてつなぐ泪の玉まつりとて奏づる舞こそはかなけれ。

金春の能なり。問なしにあすむ。先づ昭君には問これなきを習とす。

善界（ぜがい）

アヒ　能力

〽是は天臺山。飯室の僧正に仕へ申す能力にて候。唯今能出る事餘の儀にあらず。なんぼう奇特なる事こそ出來て候へ。それを如何にと申すに。大唐の天狗の首領是界坊。我國においては育王山青龍寺般若臺に至る迄。慢心の輩を一人も殘らず。皆我が道に誘引せずといふ事なし。此の上は日本に渡り。此の土の佛法に妨げをなし申さうずると存じ、則ち思立ち我が朝に渡り。まづ愛宕山に立越え。太郎坊に案內を乞ひ申されければ。太郎坊罷出で對面せらるゝ所に。是界坊申さるゝ事には。此度日本に渡る事餘の儀にあらず。我が國においては。育王山青龍寺。般若臺に至る

迄。一人も殘らず皆我が道に引入れ申して候。あはれ御同心もあれかし。互ひに申合せ。日本の佛法に妨げをなし申したき念願にて候と申されければ。其時太郎坊。奇特に思召し立ち候へどもさり乍ら。我が朝と申すは。小國なれども神國にて。天地開けしより此の方。佛法繁昌今以て盛んなり。されども斯程迄思ひ立ち給ふ事なれば。如何やうとも思案をめぐらしすべき御覽候へ。まづあれに見えたるが。天臺山にて候と教へ申されければ。其時是界坊。扨は心得たり。比叡山と申すは。日本の御祈禱所なる由承り及びて候間。何とか障りをなし申さば。定めて比叡の山より御祈禱へ御參内あるべし。其の時刻に踏次へ出迎ひ。道にて妨げ申さうずるとの分別にて。罷歸られて候。また太郎坊存ぜらるゝは。我れ日本に住みながら。斯様の事を存じ申上げては如何と思ひ。僧正へ斯くと申上げらるゝ。案の如く勅使立つて御祈禱のため。僧正に御參内あれとの御事なり。扨はと思召し唯今御參内なさるゝ。まづ我等には卷數を持つて。さきへ參れとの御事にて候間。これ迄罷出た。急ぎ參らうと存ずる。（是よりまはりかけて。）まづ急いで參らう。誠に。是界坊の分として。此の土の佛法を妨げうなどゝは思ひも寄らぬ事ぢや。ヤア。是は如何な事。行先が眞黑になつた。扨も／＼凄まじい土風ぢや。定めてこれは是界坊のお通りやるによつて。此の様に暗うなり。また土風が吹き始めてあらう。いや／＼。某が分で是界坊とはあふ事はなるまい。命は物種まづ歸つて此の由を申上げう。皆々承り候へ。これ迄は來れども。行先が暗うなり。土風が吹くによつて罷歸つたと。御申しあつて給はり候へ。構へて其分心得候へ／＼。

關原與市（せきはらよいち）

アヒ　家來

口明　へか様に候者は。關原與一殿の御内に仕へ申す者にて候。さる程に。忝くも賴朝殿より中川の庄を賜はり。只今入部仕られ候間。其の分心得候へ／＼。

同

（ワキ節にツレあり。皆々の後より供して出る。ワキ次第過ぎて呼出す。安宅の強力の様に立つて居る。シカ／＼。）

へ御前に候。シカ／＼。へ畏まつて候。シカ／＼。へ皆々人馬に息つがされ候へ。（ト云ふと。ツレ皆々橋懸りへ行く。）

（ワキ座より牛若丸橋懸りの方へ行き。又ワキの與一は。シテ柱の方よりワキ座へ行き。雙方行違ひざまに。ワキ腰うつ。牛若云ふには。あの[illegible]と云ふ。狂言方之を聞いて。）

へいや。これなる者が存外なる事を申す。其の由申上げう。（ト云うて。ワキに向ひ云ふ。）ワキ　へいかに申上げ候。あれなる者がこざかしき事を申候。ワキ　シカ／＼。へ其の馬に乗り得ずば。馬より下りて牽けと申候。ワキシカ／＼。へ中々の事。あの様な者は某が致し様が御座る。（ざせいしかゝる。ワキ止めて。）シカ／＼。へ一段とよう御座らう。（ト云うて間座に入り。切戸より入る。シテとワキと行違ひの處に。狂言仕打有之なり。）

殺生石（せつしやうせき）

アヒ　能力

（ワキ道行過ぎて立つ。）へありや／＼又ありや／＼。ワキ　シカ／＼。へされば奇特なる事で御座る。空を飛ぶ鳥が。あれに見えたる石の上を通るかと存ずれば。其儘大地へおちて死すると見えて御座るが。これは奇特なる事にては御座らぬか。太夫シカ／＼。へや。何とやら申し候ぞ。（中入すぎて。）へ扨も／＼。只今の女は物凄じい女かな。今迄は世間が眞黑にあつたが。又あかうなつた。先づあれへ參り。此事を御雜談申さう。いかに申上げ候　只今の女は何とやら物凄

じきかて御座つたと存ずるが。さて何と思召され候ぞ。シカ〳〵。へ何と仰せられ候ぞ。某は小賢しい者なれば。若し玉藻の前の仔細を存じたらば御物語申せと承り候か。シカ〳〵。へ是は存じも寄らぬ事を御意なさるゝ。左樣の事は我等如きの存ずる事にては御座なく候されども。某悴にて寺に罷りありたる時。玉藻の前の草紙とやらんを一目見申して候間。その草紙のあらましをかたはし御物語申上げうずるにて候。語昔。鳥羽院の御時。玉藻の前と申して。容顏美麗にして。ならびなきとわらはの御ありしが。片時のひまも君寵をはならず。御寵愛甚だしく御座ありたると申す。さる程に。此の女を玉藻の前と申す仔細は。四角八方より姿を見るに。例へば寶珠を見るが如く裏表もなく。美しき形なればとて。玉藻の前とは名付けられたるげに候。また一說には。此の女智惠あまりあつて。和歌の道は申すに及ばず。一切の經文に至る迄心底に收め。何事に就けても曇りなく。光ある玉の如く明かなる智惠なればとて。玉藻の前とも申したるとの二說に承りて候。さればある時。清涼殿にて御歌合ありて後御管絃のありし時。永祚の大風吹來り。禁中の燈火一燈も殘らず消えたりしに。其時かの玉藻の前が身より。金色の光をなし。玉殿は申すに及ばず。御庭の眞砂の數迄。隈なく見え候程に。それよりしては玉藻の前を。化生の前とは召されたるげに候。其後帝程なく御惱とならせ給ひければ。貴僧高僧を招じ。色々の御祈禱ありしかども更にその驗なし。安部の泰成と申す。占方を占はせ給へば。泰成來り。念比に考へて申上げゝるは。斯かる一大事の御事は御用ゐるまじい。是皆玉藻の前が仕業なり。それを如何にと申すに。まづ。此の女と申すは根本狐なるが。假に人間と化して。既に大唐にては。幽王の后褒姒となつて七帝迄取り參らせ。今又日本に來り。此の君の御命をとらんとする。斯程大事の御事なれば。急ぎ此の者を調伏あつて然るべきと申上ぐる。頓て四段をついて五段を飾り。藥師の法を行ひ給へば。大內にたまり兼ね。下野の國この那須野の原に落ちけるを。國內通化のものなれば。おろそかにしては叶はじと。犬は狐の相を得たるものなれば。犬追物といふ事をもつて御退治あるべきとて。三浦の介上總の介。兩介に仰付けらるゝ。兩人はやす〳〵とお請けを申し家の子若黨を引具し。此所に下着して。百日犬追物とぞ聞えける。百日の犬まんじければ。尾頭七尋にある狐一疋出でたりしを。一の矢は三浦の介。二の矢は上總の介。兩人馬上にて放つ矢先に彼を留め。其儘馬より飛んでおり。劍を拔き害し都へ奏聞ありければ。君の御惱も忽ち平癒あり。國土治り泰平の御代とはなりたると承りて候。然れどもかの變化の執心此所に殘つて。大石となつて鳥類畜類は申すに及ばず。人を取る事數しらず。かるが故に其名を殺生石と申すと承りて候が。疑ふ所もなく。此の石で御座あらうずると存じ候。最前申上ぐる如く。此の儀において色々仔細御座あるとは申せども。まづ我等の承りたる通り大方御物語申上げて候。シカ〳〵。へ誠に御意の如く。只今の女は疑ふ所もなく。古へ狐の執心にて御座あらうず。日頃惡念にて善所に到る事叶はねば。如何なる法力をも賴み。成佛したく存ずる所に。今是へ御出でを幸ひと思ひ。かの玉藻の前は重ねて人間と姿を顯れたると存じ候。されどもかゝる恐ろしい物なれば。何事も御座ない內に。まづ急ぎ此所を御立ちあつて然るべきかと存じ候。シカ〳〵へ是は御意にては候へども。あの鳥類畜類迄も。命を失ふ程の恐ろしい執心なれば。一大事

の御事にて候間。たゞ是は御分別あらうずるにて候。シカ〳〵。〽誠に左樣に思召さば。まづ我等は先へ參り。お宿をとり申さうずるにて候。シカ〳〵。〽畏まつて候。さあらば杜杖(ちやうぢやう)を參らせうずるにて候。シテ出ル。舞臺すゝむと入る。

同

アヒ　能力

〽ありや〳〵。又々扨も〳〵。不思議な事かな。シカ〳〵。〽されば奇特な事で御座る。空を飛ぶ鳥があの石の上を通ると思へば。其儘大地へ落ちて死したると見えて御座るが。不思議なる事にてはなく候か。シカ〳〵。〽や。何とや申され候。シカ〳〵。〽扨も〳〵物凄じい女かな。先づあれへ參り御雜談(ざうたん)申さう。如何に申上げ候。只今の女は物凄じき女にて候。疑ふ所もなく狐の執心にてあらうずる間。急ぎ此所を御立退きあれかしと存じ候。シカ〳〵。〽是は御意にて候へども。鳥獸まで命を失ふ程の恐ろしい物なれば。御分別あれかしと存じ候。シカ〳〵。〽さあらば此上は思召入次第にて候。宿をとり申さうずるにて候。シカ〳〵。〽心得申して候。シカ〳〵。〽さあらば杜杖を參らせ候べし。

攝待(せつたい)

アヒ　家來

口開。〽これは奧州佐藤の御内に仕へ申す者にて候。さても賴朝義經御兄弟の御仲。誰か讒言を申し。御仲違はれ。十二人の作り山伏となり。奧州へ御下向にて候。さるに依り。此所に於いて。乳母にて候者接待を始め。往來の山伏たちを休ませ申候。誠に。恩愛の中は淺からざる御事。其の外鳥類畜類。燒野の雉子梁の燕。何れも子故に物を思ひ候。忝くも繼信忠信の有樣。明暮懷しく思ひ。一入判官殿御下向を待ち侘び申され候。尤もなる御事にて候。いよ〳〵今日も客僧の御通り候はゞ。一人二人を捨てず。皆々御泊り候へ。其の分心得候へ〳〵。子方樂屋より呼出し。後狂言シテ花に一云ふ。シカ〳〵。〽御前に候。シカ〳〵。〽なか〳〵。今日は山伏達大勢御通り候て候。則ち奧に御入り候。シカ〳〵。〽尤もにて候。シカ〳〵。〽案内とは誰にて渡り候ぞ。シカ〳〵。〽何と東國方の客僧と仰せ候か。シカ〳〵。〽皆々御通り候へ。

同

アヒ　兼房
同(子方)菊王

次第〽旅の衣は篠懸(すゞかけ)の。〳〵。露けき袖やしぼるらん。〽子に臥し寅に起き馴れて。〳〵。雲井の月か峯の雪。その松島に參らんと東路さして急ぎけり〳〵。此の次第道行とも狂言方も謠ふ。兼房〽これに高札の候よ。いかに申し候。これに高札の候が。いか樣なることぞ。皆々御覽候へ。ワキシカ〳〵。兼房〽山伏接待のことと我等も望みにては候へども。佐藤館はちと斟酌に存じ候間。各々御分別あれかしと存じ候。ワキシカ〳〵。兼房〽さらばともかくもにて候。子方シカ〳〵。菊王〽御前に候。シカ〳〵。菊王〽十二人御座候。子方シカ〳〵。兼房〽此の子は近頃いたいけにて候。菊王〽此の山伏たちは十二人御入り候程に。疑ふ所もなく判官にてあらうずるよ。兼房〽いや變な者は。粗忽なことを言ふ者ぢや。そこに居て口なきかずとも。あつちへ行け。母シカ〳〵。兼房〽さあらば斯樣に物言ふ山伏なば。何處(どこ)山伏に御覽じて候ぞ。母シカ〳〵。兼房〽年寄りたるが兼房ならば。尼公も兼房山伏よ。あの樣な目

利き立てする人の側に居るが悪い。皆々御立ち候へ。我等は此所を罷り立つ。さて／＼氣の毒な事をいふ人ぢや。ト云うて。楽屋へ入る。

蟬丸

アヒ　里人

ワキ中入すると本幕にて出る。〽これは。この逢坂の邊りに住居する。博雅の三位と申す者にて候。誠や承り候へば。とある上つ方の。この逢坂山へ捨てられさせ給ひたると申す。如何なる御有樣にて候ぞ。參り見申さばやと存ずる。や。されぱこそ是に御座候。扨も／＼痛はしき御有樣にて候。我等の承りたるは。上つ方とばかりにて候が。中々是は唯ならぬ仔細のあるべき御姿にて候。此儘置き參らせては。雨露に濡れさせ給はうずる間。まづ取敢へず藁屋をしつらひて入れ參らせ申さばやと存ずる。楽屋へ作り物取りに入つて。持つて舞臺に直すこ。如何に申上げ候。これはこの邊りに住居する博雅の三位と申す者にて候。せめての御事に雨露をしのがせ奉らんと存じ。假初に藁屋をしつらひ申して候間。まづ此方へ渡り候へ。シテ作り物に入ると。下に居て。如何に申上げ候。又頓て御見舞申さうずるにて候。御用も御座候はゞ。博雅の三位はなきかと御尋ね候へ。罷り出で宮仕へ申さうずるにて候。立つて名乘座にて。如何に在所の面々承り候へ。逢坂山に捨てられ給ふ御方の。博雅の三位と召され候はゞ。此方へ申し候へ。その分心得候へ／＼。

禪師曾我

アヒ　能力

シテシカ／＼。〽御前に候。シカ／＼。〽畏まつて候。扨も／＼俄に百座の護摩を焚かうずると申さるゝ。何方より何のお祈禱を申して來たぞ。まづ用意仕らうと存ずる。戸明くる仕草あり。如何に申上げ候。護摩の戸を開け。佛壇を清めをもなし申して候。

同

アヒ　家來

〽御前に候。〽畏まつて候。〽案内とは誰にて渡り候ぞ。〽畏まつて候。〽いかに伊東の九郎助宗どのゝ御參りにて候。〽なか／＼の事。〽畏まつて候。〽此方へ御通りあれとの御事にて候。仇を討つ其の身も卽座に討たれて候と云ふ時。〽いかに申上げ候。曾我より御使の參りて候。

【た】

泰山府君

アヒ　家來

中入後。アヒ〽是はいかな事。唯今はつちりと鳴つたは。花の枝を折つた音があつた。心もとない。先づ樣子を見う。さればこそ。これは何者が折つたぞ。御祕藏の花の枝を折つたは。さて不審な事かな。垣を破つた所もなし。又越えた體も見えぬが。合點の行かぬ。人ならで折らう樣もなし。はてさて不審ぢや。誰ぞ寄つたらば。白砂の上に足跡があらう事ぢやが。踏むだ跡もなし。扨も／＼。合點のゆかぬ事ぢや。先づは奇特な事の。每年花を御寵愛なさるるといへども。別して此の春は御祕藏あつて。花の盛りの久しい樣にと思召し。泰山府君まで祭らせられた事なれば。木の本には垣結ひ廻し。其の上日夜番を仰附けられた。則ち今夜は某が當番で。隨分心にかけて番を仕つたが。何者やらん大事の枝を折つた。

定めてよいとは仰せられまいさりながら。申上げずはなるまい。いかに申上げ候。何者やら〳〵花の枝を折り申して候。ワキ〽言語道斷。番を申附けてあるに。汝がのさげなに依つてさ様にある。曲事にてあるぞ。アヒ〽其の事にて候。隨分大事にかけ。少しも眠らず番を仕りて候が。月の入りて暗くなる由存じて候へば。はつちりと申す音が聞こえて候故に。邊りに人もなく候故。能く〳〵見申せども。垣も少しもそこね申さず。また其の上砂の上に人の踏みたる跡も見えず。ワキ〽何と。枝折れども人のよりたる跡はなきと申すか。アヒ〽中々の事。ワキ〽さて何にても思ひ合はする事はなきか。アヒ〽別に思ひ合はする事もなく候が。我等の存じ候は。いつの春より此の春は。別して花が見事に御座候故に。天人などが天降り。枝を折りたるかと存じ候。當春は泰山府君も祭らせられたる事に候間。御本尊の御前にて御祈念も候はゞ。重ねて奇特の御座あらうずると存じ候が。何と思召し候ぞ。〽御尤もにて候。いよ〳〵御祈念候へ。

大佛供養（だいぶつくやう）

アヒ　能力

中入過ぎ早鼓にて出る。又早鼓打たぬ時には。アヒ出申さず。なしにてもすむ。〽これは。南都東大寺俊乘上人に仕へ申す能力にて候。某只今罷出る事餘の儀にあらず。當寺大佛殿成就仕り。今日吉日にてあるにより。御供養なさるべしとの御事なり。總じて大佛殿と申すは。忝くも人皇四十五代。聖武天皇の后光明皇后さる仔細あつて。御祈禱の爲伊勢大神宮へ勅使立つ。二度の勅使には行基菩薩逢ひ給ひ。色々の奇特あつて。大佛殿を御建立なされて候。斯様の大伽藍は三國にもあるまじきとの御事にて候を。平家の大將清盛の御子。三位中將重衡の卿。その伽藍を治承四年十二月二十一日に燒拂ひ給ふ。然るに源の頼朝公。大伽藍の滅したる事を歎かはしく思召され。俊乘坊仰せをうけて。日本の事は申すに及ばず。唐土迄も勸進を致され大佛殿建立ある。御本尊の事は申すに及ばず。四天二天までも。悉く成就仕り。誠にめでたき御事にて御座候。今日御供養の御座候につき。則ち頼朝公御參詣なさるべしとの御事なり。それに就き若し平家の討漏らされ共。お藤に屈み居て。頼朝を狙ふ事もあるべく候程に。番を堅く仕れと仰付けられて候間。寺中にも其心得を致され候へ。油斷をして不覺を取り申すまじきとの御事にて候間。構へて其分心得候へ〳〵。

（觀世流は問なしに相濟む）

大瓶猩々（たいへいしやうじやう）

アヒ　里人

ワキシカ〳〵。〽案内とは誰にて渡り候ぞ。シカ〳〵。〽内々唯今罷出る處にて候。先へ御出で候へ。中入過ぎ。〽今は御尋ね御着申して候。シカ〳〵。〽御不審尤もにて候。參らうずる所に。さり難き用の仔細御座候ひて。遲なはり申して候。さていつもとは申しながら。別して今日は夥しき市人にて。賑々しく候。いつもの如く酒下されて慰み申さうずるにて候。〽これは存じもよらぬ御尋ね候ものかな。常の如し。〽先づ猩々と申す者は。唐の阮籍と申す者。封溪と云ふ處にて。慥に見申されたると申す。山谷海川を住居して。一所に相集まり。壽命目出度き者にて。彼に近づき候へば。必らず富貴の身に成り申す。尤も彼を近づけ申すに

は、山川の傍に。酒多く湛へ置き。相待ち候へば。彼の猩々酒の香に引かれ。多く來り舞ひ遊び。何ぼう類ひなき目出度き者にて候。（外に云ふ事もなし。常の猩々に有之文句を隨分目出度く作りこめて。相勤むるまでなり。）ヘ是は奇特なることを承り候ものかな。扨は疑ふ處もなく。猩々と申す者にて御座あらうずると存じ候。彼の猩々と申す者出入仕り候へば。必らず富貴が花に榮ゆると申す。是と申すも方々の御心中御慈悲ある故と存じ候間。彌々以て富貴に御成りあらうずるにて候間。急ぎ酒を湛へ。彼の猩々を御待ちあれかしと存じ候。さやうに候はゞ。先づ某は罷歸り。重ねてまた參り。酒を下されうずるにて候。心得申して候。

猩々の間にて。たの分。皆常の猩々間にて相勤む。

岩戸猩々　金澤同　因幡同
岩尾同　和泉同　硯青同
村夕相同　須磨同　雪同
山崎同　根元同　番豆崎
三人同　七人同　亂舞
駒形同　歌合同

當麻（たいま）

アヒ　門前の者

（中入過ぎて。）ヘこれは。當寺門前に住居する者にて候。此の間は御堂へ參らず候程に。今日は御堂へ參らばやと存ずる。やゝ。是なるお僧達は。此の邊りにては見馴れ申さぬが。何方よりの御參詣にて候ぞ。ワキシカ〳〵。ヘ中々。この門前の者にて候。シカ〳〵。ヘ心得申して候。扨お尋ねありたきとは如何やうなる御事にて候ぞ。シカ〳〵。ヘ是は存じも寄らぬ事を承り候ものかな。我等も此の所に住居仕れども。左樣の御事委しくは存じも致さねさりながら。初めて御參りなされ御尋ねあるを。一切存ぜぬと申すも如何に候間。所に申傳へたる通り御物語申さうずるにて候。語まづ。當寺當麻の曼陀羅と申すは。人皇四十七代の帝。廢帝天皇の御宇にて御座ありげに候。横佩の右大臣豐成公の御息女に。中將姫と申して渡らせ給ひけるが。奇特なる御事にて御座候ひけるぞ。幼なかりし御時よりも。浮世のはかなき事を知ろしめし。後世一大事と思召され。父豐成にも知らせ給はず。あの雲雀山に籠り。草の庵を結び。御髪をおろさせ給ひ。その御名を法如と申し奉り。念佛三昧にして明し暮させ給ひけるを。ある時豐成御狩のため。かの山に分入り中將姫を見付け參らせられ。御悦び限りなく。頓て都に伴ひ御歸りありたると承りて候。されども中將姫は。また殿中を忍び出でさせ給ひ。再びかの山に籠り。大誓願を起し給ふ。われ正身の彌陀來迎を拜まずは。この草庵を出づまじきとの御誓願にて。晝夜の境もなく。御經を讀誦し給ひけるに。頃は秋の最中。月も明々とある夜半ばかりの折柄。年たけたる尼公一人目前に現れ給ふ。是は如何なる人ぞ。何處より來り給ふぞと問ひ給へば。日頃の誓願にて呼び給ふ程に。來り給ひたると仰せらるゝ。其時中將姫。扨は我が願成就したると思召され。奇異の思ひをなし。感涙を抑へ正身の彌陀如來に。御言葉を交させ給ひたると承り及びて候。此の上は九品の樣體を。曼陀羅に織りつけ給へ。我も力を添へうずるとありければ。猶も嬉しく思召され。それよりして蓮の絲を揃へ。極樂の上品上生。中品中生下品下生の樣體を。悉く曼陀羅に織りつけ給ふ。これ皆衆生濟度の爲とは申しながら。取分き當寺の寶となり申

して候。この曼陀羅の廣さ一丈八尺にて候が。この軸になるべきもの御座なく。如何あるべきぞと思召さるゝ所に。後の奇特にて御座候ひけるぞ。戌亥に當つて本末もなく。見事なる竹一本一夜の間に出生したるを。則ち曼陀羅の軸につけ給ふ。この竹と申すは。節の間一節なるによつて。一節竹とは名付けられて候。又一說には一夜の間に出生したる所を以て。一夜竹とも申すと。昔より爰を二說に申し慣はして候。されば草木心なしとは申せども。御覽候へ。是なる櫻は。常の樣に變り。蓮の色に咲亂れて候。是は曼陀羅を織り給ふ時。蓮の絲を取り。この池にてすゝぎ。是なる木に掛けて干し給ふにより。それより每年斯樣に色も香も蓮の如く咲くとは申傳へて候。誠に申すも愚かなれども。中將姬と申すは。正身の阿彌陀如來の化現にて。光仁天皇寶龜六年。三月中旬に。彌陀の來迎にて。大往生を遂げ給ひたると承り及びて候。最前申す如く。當寺曼陀羅の仔細。又は中將姬の御事。我等の承りたる通り。大方御物語申して候が。扨お尋ねは如何やうなる御事にて候ぞ。シテ〽シカ〳〵。ワキ〽是は奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに。御心中貴き僧の。當寺へ初めて御參りを。中將姬は嬉しく思召され。假に御姿をまみえ給ひたると存じ候間。末は急ぎの御旅なりとも。暫く此所に御逗留なされ。信心をなし給はゞ。いよいよ奇特の御座あらうずるかと存じ候。シカ〳〵。〽御逗留の間は御用を承り候べし。シカ〳〵。〽心得申して候。

第六天

アヒ　末社

（亂序にて出る。）〽斯樣に候者は。太神宮に仕へ申す末社にて候。唯今この所へ罷出ること餘の儀にあらず。爰に思ひも寄らぬ事の御座候。それを如何にと申すに。先づ日本は天地開闢より以來。今以て神國なり。然りとは申せども。生死流轉の業を免かるゝことは。佛法の威力に如くはなし。されば神の本地を尋ぬるに。法報應身正覺圓滿の佛身にて渡らせ給ふ。かるが故に佛法神道相並んで。王法を守護し給ひ。三國のうくわくの日出度き國にて御座候。然る處に第六天魔王。色界の衆生を悉く魔道に引入れ。我が眷屬となし。剩へ須彌の中央に攻め上り。帝釋天をも追ひ下し奉らんとする。さるに依つて。修羅帝釋の戰。日夜に已むことなし。されば修羅戰に負けては小身を現じ。ぐゝしの穴の內に隱れ。また軍に勝つ時は。其の身須彌の頂に居し。手に日月を握り。足に四海を踏む。其の勢に乘じ。此の日本をも魔界になさんと計れども。日本は神國にて。佛法をなすべき樣なし。また爰に解脫と申して。知道斷密の沙門あつて。遍く衆生を利益なされ候。されば彼の解脫と申す御僧。元來たゞ人にては御座なく。例へば都の傍に。年經て住める夫婦の者あり。彼の人一人の女子を持つ。此の子三歲の頃より。常に觀音の御名を唱へ。每朝東に向ひ。日天を拜し奉る。漸く七歲に至りて。金の鈴を呑むと夢見て。此の事を兩親に語る。父母不思議の思ひをなすといへども。曾て其の故を知らず。月日の經つに隨ひ。彼の女子思はずも懷胎の姿をあらはし。日重なり月滿ちて男子を生めり。其の貌異相にして世の常ならず。母の振舞産子の有樣。いかさま權化の再來なるべしとて。三歲の時より釋門に入れしに。一字聞けば十字を悟り。學ばずして佛法の奧儀を極む。されば慈悲深重にして名利の相を離れ。三衣一鉢の空しきことを悲しみ給はず。

ただ諸の衆生の苦海に沈まん事をのみ歎き給ふ。事に觸れ縁に隨ひ。山川抖擻の沙門となつて、近く衆生を濟度なさるゝ間。一人も魔界に入る者はなし。第六天の魔王之を憤り。何卒して彼の解脫を、魔界に引入れんと種々の計略を廻らし。日夜附添ひ窺ひ申す處に。解脫之を少しも知ろし召されず。彌々道心堅固の御祈誓あらんため、太神宮へ御參詣なされ候を魔王之を幸ひと存じ。道の邊に樣を變へ。上人に近づき奉り、神秘を語る由にもてなし、御心を晦まかし。邪道に引入れんとする。太神宮これをよく御存じあつて。急ぎ我等に出向ひ。事の樣體を見申せとの御事により。これまで罷出たが。彼の僧はどれに居らるゝぞ。いや。これに御入り候よ。〽扨も〳〵。御樣體いかゞと存じ候處に。何事も御座なう候ひて。一段の事にて目出度う存ずる。〽いかに八百萬の大小の御神、よく〳〵聞し召され候へ、此の度解脫と申す沙門、第六天の魔王、佛法を妨げ申さんとなし申し候間。いよ〳〵佛法の興隆の御志深くましまさす樣に、彼の僧に神力を、何れも添へ給へと、忝くも太神宮より御神託にて候間、皆々その分御心得候へや。

大會（だいゑ）

アヒ　天狗

亂序にて出る。　シテ〽斯樣に候者は、愛宕山太郎坊に仕へ申す木の葉天狗に、候。アド立衆〽やい〳〵、是はまた何事ぢや。シテワキ座へひらき。シテ〽やれ〳〵。何れもよう出さしました。アド〽餘りけはしい樣ぢやによつて來たか。何事ぢや。シテ〽まづ今度の事は、大事の事ではなかつたか。アド〽それは何事ぢや。シテ〽何ぢや知らぬ。アド〽いや、知らぬ〳〵。まづ何事ぢややい。シテ〽是はいかな事、此の事を知らぬと云ふか、言語道斷の事を云ふ、知らぬといふ事があるものか。アド〽ても知らねば是非がない。シテ〽誠に知らずば。追付け語つて聞かせう。アド〽早う語つて聞かせ　シテ〽さる程に賴うだ太郎坊、御遊覽のため鳶（とび）になつて、都東北院の邊りへ出でられて、大きなる樫がある、その樫にとまつて遠見せうずると思はるゝ所に。何としつらう蜘蛛の巣に掛かつて、難儀して。ぶら〳〵とふらめいて。終に下へ落ちられた所を、大勢の子供が居合はせて。ぱつと寄つて其儘捕へて。是こそよいものを捕へたれ。扨この鳶ならば何とせうずると云うたれば、中にもこざかしい奴があつてぬかす樣は。シカ〳〵。シテ〽まづ羽根をば拔いて矢矧（やはぎ）に賣らうぞ　シカ〳〵。シテ〽身をば汁にして喰はうず。骨をば黑燒にして、膏藥に練り賣らうずと云うて。あつちへ引張り此方へ引張りした程に、賴うだ者が迷惑せられた事、中々云ふも愚かな事であつたと云ふが。若しさて膏藥にやなんどなられたらよいものか。アド〽はて扨それはあぶない事であつたな。シテ〽斯かるあぶない所へ。折節比叡山の僧正の通らせられ、是を御覽ぜられて。扨も〳〵子供はむごい事をする、生をうけた物をさやうにするか。皆面々が身に酬（むく）はうず。離せと仰せられたれども。中々離さなんだ。シカ〳〵。シテ〽其時僧正の仰せらるゝ事に。さあらば此の扇をとらせう程に、その鳶を免れよとあつて、結構なお扇をつかはされたれども、それでも進上申さなんだ。シカ〳〵。〽此の上は力及ばぬ、是は我等身を離さぬ珠數なれども、と仰せられて。皆水晶のお珠數を遣されたれば、誠に、京童の賢さは、皆この水晶をほしがつて。さらば鳶を進上申さうと云うて。かの珠數を取つて。さて

萬な道上申した。僧正のお悦びは限なうて、暫くかの萬な御手に持たせられて、羽並みを直して囀させられた程に、頼うだ者は悦び、肝潰いて我が山に歸られた。さて其後太郎坊は、山伏の姿に身を窶へて、比叡の山へ、お禮に參られた。今度は御志によつて。不思議なる命を救かり。誠に以て忝い。この御報恩には如何やうなる事にてもあれ。若し御望みの事あらば叶へ申さうずると申されたれば。其時僧正の仰せらるゝ事には。此の世において何事にても御望みはなし。されども天竺靈鷲山にて。釋尊の御説法の有樣を。そと拜みたいと仰せられたれば。太郎坊それこそ易き御事なれさり乍ら。我等如きの仕事なれば。貴いとも有難いとも思召すな。刹那が中に御目に掛け申さうずるとて罷歸られた。然らばこの樣體と申すに。佛の數が數多入る事なれば我等如きの木の葉天狗。溝越え天狗に至る迄。佛になれと申さるゝが。そち衆も何ぞ佛にならうと思ふか何と思ふぞ。アドへ某は終に佛になつた事がない。シテへ誰あつて佛になつた者はない。此度の事ぢやによつて。とかく相談せずばなるまい。まづ皆下に居さしめ。アド皆へ心得た。シテへさて何佛にならうと思はしむ。アドへされば何がよからうぞ。シテへ身共は地藏にならうと思ふ。アドへ是はよからう〳〵。シテへ地藏は身に結構な袈裟衣をかけ。兩の手に寶珠錫杖を持つ。此の樣な拵へは急には出來ぬ。只心安う早速出來るを思ひ出さしめ。アドへそれならば仁王にならう。アド立衆へ仁王は寺方の門前に立つて居らるゝを見れば。腕をまくり足を踏立てゝ。氣張りまはるばかり。さしてむつかしい事もない。兎角仁王にならう。アド皆々へよからう〳〵。シテへ中々。仁王といふは。中々異形なうてはならぬ。そち衆や身共が恰好では。中々寒さうな仁王であらう。アド立衆へそこが相談ぢや。また何ぞ思ひ出さしめ。アドへ身共に究竟な事を思ひ出した。蛭子三郎殿にならうと思ふ。シテへ扨も〳〵。むさとした事を云ふ。蛭子は神でこそあれ。惠比須といふ佛があるものか。アドへあれは佛でないか。アド立衆へいや〳〵。神ぢやわいやい。アド皆々笑ふ。アドへさて〳〵神ぢやよなう。シテへ身共が思ふは。堂の隅に居らるゝ賓頭盧にならう。アド皆へ是はよからう。シテへ賓頭盧は紙の衣裳を拵へる迄ぢや。是より心安いものはあるまいと思ふ。アド皆へ何れも同心致いた。シテへそれならば此の儀を調うて歸らう。皆囃はしませ。アド皆へ心得た〳〵。シテへなかしき天狗は寄合うて。同へなかしき天狗は寄合うて。何佛にならうやれと談合するこそをかしけれ。シテへ愛宕の地藏に得なるまじ。同へ大峯葛城は行基菩薩。是また大義の菩薩なり。よく〳〵物を案ずるに。堂の隅なる。賓頭盧にならんと。皆紙衣を拵へて。皆紙衣を着つれ〳〵て。こそり〳〵とはいりけり。

道成寺（だうじやうじ）　上懸り

アヒ　能力

狂言方後見鐘を持つて出る。常座より笛座の方へ鐘を釣るなり。また後見持つて出でさて鐘を釣るなり。釣り樣下懸りの通りなり。さて鐘を釣りしまうて。ワキ出る。さてワキツレの後より狂言二人出で。二人とも間座に居る。ワキシカ〳〵。頭取へ御前に候。シカ〳〵。へ中々鐘を鐘樓へ上げ申して候。シカ〳〵。へ畏まつて候。ワキ座に着く。ツレも二人行く。ワキ呼出す。頭取出る。若しワキツレ橋懸りに居る時は。間座へ行かれず。ツレの次に下に居るべし。さてワキ呼ぶ時。頭取舞臺へ出る。アド間座に着く。頭取罷る。是より下懸りに少しも違はず。さて流義により。太夫道行し。日高の寺に着きにけりといふ謠過ぎて。鐘の供養を拜まうずるといふ時。狂言より。いやこれなる女人はいかなる人にて渡り候ぞと。かゝるもあり。又外に變る事なし。觀世流にては。シテ案内乞はず。仍つて。鐘の供養を拜まうといふ時。問へこれなる女人は如何なる人にて渡り候ぞ。シテシカ〳〵。へた

も拜ませ申したく候へども。何と思召し候やら／＼女人禁制と仰出だされ候間。叶ひ申すまじく候さりながら。餘の女には無い候間。我等が心得を以て拜ませ申さうずる間。面白う舞を舞うて御見せ候へ。但し烏帽子を渡さず。シテの後より笛座へ行く。さて能過ぎて。狂言二人ともワキツレの次に立ち。供して入るなり。後見鐘を下ろし持つて入る。太夫方の後見に道具渡すなり。さて上懸りも。流義により。太夫方より後見交りて出ろもあり。また太夫方よりの後見ばかりにて。鐘出し入れするもあり。諸事太夫に間合はせ。好き次第にする事なり。此の外に口傳あり。

同　下懸り

アヒ　能力

頭取の能力ワキの供して出る。ワキツレ橋懸りに下に居る。狂言も同じ。其の次に下に居る。但しワキツレ舞臺シテ柱の側に居る事もあり。何か狂言方ワキツレの次に居るなり。ワキ名乗終りて。狂言方呼出す時。狂言ワキツレの前の方を通り。一の舞臺へ出る。能力へ＼御前に候。ワキシカ／＼。へ＼畏まつて候。ト云うて。舞臺より立つと。ワキツレ立つてワキの次へ行く時。狂言裏を通り。楽屋へ入る。楽屋より鐘荷ひ出る。えいや／＼と。かけり／＼に云うて出で。重き時は。橋懸りにて下ろし。休む事もあり。其の時は。いかう重いと云ふ。シカ／＼ありて。また持出て。舞臺の眞中に下ろして。棒を抜く。アドの役なり。さて橋懸り鏡板の方へ寄せて置くなり。其のうちに。楽屋より後見割ばさみかぎの竹二本持出ろ。アド橋懸りにて請取つて持出て。正面の方へ竹の尻をやり。先く方を鐘の方へ向かはせつ八文字に成るやう見の方ならかせ置くなり。其のうちに。頭取鐘の繩を解き。正面の方の前へ丸くたぐり下ろし。アドに繩の先を渡す。さてアドか繩をわりばさみにくはせて。上の鐶に向かはせる。シテかぎ竹にて引きかけ。繩を引き。竹の尻ワキ地謡等に當らぬやうにする事なり。さて繩をたぐり。鐘引に渡すうちに。アド割ばさみかぎ竹共取り片附け。橋懸りへ持行き。板附きに寄せて置く。さて二人兩方より手をかけ。えいや／＼と云うて上げる。シテ方の鐘引も引上ぐる。隨分靜かに上ぐるなり。さて釣りすましてから。二人共に見るなり。此の一段。前方釣習仕の節。太夫同鐘引に云合せすべし。口傳あり。頭取へ＼さて／＼見事な鐘ではないか。アドへ＼いか樣下で見たよりは見事な鐘ぢや。シテへ＼急いで申上げう。アドへ＼一段とよからう。ト云うて。アドは笛座に入るなり。頭取はワキへ案内する。シテへ＼いかに申上げ候。鐘を鐘樓へ上げ申して候。ワキシカ／＼。へ＼畏まつて候。皆々承り候へ。今日は吉日なれば。鐘のお供養をなされ候間。志の面々は皆々參られ候へ。又何と思召され候やら／＼女人禁制と仰出だされて候間。構へて其の分心得候へ／＼。ト云うて。笛座の上に居るなり。シテ次第道行過ぎて。案内乞ふ。へ＼案内とは誰にて渡り候ぞ。シテシカ／＼。へ＼尤も拜ませ申したく候へども。何と思召され候やらん女人禁制と仰出だされて候間。中々叶ふまじいにて候。シテ餘の女とは變り候と云ふ。アヒ餘の女と變りたるとは。如何樣なる事にて候ぞ。シテシカ／＼。此の所太夫より案内乞はぬもあり。其の時は。ト狂言よりかゝるもあり。尤も太夫道行過ぎて後なり。へ＼さて御身はいかなる人にて渡り候ぞ。シテシカ／＼。へ＼實にもおしやれば尤もぢや。是は餘の女には變りて候。さあらば我等の心得を以て拜ませ申さうずる間。亂拍子を踏むで舞を舞うて御見せ候へ。ト云うて。笛座より烏帽子持つて出で。太夫に向ひて。セリフを云ふなり。へ＼折ふしこれに烏帽子の候。之を着て面白う御舞ひ候へや。ト云うて。烏帽子を渡す。太夫謡取り。太鼓座にて烏帽子を着せる心にて。シテの後に居る。シテ烏帽子着て。さて二人連つて笛座へ行き。下に居るなり。さて鐘落ちて二人共行き。頭取はシテ柱の向うへ。桑原々々と云うて出ろ。アドは橋懸りの方へ行く。ゆり直せ／＼と云うて行く。尤も二人とも轉び。耳に手を當てる。シテへ＼扨々鳴つた事かな。今のは雷であつたか。たゞ事とは思はれぬ。アドへ＼今のは地震であらうか。但し山が崩れたか。したゝか鳴つた。シテへ＼石垣の崩れた音の樣にあつた。ト云うて。二人橋懸りにて行當たり。肝を潰す。色々仕績あるべし。シテへ＼今の鳴つたを聞いたか。アドへ＼なるほど聞いたが。何で有らうと思ふ。シテへ＼身共は雷が十も二十も一度に落ちたと思うて。たゞ桑原／＼と云うて居た。アドへ＼いや某は地震ぢやと思うて。ゆり直せ／＼と云うて居た。シテへ＼とかく唯事ではない。さて方角はどこで有らうと思ふぞ。アドへ＼されば本堂鐘樓堂の間でもあらうか。シテへ＼とかく其の邊が心許ない。先づ急いで見て來う。アドへ＼一段とよからう。シテへ＼さあ／＼おりやれ。アドへ＼心得た。シテへ＼あゝ何時どの樣な事があらうも知れぬのう。アドへ＼其の通りぢや。ト云うて。二人舞臺へ行きて見附け。二人共驚きつ。シテへ＼わあ。これは鐘が落ちた。アドへ＼誠に鐘が落ちた。シテへ＼さて最前のは是であつた。アドへ＼何として落ちたぞ。シテへ＼先づ急いで上げて見う。手をかけさしめ。アドへ＼心得た。

す人は此の家の内には御座なく候か。日へ申々。祖慶官人は此の内にて候か。さてそれは如何やうなる仔細により御尋ねにて候ぞ。唐へ御不審尤もにて候。祖慶官人が子にそんしそいうと申す兄弟の者にて候が。祖慶官人未だ存命の由を承り。數の寶を船に積み。官人に換へ。連れて歸國せうずるため。これ迄參じて候。箱崎殿へ引合はせて給はり候へ。日へ斯かる目出度き事こそ候はね。頓て箱崎の何某に此の由申聞かせうずるにて候。暫くそれに御待ち候へ。唐へ心得申して候。日へ如何に申上げ候。近頃目出度き事の御座候。祖慶官人が唐土の子に。そんしそいうと申す兄弟の者にて候が。數々の寶を船に積み。官人に換へ歸國せうずる爲。是迄參りたる由申し候。ワキシカ〳〵。へあの沖にて御座ありげに候。シカ〳〵。へ畏まつて候。最前の人のわたり候か。唐へ是に候。日へその由申して候へば。何某も對面申されうずるとの事にて候間。是へ御出であれと御申し候へ。唐へ心得申して候。其の由申して候へば。箱崎殿御對面あらうずる間。あれへ御通りあれとの御事にて候。船立てかけて置く。ワキ叮出すて。日へ御前に候。シカ〳〵。へ畏まつて候。樂屋むいて。皆承り候へ。祖慶官人野何より歸り候はゞ。仔細ある事の候間。裏道より裏の門に歸り候へと。よく〳〵申付け候へや。納受し給ふ。の謠過ぎて立ち。ツレの方むいて片膝立て。唐へ追風がおりて候お船に召され候へ。ト云うて又間座に居る。太刀持はシテ出ると其儘切戸より入る。唐人はツレ供して出で。二人の子供に乘ると其儘船の間に乘り下に居る。艫杜立て艫は柱より面の方下に置き。その繩を持つて居る。道行打切つて。海漫々。の謠の時。そろり〳〵と手操り艫を引上げる。道行過ぎると其儘艫を下す。ツレ「如何に盡かある」の時。艫の中に居ながら膝立て「畏つて候」と云うて立ち。後の方より艫を出して後を通り。舞臺へ出て案内。「其由申して候へば」の時に。シテ柱の手前にて[illegible]の方むき[illegible]を立て入る。道行過ぎて皆々船より[illegible]りへゆき。艫杜取つて艫と一所に括りて。[illegible]共に[illegible]の枝に[illegible]また[illegible]く。また間座に居る。出囃子過ぎると。其儘立て[illegible]の中へ[illegible]。[illegible]を正面むきて下に居く。艫杜立て艫は柱より内方に下に置く。繩を外より艫の下へ括らせて。ツレの間より供の間へ引出し持つて居る。艫をひきつれて。の謠の時。そろ〳〵艫引上ぐる。謠過ぎる。其儘下す。シテツレとも皆々船より上り入ると見合せ。立つて供して入るなり。

道明寺(だうみやうじ)

アヒ 末社

へ是は河内國道明寺において。天神の末社の神にて御座候。只今罷出る事餘の儀にあらず。相模の國田代寺と云ふ所に。尊性と申して貴き人あり。此の人は往生極樂の望みあるにより。念佛三昧にして。他念もなき身なりしが。信濃の國善光寺に。一七日御參籠あり。此度安樂の世界に迎へ取り給へと。祈念ありければ。忝くも如來は御寶殿の御戸を開きゆるぎ出でさせ給ひ。尊性に向つて示し給ふ。汝往生極樂の望み疑ひなし。さらば是より五畿内河内の國。土師の寺に參り給ひ。其の寺に木槵樹といふ木あり。その木の實を取り。百八の數珠とし。念佛百萬遍申し給はゞ。極樂往生は疑ひあるまじくとの御告にて夢さめぬ。尊性は悦びのあまり。衣の袖を絞り。御夢想にまかせ當寺へ參詣し給ふ。まづこの木槵樹の有難き仔細と申すは。昔佛在世の御時。靈山會上にして。御法の庭に七つの植木あり。沙羅麁樹。毘蘭樹。娑羅双樹。紫胡双樹。藥王樹。菩提樹。木槵樹とて。是皆釋迦佛の相支し給ひたる木なり。中にも木槵樹と申すは。此の木の下にて過去現在未來を見給ふ。妙なる植木にて御座候。されば此の土師の寺の木槵樹は。天神筑紫の宰府へ御左遷の御時。御在所なれとて暫く此所に御座を構へ。現當二世安樂の爲に。五部の大乘經を書き供養し。この軸になるべきもの如何なるものかあるべきぞと。天竺より我朝へ渡りし木槵樹の枝を引いて。大乘經の軸に付け。念の箱に入れ。乾の角に埋み給へば。かの木槵

樹の軸より。若生え出でき。幾年爰に猶も榮え實のなる事。皆これ佛法繁昌の威力。目出度き故にて候。もとより神と佛は水と波とに喩へ。一體分身にてましませども。一切衆生に知らしめんが爲に。當寺におき候ひては。まづ神明を祝ひ奉り。七社の神々を勧請あり。天満天神の宮寺と現じ跡を垂れ。許多の奇瑞を見せしめ給ふ。されば當社天神は。かの尊性の志を感じ思召され。第一末社白太夫の神を遣され。木槵樹の謂れ。又は天神の威光あらたなる御事。念比に御物語なされて候。此上は舞樂を奏して。尊性を慰め給はんとの御事なり。舞樂も過ぎ候はゞ其後。かの木槵樹を與へ給はらずる間。我等如き末社にも罷出で。共に木の實を拾ひ參らせよとの御事により。是迄罷出た。斯かる奇特は上代にもあるまじき御事にて候間。寺中の面々は申すに及ばず。門前の輩において。男女老少によらず。一人も殘らず罷出で木の實を拾ひ參らせ。斯かる有難き様體を拜み申し候へ。その分心得候へ〳〵。

高砂

アヒ　里人

ワキツレ呼出す。〽當浦の者とお尋ねは。誰にて渡り候ぞ。シカ〳〵。〽心得申して候。〽當浦の者にて候が如何やうなる御用にて候ぞ。ワキ前にて。シカ〳〵。〽是は存じも寄らぬ事を承り候ものかな。我等も當浦には住居仕れども。さやうの御事は上々の御沙汰なされ。我等などの存ずる仔細にては御座なく候。されども初めて御參詣あつてお尋ねあるを。何をも存ぜぬと申すも如何なれば。大方承及びたる通り御物語申さうずるにて候。語まづ。高砂の松と申すは。是なる松を申しならはし候。又相生と申す仔細は。當社の明神と播州住吉の明神は。夫婦御一體の御神なるが。古今の集の序に。高砂住の江の松も相生のやうに覺えとあり。いふくにて神語らひをなされうずるぞと思召さるゝに。總じて松程めでたきものは御座あるまじい。それを如何にと申すに。一寸生ずれば常に千年萬歳の齢を保ち。雨露霜雪にも侵されず。色香妙にしてめでたき物なればとて。この松を兩神相諸共に植ゑ給ひ。この松の木蔭にて夫婦神語らひをなさるゝによつて。相生の松とも申し候。又愛にめでたき仔細の御座候。九夏三伏の暑月は。行きくこの風をふくみ。玄冬霜雪の寒朝。松君子の徳を現す。天くだる。荒人神の相生を。思へば久し住吉の松と。斯様に承りて候。其外松のめでたき仔細と申すは。昔上代に萬葉集を撰ぜらるゝに。高砂の松に喩へて撰じ給ふ。又延喜の帝の御時。古今集を撰じ給ふに。是は住吉の松に喩へ撰ぜらるゝ。昔の御壽命も和歌の道も。高砂松の盡きせぬ如く。相諸共に久しかれとの御事にて御座あるよし承及びて候。又和歌の詞にも塵積つて山となり。砂長じて巖となる。濱の眞砂は盡すとも。讀む言の葉はよも盡きまじいなどと承及びて候。最前申す如く松の謂れ。當社のめでたき仔細様々御座ありげに候へども。我等の承及びたる通り御物語申して候が。扨お尋ねは如何やうなる御事にて御座候ぞ。ワキシカ〳〵。〽近頃奇特なる事を承り候ものかな。其推量仕るに。神主殿當社へ御參詣を神慮にも嬉しく思召され。兩神夫婦現れ給ひ。住吉にて待たうずると仰せられたると存じ候。總じて當社へ御參詣の人は住吉へ御參詣あり。又住吉へ御

參りの人は當社へも御參詣なうては叶はぬ事にて候。折節某小船一艘作り立て持ちて候。未だ乘り始め仕らず候。斯樣のめでたき神主殿を乘せ申してこそ。船路の行末も千秋萬歳めでたからうずると存じ候間。神主殿を船玉と祝ひ申し。某かん〴〵どりに參り。住吉へ送り申さうずるにて候。シカ〳〵。〽あれ御覽候へ。神慮の奇特にて日本一の追風が吹來りて候。お船に召され候へ。

竹雪（たけのゆき）

アヒ　繼母
同　　家來

シカ〳〵。女〽何事にて候ぞ。シカ〳〵。女〽何とお喃と仰せ候か。目出度う頓て御下向候へ。シカ〳〵。女〽竹の雪のこと心得申して候。また月若殿のこと能く勞はれと申すは。あら今めかしき事を申され候。何方への御留守にも。勞はらぬ事の候か。頓て御下向候へや。（子方に向つて云ふ）女〽いかに月若。父御の物詣とて御出で候御留守につき。若を能く勞はれと仰せを聞いて候。これは今めかしき事にて候。いかさまお事は妾が惡くあたるなどと告口してあるか。面憎や腹立ちやな〳〵。（光ること色々口傳。）女〽あら不思議や。月若が見えぬは。如何に。誰かある。トモ〽御前に候。女〽月若は何方へ行きてあるか。トモ〽更に存ぜず候。女〽いや推量してある。妾が叱りたるを心に掛けて。例の長松の方へ告口に行きてあるな。あら憎い事かな。唯今父御の御歸りあつて。お尋ねあると申して連れて來り候へ。トモ〽畏まつて候。トモ〽いかに申し候。月若殿を伴ひ申して參りて候。女〽いかに月若。また長松殿の方へ行き告口してあるな。さりとては憎いことにてあるぞとよ。父御の仰せ置かれてあるは。雪降らば四壁の竹の雪を拂はせよと仰せ置かるゝ。殊の外雪が積りて候程に。急いで竹の雪を拂ひ候へ。いや物をも脫いで。ただ單衣にて拂ひ候へ。トモ〽あら痛はしく候。月若殿雪に埋れて空しく成り給ひたると申す。急いで長松に御座候母子の方へそれ〳〵と申し候。

トモは大方ワキ方よりも出る。

忠信（たゞのぶ）

アヒ　里人

早皷にて出る。〽斯樣に候者は。吉野十八郷の肝煎にて候。唯今此所へ罷出ること餘の儀にあらず。賴朝この頃聞召され。急ぎ義經を討ち取つて參らせよ。さなきに於ては。此の吉野の者共を。曲事たるべしと仰せあるに依つて。其の時衆徒の詮議には。今まで御抱へ申すも。自然御仲直りもあるべきかと存じてこそ抱へ置きしが。斯樣仰出されたる上は。是非なき事なれば。急ぎ義經を討つて出し申すべきとの事にて候。尤も義經御心中は。あはれに存ずれども。面々難儀には替へられぬとて。はや相談極まつて候さりながら。たゞ世の常にてはなかなか討つことなるまじい。夜討をかけ討取るべきとの御事にて候。義經この事を聞召されて候はゞ。此の吉野の者をさぞや御恨みとは存じ候へども。賴朝仰出さるゝ上は是非がない。此の夜半の時分に押寄せ申すべきとの御事なれば。此の吉野の者どもは。何れも殘らず罷出で。義經討手に向ひ候へ。若し一人にても罷出でずば。其の身の事は申すに及ばず。子々孫々までも。曲事に行はるゝとの御事にて候間。急ぎ罷出で候へ〳〵。構へて其の分心得候へ〳〵。

此の間三人にても出する。

忠度

アヒ　里人

へこれは。須磨の里に住居する者にて候。今日は暇に候間。何方へも罷出て。心をも慰まばやと存ずる。や。見なるお僧達は。此の邊りにては見馴れ申さぬお僧なるが。何方よりの御出でにて候ぞ。ワキシカ〳〵。へ中々。此邊りの者にて候。シカ〳〵。へ心得申して候。扨尋ねありたきとは如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。へ是は存じも寄らぬ事を承り候ものかな。我等もこの須磨の里に住居申せども。さやうの御事委しくは存じも致さね。さり乍ら。初めて御下向と承り候を。所に住みながら曾て存ぜぬと申すも如何に候間。我等の聞及びたる通り。御物語申さうずるにて候。語まづ。其頃平家は軍盡き都を追出され。取る物も取り敢へず。壽永二年七月二十五日に。津の國にさして落ち給ふ。眞に物の哀れと申すは。斯樣の時にて御座ありげに候。然るべき人こそ。妻子をも引具して落ち給へ。さもなき人は。妻や子を都に捨置き下り給ふ程に。故郷にのみ心を殘し。立歸りては泣くばかりにて。目もあてられぬ樣體にて御座ありたると承り及びて候。さる間薩摩守忠度と申すは。平家淸盛公の御弟なりしが。これも御一門と同じく此の一の谷へ御出陣ありしに。また其頃にてもや候らん。五條の三位俊成卿は。勅によつて千載集を撰じ給ふ。忠度は世に隱れもなき歌人なれば。集歌の人數に入り給ひたく思召され候へども。勅勘の身なれば其の御望み中々思ひも寄らず。力及ばせ給はずして。津の國さして御下向ありしが。千載集の御事を。御心に隙なく思召さるゝによつて。途の中より又御馬を引返し給ふ。夜に紛れて都へ御上りなされ。俊成の館へ御出であり。靜かに門を叩かれ内に入り。俊成に御對面あつて。忍びやかに仰せられける樣は。われ今度一の谷にて討死すべき身なり。今生に思置く事更になし。此度千載の集歌に。漏れ給はん事を無念に思召され候なり。草の蔭まで是のみ忘るべきにあらず。もし憐れと思召さば。一首加へ給へと泪を流し仰せられければ。俊成も共に泪を流させ給ひ。忠度の心中憐れに思召され。此度の集歌に必ず加へ給うずるぞ。さり乍ら。何れの御詠歌ぞと御尋ねありければ。其時薩摩守は。故郷の花と題にて。さゞ波や。志賀の都はあれにしを。昔ながらの山櫻かなとある御歌を書付け。俊成卿へ御目にかけられければ。俊成は大きに譽め。斯樣の歌は代々稀なるべし。千載集に加へ給はうずる間。御心やすく思召され候へと。堅く御約束ありければ。忠度は悦びの餘りに。我れ山野に屍をさらすといふとも。今は此の世の望みなしと。御悦びの袖を絞り給ひ。互ひに御暇乞あり。また此の所に下り給ふ。都には千載集を撰ぜらるゝに。俊成卿に忠度の御歌を集歌に加へ給へども。勅を憚り作者をば顯さず。讀人しらずと。書付け給ひたるなど承り及びて候。さる程に。薩摩の守忠度の御最後と申すは。平家打負け多く討たれ或ひは生捕られ。又は遁げのびたるは船に乘るもあり。皆散り〴〵になり給ふ。忠度もあの刈藻川。須磨の板宿を打過ぎ。西をさし渚について落ち給ふを。源氏の兵これを見付け參らせ。我も〳〵と駒を早め大勢にて追詰め。中に取籠め申す。忠度も隨分防ぎ戰ひ給へども。多勢と申し諸武者と云ひ。忠度叶ひ給はず。遂に討たれ給ひて候。誠に歌人にて御座候ひけるぞ。御最後の御歌に。行暮れて。木の下蔭を宿とせば。花や今宵の主ならまし。忠度

と書付、御身に添へ置かれたるなどゝ承り及びて候。されば御最後まで斯様に御心中なる昔人哀れに存じ、花の今宵の主ならましとある。この歌の心を以て、忠度のしるしの爲に。是なる櫻を植ゑおき、今に至つて若木の櫻と申して。隱れもなき名木にて候。最前申す如く、忠度の御最後の樣體。また若木の櫻の謂れ、委しくは存ぜず候へども、まづ我等の承りたる通り。御物語申して候ふ。扨お尋ねは如何なる御事にて御座候ぞ。　シカ〳〵。　〽扨々俊成卿の御內に御座ありたる御方とも存ぜず。最前より知らぬ歌物語。御心中の程迷惑仕り候。　シカ〳〵。　〽いやさり乍ら是と申すも。俊成卿の御內に御座ありたる人なれば。古をなつかしく思召され。今また貴き御身と申し、殊には木蔭に立寄り花をも眺め給ふ事を、忠度は嬉しく思召されて。再び閻浮にまみえ給ひ。都へ御言傳をもあらうずると仰せられたると存じ候間。末は急ぎの御旅なりとも。今夜にこの花の蔭に御逗留あつて。忠度の御跡を御弔ひなされ。其後何方へも御通りあれかしと存じ候。　シカ〳〵。　〽左様に候はゞ御逗留の間は御用を承り候べし。　シカ〳〵。〽心得申して候。

龍田（たつた）

アヒ　里人

〽斯様に候者は。この龍田の里に住居する者にて候。此の程宿願の仔細あつて。明神へ日參仕る。今日も參らばやと存ずる。や。是なるお僧は。此の邊りにては見馴れ申さぬが。何方よりの御參詣にて候ぞ。　[illegible]　〽[illegible]。この神と申すは。廣瀬立田の明神とて。二社共に風水の難を除き。人民豐年を祈り。此の明神を祀り奉る。然るに天武の御宇に神勅を立てられ。風神を龍田の立野に祭らしめ給ふ。又は級長戸邊の命これ風神なりと申す仔細。最も神秘の御事なり。今龍田姫と申すは。この明神とかや。また瀧祭の御神は水神の宮なり。澤女の御神とも申す。或は美津波の御神とも申し奉る。されば龍田の御神と瀧祭の御神とは御同一體にて渡らせ給ふ。天津御柱國津御柱とて。天の運營を守護し給ふとも申す。或はこの御神宇賀の神とて、五穀成就を司り給ふ御神とも申し候。また古老傳と申すものには。雷神の仔細を書きのせられたる由申し候。何れもめでたき由來類なき御神にて御座候。さる程に當社において、紅葉を御神木と崇め申す事。龍田山の紅葉いにしへより名木の樣に歌人も詠じ、今に至つて名高き名木にて候。この御神女神にて渡らせ給ふ故。楓より紅葉の色美しきものなれば、御神木と崇め申すげに候。この外に奧深き事も御座あるなどゝ承り及びて候。總じて當社の御事は。神秘至極我等如きの存ずる事にては御座なく、斯様に申すも如何に御座候へども、あら〳〵申上げ候。最前申す如く委しき事は存ぜず候。まづ我等の承りたる通り、御物語申して候が。扨お尋ねは如何やうなる御事にて御座候ぞ。　シカ〳〵。　〽是は奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに。お僧の御心中貴くましまし。殊には國土に御經を納め給ふ御志を。神慮にも有難く思召され。假に巫の姿とまみえ給ひたると存じ候。末は急ぎの御事なれども、暫く神前に御座候ひて、信心をもなし給はゞ、重ねて奇特の御座あらうずると存じ候。　シカ〳〵。　〽重ねて御用もあらば承り候べし。　シカ〳〵。　〽心得申して候。

玉葛

アヒ　里人

〽是は當寺門前に住居する者にて候。此間は。用の仔細御座候ひて。御堂へ參らず候程に。今日は參らばやと存ずる。や。是なるお僧は。この邊りにては見馴れ申さぬが。何方より御出でにて候ぞ。ワキシカ〳〵。〽中々この邊りの者にて候。シカ〳〵。〽心得申して候。扨お尋ねありたきとは如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。〽只今申す如く。この邊りには住居申せども。左様の事は上々に御沙汰なさるゝ御物語を。我等如きの存ぜう仔細にては御座なく候然れども。初めて御參詣ありお尋ねあるを。曾て存ぜぬと申すも如何に候間。大方承りたる通り御物語申さうずるにて候。語まづ。この玉葛の内侍と申すは。御父は致仕太政大臣。母は夕顏の上にてわたらせ給ひたると承及びて候。この夕顏の上は不慮の仔細あつて。何某の院にて空しくなり給ひたると申す。其頃姫君三歳にならせ給ふが。寄り所なくてわたらせ給ひしを。乳母具し奉りて　筑紫肥後の國に下り。彼處にて數多の年を送り人とならせ給ひて候。然る所に其の國の太夫の將監と申す人。この君の優に美しくおはします由を聞及び。寄り〳〵申掛け。既にはや。押して取らんと仕るを。乳母の總領の豐後の介など。甲斐〳〵しく心を一つにして。いや〳〵此の君は當時代に隱れなき人の御子にてわたらせ給ふなるに。鄙の御住居に定まらん事ないとほしく思ひ奉り。太夫の將監。其外心緣りの人に忍び。急ぎ早船に召され。心づくしを忍び出で。道すがら難所をも過ぎ。程なく都に着かせ給ひ。九條のあたりいさゝかなる所に忍びておはしますが。誠に水鳥の陸に上り。巣を離れたる鳥の樣に思召し。悲しみ給ひたると申す。然れば大和の國初瀨の觀音は。御利生あらたなる御事。唐土迄も隱れなければ。まづ初瀨に御參りあらうずると思召し。それより徒步にてこの觀世音に詣で給ひたると存じ候。また夕顏の上に仕へ奉りし。右近と申す女房の候ひしが。源氏の君さる御心の愼しみあつて。不憫し給ひ紫の上の御方へ參らせられ。かずまへ召使はれたると申す。かの右近も。姫君の御事祈りの爲當寺へ參り給ふが。なんぼう不思議なる御事にて候ひけるぞ。この邊り近きあれなる海石榴市と申す所にて。姫君も右近も相宿りし給ひ。兎角して名乘り出で。越し方の御物語あはれなる御事にて御座ありたると申す。其時右近の歌に。二本の。杉のたちどを尋ねずは。布留川のべに君を見ましや。と詠み給ひ。其後都に御上りなされ。まづ源氏の君へまゐり給ひ。後に髭黑の大將の北の方になり給ひ。里住居にて内侍を兼ね給へば。玉葛の内侍の守とは申したるげに候。最前申す如く玉葛の御事委しくは存ぜず候へども。まづ我等の承りたる通り。御物語申して候が。扨お尋ねは如何やうなる御事にて候ぞ。シカ〳〵。〽是は奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに。貴きお僧の此所へ御參りな。玉葛の君は嬉しく思召され。一句をも聽聞あり。一向をも浮みたう思召し。幽靈これ迄まみえ給ひたると存じ候間。末は急ぎの御旅なれども。暫く此所に御座候ひて。玉葛の御跡を念比に御弔ひあれかしと存じ候。シカ〳〵。〽御逗留の間は御用を承り候べし。シカ〳〵。〽心得申して候。

玉井（たまのゐ）

アヒ　榮螺の精

へ斯樣に候者は。海中に住む榮螺の精にて候。只今罷出る事餘の義にあらず。目出度い事のあるにより是迄罷出た。アド大勢　出る。へわれ〳〵。何れも早うこそ出でられたれ。シカ〳〵。へ今度の目出度い事を知つたか。アドへいや何事も知らねども。目出度いと云ふ程に出た。シテへ此樣な事を知らぬと云ふ事があるものか。さあらば語つて聞かせよ。語まう。天神七代地神四代の尊をば。火々出見と申し奉る。又火々出見の尊の御爲に兄の尊の渡らせ給ふが。是をば火闌降と申す。此の尊は釣に好き給ひ。明暮釣を垂れて御遊びなさるゝ事を。火々出見の尊御羨しく思召され。兄の尊へ少しの間釣針を借り參らせられ。海邊に出でゝ釣を御沙汰ある所に。如何なる魚か來て。かの釣針を喰切つて何處ともなう去んだ。火々出見の尊は呆れ果て御歸りなされ。火闌降へ此の由斯くと仰せられければ。兄の尊は聞し召され。なか〳〵其の針こそ身を離さず祕藏の針なれども。御所望なればこそ少しの間借し參らせたれ。急ぎ御返しあれと宣ふ。火々出見の尊色々御斷りを仰せらるれども。御同心もないによつて。其時尊われ靈劍を持つて候程に。此の劍を崩し針の數あまたに磨らせて參らせうずると仰せられければ。其の劍は其儘おいて。其方の御祕藏に遊ばさせ。只元の針を早々御返しあれと。理非を選ばず仰せらるゝによつて。是非に及ばず龍宮にいつて。この針を尋ねうずると思召せども。海路御存じないによつて。鹽土の翁に道のやうな御尋ねなされ。目無の籠とやらんに召され。この大海の都に御着きなされた。誠に。初めての御事なれば。この都をば恥しう思召して。玉の井の邊りにある。桂の木の陰に御身をひそめて御座なさるゝ所へ。豐玉姫玉依姫御姉妹。玉の釣瓶を持ちて御出でなされて。かの火々出見の尊を御覽なされた。かの火々出見の尊と申すは。忝くも天孫の尊なれば。邊りも輝く御氣色なり。また御姫君の御姿は。猶以て世に越え美しう渡らせ給ふによつて。互ひに御心移り。互ひに打解け頓て宮中に御住ひあつて。淺からざる御仲となり給ひ。はや程なく三年にもなれば。御姫宮は御懷姙ならせ給ふ。其時火々出見の尊かの釣針の御事御物語ありしを。豐姫は聞召され。御父の神に此の由かくと仰せらるゝ。それこそ易き御事なれとて。頓て海中にある鱗を殘らず集め。色々御詮索なさるれども更に此の針がない。不審なる事と思召され。もし此外に殘りたる魚やあると重ねて御尋ねなされたれば。其事にて候。赤女と申す魚の候が。日中を痛み參らぬ由を申上ぐる。それこそ猶以て不審なれ。急ぎその赤女參れとあつて。頓て召出され口を割つて御覽ぜられたれば。件の釣針のありしを其儘取出させられた。火々出見の尊は是を聞召して。なか〳〵御悦び限りもなうて。まづ急ぎ我が家に御歸りあらうずると仰せらるゝ。父の神思召さるゝは。あなたへ御歸りなされても。定めて火闌降怒る御心は止むまい。其時の爲にとあつて。かの釣針に干珠滿珠二つの玉を相添へ。尊へ參らせられうずるとの御事ぢやげな。此度海中において生あるものは罷出て。尊を送りまゐらせ。又は御姿をも拜み申せとの御事なるによつて。數ならぬ我等如きも是迄罷出たが。なんぼう目出度い事ではないか。シカ〳〵。へなかなか。宮中には尊の御門出でなるによつて。あそこも爰も御酒宴までぢやと云ふ程に。いざ

此方も諷うて酒を飲むまいか。シカ〱。へ酒盛あり。へ是程めでたいに。只今の酒盛の體をいざ一節諷うていぬるまいか。シカ〱。へ酒宴をなして甲斐〱しく。同へ酒宴をなして甲斐〱しく。鮑貝を盃に定め。伊勢貝貝の。銚子を出し。みめよき蛤の上臈貝に。お酌をとらせ。簾貝かけならべ。軒端の櫻貝。紅海に来鳴く。鶯の鳥貝も有明の。西に傾く月も赤貝曇らぬ時を。吹く法螺貝は。天地神の禁蝶となりて。天地神の禁蝶となりて。をさまる海中に入りにけり。

同

アヒ　鱗の精

（亂序にて出る。）へ斯様に候者は。海中に住む鱗の精にて候。只今罷出る事餘の儀にあらず。天神七代地神四代の尊をば。（是より語。貝盡し方にあると同じ事なり。）（先を語りつめに狂言らしく。貝盡しに二所三所あり。その所を末社間の様に直し。慇懃に語るなり。）又は御姿をも拜み申せとの御事により。數ならぬ我等如きも是迄罷出で候。誠に斯様のめでたい事は御座あるまじいと存ずる。宮中には尊の御門出なるによつて。あそこも爰も御酒宴までぢやと申す。我等如きもめでたう一曲仕り。罷歸らうと存ずる。めでたかりける時とかや。（下三段の[illegible]の通り。）

田村

アヒ　門前の者

へ是は清水寺門前に住居する者にて候。今日は地主の花盛りなる由申し候間。罷り出で花をも眺め。心をも慰まばやと存じ候。へこれなるお僧達は。このあたりにては見慣れ申さぬが。いづ方より御參詣にて候ぞ。ワキシカ〱。へさてさてこのあたりの者にて御座候。シカ〱。へ心得申して候。（下に居て。）へ扨お尋ねありたきとは如何様なる事にて御座候ぞ。ワキシカ〱。へ是は存じも寄らぬ事を承り候ものかな。我等もこの門前に住居申せども。御來歴などは委しくは存ぜず候さりながら。初めて御參りあつてお尋ねあるを。何をも存ぜぬと申すもいかゞに候間。我等承りたる通り御物語り申さうずるにて候。（語）まづ。當寺と申すは。昔平城天皇の御時。大同二年に坂の上の田村丸の御建立の御寺なる由承り及びて候。また其頃にてもや候らん。大和の國小島寺と申す所に。延鎭と申して大智識のわたらせ給ふが。正身の觀世音を拜みたう思召され。信念もなく毎日毎夜に觀音經を讀誦し給ふに。ある時淀川の水上に當つて。金色の光あきらかに差し渡り。あたり輝き見えて候程に。不審に思召し行きて御覧なされ候に。此水上に浮び給ふ千手觀音の佛像光明赫奕として眼前に拜まれさせ給ひ候程に。扨は我が願ひ成就してあるぞと思召され。斜に悦び給ひたると承りて候。其時この山上を御覧なさるゝに。とぼし火の影ほのかに見えたる山中に。何者か住むにやと分け入り御覧候へば。只一人老人のまします。いかなる人ぞと御尋ねありければ。是は行叡居士と云ふ者なるが。われ此山に住んで七百歳の星霜を經る者なり。御身は此所にて一人の檀那を待ち。大伽藍を建立すべき其縁あるぞと云ひもあへず失せ給ひたると申す。又その頃伊勢の國鈴鹿山に鬼神雲霞の如く籠り居て。上下の者を惱まし申すを。或人これを君に奏し申さる。されば則ち田村丸は勅を蒙り。其儘鈴鹿山に打立ち給ふが。何とか思召されけん先づ當寺へ御參りあつて。此度鈴鹿山の鬼神やす〱と從へさせ御申し成さるゝならば。此所に大伽藍を建立あらうずるとの御誓願に

て。是より直ぐに鬼神雲霞の如くありけるためすゝゝと御退治あつて。國土治まり都鄙の悦び今の世に至る迄。天下安全なる事も。斯樣の謂れなる由申傳へて候。最前に小島寺の沙門に一人の稚那な御待ちあれとは。田村丸の御事にて御座ありたるげに候。先に申す如く御來歴委しくは存ぜねども。まづ我等の承りたる通り御物語申して候ふ。如何なる仔細により御尋ねにて御座候ぞ。ワキシカ〲。へ是は奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに。御信此所へ初めて御參りあるを田村丸は嬉しく思召され。今の折から花にはむれ是迄御出でなされ。御言葉を交させ給ひたると存じ候間。御下向は急がせ給へども。花の蔭にて有難き御經をも御讀誦あらば。重ねて奇特の御座あらうずると存じ候。シカ〲。へ御逗留の間は御見舞申さうずるにて候。シカ〲。

へ心得申して候。

檀風（だんぷう）

アモ　本間の從者

（本間の供して出る。直ぐに太刀を本間の左の方へ差置く。リキツレ（本間）シカ〲。）

へ御前に候。シカ〲。へ畏まつて候。シカ〲。（後に太刀を渡すしき。）

へ心得申して候。ワキシカ〲。へなか〲。囚人とは誰にて渡り候ぞ。シカ〲。此の家の内にて候が。如何なる御用にて候ぞ。シカ〲。へ總じて囚人の所縁に對面は堅く禁制にて候程に。なか〲叶ひ申すまじく候。シカ〲。へ尤もにて候。誠に資朝の卿の御事は。本間も勞はり申され候間。先づ其の由申さうずる間。暫くそれに御待ち候へ。へいかに申上げ候。都今熊野梛の木の坊に。師の阿闍梨と申す客僧にて候ふ。幼き人を御伴ひあり。これまで御下向にて。御對面あり度きとの御事にて候。本間シカ〲。へ禁制の由申上げ候へ、どもさりながら。資朝の卿の御事は。別して御勞はりにて御座候と存じ。さて斯樣に申上げ候。シカ〲。へ畏まつて候。へ最前の客僧の渡り候か。ワキシカ〲。へ唯今の由本間に申して候へば。對面申さうずるとの事にて候間。かう御通り候へ。本間シカ〲。へ御前に候。シカ〲。へ畏まつて候。シカ〲。へ尤もにて候。（退出一つ切りよけくる）へ斯樣に候者は。佐渡の島の御家人。本間の三郎何某に仕へ申す者にて候。唯今罷出ること餘の儀にあらず。思ひも寄らざる事の出で來。これ迄罷出でて候。それを如何にと申すに。先づ今度元亨の亂れに。囚人數多御座候中にも。資朝の卿を生捕り。頼うだ本間預かりにて。此の島に御座候處に。都今熊野といふ所に。師の阿闍梨と申す客僧の御座候が。此の客僧の庵室に。資朝の卿の御子息。梅若丸といふ人。さる仔細候ひて。手習をなされ御座候が。何とぞ父御の存命のうち。今一度對面なされうずると思召し。師匠の坊を頼み。同心なされて。此の佐渡の島へ御下りなされて候。總じて囚人の所縁に對面は堅き法度にて候へどもさりながら。本間は資朝の卿を不憫に思召されけるか。また幼き人の遙々の下りをやさしい事と存ぜられ候故か。兩人の人に對面せられて候。又二三日が先に。都より飛脚參り。資朝の卿は一大事の囚人にてある間。急ぎ誅し申せとの御事にて候。本間も傷はしく存じ候へ、ども。上意重ければ力及ばず。濱の邊りへお供して。夜前我と本間が手に掛け。害し申されて候間。なんぼう哀れなる御事にて候。彼の御最期の時。資朝の御子。師匠の山伏も後より之を見られ候が。稚心にも親を討たれたれば。敵ぢやと存ぜられ候か。頼うだ者の間へ忍入り。此の中一番の草臥にて。正體も

なう致し申され候處を。彼の兩人の者。何の手もなく、剌殺し。何處ともなく逃げ申して候。斯樣の事にては。賴うだ者のお前に相詰め。天晴れ武邊致し。兩人共に某打留め申さうものを。さて／＼無念。口惜しい事を致いた。また賴うだ者も不念ぢや。彼の兩人の者に油斷せらるゝ所は。運の極めと申さうか。此の樣な呆れた事は御座ないさりながら。唯今悔やうだと云うても返らぬ事ぢや。彼の兩人の者ども。未だ遠くは參るまい。皆々追手を懸け申せとの御事により。これまで罷り出た。へいかに浦々の者ども慥に承れ。今夜少人一人山伏一人。兩人して島の御家人本間殿をあやまり。何處ともなく落ち申して候ぞ。落居の間浦々の出船を留め候へ。構へて其の分心得候へ。

同　二人打手方

アヒ　本間の家來（二人）

早鼓にて出る。　シテ〽やるまいぞ／＼。アド〽何事ぞ／＼。此の樣におりやあつて出て。どちへ行たやら知つてこそ。シテ〽いや。此の事を得知らぬか。アド〽そつとも知らぬ。シテ〽言語道斷。我が主の果てたる事をさへ得知らぬといふやうな。魂消れた事があるものか。アド〽ぢやも知らずは何とせう。シテ〽それが虛けといふものぢや。さらば追附け語つて聞かせう。シカ／＼。シテ〽先づ今度元亨の亂れに囚人數多あれども。中にも資朝の卿は生捕にして。賴うだ者が此島に預りぢや。これは知つたか。アド〽それを知らぬといふ事があるものか。シテ〽さればこそ。それに就いての事ぢや。例へば資朝の卿に一人の御子息がある。此の子息の名を梅若丸といふ。都東山今熊野といふ所に。手習をしておぢやつたが。資朝の卿の事を悲しがつて。何とぞして父御の存命のうちに。今一度對面し度いと思うて。彼の師匠の客僧を賴み。同心して此の佐渡の島へ御渡りやつた。總別囚人の所緣に逢ふ事は。固い御法度なれども。本間は資朝の卿を不憫に思はれた故か。また幼い人の遙々の下りをやさしい事ぢやと思うて。志の程を感じての事か。彼の兩人の人に對面せられたが。此の樣な事も知るまいな。アド〽いや。山伏の下つたに。賴うだ者が對面せられたは能う知つた。シテ〽また此の二三日が先に。都より飛脚が立つて。資朝の卿は一大事の囚人である程に。早々誅し申されいとあらうずるとあつたによつて。本間も偽にしうは思はれたれども。上意重ければ力及ばず。濱の邊りへお供して。夜前我と本間が手にかけて。氷の樣な太刀引拔いて。ずんと首を打落されたまでよ。アド〽さても／＼。いとほしい事かな。シテ〽彼の御最期の時。資朝の御子息も。師匠の山伏も。後より之を見てゐたげな程に。稚心にも親を討つた者なれば。敵ぢやと思はれたか。また彼の客僧が指圖した事やら。賴うだ者の閨へ忍入つて。此の中の雷の草臥で。正體も無う寢て居らるゝところを。何の手も無う刺殺したまでよ。アド〽これは如何なこと。肝を潰いた。なうあらう事ぢや。シテ〽何と。斯うあらうとは。アド〽いや聞いた事がある。シテ〽何事を聞いたぞ。アド〽彼の客僧の名を聞いたが。聊爾をせいで叶はぬ筈ぢや。シテ〽其の仔細は。アド〽いや。彼の山伏は都今熊野の者ぢやが。名をば長刀の坊に粗忽の阿闍梨といふとぢや程に。此の樣な粗忽をしたは道理ぢやと思ふ。シテ〽うつけた事をいふ。なぞの坊に師の阿闍梨とこそいへ。粗忽の阿闍梨といふ事があるものか。シカ／＼。シテ〽いや。此の樣にむさとした事

な云うて居た分ではなるまい。各々御談合には。此の島は離れ島である程に。浦々の船をとどめて。其の上山をも捜せとの御事ぢや。お主も急いで浦へ出て舟を止めさしませ。シカ〳〵。シテ〽そちは北浦を觸れ。身共は南浦を觸るゝぞ。シカ〳〵。シテ〽いかに浦々の者慥に承れ。今夜少人一人山伏一人。兩人として島の御家人本間殿をあやまり。何處ともなく落ち申して候。落居の間浦々の出船をとめ候へ。構へて其の分心得候へ〳〵。

【ち】

竹生嶋（ちくぶしま）

アヒ　能力

亂序にて出る。〽斯様に候者は。江州竹生島の天夫に仕へ申す者にて候。只今罷出る事餘の儀にあらず。延喜の聖主に仕へ御申しなさるゝ臣下。當島へ御下向なされて候。是と申すも當島の御利生あらたなる故なり。誠に珍しからざる申し事にては候へども。當社の御事は。別して目出度き御事にて候。それを如何にと申すに。むかし人皇十二代景行天皇の御宇に。金輪際より一夜に涌出（ゆしゆつ）したる島にて候。則ち九生如來虛空再誕の御島なれば。其後天夫御影向なされ。一切衆生を守り給ふによつて。一度（ひとたび）御參詣の輩は。現世無比樂にして。後生清淨（しやうじやう）なる事は。疑ひもなき御事にて候。や。是は當社の目出度き仔細。先づかの稀人にお禮を申さばやと存ずる。下に居て　是は當島の天夫に仕へ申す者にて候。此所への御參詣。まづ以て目出度う存じ候。然れば當島においては。靈寶あまた御座候が。御望みに思召し候はゞ拜ませ申さうずるにて候。ワキシカ〳〵。〽心得申して候。是より仕舞口傳　〽是は昔この島に一夜の中に出生したる二股竹でござる。〽馬の角。〽牛の玉。〽扨これがこびたもので御座る。七男の腋毛でござる。〽是は則ち天夫の持たせられた珠數で御座る。結緣の爲ちと頂かせられい。サア〳〵かた〳〵も頂かせられい。そなたも頂きめされ。〽まづ靈寶は斯くの通りにて候が。なんぼう有難き御事にて候はぬか。ワキシカ〳〵。〽なか〳〵某が岩飛を仕る者にて候。頓て飛んで御目にかけうずるにて候。ワキシカ〳〵。〽心得申して候。いで〳〵、岩飛はじめんとて。〽いで〳〵、岩飛はじめんとて。高き所に走り上り。東を見れば。日輪月輪照りかゞやけり。西を見れば。入り日を招き。あぶなさうなる巖（いはほ）の上より。あぶなさうなる巖の上より。水底にづぶつぶと。入りにけり。下に居て　ハアクツサメ。

張良（ちやうりやう）

アヒ　家來

早鼓にて出る。〽斯様に候者は。漢の高祖の臣下に。張良の御内に仕へ申す者にて候。さる程に高祖の臣下に。兵者多き中に。蕭何韓信。彭越曹參。樊噲張良とて。何れも一騎當千の人なり。中にも頼み奉る張良は父張平の時より。悼惠王に仕へ。韓の國譜代の臣下にて。忠節の家には誰があるべきぞ。然れども秦の始皇六國を滅し。天下一統の世となし給へば。韓悉く滅び。何事につけても思ふに甲斐なく。やう〳〵家僮三百人引具し。既に張良は流浪の身となり申さるゝ。張良は此の事無念に思ひ。日夜朝暮思案をめぐらし存ぜらるゝは。兎角秦の始皇はわが主君の敵なれば。始皇を打つて韓の爲に仇を報じ。秦の國に志を得。韓一統の世となし申さんと。色々謀をめぐらし。ある時力士を頼み。その重さ百二十斤あ

りし黒金の槌を造らせ。始皇を打たんと企みをなし。狙ひ申さるゝ所に。ある時始皇は博浪沙を御通りありしに。兼て企みし事なれば。張良は物陰に待ちて。かの槌を振上げ。始皇を打つと見えしが。始皇の御運強くにや遁らせ給ひ。又は良が志未だ至らざるにや。副車に中つて打ち得ざりければ。始皇は大きに怒らせ給ひ。斯樣の振舞は何なる者にてやあるらん。あまねく尋ねよとありければ。それより天下を穫し尋ねけると雖も。張良が運の強き故にや。名を變へて下邳といふ所に隱れ住みけるに。少しもその障りなし。これ皆君臣の禮重んじ志の深き故。天の授くる所なり。さる程に此の間張良はある夜不思議の夢を見らるゝ。其の夢と申すは。是より下邳の土橋に出でゝ。何となく四方の體を遠見せらるゝ所に。何處とも知らぬ老翁馬上にて通る。張良存ぜらるゝは。此所において我を知らぬ事はあるまじきが。何者なれば斯く乘打は仕るぞ。不思議なる者と思はれける所に。かの老人五六町行過ぎ。馬引返し左の沓を落し。張良に向ひ。其の沓取つてはかせよと云ふ。張良は呆れ。最前乘打仕るさへ不審に存ずる所に。剩へ沓を取つてはかせよと云ふ。言語道斷不思議の者と思ひ。心を鎭めかの沓を見られけるに。其の姿唯人にあらず。其の上氣高に見えたる老人なれば。老いたるを以て父母と敬ふと云ふ。この心を思ひ出し。沓を取つてはかせ申さるゝ。其時かの老人申されけるは。汝志の深き者なり。兵法の秘術を傳へ申すべし。さあらば高祖に合聞あり君の師範と成つて。天下を治めよ。其の志あらば今より五日に當らん日。爰に來るべし。必ず兵術を傳へ申さうずるとて。かの老人歸ると思へば夢覺めぬ。張良は餘りの奇特さに。五日と申すにはかの下邳の土橋に出でられければ。案の如く夢の中の翁。はや張良より先に出て。怪しからず怒り申されける其の意趣は。我は老人の身なれども。その約束を違へず。夜をこめ此所に來りけるに。汝若年にしてこの老いたる者より後に出て。かゝる大事を傳ふるならば。汝が其の身悪しかるべし。眞に志あらば。又今より五日と云ふに。必ず是處に來たれ。約束をたがへず。一卷を傳へ申さうずるとて歸られて候。眞に斯樣の例なき奇特の御座候も。ひとへには張良が志深く。わけては親に孝を盡し。殊には民百姓を憐れみ。情深き人なれば。天の加護ある故に斯かる奇特もありげに候。やう〳〵日を考ふずれば。今日は早や四日になり申して候。又遅く候へば如何にて候。今度は宵より出でられても然るべう存ずる。何れも御供に參らうずるかと申せば。斯かる一大事を相傳の所へ。供とては一人も連れ申されまじきとの御事にて候。や。斯樣に申す内にはや時刻も移り候間。もはやあれへ參り樣體を見申さばやと存ずる。〽何と申すぞ。はや御出でと申すか。近頃めでたし〳〵。斯樣に御急ぎあつて御出でこそ尤もにて候へ。何れも皆御内の者は承れ。此度御供には一人も參らず候間。御歸りの時分は。必ず路頭迄御迎ひに參らうずる間。構へてその分心得候へ〳〵。入る。

【つ】

土蜘蛛　アヒ　早打

〽斯樣に候者は。頼光の御内獨り武者に仕へ申す者にて候。只今罷出る事餘の儀にあらず。我君頼光の御病氣以ての外に御座候につき。頼うだ獨り武者御前に御出仕ある事に

て候。然るにこの二三日は。愈々御惱みなさるゝに依つて。典藥の頭より御藥を進上なさるれども。少しも其驗（しるし）御座なく候處に。奇特なる事の御座候。今夜夜更けて人音も鎮まり候時分に。其姿は僧體にて賴光の御前へ來て。直ちに申上げ候は。御惱みの心地は何と渡らせ給ふぞと申上ぐる。其時賴光思召すは。斯様に夜更けて僧體なるものゝ參らうずる仔細になし。其上かれが姿を見るに人間とは見えず。不思議なるものと思召して。斯様に夜更けて來て。我が心地を尋ぬるは如何なる者ぞ。名を名宣れと仰せられければ。其時かの者は御返事をも申さず一首の歌を申上ぐる。我がせこが。來べき宵なりさゝがにの。蜘蛛の振舞かねてしるしもと。斯様に申上ぐる程に。賴光思召すは。さては疑ふ所もなく化生のものにてあるぞ。唯は置くまいと思召され候處に。かの化生のもの其儘姿を變へ、その丈七八尺一丈ばかりの土蜘蛛の形となり。其身より糸を出し。千筋萬筋も繰出し。我君を卷いて取らうとする所を。何が君は御心中にて候ぞ。其儘枕の膝丸の太刀をするりと拔き。飛掛り踏みかけて切らせられ候程に。思ふやうに切られ。何處ともなく逃げ申して候。その時賴うだ獨武者も御前近う居られ候程に。音を聞附け其儘御前に參られければ。君斜ならず思召して。右の體悉く御物語なされ。則ち今日より膝丸の御銘を蜘蛛切と名を御變へなされうずると御意なされければ。賴うだ者申され候は　これ皆昔の御威光めでたき故。又劒（けん）の奇特に申上ぐるに及ばずと申されければ。いよ〳〵御祝着なされて御病氣も御平癒にて。めでたき御事にて候。又賴うだ者申され候は。殊の外血の流れて見え候間。此血をひいて何處迄も參り。かの化生の者を從へ給はうずると申して。はや御前を立ち申されて候。然れば我等如きも御供に參り。乾度手柄を致し御目に掛けうと存じ候處に。某などは御供に連れまじとの御事にて候。扨々口惜しい事かな。此度御供仕り。天晴れ武邉を致さうと存じたに。殘り多い事にて候さりながら。又御留守が大事なれば。某を御用に立たせうなど思召し。留守に置かるゝ事も御座らうず。それならば別に腹も立たぬ事ぢや。まづあれへ參り。様子を見申さばやと存ずる。や。何といふぞ。はやお立ちと申すか。皆々承り候へ。此度お供に參らぬ者は御歸りの時分を何ひ。踏次迄御迎ひに參らうずる間。構へて其分心得候へ〳〵。

土車（つちぐるま）

アヒ　門前の者

（ワキ名乘り過ぎて内より出る。）へこれは善光寺の門前に住居する者にて候。今日は志す日にて候間。御堂へ參らばやと存ずる。また都より物狂の來りて候。面白う狂ふ由申し候間。暫く相待ち狂はせて見ばやと存ずる。（ト云うて。笛の座に居る。シテ一セイ過ぎて。善光寺にも著きにけりといふ謠すぎて。）へさればこそ是へ參つた。（シカ〳〵。）いかに狂人。面白う狂うて見せ候へ。（シカ〳〵。）へいや〳〵狂人なればこそ狂へとは申せ。たゞ狂うて見せ候へ。（シカ〳〵。）へさて確（しか）と狂ふまじいか。狂はずは天が下には置くまいぞとよ。（獨りせかせ給ふかといふ謠すぎると。）へこびた狂人ぢや。片脇に寄つて見物致さう。（ト云うて。下に居。切戸より入る。但し謠盡の模様により。見物致さう。ト云うて。太鼓座へくつろぎ居て。切戸より入るとも。）

狂言の大返し此の間なり。又平調返し。土車の返し。光も石和泉流にはなし。

經政（つねまさ）

アヒ　家來

シカ〳〵。へ御前に候。シカ〳〵。へ畏まつて

候へ。皆々承り候へ。經政の御跡を。管絃講にて御弔ひなされ候間。乃ち管絃の役者を相催されよとの御事にて候間。何れも琵琶琴和琴を御持ち候ひて。明日早朝に御出で候へ。其の分心得候へ〳〵。

此の間はなしにて大方相濟む。

同　替の語

へか様に候者は。仁和寺御室の御門に。大納言の僧都行慶に仕へ申す者にて候。扨も平家の御一門。但馬守經政は。修理の大夫經盛の御嫡子なるが。八才の年より御室に御座あり。十三にて御元服なされ。一段琵琶の上手にて御入り候間。青山といふ琵琶預けて御座候。平家の一門四國へ御下りの時。經政も打出で給ふ。其の折節青山を赤地の錦の袋に入れ。雑兵有則と云ふ小侍に持たせ。御室へ御暇乞に參られ。青山は隱れなき御物を田舍へ携へ申す事本意ならず。暫し立ち歸り候ひて。重ねて預り奉らんと。捧げ申され候ひて西國へ御下りなされ候が。攝州一の谷にて討たれ給ふ。いたはしき御事なるにより。今日は管絃講にて。御弔ひあるべきとの御事なる故。管絃の役者急いで參られ候へ。其の分心得候へ〳〵。

この件の語。鶴龜にあり一ツ。全體になし。

鶴龜（月宮殿）

アヒ　官人

口開。へこれは。夏の禹帝王に仕へ奉る官人にて候。此の君賢王にてましますにより。吹く風枝を鳴らさず。民戸ざしをさゝず。降る雨までも土塊を破らぬめでたい御代にて御座候。さる程に四季の節會の祭事。其の數多しと申せども。いつも今日は御嘉例にて。鶴龜の舞を叡覽なさるゝ。只今御幸あるべきとの御事にて候間。月卿雲客官人仕丁に至る迄。皆々其の分心得候へ〳〵〳〵。

ト云うて一ノ松に寄る。シテワキ皆々舞臺に居る。諸ひ出すと切戸より入る。この與あるもあり。又無いもあり。云合せにて殘り居る。

大臣　へ御前に候。シカ〳〵。へ畏まつて候。皆々承り候へ。御嘉例の如く今日は鶴龜の舞を叡覽あるべきとの御事にて候間。急ぎ申付け。鶴龜共に庭上に出し候へや。

ト云うて。一寸下に居て。其の儘切戸より入る。

【て】

定家

アヒ　里人

へ是は都千本の邊りに住居する者にて候。この間は何方へも罷出でず候間。今日は北山邊に罷出で。心をも慰まばやと存ずる。や是なる御僧は。

此の間[illegible]

へ凡そ此の亭の事を申すに。いにしへ御堂の關白の御末。五條の三位俊成卿の御子。京極の中納言定家卿の假の御休所に建て置かれたる亭にて候。此所は都の內とは申しながら。閑居一入面白きなればとて。四季折々に御遊あり。御歌など詠ぜされ候。實にや春秋のあらそひ唐にもあると申すが。定家卿も秋の風景物悲しき感情面白く思召され。秋には殊に此の亭に御座候て。年々に御歌など遊ばさるゝ中に。一年時雨時を知るといふ心を。僞りのなき世なりけり神無月。誰が誠より時雨れそめけん。とやらんの御詠歌。御心にも秀歌と思召され。御調書きに。私の家にと遊ばし時雨の亭といふ額を掛け給ふ。世の人それより時雨の

亭と申し候。また式子内親王。並びに定家葛の事。まづ伊勢の齋宮加茂の齋院と申して。天皇位に即かせ給ひ。この兩所にぼくちやうし給ふ。まづ齋宮は垂仁天皇の御宇に始まり。又賀茂の齋院は嵯峨の御宇。弘仁元年初めて齋院司を置かれ。皇女有知内親王を以て齋王とす。この例を引いて後白河第三の皇女。式子内親王初めは賀茂の齋院にそなはらせ給ふが。故あつて程なくおり居させ給ひ。住所かすかにしつらへ。年頃忍びわたらせ給ふを。かの黄門聞召され知らず御心にそみ。春りに内親王を戀慕し給ひ。忍び／＼の御契り淺からざる御仲と。後にはなり給ふ由申し候。かなしき哉や生死無常の理。會者定離の浮世なれば。内親王果敢なくなり給ふ。則ち此所に御墓所を立置き申され候。又定家の卿は四條の院の御宇。仁治二年八月二十日に。小倉の山莊にて。御年八十歳とやらんにて。薨逝の由申す。實にも不思議なる御事にて候ぞ。定家卿果て給ひてより。この御石塔に葛少々這ひかゝり候が。所の者見申し心ありて。星霜經りたる故に。御石塔に野草の生ひ纒ひたると存じ。葛を皆取除け花水を手向け罷歸り候が。其の後にもまた這ひ纒ひたると覺えて重ねて見申すに。また元の如くに見え申し候間。取除け／＼し候へども。この葛絶えも申さず候。此頃の世人扨は葛は。定家の執心かやと申し終るによつて。この葛を定家葛と今に申し習はし候。最前申す如く。式子内親王の御事。時雨の亭の謂れ。委しくは存ぜず候へども。まづ我等の承りたる通り。大方御物語申して候が。扨お尋ねは如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ／＼。〽これは奇特なる事を承り候ものかな。總じて女は五障三從とて。罪深きやうに承りて候が。殊に式子内親王の御事は。定家卿の執心深くましますにより。別して苦しみも深からうずる樣に皆人申傳へて候間。お僧も左樣にあるべしと思召さば。有難き御經讀き給ひ。式子内親王の御跡を。懇ろに御弔ひあれかしと存じ候。シカ／＼。〽幸ひ逗りに罷在り候間。御逗留の内は御用も承り候べし。シカ／＼。〽心得申して候。

調伏曾我

アヒ　能力

〽御前に候。〽畏まつて候。〽さても／＼。唯今箱王殿の風情を見。我等如きも涙を流し申候。誠に。栴檀は二葉より香しく。弓取の子は胎内にてねぎ事を聞き。七歳にて親の敵を討つといふ喩のあると申すが。箱王殿の心中思合はされ。涙を流し申して候。親の敵祐經を。何とぞして討ちたく思召しけれども。名ばかり聞きてしか／＼と見知り給はねば。此度鎌倉殿の箱根詣に。定めて敵祐經も御供にてあるべし。日頃の本望を遂げんと思召しけるが。常は人の云ふ事も逆へ。物狂ばかり召され候が。此頃は大人しくなり。乃ち別當殿へ申され候は。鎌倉殿御參詣たまさかの御事なり。御供の人々の名を知らず候間。教へて給はり候へと申されければ。別當殿何心もなく。御尋ね候へ教へ申さうずると。申され候へば。箱王殿嬉しく思召し。祐經一人御覽ぜんため。先づ鎌倉殿を始め奉り。左の座上を誰と申候ぞ。左巴は誰ぞ。右巴は誰ぞ。松皮は誰人ぞ。さてまた中座の一番香の直垂二人は誰ぞ。さて次に突き出したる扇つかひは誰人ぞと問ひ給ふ。別當殿。今此方を見申すこそ。工藤一臈候と仰せられければ。箱王殿。祐經かとて。飛[illegible]からうと拔され候間。別當殿思ひあたり。か樣の座敷に長居は致さぬものにて候と。申され候處に。祐經箱王殿を呼びかけ。御身の父河津殿は。赤澤山の狩くらに

て。尾越の下に當つて果て給ひ候な。祐經が業と世上に申し候は、それは知らぬ人の申し事にて候と、詞に花咲かし申されければ。幼き身の悲しさは。祐經にだまされ。呆れ果てゝ御座候處に、鎌倉殿御下向なされ候とて。御供の人々、皆々御立ち候へば。其の時箱王殿、いかに云うても親の敵は祐經ぞかし。一太刀恨みいでは叶ふまじとて、同宿の太刀をおつとつて、走出で申され候間、同宿の者共驚き。かゝる卒爾を召され候ものかなとて、無理に連れて歸り候な。別當殿聞召し。箱王殿の心底痛はしく思召し。此の上は祐經を護摩の壇上に据置き。調伏して本望を遂げさせ申さうする間鎮まり給へ箱王殿と、御術談あつて。護摩の壇を飾り候へと、仰附けられ候間。急いで飾らせ申さう。やい〳〵。護摩の壇を飾り候へ〳〵。（ト云うて。太鼓の側に居るワキの供して入る。）へ護摩の壇を飾り候へと仰せ候間。急ぎ飾らばやと存ずる。（ト云うて。樂屋へ入り。二人して持ちて出る。今一人の能力は。同じ出立にて居て。壇をかいて置き處ワキに問ふべし。）へいかに申し候。護摩の壇を飾り申して候。（ト云うて。太鼓座に居。純過ぎに入る。又壇かいて入るともあり。）

（鎮まり給へ箱王殿と御術談有つての次を。左の通りにするもあり。）

へ護摩の壇を飾り候へと仰付けられ候。や。これは某のいらぬ獨言。先づ急ぎ壇を飾らばやと存ずる。（以下同じ。）

天鼓（てんこ）

アヒ　家來

（ワキ呼出す。）へ御前に候。シカ〳〵。へ畏まつて候。サア〳〵お立ちやれ。まづお立ちやれ。サアお立ちやれ。（右は二度の事もあり。又三度にもあり。シテと云ひ合せ次第なり。）其方の嘆きはさる事なれども、さり乍ら、天鼓が跡を念比に御弔ひなされうず。其の上夫婦には數の寶を下されうずるとの御事なれば、涙を止めまづ〳〵私宅に歸られいや。さても〳〵憐れなる事にて候ひけるぞ。王伯が嘆き實にもと存ずれば、心の中思ひやられ、我等如きも落涙仕りて候。總じて人間に生ずれば。死の縁は様々御座ありとは申せども。かの天鼓は世に越えた妙なる鼓を持ちたりしな。如何なる者か奏聞しける。是を聞召し。件の鼓を召されけるに、天鼓は色々惜しみけれども。是非なく内裏に召上げられ。それさへあるべきに。鼓を惜しみたる科により。呂水の淵に身を沈め。空しくなし給へば。老いたる父母の嘆きの色誠に不憫の次第、是に過ぎたる事は御座あるまじくと。皆人袖を絞らぬは御座なく候。まづあれへ參り。只今王伯を私宅に返したる通り。懇ろに申上げばやと存ずる。へ如何に申上げ候。唯今王伯を私宅に歸し申して候。ワキシカ〳〵。へ中々。返し申して候。皆何れも申すは、斯様の憐れなる事は御座あるまい。それを如何にと申すに。天鼓が鼓を召上げられて帝に遊ばされてさへ。そつとも鳴らぬ鼓が、恩愛のしるしとて王伯が打てば、其儘すみやかなる音の出て申した所、さりとては奇特と申さうずるか、是に過ぎて憐れなる事は。御座あるまじいとの申し事にて候が、へ何と思召され候ぞ。シカ〳〵。へ是は有難い御事にて御座ある。この御意を只今某も王伯に懇ろに申聞せて御座る。此度の嘆きはさる事なれどもさり乍ら。天鼓の跡をば呂水の江に御幸あつて。懇ろに御弔ひあらうずるとの御事なれば。是にて思ひを忘れ。歎きを止めよと申して御座あれば。誠に忝いと存ずる體にて、涙を抑へ戻られて御座る。ワキシヤ〳〵。へ畏まつて御座る。左様に御座れば、斯様の折柄なよきついでと存じ候間。我等如きも此度管絃の役を。何にても。（此間のセリフ。藤戸に同じ事なり。）皆々承り候へ。これは有難き御事にて候ひけるぞ。

我が片岡氷の江に御幸あり、管絃講を以て。かの天鼓が跡を御弔ひあるべきとの御事なれば、管絃の役者は一人も残らず参られ候へ。また一七日の間は、浦々山々の殺生をも堅くとゞまり申せとの御事にて候間、その分心得候へ／＼。

【と】

藤栄（とうえい）

アヒ　藤栄の太刀持
アヒ　能力（鳴尾の下人）

シテの供して出る。太夫シカ／＼。へ御前に候。シカ／＼。へあれは浪の音か。松風の音にて御座あらうずると存じ候。太夫シカ／＼。へ畏まつて候。立つて。又へまた太鼓の音もすると仰せらるゝ。聞く心。おつゝお其の由申上げう。いかに申上げ候。今日の御船遊びを鳴尾殿の御存じあつて、囃子ものにてお酒迎ひの由申し候。太夫シカ／＼。へ尤もにて候。ト云うて入る。傘かたげ鳴尾の供して出る。ツレ呼出す。へ御前に候。ツレシカ／＼。へ畏まつて候。小謡あり。口傳。へ此の居たは慮外ながら、藤栄殿へも申さうずるにて候。ト云うて門居。

ト下に居る。面白さうに其儘傘を持出て仕舞ひ口傳あり。へ父君のおなぐさみな、龍頭鷁首にもたせて我等もお供申さん／＼。ワキ招く。傘をたゝみ膝に置きて立つてゆく。へこちの事か。又ワキ招く。へ何事でおりやるぞ。ワキシカ／＼。へ扨にお主はお知りやらぬか。あれこそ天下に隠れない、蘆屋の藤栄殿様よ。ワキシカ／＼。へそりや誰か。ワキシカ／＼。笑つて。へさて／＼興がつた者がある。この様な事にはなか／＼申上げられまい。いやさりながら。結句お笑草に申上げう。如何に申上げ候。あれに修行者のわたり候が。今の舞こそ面白けれ。今一さし舞へ。見うと申す。あの様な慮外者に致しやうが御座る。ト云うて立たうとする。太夫シカ／＼。へこれは御意では御座れども。あのやうな慮外者には御無用で御座る。太夫シカ／＼。へ畏まつて候。これは如何な事。案の外な事ぢや。申して悦ばせう。なう／＼。扨々ぬしは冥加に叶うた人ぢや。最前舞をまはせられた程に。今度は八撥を打つて聞かせられうずるとのお事ぢや。忝いと思はしませ。ワキシカ／＼。へ是は如何な事。勝つに乗つてむしやうな事を云出す。扨々憎い事かな。エヽ身共が儘ならば。これ／＼を頂かせうものな。ト云うて張る真似をする。謡になると切戸より入る。

東岸居士（とうがんこじ）

アヒ　里人

ワキ名宣り過ぎて其儘出る。へ是は五條邊りに住居する者にて候。此の間は清水へ参らず候間。今日は参らばやと存ずる。や。是なる御方は何方より何処へ御通りにて候ぞ。シカ／＼。へ何と清水へ御参りとや。シカ／＼。へ是は幸ひの事。我等も参る者にて候間。さあらば御供申さうずるにて候。シカ／＼。へさあらば斯う御入り候へ。シカ／＼。へ其の事にて候。都とは申しながら。別に面白き事も御座なく候。されども爰に自然居士の御弟子に。東岸居士と申す御方の御座候が。此の橋の勧めに毎日御出でなされ、望みの輩には佛法を示し給ひ、一段と面白き御方にて候間。かの居士に引合せ申さうずるにて候。シカ／＼。へさあらばそれに御待ち候へ。頓て呼び出し申さうずるにて候。如何に東岸居士の御入り候か。これなる人の物な御不審ありたきとの御事にて候間。急ぎ御出でなされ候へや。シテ出でゝ花に嵐ある嵐かなの謡の内に立ち。過ぎると其儘。へ如何に申し候。東岸居士と申すは此方の御事にて候。ト云うて入るなり。

東方朔（とうはうさく）

アヒ　官人
アヒ　仙人（大勢）
アヒ　桃仁の精

[illegible]官人舞臺に出る。　へ斯様に候者は。漢の武帝に仕へ申す官人にて候。此の君賢王にてましますにより。吹く風枝を鳴さず。めでたき御代にて御座候。然る間。此の程奇特なる事の候。足三つある青き鳥の何處ともなく來り。禁裏を飛びめぐり候。如何なる化鳥ぞと皆人不審に思ひ。此の由奏聞申しければ。博士を召され古は[illegible]御覧なされけるに。君の御爲怪しからずめでたき御瑞相と申したる。又今日は七月七日の節會なれば。我が君承華殿に御幸あり。御遊あるべきとの御事にて候間。百官卿相に至る迄。皆々其分心得候へ〳〵。ト云うて座に居る。

太夫シカ〳〵。　へ奏聞申すべきとは如何やうなる事にて候ぞ。シカ〳〵。へ暫く、それに御待ち候へ。其の由奏聞申さうずるに。[illegible]候。如何に申上げ候。此の國の傍に住む者なるが。君の御爲怪しからずめでたき御瑞相の御座候間。申上げんため參内仕りたる由申し候。

大臣シカ〳〵。　へ畏まつて候。其の由奏聞申して候へば。急ぎ庭上へ御參りあれとの御事にて候。ト云うて罷出る。初同に入る。

仙人一人出る。後より大勢出て御庭に着く。　シテへこれは此の國の傍に住む仙人にて候。めでたい事あつて、これ迄罷出でて候　やれ〳〵。皆出られたか。アドへ中々。何事やらめでたい事があるといふ程に罷出た。　シテへ尤もでこそあれ。めでたい事があるを。追付け語つて聞かせう。シカ〳〵シテへまづ。此の君賢王にて御座候により。何事につけても思召す儘にて。御心に叶はぬといふ事なし。[illegible]あるが故に。毎日めでたい奇特ども其の數を盡すと雖も。中にも此の足三つある青き鳥の何處（いづく）ともなく來り。禁裏を飛びめぐるについて。是を如何なる事ぞと思へば。君の御爲怪しからずめでたい御瑞相なるにより。東方朔は此の事をよく存ぜられ。奏聞申さうずるとて參内申されたれば。其儘庭上へ召出され。委しく申せとの綸言なるによつて。則ち懇ろに申上げられた。まづその申されまる様には。此頃禁裏を飛びめぐる三足の青い鳥は。崑崙山に住む。西王母と云へる仙人寵愛の鳥なるが。この西王母三千年に一度花咲き實なる桃を持たれた。是を一つ服すれ

ば。三千年の齢を保つ桃なり。此の度かの桃實を我君に捧げ申さうずると存ぜらるゝによつて。斯るめでたき事を。三足の青い鳥は先づ先立つて遣はされ。禁裏を飛ばせらるゝと申上げられければ。君も御機嫌の餘りに。猶々仙人のめでたき事を。聞召しあげられうずるとあつて。お尋ねなされたれば。東方朔申さるゝ事に。この西王母と申すは。忝くも西方極樂に於いて。無量壽佛の化現なれども。假に仙人と顯れ。命（いのち）限りもなきめでたい仙人にて御座候。既に悉達太子も仙端に入つて。終に成道し給ふ。其外仙人の身の有様。色々様々御物語申し上げられければ。猶々斜ならず。かの桃實を捧げ申さうずるとて御暇を申されたる處に。各（おの）〳〵其事の仔細を存ぜられたが。この東方朔と云ふは。たゞ世の常の仙人にはあらず。昔は泰山上の仙官にして。風雨雷電を掌にあてがひ。ある時は鯨を取つて陸に遣し。又ある時は山を海にし。海を山とし。自由方便をなし。何事につけても思ひの儘なる仙人にて。殊には西王母の窗の桃を。三度迄盗み申されたる故に。壽命は九千歳を保ち。然れば西王母も比類なきめでたい仙人なり。

作ひ。桃實を我君に捧げ申されうずるとの事なれば。此の君の御命は萬々歳にて御座あらうず。さあれば我等如きも仙人の數に入つて。別に望みはなけれども。斯樣のめでたい折柄これへ罷出で。かの桃實の姿を一目見てなりとも。いよ／＼壽命を保つ樣にと思ふが。扨おの／＼何と思ふぞ。 シカ／＼諸々あれ。口傳。 アドへ何れも望みでおりやるぞ。 シテへあら不思議や。異香薫じ唯ならぬ體なや。 アドへ誠に景色が變つた。 シテへまづ斷う寄つて居さしめ。 アドへ心得た。 一聲。桃仁出る。 へ抑も是は。西王母の園の桃の。三千年に一度花咲き實なる。桃仁の精とは我が事なり。 シカ／＼色々あれ。桃仁樣子。 シテへこれへなつかしきものゝ顯れたるは何と申すものにて候ぞ。 桃仁へこれは西王母の園において。三千年に花咲き實なる桃仁の精にて候が。東方朔に服せられて斯樣の姿となりて候。 シテへ扨は東方朔に服せられし。桃仁にて候か。何れも何とか思ふ。とても我等如き分として。西王母の園の桃を服する事も叶はぬ。せめてこの桃仁なりとも一獻りづゝ獻らうと思ふは如何に。 立アドへ尤もにて候。何れも一獻りづゝ獻つて。壽命長遠になりたく候間。獻らせて給はり候へ。 シテへ心得申して候。如何に桃仁の精。幸ひの所へ參られて候程に。近頃申兼ねて候へども。仙人共に一獻りづゝ獻らせて給はり候へ。 桃仁へこれは思ひも寄らず候。風味のよき所は皆東方朔に喰はれて。今はあら／＼しき桃仁の形にて。甘き所もあるまじく候間御免し候へ。 シテへいや／＼風味に兎も角も。參り合せたるこそ幸なれ。是非獻らいで叶ひ候まじ。 桃仁へ左樣に候はゞ。そと獻りて給はり候へ。構へて／＼齒を強く御當てあるまじく候。 シテへ近頃にて候。さあらば何れも立寄り獻り候へ。 仙人へいで／＼さらば獻らんとて。大勢中に取りこめて。まづ我も先にと進みけり。 桃仁へ其時桃仁驚いて。いかうな仰せ待ちければ。 仙人へおかし。古な薬出し。寄りては獻り歸り。ては獻り。あまりに強く獻られて。頭は小さくなりぬれど。命は長き桃仁の。命は長き桃仁の精は。王母の御許に參りけり。

東北（とうぼく）

アヒ　里人

ワキ呼出す。 へこのあたりの者とお尋ねは如何やうなる御事にて候。 ワキシカ／＼。 へあれは和泉式部と申す梅にて候。立寄り心靜かに御眺めあらうずるにて候。 シカ／＼。 へ重ねて御用もあらば承り候べし。 シカ／＼。 へ心得申して候。 中入。 へ最前東國方の僧の和泉式部の梅をお尋ねにて候。奇特なる旅人にて候間未だあれに御入りあらば參り。お物語申さばやと存ずる。やこ最前のお僧の未だ此所に御入り候よ。 シカ／＼。 へさん候／＼最前の者にて候。 シカ／＼。 へ心得申して候。扨お尋ねありたきとは如何樣なる御事にて候ぞ。 シカ／＼。 へ是は存じも寄らぬ事を承り候ものかな。我等もこの邊りに住居申せども。左樣の御事委しくは存じも致さぬさりながら。最前御用あらば承らうずると申したるによつてお尋ねあるな。存ぜぬと申すも如何に候間。大方承りたる通り。御物語申さうずるにて候。 語へまづ東北院と申す仔細は。此寺御所の内におき候ても。北と東との間。丑寅に當つて立てられたる寺なるに依つて。東北院とは名付けられたるげに候。さる程に此寺。元は上東門院の。住ませ給ひたる所な。其後寺となし給ふ。その謂れは。總じて賀茂川と申すは。都の北より流れ出で。川上は土御門なれば。川よけの御祈禱のため。人王五十八代。後一條院の

御宇。長元三年。庚午。八月朔日に。上東門院なり。改暮となし給ふ。さつた和泉式部と申すは。生國は因幡の國。高草の郡。さうみと申す所に。越前守大江の政助とやらん申す人の。御息女にて御座ありしが。一條の院に仕へ參らせられ。藤原の安政とつれて。丹後國に下り給ふ。その折節。播州書寫山に。性空上人とて。貴き上人の御座ありしを。風のたよりに聞し召され。後の世の事など。頼み參らせんとて。暗きより。暗き道にぞ入りぬべき。遙かに照せ。山の端の月といふ歌を參らせらるゝ。是は一段と秀逸なる歌と承りて候。其後安政におくれ。よろづ便りなき身となり給ひ。又都に上り。上東門院に宮仕へし給ふ。あの方丈の西の端を。和泉式部の御休み所と定め。此梅を軒近く。手づから植ゑ置かせ給ひ。目離れせず眺め給ふにより。軒端梅とも申し候。かの和泉式部と申すは。唯人ならねばとて。御休み所を作りも壊へず。今に殘し置かれて候。判じて女は。五障三従の罪深き者と思召され。信心を起させ給ひ。是より誓願寺へ日夜朝暮御參りあり。終に誓願寺にて。往生の素懐を遂げ給ひたると承り及びて候。最前申す如く。委しき事は存ぜず候へども。まづ我等の承りたる通り。大方御物語申上げて候ふ。扨お尋ねは如何樣なる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。〽是は存じも寄らぬ事承り候ものかな。某推量仕るに。お僧の御心中貴うましますにより。殊には軒端梅を。御心靜かに眺め給ふ事を。和泉式部は嬉しく思召され。かりに姿をまみえ給ひたると存じ候間。梅の木の木にて有難き御經をも御讀誦なされ候はゞ。猶も奇特の御座あらうずるかしと存じ候。シカ〳〵。〽御逗留の間は御用を承り候べし。シカ〳〵。〽心得申して候。

木賊

アヒ　従僕

太夫シカ〳〵。〽御前に候。太夫シカ〳〵。〽畏まつて候。いかに申候。見申せば幼き人も御入り候が。これは何方より御出でにて候ぞ。ワキシカ〳〵。〽さ樣に見えさせ給ひて候。それに就いて申し度きことの御座候。ワキシカ〳〵。〽此の間殿にも。そと身に思ひある人にて。時々現なき事の候間。心得て御物語あらうずるにて候。ワキシカ〳〵。〽なか〳〵其の通りにて候。先づ心靜かに御休み候へ。御用もあらば我等に御申し候へ。ワキシカ〳〵。〽心得申し候。太夫シカ〳〵。〽御前に候。太夫シカ〳〵。〽畏まつて候。

融

アヒ　里人

〽是は六條邊に住居する者にて候。今日は東山へ罷り出で。心をも慰まばやと存ずる。や。是なるお僧は。此邊りにては見馴れ申さぬお僧なるが。何方より御出であつて此所には休らひ給ふぞ。ワキシカ〳〵。〽なか〳〵此邊りの者にて候。シカ〳〵。〽心得申して候。〽扨お尋ねありたきとは如何樣なる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。〽是は存じも寄らぬ事を承り候ものかな。我等も此邊りには住居申せども。委しき事は存じも致さぬさりながら。初めて御上洛あつて御尋ねあるを。何をも存ぜぬと申すも如何なれば。大方承りたる通り。御物語申さうずるにて候。語まづ。源の融と申すは。遊舞に好き給ひ。明暮の御遊さま〴〵御座ありしに。ある徒然の折節。何事か世に面白き事のあるぞと御尋ねありければ。ある人申さるゝは。陸奥の千賀の鹽釜程。世

に面白きことは御座あるまじき由申上げらるゝ。融の大臣は御覽ありたく思召さるれども、遠里の御事なれば御下向あるべき樣はなし。既にこの六條河原の院へ、千賀の鹽釜を寫し、是にて御覽なされうずるとて、よく存じたる者を召し出され、鹽釜の樣體を念比に寫させ御申しなさるゝ。されども鹽を焼かずば其の曲あるまじきとて。津の國難波の津より毎日潮を汲ませ、蜑乙女に濱をならさせ。鹽を焼かせ給へば、所から面白きともなか〳〵申すも愚かなる御事にて御座ありげに候。斯程の致景は三國にも御座なかりしと申す。悲山宗加煙雨の歸雁、我が瀟湘の洞庭に坐せしむ、偏舟及んで。歸り来らんとすれば、傍八六ふ是。丹青と。山谷を作りたると申すがこの詩に等しく候はんや。誠に、海邊の樣に面白く打眺め給ふ心を。業平の歌に、鹽釜に、いつか來にけん朝なぎに、釣する船は爰に寄らなん、斯樣に詠じ給ひたると申す。又あれに見えたるは籬が島と申して、前に泉水遣水を湛へ。御船を寄せられ、見遮しには山を築かせ諸木を植ゑ、春は花に馴れ、秋は月に戯れ。おの〳〵、あれにて御酒宴ありたる所なれども、今は其樣に名のみばかり殘り申して候。最前申す如く、委しき仔細は存ぜず候。扨お尋ねは如何樣なる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。〽是は奇特なる事を承り候ものかな。我等の推量仕るに。お僧初めて御上りあるを、融の大臣は嬉しく思召され、假に鹽汲とまみえ給ひたると存じ候間、末は急ぎの御旅なれども。今夜は此所に御逗留あつて、月をも眺め信心をなし給はゞ。重ねて奇特の御座あらうずると存じ候。シカ〳〵。〽もし御逗留もあらば重ねて御宿申さうずるにて候。シカ〳〵。〽心得申して候。

同　アヒ　里人

〽まづ、源の融と申すは。嵯峨の天皇の御宇にて御座ありたると申す。淳和の帝の御時、天長元年に御誕生あり。清和天皇の御宇貞觀十四年八月に。左大臣に任ぜらるゝ。さる程にかの融の大臣と申すは、遊興に好き給ひ。（是より前の如し。）〽毎日潮を汲ませ鹽を焼かせ御申しなされけるが、なんぼう夥しき御事にて候ひけるぞ。海に千人、道に千人、此所に千人、三千人の人足を以て、日々に潮を運ばせ鹽屋を造り、海士乙女に濱をならさせ。（これより前にある如し。）〽春は花に馴れ。秋は月に戯れ。歌をよみ詩を作り。各あれにて御酒宴のありたる所と申す。其の國々在々より見物に出で給ふ輩は。毎日肩を並べ踵を接いで。都人群集なしたるげに候。かの大臣は。斯樣の御遊にて一生を送らせ給ふ程に。御心に殘る事は御座なかりしと申せども。有爲轉變の習ひとて。宇多天皇の御宇、寛平七年八月二十五日に。御年七十三歳にして。薨逝ならせ給ひ。其後誰あつて相續する人も御座なかりしによつて。今は斯樣に名のみばかり殘り申して候。この憐れなる體を貫之の歌に。君まさで。煙絶えにし鹽釜の。浦淋しくも見えわたるかなと。斯樣に承り及びて候。最前申す如く。融の大臣の御事、鹽釜を移されたる樣體。委しくは存ぜず候。（此後セリフ前にある如くなり。）

知章（ともあきら）　アヒ　里人

〽これは此の須磨の里に住居するものにて候。此の間は浦邊へ罷出でず候間。今日はあれへ參り濱の體を見舞ひ申さばやと存ずる。

〽心得申して候。

朝長

アヒ　里人

ワキ詞 〽此所の者とお尋ねは誰にてわたり候ぞ。シカ〳〵。〽頓てあれに見えたる一村の内にて候間。御出であつて心静かに御慰みあらうずるにて候。シカ〳〵。〽重ねて御用もあらば承り候べし　シカ〳〵。〽心得申して候。

シャシカ〳〵。〽御前に候　シャ〳〵。〽畏まつて候。只今この家の長の申さるゝ候に。旅人のお着にて候程に罷出で。御用を承れと申付けられた。惣じて旅人は数多御着なれども。斯様に心にかけ。しみ〴〵と申されたる事は御座なく候。不審に存ずる。まづあれへ参り。御用を承らうと存ずる。旅人の御座候か。やこれは先に朝長の御墓所を尋ね給ひたるお僧にてわたり候よ。ワキシカ〳〵。〽某は此の家の長に仕へ申す者にて候が。主の申さるゝ候は。旅人のお着にて候間罷出で。随分御用を承れと申付けられて候間。何にても御用の事候はゞ承り候べし。シャ〳〵。〽主の申され候上は。別に變りたる事は御座あるまじく候へども。御慰みにて候間　さあらば御物語申さうずるにて候。語さる程に。義朝朝長御父子共に此所への御出では。即ち過ぎにし極月八日の夜の事にて御座候。其の折柄の様體と申すは。都にて御合戦に打負け給ひ落人となり。皆散々になり給ふがさりながら。朝長は御父義朝と一緒になり給ひ。是迄御下りなされ。この家の長を召出され御頼み候程に。長はやす〳〵と頼まれ御宿を参らせて候。又御嫡子悪源太義平は。敵に隔てられ給ひけるが。何とか候らん江州さして落ち給ふを。敵は是を見付け。其儘取掛け石山寺にて生捕り申したると承りて候。誠や皆人の申すは。さしも名を得し悪源太が。おめ〳〵と生捕られ縄目の恥を蒙り給ふ事。一期の不覚なる由世上に御沙汰候へども。又義平の御覺悟は。一向左様にてはなく。向ふ敵を打取つて。御腹召さるゝ事はいと易き御事なれども。爰に一つの御望みあり。それを如何にと申すに。われ生捕られ都に上るならば。定めて清盛われに對面せぬ事はあるまじい。對面するならば。其時かい手筋の縄を引きちぎつて。一足に飛んで掛かり。清盛が頭をひき切つて。本望をとげ給はんと。その御覺悟一つにて。わざと生捕られ給ひたるげに候。されども御運の末の悲しさは。清盛の御對面もなく。其儘六條河原へ引渡し。遂に誅し申されたると承りて候。又朝長の御最後は。都大崩にて数多の御手を蒙らせ給ふにより。次第〳〵に御心も弱らせ給へば。朝長思召さるゝは。定めて後より敵大勢にて追掛け来るべし。左様の時は雑兵の手にかゝり死なん事。無念に思召さるゝとて。夜半ばかりと思しきに。すみやかなる御十念あり。終に御自害なされて候。義朝の御嘆きは申すに及ばず。其外の人々。此の家の内にても男女老少によらず。是を嘆かざる者は御座なく候。痛はしながら御死骸をば。野邊に送り申す。又義朝は是にも御座あるまじい。尾張の國野間の内海と申す所に。長田と申す人の御座候間。是を頼み御出でありたきと仰せられ候程に。長は承り。この東の川よりお船に召し。如何にも忍びやかに内海へ落されける。世には隠れなき事の候ひけるぞ。かの長田心替りしてたばかり。御湯殿とやらんにて義朝に御腹召させて候。寔に長田は不得心なる者にて候ひけるぞ　聟の鎌田をもの〳〵と打ち申して候。斯様の事を存じ候へば。此の

宗の長は女人の身ながら。頼もしく情深き人にて候ひけるぞ。枕上の假りをも賴みず。お宿を申さるゝのみならず。今に至つて七日〳〵には朝長の御墓所に參り。花水を手向け。燒香をなし。御菩提を弔ひ申され候。先に申す如く。主の御物語の上に。又我等の斯樣に申す事は如何に存じ候へども。御懇みと存じあらば。御物語申して候が。朝長の御事を何とて斯程まで親しく御尋ね候ぞ。近頃不審に存じ候。シカ〳〵。ヘ是は奇特なる事を承り候ものかな。扨は朝長の御傳にて渡らせ給ひ候か。今更御心中の程察し申して候。此上はいつ迄も是に御座候ひて。朝長の御菩提を。御弔ひあれかしと存じ候。シカ〳〵。ヘ御逗留の内は萬事御用を承り候べし。シカ〳〵。ヘ心得申して候。

巴(ともゑ)

アヒ　里人

ヘこれはこの粟津の浦里に住居する者にて候。今日は此所の御神事にて候間。只今參らばやと存ずる。や。是なるお僧は旅人と見え給ひて候が。何方よりの御出でにて候ぞ。シカ〳〵。ヘ中々この邊りの者にて候。シカ〳〵。ヘ心得申して候。扨お尋ねありたきとは如何やうなる御事にて候ぞ。シカ〳〵。ヘ是は存じも寄らぬ事を承り候ものかな。我等も此の浦には住居申せども。左樣の事委しくは存じも致さぬ。さりながら。初めて御上りあつてお尋ねあるを。何をも存ぜぬと申すも如何に候間。大方承り及びたる通り御物語申さうずるにて候。語まづ。木曾義仲木曾を御出での時は。御乳母子にてましませし。今井四郎兼平を先とし て。都合その勢五萬餘騎にて御上りなさるゝ。中にも巴山吹と申して。隱れもなき女武者を二人召具せらるゝ。さる程に木曾殿は。都六條河原合戰において。散々に打ちもらされ。僅か七騎になり給ふ。山吹と申すかは。さる仔細あつて都に殘り。巴は御供して七騎が中に落ち給ふ。この巴と申す女は。色白く容顏美麗にして。また力の强き事は。誰續く人も御座なかりしと申し候。荒馬に乘つての名人なれば。度々の合戰に惡所を落とし弓矢打物取つては。一人當千の兵にて。鎧なども眞よき鎧を二兩ばかりひつ重ねて着。必ず一方の大將に立たれけるに。數度の高名。比類も御座なかりしと申傳へて候。木曾殿は既に六條河原にて。九郎義經の軍兵に。生捕られさせ給ふべきを。大剛の人なれば。雲霞の如くある大勢の敵を。悉く追拂ひ。加茂川を打渡り龍華越にかゝり。北國さして落ち給ふずると思召し候が。今一度兼平にあひ參らせられうずると思召され。馬引返し近江路に下り給ふ。また兼平は御行方を尋ね參らせんと。都を指して上り給ふが。道にて行逢ひ參らせられ。二世の契盡きせぬ故と御淚にて悦び給ひ。兼平に其處にて卷いたる旗を上げ給へば。山林に隱れゐたる御味方の勢。三百餘騎集り申す。さらばこの勢にて御最期の御合戰あらうずるとて。邊りを御覽ずるに。甲斐の一條の次郎。六千餘騎にて控へたるに。木曾殿は鬼葦毛と申す名馬に召され。是こそ木曾の冠者源の義仲。我が首取つて鎌倉に參らせ名を擧げよと。大音聲に名乘り駒驅入れ四方へ追拂ひ。二陣に控へたる土肥の次郎實平が。二千餘騎を打破つて。數多の高名にて早これ迄なり。御自害あるべきとて。この粟津の松原迄御出でなされ。巴を召されて仰せられけるは。汝は女なれば何方へも落ち行き申すべし。若し人手に掛からずば。義仲が後世を弔へとて。御形見の物を參らせられければ。其時巴に御最期

なも見捨け申さず。何方へ落ちゆき申すべきぞと。泣く／＼申上げらるゝ。木曾殿其儀にてはなし。鬼神とも云はれし義仲が。最後迄女を引具し。合戰したるなどと云はれんな。末代の恥辱なるべし。是を背くものならば。永き世迄の恨みと重ねて仰せられ候程に。巴は違はず。さらば名殘の合戰仕り。御目に掛け申さんとて。あたりを見給ふに。御田の八郎諸重といふ大力の剛の者。三十騎に控へけるを。巴は長刀取りのべ。大勢にわつて入り先づ御田の八郎と押並べて。むんずと組み御田を馬より引落し。わが乗つたる鞍の前輪に押付け。首ねぢ切つて捨て給へば。續く勢もなかりしと申す。はや其中に木曾殿は。御自害あるべかりしを。相模の國の住人。石田次郎爲久が放つ矢に。木曾殿の内甲を射させ。馬上にもたまらせぬ所を。石田が郎黨おり合ひ。御首たまはりたると承りて候。それより巴は御形見を持ち。木國さして落ち下り給ひたるなどと申傳へて候。又義仲の御事は。名大將なれば。この御社の神といはひ奉り。皆人敬ひ申にも弓矢の家人は。別して渴仰ある御事にて候。最前申す如く委しき事は存ぜず候へども。まづ我等の承りたる通り御物語申して候が。さて御尋ねは如何様なる御事にて御座候ぞ。シカ／＼。〽是は奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに。木曾の山家より御出でありたる御僧と申し。殊に今日は御神事なれば。古を語らんと思ひ。巴の幽靈假に閻浮にまみえ給ひたると存じ候間。暫く此所に御逗留あり。義仲巴の御跡を弔ひ。其後下向あれかしと存じ候。シカ／＼。〽重ねて御用も承り候べし。シカ／＼。〽心得申して候。

鳥追船(とりおひぶね)

アヒ　供人

アヒ太刀持。日暮の供して出る。太鼓座に居る。日暮シカ／＼。〽御前に候。シカ／＼。〽誠に。斯様のめでたき事は御座あるまじく候。シカ／＼。〽畏まつて候。供して本口へ戻る。シカ／＼。〽畏まつて候。ハア何ぢや知らぬまで。揚幕へゆき。樂屋むいて。やい／＼。其の先に笛太鼓の聞ゆるは何事にてあるぞ。ジヤア。其の由申上げう。尋ね申して候へば。鳥追船にて候が。幼き者共笛太鼓にて囃子物を仕る由申し候。シカ／＼。〽畏まつて候。見合せ切戸より入る。

【な】

仲光(なかみつ)

アヒ　家來

仲光の供して出る。我が子を夢となしにけりの謠にて。狂言立つて。小袖着せる。〽いかに申上げ候。何と御歎き候ても歸らぬ事にて候。御歎き御留めあれかしと存じ候。シカ／＼。〽畏まつて候。シカ／＼。〽畏まつて候。美女御前つれて。樂屋へ入る。〽いざ／＼此方へ御出で候へ。さても痛はしき御事にて候。仲光は我が子の幸壽丸を御手掛け給ひ失ひ給ふ。誠に武士の義理ほど情なきものは御座あるまいさりながら。幸壽丸殿は何ぼうあやかり者にて候。幼(いとけな)くして主君の命に代り給ふ。弓矢とる身の鑑にて御座あらうずるさりながら。頼うだ人の御心中。推し量り落涙仕り候。代らるゝものならば。幸壽丸殿の命に代りなば。かゝる思ひあるまじく候。ト云うて。泣き／＼入る。

同　替の間

アヒ　家來

仲光の供して出る。〽御前に候。シテシカ／＼。〽畏ま

つて候。いかに申上げ候。御涙をお止め□□
斎丸殿の御菩提を御弔ひあれかしと存じ候。
シカ〳〵。へ畏まつて候。我等よき様に計らひ
申し候間。御心安く思召し候へ。（シテ立上つて脇座へ向く。小袖を取り上げ死骸の上に掛けるやうに扱ふ）
へさても〳〵痛はしい事かな。主君の命に代
はり給ふ。ゆゝしく候が。御光の御心申思ひ
遣り。落涙仕り候。先づ死骸を隠し申さう。
（太鼓座にて。幸寿を下ろし。又美女の側へ行き。右のよし。下に居て）
御前へ申し候。急ぎ御立ち候へ。（美女既に立ちて屋の内の袖持つて立つて。尤も入るまで持つて。）へいかに美女
へ誠に。危き命を助かり給ふ。
これと申すも。親子の御志浅からず。まこと
に有難き御事にて候。シカ〳〵。へさて此の小
太郎宗清に。御供申し。何方へなりとも立退
き候へと御申し候間。これまで御供申して候。
いつくまでも御宮仕へ申さう。さて何方へ参
らうずるぞ。いや。先づ北嶺山真心の僧都へ
御供申さう。此方へ御座候へ。

難波（なには）

（皇子にて出る。太鼓座ちて一のたにまへ）へ斯様に候者は。平野
明神に仕へ申す末社にて候。唯今罷出る事餘
の儀にあらず。當今に仕へ御申しなさるゝ臣
下。此所へ御下向なされて候が。誰あつて罷
出でこの難波の梅のめでたき仔細。御物語申
すべき者も御座なきと思召され。間□は假に
梅花の精と御身を現じ。王仁を作ひ御出でな
され。この梅のめでたき謂れ懇に御物語なさ
れて候。誠に珍しからぬ申し事にては候へど
も。此の儀において色々仔細御座あるげに候
それを如何にと申すに。昔人皇十六代。應神
天皇に二人の尊まします。一人は難波の尊と
申す。今一人は宇治の尊と申し奉り。我君宇
治の尊へ。御位を譲り給へども。何と思召され
候やらん。たゞ難波の王子に御位につき給へ。
我にには王位の望みなしとあつて。宇治の尊は
御位を保ち給はず候程に。さらば此の上は難
波の王子御位につき給へとありければ。いや
宇治の尊御位につき給ひてこそ然るべけれ。
我等に賜はるべき事思ひも寄らずとあり。互
ひに御斟酌あつて。三年に及ぶ迄御位定まら
ねば。まして御調物も互ひに納め給はず。民
百姓に至る迄これを悲しみ。或ひは又浦々の
蜑人も業に出て魚を釣り。宇治の尊へ備へ。奉
れば。難波の王子へ捧げ申せと云へ納め給はず。
又難波の王子へ備へ申せば。宇治の尊へ参れ
とあり。あなた此方と仕る中に。新しき魚も。
はや饐れぬれば。又海上に出で魚を捕り。新
しき魚をとり。あなたへ参れば此方へ参れ
此方へ参ればあなたへ参れとありて。三年の
間は毎日道にて日を暮し申す。いづれも斯く
の如くなれば。萬民の惱み是に過ぎたる事は
御座なかりし所に。其の折節百濟國より。王
仁といへる相人この土に渡る。さらば天下の
様體をこの相人に占はせ。御位を定めらるゝ
ずるとの御事にて。かの相人に仰付けられけ
れば。相人懇ろに勘へて申さるゝに。難波の
王子御位を保ち給ひて。天下安全に御座あら
うずると申上げらるゝ。其時は難波の王子。
是非に及ばず給はず。癸の酉正月三日に御即
位あつて。今の世に至る迄めでたき御事にて
候。又草木心なしとは申せども。心の候なけ
るぞ是なる梅御位定まらざりし三年の間は。
春を忘れ花も開かざれば。まして青葉をも見
せず。三年が程はたゞ朽木の如くに御座ありし
が。御位に具はり給へば。一夜の内に今を盛
と花開けぬるを。忝くも神武十七代仁德天皇
の御製に。難波津に。咲くやこの花冬籠り。
今は春邊と咲くやこの花と。斯様に御座ありし
より此方。此の梅を御神木と崇め申す御事に
て候。其後近國の事は申すに及ばず。遠國十

里の外よりも。三年の積る錦木を我が君に備へ奉る。少しも納め給はず。萬民に是を下し給ふ。それより猶以て民の賑ひ。納めざるに。國土納りめでたき御事にて御座候。や。是は我が君のめでたき仔細。然れば今夜に舞楽を奏して。かの稀人を慰め御申しなされうずるとの御事なり。則ち王仁は太鼓の役なれば我等如きも罷出で。然るべき所に太鼓を置き。其上都人にお禮を申さばやと存ずる。話過ぎて。又一の松に太鼓を取りにゆき。持って出て置く所太夫次第。口傳。シカ／＼もあり。是は當社明神に仕へ申す末社にて候。此度の御舞詣先づ以てめでたう存ずる。然れば當社明神に舞楽を奏して。御目にかけ申されうずる間。まづその内に我等如き末社にも罷出で。お慰みを仕れとの御事により。これ迄罷出でて御座るが。何と一曲仕らうずるか。[illegible]

【に】

錦木（にしきぎ）

へ是は陸奥狭布（けふ）の里に住居する者にて候。今日市立仕りて候が。用の仔細の候間。序でながら山本の在所迄参らばやと存ずる。や。これなるお僧は。何處（いづく）の人なれば。斯様に暮に及び里離れには御入り候ぞ。シカ／＼。へ扨それは如何やうなる御事にて候ぞ。シカ／＼。へ我等も此所には住居仕れども。左様の御事委しくは存じも致さぬさり乍ら。此所初めて御下向と承り候を。一切存ぜぬと申すも如何（いかゞ）なれば。昔より人の申習はしたる通り。大方御物語申さうずるにて候。シカ／＼。へまづ。此所をば陸奥希婦の郡希婦の里と申し候。又錦塚と申すは則ち是なる塚にて候。さる程に他國の習ひを承るに。男女をよばんとてはわが思ふ女の方へ文をやり。或は又親類にてもあれ。親しき人にてもあれ。左様の媒をして。夫婦の語らひをなすと承りて候が。昔より此所の習ひにて。左様の事は御座なく。迎へんと思ふ女のあれば。錦木と申して尺ばかりある木を。美しく色どり錺り。思ふ女の門にかの錦木を立つるに。逢ふべきと思へば取入れ。逢ふまじきと思ふ夫の錦木をば。取入れざるが當所の習ひにて候。然ればいにしへ此所にとある夫の御座ありしに。思ふ女のありて錦木を錺り。かの女の門に立てたりしに。逢ふまじきと思ふにや。内にては細布をいとなみ。幾度立て候へども取入れねば。夫は猶々この女を戀しく思ひ。まづは立てゝも立てゝ候ひけるに。毎日錦木を錺り替へ。三年に及ぶ迄立てけれども。つれなう取入れずして。夫は終にむなしくなり申して候。されば世に錦木の千束になりたると申すも。この三年の日數のつもるを以て言ひ習はしたる御事にて候。かの程に思ひし夫の念力深き故にや。かの女も程なくむなしくなり申して候。所の面々不憫に思ひ。夫婦の者は申すに及ばず。三年の間立てたりし錦木も。又女の織りたる細布も同じく土中につきこめ。是を錦塚と申すも此の謂れにて候。爰を以て古き歌にも。錦木は。立ちながらこそ朽ちにけれ。けふの細布胸あはじとや。斯様に詠まれたるなどと承及びて候。又細布と申すも。他國には御座なく此國の名物にて候。是は鳥の羽を緯にして織りたる布にて。幅狭く後には着るとも。前にては合はぬ布なれば。胸合ひ難き戀の譬には。必ず此の細布を譬へて詠み給ふ。陸奥のけふの細布ほど狭く。胸あひ難き戀もするかなと。古の歌人も詠み置かれたると申傳へて候。其の外所に於ての名歌は數多御座あるなどと申せども。まづ我等の承りたるは。大方かくの通りにて候が。扨お尋ねは如何やうなる御事にて候

ざ。シカ〳〵。〽是は奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに。お僧の御心中貴うまし[illegible]。殊には夫婦の者[illegible]。此度御弔ひ[illegible]と思ひ。而人の妻とな[illegible]。[illegible]と存じ候間。末に急ぎの御事なれども。暫く此所に御逗留あり。結縁のため有難き御法をも説き。かの者を弔ひうかめ。其後いづく〳〵も御通りあれかしと存じ候。シカ〳〵。〽御逗留の間は。我等のお宿を參らせうずるにて候。シカ〳〵。〽心得申して候。

錦戸（にしきど）

アヒ　家來

〽斯様に候者は。奥州の住人錦戸太郎に仕へ申す者にて候。爰に一大事の事こそ出で來て候へ。其の仔細と申すは。先づ頼朝義經御兄弟の御仲。不和にならせ給ふにより。判官殿は秀衡を頼み。御下りなされ候を。安々と頼まれ申し。主君と仰ぎ奉るに。秀衡不慮に死去申されて後。頼朝よりの仰せには。早速錦戸を頼み其名をさるゝ間。兄弟三人御味方に參れ。參るにおいては望みに從ひ國を與へ給はるべきとの御事により。錦戸頓てお請けを申し。二男泰衡に此の事かくと申されければ。泰衡も同心申されて候。また三男和泉の三郎に。此の望を語らせ給ひ。三人打連れ。御味方に參らうずると申され候へば。和泉の三郎これを聞き。言語道斷。存じも寄らぬ事を承り候ものかな。今まで頼まれ奉る主君を引替へ。敵と成り申さんこと。家の恥辱。なか〳〵思ひも寄らずと申されければ。いや〳〵それは苦しからぬこと。他門の人を頼む主君にあらず。御兄弟の御仲なれば。同じ事にてあるぞと申されたれども。いや〳〵心を鎮めて聞し召されよ。親にて候秀衡の遺言をば。早や御失念候か。最期の刻み三人の子を近づけ。構へて君に心[illegible]り仕るな。いよ〳〵親しく御奉公仕れ。其の儀にてあるならば。草の蔭までも嬉しからうずると仰せられければ。各々涙の下より。御心安く思召せ。義經を主君と崇め奉るには。何か兄弟の中にて二心あるべきぞと。領掌ありたるをば忘れ給ひ候か。さある時は義を背き。親の遺言を背き。不孝の至り。これに過ぎたる事あるまじく候。なか〳〵某は同心仕ることは罷り成らぬと申された程に。その時また頼うだ者が申す様には。仁義を背くといふか。汝こそ仁義を背け。其の仔細は。現在兄のいふ事を聞かねば。仁義を背くではないかと申されたれば。いや〳〵親の遺言に背く人こそ。仁義をも背け。不孝の科であらうずれ。この儀に於ては。そつとも同心仕るまいと申切られた程に。頼うだ者はあつきと腹を立て。是非に及ばぬ。今日よりしては兄おとゝとば思ふな。また身共も弟おやと思ふまいといつて。散々に言ひあうて歸られた。頼うだ者も氣が短い程に。頓て泰衡と談合して。とかく和泉の城へ押寄せて。打果すに相極められた。少々先手は早や往（い）たもあると申す。かゝる一大事は御座あるまい。頼うだ者も餘り粗忽なり。また和泉の三郎も。同心せられたらば後はよからうものを。無分別と申さうか。無慾なといふものであらうか。可惜（あたら）命を捨てらるゝ。や。これは某がいらぬ獨り言ぢや。皆承り候へ。唯今大勢を集めて。和泉の城へ押寄せ申され候が。はや先手の勢は參らるゝと申すぞ。錦戸の内にてあらうずる者には。上は六十。下は十五を限つて。急ぎ物の具をなし。罷出でよとの御事にて候ぞ。構へて其の分心得候へ〳〵。

【ぬ】

鵺

ワキ呼出す。へ在所の者とお尋ねは。如何やうなる御事にて候ぞ。シカ〲。へ尤もお宿参らせたくは候へども。此所の大法にて往來の人にはお宿参らせず候間。急ぎ何方へも御出であらうずるにて候。シカ〲。へいや叶ふまじいにて候。シカ〲。へ中々の事。あら痛はしやお宿参らせう。あれに見えたる洲崎の堂へ御出であり御泊り候へ。シカ〲。へ構へて其の堂には。化物があるぞや。シカ〲。へ扨もすねい坊主かな。中入後。へ夜前諸國一見のお僧の。一夜のお宿とは承れども。大法なれば是非に及ばず。お宿参らせず洲崎の堂を敎へ申して候が。痛はしく存じ候間。あれに御入りあるか。見舞申さばやと存ずる。や。是なるは夜前のお僧にて候か。シカ〲。へ其の事にて候。痛はしく存じ候間。お宿を申したうは存ずれども。大法なれば力及ばず。せめての事に御見舞申して候。シカ〲。へそれは如何やうなる御事にて候ぞ。シカ〲。へ是は存じもよらぬ事を承り候ものかな。我等も委しくは存じも致されさり乍ら。お僧の物淋しくお尋ねあるを存ぜぬと申すも如何に候間。昔人の申し傳へたる通り。御物語申さうずるに。ヽ候 語る程に。鵺の果てたる仔細と申すは。昔人皇七十六代近衛院の御宇。仁平三年癸の酉の年。かの鵺と申す化生の物君に祟りをなし申す。夜半ばかりの折節。東三條の森の方より。黒雲立來り。宮殿の上に覆ひければ。御惱しきりに見えさせ給ひたると申す。一大事の御事なれば。貴僧高僧を召され。色々樣々の御祈禱をなされ候へども。少しも其の驗御座なかりしにより。ある博士を召され占はせ給へば。念比に考へて申上げけるは。是こそ恐ろしき化生のものゝ仕業なれ。武士に仰付けられ。この變化のものを射させられ候はゞ。君の御惱は御平癒あるべき由申上ぐる。其の時公卿大臣集らせ給はず御談合あり。源平兩家の兵の內。何れにか御付けられんと。我も〱と選じ御覽ずるに。源の賴政にまさりたる人あるまじきとて。頓て賴政に仰付けらるゝ。賴政承つて申されけるは。左様の目に見えぬ化生のもの。仕つたる事なし。さも仕るべき者に仰付けられ然るべきとて。辭退申されけれども。綸言なれば力及ばずお請を申さるゝ。御供には遠江の國の住人。猪の早太と申す郎等に。ほろのかざ切りにてはいだる矢を負はせ。賴政は常々御祕藏ありし。重籐の弓に。山鳥の尾を以てはいだる矢をおつとり添へ。宮中に參り庭上に座して。御惱の時刻を窺ひ給ふに。夜半ばかりにもなりしかば。案の如く東三條より俄に風立つて雨そゝぎ。一村の黑雲立來り。玉殿の上に覆ひかゝる。賴政かの黑雲の內を見給ふに。何とも見えわかず恐ろしきものゝ姿あり。よつぴきしなり。暫くかためてひやうと放つ。手答へすると思へば。大地にどうど落つる。其時猪早太走りかゝつて取つて押へ。突く程に〱。十八刀にて突きとめられたると申す。シカ〲。へ尤も今思ひ出いて御座る。九刀では御座らうが。疵をようて見たれば。十八ヶ所あつたと申すが。太刀にて突いたによつて。刀が裏表へ通つて。疵が十八あつたもので御座らうず。さて火を燈いて御覽ずるに。扨も〱色々のものが寄集つて。君に祟りをなし申したるぞ。頭は猿。尾は蛇。足手は虎の樣に御座ありたると申す。かゝる恐ろしきものをおろそかにしては惡しかりなんとて。うつほ舟に

つくりこめ。淀川に流されしが、この難波の浦に流れとゞまり。今に執心殘つて夜な〳〵人に姿をまみゆるなどゝ申傳へて候。最前申す如く。委しき事は存じも致されさり乍ら。我等の承りたる通り御物語申して候が。扨お尋ねは如何やうなる御事にて候ぞ。シカ〳〵。へ是は奇特なる事を承り候ものかな。先に申す如くかの鵺の執心此所に殘り。へんまく仕ると申すが。お僧の御心中貴うましますにより。此の度御法をうけ。變化の身を變へ。成佛仕りたきとの望あり。今夜現れ靡言葉をも交したは不憫なる事に存じ候間。お僧もさやうに思召さば。有難き御經をも御讀誦(じゅ)あり。かの鵺を弔ひうかめ。其後いづ方へも御通りあれかしと存じ候。さあらば此の上は。所の大法をも破り。御逗留の間はお宿參らせうずるにて候。シカ〳〵。へ心得申して候。

【ね】

寢(ね)覺(ざめ)　　アヒ　山神

亂序にて出る。　へ斯樣に候者は。信濃の國木曾の郡。寢覺の床に住居する山の神にて候。唯今罷出ること餘の儀にあらず。三歸りと申して。壽命日出度き藥を與ふる翁の御座候が。我が君賢王なるにより。此の翁に就いて奇特の御靈夢のましまして。勅使これまで御下向なされて候。されども誰あつて罷出で。御藥の日出度き仔細。申上ぐべき者も御座なく候により。三歸りの翁は。かりに賤しき柴人と身を窶し。我と我が身の上を御物語りなされて候。此の三歸りの翁と申すは。忝くも醫王佛の化現なるにより。生所もあらず出所もなく。たゞ忽然と現れ。數多の奇特を見せしめ。神ともいひ佛ともいひ。自由方便なること。申すも愚かにて候。されば此の翁を三歸りと申す仔細は。此の邊りに仙郷あつて。役の行者と心を合せ。彼の仙郷に入つて仙術を行じ。また或る時は此の川上より龍宮に至つて。不老不死の藥を求め。これを服して。三度まで若やぎ。故に三歸りの翁とは申し候。さる程に。かゝる藥の奇特は我が朝に限らず。唐の孫思邈といふ人。慈悲深うして。普く萬民に藥を與へ。物の命を全うせしに。或る時龍宮の小蛇となつて。人間に出て遊びけるを。草苅の童はこれを見て。何としてか身を痛め。疵をつけけるを。折節孫思邈行き逢ひ。憐れみの志あるにより。其の傷疵に藥をつけ。彼の小蛇を助け。再び龍宮に歸しければ。龍王これを悦び。此の恩を報ぜんとて。孫思邈を龍宮へ迎へ請じ。樣々の珍寶を擲げけれども。もとより孫思邈は慾なき人にて。此の寶を一つも請けざりし程に。龍王いかゞ御恩を報ぜんと。思案を廻らし。さあらば昔より龍宮に祕し傳ふ藥方あり。之を與へんとありし時。孫思邈は大きに悦び。三十の藥方を受け。人間に歸り。普く人を醫するに癒えずといふ事なし。此の祕方を書に著し。本朝までも傳はりて。醫家の寶と成ること。これ皆慈悲の心深うして。物の命を助け。龍宮に到る故なり。されば彼の孫思邈も。仙人となつて國々に廻り給ふ。また三歸りの翁も。同じく仙人にて。或は此の所の神とも崇め。壽命長久の藥を以て。御代を守り給ふ目出度き御事にて候。や。これは御藥の威德。先づあれへ參り。彼の稀人にお禮を申さばやと存ずる。シカ〳〵。常の如し。へ罷出でたる者を。如何なる者と思召されうずるか。此の寢覺の床に住居する山神にて候。これまでの御下向。先づ以て目出度う存ずる。また三歸りの翁は。唯今かの御藥を我が君に

獻げ申し。其の上舞樂を奏して稀人を慰め申さうずる間。我等如きにも罷出で。お禮をも申し。また何にても一曲仕り。御目に懸け申せとの御事にて候が。何と一曲仕らうずるか。仕るまいか。シカ〳〵も。謡も。舞も。常の如し。

【の】

野宮（のゝみや）

〽これは。嵯峨野の邊りに住居する者にて候。今日は野宮の御神事にて候間。罷出で心をも慰まばやと存ずる。や。これなるお僧は。此の邊りにては見馴れ申さぬが。何方より御參りにて候ぞ。ワキシカ〳〵。〽中々。此の邊りの者にて候。シカ〳〵。〽心得申して候。〽扨それは如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。〽是は存じもよらぬ事を承り候ものかな。斯様の物語は上々にこそ御沙汰候へ。我等如きの賤しき者は。委しくは存じも致されざり乍ら。お尋ねあるを存ぜぬと申すも如何なれば。大方承り及びたる通り。御物語申さうずるにて候。語さる程に。この野々宮と申すは。伊勢齋宮に立ち給ふ人。精進收め（しやうじ）られん爲の野々宮にて御座候。總じて伊勢齋宮に立ち給ふ事は。人皇十一代垂仁天皇の皇女。倭姫の命より始まりたると承り及びて候。其後桐壺の帝（みかど）の御弟に。前坊と申して渡らせ給ふ。この御息女に。秋好む中宮と申して御座ありしが。伊勢齋宮に立ち給ふに。御精進收められん爲に。この野々宮に移らせ給ふ。則ち御母御息所も伴ひ是へ移り給ふが。其の折節光源氏。御息所の御跡を慕ひ給ひ。これ迄御座候へども。精進家の御事なれば。内へ御入りの事は叶ひ給はず。其時御手に榊の枝を持ち給ふを。忌垣（いがき）の内にさゝせ給へば。御息所は是を御覽じて。神垣は。しるしの杉もなきものを。いかにまがへて折れる榊ぞと。斯様に遊ばされたると承りて候。斯くて長月十六日に。桂の祓（はらひ）と申す事を御沙汰なされ。それより直ぐに鈴鹿の地に赴き給ふが。其時また源氏より御歌を遊ばされ。前の榊に添へて。參らせられたると申す。振捨てゝ。今日は行くとも鈴鹿川。八十瀬の浪に袖は濡れじやと。斯様に返り參らせられければ。御息所御返歌に。鈴鹿川。八十瀬の浪にぬれ〳〵ず。伊勢まで誰か思ひおこさんと。斯様に御返歌ありたるなどと承り及びて候。また其後都より。こま〴〵の御音信ありたるとは申せども。委しき事は存ぜず候。最前申す如く。こまなる仔細は存ぜねども。先づ我等の承りたる通り御物語申して候が。扨お尋ねは如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。〽是は奇特なる事を承り候ものかな。誠に光源氏この野々宮にまうで給ふも。長月七日。則ち今月今日に相當りて候により。古をなつかしく思召され。御息所假に現れ給ひたると存じ候間。殊にお僧の御心中貴うましますにより。一向少しも浮きたう思召し。かた〴〵以てまみえ給ひたると存じ候間。暫く此所に御逗留あつて。御息所の御跡を。御弔ひあれかしと存じ候。シカ〳〵。〽御逗留の内は御用もあらば承り候べし。シカ〳〵。〽心得申して候。

野守（のもり）

アヒ　里人

〽斯様に候者は。此の春日野の里に住居する者にて候。今日は徒然に候間。春日野に出で。心をも慰まばやと存ずる。これなる山伏たちは。此の邊りにては見馴れ申さぬが。何

方こり此の所へ御出でにて候へ。シカ〳〵。へなか〳〵。此の邊りの者にて候。シカ〳〵。へ心得申して候。シカ〳〵。へさてお尋ねあり度きとは。如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。へわれ等も此の邊りには住居申せども。左樣の御事委しくは存じも致さねど。さりながら。遙々御上りなされ御尋ねあるを。何をも存ぜぬと申すも如何なれば。昔に申し傳へたる通り。御物語申さうずるにて候。先づ。この野守の鏡と申すは。これなる水を申し傳へて候。其の仔細と申すは。昔この春日野にて。御狩のありし時。狩人御鷹を遣ひ申されけるに。何とか仕りけん。御秘藏ありし御鷹を失ひ申さるゝ。御供の人々驚き騒ぎ。此處彼處と尋ね申されけれども。終に御鷹の行方見え申さず候程に。皆人呆れ。如何せんとありし處に。此の春日野の野守の翁ありしに。若し御鷹の行衛や知りてあるかと。御尋ねありければ。その時かの野守の老人。答へて申しけるは。御鷹の行衛をこそ能く存じて候へ。教へ申さうずるとて。唯今御尋ね給ふ御鷹は。これなる水の底に有ると申す。狩人不審に思ひ。立寄り水底を見。木居にある御鷹の。其の影の水に映りたるを見て教へ申す。狩人は悦び。其の儘御鷹をすゑあげ我が家に歸る。されば古の歌にも。此の心を實にも面白き事と思ひ給ひけるか。一首に。はし鷹の。野守の鏡えてしかな。思ひ思はず餘所ながら見んと。斯樣に詠み置かせ給ひしより後。名所と申し名歌といひ。それより此の水を。野守の鏡とは申傳へたるげに候。また一説には。正身の鏡と申すは。昔この野に鬼神住みけるが。衆生に對して惡をもなさず。夜はこれなる塚に入り。晝には成り候へば人間となつて。此の野を守りたると申す。さる程に彼の鬼神。一面の鏡を持ちて。折に觸れ時によそへて。人の目に見せたると申傳へて候。されば野を守りし鬼の持ちたる鏡なればとて。これを野守の鏡と申すなどと。二説に承りては候へども。いづれ正説と慥なるをば存ぜず候。また此の邊りを飛火野と申す仔細は。むかし此國の軍起つて。此の國を窺ひ申すに。あの山々峯々へ。多勢取上り。夜にも成りぬれば火を點し。此方かなたへありき候が。譬へば火の飛ぶ樣に候ひけるを。所の面々この野にて見附け始めしに依つて。それより此の野を飛火野とも申傳へて候。最前申す如く。野守の鏡の仔細。飛火野の謂れ。委しくに存ぜず候へども。先づ我等の承り及びたる通り。御物語申して候が。さてお尋ねは如何樣なる御事にて候ぞ。シカ〳〵。へ是は奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに。客僧たちの行法の程。貴くましますに依り。彼の鬼神この度法味を請け申さんと。今ぞ昔の野守の翁と身を變へ。これまで顯れたると推量仕りて候間。大峯へは御急ぎなれども。今宵は此の所に御座候ひて。三法の御勤めをもなし給はゞ。若しまた彼の鏡を御見せらるゝ事も御座あらうずると存じ候。シカ〳〵。へ御逗留ならば重ねて御見舞申さうずるにて候。シカ〳〵。へ心得申して候。

【は】

放下僧（はうかそう）

アヒ　供人

中入前に立ちて仕に太刀持ち一間へ。下て呼出す。へ御前に候。シカ〳〵。へ畏まつて候。皆承り候へ。瀬戸の三島へ御參りなされ候間。身を用意仕り候へ。其分心得候へ〳〵。わあ〳〵何と申すぞ。何ぢや放下僧が來る。それは面白からう。申上げて賴

うだお方へ、御目にかけう　如何に申上げ候。放下が參ると申す。そと御覽あれかしと存ずる。ワキシカ〱。へ畏まつて候。はて大事ない事な。やあ　殊の外面白いと云ふか。やい〱、賴うだお方へ申上げたれば、左樣のものは無用の由仰せらるれども、某が一目見たい程に。急ぎ此方へ通し候へ〱。ト立ち上下にするや　テ出て人をあだにや思ふらんの言葉にて。へいかに申上げ候。最前の放下の參りて候。餘り面白き由申し候間、一目御覽あれかしと存じ候。ワキシカ〱。へ畏まつて候。如何に是なる人々。おことは邊りの人には變り面白き出立ちにて候が。何と申す御方にて候ぞ。太夫シカ〱。へ何と浮雲流水(ふうんりうすい)と又あれなるに何と申し候ぞ。太夫シカ〱。へ扨は兩人の名が浮雲流水にて候か。太夫シカ〱。へあれは相模の國の住人、利根の信俊。ト目にてあてた　聞いてはおりない。シカ〱。へ心得申して候。如何に申上げ候。尋ね申して候へども。浮雲流水と申して。二人の放下にてある由申し候。ワキシカ〱。へ畏まつて候。其の由申して候へばそと物をお尋ねありたきとの御事にて候間御入り候へ。知らずな物なのたまひそ。の謠すぎて。へ知つたればこそ云へ、知らぬ事が云はるゝものか。切つて三段となす。ト云ふ　此時ワキ刀に手をかける。へあゝ　ト聲をかけて止める。此所云合せありつたかしの人の心そこの字きに。へそちがなかしくばこちもなかしからうよ。ト笑ふ。ワキシカ〱。へ畏まつて候。瀨戸の三島へ御作ひあらうずるとの御事にて候間、舟に召され候へ。後にワキ切戸より入る。皆いて太刀持ちながら入る。

放生川(はうじやうがは)　上懸り

アヒ　里人

へ斯樣に候者は。この八幡の里に住居する者にて候。今日は八月十五日放生會と申して、當社の御神事にて候間、我等如きも參らばやと存ずる。やこれに御座候は、この邊りよりの御參詣とは見え給はず候、何方よりの御參詣にて候ぞ。シカ〱。へ中々。この八幡の里に住居する者にて候。シカ〱。へ心得申して候。扨お尋ねは如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ〱。へ是は存じも寄らぬ事な承り候ものかな、我等もこの八幡山下(さんか)の者とは申しながら、さやうの御事委しくは存じも致さず候、されども遙々御上洛と申し、殊には初めての御參詣にてお尋ねあるを、何なりとも存ぜぬと申すも如何なれば、大方承り及びたる通り。御物語申さうずるにて候。語まう、今日當社の御神事な。放生會と名付け給ふ事は。昔人皇十五代神功皇后、丁巳三韓を征伐し給ひし時。多くの敵を亡し給ふ。殺生(せつしやう)の善根のため。放生といふ大願を起し給ひ。生きたる鱗(うろくづ)を集め此の川に放ち給ふ。されば生けるを放つ祭なるにより、今日の御神事を放生會の御神事とは名付けられたるげに候。さる程に。この放生川と申すは。神水にて候程に。如何にも澄渡り。底清く御座あるべき事なるに。御覽なさるゝ如く。斯樣に打濁り。水底(すゐてい)も見えわかざるな。昔人不審に思召さるゝ。この御不審はさる事なれどもさり乍ら。斯樣に打濁りたるこそ。猶以て神德の謂れにて候へ。それを如何にと申すに。水の至つて清きには魚の住むべき所なし。人至つて賢なれば友少なしと申すも。此の心にて御座ありげに候。然れば今日の御神事と申すは。社家の人々執行ひ給ふ御神事にもあらず。まして山家の者のなす祭にても御座なく候。人皇四十四代。元正天皇乙卯(きのとう)八幡の御託宣によつて。養老四年に初めて執行はせ給ふにより、今來の世に至る迄も、忝くも勅使立つて。斯樣に執行はせ給ふ御神事なれば、別して有難き仔細にて御座ありげに候。また當社と申すは、その昔へ

は豊前の國宇佐八幡と現じ給ひけるが。清和天皇の御時。大和の國大安寺の行敎と申す貴き人。八幡の御神體を拜み奉らんと誓をなし。一夏九旬の間。宇佐の宮に御參籠あり祈誓し給ふに。或る夜の夢に。八幡現じて示し給ふは。帝都遠きにより。王城近く移り給ひ。君を守護し給はうずる間。我を伴ひ上り給へと仰せられて夢さめぬ。行敎は悦びの餘りに泪にむせび。一夏も過ぎぬれば。都に上らせ給ひ。程なくあの向ひに見えたる。山崎迄御上洛ありけるが。また其の夜夢に見えさせ給ひ。我が住家はあれなる男山と仰せられける。行敎は猶も奇特に思召され。御神託にまかせ此の山に來り給へば。俄に御衣の袖かろくなり申す程に。扨は八幡の御座所なるにより。是處にて下りさせ給ふよと思召され。膝を折り感涙を抑へ。兩眼をひらき御覽ずれば。其儘鳩の峯に光立つて。忽ち八幡の相好を見せしめ給ふ。行敎は餘りの奇特さに。此の由帝都に奏聞あり。貞觀二年に初めて。男山鳩の峯に新宮を作り。御宮移し奉り。八幡大菩薩と崇め。別しては弓矢の守護神となり給へば。上下萬民渇仰仕る事も。この謂れにて御座ありげに候。最前申す如く。當社のめでたき仔細。又放生會の御神事につき。様々ありとは申せども。まづ我等の承りたるは。斯くの如くにて候が。扨お尋ねは如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。〽是は奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに。鹿島の神職初めて御參詣を。神慮に嬉しく思召さるゝにより。誰やの者か罷出で。神秘を申すべき者も御座なきと思召され。武内の神は御神託として。假に顯れ給ひ。今日の御神事のめでたき謂れをも。懇ろに御物語なされたると存じ候間。御下向は急ぎなれども。暫く此所に御座候て。愈々信心をなし給はゞ。重ねて奇特の御座あらうずると存じ候。シカ〳〵。〽御逗留の内は。御用もあらば承り候べし。シカ〳〵。〽心得申して候。

同　下懸り

アヒ　鱗の精

（亂序にて出る）〽斯様に候者は。城州八幡の里において。放生川の水底に。年久しく住む鱗の精にて候。只今罷出る事餘の儀にあらず。當所において。御神拜年中に其の數おほしとは申せども。とりわき今月今日の御神事をば。放生會と名付け給ふことは。昔人皇十五代。

（是より上懸りのいひ事なり。[illegible]に。）〽此の謂れにて御座ありげに候。や。是は當山のめでたき仔細。また我等如きもこれ迄罷出で。たゞ歸るも如何なれば。めでたき一曲仕り。罷歸らうと存ずる。〽めでたかりける時とかや。（三段の舞）やら〳〵めでたや〳〵めでたやな。斯かるめでたき折柄なれば。我等がやうなる鱗迄も。顯れ出でて。悦び勇み。謳ひ奏で〳〵。又水中にぞ入りにける。

白樂天

アヒ　末社

（亂序にて出る）〽斯様に候者は。攝州住吉の明神に仕へ申す末社にて候。只今罷出る事餘の儀にあらず。爰に思ひも寄らざる事の御座候。それを如何にと申すに。唐の賓客白樂天と申す者。是は智惠第一にして。我れ程な者はあるまじきと存ずる所に。又日本は小國にておのづから人の智惠も少なく。何事に就けても愚かにあらうずると推量致し。我朝に渡り日本の智惠をおしはかり。其後は此の國をわが儘に從へようずると思ひすまし。則ち大船に乘り移り。此の土に渡る事を。忝くも大明

神は神通方便を以て是をよく御存じあり。我朝と申すは。天地開闢より神國にて日出度き御國なるを。今更白樂天にあなづられては叶ふまじきと思召され。賤しき漁夫と御身を變じ。小船に召され海上に出で。さらぬ體にて待ち給ふを。白樂天明神とは夢にも知らず。大船を押寄せ頓て漁翁に問をかくる。さて汝は日本の者かと云ふ。其時明神思召さるゝは早や心安し白樂天が智惠の程こそ見えたれ。それを如何にと云ふに。日本に渡り和國の者を見て。汝は日本の者かと云ふ程愚智なる者は。まづ我國にあるまじきと思召され。弱々と日本の者と仰せられければ。其時樂天さて日の本にては何をもてあそぶと云ふ。明神さてまた唐には。如何なる事をもてあそぶと仰せらるゝ。白樂天。唐には詩を作つて心を慰むと云ふ。また明神日本には歌を詠うで人間の心を慰め申すと仰せられければ。白樂天日本の歌と云ふは。如何やうなる事ぞと不審をなし申す。明神答へ給ふ。惣じて歌と申す事は。天竺の靈文を唐土の詩賦とし。唐土の詩を我朝の歌とす。三國を和らげ來たるを以て。大きに和らぐる歌と書きて。大和歌とは申すと仰せられければ。白樂天さあらば目前の體を。唐土の詩に作つて聞かせうずるとて。青苔衣を負ひて巖の肩にかゝり。白雲帶に似て山の腰を廻る。翁もこの心を存じたるかと云ふ。明神仰せられけるは。一段と面白う候。さりながら日本の歌と申すも皆この心にて候。苔衣。着たる巖はさもなくて。衣着ぬ山の帶をするかなと。斯様に和らげ給ひければ。白樂天肝を潰し。斯かる賤しき漁夫なれども日本の者とて歌を詠む。然るべき人はさぞあるらん。深入りしては如何なれば。其儘これより唐土に押戻らんと存ずる白樂天が其の心中を。又明神はよく知ろし召され。暫く御逗留あれ。海上に舞臺を敷き。青海樂を奏して見せ申さうずると仰せられければ。猶々奇特なる事と肝を潰し。夜に日に續いで歸國仕らうずると存じ候間。我等如きにも罷出で。かの白樂天が様體を見申せとの御事により。これ迄罷出た。急ぎ參り。かの樂天の有様を見申さばやと存ずる。シカ〱。加茂と同じ。へ是は白樂天ぢや。扨々存ずるよりも美々しい體ぢや。また某のやうな者も是迄罷出てたゞ歸るも如何なれば。日出度き一曲仕り罷歸らうと存ずる。三段の舞。○鳥加茂と同じ事なし。

半蔀

アヒ　里人

へ是は此邊りに住居する者にて候。邊り近き御寺に一夏九旬の間立花をなされ。佛前に手向け御申しなさるゝ。漸う夏中も過ぎ候へども今日は花の供養なされ候間。只今參らばやと存ずる。御見舞申上げ候。先づ以て今日の御供養。參詣の貴賤皆々有難う存ずる事にて候。シカ〱。へさん候ちと用の仔細の候て遲なはり申して候。シカ〱。へ扨それは如何やうなる御事にて候ぞ。シカ〱。へ是は存じも寄らぬ事を承り候ものかな。斯様の御事は我等如きの様な賤しき者の存ずる事にては御座なく候。されども某悴の時分にて寺へのぼり申したる時。この草紙の片はし承りたる様に候間。前後仕りたる御事にては御座あらうずれども。御尋ねなさるゝ間。むざと御物語り申さうずるにて候。語まづ。夕顔の上と申すは。一人の御姫君を儲け給ひてより。さる仔細あつて其後夕顔の上は何方ともなく失せ給ひたると承り及びて候。さる程に其頃源氏の御乳母大貳と申して御座ありしが。御乳母以てい

外に傾かせ給ひ五條邊りに住み給ひけるな。忝くも光源氏は御心許なく思召し。御見舞のため御車を寄せられけるが。御乳母大貳のまします家の門をあけ申す内に。邊りを御覽なされ候へば。あやしげなる小家に夕顏の花今を盛りと咲亂れて見えし程に。御隨身を召され一房折りて參れと仰せられければ。其儘門に入りてかの夕顏の花を折りける所に。内より白き扇のいたう焦したるを持つて參り。是に置いて參らせ給へと申されける。則ちその扇に載せ惟光をしてかの花を奉りしに。源氏御車の上より御覽候へば。一首の歌の御座ありしと申す。心當てにそれかとぞ見る白露の。光添へたる夕顏の花と。斯樣にありければ。其時源氏の御返歌に。寄りてこそそれかとも見め黄昏に。ほのぼの見つる花の夕顏と。斯樣に御返歌ありたると承及びて候。其時こそ夕顏の上の宿りとは知ろし召されて。それより惟光折々通ひ深き御仲となり給ひたると申し候。最前申す如く。夕顏の上の御事委しくは存ぜず候へども。御尋ねにて候間先づ我等の承りたる通り御物語申して候が。さてお尋ねは如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。へこれは奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに。千草を集め。一夏の御供養を執行はせ給ふにより。夕顏の上には斯樣の折柄御出でなされ。立花の數に入り五障の罪をも浮かみたう思召し。夕顏の花の精とまみえ。闇屋これ迄まみえ給ひたると存じ候間。恐れ多き申し事にて候へども。是より五條邊りへ御出でなされ。かの古跡にて夕顏の上の御跡を念比に御弔ひあれかしと存じ候。シカ〳〵。へ左樣に候はゞ我等も御後より參らうずるにて候。シカ〳〵。へ心得申して候。

同　立花の間　アヒ　里人

ワキシカ〳〵。へ御前に候。へ畏まつて候。へ皆々承り候へ。當寺に於いて一夏九旬の間。立花をなされ候處に。漸う夏中も過ぎ候へば。今日花の供養をなされ候間。志の輩は。美しき花を集め。何れも御堂へ參られ候へ。其の分心得候へ〳〵。（中入。里人、立つて。）へさても〳〵。今日の御供養。皆人有難う存ずる事にて候。先づあれへ參り此の由申上げうと存ずる。いかに申上候。先づ以て今日の御供養。參詣の輩何れも有難く存ずる事にて候。へ中々。か樣の有難き事は御座あるまじくと申候。へこれは存じも寄らぬ事を承り候ものかな。（以後前に同じ。）

寶生流立花狂言セリフなし。立花は。初に後見出て。舞臺の眞中に直す。ワキ出て二言あり。[illegible]立花入れる。此の出入れに云分あり。

橋辨慶（はしべんけい）　アヒ　家來（二人）

（右の肩ぬぎ。局着。竹杖ついて。早鼓にて出る。）

シテへ知つたか〳〵。アドへ何事ぢや。シテへ此事を知らぬか。アドへいや何をも知らぬ。シテへ是程大事の事を知らぬといふ事があるものか。さあらば追付け語つて聞かせう。アドへ頼む語らしませ。シテへ先づ頼うだ人が。このうち北野へ丑の刻詣でせられたは知らうぞ。アドへそれは知つた。シテへそれに就て思ふ仔細こそあるらう。今夜は東山十禪寺へ參らうずると申されたれば。誰かは知らぬ粗忽な者があつて。今夜の丑の刻詣ではならに御無用で御座ると申した。其時頼うだ者がその仔細はと聞かれたれば。其の事にて御座る。昨日日暮れて五條の橋を通りたる者が御座るが。年の頃十二三にかなても御座らうか幼い者が。小太刀を拔いて切廻る程に。さたよる事では御座らぬ。必ず十禪寺への御參りは御無用ぢやと申した。これは粗

忽な事を云うたてはないか。シカ〳〵。シテへ其の時頼うだ者が。なぜにそれを生けて置くぞ。打殺さぬと申されたればこそ。中々。身の輕い事。蝶や鳥の樣に御座つて。いか程大勢でも手元へ人を寄する事では御座らぬと申したれば。頼うだ者が強い事を云はれた。定めて化生のものであらうず。兎角辨慶程の者が。是を聞き逃げはなるまい。兎角五條の橋へ出て。かの者を從へうずると云うて。はや行かるゝになつたが。是は意見をして止めたいものではないか。アドへ是はそちの云ふ如く。兎角いらぬ事ぢや。合ひ口を以て止めたいものぢやな。シテへ何が情強(こは)者ぢや程に。誰(た)が云うたりとも止まられまい。所で大勢供に行くであらうが。そちやこちや衆は何としたらいであらうぞ。アドへ誠に大事の事ぢや。供にあらうに。ちと斟酌したいものぢや。シテへ必ずの事ぢや。化生のものは頼うだ人の樣な。健氣な者には取りつかいで。弱い者に取りつくものぢやげな。アドへそれならば猶以ていやな事ぢや。シテへ兎角つれて行(い)かるゝであらうず。それならば宿に居うで居たりとも。つれて行(い)かれう程に。いざ物の具して屋敷へいのまいか。アドへおぬしは健氣を云ふ。まづ宿に居うて居たらよからう。シテへまづ屋敷へいて。餘り近くへ寄らず。片隅に居て樣子を聞いたらよからう。アドへ是は尤もぢや。いざさらば行け。ト云うて(のく)アドへやい。聞いたか。兎角供にいたらば死ぬるは一定よ。シテへまづ死ぬると思ふ覺悟せねばならぬ。アドへそれなれば。身共は妻子に云置きたい事がある程に。おぬしは先へ行け。宿へいて後(あと)から行かうぞ。シテへやれあの卑怯者よ。いかう心細うなつた。身共は他處(よそ)へ夜咄しを約束したが。大事なくばそれ過ぎてから行きたいものぢや。何とせうぞ。先づ行て樣體を見よ。何と云ふぞはや頼うだ人が出らるゝ。あの一人も人を連れずに行かるゝ。扨々健氣なものではあるぞ。是は無念な事ぢや。身共も此樣な時に供をして。手柄して身上の望みもあつたものに。殘多い事ぢや。最早是非に及ばぬ。皆辨慶の内にあらうずる者はよく聞け。たとひ橋迄は參らずとも。路次迄思ひ〳〵に參らうずる間。まづ物の具して。その覺悟仕り候へ。構へて其分心得候へ〳〵。ト云うて入る。

同　弦師(つるし)

シテ　弦師
アド　通行人

シテへなう悲しや〳〵。お助けやつてたもれ。ト云うて。泣き〳〵走つて出る。アドへこれは何事〳〵。シテへなう悲しや〳〵。最早助けて下され。ト云うて。舞臺の眞中にこける。アドへ身どもぢやが何事ぢや。氣をはつたりと持て。シテへこなたは是處へ何として驅付けさつしやれた。アドへ身共は用事があつて此の邊りを通つたれば。餘りそちが取り亂した體であつたに依つて驅附けたが。先づ何事ぢや。シテへそこへ誰も追うてはおぢやりませぬか。アドへいや誰も見えぬ。シテへ扨も〳〵。こはい事に遭ひまして御座る。猪熊(ゐのくま)あたりに弦が欲しいといふ人があつた程に。此の弦補に入れて持つて行(い)て。つい戻ればよかつたものを。問はず語りをして茶を飲うでゐるうちに。日がずんぶりと暮れました。五條の橋まで來れば。擬寶珠の上に。何やら白い物がちら〳〵見ゆる程に。はて氣味の惡い物があると。思ひ〳〵來れば。何やらひつかりと光ると思うたれば。なう恐ろしや。氷を突き割つた樣な太刀をするりと拔いて。ばたり〳〵と切附けた程に。最早切られたと思うて。氣も魂もあらばこそ。此處へどのや

うに來たも覺えませぬ。アドへさて／＼危ない事であつたな。扨は切られはせなんだか。シテへ切られたら知つてこそ。切られもせぬやらして痛うも御座らぬ。アドへそつとは痛いか。シテへあゝこなたは氣味の惡いことないふ人ぢや。其の樣に言はつしやれば。どうやら痺の切れた樣に。ひり／＼する樣に御座る。アドへちと見てやらうか。シテへ見て下され。アドへ臆病者ぢや。威さう。どれ／＼。やあそちはそれで能う生きて居るぞ。シテへ何としました。アドへ肩先が藥研ほど切下げてある。シテへそれは正か。アドへ眞實ぢや。シテへあいた／＼。やれ死ぬるは／＼。また右の通りこけて泣く。アドへやれ嘘ぢや。シテへ嘘なら嬉しからう。ト云うて。背中をいらうて見る。ほんに嘘であるやら血も出ませぬ。アドへさて其の切らうとした人を知つてゐるか。シテへいや誰ぢやも知りませぬ。アドへあれは源義朝の御子牛若殿。此間五條の橋へ出て。千人斬を召さるゝ。はや九百九十九人斬つて。今一人誰なりとも斬り度いと思うて居らるゝ所であつたげな。そちは危ない所へ通り合せたな。シテへさてもさ／＼。それはあぶない事で御座つたのう。アドへそちを切るけ。蛙を踏み潰すよりは心易けれども。犬を切つたも同然ぢやと思うて。助けさせられたであらう。シテへはてそれはよい事を思うてたもりましたのう。アドへさては犬になつても大事ないか。シテへ犬になつても猿になつても。死なぬが増しで御座る。アドへさて／＼そちは卑怯者ぢや。シテへ卑怯とは。アドへはて卑怯でないか。シテへおれはつひに人の振舞はぬ物を食うた事はない。アドへその事ではない。心中の事ぢや。シテへそれは知らぬ事で御座る。アドへえさてそちが乳母は息災なか。シテへまだ生きて居られます。アドへ誠にそちを可愛がられた程に。若し切られたらさぞ泣かれうぞ。シテへ何のいの。今の時は子の事さへ思はなんだ。乳母の事などけんによが御座らぬ。アドへとかく卑怯者ぢや。シテへこなたはもどかしさうに言はつしやるが。最前の樣子を見せたらば。眼玉が見えますまい。アドへまた威さうと存ずる。やい／＼何といふ。牛若殿は最前の弦師を切り損うて。無念なと云うて。爰へ打つて御座る。口傳。シテへなうそれは何を言はつしやる。アドへいや牛若殿が其の方を切り損うて。無念なと言うて。爰へ打つてわするといやい。シテへそれは誠か。アドへおんでもないこと。シテへおれは何とせうのう。アドへ身共がそれを知つたか。シテへ胴慾な。どうぞ助けて下され。アドへそちを匿まうて。身共まで切られてはならぬ。身共は歸る。シテへこれ／＼。人間一人助くるといふは慈悲にならう。こなたの所へ連れて行て。緣の下へなりとも入れて隠して下され。ト云うて取附く。アドへいかな／＼。ト云うて突倒す。無理に取附く。また突倒して思ひも寄らぬことぢや。逃げて入る。シテへ助けて下され。ト云うて。追入るなり。

芭蕉

アヒ　里人

へ斯樣に候者は唐土楚國の傍。小水と申す所に住居する者にて候。爰に貴きお僧の渡り候が。毎日毎夜有難き御經を讀誦なさるゝ。今日は未だ參らず候程に。只今參らばやと存ずる。今日は遲なはり申して候。ワキシカ／＼。へ心得申して候。扨お尋ねありたきとは。如何樣なる御事にて御座候ぞ。シカ／＼。へ是は思ひも寄らぬ事を承り候ものかな。左樣の御事な。我等如きの委しくは存ぜず候さりながら。お尋ねなさるゝを曾て存ぜぬと申すも如何に候間。大方承りたる通り。御物語申さうずる

にて候。語まうす。芭蕉と申す草は。千草萬木の中に於いて。第一例ある草にて御座あるげに候。それを如何にと申すに。昔此所にとある狩人の御座ありしが。明暮山路に分入り殺生をのみ仕るに。かの狩人ある夜の夢にいつもの如く山に入り殺生を禁む所に。何となく死したる鹿を一匹拾ひ申して候。悦びは限なく其儘とりて歸らんと存ずれども。殊の外なる大鹿にてなか〳〵一人や二人しては持ち難く思ひ。人を語らひに罷歸らんと存ずれども。若し亦その内に餘人是を見付け拾ひ申しては如何と思ひ。邊りを見れば見事なる芭蕉のありし程に。則ちこの芭蕉の葉をとり。かの鹿に打着せ隱し置きけるが。死したる鹿の一聲二聲泣くと思へば夢さめぬ。夢心にも嬉しく思ひ夜の明くるを待兼ね山に入り。若しも鹿やあると一日尋ねけれども。誠は夢なれば鹿もなく芭蕉も御座なかりしと申す。其時狩人思ふやう。われ愚痴無智にして。佛道をも求めず。佛の方便にて斯樣の夢を見ると思ひ。それより弓矢を打捨て殺生を止まり。後生一大事と心にかけ後には大智識となり申されたると承りて候。爰をもつて。蕉鹿の夢と申傳へたるげに候。又雪の中の芭蕉の僞れると申すことは。昔居の世の御時。帝芭蕉に好き給ひ。絶えず叡覽ありしかば。冬は芭蕉のなきものなれば。其頃大摩詰と申す繪師を召され。冬の芭蕉を繪に寫しあげ申せとありしかば。世になきものなれば如何とは思ひしかども。綸言なれば力及ばず。雪の中の芭蕉を在々と書付け申す。それより雪裏の芭蕉摩詰が繪。炎天の梅蕊は。簡齋が詩と申す。是によつて雪の中の芭蕉の。僞れると申傳へたるも。この謂れにて御座ありげに候。其外芭蕉は皆人御寵愛にて翫び給ふにより。いかなる詩人も是を題し給ふ。籬外消々として澗水流る。槿花半ば照して夕陽收まる。名字を題して相訪ふを知らしめんとすれば。又恐る芭蕉の秋に堪へざらん事など。斯樣にもありげに候。總じて芭蕉は。佛道にも用ゐ給ふか庭に植置かせ給ひ。其名を芭蕉和尙とつき給ひたると申し候。さんせんさんがくの大事鐘杖を振廻し。佛法を示し給へば。是によつて有情非情草木國土悉皆成佛の因緣を以て。芭蕉の精も成佛仕るべき事疑ひあるまじきと存じ候。芭蕉和尙の寂後に助かつては。斷橋の水に過ぎ。友なくては無月の村に歸るなどと。御座あるよし承り候。最前申す如く。この儀に於て悉しき事は存ぜず候へども。先づ大方承りたる通り御物語申して候が。扨お尋ねは如何樣なる御事にて候ぞ。シカ〳〵。〽是は奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに草木心なしとは申せども。時節をたがへず花咲き實のなる事。これ皆心ある故なれば。毎日の御法を有難く思ひ。芭蕉の精假に現れ出でたると存じ候間。此上はいよ〳〵有難き御經をも御讀誦あらば。芭蕉の精も必ず成佛は疑ひあるまじきかと存じ候。シカ〳〵。〽さあらばまづ罷歸り。頓て聽聞に參らうずるにて候。シカ〳〵。〽心得申して候。

鉢木

アヒ　家來

早鼓にて出る。杖をつき。〽斯樣に候者は。鎌倉殿に仕へ申す者にて候。只今罷出る事餘の儀にあらず。まづ我が君鎌倉殿と申すは。御出家あつて御修行なされ候處に。夜前この鎌倉に入らせられて候。我等如きの存じ候は。國々の古跡をも眺め。又は名所の月花をも御覽なされて。御遊山のため諸國を御めぐりなされ候樣に存じ候へば。中々さやうの事にてはなく候。

其の仔細は、まづ第一御心に殊の外御慈悲の深いから起り申す御事にて候。それが如何にと申すに、昔人間においてに、高いも低いも御座候。賤しは民百姓に至る迄も、この鎌倉に御座なされた分にては。人の善悪を。御存ぜらるゝ事が御座ないと思召され。兎角修行なされて。苦しみだりな輩も御座候はゞ、その儘つと仰せつけなさらうず。また如何やうの賤しい者なりとも、何卒奇特な志の者ならば。其の身〳〵に應じて、御褒美をもなされうずる爲に思召し立つて御修行なされ候。なんぼう有難き御事にて御座候。扨また何と思召すやら。只今の仰せ出しには。關八州の大名小名によらず。侍とあらうずる者には、馬物の具をして早々鎌倉に參れ、仰付けらるゝ事がある。その上意にて御座候。是はよい事で召すか、但し又悪い事であらうか氣遣な事ではある。兎角この善悪を知つた者が御座ない。急いで八ケ國の國分けをして。早々觸れいとの御事にて。昔々家來の者共はもはや參つたと申す。某も急いで上野下野を觸れう。扨々忙しい事ではあるぞ。皆々上意の趣たしかに承り候へ、此の度仰出さるゝ事の儀聞。此の國の大名によらず、小名によらず。馬物の具をし。早々鎌倉に參られよとの御事にて候間。如何にも油斷なく。急ぎ鎌倉へ御上り候へ。構へて其分心得候へ〳〵。

同

アヒ　家來

ワキシカ〳〵。　へ畏まつて候。この諸軍勢の中に一人連れ出さるゝは如何さま不審な事ぢや。これは甲斐の國の衆。これは駿河の國人。此方なるは上野の衆。や。これであらう、へいかに申す　二階堂の承りにて急ぎ御前に。御參りあれとの御事にて候。　ワキシカ〳〵。へいや〳〵人違ひにてはあるまじく候。御前よりの仰せには。ちぎれたる腹卷を着し、錆びたる長刀を横たへ、痩せたる馬を白身拵へ、たる武者あらうずるとの御事なり。諸軍勢の中に、是程痩せたる馬を白身拵へたるは其の方一人にて候間。急ぎ御參り候へ。

三人に勤むる方。又は二人にても。

一へ知つたか〳〵。　二人へ何事ぢや〳〵。　一へやれ〳〵精が出て早う出られた。二へ早いにも遲いにも今日は非番なれば、宿おりをせうと思うて、身拵へをして既に出る所であつたれば、部屋〳〵の鳴子を引いた程に、是はどうでも只事ではないと思うて、取るものも取り敢へず、此所へ出た事ぢや。三へ身共もその通りぢや。一へ尤もでこそあれ。さて氣遣ひな事ではないか。二へ身共は何にも知らぬが、そちは知つたか。三へ某も皆目知らぬが何事ぢや。一へなか〳〵の事を云ふ。さらば追付け語つて聞かせう。まづ、我君鎌倉殿と申すは、御出家あつて諸國を修行なされて、夜前この鎌倉へ歸らせられたが、是は知つたか。二へ扨々愚な者が、如何に知らぬと云へばとて。鎌倉殿修行なされて。此所へ歸らせられた事は知つて居る。一へさればこそ御修行なさるゝ事に、殊の外仔細があるが何事であらうと思ふぞ。二へこち衆の分別には。國々の古跡をも眺め。又名所の月花をも御覽なされて、御遊山の爲諸國を巡らせらるゝと思ふがさうではないか。三へいか樣そちが云ふ如く。御内でお慰みに事は缺かせられぬに。廻國なさるゝは。國々の名所を御覽なされて。歌を詠み詩を作らせらるゝ爲であらう。一へいや〳〵なか〳〵左樣の事ではない。忝い事ぢや。二へ忝いとはどうした事ぢや。一へ殊の外お心のお慈悲の深いから起つたことぢや。三へお慈悲の深いとは何事ぢ

やヽ一〽皆人間に於ては。高いもあり低いもあり。或は民百姓に至る迄。この鎌倉に御座なされては。人の善悪が知れぬ。兎角修行なされて。若し猥りな輩もあらば其儘乞度仰付けられうず。又いか樣の賤しい者なりとも。奇特な志のある者ならば。その身〳〵に應じて御褒美を下さりよと思召し立つて。御修行なされたと云ふが。なんぼう有難い事でないか。二〽扨も〳〵よい加減な事を云ふ。銘々が事さへ世話なし足らぬに。諸國をめぐり。彼方此方の世話が何となるものぢや。それは嘘であらう。三〽いや〳〵こち衆の賤しい心入れとは違ふ。なにが天下を知ろしめす御身と云ひ。御慈悲の深いから善惡を正さるゝ爲御修行なされたであらう。二〽お慈悲の深いお心に極つたらば有難い事ぢや。一〽それに就いて此度の仰せ出しには。關八州の大名小名によらず。侍とあらうずる者は。馬物の具をなして早々鎌倉に參れ。仰せ渡さるゝ事があるとの上意ぢや。よい事であらうか。但し惡い事であらうか。三〽定めて國々を巡らせられた時。鎌倉殿とは知らいで慮外をした者があつたれども。弱々と逃げて歸らせられて。その返しをなさるゝであらう。一〽こゝ善惡を知つた者がない。則ち八ヶ國の國分をなして早々觸れよとのお事ぢや。お觸しは何處を觸れよと思ふ。二〽とかく山川のない辛勞にない所へ行きたいが。案内を知つた程に上總の國を觸れよ。三〽身共は上野下野を觸れよ。一〽尤もぢや。斯程に申す内に時刻が移る。一大事の使ぢや。急いでゆかしませ。二〽それならば身共は早や行くぞ。三〽身共も行くぞ。一〽いそげ〳〵。二三〽心得た〳〵。(二人ただに入る。) 一〽皆々上意の趣承り候へ。此度仰せ出さるゝ事の候間。此國の大名小名によらず。馬物の具をなして。早々鎌倉に參れとの御事にて候間。如何にも油斷なく急ぎ鎌倉に御上り候へ。構へて其分心得候へ〳〵。(云うて直ぐ入る。)

初雪(はつゆき)

アヒ　老僕

〽これは出雲國大社の神主殿の御内に仕へ申す。楊柳と申す老の者にて候。さても神主殿。御息女一人御持ちなされ候が。彼の息女みめ貌人に勝れ。優にやさしき御方にて候。物好き時鷄の子を一つ參らせて候。これは白き鷄の子にて御座候により。初雪と名をお附けなされ。朝夕御寵愛なされ候。今日は見え申さぬ程に。戸を開けて見ばやと存ずる。いや。此の鷄は命なくなりて候。あら不憫や。申したらば。よいとは仰せられまいさりながら。申し上げずにも居られまい。急ぎ申し上げう。シカ〳〵。〽やれ〳〵。目出度い御祈禱かあるものぢや。

斑女(はんによ)

アヒ　野上の宿の長

口明〽是は。美濃の國野上の宿の長にて候。われ數多上﨟を持ちて候が。中にも花子と申す人は。稚き時より扇に好き朝夕手慣れ申さるゝ。仔細あつてこの花子を斑女と皆々御申し候。又この春都より。吉田の少將殿と申す人。東へ御下り候が。これに御泊りあつて。かの斑女にお酌をとらさせられ。少將殿の扇をば花子の扇と取替へさせ給ひて御下り候ひしが。それよりして花子。この扇にのみ眺め入りて。今は人の御酌とては召しにも參らず候。この事長が仕業と御申しあつて皆々より御叱り

候程に。かの花子を呼出し追出さばやと存ずる。（樂屋向いて。）へいかに花子の御入り候か。（太夫出る。）へ此の程再々申せども。長が申す事をばお聞き候はぬ程に。今日よりしては此の家の内には叶ひ候まじ。急いでいづ方へも御出で候へ。長は仲たがひにて候ぞ。へエヽ腹立ちや／＼。まだ其の扇を放さぬか。なう腹立ちや／＼。（と云うて樂屋へ入る。）

【ひ】

飛雲（ひうん）

アヒ　末社

へ斯様に候者は。忝くも熊野の權現に仕へ申す末社にて候。唯今罷出ること餘の儀にあらず。本山三熊野の山伏たち。出羽の國羽黒に初めて參籠すると思ひ立ち。信濃の國木曾路を通り給ふ。此の木曾山と申すは。人倫稀にして山深きこと。いづくないづくと果もなく。諸木茂りて日月の光も影さだかならず。然れば彼の山に幾歳住むで飛雲といへる鬼あり。此の鬼神と申すは。或る時は大石岩頭に。其の身を見する事もあり。まして人間に化生して來り。色々様々に其の身を變化して。人を取ること其の數を知らず。神變奇特なる鬼神にて。往來の惱みこれに過ぎたることなし。さる程に。此の鬼神を飛雲と名づくること。譬へば黒雲に乘じて。虚空を走ること。飛鳥も及ばず。なか／＼射る矢も欺く程の早き鬼なれば。其の名を飛雲と申す。然るに彼の飛雲。このたび羽黒山に罷り參らる客僧たちの。命を取らんと謀を廻らし。俄に日を暮らし。其の身はただ老いたる山賤の體にもてなし。紅葉の木蔭に立ち寄り。負ひたる薪を下ろし。何となく休らう氣色にて。山伏たちに近づき申すを。客僧たち鬼神とは夢にも知らず。誠の山人と思ひ。打ち解け色々物語りありければ。はや夜も更け方になり申す程に。彼の鬼神申すやう。今夜は此の梢の木蔭にて。夜を明し給へ。先づ我等も罷歸り。夜遊の御慰みに參らうずるとて。罷歸りて候。されば彼の鬼神。とかくは今夜の内に。客僧の命を取らんと悦びの色をなし。其の時刻を窺ひ待ちけるを。熊野權現は神通方便を以て。此の事よく知ろし召され。客僧たちをいたはり給ひ。急ぎ某に參り。夢の告に知らせ申せとの御事により。これまで罷出でて候。誠に。申すも愚かなる御事なれども。日本は神國にて。大小の神祇普しとは申せども。別して熊野の權現と申し奉るは。天竺にては國の主と生れさせ給ひ。日本にては本朝開闢伊弉諾尊と現じ。天照大神の御親にてましませば。慈悲の心を先として。國土を守護し。萬民を惠み給ふ故に。紀州牟婁の郡。音無しといふ所に跡を垂れ。本宮證誠殿。飛鳥に新宮。那智の飛龍大薩埵。三つのお山と現れ。和光の御結縁淺からざる御事にて候。殊に證誠殿と申すは。阿彌陀如來の化身にてましますにより。十方世界無緣の衆生を導き給ひ。靈驗無雙の神明と現れ給ふ。此の思ひをなし。親しく歩みを運び渴仰ある輩は。諸願必ず成就して。無量の功德を受くる事は。疑もなき御事にて候。やゝこれは三つのお山威光めでたき仔細。はや時刻も移り候間。急ぎ客僧たちに此の事を知らせ申さばやと存ずる。シカ／＼。へさればこそこれに候。さても／＼。正體もなくまどろみ申さるゝものかな。はや彼の飛雲に領せられ。行法も盡きたると存じ候。へいかに客僧たち。慥に聞き給へ。これは熊野の權現に仕へ申す末社にて候。忝くも御使にて候。昨日暮ほどに參り逢ひたる老人は。山人にてはなく。

飛雲と云へる鬼神なるが。今夜の内に面々の命を取らんと謀をなし。人間とは化して現れたり。三所權現は此の事を不憫に思召され。力を添へ給はうずる間。急ぎ此の旨知らせ申せとの御事により。これまで參りて候ぞ。いかにも有難く存じ。信心堅固に奇異の思ひをなし。急ぎ夢を覺され候へ。その分心得候へ〳〵。

檜垣(ひがき)

アヒ　里人

〽是は。肥後の國岩戸の山下に住居する者にて候。爰に貴きお僧の御座候が。是は何處(いづく)ともなく御出でなされ。岩戸に上り給ひ早や三ヶ年に罷成り申し候。此間は御見舞申さず候間。今日は御見舞申さばやと存ずる。〽此間は川の仔細御座候て。御見舞も申上げず迷惑仕りて候。ワキシカ〳〵。〽畏まつて候。扨お尋ねなされたきとは如何やうなる御事にて候ぞ。シカ〳〵。〽是は存じも寄らぬ事を御不審なされ候ものかな。我等も檜垣の女の事。委しくは存じも致さず候さりながら。何卒思召し合はさるゝ事の御座候て。お尋ねと存じ候間。皆人の申傳へたる通り。大方御物語申さうずるにて候。シカ〳〵。〽まづ。檜垣の女の仔細と申すは。生國は筑前の國の者にて御座ありたるげに候。則ち宰府の傍において。庭に檜垣をしつらひ流を立てゝ住みけるが。この女は容顏人に勝れ。好色を事とし。月にも花にも譬へがたく。さながら美しうて。殊には和歌の道にも携はり。舞女擧世に名高き遊女にて御座候程に。皆人の心を移しもてあそび給ふ事。誰ならびなき白拍子にて御座ありたると承及びて候。かゝる優しき遊女なれども。浮世のならひ光陰時移り。きのふ見し花も今日(けふ)は移ろふが如く。秋の紅葉の夕も朝(あした)を待たぬならひ。次第に衰へ緑の髮には霜雪を頂き。柔和の姿形も昔を失ひぬれば。まして古へを問ふ人も御座なく候處に。如何なる縁によりてか。其の後は此の國に下り。あの白川の邊に柴の庵を結び。後世菩提の事をのみ思ひ明し暮し候が。又その折柄にてもや御座候ひけん。藤原の興範(おきのり)とやらん申す人。水無月半に白川の邊りを通り給ひ。誰住むとも知ろしめされず。かの老女の住みける庵に立寄り水をたべと御所望ありければ。檜垣の女は易き御事にて御座候とて。頓て水を掬びあげて參らせける。其の時老女の歌に。年經れば。わが黑髮も白川の。みづはくむ迄老いにけるかなと。此の歌を詠みて興範に奉りたると承りて候。我等如きの存ずるは。みづはくむ迄と詠みたる歌の心は。興範に參らせたる。水の事にて御座あらうずるかと存じ候へば。中々さやうにては御座なく候。わが年のふり積り。老いかゞまりて淺ましげなる。其の姿を詠みたる歌にて御座あるなどゝ承りて候。誠や皆人の申すは。此の歌は勝れて名歌なるにより。後撰集とやらんに入りたるなどゝは申せども。憖かなる御事は存じも致さず候。最前申す如く。檜垣の女の仔細。委しくは存ぜず候へども。まづ我等の承及びたる通り。大方御物語申して候が。扨お尋ねは如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。〽是は奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに。かの檜垣の女の跡を誰(たれ)弔ふ者も御座なきにより。此度水をも捧げ申し。御弔ひをうけ五障の罪をも遁れ。佛果に至らんと思ひ。これ迄幽靈現れたるは。疑ひもなき御事にて御座候間。憚り多き申し事にては御座候へども。是より白川へ御出でなされ。かの老女の跡を御弔ひなさるゝならば。別して有難き御事にて。御座あらうずる

かゝ存じ候。シカ〳〵。へさあらば我等も御跡より自身へ参らうずるにて候。シカ〳〵。へ畏まつて候。

雲雀山（ひばりやま）

シテ　鷹匠
アド　大名
立衆　勢子三人
犬
鷹（作物）

シテへさあ〳〵、何れも出さしませ。アドへ心得てなりやる。シテへ頼うだお方は御狩がお好きで。此のやうにお出でなさるゝ時は。殊の外御機嫌がよい。天晴れ今日は仕合せをして。御機嫌のよい様に願ふ事ぢや。アドへ誠にそなたの云ふ通り。今日は何でも仕合はせを致いて。お悦びなさるゝやうに致さう。シテへ何も云ふまではない。随分精を入れさしませ。立頭へ心得た。シテへはお愛元にいかうはみがある。何れも油斷せまいぞ。立衆へ愛には殊の外はみがある。シテへそれならば先づ勢子を立たさしませ。アドへ心得た。シテへさあ〳〵。犬を入れさしませ。アドへ心得た。シテへそれ〳〵。ほう鳥〳〵。と云うて。一遍まはる。其の内[illegible]へそれ〳〵。ほう鳥〳〵。そりや當つたは。シテへさあ當つた。舞臺の最中にて各一所よし。立衆中へさて〳〵逸物ぢや。ト云うて鷹を褒める。シテ鷹を据ゑ上げて。シテへ何と能う捕つたではないか。ぶちを梳き。羽居などを撫でる。立衆へさても〳〵。鳥を掛けた體。氣散じなことぢや。立衆三へ犬も御[illegible]にはどあつて。逸物ぢや。シテへいまの一所（ひとところ）得られたは何處ぢや。立衆へあれに見えた芝ぢや。シテへそれならば。何れも急がしませ。立衆へ心得た。シテへ随分精を出さしませ。物數を致せば褒美があるぞや。立頭へその段は何れもぬかる事ではない。シテへ大方これではないか。立衆へこれぢや。シテへさらば犬を入れさしませ。アドへ心得た。ほう鳥〳〵。は。別れぢや。シテへこれはいかなこと。立別れぢや。立頭へまたつかれぢや。立衆二へあれ〳〵つかればしりでないか。シテへまことに。今少し油斷であつた。立衆へ犬に餌が過ぎたに依つてぢや。アドへ犬に何處に餌が過ぎたぞ。勢子衆が悪さに當らなんだ。シテへいや〳〵。論は無用ぢや。斯様に立て合つて鷹狩をするからは。物數あはせいでは無念な事ぢや。アドへうぬしが云ふ通りぢや。何としたものであらうぞ。シテへ此のやうに當らぬ事を。頼うだ人に聞かせては。さぞ御機嫌が悪からう。さうあればこち衆が迷惑する。必ず〳〵今の事を沙汰召さるな。立衆へ心得た。シテへさてもはお愛元で合はせては叶はぬ。あの東の山おしを狩るまいか。アドへあそこは鳥の多い處ぢや。一段とよからう。シテへさらばそれへ行かう。何れもおぢやれ。立衆へ心得た。シテへさて〳〵。今のは云うて[illegible]餘り多い事をした。立衆三へ東の山おしへ参つたらば。また仕合はせのよい事もあらう。餘り其の様に云はしますな。シテへまた鳥の當つた後へ行ては無念な。何れも急がしませ。立衆へ心得た〳〵。

同　寶生流

ワキシカ〳〵。へ御前に候。シカ〳〵。へ畏まつて候。是は横佩の右大臣豊成の御内に仕へ申す。鷹匠にて候。今日は鷹狩の御沙汰なされ候間。我等も罷出て候。皆々居さしますか。へいかにも是に居ます。へ今日は御鷹狩の御沙汰なされ候。物數を仕れとの御事にて候。皆々精を出し候へ。へ心得申して候。ほう鳥

〳〵〳〵。

同　一人間

（狂言ワキ供して出る。太刀持つて目附に居などワキ次第道行すむと座につく一の松に立つて）〽皆々承り候へ。今日頼うだお方是へ御狩に御出でなされ候間。鳥のおり當りな物騒がしく仕るなと仰出だされ候。構へて其の分心得候へ〳〵。（橋懸り向いて。）〽やあ〳〵。そこもとがとゞめくに何ぢや。なに花が来ると申す。其の由申上げう。（ワキツレに云ふ。）〽いかに申上候。花が来る由申候。（ワキツレシカ〳〵。）〽畏まつて候。やい〳〵。其由申してあれば。花とは何の事ぢやと仰せらるゝ。何と云ふぞ。女物狂が花を折りて来ると云ふか。〽其の由申上げう。（下に居て。）〽花とは何事ぢやと尋ねて候へば。女が花を折りて参る由を申し候。（ワキツレシカ〳〵。）〽畏まつて候。（立つて橋懸へ行きて）〽やい〳〵。道を廣々と明けて置いて。其の女を此方へ通し候へ〳〵。（ト云うて座に居る。シテ出て。切戸より入る。）

かくの如く。一人にてもする事。又[illegible]にてもする。ワキシカ〳〵問合はせすべし。觀世流には問なし。

氷室（ひむろ）

アヒ　末社

〽斯様に候者は。丹波國氷室の明神に仕へ申す末社にて候。唯今罷り出る事餘の儀にあらず。龜山の院に仕へ御申しなさるゝ臣下殿。此の所へ初めて御參詣なされ。氷室の構をも御覽あり度く思召さるゝな。明神は能く御存じあつて。誰やの者か罷出て。氷室の在所をも教へ申し。または目出度き謂れを御物語り申すべき者も御座なきと思召し。かりに賤しき老人の姿に御身を現じ。彼の稀人に御對面なさるゝ。案の如く。氷室の構を御尋ねありしを。懇ろに教へ給ひ。または氷の物の目出度き謂れをも。委しく御物語なされて候。さる程に。珍しからざる申し事にては候へども。氷の物の供御と申すは。別して目出度き仔細ある御事にて御座候。それを如何にと申すに。昔大和の國に於て。額田の王子闘鶏といふ所に御狩に御出であり。何となく山より野中を御覽ずれば。一つの庵あり。不審に思召し。人を遣し見せしめ給ふに。室にて御座ある由を申し上ぐる。室と申すをなほも不審に思召され。其の時闘鶏の大山主を召出だされ。あの野中にある室は如何なるものぞ。何のためぞと御尋ねありければ。あれは氷室にて御座あると申上ぐる。さて其の氷室といふは如何やうなる事ぞと。重ねて仰せられければ。大山主答へて曰く。其の事にて候。氷室と申すは。一丈餘り土を掘りて。上をば草にて葺き。下は茅がや小篠などを集め。如何にも厚く敷いて。其の上に氷を置きければ。夏も溶けず。暑き日酒を冷して飲む。まして氷を用ひぬれば。不老不死の藥となり。目出度き物なりと申し上ぐる。王子これを聞し召され。かゝる奇特の不死の藥。急ぎ我が君に獻げ給はんとて。人皇十七代。仁徳天皇。六十二年甲戌に。初めて彼の氷室を供御に供へ給ひしかば。叡感甚しく。それより此の方。氷の物の供御といふこと始まれり。壽命長久の御藥となること疑ひなし。それより以後。山城の國北山陰。松ヶ崎といふ所に。彼の氷室を構へ。供御に供へ給ひしかども。また其の後は丹波の國。桑田郡この所に氷室を移し。今に至つて毎年水無月一日に。氷の物の御調を我が君に獻げ奉り。千秋萬歳をたもち給ふも。此の謂れにて御座ありげに候。やゝ。これは氷室の目出度き

ば、此の所には休らうて御座候ぞ。シカ〳〵。へ心得申して候。さてお尋ねありたきとは、いか樣なる御事にて候ぞ。シカ〳〵。へこれは思ひも寄らぬ事をお尋ね候ものかな。所には住み候へども、委しくは存ぜず候さりながら、初めて御目にかゝり、お尋ね候事を何とて存ぜぬと申すもいかゞなれば、古き人の申傳へたる通り、御物語申さうずるにて候。シカ〳〵。へ語さる程に。此の湖をふせの海と申し候て多枯の浦と申す仔細は。これなる松にかゝりたる藤を、多枯の浦藤と申す名花にて候。昔奈良の帝の御時。大伴の家持卿。越中守にて御座ありし時。此の處へ御出であり、樣々御遊覽の折ふし、此の藤今を盛りと咲き亂れ候を御覽あり、春の名殘をいとゞ思はせ給ひ、御寵愛なされ、御酒宴ありたると承りて候。さる程に、此の藤の花。これなる汀に影映り、水底清く見え申して候程に、一首の御詠歌に、藤浪の。影なる海の底清み。雫石をも玉とぞ我れ見る。と遊ばされければ。其の時御供に候ひしは丸と申す御方の取敢へず、多枯の浦、底さへ匂ふ藤浪を。かざしてゆかん見ぬ人の爲と。詠ませ給ひしより。此の處を多枯の浦と申し、これよりこれなる藤を。多枯の浦藤と申しならはし候。しかのみならず。家持の卿は。萬葉集の作者と聞こゆる歌人にておはします故、其の後代々の集にも、多枯の浦藤と詠みたる歌は、數多ある由聞及びて候。誠に此の藤は、しなひ長く色深う御座候昔こそ、御賞翫も候へ、唯今に遠國の事なれば誰れ見る人もなく候。か樣の物語も古き人の申傳へたるばかりにて候。最前申す如く、委しき事は存ぜず候へども、先づ我等の承及びたる通り御物語申して候が。さてお尋ねはいか樣なる御事にて候ぞ。シカ〳〵。へこれは奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに。お僧の御心中貴うましますにより、御法を受け佛果を得んと思ひ、此の花の精女と現れ。藤言葉を交したると存じ候間。今宵は此の處に御逗留あり。有難き御法をも御讀誦なされ、重ねて奇特を御覽あれかしと存じ候。シカ〳〵。へそれは近頃にて候。御逗留候はゞ、我等お宿をまゐらせ候べし。シカ〳〵。へ心得申して候。

藤戸（ふぢと）

アヒ　從者

ワキ呼出すセリフ大槪にある如く。

へ扨も〳〵憐れなる事を見申して候。只今の老女は如何やうなる者ぞと存じて御座れば、今度佐々木の三郎手にかけ害せられたる男（をとこ）の母にて候が、恨の上の歎きなれば、親の身にては道理至極仕りたる事と存じ、我等の如きの者迄も、覺えず落淚仕り候。さりながら昔人の申すに、弓取の習ひは、斯樣にこそ御座あるべきものなれ、それを如何にと申すに。大海の中にても奇特なる淺み（うみ）を敎へ申す程に、賴うだ人の御悦は限り御座なけれども、若しまた他言致せば、その甲斐なき事と存ぜられ、不憫なる事とは思はれけれども、手にかけ害し申されて候。さる程に此度藤戸の先陣は、天下の聞えては家の覺え是に過ぎたる事は御座なく候。さりあれへ參り老母を私宅へ歸したる通り申上げうと存ずる。如何に申上げ候。老母を私宅へ歸し申して候。シカ〳〵。へ申々、歸し申して候。誠に斯樣の憐れなる事は御座あるまじい。さりとては御前（おまへ）へ申上ぐる母の恨み歎きの色、何れも見申し落淚仕りて候。シカ〳〵。へ御意尤もに、候。只今老母の歸るさに、某の申し聞かするは。かの者の跡をば懇に御弔ひなされうず、其上妻子をも召出されうずると申して御座れ

げ、殊に外参たつて。頭役て涙を流いて罷歸つて御座る。シカ〳〵。〽中々の事。此所にも管絃の役者は數多御座る由申し候。爰に一つ業の望が御座るが。何と御座あらうずるぞ。シカ〳〵。〽やれ〳〵左樣に思召せば。餘り以て忝い事で御座る。それならば何がな御座らうぞ。迚ものお事に其の中で。鳴りよきやうな物を。お指圖あつて仰付けられば。いよ〳〵忝う御座る。ワキシカ〳〵。〽さらば何がよう御座らうぞ。笛。鼓。笙。篳。太鼓。以上は後あり。ワキとせりふ。ワキシカ〳〵。〽仰せらるゝも尤もで御座るが。此度一役致さぬも無念なり。又致す事もならず。かゝる憚り多い事は御座らぬ。何と致いてよう御座らうぞ。やゝ。唯今なる事を思出いて御座る。ワキシカ〳〵。〽別なる事では御座らぬ。芽出度う管絃過ぎて御座らば。定めて何れも管絃の役者を召出されて。大酒を下されうず。其時某も罷出て。あそこの座爰の座敷をと申して。七八盃十盃もたべてさて片隅に寄つて。高枕で鼾の役なと。何と御座あらうずるぞ。ワキシカ〳〵。〽畏まつて候。皆々承り候へ。今度頼うだる人の手にかゝり。空しくなりたる者を不憫に思はれ。追善のため管絃講を以て。弔ひ申され候間。管絃の役者は一人も殘らず參られ候へ。また一七日の間は。浦々の殺生をもとゞめ申せとの御事にて候間。構へて其分心得候へ〳〵。

同（大根語）

アヒ　從者

ワキ呼出す。〽御前に候。シカ〳〵。〽畏まつて候。いかに面々慥に承り候へ。今日この島の主佐々木の三郎殿御入部にて候間。何事に寄らず。訴訟の事あらば罷出でよとの御事にて候。其分心得候へ〳〵。中入前ワキ呼出す。〽御前に候。シカ〳〵。〽畏まつて候。さあ〳〵お立ちやれ。まづお立ちやれ。さあお立ちやれ。誠にわごりよの嘆きは尤もなれどもさりながら。何事も前生の事ぢやと思うたがよい。頼うだお方にも殊の外不憫に思召され。かの者の跡を懇ろに御弔ひなされうず。其上妻子をも召出され御扶持を下されうずるとのお事ぢや程に。忝い事ぢやと思ひ嘆きを止め。急ぎ私宅へお歸りやれや。中入過ぎて。〽扨も〳〵哀れなる事を見申して候。何れ老女の嘆きは尤もなる事と存じ我等も落涙仕りて候。又この度頼うだ者に此島を下されたるは。藤戸の先陣を致されたる御褒美と承りて候。其の仔細と申すにさる三月十八日の頃。平家讃岐の國にありながら山陽道を打靡け。左馬頭行盛を大將として。其の勢都合五千餘騎にて。此所に陣を取り給ふ。源氏の方にも三河守範頼は。室の泊りにおはせしが集まりたり。この國西川尻藤戸の渡りに陣を取り給ふ。海上四五町には過ぎざりけり。同じき廿五日平家は海を隔てゝ源氏を招き爰を渡せことあざむきける。舟なくして渡すべき樣もなく徒らに其の日も暮れけるが。盛綱思はれける樣は。斯かる所を渡してこそ人に越えたる高名なるべしと。きつと思案をめぐらし浦人を語らひ。白鞘巻をとらせて仰せられける樣は。向ひの島へ馬にて渡すべき瀬はなきかと尋ね給ふ。其の者承りなか〳〵。瀬は二つ御座候。月頭には東が瀬になり申す。則ち是を大根の渡りと申し候。又月尻には西が瀬になり申す。是を藤戸の渡りと名付け候。東西の瀬の間およそ二町ばかりにて其の廣さ二段ばかりも御座候はん。徒歩にて渡し候はゞ膝に立つ所もあり。腰に立つ所もあり。深き所二段ばかりは鞍鬘を濡らす程にて。それより向ひは遠淺候と懇ろに申しける。其時かの者案内にて馬に打乘り。夜に紛

れ。水筋を委しく御覽じつゝ申されけるは。夜の事にて覺えもなく候間。人知らぬ樣に澪注を立て置き候へとあつて。小竹を數多切り。所々に澪注を立置きける。盛綱大きに悦び給ひ又直垂を一具下されける。頼うだ者思はれけるは。もし又この事外へ洩れなば無念なる事と存ぜられ。不憫ながら彼の者を打つて海へ投込み歸られ候。翌二十六日辰の刻其身は黄生絹の直垂に。緋縅の大鎧白星の甲を着。連錢蘆毛の馬に。金覆輪の鞍置いてぞ召されける。家の子は和比の八郎小林の三郎。郎黨に黒田の源太を始め。一騎當千の兵ただすぐつて十六騎。轡をならべて濤へざつと打入つて渡し給ふ。範頼御覽じ馬にて海を渡す事のあやふさよ。佐々木打たすなあれ制せよと宣へば。土肥梶原千葉畠山承り。あやまちし給ふな。盛綱返せ／＼と制しけれども。くだんの澪注を立てたれば。耳にも聞入れず渡し給ふが。馬の草脇胸懸に立つ所もあり。深き所は手綱をくれて泳がせ。淺くなれば物の具の水はしらかし。弓取直し向ひの岸にざつと上り大音聲。宇多の天皇一品式部卿敦實親王より九代の孫。近江の國の住人佐々木源三秀義が三男。佐々木の三郎盛綱。藤戸の先陣とよばはつて眞一文字切つてかゝる。殘る源氏の兵是を見て。すは海は淺かりつるぞと。我も／＼と乘込み／＼打渡し一度にざつと上る。平家の方には思ひも寄らぬ事なれば。いかゞして渡しけると呆れたる所を。只一揉みに追落し。我も／＼と分捕り高名さま／＼にて。やす／＼と勝利を得給ふ。されば頼うだお方この先陣の手柄により。此の島は申すに及ばず。伊豫讃岐。兩國を下され。末代迄家の覺え是に過ぎたる事はあるまじいと存ずる。則ち只今の老女は。かの淺瀬を敎へて害せられたる者の母なる由申し候。誠に哀れ至極我等も落涙仕り候。やゝまづあれへ參り。老女を私宅へ返したる由申上げうと存ずる。シカ／＼。へなか／＼罷歸り申して候。誠に彼の者の嘆きの程もつともの哀れなる事と存じ。我等如きも落涙仕りて候。シカ／＼。へ畏まつて候。皆々承り候へ。佐々木殿手に掛け害し申されたる者を不憫に思召され。管絃講を以て御弔ひなされうずるとの御事にて候間。管絃の役者は一人も殘らず。集め候へとの御事。又一七日の間は。浦々の殺生をも堅く留めよとの御事にて候間。構へて其の分。心得候へ／＼。觸れ申して候。

二人靜（ふたりしづか）

アヒ　家來

シカ／＼。へ御前に候。シカ／＼。へ畏まつて候。へいかに菜摘の女。何とて今日は遲なはり候ぞ。とう／＼歸り候へ。其の分心得候へ。

船橋（ふなはし）

アヒ　里人

へ是は。この佐野の里に住居する者にて候。某今日は所用の仔細の候間。急ぎ參らばやと存ずる。やゝ。是なる旅人達は。この邊りにては見馴れ申さぬが。何方よりの御出でにて候ぞ。ワキシカ／＼。へ中々この邊りの者にて候。シカ／＼。へ心得申して候。扨お尋ねありたさとは。如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ／＼。へ我等も此所には住居申せども。左樣の御事委しくは存じも致されさり乍ら。名所に住みながら。何なりとも存ぜぬと申すも如何に候間。古き者の申傳へたる通り。大方御物語申さうずるにて候。語まづ。昔へこの佐野の里において。忍び妻に焦れし者。所

は川を隔てゝ住みけるに。この橋より東に。朝日の長者と申す者御座ありしが。十になる男子を一人持つ。又橋より西に夕日の長者と申す者。是は九つになる女子を一人持たるゝ。誠に幼き時よりも。毎日作ひけるに。いつともなく互ひに戀慕の思ひとなり。ある時十になる男。小夜更けて。夕日の長者の許へ行き。忍びやかに門を敲かれけるに。人皆臥したりければ。さながら答ふる者もなく。只一人すご／＼と門に佇み。餘りの思ひに涙の下るより。一首の歌に。九つより十が來るに此處あけよ。帷子雪の袖にたまればと。斯樣に口ずさみけるを。かの九つになる女子内より是を聞き。起き出でゝ其儘返歌に。明けたくば。十に九つ思へども。乳房の母の傍にねどければと。斯樣に云ひ返して後。深き契となり。更けゆく鐘をたよりに此の橋の邊りにて出合ひ申す。二親聞いて是を深く厭ひ。如何あるべきぞと色々談合しけるに。此の橋のあればこそ出合ひ申せ。兎角に此の橋の板を引放せとて。それより頓て橋の板を取放つ。かの二人の者共是をば夢にも知らずして。又いつもの如く。夫婦共川の邊りに來り。互ひに見付け從ひ。まづ夫の方より渡る程に。離つの中間を踏み外し。敢なくも落ちて空しくなる。又一人の者も只今迄は人陸のいりつる樣に見えけるが。誠に見えぬ事の不思議さよ。急ぎ行逢はんと思ひ。あわてゝ渡る程に。件の如く是も落ちて空しくなり申して候。二人の父母是を聞き。この川の邊りに來り嘆き悲しむとは申せども。その甲斐なし。せめて死骸をなりとも今一度見申さんと。水入をたのみ網をおろし。色々尋ね申せども。不思議なる事にて御座候ひけるぞ。かの者の死骸二人共に終にとり申さず候。又ある人の申すは。雞を船に乗せ。川の面を彼方此方仕れば。必ず死骸の上にて。雞の時を作るものなる由申す程に。さらにとありて。いろ／＼樣々尋ね申せども。昔よりこの佐野の庄三十餘郷の内は。雞のなき所にて候程に。受をもつて古人の歌にも。東路の。佐野の舟橋雞はなしと。斯樣に詠み置かれたるげに候。是は名歌なればとて。萬葉集にも入りたる樣に承及びて候。又一說には。橋の板を取離したる所を以て。佐野の船橋取離しとも。又雞はなしとも。二說に是ありと申せども。何れが本說にて御座候ぞ。樣なる儀は存ぜず候。最前申す如く。委しき仔細は存ぜず候。まづ大方承りたる通り。御物語申して候が。扨お尋ねは如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ／＼。〽是は奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに。諸僧達の御心中貴く。ましますにより。かの二人の者妄執深く、[illegible]にも此度有難き法味を受け成佛せんと[illegible]の者の幽靈顯れたると推量仕り候間。末は[illegible]御事なれども。暫く御逗留なされ。彼方を以て弔ひなさるゝならば。かの者成佛疑ひあるまじくと存じ候。シカ／＼。〽御逗留の間は何時なりとも承り候べし。シカ／＼〽心得申して候

舟辨慶（ふなべんけい）

アヒ　船頭

（ワキ呼出し）〽案内とは誰にてわたり候ぞ。や。武藏殿の御出でにて候よ。シカ／＼。〽畏まつて候。シカ／＼。〽左樣に候はゞ奥の間へ御通しあらうずるにて候。シカ／＼。〽心得申して候。（中入過ぎて。）〽扨も／＼哀れなる事を見申して候ぞ。唯今靜御前の。我が君に名殘を惜しみ給ふ氣色。我等もよそながら見參らせ。思ひ寄らず落涙仕りて候。又この度我が君の御下向を如何なる事ぞと存じ候へば。よしなき者の

にて候。今日は忌す日にて候間。草堂へ參り。花水を手向け申さばやと存ずる。や。（嵯峨ノセリフ ワキに同じ。）〽只今申す如く。此邊りには住居申せども。はるか昔の御事なれば。（嵯峨ヨリ ワキ前に）同じ。〽まづ。この草堂は。いにしへ佛御前の御建立の寺にて御座候。昔平相國の御時。祇王祇女とじと申して。三人の白拍子の御座ありしが。中にも祇王と申すは。容顏人にすぐれ。優にやさしく御座候程に。殿中を立去らず。遊舞の御寵愛ならびなかりし所に。又その折柄この國より佛御前と申す白拍子。年十六歳にして都に上り。美女のほまれ世上に其の隱れ御座なかりしと申す。然れども未だ入道清盛へ召出されず候程に。これのみ無念に思ひ。たとひ召されずとも望みて參り。見(げん)參(さん)にいらんと佛御前は車に打乘り西八條殿へ參り。この由斯くと申上げられければ。清盛聞召され。如何に遊びなき遊女なればとて。召さゞりし所へ。推して參る事斯かる推參は世に稀なり。たとひ神にてもあれ佛にてもあれ。祇王があらん限りは。御對面叶ふまじきと仰出さるゝに。其時祇王御前御前(おまへ)におりて申上げられけるは。仰せはさる事にて御座候へども。推參は遊女の習ひ。其の上年も稚(をさな)ければ。よし舞は御覽なられずとも。一度の御對面は如何(いかが)あるべきぞと申上げらるゝ。清盛是はげにもと思召され。頓て召出され御對面ありたると申す。誠に。移れば變る世の習ひ。佛御前を一目御覽じてより御心移り。其儘召置かれ御寵愛はなはだしく。あまつさへ祇王御前を追出されんとありし程に。佛御前申上げらるゝは。祇王を出され候はゞ我も御前にあるまじきと申されけれども。兎角御承引もなく。祇王御前に急ぎ殿中を御出であれと。荐りの御使三度迄たつて。終に殿中を追出させ給ひたると承りて候。其時祇王の歌に。萌え出るも　枯るゝも同じ野邊の草。いづれか秋にあはで果つべきと。局の障子とかやに書付け出でさせ給ひたると申す。斯かる不思議の思ひに。これ皆佛の教へなりと心を悟り。西山指して御出でありしが。俄に村雨降り來り候程に又一首の歌に。村雨の。降るもいとはじいつとても。濡れてゆくべきわが袂かはと。斯樣に云捨て嵯峨野の奧なる。山里にて髮をおろし。草の庵を結び。念佛申し籠居し給ひたると承りて候。また其後佛御前は。かの障子に書置(かきおき)かれたる祇王の歌を御覽じて。元より夢幻(ゆめまぼろし)の世の習ひ。人の身の上にあらずわが身の上なり。御心の變らぬ先に。急ぎ祇王と同じ道に入らんと夜にまぎれ殿中を忍び出で。樣をかへ祇王の庵室に尋ねゆき。會ひ給ひて。互ひの御涙塞きあへず。正身の佛にてましますとあつて。祇王は佛御前を禮し給ひたると承りて候。過ぎにし事など聊かも語り給はず。後世の事のみ御物語あり。諸共に念佛申し開し暮させ給ひて候が。無常の習ひとて。祇王はつひに嵯峨野の露と消えさせ給ひたると申し候。又佛御前は故鄕なつかしく思ひ。後に此の國に下りこの草堂を結び。念佛三昧にして。此庭にてたゞ往生を遂げさせ給ひて候。世に名高き人の跡なるによつて。此處を佛の原と申すも。この謂れにて御座候。最前申す如く。委しき事は存ぜず候へども。まづ我等承りたる通り。御物語申して候が。扨お尋ねは如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。〽是は奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに。お僧御心中貴くましまし。殊にこの草堂に御泊りなさ。佛御前は不思議の緣と思ひ。御弔ひに預からんため。幽靈顯れ給ひたると存じ候間。お僧も左樣に思召さば。今夜はこの草堂にて。有難き御經をも御讀誦あり。かの御跡を御弔ひあれかしと存じ候。シカ〳〵。〽重ね

て御用を承り候べし。シカ〳〵。〽心得申して候。

【ま】

巻絹

アヒ　家來

ワキシカ〳〵。〽御前に候。シカ〳〵。〽畏まつて候。ツレシカ〳〵。〽案内とは誰にて渡り候ぞ。シカ〳〵。〽其の由申さうずるにて候間。暫くそれに御待ち候へ。〽いかに申上候。巻絹を持ちて参りたる由申し候。シカ〳〵。〽心得申して候。〽此方へ御通りあれとの御事にて候。ワキシカ〳〵。〽畏まつて候。

枕士童

アヒ　官人

〽か様に候者は。周の穆王に仕へ候す官人にて候。此の君賢王にてましますにより。吹く風枝を鳴らさず民戸ざしをさゝず。降る雨土塊を破らぬ目出度き御代なれば。何事も思召す儘に御座候。去る程に。唯今罷り出る事餘の義にあらず。爰に士童と申す童の御座候が。帝御寵愛の餘り。枕を越えし科により。此度鐵鋼山と申す深山へ流され候。然るに此の穆王と申すは。八疋の駒に召され。天竺靈鷲山に至り給ふ。其の時釋尊は法華を説き給ひしかば。其の會座に詣で給ふ。釋尊は穆王に向ひ。いかなる人ぞと御尋ねありければ。我は震旦の主なり。大聖世尊は三世の覺母たり。願はくば我が國の御法を授け給へと。冠下げて宣へば。いで汝に法味を授けんとて。普門品の二句の偈を授け給ふ。此の文と云つぱ。慈眼視衆生福壽海無量。是故應頂禮と云ふ文を授け給ひしかば。穆王有難く思召し歸國なされ候てより。信心深く此の文を唱へ給ふ。さる有難き御事にて御座候ひけるが。この度士童流されしに。帝猶も不憫に思召し此の文を授け給ふ。誠に。これと申すも此の君政事正しくましまし。殊には萬民を憐れみ給ふ御志深き故にて御座候。や。これは某の獨り言。彼の士童鐵鋼山へ流し申候はゞ。其の由申上げよとの御事にて候間。皆々士童送り候者歸り申候はゞ。早々参内仕り。能く〳〵奏聞申候へ。其の分心得候へ〳〵。

松風

アヒ　浦人

ワキ呼出す。〽須磨の浦人のお尋ねは。誰にて渡り候ぞ。シカ〳〵。〽さん候あれは松風村雨二人の海女の舊跡にて候。お僧も逆縁ながら弔うて御通り候へ。シカ〳〵。〽重ねて御用を承り候べし。シカ〳〵。〽心得申して候。

松尾

アヒ　里人

ワキ呼出す。〽所の者と御尋ねは。いか樣なる御事にて候ぞ。シカ〳〵。〽心得申して候。所の者にて候が。いかやうなる御用にて候ぞ。シカ〳〵。〽是は存じも寄らぬ事を承り候ものかな。我等も此の所には住居仕れども。左樣の御事委しくは存じも致さず候。されども思ひ出でられ御尋ねなさるゝ上。何をも存ぜぬと申すもいかゞに御座候間。大方承及びたる通り。御物語り申さうずるにて候。先づ當社松尾の大明神と申すは。神代の古へは。丹塗の矢の化神にてましますにより。加茂の明神

ず作ひ申す。これを二人の變らぬ友とは申したるげに候。又大唐の古へにも。琴詩酒の友とて。變らぬ友はありしと申す。嵆康向秀(しやうしう)は。朝暮琴を彈じて相伴ひ。花の晨月の夕は申すに及ばず。常に興を折々は。何れもこれを翫び。深き友の交りとはかゝりたるげに候。又杜子美李太白は。詩を作りて友を語らへ。遺書は心を陳べて之を寄せ。何れも詩の友の樂みとなる。阮籍宋玉は。酒好の情深き故。樽をたゝへて往き來り。竹林の風景をともに愛して。一生の樂しみとはかゝりたるなどと申す。之を琴詩酒の友とは申すげに候。さる程に。此の處に於いて。彼の二人の變らぬ友。此の阿部野の松原を作ひ通りしに。頃は長月半ばなれば。松蟲の音をきながら面白く聞え候程に。一人の友人(ともびと)申すやうは。それに暫く御待ちあれ。あの松蟲の音の聲を聞いて參らうずると。叢深く分入り。色々尋ね申せども。奇特なる事にて候ひけるぞ。蟲の音は間近く聞こえて。終にありかを知らず。其のうちに。精魂も盡きけるか。其のまゝ其處にて野草の露と空しくなり申して候。又一人の友人。やゝ久しく待てども終に歸らず候程に。餘り不審に思ひ。彼の人の跡を慕ひ。叢に分入り尋ね申すに。死にたる者に行逢ひ。驚き騷ぎ。死なば一處とこそ契りしに。かゝる無殘なる事はあるまじきとて。死骸に取附き泣き悲しみ。歸らん道を忘れ。思ひの切なる餘りにや。これも草露(さうろ)に空しくなる。二人の者の心中皆人不憫に思ひ。同じ土中に築き籠め申して候。誠や知らぬ人の申すは。松蟲の音に友を偲ぶといふ事を。古今の序にも。書かれたるなどと申すが。若しか樣の事にてもや候らん。されば古き歌にも。秋の野に。人まつ蟲の聲すなり。われかと行きていざ弔はんと。かやうに詠まれたる歌もあるなどと承りて候。最前申す如く。此の儀に於いて色々仔細ありげに候へども。先づ我等の承りたるは。かくの分にて候が。いかやうなる仔細により。珍らしき事をお尋ねにて候ぞ。シカ〳〵。へこれは奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに。頃しも秋の半。蟲の音も面白き折なれば。彼の二人の友人。古へを懷しく思ひ。再び閻浮にまみえ。方々酒を愛して。昔を語りたると推量申して候。尤も其方は在俗の身なれども。頻にあらず俗にあらずといふ時は。逆縁ながら彼の者の跡を御弔ひあれかしと存じ候。シカ〳〵。へ頓て御目にかゝらうずるにて候。シカ〳〵。へ心得申して候。

松山天狗(まつやまてんぐ)

アヒ　天狗

へ斯樣に候者は。讃岐の國白峯相模坊に屬(しよく)する木の葉天狗にて候。抑も人皇七十五代。崇德院と申し奉りしは。鳥羽天皇第一の皇子にて渡らせ給ふ。御連枝近衞の院に御位を讓り給ひて。新院と申し奉る。然れば近衞の院崩御の後。新院第一の宮。重仁親王を御位に即け奉らんと思召す處に。美福院の御計らひにて。鳥羽の院第四の皇子を。御位になし給ふ。後白河の院これなり。此の意趣に依つて。本院新院不和にならせ給ひ。新院御謀叛あり。合戰始まり候。新院の味方には。宇治の惡左府。武家には六條判官爲義父子是等を大將と定め給ふ。また本院の味方には。關白內大臣基通。武家には源義朝。並に平家の清盛を大將として。保元二年七月十一日。寅の刻より合戰始まり。辰の刻に軍破れ。新院打負け給ふによりて。同じく八月十日。讃岐直島と申す所へ流され給ひ。御住所には。四方に築地をつかせ。出入の口は一つ明け。日に三

度の供御を供へ申す者ならでは。訪ふ人も更になし。誠に世上の盛衰時の轉變。歎くに叶はぬ習ひとは云ひながら。都にては玉樓金殿に座し給ひ。百官卿相にかしづかれ。含香の花を翫び。南樓の月に嘯き。既に三十八年を送り給ひしに。樂しみ盡きて。眼前の悲しみに遭ひ給へば。御涙の乾く隙もなく。たゞ後世の爲に。五部の大乘經を遊ばし。王城近き八幡山に籠め給はんとて。平治元年の春の頃。仁和寺へ御上ぼせなされしに。主上御手跡だに御許しなく。御返し候へば。我れ惡念機悔のため。此の經を書きつるに。心に任せず返されし事。嗔恚の炎忍び難く。此の上は魔緣となつて。意恨を散ぜんと思召し。何ぼう御憤り恐ろしき御方にてありたるぞ。忽ち天狗の姿と御身をやつされ。御爪をも生やし。御髮をも剃せ給はず。柿の御衣に御篠懸長帶を召され。大乘經の奧に血を以て御誓狀を遊ばされ。千尋の底に沈め給ふ程に。御憤り相模坊いたはしく存じ。本意を遂げさせ申すべしとて。玉體に近づき奉り申され候。さあるに依つて。平治元年。十二月九日に。信頼卿に語らはれ。義朝謀叛を起し候も。偏に讃岐の院の御靈ゆゑなり。然れども無常の風誘れ給はず。長寛二年八月六日に。御年四十六にて。志度と云ふ所にて。終に崩御なる間。白峯にて煙となし奉り。既に五十年の春秋は過ぎ候へども。御跡慕ふ人もなく候處に。西行法師都より。はる／＼松山の御廟へ尋ね來られ候を。新院の御亡心老人と現れ。御道知るべをされ候處に。西行御陵を拜し。一首の歌に。よしや君。昔の玉の床とても。かゝらん後は何にかはせんと。斯様に詠じ給へば。亡心も嬉しく思召し。かき消すやうに失せ給ひ候ふ。重ねて玉體を現し。夜もすがら舞樂を奏し。西行を慰め給はうずるとの御事なり。それに就き相模坊にも。諸天狗を作ひ。參内仕れとの御事なる間。皆々その分心得候へ／＼。

【み】

通盛（みちもり）　アヒ　里人

へこれは。この阿波の鳴戸に住居する者にて候。爰に貴きお僧の渡り候が。一夏の間晝夜に有難き御經を御讀誦なさるゝ。今夜も參り。聽聞申さばやと存ずる。如何に申上げ候。今日はちと用いことゝ御座候て遲なはり申し、候。シャノ／＼。へそれは如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ／＼。へ是は存じも寄らぬ事を承り候ものかな。我等も此の鳴戸に住むとは申しながら。さやうの御事委しくは存じも致さぬ。されどもお尋ねの所を存ぜぬと申すも如何なれば。大方承り及びたる通り。御物語申さうずるにて候。まづ越前の三位通盛と申すは。平家教盛卿の御子にて御座ありげに候。また小宰相の局と申すは。小形部の卿教賢の娘なるが。上西門院に宮仕へし給ひしに。ある時上西門院北野へ御幸の折柄。通盛も御供にて。かの小宰相の局を一日御覽じて御心移り。乳持の女房を近付け。如何あるべきぞと仰せられければ。一度の御文などは苦しかるまじき由申されける。通盛は嬉しく思召され。頓て御文を參らせらるゝ。其の御歌に。吹き送る。風の便りに見てしより。雲間の月に物思ふかなと。斯様に詠みて參らせ給ふを。小宰相の局は。あら恥しや。此の文を若し人や見るらんと思召され。中々御返事もなく。其儘返し給ふ程に。通盛はいふ／＼御心に忘れ給はず。三年が間御文玉章を參らせられけれども。終に御返事御座なかりしと

申す。今度は御前の官人を頼み。又重ねて御文を參らせらるゝ。官人も是非なく頼まれ申せども。此の文を局へ參らすべき所御座なかりしに。ある時御車の物見へ投入れ申す。小宰相に驚き給ひ。此の文を捨て給はん樣はなし。まづ御袴の腰に差挾み給ふが。所こそあるべきに。上西門院の御前にて。此の文を落し給ふさり乍ら。有より女院の御所にも。此の事斯くと知ろしめされけれども。小宰相の御心中を御覽ぜられん爲に。如何なる者が此の文を落しけるぞと御尋ねありければ。何れも進み出て我も／＼と申し開かせ給ふ。小宰相の局は赤面して御座を立ち給ふ。まづ此の文を披いて御覽なさるゝに。一首の歌の御座ありしと申す。わが戀は。細谷川の丸木橋。ふみかへされて濡るゝ袖かなと。斯樣に書させ給ふな。女院には御覽なされ。通盛の心中不憫に思召されけるか。急ぎ小宰相の局に御返事あれと仰付けらるゝ。其時は局も是非に及ばせ給はず。御返事ありたると申す。其の御歌に。たゞ頼め。細谷川の丸木橋。ふみかへしては落さざらめやはと。斯樣に御返歌ありて後。小宰相の局を通盛へ參らせられ。それより御契り淺からざる御仲となり給ひたるげに候ござる程に壽永の秋の頃。平家の一門殘らず都を去り。津の國一の谷に落ち給ふ。通盛は小宰相の局を。御伴ひなされ御下向ありしに。平家の御運末になり候ひけるか。一の谷の合戰に打負け。皆ちり／＼になり給ふ。通盛思召すは。此の上は力及ばず。よき大將と打死あらうずると。馬上に突立ちあがり四方を見給へば。源氏の軍兵に。木村。佐々木。玉の井の者共。かれこれ七騎の兵共。通盛を目懸け馳せ向ふ。御望みの敵なれば。さん／＼に戰ひ。終に其處(そこ)にて打死ありたると承り及びて候。それより小宰相の局は小船に召され。この鳴戸迄御越しなされ候が。是處にて思召さるゝは。通盛は果て給ふ。浮世にありても其の甲斐なし。此の海に御身を投げ給はんと仰せらるゝ。乳母申され候は。御心の安からぬ事。御一人に限らず。たが身の上にもある御事にて候と。色々とゞめ申されけれども。思ひ切り給ふ御事なれば。壽永三年二月十四日夜半の頃。御身を投げ終に空しくなり給ひて候。斯樣の哀なる御事はあるまじきとの御事にて候。通盛小宰相の局の果て給ひたる仔細。委しくは存ぜず候へども。まづ我等の承りたる通り御物語申して候か。扨お尋ねは如何やうなる御事にて候ぞ。シカ／＼。へ是は奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに。毎日毎夜あり難き御經を御讀誦なさるゝによつて。其の功力により。通盛小宰相の幽靈これ迄まみえ給ひたると存じ候間。此の上はいよ／＼妙軸の勘向を御讀誦あらば。通盛夫婦の御事は申すに及ばず。平家の御一門いづれも。成佛は疑ひあるまじくと存じ候。シカ／＼。へさやうにて候はゞ。我等如きもいよ／＼歩みを運び。御經を聽聞申さうずるにて候。シカ／＼。へ心得申して候。

三山(みつやま)

アヒ　里人

(ワキ呼出す。)へ所の者とお尋ねは。如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ／＼。へ三山と申せば。一つ山の樣に思召されうずるが。左樣にては御座なく候。まづ是より南に見えたるを天の香久山と申し候。また西に見えたるが耳無山にて候。萬葉集にも褒められたる名山にて候間。心のどかに御眺めあらうずるにて候。シカ／＼。へ重ねて御用もあらば承り候べし。シカ／＼。へ心得申して候(後つ中入過ぎて。)へ最前修行

昔の三山を御尋ねにて候ふ。未だ受許に御入り候はゞ一手十念をも請け申さばやと存ずるや。先のお僧の未だ是に御座候か。シカ〳〵。我等も十念請け申したき望みにて是迄參りて候。シカ〳〵。へ心得申して候。扨お尋ねありたきとは、如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。へ是は存じも寄らぬ事を承り候ものかな。我等も委しくは存ぜず候へども、最前より御目にかゝり、今更存ぜぬと申すも如何に候間、あら〳〵御物語申さうずるにて候。語まづ三山と申すは、最前教へ申す如く。香久山畝傍山耳無山、是を三山と申し候。いにしへこの耳無山の麓に、桂子と申して優にやさしき遊女のありしに、その頃香久山の邊りに、柏手の公成と申す御方の御座候ひしが。かの桂子に心をかけ。耳無山に通ひ淺からざる仲となり給ひたると申す。又同じ頃畝傍山の麓に、櫻子と申してその貌世に越えいとやさしき女のありしを、かの公成心移り。又引替へて畝傍山に通ひ。それよりして桂子は音信もなく。すさみ參らせし程に。其時桂子思ふ樣。昔より移り變るは世の習ひ。たとひ千年を契れども。別るゝ仲もあり。定めなきは夫の心。誰恨むべき樣もなし。此世にありても其の甲斐なしと思ひ、是なる池水に身を投げ空しくなり申して候。其の樣體を公成聞附け池の邊に來り。敢へなき姿を見て一首の歌に耳なしの。池し恨みて吾妹子が、きつゝかくれば水はかれなんと。詠み給ひたると申し候。誠に哀れなる御事にて御座ありたるげに候。又三山の事を萬葉集に載せられたるは。香久山は女山、畝傍山耳無山は男とあり。昔は山川も夫婦の契を結びしにや。耳無山初めに香久山を懸想じければ。何となくうけひく氣色なりしを。又畝傍山も香久山に思ひをかけしに。畝傍山は姿も雄々しく、長かりければ、香久山これに心移りしにより。互ひに爭へ戰ひしを。三山の戰とは申すげに候。されば天智帝の御歌に。香久山は畝傍雄々しと耳無しと、相爭ひき神代より。斯かるにあらしいにしへも。然にあれこそ虚蟬も、つまをあらそふらしきと。詠ませ給ひたると承り及びて候。最前申す如く、此の儀に於て、色々仔細ありげに候へども。まづ我等の承りたるは斯くの譯にて候が。扨お尋ねは如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。へ是は奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに、かの桂子は妄執深き女なれば。此度名帳につき。念佛の功力を受け、佛果に至らん爲、怨靈これ迄現れたると存じ候間、修行の道に御急ぎなされども、暫く御逗留ありて、桂子の跡を弔ひ、何方へも御通りあれかしと存じ候。シカ〳〵。へ御逗留の内は御用を承り候べし。シカ〳〵。へ心得申して候。

水無瀬（みなせ）

アヒ　里人

シカ〳〵。へ在所の者とお尋ねは、誰にて渡り候ぞ。シカ〳〵。へ此の所に於いて隱世の卿と申す人御座候ひつるが、それは遁世させられ。今は吉野に御座候。其の御子に男子女子御座候。又かの人樣は七日先に死去させられて候。さるにより、姉君たちは墓へ參られ候。御用御座候はゞ、是に御座候ひて御逢ひなされ候へ。へまた御用御座候はゞ、重ねて承り候べし。へ心得申して候。

水無月祓（みなづきばらひ）

アヒ　上京の者

へこれは上京の者にて候。當月は六月にて。

廿日より後は。晦日まで紀の明神へ參り候。殊に今日は晦日なれば。水無月祓にて候間。參らばやと思ひ候。ワキシカ〳〵。〽見申せば都人にて候が。無案內に御座候が。〽げに〳〵さ樣に見えさせ給ひて候。さあらば御供申し候べし。〽かう〳〵御座候へ。〽御存じの通り。都は遠き事に候へば。色々珍しき事の御座候中にも。御手洗に面白き事の候。若き女物狂の候が。巫の樣なる體にて。茅草にて作りたる輪を持つて人々に。越せよと申す名越の祓の謂れを語り。舞ひ遊び候。面白く候間これを見せ申すべし。〽や。物語申して參り候うちに。早や御手洗に着きて候。何と殊の外の群集にては候はぬか。〽此の所にて彼の物狂見せ申し候べし。暫く御待ち候へ。ワキ上に直る。ワキツレは次に居り。[illegible]に加茂の川に着きにけり〳〵。〽彼の物狂が參りて候。言葉をかけられ。輪の謂れを御聞き候へ。加茂の祠に參らんといふ時に 〽いかに申し候。人々の御所望にて候間。烏帽子を着て面白う舞うて御見せ候へ。

御裳濯(みもすそ)

アヒ　里人

ワキ呼出す。〽所の者とお尋ねは。いか樣なる御事にて候ぞ。シカ〳〵。〽心得申して候。所の者を召出さるゝは。いか樣なる御用にて候ぞ。ワキシカ〳〵。〽これは存じも寄らぬ事を承り候ものかな。我等も此所には住居申せども。左樣の御事委しくは存ぜず候さりながら。初めての御參詣と申し。殊には召出だされお尋ねなさるゝを。何をも存ぜぬと申すもいかゞに御座候間。大方承及びたる通り申上げうずるにて候。語先つ。御裳濯川の日出度き仔細と申すは。昔天照太神。此の伊勢の國度會の郡五十鈴川上に地を占め給ふ時。忝くも人皇十一代。垂仁天皇二十六年に。倭姫の命この神鏡を戴き。國々を御廻りありしに。當國にてはあの二見の浦を御通りなされ候に。何となく御裳の裾汚(よご)れたりしを。此の川にて濯がせ給ひしより。今に於いて御裳濯川と名附け。取分け此の所を神が瀨と申すも。かやうの謂れにて御座あるげに候。其の折節。此の邊りに田作の翁のありしを。命御覽じて。彼の翁にも仰せけるは。神の御鎭座になるべき所やあると。御尋ねなされしかば。其の時翁。我はこれ川上に三十八萬歲の間。此の山を守護したる者なり。御鎭座になる所を敎へ申さんとて。御道しるべ申させ給ふ。これ卽ち猿田彥の明神。今の興玉の神にて渡らせ給ひ候。又神路山と申す仔細も。其の時御鎭座を尋ね分け入らせ給ふ道なるに依つて。神路山と申して隱れもなき名所にて御座候。それより命天照太神をいつき奉り。神の敎へなればとて。五十鈴川の川上に御宮所を占め。高天の原に千木高知りて。下つ岩根に大宮柱太しき立て。地を占めましますも。今の內宮これにて渡らせ給ふ。其の後四百八十三年。雄略天皇の御宇に。また倭姫の命。丹後の國與謝眞名井の原より。豐受(とようけ)の明神を迎へ參らせられ。重ねて當國に移し。今の外宮と現れ。國土を照らし給ふ。日出度き御事にて御座候。さる程に。我が朝と申すは。古へより三國にすぐれ。神の勢強く。人の智惠餘りあつて。外國の侮りを受けず。神代々武威を守り給ふにより。此の國の豐かなる民の竈も賑ひ。神に步みを運ぶ人は。何事につけても願の叶はぬと云ふ事なく。高麗唐土南蠻西戎までも。貢物を捧げて來朝するも。此の理にて御座あるげに候。また是なる小田は。神の小田にて御座候。御覽なさるゝ如く。田水豐かなれども。なほ川水をまかせ入れらるゝ仔細。これは神を敬ひ。又は衆生

の民に此の心を知らしめんが為なる田。承及びて候。惣じて此の小田より御供にそなふる事。外宮内宮の事は申すに及ばず。なこの宮四所の別宮。月讀の宮まで參る事なれば。皆人信心を致し。此の小田を渇仰仕る御事にて候。最前申す如く。委しき事は存ぜず候へども。先づ大方承及びたる通り。御物語申して候が。さてお尋ねはいか樣なる御事にて候ぞ。シテ〽これは奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに。此度遠々の御參詣を。神慮に嬉しく思召され。誰やの者が罷出で。神託申上ぐべき者も御座なきと思召され。與玉の神かりに現れ給ひ。御言葉をもかはし給ひたると存じ候間。御上洛は御急ぎなれども。暫く此の所に御座なされ。信心をなし給はゞ。重ねて奇特の御座あらうずるかと存じ候。シカ〳〵。〽さ樣に御座候はゞ。御逗留の間はまた御見舞申上げうずるにて候。シカ〳〵。〽心得申して候。

三輪（みわ）

アヒ　里人

ワキ詞〽これはこの三輪の里に住居する者にて候。某宿願の仔細あつて。明神へ日參仕る。今日も參らばやと存ずる。誠に。有難き御事にて候ひけるぞ。毎日參れども。彌珍しに有難う存ずる。惣じてこの三輪の明神と申すは。昔より如何なる御事にや鳥居も立てず。御社も御座なく候程に。中頃氏子の面々寄集り。御社を造り。鳥居を立て參らせうずると申しければ。明神夢に見えさせ給ふ。社を造り鳥居を立てんと云ふは。鳥類畜類の栖處か。我を祈らん輩は。杉立てる。門を知るべに參れとの。御託宣なるによつて。今に鳥居もなく。社壇も御座なく。杉を御社とも。まして御神體とも崇め申す御事にて候。や。獨言を申す内にはや御前にて候。まづ拜を致さう。（ト云うて下に置き、ト二度頭を下げ二度拝みて）あら奇特や。御神木の一の枝に衣の掛りて御座候。いで此の衣をよく〳〵見申せば。この山陰にまします。玄賓僧都の御衣かと存じ候間。頓て參り。此の事不審申さばやと存ずる。（ワキ前に下に居て）如何に申上げ候。此の間はちと用の仔細御座候ひて御見舞をも申上げず候。シカ〳〵。〽只今參る事。餘なる儀にても御座なく候。某宿願の仔細あつて。明神へ日參仕る。今日も參詣申して候へば。御神木の一の枝に。衣の掛りて御座候。是をよく〳〵見申せば。僧都樣の御衣かと存じ候が。若し思召し合はさるゝ事は御座なく候か。シカ〳〵。〽さん候。シカ〳〵。〽さればこそ奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに。是と申すも僧都樣の御心の中常時にましまして。殊には有難き御法を説き給ふにより。明神も假に人間と現じ給ひ。色々御言葉を交させ給ひたると存じ候。其の上昔人の申すは。神に三衰三熱の苦しみましますなどゝ申せば。左樣の苦しみをも免れたう思召し。御衣をも御所望ありたると存じ候。餘り奇特なる御事にて候間。我等の申すは如何なれども。急ぎ神前に御參りなされ。御衣の樣體をそと御覽ぜられ候へかしと存じ候。シカ〳〵。〽さあらば御跡を慕ひ參らうずるにて候。シカ〳〵。〽心得申して候。

三井寺（みゐでら）

アヒ　夢合

アヒ　能力

夢〽是は清水寺門前に住居する者にて候。今夜女性上﨟にお宿を參らせて候が。漸う御下向の時分にて候間。御迎ひに參らばやと存

ずる。や。はや御下向にて候よ。太夫にこしあてゝやる。先づおこしを召され候へ。さて如何やうなる御靈夢ばし御座候ぞ。太夫シカ〳〵。〽是は奇特なる事を承り候ものかな。某は門前にて夢を合する者にて候間。頓て合せて參らせうずるにて候。まづ。戀しき人に近江の國。尋ぬる人を三井寺。これは目出度き御靈夢にて候間。急ぎ三井寺へ御參りあらうずるにて候。太夫シカ〳〵。〽是より今道峠と申すへ御出であり、それより右の方へついて御參りあれば。其儘三井寺にて候間。急ぎ御參りあらうずるにて候。太夫道行の時。片幕にて出て。能力出ると其儘立つて揚幕切戸より入る方もよし。又片幕にて入るとき。且又幕柄は狂言取りに入る。先も当に太夫にあてゝやる。能力は幽の供して出る。夢合の跡に下に居る。ワキ能上に居てから立つて名乗座にて。〽扨も〳〵。毎年とは申しながら。當年のやうな面白い月は御座あるまい。如何に申上げ候。毎年とは申せども。當年のやうな隈もない月は。御座あるまいと存ずるが。何と思召され候ぞ。ワキシカ〳〵。〽畏まつて候。小舞。やい〳〵其の許ふとゞめたは何事ぞ。やア。なんぢや女物狂がある。面白う狂ふ。はアそれは面白からう。是は日本一の事。申上げて少人の御目にかけう。三位殿。〳〵。ワキツレシカ〳〵。〽あれに女物狂ひの候が。一段と面白う狂ふと申す。これを召して少人の御目にかけう。ツレシカ〳〵。〽え物知りだとてな。あの三位殿と云ふ人は。何を云うても合點せぬ人ぢや。アヽ何ぢや面白う狂ふ。笑ふ。扨々見たい事ぢや。何としたものであらう。やア致しやうがある。其の由申してあれば。左樣の者は當寺へは禁制にてある間。中々叶ふまいと仰せらるゝさり乍ら。某が一目見たい程に。まづ道を廣々とあけておいて。其の女物狂をそつちへやるやうにして。やらいで。急ぎ此方へ通し候へ。船人もこがれ出づらん。と謡過ぎて。太夫一の松にくつろぐ時に立つて。〽なんぼう初夜を忘れた。我が朝も鐘は數多ありとは申せども。せい東大寺ゝり平等院。こゝ園城寺と申して。天下に三つの鐘ぢや。まづ急ぎ鐘を撞かう。ト云うて鐘を撞く。口傳。太夫叫く。蟬がさいた。太夫シカ〳〵。〽いや此の鐘は人の撞かぬ鐘にて候よ。太夫シカ〳〵。〽オヽ某の撞くこそ道理なれ。此の寺の鐘つく〳〵〳〵法師にておりやり候。ト云うて。小鼓と笛との間に下居るよし。影はさながら宿夜にて。返しの謡の中に左の一句云切るがよし。にぢり出でて膝立てにする。手をついて云ふ。〽女物狂が鐘を撞かうと申す。ト云うて直ぐに切戸へ入るとも。又ゆるし給へや人々よ。の時笛の間より切戸へ入るもよし。

【む】

六浦（むつら）

アヒ　門前の者

〽是は稱名寺門前に住居する者にて候。今日は存ずる仔細の候間。御堂へ參らばやと存ずる。や。これなるお僧は。この邊りにては見馴れ申さぬが。何方より御出でにて候ぞ。シカ〳〵。〽中々この邊りの者にて候。シカ〳〵。〽心得申して候。さてお尋ねありたきとは。如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。〽誠に都のお僧とて。奇特なる事を御不審にて候ものかな。我等も委しくは存ぜず候へども。昔より申傳へたる通りあら〳〵御物語申さうずるにて候。語まづ。この所をば相模の國六浦と申して。隱れもなき名所にて御座候。またこの御堂は六浦の稱名寺と申す御寺にて御座候。誠に今の折柄は御覽なさるゝ如く。山々の紅葉今を盛りなれば。眺め一入の折なるに。この庭の楓一葉も紅葉せず。たゞ夏木立の樣に見え申し候事。お僧に限らず何れも是を御不審なさるゝ。この仔細と申すは。昔藤原の

中納言爲相の卿と申して。世に隠れもなき歌人の渡らせ給ひ候が。さる仔細あつて。在鎌倉なされ候ひしにより。鎌倉の中納言とも申したるげに候。殊に歌人の御心のやさしさは。田舎の御住居とは申しながら。此處彼處の名所舊蹟を御覽じて。折に觸れ事によそへ。名所々々の歌どもを詠吟ありたると承り及びて候。さる程にかの爲相の卿。時しも今の折節にてもや候らん。ある時此所の紅葉を御覽ぜんため。この稱名寺へ御出でなされ候所に。山々の楓未だ紅葉仕らず。本意なげに思召さるゝ所に。この庭の紅葉一本に限り。さながら紅をさらすが如く。今を盛りに見え申し候程に。爲相の卿は不審に思召され。取敢へず一首の歌に。如何にして。この一本に時雨れけん。山に先立つ庭のもみぢ葉と。斯様に詠じ給ひたると申傳へて候。草木心なしとは申せども。心の御座候ひけるぞ。諸木多き中に此の木に限り。御詠歌にあづかり申したる事。誠に有難きと思ひけるか。明くる年より紅葉をとゞめ。今に一葉も紅葉せず。御覽なさるゝ如く。常盤木の様にて秋をも暮し申す。されば爲相の卿の御詠歌により。それよりも名木と名付け。何れも此の楓を御賞翫なさるゝなど、承り及びて候。最前申す如く委しくは存ぜず候へども。まづ我等の承りたる通り、御物語申して候が。扨お尋ねは如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。〽是は奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに。お僧のお心中貴くましまず故に。または此の木のもみぢ仕らず候事を御心に掛け給ふを。紅葉の精は嬉しく思ひ。御法を受け佛果に至らんと思ひ。是迄顯れたると存じ候間。今夜は此の寺に御座候ひて。月と共に法味をなし給はゞ。猶も奇特を御覽ぜられうずるかと存じ候。シカ〳〵。〽御逗留の内は御用もあらば承り候べし。シカ〳〵。〽心得申して候。

梅枝（むめがえ）

アヒ　里人

〽是はこの住吉の里に住居する者にて候。此の間は明神へ參らず候間。今日は社參申さばやと存ずる。や。是なるお僧は。この邊りにては見馴れ申さぬお僧なるが。いづ方よりの御出でにて候ぞ。ワキシカ〳〵。〽中々この住吉の里に住居する者にて候。シカ〳〵。〽心得申して候。扨お尋ねありたきとは如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。〽是は存じも寄らぬ事を承り候ものかな。我等も此の在所には住居仕れども。左樣なる事は存じも寄らぬさりながら。お僧初めて此所へ御出でなされ御尋ねある上は。何をも存ぜぬと申すも如何に候間。大方承りたる通り。御物語申さうずるにて候。語まづ。富士と申す伶人の果てたる仔細は。およそ人皇九十四代。花園の院の御宇にて御座あるげに候。その頃内裏に於いて天下の御祈禱のため。七日の間管絃をとり行はせ給ふに。國々遠方より管絃の役者を召し上さるゝ。當國に於てはあの天王寺より。淺間と申す樂人を召して罷上る。又住吉よりは御尋ねなさるゝ富士と申す樂人罷上る。是は太鼓役にて何れも劣らぬ上手なれば。この兩人が中。何れにか仰付けられんと諍議まち〳〵なるによつて。富士と淺間は互ひに此の役を爭ひ。我も〳〵と家流の系圖をのべ。面々是を訴へ申すと雖も。其時の樣體なにとか御座候ひつらん。淺間は召出されずして。終には富士を召して此の役を仰付けられ候程に。富士が身の上に於て。時の面目家の面目。是に過ぎたる事は御座なかりしと申す。淺間は是を無念に思ひ。兎角彼を恨みんと。夜更人しづまつて

後。富士が宿へ忍び入り。左右なう富士を打つて候。斯かる不憫なる事は。あるまじきとの御沙汰にて御座ありたると承及びて候。又爰に哀れなる事の御座候。富士が妻の御座候ひしが。夫の別れを悲しみ。明暮形見の衣裳を着し。形見の太鼓を打ち常に富士を弔ひ申せども。女の身なれば夫の別れを忘れ兼ね。深く思ひに沈みけるが。又夫の執心深き故か。是も程なくむなしくなり申して候。まづ是は富士夫婦が果てたる仔細。さる程にこの音樂と申す事は。取分け目出度き事にて神を慰め。國家を守り給ふも。是なる事に始まりたると承りて候。昔神代の御時。天照太神岩戸に閉籠らせ給ひ。世界暗闇となつて。夜と晝の境も御座なかりしに。天の鈿の命樂をうたひ給へば。神は是を悦び岩戸を出で給ひ。今に四方の國明らかなるも。この謂れにて御座あるげに候。又それのみならず。大唐の古へ。黄帝の御時は雲門樂を奏し給ふ。舜の時代にはじやうの樂をなし給へば。鳳凰飛來て舞ひ遊びたる例もあり。其の外夏。殷。周の三代。何れも樂をつくり。其の徳を稱じ給へば。それよりして萬國治まり天下を保ち給ひたると承りて候。ましてや日本は神國なれば。昔より禮樂を以て國の政治なし。神の御心を和らげ四海の浪おだやかなるも。皆この神樂の目出度き謂れにて御座あるなどゝ申傳へて候。されば當社におき候ても。地給の伶人數多御座候が。四季折々は神前に於て。舞樂をなし神慮をすゞしめ給ふ。是によつて神は人民を憐れみ給ふ御事にてありげに候。最前申す如く。富士夫婦の果てたる仔細につき。いろ〳〵御物語あるとは申せども。まづ我等の承りたる通り。御物語申して候が。扨お尋ねは如何やうなる事にて御座候ぞ。シカ〳〵。〽是は奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに。衆生濟度あるべきお僧の。此所へ御出でたる不思議の値遇と思ひ。この度妙なる御法を受け。佛果に致らんと。富士が妻の幽靈これ迄顯れたるは。疑ひもなき御事にて候間。末は御急ぎの御事なれども。暫く此所に御逗留なされ。有難き御法を説き。かの者を御弔ひあれかしと存じ候。シカ〳〵。〽御逗留の内御用も候はゞ承り候べし。シカ〳〵。〽心得申して候。

室君

アヒ　室の長

（ワキ名乘つて。シカ〳〵。）〽如何樣なる御用にて候ぞ。シカ〳〵。〽心得申して候。やれ〳〵目出度いことかな。例年の通り室君の祭を成されうずると仰せ候。かやうの目出度い事は御座あるまい。急いで此の由遊女達へ申し渡さばやと思ひ候。（樂屋向いて。）いかに遊女達に申候。御神事を執行はせらるゝ間。いつもの如く船へ乘り。囃子物をして出られ候へや。（ツレ樂屋を出る。下り端にて。囃子につれ船の歌謠ふ。）いざや遊ばん。（ワキ詞。舟より）御上り候へ。そと神樂を參らせられ候へ。〽やれ〳〵目出度いことかな。急いで神樂をまゐらせ候へ。

【め】

和布刈

アヒ　鱗の精

（眞序にて出る。）〽斯樣に候者は。長門の國早鞆の沖に住む鱗の精にて候。只今罷出る事餘の儀にあらず。當社早鞆の明神に於て。御神拜年中に其の數多しとは申せども。取分け十二月晦日の御神事なれば。和布刈の御神事と申して。奇特數多御座あるめでたき御神拜にて候。それを如何にと申すに。今夜寅の一天に。廣原

海の都より。龍神波間を分けて。かにとなく現れ出で。海上を陸地の如く平々と眞砂になし申すを。その時刻を相待ち。神職の人出合ひ。松明をともし眞砂の地に下り立つて。海中の和布を苅取り神前に供へぬれば。神は悦び納受ある。なるが故に今月今日の御神事は。和布の御神事と申し習はし候。誠に珍しからざる申し事にて候へども當社の御事は。福壽圓滿の靈地にて。神代の昔より。廣原海の宮と。當社明神は御心を一つにして。今末の世に至る迄も。その嘉例を殘し。めでたき御事色々御座候。殊更今の折柄。四海治り天下安全の御代なれば。廣原海の都より今夜の御神事なれば。一入めでたく執行ひ給はうずるとあつて。龍宮の姫宮。鹽筒男の翁仰せ合はされ。假に人間と現じ出で給ひ。數々の御寶を捧げ神を敬ひ給ふ。神主是を見て不審をなし。如何なる人ぞと尋ね給ふ。龍女我は是賤しき蜑乙女と答へ給へば。又翁は只この浦里の者と云ひもあへず。海中に入り給ふ。誠に是と申すも。當社の御威光めでたき故なり。かゝる奇特を見る事。偏に御神徳と思へば。別して有難き御事にて御座候。惣じて此の神に歩みを運び給ふ輩は。無量無邊不可思議の利益を請け。一期生の袂には。不退の位に至り給ふ事。疑ひもなき御事にて候。や。是は當社のめでたき仔細。我等如きも是迄罷出で。斯かる御神に逢ひ奉り。唯その儘罷歸るも如何に候間。めでたく一曲仕り罷歸らうと存ずる。〽めでたかりける時とかや。三段の舞 やら〳〵めでたやめでたやな。數にもあらぬ鱗迄も。顯れ出でゝ。悦び勇み。謠ひ奏で。謠ひ奏でゝ。又海中にぞ入りにける。

【も】

望月　觀世流

アヒ　供人

シテ名乘すぎて。ツレ子方出で。後ワキ出る時。太刀持供して出る。　ワキシカ〳〵。

〽御前に候。シカ〳〵。〽畏まつて候。シカ〳〵。〽心得申して候。やれ〳〵。まだ日は高けれども。宿をとると申さるゝ。どこ許がよからうぞ。はあ。これに宿がある。なに大黒屋。目出度うはあれども宿がわるい。はあ。これは何ぢや。なに甲屋。はあ。これはよい宿ぢや。これに致さう。いかに此の内へ案内申候。シテシカ〳〵。〽頼うだ者を同道申して候。宿を貸して給はり候へ。シカ〳〵。〽おゝあれこそは信濃の國の住人。望月の何某ではおりない。シカ〳〵。〽心得申して候。いかに申上候。御宿を取り申して候。此方へ御通りあらうずるにて候。是よりワキ太刀持につく。[illegible]すわる。[illegible]舞臺へ來て座につく。シテ出て。シカ〳〵。〽何事にて候ぞ。シカ〳〵。〽其の由申さうずるにて候間。暫くこれに御待ち候へ。ワキへ。〽いかに申上げ候。此の家の亭主にて候が。御下向を目出度う存じ。酒を持ちこれ迄參られて候。ワキシカ〳〵。〽心得申して候。其の由申して候へば。此方へ御通りあれとの御事にて候。トいうて。シテ座に着きたるとすぐに。〽あゝ是々。あれなる兩人は何人にて候ぞ。シカ〳〵。〽さあらば其の由申さうずるにて候。暫くそれに御待ち候へ。ト云うて。ワキへ。〽いかに申上候。あれなるは此の宿にはやる盲者女にて候が。今宵の御慰みに。何にても面白からうずるものを。一ふし御所望あれかしと存候。ワキシカ〳〵。〽心得申して候。さあらば何なりとも面白からうずるものを。一節御謡ひ候へ。ツレシカ〳〵。〽いや〳〵。それは差合がある。ワキシカ〳〵。〽畏まつて候。さあらば何なりともそなた次第に御謡ひ候へ。ツレ謡過ぎて。〽討つとは。シテシカ〳〵。〽されば

討たうとおしやつたに依つて。近頃驚いて候。シテシカ〳〵。〽八撥ならば八撥とおしやらいで。よい肝を潰した。ワキシカ〳〵。〽畏まつて候。さあらば八撥を御打ち候へ。シテ中入あり一。〽さても〳〵。今宵の亭主のおもてなしには。只今の幼き人に八撥を打たうず。又亭主は獅子を舞うて御目にかけうとの御事にて候。語抑も此の獅子と申す事は。昔大江の定基出家し。寂照法師と申しし時入唐し給ひて。震旦の古跡を眺めめぐり。さて文珠の淨土に到らんとて。石橋を渡らんとし給ひ候に。瀧の流れ雲より落ちて。霧深ければ。佛力ならで渡る事叶はず。いかゞはせんと躊躇したりけるを。忝くも大聖文珠現れ見え給ひ。淨土の有樣寂照に拜ませ給ふ。文珠影向の砌なれば。しおんの花ふり笙歌の聲たうとければ。此の山中の禽獸。これに浮かれ舞ひしとかや。それよりして獅子を舞ふと云ふこと始まりしと申す。然れば誠に面白き舞曲にてあらうずると存ずる。いや。いらざる獨り言を申すうちに。時刻が移つて候間。幼き人には八撥を打たせ申さばやと存ずる。〽いかに幼き人へ申し候。急いで八撥を打ち申され候へや。金鞨鼓にて八撥に變る事なし。シテ盃持出て。シカ〳〵あり一。此方へ御通りあれとの御事にて候。シテ通し。ワキより唯今の謠はと云ふ。シテシカ〳〵。「さあらば此の由申上げうずるにて候。これなる兩人はのたつねなし。〽討たうとは。シテシカ〳〵。〽八撥ならば八撥とおしやらいで。近頃驚いて候。されば討たうとおしやるに依つて。近頃驚いて候。と云ふことなし。

同

アヒ　供人

ワキの供して出る。ワキシカ〳〵。〽御前に候。シカ〳〵。〽畏まつて候。〽やれ〳〵目出度いことかな。訴訟悉く御叶ひなされて。思召す儘の御下りおや。急ぎ御宿を取り申さう。此の宿では甲屋がよいと申す。甲屋に致さう。雙屋へ向い一。〽いかに此の内に案内申し候。シテシカ〳〵。〽某の頼うだ人を御供申した。一夜の宿を御貸し候へ。シテシカ〳〵。〽信濃の國の住人望月の秋長殿ではおりない。シテシカ〳〵。〽心得申して候。ワキへ向いて。下に居て。〽いかに申上げ候。御宿を借り申して候間。かう〳〵御通り候へ。シテシカ〳〵。〽誰にて渡り候ぞ。や。亭主にて候か。何の御用にて候ぞ。シテシカ〳〵。〽それは近頃にて候。其の由申さう。またそれなる人たちは何者にて候ぞ。シカ〳〵。〽それは一段の御馳走にて候。それに御待ち候へ。其の由申し上げ候べし。ワキ〽いかに申上げ候。此の家の亭主酒を持つて參られて候。ワキシカ〳〵。〽畏まつて候。シテに向ひて。〽かう〳〵御通り候へ。ワキへ。〽またあれに候者は。此の宿にある盲瞽女にて候。御慰みのために同道申され候。〽此方へ御通り候へとの御事にて候。ワキシカ〳〵。〽畏まつて候。子方に向ひて。〽いかにこれなる人。何なりとも面白き事を一節御謳ひ候へ。子方シカ〳〵。〽いや〳〵。それは差合ひがある。餘の事を御謳ひ候へ。ワキシカ〳〵。〽謠を御所望候へば。一萬箱王が親の敵を討つたる所を謠はうと申す程に。差合ひがあると申すことにて候。ワキシカ〳〵。〽さあらば其方次第に謳ひ候へ。曲舞過ぎていざ討たうといふ時。〽あゝ暫く。これは何と。子方シカ〳〵。〽それならばそれとおしやらいで。聊爾な事をおしやる程に。愛にて亭主に何も能はないかといふ。子方。獅子を御望み候へといふ。シテ幼き者は筋なき事を申すといふ時。〽いや〳〵。幼き人の申さるゝ程に僞りはあるまじい。急いで舞うて御目にかけ候へ。シテ。拵へて參らうずる間。その間にこれなる幼き者に羯鼓を御打たせ候へ。〽それは近頃にて候。さあらば急いで御拵へ候へ。子方に向ひ。〽なう〳〵これなる幼き人。萬能に達した子ぢや。亭主拵への間に。

急ぎ鶏皷を御打ち候へ。

出鼓のうちに。切戸より入るよし。

求塚（もとめづか）

アヒ　里人

へこれは。此の生田の里に住居する者にて候。此のうちは何方へも參らず候間。今日は罷出で心をも慰まばやと存ずる。や。これなる御僧は。此の邊りにては見馴れ申さぬが。何方よりの御出でにて候ぞ。シカ〳〵。へ心得申して候。さて御尋ねありたきとは。いか樣なる御事にて候ぞ。シカ〳〵。へ我等も此の邊りには住居申せども。委しくは存じも致さぬさりながら。始めて承り候を。何をも存ぜぬと申すもいかゞに候間。大方承りたる通り御物語申さうずるにて候。謡先づこなたに見えたる在所は。津の國生田の里と申し候。又あれに一村茂りて見えたるこそ。生田の森にて御座候へ。當國に於いては。かたの如く名所にて御座候。殊に今の折からは。生田の若菜と申して名物なれば。昔より何れの歌人も。此の所の若菜を歌にも詠じ。ほめ給ひたると申す。さる程に。これなる塚を求塚と申し候。之を求塚と申す仔細は。古へ此の生田の里に。うなひ乙女と申して。貌人にすぐれ。美しき女の御座候ひけるに。皆人この女を見て心をかけ。我も〳〵と之を偲ばぬ者は御座なかりしと申す。その中にもさゝ田男茅渟のますら男と申して。二人の男の候ひしが。奇特なる事にて候ひけるぞ。同じ日の時も違へず。かの二人の男。うなひ乙女の方へ文玉章を送りければ。其の時乙女思ふ樣。我が身一つにして。二人の方より。同じ日の同じ時。か樣に文を得て。あなたへ靡くならば。こなたの恨あるべし。又こなたへ靡くならば。あなたの恨となるべし。とかく何方へも靡き申すまじきと思切り。終に文の返事もせざりしかば。それよりなほ以て二人の男憧れ。我れ劣らじと心を盡くし。詞の品をかへ。數々の文を送り申す程に。うなひ乙女はせん方なく。此の上は力及ばず。何れへなりとも靡き申すべし。さあらば二人の人に勝負を決し。其の勝ち負けに依つて。何れへなりともなびき申さんと申しける。これこそ然るべき事なりとて。さて勝負には何あらんと云ひける時。乙女申すは。あの生田川の鴛鴦を射て。何れなりとも矢先の當たりたる人を。夫（つま）と定めんと申す。二人の男は之を聞き。實にもか樣にこそあるべき事なれとて。頓てそれより日限刻限を定め。兩人ながら生田川に立出で。雙方共に矢先を揃へ。暫しかためて一度に放つ矢に。かゝる奇特は御座あるまじい。一つ鴛鴦の一つ翼に。二人の矢の當たり申す程に。勝負はなかりしかども。二人の男は。互に我が方へ迎へんと。爭ひ申す程に。彼の女思ふ樣。此の上は更に誰を恨みん樣もなし。我あればこそ人もかゝる思ひをかくれ。とかく身を空しくなさんと思切り。夜に紛れ家を出で。此の生田川に身を投げ。空しくなり申して候。所の者ども。彼の女の心中を不憫に思ひ。死骸を取上げ此の土中につき籠め申して候へば。二人の男は之を聞き。是處に來り。我れ故か樣に身を投げ。空しくなりたる事のあはれさよと。二人共に互に名を名告り合ひ。此の塚の上にて刺し違へ。空しくなり申して候。されば兩人の者共。此の塚を求めて來りたる故を以て。今の世までも之を求塚と申し候。最前申す如く。此の儀に於いて色々御物語あるとは申せども。先づ我等の承りたるは。かくの分にて候が。さてお尋ねはいか樣なる御事にて候ぞ。シカ〳〵。へこれは奇特なる事を承り

候ものかな。某推量仕るに。お僧の御心中貴うましますにより。御弔ひをも受け佛果に到らんと。古へのうなひ乙女の幽靈。假に姿をまみえ申したると存じ候。此の女に。男の恨を深う請けたる者なれば。別して業因も深からうずると存じ候間。都へ御上りは御急ぎなりとも。暫く此の所に御逗留候ひて。彼の罪深き女の跡を弔ひ。其の後御上りあれかしと存じ候。シカ〳〵。へ、渡りに住む者なれば。御逗留のうち。また御見舞ひ申さうずるにて候。シカ〳〵。へ心得申して候。

紅葉狩

アヒ　供人
同　末社

な　へ扨も〳〵見事な紅葉かな。おの〳〵酒を聞召して。面白う紅葉御覽ぜられ候へや。ト云うて笛の前に下に居る。ワキツレシカ〳〵。へ案内とは誰にて渡り候ぞ。シカ〳〵。へこれは此邊りの女臈達にて候。紅葉を御覽なさるゝ。又あれに立たせられたは如何なる人にて候ぞ。シカ〳〵。へあう。よし其方は誰にてもあれ。此方は只さる御方とばかり御申しやれや。

（末社亂序に出る）へ斯樣に候者は。石清水八幡宮に仕へ申す武内の神にて候。只今罷出る事餘の義にあらず。不思議なる事の出來。思ひも寄らざる御使に參じ候。それを如何にと申すに。信濃國戸隱山に。鬼神雲霞の如く籠り居て。人を取る事その數を知らず。上下の惱み申すばかりも御座なく候。惣じて此の鬼神と申すは。此の朝國々を遍滿して。或は山に入り。又ある時は里に下つて。人間を惱まし國家萬民の嘆き。是に過ぎたる事は御座なく候所に。今また信濃國戸隱山に籠り居て。惡事を致す事甚だ以て盛んなり。然れば爰に桓武天皇より八代の孫。平惟茂と云ふ人。戸隱山に鬼神の住む事をいさゝかも知り給はず。御狩の爲かの山に分入り給ふを。戸隱山の山神。神通方便を以て。是をよく知り濟し。折柄紅葉狩に事寄せ。美しき女と身を變じ。惟茂に出合ひ申す。惣じて人間をたぶらかすには。酒に過ぎたる事はあるまじきとて。色々樣々の名酒を集め。大勢の美女となつて紅葉の下蔭を方取り。幕を打ち酒宴をなし惟茂を待ちかけ申すを。左樣の事とは夢にも知り給はず。かの邊まで御出でありしを。左右なうにたばかり大勢立寄り。遂に幕の内へ招じ入れ申す。さすが名を得し惟茂も誠の美女と思ひ。心弱々となつて打解け給ふ所を。種々の珍しき物を集め御肴とて參らせ。あなたの盃こなたの盃とて。幾度ともなく酒を勸め申す程に。盃の數も重なりぬれば。正體もなく醉伏しまどろみ給ふ。かの鬼神はやよき時分と思ひ。惟茂の命を取らんとしけるを。忝くも八幡大菩薩この事不憫に思召され。急ぎ某に參り。夢の告をも知らせ申せとの神勅により。是迄罷出でゝ候。則ち八幡宮よりこの御劔を差遣され候間。急ぎかの戸隱山に分入り。惟茂にこの樣體を知らせ申さばやと存ずる。まづ急いで參らう。誠に。かの惟茂は。八幡宮の御内證に相叶ひたる人にて候ぞ。斯樣の有難い事は御座あるまい。や。神通を得たれば。刹那が内にはや戸隱山に着いた。爰で酒宴をなしたと見えて。木具土器の體だや。扨かの惟茂はどこもとに居らるゝ事ぢやまで。●されぱこそあれに正體もなう醉臥して居らるゝ。頓て示現をおろさうと存ずる。如何に惟茂樣に聞き給へ。先に酒を勸め申すなは。此の山の鬼神なるが。是皆命を取らんといふ計略なり。斯樣に正體もなく醉臥しまどろみ給ふを。忝くも八幡宮あまり不憫に思召され。この武内の神を差遣され

候。乃ち劔を參らせられ候間。この御劔をもつて。やす／＼と鬼神を從へ。再び御上洛あれとの御事なり。八幡宮も力を添へ給うずる間。如何にも頼母しく思召され候へ。斯かる奇特の御神託を請け。何とて驚き給はぬぞ。あら正體なや。なう如何に惟茂。急ぎ夢を覺され候へ／＼■

盛久（もりひさ）

アヒ　家來

（鎌倉殿に參りければ。ト云ふ所を過ぎ一出る。立ちながらこれを語る。）

へ扨も／＼奇特なる事かな。盛久の只今を御最後と見えさせ給ふ所に。御太刀取五體すくみ目も閉ぢ寒がり。覺えず太刀を取落されたれば。隱れもない銘のお太刀なれども。眞中より二つに折れて。盛久は思ひも寄らぬ命を助かり給ふ。末世の今の世は申すに及ばず。上代にも斯様の奇特はあるまじいと存ずる。此の上は盛久の御命は。五百八拾年目出度からうと存ずる。誠や皆人の御物語を承れば。只今の奇特にこそ。殊の外の仔細があれ。それを如何にと申すに。常に盛久は清水の觀世音を御信仰あつて。毎日怠らず觀音經を。御讀誦なされたるによつて。其の經の功力を以て。お太刀も折れ不思議の命を助かり給ひたると申す。尤も斯様にこそ御座あらうずる事なれ。又これについて我が身の上に於て思ひ合する事が御座る。其の仔細と申すは。某悴を一人持つて御座るが。此頃寺へ上せて御座れば。小刀が欲しいと申す程に。關の小刀の上々を一本とらせて御座れば。限りもなう悦うで御座るが。何と致したやら二つに折れて。中々悲しいと申してほゆる程に。やれ泣くな。又求めてとらせう程に。心安う思へと申して御座るが。誠に奇特はあるもので御座るぞ。承れば此程この子が寺で懈怠なく。いろはを讀うだと申すが。是は疑ふ所もない。此の中讀うだいろはの功力を以て。かの小刀が折れたと存ずれば。一人息子が心中もかはゆし。此の様な嬉しい事は御座らぬ。や。是は私の悴の身の上。まづ今日の盛久の御事を。頼うだ土屋殿へ物語申さばやと存ずる。如何に申上げ候。諸々（もろ／＼）今日の盛久に就いての奇特。お太刀の折れた樣體。中々昔も今も斯かる奇特は。御座あるまじいと存ずる事にて候が。扨お前には何と思召され候ぞ。ワキシカ／＼。へ中々。某もあれにて見申して候が。上代にはいさ知らず末世において。斯様の奇特なる事は御座あるまじいと存ずる。シカ／＼。へ畏まつて候。如何に盛久へ申し候。目出度き折柄なれば。烏帽子直垂を着し。急ぎ御前へ御參りあれとの御事にて候。

【や】

楊貴妃（やうきひ）

アヒ　蓬萊宮の邊りの者

ワキシカ／＼。へ案内とは誰にて渡り候ぞ。シカ／＼。へこの邊りに左樣の御方は御座なく候。さてこれは何方（いづ）よりの御出でにて候ぞ。シカ／＼。へ唐土と仰せらるゝに就いて。思出したる事の候。爰に玉妃と申して御座候が。明暮唐土戀しや。越（こ）し方戀しやとしたしく仰せらるゝ御方の候が。もし斯様の人にては候はぬか。シカ／＼。へあれに見えたる森の内に。宮あまた御座候中にも。太眞殿（たいしんでん）と打ちたる額の候。是をしるべに御出であらうずるにて候。シカ／＼。へ重ねて御用を承り候。シカ／＼。へ心得申して候。

養老

アヒ　山神

（舞序にて出る）ヘ斯樣に候者は。濃州本巣の郡養老のお山を守護し給ふ。護法善神に仕へ申す山の神にて候。唯今罷出る事餘の儀にあらず。此所に於いて養老の瀧とて。不老不死の泉湧き出ると。如何なる者か奏聞しける。君この事をお聞召され。忝くも勅使御下向なされて候。誠に珍しからざる申し事にては候へども。此の泉を養老と名付けられたるめでたき仔細。まづこの本巣の郡にとある親子の民の御座候ふ。此の子親に孝ある者にて。老いたる父母を育まん爲。明暮山に分入り。薪を樵り。これを兎角して。父母を養ひけるに。ある時山路の疲れにや。さん〲に違例し。取りたる薪を下し。この瀧壺のあたりにひれ臥しけるに。何となく此の水を掬びて飲めば。心もすゞしくまして疲れも助かり候程に。奇特なる泉と思ひ。薪を捨置き。かの水を汲んで急ぎ我家に歸り。父母に與へぬれば。二親これを呑みけるに。俄に心勇み心すゞしく。老いたる姿も若くなり申せば。皆人奇異の思ひをなし。是はたゞ老を養ふ水なればとて。それより此の瀧を養老とは名付けられて候。惣じて藥の水のめでたき事。我朝に限らず。唐土にも其の例あり。諸沃の野人。榕山の民は。常に甘露水を呑んで千餘歳の命を經る。さ程の命あらざる者も。八百歳の壽命を保つ事疑ひなし。また水の美なるものは。三危を第一とすとも云へり。此の外泉の德を考ふるに。秦の始皇は驪山の溫泉に入つて神女に逢ひ。漢の光武の時は。都の内に醴泉湧き出でゝ。是を飲むもの何れも皆舊病癒えて。壽命長遠なり。廬山の瀑布は。如何やうなる詩人も是を題せずと云ふ事なし。然れども此の養老の瀧何れにか劣り申すべき。斯かる奇特の藥の泉出で來たる事も。偏に泰平の御代のしるし。王位めでたき故なれば。此の山の守護善神は。急ぎ此の水を我が君に。捧げ申されうずるとの御事にて候間。さあらば君の御壽命長遠にして。御身息災に御座あらうずる事は。疑ひもなき御事にて候。や。是は養老のめでたき仔細。まづ我等如きもあれへ參り。かの稀人にお禮申さばやと存ずる。シカ〲。（茂の如し。）加ヘ如何に申上げ候。是は此の山の守護神に仕へ申す山の神にて候。是迄の御下向先づ以てめでたう存ずる。然れば守護善神の宮も罷出で。舞樂を奏して御目に掛け申さうずる間。その間に我等如きにも罷出で。お慰みを申せとの御事にて候。シカ〲。（茂の通り。）加ヘめでたかりける時とかや。（舞三段。）やら〲めでたやめでたやな。斯かるめでたき折柄なれば。我等がやうなる山の神も。顯れ出でゝ。諷ひかなで。これ迄なりとて悦び勇み。これ迄なりとて悦び勇みて。元の住家に歸りける。

同（藥水）

アヒ　老翁
立衆

シテヘ罷出でたる者は。濃州本巣の郡に年久しく住んで。めでたい祖父で御座る。立衆ヘ何事ぢや〲。シテヘ皆々出さしましたか。立頭ヘわごりよが勇みに勇んでお出やる程に。何やらめでたい事があるといふ程に。皆云合せて罷出てすは。シテヘ何と〲。有難い折柄ではないか。立頭ヘいや。何の樣子も何れも知らぬ。シテヘそれならば。追付け語つて聞かせう。シカ〲。シテヘまづ。この山の奥に奇特なる不老不死の藥の泉湧出でけるを。如何なる者か奏聞しける。帝聞召し及ば

れ、頓て此の所へ勅使を下さるゝと云ふは、ひとへに泉の德と云ひながら、有難い事ではないか。立頭へ如何さま、是は例少ない事ぢや。シテへ卽ち彼所にめでたい親子の者がある。父子共に罷出て養老のめでたい子細をば、奏聞に申上げられたれば、勅使も殊の外御祝着なされたげな。シカ〳〵。シテへそれに就いて藥の水のめでたい事は。この養老の水に限らず。唐土にも斯かる例はありと云ふ。彭祖仙人は菊水を飲んで七百歳の壽命を保つ。またしよくの野人やう山の民は、常に甘露水を飲むゆゑに、千餘歳の命を經る。さ程の命あらざる者も、八百歳の壽命を保つ事疑ひなし。シカ〳〵。シテへまた水の美なるものは三危を第一とすと云へり。この外。泉の德を考ふるに。秦の始皇は驪山の温泉に入つて神女にあひ、漢の光武の時は、宮の内に醴泉湧出で、是を飲む者、舊病癒えて、皆壽命長遠なり。廬山の瀑布は、如何なる詩人も是を題せずと云ふ事なし、然れどもこの養老の瀧、何れにか劣り申すべき。なんぼうめでたき藥の水の德ではおりないか。立頭へ扨も〳〵聞き事でこそあれ、皆何れも聞かしましたか。立衆へ返すがへすも斯様の御代に生れあうたは有難い事ぢや。シテへさりながら。我等如きの老人は。たとひ水を飲うだりとも、なかなか若やぎさうなものではなけれども。そと飲うで見うと思ふが何とあらう。立頭へ如何様、これ程年寄つて水を飲うでも要らぬ事ぢやが、飲まぬも如何ぢや。少し飲うで見さしませ。シテへそれならばいざ瀧壺へ行かう。さあ〳〵來さしませ。立衆へ心得た。シテへ何と何れも。水を飲うで若やいだ時は嬉しいことであらう。立頭へ身共が思ふは。この祖父共ばかり若やいでも濟まぬ事ぢや。姥も皆連れていて水を飲ませて。夫婦共に若やがうではあるまいか。立衆へ是は尤もぢや。シテへいや〳〵。此方衆さへ若うなつたらば。姥は其儘おいて、二十ばかりな見様のよい連添ひを拵へう。（何れも笑ふなり。）シテへ何かと云ふうちに瀧へ來た。扨も〳〵。せい〳〵として、いさぎよい瀧の色ではないか。立へ如何さま。心地よい水の色でおりやる。シテへいざ水を飲まう。立へ一段とよからう。シカ〳〵。シテへいで〳〵水を飲まんとて。同へいで〳〵水を飲まんとて。瀧壺に立寄り。一盃受けて飲みぬれば。髭のまはりがぞいぬき渡つて。元の黒髭となりたりけり。シテへさても〳〵。奇特な事ではないか、皆髭が黒うなつた。立へ心がわつきりとなつた。シテへいざもそつと水を飲まう。シカ〳〵。シテへ猶々水を飲まんとて。同へ再び受けて飲みぬれば。髮のまはりがぞいぬき渡つて。元の黒髪となりたりけり。シテへ扨も〳〵。白髪が皆黒うなつた。立へ身共は年を三十も四十も若やいだ樣な。シテへ追付け若男になるは知れた事ぢや。いかう飲み過ぎて、童しうなつては如何ぢや。もそつと飲うで歸らう程に。シカ〳〵。シテへいよ〳〵水を飲まんとて。同へ三盃飲めば不思議やな。かゞめる腰も。すぐになる。餘りに多く飲むならば。元の赤子になりやせん。元の赤子になりては如何にと。餘程飲うでぞ歸りける。

八嶋

アヒ　浦人

へ是は讃岐の國境の浦に住居する者にて候。此の間は鹽屋を見舞ひ申さぬ。今日は鹽屋を見舞ひ、鹽をならさせ鹽をも燒かせばやと存ずる。あら不思議や。鹽屋の戸が開いてある。戸のあいてあらうずる事はないが、不審な

や。これにお僧達の御入り候よ。いかに各この鹽屋は誰に借りて此の内には御入り候ぞ。ワキシカ〳〵。ヘいや〳〵主と申すは某ぢや。惣じて當浦の法度にて。人の鹽屋の戸を我等の叩くる事もならず。又某の鹽屋を餘人のいふ事もならぬ。御出家は妄語を仰せらるゝと存ずるよ。シカ〳〵。ヘ扨それは如何やうなる御事にて候ぞ。我等も當浦に住居申せども。さやうの御事委しくは存じも致さぬさりながら。お僧の初めて御下りあつて御尋ねあるを。何をも存ぜぬと申上ぐるも如何なれば。承及びたる通り。御物語り申さうずるにて候。語さる間八嶋の磯の合戰と申すは。其頃は元暦元年三月十八日の事にてありしと申す。源氏は陸に陣取り。平家は數多の舟に取乘り海上に控へ給ふ。さる程に其の日の合戰樣々ありしとは申せども。沖の平家の方よりも。小船一艘押出す。船中を見れば如何にも大きなる武者一騎長刀を横たへ。艪櫂を早めさせざゝめいて船を押さする。陸近くなりしかば。長刀をばからりと捨て。舟よりゆらりと上り。大太刀をすらりと抜き。眞向に差翳し大音あげて名宣る。是こそ平家に惡七兵衛景清といふ者なり。源氏の方に我と思はん人あらば御出であれ。一勝負まゐらうずると呼ばゝる。其時源氏の陣より。如何にも花やかなる武者一騎そろりと出で。只今是へ罷出でたるは。源氏の方に美尾の屋の四郎と申す者なり。景清と承る。天晴れ敵においてはよき敵なり。一太刀參らうずると云ひもあへず相掛りに掛り。錣を傾く。切先よりも火焔を出だし。鍔を削り戰ひ給ふが。何とやらん美尾の屋の持ち給ふ太刀の手の内の輕くなり申す程に。不審に思ひ。甲の吹返しの隙より見給へば。近頃大事の御事にて候ひけるぞ。太刀の鍔元二三寸おいてはつくと折れたると申す。美尾の屋は呆れ。如何に景清聞き給へ。御覽ずる如く太刀打折つて候程に。陣屋に罷歸り重ねて今一太刀參らうずると云うて引かるゝ。其時景清さらば。力勝負に參らうずる間御返しあれとて。二三間追掛けて美尾の屋の召されたる。甲の錣をおつ取つて。えいやつと云うて引き給ふ。又美尾の屋の四郎は。もし後へ引き倒されては一期の恥辱と思ひ。首の骨に力を入れ。又えいやつ前へ引かるゝ。何も大力がえいや〳〵と引く程に。引きも引いたり堪へも堪へけるぞ。甲の上より西の終り迄引いて。遂に甲の錣を引きちぎつて。景清はおほぬきに轉んで。したゝかに盆窪を打ち申さるゝ。又美尾の屋はうつぶしに轉ばれて思ふさまに。額を打たれたると申すが。三月中旬の事なれば。折によそへて鼻の先が落花仕りたると申す。互ひに起上つて。美尾の屋の四郎は甲の錣を引きちぎられたるを。無念に存ぜらるゝか。馬の陰に隱れ給ふ。又景清は引きちぎりたる錣を太刀の先にさし貫いて高く差上げ。是こそ京童迄も知りわたせる。惡七兵衛景清と云ふ者なり。敵も味方もよく見よと。大音聲に名宣り。互ひに陣を引き。合戰散じたると承及びて候。最前申す如く。委しき仔細は存ぜず候へども。まづ承りたる通り。御物語申して候が。扨お尋ねは如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。ヘ是は奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに。お僧の御心中貴うましまし。殊には古へをなつかしく思召され。判官殿の御亡心假に現れ給ひ。御言葉を交させ給ふが。判官殿と御名宣りあるべき事を餘り面はゆく思召され。義經の世の夢心。覺さで待てと仰せられたると存じ候間。御上洛は御急ぎなれども。此所に御逗留もあらば。猶々義經の誠の姿を。御覽ぜられうずるかと存じ候。シカ〳〵。ヘ重ねて御用もあらば承り候へ

し。シカ〳〵。ヘ心得申して候。

同　那須　　アヒ　浦人

ヘそも〳〵、四國の兵平家に背き。御味方待掛けし侍。愛の峯。かしこの洞より。十騎二十騎馳せ集り。程なく判官殿の御勢三百餘騎になり給ふ。今日は日暮れぬ。明日の軍と定め。引退きしに。沖よりも。尋常に餝りたる小船一艘漕出だし。陸へ向いてぞ押させける。渚七八段ぎり置いて船横さまになす。あれは如何にと見る所に。船の內よりも十七八なる遊君の。柳の五衣に紅の袴着たりしが。端紅の扇に日出だしたるを。船のせがひに挾んで立て。陸へそほおいとぞ招きける。判官後藤兵衞實基を召され。あれは如何にと御諚あり。さん候大將軍の扇御覽ぜられん所を。船底によき手垂を隱し置き。射落さんとの謀にてもや候らん。只あの扇を射させられつびよもやと申上ぐれば。さあらば味方の內に射つべき者誰かあるべき。さん候。御味方の內に射つべきもの數多御座候中にも。下野の國の住人。那須の太郎祐高が子に。與市宗高とて。小兵にて候へども上手にて候。それを如何にと申すに。あのかけ鳥などを仕るに。三つに二つは必ず射落し候と申上ぐる。さあらばその與市を召せエイ。與市その頃二十あまりの男なるが。黑革縅の大鎧同じ毛の甲をぬいで高紐に懸け。判官の御前に畏まる。義經御覽じやア如何に與市。あの遊君の立てたる扇の眞中射て。敵味方に見物せさせよ。やア。與市。御諚にて候へども。斯樣の分のもの仕つたる事なく候。必定仕るべき者に仰付けられつべうもやと申上ぐる。其時判官大きに怒つて。今度鎌倉を立つて。西國へ向はん殿原に。この義經が命を背く輩は急ぎ鎌倉を指いてお歸り候へ。重ねて沙汰申すべきとありしかば。いや〳〵とかくしては惡しかりなんと思ひ。承り候とて。頓て御前を罷立つ。斯くて其頃那須の小黑と聞ゆる名馬に。まろぼや摺つたる金覆輪の鞍おかせ。我が身かろげにゆらりと乘り。手綱かいくり。滋籐の弓の眞中握り。渚へむいてこそ步ませける。味方の兵與市が後かげを見て。はゝあ天晴あの若い者こそ。射つべきものなと申上ぐる。其時判官も賴母し氣にぞ見給ひける。斯くて馬の太腹ひたす程にもなりしかば。頃は三月十八日。西一天の事なれば。折節北風荒うして。浪は高し船は小さし。浮いつ沈んづ〳〵搖られければ。扇もさだかに見えざりけり。其時與一潮を掬んで手洗とし。兩眼ふさぎ。南無八幡大菩薩別しては氏の神。那須湯泉大明神。此の矢はづさせ給ふなよ。もし射損ずものならば。弓を切折り海に入り。人に面を向くべからず。懇ろに祈念し。目を開いてみれば。風も少しは弱り。扇もそと射よげにぞ見えにける。與市小兵と云ふ條。十二束三伏。取つてからりと打番ひ。よつ引き絞り過たず。扇の要一寸ばかりおいて。ひい。ふつりと射切る。鏑は海に入りければ暫しは鳴も止まざりし。扇は春風に一揉み二揉み揉まれ。海にさつと入る。端紅の扇の。白浪の上に浮めるは。たゞ紅葉の水に散り浮く如くなり。源氏平家は舷を扣き箙を扣き。射たりや與市。射たりや宗高とほめければ。判官も餘りの嬉しさに。やアいかに與市。人馬に息つかせよ。おことはつうと奧の間へいて。乳すはい〳〵と御諚ありたると承及びて候。

同　繼信の語　　アヒ　浦人

へその事にて候。同じく十八日の合戰に平家少し負色に見え申す程に。大臣殿は大きに怒り給ひ。能登守教經を召され。何とて花々しき合戰あらぬぞとありたれば。げに尤もなりとて。其のまゝ小船に乘移り。大勢人をも召具せられず。菊王丸と楫取一人にて。船を渚に押寄せ。礒ま近く飛んで下り。これは平家の軍兵に。門脇の次男。能登守教經といふ大剛の者。大將に矢一筋參らせん請け給へと。大音上げ名宣り給ふ。流石義經は名大將なれば。大將と呼びかけられ。此の矢を請けずば一期の恥辱と思召され。矢面に進ませ給ふを。龜井片岡何れも御馬の目に取附き。これはいかなる御事にて候ぞと。止め申されける處に。中にも心勝りの武者あつて。進み出て名告りける。これは奥州の住人。佐藤四郎兵衞繼信といふ者なり。教經の大矢を請け申さんとて。左右の手をひろげ。大きなる胸を差出し。矢坪はこゝもとに遊ばせとて。胸板を叩きける。能登守は。五人張に打番ひ。よつ引いてえいやツと放されければ。此の壇の浦は地震のゆる樣にて。一刻ばかりはゆりもやまなんだと申す。繼信の召されける鎧は。鐵を鍛へ。厚さ一寸ばかりに伸べたるを。二領引重ねて着給ふが。能登殿は恐ろしい大力にて候ひけるぞ。二枚の金をくつと射通し。後まで射拔かれける程に。何か命もたまるべきぞ。卽座に空しくなり給ふ。其の時繼信の舍弟。忠信と申して候ひしが。兄の敵を射取らんと。弓と矢を打番ひ給ふを。能登殿の郞等菊王丸之を見て。主を射させては叶ふまじいとて。教經を我が身の後に押退けゝれば。忠信も力及ばず。せめての事にと思ひ給ふか。菊王丸が股を射拔き。首を取らんとし給ふ。能登殿は。この童が首を源氏に取られては。無念なる事と思ひ給ひ。菊王が上帶を取つて。船へ投入れ給ふ。未だ死ぬまじき手負なれども。能登殿が大力に投げられ。菊王も終に空しくなりたると承及びて候。合戰の事。重ね〴〵の御尋ね迷惑仕りて候。昔物語なれば相違したる事もあるべく候間。重ねてよく存じたる者に御尋ねあらうずるにて候。

山姥

アヒ　里人

ワキ〽境川の在所の人の渡り候か。アヒ〽境川の者とお尋ねは誰にて渡り候ぞ。ワキ〽是は都方の者にて候が。初めて善光寺へ參る者にて候。是より善光寺への道あまた有る由承及び候間。本道を教へて給はり候へ。アヒ〽何と承り候ぞ。都方より初めて此所へ御出でなされて候が。善光寺への道の樣を。教へ申せとの御事にて候か。ワキシカ〴〵。アヒ〽仰せの如く是より善光寺へは道あまた御座候。上道下道あげろ越と申して御座候が。中にもこのあげろ越と申すが本道にて候。己心の彌陀。如來の踏分け給ひたるなるによつて。唯心の淨土に譬へられたる道にて候。餘の道五度十度御參りあらうずるよりも。このあげろ越を一度御參りなさるれば。如來の御內證に叶ひ給ふ道にて候さりながら。女性上﨟を御供と見えさせ給ひて候が。御乘物は叶はぬ道にて候。ワキ〽さあらば此の由を申さうずる間。暫く御待ちあつて給はり候へ。アヒ〽尤もにて候。ワキツレに云ふ。ワキ〽如何に申し候。道の樣體尋ね申して候へば。上道下道あげろ越とて。道あまた有る由申し候。中にも此のあげろ越と申すは。己心の彌陀。唯心の淨土に譬へられたる道にて候間。乃ち如來の踏分けさせ給ひたる道にて候により。いづれも御參詣のかた〴〵は。此の道を御通り候さりながら。乘物

などは叶はぬ由を申し候か。さて何方へ御參り候ぞ。ツレシカ〳〵。ワキ〽實にや常に心得申し候。さらば路次の案内者を頼み申さうずるにて候。ツレシカ〳〵。ワキ〽最前の人の渡り候か。アヒ〽是に候。ワキ〽唯今の由申して候へば。乘物をば此所に置かれ。あげろ越を御ひろひあるべきとの御事にて候間。路次の案内を頼み申さうずるにて候。アヒ〽今日は叶はぬ用の仔細御座候へども。初めて御參りと承り候間。さあらば御案内申さうずるにて候。ワキ〽近頃祝着申して候。アヒ〽頓て御立ちあらうずるにて候。ワキ〽心得申して候。ツレに向ひ。ワキ〽さらば御立ちあらうずるにて候。アヒ〽御覽候へ。殊の外の難所にて御座候。ワキ〽誠に承及びたるよりも險難なる山にて候。アヒ〽あら不思議や。俄に日が暮るゝ樣になつた。ワキ〽斯かる不思議なる次第にて候。さて此の邊りに宿はあるまじく候か。アヒ〽いや。邊りに宿は御座なく候。ワキシカ〳〵。アヒ〽先(さき)に在所は御座れども。後よりも結句遠ござる。太夫うたひあり。出るなり。アヒ〽日本一のこと。御宿參らせうと申す。太夫中入過ぎてから。アヒ〽又夜があけた。扨々奇特な事かな。如何に申上げ候。又夜があけて御座る。ワキ〽實に／＼元の日中になつて候。アヒ〽未だ暮るまじい日で御座つたと存じたが。斯かる奇特な事は御座あるまい。ワキ〽斯樣の不思議なる事は。其方も今が初めにて候べし。アヒ〽毎日この山へは通ひ申せども。斯樣の事は今が初めてゞ御座る。ワキ〽又おことに尋ね申したき事の候。是に渡り候御方は。都に隱れなき百魔山姥とて隱れなき遊女にて候。その謂れは。山姥の山めぐりするといふ事を曲舞によつて御謡ひあるにより。京童(わらんべ)の申しならはして候。さやうの故により。唯今山姥とやらん申して來り候が。山姥とは如何やうなる者にて候ぞ。御物語り候へ。アヒ〽其事にて候。愛元にも山姥になるものをとり／＼に申傳へ、ては御座れども。正身の山姥になる者が御座る程に。お物語申さう。ワキシカ〳〵。アヒ〽まづ。山姥には靫がなると申す。ワキシカ〳〵。アヒ〽ある時何と仕つたぞ。靫を山に取落いてござれば。程なう谷底へ轉び落ちたと申す。則ち毛靫であつたによつて。其の毛が髮となり。靫の胴が山姥の胴になり。目鼻が出來て。山姥になつたと申す。ワキシカ〳〵。アヒ〽桶がなると申す。ワキシカ〳〵。アヒ〽山里に古い桶が數多あつたと申す。小さい桶が頭(かしら)となり。乃ち底が拔けて目となり。大きい桶が胴となり。桶の輪が切れて手足になつたると申す。それに足と申す事がござる程に。是が正身の山姥であらうと存ずる。ワキシカ〳〵。アヒ〽木戸がなると申す。ワキシカ〳〵。アヒ〽山寺になる程年久しい古い戸があつたと申す。是も大風に吹かれて谷底へ落ちてござる。古い戸の事なれば。板が離れて胴になり。戸の棧が手になり。緣が足となつて。山姥になつたと申す。山に住む木戸と申す時は是が正身の山姥でござらうと存ずる。ワキシカ〳〵。アヒ〽是もなるまじいと仰せらるゝか。我の作つて申すではござらぬ。律義(りちぎ)な者が申してござるによつて。お話しを申した事で御座る。扨それに御座候人の名を何と申し候ぞ。ワキシカ〳〵。アヒ〽只今思ひ出した事がござる。先の女が申す事には。山姥の一節(ふし)を御謡ひあれ。その後誠の姿を現し申さうずると申して候間。頓て御謡ひあつて。山姥の誠の姿を御覽あれかしと存じ候。ワキ〽實に／＼唯今の女の謡るさに。山姥の一節(ふし)を謡ひ給はゞ。乃ち誠の姿を現して。うつり舞をまはうずる由申し。掻消すやうに失せて候。さやうに候はゞ。謡はせ申し候べし。御身も木陰にて正

身の山姥を御覽候へ。アヒ〽さあらば我等も是にあつて。誠の姿を見うずるにて候。

ワキシカ〲。アヒ〽心得申して候。

同

アヒ 里人

〽これもならぬと仰せらるゝ。其の様に仰せらるれば。何とやら某の飾りを申す様にて迷惑に存ずる。是は必ず我の作つて申すでは御座らぬ。さる律義な者が物語を致したを承つた通り。ふと少し咄を申した事で御座る。さり乍ら。何が何になるまいものとも申されぬ事が御座る。ある智識の物語を承り候に。卵胎濕化の四生とて。生類の品々を法華經にも説き給へり。中にも化生の類を尋ぬるに。百歳の狐は美女と化し。千年の松は青羊と變じ。萬歳の樹は青牛となり申し。思ひの女の石となり。老いたる楓の人となりたる例もあり。惣じて水中に水神魍魎とて靈物あり。深山には樹神魑魅と云ふものあり。又は精空金果などと申して。或ひは一足の小兒と現じ。或ひは又その長九尺ばかりの人と現れ。又は鼓の様に見ゆる時もあり。これ皆山の精なりと。山海經にもあるげに候。其の外色々品々の姿を現し。形はあると申せども。更に實體はなしと御座候へば。山姥もかゝる類とや申さん。惣じて。迷の眼より見ればなきものもありと見え。又悟りてみれば一切なしと見ゆ。されば。ありと云はんとすればあり。あるともなしとも一切には定め難し。さるにより。怪しきを見て怪しむ時には怪しく。又怪しまざれば怪しからずともあるげに候。然れどもそれは智者達の身の上の事。我等如きの様な愚かな者などは。さやうの事承りたるばかりにては中々以て一つも合點の參らぬ事にて候。や。最前から委しく存じも致さぬ事共を。むさと御物語申して候。まづあれに御座なさるゝ人の御名をば。何と申し候ぞ。シカ〲。〽扨々御名を承り候へば。某も只今思出したる事が御座る。最前の女の申したるを承り候へば。山姥の一節を御謡ひあらば。其の後誠の姿を現し申さうずると申し候間。頓て一節を御謡ひなされ。山姥の眞の姿を御覽ぜられかしと存じ候。シカ〲。〽さやうに御座候はゞ。我等如きも此所に雜在りて。かの山姥の眞の姿を見申さうずるにて候。シカ〲。〽心得申して候。

【ゆ】

雪

アヒ 里人

前セリフ皆の如し。〽先づ此の所を交野の郡禁野と申して。隱れなき名所にて候。昔在原の業平。此の處にて明暮れ御狩をなされ候ひしが。頃は極月末つ方の事なるに。俄に雪降り來り日の暮れて。前後を忘じ給ふ。折節一首の歌に。いかにせん。交野のみのゝ狩衣。濡れぬ宿かす人しなければと。か様に遊ばされ候へば。何國ともなく女一人現れ出でて。御歌の心を憐れみ。返歌に。分けつゝも。行くや交野の夕ま暮。濡れぬ宿かす人もありけりと有つて。頓て誘引參らせ御宿を貸し。一夜假寢の契を込めたると申す。いかさま此の女は人間にてはなく。雪鬼とやらん承り候。惣じて法華經には。卵胎濕化の四生など申して。色々生を受け候者ありとは申せども。雪鬼も化生の類にて。深谷岩の硲に。幾年ふり籠もりたる雪。自然と生を受け女の姿となり。折々人にまみえ申すと承及びて候。

雪見る。右の文句にて打濟む。

遊行柳

アヒ　里八

ヘ是は白川の邊りに住居する者にて候。承り候へば。遊行上人是より奥へ御下りなされ候が。未だあれに御座候ひて。愚官の藩に有難き御札を授け給ふと申す。急ぎ參り。御札を賜はり。十念をも受け申さばやと存ずる。や。未だ是に御座候よ。是は邊り近き在所に住居仕る者にて候。まづ以てかゝる田舎へ。不思議の御下向にて御座候。貴い承り候へば。嘆しき我等如きに。有難き御札を結縁なさるゝ由承り候間。御札を賜はり。十念をも受け申したき望みにて是迄參りて候。シカ〳〵。ヘなか〳〵御札の望みにて候。シカ〳〵。ヘ是は存じも寄らぬ事を承り候ものかな。我等も此邊りには住居仕れども。朽木の柳の謂れ。委しくは存じも致さず候さりながら。御尋ねなさるゝ所を。曾て存ぜぬと申すも如何に御座候間。昔より所に申傳へたる通り。大方御物語申さうずるにて候。語まづ。これなる塚の上なる柳を朽木の柳と申して。名木と名附けられたる仔細は。むかし人皇七十四代鳥羽院の北面。佐藤兵衛則清と申す人御座ありしが。此の人は世の中の徒なる有樣を思ひつらね。浮世を捨て元結を切り出家し。都の西嵯峨の奥とやらんに籠居し給ひ。その名を西行法師と申したるげに候。然るにこの西行は。敷島の道人にすぐれ仙洞の交りをなし。並びなき歌の上手にて渡らせ給ひたると承及びて候。斯かる歌人は見ぬ名所をも知るとは申せども。かの西行は諸國を巡り。名所舊蹟の歌をよみ。世上の名高き人にて御座ありしが。或時これより奥へ御下向ありしに。頃は水無月半ばの事なれば。あまりの暑氣をさまさんと。是なる柳の木陰に立寄り。水を掬で暫く休らひ給ひ。一首の歌に。道の邊に。清水流るゝ柳蔭。暫しとてこそ立止まりつれと。斯樣に詠吟ありてより後。今に於て此の柳を名木とは申傳へたる御事にて御座候。されば此の道の邊の歌はすぐれて名歌なればとて。新古今集にも入りたるなどゝは申せども。左樣の御事委しくは存じも致さず候。惣じて諸木多き中に。取分き柳は御寵愛あるが故に。何れの集にも柳の歌は數多ざあるやうに承りて候。又韓家の古へも。此の柳を愛する人多きとは申せども。中にも昔の陶淵明は。我が門に五つの柳を植ゑ置き。朝夕愛せられたると申す。五柳先生が傳を書き候ひしより此方。賢人君子これを詠び。その徳を顯し給ふ。草木は情心なきに。柳一木に限り離別を惜しむ心あるによつて。別れを作るには如何なる詩人も。此の柳を題せらるゝ。既に唐の劉夢得とやらんも。此の心を。長安陌上限りなき木。唯垂楊の離別を觀ずるありと。斯樣に作られたるなどゝ承及びて候。さる程に上人是より奥へ御下向なされ候へば。道あまた御座候。先づあれに見えたるは今道と申して。今の街道にて御座候。又この道は古道にて。御覽なさるゝ如く人倫絶え果て。誠に物淋しく。今は上下の行きかひも御座なく候へども。心ある人は名木の柳を御覽ぜられん爲。此の道を御通りなさるゝ。上人もその御志にて。此の道へ御出でなされたると推量仕りて候。最前申す如く朽木の柳の仔細。委しくは存ぜず候へども。まづ古き者の申傳へたる通り。大方申上げて候が。扨お尋ねは如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。ヘ是は奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに。上人これ迄の御下向を不思議の値遇と思ひ。非情の身を變へ。佛果に至らんと朽木の柳の精。老人とまみえ。

瞽言葉をも交し御道しるべ申したると推量仕り候。餘り不思議なる事にて候間。今夜は此所に御座候ひて。有難き御法をもなし給はゞ。重ねて奇特の御座あらうずると存じ候。シカ〳〵。〽御逗留の内は御用も承り候べし。シカ〳〵。〽心得申して候。

夕顔

アヒ　里人

〽是は五條邊りに住居する者にて候。此間は何方へも參らず候程に。今日は東山へ罷出で心をも慰まばやと存ずる。や。是なるお僧は。この邊りにては見馴れ申さぬが。何方より御出でにて候ぞ。ワキシカ〳〵。〽中々此邊りには住居申せども。左樣の御物語など我等如きの存ずる仔細にては中々御座なく。されども遠國より初めて御上りあり。お尋ねあるを。曾て存ぜぬと申すも如何に候間。大方承りたる通り御物語申さうずるにて候。語 まづ。この夕顔と申すは。頭の中將の思ひ人にて渡らせ給ひ候が。一人の御娘君をまうけ給ひてより。さる仔細あつて其後夕顔の上は。何處ともなく失せ給ひたると承及びて候。さる程に其頃源氏の御乳母。大貳と申して御座ありしが。この乳母以ての外にわづらはせ給ひ。この五條あたりに住み給ひけるを。忝くも光源氏は御心許なう思召され。御見舞のため。此所に御車を寄せられけるが。御乳母大貳のまします家の門を明け申す内に。あたりを御覽なされ候へば。あやしげなる小家に。夕顔の花今を盛と咲亂れて見え候程に。御隨身を召され。一房折りて參れと仰せられければ。其儘門に入つて。かの夕顔の花を折りける所に。内よりも白き扇のいたう焦したるを持ちて參り。是において參らせ給へと申されける。則ち其の扇にのせ惟光をして。かの花を奉りしに。源氏御車の上より御覽候へば。扇に一首の御歌の御座ありしと申す。心當てに。それかとぞみる白露の。光そへたる夕顔の花。斯樣にありければ。其時源氏の御返歌に。寄りてこそ。それかとも見め黄昏に。ほの〴〵見つる花の夕顔と。斯樣に御返歌ありたると承及べて候。其時こそ夕顔の上の宿りとは知ろしめされ。それより後光君は。折々此所に通ひ給ひ。深き御仲となり給ひたると申し候。然れどもこの五條邊りは。あまりあばら家の御事にて候程に。いざ此上は是よりしてあたり近き所に。御心あてあらんと宣ひ。頃は八月十五日月なかごとに。夕顔の上を御伴ひあり。何某の院に渡り給ひたると承及びて候。誠に定めなき世の習ひなれば。程なく夕顔の上は。何某の院にして終に空しくなり給ひたると申し候。最前申す如く。夕顔の上の御事委しくは存ぜず候へども。お尋ねにて候間。まづ我等の承りたる通り。あらまし御物語申して候が。扨お尋ねは如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。〽是は奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに。此所において夕顔の上の御跡を弔ふ者も御座なきにより。此度貴きお僧の是へ御出でを待ち給ひ。御法を請け給はんと嬉しく思召され。夕顔の上の幽靈。假に姿をまみえ給ひたると存じ候間。餘りに奇特なる御事なれば。此上は有難き御經を御讀誦あり。かの御跡を懇ろに御弔ひあれかしと存じ候。シカ〳〵。〽左樣に候はゞ御逗留の内は御用を承り候べし。シカ〳〵。〽心得申して候。

弓八幡

アヒ　山下の者

ワキ詞へ山下の者とお尋ねはいか樣なる御事にて候ぞ。シカ〳〵。へ心得申して候。シカ〳〵。へ八幡山下の者にて御座候が。いか樣なる御用にて候ぞ。シカ〳〵。へ是は存じもよらぬ事を承り候ものかな。我等もこの八幡の里に住居仕れども。左樣の御事委しくは存ぜず候さりながら。御前へ召出されお尋ねなさるゝな。何をも存ぜぬと申すもいかゞに候間。大方承及びたる通り。御物語り申さうずるにて候。語先づ此の八幡山に於て。御神拜年中に七十餘度に及んで御座あるとは申せども。取分け今月今日の御神事なれば。初卯の御神事と申して。別して目出度き仔細ども御座あるげに候。それをいかにと申すに。人皇十五代。神功皇后異國退治の時。我が朝の神々を御作ひあり。九州松浦の沖にて。神語ひをなされ候が。先づ御船を造らせられうずるとて。邊りに大山の御座候に。分け入らせ給ひ楠を一本切り。この木一本にて。御船を四十八艘御造りなさるゝ。是よりもかの山を船木山の山とも申傳へたるげに候。昔人の存ずるは。一艘の船に神の一社も乘り給はんと存じ候へども。中々左樣にては御座なく。一艘の船に大神小神三百七十五社も乘り給ひ。其の儘御船を浮かめられたるが。何と思召し候やらん。又御船を留められ。四天王寺の峯に於て。靈木の御座候に。黃金の鈴をかけ。七日七夜の御祈禱あり。吉日良辰を選み。御出船ありたれば。風波の難もなく。異國に到り給ひ。思召す儘に御退治あり。國土を鎭め御弓の筈を以て。三韓人の王は我が日の本の犬なりと。大石に書附け御歸朝ありしが。筑紫宇美と申す所にて。十二月十四日に應神御誕生あり。今に於て目出度き御事にてあるげに候。其後應神天皇は。豐前の國宇佐の宮と現れ給ふ。又當社と申すは。欽明天皇の御時。八幡思召すは。王城近く御上りなされ。帝都を守らんと思召し候へども。さりながら。大方にては御宮造り定めがたくて。八流れの幡を虛空に投げさせ給ひ。此の幡の落止まりたる所を鎭座と御定めあらうずるとて。かの幡を投げ給へば。忝くも本宮の峯に落止まり申す。扨は目出度き所と思召され。それより御宮造りあり。御影向なされ候が。即ち卯の年の二月卯の日の卯の刻にて。御座ありたるげに候。其時御前に壹人の巫のありしが。何とやらん神慮目出度き樣に見えさせ給ふとて。それ神樂を參らせられける。これを初卯の御神事の始めとは申せども。當社の御事は。弓箭の守護神と崇め奉り。殊には王位を守り給ふことなれば。次第〳〵に御神事をも行ひ。今はか樣に夥しき御神拜にて御座候。最前申す如く。初卯の謂れ其外お山の目出度き仔細。樣々御座ありとは申せども。先づ我等の承及びたる通り。御物語申して候か。さて御尋ねはいか樣なる御事にて候ぞ。シカ〳〵。へ是は奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに。是と申すも今日の御神事に御參詣な。神慮にも嬉しく思召され。殊には天下泰平の折なれば。高良の神な以て桑弓を我が君に捧げ給ひたると存じ候。此の上は急ぎ御上洛あり。此事奏聞ありたく思召さるゝとも。暫く御逗留なされ。神前に於て。御祈念をなさるゝならば。猶も奇特なることの御座あらうずるかと存じ候。シカ〳〵。へ重ねて御用もあらば。承らうずるにて候。シカ〳〵。へ心得申して候。

【よ】

夜討曾我（ようちそが）　大藤内

シテ　大藤内

アド　通行人

シテ〽なう悲しや。お助けやつてたもれ／＼。アド〽何事ぢや／＼。シテ〽お助けやつてたもれ。アド〽何事ぢや。シテ〽えいこなた誰ぢや。アド〽身共は此の邊りを通る者ぢや。餘り汝が取亂した體ぢやに依つて駈けつけた。先づ何事ぢや。シテ〽それ／＼。そこへ誰も追うては來ませぬか。アド〽いゝや誰も追うては來ぬ。シテ〽あゝ胸がだく／＼として。物が云はれませぬ。アド〽これはいかな事。身共がこれに居るからは。何も聊爾はさせぬ。氣をはつたりと持つて早う聞かせ。シテ〽あゝなう聞うて下された。おれは備前の國吉備津宮の神主。又藤内と云ふ者で御座る。久々訴訟の事があつて。此の鎌倉へ來て居まする。工藤左衞門祐經殿は。おれを可愛がつてたもるに依つて。朝も晩も。祐經殿の側にばかり居まする。今宵もむまいものを喰うて遊んで居りましたが。はや祐經殿はおしづまりやつたに依つて。おれも次の間へいて。とろ／＼とまどろうで居ましたが。ふいと寢耳に何やらちん／＼ばた／＼すると思はつしやれ。アド〽おゝ。シテ〽これは唯事ではないと思うて　こはご／＼障子をそと開けて見たればなう恐ろしや。アド〽何とした。シテ〽氷を突割つた樣な太刀をするりと拔いて。ばた／＼と斬りつけたに依つて。最早斬られたかと思うて。帶する隙さへなうて。やう／＼と太刀一振。あゝこりや尺八ぢや。アド〽さて／＼それはあぶない事であつたのう。シテ〽いやも危ないともこはいとも。云はるゝ事では御座らぬ。アド〽してそちは斬られはせぬか。シテ〽いやおれは何處も斬られはしませぬ。アド〽斬られたも知つてこそ。シテ〽斬られぬ證據は痛う御座らぬ。アド〽そつとは痛いか。シテ〽いやあ。アド〽そつとは痛いか。シテ〽あゝ此方は聞はいでも大事ない事に。根問ひをする人ぢやに其の樣に云はつしやれば。どうやらひり／＼する樣な。アド〽ちと見てやらうか。シテ〽おゝ見て下され。アド〽臆病者ぢや。おどしてやらう。シテ〽あゝ斬られねばよいが。アド〽やあこちはそれでも生きて居るか。シテ〽何とした。アド〽肩先がやげん程斬下げてある。シテ〽何ぢや。やげん程斬下げてある。アド〽なか／＼。シテ〽あゝやげん程なら痛いわいやい／＼。アド〽さて／＼臆病な奴ぢや。こりや／＼。うそぢや／＼。シテ〽やあ。うそぢや。アド〽おゝうそぢや。シテ〽うそかや。アド〽おゝうそぢや／＼。シテ〽あゝうそがぢやうなら嬉しい事ぢやが。はあ。うそがぢやうやら血も出ませぬは。アド〽さて其の斬らうとした者を知つて居るか。シテ〽そりや誰ぢやも知りませぬ。アド〽それは定めて曾我兄弟の者であらう。日頃祐經に親の敵ぢやと云うて。ねらふと聞いたが。扨は今宵本望を遂げたものであらう。シテ〽扨は祐經殿はお死にやりましたか。アド〽其の通りぢや。シテ〽あゝ其の樣な事は知らいで。宵まではうまいものを喰うて遊んでおゐやりましたに。扨も／＼いとしい事で御座るのう。アド〽何のいとしい事があるものか。あれは親の敵ぢや。シテ〽何ぢや。親の敵ぢや。アド〽中々。シテ〽それならば其の樣にも御座らぬ。アド〽さて汝が着て居るものは。何やらひら／＼した物ぢやが。それは何ぢや。シテ〽誠に。是は女めいた物で御座る。あゝこれは物で御座る。アド〽物とは。シテ〽祐經殿の側には美しい女中が大勢お居やりまする。又おれが寢て居た側にも。女めいた者が四五人も寢て居ましたが。扨は今宵の騷動で。ちつとの間かはつたものでがな御座らう。アド〽とかくそちは卑怯者ぢや。

シテ〽卑怯とは。アド〽はて卑怯ではないか。シテ〽えい。卑怯々々ともどかしさうにおしやれども。おりや終に人の振舞はぬものを喰うた事は御座らぬ。アド〽その事ではない。心中の事ぢや。シテ〽そりやまあ知らぬ事ぢや。とかくおれは斬られぬがましで御座る。扨々悲しいめに遭うた事ぢや。アド〽もそつとおどしてやらう。やあ〳〵。何といふぞ。今の大藤内を打渡らしたが無念なと云うて。曾我兄弟の者が是へ打つて来るといふか。それは誠か。さて〳〵恐ろしい事かな。シテ〽あゝこれ〳〵。何を云はつしやる。アド〽今そちを打渡らしたが無念なと云うて、曾我兄弟の者がこれへ打つて来るといふは。シテ〽しておりや何としませう。アド〽何とゝは。身共は知らぬ。シテ〽あゝこれ〳〵。どうぞこなたの所へ連れていて。かくまうて下され。アド〽そちをかくまへば。身共が迷惑をする。シテ〽人間一人助くる事で御座るわいのう。アド〽おのれが様な者はかうして置いたがよい。そりや打つて来るは。シテ〽なう悲しや。お助けやつてたもれ。アド〽そりや打つて来るは〳〵。シテ〽なう悲しや。お助けやつてたもれ〳〵。

吉野静（よしのしづか）

アヒ　衆徒（二人）

前ある時は中入で出る。前なき時は。ワキ出で。名乗り。太鼓座に居る。其後出る。

シテ〽うわい〳〵〳〵。アド〽ぶう〳〵〳〵。シテ〽づうわい〳〵〳〵。アド〽ぶう〳〵〳〵。シテ。ワキ柱の方へ行く。アドより言葉をかける。アド〽やい〳〵。これはまあ何事ぢや。シテ〽はて一大事があるを知らぬか。アド〽いや何も知らぬ。シテ〽はて。それ判官殿この暁この山をひらかれたと云ふが知らぬか。アド〽いやそれも知らぬ。シテ〽是はいかな事。是程の事を知らぬと云ふ事があるものか。是は殊の外一大事ぢや程に。この吉野十八部のおとな中寄合ひをなして。大講堂で談合せまいか。アド〽是は一段とよからう。シテ〽それならば下に居さしめ。アド〽心得た。シテ〽まづ。判官殿は如何程人をつれ退かれたぞ。アド〽されば。如何程で退かれたも知らぬ。シテ〽某が思ふは。定めて大勢でひかれたと思ふ事ぢや。アド〽いや〳〵。餘り大勢ではあるまいと思ふ。シテ〽いや〳〵。聞及うだ判官殿の事ぢや程に。さぞ夥しい人數であらうと思ふによつて。身共は氣遣ひに思ふ事ぢや。アド〽何れ案じ事も尤もなことぢや。シテ〽これは何卒様子が聞きたいものぢやな。アド〽いかさま知りたいものぢや。狂言下に居る時。ワキ太鼓座を立つて。下に居。拜仕方あつて。又立つて。正面にて狂言二人の間を通る。狂言見付け。シテ〽これなる人は。ぬれわらんづで如何やうなる人ぞ。ワキシカ〳〵。シテ〽はあ。爾人ならば是が知られう。尋ねう。アド〽一段とよからう。シテ〽なう〳〵。判官殿この暁この山をひらかれたが。如何程の勢でのかれたと云ふぞ。ワキシカ〳〵。シテ〽やい。十二騎ぢやといやい。アド〽それは心安い事ぢや。シテ〽それならばいざ来い。追掛けよ。アド〽心得た。二人共立ちかゝる。ワキシカ〳〵。シテ〽はあ。此の人も餘程判官贔屓ぢやよ。ワキ[illegible]ワキ座へ[illegible]見てゐて。又アドの顔を見て。ワキ[illegible]申し候はん〳〵ト[illegible]の時シテ〽いや唯こちも。二人〽おいゝゝゝとま申し候はん。シテ〽づうわい〳〵〳〵〳〵。アド〽ぶう〳〵〳〵。ト云ひながら入るなり。

吉野天人（よしのてんにん）

アヒ　末社

亂序にて出る。〽か様に候者は。吉野山に住居する山神にて候。唯今罷出る事餘の儀にあらず。

さて吉野山と申すは。天下に隠れもなき花の名所にて。峯も尾上も皆花にて候へば。盛りには雪か花かと疑はれ。見事なる事。中々申すも愚かなれば。國々在々より。貴賤群集なし。袖をつらね踵をつぎ見物仕る。また中にも千本の櫻は。隠れなき名木なれば。上界の天人天降り。花の梢を宿りとして。花に戯れ眺め居られ候所に。諸人は左様の者とは知らず。女性の身として家居を忘れ。花に眺め入り給ふ事。不審なりと申候へば。我は上界の天人なるが。此の花の香に愛でゝ。天上を忘れたりさりながら。今宵は爰に旅居して。信念なし給はゞ。花に戯れ。其の古への五節の舞。小忌衣の羽衣を返し。月の夜遊を奏せんとて。女は天に上り候。誠に。不思議の事にて候。か様の稀なる事なれば。我等も見物致さうと存じ罷り出た。やあ／＼。何かと申すうちに靈香薫じ音樂聞え。唯ならぬ音がする。皆々心を鎭めて拜み候へ。其の分心得候へ／＼。

（觀世流には亂序なき故。吉野山下の者と名告り語る。）

頼政

アヒ　里人

へ是はこの宇治の里に住居する者にて候。今日は志す日にて候程に。平等院に參らばやと存ずる。や。是なるお僧は。此邊りにて見馴れ申さぬが。いづ方より御出であり此所には御座候ぞ。シカ／＼。へ中々此邊りの者にて候。シカ／＼。へ心得申して候。扨お尋ねありたときは。如何様なる御事にて御座候ぞ。ワキシカ／＼。へ是は存じも寄らぬ事を承り候ものかな。我等も此所に住居申せども。左様の御事委くは存ぜず候さりながら。初めて御目にかゝり。かつて存ぜぬと申すも如何に候間。大方承りたる通り。御物語申さうずるにて候。語まづ。宮軍のおこりと申すは。源三位頼政の嫡子に。伊豆守仲綱と申して御座ありしが。この人都に隠れもなき木の下と申して。鹿毛なる名馬を持ち給ふが。宗盛の卿はこれを聞召されこの馬を御所望ありしに惜しみ申し。折節つかれ療治のため。田舎へ遣したると僞り給へば。御前の人々それこそ惜しみて僞りを申せ。昨日も庭乗りし。今日も湯洗ひしたるを見申したると申上げらるゝ。宗盛さては我に惜しみ斯様に申すとあつて。それより猶も重ね／＼の御使を立てらるゝ。その時仲綱は。父の入道に此の事斯くと御物語りありければ。たとへ金をまろめたる馬なりとも。さ程御所望の上は。など參らせぬぞとありければ。仲綱も力及ばず。一首の歌を詠み。木の下に添へ六波羅へ參らせらるゝ。戀しくは。來ても見よかし身に添ふる。鹿毛をばいかで放ちやるべきと。斯様にありしを。宗盛は御覧じ御返事もなく。天晴れよき馬とは思召されども。深く惜しみたる心中を憎み給ひ。かの馬の尾髪を切つて。仲綱と焼金を當て。御厩に立ておかれ。御一門の御參會には。珍らしき馬を見せ申さんと。仲綱を引出し。仲綱めに乗れ打て。張れなどゝ宣ひけるを。伊豆守は是を聞傳へ。身に替へて思ふ馬なれども御所望なれば參らする所に。結句斯様に天下の笑ひ草となる事こそ安からねと。大きに怒られければ。頼政これを聞き。仲綱にむいて。平家の人々我を侮り。斯様の振舞心得ず。命生きてもその甲斐なし。便宜を窺うてこそあらめとて。私にも思ひ立たず。高倉の宮を勸め御謀反の宣旨。治承四年五月十五日に。江州三井

寺を頼み。頼政の一門宮の御供申し下り給ふ。さる程に三位の入道幼少より召使はれたる。競の瀧口と申す者宿所に残り。六波羅に参り。存ずる仔細の候間罷し、宗盛公仕るべき由申上ぐる。皆人不審に思ひ如何あるべきぞとありければ。瀧口申す様。今度の謀反の様體頼政父子。我には夢にも知らせず。無念に存ずる間。いづく迄も御供申すべき由申しける。宗盛は誠と思召されお心とけ。南鐐と申す名馬を競に賜はる。瀧口は此馬を拜領し。其日の暮るゝを待ち宿所に火をかけ三井寺に來り。木の下の替りに南鐐を取つたると申せば。三位の入道はこの馬の尾髪を切つて。平宗盛と焼金を當てゝ。都の内に追放されたると申す。其時都より大勢を率して。取掛け給はんとの御沙汰しきりなり。入道頼政無勢にては叶はじと。南部の衆徒を頼み御下りありしかば。この平等院に暫く御陣を居ゑ。橋を取放ち給ふ。都よりの大將軍には。左兵衛頭知盛。頭中將重衡。薩摩守忠度。かれこれ都合二萬五千餘騎にて。宇治橋の川詰迄押寄せたれども。橋は引いたり越すべき様もなかりしに。心きゝたる武者あつて。やす〳〵と川を渡しけるが。三位の入道七十に餘り軍し。膝の口を射させ重手なれば叶はじと思召し。此所に扇を敷き御自害ありたると申候。名大將の御跡なればとて。斯様に扇の如く芝を取殘し。今に扇の芝と申して。かたちの如くも名所にて御座候。最前申す如く。委しく仔細は存ぜず候。我等の承りたる通り。大方御物語申して候か。扨お尋ねは如何様なる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。ヘ是は存じも寄らぬ事を承り候ものかな。只今思ひ出したる事の候。かの宮軍は。則ち月も日も今月今日に相當りて候。其推量仕るに。お僧の御心中貴うまし〳〵。殊には頼政の正命日なれば。かた〳〵の弔ひを請け。修羅の苦患を免れたう思召し。源三位の幽靈再び閻浮にまみえ給ひたると存じ候間。末は急ぎの御旅なれども。暫く此所に御逗留あり。頼政の御跡を御弔ひあれかしと存じ候。シカ〳〵。ヘ重ねて御用も候はゞ承り候べし。シカ〳〵。ヘ心得申して候。

【ら】

雷電（妻戸）

アヒ　能力

亂序なし　ヘかやうに候者は。比叡山延暦寺十三代の座主。師の僧正に仕へ申す能力にて候。唯今罷出る事餘の儀にあらず。天下の御祈禱の爲。僧正には百座の護摩を焚き。漸う滿じけるに。四明山の上ゝ。十乘の床の前に觀月を照らし。心水を清めおはします所に。何となく持佛堂の妻戸を叩く音す。いかなる者ぞと不審に思召し。妻戸を開き御覽ずれば。何とやう奇特なる事にて候ひける。既に此の世を去り給ひし。菅原の大臣にてましまず。此の大臣と申すは。昌泰四年正月二十日に。筑紫宰府へ左遷し給ひ。過ぎにし如月二十五日に儚く御逝去ありしにより。僧正は御跡をも弔ひ給ふ所に。深更に及び再び姿をまみえ給ふ事。僧正は驚き給ひ。夢現ともわきまへず。師弟の情をも忘れず。懷しさの餘り御出でありたると。涙を流し請じ入れ給ふ。菅丞相仰せられけるは。我れ死して後は。色々上人の御弔ひ有難く思召さるゝ。又唯今の御出では更に餘の儀にあらず。昔時平公の讒言を御用ひあつて。終に無實の罪に沈め給ふ。瞋恚のほむら猛火よりなほ盛なり。此度鳴る雷となつて内裏に亂れ入り。我につらかりし者ども皆蹴殺し。本望を遂げ給はんと思召すなり。

さりながら。其時は僧正に召され御祈禱あるべく候。これのみ心に懸かり思召さるゝ間。上人今までの御情を忘れ給はずば。必らず御參內なき樣に賴み思召され。これ迄御出でありたると。語り給ふ。僧正は聞召され。御歎きは尤もにて候。さあらばいか樣の勅使ありとも。一二度までは御參りあるまじいと仰せられける。菅丞相。いや〳〵。勅使幾度ありといふとも。御參內なき樣にと。重ねて仰せらるゝ。其の時上人。我れ王土に住んで勅命背き難し。三度に及び召さるゝならば。參內なくては叶はじと宣へば。丞相は大きに怒りを起し。面色變り。明王の御前に供へ給ふ。御食菓子のうちに柘榴のありしを。其のまゝ取つて噛碎き。妻戸に吐きかけ給へば。其の柘榴乃ち猛火となつて燃上りけるを。僧正少しも騷ぎ給はず。灑水といへる祕密の印を結び。妻戸に投げかけ給へば。行者の法力淺からざる故に。火焰も其のまゝに消え退き。菅丞相は煙に紛れ。虛空に失せ給ひて候。然るに此の菅丞相と申すは。世の常の古へより凡夫にあらず。天に生じては日月の光を顯し。國土を照らし。下界の地にては垣梅の臣となつて。萬民を治め。父もなく母もなき人なり。其の仔細は。菅原の是善卿の庭に。年五六歲ばかりなる兒一人。容顏美麗なるが。何となく花を眺め立ち給ふ。是善卿不審に思召して。いかなる人ぞ。何方より來り給ふぞと。問ひ給へば。我は父もなく母もなき者なり。願はくは相公を父と賴み申し度きと仰せらるゝ。相公は嬉しく思召され。頓てそれより恩愛の養育をなして。育て持ち行き給ふに。未だ習はざるに道を學び。才智共にすぐれ。十一歲の時。父前栽に出でて。菅丞相を近附け。若し詩や作り給ふべきかと問ひ給へば。少しも案じたる氣色もなく。月の光は晴れる雪の如し。梅の花は照る星に似たり。憐れむべし金鏡めぐつて庭上に玉芳の香しき事なと。即座に作り給ふ。かゝる奇特の事どもなれば。早や詩歌の道は言語に及ばず。其の後尊意僧正を師と賴み。天臺の門に入り。一切の經論に一字も滯る事なし。然れども。時平の大臣無實の讒言にて。配所に赴き給ふ事。之を深く歎き。七日が間御身を潔め。一卷の告文を書き。天拜といへる高山に登り。御足を爪立て。彼の告文を捧げ給へば。梵天帝釋その無實を憫れみ給ひ黑雲一村おり下がつて。彼の告文を取つて天に上がり給ふ。これまた不思議の瑞相なり。此度讒言の罪に。仇をなさんと思召すに。其の念力通じけるにや。都の內は俄に大雨降り下つて洪水となり。大風吹落ち大內震動して。軒の瓦は落ちて築地を破り。さも物凄く。上下身を潜め。之を悲しみ給へば。度々勅使立つて。急ぎ僧正に御參內あり御祈禱あれとの御事にて。僧正參內なさるゝ。先づ我等は天台の妙輪を持つて。急ぎ壇へ參れとの御事にて候間。急ぎ參らばやと存ずる。へ何と申すぞ。早や頓て御出でと申すか。皆々來れ。此度の御參內は。いづれよりも一大事の御參內にて候間。御供の人々は。心中に油斷なく。信心を致し。在家の者共は罷出で道をも清め。御參內の樣體を拜み申候へ。其の分心得候へ〳〵。

虛空に失せ給ひて候の次一本に此の菅丞相と申すはこゝより「不思議の瑞相なり」まで示○左の如くにあり。

然るに此の菅丞相と申すは。其の古へより凡僧にあらず。日月の光を顯し。父もなく母もなき人なり。菅原の是善卿の庭に。年五六歲ばかりなる兒一人。何となく花を眺め立ち給ふ。いかなる人ぞと問ひ給へば。相公を父と賴み申したきと仰せらるゝ。十一歲の時に若し詩や作り給ふべきかと問ひ給へば。少し

も案じたる氣色もなく。即座を作り給ふ。かゝる奇特の事どもなり。然れども無實の讒言にて。配所に赴き給ふ事を深く歎き。

羅生門(らしやうもん)

シテ　渡邊綱の家來
アド　同家來

シテ〽聞いたか〱。アド〽何事ぢや〱。シテ〽さても〱。唯今の事は一大事でないか。アド〽何事ぢや。シテ〽何と云うて。今の事を知らぬと云ふか。アド〽いゝや知らぬ。シテ〽沙汰の限りぢや。日頃宿ばいりをして。不奉公なに依つて。我が主の一大事をさへ知らぬ。さらば追附け語つて聞かせう。アド〽さらば語らしませ。シテ〽先づ今日は雨中なれば。御徒然に思召されたか。忝くも頼光の御意には。御酒宴をなされて。御遊覽あらうずるとあつて。頼うだ綱を先として。各々殘らず御參會あつた。なか〱御酒なども染み〱と參つて。何れも御機嫌殘る所もなかつたげな。その時御座敷の興にこそ仰せられつらう君の御意に。此の程都に於て何事か珍らしき事のあるぞと。お尋ねなされたれば。保昌といふ人が。粗忽な仁ではないか。其の事で御座る。此の程東寺の羅生門に。鬼神が棲むで。往來の人を惱まし申すが。上下萬民これを迷惑仕るゝと申上げられた。その時頼うだ者が。何が氣の早い仁ぢや程に。其のまゝ進み出て申されたは。さて〱保昌は。粗忽な事をおしやる。あの羅生門は王城の南門にてあるに。たとひ鬼神が棲めばとて。それを棲まはせて置くものか。と云うて齒を出された。所でまた保昌もむつきと腹を立てゝ。さては某が御前で僞りを申すと思召すか。まことと僞りと思召さば。今夜なりとも彼の羅生門へ行て。鬼神があるか無いかな。頼うだ者に行てお見やれと云はれた。何が頼うだ者が。健氣者ではあるなり。強い事を云はれた。アド〽何と云はれたぞ。シテ〽なか〱。今夜羅生門へ參らうずさりながら。たゞ參つては。參つたも參らぬも知れぬ程に。彼の羅生門に。印を立てゝ罷歸らう程に。何にてもあれ印を下さるゝ樣にと申された。また其の内に分別な者があつて。これは無用ぢやと云うて。留めた衆もあつたけれども。日頃の片意地を止めずに。是非印を下さるゝ樣にと申された。所で君も是非に及ばせられいで。印の札を遣された。彼の札を頂戴して。爰て云ふまい事を云はれたまでよ。アド〽何と云はれたぞ。シテ〽若し此の鬼神を從へ損じたらば。再び各々に御目に懸かるまいと云うて。御前をわめき立ちに立たれたが。先づ一大事を云はれたではないか。アド〽さて一大事を云はれた事ぢやな。シテ〽最早追附け出らるゝと云ふが。そち衆もこちも。とても供に行くであらうが。どうしたりともこち衆の命は。あつち物ぢやと思へ。アド〽そちは氣味の惡い事を云ひ出した。シテ〽供に行たりとも。逃げはせまいけれども。足もとの見ゆる樣に。夜が明けてからやり度いものぢやまでよ。アド〽誠に。夜が明けてから行たらよからう。シテ〽とかく云うてはなるまい。早う參つて御供せう。さあ〱。來い〱。アド〽あいた〱〱。シテ〽何とした。アド〽某は俄に腹が痛うなつた。宿へ歸つて蟲藥を呑うで。後から行くぞ。シテ〽そちは卑怯な事を云ふ。供を厭がつて其の樣に云ふか。アド〽さりとてはさうではない。後から行くぞ〱。シテ〽やい〱。返せ〱。扨て〱賢い事をなした。あれが歸つたれば。いかう心細うなつた。シカ〱。シテ〽何と云ふぞ。はやお出

でぢや。あの一人も供は召連れられぬ。やれ〱口惜しや。此の度お供して。天晴れ武邊をせうと思うたものを。扨も〱。無念至極なさりながら。供などを連れては。其の身の手柄が見えぬといふ事であらうぞ。尤も綱ほどの者が。斯う無うては叶はぬ事ぢや。いづれも賴うだ者の家來にてあらうず者は能く承れ。今度羅生門への御供には。一人も參らず候間。御歸りの時分を窺ひ。路次まで御迎ひに參らうずる間。構へて其の分心得候へ〱。

【り】

龍虎

アヒ　仙人

シテへ斯樣に候者は。この邊りに住む仙人にて候。唯今罷出る事餘の儀にあらず。爰に面白き事の候。ト云ふ時。立衆皆々出る。アドへ何事ぢや〱。頭取へやあ。是は何れも早う出られたよ。立衆へ中々。餘りおぬしが急いでお出やつたによつて。皆云合せて參つた。頭へ尤もでこそあれ。さあ〱。何れも斯う通らしませ。立頭へ心得た。さあ〱。皆々通らしませ。立へ心得た〱。立頭へ扨まづ是は何事でおりやる。頭へふむ。扨はわごりよは今度の樣子を知らぬか。立頭へいや。何にも知らぬ。頭へシカ〱。立へシカ〱。頭へこれは如何な事。身共はまたおぬし達が急いでお出やつたによつて。定めて樣子を知つてわせたものぢやと思うた。どこにかこれ程の事を知らぬと云ふ事があるものか。立衆皆々へシカ〱。立頭へそれでも知らぬは是非がない。頭へそれならば。追附け語つて聞かせう程に。ようお聞きやれ。立頭へシカ〱。頭へわごりよ達もよう聞かしませ。立衆皆々へシカ〱。

頭へ先づ此度龍虎の戰の候が。人間威勢を爭ふに少しも劣る事がない。獸と申しながら。何れも位高き物にて。先づ龍は鱗蟲の長なれば。九々の陽數を得て。八十一鱗。首には博山を頂き。喉の下に明珠あり。飛行自在の靈物にして。或ひは萬天の雲を起し。また大旱の雨を施し。其の德を聖人になぞらへ。飛龍天に在りとも書かれて候。されば帝の御衣にも之を織り。天子の御顏を龍顏と喩へ。御乘物を龍駕と申す。皇帝も是に召されて天上し給ふ。其外老子を龍に喩へ。孔明を臥龍と申すも。皆これ龍の佳名にて候。などと申す事ぢやが。何といづれも凄まじい事ではないか。立衆皆々へシカ〱。頭へまた身共が思ふは。あの虎と云ふ物は。龍より勢ひのひきい物かと思へば。なか〱さうではない。虎も龍に少しも負けぬ凄まじい勢ひな物ぢや。立衆へシカ〱。頭へそれを如何にと云ふに。虎は山獸の君と云はれ。眼には百步の威あり。その聲雷の如くにして。嘯く時は千山の風を生じ。萬の獸怖れをなす。されば尾の端に威骨を具へ。人これをふれば威勢あり。その鼻を門に掛くれば。子孫に貴き人多しとも申習はし候。殊に惡魔を掃ふ德あれば。よもぎを以て虎を作り。門に掛けたる例もあり。また勇士を虎賁と申すも。虎の勇力を借りたる名にて候。斯かる恐ろしき物なれども。竹を好きて住家となす。元來竹は直ぐにして。內の清きを我が友とし。猶千尋の影清く。曇らぬ法の道を知る羅漢に仕へ奉り。四すゐの內にも入り。斯かる類なき物なれども。代々の帝の御旗にも。青龍に白虎をつがひ。その優劣あるまじきなれども。己が威勢を爭ひて。衰龍雲をうかがつては。猛虎遠山の風を出すとも申習はし候。何と是も夥しい勢ひではないか。立衆へシカ〱。頭へ某が思ふは。何れも劣ら

お勢の凄い物ぢやによつて、畢竟月花のやうな物なれば、何程龍虎が爭うたりとも、雙方共に互ひに勝負はありさうない事ぢやと思ふが、何れもは何と思はします。立頭へ如何樣。龍虎の爭ひに勝負はあるまいな。何れも、立へ身共が思ふは。虎は足のある物ぢやによつて、虎が勝たうと思ふ。立へシカ〳〵。立へいや〳〵。某は龍が強からうと思ふ。立へ身共は虎が負けたらば。その皮がほしい。立へシカ〳〵、立へ馬の鞍覆ひにしたい。シテ〳〵。頭へ何れも先づお待ちやれ。この樣な險しい所で、他人の分で慾の深い事を云ふ事ぢや。立衆皆々さうさ。頭へあゝ〳〵、何と云ふぞ。早や龍虎の爭ひの始まると申すか、最前から云ふ通り。皆々凄まじい物共ぢやによつて。近附いて若し過ちでもすれば悪い程に。おい〳〵つツと脇へ逃げて。山の陰の岩窟の内。又は大木の間などから見てゐて、怪我なせぬ樣に用心なして見物召されい。立頭へ成程。それならば遠い所へ行かう。皆々斯うおりやれ。立へ心得た〳〵。頭へかまへて油斷召されな。立へシカ〳〵。頭へ皆々承り候へ。追附け龍虎の爭ひの始まり申す程に。遠り近くては無用に候間。何れも程遠い所へ立寄り。隨分用心なして見物仕り候へ。その分心得候へ〳〵。

此の間は、一人にて勤むる。

輪蔵（りんざう）

アヒ　末社

へ斯樣に候者は。當社に仕へ申す末社にて候。只今罷出づる事餘の儀にあらず。筑紫の宰府より。貴きお僧の初めて御參詣あり、御經を拜み申したきとの志ありける所に。なんぼう奇特なる事にて候なけるぞ。この御經を晝夜守護ましいます。十二天の其の中に火天（くわてん）は現れ出で給ひ。かのお僧に對面ありて。御身は宰府の人にてましますかと仰せられければ。かの僧肝を潰し。不思議やな初めて當社へ參詣の者を。宰府の者かと宣へば。如何なる人にてましますぞと。お尋ねありければ。其時火天仰せらるゝは。其方（そなた）は知ろし召されずとも、我は朝夕白雲の。迷はぬ法の友人なりと仰せられければ。猶も不審の御事なり。御名を名宣り給へとありければ。今は何をか包むべき。十二天の中に。火天是まで現れたりと仰せられければ。扨は天部の御姿を拜み申すぞ有難き御事と仰せられける。火天にてましまさば。五千餘卷の御經を一夜に拜ませおはしませと宣へば。其時火天五千餘卷の御經を一夜に御身の拜まんとは。思ひも寄らぬ御事なり。さりながら御身出家せしより此方、五戒を亂さず。誠に清淨の人なれば。今宵の中に殘らず拜ませ申すべし。暫く待たせ給へとて、火天は失せさせ給ひて候。誠に珍しからざる申し事なれども。この御經と申すは。忝くも釋尊靈鷲山にて三十成道より。八十入滅まで說かせ給ふ御經にて御座候。華嚴阿含、方等般若。法華涅槃、其外御一代の藏經なり。佛御入滅の後衆生歎き申す事は。釋尊御在世の御時は御說法をも承り。皆々得道申せしが。今は誰か御說法あつて。衆生を導引し給はんと、深く歎き申しければ。御弟子多き其中に、阿難（あなん）尊者と申せしは。御一代の說法を一々そらんじ覺え給ひ、多羅葉（たらえふ）の葉に書き記し。其後御說法ありければ。皆々悦び申す事限りも御座なく候。扨また佛大唐へ渡りしは。後漢二代の帝の御時。天竺より佛經を渡されしかども。もとより天竺の梵字なれば讀みわけ難かりしに。其頃謝靈運羅什三藏と申す御僧。一々飜譯なされてより、佛法は始まりしと申し候。又

其後欽明十三年壬申の年、佛經我朝に弘め給ひて候。則ち御經は則ち當社に納まり給ひたると申傳へ候。〳〵。是は某が獨言。御經讀誦の時節になつて候。我等如きにも罷出で。御經箱を運び申せとの御事にて候間。是迄罷出でた。斯かる有難き御事は御座あるまじく候間。男が老若に寄らず罷出で。斯樣の有難き御經を聽聞申し候へ。構へて其分心得候へ〳〵。

同　鉢叩の間

アヒ　鉢叩(立衆頭、立衆)

同　瓢の神

〽斯樣に候者は、都に住居する鉢叩きにて候。我等朋輩同道にて。北野へ參詣申さうずるとて。何れもこれへ參り候程に。暫く待たばやと存ずる。下り羽〽治まれる。〳〵。都の春の鉢たゝき。叩きついたる一節を。茶筅召せと囃さん。此の茶せん召せと囃さん。立衆頭〽やれ〳〵。おぬし達は囃子物で出られたよ。立衆〽その事でおりやる。目出度い折なれば。いづかたも賑々しいがけなりさに。囃子物で出ておりやる。立頭〽尤もにて候。さらば北野へ參らう。さあ〳〵來さしませ。立衆〽心得た。立頭〽何と思召しむ。我々が宗體の樣な變つた法義ない。髮を剃らねば出家にもあらず。衣を破れば俗にもなし。茶筅を賣つて渡世とし。手に一つの瓢をさゝげ。口に無常の偈を唱へ。遍く人々を勸むるに依つて。さながら大俗にも變はらぬ有難い宗旨ではおりないか。立衆〽さりながら。此の間は茶筅は賣れず。何れも衣に着古るばし。肩裾の分ちもないでおりやる。立頭〽此の樣に打揃うて參詣致すれば。定めて御利生があらうと存ずる。何かといふうちに北野ぢや。先づ御前へ向かはう。ト云うて。皆々正面下に居て。扇をひろげ拜む。立衆〽一段とよからう。立頭〽さて天神の末社瓢の神は。我等が宗旨の氏神なれば。瓢の神の前で勤を致さう。皆かう來さしめ。立衆〽心得た。ト云うて。皆太鼓座の方へ廻りくつろぎ。直に舞臺の眞中に並ぶ。立頭〽釋迦は去り。同〽彌勒は未だ世に出でず。彌陀の悲願を頼まずば。などか佛果に到らざるらん。立頭〽極樂を。同〽いづくの程と思ひしに。松葉たてたるまつんちよが家。立頭〽地獄とて。同〽遠さにあらず目の前の。憂き苦しみを見るにつけても。立頭〽世を樂に。同〽暮らす手段を尋ねしに。澄まず濁らず出ずも入らずも。立頭〽長からん。同〽さゝげの花は短くて。短き栗の花の長さよ。立頭〽奥山に。同〽猿が三疋集まりて。見ざる聞かざる物を云はざる。立頭〽何事も。同〽皆僞りの世の中に。死するばかりぞ誠なりける。立頭〽あれを見よ。同〽鳥邊の山に立つ煙。立ち續けても立たぬ日もなし。立頭〽あだし野の。同〽露は果敢なき譬なり。露にも劣る人の命ぞ。立頭〽思へば浮世は。同〽夢の世ぞかし。榮華はこれみな春の花。名利の心を止むべし。佛法あれば世法あり。煩惱あれば菩提あり。柳は緑花は紅の色々なれば。急いで淨土を願ふべし〳〵。なまうだ〳〵。南無阿彌だんぶや。なまうだ波羅イロ密はつはいほう。ト云うて。皆々ワキ座末より。笛の座の方まで並び。下に居る。笛　一セイ〽そも〳〵これは。當社天神の末社。瓢の神とは我が事なり。〽斯程目出度き影向に。〳〵。逢ふこそ我等も嬉しけれ。萬の事も願ひのまゝに樂しみ榮うる此の君の。枝を鳴らさぬ松の風。瓢の神は神託を傳へ。これ迄なりとて歸らせ給ふを。其の時人々袖に縋り瓢簞しばし。止まり給へと引止めければまた立歸りなほ行末を守らんとなほ行末を守らんとて本の社に入りにけり。

【ろ】

籠太鼓（ろうたいこ）

アヒ　供人

太刀持ちワキの供して出る。間座に太刀持ちながら坐る。ワキ呼出す。

シカ〳〵。〽畏まつて候。太刀置いて籠の前下に居る。〽御前に候。〽なう如何に清次。永の籠舎心中を察した。去り乍ら。各の日を承るに。頓て仰せ直されうずるとのお事ぢや程に。構へて心弱う持たしますな。また湯水の事は申すに及ばず。何なりとも心置かずに用を云はしませ。そつとも身共が如才はせまい程に。其の段は心安う思はしませ。や。清次〳〵。なう物を云はぬか。や。清次居眠るか。ハテ但し気むつかしいか。やあれ清次〳〵。これは如何な事。籠が破つてある。南無三寶。清次がぬけた。扨も〳〵苦々しい事かな。是は身共が迷惑にならうが何としたもいでおらう。去り乍ら。兎角申さいではなるまい。急いで申さう。ぬけて御座る。シカ〳〵。〽この曉籠を破つて清次がぬけて御座る。シカ〳〵。〽はア。シカ〳〵。〽いや親は御座らぬ。シカ〳〵。〽いや子も御座らぬ。

シカ〳〵。〽なか〳〵。おゝ成る程妻は御座る。シカ〳〵。〽畏まつて候。扨も〳〵あぶない事かな。まづ心がゆるりとした。急いで清次が妻をつれて参らう。楽屋へ向つて。如何に此の家の内に清次が妻のあるか。松浦殿より御用の事候間。急ぎ参られ候へ。太夫シカ〳〵。〽いや〳〵ちつとも左様の儀ではおりない。ちと物を御不審あらうずるとのおことぢや。急いでお参りやれ。清次が妻これ迄参りて候。ワキシカ〳〵。〽畏まつて候。立つて太夫に向ひて。斯うお通りやれ。ト云うて間座に居る。地〽いゝいゝ今の女を引立てい。ト籠の内ワキ呼ぶ。ワキシカ〳〵。〽御前に候。シカ〳〵。〽畏まつて候。立つて太夫の右の勢を持つ心にて。片膝を立て。強く。お立ちやれ。籠へ入れる。口傳。そのまゝ間座にゆき。肩を抜ぎ。太刀を持つて立つ。やあ〳〵。清次をこそ逃（のが）したりとも。汝を逃しはせまいぞ。ト撥勢。反を打つ。ワキシカ〳〵。〽畏まつて候。ト云うて一名乗座に一。シカ〳〵。〽尤もの仰せかな。まづ急ぎ太鼓をつらうと存ずる。ト云うて一。太鼓座へ取りにゆく。初めから斯様ならば。清次をも逃しはせまいものな。無念な事をした。まづ急ぎ太鼓をつらうと存ずる。太鼓を結びつけ。正面むいて云ふ。さらば時を打つて。番をわたさうと存ずる。ト云うて扇を抜き。太鼓のそばへよる。どん。どん〳〵〳〵〳〵〳〵。一つ。二つ。三つ。七つ。八つ。九つ十 ト撥を退き一。わア一つ打ち過ぎた。わア取つておいて明日（あす）のたしに致さう。ト云うて間座へゆき。下に居る。クドキ過ぎて立つて。あら不思議や。籠の女が狂気仕る。此の由申上げう。如何に申上げ候。籠の女が狂気仕り候。ワキシカ〳〵。〽中々の事。ワキシカ〳〵。〽尤もにて候。立つて。皆承り候へ。頼うだ人の御出でなさるゝ間。皆々籠のまはりを退き候へ。ト云ひ。間座へちよつと下に居て。後切戸より入るなり。

【ゐ】

井筒（ゐづつ）

アヒ　門前の者

〽是は。この在原寺の門前に住居する者にて候。今日は志す日にて候間。御堂へ参らばやと存ずる。や。是なるお僧は此邊りにては見馴れ申さぬお僧なるが。いづ方より御出でにて候ぞ。ワキシカ〳〵。〽中々この邊りの者にて候。シカ〳〵。〽心得申して候。扨お尋ねは如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。〽我等も此の邊りには住居申せども。左様の御事委くは存じも致さぬさりながら。お僧に初

めゝ御目にかゝりお尋ねあるな。曾て存ぜぬと申すも如何に候間。大方承りたる通り御物語申さうずるにて候。語まづ。此の處をば磯の上と申し候。又この寺は。在原の中將業平の御建立にて御座候により。在原寺と名付けられて。昔紀の有常と申す御方の御座ありしに。この御息女稚き時よりも。此の里に住み給ひけるが。また其頃にてもや候らん。業平も未だ稚うましまして。御息女の隣とかやに渡らせ給ひ。友達語らひし是なる井筒の邊に立寄り。朝な夕な遊び給ひしに。程なう大人しくなり給ひ。後には恥ぢ參らせられ。出會ひ給ふ事も御座なかりしが。されども互に忘れ給ふ事も御座なく。御心のしのび給ふ故にや。ある時業平は。かの息女の方へ一首の歌を詠みおくり參らせたると申す。つゝ井筒。ゐづつにかけしまろがたけ。すぎにけらしな妹見ざる間にと。斯樣に御座ありければ。息女の御返歌に。くらべ來し。振分け髮も肩すぎぬ。君ならずして誰かあぐべきと。この御返歌ありて後。妹背の御契り淺からず御座ありたると承り及びて候。又その頃河内國高安と申す所に。とある女の候ひしに。業平現なき御心にや。かの女の許に忍び給ひしを。有常の息女は是なくよく知ろしめされ候程に。業平思召すは。世の中のならひなれば厭ひ給ふ氣色もあるべきに。其の色の見えざるは。若し異心にもやあると。却つて御留守を疑ひ給ひ。又いつもの如く河内通ひとて出で給ふが。頃は秋の事にてもや候らん。御庭の傍に薄の一村候ひける其の蔭におし紛れ。夜もすがら更けゆく迄内の體を聞き給ふに。河内通ひを厭ひ給ふ事は思ひも寄らず。あまつさへ道の邊りを御心許なう思召され。其時一首の歌に。風吹けば。沖津白浪龍田山。夜半にや君がひとり越ゆらんと。斯樣に詠み給ひたると申し候。沖津白浪とは。業平の通り給ふ道に心の直ぐになき者やあらんに。君は如何し給ふぞと。案じ思召したる御歌なる由承及びて候。業平これを聞召され。それより河内通ひを思ひとまり給ひたると承り及びて候。最前申す如く業平紀有常の息女の御事。色々仔細ありとは申せども。まづ我等の承りたる通り御物語申して候が。扨お尋ねは如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。　〽是は奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに。業平夫婦の御跡誰あつて弔ふ者も御座なきにより。有常の息女假に姿をまみえ給ひたると存じ候間。末は急ぎの御旅なれども。暫く此所に御座候ひて。かの御跡を懇ろに御弔ひあれかしと存じ候。シカ〳〵。
〽御逗留の内は御用を承り候べし。シカ〳〵。
〽心得申して候。

【ゑ】

烏帽子折

アヒ　前　アシラヒ（一人）
　　　後　盜人（三人）

ワキシカ〳〵。〽誰にてわたり候ぞ。いやいつもの人にてわたり候よ。先づかう御通り候へ。（樂屋に向ひて）〽やい〳〵。いつもの旅人をお宿申し候。其の用意仕り候へ。其の分心得候へ〳〵。（間座に立つて居る。）〽やあ何といふぞ。これに吉次殿の御座る由を聞き。所の惡黨共今宵夜討に討たうといふ。先づ其の由申上げう。（ワキ前に居て）〽いかに申上げ候。お宿をなさるゝ事を所の惡黨共存じ。今宵夜討に討たう由申し候間。急ぎその用意を召され候へ。シカ〳〵。〽なか〳〵。（早鼓にて間一。）〽さても〳〵。組の者共多い中に。某究竟の者と思召し。先懸の統領を御倒

けられた。さても唯今この所に罷出ること餘の儀にあらず。都方より東國方へ黄金を商ふ商人に。吉次と申して御座候。今宵この宿に泊り候なげ。所の[illegible]熊坂の長範よく御存じあつて。今宵中に討取り申すべしさりながら。先づ住居の樣子を某に見て參れと仰せられた。さても[illegible]の者共は何をして居る事ぢや知らぬまで。（樂屋に向いて呼び出す。）へなう／＼皆の者共お居やるか。間二三へ何事ぢや。（[illegible]）間一へさてわごりよたちは何をして居るぞい。間二へ何をなして居るといふ事はない。はて長範殿酒盛を召されて。いつ[illegible]よりも御機嫌がよい時でな。間三へおゝそれ故街道の見廻りもせぬわいやい。間一へさてそち達は今宵の酒盛の仔細を知らぬか。間二三へいや何も知らぬわいやい。間一へはて都方より東へ金を商ふ商人に。吉次と申すがある。間二三へ成るほど聞き及うだ。間一へさあそれが今宵この宿に泊つたな。熊坂殿御存じあつて。今宵中に討取れ。それが寶は我が寶ぢあつて。宵より飲めや唄へやとの酒宴ぢや。間二へこれはよい事が出來たな。間三へ其の通りぢや。間一へ先づ我等どもに先駆をして。見て參れとのお事ぢや。さあ[illegible]おりやれ。間二三へ心得た[illegible]。

間一へ何と長範殿に物に拔からぬ人ぢやな。間二三へ其の通りぢや。間一へはやこれが吉次の泊り居る宿ぢやが。なか／＼これは表が殊の外嚴しい。此の體ではなか／＼這入られまい。間二へいづれこれは殊の外な用心ぢや。間三へなか／＼これでは這入られまい。裏の手へ廻つて。お見やれ。間一へいかさま裏の手はまたこれ程にもあるまい。間二三へ心得た／＼。（シテ柱の際にて。）間一へ裏の手も表の樣になければよいがな。間二三へいや表の樣にはあるまい。間一へこれは表に劣らぬ裏ぢや。此の高塀を切拔けば。はやあなたは座敷ぢや。間二三へいやそれは心安いことぢや。間一へそちたちは何ぞ道具を用意したか。間二三へ身共は何も持つて來なんだ。間一へさても油斷な事ぢや。これ[illegible]。これに槌もある。先づそちは松明を上げてゐよ。（松明三本共に持つて。）間三へ心得た／＼。間一二へさあ／＼毀て／＼。バタ／＼。ザラ／＼／＼。バタ／＼／＼。（高塀毀つ體なり。）間一へさて此の鋸で下地切り拔け。ズカ／＼／＼。（一間ほどに切拔く體。）間一へさあ／＼押せ／＼／＼。間二へ心得た／＼。間一二へえい。メリ／＼／＼／＼。間一へさても鳴つたり／＼。誰も聞附けはせぬかの。間二三へ殊の外な音であつた。

間一へこりや／＼。そちは這入つて樣子を見て來い。間三へ成るほど心得た。（[illegible]）さても廣い庭ぢや。さて誰も聞附けはせぬかいの。[illegible]知らぬのか寢まりかへつてゐる。先づ此の雨戸を開けう。サラ[illegible]。これは座敷も廣いは。さて爰には何もないて。まその奥へ行き[illegible]能う見たい物ぢやが。いや[illegible]寢間には這入られまい。先づ投松明をして見う。あゝ／＼。（此の所逃げて塀をくゞり。[illegible]へ戻つて。）間一二へやい[illegible]何事ぢや。[illegible]間三へ先づ座敷を開けて見たれば。殊の外廣い所で。中々聊爾に深入りは成るまいと思つて。先づ投松明をして見たれば。纔に十二三になる小童が。角の方に立つて居て。彼の松明を踏み消した。間一へこれはしたり。間二へはて合點の行かぬ事ぢや。此の内に吉次兄弟ならで外に其の樣な者はあるまいが。間一へいや今度は汝行て篤と樣子を見て來い。間二へ成るほど心得た／＼。先づ高塀くゞつて。さても廣い庭ぢや。これから座敷へ入つたと見えた。戸が開いてある。これは廣いことぢや。さて何者も居らぬに。何を見て人ぢやと思ひ居つたことぢや知らぬまで。（[illegible]ふ心持つ[illegible]）さあ／＼。何者やらちつとして居る。はてさて人

ならば咎めさうなものぢやが。これは不思議な事ぢや。先づ投松明なして見う。（前の通りにする。逃げ戻つて。懸りにて。）やい／＼。成る程十二三なる小童と見えて。すつくりとして居る。さりながら。咎めぬが不思議なに依つて。投松明なして見たれば。宙に切つて落した。間三へそれ見よな。間一へ扨は慥に居るか。間二へなか／＼。間一へこれは如何なこと。先づ其の由を申上げう。間二三へあゝこりや／＼また篤とそちも見て來い。間一へはて其方たちが見たの。もうよいわいやい。間二三へいや／＼さう云はずとも見て來い。間一へそれならば見に行かう。間二三へ早う行け／＼。間二へあれはいつも先駆をするが。今夜は段々尻込をし居ることぢや。間三へなか／＼其の通りぢや。（二三の仕草より少し思入をして。）間一へさて何處もとにあつた事ぢやの。されぱこそ。あれにつくりとしてゐる。先づ松明を投げて見う。はあ投げ返した。南無三寳。切り居つた。なう悲しや／＼。間二三へこれはまあ何事ぢや／＼。間一へあいたゝ／＼。（おも間をアド二人して抱へて入る。）

繪馬（ゑま）

アヒ　鬼

（亂序に一つ板ついて出る。）へこれは。蓬莱の嶋に住んで。衆生に寶を與ふるめでたき鬼にて候。只今罷出る事餘の儀にあらず。いつも節分の夜になり候へば。我等如きの者までも。伊勢太神宮に參り。年籠り仕りて候。然れば當年は別してめでたき事の御座候。その仔細は。いつも今夜になり候へば。齋の宮に繪馬のかゝる御神事あり。この御神事と申すは。昔より今に至つて。天照太神國土萬民を憐れみ給ひ。明の年をみな奏し御心に請けて。繪馬の黑白を何れにても掛け給ふ。衆生之を見て。繪馬の色により其の心得をなし。田作りを營み申す御神事にて候。まづ黑の繪馬の掛かる時は。雨露の惠みあまねうして。耕作に民苦をなす。白の繪馬の掛かる時は。風枝を鳴らさず。思ひの儘に五穀生ず。然れば當年は奇特なる事にて候かけるぞ。黑白二つの繪馬を。一度に來し給ふ。是と申すも愈々天下泰平にして。國土豐かにあらうずる謹と覺え申して候。扨。是は今夜の繪馬かゝりたるめでたき謂れ。何れも鬼共を呼出し。いつもの如く我君に御寶物を捧げ申さばやと存ずる。皆來れ。何とて遲なはり申すぞ。急いで出でられ候へ。其分心得候へ／＼。（立衆出て謡ふ。）へ有難や。／＼。治まる御代いろしとて。蓬莱の嶋よりも。鬼こそ出でて此の君に。寶物を捧げん。御寶物を捧げん。シテへやれ／＼皆ようこそ出でられたれ。めでたい事があるを。語つて聞かう。此方へ通らしませ。シカ／＼。へそち衆が知る如く。昔より太神宮に萬民憐れみ思召して。草木おだやかなる繪馬の黑白を何れにても掛けなさるゝが。愈々當年は天下安全にして。又は我等が住家迄も。豐にあらうずると覺ゆるは。當年初めて白の繪馬と黑の繪馬と。一度に二匹まで掛かつた。なんぼうめでたい事ではないか。（立衆シカ／＼。）へいや兎角申すうちに時刻が移る。當年はいつ／＼よりもめでたう謡文を持つて。此の君に御寶物を捧げうと思ふが。なんと思ふぞ。シカ／＼。へさあらば是へ寄らしませ。シカ／＼。へ蓬莱の嶋なる。鬼の持つ寶は隱蓑に隱笠打出の小槌。諸行無常しよ／＼月氏國にくわつと。同へ打出だしたる御寶を。手毎に持ちて我が君に。手毎に持ちて我が君に。捧げ申すぞ有難き。捧げ申すぞ有難き。

右衛門櫻（うゑもんざくら）

アヒ　里人

＼是は武蔵の國豊島の郡。柏木と申す所に住居する者にて候。漸う花の盛りなる由申候程に。一木の櫻の邊りへ參り。花を眺め慰まばやと存候。（ワキシカ／＼常の如し。）＼先づ柏木の右衛門督と申すは。藤原の中將殿御子にて御座ありしが。世の人に越えて美しき御方にて御座ありたると申す。又人皇六十一代。朱雀天皇の女三宮は。其頃光源氏の方に御座ありたると申す。或る時六條の院に御鞠の御遊びある時。右衛門督も召され。御出でありしと申す。其時女三の宮御秘藏のから猫。御翠簾内より外へ出で申せしに。彼の猫の引き綱に。簾の明きたる隙より。右衛門督女三の宮を御覽じて。戀しく思召し。忍びて御文を參らせらるゝ。何ぼう御いたづらなる御事にて候ひけるぞ。即ち女二の宮は右衛門督に下され置き候に。斯樣にはあるまじき御事なれども。戀路は是非もなき御事にて御座候ひけるぞ。女三の宮も御心移りし給ひて。御契りありたると申す。また或る時女三の宮。右衛門督の方より參り候文御覽ある時。光源氏かの文を。物のあなたより。そと御覽あり。其後かの文を何となく源氏御覽なされ候て御歸りなされ候を。右衛門督この事を洩れ聞き。扨は源氏に知れたる事を歎き。程なく空しくなり給ひたると申す。又御尋ねなされ候右衛門櫻と申す仔細は。此の一木右衛門督植ゑ置き給ふにはあらず候へども。所も爰は柏木なれば。昔を思ひ合はせ。後に附きたる名なる由申傳へて候。最前申す如く。（以下セリフ常の如し。）＼是は奇特なる事を承り候ものかな。扨は右衛門督今一人の女性は。女三の宮と推量仕候。（以下常の如し。）＼御弔ひにも預りたう思召し。是まで現れ給ひたると存じ候間。さ樣に思召さば。有難き御經を御誦へあり。夫婦の御跡を御弔ひあれかしと存じ候。

【を】

小塩（をしほ）

アヒ　里人

＼是は小塩の里に住居する者にて候。毎年とは申しながら。大原山の花。いつに勝れ咲きまさり。殊に今を盛なれば。今日罷出で花を眺め。心をも慰まばやと存ずる。や。是なる人々は。この邊りよりの花見とは見え給はず候が。何方よりの御出でにて候ぞ。（ワキシカ／＼。）＼中々この邊りの者にて候。（シカ／＼。）＼心得申して候。扨お尋ねありたきとは。如何やうなる御事にて御座候ぞ。（シカ／＼。）＼是は思ひも寄らぬ事をお尋ね候ものかな。我等もこの邊りの里に住居仕れども。左樣の御事委しくは存じも致さぬ。されども都より遙々御出でと申し。殊には若き人々のお尋ねなさるゝな。何をも存ぜぬと申すも如何に候間。我等承りたる通り。大方御物語申さうずるにて候。（語）まづ。この大原野の明神と申すは。大和國春日の明神と御一體の御事にて御座あるげに候。その仔細と申すは。昔奈良の都をこの山城國に移し給ひ。長岡の都に皇居なし給ひし時。后の宮は藤原氏にてましませば。春日の明神氏の神にて御座候により。南都に御座の御時は毎月詣でさせ給ひしかども。都遷りて後は遠里の御事なれば。供奉の人々迄も毎月の御事を如何あるべきぞと。所詮春日の明神を王城近く移し給はうずると。閑院の左大臣冬嗣公の仰せによつて。嘉祥三年庚午に。春日の本社をこの大原山へ御勸請あり。それよりして此所へ行啓ならせ給ひたると承及びて候。また其後淸和天皇の御時。長良の卿の御

息女に。二條の后と申してわたらせ給ひ候が。是も藤原氏にて御座候により。或ひは奈良の都迄も行啓なくては叶はぬ御事なる由を。此所へ春日を移し置かせ給ふ事。世の幸と嬉しく思召され。是へ詣でさせ給ひたると申し候。然れば二條の后初めてこの大原山へ行啓ならせ給ふ御時。御供の人々多き中に。在原の中將業平も。供奉し給ひしに。何とか思召し候ひけん。神前において業平一首の御詠歌に。大原や。小鹽の山も今日こそは。神代の事も思ひ出づらめと。斯様に詠じ給ひたると申し候。この御詠歌の心は。今日の后の初めて行啓ならせ給へば。定めて神慮にも嬉しくおはしまし。さぞ神代の御事を思召し出されんとの。御覽なる様に皆人存じ候へば。中々左様にては御座なく。誠の心は二條の后。いまだ皇后にも立たせ給はず。只人にて渡らせ給ふ御時。業平忍びて逢ひ奉り給ひしを。今日の行啓にも。さぞ御身の昔を思召し出されんとの。御歌なる由承及びて候。されば在原の業平と申すは。忝くも平城天皇の御孫。阿保親王の御子にて御座ありたると申すが。人間にてはましまさず。歌舞の菩薩の化現にて渡らせ給ひしかども。あまねく迷ひの衆生を助け。殊には罪深き女の塵に交り。是を済度し給はんとの御方便にて。假に人間と顯れ給ひたるなどと申傳へて候。又當社におき候へて。二季の御祭禮の御座候。是は人皇五十五代。文德天皇の御宇。仁壽元年に初めて勅使を立つ。二月上の卯。十一月中の子に。二季の御神事を定められ執行はせ給ふにより。今に絶えせず目出度き御神拜にて御座候。さる程にその古へはこの大原山に。木陰もなく誠に御座ありたると申せども。和州三笠山の如くなし給はんとて。氏人より木を植ゑ參らせられ。次第〳〵に斯様に深山とはなりたるげに候。御覽候へ諸木多き中に。今の時分は峯も尾上も皆花盛の様にて。眺め盡きせぬ御事なれば。いつも春になり候へば。近き都は申すに及ばず。都鄙遠國よりも此の山の花見とて。貴賤老若の輩は。肩をならべ踵をついで斯様に夥しさ御事にて候。最前申す如く當社春日の御來歷。また業平の御事につき。色々様々御座ありとは申せども。まづ我等の承りたる通り。大方御物語申して候が。扨お尋ねは如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。〽是は奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに。疑ふ所もなく。在原の業平は古へを思召し出され、今の折から花に戯れ。假に御姿をまみえ給ひ。都人に御言葉をかはさせ給ひたると存じ候間。御歸りは御急ぎなりとも。今夜この花の下にておの〳〵信心をなし給はゞ。重ねて奇特の御座あらうずるかと存じ候。シカ〳〵。
〽重ねて御用もあらば承り候べし。シカ〳〵。
〽心得申して候。

姨捨

アヒ　里人

〽是は。この更科の里に住居する者にて候。今日は名月の夜にて候間。山に上り月を眺め。心をも慰まばやと存ずる。や。是は此邊りにては見馴れ申さぬ御方にて候が。今宵の月を御覽ぜん爲か。何方よりの御出でにて候ぞ。ワキシカ〳〵。〽中々此邊りの者にて候。シカ〳〵。
〽心得申して候。扨お尋ねありたきとは。如何様なる御事にて候ぞ。シカ〳〵。〽是は存じも寄らぬ事を承り候ものかな。我等も此所には住居仕れども。遙か昔の御事なれば。委しくは存じも致さず候へども。都人の初めて御下向ありお尋ねなさるゝを。所に住みながら一切存ぜぬと申すも如何に候間。所に申傳へ

たる通り。大方御物語り申さうずるにて候。シカ〲。〽語まう。この山を姨捨山と申す仔細は。當國更科の里に。さる夫婦の者の御座ありし。此の男は幼き時より親に遅れ一人の姨の御座候ひしが。我子の如くにいたはり育てもてゆく。親と思ひ子と思ひ互ひの馴染み淺からず御座ありたると申し候。されども嫁の心あしく。常々姨を憎みけるに。人間のならひ思ふに死なれぬ命にて。かの姨頭には霜を頂き。兩眼も盲ひなくなりて。日月の光もなく。身體は老いかゞまり。みづからの起き臥しも叶はず日々に悲しければ。かの女猶々この姨を憎み。死なぬ事を明暮恨み。此上は何方へなりとも捨て申さうずると思ひ。ある時夫に申しけるは。あの姨の朝夕人事をのみ云うて。心さがなくまします故。此の里は申すに及ばず。隣郷迄も人の口に餘り。世上のそねみを受け。禍を招くいたずら者を。何とて知り給はずや。如何にもして籠に持てゆき。人知れず深き山の奥に。捨て給ひて然るべしと申しければ。夫は是を聞いて大きに驚き。尤もさもあるべけれどもさりながら。若年より添ひ參らせ。今更捨て申さん事いたはしく存ずれば。中々思ひも寄らずとて。一向同心せざりしかども。女の憤りの恐ろしさは。あらぬ事をば云掛け。兎角捨て給へ。捨て給はずば叶はじと。日夜隙なく責め申す程に。夫も終には女に云はれてさらば捨て申さうずるとて。頃は秋の最中。月の隈なき夜。かの姨に申しけるは。さる寺に尊きことの御座候を。詣で參り聞かせ申さうずる間。我に負はれ給へと申す。姨は誠と心得。限りなく喜び頓て負はれけるを。此の山の上に連れて登り。この桂の木の下におろし。則ち此の石を正身の阿彌陀佛にてましますぞ。よく〱拜み給へと申しければ。盲目の悲しさは喜び申し。夫婦の者頓て迎へに參らうずると云ひも敢へず。其儘逃げて歸る。姨は餘りの悲しさに。聲をあげ呼ばはれども。答へもせず我が家に歸り申して候。爰を以て姨捨山とは申傳へて候。則ち此の石を姨捨石と申すも。この謂れにて御座候。されば件の心を古き歌に。來んと云ひて。月日を過す姨捨の。山の名つらき物にぞありけると。斯樣に詠み置かれたると承及びて候。されば月の名所國々に御座ありとは申せども。此の山の月は峯に峯をならべ。所から面白ければ。いにしへの歌人も第一月の名所とは褒め給ひ。數多の歌にも詠み置かれたると承及んで候。又田毎の月と申すは。あれなる山田に映るを申し候。月は一つなれども。田毎に影の現るゝ故。田毎の月とは申し候。最前申す如く。委しき事は存ぜず候へども。初めての御事と存じ。所に申傳へたる通りあら〱御物語申して候。シカ〲。〽是は奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに。都より遙々御下向なさるゝその御心中を。昔への老女は嬉しく思ひ。殊には名月の夜なれば。閻浮の名殘を思ひ。假に闇濡と現れ昔の事共を御物語申したると推量仕りて候間。幸ひ月と共に是にて一夜を明し給はゞ。重ねて奇特の御座あらうずるかと存じ候。シカ〲。〽御逗留の内に。里に於いて御用を承り候べし。シカ〲。〽心得申して候。

小原御幸（をはらごかう）

アヒ　供人

呼出す。〽御前にて候。シカ〲。〽畏まつて候。皆々承り候へ。法皇小原へ御幸なされ候間。道をも作り其の用意仕り候へ。構へて其分心得候へ〱。

女郎花（をみなめし）

アヒ　山下の者

〽是はこの八幡山下の者にて候。久しく參らず候間、今日は社參申さばやと存ずるぞや。是なるお僧は、（此間セリフ〳〵詞に同じ。）〽初めて御參詣にてお尋ねあるな。（此間セリフ〳〵詞に同じ。）〽まづ。この八幡山において。小野の賴風と申す人の御座候ひしが。御身の上に訴訟あつて。永々在京ありしに。都の内とは申しながら、旅宿の御事なれば。萬につけて淋しく思召して。朝夕を暮し給ひたると承りて候。また其頃御馴取の女性のましましけるが。誠に初めは假初のやうに御座ありしと申せども。互ひに御心遂げ淺からず深き御仲となり給ひ。ある時賴風かの女性に御物語りありけるは。今にてもあれ訴訟叶ひ。安堵するならば。八幡へ迎へ給うずる間必ず御下りあれ。御心替る事は御座あるまじいと吳々御物語あり。其後賴風は。訴訟相叶ひ此所へ御歸りなされて候が。なんぼう果敢なきものは女の心にて御座候ひけるぞ。御約束なればとて、かの女性都の内なば夜をこめ忍び出で。只一人この八幡に下り。賴風の私宅へ尋ねゆき案内を乞ひ給ふに。折節賴風は社參し給ひ御留守の事なれば。なまめいたる女の、賴風を尋ねて來りたるは、如何なる者ぞ何者ぞと。さも荒けなく答へ追出し申す程に。かの女性あら曲もなや。都にての御約束なればこそ遙々尋ねて下りたるに。斯樣に御心の變り給はんこととは夢にも知らず。此上は命ながらへ都に上りても其の甲斐なしと。この放生川に身を投げ空しくなり申されて候。其時賴風社頭より御下向ありしが、放生川に人の多く集りたるを見給ひ。もし殺生にし致すかと。御心許なう思召され。御内の者を遣し見せたまひ給へば。この者歸りて申す樣。都より女の人が尋ねて下りたるが。會はぬを怨み。身を投げ空しくなりたると申す。賴風は胸騷ぎして不審に思ひ給ひ。立越え死骸を御覽ずるに。都にてあひ參らせられたる女性にて候程に。賴風思召すは、疑ふ所もなく　我を尋ねて來りたるを。內よりあらけなく出て追出したるを。留守とは知らず心變りと思ひ、我を怨み身を投げ空しくなりたる志誰故ぞ。是皆われ故なれば。斯かる不憫なる事はあるまじいと思召され。共に我も沈まんと一つ所に身を投げ、賴風も終に空しくなり給ひて候。斯樣の哀れなる事はあるまじきとて。所の面々夫婦共に死骸を取上げ。この土中に築きこめ申して候。御覽候へ是を則ち男塚女塚と申し候。又この女郎花は、女塚の上より生ひ出でたる草にて御座候により。女郎花と申して。此所の名草にて御座候。されば古への歌人も此の女郎花なれば。歌にも詠み給ひたるなどと申せども。委しき事は存ぜず候。最前申す如く。男塚女塚女郎花の謂れ。まづ我等の承りたる通り御物語申して候が。さてお尋ねは如何やうなる御事にて候ぞ。シカ〳〵。〽是は奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに。お僧の御心中貴くましますにより。古への賴風の執心これ迄顯れ給ひ。辭言葉を交させ給ひたるは。疑ひもなき御事にて候。惣じてこの夫婦の人は。別して迷ひも深からうずると存じ候間。お僧も左樣に思召さば。暫く是に御逗留あり、賴風夫婦の御跡を。懇ろに弔ひ其後。何方へも御通りあれかしと存じ候。シカ〳〵。〽山下に住居申せば。御逗留の間は御用を承り候べし。シカ〳〵。〽心得申して候。

大蛇

アヒ　山の精

亂序にて出る。ヘ斯様に候者は。出雲の國飛かんが嶽の山の精にて候。唯今罷出ること餘の儀にあらず。爰に伊弉諾第四の御子素盞嗚尊。天の御神の教へを受け。新羅の國に天降り給ふが。此の出雲の國に到り給ひ。四方の景色を眺め給ふ處に。爰に怪しき離居のうちに。いみじく啼哭する聲の聞えければ。尊訝しめ給ひ。立寄りて御覧ずれば。老人夫婦が中に少女を抱き。泣き悲しむ有様なり。これは如何なる神ぞ。また何故悲しむぞと御尋ねありければ。さん候これは此の國の神なり。我等名は手摩乳脚摩乳と申す夫婦の者なり。これは我等が子にて名は稲田姫と申す。われ／＼多くの娘を。年毎に簸の川上の大蛇に取られ。今また稲田姫を取らんとす。それ故悲しみ申すと語りければ。尊は聞召し不憫に思召され。さらば姫を我に與へよ。彼の大蛇を隨へ。治まる國となさんと宣ひければ。夫婦大きに悦び。安き御事とて。乃ち姫を參らする。其の時尊は。さて彼の大蛇の様體は。何とあるぞと仰せられければ。其の事にて御座候。彼の大蛇と申すは。胴は一つなれども。頭は八つ御座候と語り參らする。尊はこれを聞召され。頓て謀を以て彼の大蛇を平げ給はんと。先づ酒槽を八艘作らせ。八艘の槽に八搾りといふ毒の酒を取合はせ。槽の上には高く棚をかき。其の上に彼の姫を置き給はゞ。姫の姿は彼の酒のうちへ、明かにさし映り見え候程に。大蛇これを見て。毎もの如く生贄を供へけるぞと心得。其の儘立ち寄り。八艘の槽の酒を皆一度に呑み乾すべし。呑むところは八頭なれば。散々に醉ひ伏しまどろむところを。易々と平げんとの御方便にて御座候。我等如きの山の精も。身を變じ見物仕らうと存じ罷出でて候。此の邊り近き草木の精。鳥類畜類に至るまでも。罷出で身をひそめ。物蔭より見物仕り候へ。其の分心得候へ／＼。

番外曲

【あ】

愛壽（あいじゅ）

アヒ　力壽御前

ワキ(忠信)呼出す。後にまた樂屋より出る。〽力壽とは誰にて渡り候ぞ。問〽忠信殿にて御入り候か。扨も珍らしや。能うこそ御出でなされたれ。さりながら。おことの御事は。とり分け御改めなされ候間。先づ内へ御入り候ひて。人目を御忍び候へや。先づ奥の間へ御入り候へ。ワキ座へ通す。シテ柱先にて。なう〳〵恐ろしや。忠信の事は。判官殿の御内には。殊の外御改めにて。妾所に置き參らせては。後日の咎めも恐ろしく候程に。いたはしく候へども申上げ。御褒美に預り申さうと思ひ候。問〽いかに忠信殿。妾を頼みこれまでの御出で。何より嬉しく候へ。隨分々々隱し申さうずる程に。御氣遣ひなされずとも。これにゆる〳〵おくつろぎ候へや。問〽急ぎ是にある由申上げう。樂屋へ入る。先に立出る。〽いかに忠信殿〳〵。是はいかな事。はや此家の内には御入りなく候。問〽いや僞りにては御座なく候。慥に奥の間へ通し申して候。扨は御出であらうずる所を推量申して候。六條堀川愛壽のもとに。必らず御入りあらうずるにて候間。それへ御出で候へや。

明石上（あかしのうへ）

アヒ　里人

〽是は明石の岡に住居する者にて候。シカ〳〵。〽さる程に。明石の上と申したるは。明石入道の御息女にて御座候が。岡部の宿にて人とならせ給ひ。世に類ひ少なき美女にて渡らせ給ふ。又入道なべてならざる聟をとらしと思ひ給ふ處に。其頃光源氏は。朧月夜の内侍に浮名を立てられ給ひ。須磨の浦へ流され給ひ。かすかなる御住居にて御座ありしが。浦傳ひに明石へ御下向あり。入道の館へ入らせ給ふ處に。いつきかしづき奉り。暫く御座ありしうち。明石の上と深く契り給ふに依つて。一年餘り。此の所に御座ありたると申すが。又都へ召上され給ひ。御歸りなされ候が。互に御名殘を惜しみ給ひ。其時光源氏の歌に。都出でし。春の歎きに劣らめや。年ふる浦を別れぬる秋と。か樣に遊ばされ御上りなされ候が。女性御名殘を惜しみ給ひ。御見送りあり御戻りありたるが。其後また都へ御上りありたると承及びて候。先づ我等承及びたるはかくの如し。以下セリフ常の如し。明石の上の御亡心現れ給ひし。

惡源太（あくげんた）

アヒ　能力

打流の早鼓か。〽やい〳〵。たゞ續け〳〵。いや言語道斷の事にてある。色々の詮義あつて嚴く申附けられてあるに。壹人も續かぬはいかに。〽先づ某唯今この處へ出ること餘の儀にあらず。先づ子細を申さねば聞えぬ。去る平治元年十二月九日に。信頼謀叛を召され。源氏の大將義朝を御頼みあつて。院の御所三條殿へ押寄せ。上皇を御車に召させ。信頼義朝打圍み。内裏へ入れ給ひしに。清盛は其の時熊野參詣なされ候程に。六條より飛脚立ち。急ぎ御下向あり。主上を盜み出し。それより同十二月廿七日の明方。平家の兵内裏に押し寄せ給ひ。はや源平兩家の戰夥しき事にて有りつるが。義朝打負けあつて。東國さして落ち給ひたる

と申すが。義朝の嫡子悪源太義平は。美濃の國青墓の宿より。北國飛騨の國へ落ち給ひ。北國の源氏を催して。打つて歸りあるべきとなされ候處に。義朝尾張の國野間の内海にて。長田の庄司が討ちたると聞きしかば。北國の源氏皆心變り仕り候間。義平も是非に及ばず。其後忍びて都へ御上りあり。清盛を狙らひ給ふ處に。此の由平家に聞召し。時を移さず押寄せられけれども。義平その所を切拔け。當寺へ御出でなされ候間。平家は之を聞き。急ぎ義平を搦めて參らせよ。さなきに於ては。當寺をも打果たさるべきとの御事なるに。若き衆の申さるゝには。流石源氏の大將。當寺を見掛け御賴みあるを。易々と搦め參らすべきやと申されたる。又老僧たちの仰せには。若い衆の申さるゝ樣尤もなれどもさりながら。時に隨ふ世の習ひ。唯義平を捕つて出し。褒美に與らんと御談合きまり。時を移さず只今討手の向ひ申す間。先づ我等如きの者共は。先驅をして。義平の御手並の程を見せ申せとの御事なるに依つて。是迄出でたれども。見るに及ばず。義平は都にても。御兄弟にも御一門にも越えて。度々御手柄をなされ。鬼神の樣に沙汰する御方。我等如きの者が。百二百向ふたるとも。物の數にもなされまい。へいや。見れば壹人もつゞかぬ。某壹人くど〳〵として居たらば。寺中の心變りは隱れがない程に。義平も大方聞かせられたであらう間。五騎三騎參り合ひたらば。軍の血祭にしてやらうと仰せられうは疑ひもない事ぢや。見附けられぬ先にのびたがましぢや。急いで罷歸らう。なう恐ろしや〳〵。

朝顔(あさがほ)

アヒ　里人

へこれは。此の邊りに住居する者にて候。今日は佛身寺へ參り。萩朝顔をも眺め。心をも慰まばやと存ずる。や。これなるお僧には。(以下セリフ普通の如し。)　語先づ當寺は一條大宮佛身寺と申す。昔桐壺の天皇の御弟に。式部卿の宮と申し奉りし人の。住ませ給ひたる所なると申す。其の後は桃薗の宮の御舊跡にて御座候。さる程に。式部卿の御息女に。みめよき姫宮の御座候を。光源氏御覽じ。御心をかけられ候へども。何とやらん程經させられての御歌に。見し折の。つゆ忘られぬ朝顔の。花の盛りは過ぎやしぬらんと。か樣に遊ばされ候へば。御姫宮の御返歌に。秋はてゝ。霧の籬の結ぼほれ。あるかなきかにうつる朝顔と。詠み給ひしよりこの方。式部卿の御息女を。朝顔の宮と申習はしたると承り候。其の時朝顔の宮には。加茂の齋の宮にそなはり給ひしにより。朝顔の齋院とも申し奉りたるげに候。又源氏もとの心を忘れ給はず。忍び〳〵に御心を盡くさせられけれども。神慮の御事なれば。靡かせらるゝ事なされず候によつて。源氏御恨みのありたると申す。さる程に。その式部卿の宮薨じなされてより。加茂の齋院のなりゐさせられ。御徒然の餘りにや。庭のませに。萩朝顔を植ゑ置かせられ。御覽じて御慰みありたると申す。惣じて朝顔と申すものは。草の中にても。頼みなきあだなる花なれば。朝開暮落と申して。早朝に花咲き。日の光に當たつて萎み。暮方になりてはらりと落つるものなれば。朝顔の齋院。世に勝れたる御方なれば悟り給ひ。世のあだにして常ならぬに擬へて。御寵愛なされたると聞及びて候。桃薗の宮これにて御隱れなされ候程に。それより桃薗の宮を改めて。佛身寺とす。最前申す如く。當寺は桃薗の舊跡にて候間。暫く此の處

に御逗留あり、萩朝顔なも御覽なされ。御心なも慰まれ候へ。シカ〳〵。〽これは奇特なる事な承り候ものかな。扨は某推量仕るに、御僧の御心中貫くましますにより、朝顔の齋院の御亡心、現れ給ひたると存じ候へば。お僧も左樣に思召さば。こざかしき申事に候へども、暫く御逗留あり、彼の御跡な懇に御弔ひあれかしと存じ候。〽御逗留に候はゞ、重ねて參らうずるにて候間。御用の事あらば御申し候へ。〽心得申して候。

飛鳥寺（あすかでら）

アヒ　能力

ワキの供して出る。〽御前に候。〽畏まつて候。いかに此の内へ案内申候。道場法師の渡り候か、〽某にて候。住僧の御使に參りて候。早々御參りあれとの御事にて候。〽畏まつて候。いかに申候。早やこれへ御出でにて候。〽畏まつて候。此方へ御通り候へ。中入の時立つて。〽さても〳〵唯今道場法師の行當り御迷惑に思召し、皆々に御暇乞仰せられ候體たらく。心なき我等如きまでも落涙仕りて候。さて此の化生の者に就き、古き人の物語り候は。先づ此の寺は敏達天皇の御宇に。大和飛鳥の岡に初めて建立あつて。佛法あつて初めて興るゆゑに。法興寺とも。又は建通寺とも名附けたるは。後に今この所に移し。古へ飛鳥の岡にありしにより飛鳥寺と申す、又元興寺とも申候、然るに此の寺に鐘な鑄んとせし砌、心の惡しき者ありて。此の鐘具の金な夜な夜な盜取り候程に。寺中の面々之な見附け。後代の戒めに、此寺より丑寅に當り候高山へ連れ行き、谷へ投込み殺し申候。其の者の怨念殘り。每夜鐘樓の邊りへ出で。人な取殺すと申す。然れども道場法師唯人にあらず。近江の國の生れの人にて雷神のみどりし子なる故。心剛にして力量人に睛れたる人なれば。化生な退治し給はん事疑なく御座候程に。さあらば此の寺佛法繁昌の靈地とならん悅な申候なり。何かと申すうちに早や時分になつた。急ぎ呼出し申さう。いかに道場へ申候、時分になり候間とう〳〵御出で候へ。其の分心得候べし。

同音の間〽御前に候　〽仰せの如く化生の者に就き。老若評義仕り候故。我等如きまで思案な廻らし候、それに就き思出だしたる事の候。此の寺に住居し給ふ道場法師は。力量人に勝れ候へば、此方な御賴み候はゞ。たやすく御退治あるべしと存じ候。〽畏まつて候。御賴みあつて然るべくと存じ候。〽畏まつて候。いかに此の坊に道場法師の御入り候か。門寺より召して來り候へ、との御事にて候。御參り候へ。太夫出る。〽はやこれへ御出でにて候。

愛宕空也（あたごくうや）

アヒ　能力

〽斯樣に候者は、山城の國愛宕山地藏權現に仕へ申す能力にて候。唯今參ること餘の儀にあらず。一山の輩、今夜不思議の御靈夢な蒙りて候　その仔細は。今日正身の彌陀如來の御登山あり候間。皆々罷り出で、拜み申せとの御告にて候ほどに。未明より罷出で、如何なる御姿ぞ拜み申さんとて相待ち候處に。念佛の行者。空也上人御參り候間。さては此の上人は彌陀如來の御化身ぞと。皆々拜み申し候。それに就き奇特なる事候は。法華經御讀誦のうちに。龍神翁の姿と現じ。空也上人に申すやう。上人の看讀し給ふ佛舍利な賜び給へ。我れ三熱の苦しみなも。免れ申さんと申し

ければ。上人の御仰せには。これは思ひも寄らぬ事なり。我は舍利を看讀せず。また此の頸に掛けたるは。延喜の帝より賜はりたる御經なりと。御申し候へば。其の袖の中に。正身の佛舍利一顆あり。それを我に賜はるならば。熱砂熱風金翅鳥。三つの苦しみ免るべしと申しければ。上人不思議に思召し。袖を離し御覽あるに。誠に佛舍利の御座候を。龍神に惠み給へば。龍神喜びの餘りにや。此の報恩に。何にても望の事候はゞ。叶へ申さんと申す。その時上人の仰せには。空也は身の上に望あらず。當山を見るに用水なし。龍神は水を心に任する者なれば。此の山に清水を出し候へと。御申しありしに。それこそ易き御事なり。三日の間に清水を出し申すべしとて。其の儘失せ申し候。末世なれどもかゝる奇特を拜み申すこと。偏に當山の御利益にて候。總じて此の愛宕山は慶俊法師。檀那は大織冠の御孫。清麻呂の御建立なり。六道能化の將軍地藏とて。修羅の司として。嗔恚の炎を滅(めつ)し。佛道に導きし。現在にては惡魔を降伏し。災難を拂ひ給ふ故に。天狗の統領太郎坊當山を守護し。惡人を罰し善人を救ひ給ふ。これ正直の道理なり。さてまた空也と申すは。內には法華經を讀誦し。外には念佛行者として諸國を修行し。衆生を濟度し給ふ。かゝる有難き御上人を。皆々罷出で拜み給ふべし。其の分心得候へ〳〵。

熱田(あつた)

アヒ　末社

〽これは尾州熱田大明神に仕へ申す。末社の神(しん)にて候。此の社は都を深く守護なされたく思召し。五月三日八月までは。毎年西の御門に鎭座なされ候。これに依つて。西の門の額を鎭皇門と打たれ候。又南の門は。かいそう門と申して額の御座ありたるが。其の頃南門前まで。潮のさし上りたるに。弘法大師御覽じ。額の上かいの字を御直しあつて。字の作りを上に置き。偏を三水(さんずい)にして下に置かせられ候へば。二重四丈引き申して今に是の如くなり。又東の門を春向門と申す子細は。唐の玄宗皇帝。楊貴妃の魂魄のありかを尋ね。方士といふ仙人を御供に連れ。當社まで尋ね來り。東の門を叩き。楊貴妃に二度逢ひなされ候。其の折節春にてありし程に。春向門と申候。さて當社は劍の宮と申して。神代の御時。素盞嗚尊出雲國にて大蛇を殺し。其の尾にある劍を取りて歸り給ひ。則ち當社に納むるにより。尾有りの國と名附け給ひて候。其の後日本武尊。東夷征伐の時この劍を持ち給ふに。駿河の國蒲原にて。東夷尊をたばかり。枯野に火をかけ。四方より圍み申候。尊かの劍を拔いて。邊りの草を薙ぎ給へば。猛火却つて敵方へ燃えかへり。十萬餘夷悉く亡し給ふ。それより彼の劍を草薙の劍とも名附け給ひ候。其の後數の劍と一所に籠めて。八劍の宮と申して崇め奉り候。これは當社の日出度き子細。(以下常の如し。末社常の如し。)

【い】

異國退治(いこくたいぢ)

アヒ　水神

〽か樣に候者は。筑前の國志賀の沖に住む水神にて候。唯今これへ出る事餘の儀にあらず。神功皇后異國の夷を退治なさるべきとて。此の所に御船を揃へられ候。又吹上と申す所

に、松を植ゑさせ給はんとて。勅使この所へ御下向候所に。龍神現れ。松の目出度き子細御物語りなされ候。さてまた三韓を攻め給はん事。何より目出度き御事なり。さあらば新羅高麗の夷どもは。定めて船軍を好むべし。然れば龍宮に候干珠滿珠を貸し給へ。干珠と申すは。漲る水をも乾す玉なり。滿珠と申すは。陸をも海になすなれば。夷ども船にて寄せ來たらば。干珠を以て汐を干し。陸地あらば。滿珠を以て海になしなば。三韓の夷ども一人も殘らず討取るべし。さあらば志賀の島の明神をして。龍宮へ遣すべしとありければ。此の島が歸りて兩珠を捧げ。其の上異國までも御供あるべきとて。先づ海中に入り給ふ。此の君女帝の御身として。かゝる大義思召し立ち給ふ。天地神納受あつて。御首途御吉左右。誠に目出度き御事にて候。然れば八大龍王を始め諸眷屬までも。御供仕れとの御事なれば。小龍水神海草鱗までも。皆々御船を守護し御供仕り候へ。其の分心得候へ／＼。

一來法師（いちらいほつし）

アヒ　門前の者

（早業にて出る。）へか様に候者は。平等院門前の者にて候。唯今是へ罷り出る事餘の儀にあらず。源三位賴政。高倉の宮に御謀叛を勸め。三井寺に御座ありしが。平家大勢を以て押寄せ申すに依つて。南都の衆徒を御賴みあるべきとて。大和路へ赴き給ふが。何と仕り候やらん。度々落馬なされ候。暫く御休みあらうずるとて。此の平等院へ御入り候。當寺の住僧淨妙坊と申すは。隱れもなき大剛の御方なれば。賴まれ參らせられ。易き間の御事なり。暫くこれに御座候へとあつて。其の間に敵攻め來らば。淨妙坊防ぎ矢仕り。御心靜かに落とし申さうずるとて。宇治橋を眞中取放し。時刻を移し給ふ處に。はや平家方より大勢にて攻め來る由申し候間。門前の者ども罷出で。宮に力仕れとの御事なり。其の分かまへて心得候へ／＼。

和泉監將（いづみのけんじやう）

アヒ　家來

へか様に候者は。和泉の國に住居する者にて候。然れば爰に和泉監將と申して。親孝行なる人の御座候が。仔細あつて大蛇より。小櫻緘の鎧と藥の泉の酒を與へ申し候。さる間。帝この由を聞召し。急ぎ捧げ申せよとの勅使御立ち候間。監將の御悦び限りなく。彼の兩種を持ち。唯今內裏へ參內あるべきとの御事なり。皆々罷り出で。監將の參內を見物致し候へ。其の分心得候へ／＼。

稻荷（いなり）

アヒ　里人

（セリフ常の如し。）へさる程に。弘法大師紀州田邊の宿にて。化身に逢ひ給ひて。大師のなくは。靈山にありし時の契約未だ忘れず。我れ密教せうりやうの願あり。神に佛法擁護の誓ひましまし。帝都九條の內に。一方には伽藍あり東寺と號す。それにて待つべしと約束ありしに。弘安十四年正月。東寺を弘法大師に賜はつて。密場となし給ひし。其年の四月十三日。紀州にて約束の化人。稻を荷ひ鉤を持ち。兩部を作ひ二子を引いて。東寺の南門に來り給へり。大師先づ大門にして暫く休め奉り。供物を供へ。八條にかいはうを旅宿として　終に奏聞

を經て。東寺の藥山東寺の峯に。勸請申させ給へり。共に卯の日に當れり。卯は東方注しの正方なり。東寺に來り給ふにも。これよりまた東山の鎭座あるにも杓膴の日なり。これ法の大小の道理なり。二人の女は命婦の御前。中の宮と二子は田中の明神。稻荷五社と云ふはこれなり。

岩根山（いはねやま）

ワキ呼出す。セリフ常の如し。〽さる程に。當社明神一の宮二の宮と申して。隱れなき靈神にて御座候。其の仔細は。昔この所に。年久しき夫婦の者あり。定に十歸り齡保ち申すにより。皆人之を湯御申す處に。君この由を聞召し。御叡覽これあるべきとの。宣旨を下さるゝ。是非に及ばず。夫婦の者。清涼殿の白砂に伺候せり。君叡覽ありて後。壽命長久の謂はれ御尋ねありしに。夫婦の者申すやう。我れ壽命長久の謂はれなし。我が里の谷峯は。皆々枸杞と云へる木あり。此の葉のくだり谷水に流れ候を。朝夕これを吞みけるに。其の味ひ甘露の如くにて。老を忘れ。幾年の心苦しき事なく。さてこそ壽命長久に保ち申す由申し上げしかば。君も奇特に思召し。頓て此の所の神と祝ひ給へば。神慮の深き故にや。一夜の内に。兩宮の御前に松竹生じ申候故。松竹の大明神と崇め申候。何ぼう有難き御事にて候。

【う】

空蟬（うつせみ）

アヒ　下京の者

ワキよりかゝる事もあり。〽これは。下京邊に住居する者にて候。此の間は何方へも罷出でず候間。今日は中川邊りへ罷出で。心をも慰まばやと存ずる。ワキシカ〳〵。〽先づ此の所をば。三條京極中川と申し候。昔この所に。光源氏の御家人に。伊豫の介と申す人の住み申されたるげに候。又源氏この中川へ度々通ひ給ひ。伊豫の介が妻女に戀慕し給へども。彼の女何の應答（いらへ）も申さず。一首の歌に。蘭原や。伏屋におふる名のうきに。あるにもあらぬきゆる箒木と。詠まれたると申す。彌々源氏御心をよせ給へども。曾て靡き申さず候程に。或る時伊豫の介の留守を御考へあり。彼の女の妹に。小君と申す者を案内して。女の許に忍び給へば。女は繼娘と碁打ち居たりしを。さし覗き給へば。彼の妻女は悟りて。娘を殘し置き隱れ申す。其の時我が衣ばかり。蟬の脫殼の如くして置き申す。源氏は詮方なく。せめての御事にと。彼の娘と假初に契り給ひ。妻女の脫ぎ置きし衣を取りて御歸りあり。重ねて御文を送り御申しなさるゝ。其の時の歌に。空蟬の。身を替へてけり木の下に。なほ人からの懷しきかな。かく樣に遊ばされ送り給へば。彼の女の返歌に。空蟬の。羽に置く露の木隱れて。忍び〳〵に濡るゝ袖かな。是の如く返歌の御座ありたると申し傍なるにより。彼の女房終に空蟬と申したるげに候。其の後女も伊豫の介に後れ。尼になりたると申すを。光源氏かの尼を。二條の對（たい）に据ゑ置かれ給ひたりしと。承及びて候。最前申す如く。以下ヤリノ常の如し

鵜羽（うのは）

アヒ　末社

亂序にて出る。〽斯樣に候者は。鵜戸の岩屋に仕へ申す末社にて候。唯今罷出る事餘の儀にあらず。當今に仕へ御申しなさるゝ臣下。初めて

此所へ御參詣にて候が。この鵜戸の岩屋は。神代の昔より只世の常ならず。神祕樣々御座あるにより。誰々の者が罷出で。左樣の御事御物語申すべき者も御座なきと思召され。豐玉姬は。里人の姿と御身を顯し御出でなされ。かの稀人に逢ひ參らせられ。神祕大方御物語なされて候。誠に。珍しからざる事にては候へども。この鵜戸の岩屋と申すは。昔天神七代地神四代の御神なれば。火々出見の尊と申し奉る。かの尊は御狩に好き給ひ。弓矢を持ち。朝暮山に入り。之を御遊とし給ふ。又兄火闌降の尊と申すは。釣に好かせ給ひ。日々に海上に出で。釣を垂れて一生の遊びとし給ふ。おる徒然に。御兄弟の尊仰せられけるは。互ひに御遊びの事を替へて御沙汰あるべしとて。弓矢は火闌降へ參らせられ。釣針をば火々出見の尊へ參らせらるゝ。火々出見の尊かの釣針を取持ち。海上に出で釣を垂れ給ふ所に。中にも惡魚の候ひけるぞ。釣針の糸を喰切り。針を取り申す。尊呆れて歸り給ひ。火闌降へ此由斯くと仰せられければ。兄の尊聞召され。その釣針こそ我が身に添へ。祕藏せし針なれ。急ぎ御返しあれと仰せらるゝ。其時火々出見の尊。まことさ程に思召さば。我れ靈劍を持つて候程に。針の數多に磨らせて參らせうと仰せられければ。その劍は其儘置かせられ。唯本の針を片時も急ぎ御返しあれと承り候程に。力及ばせ給はず。鹽筒男の翁に。海路を御尋ねあり。目無の籠に召され。龍宮に分入り給ふ。廣原海の都にも着き給へば。美しき井の邊に桂の木の候。その木蔭に立寄り。何となく休らひ給ふ所に。姿を見給へば。唯人ならざる女性二人。玉の釣瓶を持ち。井の水を汲み給ふ。尊御覽じて。如何なる人ぞと御尋ねありければ。神海の宮に於いて豐玉姬。今一人は玉依姬にて渡らせ給ふと仰せらるゝ。尊かの豐玉姬に御心移り給へば。又豐玉姬は尊に御心移り。互ひに打解け。終に淺からざる御契りとなり給ひ。程なく御懷姙ならせ給ふ。其時かの失ひ御申しなさるゝ。針の御事御物語なされ候へば。豐玉姬は聞召し。頓て御父かぞの神に。此由かくと仰せられければ。易き間の御事なりとて。海中にある鱗を殘らず集め。釣針を御尋ねなされ候へども。更に此針御座なく候。不審に思召され。もし此外に殘りたる魚やあると御尋ねありければ。其事にて候。赤目と申す魚の候が。口中を痛み參らぬ由を申上ぐる。それこそ不審なれ。急ぎ赤目に參れとて。かの赤目を召出だされ。口を割つて御覽ずれば。件の針のありしを取出して。干珠滿珠に相添へ。尊へ參らせらるゝ。それより尊此方へ御歸りありけるが。其時の御約束に。御產の紐を解き給はん時。この汀に御產屋を造り。鵜の羽を以て屋根を葺き給へ。めでたく御誕生あるべしとの御契約にて。此方へ歸り給ふ。御產の月にもなり候へば。御約束の如く御產屋を造り。鵜の羽を以て一つ方を葺き。今一つ方を葺きもあはせざるに。尊生れさせ給ふ。かるが故に。天神七代地神四代の御神なれば。鵜鷀草葺不合尊と申すも此謂れにて。即ちかの御誕生日が。この秋の今月今日なるにより。今に至つて皆人歩を運び。斯樣に拜をなし申す御事にて候。や。是は忝くも神代のめでたき仔細。まづ我等如きにも罷出で。かの稀人にお禮を申し。又は何にても御慰みをも仕れとの御神託により。これまで罷出でた。まづあれへ參り。お禮を申さばやと存ずる。シカ〳〵。（詞も常の如し。）

浦壁

〽御前に候。〽さあらば明日御迎へに參ら

うずるにて候。へ畏まつて候。

植田（うゑだ）

アヒ　供人

ワキ呼出し出る。ワキシカ〴〵。へ御前に候。シカ〴〵。へ畏まつて候。シカ〴〵。へ心得申して候。ト云うて太鼓座に居る。シテ(入間何某)シカ〴〵。へ案内とは誰にて渡り候ぞ。シテシカ〴〵。へいや入間の訴は御取上げなく候間。取次ぎ申すに及ばず。只御歸り候へ。

段々謡あつて。植田直垂入間何某を伏せる時。狂言方繩かけ。また間の座に居る。また段々あつて。植田繩ゆるす時。また狂言方立つて解く。間は。男舞のうちに切戸より入る。

へなう〳〵恐ろしや。人々の前に畏まる。へ唯今狼藉者を。入間殿取りたると申すが。扨々手柄召された。急ぎ申上げう。へいかに申上候。只今狼藉者をば入間殿生捕り。繩をかけこれへ參られて候。へさん候。へ急ぎ御覽候へ。

【お】

隠岐物狂（おきものぐるひ）

アヒ　里人

ワキ名呼出す。へ所の者とお尋ねは。何の御用にて御座候ぞ。へさて後鳥羽院の御廟を御尋ねにて候か。易き間の事教へ申さうずるにて候。此方へ御入り候へ。へ此の御廟こそ後鳥羽院の御墓にて候へ。又爰に面白き事の候。女物狂の候が。此の御廟へ毎日參り。後鳥羽院の事曲舞に作り。謡ひ申すが一段と面白く候。暫く此の所に御座候ひて。御覽あれかしと存じ候。シカ〴〵。へ尤もにて候。我等もこれにて見うずるにて候。へ重ねて御用もあらば仰せられ候へ。シカ〴〵。へ心得申して候。君の御鎮りなるべき定めなや〳〵と云ふ謡の時。へいかにお客へ申候。先に申しつる此の物狂の事にて候。後鳥羽院の御事を謡はせ申候べし。シカ〴〵。へ心得申候。太夫に向ひ。へなう〳〵。後鳥羽院の御事を謡うて聞かせ候へ。旅人の御入り候が。御聞きたう仰せ候間。此の烏帽子を召して。面白う舞うて見せられ候へ。

【か】

高祖星（かうそほし）

アヒ　里人

早鼓にて出る。へ斯様に候者は。漢國の帝高祖に仕へ申す者にて候。唯今この所へ罷出る事餘の儀にあらず。高祖項羽の合戰數度に及び候。然るに高祖の方よりは。蕭何韓信樊噲張良とて。勝れたる臣あり。殊に數に十萬餘騎と申せども。項羽の勢強く。宛に龍虎の爭の如く未だ勝負決せず。七十餘度に及び候間。此の度は何卒勝利を得んと思召し。乃ち天へ御祈誓候へば。忝くも帝釋天納受ましまし。乃ち御守星本命星現れ出で給ひ。此の度の御合戰には。九曜の星現れ出で給ひ。御力を添へられ。勝利取らせんとの御事なり。蕭何韓信樊噲張良は申すに及ばず。我等如き者までも。悦び勇み未明より。烏江の原へ打立ち候へとの御事なり。皆々その分心得候へ〳〵。

降魔（がうま）

アヒ　魔王(四人)

へ斯様に候者は。第六天魔王の中にも。四軍と申して隠れもなき魔王にて候。唯今出る事餘の儀にあらず。扨も淨飯大王の御子。悉陀太子と申すは。十九より佛法にもとづき。今

は早や天竺の摩掲陀國、寂滅道場菩提樹の下、金剛座上にして、吉禪草を敷きましく候。眞如阿鼻跋致十刀迦葉瞿利太子。是等の五比丘の左右に立つて。釋尊三十四心斷結となるべし。さ様にては。魔王は壹人も有るか無いかの様にならうずるとて。魔醯修羅城護天を始めとして。此の道場を妨げ申すべしとて。魔王の中にも頭をする程の者ども。此の道場を妨げんとて。歸樂歸らん偶體女と申して。隠れなき美人となり候間、座近く參り候へば。釋尊御覽じて。今に目の前に來る者を見れば、第六天の魔王や三人の美女となり、我が成道を妨げに來るなどと仰せられ候へば。さばかりの魔王にて候へども。肝を潰し。釋尊未だ太子にておはせし時。やしやう夫人の事を云出だし。同じ女のうき身なれども。哀れを催すなり。其の成道をさし置いて、王宮に歸り給へと申しければ。釋尊まこと妨げをなすならば。忽ち美女の姿を鬼面になすべしと仰せらるゝ御聲の下より。鬼と成りしかば。とかくの事を云はず急ぎ歸りぬ。さあるに依つて此度は。象馬牛羊。此の四軍に罷出で。釋尊の成道を妨げよとの御事にて候間。先づ某一人罷出たが。中々あの體ならば妨ぐる事もなるまい、殘り三人の者を呼出だし談合せう。なうく三ツの者どもゐさしますか。アド〽何事ぢやく。シテ〽釋尊の成道を妨げ様の相談せう。先づ通らしめ。アド〽心得た。シテ〽さて是は何としたものであらう。アド〽身共が思ふは。先づ色々になぶつて見うと思ふ。シテ〽尤もぢやが一通りでは行くまい。釋尊の鼻先にて。飛び越え跳ね越え。色々狂ふまいか。アド〽これはよからう。シテ〽それならばかう來さしめ。先づ待てく。今釋尊お指なし。又お手招き召された。あれは定めてけんれう地神虚空の神に御出であれとの御事であらう。アド〽いかさま其の様な事であらう。シテ〽長居は無益(むやく)いざ戻らう。アド〽一段とよからう。謡〽あらくいゝいゝ恐ろしやいゝく。はつ足元はよろくと。よろめけば眼もくらみ。いゝいゝ杖にすがり。行くべき方は知らねども。足に任せて逃げにけり。シテ〽ちやつと來いく。アド三人〽心得たく。

高野敦盛（かうやあつもり）

アヒ　宿の者

シカく〽案内とは誰にて渡り候ぞ。シカく。〽なに熊谷殿の所縁(ゆかり)の人と仰せ候か。〽熊谷殿を存じて候間。致へ申さうずるが。高野の山へは女人禁制にて候間。女性はなり申さず候よ。〽中々の事。〽易き間の事御宿參らせうずる間。奥の間へ御通り候へ。やいく。熊谷殿の所縁の人に。お宿參らせてあるぞ。洗足を取つて參らせ候へ、〽何事にて候ぞ。〽畏まつて候。〽いつも熊谷殿は。奥の院へ御參りなされ候が。今日は未だ御參詣なく候間。あれへ御供申し、引合はせ申さうずるぞ。此の方へ御座候へ、（ト云うて。子連れて橋の座下に居る。ワキの詞に。今日は遲なはり申して候間。參らばやと存じ候と云ふ時。）〽あれこそ熊谷殿にて候間。急ぎ御對面候へ。

同

〽案内とは誰にて渡り候ぞ。〽易き間の事お宿參らせうずるにて候。かつく御通り候へ、〽何事にて候ぞ。〽心得申して候、熊谷殿をよく存じて候。毎日奥の院へ御參詣候が。今日は未だ御參りなく候間、あれへ參り。引合はせ申さうずる程に。御心安く思召され候へ。（ワキ。急ぎ參らばやと云ふ時。）〽さらば此方へ御座候へ。〽あれこそ熊谷殿にて候御對面候へ。某は是に待ち申候。

此の如くにもする。

影山（かげやま）

アヒ　從者

〽御前に候　〽君は頓てあれへ御座候。暫く是にて御待ち候へ。　〽御尤もにて候。

笠卒都婆（かさそとば）

アヒ　里人

〽これは奈良坂邊に住居する者にて候。此の間何方へも罷出ず候程に。佐保山邊に參り。心をも慰まばやと存ずる。ワキシカ〳〵。常の如し。　〽さる程に。これなる笠卒都婆と申すは。弘法大師の御弟子に。中川寺の住僧。實範上人の建て給ひし卒都婆なる由承及びて候。又重衡の果て給ひたる仔細は。人皇八十代。高倉天皇の御宇に。太政大臣平の清盛入道忽ち朝恩を忘れ。南都東大興福の兩寺を。治承四年極月廿六日に。清盛の四男に三位頭中將重衡に仰せて。右兩寺燒拂ひければ。衆徒も一人もたまらず落失せにし申す。誠に岡浮無雙の堂舍を。僧坊燒拂ひ申され候により。昔人之を歎き申したるげに候。又平相國入道は。養和元年に。歳六十四歳にて卒し申され候。其後程なく平氏の一門。皆々都を追落され。西海の浪に漂ひ。おほそ海中に沈み果て給ひぬ。中にも重衡は。一の谷にて生捕られ。鎌倉へ渡され。其後南都の衆徒申。鎌倉殿へ訴訟申す。乃ち重衡を貰ひ。奈良坂にて首を曝（からべ）し申す。誠に諸堂大伽藍燒失ひ申され候報いと申し習はし候。何と思召し重衡の御事尋ね給ひ候ぞ。シカ〳〵。　〽これは奇特なる事を承り候ものかな。扨は重衡の幽靈かりに現れ給ひ。以下セリフ。常の如し。

香椎（かしひ）

アヒ　篠栗の精

〽か樣に候者は。此の山に住む篠栗の精にて候。唯今罷出づる事餘の儀にあらず。稀人この所へ御下向に就き。豐玉姫跡部の磯山悦び給ひ。かりに現れ。此の篠栗の天神の御詠歌に預り申し。我等が威勢物語り御申しあり。誠に誰あつて我等が事申すべき者もあるまじく候處に。御兩人御出で御物語ありたる儀。何ぼう忝さにこれまで罷出た。惣じて此の浦を。もとはかすゐと申せしを。香ばしき椎の字に書改めて香椎と申す。昔神功皇后この海上にて三百七十餘の神たち舞樂を奏し給ひて其の時龍宮より。干球滿珠を捧げたりしも此の浦の事なり。干珠といふは白き玉。滿珠は靑き玉なり。干珠海に入るれば則ち平地なり滿珠を入るれば汐滿つ。乃ち此の二つの珠を以て三韓を平げ。思召すまゝになること。誠に目出度き御事にて候。さて稀人の御慰めに。昔の舞樂の如く。今宵かなでて御見せあらうずるとの御事なれば。此の浦の海草鱗草木の精までも。罷出で見物申せとの御事なり。構へて其の分心得候へ〳〵。

葛城天狗（かづらきてんぐ）

アヒ　天狗

亂拍子ニテ出ル　〽斯樣に候者は。大峯葛城山を廻る木の葉天狗にて候。天下治まり目出度い御代なれば。人々假初の口論をも致さず候。我等はさ樣のことを見てこそ慰み候へ。〽なう〳〵。何事を云はします。〽お主たちは何として出たぞ。〽其の事ぢや。そなたを尋ねたれども見えなんだに依つて。爰まで尋ねて來た。〽やれ〳〵。嬉しや〳〵。和御寮たちに逢うて力を得たよ。〽さてはお主は何事

にそ逢うたな。へされば聞いてたもれ。方々や我等は人の喧嘩を見てこそ慰め。目出度い御代なれば左樣の事はなし。淋しさに天の川へ出たれば。若い者が六七人寄合うて。餘念もなう雑談をして居たほど。ちと嬲らうと思うて。側へ居たれども。天狗は人間の目に見えぬに依り。見附くる者はなし。へさうであらう。へさらば嬲らうと思うて。其のうちで年若な腹を立てさうな者の鼻を弾いたれば。肝を潰して誰がしたぞと思うて。うろ／＼するところを。後へ廻つて。頭をくわちりとはつたれば。さて／＼腹を立て。誰がしたぞと云うて震動するところで。いや我はせぬ。いや身共は知らぬと云うて。また側に居た者の耳の根を。拔けるほど引いたれば。此奴か以ての外に腹を立て。言語道斷のことをする。俺が耳を引拔かうとした程に。堪忍ならぬと云うて組合ひ。組んづ轉んづするほどに。殊の外面白うて。飛びしさつて見物してゐたれば。侍學童子の御出であつて。これほど目出度い御代に。沙汰の限りな事をすると云うて。打杖を以て思ふ樣叩かれて。此處まで逃げて來たは。へそれは惡いことをした程に。お叱りやつたは尤もぢや。へいやまたお主たちも惡いことをせぬでもないぞよ。へいや身共等は終に惡い事をした覺えはない。へはてさて苦しうない。隱さずとも有樣におしやれ。へいかさま曾てせぬでもない。もはや久しい事ぢやが。此の葛城山の麓に。童子が二三人遊んで居た。其の中に一人美しい子を取隱したれば。殘る二人が肝を潰して。彼の親に告げてこそあれ。そこで大勢語らうて。太鼓鐃を叩いて。此の山へ、尋ねに上るほどに。嬉しうはあり。飛び廻つて見物して居たれば。彼の學童子の御出であり。惡いことをなする。早う返せと云うて。したゝか、ふまされた程に。其の儘返した。それに懲りて。其の後は惡いことはせぬよ。へそれに懲りぬといふ事はあるまいさりながら。方々や我等が。惡い事をするは尤もかと思ふ。へとはどうした事ぢやぞ。へされば其の事ぢや。此の山の大天狗は皆が頼うだお方ぢや。へなか／＼。へ聞けば峯入の山伏たちの此の山へお登りあるな。嬲らせらるゝと聞いたが。大天狗の御心もこれぢや。すればこち衆が惡い事するは尤もぢや。へそれはさうなれども。わるい事をすると其の儘。侍學童子のお出あるに依つてならぬ。へいかにも其の通りぢや。へそれに戯れて大天狗も。山伏たちを嬲らせらるゝ事はなるまいと思ふが。そなたは何と思ふぞ。へ和御寮が云ふ如く。佛力神力には大天狗もなるまい所で。それは迷惑な召さるゝであらう。へいかにも其の通りぢや。へさて此の樣な時が奉公時ぢやほどに。力を添へたけれども。大天狗とは違ひ。一番掛けに迷惑するであらう。とかく知らぬ分がよからう。いや其の樣に云うて居るうちに。頼うだお方のお出でなされ何事なし出かされうも知れぬ程に。急いで去ぬまい。尤もぢや。早う去なう。へ先づ待て／＼。へ何事ぢや。そなたや身共の心底を諷うて行くまいか。へこれは一段とよからう。へ皆々同音諷ひやれ。へ心得た。諸木の葉天狗の望には。ハヽヽ。火風土風。人々寄りて頭をはり合ひ組ん／＼轉んづ諍ひするを。見物すれば心も清く。面白さに。飛行自在に遊びまはれば。侍學童子は出合ひ給ひ。さも荒けなく憎まれさも荒けなく叱られて。ひつそとしてこそ失せにけれ。

鐘巻（かねまき）

アヒ　能力

道成寺の通こ一。ワキ呼出し。えいとう〳〵の所。其の外同様。白拍子来て案内乞ひ。狂言出て。セリフ同じ。然し院主に其の由申さうと云ふ。ワキ此の旨云ふ。セリフあり。ワキ舞の所望せよと云ふ。シテ其の旨云ふ。シテ道成寺の如く謡けて。亂拍子。舞。中入。道成寺の通りの發展々々に。云はず。

へいかに申候。鐘が落ちて候。龍頭も其の儘候が。且つ大地へ煮え入りて候。鐘が面白きに賦りて駐がとは見ず候。憶に鐘の内へ飛入り潜みたると見えて候。へ尤も我等も曾て知らぬにてはなく候へども。か樣の事は末世までの有樣にて候間。御物語あつて寺僧たちに御聞かせあれかしと存候。

此の能描にこれあるべきに就き。之を略す。

兼元（かねもと）

アヒ　能力

へ御前に候。へ畏まつて候。いかに花若殿師匠の御召にて候間。とう〳〵御出で候へや。へ花若殿御出でにて候。ト云うて大波に居る。體に。身を投げ空しくなりにけりと云ふ時。へやあ〳〵何と何ふぞ。花若殿は本堂の池へ身を投げ給ひたると申すか。扨々苦々しい事かな。急ぎ其の由申上げう。へいかに申上候。花若殿本堂の池へ身を投げ。空しくなり給ひて候。へ中々の事急ぎ御出で候へ。あの邊りにてありげに候。へあゝ暫く。左様に院主の身を投げ給ひて。兼元殿の御出でにては。誰か事の仔細を申すべき。先づ留りあつて兼元の御登山の時。御折檻の樣體を委しく仰せられ候へ。こゝにて水に入り。死骸を取上ぐる體。某は御死骸を取上げ申さうずるにて候。へ是々御覽候へ。さて御痛はしき御有樣にて候。ト云ひ。小袖抱いて泣く〳〵下に居る。ワキの詞にて先づ持參へ。かつ云々。へ畏まつて候。へあゝおいとしや〳〵。小袖は葵の上の小袖より少しワキの方にて。小袖を前に置くなり。さて兼元案内乞ふ。へ案内とは誰にて渡り候ぞ。へ兼元殿御參りにて候か。暫く御待ち候へ。へいかに御出での由院主へ申さうずるにて候。へいかに申候。へ兼元殿の御出でにて候。はや御出で有つて御對面候へ。へいや〳〵。我等は其の事え申すまじく候。御折檻をさせられいでは叶はぬ事にて候に。か樣の仕儀は是非なく候。是までの御出でに。御對面なくては叶ひ候まじ。急ぎ御對面あつて樣子を懇ろに仰せられ候へ。へ畏まつて候。いかに申し候。此方へ御通りあれとの御事にて候。かう〳〵御參り候へ。

河水（かはみづ）

アヒ　官人（前）

同　鱗の精五人（後）

臣下呼出す。へ御前に候。へ畏まつて候。へあら奇特や。何の御沙汰もなきにつ不思議なる事を仰せ出ださるゝよりながら。か樣の一大事にて候間。何方へも參り。國中の沙汰を聞いて參らう。へや。何と申すぞ。それは誠か。さればこそ急いで申上げう。へいかに奏聞申候。國中を走り聞き申して候。隣國の陳成子と申す者。此の國を取らうずるとて。大勢にて南門より入との御事。いづくも此の沙汰隱れ御座なく候。龍女入つて。間官人。へ御前に候。へ中々の事。委しく承りて候。へ畏まつて候。へいかに奏聞申候。へ大河の川上へ。宣旨の臣下御着きあり候處に。龍女一人現れ。奏聞申度き事あつて。水留めたる由申候間。いかなる事ぞと尋ね候へば。かの龍女未だ夫を持ち申さぬ程に。百官のうち一人夫に賜はるならば。水を出だし。國土の民も豊かに。君安全に守るべしと申され候間。急ぎ百官のうちを一人賜はれとの。臣下よりの奏聞にて候。へ心得申して候。

ヘこれに候。ヘ畏まつて候。奏聞申して候へ。ば。委しく聞召されて候。百官のうちな夫にと申すならば。何れにても選み出だし。龍女の望な御叶へあり。水な出だして。國土の民も豐かにあるやうにとの御事にて候。其分心得候へ／＼。龍女水底に入りにけりの謡に上中へ。○謡の五人○太鼓の作物持ち出る○下り羽にて出る。ヘ治まれる。／＼。御代の驗のためしとて。音せぬ浪の太鼓な。君に捧げ申さん此の君に捧げ申さん。シテヘさて面々何と思ふぞ。龍宮の姫君の御祝言は目出度い事にてはないか。アドヘ其事御祝言あると聞いてあれども。しかと知らぬが。仔細な知つたら語つて聞かさしめ。シテヘおゝ知らずは語つて聞かさう。皆々能う聞かしめ。アドヘ心得た。シテヘたとへば龍女の思召すには。我れかたの如く。龍宮界の姫とはなりぬれど。夫な持たざる事は不覺なり。いかなるもの夫と定めん。さりながら。當今の百官のうちな一人語らはんと思召せども。奏聞なさるべき様なかりしかば。思案し給ひて。いや／＼とかく大河の用水な留むならば。民百姓迷惑なるべし。然るに於いては。川上な御塞ぎあるべきなり。其の時龍女現れ奏聞して。百官のうちな一人夫に語らふべしと御工みにて。大川の用水なはたと御留めなされ候間。國土惱み。様々御祈禱なされ候へども。龍女なされ置きたる事なれば。其の驗なかりしかば。大川の川上へ。宣旨な蒙り。臣下殿御出で候程に。龍女は工み給ひたる事なれば。現れ出で給ひ。川上の水留むる事。我望みありと申し候へば。臣下殿。いかなる望なりとも叶へ申すべく。水な出だし給へと御申し候處。百官のうち一人夫に賜はれと申されしかば。臣下殿頓て君に奏聞し。百官のうちな一人夫に下され候な。龍女悦び其の儘迎ひに出で給ひて。龍宮へ御供あり。御悦び限りなし。太鼓も神變の太鼓にて。もしや君に障りあらば打人もないに鳴り出で。震動する太鼓なるな。龍女に夫賜はりたる其の故に。君に捧げ申さるゝに依つて持出でたり。何ぼう目出度い事ではないか。アドヘ定にこれは目出度い事ぢや程に。いざ酒盛して祝ふまいか。シテヘおゝ上々が目出度ければ。下々までも目出度い。いざさらばこれに並み居て酒を呑まう。酒盛。シテヘか様の折いざ目出度う皆々相舞に舞納めう。アドヘ一段とよからう。シテヘあら／＼めで鯛は／＼。同ヘ七こんまでもお肴とて。召出ださるゝ賞翫の品々うしほ煮うけいり。違ひ切り。鯛な汁に。膾刺身にすはしり鮭鮓までも。酔ひぬればいざ／＼さらば鯔んとて。座敷な太刀魚。月も鱚にいるかと。なれば／＼名吉參らんとて。皆々海中に入りにけり。

河原太郎（かははらのたらう）

アヒ　里人

ヘ先づ平家は木曾義仲に都な落とされ。壽永二年秋の頃。津の國の一の谷に御座な構へ。大手は生田の森。搦手は一の谷。其の間三里が程十萬餘騎にて固め給ふ。然るに源氏は平家な滅さんと。六萬餘騎の兵な集め。元曆元年。二月四日都な立ち給ふ。大將軍は範頼義經兩大將にて。義經は一萬餘騎にて搦手にむかひ給ふ。生田の森は大手なれば。五萬餘騎にて範頼押寄せ。中にも武藏の國の住人。河原の太郎高直。同次郎守直。二月七日合戰なれば。宵より押寄せ。明くる寅の刻に。逆茂木な越えて城中に入り。大音上げ。武藏の國の住人河原の太郎兄弟なり。掛合ひ給へと云ふ儘に。引詰め／＼射るまゝに。屈竟の兵者七八騎。矢の下に射落とし給ふ。此の矢先に。推して進む者もなかりし所に。西國一の兵と

聞えたる。眞鍋の五郎これを見て。さこ／＼。驚き入り候御弓勢かな。かく申す某は。眞鍋の五郎と申す者なり。細矢一筋參らせん。請けて見給へと云ふ儘に。あやまたず河原の太郎が胸板を。つうと射通す。さしも剛なる高倚も。弓杖に把り立ちすくみ給ふ。守倚この由を見て。高倚を肩に引掛け。生田の森を越え給ふ處に。眞鍋續いて放す矢に。守高も射落とされ申す。何ぼう哀れなる事にて御座候。これにより。河原の太郎が郎黨共も。源氏の陣へ戻り。武藏の住人河原の太郎兄弟。生田の森の先陣にて候ひしが。二人共に討たれたると呼ばはれば。源氏の軍兵之を聞き。河原兄弟を討たせては安からじ。いざ參れと。皆々城中へ亂れ入り。是處を先途と戰ひ給ふが。遂に平家に打勝ちなされたると承りて候。最前申す如く。委しき仔細は存ぜず候。（以下セリフ常の如し。）

神有月（かみありづき）

アヒ　末社

（亂序にて出る。）〽か樣に候者は。出雲の國大社に仕へ申す末社の神にて候。誠に。靈神あまた御座ありと申せども。取分き當社は日本父母の御神なり。さあるに依つて當月には日本の神々當社に參り給ひ。是にていよ／＼天下泰平に御守りあらうずると。懇に仰せ合ひ候。又は男女夫婦の縁を御定めなされ候。何ぼう目出度き御事にて候。されば餘の國々にては。神々御留守にて御座候故。神無月と申候が。此の大社にゝは神有月と申候。又神々御戻りなされ候は。當月末つ方の事にて候。乃ち向うの神上山と申すへ。天より隼人の御神天降り給ひ。神々御踊りあれと。榊の枝に十方へ戻し給ふ。何ぼう目出度き御事にて候。さる程に。當今に仕へ御申しある臣下殿。此の處へ御參詣にて候間。當社嬉しく思召し。かりに御姿を現し。御詞をかはし給ひ候が。重ねて奇特を見せんとて。神隱れなされ候。其の間に我等如きの末社にも罷出で。（以下常の如く鷹舞三段切謠もあり。）

神渡し（かみわたし）

アヒ　里人

〽さる程に。此の諏訪大明神と申すは。昔神代の御時。出雲の國にて素盞嗚の尊と申して、靈驗あらたに御座候。取分け弓矢の守護と崇め奉り候。其後攝餘天皇の御時。異賊御退治の皇后。輔佐の臣となり。三韓を易々と滅ぼし。國土を鎭め。其後この所に御影をうつし。諏訪大明神と現れ。國家を守り給ひ。何ぼう有難き御神にて候。さてまた當社に於いて。一年に御神事數多御座候中にも。氷の橋と申して。此の湖水一夜に氷閉じ三日と申すに神渡しし。貢税運送の道廣く。氷の橋を渡り行通ひ申候。寒月強く足にもすへ耐えがたければ。此の温泉に身をひたし。嚴寒を凌ぎ申候。誠に氷の面は鏡の如く影を映し。眞實慈悲の政。夥しき御事にて御座候。今神前の御鏡は。その御惠みの謂れなどゝ承及びて候。

苅萱（かるかや）

アヒ　宿の者

シカ／＼。〽所の者と御尋ねは。誰にて渡り候ぞ。〽易き間の事お宿參らせうずる間。緩々とお休み候へ。（女ワキの座に着き。明日高野へ參らうするにて候と云ふ時。）〽さては高野不案内の御方と見え申して候。女性はこれまでにて。山へ御登山候事はなり申さず候間。御用候はゞ。あの稚き人ばかり

御登せ候へ。〽中々の事。ト云うて。太鼓座下に居る。〽きのふ暮方に女性の旅人にお宿參らせて候が。今夜曉に空しくなり給ひて候。又幼き人の御座候ひしより高野へ人を尋ねて御登り候が。未だ御歸りなく候。餘り傷はしく候程に。幼き人を尋ねに登り。知らさばやと存ずる。いやこれに御下向候よ。亭主これまで參る事餘の儀にても候はず。御身の母御の今夜空しくなり給ひて候。知らせ申さんためこれまで參りて候。〽中々。事急ぎ御下り候へ。子連れ歸り。歎きの中のなげきと云ふ時。〽御歎き尤もにて候さりながら。生死の習ひにて候間。さ樣に深く御歎き候ふな。某高野に存じ候ひたる御聖の候程に。呼出し孝養(けうやう)させ申さうずるにて候間。御心安く思召し候へ。〽急ぎ山へ登り。此の由を申さう。シカ〳〵。〽ふとお宿申してかく哀れなる事を見て候。寔に幼き人の歎き思ひやられ。我等も共に落涙仕りて候。いや參る程にこれにて候。〽いかに御聖の御座候か。シテ樂屋より出て。〽唯今參る事餘の儀にても候はず。女性の旅人にお宿申して候處。此の曉空しくなり給ひて候間。御下りなされ。孝養あつて賜はり候へ。〽近頃祝着仕り候。さらば御供申さうずるにて候。〽是に御座候。シテ歸らうと云ふ時。〽何と御歸りあらうずると候や。暫く。上人の御十念も時にこそよれ。行衞も知らぬ旅人なれば。我等如きの者さへ落涙仕りて候。まして御出家の御身なれば。無緣の者を御弔ひありてこそ御本意なれ。又か樣に御賴み申す我等は。日頃の檀那なり。末とても賴もしからず候程に。此の上は以來申し承るまじく候。急ぎ御休み候へ。シカ〳〵。〽さてはさ樣にて候か。仔細をも存ぜず。情けなく申して面目なく候。誠に此の山の麓にて。空しく相成り候事。偏に大師の御計らひにて候べし。急ぎ御名告り候ひて御悦ばせなされ。又亡者をも心靜かに御孝養御申し候へ。〽中々。空しく御成り候上は。苦しからぬ事急いで御名告り候へ。

寒山(かんざん)

アヒ　門前の者

道行過ぎ。ワキ呼出す。〽門前の者とお尋ねはいか樣なる御用にて候ぞ。〽中々。寒山拾得は。折々此の所へ御出で候。殊に今月は月も隈なく候程に。定めて頓て御出であらうずる間。暫く御待ちあつて御會ひ候へ。シテ出で。謡に。菩薩は雨たけけ御身の事を申すなりと云ふ時。狂言立つて。〽暫く。方々はむさとしたる事を御申し候。とう〳〵傍へ御のき候へ。ワキ。說法させて御聞かせ候へと云ふ。〽さ樣の御望ならば。某所望申さうずる間。傍に御忍び候へ。御聽聞候へ。かまへてむさとしたる事を仰せ候な。〽いかに御兩人へ申候。今夜は面白き月にて候程に。終夜(よもすがら)說法を御のべ候ひて御聞かせ候へや。白雲消えて何とからたりぬらんと云ふ時。〽是へ御出であつて御聽聞候へや。

揭鼓の所望の時。狂言より云ふ事もあり。

巖洞(がんどう)

アヒ　鬼神

亂序に二出る。〽か樣に候者は。勢州鈴鹿山に住み給ふ。赤頭の四郎高丸と申す鬼神に仕へ申す眷屬にて候。扨も賴うだ御方王土に住みながら。天命をも恐れず。萬民を惱まし給ふにより。田村の五郎利重に。急ぎ退治せよとの宣旨なれば。利重數萬の軍兵を召し具し。討手に向ひ給ふ。抑も此の利重と申すは。奧州せつせの郡。田村の里に生まれ給ふにより。其の名を田村丸と申候。奧州より都まで。三日の間に御着ありし御方なれば。常の人にあらず。いかなる神の化身ぞと。人々恐れ申候。扨また田村の御佩刀(はかせ)は。そやはうと申して隱

れなき剣にて候。さてまた鈴鹿御前は。立烏帽子と申す鬼神にて候が。赤頭の四郎殿とは御夫婦にて候へども。逆心と見え申候間。赤頭の御運のつきにて候。我等が身の上までも大事に候間。眷屬どもを伴ひ。駈落の用意を致さうと存ずる。皆々その分心得候へ〳〵。

【き】

歸雁（きがん）

アヒ　家來

早鼓にて出る。へ斯様に候者は。八幡太郎義家に仕へ申す者にて候。此度院宣を承り。頼うだ八幡太郎殿。安部貞任宗任追討の爲。東へ御下向候。誠に貞任兄弟は常人ならず。大勇猛の者にて。既に御父頼義公も。七ヶ年まで責め給へども。叶はず御歸陣なされ候。仍って此度義家殿。武神なればとて。八幡宮へ御社參あり。種々奉幣を御神前にて御捧げあり。さま〳〵御祈念御座候ひて。神託を蒙り給ひ。則ち今日吉日にて候により。御出陣あるべきとの御事なり。か様に神慮に叶ひ給ふ事なれば。頓て目出度く御退治なされ。御上洛は疑ひもなく候。さて御供の面々追附け御出陣候間。皆々その分心得候へ〳〵。

貴船（きぶね）

アヒ　供人

クセ過ぎて。篠原保昌出る。狂言出る。へ御前に候。へ畏まつて候。いかさま此の人立ちは何事にてあるぞ。やあ〳〵。それは誠か。其の由申さう。いかに申上候。和泉式部御參りあつて。法樂の舞を御舞ひなされ候由申候。へ御尤もにて候。

清重（きよしげ）

アヒ　鷹師

へ案内とは誰にて渡り候ぞ。シカ〳〵。へ易き御事お宿申さうずるにて候。かう〳〵御通り候へ。義盛と清重と別れたる時。謡の時に。狂言シカ〳〵に。梶原鷹狩をする事。しやべるなり。但し此方なしに相濟む。

一セイワキ方文句あれ。鷹供して出る。いゝいゝいゝいゝ。へ狩場の雲の朝ぼらけ。月遠見にかかりわらん。いゝいゝいゝ。いたちする野ざれの鷹の面白や。いゝいゝ。いざ手離して合はせん。鷹人の心に雲にならしはい。雲打ちはい行く道の。鳥の落草跡とめて。犬の[illegible]心せよ〳〵。

問へ〳〵しい〳〵〳〵。ありや〳〵〳〵〳〵。南無三寶。鷹がそれた。何を見てそれた事ぢや。扨も〳〵合點の行かぬ事かな。えゝあれに大きな鷲が居る。それ故にそれたものであらう。えいこれはいかな事。鷲だと思うたれば。人が忍ぶ体ぢや。先ず此の由申上げう。問へ〳〵いかに申上候。鷹がそれて御座る。何故それたかと存じて候へば。あの松蔭に人が忍うで居り候。急ぎ御覧候へ。問へ〳〵中々の事

立衆皆々供して出る。狂言共に追ひかけて入る時も狂言ばかり鷹に出て。立衆は皆々退りて居る。留拍子ありてかゝ。問の入にて相濟む。

清時田村（きよときたむら）

アヒ　家來

早鼓にて出る。へかやうに候者は。田村清時卿に仕へ申す者にて候。唯今出る事餘の儀にあらず。奥州三津ヶ濱の邊りに。鬼神ども集り。國を騒がし申す事奏聞に及ぶ。乃ち清時に宣旨を下され。急ぎ立越え。退治せよとの御事

なり。仍つて常に初瀬の觀世音御信仰の事なれば。此度はなほまた御參詣候處に。何ぼう奇特なる事にて御座候ぞ。道にていづくともなく御方に行き逆ひ給ふが。今度東夷御退治候はゞ。此の馬を遣し候はんとあり。先づ忝しと御請け候へば。彼の人かき消すやうに失せ給ひ候間。さては觀世音現れ出で給ひ。與へ給ひたると思召し。御悦びのまゝ頓て彼の地へ御出でなされ候間。御内の者ども。隨分手柄を致し候へ。御勳功は後日に御沙汰候ひて充て行はせらるゝうずる間。其の分心得候へ〳〵。（此の間。二人にてもよ。三人にてもする。）

【く】

空也（くうや）

アヒ　家來

〽いかに申候。筑紫西濱の何某。空しくならせられ候と申して。刀に文を添へ。上人に送り候由申候。（常らさせ給へ上人よ。〱の字過ぎ一つ）（ト云ふ一つ。文を渡す。）

九穴（くけつ）

アヒ　家來

〽か樣に候者は。畠山重忠に仕へ申す者にて候。然るに賴朝公御內宴なされ。御酒興の餘りに仰せ出され候は。何も世に珍らしき事はなきかと御尋ね候處。梶原景時申され候。さん候この海中に。九穴の貝と申して寶の候が。之を取らせ御覽候へかしと仰せらるゝ。其時賴朝の仰せには。味方の內に誰か取るべき者やあると仰せらるゝ。梶原景時と。畠山重忠とは不和に候間。畠山を海中に入れ。失ひ申さんとの計略にて。景時申され候は。御前に人多き中に。重忠ならで彼の九穴を取るべき者あるまじくと申され候により。乃ち畠山に仰せ附けらるゝ。重忠是非に及ばず。畏まつたと御請けを申し。乃ち歸り申されて候が。か樣の事は私にはなり難く。佛神の力を以て。取るべきとの御事にて候間。何れも志の方々は御供の用意仕り候へ。其分心得候へ〳〵。

國玉（くにたま）

アヒ　末社

（亂序にて出る。）〽か樣に候者は。奧州磐城の郡大國魂神に仕へ申す。末社の神にて候。誠に。國々に靈神あまた御座候へども。當社大國魂神と申すは。忝くも伊奘諾伊奘册の尊。天の岩倉の苔筵にて。男女語らひをなし給ひ。日神月神蛭子素盞嗚の尊を儲け給ふ。然れば素盞嗚尊はいかなる御事にや。出雲の國に御座候。其の時一人の御子を儲け給ふ。大國魂神これなり。往古この處に鬼神棲むで。國土を惱まし候程に。坂上田村丸。宣旨を蒙り鬼神を平げ給ふ。其の時この神に祈誓をかけ給へば。當社の神力を以て鬼神を易々平げ給ふ。これによつて當社を田村丸御再興ありたると申す。大物主とも大己貴の神と申すも。則ち當社の仔細この如し。さて唯今當松尾の神職御參詣を。神慮に嬉しく思召し。假に現れ出で給ひ。御詞をかはし。重ねて拜ませ御申しあらうずるとの御事にて候。先づそれまで我等やうなる末社に罷出で。（以下右の如し。一段舞つて切る。常の如し。）

鞍馬（くらま）

アヒ　天狗

〽か樣に候者は。鞍馬僧正が谷に住居する木の葉天狗にて候。唯今罷出る事餘の儀にあ

らず。源の義朝の御子。沙那王丸殿父義朝に後れ、此の鞍馬寺に忍び御座候。然るに我等の頼うだ大天狗、いたはしく思召し。何卒平家を討たせ。再び源氏の世となし奉らんと。樣々に御抱へあり。或る時は愛宕高尾　吉野初瀬是處彼處の花を見せ。又兵法の大事を傳へ給ふ。沙那王殿器用なる人にて。委しく覺え給へば。今日は我等如きの木の葉天狗ども。皆々僧正が谷へ出て。沙那王殿の打太刀を仕れとの御事にて候により。これまで罷出たが。未だ一人も出ぬ。何とて出ぬまで。何と云ふぞ。沙那王殿には所詮叶はぬと云うて皆出ぬか。誠に。某も爰が思案ぢや。何としよう。いや／＼。一人も出ぬに。某ばかり手柄をせうと思うて　したゝかな目に合はうより。唯先づ戻らう。なう／＼いらぬ事ぢや／＼。

會盟（くわいめい）

アヒ　官人

口明して[illegible]に居る。中入過ぎかゝる。へ斯樣に候者は。秦帝に仕へ申す官人にて候。さる程に。隣國に趙王と申して御座候ひしが。然れば秦王より。會盟あるべきとの勅使を立てさせられ候處に。今日互に國境へ御幸あつて。御内宴あるべきとの御事にて候ぞ。相心得候へ／＼。ワキ呼出す。へ御前に候。ワキシカ／＼。へ畏まつて候。臣下シカ／＼。へ誰にて渡り候ぞ。シカ／＼。へ頓て御殿へ御うつし候へ。

へ扨々目出度き事かな。日頃御望みに思召す。趙璧の玉御所望候處に。趙王やす／＼と御出し候事。君の御悦び以ての外の御事にて候。乃ち此の所を内裏となされ。暫く御逗留あつて。趙國まで御從へあるべきとの御事なれば。民百姓に至るまで。訴訟の事あらば。急いで罷出で奏聞申し候へ。其の分心得候へ／＼。參内を乞ふ。へ誰にて渡り候ぞ。へ暫く御待ち候へ。へ其の由申上げうずるにて候。いかに申上候。趙王の臣下藺相如と申す者。玉の瑕を申さん爲にて。唯今參内申して候。

郭巨（くわくきよ）

アヒ　里人

中入過ぎて。唐人出立にて。本幕にて出で。橋懸りにて。後を見返り／＼云ふ。へやあ／＼何と云ふぞ。郭巨夫婦の者が。親を養育せんために。子を山へ捨てに參つたと申すかいや。それは誠か。やあこれはいかな事。トテ云うて。舞臺へ出る。はゝあ扨も／＼。夫婦共に天晴れ孝心な者共かな。尤も仁義禮智信の五常を守り。親たる者に孝を致す事は。珍らしからぬ事とは申しながら。人間は云ふに及ばず。鳥類畜類に至る迄。生きとし生ける者として。子を憐れまざる者もなく候に。尤も孝心の道とは申しながら。老母のために只一人の子を捨つると申す事。これまた雙びなき孝心。誠に感じてもなほ餘りあり。凡そ物を並べて見るに。天地陰陽貴賤上下。前後左右黒白表裏。此の類なの善悪擧げて算へがたし。今日の當り郭巨と某。同じ土民と申しながら。心は雲泥黒白の違ひなり。それはいかにと申すに。彼の郭巨は八旬に及ぶ老母あり。又一人の子を持つ。某も同じく老いたる親あり。幼き悴あり。郭巨も貧しく。又我も貧なり。朝夕の煙をさへ立ち兼ぬる體なれば。某夫婦種々に相談して存ずる樣は。老人は迚も生きても其の命末近し。又幼き者は命のたけ長く。生けるに末の樂しみ深し。所詮老母を何方へも捨て失ひて。我が子の長命を祈り。末の榮花を樂しまんと思ひ。老母を捨てんと心を定む。又かの郭巨は。一人の愛子を捨て。齡短き老母の飢を助けんと思ひ。夫婦諸共に心を定め談合して。早

の彼の幼き者を引連れて。山中さして參りたる由を申す。誠に。か様の孝心は世にあり難き志にて候。此の上は。某も郭巨が孝心に習ひ。心を改め懺して。老いたる親を大切に養育致さうと存ずる事にて候。他の直ぐなるを見ては。自らの曲れる心を直さではあるべからず。誠に能々存ずれば。天の咎も恐ろし。惣じて誤つて改むるに憚る所あるべからず。先づ急ぎ我が家に罷歸り。妻に此の事を申聞かせ候はゞ。嗟しき身にては候へども。郭巨が孝心の深き事を感心致し。志を改め。孝心の道に入らうと存ずる。や。か様に申すうちに時刻は移り候間。急いで歸らう。扨も〳〵此の様な奇特な志はあるまい。此の由を申聞かせたらば。定めて妻も感心致さうと存ずる。

菅丞相（くわんしようじやう）

アヒ　能力

〽斯様に候者は。延暦寺第十三の座主。法性坊尊意僧正に仕へ申す能力にて候。扨も僧正は。四明山の十乘の床に。觀月と惡れ心水を清めおはします處に。何ぼう不思議なる事にて候ぞ。筑紫にて果て給ひたる菅丞相。御出でありたると申す。抑も此の菅公に。菅原の宰相是善と申す御方。御子なかりし處に。或る時南庭に見あり。之を拾ひ上げ給ひ。養育して法性坊を師と頼み。誠に御成長の後。賢才の譽れ仁義に達し。朝臣人に越えて。高位に進み給ふ。然れども左大臣時平公の讒により。菅丞相筑紫へ左遷し給ふ。彼の配所にて終焉遊ばし給ひたるが。御存生の御姿に。少しも變らず御出であり。僧正に仰せられ候は。我れ鳴る雷となつて。九重の帝闕に近づき。讒言の輩を蹴殺すべし。其の時は。定めて僧正に御出であり御祈禱をあれとの勅使立つべし。我と師匠の義淺からざるまゝ。構へて御出であるなとの御斷りのため參りたりと。御申候へば。其の時僧正仰せられ候は。勅使二度までは參るまじ。若し勅使三度に及びなば。さのみはいかゞと仰せ候へば。其の時菅丞相氣色變り。折節本尊に供へありし。柘榴を取つて噛碎き。妻戸に吐きかけ給へば。火焰となつて燃上がる。僧正灑水の印を結んで。灑水の妙をじゆし給へば。火焰は消ゆる。丞相は黑雲に打乘り。卽ち内裏へ往き。樣々の事あるにより。僧正に御出であれとの勅使度々候により。僧正も是非に及ばず。參内あるべきとの御事にて候間。皆々御供の用意仕り候へ〳〵。其の分心得候へ〳〵。

長く仕立つるには。天拜山のしだら。丞相の降誕一件。天神の次第。作り立て。語るがよし。あらましは。雷電の謡にもある事なり。

【け】

堯舜（げうしゆん）

アヒ　官人

口明〽斯様に候者は。堯帝に仕へ申す官人にて候。定に。君賢王にてましますにより。國土治まり民榮え。目出度き御代にて候。今日は此の處へ御幸あり。御遊あるべきとの御事なり。皆々參内申され候へ。其分心得候へ〳〵。

太鼓座に入る。中入過ぎて立つて語る。

〽扨々目出度き御代かな。君の御惠み深き故。五日の風は枝を鳴らさず。十日の雨土塊を壞らず。思召すまゝの御代にて候。然れども御位を讓り給はん御方御座なく候故。箕山に許由と云へる賢人あり。これに位を禪らんとの御事にて候處に。許由宣旨を蒙り。頭を振り。我れ此の處に隱れ住み。濁世の塵を拂ひ。谷の清水に心を澄まし。悠々とある折節。穢らはしき世の業思寄らずとて。頭

川の瀧にて耳を洗ひ候處へ。巣父と申す賢人。牛を引いて來り。許由が耳を洗ふを見て。何事ぞと尋ねければ。許由右の次第を語りければ。巣父聞きもあえず。誠に此の瀧のいつも濁り候を。不思議に思ひしに。左樣に穢れし瀧水にて我が牛にもかはじとて歸り候。寔に二人共に希代なる賢人にて候。又驪山の麓に平花といへる民あり。隱れなき親孝行なる人にて候故。乃ち平花を召出だされ。舜の君となし給ふ。か樣の事も親孝行の志故。天道よりの御惠みを受け給ふ事にて候。惣じて上たる學ぶ下にて候へば。か樣なる者も彌々親孝行に致し。舜の君に仕へ。官祿に預り申す樣にとの御事なり。皆々その分心得候へ〳〵。

現在熊坂（げんざいくまさか）

アヒ　宿の者

シカ〳〵。〽案内とは誰にて渡り候ぞ。シカ〳〵。〽吉次殿御下りにて候よ。いつもより當年は早々との御下りにて候。奧の間へ御通り候へ。

現在巴（げんざいともゑ）

アヒ　供人

（中入の時）〽扨も〳〵哀れなる事かな。誠に健氣な御方なればとて。戰場へ女性を召連れられんはいかゞとて。御殘しあるも尤もなり。巴何方までも御供なされたいと思召すも道理なり。互の御心中察し申して候。やあ〳〵。（シテ太鼓座へ行き。長刀持つて出る。）誠か。これは如何なこと。其の由申さう。それはなにと三田の八郎師重巴の討手に向ふ。（問）〽いかに申候。三田の八郎師重と申す者。方々を討取り申さんとて。大勢にて押寄せ申候間。先づこれにて御防ぎあれかしと存じ候。（ト云うて。長刀を渡す。シテ（巴）は。中入せず。舞臺に居る。）

元服曾我（げんぷくそが）

アヒ　從者

〽案内とは誰にて渡り候ぞ。シカ〳〵。〽其の由申さうずるにて候。暫く御待ち候へ。いかに申し候。祐成殿の御登山にて候。シカ〳〵。〽畏まつて候。〽最前の人の渡り候。御登山の由申して候へば。御目にかゝらうずると申され候間。こなたへ御通りなさるゝ樣に御申し候へ。〽御前に候。シカ〳〵。〽畏まつて候。〽いかに箱王殿。祐成殿御參りにて候ぞ。急いで御出で候へ。〽箱王殿御出でにて候。（此の時は太刀を持つ。）〽御前に候。はや拔群御出であらうずるにて候。〽心得申候。〽いや。これに御座候よ。〽いかに申候。別當これまで參られて候。〽畏まつて候。〽此方へ御出で候へと仰せ候。

【こ】

暮空蟬（ごうつせみ）

アヒ　下京の者

（前後セリフ箒木に同じ。以下文句語の末に入る。）〽さる程に。かの息女の方へ一夜の御情に。御歌詠み遣されたると申す。其の御歌に。ほのかにも。軒端の荻を結ばずは。露のかごとを何にかけまし。か樣に送り給へば。其の御返歌に。ほのめかす。風につけても下荻の。なかばは霜に結ぼほれつゝと。御返歌により。かの息女を軒端の荻

とも。又下荻とも申したるげに候。以下セリフ常の如し。
前は空蟬の亡心。ワキの詞に。中川の宿に立寄る。空蟬出て詞かはし。今夜は此の處に明し給へ。碁を打ち。懺悔せんと云ふ。ワキ其の相手はと問ふ。軒端の荻なりといふ。後の出端は。軒端の荻先に立つて。空蟬後より出る。

粉川寺（こかはでら）　アヒ　能力

ワキ呼出す。〽御前に候。シカ〳〵。〽畏まつて候。シテ道行過ぎ。宿借れとツレに云ふ。シテツレ呼出す。〽案内とは誰にて渡り候ぞ。シカ〳〵。〽お宿參らせ度く候へども。當寺の大法にて。年に二夜。旅人に宿を貸さぬ夜の候が。則ち今夜に當りて候程に。お貸し申す事はならず候間。何方へも御出で候へ。又シカ〳〵呼出す。〽案内とはいかなる人にて候ぞ。〽何と高島殿の御出でにて候か。それに御待ち候へ。其の由申さうずるにて候。〽いかに申候。高島殿御登山にて候。〽畏まつて候。最前の人の渡り候か。〽其の由を申して候へば。此方へ御出で候へとの御事にて候。段々有あつて。忘れがたの面影やと云ふ時立つ。〽扨も〳〵。今夜の客人に呆れ果てた。肴物日頃拵へて置いたを無になした。それに又笑止な事が御座る。急ぎ此の由を御坊へ申さう。〽いかに申し候。〽今夜の高島殿は。何せ高島殿に御座あつたと申す。其の仔細は。今夜は年に二度。旅人に宿を貸さぬ日に當つた程にと仰せられ候によりて。宿借る事のなきに。本堂に休みて居られ候な。是の梅夜叉殿御覧じて。御堂の庭に何やら反故切れを落とさしましたを。我等の存ずるには。せゝり經がな落とさせられたかと思うて御座れば。くどき文にてあつたと申す。其の文體には。未だ申通じたる事はなけれども。行暮れて宿もないと見えて。草臥れたる御有様。見參らせ候へば傷はしく候程に申し參らせ候。寺中には旅人に。宿を參らする者はあるまじき大法の候間。我等の故郷近江國。高島の某と申す者の子にて候間。高島と名告つて御出で候へ。然らば師匠も出合ひ。お宿を參らせられぬ事はあるまじ。某もさ樣にあしらひ。一夜明かさせ申さうずるにて候。我等が名は梅夜叉と申候。御疑あなかしこと書いて。御遣りありたると申し候が。大膽な事を。年も足らいで。さ樣の事を書いてやつて。行衛も知らぬ者を留めて。いかい物入りぢや。おかずの物も皆喰はせて御座ない。漸うあらめの切が少しならでは御座らぬ。柚子や六條の樣な物まで。拵へ置いたを悉く。御肴の何のかのとおしやつて。取りにおやる所で。誠の高島殿かと存じて。やつて皆になつた。今からだにあの樣にあつては。後には師匠を賣つておまゐらうも知れぬと存ずる。ちと折檻を成されたらよう御座らう。〽御尤もにて候。〽イヤ案内と申すは誰にて渡り候ぞ。〽又高島殿の御出でぢや。其の由申さう。扨々先づは多い高島殿かな。どれが本の高島殿ぞ。〽いかに申候。又高島殿の御出でにて候。〽畏まつて候。〽最前の人の御入り候か。〽此方へ御入りあれとの御事にて候。此の後切戸より入る。

木幡（こはた）　アヒ　里の女

〽是は伏見の里に住居する女にて候。妾が賴み奉りたる尼公御息女は。邊り近き木幡の左衛門殿の北の方にて候が。尼公は此の御方の育てにて身命を御つぎ候。又御心附を得させられんため。御文を遣され候間。急ぎ木幡へ持ちて參らばやと思ひ候。誠に。此の間は

あなたからも此方よりも。音信のなく候程に。是参り候はゞ。よきに御披露にて御座あらうずると思ひ候。程なく参り着いて候。いかに此の内へ案内申候。伏見より御使に参りたる由御申候へ。ツレ。伏見よりと申すか。人までもなし。此方へと申候へ。へや。左衛門殿は御留守にて。北の方御一人御座ありげに候。直に御文を参らせうずるにて候。伏見よりの御文にて候御覧候へ。ツレ。あら嬉しや。開いて見よとあるにて候。へこれはいかなる事にて候ぞ。文は伏見よりの文にて候ものを。あらあさましや。先づ急ぎ伏見へ歸り。此の由申さうと存ずる。へいかに申上候。北の方を左衛門殿の害し給ひて候。シカ〳〵。へ唯今の事にて候。シカ〳〵。へさん候。此方より遣されたる文を。いかなる者の文ぞと思召し。害し給ひて候。太夫詞。いかに申候。斯様の事。某も知らず事に[illegible]御歸り候へ。へ暫く御待ち候へ。これは後までも無き名を取り給はん事。餘處の聞えも口惜しく候間。是非その文を取出だし御覧候へ。

小林（こばやし）

アヒ　里人

ワキ名宮わのうちに立つて。へ是は八幡の里に住居する者にて候。八幡宮へ参らばやと思ひ候。ワキ見かけて。へいかにお僧へ申候。八幡宮へ御参り候はゞ御供申候べし。へ扨は初めての御参詣にて候か。我等は當所の者にて候間。御道知るべ申候べし。かう〳〵御座候へ。

へ別に珍らしき事もなく候ぞりながら。山上の廻廊に瞽女の候が。氏清の事を謠に作り謳ひ候。殊の外面白く候程に。之を聞かせ申さうずるにて候。へ心得申候。へや。程なく廻廊へ参り着きて候。申しつる瞽女の是に候。謠を所望申さうずる間。それへ御通りあつて御聞き候へ。へなう〳〵瞽女。是にお僧の御座候が。氏清の事を謠ひ聞かせられたきと仰せ候間。急いで謠はれ候へ。瞽女となり行く。若悲しきと云ふ時。へ迚もの事に早節を謠はれ候へ。

伍筆（ごはつ）

アヒ　里人

へ是は此の邊りの者にて候。此の所に貴きお僧の御座候が。伍筆の御經を書寫なされ候故。折々御見舞ひ申候。此の間は怠り申候間。立寄り申さばやと存じ候。セリフの三輪の如し。へ先づ當所上の宮と申すは。地神四代彦火々出見の尊。御母は木花咲耶姫實の戸出生し給ひ。御兄火闌降の尊と。朝暮に沖に出で。釣を垂れ給ふ處に。鱗の中に惡魚あつて。彼の釣針を喰切り失せ申す。兄尊に借り給ひたる針にて。迷惑し給ひ。鹽筒男の翁を頼み給ひ。龍宮まで分入り尋ね給ふ。其時豐玉姫玉依姫は。玉の井に楽水を汲み居り給ふに。豐玉姫尊を一目御覧じ。其のまゝ戀しく思召し。頓て龍宮へ伴ひ。夫婦の御語らひなし給ふ。既に二年を送り給ふ。其後干珠滿珠の寶に釣針を取添へ。豐玉姫諸共に。御歸りあり御位に即かせ給ふ。さあるに依つて。豐玉姫を下の宮と祝ひ。今に靈驗あらたなる御事にて御座候。先づ我等の承り及びたる通り。かくの如くに御座候。トメ常の如し。へさては豐玉姫にて御座あらうずる間。さあらば御申しの通り。御經を社内へ納め。重ねて寄特を。あとのセリフ常の如し。

戀の松原（こひのまつばら）

アヒ　里人

へ是は此の邊りに住居する者にて候。此の程は薪を採り申さず候。大雪になり候はゞ。

薪を採り申す事もなるまじく候間。童共には松原の木の葉を採らせ。我等も木の葉を取り申さばやと存ずる。や。これなるお僧は此の邊りにては見馴れ申さぬが。以下セリフ常の如し。〽先づこれなるは。戀の松原と申す名所にて御座候。又爰に恨み坂と申す所も御座候。此の戀の松原と申す仔細は。古へ此の所に忍び妻憧れたる者あり。此の松原にて忍び〳〵に出合ひ申す。或る時互に申合せ。此の松原へ立出で候處に。先づ男はとくより出で。今や〳〵と待つ處に。別して此の所は春になり候へども。大雪降り積り候所に御座候。彼の男待つには程もあり候うちに。次第に大雪降り來り候程に。人知らず雪に埋もれ死に申して候。又女はさ樣の事も知らず。此の野に出で。男を待ちけるが。それだに凌ぎ難き雪なれば。此の女も寒風に吹かれて。終に空しくなりたるげに候。何ぼう哀れなる事にて候。以下セリフ常の如し。〽さ樣の女は此の所には御座なく候が。さては現れ出でたると存じ候間。夫婦の跡を御弔ひあれかしと存じ候。

護法（ごほふ）

アヒ　里人

ワキ名宣り道行過ぎて。シカ〴〵。〽所の者とお尋ねは。いか樣なる御用にて御座候ぞ。〽さん候名取の嫗と申すは。隱れもなき人にて。此の所に三熊野を勸請申され。日參にて候。今日は未だ御參りなく候。頓て御參詣あるべき間。これに御待ちあつて御逢ひ候へ。〽御用の事候はゞ。重ねて承り候べし。〽心得申して候。

子守勝手（こもりかつて）

アヒ　里人

ワキ呼出す。〽所の者とお尋ねは。誰にて渡り候ぞ。セリフ常の如し。〽先づ子守大明神と申すは。人皇七代孝靈天皇の御宇に。常陸國にて筑波山。又吉野山即ち金峯山と申す。此の兩山涌出したる節は。殊の外雨風しきりにして。天地震動し。世の常ならぬに依つて。帝聞召され。勅使下され候處に。山の峯に金峯山と申す額あり。勅使不審の儀に思召されたるに。一人の老翁花を植ゑて居たりし故。勅使御覽じ。いかなればこの山に花を植うるぞ。又仔細は知らぬやと。御尋ね成されければ。老人答へて申すやうは。さん候此の山は。忝くも天竺の五臺山の金の山なるが。帝思召すは。日本にも金の山を築きたう思召すにより。天竺五臺山未申の方かけて。道にて一つに成り。本山は此の所に納まり。かけたるが。東國筑波山になりたると申す。御念願にて日本にも金山二つ出來たり。然れば彌々何事も思召すまゝに目出度かるべきか程の御山に。草木なくては叶はじと。花の木を植ゑ申す。此の由奏聞あれ。我は此の山守る者なりと。仰せられ候へば。勅使も斜ならず御悦びあり。頓て御歸りあり。此の旨奏聞ありければ。其の後帝も御幸ありたると申す。其時の老人は。子守の明神と申して。即ち此の山の守護神にて御座候。先づ我等の承る通り御物語申して候。

惟盛（これもり）

アヒ　宿の者

〽此の家の者とお尋ねは。いか樣なる御用にて候ぞ。〽易き間の事見苦しくは御座候へども。此方へ御座候へ。シカ〴〵。〽さん候。爰に平家の人にて御入り候が。夜な〳〵此に乘り。念佛を御申候が。若しお僧も所縁の御

方にて御座候か。〽御覽ぜられ度くは。急ぎ御出であつて。御待ちあれかしと存じ候。〽早や夜も深くなりて候。最前のお僧未だ御歸りなく候程に。參り尋ね申さばやと存ずる。〽最前のお僧は御座候か。宿の主參りて候。誠に惟盛の御宿も某申して候。シャ〳〵。〽さる程に。惟盛と申したる御方は。一の谷の合戰に打負けなされ候間。惟盛思召す樣は。平家は運盡き末になりて候間。今は浮世をいわうずると思召し。高野山へ御參りあつて。瀧口の聖を御頼みあつて。暫く高野山に御座なされたる時、熊野へ御參詣あらうずるとて。瀧口の聖を同道なされ。當浦まで御下向なされ候。その時の御供には。與三左衛門重景。石洞丸武郷。此の三人召連れられ候。某は此の濱にて參會申す處に。此の浦の者にて候が。いか樣なる御用にて候ぞと申して候へば。小船一艘御貸しあれと。仰せられ候程に。易き間の御事と申して、頓てお船を呼出し。某楫取(かぢとり)に參り、押し出だす處に。あれなる島を御覽じて。何と申す島ぞと御尋ねなされ候程に、さん候あの島は。帆立島と申す島にて候と申して候へば。謂はれのあるかと御尋ねなされ候間。さん候じつ國の聖、此の所より補陀落へ御渡り候時、此の島にて帆柱を立て。帆を引き候に依つて。帆立島などと申すと申して候へば。惟盛聞召し。さあらば御見物あらうずるとて、お船をさし寄せ申候へば。船の舳板(へいた)に立ち給ひ。彼方此方を御覽じて。一首の歌に。ふるさとの。松風我を恨むらん。底の水屑と成り果つる身を。斯樣に詠み給ひ。御身を投げ空しくなり給ひ候間。驚き騷ぎ。助け申さうずると存じ。海中に分入り尋ね候へども。荒磯の事なれば。見失ひ。すご〳〵と歸り申して候。何ぼう傷はしき事にて御座候ぞ。某も一夜のお宿をも參らせて候へば。一入いたはしく存じ。某もお供申さうずると思定めて候へども。妻子に暇乞ひを仕り申さばやと。罷歸りて候へば。命つれなき者にて候ぞ。お供をも申さず。今に此の仕合はせに御座候。〽惟盛修維の業因深くましますにより。常に此の邊りの者にまみえ給ふとは申候へども。終に我等は。見申したる事は御座なく候へども。惟盛の御跡を懇に御弔ひあれかしと存じ候。〽いか樣明日宿にて待ち申さうずるにて候。〽心得申して候。

同

アヒ　里人

〽誰にて渡り候ぞ。〽易き間の事お宿申さう。かう〳〵、御通り候へ。六代ワキ座直し。〽是は熊野への道者にて御座候か。〽何事にて候ぞ。〽我等も爰もとに住居仕り候間。さ樣には承り候へども。所はさだかに存ぜず候。〽いや思ひ出だしたる事の候。惟盛御弔ひの爲。夜念佛申す人の候が。定めて御存じ候べし。毎夜この磯邊を御通りなされ候。漸う時分にて候間。之を待ちて委しく御尋ね候へ。

金剛山(こんがうざん)

アヒ　龍の眷屬

〽是は此の山に棲む諸龍の眷屬にて候。惣じて此の山は。佛在世の時。五部の大三千經を説き給ふ。華嚴經の文(もん)に曰く。南閻浮提の其の中に。扶桑國の傍に水精輪の山あり。これ即ち菩薩諸法の所なりと説き給ふも。即ち此の金剛山の事なれば。己身の彌陀唯心の淨土と渇仰致す。然れば除砂大王この山を守護し給ふ。これ天竺龍沙川の主にておはします。先づ往古玄弉は三藏法師渡天の時出會ひ。

大般若の名軸を與へ給ふ。されば佛法守護の龍王にて御座候。唯今これへ出る事餘の儀にあらず。唐土の貴き沙門唯今これへ御出での事。嬉しく思召し。假に山賤と現じ。此の山を淨土になし。御目にかけうずるとて。御歸りありたるが。然れば佛たちは數多いるほどに。我等如きの者も罷出で。何佛になりとも成り申せとの御事にて候。皆々その分心得候へ〳〵。

【さ】

犀(さい)

（早鼓にて出ると）へか樣に候者は。和泉小二郎が内に仕へ申す者にて候。扨も我が君賴朝御狩御遊に御出で成され。信濃の國に於て。山々の致景鹿の多く集まりたるを御覽なされ。御機嫌斜ならず。邊りに大川の流るゝを御覽なされ。此の川は。何と云ふ川ぞと御尋ねありければ。これは犀川と申す川にて御座候と申上ぐる。君聞召され。又た犀川と名付けたる仔細のあるかと。重ねて御尋ねなされ候へば。其時相模守進み出で申されけるは。其の事にて候。犀と申すものの棲みける川に依つて。昔より犀川と名附け候と申上げられければ。君聞召され。これは奇特なる事を申すものかな。我れ日本に犀の棲む事を。今こそ知れ。我れ天下を掌に治むる事。弓矢を取つて其の威德なり。其の上この犀の角を持つならば。たとひ海川山を隔てたる敵なりとも。思召すまゝに從へ給はん事疑ひなし。急ぎ此の川に棲む犀の角を取つて差上げ申せと仰出ださるゝ。さて誰かは水中に入つて犀の角を取るべき者やあると。御詮ありし時。供奉の侍多き中に。賴み申す小二郎ならではあるまじきとて。御前に召出だされ。仰附けらるゝ。小二郎存ぜらるゝは。水底に棲むて。あらはに人に姿を見せず。殊に水馴たる者なれば。危く存じ。御請けいかがと存ぜられ候へども。一つは家の面目これに過ぎじと。易々御請け申されける。賴朝この犀の角御所望に思召さるゝ事。全く私にあらず。これ皆古へ既に溫嶠が牛渚磯の大川を渡りしも。犀の力を賴みしと云へば。か樣の事も思召され。仰附けられたるとぞ存ずる。又或る詩に曰はく。山に梯海に[illegible]渡りして。馴犀を貢ずとも作られたり。其の外犀の德義數多しといへども。三冬の朝。此の犀に觸るゝ者は寒氣を去り。溫暖の和氣を得る事。其の疑ひなし。又九夏の天には暑氣を退けて。清涼の清風を起こす事あり。これ皆目出度き例なり。人の怒りをやめてその儘に。悦びの色をなす事僞りなし。これ獨忿犀なり。これを開き彼れを見る時は。長生不老の藥ともなるべき物なり。かるが故に唐の玄宗も。朝暮犀を愛し給ひたる例もあり。我が君もか樣の思召し。武運長久の家の寶となし給はんずる例仰附けられたると存ずる。小二郎も一大事の事なれば。大勢人をも連れられうずるかと存じて候へば。中々さ樣にてはなく。人をも連れ申すまじくと申され候さりながら。小次郎が内におらうずる者は。川まで參らずとも。思ひ〳〵に路次までは參り候へ。其の分心得候へ〳〵。

西寂(さいじゃく)

アヒ　家來

へこれは。當國の守護入道殿に仕へ申す者にて候。さても賴み奉りたる西寂殿は。此度伊豫の國に渡り給ひ。河野の四郎道清と合戰なされ候に就き。勝ち給ひ御凱陣なされ候。然れば目出度き折からに候へば。今日の陣に

て御船なされ候由仰せられ候ひて。いつもの苫侍たち、船備へ囃子物して參り候へ。其の分心得候へ。へやれ／＼尤もぢや。能き御囃子にて候。先づ陸へ皆々御上り候ひて。御休み候へ。へやれ／＼御苦勞や。御酒下さるゝ間參り候へ。へあら不思議や。此の由申上げう。いかに申候。鸕飼の船に乘り移り申す處に。船底に打物を入れ置き申候。是は怪しき者にて候。へいかなる事にて候ぞ。彼の者に御尋ねあれかしと存じ候。

材施太子（ざいせたいし）

へ誰にて渡り候ぞ。へ心得申して候。へさていか樣なる御用にて候ぞ。へ先づ此の國は萬事目出度き御事なれば。御瑞相の數多御座候故に。國々在々まで。喜悅の思ひをなし申候間。さ樣の奏聞あれかしと存じ候。へそれは近頃にて候。

齋藤五（さいとうご）

アヒ　家來

へ御前に候。へ六代御の御願の爲。祇園へ御參りなされて候。時刻の供へ大事の囚人（めしうど）の傍へ。長具足を帶し寄りたるは何者ぞ。へさらば其の由申候べし。暫くそれに御待ち候へ。へいかに申候。六代御の御供申さん爲。齋藤五齋藤六兄弟。六代御の御めのと。これまで參りたると申され候。へ御尤もにて候。へ御前に候。へ畏まつて候。へいかに申候。此の所は江州鏡の宿にて候。御輿を留めらせ候へ。へいかに齋藤五齋藤六へ申候。今夜は此の所が御泊りにて候が。方々は六代御の御宿へ御泊りは無用に候間。別宿に御泊りあれとの御事にて候。へいかに申候。へ六代御の御宿を申附け候。又兄弟の者は別宿を申附けて候。へいかに齋藤五の渡り候か。へ時政申され候は。最前艸なしの森にて。御供の事仰せ候程に。時政心得を以て許し申され候。又六代御の御事は。大事の囚人にて御座候間。大法の如く刀を渡し候へ。へいや左樣に仰せ候はゞ。都へ追返し申せとの御事にて候。へ近頃にて候。刀を取りて參りて候。へ畏まつて候。へいかに申候。唯今御刀を御渡しなされ候近頃により。又繩をも御かゝり候ひて。御供あれとの御事にて候。へ左樣に候はゞ。最前の刀を戾し。追返し申せとの御事にて候。へ何と繩を御かゝりあらうずると候や。へよき御分別にて候。さあらば掛け申さう。へいや是は主君の御事なれば。少しも苦しからぬ御事にて候。へいかに申候。繩をかけて參りて候。へ畏まつて候。へいかに齋藤六へ申候。時政申され候は。艸なしの森にて。御供の事樣々御申しなされ候により。心得を以て許し申候。然れば六代御は大事の囚人にて御座候間。刀をも渡し。又繩をかゝりあつて。心安く御供あれとの御事にて候。へ中々。齋藤五はとく繩を掛かり候。へいやさ樣候はゞ。追返し申せとの御事にて候。へやあら存じの外なる事にて候。へいかに申候。齋藤六へ參りて候齋藤五とは引替へ。殊の外の氣色にて。弓矢八幡刀を出し申すまいと申す。無分別にて候間追返し申さうずるにて候。へ御尤もにて候。へやれ／＼憎い事かな。人のかゝれと云ふ時は掛からずして。思ふさましめておましよ。へ御前に候。へ畏まつて候。へ繩を許し申候間。これへ御出で候へ。

櫻間（さくらま）

アヒ　家來（二人）

シテ〽聞いたか〳〵。アド〽何事ぢや〳〵。シテ〽さても頼朝舍弟。九郎判官平家を退治のため。八島の浦に赴かせ給ふ。當國勝浦へ船を寄せ。櫻間の館を責落とし。八島の門出にせんとて。中々夥しき軍兵ぢや。櫻間殿この由を聞き。寄り〳〵軍兵若輩を集め。談合せられ候處。皆々申さるゝは。九郎義經は名大將なれば。中々叶ふまじ。殊に味方は無勢に候程に。一先づ引退き申すべきが然るべしと。申され候へども。櫻間これを聞いて。いやせめて矢一筋射では叶ふまじと。急ぎ御拵へ。おや。急ぎ此の由觸るゝ程に。おぬしも急ぎお觸りや。アド〽心得た。シテ〽皆々承り候へ。頼朝の舍弟九郎判官。當國勝浦に船を寄せ。櫻間の館を責めたされ候。何れも年寄若き者によらず。急ぎ籠城仕り候へとの御事にて候間。其の分心得候へ〳〵。

狹衣（さごろも）

アヒ　里人

〽これは嵯峨野の邊りに住居する者にて候。セリフ常の如し。〽先づ。狹衣の大將と申すは。人皇六十一代。一條天皇の御弟。堀川の大臣と申したる御方にて御座ありたると申し候。此の君を狹衣の君と申す仔細は。御歌に。色々の。重ねては着し人知らず。思ひそめにし夜半の狹衣と。か樣に詠み給ひしより。狹衣の君と申したるげに候。或る時。頃は五月五日夜の事なりしに。禁中にて狹衣の君。笛の役を仰付けられしが。笛の音雲井に響きし吹き給ふ。月宮殿の天若御子天降り給ひ。薄衣を狹衣の肩に打掛け。袖を引き天上あれと誘ひ給ふ。狹衣の君御覽じて。早や御纒ひ既に天上あらんと見えし程に。帝御覽じ驚き給ひ。引止め給へば。天若御子は力なく。雲井に乗り天上ありたると申す。帝御盃を賜はり。頓て其の夜女二の宮を狹衣の君に遣され候。其の後御髪をおろし。此の嵯峨野に住み給ひたると申傳へ候。以下セリフ常の如し。〽それは古へ天降り給ふ。天若御子の執心にて御座あらうずる。それはいかにと申すに。古へ狹衣の大將住み給ひし所なる故。彼の天人今に執心殘され。現れ給ひたると存じ候。此のあとセリフ常の如し。

貞任（さだたふ）

アヒ　里人

〽さる程に。人皇七十三代。堀河天皇の御宇。安倍の貞任宗任の兄弟の者。奧州衣川の城郭に籠もり。せいしやうがいにまかする間。都より打手の大將定められける。爰に攝津の守源の頼光。河内守源の頼信。伊豫の守源の頼義とて。三人の勇士あり。公卿詮議あつて。頼義を定め將軍を下し給ふ。さあるに依つて。頓て打手に立ち給ふ。氏神なればとて。八幡宮に參詣し給ふ處に。山鳩一羽飛び來り。椋の實くはへて頼義に與へ申す。頼義大きに悦び給ひ。御館に彼の椋の實を植ゑ置き給ひ。さて東國に下向あり。衣川の城に押寄せ給へども。中々勝利を得ざるによつて。又八幡太郎義家を差遣されたると申す。さる程に。帝不思議なる御靈夢まします。比叡山中堂の將藥師の御告に。此度貞任宗任誅伐は。勝利あるべきと御示現ありたれば。此の旨乃ち義家に告げ知らせ給へば。其の時義家大きに力を得て。都帝に向ひ。八幡宮竝に中堂の將藥師を祈念し。松明を城中へ投入れ給へば。乃ち大風吹き來り。城中悉く燒亡び貞任今は叶はじとて落行き候を。義家御覽じて。いかに貞

任。衣の關はほころびにけり。と云ふ歌の下の句を。詠み掛け給へば。貞任もさる者にて。頓て馬引返し取敢へず。年頃は。たてを揃へて繕りしかどと。上の句を繼ぎ申す。義家斜ならずに思召し。遂に貞任を滅ぼし御上洛あり。都の邊りに勤林院と申す寺を御建立あり。貞任を御弔はせたると申す。されば衣川の戦も。前後十二年に亡びたると申候。又頼義の植置き給ひたる。椋の實も大木に成り。則ちその木の下に。八幡宮を勧請申し。都佐女牛の八幡と號し。信仰ありたると承り及びて候。以下セリフ常の如し。

實方（さねかた）

アヒ　里人

〽所の者とお尋ねは。誰にてわたり候ぞ。〽さん候あれは實方の卿の御墓所にて候間。立寄り御心靜かに御一見候へ。〽重ねて御用あらば承り候べし。〽心得申して候。セリフ。江口の通り。〽さる程に。實方の卿は。都に御座ありて後。此の所に住み給ひ。終に此の所にて空しくなり給ひ。これなる標（しるし）を立て。今にかくの如くなる御事にて御座候。誠にこの御方。或る時加茂の臨時の舞の役人たりしが。妙（たへ）なる粧にて。大口に狩衣。烏帽子に篠の葉を附け。きらびやかなる髷引結び。橘木の宮居に御出でありしかば。誠に。春の花秋の月をも欺く程にて。類ひなき御粧にて御座ありたると申す。其の折節御手洗川の水にて。水鏡をうつし御覽じ。我ながら思ひ煩ひ給ひたるなどと。承り及びて候。あとのセリフ常の如し。

佐保川（さほがは）

アヒ　家來

月ぞよしなきの謠過ぎて。〽此の間心にかけて狙ひ候へば。女の二人あるが魚を取り申候間。此の由申さうずるにて候。いかに申上げ候。此の程狙ひ申して候へば。二人佐保川の魚を取り申候。ワキシカ〳〵。〽御前に候。シカ〳〵。〽畏まつて候。近頃曲者にて。ただ打殺し申さう。〽御身の事は某が心得にて助け申して候。姉御の死骸を御覽候へ。

【し】

志賀忠度（しがたゞのり）

〽さる程に。志賀の山櫻は。忝くも人皇三十九代。天智天皇この志賀の里に。大宮作りましまし此の櫻を植ゑ置かせ申され。それより志賀の花園志賀の山櫻などと。御歌にも詠まれ。誠に此の櫻は名木に御座候。其の樣體は。花の盛りは申すに及ばず。散り方には。今道峠の山嵐に吹かれ。湖水に花の散り浮き候ありさまは。宛ら雪か花かと疑はれて。類ひなく見事に中々申すも愚かに候。さる程に。薩摩の守忠度の御歌に。さゞ波や。志賀の都は荒れにしを。昔ながらの山櫻かなと。此の所の景色を詠み給ひたると申す。さて又薩摩の守と申したる御方は。破戒無慚の罪を恐れ。仁義禮智信の五常を守り給ふ。殊には歌の道に達し。又は弓矢の名を揚げ。文武二道に暗からぬ御方にて御座ありたると申すが。津の國一の谷の合戦に。岡部の六彌太忠澄に討たれ給ひたると申す。御最期に箙を見れば。旅宿の花と申す題にて。行暮れて。木の下蔭を宿とせば。花や今宵の主ならましと。短冊に書附け御座ありたると申す。誠に。戦場まで。か樣に嗜み給ふと、皆人感涙を流し申す。されば後白河天皇の御宇に。五條三位俊成の卿。千載集を撰じ給ふ。忠度の歌をも入れ給

へども。忠度は平家。中にも勅勘の人なれば。詠み人知らずと書かれ候へども。か樣のやさしき心ばへを感じ。重ねて平の忠度朝臣と改められたると申す。最前申す如く。委しき仔細は存ぜず候へども。以下セリフ。常の如し。

信貴山（しぎさん）

アヒ　末社

〽か樣に候者は。河内の國信貴山毘沙門天に仕へ申す化身にて候。唯今この所へ罷出る事餘の儀にあらず。抑も上宮太子佛法を濟度し給はんとの御事なり。然るに一天にこみこみたる魔王ども。守屋と申す者に變化し。太子の御志を妨げ申す。太子この事能く御存じあつて。守屋が立籠もりたる稲村の城へ押寄せ。守屋を退治なさるべきとの御事なり。依つて多門天は山賤となり給ひ。先づ此の山の道しるべなされ。先に歸らせ候が。重ねて誠の御姿を現し。太子に力を添へ給はんとの御事なり。先づ此の由を某に參り申せとの御事により。これまで參つたが。太子はどれに御座るぢやまで。えい。これに御座る。急ぎ申し渡さう。いかに申候。これは信貴山多門天に仕へ申す化身にて候。此度守屋を御退治なさるべき事。たやすくは叶ふまじ。則ち多門天現れ出で給ひ。御力を添へ給ふべきとの御事なり。御心安く思召し。頓て御退治あるべし。此の事申さんためこれまで參りたり。あら正體なの體や。とう〳〵御目を覺まされ候へ〳〵。以下紅葉狩の通り。

敷地物狂（しきぢものぐるひ）

アヒ　里人

〽所の者とお尋ねは。誰にてわたり候ぞ。〽もとは此の所に御座候ひしが。松若殿と申して。御子息の候ひしが御遁世にて。いづくともなく御出で候程に。御尋ねに御出で候由にて。皆々散り〳〵になり給ひ。今は此の處には御座なく候。〽心得申し候。〽最前の者とお尋ねには何事にて御座候て。〽心得申候。皆々承り候へ。都より御新發意御下り候ひて。父母恩重恩の御說法。一七日の間なされ候程に。皆々御參りあり。聽聞申され候へ。其の分心得候へ〳〵。

樒天狗（しきみてんぐ）

アヒ　天狗

〽か樣に候者は。愛宕山樒が原に住居する木の葉天狗にて候。唯今これへ罷出る事餘の儀にあらず。光源氏の御寵愛。數多御座候中にも。六條の御息所と申すは。殊の外御生まれつき穩やかにして。容顏美麗なる事。申すも愚かに候。誠に春の花秋の月をも欺く程に。眺めに飽かぬ御粧にて。美女の聞えあるにより。みづから我ほど美女のあるまじくと思はれ候間。賴うだ御方。彼の慢ずる所を憎しとあつて。其のまゝ魔道へ引落とし。熱湯樣々の御苦しみにて候。御いたはしき事にて候。我等如きの存ずるは。いかに慢心あればとて。あの花の樣な美しき御方を。熱湯は無用にして。あまいにても參らせ。少し賴うだ者も。御寵愛あれかしと存ずる事にて候。いや何かと申すうちに時刻が移る。仰付けられた通り申さう。皆々承り候へ。今日は御息所を伴ひ。六條の古御所へ御出でにて候間。小天狗ども罷り出でよとの御事なり。構へて其の分心得候へ〳〵。

樒塚（しきみづか）

皇の皇子にて。寄位を受け給はんなれども。衆生を助けん爲。推古天皇を御位に立て給ひ。御身に攝籙の臣となり。國土を治め給ふ。殊に佛法を第一と崇め給ふ處に。守屋の大臣は。神道を專らにし。既に合戰に及て申す　太子打負け給ふ節。道の傍に櫻の木二つに割れ。其の內へ御馬に召しながら隱れ御申候。其の後また木の中より御出でありしに。彼の木元の如くになり申候。何ぼう不思議の御事にて候。唯今に至るまで。彼の馬の隱れし故に。木の葉の間に。馬の尾一筋づつ生ひ出で申候。それより太子大勢を卒し。守屋を一矢に討滅ぼし給ふ。芋子大臣。團勝大臣。彼の守屋平らげ。其の後當寺御建立あり。初めて僧尼を度し給ふ。則ち四天王寺と崇め申候。

松鶴西王母（しようかくせいわうぼ）

アヒ　仙人

狂言口明。置鼓あり。〽斯様に候者は。此の國の傍に住居する仙人にて候。さても漢の武帝賢王にてましますにより。吹く風枝を鳴らさず。民戸ざしをせず。誠に目出度き御代にて候。さる程に。此の國に松鶴と申して。夫婦の民御座候が。正直の德により。西王母その志を感じ。桃實を與へ給ふにより。いよ／＼繁昌し。子供多くなり。富貴榮花に榮え候間。漢王御聞召し。勅使を立てられ候程に。夫婦官位を有難く存じ　王母を伴ひ參內あり。桃實を捧げ。舞樂を奏し申さうずるとの。目出度き御事にて候間。皆々罷出で。舞樂を拜み候へ。其の分心得候へ／＼。

織女（しよくぢよ）

アヒ　星の精（五八）

下り羽にて出る〽七夕の。／＼。けふの逢瀬を祝はんとて。菓子物を作り。數々の祝言を。星々と申さん／＼此の星々と申さん／＼。

シテ〽さあ／＼。皆々かう渡らしめ。アド〽心得た。シテ〽今宵は目出度き七夕なれば。上十善より下萬民まで　品々捧げ物を供へ。酒盃をして　興ひざゝめく程に。いざ我等も酒盛をせう。アド〽一段とよからう。シテ〽下に居さしめ。アド〽心得た。トあう一つ酒盛いたし色々謡あり。今宵七夕逢ふ夜なり。舞二段。

〽我等もいかで獨り寢せんと。六ふ斷も亢宿なれや。婁も妙なる柳宿女宿。心も虛宿壁宿をへだつる身なれてつゝ。是處や彼處によばひ星／＼よばへども。終にすばりは逢はざりけり。

亢柳。女。虛。壁。廿八宿のうちなり。此の星の乘る物は。亢は龍。柳は鹿。女は蝙蝠。虛はむじな。壁はいたちなり。此の詞りに一つ心得を立つべし。

書寫山（しよしやざん）

アヒ　里人

ワキ詞に對すこと。セリフ常の如し。〽所の者とお尋ねは。誰にて渡り候ぞ。〽さる程に。播州書寫山と申す仔細は。忝くも天神七代。伊弉册の尊の御子。日神月神蛭子素盞嗚の尊と申して御座候が。素盞嗚の尊御心猛くましますにより。大和の國宇陀の郡に。皇居を構へ。一千の劔を揃へて。立籠り給ひしを。天照太神乃ち彼の所へ御出であり。劔破り給ふにより。千の劔を破ると書いて。即ち千はやふると訓ませ給ひたると申す。さるにより。其の後素盞嗚の尊出雲の國へ御下りなされ候が。先づ當山へ御出であり。御狩を遊ばされ候。誠に此山靈山と褒め給ひ。補陀落の北門形の岸通し申す。殊更これなる櫻は。即ち本尊と一體分木の櫻なる由。仍って天人一日に三度まで天降り。

香花を供へ、供養讀經をなし給ひ候ひける間に春の頃は取分け近邊の人々。當山の櫻を拜み奉り、其の外奇特なる事樣々御座ありげに候。最前申す如く。（あとのセリフ。常の如し。）へ扨は此の山の守護神現れ、（以下常の如し。）

【す】

鈴落（すゞおとし）　アヒ　家來

（早鼓にて出る。）へ斯樣に候者は。仁德天皇第三の皇子。瑞齒別（みづはわけ）に仕へ申す者にて候。只今これへ出る事餘の儀にあらず。扨も當今履中帝御惱直ぐなるにや。國民業え治まる御代にて候。然れば爰に田矢代の宿禰と申す者。一人の娘を持つ。其の名を黑媛と申候が。隱れなき美人の由聞召され。后にも御立てありたく思召し。彼の黑媛が貌を見て參れとの御事にて。乃ち中の皇子に御附けられ候處に。中の皇子宜旨に任せ。宿禰が方へ御幸なり。竊に黑媛が閨の邊へ御忍びあり。火の影より媛の姿を御覽なされしが。申すに違はず美しき姿にて。はや御心移り。御兄履中帝と僞り。直ぐならぬ御契り。後朝（きぬぎぬ）の御別れを惜しみ給ふ事。帝聞召し。逆鱗甚しく。乃ち瑞齒別に御附けられ、中の皇子を討つて參れとの御事にて候故。是非に及ばず、只今對手に向ひ給ふ故。皆々御用意仕り候へ。其の分心得候へ〳〵。

薄（すゝき）　アヒ　里人

へ斯樣に候者は。此の邊りに住居する者にて候。此の間に何方へも罷出ず候程に。（以下常の如し）へさる程に。此の寺は阿彌陀寺と申して。古へ登蓮法師と申す御方の御座候が。薄（すゝき）を塚らに蒔べ給ふ。中にも増穗まそうと申す種を。播州より取寄せ。植置かれたると申す。増穗の薄は。穗の長きこと一尺御座候。又まそうと申すは。俊賴の御歌に。まそうの絲を繰りなどと御座候へば。麻の絲の如く。色深く御座候へば。ますはうともいふべけれども。詞を休めまそうと申すげに候。惣じて増穗に出でては。尾花と申候。何れの歌人も之を題にして詠み置かれたると申す。先づ我等が承りたるは。この如くに御座候。（此の後セリフ。常の如し。）

鈴木（すゞき）　アヒ（二人）

（早鼓にて出る。）シテへ取つたぞ〳〵。アドへ何事ぞ。シテへ取つた〳〵。アドへ何を取つた。シテへ鱸を取つた。アドへそれはよい物を取つたなあ。シテへこれはよい物ぢや程に。其方へ申さう。迚もの事に料理を好ましめ。アドへそれならば何がよからうぞ。膾にすまいて生醋がよからう。シテへそれもよからう。身共が思ふには、いり酒を掛けては何とあらう。アドへいり酒。シテへ中々。アドへこれは一段とよからう。シテへつい鱸ではない。鈴木の三郎重家を生捕つたと云ふ事ぢや。アドへなに重家の事ぢや。シテへ中々。アドへそれは手柄な事ぢや。シテへ此の由申上げう。アドへ夫に申上げずはなるまい。急ぎ申上げよ〳〵。シテへこちに功者役に申上げたがよい。アドへにて功者がある事か。ふせうな事を云ふ。シテへ其方が承りぢや。アドへいや〳〵どうでもあ〳〵。アドへ身共は知らぬぞ。（樂屋に入る。）シテへはあこれはいかな事。是は何としようぞ。是非に及ばぬ申上げう。（ト云ふて正面へ云ふ）へいかに申上候。

鈴木の三郎重家を生捕り申して候。シテ〽畏まつて候。樂屋へ入り。鈴木に繩掛けて出で。一の松にて御前近く候間。先づ笠を取り候へと云ふ。梶原より後に出で。太鼓座に居る。シテ〽先づ下に居さしめ。梶原二階堂に云ふ。三郎連れて參り候。二階堂。其方へ來り候へ。梶原。引いて來り候へと。狂言に云ふ。〽畏まつて候。引出し。舞臺眞中に引据ゑ。繩を持ち。太夫の正面めかと云ふ時。〽畏まつて〽御前に候。二階堂。鈴木を傍へ引きのけ候へ。候。太鼓座へ入り。二階堂呼出す。〽御前に候。急ぎいましめ解き。由なき義經に仕へんより。頼朝に奉公申候へと申候へ。〽畏まつて候。太夫に云ふ。〽いかに申候。由なき義經に仕へんより。先づ我が君に奉公仕り候へと仰せ候。太夫シカ〳〵。〽先づ畏まつたと申せ。〽扨も〳〵推參な者ぢやさりながら。あのつれな者ぢやに依つて。命を助かられた事ぢや。此の由申さう。梶原へ云ふ。〽いかに申候。先づ畏まつたと申候。梶原シカ〳〵。〽畏まつて候。大夫へ云ふ。〽いかに鈴木三郎へ申候。烏帽子直垂を召し。急ぎ御前へ御出であれとの御事にて候。

諏訪龍神（すはりうじん）

アヒ　末社

亂序にて出る。〽か樣に候者は。諏訪大明神に仕へ申す末社の神にて候。誠に申すも愚かなる事ながら。當社の御事は。初めは信濃の國に御座候ひしが。神功皇后異國御退治の時。信濃の國より御旅立あつて。三韓を從へ給ひ。目出度き御代となし。此の處に影向あり。旅神とならせ給ひ。此の處に大宮造りをなし。御神事樣々執行ひ申候。さる程に。當今に仕へ御申す臣下殿あり。宣旨を蒙り此の處へ御出で候間。明神嬉しく思召し。かりに老人と現れ。神祕樣々御物語りなされ。重ねて御奇特見せんとて。神隱れなされ。則ち今夜舞樂を奏し。御慰め申さばやと存じ罷出でた。これより難波の通り。太鼓舞あり。

住吉橋姫（すみよしはしひめ）

アヒ　里人

〽是は宇治の里に住居する者にて候。セリフ常の如し。〽先づ此の處は宇治の里と申候。色々面白き名所にて御座候。これなるは平等院と申して。惠心の僧都の居り給ひたる御寺にて候。あれなるが離の嶋。向ひに見え候は朝日山と申候。朝日山より出でたる月影の。此の川水に映る景色を御覽じて。僧都の御歌に。水むすぶ。水に宿れる月影は。あるかなきかの世にも住むかなと。か樣に詠み給ひしも此の所にてありげに候。さて又これなる橋姫は。住吉の御神この古へ此の所に住み給ひしが。住吉の御神この橋姫に相馴れ。夜な〳〵此の川下より船に棹さし。御通ひありたると承り候。さあるに依つて。此の所に宮作りし。橋姫の御神と崇め申候。あとのセリフ。常の如し。

【せ】

清舜（せいしゆん）

アヒ　家來

〽御前に候。〽畏まつて候。〽やあ〳〵何と申すぞ。御内の者が囃子物にて酒迎ひに參ると申すか。急いで其の由申上げう。いかに申候。御内の者が酒迎ひに囃子物にて參る由申し候間。これにて御待ちあらうずるにて候。下り羽にて立衆出る。〽さても〳〵面白き事かな。暫く御逗留なされ。御酒宴あらうずるにて候。〽扨も〳〵詞にも及ばぬ面白き事ぢや。又遙かに船が見ゆる。何事ぢや。何と申すぞ。釣船が來る。此の由申さう。いかに申上候。これへ網船が參り候間。それにて御覽候へ。宴にて太夫船にて出る。[illegible]よき肴と[illegible]たり〳〵と云ふ時。立つて太夫に酒を勸る。〽扨々奇

特なるものかな。肴物が上かつたさうな。さらば一つ聞召し候へ。ト酒盛る時。真足を見附けて。ワキに云ふ。へいかに申候、釣船の内を見申して候へば。船底に鎧甲を隠し置き申候、釣船とは見え申さず。但したばかる船とみえ申候、先づ立越え御覧候へ。

千人斬（せんにんきり）

アヒ　里人

ワキ僧これに道が多く見えて候。慶き方へ行かばやと云ふ時。呼かけて。へいかに申し候、其の道へは御出であるまじく候。ワキシカ〳〵。へ阿武隈川の源左衛門殿と申す人、行衛も知らぬ人に父を討たれ、其の無念さに、千人斬せられ候。ワキシカ〳〵。へはや百人餘り斬られて候。ワキシカ〳〵。へ元弘三年にて候。シカ〳〵。へ三月にて候。シカ〳〵。へ三日。シカ〳〵。へまん時。シカ〳〵。へ此の先きに石橋の候。其の處にて候。構へて御出であるまじく候。後同音入る。

【そ】

孫思邈（そんしばく）

アヒ　鱗の精

シテへ斯様に候者は、海中に住む鱗の精にて候。アドへなう　そなたは何事をおしやる。シテへや。わごりよたちは目出度き仔細を聞いてお出でやつたか。アドへ中々、凡そ聞き及うだが、併し委しい事は知らぬに依つて、そなたに尋ねうと思うて。皆々出ておりやる。シテへさては委しうはお聞きやらぬか。アドへ中々。シテへそれならば語つて聞かせう程に、能う聞かしませ。アドへ心得ておりやる。シテへ先づ此度目出度き仔細と云ふは。大龍王の御子御遊山をなされうずると思召し。小さき青い蛇になつて。涇水の邊りの叢を。彼方此方へ廻り遊び給ふ處に。童子共が見附けて、やれ〳〵爰に美しい蛇がある、いざ打殺さうと云うて。散々惱ました。アドへこれは苦々しい事したの。シテへされば〳〵。殊の外荒けなう打つたに依つて。御身も破れ、血流れ、既に御命も危かりし處に。孫思邈と云へる仙人、折節通り合はし。彼の體を見給ひ。元來孫思邈は慈悲なる御方なれば。不憫に思召し。童子共に蛇を乞ひ給ふに。童子共が申すは。やれ〳〵譯もない事を云ふ人がある。こちが見附けてこれ程面白い事はないに。くれいとおしやる。やる事はならぬと申した。シテへ其時孫思邈の。それならば此の衣裳と替へて呉れよと仰せられて、衣裳を脱いで取らせ給へば、童子共悦び、乃ち蛇を參らせければ。孫思邈蛇に藥を與へ、叢に放ち給ふにより、危い御命を助かり給ひ、御歸りなされたが、先づは危ないことに遭はせられたではないか。アドへさてそれは危ないことでおつたなう。さ樣の事今こそ聞いたれ、若し打殺しなどしたらば、龍王の御歎きは云ふに及ばず、我等如きも氣が詰め。迷惑致さうに。孫思邈の行合はされて、此の樣な嬉しい事はあるまいなう。シテへそれよ〳〵。下々までも悦ぶ事ぢや。さて孫思邈と云ふは。いか樣の人でおりやる。孫思邈は、華原と云ふ所の人なるが、七歳の時より學問に基き、成長に及んで道を學び。渡世の術を求め、醫藥を極め、人の精氣を祭し、萬民の病苦を助け。其の上慈悲を專らとし給ふが。誠に。世の常の人ではおりない。アドへそれならば。只人ではおりないぞ。シテ

ヘそれ／＼さて此度御命を救ひ給ひしに依つて。大龍王御馳走なさるゝは。御尤もではないか。アドヘいかにもそなたのおしやる如く。随分御馳走なされいで叶はぬことぢや。シテヘそれに就き。上々が目出度ければ。下々までも目出度い程に。何れも酒盛して遊ばうと思ふが。何とあらう。アドヘこれは一段とよからう。シテヘそれならば先づ下に居させませ。酒を出さう。アドヘ心得た。シテヘさあ／＼。皆酒をお飲みやれ。アドヘさあ／＼注いでおくりやれ。シテヘ云うても／＼。これは目出度い事ぢやな。アドヘなる程／＼。此の様に目出度い事はあるまいぞ。（此の所常の如く。入違ひ。酌に立ち。酒盛ある。）シテヘいざさらば目出度う和歌を上げさしめ。アドヘ心得ておりやる。やら／＼目出度やめで度やな。打返し／＼昔の御壽命は。我等鱗の數々重ね／＼に祝ひ奉り。これ迄なりとて鱗の精は。／＼。元の海中に入りにけり。

（飾りこれなき能なり。）

【た】

太子（たいし）

アヒ　末社

ヘか様に候者は。三笠山の山神に仕へ申す者にて候。唯今出づる事餘の儀にあらず。扨も太子は守屋に襲はれ給ひ候が。誠に神通方便の御身なればとて。此の櫻木のもとへ立寄らせ給ひしに。召したる御馬は天へ上り。又御身は此の櫻の木の中に押隠し給ふ。佛身神通の御事なれば。櫻の木をうろとなし。彼の太子を圍み奉り。然る所に守屋は柚を出だし。此の木を切り太子を討取らんとせしを。忝くも山神乃ち杣人と現じ顕れ出で。彼の守屋に方便を仰せられ。木を切り給ひ。漸う御命も全う見えさせ給ふ所に。守屋は悪逆を以て捜し出し。太子を取らんとの事にて候。然れども山神は。彌々方便を以て太子をみつぎ奉らん。さあらば寄手の軍兵となり申すべしとて。先に登山遊ばされ候。我等も此の事を告げ知らしめん爲罷出でゝ候。皆々その分心得候へ／＼。

太世太子（たいせたいし）

アヒ　官人

（ワキ呼出す。）ヘ御前に候。ヘ畏まつて候。皆々承り候へ。貧なる民に寶を與へ給ふべきとの御事なり。急ぎ參られ候へ／＼。（中入後早鼓にて出る。）ヘ是は天竺波羅奈國の帝。太世太子に仕へ申す者にて候。さても此の君國土の貧なる事を悲しみ給ひ。梵天に祈誓し給ふ。其の時龍宮の寶如意寶珠を太子に與へ給ふ。乃ち宮中に納め給へば。七寶滿々たる事にて御座候。頓て辻々に高札を立て。民に與へ候へば。女一人來り。我れ寶の望ならず。如意寶珠を一目拜ませ給へと申す。いや／＼宮中深く納まりたり。それは叶ふまじきと仰せ候。其の時彼の女申すやう。望を叶へ給はん事僞なり拜まんと申す。流石綸言出でゝ二度返らず珠を拜ませ給ふ。其の時かの女。氣色變りて珠を盗み。龍宮へ歸りぬ。然れば梵天帝釋を伴ひ。龍宮を從へあるべきとの御事にて候。其の分心得候へ／＼。

大般若（だいはんにゃ）

アヒ　眞蛇大王の眷屬

ヘ斯様に候者は。此の川の主眞蛇大王に仕へ申す者にて候。只今罷出る事餘の儀にあら

ず。大唐蓮嚴寺の住僧。玄弉三藏と申す法師。大般若の妙軸を震旦國へわたさんとの御事にて。度々師となり弟子となり。様々に生を轉じて。この經を渡さんとの誓なりしかども。未だ至らぬ心中を。眞蛇大王は知ろしめし。七度迄この所にて命を奪取り申さるゝ。然れども三藏法師貴き御方にて。度々斯様の大願を起し給ふ。眞蛇大王存ぜらるゝは。此度大般若を授け申さんとの御事にて。則ち此の川の邊に出迎ひ給ふ所に。玄弉法師御覽じて。川の渡りを尋ね給ふに。大王仰せらるゝは深き事介輪に同じ。早き事鳥の飛ぶ如く。射る矢も事の數にも足らぬ流なれば。たやすく渡るべきやうなし。たとひ此の川を渡り給ひても。あの葱嶺を通り給ふ事。難かるべしと申されければ。玄弉三藏。たとへ何程の惡所なりとも。よも通路なき事はあるまじきと仰せられければ。大王も御返事にあたはず。然らば此度大般若の妙體を。和僧に與へ申すべしと。云ひもあへず。さしも險しき川の面を。たとへば瑠璃の盤の上などを走るが如くに。する/\と向ひに渡り。其儘歸り給ひて候。則ち羅刹の洞の岩戸に。大般若をたゝひ。又三藏の御命を七度迄奪ひ給ふ。その首を胸にかけ。姿を顯し申されうずるとの御事なり。かゝる有難き時節なれば。二十五の菩薩。其外諸神諸佛に至る迄。御影向あるべしとの御事なれば。この葱嶺の峯の蠢蟲に至る迄。この度成佛の緣を結び候へ。則ち我等に罷出で。この旨知らせ申せとの眞蛇大王よりの仰せにてあるぞ。流砂の鱗に至る迄。皆々其分心得候へ/\。

大木（たいぼく）

アヒ　能力

へ御前に候。へ畏まつて候。へいかに仙人の阿闍梨の御諚には。本堂の棟木になさるべきとの御事にて候間。北谷の松をなほされ候へとの御事なり。其の分心得候へ/\。シテの謡に。雲を分けて飛んで行く。へ言語道斷。恐ろしき事にて候。先づ此の由を阿闍梨へ御申しあれかしと存じ候。へ尤もにて候。急ぎ申され候へ。橘の詞に。化ことなれし雷空に上がりて候。と云ふ時。へいや只事にてはなく候。阿闍梨の命をも。又皆々命をもとらうと候。急ぎ加持あつて然るべく候。

當願暮頭（たうぐわんぼとう）

アヒ　能力

シカ/\。へ御前に候。シカ/\。へ畏まつて候。讃州志度寺に於て。法華供養を行ひ給ひ候間。志の面々皆々參られ候へ。其分心得候へ/\。へ扨々奇特なる事にて候ひつるぞ。此の國に於て當願暮頭と申して。隱れもなき二人獵師の御座候が。當願と云へる獵師は。今日の法會を聽聞せず。山に入り殺生を營む。又暮頭は志の深き者にて候やらん。業を捨て法事の庭に參り。御法を聽聞仕る程に。何れも皆之を感じたる處に。日頃の惡逆。物の命を殺す天罰にや。法事の庭を立去り。まなふの池に入り。大蛇となり申して候。定めて此の上は。人を取り所の惱みともなり申すべきと存じ候。十惡罪の者なれば。か様に戒め給ふか。かゝる奇特なる事は有るまじく候。先づ此の由を上人へ申さばやと存ずる。いかに申し上げ候。へ獵師の暮頭が事を聞召して候か。シカ/\。へ暮頭がまなふの池に入り。大蛇となり申して候が。在所の面々之を恐れ。門戸をしめ。人の

行きかひも御座なく候。シカ〳〵。へ中々の事。

高安（たかやす）

アヒ　里人

へ此の邊りの者にて候。セリフ常の如し。へ先づ此の所は河内國高安と申候。古へ此の所に。とある女の有りしが。在原の業平この女に相馴れ給ひ。他にことなく契を込め。高安通ひを御沙汰ありしに。其の折節。此の松の木蔭に立寄り。笛を吹き休らひ給ひ候より。此の松を笛吹松と申習はし候。又一説には。此の所用心悪しく。盗賊數多住み申候故。旅人通り候へば。數多の盗人ども相集り申したる故に。笛吹松と申すげに候。何れさ様にも御計らひあるべきか。業平夜な〳〵通ひ給ふ事。井筒の前覺束なく思召し。一首の歌に。風吹けば。沖津白浪立田山。夜半にや君がひとり行くらん。斯様に詠み給ひしも。此の所にて御座ありげに候。最前申す如く。以下常の如し。

瀧見小町（たきみこまち）

アヒ　里人

へ是は市原野に住居する者にて候。セリフ常の如し。へさる程に。小野の小町と申すは。出羽の郡司。小野の良眞の御息女にて御座ありたると申候が。容顔美麗にして。優にやさしき御方にて御座候が。誰人とやらん怨念が附添ひ。狂氣し給ひ。此の所に御出でおり。月日を送り給ふ處に。常に清水の觀世音を御信仰ありたるにより。清水寺へ御參詣あり。鳥羽の瀧を御覽じ。昔に變り年寄り衰へ給ひたると思召し。一首の歌に。何として。身はいたづらになりぬらん。瀧の景色は。變らじものを。などゝ詠め給ひ候由承り候。其後終に此の野邊にて御果て候故。是なる標（しるし）を立置き。弔ひ申す事にて候。先づ我等の承りたるは。この如くに御座候。最前申す如く。以下セリフ。常の如し。

涿鹿（たくろく）

アヒ　官人

口開へ斯様に候者は。軒轅黄帝に仕へ申す官人なり。セリフ常の如し。然れば今日は此の殿へ行幸あり。御遊あるべきとの御事なり。皆々參内申され候へ。その分心得候へ〳〵。ト云うて。太鼓座に居て後に立つて へ抑も〳〵奇特なる事かな。此の君位に立たせ給ひてより。萬機の政事正しくましませば。天下泰平にて。日出度き御代なるに。蚩尤と云へる悪臣あつて。天下を覆へさんとする事度々なり。仍つて御謀を廻らし。御戰ひ候事七十四度に及び候へども。未だ勝負も決せず候處。此度涿鹿の地へ引籠り候。此の涿鹿と申すは。前には巖石滑らかにして。苔むしたる岩を疊み。二三日は烽立つべき入家もなき切所なれば。人馬通ひなし。後には鳥江の海をあてゝ。鳥も通はぬ處なり。然るに此の君御心魂を廻らし。船と云ふ物を作り。それに打乘り。鳥江を易々と渡り。蚩尤を滅ぼし給はんとの御事なり。其の分心得候ひて。打立ち申せとの御事なり。構へて其の分心得候へ〳〵。

武文（たけぶん）

アヒ　武文の宿の者

同　松浦の宿の者

武文の宿の者へ案内とは誰にてわたり候ぞ。シカ〳〵。へ安き間のこと奥の間へ御通り候へ〳〵

へ其の事にて候。早の雲の景色が續け候。一兩日中に追風(おつて)おり申さうずる間。其の用意召され候へ。（ワキへ松浦の娘　シテへいに）松浦の宿の者へいや珍らしき事もなく候。此程一條の御息所とやらん申す御方。土佐の濱へ御下向なされ候が。風待ちにて此の所に御逗留候。一段と美人なる由申候。へ頓て此の邊りにて候。へさあらば案内致し。御目に掛けうずる此方へ御座候へ。へあれなる上﨟の事にて候。へ是は尤もにて候へども。旅人にお宿を參らせては。何事も大事に掛け申候間。さやうに聊爾なる事は中々なるまじく候間。思召しとまり候へ。へさあら迷惑なる事な仰せ候ものかな。さ様に思召し候はゞ。彼の宿主を面白くたばかり。連れて參り候へし。御前にて御頼みなされ候由を申候はゞ。自然同心申す事もあらうずる間。さ様になされ候へかし。へ心得申して候。へ先づかう〳〵御入り候へ。（松浦に）松宿へいかに案内申候。武宿へ案内とは誰にて渡り候ぞ。松宿へいや我等にて候。武宿へ御出で滿足致し候。先づ此方御入り候へ。松宿へ心得申して候。武宿へさて只今は何の爲の御出でにて候ぞ。松宿へ筑紫の松浦殿と申す御方。御浦に御着きにて御宿仕りて候。それは再々船に乘る人にて候程に。自然の爲禮を御申候へかしと存じ。才覺いたし參りて候。武宿へそれは近頃添う候。某も旅人の御入り候間。隙なく候へども。自然の時の爲にて候。御禮申さうずるにて候。松宿へさらば御供申候べし。かう〳〵御入り候へ。武宿へ心得申候。松宿へいかに申候。是は松浦の者にて候。筑紫へ船が乘る者にて。御禮申したき由申候間。連れて候。シカ〳〵。松宿へいかに申候。松浦殿の某を御頼みあり度き由仰せられ候。武宿へそれはいか様なる事にて候ぞ。松宿へ此方に御座候一條の息女を一目御覽じて。それは流され人にて候程に。後の咎めもあるまじく候間。奪取り申したきとの御事にて候。御同心あつて給はり候へ。武宿へ是は思ひ寄らぬ事な仰せ候ものかな。夫の松浦殿を大切に御思ひ候樣に。何れも旅人は大事に存候間。思ひも寄らず候。シカ〳〵。松宿へ此程まで頼み候間唯御同心あらうずるにて候。武宿へ近頃迷惑な所へ參り候。此の上は力なき事。頼まれ申さうずるにて候。松宿へ只押入つて御捕り候へ。武宿へ尤も押入つて御捕りあらうずる事もなり申すべけれど。爰に大事の候。奉公武文と申して。若き男の候が。太刀脇にさけ少しも御側を離れ申さず候間。聊爾に御懸かり候ては。中々なるまじく候。能々(よく〳〵)御談合あらうずるにて候。シカ〳〵。武宿へ我等の存じ候は。荷物に目掛け。盜賊と號し。並びの家に火掛けて候はゞ。若き者は早きものに候間。表へ切つて出で候べし。其の隙に裏の口より某御供申さうずる間。皆々あれへ御出で候へ。松宿へ近頃の工(たくみ)にて候。さあらばこれに定め候へ。ト云うて。樂屋入る。（暫過ぎて。[illegible]）松宿へえいとう〳〵ト云うて。三人ばかり（に押入つて　シカ〳〵）武宿へいかに申候。夜討が入つて候急ぎ表へ切つて御出で候へ。

橘(たちばな)

アヒ　仙人

（風序にて出る）へか様に候者は。此の國の傍に住む世俗仙人にて候。唯今罷出る事餘の儀にあらず。爰に商山の四皓のうち。東園公夏黄公兩人は。わきうの里に橘のなり候に橘と定め。四皓その中に碁を打ち。慰み申され候處に。邊りの者不審をなし。栩をしつらひ育て候を。漢の武帝聞召し。勅使を立てられ。彼の仙人

の住家を御覧あつて。奏聞あれとの御事にて候へば。勅使はそうに着き給ひ。彼の仙人の住家を下ろされん事を聞いて。現れ出で託言作り候へども。叶はずして下ろし申され候。然れども斯様の栞を以て罷出で。彌々君の御壽命永く祝ひ申さんと。捧げ申され候て。此の橘を一つ聞召せば。一千年の齢保つ。二つ聞召せば二千年保つ。昔もいよ〱御壽命長久に御座あらうずるとの御事にて候。唯今も現れ橘に宿る事。其の引例を御物語り候。さる程に。商山四皓と申すは。前漢の惠帝張良謀を以て位に即け奉る。其の時羽翼となりぬしには。隠れなく然りし事どもなり。文帝の御代になりて。堯舜の古へを其の間〱に移すと聞くより。住命を知られしも其の爲にまた商山を出で來たる。誠に仙人は松の葉をなしき。昔を身に譲ひ。壽命長穏にして。年は經れどもまみ盡きず。命は限なきものなりと。色々の事を勅使の御前にて。物語りあり御歸りにて候。頓て形を現れ舞樂を奏し。慰め申さんとの御事にて候。我等も一さし舞うて歸らばやと存ずる。込てたかりける時とかや。舞[illegible]。あら〱目出度や〱な。治まる御代の。驗とて仙人頓て仙洞よりも。勅使の御前に罷出で。舞ひかなで。これまでなりとて仙人はこれまでなりとて仙人はもとの仙洞に入りにけり。

立尾（たてを）

アヒ　家来

〽皆々參り候へ。我等が主君菊池殿。嶋津方と一旦の口論の上。大喧嘩になり。嶋津方大勢を討取つて候。其の事嶋津殿へ御聞して。多勢を以て唯今此方へ寄せ來り候事一定に候間。其方にも夥しき御用意にて候が。爰に笑止なる事の候。それないかにと申すに。菊池殿御兄弟。藤左衛門殿と申すは。御參詣にて他行にて候が。御子息に千若殿と申して御座候が。皆々御内の者を召連れ。此度合戦に御出で候はんと仰せられ候間。御内の立尾。色々御留め候へども。御承引なく候。其の上。御母君御留め候へども。中々御聞入れ御座なく候。武家の棟梁ほど御座候。終に御出できまり申候。仍つて御上樣より。御重代の太刀。千若殿へ御遣し候。頓て御出で候間。御内の者ども其の分心得候べし。

七夕（たなばた）

アヒ　曉の明星

〽斯様に候者は。忝くも曉の明星にて候。某は三光の中の其の一つなり。然るに人間大きに心違ひにて。破軍九曜。又は七星など申す星を大いに恐れて。それ〱に祟りをなす。身共は恐れ祟りもなさず。其の上旅立の時節。又は時を考ふる節には。曉の明星はあそこに居る。これに依り最早時節もよいなどと云ふ。某は不斷須彌の四州を。一日の休みもなさず。くる〱と廻り苦勞なるも。皆人間を守護の心故に。いつなけふと樂しむ事もない。剰へ某を見附けて。曉の言葉など〱申して。恐ろしき狼の啼くやうなるしはがり聲にてながき廻り。音曲の稽古をする。これが殊の外嬉しけれども。其の儘に聞捨て置く。然るに何ぞ今月今日は七夕と申して。年々一度。身共中間の色慾に逢ふ夜なり。然るを老若男女の者共羨み。百種の珍物をなし。腰折れ歌を詠み謡ひ。酒盛りなどなして。夜と共に遊び舞ふ。これに依り一年に一度の逢ふ夜。又今宵に限らずよい事もある。仍つて宵の間には夜

逢星なすれども。今宵は何方へ忍び夜這ひもならぬ。せめての事に一さし舞はう。今宵七夕の逢ふ夜なり。三段舞。今宵七夕の逢ふ夜なりとて。是非彼處へよばひ星。／＼して逢に望みを叶へけり。

玉江の橋

アヒ　里人

〽先づ此の越前の國玉江の橋と申すは。此の所にて隠れもなき名所にて候。惣じて橋の始めは。天武天皇の御宇に。宇治橋津の國の長柄。三州矢矧江州勢田。其の外所々あまた御座候。然るに此の橋を名所と申すは。澤水の様に見え候ひて。水上遠く。川岸の草露の玉。落合ひ流となり。此の所に淀み。水底清く。宛ら玉なのべたる如くの江に。掛けし橋なれば。玉江の橋と申すげに候。殊に此の所は。螢多く集め。蘆間の蔭の光を見て。眞如の玉もかくやらんと感じ給ふ。されば五條の三位俊成卿の御歌に。夏刈の。蘆の假寢ぞ哀れなる。玉江の月の明け方の空。斯様に御座候。さてお尋ねはいか様なる御事にて御座候ぞ。シカ／＼。〽此の江守る水神現れ出て。さ様の物語ありたると存じ候。暫く此の所に御座候ひて。あとのセリフ。常の如し。

玉嶋川

アヒ　里人

ワキ呼出す。〽所の者と御尋ねは。誰にて渡り候ぞ。常の如し〽去る程に。此に於て神功皇后御下向なされ候仔細は。人皇九代開化天皇の御宇。異國より日本に望をかけ。仲哀天皇の御宇に至り。異國の夷ども夥しく押寄せ來る。然るにむくりの大將の顔は八つあり。さて兩眼日月の如くなり。目と目を見合はせ申せば氣も魂も失せ果て申す。此の由仲哀天皇に奏聞申せば。忝くも。出向ひ敵の方へ放ち給ふ。其の矢忽ちむくりの大將のたゞ中に受留め。既に命失する時當の矢を射返す。其の矢仲哀天皇に當たり。崩御ありたると申す。神功皇后無念に思召され。御夫の敵なる故に。三韓を從へ御申しあるべき爲。異國へ赴かせ給ひたると申す。其の時高き山に御登りなされ。異國討伐の次第。様々御行ひありたるにより。彼の高山を四王子の峯と申す。さてそれより玉嶋川へ御下りなされて。御髪を二つに分け。濯ぎ清めさせられ候處に。いづくの誰とも知らぬ童女二人來り。皇后の御髪を濯ぎ清め候程に。皇后不審に思召し。いかなる人ぞと御尋ねありしかば。其の時一人は龍女と答へ給ひしに。今一人は水神女と名告り。虚空をさして失せ給ふ。乃ち龍神女と答へ給ひしは。安藝の嚴嶋の明神にてましましたると申す。又水神女と名告り御申したは。筑紫の宗像の明神にて御座ありたると申す。扨は異國退治の御吉慶。目出度きと思召され。乃ち吉凶御覽ぜん爲に。玉嶋川にて御弓の弦を取り。御針なくして魚を御釣り候へば。魚ども多く集まり。忝く弓の弦に魚ども附き申す。獨々御吉例と思召し。異國退治の御用意なされたると申す。さるに依つて。今に至るまで。玉嶋川の魚は。女が釣り候へば。針なくしてもかゝり申候と申す。又た男が釣り候へば。いか様なる針にて釣り候ても。魚がかゝり申さゞる由申候。最前申す如く。委しき仔細は存ぜず候へども。我等承り傳へたる通り。御物語申して候が。さてお尋ねはいか様なる仔細にて御座候ぞ。あとのセリフ。常の如し。

玉津嶋

吹上とも

アヒ　浦人

〽是は和歌の浦に住居する者にて候。此の間は玉津嶋へ參らず候程に。今日は參らばやと存ずる。セリフ常の如し。〽さる程に。當社玉津嶋の明神と申すは。人皇二十代。允恭天皇二まの皇子の御娘に。忍坂大中姫と申し奉る。其の御妹にて衣通姫と申し奉る。御身の光衣を通したる故に。衣通姫と名附く。此の旨叡慮に達し。帝衣通姫を大和國藤原の宮に移し參らせ。御寵愛淺からず。寄り〳〵通ひ給ひたると申す。さる程に御后この由聞召し。御妬み深くましますにより。姫を河内國へ遣されたると申す。さあるによつて。御后御妬みも止みたると申す。又衣通姫の御歌に。我がせこが。來べき宵なりさゝがにの。蜘蛛の振舞兼ねてしるしもと。御帝慕ひ給ひたると申す。其の後この和歌の浦に垂跡ましまし。和歌の守護神と。代々崇め奉り候。されば住吉大明神と。御心一つにして。和歌の榮ゆる事を悦び給ふ。誠に歌と申すは。鬼神をも和らげ。武士の心慰め。何ぼうやさしき御事にて御座候。さあるに依つて。いやましに當社へ諸人參詣をなし申候。さて唯今は何と思召し御尋ねなされ候ぞ。あとのセリフ常の如し。

玉津島龍神

アヒ　海草の精

亂序にて出る。〽か樣に候者は。玉津島根に住む海草の精にて候。唯今罷出る事餘の儀にあらず。當今に仕へ申す臣下殿。和歌道を專らになされ。則ち御參り候を。明神嬉しく思召し。かりに御姿まみえ和歌物語なされ候。誠に。當社と申すは人皇二十代。允恭天皇の后の宮。此の玉津島根に跡を垂れ。和歌の大社と現れ給ふ。又日本を和國と申すも。和歌の詞を種として和らぐが故なり。惣じて歌は目に見えぬ鬼神猛き武士に至るまで。歌にめでざる者はなし。其の上陰陽をわかちて。山野草木海川我等如きの者までも。此の歌に洩るゝ事なし。夫婦男女の儀なれば。末榮え目出度き事も。偏に當社の御惠深き故なり。又和歌の詞にも。砂長じて巖となり。塵積もりて山となる。濱の眞砂盡くるとも。詠む言の葉は盡きまじなどと申せば。何ぼう目出度き事にて候。いや。これは某の獨り言。先づ稀人に御禮。以下常の如し。舞二段。切詞末社の如く。

玉椿

アヒ　供人

ワキの供して。座に居る。ワキ呼出す。〽御前に候。〽畏まつて候。中入過ぎて。立つて。〽言語道斷。奇特なる事の候。誠に申すも愚かなれども。隱れもなき靈神にて。椿を渴仰致し。御神木と崇め申候。さあるに依つて。仲春椿の盛りには。若宮うずめの御前にて。神樂を參らせ御神事を執行ひ申候。それに就き唯今の樣體餘り不審に候間。神職の人に申さばやと存候。いかに申候。今日の御事目出度う存候。シカ〳〵。〽それに就き唯今の體を見申し。不審に存候。我等存候には。當社は隱れもなき靈神にてましませば。今日の御神事を嬉しく思召し。現れ出で給ひたると存候間。彌々御意に任せ。頓て神樂始め。神靈をすゞしめ御申しあれかしと存候。シカ〳〵。〽畏まつて候。皆々承り候へ。いつもの如く。御神事を執行ひ候間。神樂の役者急いで參られ候へ。〽其の分心得候へ。〽相觸れ申して候。

陀羅尼落葉

アヒ　里人

〽是は北野の里に住居する者にて候。今日は徒然に候間。山へ上り四方の景色を眺め。心をも慰まばやと存ずる。や。是なるお僧は此の邊にては見馴れ申さぬお僧なるが。何方より何處へ御通りなされ候ぞ。ワキシカ〳〵。〽中々この邊りの者にて候。さて御不審ありたきとは如何やうなる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。〽、是は存じも寄らぬ事を尋ね給ふものかな。仰せの如く。此所において。落葉の宮の御事は申すに及ばず。其の外數多住み給ひたる所にて候程に。所の者なれば。知らぬ事はあるまじきと思召すは尤もなれども。左樣の御物語。我等如きの存ずる事にては御座なく候さりながら。お僧初めて御一見と申し。所に住みながら。一切存ぜぬと申すも如何に候間。古き者の申し傳へたる通り。御物語り申さうずるにて候。語以下落葉に同じ。

湛海(たんかい)

アヒ　家來

ワキ(鬼一)の供して出で座に居る。〽御前に候。〽畏まつて候。〽いかに此の内へ案内申候。御出であれとの御使に參りて候。シテ(湛海)シカ〳〵。〽畏まつて候。いかに申候。湛海を請じて參りて候。中入[illegible]家來出る。〽斯樣に候者は。鬼一坊に仕へ申す者にて候。爰に源氏の大將義朝の御子沙那王殿幼にして父義朝に後れ給ひ。平家一統の世と成り候へば。是處彼處に身を隱し。又我等の頼うだ御方。深く御頼みあり。兵法の奥義を極め。平家を滅ぼし給ふ思召に依つて頼うだ人隨分いたはりて。大事をも傳へんと思召す處に。頼うだ人の一大事の卷を盗み給ふ。頼うだ者大に驚き。何卒取返さんと思召し候へども。沙那王殿中々並の人ならねば。いかゞせんと思召し。三國一の大剛の湛海坊に御相談候處。さあらば沙那王殿。今日五條の天神へ社參させ。其の所にて取返し申すべし。定めて大事の卷物なれば。身に添へ持ち給ふべしとあつて。か樣に申定め候に依つて。沙那王殿に。今日五條の天神へ御參詣あれと申さう。いかに沙那王殿。五條の天神へ今日參詣あれとの御事なり。とう〳〵御參り候へ。其の分御心得候へ〳〵。

丹後物狂(たんごものぐるひ)

アヒ　家來(前)
同　里人(後)

シカ〳〵。〽御前に候。シカ〳〵。〽、夜前これへ御下りなされて候。シカ〳〵。〽中々の事。其の事にて候。夜前は殊の外の御酒宴にて御座候。シカ〳〵。〽畏まつて候。幕を見て。〽いかに花松殿。父御の御對面なされうずると仰せ候。急ぎ御參り候へ。子方出て。〽花松殿の御參り候。ト云うて。大小の前に居る。太夫の詞[illegible]〽殊の外御器用にて。經讀誦小弓。當木八撥獅子頭まで。御習ひ候が。何れもよく御覺え候。太夫の詞[illegible]シカ〳〵。〽、いや花松殿の御事にて候。[illegible]〽扨も〳〵迷惑な事かな。色々の事を覺えなされたと申したらばお悦びであらうと存じ。申上げたれば。結句御機嫌が悪い。花松殿御叱りなされて候。只今の樣に叱らせられうと存じたらば。申すまいものを。智慧の淺い故に。何の思案もなく。ふと申上げて。今更悔やしい。誠に。車は三寸の轄を以て千里を走り。人は三寸の

古を以て五尺の身を失ふと申すも。かやうの事ぢや。某が目の前に。御父子の仲違ひ申す事。さて〳〵氣の毒な事ぢや。こつあ〳〵何と云ふぞ。花松殿海へ身を投げ。空しくなりたると申すか。扨も〳〵苦々しい事ぢや。唯今の事ならば。何とぞして御命恙ない様にしたいものぢや。先づあれへ参り見うと存ずる。脇正面の下を見て。へどこ許へ身を投げさせられた事ぢやぞ。扨も〳〵苦々しい事かな。これと申すも某が由ない事を申した故ぢや。某も此のまゝでは居られぬ。これより直ぐに成相寺へ参り。元結を切り。身を墨染になし。花松殿の菩提を弔はう。南無三寶。しないたり。ト云うて。楽屋に入る。先づ置鼓にて。花若を切れ。成相寺へ参れ。衣を身に染めらる。今若は出て申す次第。ワキ。父御の御行方を尋ねて参らするに付し シカ〳〵。へ所のものとお尋ねは。何の御用にて御座候て。シカ〳〵。へ其の事にて候。もとは此の處に御座候ひしが。花松殿と申したる御子失ひ給ひ。明暮れ御歎き候ひしが。終に狂氣となり給ひ。夫婦とも狂ひ出で給ひ。今は何方に御座候とも存ぜず候。シカ〳〵。へ心得申して候。ワキツレ シカ〳〵。へ最前の者とお尋ねは。何の御用にて候ぞ。シカ〳〵。へそれは奇特なる事にて候。さあらば在所の面々へ觸れ申さうずるにて候。シカ〳〵。へ心得申して候。へ皆々承り候へ。若井の何某殿の御子。花松殿御出家とならせられ。父母の御ため九世の戸の文珠堂にて。一七日の間説法なされ候ぞ。志の方々は参られ候へ。其の分心得候へ〳〵。

【ち】

千引（ちびき）

アヒ　家来

へ御前に候。へ畏まつて候。楽屋向いて。へいかに此の内へ案内申候。へこれは葛西殿よりの御使にて候。此の石を他國へ引出し。千々に御破りあるべきとの御事にて候間。急ぎ出でられ。石を御引き候へ。たとへ貧女なりとも。此の事背き申すならば。當所の住居は叶ふまじいとの御事にて候ぞ。とう〳〵出でられ候へ。へ皆々承り候へ。此の所の千引の石を引出し。千々に破り捨てらるべきとの御事なるぞ。男女によらず石を引き候へ。其の分心得候へ〳〵。ト云うて。太鼓座に居る。へ何と此の石を。そなた一人して引かうとおしやるか。へそれに御待ち候へ。其の由申さうずるにて候。いかに申上候。あれに女の候が。石を一人して引かうずると申候。へ畏まつて候 へなう〳〵此方へ参られ候へ。急ぎ石を引き候へ。女。此の屋の内には我ならでは人はなく候。へさあらば方々出でて引き候へ。貧女の身にて候間。石は元引き候まじ。へ女にても此の事背くものならば。所の住所は叶ふまじいと仰せ候間。急ぎ出でられ候へ。何方へお出でにやと思ひ候といふ時。へさあらば餘人を傭うて出され候へ。貧女の身にて候へば。なり難く候。へこれは何たる事をおしやるぞ。人を雇うて出されよと申せば。なるまいとおしやる。さ様に候はゞ。此の屋を明けて何方へなりとも出でられ候へ。

長閑寺

アヒ　能力

諺に。秋の月もろともに法の光や遠からん〳〵。過ぎて。へいかに申候。不思議なる事の候。此の寺の沙彌すいえき。俄に狂亂仕り候。それにつき奇特なる事の候。我は南部の某がつき添ひてあるに。何とて重代の太刀を池へ入れ候はぬぞ。餘の太刀を池へ沈めて候間。重代の太刀を入れてくれよと申して。これへ引立て参りて候。へ畏まつて

候。へいかに案内申候。へいづ方にて候。へ長閑寺より御使に參りて候。へさん候。不思議の事の候間。急ぎ御出であれとの御事にて候。へさあらば頓て御出で候へ。へいかに氏松殿御出でにて候。へ畏まつて候。此方へ御出で候へ。

長兵衛尉（ちやうべゑのじよう）

アヒ　家來

シテの謠に。心ぐるしき住居かなくと云ふ時。へなうくく。騷がしや〳〵。いかに申し候。源三位入道頼政よりの御文にて候。急ぎ御覽候へ。ト云うて。シテに文を渡し入る。

【つ】

月乙女（つきをとめ）

アヒ　里人

名宣りのセリフ常の如し。へ先づ月の名所は。唐土に於ては洞庭の秋の月。又我が朝にては須磨明石の月。さては更科。其の外國々に多く御座候へども。此所は都近く御座候故。公卿殿上人の御出でなされ。月を眺めあるは。歌にもあまた詠み置き給ふ故。月の盛りには。都近邊より貴賤群集をなし。誠に奇特なる事にて候ぞ。隈なき月の夜には。上界の天人下り給ふなどゝ申し候が。これはさ樣の事も御座あらうずると存ずる事にて候。古へも吉野山へ。天人天降り給ひたると申候へば。あるまじき事とは申されず候が。唯今は何と思召し。御尋ねなされ候ぞ。

皷瀧（つゞみのたき）

アヒ　里人

へ所の者とお尋ねは。誰にてわたり候ぞ。セリフ常の如し。へ先づ此の所を鼓の里と申して。目出度き靈地にて御座候。これなる瀧を鼓の瀧と申す。御覽の如く。岸は岩間を抱へ。瀧壺は霧深うして。瀧の響の音。鼓の音の樣に御座候故に。鼓の瀧と名附け申したると申候。ある歌に。津の國の。鼓の瀧を打見れば。たゞ山川の鳴るぞありける。斯樣に詠まれたると申す。あれに見えたるは有明櫻と申して。隠れなき名木にて御座候。何れも花は同じ事と申せども。取分き此の花は名木と申す仔細は。見る人愛でぬ者なく。悦びを含むと申す。故に昔の歌人。此の花に御詠をあげられて。樣々の御歌を遊ばされたると申す。もつとも花盛りには。貴賤群集仕り。隙も暇もなき御事にて御座候。何とて此の櫻は仔細ありげに見え候間。此の所へ初めて御出での方は。御不審なされ候。惣じて此の有明櫻の。仔細樣々御座あるとは申せども。我等如きの者委しくは存ぜず候。セリフ常の如し。へ扨は此の山の守護神。[illegible]の翁にて御座あらうずると存候。それはいかにと申すに。此の山へ初めて分入られ。山々の花を眺めなさるゝ事を。嬉しく思召し現れ出で給ひ。當山の謂れ。また有明櫻の仔細を御物語ありたると存候。

局六代（つぼねろくだい）

アヒ　里人

へ案内とは誰にて渡り候ぞ。へや。此の邊りにては見馴れ申さぬ御方なるが。何方より御出でにて候ぞ。シカく。へ其の事にて候。寺

中々く候故。我等もしかと存ぜず候さりながら。爰に文覺上人は。此の程木堂へ日參なされ候。漸う御參詣あるべく候間。木堂へ御出であつて。御逢ひあれかしと存候。〽これより直に御出であつて。左の方へ御上りあれば。木堂は隱れなく候。急ぎ御出で候へ。

露（つゆ）

アヒ　里人

〽是は此の邊りの者にて候。武藏野へ出で心なも慰まばやと存ずる。（セリフ常の如し）〽さる程に。露の仔細と申すは。先づ水の泡とひとし。されば金剛經にも。如夢幻泡影。如露亦如電と結ば置かれ。又この國始まりしも。天の逆鉾の露滴り。一つの島となる。これ蘆原の國大日本とかや。なほ萬木千草も。皆々露の德なかり。花實なる事も。露の惠にて御座あると申す。殊更この武藏野の露は。一入浮立つ樣なる風情にて。見事さ申すも中々愚かに御座候。筋なき事ながら申上候が。何と思召し御尋ねなされ候ぞ。（あとのセリフ常の如し。）

鶴若（つるわか）

アヒ　家來

〽御前に候。〽畏まつて候。（樂屋向いて。）〽いかに鶴若殿に申し候。父御の御錫にて候間。急ぎ御參り候へ。〽中々の事。とう御座候へ。〽御前に候。〽畏まつて候。〽皆々承り候へ。蒲平家追討のため。鎌倉殿の御代官として。蒲の御曹子範賴。源九郎義經。兩大將にて西國へ御下向候が。先づ木曾義仲の狼藉を。鎭めなさるゝため。義經都へ御上りにて候。それに就き。繼信忠信も御供なされ候ぞ。乃ち明日早天になさるべきとの御事なる間。何れも其の用意仕り候へ。其の分心得候へ〳〵。

【と】

鳶窟（とびのいはや）

アヒ　天狗

〽斯樣に候者は。此の山に住む木の葉天狗にて候。唯今出る事餘の儀にあらず。和州の山伏三熊野へ參籠ありし處。或る夜の御靈夢に。此の山を結界の地になすべしと。あらたに靈夢を蒙り給ひ。唯今この所へ御出で候間。某の賴うだ大天狗御出で。色々問答なされ候。誠に。此の山伏貴きにより。釋尊の御蔭によりて。江州志賀邊りに。佛法開闢あるべきとありしにより。彼の地に越えられ候處に。釣の翁出合ひ。此の處佛法の地となすべき事。思ひも寄らずと。妨げなし申す。其の時藥師如來出現して。遂に佛法のちまたとなし給ふ謂れ。委しく物語致され候間。賴うだ人も。返答もなく鳶窟へ戻られた。かゝる一大事なれば我等如きの者までも。寬ひ申すやうにあり候ひて。これまで罷出たが。彼の客僧はどれに居らるゝ。これぞこそこれに居らるゝ。いかさま賴うだ人が憎まるゝも尤もぢや。扨々苦々しい顏ぢや。何卒して某が分別で。魔道へ引落としたいものぢやが。いや〳〵。賴うだ者さへ及ばぬ。某が分で思ひも寄らぬ事ぢや。足元の明いうちに戻らう。やい〳〵。彼此度の事に就き。我と思はん者は罷出で。彼の客僧を嬲り候へ。其の分心得候へ〳〵。

【な】

泣不動（なきふどう）

アヒ　能力

シカ〱。へ常住院の能力とお尋ねは。いか樣なる御事にて御座候ぞ。シカ〱。へ心得申して候。さてお尋ねなされ度きとは何事にて候ぞ。シカ〱。へこれは思ひも寄らぬ事なお尋ねなされ候。我等も當寺には住み候へども。委しくは存せず候さりながら。明王の御事聞き及ばせられお尋ね候に。曾て存ぜぬと申すもいかゞに候間。承及びたる通り。御物語申さうずるにて候。先づ不動と申し奉る仔細は。園城寺の願主智興内供といへるは。行功年經り法力達し。世上より双の驗僧と申したる御方にてありしが。五种の大願を發させられたると申す。然れども。願滿てずして病苦を請け給ふにより。良醫藥をつくすといへども。其の驗なく。すでに必死と見え給ふ處に。證空と云ひし小僧おはせしが。法を重んじ命を輕んずるは。師に仕ふる者の習なり。我れ年若き身なれば。命惜しからざるにはあらねども。師匠のために身命を捨てん事。歎くべきにあらずとて。年頃念じ給へる繪像の不動尊に祈り給ふは。智興の大願未だ成就し給はず。世を去り給はん事。餘り歎かはしく候間。願はくは佛力にて。病難を拂ひ給へ。快氣あらしめ給へ。若しまた定業遁れ給はず候はゞ。我が命を召され。智興は安穩に守らせ給へと。一心に祈り給へば。佛心に通じ。智興の病ひ立ち所に去り。證空忽ち心地惡しく。身ほとほり顏色衰へ。萎める花の如くにて。時節うつるに隨ひ。重病となり。今を限りと見え給ふ間。智興は申すに及ばず。一寺の老若永々まれん事を悲しみ給ひしが。何ぼう有難き御事にて候ぞ。不動の尊像枕上に立たせ給ひ。證空に告げさせ給ふは。汝すでに師命に代つて死をとる。我れ常持者に代らざらんやと宣ふ。御聲證空の肝に染み。五體に汗出で。心身乃ち爽かになり。長生し給ひたると申す。されば泣不動と申すは。證空師弟の儀淺からぬ志を。明王深く感じ給ひ。繪像の御眼より御泪を流させ給ひし故。泣不動と號し奉り。天下に隠れましまさぬ御事にて候が。さて唯今は何と思召し。お尋ねなされ候ぞ。不審に存じ候。シカ〱。へこれは奇特なる事を承り候ものかな。我等の推量仕るに。疑ふ所もなき。矜羯羅制多迦二尊のうちにて御座あらうずると存じ候。さ樣の事も。御咎借貰く。殊更護摩の壇上に念佛してましましたるより奇特を見せ給ひたると存じ候間。彌々信心私なく。御祈念なされ。重ねて奇特な御覽あれかしと存じ候。シカ〱。へ尤もにて候。御逗留候はゞ。重ねて御見舞申さうずるにて候。

繩鈴木（なはすゞき）

アヒ　家來

（頼朝の使しに出る。）へ御前に候。へ畏まつて候。へ扨も〱我が君御威光は申すも愚かに候。之をいかにと申すに。義經は正しき御弟にて渡らせ給ふに。何と思召し候やらん。我が君に野心御座ある由聞召し。土佐正尊を討手に上せ給ふ處に。堀川の御所にて。正尊生捕られ。終に正尊義經の爲に誅せられ候。さあるに依つて。義經都へも叶はず。西國へ御下り候處に。難風吹き。西國下向叶はず。和州吉野郷を御頼み候處。衆徒共一統心變り仕る由聞召し。奥州秀衡の館へ御座候。此の由君聞召し

御下し文をなされ。益々勢を以て御責めあるべきとの御事にて候。さある間に。紀州熊野の邊りにある鈴木三郎重家。此頃熊野山に隱れありしを生捕り申し候。誠に。義經味方に下り申す迄もなく。誅し申さるべく。鈴木の心中不憫に候。いやかく申すうち時刻移り候。（樂屋向いて。）〽いかに面々。鈴木の三郎重家を。急ぎ御前へ引出し申せとの御諚にて候。〽御前に候。〽畏まつて候。いかに申候 先づ傍へ入り候へとの御事にて候。〽心得申し候。上意の如く。鈴木の三郎を傍へ引き申して候。〽畏まつて候。いかに申候。我が君の御諚には 唯今いしくも申して候ものかな。縄を宥し永く召使はれんとの御諚はいかに。〽先づ畏まつた。〽心得申し候 やれ〳〵推參な奴ぢや。先づとは何と。〽御意の通り申して候へば。先づ畏まつたと申すは。鈴木には似合はぬ推參な申し樣にて候。誠にすね者にて候程に。此節御成敗あれかしと存候。尤もにて候へども。縄に掛け候てさへ。御前をも憚らず。推參な申し候間。お助けなされても。直ぐにはあるまい。只此度御成敗然るべくと存候。〽畏まつて申候。一段は申してあれども。我が君は召使はれんと思召し候へども。中々召使はれさうな者ではない。御諚に候間急ぎ御前へ參れ。先づと云ふが聞き所ぢや。〽いかに鈴木の三郎御前へ御參りあれとの御事にて候。

【に】

鷄龍田（にはとりたつた）　アヒ　供人

（ワキツレ（平岡）供して出る。間座に居る。シカ〳〵。）〽御前に候。シカ〳〵。〽畏まつて候。〽誠に美しき雞にて候。シカ〳〵。〽畏まつて候。やれ〳〵美しい鳥かな。あれを和子樣の土産にせいでは。（トトウ〳〵トトノ〳〵と鷄を呼ぶ心。正面へゆき鷄を抱いて退く。）（仕舞して幕へ入るなり。尤中入あつて。狂言出る。）〽如何に申上げ候。シカ〳〵。〽召使はるゝあこれの前。物の怪の憑き俄に御狂ひ候が。若しかの鷄ばし憑いたるかとの御事にて候。シカ〳〵。〽畏まつて候。シカ〳〵。（茶にの心。）〽如何に此内へ案内申し候。シカ〳〵。〽御使に參じて候。ワキシカ〳〵。〽其事にて御座候。平岡殿の仰せには。あこれの前と申す女に物の怪の憑き。俄に狂ひ申し候間。御出でなされ。加持あつて給はり候へとの御使にて候。ワキシカ〳〵。〽近頃めでたう候。頓て御供申さうずるにて候。如何に申上げ候。僧正の御參りにて候。ワキツレシカ〳〵。〽畏まつて候。此方へ御通りあらうずるにて候。（流により平岡道行過ぎて立つてゐる時。アヒ立つて鳥を見付け。シカ〳〵云ふとめ。間合はすべく候。）

（後のアシラヒ。）ワキシカ〳〵。〽御前に候。シカ〳〵。〽畏まつて候。（後のアシラヒ餘人なり。また同人にてもする。）

【ぬ】

濡衣（ぬれぎぬ）　アヒ　里人

〽所の者とお尋ねは。いか樣なる御用にて候ぞ。〽さん候この川は染川と申し候。又あれに見えたるは。濡衣と申したる女の舊跡にて候。立寄り御心靜かに御一見候へ。〽御用の事候はゞ。重ねて承り候べし。〽心得申して候。〽最前御僧の染川をお尋ねなされ候。未だあれに御座候か御見舞申さう。〽さればこそ。最前のお僧未だこれに御座候よ。〽申々。最前御目に懸かりたる者にて候。〽心得申し候。先づ濡衣と申す女は。古へ此の風流島の地頭。筑前守平貞文と申す人の息女にて

御座候。其の頃在原の業平。宇佐の宮へ勅使として御下向の節。貞文が許に宿を召されしが。彼の息女に一首の歌を贈り給ふ。染川を。渡らん人のいかでかは。色にならでふことのなからんと。遊ばされ候へば。息女の御返歌に。名にしおはゞ。あだにぞあるべき風流島。浪の濡衣きるとなりけり。かやうに御返歌あり。契り給ひたると承及びて候。さる程に。彼の息女の繼母。ましうして息女を失はんとたくみ。浦の蜑人と心を合はせ。或る時息女假寢の節。蜑人の濡衣を息女に着せ置き。蜑人は濡衣を盜まれたるとさゞめき。彼の息女の盜取り給ひたると嘲り申す。元來繼母のたくみ。是非なく盜人の科に落ち申す。其の時筑前守恩愛の息女なれども。所の主の悲しさは。私を以て助くべきにあらずとて。息女を刺し殺し。濡衣を蜑人に返し申さるゝ。何ぼう恐ろしき繼母にては候はぬか。然るに彼の父。夢に息女さも凄じき姿にて。一首の歌に。脱ぎ捨つる。其の僞りの濡衣は。長き泪のためしなりけりと詠み。さめ〴〵と泣くと見て夢覺めぬ。さては繼母讒言工み候ぞと。後悔ましまし。繼母を罪に行ひ。息女の御跡を怨に御弔ひありたると承及びて候。ワキシカ〴〵。常の如し。へこれは奇特なる事を承り候ものかな。お僧貴くよしますにより。濡衣の女の幽靈現れ。以下セリフ常の如し。

【の】

野口判官（のぐちはうぐわん）

アヒ　里人

へ野口の里の者と御尋ねは。誰にて渡り候ぞ。へさん候あれなる寺は教眞寺と申候。御心靜かに御一覽候へ。へ御用候はゞ承り候べし。へ心得申して候。中入。セリフ江口と同じ。へさる程に。義朝の御子九郎判官殿は。鞍馬寺東光坊に。學文のため御座候ひしが。學文は好まず。僧正が谷に御出でおり。明暮兵法の御稽古なされ。平家を滅ぼし給ひし後。奥州へ御下りなされ。秀衡を賴み給ふが。秀衡が子共心變りして。高館の城へ押寄せ。判官殿既に御腹召されんと思召す時。いづくともなく黑雲俄に城の内へ。一村立ち來り。木の葉天狗に車を引かせ。義經を乘せ申す。刹那が間に播磨の國野口へ來り給ひ。愛にて御出家あり。慈悲を專らとして。年月を送り給ひ。其の後終に此の所にて空しくなり給ひ候を。皆々寺を立て。毎年大念佛にて弔ひ申候が。奇特なる事にて候。肌の守に義朝の末子九郎太夫判官と。血脉に御座候。それを判官殿と知れ申候。あとのセリフ常の如し。

範頼（のりより）

アヒ　家來

へ斯樣に候者は。三河の守範賴に仕へ申す者にて候。唯今この所へ出る事餘の儀にあらず。賴朝義經御不和にならせ給ふ。既に賴うだる御方に。舍弟判官殿の討手を仰附けられ候。賴うだ御方には。御連枝の御事なれば。歎かはしく思召し。色々御なだめ候へども。中々御承引これなく。殊の外御立腹にて。討手に參らずは。範賴から搦捕つて得させよとの御諚にて。乃ち梶原が討手に向ふと申す間。賴うだ御方も。是非に及ばず。馬武具を固め。隨分防ぎ申せとの御事なり。皆々その分心得候へ〳〵。

【は】

箱崎（はこざき）

アヒ　浦人

ワキ呼出す。〽當浦の者とお尋ねは。誰にて渡り候ぞ。セリフ常の如し。〽先づ此の浦箱崎標（しるし）の松と申す仔細は。人皇十五代。神功皇后異國に赴き。多くの夷を滅ぼし給ふ。然るに新羅高麗百濟。契丹國（きつたんこく）まで皆從へ給ひ。御歸國の節この箱崎の浦にて。皇子御誕生あそばされ。程なく御位に立ち給ひ。人皇十六代。應神天皇と申して。御威光目出度き御事にて渡らせ給ふ。然るに皇后。末世に奇特な御渡らし給うずることを思召し。戒定慧の三學の妙文を。金（こがね）の箱に納め。此の處に埋み給ふ。尤も標に松を植ゑ給ふにより。箱崎標の松と申して。今に於て樣々奇特の御座候。餘の松に繼り。松吹く風にても。常にじとじ波羅密　と吹き申す。浦打つ浪も。じとくはらみつ〳〵と打ち申候。誠に君を守護し民を憐れみ。偏に當社の神德あらたに目出度き御事御座候。最前も申す如く。の奇特の御座ありたると申す。〽遙々御下向ありたるにより。さ樣御覽あれかしと存じ候。セリフ常の如し。〽重ねて奇特

橋立龍神（はしだてりゅうじん）

アヒ　社人
同　海草の精

ワキ供して出で。座に居る。ワキ呼出す。シカ〳〵。〽御前に候。シカ〳〵。〽畏まつて候。皆々承り候へ。今夜は目出度き御事にて候間。社内淸め其の心得をなし申せとの御事なり。其の分心得候へ〳〵。

中入過ぎて。末社亂序。常の如し。

〽か樣に候者は。丹後の國橋立の沖に棲む海草の精にて候。さても當社に於て御神事あまた御座候中にも。今月今日の御神事なれば。天燈龍燈の祭と申して。子細目出度き御神拜にて候。其の仔細は。地神二代の御神。忍穗耳尊わたづみの宮に入らせ給ひ。下界廣め此の島に御上りあり。末世の衆生濟度の爲。天竺の大聖文珠を勸請なされ。九世戸と名附け給ひ。又橋立と申す事を御作りあるべしとの御事なるが。雲霧虛空に充ち滿ち。常闇の如くありし程に。神々集まり給ひ。松をともし日夜に成就し給へば。松ほど目出度き物はあるまじきとて。松を植ゑ給ふとかや。なほも神はわたづみの宮に入り給ひ。御心一つにして。燈の松の枝にうつし給へば。其の時天より天人降り。燈を松の枝に捧げ。天地兩頭を捧げ給ふ御事なり。則ち今夜の御神事と申すは。其の兩燈神前に輝き。渇仰なさるゝ御事なれば。上は有頂。下は下界の龍宮まで。隱れなき御神拜にて候故。參詣夥しき御事にて候。さあるに依つて。我等がやうなる者も。御神事を拜まんとてこれまで罷出でた。いや。何かと申すうちに時刻が移る。某もこれまで罷出でた印に。何ぞ一曲仕りたいが。何をか致さうぞ。古へ舞うた事がある。いざ一さし舞うて戻らう。舞三段。切詞やら〳〵。我等がやうなる海草までも。此の神前に浮かみ出でて。神祕を拜み奉り〳〵て。また海中にぞ入りにける。

橋姫（はしひめ）

アヒ　里人

〽語　先づ此の宇治の里は。名所舊跡多き所

にて御座候。先づあれに見えたるに塔の島。此方なるは橘の小島が崎。あれなるは離が島と申す。其の外橘の景色。何れも〳〵面白き眺めたえせぬ所にて候。又これなる寺は平等院と申す。さる程に。古へ惠心の僧都一切經供養の時。あれなる寺にて御法を御演べなされたる由承りて候。それに就き。何ぼう奇特なる事の御座ありたると申す。其の様體は。僧都御法を御演べなされ候折節。風吹きて木の葉一葉。御珠數の上へ吹上げし程に。僧都取りて御覽候へば。文字の如くに蟲喰が見え候間。讀みて見給へば。歌の下の句ありたると申す。其の歌に。極樂へ行く船の便りにと。かく様の歌の下の句の候間。僧都不審に思召し候いて。さあらば今の上の句を。御つぎあるべしとて。仰せられて。法知らぬ。人を導きて渡さばや。極樂へ行く船の便りにと。斯様につぎ給へば。聽衆も一度に感じて。有難きと申す處に。近く女性のありしが。今の續き給ふ御歌を聞いて。殊の外落涙せられし程に。僧都仰せられ候は。聽衆多き中に。御身は何とてさ様に泣き給ふと。御尋ねなされ候へば。彼の女の申さるゝは。さなきだに。女は後生の罪深きと申すに。唯今の僧都様の御說法を承りて候へば。我等如きの女人の身は。極樂へ參る事はあるまじいと思へば。あさましく候ひて。斯様に歎く由申さるゝ。僧都奇特に思召して。さあらばいか様ともついで見給へと。仰せられ候へば。女暫くためらひて。しる人も。知らぬ人をも渡さばや。極樂へ行く船の便りにと。斯様に續がれたれば。惠心の僧都も高座を下り給ひ。彼の女人を禮し申され。先づは奇特なる事かなとて感じ給へば。聽衆も一度に奇特なる女性かなとて感じ入り。さて彼の女性を何者ぞと不審をなし。行方を心がけて見候へば。諸人の見るに。彼の女御堂を出るかと見れば。行方知らず失せ候程に。僧都もいろ〳〵不審をなし申されければ。何ぼう不思議なる事にて候ぞ。此の宇治の橋姫現れ給ひ。僧都の御法を聽聞ありたると申す。惣じて此の所に於て。名所舊跡古き物語。あまた御座ありとは申せども。委しくは存じも致さぬ。先づ我等の所にて承及びたるは。この如くに御座候が。何と思召し唯今はお尋ねなされ候ぞ。シカ〳〵。〽これは奇特なる事を仰せ候ものかな。扨は某の推量仕るは。疑ふ所もなく。橋姫にて御座あらうずると存じ候。それをいかにと申すに。此の所の女に心ありて。御僧の御尋ねなさるればとて。僧都の御法の時つかせ給ひし歌物語など申し。又これなる御社に入り給ふ風聞仕らう者は。御座なく候が。御僧貴き御方なれば。橋姫現れ。其の時の様體御物語りなされたると。推量申し候。お僧もさ様にありつべく思召さば。暫くこれに御逗留あり。御經をも御讀誦なされ重ねて奇特な御覽あれかしと存候。シカ〳〵。

〽重ねて御用もあらば承り候べし。シカ〳〵。

〽心得申して候。

花軍（はないくさ）

アヒ　草花の精

〽斯様に候者は。木幡邊に住居する草花の精にて候。唯今これへ出る事餘の儀にあらず。都より人々花を手折るとて。此の木幡の野邊に入らせ給ふ處に。女郎花現れ出で。いかに都人。草花を手折らせ給ふならば。先づ女郎花を折り給へと申され候。其の時都人申され候。いや〳〵此の野邊の名草なれば。先づ菊の花を手折り候はんと宣ひければ。其の時女郎花腹立ち。賞翫し給はるませ菊のもとに立

寄り。花の威光を顯し。花軍をして今の思ひを晴らさんと。其のまゝ姿は失せて候。これに就き互に思ひの花を集め。爭をして彼の都人に。夢ながら見せ申さんとの事にて候。我等が樣なる者も罷出で。花々しく軍して見せ申さん。構へて其の分心得候へ／＼。

花櫓（はなやぐら）　花行とも

アヒ　從者
同　使の者

シテの供して出る。　トモ〽御前に候。　シテ〇急ぎ諸木切りて櫓を拵へ候へ。　〽畏まつて候。　使〽いかに此の内へ案内申候。　トモ〽誰にて渡り候ぞ。　使〽吉野山衆徒の方より參りて候。此の文を參らせて給はり候へ。　トモ〽心得申し候。暫くこれに御待ち候へ。いかに申候。此の山の衆徒の方より文を遣し候。是々御覽候へ。　シテ〇此の返事を持たせて返し候へ。　トモ〽畏まつて候。最前の人のわたり候か。　使〽これに候。　トモ〽御返事を參らせ候。　使〽心得申候。　ト云うて入る。あと見送り。　トモ〽いかに申上候。唯今の御返事を持たせ返して候ひしが。彼の者の氣色城中を見廻し候。いか樣追附け大勢馳向うずべき樣に見えて候間。其の御用心あらうずるにて候。　ト云うて〇座に居る〇それより切組まける〇這入ると〇ワキ呼び出す〇　〽御前に候。　シカ／＼。　〽誠に只今正行の御働き申す愚かに御座候。天晴れ御手柄と存じ候。　シカ／＼。　〽畏まつて候。いかに申候。さて唯今の働き目を驚かしたる御事にて候。御休み候ひて。とう／＼御出であれとの御事にて候。　ト云うて〇太鼓座に入る〇

濱川（はまかは）

アヒ　供人
同　能力

シテ（濱川）の供して出る。　〽御前に候。　シテ八幡へ參らうずるぞとも仕り候へ〇　〽心得申して候。　シテ〇又花菊が事申す人には對面仕るまじいぞ〇其の分心得候へ〇　〽畏まつて候。　ト云うて〇笛の上に居る〇　能力（ワキ宮島の別當の供）〽御前に候。　〽畏まつて候。　〽心得申して候。　〽いかに此の内へ案内申候。　濱川のトモ〽案内とは誰にて渡り候ぞ。　能力〽宮島の別當參られたる由御申し候へ。　トモ〽只今は何の爲の御出でにて候ぞ。　能力〽別儀にても御座なく候。花菊殿の御仲直しのため參られ候さりながら。只見舞とばかり御申候へ。　トモ〽心得申して候。暫くそれに御待ち候へ。　能力〽心得申して候。　トモ〽いかに申上候。宮島の御坊の御出でにて候。　〽畏まつて候。最前の人の渡り候か。　能力〽これに候。　トモ〽其の由申して候へば。只今は八幡へ參詣致され候間。對面申すまじき由申され候。　能力〽さあらば其の由申さうずるにて候。　能力〽尤もにて候。　能力〽御出での由申して候へば。唯今八幡へ參詣候間。御對面はあるまじき由申され候。　能力〽なか／＼の事。　さあらば何方迄なりとも道まで參らうずるにてあるぞ　能力〽これは日本一の御思案にて候。濱川殿は御舞好きにて候間。定めて御機嫌にて候べし。其の折節御仲直し然るべく候。　急いで其の用意仕候へ　〽畏まつて候。　ト云うて〇ワキ狂言も樂屋へ入る〇　トモ〽いかに申上候。別當殿は御歸りなされて候。　トモ〽さん候。　トモ〽頓て御社參なされ候へ。　シテ出てワキ座下に居ると〇　トモ〽やあ／＼そなたに笛鼓の音の聞こゆるは。何事にてあるぞ。何と云ふぞ。宮島の別當殿船を飾り。御酒迎に御出であると申すか。さてそれは面白からう。急ぎ其の由申上げう。いや／＼。若しまたお逢ひあらうまじい仰せらるれば氣の毒ぢや。先づ沙汰なしにして居よう。　ト云うて〇太鼓座下に居る〇ワキ能力謡り拍子にて樂屋より出る〇先づ其の酒を飲まうよと謡ふ〇シテ船に乗ると〇　能力〽やれ／＼目出度や。

先々御上りなされ。御心静かに御酒宴候へ。（皆々橋より上り座に着いて。ワキ。いかに能力。）能力へ御前に候。能力へ畏まつて候。（十車舞その事に）能力へいかに濱川殿へ申し候。御仲直りなされ。此の浦の目出度き仔細御物語り候へ。（ト云うて。太鼓にて能力踊む。ワキの供して入る。此の能に限り仕舞まで居るか。）

濱鑵（はまなつこ）

アヒ　使の者

口明へこれは清水寺門前に住居するものにて候。扨も菊若殿と申す稚き人清水へ參籠候が。深草の左衛門殿へ。此の文を届けくれよと仰せ候程に。只今持つて參り候。シカ〳〵。へ内に御座ればよいが。若し御他行にてにあるまじいか存ぜぬよ。あら草臥れや暫く此の所に休らうて參らう。（ト云うて。間座に下に居る。太夫の謡にかかると云ふ時。）へいや是へ左衛門殿御出でにて候。幸ひの事ぢや。文を届け申さう。へいかに申候。菊若殿より文をことづかり申候間。届け申候。（ト云うて。文渡し入る。ワキトモ謡に。濱ならしせん〳〵此の濱鑵せん〳〵と謡ふ時。）へいかに申候。京物語を童共が聞きたき由申候間。ちと語つて御聞かせ候へ。シカ〳〵。へいや苦しからぬ事御語り候へ。へ御前に候。へ新參の者が面白う謡ひて候間。これに謡はせられ候へ。それは少しも大事ない事にて候。

馬融（はゆう）

アヒ　官人

（ワキの供して出る。太鼓座に居る。ワキ呼出す。）へ御前に候。シカ〳〵。へ畏まつて候。へいかに此の内に博士の渡り候か。帝より御召し候間急ぎ參られ候へ。いかに申上候。博士を召して參りて候。へ心得申して候。かう〳〵御通り候へ。（座に入る。中入過ぎ。立つて。）へ扨も〳〵不思議の事かな。唯今博士には。我は誠は馬融が幽靈と申して失せて候。先づ不思議なる事にて候。さて此度帝御惱唯ならぬ事なれば。國々捜し隨分と名醫師を選み御附けられ候へども。更に其の驗なし。仍つて樣々御詮議あつて。とかく博士を召寄せよとの御事にて。馬融を召出だされ候處に。只今申す如く。姿を見失ひ申して候。さて又この馬融と申す者は。先帝の御時。隱れなき伶人にて。即ち太鼓の奥義を極めたりしが。人の讒に因つて。江南の江にて誅せられたると申すが。其の執心此度帝に恨みをなし。御惱とならせ給ふとの御事。誠に恐ろしき事にて候さりながら。馬融が跡を弔ひ候はゞ。早速御惱は直らせ給ふべき由申し候へば。これ程目出度き事は御座ない。さて御弔ひはいかなる事にて御座あるべきぞ。伺ひ申さばやと存ずる。いかに申上候。さて只今の博士は。馬融が幽靈なる由を申して失せて候。何ぼう不思議なる事にては御座候はぬか。へさてはまた我等の聞及びたるは。馬融が跡を御弔ひあらば。御惱は其儘直らせらるゝと承り候が。御弔ひはいかやうなる御事にて御座候ぞ。シカ〳〵。へさあらば其の由相觸れ申さうずるにて候。皆々承り候へ。江南の江にて馬融が跡を御弔ひ給ひ。管絃講仰附けられ候間。管絃の役者は參り候へとの御事。其の分心得候へ〳〵。へ相觸れ申して候。

治親（はるちか）

シテ　居鶴太夫季次
アド　季次の家來

シテへ抑もこれは鎌倉殿の御内に居鶴（ゐつる）の大（だい）

大夫季次にて候。さる程に。某が舞に磯屋の十郎治親と申す者。謀叛を企て。朝敵となり申すにより。某に御附けられ。急ぎ召捕り參らせよ。さあるに於ては。上野下野兩國を。親子三人に下されうずるとの御事により。則ち御前にて場々と領掌仕りて候。シカ〳〵云うて。床几に腰かくる。脇座に入る。ヘいかに誰かある。アドヘ御前に候。シテヘ某が子の太郎次郎兄弟の者を召して來り候へ。アドヘ畏まつて候。いかに太郎殿次郎殿へ申上候。急ぎ御前へ御出であれとの御事にて候。太郎次郎出る。シテヘいかに兩人の者よく聞き候へ。某に治親を召捕り申せ。上野下野兩國を親子三人に下されうずるとの御事ぢや。某は年寄りたる者なれば。汝等いか樣にもたばかり。治親を召捕り候へ。二人ともシカ〳〵あり。シテヘいや某も色々申上げたれども。上意なれば力及ばぬ。急ぎ召捕り候へ。爰にて兩人とも色々あり。其のうちアシライ二人共に後へ入つて居るべし。太夫に縄をかけて。中入ありてから。二人共に出る。アドヘやあ捕つたか〳〵。まうし〳〵捕つて御座る。シテヘ何ぢや。捕つたと云ふか。アドヘ中々の事。シテヘあら心安や。鼠の穴へなりともなゞまざなるまいかと思うたに。さても〳〵嬉しやな。アドヘ太郎殿次郎殿。兩人まんまと御たばかりにて。則ち籠へ御入れなされて候。シテヘそれはさて。子供がでかいた事をしたな。さて玉若は何としたぞ。アドヘ其の事で御座る。重ねての御上意として玉若殿は申すに及ばず。乳母の澤田まで召捕りたるとの御事にて候。シテヘやあこれはいかな事。扨々それは苦々しい事ぢや。玉若は身共が秘藏の一人孫ぢやもの。無殘な事をしたな。やい。泣かば飴なりとも買うて喰はしてくれい。ト云うて泣く。何と云ふぞ。其の許がとゞめくと云ふか。アドヘ中々の事。ト云うて。アド入るなり。ヘやれ治親は大力ぢやが。定めて千筋の縄を引き千切つて。爰へ來るもいであらう。はつちやこはい。此の祖父が首を斬られてはなるまい。どこへ逃げうぞ。あゝ恐ろしや〳〵。ト云うて狼狽へて樂屋へ逃げこむなり。

巴薗橘（はゑんのたちばな）

アヒ　仙人

亂序にて出る。ヘか樣に候者は。巴薗の傍に住む仙人にて候。常の如く。官人云ふ。セリフ云うて。さる程に。此の巴薗の内に年久しき橘の靈木御座候が。彼の木に紫雲たなびき候事七日七夜なり。殊に色香妙にして虛空に音樂聞えて。常ならぬ御事ゆゑ。漢の帝の臣下宣旨を蒙り。此の所へ御出でにて候間。巴薗の翁百歲になりたるが出で會ひ。目出度き仔細委しく奏聞申したれば。目出度き御代なれば橘のうちなる仙人も現れ出で。翁の枝も靑龍となつて。奇特を現し。舞樂を奏し申さんとの事にて候。我等も此の傍に住む者なれば。舞樂こそならずとも。一さし舞うて戻らばやと存じて。これまで罷出でた。急いで一かなで申さばやと存ずる。ヘめでたかりける時とかや。三段舞。やら〳〵目出度や〳〵な。治まる御代の。驗とて我等が樣なる仙人までも。現れ出でて。諷ひかなで。これまでなりとて仙人は〳〵元の住居に入りにけり。

反魂香（はんごんかう）

アヒ　宿の召使

ヘ誰にて渡り候ぞ。ヘ主に其の由申さうずるにて候。ヘそれに御待ち候へ。ヘいかに申候。女性旅人の一夜の宿と申され候。ヘ心得申して候。ヘ主に申して候へば。御宿參らせうずると申し候。奧の間へ御通り候へ。

亭主大小前に行き居る。女座に着くと。狂言立つて。へいや旅の上﨟の風の心地と申され候が。以ての外に見え給ひ候。此の由主に申さう。へいかに申上候。旅の女性風の心地と申され候が。以ての外に御座候。へ御尤もにて候。へ御前に候。森のお傍の方へ連れ参らせ申し候へ。へ畏まつて候。

【ひ】

常陸帯（ひたちおび）

アヒ　社人

ワキの供して出る。シカ〳〵。へ御前に候。シカ〳〵。へ心得申して候。へ皆々社人たちへ申し候。罷出で御神事の用意なし申せとの御事にて候間。皆々出でられ候へや。へ相觸れ申して候。ト云うて。太鼓座に居る。アヒ亂序にて出る。へ斯樣に候者は。鹿島大明神に仕へ申す社人にて候。珍らしからざる申し事にて候へども。我が朝と申すは小國なれども神國にて。國々在々に靈神あまた地を占め給ふとは申せども。別して當社の御事は。其の昔へ異國の夷を平らげ。國土を治め。王位を守り給へば。誠に目出度き神にて渡らせ給ふ。さて當社に於いて。年中に御神拜。七十餘度に及んで御座ありとは申せども。取分き今月今日の御神拜を。常陸帶の御神拜と申候。誰にてもあれ。若き男の妻を迎へんと思召さば。女の帶に一首の歌を書附け。神前に手向け申し。此の歌を吟ずる女。乃ち夫婦となし給ふ御事にて候。さあるに依つて。若き男女踵をつぎ。袖を列ね群集をなし。神に歩みを運び候。や。これは當社の目出度き佇細。貴賤群集仕り。賑々しく相成り申して候間。神主殿へ。此の由申上げう。ワキへ云ふ。へいかに申上候。賑々しく相成り候間。いつもの如く。御神事の用意なされかしと存候。シカ〳〵。へ畏まつて候。樂屋向いて。へいかに社人たち。漸う時分よく候間。急ぎ御神事の用意召され候へ。立衆（社人）四人出る。シテへ何れも居さしますか。アドへこれに居まする。シテへ時分もよく候間。御輿を御幸なし申さうずる間。身拵へをなさしませ。ト云うて。御輿を取りに。樂屋へ行く。へさあ〳〵。御幸なし申さう。ト云うて。四人してかく。シテは手をかくるが。少しも上らぬ作り物。皆々こける。シテへこれはお上りないか。アドへ何としたものであらうぞ。シテへ囃子物にていさめて見う。此の所。皆々囃を囃けてなす。シテへえいさら〳〵。立衆へえいさら〳〵。シテへえいとも〳〵えいともな。立衆へえいさら〳〵。シテへやうさ〳〵。さあ〳〵御幸なし申さう。また上らぬ作り物。アドへさても〳〵不審な事ぢや。シテへ急ぎ神主殿へ申さう。ワキへ云ふ。へいかに申上候。御輿御上がりなく候。シカ〳〵。へそれに付き思召はする事の候。最前若い男。女の帶に歌を書附け。神前に手向け置き候處に。若い女來りて。吟じ申され候程に。彼の男悦び。夫婦の語らひをなし申さうずると申候へば。女の打解けず候程に。神に恨みを申し。彼の帶を取りて歸り候が。若しか樣の事にておん上がりなきかと存候。シカ〳〵。へ急ぎ神前へ御出であり樣體を御覽候へ。シカ〳〵。へ御歸りより參り申さうずるにて候。

羊（ひつじ）

アヒ　官人

ワキ呼出す。へ御前に候。シカ〳〵。へ畏まつて候。へ皆々承り候へ。景陽國の帝の御祕藏なされ候羊を失ひ申して候。此の羊のありかを奏聞するに於いては。いか樣の望みなりとも。御叶へあるべきとのことにて候間。高札打ち申して候ぞ。構へて其の分心得候へ〳〵。シカ〳〵。へ奏聞とは誰にて渡り候ぞ。へ暫く

それに御待ち候へ。其の分申上げうずるにて候。〽いかに申上候。御國に光伯と申す者にて候が。御羊のありかを存じたる由奏聞仕候。ワキシカ〱。〽畏まつて候。最前の人の渡り候か。シカ〱。〽庭上に參內あれとの御事にて候。かう〱參られ候へ。ワキシカ〱。〽御前に候。〽畏まつて候。皆々承り候へ。帝の羊を此の國の傍に孝書と申す者が盜み候間。十車を拵へ。姥を乘せ祖父に引かせ。仕丁官人に追立て參れとの御事にて候。其の分心得候へ〱。

比良（ひら）

アヒ　家來
同　下女

〽御前に候。〽畏まつて候。扨も〱要害嚴しき構へにて候。急ぎ歸り此の由申上げう。〽いかに申上候。國久が要害を見て參りて候。〽堀を掘り廻らし橋を架け。一段とよき構へにて候。未だ用心する體と見えて候。

〽妾は濱の庄司の下女にて候。江川殿へ急ぐ用の候間參り候。此の內に江川殿の御座候か。〽妾は濱の庄司の下女にて候。先の夜能州ゆすきの山伏たち大勢。庄司が處へ御着き候。其の內に童山伏の御座候。國久は親の敵なれば。討ち申したき由申され候。先達は御同心なく候が。同行たちは皆々一味なされたるやうに見え申して候が。夜にまぎれ庄司殿を御立ち候。是は大事の御事にて候程に。知らせ申さんため參りて候。〽いかに江川殿へ申候。妾が申したると御申し候な。

廣基（ひろもと）

アヒ　家來

シカ〱。〽御前に候。シカ〱。〽大事の御談合候間。御出でなされ候へ。シカ〱。〽其の由申候べし。シカ〱。〽御前に候。シカ〱。〽畏まつて候。皆々承り候へ。廣基殿と申す御方は。一段の曲人にて候間。番堅く仕り候へ。遲る事あらば此方へ申し候へ。此の內へ案內申し候。〽案內とは誰にてわたり候ぞ。此の國の傍に住む白拍子にて候。目出度き折なれば一節謠ひ申し度候。〽中々の事。其の由申さうずる間。それに御待ち候へ。いかに申上候。此の國の傍に住む白拍子にて候が。目出度き折なれば。一節謠ひ申さうずる由申し候。シカ〱。〽めでたき事にて候間。一節聞かせ申され候へ。シカ〱。〽畏まつて候。此方へ御通り候へ。なう お聞きやるか。あの女郎は殿樣の置かせられうず。和御寮と身共は。あとをさして寢よう程に。足をそこなはぬ樣にしてくれさしめ。〽さればこそ。廣基殿の御醉ちや。近頃目出度い事かな。某が腹卷をめされ候へ。斯樣に古く候へども。一段と堅き具足にて候。先づ某は罷歸り申候。

【ふ】

伏木曾我（ふしきそが）

アヒ　里人

〽斯樣に候者は。富士の裾野に住居する者にて候。久しく何方へも參らず候程に。今日は罷出で慰まばやと存じ候。さすが三國一の富士山の裾野にて。眺め盡きせぬ面白き所にて候。や。これに見なれ申さぬ御方御座候。何方よりの御出でにて候ぞ。ワキとのセリフ常の如し。〽先づ曾我の十郎祐成。同五郎時致。此の所にて果て給ひたる仔細は。此の二人未だ幼少の時分。父河津の三郎殿を。工藤一﨟祐經の仕業にて。赤澤山の狩りくらとやらんにて。射殺し申され候故。兄弟の人々。祐經は親の敵なれ

ば。討つて孝養に奉らんと思ひ。年月狙ひ申されけれども討つべきやうなし。月日を送り給ふ處に。建久四年五月。頼朝富士の牧狩なされ候に。在鎌倉の大名小名は申すに及ばず。東八ヶ國の諸侍。皆御供と聞こえしかば。祐經も狩場へ出でぬといふ事あらじ。敵討つべき時節なりと。兄弟心を合せ。狩人の姿となり。敵を狙ひ申されたると承り候。案の如く。祐經も御供にて候ひしが。三つ連れたる鹿に目をかけ。留めんと思ひ。駒に任せて驅け通るを。兄弟見つけ。天の與へと喜び。鏑を番ひ。駒一さんに驅け給ひしが。運や強かりけん。祐成の乗り給ひし馬。伏木に乗りかゝり倒れ。既に危く見え給ふにより。時致馬より飛んで下り。祐成を引立て給ふ。其の間に。祐經は乗越し申され候間。兄弟の人々は。本意なく歸り申されしが。或る夜敵の寢間へ忍び入つて見給ふに。祐經は前後も知らず臥して候間。兄弟詞をかけ。祐成時致なり。起き合へと申されければ。祐經刀を押取り立上がらんと召され候を。易々と討ち留め給ひたると聞及びて候。又大藤内と申す者。其の夜祐經の側に臥したりしを。太刀音に驚き。逃げざまに申す樣。今宵の夜討は曾我兄弟なり。後日に爭ひ給ふな。慥に證據人は大藤内ぞと呼びければ。兄弟は聞き給ひ。惜き彼が詞かなとて。追詰め斬留め申されたると申す。其の外狩屋より夜討の聲。打留め高名せんと思ひ。我れ先にと打つてかゝるを。兄弟の手に掛け。あまた切り防ぎ給ひしが。終に祐成は討死し給ふ。又時致は薄手をも負ひ給はず。頼朝公の寢所をさして切つて入り給ふを。五郎丸といへる大力の人。後より抱き給ふ。其の時大勢折合ひ。時致を生捕りしは。富士の裾野にて誅し給ひて候。誠に兄弟共に。屍は土中に埋むと雖も。名はとゞまつて。天晴れ大剛の人々かな。類ひあるまじきとぞ沙汰仕り候。（これよりセリフ常の如し。）

伏見（ふしみ）

アヒ　里人

（ワキよりカヽリフ常の如し。）〽語るほどに。伏見明神と申し奉りしは。則ち當社の御事にて御座候。御覽候へ餘の宮造りには變り。御宮柱鳥居などの樣體。申すも愚かに御入り候。然れども御札の守護神と申すは。忝くも昔伊勢の國。あこねの浦に出現ましましたる御事なれども。なほ〳〵王城近く御鎭座なされ。彌々天下を守り。國土安全になすべしとて。此の伏見に飛移り給ひたる御事にて御座候。然れば此の大宮造り立始まりたる御事は。桓武天皇の御宇にて。何ぼう有難き御事にて御座候ぞ。其の折節。大宮造りの御事に勅使立つて。宮居の樣子御覽じ定められ候處に。老人一人出で。此の所に御宮造りあるべき事。何より以て目出度き御事なり。先づ木取りの樣體御談合ある處に。天より黄金の御札降下り。色々目出度き御事ありて。其の御札を神前に納め申したるに依つて。御札の宮と申す由聞及びて候。されば當社は。伏見の翁にましますか。又伊勢の國あこねの浦より。飛移り給ひしは。御札の守護神にて御座候。まこと所から目出度き御事の仔細は。伏見と申すも日本の總名なれば。所から目出度き靈地にて御座候。惣じて此の事に就き。色々樣々仔細御座ありとは申せども。我等如きの者。誠の樣體は存ぜず候さりながら。お尋ねによりあら〳〵御物語申して候が。さて御尋ねありたきとは。いか樣なる仔細にて御座候ぞ。シカ〳〵。〽これは奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに。疑ふ所もなく。伏見の翁現れ給ひたると存じ候。

それないかにと申すに。これ迄の御參詣嬉しく思召され。當社の日出度き仔細を。申上ぐる者あるまじと思召し。ことなき老人と現れ。御詞をも交し給ひたると存じ候間。彌々御神前にて。猶も信心をなし給はゞ。誠の神の御姿をも御覧なされ。其の後御上洛あれかしと存じ候。シカ〴〵。〽重ねて御用も御座候はゞ。承り候べし。シカ〴〵。〽心得申して候。

不斷櫻（ふだんざくら）

アヒ　門前の者

〽觀音寺門前の者とお尋ねは。誰にて渡り候ぞ。ワキとのセリフ常の如し。〽さる程に。觀音寺と申すは人皇四十五代。聖武天皇の御願。淡海公の御建立にて御座候。其の後天平七年の頃。玄昉僧都と申す御方。大唐より御經を傳へ。取りて歸朝ありけるが。肥前の國松浦の郡。太宰の少貳廣嗣と申す者。玄昉讒言の意趣により。鳴る雷となつて。玄昉の命を取り。五體を切割き。死骸を南都興福寺の内陣に納め奉りしが。其の後時節到來にて。此の寺燒失仕り候間。御經もおのづから土に入り候。然るに雨露の惠にや。其の御經の軸より。一木の櫻生ひ出で。枝を垂れ葉を並べ。四季共に花咲き亂れ候間。不斷櫻と申習はし候。其の後稱德天皇の御宇に。當寺の櫻を聞召し及ばせ給ひ。南都の庭に移し給ひ。雲の上人色に染み香に愛でて。南殿の御遊淺からず御座ありたると申す。君が代の。いつも櫻の花なれば。松も眺めの色そへてげりと。かやうに御座ありたると申す。最前申す如く。これよりセリフ常の如し。〽さては櫻の精現れ。詞をかはし。あとのセリフ常の如し。

【ほ】

星（ほし）

アヒ　家來

〽御前に候。〽畏まつて候。ワキの供して出る。ワキ呼出すこと 抑も――〽日出度い事かな。此の由觸れ申さう。皆々承り候へ。天より君へあらたに御告のまします。明日の御合戰に。敵を平らげ給ふべきとの御事なり。然れば時の太鼓の相圖次第に未明より罷出で相詰め候へ。其の分心得候へ〳〵。

【ま】

正成（まさしげ）

アヒ　里人

〽斯樣に候ものは。此の邊りの者にて候。セリフ常の如し。〽先づ多門兵衛正成と申したる御方は。御母信貴の毘沙門に祈り。儲け給ひたる御子なればとて。多門兵衛と申したるげに候。依つて智仁勇の能き大將にて御座ありたると申す。さて又この千早の城と申すは。僅か千人餘りの小勢にて立籠り給ふ處に。寄手は八十萬騎の勢を以て攻め候へども。城中少しも騷がず戰ふ程に。次第に勢加はり。百萬騎を以て千早が二三里を取巻き。稻麻竹葦の如くにありたると申す。然れども。寄手謀を以て手を盡くすといへども。楠の謀にて。毎日討たるゝ者數知らず御座ありたると申す。さあるに依つて。百萬騎と聞こえし勢も。後には十萬餘騎ばかりになりたると申す。其の時いかなる者が詠じけん。よそにのみ。見てややみなん葛城の。高間の山の峯の楠と。斯樣に口ずさみたるなどと承及びて候。最前申す如

く（セリフ常の如し。）

松浦梅（まつらうめ）

アヒ　里人

へ是は松浦潟に住居する者にて候。（セリフ常の如し。）へ先づ此の所は肥前の國松浦と申候。又この梅は隱れなき名木にて候。誠に梅の名には。好文木鶯宿梅。さては八重一重。紅梅白梅などと申して。樣々名木御座候へども。取分け此の梅は心あり顏なる梅にて御座候故。初めての御方は不審をなし。面白き歌など遊ばし候。玄冬惣じて梅は。冬のうちより匂ひを持ち。立春には淡雪の刺には。嵐を防ぎ霜を厭ひ。諸木に先立つ必らず咲亂れ。色香妙にして。菅丞相物なればとて。花の兄と申すげに候。紅梅を御寵愛なされ。庭上に植ゑ置かせられ。常に御詠覽ありたると申す。さあるに依つて。太宰府へ流され給ひたる時。御歌などを遊ばされ候へば。御歌に感じ。其の梅飛び來り。飛梅などと申候。最前申す如く。（セリフ常の如し。）

眞名井原（まないのはら）

アヒ　末社

へか樣に候者は。丹後の國當社天照太神宮に仕へ申す。末社の神にて候。さる程に。此の處を眞名井原と申す仔細は。人皇二十二代。雄略天皇の御宇。當國に凶り竃鬼にて。既に世の妨げとなりしかば。此の事奏聞に及び。皇子の親王に急ぎ御退治あるべしとの御事にて候。親王既に打立ち給ふ所に。忝くも天より金の札降り。神明下り給ふとあり。忝くも神力を添へ。程なく數萬の鬼どもを滅ぼし。天下泰平一統の御代となし給ふより此の方。竃無いの原とは名附け給ふ。其の後宮作り彼の札納め。今の代まで崇め奉り候。これは當社の。（以下常の如し。末社常セリフ。總三段舞。切誑あり。右の旨にて。少々工夫も可有之候。）

舞車（まひぐるま）

アヒ　召使の者

（ワキ呼出す。）へ御前に候。（ワキシカ〳〵。）へ畏まつて候。（シテ出て。あら笑止や日の暮れて候。と云ふを見て。）へいかに申候。お旅人の御通りにて候。（色々セリフあり。シテ。宿貸ふ事はなるまじくと云ふ時。）へそれは尤もにて候へども。當社人御計らひにて候間。御舞ひ候へ。（ワキとシテとシカシカ過ぎて。ワキ。頓て御捌へ候へと云ふ時。）へ誠に此の祇園會は。天下に隱れもない祭禮にて。參り合はする人を留め。車の上にて舞を舞はする法にて候。西の方は御座あり。東の方は色々と辭退にて候へども。所望申して候。漸う時分になりて候。急ぎ車を出し申さう。へいかに申候。舞の始まり申候。急ぎ兩車ながら出され候へ。（先に西方舞を始め候へと笑人揃舞。）へ扨も〳〵。面白き車かな。東方へ申さう。いかに申候。西方の舞は濟み候間。とう〳〵御舞ひ候へ。（東方舞て。車を東方へ入る。）へ扨々面白い事かな。何れもいづれと云はう樣もない面白い事ぢや。へやあ〳〵何と申す。今の舞が面白かつた。所望せい。いや今のさへ有つた。へいかに申候。見物先づ其の由申してみう。へいかに申候。見物より今の舞が出來た程に。今一さし所望あれとの御事にて候。（此の間。衣裳口傳。又太夫ワキ方と。よく申合はすべし。）

鞠（まり）

アヒ　召使の女

（木幕にて出る。）へこれは薩摩國一丸殿の御内に仕へ申す女にて候。さても賴み奉る一丸殿は。たゞかり誣設のこと候ひて永々在京にて候が。終に空しくなり給ひて候。さる間北の御方御歎き淺から

ぬ御事にて御座候。又この一九殿は、鞠を御好み候が。常々北の御方も鞠のつめに御出で候。されば此の間は荐りに北の御方鞠をなされ候。又今日も掛かりの用意なせよとの御事にて候。（此の所に作り木に鞠かける。）〽漸う掛かりの用意もよく候程に。つめの女中達を呼出し申さう。（樂屋向いて。）〽上﨟たちは皆々御出であり。鞠あそばされ候へや。（シテ出て。謡の時。切戸より入る。此の間。作物出てから出る。鞠持つて出る。尤も右に抱へて。）

【み】

身賣（みうり）

アヒ　従者

〽船頭殿にはいか様なる人にて候ぞ。〽心得申して候。〽いかに商人たちへ申候。人や召すと尋ね候が。御買ひ候か。〽心得申して候。〽あれに立ちたる人にて候。〽一段の追手がおりて候。急ぎ召され候へ。〽いや〳〵待つ事はなるまじく候。〽さらば急ぎ候へ。〽いつ事いせんは悉く出でて候。我等が舟にて候。〽いかに申候。我等が船にて候間。急ぎ御乗り候へ。

三笠山（みかさやま）

アヒ　里人

〽所の者とお尋ねは。誰にてわたり候ぞ。（セリフ常の如し。）〽先づ當社春日大明神と申すは。神護景雲元年。正月廿一日。常陸國鹿島より伊賀の國名張の尼成へ移らせ。それより河内の國平岡の庄へ御移りなされ。其の後同二年戊の年正月九日。當國阿部野山へ移り給ひ。同年十一月九日。戊午の日。此の三笠山へ御移りありたると申す。誠に。當社は君を守護し。藤原氏の祖神にて渡らせ給ふ。此の所へ御移りまします折節は。禿山にて御座候を。御託宣に木を植ゑて得させよとの御事にて御座候により。皆人諸木植ゑ參らせ候。又古へ藤原の定家卿。此の所へ御參詣あり。三笠山と申すは。いか様なる仔細あるぞと御尋ね候へば。社人答へて申すやう。笠を三つ重ね候やうなるにより。三笠山と答へ候へば。其の時定家卿の御歌に。名のみして。さして三笠もなかりけん。朝日夕日のさすも云ふかもと。斯様に遊ばされたると申す。また水屋の御神と申すは。牛頭天王を祭り奉る。夫婦の縁を結び給ひ。靈驗あらたなる御神にて御座候。さて又御尋ね候八重櫻は。隱れもなき名木にて。即ち奈良の都の八重櫻などとも詠まれたると申す。（以下セリフ常の如し。）〽扨は水屋の明神假に現れ給ひ。（あとセリフ常の如し。）

三笠龍神（みかさりうじん）

アヒ　里人

〽斯様に候者は。和州南都に住居仕る者にて候。今日は春日明神へ參らばやと存ずる。（これよりセリフ常の如し。）〽謡 先づ當社春日明神と申すは。神護慶雲二年。河内の平岡より此の所へ飛移り給ひ候。其の頃この山は禿山にて候へども。御託宣に。木を植ゑて得させよ。何事も思ふ事を叶へんとの御神慮なるにより。我も〳〵と木を植ゑ。程なく斯様の深山となり申候。昔より今に至るまで。靈驗あらたなる御神にて御座候。誠に。天下泰平國土安全に守り給ひ。富はわこきのをより。四所明神の御事有難ければ。龍神までも信心をなし。龍燈を焉になすと申す。されば慈悲萬行の月の影は。三笠山に長閑に。國重唯識の月の光。此の春

日明神にしくはなしと申候。また只今御尋ねなされ候三笠山と申すは、御覽の如く山の形三笠に山が見え候により。乃ち三笠山と申習はし候。最前申す如く（セリフ常の如し。）

身延七面（みのぶしちめん）

アヒ　所の者

へ先づ此の七面の明神と申すは。靈驗あらたなる御事にて候。其の仔細は。本佛上行菩薩の化身。日蓮上人この身延山に移らせ給ふは。文永十一年卯月半と申候。誠に。此の山に庵室を結び。法華經を御讀誦あるべしとて。居住なされし所。險しき深山なるを。妙法蓮華經の德により。夜な〳〵此の所へ。山神來りて陸地となし。安々と安置し給ふ。又讀經を聽聞申す。參詣の人々不審なし申す程に。上人御身はいかなる者と尋ね給へば。忽ち面色變り。二丈ばかりの大蛇となり。天地も響き震動して。御池の方に行くよと見て。失せ申し候間。聽聞の面々驚き騒ぎ逃去りぬ。これと申すも法華經の謂れにて候。また十二の角その座に落ちて、成佛得脫の身となり給ひ。則ち其の角を岩に鑿き。形をうつし置き。蛇形の曼陀羅と申候。先づ我等の承及びたる通り。（以下セリフ常の如し。）

宮城野（みやぎの）

アヒ　里人

へ斯樣に候者は。此の邊りに住居する者にて候。今日は野邊へ罷出て。心をも慰まばやと存ずる。（セリフ常の如し。）へ先づ此の所は。奥州五十四郡の內。宮城野の郡と申候。千草萬木の中に。取分き此の櫻は名木にて御座候。又この野に就いては。物語御座候。此の宮城野と申すは。奥への街道にて御座候。昔都よりある人妻を誘ひ。奥へ下り申され候が。此の野にて女申すやう。惣じて男の人は賴み少き者にてある程に。最早この野より奥へは下り申すまじくと申す。其の時男の申す樣は。あれに見えたる山を。末の松山と申して。御覽候へ、何ぼう高き山にて候。あの山を波は越すとも。我等心中は變り申すまじくと申し候ひて。遂々連れて下り候が。此の程かれ〴〵事出で來て、離別申されて候。さて彼の女は。是非なく都へ上らんとて。此の野まで參り。あの山を恨めしげに眺め。終に空しくなり申して候。さあるに依つて、今に至る迄、是の謂にも、末の松山に譬へ申したると申候。最前申す如く。（セリフ常の如し。）へ是に奇特なる事を承り候ものかな。扨は彼の女の執心この野に殘り、お僧に詞を交したると存じ候間。某は急ぎの御旅なれども。（あとのセリフ常の如し。）

三尾（みを）

アヒ　里人

へさる程に。當社に於いて。三尾の明神と申すは。地神三代の尊。赤白黑の三尾の大龍と現れ出で給ひしを。三尾の明神と崇め奉り。隱れなき靈神にて候。誠に。神と云へるも佛と申すも。水波の隔てにて。同體異名と申して。同じ御事とは申せども。取分き當社は。瑞籬の代よりも。三尾の明神と申して。有難き御神にて候。さて又當寺を。三井寺と申す仔細は。尊賢菩薩の御座候ひしより。湯の神と現れ給ひ。三代帝の御湯を參らせ候により。三井寺と申して。御惠み深き御事にて御座候。

【む】

聟入自然居士（むこいりじねんこじ）

アヒ　家來

ワキ呼出す。〽御前に候。此の文を雲居寺に自然居士の御入り候間。持つて參り候へ。我等あとより參り申さうずるにて候。〽畏まつて候。やれ〳〵。雲居寺へ持つて參れとの御事にて候間。急ぎ參らばやと存ずる。いかに自然居士へ申し候。さる方よりも御使にて參りて候。謠に。めいめいとして心も澄める折ふしに。案内といかなる者ぞ。これに御文の候。ワキ。これは北山衣笠殿より御使にて候。これよりワキとシテと。段々長くセリフあり。中入あり。ワキ呼出す。〽御前に候。〽心得申し候。やれ〳〵。最前自然居士へ遣され候御文を。何心もなく持ちて參り候が。唯今承り候へば。衣笠殿の御姫君。自然居士を一目御覽じて。しづ戀とならせ給ひたると申す。さ樣の事とも存ぜず。持ちて則ち參り候。明くる夜に入り。自然居士の御出である間。用意をも致し。又道をも掃除致させよとの御事にて候。此の由申附けばやと存ずる。皆々承り候へ。明くる夜に入り。自然居士忍びて御出で候間。道をも掃除致させよとの御事にて候間。其の分心得候へ〳〵。シテ出端常の通り。中入後。姫出立。上下烏帽子を着け。笹の葉持ち下り羽にて出る。

馬乞佐々木（むまこひささき）

アヒ　家來

〽これは。佐々木殿の御内に仕へ申す者にて候。さる程に。木曾義仲都に於て狼籍なる由。鎌倉殿聞召され。急ぎ義仲を追討あるべきとの御事にて候間。それに就き。頼うだ人申上げられ候は。此度御名馬の生月（いけづき）を拜領し先懸け仕度きと色々申上げられ候處に。鎌倉殿の仰せには。生月は最前梶原色々所望申せども。取らせざる間。なるまじき由を仰せ候へば。頼うだ人大に腹立ちにて。君一年（ひととせ）。伊豆の國北條。蛭が小島に流人となり給ふ　菜御供申し。其の外色々忠節を盡くし。御奉公仕るに。何とてか生月を下されんとあつて。ひたすら申上げられ候へば。君聞召され。重ねて生月を佐々木に下され候間。頼うだ人滿足に存ぜられ。夥しき用意にて候間。皆々その分心得候へ〳〵。シカ〳〵あり。後に佐々木の供して出る。梶原の供〽案内とは誰にて渡り候ぞ。〽中々。生月の口附にて候。これは佐々木申請けて候。

村山（むらやま）

アヒ　家來

シテ（村山）に向ひ云ふ。〽いかに申候。〽眞木の四郎殿よりの注進にて候。ト云うて。文を渡す。

【も】

守屋（もりや）

アヒ　家來

〽やるまいぞ〳〵。〳〵〳〵。えい。これ迄は見えたが。此の木の側にて見失うた。さても〳〵不審な事かな。ワキ。太子を討留めたるか。〽其の事にて候。これまで追懸け候が。此の木の下にて忽ち見失ひ申して候。御馬は天に上がりたると見え申して候。〽尤もにて候。急いで軸を召されうずるにて候。

文覺（もんがく）

アヒ　里人

〽案内とは誰にて渡り候ぞ。〽何と文覺上

人の寺を致へ申せとの御事にて候か。〽尤も致へ申度くは候へども。御寺あまた御座候間。知れ申すまじく候。天下の御祈禱に。百日の護摩を御焚き候が。今日滿座に御座候。御堂へ參り候間。文覺と御尋ね候へ。〽御用の事候はゞ。重ねて仰せられ候へ。

【や】

野干（やかん）

アヒ　里人

〽那須野の原に住居する者にて候。（セリフ常の如し。）〽さる程に。玉藻の前の事は申すに及ばず。今に執心を殘し石となり。殺生をする事なれば。此の石にあたる人。忽ち空しくなる事にて候。されば人間ばかりにてなく。空飛ぶ鳥。地を走る畜類までも。皆石の勢にあたり空しくなり候。尤も天竺にては斑足太子をとり。又唐土にては七帝までとり奉り。我が朝にては則ち玉藻の前となり。色々妨げをなし申候。狐は執心深きものと申候。殊に狐は通を得たるものにてあり。人間に化して。人をたぶらかし。又牛馬まで化かすと申候。惣じて此の野は野干の住所なれば。樣々の事も御座候。さて唯今は何と思召し。御尋ねなされ候ぞ。

安犬（やすいぬ）

アヒ　家來

〽か樣に候者は。笠間の十郎に仕へ申す者にて候。唯今是へ出る事餘の儀にあらず。賴うだる御方は。鎌倉殿よりの仰せにて。安犬丸の館へ押寄せて。唯今討取り申すべしとの御事にて候が。先づ某に參り。たばかり申せとの御事にて。これまで罷出でた。急いで參らう。則ちこれぢや。〽いかに此の内へ案内申候。笠間の十郎申され候は。安犬殿へ御目に掛かり。相談申したき事の候とて。これまで參りて候。急いで門を開かれ候へ。シカ〳〵。〽これに候。シカ〳〵。〽何とこれには御座ない。シカ〳〵。〽急ぎ其の由申上げう。いかに申候。色々たばかり候へども。あれには御座なく候由申し候間。急いで御出で候へ。

柳（やなぎ）

アヒ　里人

〽これは宇治の里に住居する者にて候。今日は平等院の邊りへ參り。心をも慰まばやと存候。（セリフ常の如し。）〽先づ此の宇治の里は。名所舊跡多き處にて御座候。先づ前川は本名に橘川と申候。其の仔細は。八幡宮御弟の宮。常に橘を愛で給ひ。川中までも植ゑ給ふにより。橘川と申す。又宇治の里と申すは。此の弟御子兎を先に御立て御道知るべ申す。則ち兎の留り候處に宮居ましますにより。兎道の里と申せども。神の御名を恐れなし。今は文字を改め申候。さるに依って。俗宇治川とも申候。槇の島塔の島山吹の瀨。いづれも名所にて御座候。朝日山と申すは。あの興聖寺山の後の高き峰を朝日山と申して。則ち源三位賴政自害の場所にて御座候。又宇治橋は。孝德天皇大化二年。道和と申す人かけ渡されて候。さる程に。平等院は人皇七十代。後冷泉天皇の御宇。御堂の關白道長公の御子。賴通公の御建立にて御座候。其の後僧都惠心も此の寺にて御法を說き給ひたると申す。又橋姬の宮興聖寺。惠心院橋寺。何れも名所にて候間。御逗留候はゞ。迚もの御事に御一見候へ。又この川岸の柳は。隱れもなき名木にて。春秋とも都方より。此の柳を愛し群集仕り候。貴賤の

人亦び歌を詠み。詩を通し申され候。最前申す如く。（セリフ常の如し。）〽御僧貴くましますにより。柳の精魂現れ。姿をまみえたると存候間。非情顛とは申しながら。草木國土悉皆成佛とやらん申す事もありげに候間。御法をなし。佛果に到らしめて。御通りあれかしと存候。

ワキシカ〲（常の如し。）

【ゆ】

行家（ゆきいへ）　　アヒ　宿の者

〽いか樣なる御尋ねにて候ぞ。〽畏まつて候。〽奥の間へ御通り候へ。（こゝにて色々濡あり。日影まつ間の余や唄りなるらんと云ふ時。）やれ〳〵。正しく今の行家殿にて候と存じ候。此儘に置き申し候はゞ。我等が迷惑になり申さうと存じ候間。早々參り申さうと存ずる。

同

シカ〲。〽案内とは誰にて渡り候ぞ。シカ〲。〽易き間の御事にて候。見苦しく候へどもお宿を參らせうずるにて候。〽先づかう御通り候へ。〽あら不思議や。由ありげなる人にお宿を參らせて候。朝敵の人にて候間。急ぎ濟藤常陸坊へ注進致さうと存ずる。先づ急いで參らう。

【よ】

横山（よこやま）　　アヒ　家來

シカ〲。〽御前に候。シカ〲。〽畏まつて候。〽これはいかな事。御酒宴半ばにて候程に。中々今は申されまい。〽いかに申上候。横山殿は御酒宴なかばと見えて候間。申上ぐべき樣も御座なく候。〽中々の事。〽急ぎ御出で有らうずるにて候。

義家信夫（よしいへしのぶ）　　アヒ　里人

〽さる程に。信夫ヶ原に於て。昔より合戰度々御座候中にも。八幡太郎義家。安倍の貞任御退治の時　此の處にて花やかなる合戰あり。既に城の太郎味方負け軍と見え申し候間。大に怒らせ給ふ。流石名大將なれば。いつまて爰にながらふべき。一命を輕んじ。軍仕りて名を後代に殘さんと。能き大將と覺しき中へ駈入り。能き大將と組み給ふ勢ひ。獅子虎もかくやと。目を驚かす處に。敵の郎黨打合ひて。太郎殿の首を取り申候。然れども敵打ち給ひ。互に御果てなされたると申す。又西行法師奥へ下り給ふ時。此の橋をいか樣なる橋ぞと御尋ねありければ。これは𣏐橋（さゝやきはし）と答へ申したるげに候。最前申す如く。（あとのセリフ常の如し。）

義興（よしおき）　　アヒ　里人

〽さる程に。左兵衛佐義興と申すは。新田左中將義貞の子息にて御座ありたると申す。越後の國に城廓を構へ居たりけるが。さる仔細あつて。主従百餘人。密かに武藏の國へ參られ候節。左馬頭基氏。畠山入道之を聞き。夜討に寄せて討取らんとすれども。義興更に事ともせず。通りける程に。畠山入道急度謀を廻らし。竹澤左京亮。江戸遠江守。其の甥下野守。此の三人の謀にて。十月十日曉に。義興鎌倉へ急がれ候處に。兼ねて支度の事なれば。矢口の渡にて。渡し船の底を二所ゑり

抜き。鑿をさし込み置き申し候處に。ゆめ〳〵此の事を義興は知らずして。船に乘り給ふ處に。川の半ばにて彼の鑿を一時に抜き放す。何の手もなく船に入水申し候間。義興詮方もなく。腹召されたると申す。其の後江戸竹澤兩人は。拜領の地へ下向ありけるが。彼の矢口の渡に來り候處に。義興の執心雷となつて。江戸竹澤を取殺したると申す。其の外これのみならず人を惱ましけるにより。其の靈を。一社の神に崇め新田大明神とて。ときはかきはの祭禮。今に絶えず御座ありたると承及びて候。最前申す如く。あとのセリフ常の如し。

義經

アヒ　里人

へこれは此の邊りに住居する者にて候。此の間はいづくへも罷出でず候程に。セリフ常の如し。へ詣さる程に。九郎判官殿御最期の樣體は。御舍兄頼朝卿より。御勘氣を蒙り給ひ候間。親兄の禮を重んじ給ひ。熊野詣の山伏となり。主從十餘人。當國へ下り給ひ。秀衡の館へ忍び入らせ給ひ候處に。秀衡は相傳の郎黨なれば。頓て賴まれ參らせ。此の高館の御所を構へ。これにて月日を送らせ給ふ處に。文治四年の春の頃。入道風の心地とふけり申され候間。頼朝卿より泰衡方へ院宣あつて。義經を討ち奉るものならば。本領に常陸の國を相添へ。遣さるべき由仰せ出だされ候間。泰衡頓て畏まり奉り。三百餘騎にて押寄せ。高館の城を取圍み。關を作り候處。判官殿。兵共十騎餘りにて立籠もりたりしが。さん〴〵に戰ひ。敵數多討取り候へども。大勢に叶ひ給はず。甚しき合戰して。討死仕り候間。十郎兼房御前に參り。今は軍もこれ迄なり。龜井片岡伊勢駿河。武藏坊等皆討死仕り候。急ぎ御腹召され候へと。勸め申され候へば。さあらばとあつて。御腹十文字に搔き切り。果て給ひたると承及びて候。セリフ常の如し。へさては御所緣にて是まで御出でなされ候により。義經の御亡心。あとのセリフ常の如し。

吉野

アヒ　里人

へ是は。この吉野の里に住居する者にて候。今の折柄花も盛りなれば。罷り出で花を眺め。心をも慰まばやと存ずる。や。是に御座候は。この邊りにては見參らせず。如何さま上つ方と見えさせ給ひて候が。いづ方より御參詣にて候ぞ。ワキシカ〳〵。へ中々この邊りの者にて候。シカ〳〵。へ心得申して候。扨お尋ねありたきとは。如何やうなる御事にて候ぞ。シカ〳〵。へ是は思ひも寄らぬ事を承り候ものかな。我等も吉野の里には住居仕れども。さやうの御事委しくは存じも致さず候さりながら。斯かる上つ方の初めて御參詣にて。お尋ねなさるゝを。何をも存ぜぬと申すも如何に御座候間。大方承りたる通り。御物語申上げうずるにて候。シカ〳〵。へまづこの吉野のお山と申すは。昔天竺五臺山の片一方飛來り。この吉野筑波とはなりたると承及びて候。後役の行者の此山に移り給ひ。思召されける樣は。斯程妙なるお山に。守護神なくては叶ふまじいと。天道に向ひ。祈誓し給ふ所に。忝くも辨才天を祈り出し給ふ。行者斜に思召されけるが。されども此山の守護神には。少し柔和に御座候程に。如何あるべきぞと。是より奥に天の川と申す所の御座候が。それへ送り參らせられ齋ひこめ給ひ。今に於いて天の川の辨才天と申して。二世の願を叶へ給ふ。かるが故に。皆人敬ひ國々よりも。歩みを運び申す事も。

此の謂れにて御座ありげに候。行者重ねて祈り給へば。今度は地藏を一體祈り給ふが。是も此山には似合ひ申さぬとあつて。川上と申す所へ送り。あれに安置し給ひ。川上の地藏と申して。靈驗あらたなる御事。申すも愚かに御座候。又祈り給へば。此度は藏王權現を三體まで。祈り出し給ふ。其時行者は。是こそ此山の守護神に思召す儘なるとて。則ち齋ひ給ひ。吉野山の藏王權現と崇め奉る事も。斯樣の仔細にて御座ありげに候。さる程に。子守の明神と申すは。慈悲萬行の神にて。一切衆生をわが子の如く。守り給ふにより。子守の明神とは申し候。又勝手の御前と申すは。弓矢の家を守護し給ひ。武運長久を守り給ふ。その名詮によつて。勝手の明神とは崇め。弓箭の御門出に。勝手の明神に鏑矢を參らすれば。如何なる怨敵をも滅ぼし。思召す儘に御凱陣あるは。疑ひもなき御事にて候。然れば昔清見原の天皇。この吉野の瀧の宮に行幸なり給ひし時。月も明々として。花にうつり見え候を。面白く思召され。花の木の下にて。琴を彈じ給へば。その琴の音にひかれ。上界より天人天降り。帝の御調べに合せ奏で給ふ事。一度ならず二度ならず。五つ度まで袖をかへし天上し給ふ。爰を以て今の世に至るまで。五節の舞と申す事も。これを學びたる御事にて御座ありげに候。最前申す如く。當山の謂れ。其の外子守勝手の御事に就き。色々仔細御座ありとは申せども。まづ我等の承りたる通り。大方御物語申上げて候が。さてお尋ねは如何やうなる御事にて候ぞ。シカ〳〵。〽扨も〳〵紀貫之にて御座候をも存ぜず。むさと御物語申上げて候さりながら。これと申すも遙々の御參詣を。子守の明神は嬉しく思召され。假に人間とまみえ給ひ。聲言葉をも交させ給ひたると存じ候間。御上洛は御急ぎなれども。暫く此山に御逗留あつて。御心靜かに花をも御覽なされ。御祈念をなさるゝならば。重ねて奇特の御座あらうずるかと存じ候。シカ〳〵。〽御逗留の間は御用を承り候べし。シカ〳〵。〽心得申して候。

吉野優婆塞(よしのうばそく)

アヒ　里人

ワキ呼出す。〽所の者とお尋ねは。誰にて渡り候ぞ。セリフ常の如し。〽先づ此の吉野山と申すは。人皇七代。孝靈天皇の御宇に涌出し。金の山なるに依つて。則ち金峯山と御名附けなされ候。其後かの優婆塞思召す樣は。か樣に目出度き御山に。守護なくては叶はじと。肝膽を碎き祈り給へば。辨才天現れ給ふ。然れども此の山に。女神はいかゞと思召し。天の川と申す所に置かせ給ふ。次には地藏尊出現候。是は川上と申す所に置き給ひ。其後藏王權現現れ給ふ。行者嬉しく思召し。當山の守護神となし給ふ。今に至る迄。靈驗あらたなる御事にて御座候。さて又花の名所多く御座候へども。中にも四木の櫻千本の櫻と申すは。勝れたる木にて御座候。されば歌にも。昔誰れ。かゝる櫻の種うゑて。吉野の春の山となしけん。この如く申すも此の山の事にて御座候。最前申す如く。ワキとのセリフ常の如し。〽行者嬉しく思召し。老人と現じ。セリフ常の如し。〽奇特なる事を御覽じ。御心靜かに御上洛あれかしと存候。

吉水(よしみづ)

アヒ　家來

ワキ(同崎)呼出す。〽御前に候。〽畏まつて候。〽是はいづくより何方へ御座ある少人にて候ぞ。〽さあらば其の由申候べし。〽いかに申

候。吉水殿の御弟子。木菊あちわと申す二人の少人。御最期御對面のため御出て候間。吉水に引合はせて給はれと申され候。〽中々の事。〽畏まつて候。〽いかに申候。只今の通り申して候へば。先づ岡崎殿御對面あらうずるとの御事にて候間。かう御通り候へ。

【り】

龍頭太夫（りうづだいふ）

アヒ　末社

亂序にて出る。〽か樣に候者は。當社稻荷大明神に仕へ申す末社の神（しん）にて候。國々所々に靈神あまた御座ありとは申せども。取分き當社は王城の鎭守にて。天下に隱れなき靈神にて御座候。和銅年中出現あり。空海東寺を建立の折節。門前に稻荷へる翁に行合ひ。樣々約束ありて。此の處に影向あり。稻荷大明神と現れ給ふ。さあるに依つて。稻荷ふと書いていなりと申すげに候。また龍頭太夫は卽ち末社にて候が。此の三つの山の守護神なり。抑も三つの山と申すは。如意寶珠をうつされたり。さあるに依つて明神御歌に。我れたのむ。人の願ひを照らすとて。浮世に殘す三つの燈と。か樣にあるげに候。かゝる目出度き靈地なれば。當今に仕へ申す臣下殿。唯今御參詣にて候間。以下常の如し。禮舞三段。切諸常の如し。

【ろ】

籠祇王（ろうぎわう）

アヒ　家來

ワキ〽如何に誰かある。狂言〽御前に候。ワキ〽かの囚人（めしうど）を逃したる老人は籠舍させてあるか。狂言〽中々の事。老人の事にて皆人不憫に存じ候へども。御意にて候故。籠舍させ申して候。ワキ〽囚人の所緣（ゆかり）とて人來りしとも。一人も會はせ申すまじきぞ。又某も對面申すまじきぞ。その分よく〱申附け候へ。狂言〽畏まつて候。承り候へ。今度籠舍仕りたる老人の所緣とて。もし人來り候とも。囚人に會はせ申すまじきと申され候間。何れも其分心得候へ〱。祇王シカ〱。〽案内とは誰にて渡り候ぞ。シカ〱。〽何と承り候ぞ。是は祇王御前と申す人にて候が。今度籠舍仕りたる囚人の爲に父子にて候が。粉河の何某に對面ありたきとの御事にて候か。シカ〱。〽御申しの通り承りて候。されども囚人の所緣に對面は堅く禁制にて候間。中々叶ひ申すまじく候。シカ〱。〽尤もにて候。迚も對面はなり申すまじく候へども。祇王御前の御事は。世に隱れもなき御事なれば。まづ申して見うずる間。暫くそれに御待ちあらうずるにて候。如何に申上げ候。ワキシカ〱。〽都より祇王御前と申す遊女にて候が。今度籠舍仕りたる老人の爲には子にて候。そと對面申したきとて是まで參り申して候。シカ〱。〽中々禁制の由申して候へば。祇王御前の御事は。天下に隱れもなき白拍子なれば。世上の聞え思召され。もし御對面もあらうずるかと存じさて斯樣に申上げて候。シカ〱。〽畏まつて候。如何に申上げ候。日本一の機嫌に申合はせて。對面申さうずる間。此方へ御通りあれとの御事にて候。ワキと祇王と色々セリフあつて後。ワキ〽如何に誰かある。狂言〽御前に候。ワキ〽この人を籠舍の者に引會はせ候へ。狂言〽畏まつて候。善所に迎へとり給へといふ謠過ぎて。此方へ御入り候へ。父御に引會はせ申さうずるにて候。愛にて籠へつれてゆく心あり。この籠の中（うち）に父御の御入り候間。よく〱御對面候へ。さめ〲と泣きゐたりといふ謠すぎて。ワキ〽如何に誰

かある。狂言〽御前に候。ワキ〽時刻にて候開老人か籠より出し候へ。狂言〽畏まつて候。如何に尉殿。今こそ最後にて候へ。急いで御出で候へ。あら痛はしや。ト云うて。右の手を取つて籠より出し。左の手にて太夫の後を抱へ。つれ出して正面の下に置く。

【わ】

和田酒盛（わださかもり）

アヒ　侍女

〽誰にて渡り候ぞ。〽暫く御待ち候へ。頓て御返事申さうずるにて候。〽いかに和田の義盛の御出でにて候。虎御前に御酒一つ申したき由仰せ候ひて。會所に皆々御座あり。急ぎ御出であり。御酌をとられ候へと仰せ候。〽あら目出度や。虎御前に申候。和田の義盛其の外御一門皆々御座候間。御出であれと仰せ候。〽其の由虎御前に申候へば。今朝より何とやらん御心惑ひて候程に。重ねて御出であるべくと仰せ候。〽さて十郎殿はわたり候か。〽さん候。〽それは十郎殿の前思うて出でまじき由申候。十郎殿に此の由を申せ。此度座敷へ虎出でねば。何とも我が迷惑ぢや。あの義盛は。頼朝の御事さへも思召す儘ぢや。ましで我等體の者は。御意に背いては此の處に住居も叶ふまじ。何ともして座敷へ御出であれと申せ。若し虎より出ずは。十郎殿重ねて大磯通ひは無用ぢやと申せ。あら腹立ちや〳〵。〽いかに申候。御意見をあり御出だし候へ。若し御出でなくば。重ねて十郎殿御出では叶ふまじき由仰せ候。シカ〳〵。虎十郎出で。義盛の御出で祝着申候といふ時。〽いかに虎御前。此の盃にて一つ呑み。何方へなりとも思ふ方へさし候へ。

【ゐ】

韋駄天（ゐだてん）

アヒ　里人

〽さる程に。韋駄天と申す御方は。北天の太子。那駄と申す御方にて御座ありたると申す。卽ち毘沙門天と御兄弟なる由申候。惣じて此の韋駄天は。足速き御佛にて。つまはじきするうちに。三千大世界を易々と廻り給ふなど聞き及び候。さ樣にあるに依つて。佛たちにおぶくを供へ申すに。打鳴らし一つ打ち申す時。寺を出で給ひ。二つめにおぶく參れと。世界の佛たちに觸れ給ひ。三つめは本地へ歸り給ふなどと承及び候。さてまた帝釋天の眷屬に。足疾鬼と申して。足早き外道御座ありたるが。釋尊入滅の刻。金棺未だ閉ぢざるに。竊に双林の許に立寄り。御齒を一つ引きかづき迯げ候を。佛弟子留めんと仕り給へども。片時のうちに四萬由旬を飛越え。須彌の中場四王天まで迯げのぼる。韋駄天聞召し。一足に追懸け。御取戻しなされたると承及びて候。

【を】

岡崎（をかざき）

アヒ　能力
同　家來

ワキ呼出す。〽御前に候。〽畏まつて候。ワキ下に居ると立つて。〽皆々承り候へ。神前の花一枝も折り候事禁制と仰せられ候間。その分心得候へ〳〵。笛の先に居る。シテ（岡崎）シテ柱の先より案内乞ふ。〽神前の者とは何事にて候ぞ。少人を伴ひ花見に參り候間。一さし御舞ひあつて給はり候へ。〽げに少人を御ともなひ候間。一さし舞ひ申さう。二人靜の花を踏むでは同じく惜む少年の所を舞ふ。同音つける。狂言より頼む事無用なり。舞過ぎて。また笛の先に

留る。シテ呼出す。へ何事にて候ぞ。少し花を一本御所望候間はり候へ。へ易き間の事にて候へども。此の櫻は御神木にて候へば。なり申さず候。御大法さる事なれども。平に一本賜はり候へ。へ某が心得としてなり申さず候間。其の由申さうずるにて候。近頃にて候。ワキへ云ふ。へいかに申上候。都より花見の人々來られ。神前の櫻を御所望にて候。へ中々の事。笛先に立つて居る。シテワキ諍論あつて。ワキ落花狼藉さじと云うて。刀に手かくる。狂言とめる。色々あつて中入。ワキ。明日定めて攻め來るべし。其の用意仕り候へ。狂言切戸より入る。作り物入れる。

早鼓にて出る。へか樣に候者は。岡崎殿の御内に仕へ申す者にて候。只今これへ出る事餘の儀にあらず。さても今日岡崎殿を御供申し。其外御内の人々を召連れ。平松彈正殿大原山へ花見に御出であり。御酒宴樣々にあり。はや御歸りなされて候間。岡崎殿忠廣を以て。花一本御所望候へども。神木の由申し。一枚も參らせず候程に。若き人々腹を立て。既に意恨に及び候間。忠廣殿若き方々を制し申され。主君を御伴ひ申候へば御ため惡しかるべし。先づ御歸り候へとて。人々を同道申し御歸り候が。とかく大勢催し。押寄せ給ふべきとて。殊の外御用意にて候間。我等も御供に參らうと存じ候。誠に。かりそめの樣に候へども一大事にて候。皆々御内の者一人も殘らず罷出で候へ。其の分心得候へ〳〵。

苧玉卷（をだまき）

アヒ　姫の母

へこれは豐後の國この里に住居する者にて候。妾娘を一人持ちて候が。成人致し候故。別屋を造り置いて候。承ればいづくとも知らず夜な〳〵人の通ふと申すが。誠か僞りか。娘を呼出し尋ね申さばやと思ひ候。いかに渡り候か。シカ〳〵。へ只今呼出す事餘の儀にあらず。おことの間へ夜な〳〵通ふ人ありと申すが。誠か僞りか。素直に申候へ。シカ〳〵。へ言語道斷の事かな。扨それはいか樣なる者ぞ。シカ〳〵。へあら不思議や。此の傍にさ樣の人はないが。奇特なる事や。妾は案じ出だしたる事の候。日頃つぎ置きたる苧玉卷の候。此の絲に針を附け。彼の者の衣裳に縫着け歸し候へ。これは五里も續き候はんぞ。扨その絲を知るべにて。ありかを尋ね候へや。

昭和六年七月十日印刷
昭和六年七月十四日發行

狂言集成

著作者検印

定價金八圓

著作者　野々村戒三
安藤常次郎

東京市日本橋區通三丁目八番地
發行者　和田利彦

東京市本郷區眞砂町三十六番地
印刷者　龜谷良一

東京市本郷區眞砂町三十六番地
印刷所　日東印刷株式會社

東京市日本橋區通三丁目八番地
發行所　春陽堂
電話日本橋 三六五四・七四一・八八一
振替東京一六[illegible]